
wars! -ウォーズ-

あんだーすたんど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wars! - ウォーズ -

【Nコード】

N0604S

【作者名】

あんだーすたんど

【あらすじ】

第四次世界大戦が終戦し、時は2096年

日本は進化大国と呼ばれるようになった

その日本で新たなスポーツが発祥する

その名前を“Wars”

この物語は普通の高校に通う少年たちの戦いと日常をまとめた物語である

部活動青春系(?) ラブコメ、ここに開戦!

皆様のおかげで10万アクセス突破いたしました！これから
感想が増えると嬉しいです……（殴

#0 プロローグ

時は2096年。先の皇帝が82歳で亡くなり、平成、丁礼、珀^{ていれい}千^{せん}、天戒^{てんかい}と続いてきた日本……いや、今は進化大国とも呼ばれるようになった。進化大国・日本。そう呼ばれるようになるまでには長い時間……戦争があつた

今から55年前、2041年。丁礼12年、4月2日。第三次世界大戦が始まつた。その戦争に日本は巻き込まれる事は無かつたが、ヨーロッパ方面では相当な被害出た。特にロシア。当時のロシアは兵器の開発の先頭に立っていたと言っても過言では無かつた。そう、兵器を開発しすぎたのだ。ある人物がその兵器……当時で最高レベルの兵器、テンペスターを使つてしまつたのだ。事故ではない。意図的に。その兵器はヨーロッパのほぼ全体に打撃を与えることになり、それが引き金となり、第三次世界大戦が始まつてしまつた。その戦争はヨーロッパだけの問題だつたはずだつた。だがその激しさは段々とアフリカ、中国、アメリカを巻き込んで大きな戦争となつてしまつた。それが集結したのは2053年、丁礼24年の12月25日だつた。世界でその日のことを“終戦のクリスマス”と呼ぶようになった

それから6年後の事だ。次は第四次世界大戦が始まつた。この戦争は日本も巻き込まれたのだ。北朝鮮の宣戦布告によつて。当時の北朝鮮と日本の関係は最悪だつた。そして北朝鮮は吹っ切れたのか、日本に宣戦布告してきたのだ。もちろん日本は戦争はしないと断つた。兵器もない。だが北朝鮮はそれを無視し、北海道にミサイル

を撃つてきた。それに反撃したのが中国。当時の日中の関係は最良とも言われていた。その関係があつてか、中国は日本を救ってくれた。その次に来たのがアメリカ。次にイギリス、フランス……段々と多くの国を巻き込み……日本は戦場と化した。酷い戦いとなった。日本の死者は8000万人弱。今までの戦争で一番酷い被害となった

そして北朝鮮は降伏した。それが18年前、2078年の9月18日の事。9年に渡る戦争は幕を下ろした。その1週間後の9月25日。大阪で条約が結ばれた。“大阪条約”

内容は簡単だ。戦争の引き金を引いた国は、全ての権利と土地を失うという物だ。さらに第二次世界大戦で日本が受けた苦しみを味わう、と……。悪魔のような条約だ

それ以来戦争が起こることは無くなった

その終戦から18年間の間だ。その18年で日本は進化大国と呼ばれるようになったのだ

ヴァーチャル・ワールドの存在を日本で確立させたのだ。さらにアメリカとの協力開発により、電話機能に3D再生機能……今まで平面だった携帯に3D再生機能が搭載されたのだ。つまり、テレビ電話が進化した物で、携帯を横に置くことで、相手の姿を立体的に投影する機能、と言ったところだろうか

さらに日本は物質の瞬間移動をさせる機械を開発した。当時の開発力では作れる数が少なく、東京とアメリカのワシントンにしか置かれなかった。それがさらに開発され、量産化と小型化に成功し、一般家庭にも普及されるのが普通となっていた

さて、2つの機能を紹介をしたところでこの物語は始まる

ヴァーチャル・ワールド、通称VW。そして物質瞬間移送装置、通称TEMM。この2つを用いるスポーツが日本で発祥したのだ。

その名前を…… Wars ウォーズ

Warsは今ではオリンピック公式種目としても扱われ、部活動にも取り込まれるようになった

この物語は、普通の高校に通う少年達の戦いと日常をまとめた物語である

#0 プロローグ（後書き）

この度はこの作品を読んでくださってありがとうございますorz

まだ登場人物一人も出してないけど……ハハw

次から本編入ります

とりあえず駄作ですが、よろしく願います

面白い小説になるよう日々精進させていただきます。。。

#1 入学

ジリリリリリリリ

目覚まし時計のアラームが部屋に鳴り響く

「ん……」

俺は時計に手を伸ばし

カチャ

目覚ましのアラームを止める。そして上半身を起こす。とりあえずまだ眠い

「ふあああああ……」

起きてすぐに大きく欠伸をする。そして改めて時計を確認する。昨日のうちにちゃんと6時30分にセットしたから問題はない。そりゃ入学初日に遅刻なんてしてられっかての

「6時30分か……」

俺はベッドから降りて立ち上がり、少しそのままにいる。そして部屋を確認し、自分の制服が目に映る。そう、今日から俺は高校生になる。東京都立、弦巻高等学校（じまきこうとうがっこう）。俺の姉も通っていた学校だ。俺がこの高校を選んだ理由は……はつきり言って特にない。強（し）いて言うなら、姉が通っていたから、ということになる。

『真筆ー！ 起きてるのー！？ 起きてるなら早く来なさいー！』

ドアの向こう……廊下から母さんの声が聞こえる。そつだな……
行くとするか

改めて自己紹介。俺の名前は神崎真筆^{かみざままじつ}。さっきも言ったとおり、
今日から高校生だ

さて、朝食を取り終え、制服に着替え、時間も丁度良くなったところで玄関。今母さんが見送りをしてくれている。してくれているのだが……

「ちゃんと準備した？」

「うん」

「ハンカチとティッシュは持った？」

「うん」

「あ、ここ埃^{ほこ}ついてる。動かないでね？」

「だー！ もうそんなくらい気にすんなっての！ ってかいつまでもガキ扱いすんなっての！」

そろそろ子供扱いはやめて欲しいくらいだ。そのくらい自分で出来る訳だし……

「まあそんな事言っつて！ あなたはいつまで経つても私の子よ。じゃ、行ってらっしゃい！ 初登校頑張つてね！」

「あ、ああ……行ってきます」

いつまで経っても私の子、か……

玄関を出て左に曲がる。なんて言うか……人がいない。つまり今この道を歩いているのは俺1人だけ。寂しいという感情に襲われ……襲われてたまるか。俺は今日から高校生だぞ！？
でも……

「流石に誰か居てくれてもいいよなあ……」

これが俺の本音だ。本当は寂しいんだよ……悪かったな……

とりあえずその道をひたすら歩く。高校はまだ見えない。案外遠いんだよなあ……チャリで来れば良かったかね……？ だけど弦巻高校ではそれが原則禁止らしい。だからなあ……

「はあ……」

長い……

とりあえず携帯をポケットから取り出して、時間を確認してみる。余裕余裕。学校に着いても暇になるだろうペースだ。ちなみに高校までは徒歩で30分だ

だが、その30分が長い。1人だから……誰も話す人がいないから……

あれ？ 今まで1人でいる時間ってあったか？ 無かったよな、うん。だって友達居たし……ああ、そうか。仲の良い友達はみんな別の高校行ったんだよな……だから俺は今1人で登校してるのか……

「……よし」

だから俺は決めた。高校で新しい友達を作って高校生活をエンジョイしよう。俺の性格ならすぐに友達を作れるハズだ。まずは第一印象からだよな！

そう思った俺は学校へと向かってダッシュしていた。新たな生活に胸を躍らせながら

「はぁ……はぁ……」

あれから15分。俺は今校門の前に立っている。つまり到着したのだ、弦巻高等学校に。しかし……いつ来てもデカい。姉が通っていたから何回か来たことはあった

とりあえず今日からここが俺の通う学校だ。それじゃあまずはクラスの確認と……うわ、集団できてら。俺もその集団に混じってクラスを確認する。するんだけど……

「見え……ねえ……」

人が多すぎて前に近づけず、張り紙を見ることが出来ない。一旦諦めようか……と思っていたら前の人がいなくなった。そしてそのまま前へ……

「ぐぬう……」

再び前方を塞がれる。何だ!? これは試練か!?

とりあえずそこでストップ。少し様子を見てから前に進もう……
待つこと20秒。再び前の人がいなくなる。今度こそ前に進む事ができた。そして俺のクラス番号を確認してみる

「1年4組……か。ふう」

確認し終えた俺はその集団から抜ける。俺のクラスは1年4組……
その番号を頭に刻み込み、俺は1年4組へと向かった

「うわ、結構来てるじゃん……」

いざ教室へ来てみると、人が多かった。俺も結構早く来たつもり
だったんだけどなあ……

さて、ここからが本番だ。俺はどうやってこのクラスに馴染むか。
いきなり大声で「みんなー! これからヨロシクなー!」といくか、
何も言わずに自分の席に着くべきか……そんな事を思っていると

「ん、お前……」

「え?」

見知らぬ男子に話しかけられた。もしかして昔会ったことがある
人とか? いや、違うな。俺の知ってる限りではこんなヤツは俺の
記憶の中にいない

「……………」

ん……無言で見つめないでくれよ……なんか困るんだが……

「お前……これからヨロシクなっ!!」

「ハイ？」

しばらく見つめ合ってた男子が手を差し出してくる。握手ってヤツですな。ふむ、ここは暗い印象を与えないようにしないと

「おう！ こっちこそよろしくな！」

俺と知らない男子で握手を交わす。早速友達ができた感じがする。とりあえず自己紹介しないと

「俺の名前は神崎真筈だ。これからよろしくな。え」と……」

「ああ僕の名前は……」

「さて席につけー」

あれ？ 担任？ ちょっと来るの早くねえか？ まだ時間ありありだぞ？

まあ仕方ない

「スマン、また後で」

「おう！ 後でな真筈！」

……早く名前を聞いておかないとな

「さて、俺が今日からこのクラスの担任になる……」

担任の先生は黒板に大きく文字を書き始める。書く際のチョークと黒板のぶつかり合う音が大きい。そして黒板に名前を書き終える

「……梅花哲也つばなはなてつやだ！ 皆の者！ 1年間よろしく！」

すっげー明るい先生だなあ……

「さて、この後入学式があるわけなのだが……大体の保護者はヴァーチャルVシステムで入学式の様子を見るだろうが……この中で保護者が学校に来る者はいるか！？」

誰も手を挙げることはない。なんていうか……便利になったな世の中

昔はVシステムなんて無かったから、保護者は全員見に来ていたとか……

「そうか……よし、それじゃあ自己紹介などは後でやるから、まずは講堂に向かえー！ これから入学式だ！ 以上、廊下に並べ！」

その声で全員が廊下に並び出す。今名前を聞いてる余裕は無さそうだ。それに後で自己紹介するって言ってたし大丈夫か

俺たち新生で一杯になった廊下……300人の生徒がいるに違いない。今日からこの学校で生活する。頑張らなくちゃな

「さて、出席確認も終えたところで……次は自己紹介か？ よし、

あ行の人から順に紹介していけ」

入学式を取り終え、現在教室。待ちに待った自己紹介タイムだ。
ちなみにさっきの男子の名前は聞いていない

さて、なんて紹介するか……ここで根暗なレッテルを貼られても困るしな

そして段々と順番が回ってきて、俺の目の前の背の低い女子が席を立つ

「え、えっと……エ、エルフィ・N・エストラントニアです！ その……
みなさんどうぞよろしゅきゅお願いしまふゅっ！」

緊張すぎたのかその女子は噛みまくっている。見た感じだと……
……なんか外人の顔つきをしている

「エストラント、あまり緊張しなくていいぞ。緊張しているのはお前だけじゃないからな」

先生がフォローしてくれている。結構良い先生じゃないか

「は、はいっ！ しゅ、趣味はPCパソコンです！」

うわぁ、なんて一言。その趣味を言ったらもう根暗なイメージしか与えられないじゃないか。それはそれでいいのかもしれないけどさ……

「じ、これから1年間よろしくお願いしますっ！！」

そう言ってエルフィさん（だよな？）は席に座った。今にも泣き

そんな顔をしている。どれだけ緊張していたのだろうか……
さて、次は俺の番だ。やべえ……今になって緊張してきた……

席を立ち上がる

「……神崎真箏です。趣味は……これといって無いですが、サッカーをすることです！ 皆さんどうぞよろしくお願いします！
気軽に話しかけてください！」

とりあえず噛まなかった。まあ……大丈夫だろう。席に座る。そして目の前の……女子がこっちを振り向いてきた

「えへへ……よろしくお願いします神崎さん」

「え、あ、ああよろしく。えーと……」

「う……やっぱり忘れられちゃうんですね……」

「い、いやそういう訳じゃない！ ただ珍しい名前だったから……」

スマン女の子。正直に言つと忘れた

「わたしの名前はエルフィ・N・エストラントです。わたしの事は好きに呼んでください」

「あ、ああよろしく。じゃあ……エルフィ」

「ほえっ!？」

あれ？　なんか俺いけない事言った？　なんか顔が真っ赤だよ？

「よ、よろしくお願いします……」

そう言つてエルフィは再び前を向いた。はて……あ、さっきの男子の番だ

「え〜と、佐々木健太ささきけんたです。それでは皆さん！ 1年間よろしくお願いたします！」

爽やかな笑顔で挨拶をしてくるさっきの男子……健太
すっげー明るいキャラだな、オイ

「ちなみに趣味は同人誌の収集、エロゲー等々です！ 以上！」

はて、今聞き捨てならない言葉が……気のせいだろうけど……
…ま、名前もわかったし大丈夫か。そしてもつと友達作らないとな
時間が過ぎ、自己紹介も終わって本日最後のHR

「さて今日はここまでにしておこつ。その他のことは明日から決める
としよう。ああ部活は今日から好きに入れるからな。以上解散！」

解散の合図が入り、みんなが席を立つ。さて俺も帰るとしますか

「なあ真箏ー」

「ん？」

さっきの男子……健太に話しかけられる。あっちは呼び捨てだし、
俺も呼び捨てでいいよな

「どうした健太？」

「今から暇？」

「え、別に暇だけど？」

「よかった。じゃあさ、今から昼飯食いに行こーぜ。お近づきの印
にでもさ」

「あ〜……別に大丈夫だな。よし、行くか！！ あ、そうだエルフ

「イ

丁度帰る準備をしていたエルフィに声を掛ける。驚いたのか一瞬ビクツとしていた

「は、はい!?!」

「なんだ真箒? さっそくナンパか?」

「違っつての。今からコイツと飯食いに行くんだけどさ、お近づきの印につて。だから一緒に行かない?」

「え……あ……え、遠慮させていただきますー!!」

「あ、ちよ……」

そのままエルフィは去って行ってしまった。はて……なんか悪いこと言っただかねえ……

まあいいか

「よし、行くか!」

「……あ、ああ。真箒、頑張れよ?」

「え? 何を?」

「いや、何でもない……よし、行こう!」

「?????」

俺たちは学校近くのラーメン屋に行くことになった

とりあえず入学早々友達が出来て良かったな、うん

#2 入部

「大将！ ラーメン2つ！」

「あいよ！」

とりあえず俺と健太けんたは近くのラーメン屋に来た。この店には来たことがなかったたので美味しいのかどうかはわからない。美味しいことを信じよう

思えば「大将」って言うってたな……仲がいいのか、それとも何度か来たことがあるのか。ついそんな疑問が生まれてしまう

だんだんとスープの美味しそうな匂いが香ってくる。席に着いた俺らはそれを堪能しながら雑談を開始した

「なあ真筆まひしってどこ中だったん？」

「あー……そこだそこ。弦巻じゅんまき中学校。この高校選んだのは“近いから”と言っておこう。くだらない理由だけだな。ああ、あと姉が通ってたからってのも理由の1つだな」

「ほう。あ、ちなみに僕は西堂せいどう中学の出身ね。大して距離ないしさ。それに自分のレベルだとここが良くてね」

「レベルかあ……そういえばそんなの考えなかったかなあ……」

俺は勉強が出来るわけでも出来ないわけでも無かったからなあ……

「考えなかった？ お前中学の時の成績どんなだったんだよ」

「俺？ えーと……全体で50位くらいだったハズだな。ちなみに俺の学年の人数は120人ちよいだな」

「なんだよ結構頭いいじゃん。半分以上に入れてるし……。僕は160人中100位くらいだったからなあ……」

これは頭が良い方なのか。何か改めて知った気がする

「まつ、中学の成績なんて思い出すなよ。これからを楽しもうぜ、なっ?」

「そうだね」

「へい、ラーメン2つお待ち!」

こうやって中学校の時の話をしている内にラーメンが出てくる。見た目は凄い美味そう。後は本当に美味いかどうか……

「さて、食つか」

「だなあ」

目の前にあった割り箸を取り、2つに割る。むう、綺麗に割れなかったな……。割り箸ってどうしても綺麗に割りたくなくなってしまふ。健太は……。うわ、綺麗だ……

「どした真筆?」

「あ、いや、何でもない」

気付かぬ内に健太の割り箸に目が行ってたみたいだ。ま、まあ、そろそろラーメンを食べるとしよう。もう左では健太がラーメンを食べ始めている

「じゃ、俺も」

割り箸でラーメンの麺を掴む。そのまま麺を口へと運び、食する。

ふむ、初めて来たわけだがこのラーメンは美味い。前に家族で行ったラーメン屋より美味いかもしれない

「ところであんちゃん達こゝろまわりのひと弦巻高校じんまわいこうの生徒さんかい？ 見かけない顔だが……新入生さんかい？」

「え？ ああ、はいそうです。今日入学式だったので……今日から1年生になりました。それでコイツとは今日知り合って……お近づきの印に、って来たわけです」

大将（？）に尋ねられたので、そう返す。なんか俺の事をジツと見ているような……

「というか何？ ここに弦巻の生徒は良く来るの？」

「似てるんだよなあ……」

「へ？」

「あ、いや……お前さんが神崎かみさきさんちの雫しずくちゃんに似ててな……気のせいかねえ」

いや、気のせいではないだろう、多分……というか姉貴はこの店に来たことがあったのか？ とりあえず答えるとしよう

「神崎かみさきって……もしかして神崎雫しずくの事ですか？」

「お、そうそう。もしかして雫しずくちゃんの弟さんかい？」

やっぱり姉貴の事か……

こんな美味い店知ってるなら教えてくれても良かったんじゃないか っつて、話がずれた

「そうなりますね。姉貴はこの店に来てたんですか？」

「おうよ！ 部活の仲間引き連れてよく来てたもんだよ……今元気

かい？」

「はい多分……今はアメリカの方にいるのでよくわからないんですがね。元気だと思います」

「そうか……ところでお前さんは雫ちゃんと同じ部活に入るのか？
なんつったかな……あ、そうそう。wars部だっけか？」

「あ……まだ決めてないんです。流石に姉と同じような事は出来ないと思うんで……」

「なんだあ！？ 初代全国優勝者の弟さんが何を言うんだあ！？
そうやってすぐに諦めるなつてのお！！」

「ぶふっ！！ 何？ 真箏の姉ちゃんwarsの全国優勝チームにいたの！？ なんだよ早く言えよー！！」

「いや、俺は別にwarsをやるつもりはないしな……。すいません」

そう、俺の姉貴はwars全国大会優勝チーム……弦巻高等学校にいたのだ。当時のチームは“無敵チーム”とも呼ばれるほどの強さを誇っていた。だから弦巻高校はwarsで有名な学校だったのだ。過去形なのは理由がある。一昨年までは全国に進出する強さを持っていた。優勝は出来ずとも確実に準優勝はしていたのだ。だが去年の都北の大会。まさかの一回戦敗退をってしまったのだ。それで今年は弦巻にwarsを求める人間は少ないだろう。そうなたら俺は入るべきなのだろう。でも嫌だ。理由は簡単。姉と同じよう出来ないから

「そうか……ま、雫ちゃんによろしく伝えておいてくれな。そういや聞いてなかったなお前さんの名前。教えてくれ」

「俺は神崎真箏です。さつきも言ったとおり神崎雫の弟です」

「僕は佐々木健太です……って知ってますよね」

「おうとも！ お前は常連だからな！」

やっぱり何度か来たことあったんだな

「よし後は俺の自己紹介だな。俺の名前は鈴木だ！ 大将とでも鈴木さんとも好きに呼んでくれ！ そしていつでも来いよ！」

「はい、そうさせていただきます」

「2週に1度のペースで来ますからね！」

「おう！ 待ってるぜ健太！」

すげー仲いいんだな。というか下の名前はなんだ

「それじゃあご馳走様です。では大将また！」

「おう！ いつでも来いよ！」

ラーメンを食べ終わった俺たちは店を出る。さてこれからどうするのだろうか

「で、健太。これからどうするんだ？」

「そつだなあ……よし、学校戻ろう」

「は？」

「何、wars部の見学だよ。俺は元々wars部に入るつもりで来たわけだからね。真箏も一緒に入ろうぜえ」

「さつきも言っただろ？ 俺はwarsをやらないって……悪いけど俺は見学だけだ」

「ちええ。じゃ行きますかあ」

俺と健太は学校へ戻ることになった。wars部を見学するために

正直俺は今部活に入るかは入らないかはまだ決めていない。入る

としてもサッカー部だろう。warsを出来ないことは無い。姉貴がwarsをやっていたから。でもwarsはやらない。俺はそう胸に刻み込んであるんだ

さて、今俺と健太はwars部の部室前にいる。いるんだが……人の気配がまるで無い。というか何で校舎の裏の日の当たらない所に部室があるかなあ……前まではグラウンドの隅にあつたハズだぞ？ 去年のアレで移動になってしまったんだろうが

「なあ健太。もしかしてもう人いないんじゃないか？」
「いやそんな事はない。1人はいてもおかしくない！」
「あんな……」

とりあえず辺りを見回してみる。すると、丁度そこを通りかかった人がいたので聞いてみることにしよう

「あのすいません！」
「ん？ あ、新入生の子か？ よし野球部と一緒に青春の汗を流さないか！？」
「いやその……wars部ってもう人いないんですか？」
「あ……wars部ねえ……知らん。もともと興味ないし。」

予想外の返事が返ってきた

「原、その回答は可哀想だろ。wars部には……誰もいなかったハズだよ？ 何？ 君達wars部に入部するの？ やめておきな

つて。また都北の大会で負けることになっちゃうからさ」

「いや入るつもりはないんですが……ありがとうございます」

お礼を言ってそこから離れようとする

「行く当てが無かったら野球部で青春の汗を……」

「よし、原。俺と一緒に青春の汗を掻こうじゃないか」

「行くぞ南！」

「おう！」

暑苦しい先輩たちだったな。“青春の汗”とか……おっと、そんな場合じゃない

「ということらしいが　　って無駄だと思っただけだなあ……」

「誰か居ませんかぁー!?」

後ろを見ると、健太がドアをドンドン叩いている。どれだけやりたいたいだ……

「俺帰るけどいいー?」

「誰か居ませんかぁー!?」

ダメだ、聞いてない。というか今日入学初日だよな……結構仲良くなつた気が……いや今はそんな事どうでもいい
健太もそろそろ諦めようとしたその瞬間

ガチャ

「なんだ?　ここに何か用か?」

ドアが開き、その中から制服を着て眠そうにしている男子生徒が

先輩

出てきた。髪は若干ボサボサ気味で、頭を掻いている。多分今まで寝ていたのだろう。そんな目をしている

「Wars部を見学したいんですが!」

健太はその旨を伝える。さて俺はどうするか

「見学だあ? 無理だな」

「「え?」」

「なんだって今この部活は1人しか……俺しかいないからな。なんだ? それでも見学したいってか? そして入部してくれるってか? とりあえず俺は眠いからな。帰れガキ共」

バタン

そう言い残して先輩は中へと戻っていった。多分今日は見学は出来ないだろう。というか入部しても廃部になってしまうだろう

Warsは7人1チーム編成だからだ。だからあと健太とあの先輩を入れたらあと5人は必要になる。それを集めるのは相当厳しいだろう。これなら健太も諦めるハズ

「よし、部員を集めよう」

「は?」

「部員集めるんだよ。いや、もしかしたら明日には人数が増えてるって可能性が……よし集めるのは止めて入部はしよう。そして待つ!」

なんだそのやり方。待つんじゃないかって集めるのはしろよ。というか諦めるどころか余計に入部したがるようになってしまったな……

「真筆も入るよな？」

「さつきも言つたる？ Warsはやらないって」

「ちえつ。いいよ俺は頑張るぜ！ 今日はこちらまでだ！ 俺は入部希望用紙を出してから帰る！ じゃあな、また明日な！」

「あ、ああ。また明日な！！」

そう言つと、健太は校舎の方へと向かつていった。本気で入るつもりなんだろうなあ……

「Wars……か……」

部室を見てそんな言葉を呟く。俺にWarsをやる気はない。姉貴と同じようにはなれないから……

さて、俺は何の部活に入るとするか。そんな事を考えながら家路へとついた

翌日の朝。リビングにて

「真筆。1日目はどうだった？」

いや、聞くの遅いだろ。普通昨日帰ってきたときに聞けよバカ母。でもそんな理由で答えないほど俺は酷くない

「うん。友達が2人出来た」

「そう、よかった。お母さん安心！」

困るなこの親。ちなみに友達つてのは健太とエルフィの事だ。今日は学校についたら早速エルフィに声を掛ける事にしよう。昨日は（理由は知らんが）逃げられた訳だし

「それで真筆。部活は入るの？」

なんてことを聞くんだ

昨日あんな事があつたばかりなのに

「いや、入らないかもね（わからんけど）」

「あらそうなの？ てつきり隼と同じwarsでもやるのかと思つてたけど……ま、真筆の好きになさい。気が変わったらすぐに言つてね。お母さん備品ならなんでも買つてあげるから！」

「わかった。さて、それじゃ行つてくる」

「はい、行つてらっしゃい」

俺は玄関へと向かう。備品ならなんでも買つてあげる、か……今更思う。いい親だ

それより母さんまでもが……俺がwarsやると思つてたのか……でもゴメン母さん。俺は……warsをやりたくないんだ。姉貴みたいになれないしな……

そう思いながら玄関を出る。さて、今日も始まりだ！

学校にて。荷物を置いて席に着いた。着いたのは良い。だが

「まさかな……こんな人がいないとは思わなかったぜ」

誰も人がいない。いや、いないってのは違うな。いても俺と2、3人の人たちだけ。健太は来ていない。でもエルフィは目の前にいる。いるんだが……

「なあエルフィ。朝から学校でNPC開くのはどうかと思うんだが

……」

「ほえっ!? な、なんですか神崎さん!？」

「いや、そんな驚かなくても……で、朝からパソコンってのは……」
「あ、はい! そうですよ。朝からこれはないですよね!！」

そう言ったエルフィは、急いでパソコンをしまつ。これは周りから見たらどう思われるんだろうか

「ところでさ、昨日俺何か悪い事言ったかな? もしそうだったら謝るけどさ」

「えっ!?! 別に神崎さんは何も言ってないですよ!?! 昨日わたしが逃げていったのは私からだ……」

「ただ?」

「やっぱり何でもないです」

「あゝそう? まあとりあえずゴメン」

「いや、別に謝らないでくださいよ。謝るのは寧ろわたしの方です
から……」

「そう?」

「はい。あ、それで神崎さんは何か部活入るんですか?」

また部活の話か……ま、正直に答えておこうかね

「いや、別に何に入ろうとかは決めてないね。エルフィは?」

「わたしですか? わたしはWars部に」

「へっ?」

「え？ Wars部に……」

まさか健太以外にもWars部に入りたい人がいたとは……正直
吃驚だ。というかエルフィは武器を扱えるのだろうか。もしかして
経験者？

「あのさ、エルフィってWars経験者？」

「いや、一回だけやってみたって感じですよ。それで面白かったから
入ろうかなと……ダメですかね？」

「ダメって訳じゃないんだけど……ま、頑張つてな」

「ハイ！」

「お、真筆。早速ナンパかあ？ よし！ 僕は応援してるぞ！」
「はあっ？」

健太が教室に入ってきた。というかナンパとは何だ。俺はただ親
睦を深めようとな……

「そうなんですか真筆さん？」

「うん信じないように」

変な誤解を与えてしまったではないか。解くには簡単だろうけど

「なあ、真筆。Wars部にはもう7人集まったんだぜえ。すげえ
だろ？」

「え！？マジか！？」

「しかも全員俺と同じように希望して入部したヤツだ。その……
含めてな！」

「……………」

「何だ2人とも。そんな目で見ないでくれよ。照れるじゃないか！」
「……………」

決してそんな目で見ている訳じゃない

「やっぱりわたし……名前を覚えて貰えないんですね……………」
「ちょエルファイ、泣くな泣くな！！ 健太もせめて名前を呼んでやれよ！！」

「スマン。本当に忘れてしまったんだ……………」
「うわあああああん！！」

本当に泣いちゃったじゃないか！！ もう教室にいた人たち（4人強……………）っていつの間に！？）がこちらを見ている。ヤバい！これじゃまるで俺たちが悪人みたいじゃないか！ イメージダウンじゃないか！ ちよつと健太どうにか…………… っつて、「僕は関係ないですよ」的な感じで去ろうとするな！！ 仕方ない。俺がどうにかするしか…………… っつて、どうすればいいんだよ！！ ええい！ これは健太に謝らせるしか おい！ 席に座るな！ でも今ここで席を離れれば俺は悪人だ。だから俺がどうにか……………

「エルファイ！ 落ち着くんだ！ 健太は別に名前を忘れてしまった訳じゃないんだ！」
「グスン……………でやったら……………何だってなんでやってゆー言ってますかんでしゅかあああああ……………！！！！」

呂律ろれつが回らないのか、言語がおかしくなっている

「あーそれは……………」

ヤベ、なんて言うか考えずに言っちゃったよ……………

「やっぱり忘れられてたんじゃないですかあああああ！！ うわ

「……ん……！」

「だぁ……っ！ 健太こっちに戻って 僕は関係無いですよー」みたいな感じで無視をするなああああっ……！」

「うわ……ん……！」

ダメだ。周りの目が俺を段々と悪い評価へと運んでいく。もうどうすればいいんだよ！？ そう思った瞬間

「よし席に着けー。HRをホームルーム って、エストラント、何泣いてるんだ……？」

我がクラス担任、梅花哲也うめはなてつや登場。助け船がっ……！」

「佐々木さんに名前を忘れられました……ん！ うわ……ん……！」

「よし佐々木。HRが終わったら廊下に来るんだ。女子を泣かせた罰を味あわせてやる」

「嫌だ……ん……ん……！」

よし、これで俺への評価の低下は無くな

「神崎さんには嘘をつかれました……ん……！」

らないかもな

「よし神崎。お前もHRが終わったら廊下へ来い」
「嫌だ……ん……ん……ん……！」

入学2日目で、周りからの評価はかなり下げられた気がした

「まったく……アイツのせいで酷い目に……」

今日の授業（校内見学と役員決め）が終わり、放課後。俺は昇降口で靴に履き替えている。今日から掃除があるのだが、掃除当番にならなくて良かった……

ちなみに学級委員長は健太になった。そして俺は副委員長に……さっきの罰ということだ

「さて……」

「真筆……！！」

「ん？」

後ろを振り返る。そこには掃除当番のハズであろう、健太がいた。さてはサボってきたな

「サボってきたな？」

「そりゃあ……掃除なんて怠^{たる}くてやってやれないよ……」

「全く……」

「それに今日から部活だしね！ んじゃまた明日……！！」

「あ、ああ。じゃあな……！！」

健太はそう言つと校舎裏^{部室}へと向かっていった。さて俺はどうするか……って、あれ？ 何か忘れてるような……

「あ、ノート」

さっき何故か健太にノートを貸したんだ。すぐに返すと言っていたが、まだ返して貰っていない。今から返して貰うか。その為に俺

も Wars 部の部室へと向かった

「うわ、やっぱりだな……近寄りたくねえ………」

俺は今、校舎の角部室から離れた場所にいる。なんでこんな所にいるかって言うと、近寄りがたいオーラが部室から放たれているからだ。ここは行くべきなのか行かぬべきなのか……？

「ま、別に明日でもいいよなあ……大して重要な物でも……重要なな………」

どれくらい重要かっていうと、周りからの評価高校生活並みに重要な物だ。あれの一部の内容は俺と健太の秘密になっているんだが……それを他の生徒、主に女子に見られるとヤバい事になる。どうにかして返して貰わないとな。でも、すげー近寄りがたい……

「くっそ………」

悩む事早3分。それは起こった

ガチャ

「……おいその」

昨日の男子先輩生徒が部室から現れた。「その」って誰の事だろうか。いや、俺の事では無いだろう

「そこのお前だ、男子……あー昨日のヤツか。出てこい。3秒だけ

時間をやる」

俺の事なの！？ いや、そういう訳じゃないな。昨日のヤツってだけで判断するのは良くない。もしかしたら昨日俺たち以外にも来たのかもしれない。だから違う、うん。でもこっちを見ているのは気のせいだろうな……

「チツ。こんな事はしたくねえが……」物質瞬間移動装置「TEMM起動」

え？ TEMMってまさか……いや、そんなハズ

チュインツ！！

あれ？ 今頬を何かが通過したよ？ 恐る恐るその部分を触って見る。何か暖かい液体が……よし確に……気のせいだよなあ、赤く見えるなんて、ハハ、ハハハ……

チュインツ！！

「危ないじゃないですかあああああつ！！」

今度は目の前（校舎の角）に弾が命中した

「3秒待ってやったのにな。それは無いんじゃないか？」

「だからといってTEMM使って銃を取り出さないでくださいよ！ 殺す気ですか！？」

「そのまま出てこなかったら殺す気だったぞ」

やべえ。この先輩危ない人だ……！！

「それで、何の用ですか？ 俺はその中にいるであろう佐々木君に用があつて来たんですが……？」

「おーそうだったな。お前、入部しろ」

「……………へ？」

今言つた言葉を一瞬理解できなかった

「聞こえなかったか？ 入部しろ」

「何処にですか……？」

「wars部だ。ちなみに逆らつたら今この場で殺す」

「け、結構ですーっ！！」

俺はその場から逃げ出した。冗談じゃない！ 俺はwarsをやらないうつて決めたんだ！！

「逃げられると思うな。おい新人共、ヴァウチル形VWじゃねえがミッションだから殺したりはするな。内容は男子生徒1人捕まえてこい。以上だ」

さて俺は今wars部の部室の中にいる。理由はとっても簡単。さあここで問題だー！

俺がここにいる理由は次のうちどれ！？

？投降した自らここへ来たから

？入部したいから

「^{カサネ}鶴と呼ばれていた女子が俺の後ろに回り込む。そして銃口を俺の首に向けながら

「わかったな？ 入部しなかったら殺す。そして入部して来なくても殺す」

「う……」

とりあえず威圧感が尋常じゃない

「真筆……返事してくれ。僕はお前を殺したくない……」

「ちよつと待て健太。俺はもう入部する事は確定しているのか？」

……裏切られた気分だ

「お主も少しは理解せよ。お主はこの戦線に立つ事は確定されたのだ。男なら潔く了承せよ」

「あなたたちは何ですか？ 俺を虐めてそんな楽しいですか？」

多分これは校内での虐めに入るに間違いない

「これは決定事項だ。逆らえば殺すと何度言ったらわかるんだ？」

「くっ……」

やっぱり威圧感が尋常じゃねーです

「お願いです神崎さん……」

「エルファイまで……」

……更に裏切られた気分だ

「ボクは逆らわない方がいいと思うよ？」
「お前は女だよな？」

つい今どうでもいい事を聞いてしまっ

「で、どうなんだ？」

「……わーったよ！ だからこの縄を解け！ 入部してやるから！」
もう諦めるよ……逃げ出すのは……

「入部して来なかったら殺すぞ？」

「……ちっ！ わかったよ……」

やっと縄を解かれて解放される。なんつーか本当に強引だなこの
連中……

「さ、ここにサインしてちょ」

「健太、後で話がある」

……俺はwars部に入る事になってしまった……あれだけ
入りたくなかった部活に。というか本当にこれ虐めでね？
とにかく俺は“強制的に”wars部に入部させられた。これが
らどうなるのやら……

なんつーか……逆らえないよなあ……

3 Wars

「よし、これで真箒もWars部員になったな！ おめでとう真箒！」

「全然嬉しくねーひっ！」

「少しは喜べ神崎」

「わかったから銃口をこちらに向けるな」

今俺はWars部の部室にいる。理由？ 強制入部させられたんだよ！ なんで俺がWarsなんかを……！！ 俺はWarsをやらないって決めてたんだぞ！？

でも逃げる事が出来ない。殺されるから……はあ

「それでお前ら、コイツに自己紹介とか無いのか？」

すぐそのソファで横になっている先輩部員がそんな事を言ってくる。いや、アンタも自己紹介くらいしろよ。まあいい、とりあえず俺からだ

「俺の名前は神崎真箒だ。元々Warsなんてやる気は無かったんだよコンチクショイ。とりあえずよろしくな。ああそれと俺は武器持っていないから」

「神崎雫の弟なのになー」

「健太、それを今言うか？」

「もち！」

でもその割には皆驚いてはいない。まさか……健太が教えたとか？ 俺が来る前に………。だとしたらシバかないとな……。そんな事を思っていると、銃口をこちらに向けていて、髪をサイドテール

にしている女子が口を開いた

「「しらのあやか 鶴明日香だ。よろしく頼むぞ神崎。とりあえず私の命令には従え」
「ちよつと待て鶴（だよな？）。俺はお前の奴隷か何か？ そしてそれはいつ決まった事なんだ？」

「今だ」

「ざけんなよ？ いくら女子だからって手加減ごめんなさい」

「わかればいい」

とりあえずコイツは危険人物だ。すぐに銃を向けてくる。下手なことを言つと確実に殺されそうだ。

そして今度は、髪をロングポニーテールにしている隻眼の男子が口を開いた

「あけちみつひび 明智光久だ。真箏殿、よろしく頼む」

「あ、ああよろしく。明智ってもしかして…… 明智光秀みつひでの子孫か何かか？」

「左様。拙者の家系は明智光秀の繋がりだ。故に武士の心は忘れぬ」
「そ、そう……」

まさかここで歴史人物の子孫に出会えるとは……正直驚いた。600年くらい立っても武士の心って……ある意味凄いのかもしれぬ

「次はボクかな？」

そんな事を考えていると、ショートヘアの女子が立ち上がった。
「ボク」って何事ぞ

「ボクは藤堂琉華とうどうりゅうか。よろしくネ、神崎くん」

「ああ、よろしく」

とりあえず一人称以外は普通の女子らしい。よかった……こうい
う人がい

「あのノートは絶対女子に見せちゃダメだね。私興奮しちゃったも
ん」

ちや困るな。しかも全然良くない！ まさかあのノートを見
られた！？ 健太！？ お前何してくれてんの！？ そう思っ
て健太の顔を見る。目に映ったのは、見た瞬間に目を逸らす健太の姿。
後で殺そう

……何が書いてあったのかは聞かないでくれるとありがたい

「……………近藤望」
「こたけのぞみ」

どうやって健太を殺すか考えていると、次の女子が自己紹介をし
ていた。やべ、聞いてなかった

「スマン、聞いてなかった」

「……………近藤望」

「あ、ああヨロシク……………」

第一印象：凄い暗い

見た目：髪、ロングでストレート・顔つき、普通（どっちかって
と可愛い寄り）

俺……………こんな部活でやっていけるのか……………？

全員の紹介が終わったところで、部長の口が開く

「お、紹介終わったか？ それじゃ最後は俺か……面倒だけど仕方ねえ。西宮雄太だ。お前の話は健太に聞いた。お前を引き込んだ理由はそれともう一つある」

「え？」

「そこにいたからだ」

「死にさせええええつ！！」

部長に襲いかかるが、結局……

「お前がな」

チュインツ！！

「すみませんでした」

負けてしまった。武器は卑怯だぞコノヤロー！

「で、だ。お前武器が無いって？ あの神崎雫の弟なのにか？」

「ハイ……」

流石に姉貴の弟だからって武器そいつを持っている扱いにしないでくれ

「ふむ……じゃあその貸し武器を使え。もちろん後で自分専用の武器を買って貰うことになるが……もしかしてその様子だとTEM M特殊ンサーもSSも持ってないんじゃないか？」

「ええその通りです。家にある武器等は全部姉が持っていましたから……」

つまり家にはWarsに関する物が一切無い

「それじゃその貸しTEMMとSSも好きに使え。もちろん後で自分で買えよ?」

「ハイ……」

なんだかんだで良い人じゃねえか……凄^{わる}い悪人だと思ってたけど……

「そういえば……VWってどこにあるんですか?」

さっきまで気になっていた質問を口にする。前に来たときには大きな機械が部室の裏に取り付けられていたんだけど……それがこの部室には見あたらない。はて……

「ああ、その機械だ。そうそう、明智。お前はあれに一切触れるな」

奥にある機械を指さしてそう言う。触れるなってどういう意味だろうか……?

「承知しておる」

承知するんだ……理由はわかってしているのだから?

「ならいい。そうだな……よし、全員今から模擬戦闘でもするか?」
『は?』

全員でそう返す。いやいや、いきなり模擬戦闘って……

「あの……いいんですか? 全員初心者なんじゃないですか?」

「何を言う。エストラントは経験者だろ？ それ以外は皆無だ」

すっげー不安なんだけど……？

「とりあえずやってみる。そのうち慣れるからよ」

「部長はやらないんですか……？」

「俺はもうやらねえよ。ただここで部長をしてるだけだ」

なんて適当な人だ……もしかしたら何かあったのかも知れない。
だが敢えて触れないでおこう

「よし！ 全員武器のセッティングをしろ！ 今から15分後に戦闘開始する！ それまでに全ての準備を終わらせておけ！ いいな！？」

そう言った部長は再びソファに横になる。あれ？ その他のこと教えてくれないの？

「あの、部長……」

「他のことはそいつらに聞きながらやれ。安心しろ、全員初心者な訳だ。頑張ってくれよ？」

クスクスと笑いながら部長はそう言う。そしてそのまま眠ってしまった。いいのかこの人……
とりあえず準備だ

「お、真箏。話は終わったのかな？」

「ああ。健太、それは……？」

「おう、よく聞いてくれた！ これ昨日買って貰ったんだよ。AG社の武器。“AGシユバルツ”だ。これでも僕は空手をやってのだ

！ だから手甲を選んだワケ。そのうちまた武器買つかもしれないからさ、その時は真箏も一緒に行こうぜ？」

まー色々アドバイスして貰うとするか

「おうよ。で、エルフィは？」

「わたしですか？ 私は戦闘に参加はしません」

「へ？」

じゃあ何故ここにいる！？

「わたしはサポートルームで皆さんを支援させていただきます。もちろんVW内ですからね？ まあ武器は……これですかね？」

エルフィはそう言うと、銃を取り出した

「RF社の“RF-Zipp89型”です。Zipモデルなんで命中率は悪いですが、攻撃力は高いので自分の身は守れるかと」

「そ、そうか……（なんだZipモデルって……？）鶴は？」

「私か？ 私はこれだ」

俺が尋ねると、鶴は2丁の銃と、1本の刀を取り出した

「この銃はどちらもAT社の物だ。“AT-Zipp08型”と“AT-Xp82型”だ。エルが話してくれた通りZipモデルは命中率が悪い。だからこのXpモデルの銃で補うつもりだ。そしてこの刀は伊右衛門^{いゑもん}。私は中衛型だ。そして佐々木。お前も一つ武器あるだろ？」

「え？」

「バレてたか……ほれ“AT-Wn22型”だ」

「お前……今更Wnモデルだと？ 巫山戯てるのか？」

「仕方ないだろお？ 昨日買いに行ったら銃はこれしか無かったんだから……」

「Wnモデルってまだ販売してたんですね……でもいいじゃないですか。Xp、Zipモデルよりは便利ですよ」

「まあそうだが……」

ダメだ。全然ついて行けない……

というか、本当に初心者なんだろうか？ やたら武器に詳しいよ
うな気がするんだが……

とか思ってるよ

「さーてこれがボクの武器だー！！」

「うおっ！」

一人称がおかしい藤堂さんが武器を取り出し、俺の目の前に長い銃が2本置かれる。スナイパー専用武器みたいなの……

「ほう、ミーティアシリーズか。お前スナイパーだな？」

「ご名答。高いところから遠距離攻撃なら任せてよ。ミーティアシリーズは命中率が良くていいからね」

「……………（ついて行けない）」

「あ、ちなみにこつちが“ミーティア3000”で、こつちが“ミーティア8000”ね。8000の方が攻撃力は高いかなあ」

ホント無理、ついていけん

「拙者はこれだ」

今度は明智家子孫の光久が武器を取り出す刀が二本と銃が一本。

古風な武器だな……

「この刀が“正宗”、これが“落楼春水”。そしてこの銃が“種子島”だ。武士の心は忘れぬ故……」

「わかったわかった。武士の精神ね？　しかし……こんな銃もあるんだな」

「左様。それは拙者用に改造してもらった物だ。原型は……そのよ
うな物だったな」

光久はエルファイが持っている銃を指さす。なるほど、そういうこと
とね

「……………」

今度は無口少女の近藤望さんが武器を取り出す。刃物のオンパレ
ード。出された物は槍、鎌、刀。すげえ危ないんですが……

「ほう……お前も“伊右衛門”使ってるんだな？　それ以外は……」
「……………“テンプティーゼロ”と“ノア・クラウン”。……………私は近接
攻撃しかしない」

もうダメ……無理

「で、神崎。お前はどつするんだ？　2つは選んでおいた方がいい
と思うが……」

「お、おう。そうだったな」

いけないいけない。危うく自分が使う武器を選ぶのを忘れるとこ
ろだった。えーと貸し武器は、っと……銃が多いな……近接武器は
刀か……

「……………これにしよう」

俺はその中から適当に2丁の銃を選び取った。何気に重いんだな

……

「RF-Xp02型」と「RF-Xp05型」か。まあいいんじゃないか？」

鶴にそう言われる。武器の良さが全然わからねえ。ま、そのうち慣れるか

「さて次は作戦会議ミーティングでもするかあ？」

「そうだな……………そうしよう。全員輪になれ」

健太の案を採用した鶴は、俺らに輪を作るように促す。作戦会議
って何を話すんだ

ちなみに後で聞いたら作戦会議ブリーフィングとも言っらしい。いや、それを聞いた訳じゃないが……………

「さて、とりあえず決まったポジションはある。エル、お前はサポートルームだ」

「言われなくてもわかってますよ」

「それで大将Headなんだが……………エル、頼めないか？」

「え！？ わたしですか！？」

「鶴……………大将って？」

「……………」

「とことん初心者だなお前は……………大将は討ち取られたら負けな人物だ。それをエルフィがやるってこと？ わかった？」

「ありがとう健太。なんとなくだけどわかったよ」

無視した鶴に代わり、健太が教えてくれる。やっぱり良いヤツだ

「ふむ、で、エル。頼めるか？ 理由と言えば、お前はあまり戦わない人物だからだ。しかも敵陣からもっとも離れた場所で行動することになる。だから……」

「……はあ、わかりました。その代わり、皆さん頑張ってくださいよ?」

「ああ。よし、それ以外のメンバーは極力相手の大将を狙うか、敵陣旗を撃破することを考えよう。それで行く!」

考えは纏まったみたいだ。そして、皆がSSを取り付け、準備完了となり、その時間が訪れた

「よし、全員準備OKだな? 今回の模擬戦闘は公式ルールに則って、3回戦行うこととする。大体のルールは知っているな、神崎?」

部長が起き上がってきて、そう尋ねてくる

「大体は知ってます(武器の知識は知らなかったけどな……)」

「全員SSの取り付けとTEMMの用意は出来てるな?」

『大丈夫です』

全員で返事をする

「よし、一回戦は相手側のフィールド、二回戦はこの学校のフィールド、延長戦はWars共通フィールドだ。いいな? それでは行ってこい!」

ガチャン!

「くっ!!」

スイッチを入れられると、急に耳鳴りが始まった。これがVWに入る感覚か……凄い。姉貴達はこんな事を……いや、まだ戦いは始まっていないんだ。これだけで関心している場合か

だんだんと意識が飛びそうになってくる。でもここで意識を失ったらダメか。そして

「おっと……」

少しバランスを崩し、倒れそうになる。そして目を覚ますとそこには……

「すげえ……」

よくわからない空間が広がっていた。辺りを見回すと、白い空間と黒いブロック。ブロックが幾つか重なって出来た、縦に長い物もある。そういえばみんなはいない。どうして？ そう思っていると

『さて、全員到着したな?』

部長の声が聞こえてきた。どこにいるんだ、と思って辺りを見回すが、やっぱり不思議な空間しかない

『俺はRWリアワールドにいるに決まってるだろ神崎。そして全員バラバラの位置にいる。エルフィ、回線の方はどうだ? 試してみる』

その言葉を最後に静かになる。そして

『…………ジ…………ジジジ……………』

耳にノイズが走る。なんだこれは……

『あーあー、皆さん聞こえますか？ こちらサポートルーム、エルフィ・N・エストラントです。聞こえたら1人ずつ返事をお願いします。現在WL全体回線に設定してあるので皆さんの声が聞こえるはずですが、確認をお願いします。それとWLとPL個人回線は各自設定変更は可能なので、それは戦闘中に確認してください。ではお願いします』

その言葉を最後に、エルフィの声は聞こえなくなる。そして次々と他のみんなの声が聞こえてきた。それに俺も返答をし、回線が大丈夫な事を確認する

『よし、準備は整ったな？ お前ら気合い入れろ。今回の相手は模擬戦闘用プログラムだが、俺がデータを漁ってたら昔の他高校のデータを見つけてな、それをインストールした。今日はそれが相手だ。ちなみに去年の都北の大会の優勝校、哉町かなまち高校のデータだ。それじゃ、健闘を祈る』

ブツッ

RWとの回線が切れた。これから戦いが始まるらしい……気合いを入れないとな

「全員準備は出来てるの？」

俺はちよつと心細くなったので、WLを開き、皆に確認してみる。すると、すぐに返事が返ってきた

「もち！」

「左様」

「私はいつでも大丈夫だ」

「ボクも大丈夫だよ」

「……問題ない」

「大丈夫です！」

「……みんな、頑張ろう」

戦闘……開始だ……！！

#3 Wars (後書き)

どうも、作者の“あんだーすたんど”です

#3 まで書いてはみましたが……全然ダメですね

正直自分でもわからない設定です
これからどうなることやら。。。

次回、模擬戦闘を開始します

それと今の内に謝罪を

僕は戦闘描写が大の苦手です

だから次話は大分読みづらくなる(予定)です
それだけです

ではでは。。。

#4 模擬戦闘(前書き)

もう一度謝っておきます

ごめんなさい

#4 模擬戦闘

みんなとの会話を終えて戦闘の準備をすると、どこからかノイズが走り、何かが喋り始めた

```
『wars program setting start .
field coating . . . . .complate .
enemy program . . . . .complate .
first battle data install . . . . .co
mplate
are you ready . . . . .Wars battle
start!』
```

ビーーーーッ!!

英語で話された何か(全くもって理解不可)が止まると、VWに大きな音が響き渡った。これが戦闘開始の合図だ。多分みんなは敵陣に攻め込み始めただろう

やっぱり俺はwarsをやるべきではないのではないか? そんな事を考えてしまう。でも殺されるし……いや、もうこうなった以上やってやるしかねえ! この模擬戦闘……勝利してやらあ!!

ここでwarsの基本ルールを確認してみよう。warsは7人1チームとして参加するスポーツだ。仮に人数が足りなかった場合、それが公式ルールで無ければ相手の人数に合わせて戦闘をする事になる。つまりAチームに4人しかいないとすれば、Bチームは7人

いても、4人…… Aチームの人数に合わせなければならない。その場合は戦闘は一回のみ行うということになる。wars共通フィードの《都市^{シティ}》で

次のルールを確認しよう。武器について。3回戦う中で用いることが出来る武器の数は、1人5つまでと決まっている。そしてその武器には、戦闘が始まる前にSS、特殊センサーを付けておかなければならない。このSS^{特殊センサー}というのは、敵を攻撃した際に、相手の身体本体へダメージ感覚を与えるセンサーの事だ。もちろんこのセンサーを付けずに戦った者は失格となり、戦闘に参加できなくなる

次、TEMMについて。TEMMというのは、物質瞬間移送装置、Transport Equipment Materials Momentの略称で、その名の通り物質の瞬間移送を可能にする装置の事だ。warsに参加する者は、小型TEMMを手首（左右は問わない）に取り付け、それを起動することによって、武器を^{あらかじ}VW武器管理システム”から引き出すことが出来る。つまり、予め武器をVWに転送しておくことが必要なのだ

余談だが、TEMMで人間の移送はまだ不可らしい（人間を移送すると、何が起こるかわからない為だとか）

次、勝利方法。これはさつきも話したとおり、敵大将^{Head}を討ち取るか、敵陣旗^{Flag}を破壊する必要がある。陣旗の位置は、VW戦闘エリアの角に当たり、対角線上に位置する。大将は事前に決めておき、相手に人物の顔は公開されるが、位置情報は公開されないようになっている。それはそれでいいのだが……

現段階で説明出来るルールはこれくらいだ

「さて、俺も行きますかあ！」

ここからが本番だ。いつ敵に遭遇するかもわからなければ、敵の居場所もわからない。わかっていることは、自分が今戦っていること、みんなの居場所、敵大将の顔だ。移動したいがどっちに行けば……

改めて今居るフィールドを確認。白い世界にいくつもの黒いブロツク。目がおかしくなりそうだ……。そんなことを思っている

『ジジ……神崎さん、神崎さん！？ 聞こえますか！？ 聞こえたら応答お願いします！』

エルフィの声が聞こえてきた。おそらくこれはPLで連絡しているに違いない。というか俺がそう設定してある

「ああ聞こえてる。どうかしたか？」

『現在神崎さんの前方50m地点に敵を捕捉しました！ もう一度繰り返します。50m前方に敵を捕捉！ 警戒態勢に入ってください！』

「りょーかい！」

さて、初戦闘か……。ここで敵大将が来てくれれば嬉しいかなあ……？

「さて」

俺も移動を開始した。前方へ。いつ敵が出てくるかわからないので、TEMPを起動して武器を取り出す。確か“RF-Xp05型

”だったか？ 武器の知識に乏しいぜ……。武器を構えながら前へ前へと進んでいく。そして

バンツ！

左から乾いた銃声が聞こえた。敵か！？ そう思った瞬間、自分の肩を何かが掠る。銃弾だ。結構狙良いいじゃん……！

急いで左を見ると、そこには敵がいた。大将ではないか……

「さあて……そのまま俺の銃の餌食にでもなりな……！」

俺は銃を敵に向けて引き金を引く。実際に銃を撃つってこんな感じなんだ、と思ってしまった、が今はどうでもいい。目の前の敵に集中しなければ

今俺が撃った弾は、軽々と回避されてその奥の黒ブロックへと命中した

そして再び敵は銃を撃ってきた。俺もその弾を回避し、黒ブロックの陰へと隠れた。敵の攻撃は止むことが無く、俺の右側を幾つもの銃弾が流れていく。反撃のチャンスがないじゃないか……と思っただ2秒後

カチャカチャ

敵のいる場所から銃の音（弾切れ）が聞こえてきた。よし、チャンスだ！ 俺は思いきって敵へと接近する。敵まであと5m

「これで……」

銃を敵に向けてさらに接近する。あと2m

「終わりだっ!!」

ドンッ!

今俺が放った銃弾は、敵の腹部を貫通した。別に敵はデータなんだから死ぬ訳じゃない。そもそもここはVWだ。攻撃のダメージはあっても死ぬ訳じゃない。それに死ぬほどの痛みを負う訳でもないからな

腹部を貫通された敵は、その場から消えていった。Warsでは“死ぬ程のダメージ”を負った場合、戦闘不能と見なされてその戦闘からは除外され、次の戦闘で再び参加するという物になっている。つまり今消えた敵は戦闘不能となった訳だ。まずは1人つと。さて、大将を狙うか敵陣旗を狙うか。そんな事を考えながら歩き出した瞬間

ビーーーーッ!!

「なっ!?!」

戦闘終了の合図がVWに響き渡る。そしてこの戦闘結果が空中へ投影される。結果は……

『A team lose

reason: flag broked』

確かAチームは俺たちの方だ。つまり俺たちの負け。敗北の理由は陣旗が破壊されたから。むう……

『next battle starting time at

5 minute after . . .
count start p p
『 . . . 』

どうやら次の試合は5分後に開始されるらしい。今の文章が消えて、フィールドも消える。それと同時に皆が同じ場所へと招集された。つか一回戦終わるの速くねえか？ どうでもいいことを考える
すると、鶴kurajuriが口を開いた

「さて、今回は陣旗が破壊されたみたいだが……誰か辺りにいなかったのか？」

「何を言う鶴。お前ルール忘れたのか？ “自陣旗周辺50mは接近不可”のルールを」

俺がそう答える。そう、自陣旗の周辺50mには近づけないルールになっているのだ。ただしそれは敵が30m以内にいないときに限る。敵が自陣旗30mに入った場合のみ、30mまで接近できるのだ。敵が20m、15m、10m、5mと進むたびにこちらが接近できる距離も変わってくる。ただし、それは5mまで。それ以上の接近は反則行為として失格となる。敵の迎撃に成功した場合は2分の猶予が与えられ、その時間内に50m圏外へと脱出しなければいけない。そういうややこしいルールなのだ

「……ふむ、そうだったな。よしこうしよう。琉華、お前は自陣旗51m地点で待機しろ。お前のミーティアなら迎撃が可能だ」

「了解」

「それと神崎、お前はサポートルーム51m地点で待機。エルの護衛を任せる」

「おう」

「そして残りのメンバーだが……バラバラに突入するのもアレだ。」

だから全員で敵陣旗への突入をする」

「ちよつと待て、もし仮に敵と遭遇することなく俺たちの元へ敵が辿り着いたらどうなる？ かなりの数を相手にする可能性があるんだが」

「それだと厳しいか……よし、2：2に別れる。佐々木と明智、私と望で2方向から攻める。いいな？」

「よし、それで行こう。……時間だ。次は勝つぞ」

俺がそう言っていると、全員が頷いた。なんつーか俺馴染んでない？
今はどうでもいいか

時間が来て、フィールドが構成されていく。次は前の先輩達が作成したフィールドだ。改善点があれば後で改修もできる。どんなフィールドなんだか……

「……荒野……か……」

今度は荒野に場所が切り替わる。ほとんど何も無いが、若干隠れるスペース（高低差によって作られた）があるので大丈夫だろう。

後ろを確認すると、サポートルーム……ルームじゃないな。洞窟、とでも言ったところか。その中でエルファイがパソコンを操作している

次は左の方を見てみる。何も見えないが、あちらに自陣旗があるハズだ。その51m地点に藤堂さんがいる。あっちは任せられそう……いや、難しいか？ 何たってここは荒野だ。高台があればまだしも、ここにはそれがない。藤堂さんのスナイパーの腕があったとしても簡単に攻撃される高さだ。厳しいかもしれない。でもここは攻め込む4人に任せるとしよう。……戦闘開始だ

```
Wars program setting start .  
field coating . . . . .  
enemy program . . . . .  
second battle data install . . . .  
omplate  
are you ready . . . . . Wars battle  
start!-!-!
```

ビーーーーッ!!

戦闘開始の合図がVWに響き渡る。俺は今回攻め込む人員じゃないのでその場で待機する。敵が来ないことと、早くこの戦闘に勝利してくれることを祈る

「……………」

が、それにしても暇だ。敵が来ない。まあ来なければいいんだけど……………誰かにPLでも開いてみようかな……………。そう思った俺は藤堂さんにPLを掛ける

「……………」

出ない……………気付いてないのかな？　もしかして早くも殺られた？
いや、まさかな……………

ガチャ

「あ

』どつしたの神崎くん?』

やっと繋がった。どうやらまだ襲撃は受けてないみたいだ

「いや、ちよつと敵が来なくて暇だったからね。そつちはどう？
敵は見える？」

『ちよつと待って……うん大丈夫。何？ 神崎くんはボクの事が心配になつちやっただ？』

「いや……それもあるけど、暇だったからつてのが大きいかな」

『そう？ でさ、神崎くんつてあーゆーのに興味があるんだね？』

「あーゆーのつて？」

『ほら、あのノート。ダメだよあーゆーのは学校に持つて来ちゃ』

「なつ、それは……！」

『もし他の女の子が見たらどうする気だったの？ もう高校生活終わつちやう所だったよ？』

「う……つか藤堂さんは何でそんな平然としてられるのさ」

『ボク？ そつというのは聞いちゃダメだよ？ 女の子にも言えないことはあるの』

「はあ……？」

『そついうこと つて……ゴメン、切るね』

「え、ちよ」

『敵が来たんだよ。それじゃ』

ブツッ、ツーツー

PLが途絶えた。『敵が来た』か……まあ大丈夫かな？

さて、また暇になってしまったんだが……どうす

『神崎さん？ 神崎さん！？ 前方30mに敵を捕捉しました！
警戒態勢に入ってください！』

「おつと……了解」

敵、か……よし、また蹴散らしてくれるわ！

一旦俺は高低差を利用して、下の穴に隠れ込む。敵がここを通り過ぎたら奇襲するつもりだ

「……………」

敵がそこを通過するのを待つ。段々と足音は近づいてくる。あと10mくらいか……？

「……………いける」

敵が目の前に降り立つ。今だ！

俺はその穴から飛び出す。敵は反応に遅れて、俺は振り向かれる前に銃弾を放つ。その銃弾は敵の左腕に命中する。これじゃまだ戦闘不能にはならない……！

敵は完全にこちらを振り向き、銃を構えてくる。しまった！後ろに逃げ場所がない！万事休すか……！いや、先にこっちが仕掛ければ……！

ドンッ……！

敵と同時に銃を放つ。俺が放った弾は敵の心臓へ、敵が放った弾は俺の脇腹を貫いた。攻撃された部分に痛みが走る。これがVWで感じる痛みか……

俺に胸を貫かれた敵は消えていった。つまり戦闘不能だ。よし、この調子で

『神崎さん！ 後ろです！』

「え？ エルフィ何を……っ！！」

振り向いたときにはもう遅かった。敵はもう1人来ていたのだ。今俺は槍で胸を貫かれている

「ぐはっ……」

敵に槍を抜かれ、俺は地面へと倒れ込む。身体が痛い。とてつもなく……まさかVWでこんな痛みを味わえるなんて……ハハ、姉貴もこんな事してたんだなあ……

俺は気を失った

ここは……どこだ？ なんか見覚えのある場所だが……右を見ると人影がある。敵？ いや、違う。ここはRW……部屋だからだ。でも誰がそこに……？

「よっ……」

俺は身体を起こし目を擦る。段々ぼやけていた視界が元に戻っていく。そうだ、俺は気を失って……結果はどうなったのだろうか

「あ、神崎さん……」

「なんだ、エルフィか。どうしたんだそんな所で？」

「いえ……ただただです」

「そうなのか？」

「はい」

「……そっか。あ、結果はどうなった？」

「2回戦も負けて延長戦は無しでした。ちなみに敗北理由はわたし^{大将}の撃破です」

「そっか……って、よくあの痛みで気絶しなかったな」

「あはは……いろいろ理由があるんですよ。聞かないでください」

女子が気絶しないのに、気絶する俺って一体……あれ？ みんなの姿が見えないような……

「わかった。それでみんなは？」

「帰っちゃいました。……その………すみませんでした」

エルフィは急に頭を下げた。あれ？ 俺なんかしたっけか？

「いや頭を上げて。俺なんかした？」

「いえ、わたしのサポート不足でした。あの時敵を捕捉して伝えたのはいいんです。でも2人來ていることを伝えなかったからこんな結果に………すみませんでした」

また頭を下げられる。なんだ、そんな事で謝ってたのか

「気にするなって。俺だつて気付かなかったのが悪いしさ？ それにこれから改善していけばいいだけだろ？」

「そうですね………ありがとうございます神崎さん！ わたしどうすればいいのかわかりました！」

「そっか。それなら良かったよ」

「はい！」

「ところでエルフィ、なんでお前は帰らなかったんだ？ みんな帰

「つたんだろ？」

「え？」

「俺なら1人でも大丈夫な訳だしさ、別にみんながいないことにはすぐ気付いて帰ってたのに……俺のことなんか気にしなくてよかったのにさ」

「………すみません神崎さん。よく“鈍い”って言われませんか？」
「へ？」

俺が鈍いとはどういう事だ。これでも俺は中3の時1000mを学年4位には入ってたんだぞ？ その俺を“鈍い”とは……

「いや言われないな。寧ろ“俊敏”と言われたくらいだぞ？」

「いや、そういう訳じゃなくてですね……？」

「????？」

「はあ………」

何故だか知らんが、エルフィは大きく溜め息をついていた。俺なんかしたか？

「帰ります」

「あ、そう？　じゃあ俺も………あ、途中まで一緒に帰る？　エルフィの家が何処かも知りたいし」

「結構です」

キイツ、バタン

エルフィはそのまま何も言わずに出て行ってしまった。本当に俺何かしたかなあ………？　とりあえず明日朝早く来て謝っておこう、うん

俺も家路へと着くことにした

4 模擬戦闘（後書き）

はあ……

お疲れ様です

戦闘描写が下手くそですいませんでしたorz

#5 入学3日目（前書き）

さあ、真筆のお母さんがやらかします

ちなみにまだ名前は無いですら

#5 入学3日目

俺が弦巻高校に入学してから、もう2日が経過して3日目。1日が終わるのをやけに早く感じるのは俺だけだろうか？

起床時間になってベッドから降り、制服に腕を通す。昨日は散々だったなあ…… Wars 部に強制入部させられるわ、模擬戦闘をやらされるわ、胸を槍で貫かれるわ気絶するわで……しかも最後はエルフイを怒らせてしまった。理由はわからない
だから今日はすぐに謝ることにしよう。いや、今日もだな……

制服に着替え終わった俺はリビングへと向かう。朝飯は……出来ている。母さんは目の前の椅子に座ってお茶を飲みながらニュースを見ていた

「おはよう母さん」

「あら真筆おはよう。で、昨日はどうだった？」

相変わらず聞くタイミングがおかしい

「あゝ……いろいろ大変だったよ」

「そうなの？」

「ああ。朝から担任に怒られるわ、副委員長にさせられるわ……」

ここで俺の口が止まる。何故なら「強制入部させられた」と言いそうになってしまったからだ。「強制」なんて言葉を聞かせたら母

さんはどんな反応をするのだろうか…… すごい言いづらい

「どうしたの？」

「あ……部活に入ったんだけどさ、ちよつと散々な結果で……」

俺はそう答えてパン牛乳に浸して口に放り込む。そのまま牛乳も口内へと流し込む

「そう、やっと Wars やる気になったのね！」

「ぶふうっ!!」

「あら、汚いわね」

いやいやいや！ なんで「部活に入った」だけで Wars やったってわかるの!? 何? 読心術でも使えるのか? 15年間一緒に過ごしてきたけど初めて知ったよバカヤロー!

「『バカヤロー』って顔してるわね」

「母さん!? アンタ読心術でも習得してるのか!？」

「なに、そんな顔してたからよ。ほら、テーブル拭いておきなさい」
「くっ……」

ぜってー読心術使えるだろ。だから親父のヘソクリの在処もわかったのか……

ちなみに親父のヘソクリの在処は、親父の部屋の本棚の上から3段目の右から6冊目の本の下にある、親父が作った収納スペースの中だ。何故俺が知っているかというと、親父の部屋の本を読もうとして、たまたま3段目の右から6冊目の本を取り出したら、たまたま蓋が外れて46285円入っているのが見えたのだ。1285円を口止め料として貰ったけど、その3ヶ月後に母さんにバレたらしい。一応俺は疑われなかったが……

現在その…（略）…のスペースの中には29618円入っている。別に盗んでる訳じゃない。普段仕事で忙しい親父の代わりに俺が金額チェックをしているのだ。母さんに取られたかどうかを確認するために……

それだったら場所を変えろってんだ

俺はキッチンから布巾を持ってきて、テーブルを拭き始める。すると母さんが尋ねてきた

「あなた Wars やるって事になったっばいけど、武器はどうしたの？」

「ああ、貸し武器でやったよ。しばらくはアレを借りるつもり」

「そう……栗に頼んで送ってもらったら？」

「いや大丈夫だよ。姉貴の武器は俺に使えそうにないし、それに新しい武器を買うつもりでいるからさ」

「……そう。じゃあちよつと待ってて」

そう言った母さんは（母さんの）自室の方向へと向かっていった。はて？

とりあえず俺はテーブルを拭き終わり、食事を再開する。時間はまだ余裕があるので心配はない。牛乳に浸して食うのは危険っぽいからマーガリンでも塗って食おう……

そして俺が朝食（パン2枚）を食べ終えた頃

「真筆！」

廊下から母さんの声が聞こえてきた。何事？

そう思っ たが、俺はそのまま椅子に座って牛乳を飲み始める。別に母さんだし問題はないハズだし、それに……親父より強いから

大丈夫な……ハズ

「真箏助けっ、あぁっ！！」

「何事!？」

今『助けて』って言おうとしたよね!? 一体何が!?
慌てて母さんのいる場所へと駆け寄る。そこには……

「……何してんの?」

「ドアに……服が……」

ドアに服を挟んで動けない状態の母さんがいた。……心配して損した気がする

ていうか、ドアを開けば万事解決だろーが……

「あ、そうか」

何かを理解したかのような顔を見ると、ドアに向き直

「あぁっ! 腰が曲がらな……!!」

れない母さん。トコトン駄目な親だな!

「しゃーねー……」

俺はドアに近寄ってドアノブに手を掛ける。一瞬静電気を感じたが、別にどうって事はない。そのままノブを捻^{ひね}り、ドアを開く。すると

「あっ、助かつ 痛っ!！」

解放されると同時に勢いがついたので、そのまま正面の壁に激突する母。頼む、息子の前でそんな恥ずかしい姿を見せないでくれ。そしてこの場に俺以外誰もいなくて良かった……

「大丈夫母さん……？」

「ええ大丈夫よこのくらい。それで……はいこれ」

「え？」

俺は母さんが手にしていた封筒を受け取る。なんだこれ……中身は紙？　もしかして……

「『もしかして』も何も無いわよ。言ったでしょ？　備品は買ってあげるって。その中に10万円入ってるから好きな武器買ってらっしゃい。残りはお小遣いにしてもいいから」

「はあ！？　いや、別に今渡さなくても……！」

「帰りに見てらっしゃい。ハイ地図。それと全部持って行きなさいね？　持っていていかなかったら全額募金してくるから」

「いやいやいや！　こんな大金持ち歩けっの！？　しかも募金とか！」

なんて親だ。まさか全額をこの俺に持たせ、しかも持っていていかなかったら募金をするとは……いい人なのか、悪い人なのか……

募金をするんだ。いい人に決まっているだろう

「ほらもう7時半よ。行ってらっしゃい」

「ちよつとまだ話が　って7時半！？　いつの間に!？」

ドタバタで気がつかなかった。もう出発時間ではないかって、ちよつと待て。この金……

「もっかい言っておくけど……」
「だあーっ！　じゃ、持ってくよ！」

持っていく事にした。落としたり盗まれたりしないようにしなければ……

「じゃあ行ってくる！」
「行ってらっしゃーい」

もう朝だけで疲れたよ……マジで

「大丈夫か真箏？」
「大丈夫ですかー？」
「ああ……なんとかな……」

俺は学校に着いて自分の席に突っ伏している。理由は簡単。とても疲れたから

何に対して疲れたかという点、1つ目は朝の母さんとのやり取り。
2つ目は登校中の事件
そう、素晴らしい事件が発生してしまった。いわゆるヒッタクリ
というヤツだ

当時の状況を振り返ってみよう

俺は焦ることなく普段通り（3日目だけ）登校していた。そう……普通に

俺はいつも道路の左側を歩き、そして自分の右手に鞆を持つ。それだからこそその事件は発生したのだ

家を出て10分くらい。学校まではあと3分の2の所。そこで……

ブオオオオオン……ガッ！

「なっ！」

後ろから来たバイクにひつたくられたのだ。もちろん狙いは10万円の入った封筒だろう。しかし残念ながらそれは俺のズボンのポケットの中に入って……無い

「え！？ ちょっと待って？ 俺は確かにポケットに入れたはずだよな！？ はっ！！」

そうだ、一旦ポケットの中身を全部鞆に入れたんだ。理由は忘れたけど……

とりあえずあの中には携帯とか教科書とかが入っているんだ！
早く取り返さないと！！

そう思っている内にバイクは段々離れていく。しかし何故だろう……20km程度のスピードしか出ていないような……いや、チャンスだ！

俺は全力疾走でそのバイクを追いかける。昨日も話したとおり俺は足が速い。段々とバイクとの距離を詰めていく。思った。バイク（20km程度）に追いつける俺って……

それに気付いたのかバイクの運転手はペダルを思いっきり踏む。踏んだのは良い。だがその後の顛末だ。残念な結果が……

ギャリリリ……！！ ブオオン……ドガアアッ！！

さて、何があったかはもうお分かりいただけただろうか……
そう、電柱に突っ込んだのだ。思いっきり、バイクの正面が50cmめり込むほど……運転手の顔が電柱に思いっきりぶつかるほど……無事じゃねえよな、どう考えても……

「……マジかよ……」

「……いったあ……」

「え？」

今運転手は何か言ったか？　つかアレで「いったあ」で済むの！？

何事もなかったかのように運転手は立ち上がり、荷物を持って俺に近づいてくる。ヘルメットが粉々で顔が……って、はい？

「ごめんね、真筈。あなたがどれだけ不用心か試したかったのよ」

「………母さん……？」

母さん（？）はヘルメットを脱ぐ………やっぱり母さんだった。驚いたことに頭は無傷だ

「いやあ、焦ってハンドルを左に曲げちゃった　テへ」

「『テへ』じゃねえよ！　もう少して死んでる所だったぞ！？」

何？　アンタ不死身ですか！？　伝説の怪物か何かですかあ！？

「失敬な、母に向かつて」

「あのなあ……とりあえず警察に電話を……（ガサゴソ）……壊れてるし……」

「まず母を警察に届け出す考えを改めて頂戴」

「だったら息子の荷物をひったくるなあ！」

『おい聞いたか？ ひったくりだつてよ！』

『ああ確かに聞いたぞ。おい、早く警察に電話しろ！』

『わかっている！ とりあえず被害に遭った少年を逃がすんだ！』

『おい大丈夫か！』

「……よし、んじゃ俺行くわ」

「待つて真筆！ 母さんを置いていかないで！」

「後で迎えに行くからさ。それじゃ……！！！」

「真筆おおおおおお！！！」

俺はその場からダッシュで逃げ出した。もちろん連絡をしてくれた人には捕まらずに

その後母さんは連行されたらしい。後で迎えに行かないとな……

と、というのが登校中にあつた事件。お分かりいただけただろうか？ この俺の疲れの理由が……

母さんを迎えに行ったら、まずは精神科に連れて行かないと駄目だな

「本当に大丈夫？」

入学式の日、教室に入って即行話しかけてきた佐々木健太ささき けんたに話し

かけられる

「気にするなって健太。俺はいつもどー……へあっ……」
「ダメじゃないですか」

今度は目の前の席にいる身長の低い女子、エルフィ・N・エスト
ラントに話しかけられる

「もう肉体的にも精神的にも疲れたんだよ〜」……あ、そうだ。エ
ルフィ、昨日は悪かったな
「ふえっ!?!」

何を驚いているのだろうか。そして何故健太はこの場にいない……
…というか謝った瞬間に消えたような……

「ほら、俺が何か変な事を言ったから機嫌を悪くしたんだろ？ だ
から悪い」

「いや変なことだなんて……寧ろわたしの逆ギレで……」
「え?」
「なっ、なんでも無いです！ とっ、とにかく神崎さんはその鈍さを
改善するべきです!」

「鈍い？ 俺が？ 昨日も言ったとおり俺は俊敏と呼ばれ……」
「……………(ジロツ)」
「なんだかわからないけどゴメンナサイ」

今一瞬クラス全体の女子が俺を睨み付けたような……気のせいな
ら嬉しいんだけど……

そして健太、遠くからジト目で見ないでくれ
まるで俺が悪いこと言ったみたいないないか!

「ところで神崎さん。“鈍い”って意味知ってます？」
「え？ そりゃあ」

エルフィはいきなり何を聞き出すのだろうか。そんなの常識的に考えてあれじゃないじゃないか

「じゃあどうぞ」

「足が遅い事」

「……神崎さんの考えてることがよくわかりました。ご協力ありがとうございます」

よし、気のせいだ。周りの視線がさらに厳しくなったのは気のせいだ。俺は何も間違ったことは言っていないぞ、うん。“鈍い”というのは足が遅かったりそういう意味だ、うん。間違っていない。そうだ、自分は何も間違っていない……そう思いたい

エルフィはさっきのお礼を言った直後に、担任の先生こと、梅花哲也つめはなが入ってきた。入ってくるや否や

「神崎、HRが終わったら職員室に來い」

「何となく予想はできてましたけどね……」

確実に朝の出来事の話だ。ひつたくりに遭った事をいろいろ聞かれるのだろう。そして犯人が母親であることも伝えなければいけないだろうな……

先生が俺に用件を伝えると、クラス中がざわめいた。それを

「静かにしたまえ諸君。今はHR中ですぞ？」

健太てなが制する。なんだあの「決まった」的なポーズは。全然聞い効い

てないぞオイ

「佐々木の言うとおりだ、静かにしろ。出席取るぞ」

先生が言うと静まりかえる教室。それが悲しいのか悔しいのか、健太は力なく席に座る

出席が始まり、先生の名前を呼ぶ声と生徒がそれに返事する声、そして空を飛んでいく鳥たちの鳴き声が教室内に響く。なんて穏やかな風景なんだ……

「真筆！ 助けて！」

「ぶふうっ！（ガンッ！）」

5秒前までは

ちよつと待て、何で警察に連行されたはずの母さんが何故ここにいる！ 以前にどうやって抜け出てきた！ しかもその格好で来るのかコラア！！ しかも頭を机に打ち付けちまったぞ！

つか、ほれ見る！ もう教室中で「あれ、神崎くんのお母さん？」って会話が始まったじゃないか！ 大恥だよ！ 何してくれてんだコンチクショー！！

「神崎……お前マザコンなのか？」

「誤解しないでください先生！ ただ乗り込んできただけの母親です！ 別に俺はマザコンとかそういうのでは無いですからね！？」

「じゃあお前のお母様がただの息子好きと」

「大きな誤解です！ 別に俺と母さんの関係はそこまで良い物では
凄ありません！
間違って

「真筆、所々本音混じってるぞー」

「黙れ健太！」

「じゃあ何故ここに来ているのだろうか……？」

「ひつたくりの犯人で　！　コホン、何でもないですよ？」

「今ひつたくり犯って言ったよな！？　何？　お前は親子でそんなことする家庭なのか！？」

「それ以上変に言わないでください！　もう俺に対するマイナスイメージが学校全体に広まっちゃうじゃないですか！」

「おつと悪い。よし全員今のは聞かなかったことにしろ。そして神崎、お母さんを警察に連行してあげなさい」

まさか先生までもがこんな人間だったとは

「はい」

「真筆！？　先生！？　まさかお母さんを警察にだなんて……！
やゝめ〜て〜！！」

「黙れ！　そして家に帰ってくるな！」

俺は母さんを連れて警察に引き渡し、そのまま事情聴取の形になっ
てしまった

それにより今日の授業は参加することが無く放課後を迎えた……

「つたく……今日は散々だった……」

「いいじゃないか、愛されてて」

「そうですよ神崎さん！　親子で仲が良いのはとっても良いこと
ですよ！」

「あのなあ？　あの後俺がどれだけ苦労をしたと思う？　俺のいな
い間に変な噂が広まって……それをどうにかするのがどれだけ大変
だったと思う……って、視線を逸らすな」

放課後……が始まって25分後。俺たちは今教室を出たところで話しながら部室へ向かっている
若干不本意ながらも

まあ入部してしまった以上仕方ない。行かなかつたら殺されるわけだし

昨日は模擬戦闘を楽しんでしまったわけだし……情けないが

「とりあえずそのイライラはWarsで吹っ飛ばせば……！」

「エルフィ、後で話があるんだが」

「ほえっ！？ そ、その……まさか……」

「おう、お前に俺の文句の塊をぶつけまくってやる」

「………はあ」

「真筆はこうやって人を傷つけていくんだな」

「健太、お前もな」

「へいへい。とりあえずエルぽん、諦めなければ道は見える物さ」

「はは、そうですねー……ははは」

「は？」

「ま、お前はもう少し考えな」

失敬な。俺だって十分物事は考えてだな……寧ろ考えていないのはお前達の方ではないのだろうか？

「……神崎さんがここまで酷いとは思いませんでした……」

エルフィがボソボソと何かを呟くが聞き取れなかった。何か俺について呟いていたような……気のせいかもしれないけど聞いてみよう

「エルフィ、何か言った？」

「何でもないです」

やっぱり不機嫌だ。俺は何か言ったか？
というか不機嫌なのは俺の方だったの

「とうちゃーく」

「はあ……」

部室へと到着する。扉を開けるとそこには、俺たち以外のメンバ
ーが全員揃っていた

「おう、遅かったじゃねえか」

クツクツクと笑いながら、奥のソファで横になっている部長、西
みやゆった宮雄太に話しかけられる。見た目ははこれでも根は優しい人なのか
もしれないと思える人だ

「来なかったら殺してるところだったけどな」

前言撤回。危ない人だ

「しかし……朝は4組の方ではざわめいていたが……何かあったの
か？」

今度は手前の椅子に座っている女子、「うしろあそびか」鶴明日香に話しかけられる。
つり目と胸くらいまであるサイドテール、そして喋り方が男っぽい
のが特徴の女子だ

「そうそう。真筆の母さんがぐふつつ！」
「健太、お前は黙れ」

健太が余計な事を言いそうだったので、拳を鳩尾に入れて喋れな
いようにする。少し黙っておけ

「ふむ、真筆殿の母君か。ははねきみ さぞ優しい方なのだろうな……真筆殿、
何故拙者を睨み付けるのだ？」

次は余計な事を言おうとした男子、あけちみつひさ 明智光久に話しかけられる。
長いポニーテールで隻眼、武士口調が特徴の男子だ。明智家の子孫
だとか

「何？ 神崎くんのお母さんかあ。ボクも見てみたかったなあ…
…」

お次は鶴の隣に座っている女子、とうていりるか 藤堂琉華が話しかけてくる。シ
ョートヘアに男子っぽい喋り方が特徴だ

「神崎くんのお母さんってさ、なんか面白そうだよな」

「……………」
「何で黙るの神崎くん？」

あなが 強ち間違いではない所を……あなで 侮れん

「……………私は興味ない」

最後は部室の隅にちょこんと座っている女子、ちんていのねみ 近藤望が話しかけ
てくる。長い下ろした髪の毛とタレ目が特徴の、暗いイメージしか
ない女子だ

「うん、興味持たない方が良いと思う。うん、それがいい」
「……………」

頼む、何か返事してくれ。なんか困る

そんな事を思っていると

「さて全員揃った訳だ。昨日はそのグズが気絶していて出来なかったが……反省会でもしてみろ」

部長がソファに横になった状態で言ってくる。そうか、昨日は俺がダメになってたから反省会を開けなかったのか

全員が席に座って円を作る。勿論部長はソファもろろんに横になって会話を聞くだけ。アドバイスも何も無いのか……？

「とりあえず1回戦の反省からだ。敗因は陣旗F1agの破壊だった訳だが……何がいけなかったと思う？」

鶴が切り出す

「……第一の理由としては、誰も陣旗の周りにいなかった事」
「その通りだ。他には無いか？」

しばし全員で黙り込む。すると

「わたしが反応できなかったのが悪かったです」

と、エルフィが手を小さく挙げながら答える

「それに関してなら別に」

「駄目だな」

「……………え?」「……………」

部長が立ち上がったって俺らに言う。それに驚いた俺らはハモって疑問詞を投げかける。何が駄目だっていうんだ? 別にエルフィは悪くはないだろ?

「エストラント。お前はサポートルームを任された人間だ。つまりこいつらの支援をすることがお前の仕事、それはわかるな?」

「あ、ハイ」

「だがお前は敵の接近に対する反応速度が遅すぎる。お前が反応したのはサポートルーム付近の100m圏内だけだ。つまりお前は陣旗の方に目が行ってなかつたって事だ。要するに陣旗方面はガラ空きだ。負けるのも無理はない」

「……………」

「2回戦目に関しては最悪だ。敵が2体来ているにも関わらず、その数を神崎に伝えなかつた。その為神崎は遅れを取って戦死扱いとされ、お前が殺られて敗北したわけだ。いいか? お前は甘すぎる。だがそれはこれからの練習や特訓で鍛え上げていけ。いいな?」

「……………ハイ」

「よし、続ける」

「……………」

言い終えた部長は再びソファに横になる

まさか部長がここまで言う人だったとは……………そして結構見ていたんだな

「……………」

今の会話のせいか、鶴は黙ってしまった。無理もないかもしれない

「なんだ終わりか？　終わりなら今からお前らをVWに飛ばすが…

…」

会話が始まらなかったので、部長がそう言う。多分誰も何も言わないだろう

「よし、準備しろ。今日は模擬戦闘じゃなく個人演習でもしておけ。今から5分後に飛ばす。それまでに準備を終わらせておけ」

言い切った部長はVWの機械をいじり始めた

俺たちも武器の準備を始める

エルフィはそこで座ったままだ

「エルフィ……」

俺は武器の準備を手短に終わらせて、エルフィの元へと近寄る

「大丈夫かエル……」

「すいませんでした」

「え？」

「わたしの力不足で……すいませんでした。これからは頑張ります」

「エルフィ……」

「これからは皆さんの力になれるよう、全力でサポート出来るオペレーターになるので……頑張ります。足手まといには……なりたくありませんから……」

「……………」

『……………フッ』

なんだろう。今部長が笑った感じに見えたのは気のせいだろうか

……

5分後

「よし、全員準備は出来てるな。今回は演習用フィールドになっている。そこにある物は好きに使って良い。お互いにアドバイスを出し合いながら演習に挑め。以上だ」

部長が最後に何かをいじっているのが見える

そして

「行ってこい」

キイイイイイイン

部長の言葉を最後に聞き、耳鳴りが襲い始める

2度目のVWは演習フィールドか……エルフィが少し心配だが大丈夫だろう

俺たちは再びVWへと飛ばされた

#6 演習

「つとと……」

今回もバランスを崩しそうになる。とりあえずVWに到着した……んだよな？

辺りが真っ黒（真っ暗）だ。故障か何か起こったのだろうか？
とりあえずWL全体回線を繋いでみることにする

『ザ……ザザ………ザ……』

返ってくるのはノイズだけだ。もしかしたら本当に故障でもしたのだろうか？ そう思っていると

『……ザザ………あーあー聞こえるか？ 俺だー。西宮だー。ちなみにこれはお前だけに対するPLだ。個人回線他の奴らには繋がらなくてな。無事か？』

部長の声が聞こえてきた

「ええとりあえず。何かあったんですか？」

『済まないが俺にもまだわからん。今速攻でデータを解析しているんだが、どうも正常動作をしているらしい。今お前のいるVWはどんな状況になっている？』

「俺にもまだわからないんですが、辺り一面が真っ暗で……他のみんなもいないみたいなんです」

『何？ それはマズいかもな………』

「え？」

『あ、いや、それはマズい。一旦強制終了を掛けてみる。他の連中には悪いが……少し身体に負担が掛かるから気をつけておけよ？』

「え、あ、ハイ」

『行くぞ……！』

ウイイイイイイイイイイイイイイ

「……………」

ウイイイン……シユウウウウウン……………

あれ？ なんともない……

『マジかぁ…………どうだ？ 身体への異常は感じるか？』

「いいえ全く…………その前に事情を説明してください。一体このVWで何が起きているんですか？」

『……………スマン、言いづらい』

「いいから答えてください！」

『……………フレックツ故障、もしくはオーガキイフ機械の暴走だ』

正直に言おう。初めて聞く単語だ。だから意味なんて知らん

「……………それってマズいんですか？」

『おう、非常にマズい事になった』

「非常にマズいのにそんな悠長に答えないで欲しいんですが……………と
りあえず何が起こるんですか？」

『……………それは俺にもわからん。こんな事は……………初めて
だからなぁ……………』

「はぁ……………」

今、やけに止めなかったか？

『とりあえず俺の話を良く聞け？ 今から俺は顧問のヤローに助けを呼んでくる。その間何があるかはわからないからお前……お前達で対処しろ。おそらくそろそろ暗闇は消えるはずだ。そしたら全員を回収してその場を凌げ。それとこれは予想なんだが……』

「へ？」

『……戦死したら出てこられなくなる可能性が高い。つまり永久迷走ラシの可能性があるって事だ。くれぐれも戦死するな。では無事を祈る　ブツツ、ツーツー』

へ？ 永久迷走って何よ。戦死したら出られなくなるって何よ？
これじゃあ戦死出来ないじゃん！

最悪の事態の発生

とりあえず全員捜し出さねえと！　でも暗くて何も見えねえ！
と思った瞬間

バチッ

VW全体が明るくなる。いきなりのことに対応出来なかった目を細め、辺りを確認する。そこに広がる景色は

「嘘……だろ……？」

いかにもバグが発生したような所だ。様々な色が混ざり合い、混沌とした空間になっている。足場は確保されているが辺りと同じ……同化した色なので、壁や段差がどこにあるのかすらわからない。更に困ったことがある。誰の姿も見あたらない。これでは他のみん

なが戦死してしまい、永久迷走してしまう可能性もある
早く探し出さないと！

でもどこから行けばいいのかわからない
というか、そもそも敵は出てくるのか？

迷っていたって仕方ない。まずはみんなを探しだそう……よし、
右から

俺は皆を捜すために重い足を前へ出した

「おーい！ 誰かいないのかーい！？」

俺は今、さっきの場所から大体500m歩いた場所にいる。だが、
誰の姿も見あたらない。これだけ歩いて見つからないってことは、
みんなも移動し始めてしまったのだろうか？

それは本当に最悪だ。もし下手に動いて敵と遭遇し、戦闘するな
んて事になったら……

しかもエルフィは戦う事がまず無い！戦死する可能性が一番高い
人物だ。まずはエルフィを救出しておかないといけないかもしれない

「おーい！ みんなーいーいー！！！」

このフィールドを歩いていて気付いたことがある。段差も壁も…
…何もないのだ。要するにここは平野に近いフィールドになってい
るのかもしれない

それならラッキーだ。思いっきり走って探せば良いだけじゃないか！

そう思った俺は早速足に力を入れて……走り出す
走り出したのだが

「うおおっ!？」

何かに引っかけたかかって転んだ。まさかの思わせぶり? ……最悪なパターンじゃねえか

俺が引っかけた何かがある場所を見る。するとそこには、黒い何かが上へ上へと突き刺さっているように見える。何だろうか? もう一度足下を見ると、黒い何かから横に何かが飛び出しているように見える。はて……? もう一度上を見ると、それが人影に見えるような……ん、人影?

……よく見ると……銃口が俺の頭に向かっているじゃないか

ドンッ!

「危ねえええええええっ!!」

咄嗟に左に避けると、ギリギリ銃弾を回避できた。危ない所だった……もう少しで戦死になるところだった……

今俺に銃弾を放った敵は、もう真っ黒。言ってみれば“影”みたいな感じ

ラッキーなことに銃を下に向けて首を傾げている。これはチャンスだ!

「TEMM起動！」

俺は武器を取り出し……あれ？

「なんだこれ……」

武器が変な形になって俺の手元にある。はて……うん、完璧に故障してる。思いつきドット絵じゃないかあああああああ！！

俺が武器を取り出したのに反応したのか、敵は俺の方を向いてくる。そして銃を構えられる。やべえ！

ちっ、仕方ねえ！ こうなったらこの武器で反撃を……！

ドンッ！

「……………なんだよ」

今俺は引き金を引いた。無論銃口(?)からは煙(ドット絵で)が立ち上っている

そして、敵の胸には穴が開いている。つまり俺は銃弾を撃ち込めたのだ。この変な形ドット絵をした銃で。結局使えるんだな……
そう思っていると

「ん……なんだ？」

武器から光が発せられる。眩しいので目を閉じてしまった。こんな緊急事態なのに……あれ？ 武器の手触りが変わったよう……
思いつきり目を開いてみる。するとそこには、元の形に戻った銃がある。結局戻るんかいな

ま、こんな事考えていたってしょうがないか。みんなを探さないと

再び俺は足を前に出す。出したところで良いことを思い浮かぶ銃の音に反応してくれるかもしれない。我ながら良いアイデアだ。早速俺はサイレンサーを外して、銃を上にも構えて引き金を引く。大きな音を放った銃は俺の鼓膜を破壊せんとばかりに、周囲に大量の銃声を響かせる。これならみんな気付いてくれるだろう。だから俺はしばらくここを動かさない、っと

何とでも言え

「そつだ……」

俺はまた新しい案を閃く。今度はWLに繋いでみるとしよう。今度は出てくれるかもしれないし

『ザ……ザザ……』

やっぱりまだノイズかあ……無理もないかなあ……
そつ思った瞬間

『ザザザ……れ……?』

「なっ！ 今反応したのは誰だ!? 応答頼む！」

『ザ……ボ……だよ……ザザの……はザ……崎くん……ザ……?』

良い感じに聞こえないんだが

「済まない。もう一度いいか？」

『ザザ……ク……ザ……だよ……ザザ……堂……ザ……華だ……ザザザ』

「そつか！ 無事だったか！ 大丈夫!? 何も起こってないか！」

「？」

思ったことがある。「堂」と「華」でわかるとは

『ザザ……さっ……敵……ザ……遇して……とか勝った……ザ』

……思ったことがある「敵」と「遇して」と「とか勝った」でわかるとは……

「ふう、それなら良かった。それで今どの辺に居るとかはわからない？」

『……だねえ……ザ……あ……はザ……っと……ねザ……ツーツー』

最後は何を言ったのかわからないが、無事なようだ。とりあえず一人目の安否は確認、っと。後は合流しないといけないな……さて、そろそろ俺も探しに

「神崎くん！」

「へ？」

左から聞き覚えのある声が聞こえてくる。もしかして……

「藤堂さん！ どうしてここに！」

「いやあ……さっき大きな銃声が聞こえたからね……もしかして、と思ってね……」

「とにかく無事で良かったよ！ 他のみんなは見えない？」

「残念ながら……ちよっと待って」

そう言いつつ、藤堂さんは武器を取り出してスコープを覗き、周囲を確認し始める。なるほど、こういう使い方もあるのか。すると

「あ」

「ん？」

「あっちの方向に誰がいる」

「本当!？」

「うん。こっちに向かってきてるけど……あ！ 明智くんだよ!」

「そうか……他の連中は見えない？」

「連中って……酷い言いようだね……駄目、見つからないや」

「……わかった。とりあえず光久と合流しよう。これからの事はそれから考えよう」

「了解。ふふっ」

「え？」

「いや、神崎くんってリーダーっぽいなって、さ？」

まあ副委員長に選ばれた訳だしな

「まあね。とりあえず合流しよう」

「おっけー」

俺と藤堂さんは、光久と合流することに成功した

「ふむ。現状の把握はできた」

「まさかそんな事が起こってるなんて……」

「うん。今部長が顧問を呼んでくるって……ところで顧問って誰？」

「さあ」

「拙者も知らぬ」

「そつ……」

藤堂さんと光久に現状を説明し終え、これからの作戦を会議中この2人も顧問を知らないって……まだ顔出しをしていないんだろつ　って、話が逸れた

とりあえず今挙がっている案は2つ

- ・そのままここで待機して、みんなが来てくれるのを信じる
- ・3人で行動してみんなを見つけ出すの2点だ

正直俺は上の案を考えている。下手に動いて探し回るよりも、さっきのように銃声を聞きつけて来てくれた方が効率的には良いかもしれない

それで最後に話し合った結果、上の案が決行されることになった

「それじゃ行くぞ？」

「おっけー」

「承知」

「せーの……！」

ドンッ！！！

三人で同時に銃を発射する。この大音量なら気付かない人はいないだろう

とりあえず敵が来ないことを祈ろう

「よし、これでしばらく待てば誰か来るでしょ」
「だな」

「ところで2人は敵と遭遇したのか？」

光久に尋ねられる。俺は遭遇した。藤堂さんは……そうだ、遭遇したって言ってたな

「2人とも遭遇したよ。大した相手じゃなかったから大丈夫だったけどさ。光久は？」

「拙者も遭遇はした。2人同時に攻め込まれたが拙者として出遅れることはあるまい。無論我が刃やいばの前に散っていったが」

「流石明智家の子孫だけあるよね」

「だよなあ」

思わず関心してしまう。多分この7人の中で一番強いのではないだろうか

と、思っている内に藤堂さんがスコープを覗き始めた。さて、どうだろうか……

「……………あ」

「む？」

「見つかった？」

「2人の影……敵だ」

「このタイミングでか……藤堂さん、そこから狙い打てる？」

「任せて……………」

凄い。集中している顔だ……

「いける」

ピシユウンッ！

サイレンサーを付けているので大きい音は出ない。なんかスナイパー独特の音でいいなあ……

「もう一体……！ よし、2体とも撃破！」

「流石だね」

「はは、褒めないでよ。照れちゃうじゃないか」

しばらく2人で笑う。光久は腕を組んで目を閉じていたが……瞑想ってヤツかな？

「あ、ところで他には見えない？」

「おっとそうだね。ちよっとお待ちを……」

再び藤堂さんはスコープを覗き、周囲を確認する。すると

「ふっふっくん」

「？ どうかした？」

「ん？ 3人見つけえ」

「マジで！？ ちよっと俺にも……！！」

「ちよっくと神崎くん！？ そんな強引に……うわあっ！」

「うおっ！」

ドスン！ と大きな音を立てて一人で倒れ込む。しまった、やってしまったな……

「痛て……大丈夫？ 藤堂さ……」

「……あはは……」

さてお分かりいただけただろうか？ 今俺と藤堂さんはとんでもない体勢になっている

「別にいいよ？ そのままヤツちやっても？」

「そんな！ いい訳……！ いい訳……」

さて今自分は理性を失いそうな状態になっている。それは……

「そのまま揉み回しても……」

正解は左手が藤堂さんの胸に触れている……って、かなりマズい状況だよな！？ 早く離れないと……！

「ほら遠慮しないで……？」

「……」

藤堂さん！？ そんな俺を誘惑するような目で俺を見つめないでくれ！！ 俺このまま理性失ったら何するかわからないよ！？ あ駄目だ……！ この俺の左手によくフィットする大きさはなんだ！？ 大きすぎず小さすぎず……ってえ！ 俺は今何を考えていた！？ 危つく踏み越しちゃいけない線を……そもそも俺は校高だ！ 2日前に高校生になったばかりだ！ こんな出会って間もない人を襲うだなんて……！

「ほら……」

藤堂さんが俺の左手首を掴んでくる。しまった！ これじゃ逃げ場が……！

「こっちの手も……」

右手も捕まれ、完璧に逃げ場が無くなった。すると

「……な、ななな、な、なな、な、何をやってるんですか……」

神崎さん……藤堂さん……！！」

「あはは……スマン真箏」

「……そういうのは他所よそでやってくれませんか……？」

左に、顔を真っ赤にして見つめるエルフィ。凄い物を目撃してしまったかのように目を逸らす健太。冷静を保っているにも関わらず顔を赤くしながら文句を言う近藤さんの姿が……

「あは……あはは……」

「むう、もう少しで……」

藤堂さんが何かを呟いていたが、今の俺には何も聞き取ることが出来なかった

さようなら。俺の華の高校生活……

「全く！ 神崎さんはそんなことをする人だったんですね！？ 見損ないました！ 最低です！ 最悪です！ 男として恥を知ってください！ そして藤堂さんも！ そうやってすぐに男の人を誘惑しないでください！ そういうことをしたいのはわからなくもないですが、高校生ですよ！？ 1年生ですよ！？ 神崎さんですよ！？ 年齢と人を考えてからそういうのはしてください！」

なんだ？ 俺だとアカンのか？

「悪い……」

「ねえねえ、今『わからなくもない』って言ったけどさ、もしかしてエルも……」

「わっ、間違えました！ 前言撤回させてください！」

慌てて前言撤回を求めるエルフィ。はて、今何か言ったのか？

俺には聞き取れなく……

ちなみに俺と藤堂さんは正座をさせられて、エルフィにお説教をされている。もちろん理由はさっきの事故に関して。もうエルフィがすげー泣きそうな顔をしている

んで思ったことがあるんだよ。まだ入学して3日、入部して2日なのにさ、俺ら結構仲良くなった気がするんだよね？ ゴメン、どうでもいいか

つかここで説教って……どれだけ平和な状況なんだよ

事情の説明は光久に頼んであるから大丈夫だな。エルフィはお説教をして聞いてなかったけど

「そもそも高校に上がったばかりでそのような関係を作ってしまうなんて……不純です！ ですから……」

「……でさ、鶴はどうなのよ」

「さあ、とりあえず早く見つけ出さないと……」

「だよなあ……」

「神崎さん！ 藤堂さん！ 無視しないでください！」

いい加減黙ってくれい。そして現状を理解してくれ

「エルフィ……今俺たちがどういう状況下にあるか知ってる？」
「当然ですとも！ 神崎さんと藤堂さんがあんなことやそんなことをしようとしていた所です！」
「うん、かなり間違ってる。いやかなりじゃない。全部間違ってる」
「これのどこが違うって言うんですかあっ!？」
「光久、説明」
「承知」

事情説明中

「そんなことが……鶴さんが危ないじゃないですか！」
「さっき言っただろ!？」

やっと状況を理解してくれたらしい

「でもどうやって探すんだよ」
「さっきと同じ事をするだけさ」
「同じ事って何ですか？」
「上に向けて銃弾を撃つ、だけ。お前ら反応してたじゃん」
「ああ」
「……気付いてなかったんだ？」
「気付いてたのは近藤さんだけとな？」

とりあえず言っておこう。健太とエルフィはバカだ

「んで？ また同じ事するとな？」
「ま、そうなるね」
「拙者の準備はできておる」
『おっと若者共々大丈夫か？』

「……よし、やるぞ」

『神崎、俺を無視してさらに面倒な方向に運ぼうとするな』

「……これしか方法が無いからな。みんな頼んだぞ」

「……了解」「……」

『神崎、後で話がある』

「はあ……それなんなんですか？ それに面倒な方向って……」

「誰と話してんの？」

「……さあ」

「イタイ子にでもなったんじゃない？」

「少し黙ってる。で？」

『今顧問を連れてきてな、点検を開始した。それが終わるまで凌^{しの}げ、それだけだ……』

「なんだ、別に問題ないじゃないで」

『それが大アリなんだ馬鹿者』

「へ？」

『そのVW空間にある……いや、いるって言った方が良いな。黒い集団がいるだろ？ まさかとは思うが倒したりはしてないだろうな？』

「倒しましたが？」

『そう言うと思っていた。それはVW空間を構成するデータの一種だ。それを全滅させると復旧に時間が掛かる、もしくは永久迷走する可能性が高いからな。今からそいつらに一切手を出すな。わかっただな……って、鶴はどうした？』

「まだ見つかっていないんです」

『……早く見つけ出せ。下手をするとVWのデータ中枢を破壊する可能性がある。その破壊だけは防げ。仮にそれが破壊されれば全員永久迷走間違い無しだ』

「了解です」

『んじゃ、健闘を祈る』

『ツーツー』

さて、いろいろ大変な方向へ動き始めたな……

「どうしたんですか？」

「ああ、早く鶴を探し出さないと手遅れになる」

事情説明中

「わかった。早く見つけ出さないと駄目ってことだな？」

「そういうことだ」

「果たして何処にいるのだろうか……」

「多分ここから近い距離だと思います」

「……なんで？」

「ほら、ボク達がさっき銃声を響かせたからさ？」

「そういう事だ。藤堂さん、ヨロシク」

ドンッ！

「「「「「「！！」「」「」「」

今遠くで銃声が聞こえたような……まさか！

「行くぞみんな！」

俺たちはその銃声が出た方向へと掛けだした

「はあ……はあ……はあ……」

「……………」
「何か言ったらどうなんだ……………」

「……………」
「無視か……………」

ドンッ！

「……………」
「くっっ！」

ズシャアッ！

「があっ……………！ くっ、左手が……………ここまでか……………？」

『左に飛べ鶴！』

「なっ…！」

ドスンッ！

「はは、セーフか？」

「神崎……………お前……………」

「みんな遅えな。ま、流石についてこれなかったか」

「何を悠長な……………なっ、神崎！」

「おっと危ねえ。その程度の攻撃は受けねえよ」

「ったく……………」

「ははは。ところで鶴、怪我とかはないか？」

「別にこのくらい問題はない。それよりそいつは始末しないのか？」

「ああ、始末したらマズい事になるからな」

「そうか……………ところで神崎、ここは」

「ちよっと待て」

『ザ……………ザ……………神崎、こちらの調整が済んだ。そろそろ戻せるが、

「……………」

うん、既視感^{デジャヴ}。昨日もこんなだったような……

「目が覚めたか」

「ん？ その声は鶴？」

「ああ。無事のようだな」

「んっ……………痛っ！」

「無理をするな。心臓を貫かれたのだ。当たり前だろう？」

「あ、ああ……………ここは……………保健室か」

「……………済まなかったな」

「へ？」

「本来あの斬撃は私が受けている物だった。それを……………お前は……………」

「気にするなつて。あのまま女子に攻撃させてたら男じゃないだろ？」

「……………は？」

「え？ だからあのまま女子を見捨てるのか？」

「……………見捨てれば良い物を、私なんか」

「……………バカなことを言うな」

「え？ あっ、放っ……………」

俺は鶴の方を強く掴む

「あのな？ 何が「私なんか」だ？ 巫山戯^{ふざけ}たことを言うのはよせ。お前だつて今まで立派に生きてきたんだろ？ それなのに自分を全否定するような言い方はよせよ……………」

「……………」

「自分に自信を持て。俺たちには鶴……………いや、明日香、お前が必要

だ

「……私が……必要だと？ 笑わせるな」

「……いい加減にしろっ！」

「……！」

「いいか？ お前は歴れっきとした Wars 部の部員だ！ これは誰にも覆せない事実だ！ いいか？ 部員である以上お前は俺たちに必要なメンバーなんだよ！ それくらいわかってくれよ！」

「……！」

「そんな自分が必要ないみたいなんて……そんな悲しいこと、二度と言っな」

「……！」

俺は鶴……明日香の肩から手を放す

「もしかしたらお前……出てこられなかったんだぞ……？」

「ああ知ってるさ。でもちゃんと出てこられたんだ。結果オーライだよ」

「そういう意味じゃない……！ もしそのまま出てこられなくなっ
てたらどうするつもりだったんだ……？」

「それはドンマイだよ。それにさっきも言ったけどさ、女子を見捨
てるなんてな……はは」

「……！」

「ま、そういう事だ。それじゃ俺は帰るよ。行きたいところもある
しな」

「……ああ。また明日な」

「おっ」

ガラッ、ボタン

『ふふふ……アイツもかなり恥ずかしい事を口にする人間なんだな

.....
私が必要.....か
.....
」

#6 演習（後書き）

ハイ、まずは謝罪をさせていただきます
申し訳ございませんでした

本来ならこの話に武器を買いに行く話も組み込みたかったのですが、
疲れが出てきてしまい、書くことが出来ませんでした
本当にすみませんorz

そしてあんなハズカシイ言葉とちよつとHな話を書いた事に関して
言い訳させていただきます

・ハズカシイ言葉について
残念ながら僕は厨二病患者です。それくらい見逃してくれよ……
そもそもこんなん書いてるんだから厨二だろ、って話です

・ちよつとHな話について
男なら誰でも組み込みたくなるんだよ
言い訳じゃないですね。ただの欲望ですね、ハイ

以上、あんだーすたんど でした

#7 武器（前書き）

明日香解放！

#7 武器

鶴と別れて現在昇降口。俺は荷物を取りに行くために部室へ向かおうとしているところだ
もうみんなは帰ってしまっただろうか……いたら一緒に来て貰うとかしてもらうかな

まあ仮に誰もいなかったら鶴を連れて行けばいいか。どういう武器選べばいいかも教わりたいし

確実に昨日と今日使った武器は選ぶけどな

「武器つてどれくらいの値段するんだ……？」

Warsに関する知識（武器のみ）に乏しいのが辛いぜ……
10万円で足りるだろうか　って、考えてる内に部室に到着つと。あれ？　部屋の照明がついてるっぽいけど誰かいたりするのだろうか

思い切ってドアを開ける。そこには

「おう戻ってきたな真箏！」

「心配しました……！」

「……ダメかと思った」

「ボクも心配しちゃったよ」

「無事で何よりだ」

「みんな……」

みんなが出迎えてくれた

「なんだよ、そのまま出てこられなくなっただけじゃ良かったのによ？」

クツクツクと笑いながら言う部長を除いて

「それでもう下校時間のハズですよ？　なんでみんないるんですか？」

と部長に尋ねてみる

「ああ、さっきまでVWで何があったのか話を聞いていたところだ。とりあえずお疲れさん。無事で何よりだ」

「あ、どうも……」

「しかし真筆もアレだな」

「は？」

「一人で先に駆けつけたかと思えば胸を貫かれてるじゃないの、ヒヤヒヤしたぜ……」

「あ、ああ……」

「しかも勇敢に女子を守るなんてなあ、僕は感動した！　流石だ真筆！」

「よし、黙れ」

変な事を言うな健太。ほれ見ろ、この部屋にいる女子全員が俺のことを睨み付けているじゃないか。こうやって俺の変なイメージは広まっていくのだろう。入学3日目……

「ところで西宮先輩、顧問の先生はどうしたんですか？」

エルファイがそんな質問をする。そうだ、俺も丁度気になっていたところだ

「あー……調整が終わった瞬間に帰ったな。なんでも職員会議の最中に引つ張り出してきたからな」

申し訳ない、誰だか知らぬが顧問の先生……

「それで顧問って誰なんすか」

「佐々木、それはまだ秘密だ」

「なんでですか」

「ま、色々とあつてだな」

教えてくれないのか

「所で神崎、鶴はどうし」

ガチャ

「……………」

「噂をすれば影……か……どうした鶴、神崎に続いて具合でも悪くしたか？」

「いえ、問題ないです。それでは続きを話しましょうか」

「今終わったところだ。あ、そうそう故障の原因をまだ言っていないかったな」

「……………原因？」

「ああ。明智、お前部活始まる前に少しいじらなかつたか？」

「左様。拙者もこの部員だ、それくらいの操作は出来るようにしておき……雄太殿、何故睨み付けるのだ？」

「お前が犯人だからだ」

「言い掛かりを……根拠は」

「あるぞ。いかにもお前が触ったような痕があるからな。しかもこの中で機械を操作できないのはお前だけだからだ。そもそも前に「触るな」といったハズだ。以上」

「ふむ、なら納得しよう」

納得するんかい。というか機械いじれない　って、そうだよな。武士の精神を引き継いで……いや、現代人だろ、オイ。それくらいは出来てもおかしくは無いんじゃないか？

「さてと……今日の部活はこれまでにしよう。下校時刻は過ぎていくんだ。早く帰れよー」

キイツ、バタン

そう言い残して部長は出て行ってしまった。どこまで適当な人なんだろうか

ま、帰るとしますか……いや、まず武器を買ってこないと

「よし、真箒。一緒に帰ろーぜ」

「おっけー。でもその前に武器を買っていきたくんだけどさ……一緒に来てくれねえか？」

「よしいだろう。他についてきたい人はー……」

「え？」

「はい！　わたしもお供させていただきます！」

「わ、私も行くぞ……！」

拳手したのはエルフィと鶴　って鶴！？　どういつ風の吹き回しだよ！

「……へ？ 鶴も来るの？」

「とっ、当然だ！ お前みたいな武器の知識に乏しい人間をコイツらみたいな人間だけに任せられるか！」

「コイツらってなんだよ鶴……」

「酷いです明日香さん！」

「ふっ、お前たちなどでは話にならん。ここは私だけついて行かせ
て貰う。いいな真箏？」

「」「……！！」「」

あれ？ 今、健太とエルフィと藤堂さんの顔が強張こわばったよ？ 何かあつたんだらうか？

「今聞きました？」

「うん聞いたよ。まさか明日香が男子のことを下の名前で呼ぶなんて……」

「絶対何かあつたよなああの2人……」

よし、あの3人がこちらを見ながらヒソヒソ話をしているように見えるのは気のせいだ。多分俺に関して良いイメージのことを話しているに違いない、うん。そうだ、それしかない

「よし真箏、行くぞ」

「うおっ、引つ張るな鶴！」

「おい、ちよつと待てよ！」

「あ、置いていかないでくださいーい！」

『……望、どう思うっ？』

『……完璧』

『明智くんは？』

『仲がよいとは良いことだ』

『あは、あはは……』

「地図によると……ここか」

「なんだ真箒？ こんな店でいいのか？」

「真箒が選んだ店だ！ 佐々木は文句を言っな！」

「それより鶴さんの頭は今どうなっているんですか！」

とりあえず俺は3人を引き連れ、warsの武器を買ったために専門店まで来たのだ

3人を連れてきた理由は、俺がどのような武器を使えばいいのかをアドバイスして貰うため。そして武器に関する知識を教えるためだが……本当にコイツら（エルフィを除く）は初心者なのか？ と思うほど武器に詳しいような……まるで前からやっていたかの如く

それで今いる場所……wars専門店「wars shop！」
と言うところだ。母さんに受け取った地図だとここらしい。姉貴の用足し店でもあったらしい。意外と良い武器が売っているとか

「よし真箒、行くぞ」

「行きましよう神崎さん」

「ちょ鶴！ エルフィ！ 引っ張るな！ そしてお前ら腕を放せ！」

「……………」

「真箒……お前はトコトン駄目なヤツだな」

「何が言いたい健太……って、いい加減話せーっ！」

「すげえよ……僕には2人の視線の間に火花が飛び散ってるように見えるよ……」

そのまま俺は店へと引つ張られていった
この2人は一体どうしたんだろうか……いや、マジで

「神崎さん！ この武器なんか良いんじゃないでしょうか!？」

「真筆！ 私はこの武器をオススメするぞ!」

「いや……」

「「わたし（私）とおそろいの武器です（だ）!」」

「話を……」

「「さあ!」」

「俺の話を聞け!」」

「真筆）、苦勞してるねえ」

「そう思うなら助けてくれ。そして俺が借りてた武器を探してきてくれ……」

「しゃーねー。親友の頼みだ。聞いてやろう」

いつから親友……ま、いいか

とりあえずこの2人の女子をどうにかしたいんだけど……!!？

「神崎さん！ この武器はお利口なんですよ!？ 命中率が凄いです！ もう神崎さんが使ったら100発100中間違い無しですよ!」

「真筆！ この武器は凄いいんだ！ 命中率は若干悪いが攻撃力が高いんだ！ もし遠くから撃つたとして、命中力はそこまで衰えないから遠くの敵を倒せることは間違い無しだ！ それにお前の銃の腕なら100発100中だ!」

「2人して同じような事を言うな!」

「「……………むっ」」

ダメだ。俺は踏み入れてはいけない場所へ踏み込もうとしている。女子の戦線であることには間違いない。だが、それを指す意味が全く持って理解できん……

「おい真箒、確かこの2つでいいんだよね？」

「ああ、ありがとう。うんこれだ」

「神崎さんはわたしの選んだ武器を選ばずに佐々木さんの武器を選ぶんですね……」

「まさか真箒、お前そーゆー趣味か？」

「大いに誤解をしておる」

「そうだったのか真箒……」

「何！？ 健太までそういう目で見るの！？」

もう嫌だ

そして鶴の頭では何が起こり始めた？

「とりあえずこの2つは買うとして……もう一つはどうするか……」

「是非わたし（私）の選んだ武器を買うべきです（だ）！」

「健太あ、オススメ武器ないか？」

「……むっ」

「ああ……スマン。アドバイスだけにさせてくれ。僕はもうその暗黒オーラに耐えられない」

「へ？」

後ろを見ると、エルフィと鶴から漆黒のオーラが出ているように見え……るのは気のせいだ。そう、気のせいなんだ。多分俺は疲れしているんだ……間違いない

「仕方ないですね……それじゃあわたしが丁寧にアドバイスしてあ

げます」

「何を言うかエル。ここは私がアドバイスした方がいいだろう。何せお前はサポートルームの人間だ。武器に関する知識は私の方が詳しい」

「何言うんですか明日香さん。わたしだってwars経験者です。ですからして、私もそれなりの知識と経験はあるわけです。だからここは私が引き受けるべきかと」

「くっ……そう言えばお前はwars経験者だったか……まあいい。私の方が武器に関する知識は豊富だ。お前はそこで指をくわえて眺めてるが良い」

「酷い言いようですね。わたしだって明日香さんに負けないくらいの武器に関する知識があるんです。なので明日香さんが指をくわえて眺めていてください」

「いやいや、指をくわえて眺めるのはお前の役目だ。とにかく私が真箒にアドバイスをする。私は今まで“親切丁寧”をモットーにして生きてきたんだ。ここはお前が出る幕ではない」

「……なあ、これって止めないでいいのか？」

「とりあえず放っておいた方が良くもしいない。それじゃ僕が教えよう」

まずは武器を作っている会社について

武器を作っている会社は、世界に全部で3社ある

その会社ごとに作っている武器は異なってくるらしい

・RF社(Raise Force Company) 現在真箒
が使っている武器の会社

遠距離攻撃型の武器をメインで作っている会社で、武器の名前に

“RF”がついているのが目印

・AT社(Advanced Tactics Company)
近距離攻撃型の武器をメインで作っている会社で、武器の名前に
“AT”がついているのが目印。銃の方が多いとか

・AG社(Attack Gleeing Company)
格闘武器専門の会社。“AG”と入る武器と入らない武器がある。
大体ので省略され得ることが多い

次に武器のモデルについて

・Xpモデル
一番最近になって作られたモデルの武器。命中率が高い代わりに、
攻撃力が低いのが難点。ただし、一発一発の命中は、ほぼ約束され
たようなものだ

・Zipモデル
Xpモデルが作られる前に出来たモデル。攻撃力が高い代わりに、
命中率が低いのが難点。ただし、遠距離から撃って命中すれば、確
実に撃破できる。当たるか当たらないかの問題だが

・Wnモデル
一番古いモデル。生産が中止になって最近目にすることは少ない
が、攻撃力も命中率も良い。Xpや、Zipよりも断然使えるモデル
といった感じに武器の種類がある

「　　つてな感じなんだけど」
「ありがとう健太」

「　　だからここはわたしが引き受けるべきです！　明日香さんはすっこんでてください！」

「何度言えばわかる！　ここは私が引き受けると言っているだろ！　エルこそすっこんでろ！」

まだやってるんだが

ま、それはさておき……武器でも選んでみるとしますか

「そうだ真筆、武器を買うのは良いが、ちゃんとSSとTEAMも買っておけよ？　そうしないと参加出来ないからな」

「ああそうだったなあ……わかった」

「それに銃弾もな」

「銃弾まで買うの!？」

「当たり前だろ!？」

は……まさか銃弾まで自分で調達する物だとは……正直ビックリだよ！

ま、今は武器を選ぶのが先だ。ん……やっぱり銃がいいだろうか……

と思っていると、ある武器が視界に入る

『最新モデル！　“RF-Xp03型”！

特別価格により20%値引き！　16780円！
最後の一つ！　レジへと急げ!』

と、表記された銃を発見する。どうしよう……

『ねえ、ボクを買ってよ』

はっ！？ なんだこの声は！？

『お願い、ボクを買って。そうしないと……処分されちゃうんだ……』

まさか……お前なのか……？

『うん……お願い真琴くん。ボクを……買って……』

……
そんな目で……俺を見つめないでくれよ……健太

「テヘツ」

「黙れええええええ！！ はあ」

よし、決断の時だ

「これにしよう」

「結局！？ 何？ 僕が言ったことを鵜呑み！？ 流石に処分はただの想像だよ！？」

「いや……なんかこれが良いって思っちゃってさ？？」

「まあ真箏が良いならいいんじゃない？」

「だからわたしが！」

「いいや私だ！」

まだ口論を

「おい鶴、エルフィ。決まったからそろそろ戻ってこい」

「神崎さん（真箒）は黙って……って、はい？」

「武器を選び終わったから……」

「あ、そうですか（そうか）……」

「まったく……店に迷惑だろ……」

「迷惑なのは真箒の思考だけだな！」

「何が言いたい健太？ とりあえずレジ行くぞ」

レジに買いたい商品を出す。さて合計金額は……って、何いつ！？

武器だけで60000円だと！？ さらにSS（5個セット）で

10000円、TEMPで10000円、銃弾（10000発×3

セット）で50000円だと！？ 結構するんだな！？

合計金額85000円。残金15000円。ま、いつか

『ありがとございました！』

店から出て外。さて、家に帰るとするか

「俺は家に帰るけど……あっちの方向って誰がいる？」

「僕はあっちだから違うな」

「……」

「全員バラバラだな……」

これだと女子が危ないかもしれない。真っ暗だし

「じゃあ俺は……」

「じゃあみな！ また明日な！」

「おう！　じゃあな！　……………　ちよつと待て、何故俺の腕を掴むんだ2人とも」

「一緒に帰りましょう（帰るぞ）」

「待て、2人とも反对方こぎゃああああああ！！　腕がもぎれる！　身体が半分になる！　健太！　戻ってこい！　俺を助け……才イコラ！　ダッシュで逃げぎゃああああああ！！」

頼む、俺を助けてください

そしてこの2人には何があったんですか？　教えてください神様

結局俺は2人を家に送っていくハメになったのだった。なんとか順番を決めてから……

#7 武器（後書き）

どうもあんだーすたんどです

明日香さんがとうとう解放されました。あれが本来の人格で（殴
冗談です。

だんだんとこの流れはエスカレートさせていきます
どうぞご期待あれ

8 殺人兵器、その名を「DEATH Egg」

さて、いきなりだが……俺が入学してから2週間が過ぎた

俺だって思う。時が流れるのは早く感じる。こつこつと俺たちは年を取っていくんだよなあ……って、思っている場合じゃないんだ

今俺は危ない状況に立たされている。そう、とんでもなく危険な状況に

だって今体育館裏に何故かいるんだよ。そして俺がいて……明日香がいる。つまり……

「俺は死ぬのか……」

「何か大きく勘違いをしているんじゃないか？」

勘違いなものか。俺と明日香が2人きりである「死に直結するじゃないか。しかもその手には……」

「ほら、ここでなら恥ずかしくないだろ？」

殺人兵器お弁当という名の物が手に収められているのだ。そう、殺人兵器が……

そう、お弁当なのだ。お弁当……被害者は今のところ2名。Wars部一年生男子の佐々木健太と明智光久。この2人が先程天へと昇天してしまっ……いや、一命は取り留めたっばいけど

とにかく俺は今危険な状況にある

「ほ、ほら恥ずかしくないな。あ、あーん」

顔を赤らめながら箸で掴んだ卵焼きを俺の口の前まで運んでくる明日香。ちよつと待て、何が「あーん」だ。そんなはしたないことを……じゃない。俺を殺そうとするな

「断る」

「べつ、別に誰も見ていないだろう？ それに佐々木と明智君も絶賛してたじゃないか……」

「いや、そういう意味じゃないんだ。とにかく俺に命に関わる兵器卵焼きを食わせようとしなくてくれ」

「いいんだ。もしこれを食べて真箏が死ぬって事は、それだけ私の腕が良かったって事だろう？ そうなったら私もすぐについて行くから……あーん」

ダメだ、目が逝ってる

そして明日香、2週間前のあの日から何があったんだ？ まずはそれを説明して欲しい

さてここで2週間前の顛末について振り返ってみるとしよう

2週間前。俺たち4人は買い物を済ませて家に帰ろうとしていた。そして健太はすぐに立ち去って、俺は2人に腕を掴まれた。そこからの話

あれ？ 早く帰りたいんじゃないの？ なんで譲り合ってるの？

「……仕方ないですね。ここはアレで決めましょう」

「まさかエル……アレをするのか……！？」

「いいですか？ 負けた方が先に送ってもらうことにします」

「……いいだろう」

なんだ“アレ”って！？ 何？ 危ないことでもするんですか！
？ つか逆じゃないの！？

「「……………」」

2人でしばらく睨みあう。なんか凄い集中力だ……
そして

「「じゃんけんぽん！！」」

「何！？ 結局じゃんけん！？」

うわ、期待して損した感MAXだわ……
んで結果は……

ドサッ

エルフィの負けみたいだ。凄い落ち込んでるように見える……だ
って膝ついて手もついて……俺には見える、エルフィには縦線が並
んでいる

「ふっ……エル、この“じゃんけんの神様”の称号を持つ私の前
には無力か。残念だったな」

なんだその称号

「うう……でも約束は約束です。素直に負けを認めます……」

オーバー過ぎだろ

「たかがじゃんけん如きでこんな事態に……？」

「『たかがじゃんけん如き』ってなんですか！ わたしたちにとつてはとても重要な事なんです！ だから神崎さんはダメダメなんです！ バカなんです！ 少しは理解してください！」

ん？ 別に自分泣いてないよ？ 朝飲んだ牛乳がね？

「ま、とにかくまずはエルの家からだ。行くぞ」

「ハイ……」

「エルフィ、その涙で濡れた顔を俺の制服で拭うな」

「ああ……いい臭いです……はっ、失礼しました。じゃあ行きましょう」

「そして2人とも俺の腕を掴むな。歩きづらくて仕方ない」

「神崎さん。貴方はもう少し自分がどのような状況にあるのかを考える必要があるんじゃないでしょうか？」

「エルの言つとおりだ。これだからお前は……」

言ってる意味がサッパリだ

「ところでエルフィ……」

「ハイ、なんででしょうか？」

「いや……なんでもない……スマン」

「??? ならいいですけど……（ふぶっ、これなら明日香さんに勝

てます！……！」

「チツ（ふむ……エルめ。その作戦に出たか……この私には不利な作戦を実行しよって……）」

「何故舌打ちをする？」

「別に……」

「ちよつとおま……（なんだこの状況は――！？ 流石に理性を……！）」

さあ、何が起こっているか説明しよう

さつきからエルフィの胸が俺の腕に当たっているのだ。ちなみに藤堂さんより若干大き……って、何を考えているんだ俺は――！
！ くそっ！ このまま理性を失ったら……

と、いうタイミングで鶴も同じような体勢に入ってきたのだ。ほぼ平らな胸で

「真箏、何か失礼な事を考えていないか？」

「滅相もない」

「神崎さん。すいません、腕苦しくくないですか？」

「いや、別に……（嬉しいのやら困るのやら……！）」

「エル、そう思うのなら私に分け与えてくれ……！」

「結構です。以前に不可能です」

「くっ……」

はて、この2人は何を話しているのだろうか。まさか胸に関してだろうか？ いや、そんなハズはない。うん。邪念を取り除け神崎真箏……！ その忌々しき考えを取り除くのだ……！

この状態はエルフィの家に着くまで続いたのだ

ちなみにその間俺は顔を真っ赤にした状態で一言も喋らなかつた
そっだ

「到着です。ありがとうございました神崎さん」

「いいや、どうって事無いさ。それじゃあ……そろそろ離れてくれ」

「ふえっ!? あ、は、ハイ。失礼しました!」

「よし。じゃあな」

「ハイ! ……あの……神崎さん……もし良かったら……」

「よし行くぞ真箏。次は私の家だ」

「ちよっ、引つ張るな鶴! 済まないエルフィ! 今の話は明日にしてくれ! じゃあな!」

「あっ、ちよっと……神崎さんのバカ……」

さて、今来た道を戻ってさっきの店……を通り越して再び暗い夜道。現在鶴と2人きりで下校中……何故か俺の腕が拉致られてるんだがな

「な、なあ真箏」

「ん?」

拉致った俺の腕に、180度に近い胸を押し当てながら鶴が喋り始める

「さっきの言葉だが……私は必要なのか……?」

「え? ああ。まあな」

「……………」

街灯に照らされた鶴の顔は赤く染まっていた

「それじゃあ……真筆は私を受け入れているのか……？」

「は？ 当然の事を言うな」

「……そんな言葉を言われたのは初めてだ」

「へ？」

「私はな、小さい頃からこんな性格で誰も引き寄せる事が無かったんだ。だから私はいつも……どこでも独りだったんだ……」

「……………」

「いつしか私の周りには人が近寄らなくなり、親ですら私を拒絶するようになった」

「……………そんな」

「だが私を必要としてくれたのはお前が初めてだ。改めてここで礼を言わせてくれ。ありがとう」

「……………」

「もう……私は独りじゃない……んだな？」

「ああ。俺が……俺たちがいる。お前はwars部にずっといれば良いんだ。それだけで良いんだよ……」

「ありがとう……ところで真筆、何故かは知らんが呼び方が戻ったんじゃないか？」

「へ？」

「ほら、さつき“明日香”と呼んでくれただろう？」

「そうだったか？」

「お前……まあいい。よし、これからは私のことは“明日香”と呼べ。いいな？」

「おいちよつと待て。なんでそんな急に……」

「これは命令だ。何故なら貴様は私の奴隷か何かだ。それはもう昨日のうちに決定したことだ。異論があればもちろん……殺す」

「ちよつと待て。そんな良い感じまで話を広げておいて最後に物騒なことを口にするな」

「黙れ。そしてもう一つ命令だ。わっ、私をお、おおお、お前のつ

つ、つ……妻にしるし!!」
「はあ!?!」

ちょっと待て。何かがおかしい。いきなり話を飛躍させすぎだ。そしてお前の脳内思考はどうなっているんだ?

「もちろんお前は私の……そうだな、奴隷じゃ少し可哀想だ……よし、犬だ!」
「人間ですらねえのか!?!」

今ここに人間が犬を夫にしようとしている事件が発生した
そして古いアパートの前まで来る

「とつ、とにかくだ。おつ、おお、おお前は私のお、夫となるんだ。話は以上。家はそこだ」
「待て鶴、いろいろと話したいことがある。家に入る前にひっ!」
「明日香と呼べ。そして話したいこととはなんだ? もしかして今から将来についても考えるのか? いいだろう。よし、家に入れ。イロイロやろう」
「お前の脳内思考について聞かせて欲しい」
「……帰れ!」

ギイツ、ボタン!

牽制され、ドアを思いっきり閉められる。随分と怒っているように見えたな……

怒りたいのはこっちのほうだっちゅーの

ま、そんな事考えていても仕方ない。帰るとしよう……

そんな事になっていたのだ

おかげで翌日は腕が痛い痛い。どれだけ引つ張られていたんだろ
うか……

更に困ったことがある。その翌日から毎日、明日香が家に迎えに
来るのだ

更に更に困ったことがある。更にその翌翌日（翌週の月曜日）か
ら毎日、エルフィまでもが一緒に迎えに来てしまった
おかげで毎日腕が痛い……助けてくれ

とりあえず現在の状況へと話を戻そう

今俺は死ぬかもしれない状況にあるのだ。殺人兵器卵焼きをもう口元ま
で運ばれているのだ。お願い！ 助けて！ この俺を……！

願いが通じたのか

パタパタパタ……バツ！

「あつ！ くそっ……！ 雀すずめか……まあいい」

飛んできた雀が俺に食わせようとしていた卵焼きをひったくって
いったのだ。そう、助かった。助かったのが……

ドサッ

「おい明日香。今お前の卵焼きを食べた雀が落ちてきたんだが」

まさかの身代わりに。雀さん……申し訳ない……

「それだけ美味しかったから寝てしまったのだろう？ ほら、まだあるんだ。遠慮しないで食べてくれ」

「御免被る」

「ほらほら」

再び卵焼きが口元へ運ばれてくる。この口……開いてたまるか……

……！

そんな事を思う。思ってしまった瞬間

「神崎さああああああああんっ！！」

「へっ！？」

「今だ！」

「むぐうっ！……ゴクン」

ドスン！

何故エルフィは上から降ってきたんだろう。そして何故俺の目の前にエルフィの顔が……って、非常にマズいんですが！？

彼^{俺とエルフィ}我の顔の距離、おおよそ3cm

あれ……今とんでもない状況にあるんだけどさ？ だんだんと力が抜けて……あ、走馬燈^{そうまとう}が……ああ、健太と光久の死んだときの映像が……

今から10分前。俺たちWars部員(1年のみ)は屋上で弁当を広げていた

この提案をしたのは俺。最初にエルファイが誘ってくれて、その後明日香が入ってきて……このままだと俺が死にそうだから全員誘ったわけだ

だから俺は今生きて……いや、死ぬのか。だってこれ走馬燈だし話を戻そう。とりあえず弁当タイムとなり、皆が弁当を広げ……

『おっ、鶴の弁当美味しそうじゃん。1つ貰っていい?』

『ま、まあいいだろう。わっ、わが夫に食べさせる前に私の腕前を見せてやるうではないかつ!』

『頼む皆。ジト目で俺を見ないでぐふっ!』

『神崎さん!? 夫ってどういう意味ですか!? まさかそういう関係まで辿り着いたって訳じゃないですよね!?!』

『誤解だエルファイ! それはただの鶴の捏造で……!』

『明日香と呼べ! そして捏造とはなんだ! 事実だ!』

『エルファイ! とにかく放せ! 話し合えばわかる!』

ドサッ

『……………』

健太が倒れた。その手には食べかけの卵焼きが

『健太殿!? 健太殿!? 大丈夫か!?!』

『何!? 何が起こったの!? もしかしてこの卵焼きが原因じゃあ……!』

『明日香! この卵焼きに何か入れた!?!』

『わっ、私、不安なんで見てきます!』
『ぐっ……真筈……生きる……ガクッ』
『絶対に……食してはならぬ……ガクッ』

以上、走馬燈で見えた景色
てか走馬燈が見える!! ヤバクネ?

死んでたまるかああああああっ!
そう思った俺は思いつき開眼する

「ひゃあっ! 大丈夫ですか神崎さ……あ……(いけるっ!)」
「おっと……すまんがエルフィ……近い、近すぎるんだけど……?」

彼我の距離は更に縮んで2cm

よく俺生きてるよな……
もう今にも明日香に殺されそうなんだが……

「えっ、エル! 早く離れろ! そいつは私の夫だ! 変な真似は
許さんぞ!」
「……………」

目の前に顔が真っ赤になったエルフィ。マズい。死ぬことが確定
して、更に動けない……
万事休すかつ……!!

彼我の距離更に縮んで1cm
唇同士が触れるまでギリギリな状況だ

そして俺は気を失った

#9 災難

「全く……何で俺があんな目に……………」

「自業自得ですっ!」

「エルフィ、その事件が起こる前にお前は何をしようとした?」

「えっ!? え、ちよ、いや、あの……………えっと……………」

「ゴメン。やっぱいいや」

「……………そうですか。やっぱり神崎さんは明日香さんの方が……………」

「ん? 何か言った?」

「いいえ、何でもありません……………」

さて、全授業も終わって放課後。昼休みからずっと気を失ってしまった健太と光久を回収するために、俺とエルフィは保健室へと向かっている

どうでもいいけど2週間経つと授業も本格的だな

とりあえず平和な放課後だ。今は明日香がいないから変に襲われることは無い。いやぁ……………平和っていいですなぁ……………

しかもエルフィは俺の腕を拉致らないようだ。それはそれで嬉しい……………が、頼む。そうやって見つめながら歩かないでくれ。教室出てからずっとそれだぞ? おかげでどれだけ他の人間から視線を浴びたことか……………

とにかく平和だ。明日香がいないから……………早く2人を連れて部屋に逃げ込もう……………そうすれば……………いや、あそこは明日香の活動拠点だからな……………余計に危ないかもしれない

でも大丈夫か！

どれだけお気楽思考でいるんだろうか俺は……
殺されることだけは回避しないとなあ……

そんな事を思っていると、ふとある物が視界に入る

現在地は保健室へ行くための廊下、保健室まで約50m手前辺りの場所。つまり会議室前

なんか大きい箱がある。はて……凄い怪しいんだが

理由は簡単だ。“T O K A N Z A K I”とデカデカと書かれて
いれば……“開けてください”とも書いてあるし……
犯人の見当はついたぞ

「神崎さん？ どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない。いいかエルフィ？ お前に頼みがある。俺
が合図したら俺と位置が変わるんだ。できるな？」

「はい！ 神崎さんの頼みなら！」

「よし、お礼といつては何だが、後で一つ頼みを聞いてやる。それ
でOK？」

「え？ あ、はい！ はは……一つ頼みを……ふふ……」
「よくわからんが戻ってこい。それじゃ行くぞ……？」

俺とエルフィは保健室に向かって再び歩き出す。よし順調だ。エ
ルフィには悪いが……身代わりになってもらおう……

俺とエルフィはダンボールの目の前を通過しようとしたその瞬間

「エルフィ！ 今だ！」

「はっ、はいっ！」

「真筆……！！ なっ！？」

勢いよくダンボールの中から明日香が出てきた。うん予想通り
ごめんエルファイ……これしか方法が無かったんだ……。だから後
で頼みを聞いてやるから勘弁してくれ……。本当に申し訳ない

「明日香さん！？　なんでそんなところから……！　というか離れ
てください……い………！　ファーストハグは神崎さんって決めて
たのに………！」

「お前こそ何だエル……！　何故お前がそんな所に……！　私だっ
てファーストハグは真箏にして貰うつもりだったんだぞ………！？」

よし、今の内に逃げるとしよう。保健室に逃げ込みさえすれば俺
の勝ちだ

ダッ！！

「神崎さん！？　何一人で行こうとしてるんですか！？　というか
理由を説明してください！」

「真箏！　お前計ったな！　私が出てくることを予想してエルと入
れ替わったな！？　そうなんだろ！？」

「くっ……立ち直りの早いヤツらだ………！」

さて、残り40m地点（職員玄関前）だ。　　っっていうかエルフ
イの足が意外と速いだと！？

「神崎さん！　早くわたしに捕まってください！　いろいろと聞き
たいことがあるんです！」

「真箏！　エルじゃなくて私に捕まれ！　私とは将来に向けて話し
合っぞ！」

「何故捕まらなくちゃアカンのだ！　そして明日香！　お前は話す

べき内容が違うと思わないのか!？」

「それこそ何故だ! 将来の夫婦がそんなことを考えてはいけ
ないのか!？」

「とりあえずお前は病院に行くべきだ! お医者さんに見て貰う事
を推奨するぞ!」

「まだ腹痛は始まっていない!」

「2人ともそんな関係までいってしまったんですか!？」

「誤解だエルフィ! 断じて違うぞ!」

保健室まで残り20m(第二会議室前)。現在順位は俺、エルフ

イ、明日香

。。。?
だんだんとエルフィに詰められる。これは捕まってしまうのか!

「だったら神崎さん! 将来の夫婦ってどういう意味ですか!？」

「さっきも言っただろ! 明日香の捏造だ! 作り話だ! 断じて
そのような関係には至っていない! そもそも何故そんな話になっ
ているのが俺にはサツパリだ!」

「真筆! 捏造とはなんだ! もう私が決めたことだ! お前は私
の犬だ! 犬が主人の命令に従わずどうするっていうのだ!」

「本当に俺は人ですらないのか!? そして勝手に話を進めようと
するな!... 以前にお前たちは一体何がしたいんだ!」

「だから鈍いって言われるんですよ!」

「何度言ったらわかる!? 俺は俊敏だと!...!」

ドンッ

あれ? 目の前に壁? おかしい。まだ保健室は少し先にある...

... ああ職員室かあ

..... 職員室?

「答えられないほど壮絶なものだったの!？」

さて時間を少しだけ遡さかのぼらせてみよう

さっき俺たち3名は保健室に向かう途中、梅花先生に捕まって会議室へ行くことになり、そこで指導を受けるハメになってしまったのだ。

受けるのはこの2人だけでーだろっつーに……

話を戻そう

とにかく指導を受けることになった。なったのだが……その内容が壮絶なものだったのだ……

「さて神崎。言い訳はあるか？」

「さつきしたばかりなんですが？」

「なんで男子が女子に襲撃されているんだバカモノ」

「本当ですからね!？　なんで信じてくれないんですか!？」

「……あのな？　お前たちの会話は全て職員室に丸聞こえだったんだぞ？　聞いてれば夫婦だのそう言う関係だの……お前はそんな人間だったか」

「誤解です！　それは明日香のただの捏造で……!？」

「真筆？　捏造とはなんだ。これはもう決定したことなんだ。誰にも取り消せはしない……」

「ふむ。よし、お前はこれから危険人物として扱おう」

「先生!？」

「先生！　神崎さんは悪くありません!？」

「エルフィ……?？」

「ほう。よしエストラント、神崎はどのように悪くないのか説明し

「てみる」

「はい……。襲撃していたのがわたしたちなのは事実です。ですがそれには色々理由があるんです」

「……………」

「まず1つ目に、私は神崎さんに騙されました」

アウトオオオオオオ！！

「エルファイ！ それ全然フォローになってない！ 寧ろ悪化する！」

「黙れ神崎」

「……ハイ」

「2つ目に……2人はもう身体の関係なんです。だからそれを正さないと思います……」

「ちょっと待て。今大きな誤解が生まれる発言が聞こえなかったか？ 今思いつき「身体の関係」って言ったよな、オイ。その発言はどう考えても……」

「もう俺退学モンだよな！？ つかエルファイ、先生に余計な誤解を与えさせてどうするの！？」

「そうだエル。私たちはまだそんな関係にはなっていない。今晚寝込みを襲撃するつもりだったんだ。そして本当にそういう関係になるうとだな……」

「オイ明日香！ 何変なコト言ってるの！？ 馬鹿じゃないですかあ！？ 寝込みを襲撃ってなあ！ 何しようとしてるかわかってごめんなさい」

「少しは静かにしろ。私の犬の分際で……」

「よし。神崎真箏。お前の無罪が証明された。行ってよし」

「はあ！？」

「よくよく考えたらオーバーな話じゃないか。そんな事が学校であ

る訳無いからな。疑って悪か……先生を睨むな」

だったら最初から気付いてくれよ！

と、色々あった訳です

神様、アンタ俺をこんなに弄もてあそんで楽しいか？

そもそもコイツらは一体何を考えて……そんな発言や行動を……

「お、全員来たか……って、佐々木と明智はどうした」

「ああ、早退したらしいです」

そう、結局保健室に行ったのは無駄足だった。もう2時間前に帰ったのかなんとか

知ってたらこんな酷い目に遭う事は無かったのに……

「そうか。よし、それじゃあ今度の土曜について話がある」

「「「「「は？」「」「」「」

今まで休みの日に演習は無かったよな？　もしかして遊びに行く

とか　そんな訳ないか

確実に演習だなこれは

「練習試合を申し込んでおいた」

よし気のせいだ。演習用プログラムに一回も勝っていない俺たちが他の高校と戦うなんて馬鹿げた話がある訳がない。そうだ、練習

試合っていつのは嘘……

「神崎、現実逃避をしようとするな」

バレてたか

「で？ どこと試合するんですか？」

「よくぞ聞いてくれた。哉町^{かなまち}高校、去年の都北優勝校だ」

よし気のせい気のせい

「現実逃避しても無駄だぞ。ま、精々頑張るがいい若者たち。俺は雑誌でも読みながら見学させて貰うとするぞ」

「……………」

まさかこんな時期に練習試合を申し込むなんて……

アホだ

「神崎。今失礼な事を考えただろ？」

「いいえ」

なんだ？ 俺の身の回りには読心術が使える人間が多いのか？

……とりあえず弦巻高校VS哉町高校の練習試合を行うことが決定してしまった

……勝てるのか俺ら？

#9 災難（後書き）

なんか内容浅かったですね……
申し訳ございませんでした

そして次回の分も謝っておきます
申し訳ございませんでした

更に前ページに少しずつ補正を加えさせていただきます
申し訳ございませんでした

#10 練習試合(前書き)

よし、3度目の戦闘描写だ

読みづらいこと間違いなしorz

#10 練習試合

哉町高校かなまちとの練習試合を翌日に控えた金曜日　の放課後
俺たち部員はVWで模擬戦闘を……最後の演習を行っていた

ちなみに現在延長戦。一回戦目は何とか勝利し、二回戦目は敗北
したと言っわけだ

データは去年の哉町高校のデータ。最後の最後にこれかよ……っ
て感じもするが……そもそも今年の哉町高校のメンバーがこのデー
タと同じだとは限らない

本当に明日は勝てるだろうか……

とりあえず話を戻そう

俺たちは模擬戦闘、延長戦を行っていた

トトトトトトト

銃声がVW内に響き渡る。現在俺は無駄にでかいビルの陰で反撃
のチャンスを探っている……のだが、敵の攻撃は止みそうにない
まさかマシンガンまであるとは……

爆弾とかそういうのが無いだけまだましだろうか……

そんな事を考えていると個人回線PLが開かれた。相手は……藤堂さんが

『大丈夫神崎くん？　結構苦戦してるみたいだけど……』

『まあな……って、どこから見てるんだよ』

『え？ 100m手前のビルの屋上からだけど……ここから狙撃するっていうのもアリだけど？』

よし、是非頼もう

「それじゃあ頼む……」

『と、思ったけど敵が来てるから無理。ゴメンね神崎くん。じゃ）
プツッ（』

……まさかの？

良いタイミングで敵さんも現れたモノだな……

まあいい。俺は目の前の敵に集中し……まだ攻撃止まないの！？

これは困った。非常に困った。本当に困った。出るタイミングが全くもってわからない……いい加減に弾切れしろやコラ

仕方ない。ここは敢えて……

「敵陣旗^{Flag}を指そう」

遠回りをして敵陣旗を指すことにしよう……ってダメだよなあ。俺がここから離れたら敵をエルフィに近づけることになっちまうからなあ……

よし、イチかバチかで

俺は止まない攻撃の中、隠れていたビルの陰から思いっきり飛び出し、反対側のビルへと駆け込む。その間に銃弾を6発撃ち込む。何発か銃弾を受けてしまったがどうって事はない。よし、これなら敵を倒せて……るハズないか。世の中そう甘くはない

ド
ド
ド
ド
ド
ド

攻撃は一向に収まらない。どうしたものか……

そっぴいや忘れていた。俺の現在地を教えよう

フィールドを真上（正方形のフィールドを想像して欲しい）から見たとして、大体中心から右下……サポートルームよりだ。つまり俺の先に行かれたらエルファイが殺Headられてしまう

つまり俺はあの敵を倒さないといけない

でもどうするか……まだ攻撃止まないし……
そんな事を考えていると

『皆さん聞こえますか……？ エルファイです』

エルファイの声……全体回線WLで聞こえてきた。凄く深刻そうな声で……

『どうしたエル？』

『大丈夫？』

『ハイ……えと……佐々木さんがやられました』

『『『『』』』』』』……『』』』』

……頼む。誰か何か言おう。今俺はこの空気が非常に耐えられない
とりあえず健太が殺られたっぽい

よし、この怒り的な何かをあ敵にぶちまけよう

『もうこうなったら手段は選ばねえ』

明日香の銃が放った銃弾が敵の胸を貫通する。戦闘不能扱いになった敵が消滅する。待て、何故お前は戦闘不能を恐れずにそのまま向かってこれるんだ？ そして俺は6発撃って1発も当たらずじまいたったんだが……お前は何者だ？

「お前の妻……主人だ」

どうやら俺の身の回りには読心術が使える人間が多いらしい
そして俺は人間ですらないみたいだ

「わ、私とお前の……あつ、愛の前に敵は無いんだ………た、例え大きな敵が立ちほだかろうとも、私は……いや、私たちは決して負けはしない」

良いことを言っているつもりだろうが俺には迷惑な話で、お前の言いたい事がサツパリだ

そんな事を思っていると

『（ガチャ）神崎さん、明日香さん。今は模擬戦闘中なんですけど……そういうのは後に……いや、そういう話はしないでください！いいですか明日香さん？ わたしはサポートルームなんでそのような行為が出来ないからと言って、普通に動ける明日香さんはそのようなことをしないでください！ 抜け駆けは卑怯です！ 反則です！ やるならRWで……いや、やらないでください！』
「済まないエル。真摯はもう私のモノだ」

よし気のせいだ。今一瞬俺が人間扱いされなかったのは気のせいだ。そしてお前らは何を話している？

『とにかく今は戦闘に集中してください！』

「済まないエルフィ。俺はどうも動けそうにない。武器を持った腕がどうも拉致られているらしいんだ」

『明日香さん！今は戦闘に集中してください！抜け駆けはしないで……あつ、後方から敵が接近しています！気をつけてください！』

「消える邪魔者が！」

ドンッ！

今日香が放った弾は見事に敵の頭を貫通する

……やべえよ、怖えよ……

と、思った瞬間

ビーーーーッ！！

試合終了の合図がVW内に響き渡る。もしかして敵陣旗の破壊か！？それとも自陣旗の破壊か！？
気になる戦闘結果が空に投影される

『B t e a m l o s e
r e a s o n : H e a d b r o k e d』

俺らがAチームだから……勝ったのか。そして大将撃破か……つてあれ？今日香が倒した敵の顔が……うん、大将だ
つまり2対1で俺たちの勝利ということだ。一応捕捉しよう。
“初勝利”だ

「ふつ、やはり私の……いや、私たちの力の前では無力か」

「いやお前だけで十分だが」

「黙れ私の犬の分際で……スマン、夫だったな」

犬から人間にグレードアップしたのだが……嬉しくない
まず何故俺がお前の夫なのか説明を求めたいところだ

そういう思っている内にRWに戻ってくる

「おう若者たちよ、お疲れだったな」

戻って来るなり部長に話しかけられる

「これでやっと初勝利か。明日が心配で仕方ないな」

「そう思うんなら部長も参加してください」

「何を言うか。俺はもうWarsをやらんぞ？　そして神崎、お前
と鶴の力なら余裕だ」

「ありがとうアホ先^部」

「まず鶴はその呼び方を改めることを進めるが」

「いやコイツの思考を正すことを優先させてください」

部長もどこかずれているのだろうか

「ずれているのはどう考えてもお前しかいないぞ」

やっぱり部長も読心術を

何故俺の身の回りにはこう読心術を使える人間が多いのだろうか

「ま、とにかくだ。明日の為に今日はもう休め。1人欠けて試合で
きませんでしたーなんて事になったら殺すからな？」

物騒な事を言う人だ

「以上、解散」

「よし真箏。一緒に帰るぞ」

「いえ、わたしと帰りましょう」

「健太、一緒に帰って、何故急ぐ」

「ああゴメン。今日は用事が」

「じゃあ光ひ」

「済まぬ。拙者も用が」

「……………」

裏切られた気分だ

べ、別に泣いてないよ？ 朝飲んだ麦茶がね？

「やっぱり神崎さんはそういう趣味が……………」

「見損なつたぞ真箏」

「2人とも、俺をそういう趣向ジャンルの人間だと思つのか？」

「はい」

「ああ」

「よし、お前ら今から俺と話し合おう」

「ふえっ！？ そ、それはもしかして……………わたしと……………」

「私との将来についてか？ いいだろう」

「俺をどういう目で見ているかについてだ」

「……………」

何故2人とも俺を睨み付けてるのは……………理由が全くもってわからん

「真箏はこうやって人を傷つけていくんだな」

「健太、お前も混ざるか？」

「じゃあな」

逃げられたか。まあいい

「ま、明日の事があるし今日は止めにしておこう。さて、帰るか…
…って、2人とも、俺の腕を拉致るな」

「帰りましよう」

「帰るぞ真筆」

「わかってる。わかってるから俺の腕を今すぐ解放しろ」

「今日は明日香さんの家からです」

「何を言う。今日はエルの家からだろう？」

「落ち着け。何故俺はお前らを送っていくっていう前提で話を進めるんだ？」

「わたしたちが年頃の女の子だからです」

「なんだ？ お前は私たちが襲われても良いということなのか？」

「いや、そういう訳じゃ……って、引つ張るなぁー！」

この後俺は、エルフィ、明日香の順番で家に送ることになり、翌日の朝まで腕の痛みが残ってしまった

練習試合だったのにな……

「さて、全員揃ったな？ よし、^{フリーファイニング}作戦会議を始めろ」

練習試合当日。哉町高校に行く直前、学校に全員集合して作戦会議が始まるつとしていた

相変わらず放任主義だなこの部長

「よし。今日の練習試合だが、今までの模擬戦闘とはかなり違った

状況になってくるはずだ。だからポジションの変更をしようと思う」

明日香が切り出す。ポジションの変更って……このタイミングでか？

「まずはエルと琉華に関してだが、この2人は今までと同じ……サポートルームと陣旗の51m地点で活動して貰う。大丈夫だな？」

「はい、大丈夫です」

「陣旗には近づけさせないからね」

まあそれに関しては問題ないだろう

「次に佐々木と明智。お前たちは敵陣旗を目指せ。いいな？」

「おうよ」

「承知」

ふむふむ。さて俺はどうなるんだろうか

「次に望。お前はサポートルーム51m地点で待機。敵の迎撃を頼む」

「……別に問題はない」

……さて、ここまで来たらもう嫌な予感しかない

「真筆。おっ、お前は私と一緒に……」

「断る」

「何故だ。私たちは将来の夫婦なのだぞ。そのくらい問題はなかる」

「問題しかないから言ってるんだ。どうせお前はまた俺の腕を拉致るんだろ？」

「拉致と言つな。夫婦だからすることなのだ」
「だから一人で勝手に話を盛り上げるな」

コイツの脳みそを引きずり出してみたいところだ

「まあ仕方ない。腕を拉致しなければその案を受け入れる」

「ふむ。それなら仕方がない。今回は勘弁しよう」

「」「」「」「」.....「」「」「」

部長までもに酷い視線を送られた気がした

さて今俺たちは哉町高校に来ている。言っておくが顧問はいない
これでいいのかうちの学校は

まあ相手側もなんだけど

「やあ。良く来てくれたね弦巻高校の皆さん。どうぞ敷地内へお上
がりください」

部員の一人だろうか、部長っぽい人が声を掛けてくる

さて見た感じ.....ナルシストタイプ

一番嫌いなタイプの人だ

「ふふ、久しぶりだね西宮君。どうだい？ 君たちは僕らに勝てる
自信でもあるのかい？」

予想通りウザい

「黙れ吉原。言っておくが俺は参加しない。参加するのはコイツらだけだ」

「何だつて……？ 君、僕たちを舐めているんだね？ そうなんだろう？ 1年生如きに僕たちが負けるハズ無いじゃないか」

「言ってる」

「くっ……いくら君が強いからつていい気になるなよ……！」

「一応言っておく。俺はもうwarsをやらん。以上だ。さて、お前たちの部室はあっちだったな。よしお前ら、行くぞ」

「勝手に進もうとするな！ ええい！ 君たちは客人を案内するんだ！」

やっぱりすげえウザい

というか部長が強いつて………どういうことだ？ この人は部長の実力を知っているのだろうか

そんな事気にしても仕方ないか

そうこう考えている内に

「さあ上がってくれ、弦巻高校の諸君」

哉町高校の部室へ着いた。やっぱり弦巻の部室とは違うんだな……

…綺麗だ

「ではメンバー紹介をしよう………その前に申し遅れたね。僕は哉町高校2年のwars部部长、よしひろたくと吉原拓人。ヨロシクお願いするよ」

………うぜえ

「さ、順番に自己紹介を」

「ああ。哉町高校2年、かんだけいすけ神田啓介だ」

「同じく2年、椎名綾音だよ」
「同じく2年、木原大介」
「1年、笹川桂です」
「同じく1年、前織長門」
「同じく1年、渡辺零」

今回の相手が全員自己紹介をする。うちの高校と違って男子の割合が高い

「……………よし、準備開始だ」
「ちよつと西宮君！？ 僕たちに自己紹介をさせておいて自分たちの自己紹介はないのかい！？」
「吉原1つだけ言わせる。俺は一言も自己紹介してくれとは言っていない」
「くつ……………僕に向かってその態度……………！ いいだろう！ その口、2度と聞けないようにしてやる！」

「どうも、神崎です」
「ああよろしく頼むね神崎君」

「ちよつと待つんだ！ 何故僕を放置して自己紹介を始めるんだ！ 君たち僕に対するイジメか何かをしているのかい！？ それとも西宮君の入れ知恵かい！？」

「……………鶴明日香だ」
「よろしく鶴さん」

「待つんだ！ 今明らかに僕のことを無視したな！？ いいだろう！ そんな真似2度と出来ないように……………！」

VW内にお馴染みの音声が響き渡る。試合開始の合図だ
ちなみに一回戦目は俺たちのフィールド……まだ改修していない
ので荒野のままだ

「行くぞ明日香。俺たちの狙いは敵大将……あのキモ部長だ」
「ああ心得ている」

腕が拉致られる事は無い。……どれだけ幸せなことか

試合が始まる前に

『明日香さん！ 抜け駆けしたら許さないですからね！』

とか言っていたが、何の話だったんだろうか……

ま、今はどうでもいい
だって敵が早速目の前（約50m先）にいるんだもの……

『聞こえますか神崎さん、明日香さん。敵は1人じゃありません。
その更に後方120m地点に敵を捕捉しています。おそらくこれは
罠です。近づけさせておいて狙い撃ってくるハズです。注意して攻
撃を仕掛けてください』

「ああわかった」

「ありがとうエル」

後方120mか……多分あの辺から藤堂さんと同じような武器で
狙っているのだろう。注意しなければ

「大体ミーンティアシリーズの攻撃範囲は100〜120mだ。そう
なればここから攻撃するしかないな」

「そっだな……どうやって攻めるんだ？」

「……………真箏、私が合図したら左から攻める。まずはあの敵の撃破。撃破完了次第奥の敵に攻撃を仕掛ける。いいな？」

「おう」

「では……………行くぞ！」

明日香の合図と共に左右に分かれる俺たち。その間にいる敵に銃を向けて撃ち始める。どうやら敵の武器はマシンガンが2丁。ちゃんと左右に向けて攻撃されているが、2手に分かれた事により、上手く狙えていない。そして

ドキュン！

敵の胸を俺の銃弾が貫く。これで今の相手は戦闘不能扱いだが

『気をつけてください神崎さん！ 狙われてます！』

「えっ……………？」

ピシユウンッ！

「ぐあっ！」

「真箏！ くっ……………！」

左の太ももを打ち抜かれる。しまった、もう1人敵がいるのを忘れて油断していた……………！！

離れた場所にいるスナイパーが再び俺に銃を向けてくる。マズい！ このままだと殺られる……………！！

そう思った瞬間

「はあああああああっ！！！」

「なっ……うああっ!」

ズシャアッ!

俺の方に目が集中していた敵（笹川くんだけか？）は、明日香が近づいていることに気付かなかったのか、明日香の刀で斬りつけられていた……うえ、血がグロい……

いや、俺からも血は出てるんだけどね？
俺のに比べてあつちは……なあ？

そんなどうでも良いことを考えていると、明日香が駆け寄ってきた

「大丈夫か真筈？」

「ああ、なんとかな……それより……っ!」

「無理をするな。……そうだな、ここからは自分で自分の身を守れ。私一人で大将を……」

ビーーーーッ!

「「え?」」

試合終了の合図がVW内に響き渡る

そして

『A team lose

reason: flag broked』

俺らがBチームだから……つまり俺たちの勝ちだ
健太と光久がやってくれたのだろう

『next battle starting time at
5 minute after .
count start p p
.』

次の試合が始まるまでのカウントが始まり、全員集合した状態になつた

「健太、光久、お疲れ」

「なあーに！ あれくらい余裕だつての！」

「そうか余裕か……拙者が何故か盾にさせられた気がしたのだが…

…」

「気のせいだ光久！」

最悪だな健太

「……それで、次も同じようにするの？」

「そうだな……とりあえずそうしよう」

「おっけ。ボクが陣旗を守り抜く！」

「サポートも任せてください」

「よし、始めるぞ」

……

時間が来て次のフィールドが構成される。模擬戦闘と同じで、白い空間に黒いブロックがあるフィールドだ。やっぱり目が慣れない

『wars program setting start .
field coating complete』

e n e m y p r o g r a m . . . c o m p l a t e .
s e c o n d b a t t l e d a t a i n s t a l l . . . c
o m p l a t e
a r e y o u r e a d y W a r s b a t t l e
s t a r t ! ! 『

二回戦目の開始を告げる音が響き渡る
怪我は治ってるからちゃんと動けるな

「よし、行くぞ真箒」

「ああ」

俺と明日香は行動を開始した。目指すはあの部長……キモイ先輩だ
割と余裕で勝てるんじゃないか？ 見た目弱そうだったし。態度
だけっぽかったし

ま、今気になるのは部長の実力だ。さっき『いくら君が強いから
つて……』とキモイ先輩が言っていた言葉
それだけが気になる……のだが、今は戦闘に集中しよう

『神崎さん……』

「ん？ なんだエルフィ？」

「どうした真箒？」

明日香に聞こえていないと言うことは、俺に対するPLに繋いで
いるのだろう

「いや、少し待ってくれ。で、どうした？」

『あの……その……敵とか見えますか？』

「いや、見えないけど……というか探すのはお前の仕事だろ？」

『そ、そうですね。わたしの仕事ですよね……………』

「で……………それだけ？」

『あ、い、いや、その……………この試合に勝ったら後で話したい事があるんです』

「へ？」

『だから……………！ この試合に勝ったら私の話を聞いてくださいって言ってるんです！ この前の頼みです！』

「あ、そうなの？ 別に他の頼みにすれば……………」

『いいんです。それじゃあ切りま……………いや、敵を捕捉しました。気をつけてください。左の方向60m地点です。ではお気を付けて（ガチャ）』

PLが切断される

「……………何だつて？」

「ああ何でもない。それより敵がいるらしい。左方向60m先だ」

「わかった。では武器を構えろ」

「ああ」

エルフィが伝えてくれた左方向、敵のいる方向へと武器を構えて向き直る。さて、大将……………キモイ先輩だと嬉しいねえ……………

と、思った次の瞬間

ドドドドドド

マシンガンの音が聞こえてきた。段々と銃弾は近づいてくる

「左に飛べ明日香！」

「わかつてる！」

左右に避けて回避する俺たち。明日香側には壁があるが、俺側には壁がない。そのまま俺に向かって銃弾が撃ち込まれてくる

「くっ……！ これじゃあ近づけねえ！ 明日香！」

「任せろ！ とりあえずそのまま囿になってくれ！」

「言われなくとも……！！」

俺はそのまま逃げ惑う。いつ体力が切れるかが問題だ。その前に早くケリを着けてくれ明日香……！

明日香と敵の距離は段々と縮まっていく。そして

『うわあああああっ！』

敵の断末魔が聞こえてきた。つまり明日香は敵を倒したと言うこと……

ドンッ！

次は銃弾の発せられる音が聞こえてきた。もしかして2人いたとか？ それで明日香が敵を倒し……

だが、W1が繋がれると、予想外の言葉が耳……脳内に響き渡った

『……皆さん聞いてください。今明日香さんが殺られました』

「……………は？」

思わずそう返事してしまう

『敵は遠くから来たみたいで、私のレーダーに入った直後に明日香

さんを……すいませんでした……」

「……謝るなエルフィ。今から俺がソイツを倒してくる」

今の言葉にどうやら俺はプツンしたらしい。気付かぬ内にそんな言葉を言っていた

「……え？ ちょっと神崎さん!？」

『真筆殿!? 正気か!?!』

『真筆!』

『神崎君! だったら私のミーティアで……!』

『……神崎、無理を……!』

「済まないみんな。俺が全部片づける」

『神崎さ(プツッ)』

俺はWLを切断し、一人明日香のいたところへ向かう。上等だコノヤロウ。今明日香を殺ったヤツを葬^{ほつむ}つてやらあ……! !

「神崎さん!?! 神崎さん!?!」

『ダメだよエル。通信が途絶えてる』

「そんな……! もう一回繋いで……!」

『無駄だエルフィ殿! 神崎殿に任せるしかない!』

『そつだエルぼん。真筆を信じてみよう』

「ですが……!」

『……エルフィは信じてればいい』

「……みなさん……わかりました。そつしてみます……」

プツッ

「神崎さん……もしかして明日香さんの事……いや、頑張ってください。神崎さん……！」

WLを切断した俺は明日香が殺られた場所へと向かい、その場を立ち去ろうとしている敵の姿を確認した。どうやら一人っぽい

「さて、アイツが明日香を殺ったヤツ……って、ハイ？」

よしラッキーだ。俺の目の前に映ったのはあのキモイ先輩……敵大将がいる。よし、背中を向けている今なら……！

俺は音を立てずに慎重に接近する。だが

ピシユウンッ！ ドスッ！

「なっ……ぐあっ……！」

近づいている途中、両足に銃弾が撃ち込まれる。そして敵（キモイ先輩）はそれに気付いたのか、こちらを振り返る

「ふふふ。神崎君だったかな？ よく畏に引つかかってくれたね？」

「畏……だと？」

「そうさ、畏さ。わざと背中を向けさせて敵を油断させ、その油断した背後から銃弾を撃ち込む。そしてその動けなくなった身体をこの僕がトドメを刺すのさっ！」

よし、普通にキモイ

「……神崎君だったか？ 今僕に対してとても失礼な事を考えたん

じゃないかな？」

どうして俺の身の回りにはこう読心術を使える人間が多いんだ？

「まあこのくらいにしておいて……君にもトドメを刺してあげよう。それじゃあね」

「ははっ」

思わず笑ってしまった。理由は簡単。キモイ先輩の顔が変だったからだ

「なんだね？」

「いや、別に。アンタの顔が面白く……いや、すいません。笑えません」

「なっ……何を……！ 君は僕に対して何を言っているのかわかっているのか！？」

「いいえ、普通に考えた結果を言っているだけです」

もう上下関係お構いなしに先輩を貶す

別にこんなヤツに怒られても大して怖くはないハズだ。どっちかってと、うちの部長の方が怖い

「きつ、貴様……！」

「すみませんがその顔隠していただけませんか？ 笑いたくて仕方がない」

「貴様……どれだけこの僕を侮辱すれば気が済むんだ！ いいだろう！ ここで死んで詫びるんだ！」

「……お前がな」

「戯言は大概に……！ 何……だと……？」

「挑発に乗ってくれてありがとう……無駄に話を長引かせてくれ

てよ……………」

敵が熱くなって喋っている内に、俺は銃弾を敵の頭に撃ち込んだ
そして今、初めての練習試合の戦いに幕が降りた

「はっはっは！ しかつし神崎！ お前も中々言っじゃないか！

いいぞ！ 俺はお前を賞賛するぞ！ ははははは！！」

「部長……………痛いんですがあっ！！」

今俺はRWで部長に肩をバンバン叩かれている。すげえ痛い

「おのれ……………この僕が侮辱された上に負けるだと……………？ ありえな
い！ 信じない！ 僕は1年生なんかには負けるハズが無いんだ！

そうだ！ これは夢だ！ 早く！ 僕を早く起こしひっ！」

「あんな吉は……………キモイ先輩、そろそろ現実を見たらどうなんだ？
お前は負けたんだ。しかも自分の仲間を囮にするなんて……………お
前はグズの極みだ」

部長は銃を向けながらそう言い放つ

そう。この先輩は仲間を囮に使うって明日香を殺ったのだ。コイツ
は最低の人間だ

だったら明日香はどうなるか？ 俺は信じていたから囮になった
のだ

「君までも僕を馬鹿に……………！ ええい！ 早く立ち去れ！ お前た
ちの顔なんて見たくもない！」

「それはこっちの台詞ですグズ」

「そうだグズ」

「グズグズ言うな！」

試合が終わってから少しの間、俺と部長はずっとキモイ先輩の事を貶していた

なんかスッキリするわ

「よし、お前ら帰るぞ。別に荷物は無いだろうが……よし、では帰る！」

部長のかけ声で全員が立ち上がり、外に出始める。そして部長が最後に出る際に

「吉原。お前は1年に負けたんだ。最初お前は『1年如きに負けるハズが無い』と言ったが、その自信はなんだったんだ？」

「黙れ西宮……僕が負けるハズがないんだ……」

「一つ教えてやる。お前が負けた理由はだな、仲間を犠牲にしたからだ。そこから先の事は自分で考える……グズ」

「グズと言うな」

……仲間、か……

部長は良いことを言っているのか悪いことを言っているのか……

まだやっぱりわからない

でも、いい人に違いない。それはわかる。なんとなくでも……

そして1つ加えて話そう

俺たちが部室を離れて5秒後、“グズ”とか“グズ”とか部室から聞こえてきた。……なんか悪いことをした気がするなあ……

弦巻高校へ戻る際

「神崎さん」

「どうしたエルフィ？」

エルフィに話しかけられた。ちなみに今明日香はいない。気絶していて、藤堂さんと近藤さんに運ばれているからだ

「あの……さっきの約束を……」

「あゝ、そういやそんなこと言ってたっけな。よし、聞いてやる」

「はい。その、神崎さんって……明日香さんの事をどう思ってるんですか？」

「ほ？」

「いや、だからあ！ 明日香さんの事をどう思ってるんですかっ！？」

「いやはや……どう思ってるって聞かれても……まあ、答えは1つしかない」

「友達……いや、俺たちにとって必要な人だな」

「必……要？」

「ああ必要」

「はは……ははは……じゃあ次の質問です……。わたしの事をどう思っていますか？」

逆に聞きたい。何を聞きたいんだ？

「そりゃ、明日香と同じで必要な人だな」

「ほえっ!？」

何を驚いているのだろうか

「そ、その必要ってというのは……」

「もちろん Wars 部員としてだな!」

「……………はあ」

何故溜め息をつくのだろうか

『こつやって真筆は人を傷つけていくんだな』

そして健太よ、何が言いたい

それで今俺は思ったことがある。もう思いっきり Wars に溶け込んでるよな? 最初はあれだけ嫌だったのに……自分でも不思議だと思う……のだが

多分それは、コイツらというからなのかもしれない。このメンバーでいると何かが楽しい

だから俺は今こつやって Wars の練習試合をしてきたのだろう……って話がずれ……って

「エルファイ? 頼むから腕を拉致らないでくれ……」

「いいじゃないですかこれくらい。わたしが必要なですよね?」

「ま、そうは言ったんだけど……言ってる意味が違……」

「いいですよね?」

「……………ハイ」

やっぱり最終的にはこーなるのな……

「あゝ、そつだお前ら。今になって思い出した事がある」

エルフィに腕を拉致られた状態で、部長が喋り始める。思い出した事ってなんだろうか

「5月から始まる都北の大会だが……参加することに決まったからな。以上」

「……は？」

全員で同じような返事をする

「聞こえなかったか？ 都北の大会に出場する。それだけだ。よし、今日はこれで解散だ！ 各自好きに帰れ！」

なんて適當すぎる部長なんだ！ そして何の相談も無く出場させるな！

「はあ……」

「どうしたんですか神崎さん？」

「いや、大丈夫だ。それよりもエルフィ……」

「はい？」

「いや、何でもない」

都北大会に出場することになり、更に現在の状況の危うさといったら……

もう俺はどうなんだろうか

そんな事をを思ってしまった

過酷になっていくんだろうなあ……

だが、こうなってしまった以上、都北の大会で勝たないといけない
去年の結果のよう、惨敗になってはならないと

頑張ろう。頑張って優勝しよう

俺は心の中でそう思った

10 練習試合（後書き）

お疲れ様です。あんだーすたんどです
読みづらかったですなハイ

そして駄作にお付き合いいただきありがとうございます

では最後の状況の説明でも（真筍心理から）

藤堂さんのより若干大きい胸が……

と言った感じです

大変申し訳ございませんでした。

そして僕のブログにて

Wars 特別出張編（#10・5）
が載せてあります。

読みたい方はどうぞ読んでくださいb

<http://ameblo.jp/ek-6rok/entry-10852092374.html>

ではまた次回……会えるかわかりませんが、その時はよろしく願
いします
では

#11 GW・ゴールデンウィーク

入学してから1ヶ月が経過し、5月になった
5月だから段々と暖かくなってきて……この前まで見ていなかった生き物たちを良く見かけられるようになって……

時間が流れるのは早い。中学3年から思い始めた気がする

自分はオヤジか？

まーそんなこんなで時間が経つのは早い
早いんだが……

「よし真箒。今日は私と寝よう」

俺の左にいる女子、こいつのあそぶか鶴明日香がそんな事を言ってくる。つり目と胸ぐらいまであるサイドテール、男っぽい喋り方が特徴の女子だ。最近コイツの脳内思考が気になって仕方がない

「お前は何を言い出すんだ。そもそも他に人がいるのがわかってい
るのか？」

「明日香さん！？ それはいけません！ まだ神崎さんだって高校生なんです！ 子供なんです！ 甘甘なんです！ だからそのような不純な行為は明日香さんがしたくても神崎さんの了承……いや、神崎さんのご両親に許可を取ってからにしてください！」

今度は俺の右にいる女子、エルフィ・N・エストラントニテアにそう言われる。大した特徴は無い……いや、胸が大きいとでも いや、

邪念を捨てろ俺。とりあえずコイツも明日香と同じでおかしい。この二人の脳内を覗いてみたいところだ

というか俺は子供なのかぁ……甘甘なのかぁ……

いや、ツツコムベキ場所が違う。そんな行為をするのに両親の許可を得なきゃアカンのか。即行反対されるだろ……っつーか何でそんな話になってる。まず俺は明日香とどういう関係なんだ

「私の犬であり夫だ」

またもや読心術。何だ？俺はもはや人間扱いされないのか？

そもそもお前は人間でありながら犬を夫とするのか？頭おかしいんじゃないだろうか　って、まず俺は何故夫として扱われる。1ヶ月前のお前の頭にどういう異常が発生したんだ？

「なあ真箒。本当にお前らは夫婦なのか？」

今度は正面にいる男子、佐々木健太ささきけんたに話しかけられる。コイツも特徴と言った特徴が……とりあえず高校に入って最初に来た友達とでも言っておこう

「断じて違う」

「事実だ」

明日香とは180度違う返事をする。本当に何をしたらそんな事を言えるようになる

「真箒……頑張れよっ！」

「黙れ健太」

「佐々木……応援ありがとうな」

「佐々木さんは明日香さんの味方なんですかつ!？」

「いや、僕は2人を応援する」

「むっ」

気のせいだ。2人の間に火花が飛び散って見えるのは気のせいだ

一応ここでいろいろ再確認しよう

この前俺たち、弦巻つるまき高校のメンバーは哉町かまなち高校と練習試合を行い、見事に勝利した。したのだが……

その帰り道、部長が『来月5月の都北大会に参加する』と言いだしたのだ。まあ勝つことを目標にしているワケだが……今からプレッシャーが半端ねーです

ま、その話は置いておこう

現在GWユルメンクの真っ最中。ちなみに2日目、練習はない!

それでこの3人は俺の家に遊びに来ていて、くだらない話をしながら何をしようかと考えていたところである。はつきり言って何をするか考えるのを忘れていた。明日香の発言のせいだ

「それで、これから何するよ」

健太が話を戻してくれた。とりあえず助かった

「そうですね……それじゃあ神崎さんの部屋を漁りましょう」

「待て、それはさっきもしなかったか？」

それで片付けるのが大変だったんだが

「それじゃあ定番でトランプでもやるかあ？」

「いえ、漁りましょう」

「私は真箏とイロイロやるうと思うのだが」

「落ち着け女子2人。エルフィの意見はまだ許すとしても明日香の考えはどうかと思うぞ」

「それじゃあ漁ります」

「待てエルフィ！ 俺は今完全に許可した訳じゃない！ ただ明日香の意見と比較した結果を言っているんだ！ そして明日香！ 前は俺のベッドの上で何をしようとして って、勝手に入るな！」

「何を言うか。まずは一緒に寝ることから……」

……頼む。俺を助けてくれ。一度にこの2人を相手するのはどうも辛い……

健太に助けを……オイ、目を逸らすな

そんな事を思っていると

「神崎さん……あの……これは……」

「へ？」

「あ、それはこの前僕が貸した……ってえ！」

卒アル……の皮を被った ってマズい！ 中身は非常にマズい！
特に女子！

「佐々木さんの卒アルですか。それじゃあ問題な（パシッ！）あ！
なんで奪うんですか神崎さん！」

「ナイスだ真箏！」

「ああ！ これはお前たちには見せられない物 （パッ）なっ、

明日香！？ ダメだ！ 開くな！」

「なんだ？ そんなに見られてはいけない卒アルなのか？ そう言われると段々見たく……」

「健太！ 共同戦線だ！」

「おう！」

「ふっ、無駄だ」

卒アル（の皮を被った物）を持っている明日香が、勝手に入っていたベッドから出てくる 何故か下着姿で

「馬鹿あああああああああ！！！」

「眼福じゃあああああああああ！！！」

健太は発言がおかしいぞ！

「ダメです！ 神崎さんは見ないでください！」

「なっ！」

エルフィに目を押さえられて、光を失う俺。しまった！ これだと卒アル（の皮を被った物）を取り返せない！

「全く……真箏はこの程度で恥ずかしがるな。どうせ今晚は……その、アレだ。下着もないのだから……」

「待て明日香！ 何故俺はそんなことをするってなってるんだ！

というか服を着ろ！ そしてそれを返せ！ というか健太はどうした！」

「ああ、真箏以外の男にこんな姿見せられるか。だから潰しておいた」

最後の希望消滅

「真筆。私とこの本と同じ内容の事をするか、死ぬか。好きな方を選ぶ」

なんだろう。1つだけ生存出来る道を見つけた

「神崎さん？ 私とその本と同じ内容の事をするか、わたしに殺されるか。好きな方を選んでください」

…………… 2つ目の生存出来る道を見つけた

いや、間違えた。全部死亡ルートだ。おそらく

仕方ない。ここは素直に…………

「2人で俺を殺せ」

ま、こうなるよな

それで死刑直前に礼の本を燃やされ、そして2人とも「私とは嫌なのか」といった感じの事を言っていた
さようなら現世…………

「……………」

俺は目を覚ます。あれ？ ここは見覚えの無い場所だな。つか俺は家にいたはずだよな？

辺り一面お花畑で、目の前には大きな川がある
そして横には健太の寝ている姿が

「まさかな……」

目の前の川は三途の川と言うヤツだな。つまり俺と健太は死んだ
っつー事に

「おい健太」

「……ん？ おう真筈。無事だったか ってここは何処だ？」

「ああ……どうやら俺たちは死んだみたいなんだ」

「そうかあ……よし。2人で目の前にある川を渡ればいいんだな？」

「そういう事らしいな」

2人で目の前にある川……三途の川を見る。そう。向こう岸に行
けば楽になれるのだ。明日香の命令等々から解放されるのだ

健太がいれば心細くなんてちつとも思わない。よし、渡るとするか

「行こうぜ健太」

「だな」

2人で川に向かい、そして川に腰まで浸かる。結構深いんだな

「なあ健太。俺たちの一生って短かったな」

「ああ。短い間だったけど……現世は楽しかったな」

「……来世でも友達になろうな」

「わかってる。約束だ」

俺と健太は腕を組み、約束をした

そして反対岸まであと少しの所で……

「じぼおっ！」

「健太！？」

健太が沈み始めた。どうということだ！
そんな事を思っている

「なあっ！？」

俺はさっきまでいた岸の方へ引っ張られ始めた。一体これはどう
いう事だ！ まさかとは思うが……！

健太 地獄行き 俺 現世戻り

「嫌だあああああああっ！！！！」

2人で同時に叫び……

「はっ！？ はあ……はあ……はあ……はあ……」

目が覚めた。なんて事だ！ もう少して楽になれる所だった
のに！ 理由はなんだ！？

「その……大丈夫ですか神崎さん？」

「……エルフィ？」

「えっと……その……すみませんでした。さっきはあのような真似
を……」

おそらく死刑について言っているのだろう……って、明日香は何

処だ

「いや気にするな。ところで明日香は？」

「……………わたしは止めたんです。ですが許してください」

「は？」

「その……………神崎さんの具合が良くなるように料理を作ってくると…

…えっと……………神崎さんのお母さんと一緒に……………」

母さんの命が絶たれようとしている

「……………よし、健太を起こすのを手伝ってくれ。一旦アイツがどんな料理を作っているのかを確認しよう。そして場合によっては全員で逃げるぞ」

「了解です」

「よし……………健太！ 起きろ！ 地獄に堕ちている場合じゃないんだ

！」

「……………はっ！？ ……僕は一体……………」

よし、一命を取り留めてくれた。俺は今猛烈に感動している
いや泣いてないよ？ 朝飲んだコーヒーがね？

まあとりあえず事情説明

「よし。どうしたらあんな料理ができるか確認するわけだな？」

「そういう事だ」

「行きましよう」

そしてキッチン入り口。3人で明日香と母さんの様子を確認している

俺たちは現在3段重ねになって見ている訳なんだが……………1番上に

エルフィ、2番目に俺、3番目に健太となっているのだが……俺の肩辺りに柔らかい物が乗っかっている……のは気のせいだ。消え失せる邪念

まあそんなこんなで見ている訳だが……

『それで明日香ちゃん。何を作るの？』

『そうですね……やっぱり一番得意な卵焼きを……』

『そうね、それがいいわね！ 明日香ちゃんは真筆の奥さんになるんでしょ？ だから私の事はお義母さんかあって呼んで頂戴』

『はいお義母さん』

(待て！ なんで母さんがそんな事を言い出す！？ 駄目だろ！)

(静かにしてください！ 気付かれます！ というかお母さんに紹介しちゃったんですか！？)

(そんな訳ないだろ！)

(2人とも静かにしろ！)

もううちの親すら信用できねえ

『それじゃあ私は他の料理を作るから、明日香ちゃんは卵焼きをお願い。頑張つてね。私が後で試食してあげる』

母さんの死亡が確定した

『はいお義母さん。よし……まずは卵を……』

ここは普通だ

『次に調味料を……』

よしよし

『……そうだな。甘みを出すように歯磨き粉も入れておこう』

……………歯磨き粉？

（音を立てないでください！ 気付かれます！）

（放せ2人とも！ 俺はアイツの脳みそを引きずり出してやらないといけないんだ！ そしてちゃんとした卵焼きの作り方を脳内にたたき込んでやるんだ！）

（物騒な事を言うな真箏！）

（放せ！ 放せええええええつ！！）

2人に取り押さえられ、キッチンに突入することは出来なくなっ
てしまった。駄目だ。もう母さんが死んじまうよ……

『さて……後は……そうだ。栄養剤栄養剤……あつた』

（放してくれ！ アイツの脳内はおかしいんだ！ 卵焼きに栄養剤を入れるヤツはこの世を探してもアイツくらいしかいないんだ！）

（駄目です神崎さん！ ここで乗り込んだらわたしたちまで死んじやいます！）

（そうだ真箏！ ここは鶴がどんな材料を使って卵焼きを作っているのかを見極めなければいけないんだ！）

（放せ！ 放せええええええつ！！）

『後は……………』

（真箏、これ以上聞かないことを推奨する）

(お願いです。聞かないでください。私ですら耐えられません)
(放せ！ 俺の耳から手を放せ！)

『……………よし！ 出来ましたお義母さん！』

見た目は普通でも中身が異常な卵焼きが完成した。 ってマズい！ 早く母さんを止めないと！

母さんが死んでしまう！

でも今押さえつけられた状態なので動くことが出来ない。くそっ！ 放せ！ このままだと母さんがっ！ あの馬鹿でどうにも出来ない母さんがっ！

『あら…………あらまあ！ とっても美味しそうじゃない！ それじゃあ味見してあげ 』

(放せええええええええっ！)

(スマン真筆！ 許せ！)

(すいませんお義母さん！)

一瞬エルフィまでおかしくなった気がした

『(パクッ)……………』

母さああああああああんっ！！

『(モグモグ…………ゴクン)……………ああっ！』

『お義母さん！？ 大丈夫ですか！？』

母さんが床に手をついた。くそっ…………健太とエルフィを後で殺す

しか……！

『 美味しいじゃない！ 明日香ちゃんはきつと真箏の良いお嫁さんになれるわ！ 』

なんだとおおおおおおつ！？

え、何？ 母さん不死身な感じ！？ あの明日香の料理だぞ！？ 健太と光久と俺が死んだ料理だぞ！？ それを食って生きてるアソタが羨ましいわ！

『 まあ早く食べさせてあげなさい。丁度良いタイミングでそこに3人いるみたいだし 』

『 え？ 』

『 バレた！？ 』

『 お義母さん凄いです……！ 』

『 ちよつと待て！ 早く降りろ！ 俺が死ぬ！ 』

もうエルフィにツツコミを入れている余裕がない

「なんだ真箏……そ、そんなに私の料理が食べたかったのか……さあ遠慮することはない。たくさん食べてくれ……」
「……………！！（ブンブン！）」

必死に首を横に振る俺。言葉を発しないのには理由がある。喋つたら口に放り込まれるから……

「もう真箏！ 明日香ちゃんが折角作ってくれた料理を台無しにするの！？ ほら、皆さんも貰ったらどう？ 明日香ちゃん結構作つたみたいだし」

「いえ、僕はお腹が一杯なので遠慮しておきます」

「わたしもお腹が……」

「裏切り者っ！ 逃げる作戦はどうしたんだ!？」

「立ち去れっ!」

ばっ……! このタイミングで逃げるか!!

「逃げますよ神崎さん!」

「ああ!」

「待て真箏!」

「こら真箏!」

この後俺たちは外に避難し、明日香が全てぶちまけるまで逃げ
いた

母さんは一体何者だよコノヤロー……

そしてGWは毎日この4人で遊ぶことになって……散々な休日と
なり、疲れが残ったまま学校が始まった

12 都北大会前日

GWという休みが明けて2日目。明日から始まるwars都北大会に向けて……まだ放課後では無く授業中。数学という面倒くさい授業の話のスルーして、俺はノートに作戦等を書いていた

『つまりこの関数はだなー……』

「関数がなんだ。俺は今忙しいんだ

『こっとなってー……』

「こっとなって……」

良い作戦を思いついたのでノートに書く。我ながら良い作戦……

『崎、神崎！』

「……きて……」

「神崎さん。呼ばれてますよ」

「……」

どうやら今の俺には外界の音は聞こえないみたいだ
そして

「神崎真筆！」

「はっ、はいっ！」

先生に大きな声で呼ばれたので、つい椅子をガタツといった感じ

の音を立てながら起立する。何事!?

「さつきから随分と悩んでるみたいだが……なんだ? わからないのか?」

「いえ。全くもって問題ないです。むしろ良好です」

「そうか。それじゃあこの問題を解いてみる」

「……は?」

先生は黒板に書かれている問題を指さす。何々2次関数とな?

よし、ここは正直に言おう

「すみません先生。わかりま(ヒュッ)……チョーク?」

「次は頭に当てるぞ。そんな事をノートに書いている余裕があるのなら授業を真面目に受けてこの問題を解けるようになれ。で、何処がわからない」

「全ぶ(ガスッ)痛いじゃないですか!」

「自業自得だ!」

まさか本当にチョークを投げつけてくるとは……

「まあ神崎はそこで立ちながら授業を受ける。そしてそのノート……

…ほう、部活の事か……。まあいい、これは一旦預かる。放課後取りに来い」

「はい……」

「よし、神崎の代わりに同じ部活の佐々木。お前が答えろ」

今度は健太が指名される。ちなみに爆睡中

それに気付いた先生は健太の元へと近づき、何故だか知らんが広辞苑を持って……

ドスンッ！

健太の頭に落とした。

あれ？ 起き上がらない……いや、起き上がれないのか。広辞苑が重すぎて……

ちなみに広辞苑は18万ページくらいある。それで頭を叩かれるならまだしも……それを頭に落とされれば大人でも無事じゃないだろう

だがwars部の人間は何故だか特別なのだ

「痛いじゃないですかあああああー！」

……ほぼ無傷で済むほど

言ってみれば変態と変人が多い……いや、変態と変人しかない

失礼か

「自業自得だ。それで佐々木。神崎が答えられなかった問題を解いてみる。できるよな？」

「失敬な。勿論ですとも。僕はクラス委員長ですよ？」

入学後すぐ受けたテストで合計83点（3教科）を取った人間が何を言うか

「よし答えてみる」

「……………エルぽんが答えたいそうです」

「ふえっ！？ な、なんて事を言っんですか佐々木さん！」

「お前はその場じゃなく廊下に……いや、グラウンドで授業を受ける」

「どーしろと!?!」

！」

健太は投げ飛ばされていった。そしてその後の顛末

ボンツ

着地する本当に直前にマットが展開された。もしあとコンマ数秒遅れていたら死んでたな………確実に

だが、よくよく考えればアイツ2回死にかけてるんだよな……

「よし。じゃあ授業再開するぞ。それではエストラント。指名を受けたからお前だ。解いてみる」

「本当にわたしを指名するんですか!？」

「不服か？」

「いえ………ただ自信が………」

「間違つても良い。別にお前は女子だからそこまで酷い罰を与えるつもりはない」

この男子と女子の差

「はい………えと、x=4ですか………?」

「正解。流石だな」

「ふう………良かった………」

安堵の息を漏らすエルフィ。どれだけ自信が無かったのだろうか
まあ解けただけいいじゃないか

「流石だなエルフィ」

「ほえっ!?!? ベ、別にこのくらいどうって事ないですよ………」

『あーそうだ。エストラント』

「は、はひっ!？」

エルフィを呼んで向き直る先生。はて……？

「今問題を解く直前に開いたNPCは一旦没収だ。放課後取りに来い……というか、よく学校にこんな物を持ってきてるな……」

「えっ!？ き、気付いてたんですか!？」

「当然だ。お前たちの動きは大体把握してるからな」

この先生……侮れん……

エルフィの席の真後ろの俺（起立中）の俺でも気付かなかったというのに……というか何故俺たちの動きを把握しているのだろうか。もしかして目を付けられた？

もしかして……そういう趣味か？

「神崎。今失礼な事を考えたな？」

「滅相もない」

……先生まで読心術を……もしかしてこの世界で俺だけ読心術を使えないのかもしれない
どんな世界だ

『さて、今日はここまでにしておいて……俺からプレゼントを渡そ』

『う
ブーーーーーッ!』

ブーイングの嵐

無理もない。先生からプレゼントと言ったら宿題以外あり得ない
だろう

と思っただが

「なんだ？ 今日はどういう物を持ってきているんだが……そうか……いらぬのか……折角先生はヨーロッパまで行って買って来たというのに……」

『申し訳ございませんでした梅花先生』

ブーイングから一転

まさかあんな美味そうな食べ物を買ってくるとは……しかもクラスの生徒全員分あるそうだ。先生は太っぱ

「神崎と佐々木の分は無しだ」

泣きたくなった

全授業が終わって放課後。俺とエルフィは先程没収された物を返却して貰うために職員に向かっている途中。もちろん明日香は置いてきた……のだが

「またダンボールか……」

「あの、神崎さん。今回はあの作戦を実行しないでいただきたいんですが……」

「大丈夫。それは重々承知している。前回は悪かったな」

「へっ？ いや、別に謝らなくてくださいよ……わたしが悪者みたいじゃないですか」

「いや……まあエルフィ。あれをなんとか回避する良い方法を思い浮かばないか？」

「そうですねえ……ちょっと大変ですけど迂回しましょう」
「そうだな」

結局迂回して職員室に向かうことになった

タツタツタツ

『真箏……って何いつ!?!』

『なっ、鶴!?!』

『何故佐々木なんだ! 真箏はどうしたんだ! ええい、離れる汚らわしい!』

『お前が飛びついてきたんだろ!?!』

『くっ……ところで真箏は何処だ! まさかエルと……!!』

『安心しろ。それは無いと思う。職員室に向かったな』

『何!?! そうか! それではまた後ほど部室でな!』

ダッ!

『はぁ……真箏も大変だね……』

「失礼しまーす」

「失礼します」

『おっ、こっちだー!』

何事もなく職員室に辿り着いた俺たちは、先生の元へと向かう。
梅花先生の机は奥にあったので見あたりなく、先生に呼ばせること

になってしまった

「すみませんわざわざ呼ばせてしまって……探すくらいなら出来ましたのに」

「そうですよ先生」

「何を言うか。ま、これがさっきのブツだな。以後このような事が無いようにな」

「はい」

エルフィに「はNPCが返却され、俺にはノートが返却……されないだ」と……何故その手を放してくれないんだ……？

「あの……先生、そのノートを掴んでいる手を放してくれると嬉しいんですが……？」

「……ちよつと見せてみる。さっき見ようと思って忘れていた」

「へ？」

「いいから見せる(バツ)」

「あ、ちよつと」

先生にノートを奪われる。一体何だつてんだ

奪われたノートを開いて読み始めると、先生は笑いを抑えたり、しかめっ面になったりと、色々な表情を見せていた。何があつたのだろうか？ ちなみに数学のノートでもあるから、黒板に板書された事がほとんどで、warsの作戦は一部しか書いていない
そしてノートを見ながら口を開く

「神崎。お前はちゃんと勉強しているようだが……所々間違えている箇所があるから注意するんだな」

「え？ あ、はい」

「それと……この図。なんだ？」

俺がさっき考えていた作戦の書いてあるページを開かれる。何ってさっき自分で言ってたじゃないか

「それは」

「Warsの作戦とでも言いたいのか？」

「え？」

「……………甘い」

「「え？」」

「だからこの作戦だと甘いと言っている」

まさかのWarsに関してのご指導

「いいか神崎？ この作戦だとサポートエリアの方が手薄になる。

つまりエストラントが殺られる可能性が高くなるということだ。だからここは」

机に向かってペンを取り出すと、俺たちに見えるように新たな図を書いて説明を始めた。何？ 先生はWars経験者？

「これは誰だか知らんがこいつの配置をここにしてくれな、そして」

また新たな図を書き説明を始める

「これでよし。この作戦で行けばいいんじゃないか？」

「あ、ありがとうございます……」

「何、どうって事はない。頑張る部員の為だ。これくらいはしてやらないとな。……………よし、さっきのアレをやるっ」

先生は鞆を漁りだして、お土産を取り出す。まさか……！

「ほれ」

「あ……ありがとうございます」

貰えたー！ー！！ 何か嬉しいー！ー！！

さつきからクラスの連中が「美味しい美味しい」と嫌みを連発してきたからな……ま、これで健太に嫌みを……おっと冗談

「……あの、先生」

「ん？ なんだエストラント？」

「……先生は Wars 経験者なんですか？」

ここでエルファイが俺も気になっていたことを口にした。そうだ、俺も聞きたかったんだ

「……知りたい？」

先生の口調変化

「……言いたくないならいいんですが……」

「よし教えてやるっ」

その先生の言葉で職員室にいた教師が全員こちらを振り向く。え？ 何？ もしかして俺ら聞いちゃいけないこと聞こうとした？ だってもうそこでヒソヒソ話始まってるし……

やっぱり地雷踏んだ気がした

「まあ一応経験者だ。それなりに自信はあるつもりだ」

「……やっぱりそうですか」

「え？」

「先生、隠さないでください。なんで貴方ほどの人間がこんな所で教師をしているんですか？」

「ちよ、エルファイ……」

「ふむ。お前もしかして」

何？ 何で2人で分かり合ってるの？ 俺サツパリなんだけど？

「最初から引つかかってたんです。“梅花哲也”と言う名前に」

「……………」

「え、何？ そんな凄い人なの？」

「逆に知らない方が不思議なくらいです！」

「ひゃうっ！」

エルファイに怒られてついそんな声が出てしまった
何？ やっぱりそんな凄い人なの？

「……………そうか、エストラント。お前は知っていたか」

「当然です。さあ早く白状してください」

「いいだろう。俺はな……………」

「いいです！ 言わなくて良いです！ というか聞きたくないんですけど！？」 何か余計変な事になりそうなんですけど！？」

もういいよ！ 俺聞きたくねえよ！？ なんか聞いたら後悔しそ
うだもん！

「俺は……………」

駄目だ！ もう口が止まらねえ！

わ……………！！

「……TEMM起動」

ドンッ！

今撃った弾は……嘘だろ？

「なんだ？ この程度か？」

先生も武器を取り出したのか、健太と同じような武器で銃弾を止めている。この一瞬で……

まーとりあえず周りからとんでもない目で見られているのは確かだ

「この程度じゃあ……西宮にも勝てないな」

「……え？」

「おっと何でもない。忘れてくれ」

今部長の名前が出たよな？ 何？ 先生は部長の実力知ってるの？
駄目だ。気になる

「あの、先生。部長の実力って……」

武器をしまつて尋ねる
すると

「皆無だ。俺は何にも知らん。話は終わっただろう？ それじゃあ部活に行け」

「あの……」

「神崎さん。多分無駄かと……」

「エストラントの言うとおりで。さ、部活に行け」

「う……わかりました」

部長の実力を聞き出すのを諦めて部室へ向かうことにした。本当に気になるなあ……先生といい、吉は……キモイ先輩といい……気になることをそんな連発しないで欲しい所だ

ま、考えていても仕方がない。とにかく部室へ

ガラッ

「真筆。私をどれだけ待たせ……」

「よしエルフィ。行くぞ」

「はい」

「真筆、私を無視するな。そしてエル、勝ち誇った顔をするな」

「……さて、今日は模擬演習かなー」

「ですねー」

「そっちがその気なら……強行手段に出るしか無いみたいだな……」

職員室を出て少しすると、後ろからもの凄い殺気を感じていたが多分気のせいだろう。そう思いたい。思いこみたい
そんなこんなで俺たち3人は部室へと向かった

ガチャ

「おう、遅かったじゃねえか」

「何やってたんだ真筆、エルぼん、鶴」

「ちよっとな……」

部室へ到着。早速健太に職員室で何をしてたのか聞かれたので、
適当に答えておく

「どうだったよ神崎。俺とエストラントと職員全員による大作戦は」
「もうビックリの一言に尽きましたよ……」

クックククと笑いながら話しかけてくる男子生徒……我がwar
s部唯一の2年で部長の西宮雄太先輩だ。にしみゃゆった相変わらず嫌な先輩に見
える

「というかあの嘘は部長も参戦……ってエルフィも？」

「何？ エルフィも知ってたのこの作戦？」

「いえ、ノリで」

まさかだ

「何があつたのだ真箏殿？」

「いや……何故か職員室で嵌められてな」

「ほう……大変であつただろう」

「ああ」

今度は武士口調で隻眼、ポニーテール……あれ、今日は違ってみた
いだ。いつもはポニーテールが特徴の男子、あけちみつひさ明智光久に話しかけら
れる。明智光秀の子孫らしい

「……嵌められたって？」

「ああ……説明すると長い」

「……ならいい」

次は部室の角でちょこんと座っている女子、「この子の名前」近藤望さんに話しかけられる。長いストレートの髪の毛とタレ目、口数が少ないのが特徴の人だ。今更だが、身長はエルフィ以下だろう

「なんだー……話してくれないの……って、神崎くん。その手に持っている美味しそうな物は何？」

最後は目の前の椅子に座っている女子、「とうとうるか」藤堂琉華さんに話しかけられる。男子っぽい喋り方でショートヘア、俺の手にフィット……なんでもない。とにかく男子っぽい喋り方で……何か大胆であるのが特徴の女子だ

というかこれに気付くなんて……流石はwarsでスナイパーをやっているだけある。早く食べてしまおうかと、ここで

「なっ、真筆！ それさつき先生が配ってたヤツじゃん！ 何でお前が持つてるんだよ！ 何だ？ 盗んできたのか!？」

「人聞きの悪いことを言うな。貰ったんだ」

「くっ……僕によこせ!」

「渡して溜まるか！ これは俺が食うんだ!」

部室内を俺と健太が走り回る。狭いから中々走りづらいが……別に健太に捕まるほど俺は弱くはない

と、思ってたけどね

ガッ!

「何いつ!？」

足下にあった何かにつまずき、持っていたそれを手放してしまう。

「へ？ 何神崎くん。もうこれ舐めちゃったから食べるのはどうかと……」

「それでもいい！」

「へ？」

「「ええっ！？」「」

エルフィと明日香も驚いたのは気のせいだ
そもそも何に驚いている

「その神崎くん……ボクにはちょっと抵抗があるんだけど……それでも？」

「いいんだ！ 俺は藤堂さんにどんな抵抗があろうともその残りの半分を食べたいんだ！」

「……どうしても？」

「ああ！ 俺にはどうしてもその半分が必要なんだ！」
「……………え」

一瞬藤堂さんの顔が真っ赤になった気がした

（ま、ボクも大した抵抗はないけどさ……流石に男の子だよ？ そのくらいの抵抗がないって……）

「藤堂さん！ 早くその残りを俺に！」

「くっ……コイツ全てを捨てるつもりでいやがる……！ 駄目だ藤堂！ いくらコイツに抵抗が無くても絶対に食べさせてはいけな
い！」

（もうどうすればいいの……！）

駄目だ。藤堂さんがトリップ状態に……！ 早く食べないと……！

「藤堂さん……」

「は、はいつ!?!」

「早く俺の口の中へ!」

「コイツ! 正気か!?!」

「正気だ! マジだ! 本気だ! 俺はどうしてもあの残りが食べたいんだ……!」

「……えつと……その……神崎くんがどうしてもって言うなら……本当にこれでいいの?」

「ああ! それを! その食べかけをこの俺の口の中に!」

「……わ、わかったよ……それじゃあーん」

勝った……!!

「駄目ええええええええ!!」

「止めるんだ琉華あああああ!!」

「あーん……」

「くそつ! 押さえた手が間に合わねえ!」

「う……神崎くんは一体何が……」

パクッ

そのチョコレートを俺は食した。嗚呼……美味しい

「ありがとう藤堂さん。とても美味しかったよ……もう俺は死んでも構わない……」

「そんなに食べたかったの!?!」

また藤堂さんの顔が真っ赤に

そんな状態の藤堂さんとは裏腹に……

「神崎さん? 今貴方がしたことは重罪です。死んで詫びるか、わ

たしと夜遊びするか……好きな方をお選びください」

「真筭。お前は私の夫だ。今貴様は大変な罪を犯した。死んで詫びるか、私に夜襲されるか……好きな方を選び」

やっぱり俺の生きられる選択肢は存在しないみたいだ

「「やあ！」」

「どうぞ殺してください……」

「「……………」」

まさかの黙り込み……何？ 殺さないでくれるの？

「本番前最後の演習を始めましょう」

「そつだな。終わってから殺さないと演習ができないからな」

どうやら俺の命は演習の間は保つらしい

終わらせたくないなあ……

「……………神崎くんはボクをどう思って……………」

藤堂さんが真つ赤な顔で何かを呟いていたが、俺の命の事で頭が
いっぱいになっていて何を言っているのかは全くわからなかった

13 Wars 都北大会 1 日目

「ん……」

目が覚める。今日は早く起きてしまった……いや、早く起きなくちゃいけないかったって言うのも理由の一つだ。

何故なら今日は都北大会初日だから

学校に7時集合……つまり1時間早く登校しなければならない

んでもって外はまだ暗いのだ。暗いと言っても段々明るくなつては来ているが……おそらく5時頃と推測する。あくまで推測。時計はまだ見ていない

時計を見ようと身体を起こそうとする。だが、何故か起き上がらない

仕方ないので首だけで時計を見る。えーとなになに？ 5時30分か……そろそろ起きると……起き上がらない。どうするか……寝ぼけてでもいるのだろうか

仕方ないからちょっとだけ目を閉じて身体を楽にする。まあ次なら起き上がれる……何故だ。起き上がれないぞ

今度は力を思いっきり入れて……それでも何故か起き上がれない。何が起こったのだろうか。もしかして俗に言う“金縛り”と言う物なのだろうか……困る

「むっ……………」

しばしその状態で考え、時計を見ってみる5時31分。まだ大丈夫かもしれない

そして今度は反対を……………あれ？俺の横で誰か寝てたっけ？もしくはぬいぐるみとかと一緒に寝てたっけ？いや、俺は高校生男子だ。そんな事をするわけないだろう

ああそうか。俺はまだ寝ぼけているんだ。だから目の前に女子の寝顔が見え……………女子？

今そのキーワードに引っかけかり、思いつく全てのパターンを考えてみる……………脳内の記憶、知識、e t c . . . まだ寝ぼけているのに関わらず、フルスロットルで頭が回転していく

そして10秒後、俺は確信に至った

「おい明日香。起きるんだ」
「んにゅっ……………」

駄目だ。寝ぼけてやがる。つか普段ならあんな怖い顔してるのに、寝てるときだけこんな可愛い顔で寝てるんじゃないやねーコノヤロー
この寝顔を写真に撮って脅迫ネタに使いたい……………そうしよう

何とでも言え

俺は動かせる腕……………左腕を時計の横にある携帯に伸ばし、それを掴んで明日香の正面に運んでくる

すまんが明日香、その寝顔……………貰うからな……………

「ん〜……んにゃあ〜……」

まだ寝ぼけて気付いていないところを……

カシヤツ

撮影してしまった。もちろんフラッシュを焚いて

だがそれでも気付かないのか、寝返りをしてあっちを向く

それだけで済めば良かったのだ

今度は勢いを付けてこちらに寝返ってきた。ってうおおい！
危ねえ！ もう少しで俺を轢くところ……って、ハイ？

何故だろう。今明日香の顔が3cm先にある
既視感デジャヴ

嗚呼。この後俺は一体どうすればよろしいのでしょうか神様

『真箏……お前なら』

黙れ。俺の心を汚す誰かめ

『だから俺はお前の本しょ』

黙れ。そして朽ち果てろ

『……………いいよ。じゃあ』

今回は素直に聞いてくれた

よし、それでは目の前にいる明日香をどうにかしよう

「おい明日香。起き」

……………服の手触りを感じなかった

しかも最悪なことに触れている場所が場所かもしれない。若干柔らかみを帯びている……………

「ん……………？ なんだ真箏……………？ もう朝なのか……………？」

いつもと違い、さらに高い声で話しかけてくる明日香。ちょっと待て。何にも違和感を感じてないぞこいつ

慌てて触れていた手を放す俺。すると明日香は若干顔を赤らめ

「べっ、別に……………真箏が私でいいのなら……………許可する。さあ、す、好きなだけ触れているがいい」

駄目だ。コイツ完全に逝ってら

つか藤堂さんと同じような発言をするな

「ほ、ほらどうした。いいんだぞ……………？ 私は別に……………きつ、気にしていないんだからな……………！」

顔を赤らめて他所を見ながら言う明日香。あのな、嫌ならそういう発言をするな

「と…というか起きる。俺が起きられん」

「む……………わかった。真箏の頼みとあらば仕方な」

バサッ

掛けていたタオルケットが落ちると、そこには全裸で立っている明日香の姿が　　って、駄目だ！　そんな姿で俺の目の前に立つな！　うあああ！　消えろ邪念！

慌てて反対を見る。するとこんな事を言い出した

「なんだ真箒？　この程度で恥ずかしいとはお前もまだ子供だな。べっ、べつにわたしたちはふうふうとげんのなかなのだからこれくらいどうってことはないだろう……？」

若干呂律が回っていないのか、発言がおかしくなっている……って、そんな事考えてる場合じゃない！

「だっ、黙れ！　とにかく服を着る明日香！　そのままだと俺が起きられない！　それにこのタイミングで誰かが来たら……！」

「大丈夫だ真箒。別にこの時間なら誰も来はしない。来たとしてもお義母さんが……」

「ええい！　お前はその言い方を……！　とにかく服を　　！　真箒！。起きてるのー？　エルフィちゃんが来たからお通しするわよー」

「……………」

一瞬頭が飛びそうになった

まさかのお客様の訪問……相手はエルフィ。そして現在の最悪な状況。俺の死・亡・確・定・

「服を着る明日香あああああ！」

「何、気にするな。多分今のはお義母さんの冗談……」

トントン

『おはようございます神崎さん。今日試合だから一緒に行こうと入りますよー？（ガチャ）って、起きてなかったら起こしますか……ら……ね……？』

エルフィの顔は笑顔の状態で止まったままだ

「おはようエル。清々しい朝だな」

「……」
「どうしたエル？ 何故返事をくれないのだ？」

「……」
「エルフィ。スマン、これには色々と訳があつてだな」
「夫婦で寝ていたのだ」

明日香の問題発言作動

「……とうですか……」

「へ？」

「本当なんですか神崎さん！？ ま、まさか神崎さんも……そ、その……は、ハダカで寝ていたとかそういう訳じゃないですよね！？ そうですよね！？」

「ああその通りだ！ そもそも起きたら横にこいつがいて……！」

「何を言うか。私と寝たいと言い出したのはお前」

「死にさらしてください！」

「やめ、ちよ！ エルフィ……！」

大会の初日だつて言うのにこれでいいのだろうか……朝から大怪我だぞオイ

まずは明日香を病院に連れて行った方がいいのかなあ……

「全く……朝から酷い目に………」
「何を言っただ真筈。あれくらい……ふっ、普通のことだ」
「異常です！ まだ高校1年生ですよ！？ 神崎さんですよ！？
やりたくてもやっつてはいけないんです！」

前にもこんな事言われた気が

「エル。今真筈を侮辱」
「とにかくあーゆーことはしないでください！」
「俺は別にしたくてやっつてる訳じゃない。こいつが勝手に」
「しないでください！」
「ハイ……」
「別に私たちは夫婦当然の仲」
「……………（ギロツ）」
「まあ仕方ないか」

頼む。俺を助けてくれ

まあ朝起きてから色々あって登校中。現在時刻は6時30分頃。
学校まであと少しの距離だ
賑やかな登校風景に見えなくもないが、話している内容がアレなので、住宅の皆様からどのような目で見られるかは人によるだろう。
大声だし……

まずこんなこと話している時点でどうかと思うけどな

と思っっている内に学校……部室へ到着。1年は全員揃っ
て、部長だけが来ていない感じだ

こんな日に何をしているんだろうか……まさかのサボりって訳じ
ゃあない……よな？ ちゃんと昨日は来るって言っただけだし……

「真筆！。朝からそんな顔して……試合中大丈夫か？」

「さあな……」

「だったら拙者たちで補えばよからう」

「……別に私たちでも十分」

何故だろう。俺は近藤さんに信用とかされていないのだろうか。

一瞬傷つく言葉を言われた気がしてならない

「お、おはよう神崎くん。そ、その顔大丈夫？ 元気が無さそうだ
けど……」

「大丈夫藤堂さん……俺は問題ない……」

「そ、そう……？ だったらいいんだけど……」

藤堂さんの喋り方がいつもと違うように聞こえるのは気のせいだ
ろうか。もしかして藤堂さんも体調がすぐれないとか？

「そういう藤堂さんは……なんかいつもと違う気がするんだけど……
……？」

「ええっ！？ べっ、別にボクはいつも通りだよ！？ き、昨日の
事を気にしてるとかそういう訳じゃないからね！？」

テンパってるようにしか聞こえないんだが

その前に俺は昨日何かしたか？ まあ尋ねないでおこう

(明日香さん)

(ああ……私も気付いている)

(……もしかして藤堂さんも……)

(違う……敵が増えてしまったか……)

後ろ(入り口)ではエルフィと明日香が何か喋ってるし……一体
なんだってんだ
とか思っている

「おう。どけ女子共」

「わっ、部長」

「私に命令するな」

「年上が年下に命令して何が悪い」

「黙れアホ」

相変わらずのやり取り。明日香は部長に対抗意識丸出しじゃねえか
それで入り口にいた2人をどけて部室に入ってくる部長。その手
には見覚えのある箱……大きなダンボールを持っている

それを見た明日香が『それは私の……!』とか言ってるように見
えたのは多分目の錯覚か何かだろう。そう思い……願いたい

んでその箱の中身は何かを尋ねようじゃないか

「部長」

「この箱の中にはだな」

聞く前に答えようとしなくてくれ。だからもう一度

「部長」

「試合用のユニフォームが入っている。体操服で行くのもアレだからな」

……いつか殺したい人間No.1だ

「その前に神崎。俺がお前を殺してやる」

「急に何を言い出すんですか？ まるで俺が『部長を殺してやる』なんて考えてたみたいじゃないですか」

「なんだ？ 違うのか？」

やっぱり読心術。読心術を使えない俺が悲しくなってきた……

べ、別に泣いてるわけじゃないよ？ 朝飲んだはちみつレモンがね？

「さて、気になるユニフォームは……っと」

部長がダンボール箱にカッターを入れる。さて、どのようなユニフォームなのだろうか……

ちなみにwarsでのユニフォームは決まっているわけではない。私服でもなんでも良いことになっている。ここでユニフォームを買っておくだなんて……部長は結構やる気なのかもしれない

まあ肝心のユニフォームのだが……俺たち男子の想像を遙かに上回る物が登場した

「ほれ神崎。受け取れ」

「すいません部長。このユニフォームはどうしても受け取れません」

「それじゃあ……明智」

「拙者も断る」

「……佐々木。お前は絶対に受け取れ」

「……こういう物は男子が着る物では無いかと思うんですが」

と言った感じに……男子なら普通に拒絶するわアホ

「仕方ない……じゃあエストラント」

「恥ずかしくて着られません！」

「じゃあ鶴」

「黙れ」

女子でも拒絶。それだけ凄い

「全く……これじゃあ注文が無駄になるじゃないか」

「当たり前です。何でスクール水着（女子用）なんですか！」

「いや……神崎なら着ると思ってだな」

「誰が着るかこのクズ部ちょ　！」

チユインツ！

「あいつと同じ呼び方をするな。ま、それはさておき……ほれこつちが本命のユニフォームだ」

「……すいません。これも着ることは出来ません」

……この部長の趣味は一体何だ。俺たちにそんなに女物の服を着させたいか？

「うわぁ……いいじゃないですかその制服！　わたし気に入りました！　是非　」

「そうか。それじゃあまずはエストラント。お前からだ」

「ハイ！　神崎さんに着させて見せます！」

「セーラー服をか！？」

そう。部長が持っている服はセーラー服。女子が着るならいいんだが……男子が着るのは完全な変態だ！

「落ち着け神崎。お前はこれで、明智と佐々木はこれだ」

「待ってください。なんで俺だけ違うんですか」

「何を言う神崎。セーラー服と言ったら学ランだろう」

「いえ、そういう訳じゃなくてですね。何で俺だけ違う服なんですか？」

俺 学ラン 光久・健太 ブレザータイプの制服

本当にこの人は何がしたい。何だ？ ヲタクか？ なんてこんなマニアックな服を？

「まー冗談だ。ほれ、全員受け取って着替えてこい。5分後に出発するが……校門に集合。以上だ」

そう言い残した部長は、スクール水着と学ランの入ったダンボール箱を持って出ていった

あの姿を見た人はどう思うのだろうか……

「よし真箏。私と着替えるぞ」

「いえ、わたしと着替えましょう」

「お前たちは変な事を言い出すな」

「あの……ボクも……」

「藤堂さん!？」

……まさか藤堂さんまでおかしくなるとは思わなかった

・辰楼高校	—	—	—
・野坂滝高校	—	—	—
・泥湖高校	—	—	—
・東堂高校	—	—	—

最初の試合は西堂高校と言うところだ

健太曰く、健太の家の近くの高校らしい。つまり健太の友達がいる可能性があると言うことだ

ま、初戦から敗退してるわけにもいかないし……本気で行くと思いますかあ！

『 これで弦巻高校の出場選手の確認を終わりにします。続いて

西堂高校

Head

大将、飯島修平

くわしま

桑島衣鶴

いかりし

五十嵐風夏

いしのまき

石巻静香

あみ

阿美疾風

シエル

クレイン・S・ティターニア

くりはま

久里浜唯

これで西堂高校の出場選手の確認を終わりにします。戦闘を開始します。準備してください』

出場選手の確認が終わり、とうとう一回戦目の試合が始まるよう

だ……勝たないとな

そして最後にWL全体回線を開いてみんなの声を聞く

「……みんな大丈夫か？」

『大丈夫。真箏こそ大丈夫か？』

『拙者は普段通り故、問題は皆無だ』

『……他人ひとの心配をするより自分の心配をするべき』

『ぼ、ボクも普段通りだから大丈夫だよ……』

『わたしも問題ありません。全力でサポートさせていただきます』

「私は横にいるからな。別になんの問題もない」

……みんな準備は整ったんだな……

試合……開始だ……！

「大丈夫か真箏？ 息があがっているぞ？」

「べ、別に大したこたあねえよ……ただずっと走りっぱなしだったからな……」

「仕方ない。時間が勿体ないが休憩を」

『神崎さん、明日香さん！ 狙われています！ 左の方向84m地点です！』

「くっ……！ こんな時に……！」

「心配するな明日香！ 行くぞ！」

「あ、ああ！」

現在第一試合目の弦巻高校フィールド。敵を一人倒して大将の捜索中。敵を倒したのは6分前で、それ以来の敵の出現。そして一向に大将は姿を現さない

もしかしてサポート？ いや、そんな風には見えなかった。多分何処かを動いているのだろう

ほぼ平らな地形なのに見あたらないのは……高低差を利用されたか？

そして思ったことがある。このフィールド……改修しないのだろうか……試合中にもどうでも良いことを話したな

まずは目の敵だ！

明日香と2手に分かれて敵に近づく。敵はスナイパーなのか、ぜんぜん撃ってこない。こちらが動き回っているからだろう、狙いを定めるのが難しいのかもしれない。それに加え俺たちは2人だ。片方に集中していれば確実にもう片方に殺られると想定している可能性はある

だとしたら事態は一転する

そうやって想定しているのなら何か裏があるはずだ。近づけさせて片方を倒し、それに気を取られている内に自分は殺られてしまう。だが1人が何処かに隠れていてそこから狙撃し、残りの1人を倒す。そんな作戦だつてあり得るかもしれない。吉は……グズ先輩よりははまだマシな作戦だ

だってアレは強制的に囿にさせられてたつて話だし

とりあえずその可能性が無いことを祈って攻撃を仕掛けよう。その後の事はこれからだ！！

2人で敵に接近する。敵は明日香の方に気を取られているのか、こちらに目が行っていない様子だ。これなら……！

「沈めえっ！」

武器が変更されたのか、今度はマシンガンの音が聞こえ始める。その銃弾の数はものすごい数で、殆ど避けられないような銃弾が撃ち込まれてくる

「明日香！ お前は逃げろ！」

「なつ……馬鹿なことを言うな！ 戦力消耗をするつもりか!？」

「別にそういう訳じゃない！ お前だけでもあの大将は取れるはずだ！」

「だが……！」

『ふふ、神崎くん。そういう自己犠牲は関心しないか……なあっ！』

「へっ?」

『うわあああっ!!』

今PL個人回線が接続されたかと思うと、敵の叫び声が聞こえた。一体何が……!

「そうか……琉華か」

「ほ?」

『ご名答明日香。全く……か、神崎くん……そうやって自分を囮にして明日香を先に行かせるだなんて……格好いいことするねえ……』

……まあその言葉に聞き惚れたボクなんだけど……』

「ん? 藤堂さん? 何か言った?」

『ええっ!?!? ベっ、別にボクは何も言っていないよ!?!? 聞き間違えじゃない!?!? 多分疲れて……明日香! 後ろ!』

『明日香さん後ろです!』

「何っ!?!?」

「くっ……」

それを聞いた俺は真っ先に明日香の元へと駆け寄る。そして

ドンッ！

明日香を横から押し倒して、その銃弾を回避する。明日香に被害はなかったが、俺の右腕を貫通した

「ぐっつ……！」

「真筆！」

『『神崎さん（くん）……！』』

「別にこれくらいどうって事ねえ……それより明日香。あれ大将だ……」

「なんだと？」

今明日香に向けて銃弾を放った敵は敵大将のようだ。これはラッキーだ。これなら勝てる……！

「済まない明日香、頼む」

「任せる。琉華、もう少し近づけた方が狙いやすいか？」

『そうだね……できればもうちょっと近寄せて欲しい所かな』

「了解した。では行くぞ！」

左腕に負傷を負った俺を置いて明日香だが大将に向かう。別に明日香の敵ではないハズだ

そして敵の元まで駆け寄り、伊右衛門を取り出す。敵の武器は……
…槍のようだ

ガキインッ！

金属と金属のぶつかる音がする。そして小競り合いを始める2人。

どちらが勝つ……

と、ニジで

ビーーーーッ！！

「なっ！」

明日香が小競り合いをしている最中に、試合終了の合図が響き渡る。両方とも陣旗じんきの破壊、もしくはエルフィが撃破されたという可能性……いや、エルフィの声は今確認できたから大丈夫だろう。つまり……陣旗の破壊

気になる戦闘結果は

『 B t e a m l o s e

r e a s o n : f l a g b r o k e d 』

俺たちはAチーム。つまり……

「私たちの勝ちのようだな」

「けっ……」

今日明日香と小競り合いをしていた大将……飯島先輩だったか？

その人は不機嫌そうにその場を離れていった

そして俺たちは全員集合した形になる

「さて、今回陣旗を破壊したのは誰だ？」

と、明日香が尋ねる。何を聞いてるんだ明日香。破壊したのは健太か光久しか

「……私が撃破した」

いないわけじゃ無いみたいだ。というか何で近藤さんが？
確かサポートルーム51m地点で待機していたハズじゃ……

「いや実は……僕が負傷して近藤と交代して攻めてたわけ……それで敵が来なかったから良かったけどさ」

「……結果が良ければそれでいい」
「拙者は焦ったのだが……」

なんか色々あったみたいだな

「まあいい。次の作戦だが……今と同じように攻める。問題が発生したらすぐにWLを開いて連絡しろ。では次の試合……行くぞ」

明日香がそう言うと同時に次のフィールドが展開される。……どうやら“海岸”らしい

ところどころ砂の壁、海の家、更には駐車場なんて言った物もある。手が込んでいるのかなんて言うのか……あ、砂に埋もれている人が

っと、今はどうでもいい。この試合に勝てば一回戦目は突破だ。
ここで調子を着けておかないとな

Wars program setting start .
field coatingcomplate .
enemy programcomplate .
second battle data installcomplate
are you readyWars battle

start!!」

ビーーーーッ!!

2回戦目が開始された。さて、俺たちも攻めるとしますか……！
そんなこんなで足を前に出すも

「明日香……これは走りづらい」

「ああ……私も思ったところだ」

下は砂。砂に足を取られて思うように走れない。せめて下が安定
した床なら……

敵はどうなのだろうか

ちよつと耳を澄ませて……

『全く！　なんでこのフィールド改修しないんだ！』

『いつも面倒だって放置してるからですよ！』

『テメエが悪いんだろ！　なんでお前なんか部長なんだ！』

……さて、攻めるとしよう

ま、思うように走れない砂だしね。人間いつ何処で何が起ころるか
とかそういう事は普通の人間なら予測は出来ない。そう。予測でき
ないからこそ大事件は発生する

「なっ……足が……！」

「おい大丈夫か明日香……」

「どうした真筈？」

今日香は砂に足を取られて転んだのだ。前に
そして俺は明日香の後ろに立っている。そう、後ろに
そして俺たちの着ている服……ユニフォームを思い出していただ
きたい。俺たち男子はブレザータイプの制服。まあ学校とは変わら
ない一品だ

それに比べて女子は？ セーラー服と言う、ブレザータイプの制
服を扱っている弦巻高校では見かけない制服なのだ

んでもって明日香は……いや、最近の女子はそうなのだろう。ス
カートがやけに短い

そう、短すぎるのだ。いつ中身が見えてもおかしくなくらいに
短すぎたからこそ……

「本当にどうしたんだ真箏？ ほら行くぞ」

「あ、ああ……」

「どうした顔を赤らめて？」

「い、いや………水色なんだな」

転んだ際に中身が見えてしまった

別に見たくて見た訳じゃない！ 事故だ！ そう、これは事故な
んだ！ だから“見た”という訳じゃなくて“見えてしまった”と
いうのが正しいんだ！ そうこれは………って！ 俺は今日香に何
て言った！？ 今思いつき見えたことを肯定したじゃないか！
いや、見た事を肯定したじゃないか！ 逃げられない！ もう言い
逃れは！

「な、なんだ真箏？ べ、別に見たからと言ってそう慌てるな……
わ、わわ、私は許すぞ………」

……やっぱりコイツどこがおかしい

何故スカートの中身を見られて慌てたりしない

「そもそもお前はこの前私の下着姿を見た……いや、あの時はエルに妨害されてしまったが、今日は私ののは、はっ、は裸を見たじゃないか。だからそう慌てる事じゃ」

『神崎さん、明日香さん！ 敵後方から接近中！』

「沈めえっ！」

『ぐはあっ！』

済まない殺られた誰か。こうなった明日香はどうも強くなるらしい

『敵、一瞬で撃沈……何したんですか明日香さん……？』

「あっ、愛の力だ」

『あ、あああ、あ、愛っ！？』

「何を驚いているんだエル。私たちは夫婦なのだから」

『何を仰るんですか！ ま、まさか神崎さんと本当にあんなコトやそんなコトしちゃったんですか！？』

エルファイよ。女子がそのような発言をしないでくれ

「いや、残念ながら出来なかったのだ。そもそもお前が悪いんだぞ

……今朝普通に入ってくるから……」

「明日香。窓から不法侵入していたお前が言うな」

『ふう……あの時部屋に入って正解だったんですね……』

「間違いだ」

『わたしにとっては正解なんです！』

もうこの2人のやり取りが理解できない

『とにかくですわね……！ あっ！ 敵を確認……え』

「どづしたエルフィ？」

『……………おかしんです。何故か神崎さんのレーダーには……………神崎に重なって敵の位置が確認できるんですが……………』

「えっ？」

「……………まさか……………！」

『その通りだあっ……………！』

トトトトトトトト……………

「なあっ……………！」

「うわあっ……………！」

『神崎さん！ 明日香さん！』

まさかだ……………敵が真下から出てくるだなんて……………だが敵は大将。ここで攻撃を仕掛ければ……………いいのだが、両腕に攻撃を受けたのだ。これでは武器を握ることは疎か、敵に攻撃することすら出来ない。

更に最悪なことに明日香まで同じような被害を受けている。これでは……………！

「さつきはよくもなあ……………今度こそ串刺しにしてやるよ」

「くっ……………！」

「こんな所で……………！」

敵大将はTEMを起動して槍を取り出す。……………万事休すか……………

……………っ！

「ああそうそう……………その女。水色なんだな……………」

「……………は？」

「……スマン敵大将。今貴方は地雷を踏んだ」
「何を言う？ だって仕方の無いこ（ガスッ）とがあっ！」

『水色』と言う単語に反応して敵大将を押し倒し、馬乗りになる
明日香。うわ……恐ろしか……

「貴様！ 私のスカートの中身を見たというのだな！？ そうなんだろ！？ 屈辱だ！ 貴様みたいな人間に見せるなど最悪の羞恥だ！ 今ここで死んで詫びろ！ もしくは私の夫である真箏に謝れえっ！」

「ちよっ！（ガスッ）待てっ！（ドスッ）俺は！（ガンッ）ただ！（バシッ）見たくて！（グシャッ）」
「見たくて」だと！？ 貴様……！ ええい、謝っても許さん！
今すぐこの場で死ねえっ！」

「と、とりあえっ！（ゴスッ）ごめんなさいっ！（ドガアッ）」
……
今俺の目の前では想像も出来ない世界が広がっている……辺りの砂は血を含めて赤く染まり、明日香に馬乗りされて殴られている敵大将の顔は3倍に膨れあがり……更には奥に見え始めた敵ですら近づいても攻撃してもこない……

とりあえず今俺が言えること……明日香は……凶暴だ

『ねえ神崎くん』
「何、藤堂さん」

『あの敵大将が可哀想で仕方ないんだけどさ……今すぐ楽にしてあげた方が良くないかな？』

「……やめておいた方が良くと思う。多分アレはRWでも続くかもしれない」

『やっぱり？』

「ああ……だからこのまま試合が終わるのを待とう」
『……いや、これはトドメを刺すよ。なんか……納得いかな終わ
り方になりそうだし』
「……………わかった。よろしく」

この後藤堂さんが攻撃……明日香諸共頭もろともを貫いて葬った

駄目だ。何か納得いかない一回戦の突破になった……

ちなみにこの後、明日香は試合中であつたことを忘れてしまった
のか、敵大将を襲撃することは無かつた

……………とりあえず第一回戦突破。明日は第二回戦だ

#13 wars 都北大会1日目(後書き)

トーナメント表の作成時間：約30分

すげえ労働だったぜ……

変な形ですがご容赦をorz

#14 Wars 都北大大会2日目

1日目の試合で勝利を収め、明日の2回戦目に備えて現在学校で演習中。もちろん動きに慣れるよう、ユニフォームで。まああんな事件……いや、事故か

とりあえず1回戦目の事を振り返ってみる。……納得いかない勝ち方だったな……最後は明日香がマジ切れして……んで大将をメッタメタに……あの大将絶対トラウマなってるだろ

その後日談として、その大将（飯島先輩）は女子のスカートの中身を見ないことを決めたようだ

まず見ようとしている時点でどうかと思うけどな。健太みたいなヤツじゃあるまいし

だったら俺は何だ？ それ以上だろ……明日香の裸を見てしまったわけだから

ま、この話は一旦放置

現在は演習中……なのだが

「明日香。いくらこれが本番の試合じゃないからってな、俺の腕を拉致しないでくれ」

「何を言っただ真筈。最近ずっと私を突き放していたではないか」

「あのな……それは試合が近いから真面目に演習しろって……それに明日も試合な訳だ。ちゃんと演習しろ」

「断る」

「断るな」

と、いった感じなのだ

明日も試合なのだ。だからちゃんと備えておかないと駄目だろう。だがコイツ……いや、コイツらがそう真面目にやる訳がないのかもしれない。だって……

「明日香さん。今日という今日は独り占めさせません」

「なっ、エルファイ!？」

「エル! お前はサポートルームの人間ではないのか!？」

「毎回毎回明日香さんはずるいです! 卑怯です! 反則です! いくらわたしがサポートルームの人間だからって、毎回画面のお二人の姿を指をくわえて見ていろっていう訳ですか!？ 人には限度と言つ物が存在します! わたしにも存在します! つまりわたしも我慢の限界なんです! 明日香さんは離れてください!」

……まさかエルファイまでな……

その前に今は演習中だろ。なんでエルファイは抜け出してきているんだ

『ちよつと3人とも! 後ろから敵が……うわ! 挟まれてる!』

「邪魔をするな!」

「消え失せてください!」

ドンッ! ドンッ!

遠くから見ていたのか、藤堂さんが連絡をくれる。どうやら俺たちは挟み撃ちにされたらしかった

それで……明日香はいつもと同じですぐに敵を葬つたのだが……まさかエルファイまでこんな強いとは思わなかった。というかエルフ

イが武器使うの初めて見た感じがする……

……この2人は何が原因でこんな強くなるのだろうか

「とにかくですな明日香さん！ 今回は離れてください！ 今日

……その……わっ、わわわたしが一緒に寝ます！」

「にやにを！？」

「ふざけるなエル！ お前が私の夫である真箏と一緒に寝て良いわけないだろ！ 私が許さん！」

「何を言ってますか！ わたしだって明日香さんが神崎さんと寝るのを許すわけ無いじゃないですか！」

「待て2人！ 俺の権限はないのか！？ なんでお前たちで取り決めることなんだ！？」

「「わたし（私）たちが決めた事です（だ）！」」

どうやら俺には何の権限を持たされていないらしい。まあ犬だし？ いや人間だから！

もうこの2人を止めるにはどうしたらいいのだろうか……そんな事を思ったとき

『ねえ神崎くん』

何故かWL（個人設定ver）で接続される。相手は藤堂さんで、接続されているのは俺と目の前の2人に
何があったのだろうか

「まさか藤堂さんも神崎さんを……！！」

「そうなのか琉華！？ 答える！」

『えっと……あのね……』

「……俺死ぬの？」
「「勿論」^{です}」

ダッ！

ま、こうなるわな。人間誰でも怖じ気づけば逃げ出すさ。よく逃げられないってパターンがあるけど、俺には一切そんな事はない
その殺気は身を滅ぼすだけじゃ済まなさそうな程だから

逃げ出した俺に続き、2人が追いかけてくる。やべえ……怖えよ
……！

「藤堂さん助けて！」

『……神崎くんがボクと……それじゃあ今日は神崎くんの家に泊まりに……』

藤堂さん、in the trip

早く呼び戻さないと俺が死ぬ！

「藤堂さん！」

『えっ！？ はっ、ハイッ！？』

「俺を助けて！」

『え？ そ、その……何から？』

状況を考えれば十分わかることなのに……

「そこから明日香とエルフィの脳天を貫け！」

『え……ええええええっ！？』

何を驚いている。俺の現状を考えればそれくらいしないと収まら

ない

ああっ！ こんな事言ってる間にも距離が詰められて……！ 本
当に死ぬのか俺！？ ここまでなのか！？

……ここで神様が残酷なことを確信した

「このタイミングでかあああああっ！？」

目の前に敵さん登場。こちらに気付いたのか、こちらを見
つ
て、うおおい！ お前まで逃げ出すな！ 戦闘中だぞ！？

『そ、それで……2人の脳天を打てばいいのね……？』

「ああ！ 頼む！」

『……あ、ゴメン。その位置だと届かない……』

「んだと！？」

まさかの事態発生。しかももう一人敵が 逃げ出すな。しかも
大将だし

仕方がない。ここは俺がこの2人を止めるしかないだろう。だか
ら俺はその場で止まり後ろを振り向 終わった
目の前に2人がいた

「さあ……今日はわたしが……」

「私が……」

この後俺は意識を失いそうなくらいの負傷を負った。VW内だか
ら命に別状はないが……まさかRWでも痛みが残るなんて思わ
なかった

翌日……の朝。ヤバい。昨日の痛みが残っていて起き上がるのが
キツイ……

ま、焦っても仕方ないし時計で時間を確認……昨日と同じか。だ
つたらまだ余裕……昨日と同じ？

……あり得ないよな。だって今日は身体が痛くて起き上がれない
訳だし……もしそんなことになってたらなあ……

恐る恐る右をしてみる

「ふう……」

大丈夫だ。誰もいない……というかいなくてくれ
とりあえず後は起きるだけなんだが……身体が痛くて起き上がれ
ない

しかも今になって感じたのだが、やけに身体が重く感じる。はて、
何故なんだろうか？ 体重が増えたとかそういう訳ではないだろう
ちなみに俺の体重は63kgだ

さて……この起き上がらない身体、どうやって起こしたものが
昨日と同じように頭をフル回転させて、良い方法を考え始める。
でもこの対処法はどう考えても見つからないので、身体を一旦楽に
してから起き上がるという方法を施行することにした

さあ〜身体のを抜いて〜……大きく深呼吸して……よし。1、
2の3！

ガバツ！

よし、起き上がることに成功だ。その際身体に痛みを感じたが、これくらいで動じていては試合に集中はする事は疎か、動く事すらできないんじゃないかって思う。大袈裟すぎたか？

まあ今日は何事も無い朝　はて、俺の足下に何かを入れた覚えはないが？　やけに丸い何かが転がっているような……これが身体の重さの原因だろうか？

とりあえずタオルケットを剥がし……剥がせない。おそらくこれに包まれてしまったか何かだろう
……じゃあベッドから落とそう

コロコロ……ドスンッ！

「痛あつー！」

……女子の声。一体今日は誰だっただ……まあ明日香しか
……いや、昨日の事があったのだ。エルフィという考えだっと思いつく

「全く……朝から強引な事するなあ……」
「へ？」

一応聞き覚えのある声がする。Wars部の人間なのは間違いない。間違いないのだ。だつて……

「お、おはよう神崎くん……」

「あ……おはよう藤堂さん……」

タオルケットから藤堂さんの頭がヒョッコリと出てきた。……なんか身体がタオルケットに包まれていて且つ、目を逸らして頭だけを出しているところが、何となくだけど可愛く見えてしまう

でもまあこんな悠長な事を言ってる場合ではない。何故ここにいる

「で、なんでここにいる」

「え……？ だって神崎くんが昨日ボクと一緒に……ね、寝たいって言うから……」

記憶に「いま

『え……そ、その……神崎くん……？ それってボクと……』

『ああ』

『……』

ああ、誤解してしまったわけな。というか何故あの会話で『一緒に寝る』と言う事に繋がるのが全くわからん

「なるほど……とりあえずどうやって入った？」

「え？ うん……12時頃に来て、神崎くんのお母さんに入れて貰った」

「成る程……後で母さんをシバクとして、とりあえずタオルケットを返そうか」

「え、ちよ」

俺は藤堂さんを巻き付けているタオルケットに手を掛ける。すると

「だ、駄目だよ神崎くん……その……心の準備が……」

「は？ とりあえず返させて
「うっ……！」

バツ！ ドスッ！

「うおっ！」

タオルケットを剥がすのと同時に、藤堂さんが俺にタツクルしてくる。一瞬の事過ぎて何があったのかわからない。ましてやタオルケットに視界を防がれて藤堂さんがタツクルしてくることにすら見えなかった

「だ、だから駄目って言ったのに……本当強引に……」
「……へ？」

今視界に映っているのは、俺の身体の上にいる藤堂さん。だが服装が服装だろう……何も着てない

「ちよまああああああ！」

はて……昨日もこんな事があつた気がするぞ
状況がかなり違ってくるけど

どんな感じになっっているか詳細を……俺の上にいるのは藤堂さん。その藤堂さんは何も着ていない。だがセーフとでも言うのだろうか、藤堂さんの胸が俺の胸に押しつけられていて、アウトゾーンが見えない

こんな感じ……いや、十分アウトだろう。何がセーフだよ

「あのさ藤堂さん……あっち見てるから服を……ってちょ！ 右手
……！」

「ふふっ……前にもこんな事あったよね？ VW内ですか？ まあ上
下が逆なんだけど……」
「な、何を言ってる……あつ！」

藤堂さんに捕まれた右手が、俺と藤堂さんの間に運び込まれる……
何も感じないぞ……邪念を取り除け神崎真琴！

「……その……明日香とエルには悪いけど……ボクもボクだから……」

「その……藤堂さん？ 君は何が……」

言葉を失った。藤堂さんの顔が俺に近づいてくるのだ。この状況で

「ちょっと……藤堂さん……？」

そう俺が言うと、藤堂さんは一旦そこで頭を止めて

「神崎く……真琴くん。今度からボクの事は琉華って呼んでくれな
いかな？ あの2人だけ名前で呼ばれているのがちょっとアレなんだ」
「へ？ まあそれくらい……とりあえずどいて……」
『お邪魔します！』

言い終えた藤堂さんは再び俺に向かって顔を近づけてくる。その
距離約3cm……もしかして藤堂さんはキスをしようと……？

ドタドタドタ！

「「「」」」

……残り1cm

ガラッ！ ダンッ！

「……………」

ドアの思い切り開く音と、足を踏み入れる音が聞こえる。残り0.3cmの所で

「はぁ……………はぁ……………ふう。さて、説明してください」

「え、エルフィ……………」

「また……………エルに妨害かぁ……………」

「藤堂さん……………何か言いましたか……………？ とにかく説明してください……………今お邪魔したら見知らぬ靴があるじゃないですか……………まさかと思って駆け上がって見たら……………どういうことですか？」

エルフィの顔がマジだ

怒った顔で……………泣きそうな目で……………そして泣きそうな震える声で
そう尋ねてくる

「……………見ての通りなんだけど？」

そう藤堂さんが答える

「そうですか……………それで……………したんですか？」

「いいや……………丁度エルが入ってきたからね……………」

女子だけで話が進む。多分「した」というのはキスの事かもしれ
ない……………多分

「……………というか何故？ もしかして……………」

「藤堂さんの考えている事が良くわかりました……とりあえず服を着てください。行きましよう」

「ハイハイ……でもエル。そうやって敵に背中を向けても良いの？」
「……え？」

再び藤堂さんの顔が近づいてきた

「」「」

カシャン

エルフィは手に持っていた何かを床に落とす
そして藤堂さんの顔が離れる

「大丈夫だよエル。ボクがそんな卑怯な真似する訳ないじゃん！
今のは角度を使ったトリックだよ！もしかして本気にした！？」
「………はい？」

そう。今のは唇同士は触れていない………というか何処も触れていない。藤堂さんの言うとおり、角度を使ったトリックだかなんだかなのだ

その大接近のお陰で心臓がバツクンバツクン言ってるけどな

「よし。じゃあ服を着るから………真琴くんはそっち向いてて」
「………」
「あ、ああ………」

エルフィは黙ったまま。俺は返事をする。なんだか気まずい空気だなこれ……

なんだか……今日の朝は別の意味で疲れた

・高阪高校

・本多町高校

・遠藤高校

・庵海高校

・西堂高校

・弦巻高校

・香江高校

・哉町高校

・北上高校

・多実高校

・網野川高校

・南高校

優勝

・辰楼高校	—	—	—
・野坂滝高校	—	—	—
・泥湖高校	—	—	—
・東堂高校	—	—	—

最悪だ。今回の相手は哉町か……あの吉は……キモイ先輩のいる……ま、勝てるだろ

そんなこんなで会場にいる俺たち。朝からあんな事があつたので、女子一同（近藤さん除く）+俺は黙ったままなのだ。つまり作戦会議すらしていない

そんな事を思っていると、他の男子に話しかけられる

「なあ真箏。女子なんかあつたのか？」

「知らねえよ。俺が聞きたいくらいだ……」

「それはどういふことなのだ？」

「俺には全くもってわからんという事だ……」

「おい神崎。あの女子たちどうかしないと……今回の試合多分負けるぞ」

「重々承知です。でもどうすればいいのか……」

何故だろう。この3人……「真箏が犯人だろ？」的な感じな目で見てやがる……

早く正さないと……！

「とりあえずだな」

「やあ弦巻高校の諸君」

「……あの状態をどうにかしないと駄目な訳だ。神崎、これはお前に任せる」

「やあ西宮君」

「……俺に任せるって……多分無理ですよ……」

「やあ神崎君」

「……これは命令だ」

「何故無視するんだい？」

「……できるだけやってみます」

「この僕を無視するな！」

「黙れ吉は……クズ」

「そうです。黙ってください吉は……クズ」

「絶対僕の名前がクズで定着しているね!？」

哉町高校の wars 部部长にして大将の吉は……クズが話しかけてき ていることに気がつかなかった

「上の文章は間違っている！ この2人はこの僕を無視したんだ！」

何か独り言を言っているがスル！。寂しくなっちゃったのかなあ？
だって独りで行動してるんでちゅものね！。まあまあ可哀想に……
なでなでしてあげまちゅねー

「神崎君……そうやって僕を撫でるな……」

「あ、すいません。そうですね、撫でちゃ駄目ですよね……」

「そうさっ！ それは僕に対する侮辱」

「手が汚くなってしまうからね……」

ああ汚い汚い。早く手を洗ってこないと……

「すいません部長。ちょっと手を洗ってきます。汚らしい物を触

ってしまったので」

「ああ行ってこい。早めに戻ってこい。すぐ試合が始まりそうだからな」

「はい」

「待て真箏……ハンカチは持ったか？」

健太にハンカチを渡される。健太……ありがとう

「真箏殿……“あるこーる”は持たれたか？ 無ければ持っていくと良い」

「光久……」

今度は光久に“あるこーる”こと“アルコール除菌スプレー”を渡される。そうか……消毒の為に……ありがとう2人共！

……俺が手洗いに向かう際に、吉は……クズが泣きながら戻っていったのは気のせいだろうか

```
『 Wars program setting start .
  field coating . . . complete .
  enemy program . . . complete .
  final battle data install . . . complete
are you ready . . . . Wars battle
start! !』
```

いつものようにあの音声がVW内に響き渡る

現在まさかの延長戦。リベンジと言うことなのか、やけに粘って

いる気がする……いや、2回戦目は俺たちの完全な負けだったかも
しれない

まさかエルファイが琉華に敵の補足情報を送らないとは……予想外
すぎる出来事だった

とにかくそれだけ状況が悪化しているのだ。これは俺たちがどう
にかしないと……！

「なあ真箏」

「ん？」

明日香に話しかけられた。なんだろうか

「お前……朝琉華と何をしていた？」

「いや……俺は何もしていない。一方的に……な」

「そうか……だからエルと琉華は……」

「……悪い」

「気にするな。お前が気にしてどうする。これはエルと琉華と私……

……いや、女子とお前の問題だ」

「ああ……って、何故俺の名前が含まれる？」

「それくらい自分で考えろ！」

明日香に銃で殴られた。痛ええ……

まあそんな事はどうでもいい。とにかく勝たないといけないのだ。
現在延長戦〃負ければ敗退ということになる。そしたら俺が立てた
目標はどうなる？ この大会は優勝するんじゃないか？

それにあのクズに負けてられるか……！ あのクズは俺が潰す……

……！

『神崎さん、明日香さん！ 69m前方に敵影！ 警戒を！』

「了解。明日香、前回のような手を使ってくる可能性がある。気を付けていくぞ」

「わかっている。今度は2人で攻めるぞ」

「ああ」

2人で前へ……敵に接近する。まだ敵は攻撃してこない。まだ捕
捉していないのか、それとも待ち伏せか……

……良いことを思いついた。仕方ないがこの作戦を使うとするか
……不本意だが

「なあ明日香」

「なんだ真筆？」

「……後で話があるんだ」

「なっ、何！？ も、ももしかして将来に向けての話か!？」

「……まあとにかくだ。この試合に勝ったら話してやる」

「本当か!？」

「約束する。だから今は俺の腕を拉致って良い」

「なっ……！ まっ、真筆が良いのなら……」

よし、作戦成功だ。しかも敵も段々近づいてきて……

『あの……神崎さん?』

「待てエルフィ。これは作戦なんだ」

『作戦……ですか?』

「ああ。とりあえず敵に狙われたらすぐに教えてくれ」

『? まあ了解ですが……後で話があります』

「……ああ」

明日香に聞き取られないくらい小さな声で会話を終える。殺さ

れるんかなあ……

ま、とりあえずこの作戦が上手くいけば……と思った瞬間

『明日香さん！ 狙われてます！』

「何！？ 消え失せる！」

『うあああつー！』

済まない。思惑通りだ

『神崎さん……もしかして作戦つてコレですか？』

「まあな……とりあえず殺さないでくれ」

『はあ……了解です』

いじけたような声で了解してくれるエルフィ。聞いてくれて何よりだ

まあ、琉華にちゃんと「狙われてる」とか、「敵が来てます」とかを言ってくればいいのだが……俺たちは同じWarsのチームなんだから……

「よし真箒。攻める」

『……藤堂さんがやられました。相手は大将で』

「……攻めるぞ真箒」

「戻るぞ明日香。陣旗が……！」

「……そうか……！」

一応ここから陣旗までは70mの地点だ。今から全力で走ればなんとか間に合うか……？ というか間に合ってくれ！

つか急すぎだろ。なんで琉華はやられたんだ？ いつもならあのビルの上で……

まさかクズに気付かれてたのか？ くっそ！

「間に合え……！」

全力で陣旗の元へと走る。明日香は若干後ろで走っている

『神崎さん！ その角を右です！』

「ああ！」

今指令されたように右を曲がると、陣旗に向けて銃を向けているクズの姿があった

まだ気付いてない……！

だが焦りすぎて周りに気付かなかった

ドンッ！

「うあっ！」

前と同じように両足を打ち抜かれる。一瞬クズはこちらを見たが、また陣旗へと向き直る

このままだと陣旗が……！

「真箏！ 大丈夫か！」

「明日香……！ 上から狙われてる！ 気をつけ……いや、そこからアイツを撃て！ お前ならいける！」

「くっ……！ わかった！」

明日香は銃を取り出してクズに銃を向ける。そして

ドンッ！ ドンッ！

明日香とクズが同時に銃弾を放つ。間に合わなかったか……！
そして

ビーーーーッ！！

試合終了の合図がVW内に響き渡った。その音と同時にこちらへ近づいてくる……クズ。と明日香
そして嫌みな顔を嫌みな声で

「あれ神崎くん？ 君は僕たちに勝つ自信があつたんじゃないかなあ？ ははっ、残念だったね？」

「くっ……！」

「言わせておけば……真箏を侮辱した罪、ここで償え」

クズに銃を向ける明日香。ってマズい！

「おつと怖い怖い。打てる物なら撃ってみるがいい」

「いいだろう。その口2度と」

「やめる明日香」

「真箏？」

俺は今にも引き金を引きそうになっていた明日香を止める。理由は簡単。試合終了後に敵に攻撃をすれば、それは反則行為と見なされ、一応罪にも問われる物なのだ

「……済まない真箏。私もカッとなっていた」

「ははっ。まっ、君たちはここで終わりなんだ。お疲れだったね」

キイイイン

『それはどうかな吉原。お前ら上を見てみる』

「「「へ?」「」」

部長の声が聞こえる。「それはどうかな?」ってどついつの意味だ。俺たちは負けたハズじゃ

「なっ、なんだって!?!」

「……こんな事があり得るのか?」

「健太……光久……!」

空中に戦闘結果が投影されている。更には当時の映像が。その結果はこうだ

『A team lose

reason: flag broked』

俺たちはBチーム。つまり俺たちの勝ち。理由は陣旗の撃破。そして映像では、光久が陣旗を破壊するシーンと、クズが陣旗を攻撃するシーン、明日香がクズに攻撃するシーンが再生されている

その映像からわかることはただ1つ。コンマ数秒の差で光久が先に陣旗を破壊したのだ

んでもってその映像の端では、健太が敵を食い止めているのが見えた

「そんな……嘘だろ……」

クズは膝を地面に落として悔しがる

2回戦目……勝利だ！

15 第3回戦に向けて

2日目の試合……第2試合が終わって翌日

今日は試合が無く、第3試合は来週の初めなのだ。理由は知らないけど

だから俺たちは現在学校。放課後の部室で

「……………」

「エストラント、藤堂。何があった。喋りたくないなら別にいいが、このままだと支障が出る。早急に解決しろ」

部長が昨日あった事について、2人に説教をしていた。というかその内容は話してはいけない物のよう……俺の色々な物が失われる気がするからだ

だって……なあ。あんな場面を見られ………勿論俺が望んだ訳じゃないぞ？

「以上。早めに解決して月曜の第3試合に備えておけ」

そう言った部長はいつものようにソファへ横になる。相変わらず適当なのかいい人なのか……イマイチ読めない人だ

まあそんな事はどうでもいい。まずはこの2人、エルフィと琉華をどうにかしないとなあ……俺も混ざって話した方がいいのかねえ……？

ま、話しかけてみればわかるか

「なあ」

ガタツ

「神崎さん。ちょっと来てください。藤堂さんも」

「え？ ああ」

「……………」

俺が話しかけようとした途端にエルフィは席を立ち上がり、俺と琉華を呼びだす。そして部屋を出て行き、人影の少ない場所へとやってくる

……………何を話すのだろうか

エルフィは1人で少し奥に行き、立ち止まってこちらを振り向く。それに反応して俺たちも足を止める

「……………藤堂さん。あなたは……………」

「真琴くんはちょっと耳を塞いでてくれる？」

「……………え」

「ああ、うん」

俺は琉華に言われたとおり俺は耳を塞ぐ。塞ぐ直前にエルフィが驚いたような顔をしていたのは……………何故だろうか

耳を塞いでいて何も聞こえないが、目の前にいる2人は何かを話している。両方ともマジ顔で……………これ以上見たくないなので目も閉じる。完全に外界とシャットアウトした

そして

「真琴くん。もうOKだよ」

「え？ ああ……………」

肩を揺すられて目を開いて耳を解放する。話が済んだのだろう

「それで？ 大丈夫なの？」

「いいえ。わたしは納得がいてません」

「……………」

「エル……………」

何故？

「…………… 2人とも…………… 信じられないです。あんな事をして…………… それでも…………… それでも……………」

「ふむっ」

琉華に耳を塞がれる。それと同時にエルフィが喋っている内容が聞き取れなくなる。俺も聞こうとしてたのに！？…………… 聞かれてはいけない内容なのだろうか……………
それで耳を解放される

279

「…………… 正直やりすぎたと思ってる。だからゴメン……………」

「…………… まあ明日香さんに関してはまだ…………… それに比べ藤堂さん

は……………」

「ほむっ」

再び耳を塞がれた。何故！？

そして再び解放。俺に聞かせたくないなら最初から呼ぶなって話だ

「だから…………… ゴメン……………」

「…………… いいでしょう。ですがわたしはまだ許し切れていません。だからわたしも……………」

「…………… え」

「冗談です。…………… 神崎さん」

「ほい？」

エルフィに呼ばれる。今度は耳を塞がれなかった

「……その、もし大会で優勝できたらお話があります。聞いてくれますか……？」

「え？ それだけか？ だったらいいけど……」

「そっか……じゃあボクと明日香も負けてられないって事だね……」

「わたしだってお2人に負けるつもりはありません。これからは正々堂々です」

「そっだね」

「おい待て。俺にわからない話をするな」

この発言の後、俺は2人に冷たい目で見られてしまった
だってわからない物はわからないから……

『……私も負けていられないと言うことか……ま、エルや琉華に負けるつもりはないがな……』

話が済んだところで現在VW内。もちろん模擬演習中

前回の反省を踏まえ、昨日の哉町高校のデータと戦闘中。流石は部長。データ化するのが非常に早い

昨日の試合はエルフィと琉華の関係もあってか、随分とギリギリ

な感じで勝ってしまった。だから今回……そして月曜の試合では、この前のような事にならないように願いたい。そして勝ちたい……

それで今は2回戦目。1回戦目は俺たちが陣旗を撃破したので、今は有利な流れになっている。だが油断はしてはいけないだろう。とりあえずクスを探し出して撃破……っと

「なあ真箏」

「ん？」

隣で一緒に走っている明日香に話しかけられる

「さっきのことだが……何を話していたんだ？」

「いや、俺は耳を塞いだり塞がれたりで何もわかんなかった」

「そうか……真箏」

「ん？」

今度は何だ？

と、思っていると明日香はその場に立ち止まった

「……謝らせてくれないか」

「は？」

「だから……謝らせてくれと言っている」

「……何に？」

「その……一昨日の事に関してだ」

「ああ……気にしてないって言ったら嘘になるけど……謝ったから許す。なんだ急に？ 珍しいな」

「……実はさっきの話を見ていたんだ……だからお前が聞いていなかったという理由もわかっている。まあ教えるつもりは無いがな」

教えてくれないのか

「とりあえず……この通りだ」

「……ああ。まあとりあえず先に」

『敵を捕捉しました！ 67m前方です！』

「了解」

敵か……吉は……クズが来てくれれば嬉しいが……世の中そう上手くできてないか

あれは確か前織君……のデータだろう。確か近接攻撃が得意だったはずだ

「両側から銃で攻めるぞ」

「わかつてる。準備は出来たか真箏？」

「できてたらこんな事言わねえよ……行くぞ！」

俺の掛け声で2手に分かれる。いつも使っている作戦だが、今までで8割型成功しているのだ。いつまでこの作戦が通じるかどうか問題もあるが……この作戦が一番確実だ
両側から銃を撃ち続ける。敵は走り回って回避しているが、そろそろ持たない頃だろう

『明日香さんの後方29mです！』

「何！？」

「明日香っ！」

まさか後ろから来るか……！ これでじゃあ明日香が……！

『更に神崎さんの後方46mです！』

「嘘だろ!？」
『嘘じゃないです!』

困った。これじゃあ2人もやられるじゃないか……! 真ん中の敵を早く倒して残りの敵に集中するか……!?

「くっそ……! 早く倒さないと……!」
『だったらこうすればいいんだよね?』
『「え?」「』

ドンッ! ドンッ! ドンッ!

俺の後ろに回り込んでいた敵、明日香の後ろに回り込んでいた敵、そして今俺たちが攻撃していた敵の胸が撃ち抜かれる。まさか……

『諦めるのは早いよ真箏くん』

「琉華……!」

「……聞いたかエル」

『というかさつきから知ってます』

琉華が遠くから狙撃したらしい。助かった

この2人が何を話しているのかは知らないが……とりあえず溜め息をついていた

「助かったよ琉華。そっちに敵はいないのか?」

『うん全く。それで……ま、真箏たちが心配になってスコープを確認したらそんな状況で……それで……あ、別に助けたって意味じゃないよ? ただ自分の狙撃の練習をしようかね?』

「……デレたな」

『……デレましたね』

『なっ、何を言うのさ2人とも！　ボクがデレるだなんて……！』

3人は何を話しているのだろうか……駄目だぞ。「でれる」と言う単語は「でられる」の略しちゃったものだろ？　そうやって略しちゃいけないって爺ちゃんが言ってたぞ！

この後俺は明日香に冷たい目で見られたんだけどな

「まあいい。とりあえず敵を散策するぞ明日香」

「わかつてる。それではまた連絡を頼むぞ」

『了解です』

『こっちも頑張るからね』

2人の回線が切られる

『……藤堂さん。今完璧デレましたね』

『な、何を言うの！？　2人だつてよくデレてるよ！？』

『……あなたは俗に言う“ツンデレ”か何かですか？　男を落とす最強の部族じゃないですか』

『何それ！？　部族とかそういうの！？　そ、それにボクは……本当に狙撃の練習を……』

『誤魔化さないでください。正直助けるのが目的でしたよね？』

『エル……怖い……。わかったよ。そうだよ、助けたんだよ……』

『……藤堂さんに負けるつもりはないです』

『こっちだつて』

2人の回線が切られて早くも1分。敵を創作しているが一向に見あたらない。何処だ……！

まさか俺たちの先？　そしたら連絡が入るはずだ。とりあえず俺たちはクズのデータを探し出して撃破しないと……

『……明日香！……神崎！』
「「え？」」

俺たちにWLが接続される。この声は近藤さんだ。なんか珍しいでも焦った声だ。もしかして何かあったのだろうか……

『……早急に戻ってきて欲しい！……敵が3名！』
「何！？」

「くっ……耐える望！すぐに戻る！」

「……了解！」

『神崎さん、明日香さん！近藤さんが！』

「わかってる！今聞いたところだ！」

その後すぐにエルフィからも連絡が入る。一気に敵が3名だと……！？データの癖にそんな作戦を使うのか……！

正直データを舐めすぎていた

ここから近藤さんのいる場所までは約140m弱。ここから猛ダッシュで間に合うかどうか……間に合ってくれ……

今近藤さんがやられたとする。そうすればエルフィがやられて延長戦へ。というか陣旗の破壊はまだか？

連絡が入ってから大分走った。そろそろ見えてくるはず……見えた！なんとか持ちこたえている！

「望！一歩下がれ！」

明日香がそう叫ぶ。そして銃を構えて引き金を引く。すると、敵の1人が攻撃を武器で防ぎ、こちらに向かってきた。……手甲か……

だがそんな武器にやられる訳にはいかない！

「明日香！ お前はそいつをスルーして近藤さんの所へ行け！ 俺が合図したらしゃがめ！」

「ああ！」

「……今だ！」

俺は合図を出して明日香をしゃがませて走らせる。その時に俺は銃の引き金を引いて敵の注意を引く。そしてその間に明日香は敵の下をくぐり抜け、近藤さんの元へと駆け寄る。こいつは俺が相手をする……のだが、敵は明日香の方を向いてしまった

だが……！

ドンッ！

「敵に背中を向けるのは駄目だろ……」

『それボクも言ったよね……？』

「うおっ！？」

急に琉華とPLが繋がれた。何？ ドッキリ！？

『いや、ただ繋いでみただけ。それじゃ』

……何だったんだ

ま、俺の仕事はここまでだ。後は目の前の2人がやってくれる

……というかすげえ。明日香の刀の使いは何度か見てるからアレだけど……近藤さんなんて凄い。鎌で敵を攻撃してすぐに槍に切り替える。そして鎌で攻撃したときに離れた敵に、リーチの長い槍で突きを入れ、更に武器の切り替えで再び鎌を出し、回転しながら敵

を薙ぐ。それで腹部を切断してトドメに刀で斬りつける……鮮やかだ。もしかして光久より強いか？

今度試したくなってきた

まあ今はどうでもいい。この中に大将のデータは混ざっていないのか、試合が終わらない。つまり俺たちの勝ちは確定……

『……佐々木さんと明智さんがやられました。陣旗51m地点です』

まさかの報告が入った……何？ このタイミングで？

でも、もう敵は1人な訳だ。この3人で攻めれば……

全然苦戦しなかった。寧ろあの2人は何故やられた？ そんな

疑問を抱くほど弱かったんだが……

と、とりあえず模擬戦闘終了

俺たちは月曜日にある第3回戦の為に早めに休息を取る事になり、今日は解散した

……勝とう。このみんなで。そして優勝しよう

15 第3回戦に向けて（後書き）

……短かったかな？

とりあえず次回第3回戦です。

ま、エルと琉華が仲直りしたので何よりです

16 Wars 都北大会 3 日目

今日も早く目が覚めた。空は段々明るくなって…… 5時半か
既視感^{デジャヴ}
……

まあ2日連続であんな事があれば…… 誰だってそういう可能性を
考えるわ。でも今日は全くもって違和感が無い…… な、よし
なんて清々しい朝だろう。あんな事故が無いとどれだけ幸せなこ
とだろうか

よし起きよう。身体は重くない。それに隣には違和感もない。普
通の朝に戻ったんだ

それで身体を起こす

「ふあああああ」

それで大きく伸び、欠伸をする。正直まだ眠い。そうだ。眠いんだ
寝ぼけているからこそ目の前に幻影が見えるんだ

「おはようございます神崎さ」

「清々しい朝だなあ」

「無視しないでください」

…… 何故この場にエルフィがいる。というか俺の足下で何をして
いた。何？ 3度目の正直じゃなくて、2度あることは3度あるん
ですか？ 神様は俺を虐めて楽しいですか？

…… 神様を殺めたくなった

「とにかくおはようござい」

「よし、飯でも食べるか」

「だから無視しないでください！」

今の俺には何も見えない。そして何も聞こえない。目の前にエル
フイが見えるのはきつと幻覚か何かだ。それでエルフイの声が聞こ
えるのはきつと幻聴か何かだ。そうだ。違う

……幻覚が見えるとか幻聴が聞こえる「クスリをやってるとかそ
ういう訳じゃない。俺は至って健全な高校生男子だ。そんなクスリ
なんてやって楽になるうなんて誰が思ったことか

とりあえず目の前にある幻覚が消えればそれでいい。エルフイに
は悪いが無視しよう

「さてと……まずは顔を洗いに」

「行かせません。挨拶をしてくれるまで行かせません」

俺はエルフイ幻覚?に捕まれる。くそっ！ 放せ！ 俺の左腕を放せよ
っ！

思ったより力あるんだな って、そんな場合じゃない

「早くしないとみんな来るしな。飯を食って準備とかしないと……」

「む………だったらこの部屋から出させません」

「お、やっと歩けるように」

パツ、ダツ！ シュバババ……ドンツ！

今のSE効果音について簡単に説明しよう。まずはエルフイ幻聴なのか?が俺の腕を
放す音。次にエルフイが駆け出す音。次にエルフイの走る音。最後、

エルフィがドアの前に仁王立ちしたときに地面を踏みならした時の音。こんな感じだ

……逃げ場は無いのか？

「^{幻覚}エルフィ、そこをどいてくれ。俺は洗面所に行って顔を洗ってきたいんだ」

「行かせません。そもそもわたしの名前は『幻覚』なんかじゃありません。『エルフィ・N・エストラント』です」

「今の俺にはお前が幻覚であると嬉しいんだが」

「なんでですかっ!」

なんで？ 理由は簡単だよコンチクショ

「2日連続であんな事が起こったら誰だって現実逃避とかしたくなるんだよ！ それでお前はアレか!? 2人があんな事して俺が散々な目にあつたというのに……俺に対する虐めか何か!?」

「違います! ……わたしはあの2人に負けたくないだけなんです!」

「何の勝ち負けだ!？」

女子には女子の事情があるに違いない。そこに俺が関係してくる理由は何なのやら

「とにかくです……その、えと……神崎さん」

「なんだ……?」

「……今からイロイロやりましょう」

「何が言いたい!？」

……とうとうエルフィも壊れたんだな。明日香並みに

って、そんな悠長な事を考えている場合ではない。早くこいつの

脳みそを取り出して自分が何を考えているのかを考えさせないと駄目だ！ もしくは精神科に連れて行かないと！

……ま、そんな考えてる余裕は無かったようです

「例え神崎さんが拒否しようとなわたしはわたしの意志を貫きます！
覚悟！」

「してたまるかあつ！」

「早くベッドに横になってください！ まず……その……はっ、
ハダカで寝ましょう！」

「何を言い出すんだお前は！」

……やっぱり明日香並みに壊れた。いや、琉華並みでもあるか。
まさかエルフィまでこんな発言を……

もしそんな事態になったら俺完璧退学だろ

「さあ！ 観念してください！」

「誰がするか！」

俺の部屋を駆け回る俺とエルフィ。くっ……狭い上エルフィの足
が速いというのが辛い……おまけにドアは封鎖されて……

そつだ！ 窓から出よう！ 頑張れば生存でき ねえ！ まさ
か窓まで固定するとは！

……絶対俺の行動パターン呼んでたなコイツ

「もう神崎さんに逃げ場はないです！ だっ、だから……一緒に……

……

「一応言っておくが、お前も出られないぞ！」

「そつ、そんなの関係ないです！ わたしは神崎さんと一緒に果て
ますー！」

「物騒なことを言うな！　というか今日3回戦目だろ！」

「あ……関係ないです！」

「絶対今一瞬だけ気にしたろ!？」

「気のせいです！」

お願いだ。誰か助けに来てくれないか？　俺は死にそうなんだ…

…色んな意味で

……でも世の中そう上手くできていない

「そろそろ観念してください！　ていつ！」

「うおっ!？　放せ！　俺の身体に自由をくれ！」

「嫌です！」

エルフィにタックルされて、俺がエルフィの下敷きになる。正直全然重くない……のだが、顔が結構近い距離にある。最近こんな事ばかりだなあ……

「さあ……それではわたしも……あの2人と同じように……」

「待てエルフィ。あの2人と一緒ってどういう意味だ。というか何故自分の服に手を掛けて」

「……うう…………恥ずかしいですけどこのくらいどうって事無いです！」

「アリアリだろ!？」

俺が下敷きになった状態でエルフィが馬乗りに。その状態のままエルフィは自分の服に手を掛けそのまま……服を下にスライドし始め……って、ちょっと待て！　危ない！　色々と危ない！

「落ちて着けエルフィ！　このままだとお前が色々失うことになる！　俺もだけど！」

「いいんです！ わたしは決めたんです！ あの2人に負けたくないんです！ だから……だっ、だからこれくらい気にしませんっ！」

「待て！ 気にし」

言うこと遅く、エルフィは下着姿に つて、見るな。見るんじゃない。俺はエルフィを見てはいけない。そうだ、邪念を捨てる。見たら死ぬ見たら死ぬ見た見た見たら死ぬ死、死死死ぬ……
自分でも意識が保てなくなってきた

「う……神崎さん。目を開けてください」

「こ、断る……」

「はっ、はは、早くしてください……わたしだって寒いんです……」
「だったら……」

「む、無理にでも目を開かせます」

「や、やめれ……」

エルフィは俺の脛に親指と人差し指を乗せる。俺は開かれないように目を思い切り閉じる。だが抵抗するも空しく

「馬鹿あああああっ！」

「……………」

目に映った物は上半身が裸で顔を真っ赤にして目を逸らすエルフィの姿。駄目だ！ これ以上俺の目にそんな物を写すな！ やめろ！

「わたしは……負けたくないんです」

「ちょエルフィ……何を……」

エルフィの顔が近づいてきた。段々と距離が迫られ、エルフィは

目を閉じる

まさか琉華と同じような事をしようか……

そして、残りが本当に僅かの所で

「はっ!？」

……目が覚めた

「なんだ……夢か……」

いや、良かったよ夢で

もしあのままだったら……なあ……? やべ、段々と顔が赤くな
ってるような……気のせいだよな

俺は時計をしてみる。6時……まあ大丈夫か。大丈夫……大丈夫
……大じよ

ガチャ

「起きましたか神崎さん？」

「……よし、起きるとしよう」

「無視しないでください」

……ど、どうせまた夢……

「む? 大丈夫か真箏? 随分と顔が赤いのだが……」

「もしかして熱でもあるの?」

あ……………悪夢？

「それじゃあボクが測って」

「待て琉華。ここは私が測ろう」

「いえ、ここはわたしに」

「大丈夫。熱は無いから……………」

「……………ああ……………」

「露骨にガツカリした顔をするな」

駄目だ。俺にはこの3人が考えていることが全く理解できない。そもそも何故体温計という便利アイテムの名前が出てこなかったのだろうか

まあ、そんな事を考えていても仕方がない。早く朝飯を食べて学校へ向かうとしよう

「それじゃあ俺飯食べてくるから……………」

「私も一緒に」

「わたしも一緒にさせていただきます」

「ボクもいい？」

「何？ 食べてきてないの？」

「……………うん……………」

「……………仕方ないか」

そんなこんなでこの4人＋両親で朝飯を食べることになり、いつもより賑やかな朝の食卓になった。

その時母さんと親父が何かを理解したかのように頷いていたのが気になったけど……………

さて……今日は高阪高校というところが相手か……今大会優勝候補の1つだとか

ちなみに優勝候補に哉町も含まれていたわけだが……まあ、優勝候補に勝ったんだ。今回も勝てるだろう

仮に負けたとしてももうベスト4入りは果たしているので、県大会に進出することは決まっている……が、目標は優勝だ。ここまで来て負けるなんて出来るか

それで現在準備中、そして……

「久しぶりだなー雄太！」

「おう！ お前全然変わってないな！」

「つたりめえだ！」

……部長が相手の誰かと話している。多分知り合い……中学とかその辺の頃の友人かもしれない
なんだろう……この光景は。敵同士仲良く……ま、それはそれでいいんだけど

「しっかしまあ……なんだ？ 雄太は出ないんだってな」

「ああ。すまないな美里」

「何……あんな事件があつて」

「……………」

「悪い。これは禁句だったな」

「いや、気にするな。もう1年も前の話だ。それより互いに自己紹

介をするか」
「だな」

2人だけの話を終えたのか、部長と話していた人はこちらを見て自己紹介を始める

「初めまして弦巻のみんな。今見たとおり俺は雄太の友人の、瀧美里^{たきみ}だ。女っばい名前だけどちゃんとした男だからな？ それじゃあよろしく！」

『よろしくお願ひします』

うん。部長を交換して欲しい

「神崎、今失礼な事考えただろ」

「滅相もない。……あの、瀧先輩。1つお聞きしたいことが」

「済まないけど断る」

「そうですか……」

さっき話していた『あんな事件』というワードが気になって質問しようとしたけど……やっぱり教えてくれそうにもないか……

「ほら、お前たちも名前くらい紹介して……」

瀧先輩が後ろにいる残りのメンバーにそう促す。なんだろう……うちの部長より断然いい人じゃないか

この後俺は部長に色々言われたんだけどな

「に……新島凛^{にいしまりん}です……」

なんだろう、やけにジロジロ見られてる気が

そして例の3人が漆黒オーラを纏っているのは何故だろう

「許斐遼太郎このみりょうたろうです。えっと……君は」

「ん？ 私か？」

「そうそう。良かったら今度」

「死にさらせ！（ゴスツ）」

「痛っ！ 何するんですか！」

「私には真筆という心に決めた人間がいる」

「……！」

……頼む。そんな目で見ないでくれ。決して俺は悪くない

「蜺遙しじほるか。よろしく」

「楠神流くすのきんなです。よろしくお願いします」

この2人は光久にやけに目が行ってら。なんだろうこの人たちは

「リース・リティアです……が………メアド交換」

「真筆くん。急いでこの場から離れて」

「藤堂さんの言うとおりでです。ここはわたしたちが引き受けます」

「お前たちは何を言ってるんだ」

もうこの人たちがわからない

「哀川剎那あいかわせつなや。よろしく頼むで」

一応関西人もいるんやな

まあ相手の紹介も済んだところで俺たちも紹介をし、VWに入る準備を開始する

そして部長がやってきて

「お前たち。いくらアイツが俺の友人だからと言って構うことはない。本気で戦ってこい。で、勝ってこい。以上だ」

と、言っただけでその場から去っていった。多分関係者席に戻るのだろう。今になって確認するが、何故か顧問……の、梅花先生は来ていない。顧問なのにそれでいいのだろうか

「なあ真箏。お前……結構話しかけられてたな。女子に」

「へ？ まあな。なんでだろうな……あの3人の顔が随分と怖いんだ。もうやる気と怒りと嫉妬が混じり合った炎が見えるんだよ俺には」

「真箏……お前それ本気で言ってるか？」

「え……そりゃあな」

「……はあ。そりゃ女子も苦労するか……」

健太が何を言いたいのかわからない

まあそんなこんなでVWに飛ばされ……1回戦目は勝利、2回戦目で敗北。現在延長の最終戦を開始する所だ

ここで勝たないと駄目だよな。俺と隣にいる明日香は準備する

「真箏。勝つぞ」

「わかってるって」

Wars program setting start .
field coating . . . compilate .

```
enemy program...complate.  
final battle data install...co  
mplate  
are you ready...wars battle  
start!」
```

ビーーーーッ!!

戦闘開始の合図がVW内に響き渡る。戦闘開始だ

俺と明日香は敵を探すために走り出す。とりあえず部長の友人……瀧先輩を捜し出して……!
突き当たりを右へ、その次の角を左に……そしてしばらくそのまま真っ直ぐ………走って10秒後

『神崎さん、明日香さん! 140m左方より狙われています!』

「何!? 狙撃かつ!?!」

「明日香は前に飛べ!」

「言われなくとも! 攻めるぞ真箒!」

『その後方50mからも敵が接近しています! 更に右方80mに敵を確に……接近してきてます!』

「マジか!?!」

「くっ……何とか凌いで応援を求めろ! エル! 誰かをここに!」

『了解です! なるべく急ぎます!』

「任せたぞエルフィ!」

どれだけ敵が攻め込んでくるんだ……! これじゃあまるで昨日と同じような状況じゃないか……! とりあえず応援が駆けつけるまで何とか凌がないと!

まずは左方からの狙撃を回避する俺と明日香。その後も連続攻撃

を受けるも回避。その中で後ろから来た敵の対処。両方の攻撃を避けつつ右方からも射撃攻撃。これを回避しろって……無理な話だ

「うあっ！」

「ぐうっ！ 大丈夫か明日香！」

「気にするな！ 応援はまだか……！」

「耐えろ！ すぐに来る！」

これ以上は持たないかもしれない。早く誰か来てくれ！
そう思ったとき

ドンッ

「くっ……更にもう一人か……！ これ以上は持たないぞ！」

「エルファイ！ まだか！」

『ふっふっ。お助けが必要みたいじゃない、かつ！』

チュインッ！

「うあっ！」

「なっ……琉華か！」

『その通り。大丈夫？ 真琴くん、明日香』

「できればもう少し早めに……」

『……ゴメン。そんな場合じゃないかもしれない。その周辺に5人』
「なんだと!？」

思わず声が裏返ってしまったが、それは非常にマズい状況だ……
藤堂さんの狙撃の腕があるとはいえ、ここはビルが多い《都会》だ。
狙うにも相当難しいだろう

くそ……これで終わりか……？

『諦めるのはまだ早いぞ真箏殿!』

「何!? その声は光久か!？」

『左様! 今そちらに向かつておる。その間に敵は1人倒しておいた! しばらくの辛抱だ!』

「ああ!」

まさか光久が向かってきてくれているとは……正直助かる。つて、そんな事考えてる場合じゃない! 敵に今は狙われてるんだよ!

銃弾が俺と明日香の周りを飛び交う。それを何とか回避するも、結局何発かは命中……体力もそろそろ限界に……

「琉華! そこからなんとか出来ないか!? これ以上は持たない!」

『ゴメン真琴くん! 敵の動きが速いし、それに地形が複雑すぎる! 狙えてもたつたの一瞬だよ!』

「くっ……そこから反対側にスナイパーとかは見えない!？」

『……………見えた! 狙ってみる……………!』

「任せた!」

でも正直そこから狙えたとしても、命中させられるかが問題だ。おそらく琉華と敵の距離は300m近いはず。届くか届かないか……いや、届かないかもしれない。だから光久……早く来てくれ!

「うあっ!」

「明日香!」

「よそ見とは余裕だな!」

「なっ……………ぐあっ!」

明日香は右腕を槍で貫通され、俺は足を切りつけられる。バランスが保てなくなってその場に膝をついてしまう。これじゃあやられる……

「大丈夫か！ 真箏殿！ 明日香殿！」

ドンツ！ ドンツ！

「何！？ ぐああっ！」

「きゃあっ！」

「光久！ 遅いぞ！」

「申し訳ない。先程敵に阻まれた故……」

ギリギリの所で光久が駆けつけてくれた。銃で攻撃してくれたのか、俺と明日香にトドメを刺そうとしていた敵は消え……いや、まだか。今の攻撃はどうやら浅かったらしい

更には……

チュインツ！

「くあっ！」

「真箏（殿）！」

遠くから銃弾が飛んできて、それが腹を貫通する。それで俺の腹からは血が流れ出す……やべえ、もう少しで戦闘不能だ……

『ゴメン真琴くん！ 全然届かなかったんだ！』

「き、気にするな琉華……別にこれくらいどうって事……」

「アリアリだる真箏ーっ！」

ドスッ！ ドンッ！

「ぐああっ！」

「きゃあっ！」

俺の目の前にいた男子（遼太郎君）と、明日香の目の前にいた女子（蛭さん）に攻撃をして、戦闘不能にさせた人物が登場した。それは

「間に合ったか……大丈夫か真こ」

「健太。女子を殴るのはどうかしてると思うぞ」

「……………許してくれ」

『佐々木くん最低だね』

「最低の人間だ」

その光景を目の当たりにした女子からはそのような声が

「ねえ、あの人怖い……………」

「泣かないのリース。私たちが倒しましょう」

「そうだよ。凜先輩の言うとおりだよ」

「うん……………遙の為に頑張る！」

健太
ああ……………健太が最低だと他校の人にまで伝わったな……………ドンマイ

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

「なっ、危なっ！」

「これは遙と遼太郎の為！」

「私たちは貴方を許さない！」

「死にさらせえっ！」

『お前は最低の男子だっ！』

健太に向かって集中砲火。健太死んだなこれは……ま、いい。今の内に

「明日香、琉華。今の内に何とかヨロシク」

「任せろ」

『了解っ』

だって目の前に女子しかいないから俺と光久が戦うのはどうも……
んでもって目の前の女子（+健太）は倒した。後は遠くにいるス
ナイパー（哀川君）と、大将の瀧先輩だけだ。ここまで来たら余裕
……まあ、建物の陰に隠れて遠くからの狙撃を回避してるんだけどさ
それで光久は陣旗の破壊へと向かって……

俺たちは早く大将を探し出すとしま

『……明日香！ ……神崎！ ……お願い！ ……援護に来て！

……この大将強い……！』

「何！？」

探し出し始めようとしたところで近藤さんから連絡が入る。え？
大将が強い？ あの近藤さんで防ぎきれないのか！？

「明日香！ 早く戻って！」

「あ、ああ……だがお前の怪我だと！」

「き……気にするな。このくらいどうって事は無い……」

『無茶だ真箏くん！ それだったらボクが！』

『……もう持たない!』

「とにかく行くぞ! 俺はすぐに駆けつける! それに光久を信じればいい!」

「……わかった。私は先に行くが、真箏は少し遅れてこい!」

「わかってる!」

こうして明日香を先に行かせ、俺はフラフラしながら近藤さんのいる場所へと向かう。辛い……腹を貫通されてるんだ。出血多量で……やべ、視界がグラグラして……でも倒れてられるか……!

『やめて真琴くん! そのままだと倒れる!』

「いいんだ琉華……負けるわけにはいかないから……」

『でも……!』

「……明日香だって怪我してる訳だ。それに比べたら　ぐほっ」

喋ってる途中に血を吐き出す。うわ、初めてこんな事したけど結構キツイな……しかも血の色とか濃いし……まあ、VW内だから死ぬわけじゃないけどな。でも結構辛い

『……真琴くん……』

「ぐほっぐほっ……任せてくれ琉華。絶対に大将を倒して……優勝しよう」

『……そういうところが格好良いんだよね』

「え? 何か言った?」

『えっ? い、いやっ……別に何も言っていないよ!?!』

「ならいいが……間に合うか……!?!」

フラフラしながら歩き続ける。そして敵と明日香と近藤さんの姿が見え始め……なんだ敵のあの動き。近藤さん以上に綺麗な動きで……しかも傷一つ無い……

『真琴くん。ボクもそっちに向かうから、あまり無茶はしないで…
…すぐ行くから』
「わかった……」

明日香と近藤さんは敵に攻撃するも軽々と回避され、その代わりに明日香と近藤さんが攻撃されて傷を負っていく。これじゃああの2人が……

そう思った俺は前に向かって歩き出す。早くあの大将を止めて…
…勝つんだ……

銃を前に向ける。が、敵の動きが速すぎて照準が合わない。それに加え視界が歪み始めた。こんな時に……早くあの2人を……助け……て……

俺はその力なき指で引き金を引いた

#16 Wars 都北大会3日目(後書き)

なんかごめんなさい

この戦いを長引かせてしまい……んでもって結果は次回と

なんかごめんなさい

次回でこの戦いは終わりです。乞うご期待……する人はいないか

#17 3回戦の後

ドンッ！

俺は力なきその指で引き金を引いた。放たれた銃弾は段々と明日香たちのいる場所へと飛んでいく。今の俺にはそれがどうしてもスローモーションに見えて仕方がない

「頼む……当たってくれ………」

視界が……段々ぼやけ……て……

「なっ！」

「……神崎！」

「真筆！」

はは……呼ばれてるよ俺……返事したいけど……声が出ないわ……

ん？ なんかもものすごい速さで空を

ドサッ

俺はその場で仰向けに倒れ込み、気を失った

ガンッ！

「流石にこんな銃弾で俺を倒せるはずはねえ……さて、そろそろそ

「こを通して貰おうかな？」

「……くっ」

「望、少し休憩している。後は私が引き受ける」

「……明日香？」

「お前何を言ってる……」

「もし私が駄目だったらその時だ。黙って見ている」

「……勝機は？」

「ある訳」

「あるから言っている。さあ……私が相手だ」

「……流石は雄太の後輩だ……よし、かかってこい」

「……行くぞ！」

ガンッ！

明日香はその場を駆けだして敵に接近、そして刀を大きく振るって敵を縦に斬りつける。だが、相手も槍でそれを凌ぐ。が

「な……なんだこの力……」

明日香が押している。敵は段々と後退し始めている

「なんでこんな急にこんな力が……！」

「知りたいか？」

「……まあいい。聞いたところで俺の勝ちが決まってるんだ！」

「ぐっ！」

今度は敵が明日香の刀を押し返す。それによって明日香には隙が生じ、敵は槍を構える

「終わりだ！」

「くっ！」

ガキインツ！

「ちっ！」

「望！」

「……私もいることを忘れては困る！」

敵が槍で突いてきたのを、望が鎌で叩き落とす。その鎌と地面の間に槍が挟まり、今は敵に隙が生じている

「……明日香！」

「ああ！」

「これだけが俺の武器じゃねえ！」

明日香が敵に向かって刀を横に振るが、バックステップで回避される。そして敵はTEMMを起動し

「……鎌」

「望のと形状が若干異なっているが……両鎌か？」

「“スカーレット・ノヴァ”……正直扱い慣れてないからなあ……でも負けるつもりは……ない！」

「くっ……！」

敵は鎌を構えて再接近してくる。そしてそれをひと振るい

ガンツ！

望は槍で防御するが

「……っ、強い………うあっ！」
「望っ！」

耐えきれず横に吹き飛ばされる。そのままビルの壁へと激突し、
気を……いや、戦闘不能になってしまったのか、その場から段々と
消え始めた

「さあトドメだ」
「くっ………ここまでか………」

敵は明日香の首に向かって鎌を振るった

「………ん？」
「あ………気がついた真琴くん？」
「あれ………？ ……藤堂さん………？」
「る、琉華って呼んでよ………」
「あ、ゴメン………」
「べっ、別にいいんだけどさ………」

いいのか

俺は目が覚め、左を見た瞬間に琉華の姿を目に写した。ここは…
…ああ、会場の救護室か………
右には明日香と近藤さん………あ、健太と光久 光久？ なんか
エルフィまで寝てるような………幻覚か何かだろうか………
ん？ エルフィが寝ている（気絶と仮定）＝エルフィが戦闘不能
大将撃破によって敗北？

……」
「なあに。これが俺のスタイル」
「部長ですからね（チュインツ）……怪我人に大してそんな事するんですか？」

まさか怪我人に向かって発砲するとは

「今の発言にお前は何とも思わないのか？ 何なら殺すぞ？」
「物騒な発言はやめてくださいよ部長。殺すのでしたら吉はクズを」

「そうだな。よし美里。今から哉町高校に行くぞ」

よし、成功

「と、まあ冗談はここまでにしておき……今日は起きた奴から好きに帰れ。以上解散」

「それじゃあお疲れ」

「「お疲れ様でした……」」

そう言った部長は瀧先輩と救護室を出て行った。それでまた琉華と2人（？）になる

「……」
「そうだ琉華。さっきなんか話そうとした？」

「え？ ……あ、いや……その、ね？ ちょっと聞きたいことがあるなあ……」

「聞きたいこと？」

なんだ。てつきり言いたいことがあるのかと……まあ答えられる質問なら答えるでしょう

「何？ 答えられる範囲だったら答えるけど」

「あ……………うん。……………今日の結果についてどう思う？」

「へ？ あ……………そうだな……………まあ、残念だったな」

そりゃ負けた訳だし

「そ、そうだよねえ……………あー、ついつい違う質問してしまうボクに腹立つ……………」

「ん？ なんかつた？」

「ほえ！？ べつ、別に何も言っていないよ！？」

「????？」

小声で何かを呟いているような気がしたんだが……………気のせいか。でもやけにテンパってたような気がする。気のせいだよ……………？

まー、試合も終わったことだしみんなが起きるまでどうするか

「……………真箏くん」

「ハイ？」

なんだろう。ちょっと機嫌が悪そうな……………そんな感じで呼ばれた。まさか何か気に障るような事でも言ったりしただろうか……………？

琉華の顔は赤く、目線は右の方を見ている

「あ……………さ、明日香の事どう思ってる？」

「え……………」

こんな事を前にエルフィにも聞かれたような気がする……………どう思ってるも何も、友達……………同じwars部員として……………

「そりゃ友達だろうな。そんなもって同じWars部員と……」
「はは……じゃあエルは？」

「そりゃあ明日香と同じだろ。急にどうしたそんな事聞き始めて」
「え！？ いや、別に大した意味は無いんだよ！？ ただ真琴くんは明日香やエルをどう思ってるのかなって気になっただけだよ！？」
「あ……そう？」

そんなに慌てなくても……

「ま、その回答は真琴くんらしいけど……」
「なんだそれ？」
「なんでもないよ」

笑顔でそう返される。その笑顔に一瞬だけ何かを感じた

ま、まあ……現状で5名が気絶している訳なのだが……どうしよう。2人だけだから特に話す話題も見あたらない。仕方ない、適当に何かしますか

「なあ琉華。5人が起きるまでどうする？」

素直に聞こう……

「え？ ん〜そうだねえ……じゃあじゃんけんでもしてみる？」
「まあ……少しやるか」
「それじゃあ……じゃんけん」

お馴染みの掛け声で2人が手を前に出す。結果は……グーであいだ

「「あい」で」「

今度の結果は……パーとチヨキ

「あゝ……負けたか」

「残念だったな琉華？」

「む、何かそう言われると悔しくなってくるな。じゃあこれやろう」「え？ ああゝ……何度かやったことあるけどよく知らないんだよなあ……」

琉華は両手をグー……親指だけが立てられる形にして前に出してきた。えと……アレだ。何か……駄目だ。説明が上手く出来ん。俺もそこまでやったことないんだ……説明できなくても不思議じゃない

「まゝ大丈夫でしょ。ほら真琴くんも準備する」

「あ……ああ」

「じゃボクから。いつせーの2」

結果は琉華が2本、俺が1本。つまり3。だから琉華の勝ちではない

今度は俺の番だ

「いつせーの3」

次の結果は、琉華が1、俺も1だ

「いつせーの0」

結果 0。つまり琉華の勝ち

「よし」

「むう……なんか悔しいな……」

「ふっふっ。じゃあポーカーやろうよ。丁度持ってきてるし」

「ん、いいだろう。これでも俺ポーカー結構強いぞ？」

琉華がポケットからトランプ　　じゃないの？　まさかのデータ

トランプ？

……紙とかプラスチックだったら俺強いのに……

「あれ？　なんか随分残念そうな顔してるね……？」

「いや……気のせいだと思う」

「そう？」

琉華はポーカーのデータを開き、小型VWを展開する。あ、小型VWっていうのは、Wi　　がかなり発展したような物で、もう3Dでゲームができるような……そんな感じ

でも今回は更に小さく、テーブル1つ分の大きさで展開された。

そのVW内にトランプが俺と琉華に5枚ずつ配られる

ま、勝てば問題ないか

俺の手札は……^{スピード}SのJ、Q、K、Aと、^{ハート}HのAだ……ってアレ？

なんだかやけに言い手札のような気がするぞ？　ここでSの10

が来たら“ろいやるすとれーとふらっしゅ”とかいうやつじゃないか

これ勝てるんじゃないか？

「ねえ真琴くん」

「ん？」

そんな事を考えていると、琉華に話しかけられた

「この勝負さ、賭けない？」

「へ？」

「だ・か・ら、この勝負何か賭けよう？ そだね……もし真琴くんが勝ったらボクはなんでも言うことを聞く。もしボクが勝ったら……真琴くんはボクの言うことをなんでも聞く。もちろん1つだよ？
それでいい？」

「あ……まー別にいいか。よし、乗った」

「それと……役の強さはこのデータに任せるから」
「よし」

勝ったなこれは。このHのAを交換して上手くSの10が来れば……勝てる！ が、琉華がもし5カードとかだったら……いや、多分ロイヤルストレートフラッシュの方が上だろ……多分

ま、交換すればわかるだろ

思い切った俺はHのAを交換する

「……マヂで？」

正直自分でもビックリだよ……まさか本当にSの10が来るとは思わなかったし……やべえ、これ勝った

じゃ、琉華には何を聞いて貰おうかなあ、と

ちよつとだけ琉華の顔を見ている。おおう、凄い焦った顔だ。うわ、絶対勝ったよこれ

「琉華……取り消すなら今の内だぞ？」

「えっ！？ な、何を言うかなあ真琴くん？ ボクがそう簡単に取り消すワケ……なんか余裕そうな顔してるね？」

「まあな。で、いいのか？」

「……うん」

「わかった……じゃ、俺からだ」

琉華も準備が整ったようなので、俺はカードをオープンする。Sでのローヤルストレートフラッシュ。これ以上の役を出せるわけがないだろ

ほれ見ろ。琉華の顔なんてもう焦りまくりじゃねえか

「もっかい言うけど……取り消すなら今の内だぞ？」

「……いや、大丈夫。ボクは真琴くんの言うことをなんでも聞くよ

……」

「言ったな？」

「うん……ボクはこれで勝負する」

最終的に賭けを取り消さなかった琉華はカードをオープンする。どうせ俺に勝てる訳……な……いのに……？

気のせいだよな？ 何、幻？ 夢？ いや……呆けたか。だって……なあ？ 視力が落ちたわけでも無ければ……いや、呆けたかなあ……

だってKが3枚とJokerが2枚見えるんだもの。いわゆる5カード

「……琉華？」

「……ゴメン。どっちの役が上なのかボクにもわからない。だからデータに任せ」

「いや、そうじゃなくてな。なんでこんな大役出せた？」

「……さあ……正直自分でもビックリだよ……」

なんだこのデータ。おかしいんじゃないの？ イカサマかなんか？

まあ、そんなこんなで気になる勝敗結果が表示される。あーーー
……

『Your Lose』の文字が俺側に……

「よし！ それじゃあボクの勝ちだ！」

「うわー……すっげー納得いかねえー……」

「ま、仕方ないんだよ　それじゃあ×ゲームタイムだあー」

なんだ？　凄く楽しそうだぞ？

それだけ俺に×ゲームしたかったか

「しゃあない……ほれ、なんでもいいから……パシリでも荷物持ち
でも……好きな事をどうぞ」

「……よし。じゃあまずは服を脱いで」

「おかしい！　何かがおかしい！　なんだか危ない気がする！」

まさか『服を脱ぐ』ことから始まるとは……侮れない

「ははっ、冗談冗談。えっと……ベッドに横になって
……」

とりあえず言われるがままに空きベッドに横になる

「で？」

「服を……」

「だからおかしい！」

「冗談だってえ！」

いや、目だけがマジに見えるのは俺だけか？ もう最近明日香と
いいエルフィといい……もうわからなくなってきたぞ、オイ

「で？ これからどーしろと？」

「……えつとお……………目……………」

「目？」

「……………目を閉じてくれる？ いいって言うまで」

「え……………？ 凄い嫌な予感しかしないんですが？」

「きつ、気のせいだよ！ それより約束じゃん！ はっ、はは、早
く目を閉じてよっ！」

「む……………仕方ない」

俺は渋々目を閉じる。ああー嫌な予感しかしねえ……………まあ、×ゲ
ームだし仕方ないかあ……………

目を閉じたことにより辺りが暗くなる。何も見えない。とりあえ
ずわかることは、横では5人が気絶していること、琉華が何かをし
ようとしていること、まだ試合をしていること。これくらいか？
あつたとしても挙げるのがめんどい

「……………はう」

「琉華？」

「へっ？」

なんか琉華の声が聞こえたので声を掛けてみる と、我に返っ
た感じの声が聞こえてきた

……………何をしていたんだ？ 何も見えないからわからん

「あ、ゴメンゴメン……………すぐ終わるから待っててね」

キュポッ

あ、嫌な予感

ペンの蓋が外されるような音が聞こえた気がする。油性だったら最悪だ。水性であることを祈るしかない……

「……………すぐ……………終わるから……………」

「る、琉華……………」

なんだろう。手に何かを乗せられた気が……………これは琉華の手だろうか？

……………そしてなんだろう。段々と琉華の呼吸が近づいてきている気が……………顔に琉華の呼吸らしき物が当たる

嗚呼目を開けて確認したい。今現状はどうなっているんだ……………！

琉華の呼吸らしき物が近づいてくる中、琉華の手らしき物が俺の手を強く掴む　確定。これは琉華の手だ

……………一体何が！？

琉華の呼吸（確定）がかなり近づいてきた。そして

「ん……………」

「……………え？」

横にいる明日香が声を上げた

俺はそれに反応して目を……………開……………け……………た……………

「ちょ……………琉華？」

「あ……………ゴメン」

目の前に琉華の顔があった。そして右に目をやると

「……おい琉華……これは一体どういうことだ？」

「あ……ゴメンナサイ」

「え、何？ この状況の中俺はどうしたらいいの？」

不機嫌そうな顔をしている明日香さんの顔があった。あ……寝起きで機嫌が悪いのだろうか……まあ、うるさくした訳だし……

「ちよつと琉華……そろそろ離れてもらっても……？」

「ふえ……？ あっ、ああ！ うん、ゴメンね真琴くん！」

琉華に頼んで離れて貰う。そして

「真筆、琉華。今から色々問うぞ」

「……ハイ」

明日香には色々と問われることに……この後エルフィも起きてきて大変な事態になったけど……

とりあえずこれで都北大会は4位入賞を果たして幕を閉じた。高阪高校は決勝で惜しくも負けてしまったそうだが……あれ以上に強い高校があるんだなやっぱり

……まあ優勝は出来なかったが、4位入賞によって都大会へ進出することに……今回以上に強い学校と戦うことになるのだろう。だから今の内に特訓を重ねておかないと……

最終的な目標は全国大会への出場だ

その課程……次は都、駄目だったら関東。そこでまずは優勝しておきたい

だから次の大会、w a r s 都大会では今回出来なかった優勝を達成したい。そこが全国出場への一歩だ。だから強くなる

俺は心の中でそう決心した

#17 3回戦の後(後書き)

……お疲れ様です、ハイ

今話の作成所要時間は4時間です。かかりすぎですね

とりあえずこれでChapter2は完結……にしておこうかなと

本当はこの試合も勝たせて決勝に進める予定でした。が、
なんかいきなりそこまで行かせるのもアレだなーと思い、4位入賞
の所で終わらせておきました。ちいと気持ち悪さが残るけど……
5月の残りの話？ それは後で考えます

とりあえずお疲れ様でした

次回から Chapter3 June Days です
とりあえず真筈くんには次回からも頑張っていたいただきます

望？ さあ？

ではでは

#18 6月6日 前編(前書き)

前後編に分ける予定でございます

6月になり早くも6日が過ぎた。都北大会で配線してからは大体3週間とちよつとが経過しようとしている時期だ。

そう、6月。そろそろ梅雨入りしようとしているこの季節。あのジメジメする季節。段々と虫が出てき始める季節

……寝癖が気になる季節

「うおっ!？」

今何が起きているのか説明しよう。朝起きてから俺はすぐに洗面所に向かったのだ。それで顔を洗って歯を磨いて……顔を洗って目が覚めた時に目の前にある鏡を見た。それに映った自分の姿を見て驚いてしまったのだ

どんな感じかって言うと……

「どうしたんですか神崎さ　ぷっ!」

「全く。朝からそのような声を上げるとは。真箏の身に何が　ぶ
ふっ!」

「え?　2人とも一体どうし　ぶっ!」

何故か朝早くから来ている3人に見て笑われるほど凄い状態になっているのだ。まあこの3人が何故来ているかは後で話すと
して……

「ひい……ひい……か、神崎さん……なんですかそれ……?」

「ま、まさかスカイ リーの真似か？」

「ぶっ！ あ、明日香やめてよ！！」

「あのな……」

一、人の髪型を見て決して笑ってはいけません

一応俺の髪の長さを確認しておこう。大体琉華よりちょっと長いくらいだ。首の半分くらいの長さと考えておこう

で、現在その俺の髪型が、明日香曰く“東京スカイ リー”のよくな感じらしい。だったら“東京プラネットヒル”の方がインパクトがあるだろ

東京プラネットヒルって言うのは、2079年に新しく作られたデジタル……のその先の為に作られた電波塔だ。はつきり言おう。デジタルの先はまだネーミングすら決まっていない。それでいいのが日本。そんな無駄な物を作るなら政治をどうにかしろ政治を。またオーストラリアみたいな事件が起こっても知らねえぞ？ この平和ボケの神国 Japanめ……

……オーストラリアについても後に話すとしよう

とりあえず現状。エルフィたちに見て笑われるほど……凄い尖った髪型だ。東京スカイ リーに例えられても不思議ではないくらいに……個人的にはプラネットヒルの方がしっくりくるが……どうでもいいか

ちなみにプラネットヒルの高さは936mだ

「あの、神崎さん……その髪型で登校するんですか……？」
「するわけないだろ……ちゃんと直すわ」

洗面所に一番最初に入ってきた女子の、エルフィ・N・エストラ^{ニア}

ントに話しかけられる。主な特徴はないが……強いて言うなら身長が低いところだろうか

エルフィが来た理由 朝食のため

「真筆。だったら私が直してやるっ」

「いや、自分でも出来るから……蒸しタオルで」

お次は2番目に入ってきて俺の髪型をスカイ リーに喩えた女子、
鶴明日香つるあすかに話しかけられる。つり目と胸ぐらいまであるサイドテールが

って、なんだ？ 今は下ろしてるみたいだが……ま、いいか

明日香が来た理由 朝食のため

「いやあ……これ芸術じゃない？」

「何が芸術だよ。朝起きたら勝手になつてただけだっつーの」

最後は……最後に入ってきて明日香のスカイ リーで吹いた女子、
藤堂琉華とうとうるかに話しかけられる。ショートヘアで男子っぽい一人称が

特徴の女子だ。てかなんだ芸術って。人の頭で芸術作品を作るな

琉華が来た理由 朝食のため

思う。この3人は朝食を食べるためだけにうちに来たという事か？

ま、この3人は置いといて……まずは蒸しタオルをつと……アナログとでもなんとでも言え。この家には寝癖直し機が無い………のではない。姉貴が持って行ってしまった

高いんだぞアレ……？

そんなこんなで近くにあったタオルを手に取り、洗面台でお湯を出して濡らす。これで頭に乗せておけば完成つと。ちよっと熱すぎたか？

「……なんか憐れな姿だね」

「はい……」

「そうだな……」

「待て、この姿だけで憐れとか言うな」

仕方ないだろ……寝癖が酷い訳だし……

そんな事を言ったコイツらには罰でも与えろとしよう

「お前らうちで飯食うな」

「え」

「そんな……真琴くん……本気なの？」

「まっ、真筆！ それだと私たちの朝はどうなるのだ！」

「いや知らんし……そもそも何故自分の家で食べてこない？」

「……いや、なんとなく」

3人揃ってその返事かよ！ 何？ 自分で作るとか、親に作ってもらうとか無いの！？ あ、自分で作るって言う部分に関しては明日香を除く……いや、明日香は両方除外だ……

……明日香に関しては仕方ないかもしれないか。でもこの2人はなあ……いや、今日は3人とも食わせねえ

「以上。ほら、早く洗面所から出て先に行ってる」

「ぶー」

「真琴くん……本気なの……？」

「琉華、その上目遣いはずるいぞ」

「だったら明日香もやればいいじゃん」

後ろでは何を話しているんだ。そもそも見てないし

ま、回答くらいはしてやろう

「本気だ」

「「「……………」」」

「何故そこで黙る!？」

もうコイツらの考えてることがよくわかんねーよ……

「で、母さん。これはどういう事だ？」

「何言ってるの真箒！折角来てくれたんだから食べていって貰わないと！」

「あのな……………」

「それじゃあ……………」

「お義母さん、いただきます」

「あ、ボクも」

「それでお前らは遠慮しないわけな」

「「「うん」」」

いざリビングに来てみると……………なあ。まさか6人分の朝食が出てきているとは思わなかったぞ……………？ちなみに俺と母さん、親父の分と、この3人の分らしい……………

何考えてるんだこの母親は

「真箒。これだけの候補がいるんだ。悩むことはあるだろうが、ゆつくり考えなさい」

「親父、今俺はアンタの考えてる事と言っていることがサツパリだよ」「父親に向かってアンタとはなんだ真箒？とにかくだな、こんな可愛い女の子が3人もいるわけだ。ゆつくり焦らずお嫁さんを選びなさい」

「お嫁さんだなんてそんな……」

「お義父さん……」

「……何？ ボクだけが常識人？ 2人とも飛躍しすぎてない……いや、3人か」

どうやら琉華だけがマシな返事をしてくれたようだ

というか何だこの親と2人は……どうしたらこんなに話が合うんだよ

そもそも明日香。「お義父さん」とはどういう事ぞ？ そしてエルフィと親父。「お嫁さん」とか何だ。早いだろ。以前に何でそんな話になるんだよ。普通の友達だからね？

「そんな事言わないの琉華ちゃん！ アナタもきつと真筆のいいお嫁さんに」

「そろそろ黙れ馬鹿夫婦」

「親に向かって馬鹿とは何だね」

「神崎さんは酷いです」

「最低の息子だな」

「流石にその発言はどうかと思うよ？」

「俺に味方はいないのか！」

……もはや親すら信じられなくなってきた

「うえ………凄い雨だなオイ………」

「ですね………」

「ねえ真琴くん、これなら髪の毛直す必要無かったんじゃないかな？」

「雨に濡れると？」

「まあ……………」

「風邪引くつっ一の」

「真筆、傘を持ってくるのを忘れて」

「断る。そもそも今後ろに隠した物は何だ？」

「これか？ これは……………」

「傘だな」

「む……………」

朝食を取り終えいざ学校へ向かうために玄関の扉を開くと、外には土砂降りの光景が広がっていた。これじゃあ行くのが大変じゃないか
いか

それで明日香。傘がなかったらどうするつもりだったんだ？ ま
さかとは思うが、俺の傘に入ろうとか思ったんじゃないだろうな？
これでもし当たってたら困

「おい明日香。視線を左に逸らしてマジマジしているんだ？」

「……………以心伝心と言う物なのか……………？」

明日香の言いたいことがわからな まさか……………このタイミング
で読心術的な何か？ つか当たってるのかさっきの予想は！

本当に困ったよコンチクショ！。雨だし……………

「仕方ない。全員傘あるみたいだし……………行くか」

「そうだね」

「ほら行きましよう明日香さん」

「あ、ああ……………」

俺たち4人は土砂降りの中傘を差して学校へ向かって歩いていく。
嗚呼……もう制服のズボンが濡れ始めたよ……あ、今度は靴の中が
……
学校つく頃にはびしょ濡れだなこれは……

「3人とも大丈夫かー？」

「いやあ……もう靴がダメだね……」

「わたしもです……」

「ふむ……ビーチサンダルだと全然支障が無くていいな！」

「……」

「なんでそんな目で見る？ これだと足が寒いのだ」

だったら履くな。てか学校にビーチサンってどういう事だ。確かに
すぐに拭けるからいいんだけどさ？

まあいい。とりあえずこれ以上濡れないことを祈って歩くとしよう

ああ……なんで今になって思い出すのだろうか……雨避け小型展
開型屋根……凄い便利なのに……全く濡れないのに……帰って取り
に……面倒だしもう遅いか

母さんが親父に頼んで車で送迎って手もあつたかなあ……あ、も
う靴がアウトだ。うわ……もう靴の中が気持ち悪い……

「残念だな3人とも。私みたいにビーチサンダルで来ていればそん
な大変な目に遭わなくて済んだのだ」

「あのな明日香。学校にビーチサンは相当恥ずかしい……というか相
当な勇気が必要になるんだぞ？」

「私はその壁を乗り越えたのだ。まっ、お前たちに私の気持ちはわ
からないだろう？ あ、いや、別にわかっててくれてもいいのだ」

どっちだ。つか何故顔を赤くして目線を逸らす

「これは後悔しますね」

「ボクもそう思う」

「奇遇だな2人と。俺もそう思うんだ」

「何！？ 真筈、お前は私の気持ちを理解せずにその2人の気持ちを理解するというのが！？」

「ああ。お前の考えを理解するより数倍マシだからな」

「え……」

……この2人は何故顔を赤くしているのだろうか

そして俺が見た瞬間に視線を逸らすのは何故だろうか

「まあいい。これ以上酷くならないうちに急ぐぞ」

「あ、ちよつと神崎さん。走ると危な ひゃあっ！」

「なっ、エル大丈夫 うわっ！」

「え……ちよつと2人とも うおっ！」

ドンツ ドンツ ドンツ

「……大丈夫か？」

「あ、ああ……それより2人は？」

「わ、わたしは何か……」

「ボクも平気……」

まさか3人で転んでしまうとは……ツイてない。くそ、雨の奴め

……俺たちを滑って転ばせてそんなに楽しいか？

ま、天気に向かってそんなこと言っても仕方ないか

「しっかしまあ……びしょ濡れだなオイ……」

「うっ……早く行って乾かしましようよ……」

「そうだね……あゝ明日香だけ濡れてないよ……」
「ふっ、これは日頃の行いがだな」

ブオオオオオン……バシヤッ

「……」

「日頃の……行いが……だな？」

「……悪いんだな」

「黙れ真箒」

……俺たちより酷いだろ。まさか車に水を掛けられるとは。しかも身体全体に

「えっと……とりあえず大丈夫か？」

「……この程度問題なへくしっ」

「とりあえず行きませんか？ 早くしないと風邪引きへくしっ」

「そうだよ。こんな所でゆっくり話したら風邪引いて県大会に出られなくへくしっ」

「全員でクシヤミをすな！」

これ手遅れでね？

「まあとにかくだな、早く行くぞ真箒、エル、琉華」

「そうですね。早く学校に行って着替えて服を乾かしましょう」
「だね」

「よし。それじゃあ行くとしへくしっ」

「……」

泣きたくなつた

で、そんなこんなで学校へ到着　して、昇降口。あの後何故か俺だけが傘を吹き飛ばされるわ、転ぶわ、道行く車に水を掛けられるわで……今とんでもないことになっている

水もしたたるいい男とか誰かが言ってた気もするが、もう十分にしたり過ぎていて。何処を絞っても瀧のように流れ出てくる雨水をどうにかしてくれ。これじゃあ校内に入ることができないじゃないか
いか

ああ……注目半端ねえ……

「で、神崎さん。早く何処かに行って着替えましょうよ。そうしないと風邪をへくしっ」

「だなあ……でも何処で着替えるの？　この状態だと校内に入りたくても入れん」

「だったらプールの更衣室使おうよ。あそこなら別に濡れた状態でも入れるし」

「では鍵はどうするのだ？」

「誰かに頼めば……あ、丁度良いところに望が。望ー！」

琉華が近くを通りかかった近藤さんと呼ぶ。なるほど、濡れてないから職員室に鍵を取ってきて貰うのか

「……あ、どうしたの琉華？」

「いやあ……ちょっと頼みがあってさ。プールの更衣室の鍵を借りてきてくれると嬉しいんだけど、ダメかな？」

「……わかった。……男女両方の鍵ね」

「そそ。それじゃあヨロシク望」

「……うん」

そう承諾して近藤さんは職員室へと向かっていった。何とというか……相変わらず言葉数が少ないところと身長が低いところが特徴だ。もうちよつと明るくなればいいのに

ま、人には人の個性があつていいか

で、2分後。2つの鍵を持った近藤さんが職員室から戻ってきたらしく、昇降口へと再び顔を出した

「……ハイ、鍵」

「ありがと望。それじゃあちよつと着替えてくるね」

「……待って。明日香は今日体育無いハズ。……だから」

そう言つて体操服を明日香に差し出す近藤さん。おお、良いところあるじゃないか

「ありがと望。助かった」

「……別に気にすることはない。……それに私が体育サボりたいだけだし」

……気のせいか

「よし、風邪引かないうちに更衣室行くぞ。それじゃあまた放課後に」

「……うん。神崎」

「え？」

なんだろう。珍しく話しかけられた。何か大切な用事でもあるのだろうか

「何？ 急がないと風邪引く……」

「……うん。……調子に乗って変な事しないように」

「へ？ 何を言っただ近藤さん。俺がそんな事するわけないじゃないか」

「……だったら良い。……引き留めてゴメン」

「いや気にするな。それじゃ」

「……うん」

そう最後に言っただけでその場を後にしてプールの更衣室へと向かう。途中で滑って転びかけたが、何とか持ちこたえて何事もなく更衣室へと辿り着いた

が、まさかここからそんな事になるとは予想もしていなかった……いやゴメン、なんとなくは予想してた

「ふう……」

とりあえず疲れたので、そこらにあつた椅子を自分の元へと運んできて座る。その時にズボンから水が絞り出た。どれだけ濡れていたらんだろうか……

まあこんな事をしている場合ではない。早く着替えないと

俺は座っていた椅子を立ち、ワイシャツの一番上のボタンに手を掛ける。その途中でワイシャツを思いつき握ってみるとかなり雨水が絞り出た。本当にどれだけ雨に濡れたのだろうか……

まるでないあがらふおーるずのようだ

まずは1つ目のボタンを外す。そして2つ目のボタン、3つめのボタンと次々に外していく

そして4つめのボタンに手を掛けたとき、一瞬だけ何かを感じた

「……ん？ 気のせい……か？」

ちよつとそのままでいる。やっぱり気のせいだったらしく、周りの変化などは特にない

それでは気を取り直して4つめのボタンを外し

……キイツ

……正面からドアの開く音

慌てて反対側に身体を向け、顔だけをドアに向ける……が、何もない。多分勝手に開いてしまったのだろう

閉めておかないと大変な事になると予想した俺はドアに近づき、閉めようと

「油断したな真箏！」

「何いつ！？」

俺とした事が油断していた。まさかキイツ……俺をドアに近づけさせてそのまま飛びつこうって作戦だったな……！ だが！

「その程度の攻撃を食らう俺では」

……避けたことに失敗しました

いや、別に明日香が下着姿だーとか、裸でいるーとかそういうのではない。ちゃんとまだ制服でいるのだ。そう、制服で

いこーる着替えていないいこーるびしょ濡れ

つまーり

「……マズい」

「どうした真箏？ 顔を赤くして」

……透けてしまっているのだ。特に……その……あれだ…… 18
0度に近いアレ辺りの下着が……いかん、視線を逸らさねば

「本当にどうした真箏？」

「いや……ピンクなんだな」

「なっ！ どっ、どどどどうしてそれを！」

オイ、俺今なんて言ったよ。思いつきり言ったよな？ 見たこと
肯定したようなモンだよな？

視線を明日香に戻す。なんか顔を真っ赤にして訴えるような瞳で
こちらをジッと見上げている

「そ、その……アレだ。えっと……透けてて……」

「なっ……そ、そのくらい気にするな。別に恥ずかしい物ではない。
夫婦当然の仲なのだからな」

やっぱりそうなるのか。以前にその発言をそろそろやめい

「それに……真箏はこれだけでは済まないだろ？」

「明日香やめるんだ。スカートの裾を掴んでそのまま持ち上げるな
んて真似は絶対に止すんだ」

「大丈夫……今下は穿いていない」

「大問題だっ！」

まさかこの状態でパンツを穿いていないとは……万が一のことが
あったらどうするつもりだ！

「どうしたんですか明日香さん 何してるんですか？ トイレ行ってたんですよね？」

「何を言うかエル。私はちゃんとトイレ真筆の所に行つてくると言ったはずだが？」

「男子更衣室が明日香さんにとってのトイレなんですか!？」

「明日香！ 早急に病院へ行つてこい！」

「何を言うか2人も。ここは男子更衣室だぞ？ そもそもこんな所でトイレをする訳なからう」

いや、そうなんだけど……つかエルフィ、その格好でここに来られると目のやり場に……

「？ どうしたんですか神崎さん？」

「すまんエルフィ。早急にここから出て行くか、服を着るかしてくれ……」

「え……？ うわあっ！ あ、ああああの、こっ、こっここれはつつ……！」

「エル、お前……黒とは随分と勝負に……私ですら持っていないのに……」

「そこでそつという話題を出すな！」

男子の面前でそう下着の話をすな。正直な話嬉しいような気がするが……

いや、邪念を捨てよう

「とにかくくだな。早く着替えて」

「どうしたの3人も？ 早く着替えないとHR遅れるよ？」

「琉華の馬鹿ああああああつ……！」

「あ……いいじゃないこれくらい。前にもこんな事あったし」

「良くない！　ちつとも良くない！　それにあの時は見てない！」
「え……真琴くん、見たかったの？」
「やめろ！　これ以上俺を壊さないでくれ！」

もう助けてくれ。エルフィと明日香からは何か殺気が出るような気がするし、琉華に関しては、下は体操服のジャージなんだけど……まさか上は何も着けずに現れるとは……この3人の思考回路が気になって仕方がない

「ほら明日香、エル。早く着替えて……真琴くんも。なんならボクが着替えさせて」

「いいから女子更衣室に戻れ！」
「別にいいんだけどさ……真琴くん気がついてないの？　本当はこっちが女子更衣室なんだよ？」

……気のせいだ

「何を言ってるんだ琉華？　まるで俺が変態みたいな」
「真筆、外の張り紙を後で剥がしてみろ」
「とにかく着替えましょうよ！　もう面倒なのでここで着ます！」
「ちよっ……！　だああ！　エルフィはそこで下着を外そうとするな！」
「ぬっ、濡れちゃったんだから仕方ないじゃないですか！」
「それじゃあ私も……」
「もう嫌だ……！！！」

この後俺は3人を見ないようにして着替え　後ろからは凄い視線を感じながらだったが……まあなんとかHRには間に合ったのだ
それで余談。さっき明日香に言われたとおり張り紙を剥がしてみ

た。するとそこには『女子更衣室』と書かれていた

その理由についてなのだが、俺が来る本当に直前だったらしい。明日香が悪戯で貼ったそうなのだ。さっきの様な展開を作り出すためにやったことだとか

……朝から散々だったよコンチクショーー

#18 6月6日 前編(後書き)

後編へ続くb

『これから3時間目授業を始めます。よろしくお願いします』

朝にあんな事があってから約3時間が経過し、現在3時間目の授業の体育で皆が体育館にいる。皆と言っても全校生徒なワケがない。いるのは俺のクラスの1年4組、そして今日の合同クラスは5組。琉華と近藤さんがいるクラスだ

それで男女分かれて体操、先生の話、そして授業に取りかかる。

男子はバスケ、女子はバレーボールだ

正直言おう。俺はバスケが少し苦手だ

サッカーもぶつかり合うスポーツだが、手を使つてところが…

…アレだ

そんな事を思いながらもチームを作つてバスケを開始する……が、初戦は見学となり、健太と話すハメになった

「何か失礼なこと考えたる真筆」

「んな訳ないだろ」

……読心術。読心術を使えない俺に嫌気がさしてきた

「真筆、この前貸した本どうした？」

「……………」

頼む。今この場でそんな話をしないでくれ……これ以上変な話に繋がったらどうするつもりだ

「……ああ、家においてある」

「そうか……じゃあ早めに頼む」

「ハイハイ……」

そう適当に返事をして前を見る。そこでは男子たちによる熱い戦いが繰り広げられていた

体育用の靴と体育館の床が擦れ合う嫌な音、男子たちによる暑苦しい掛け声、外が雨により体育館に閉じこめられる湿気、バスケットボールの弾む音、俺の顔面に向かってくるバスケットボール……

「ぐぶっ！」

……俺の顔面に思いつきりバスケットボールが命中した

「いつてええええええええっ！」

「大丈夫か神崎!？」

慌ててバスケットをやっていた人（俺にボールを当てたであろう人物、杉山君）が俺に近づいてくる。そして両手を前で合わせてペコペコと謝ってくる

ただ痛かっただけで何処も問題はないはずだ
それに悪気がないなら許すしかないだろう

「あ、ああ……まあ大丈夫だ」

「悪い……俺が思いつきり神崎に向かって投げたばかりに……」

前言撤回

「なんでそうなるんだああああああっ！」

俺は目の前に転がっていたボールを拾い上げ、杉山君の顔面に向かってボールを投げつける。至近距離（1m弱）からの投擲だ。避けられるはずが

「（シュツ）本当にゴメンな神崎。後で何か奢るからさ、なっ？」
「う……まあいいか。戻れ戻れ」

……まさか避けられるとは思ってもいなかった。だってこの至近距離だぞ？

ま、後で何か奢って貰えるんだしいいか

「なあ真箒、念のため保健室行ってこい」
「は？ なんでだよ」

今度は横にいた健太に話しかけられる。この程度で何故保健室に行かなきゃアカンのだ

そう尋ねると、健太は俺の足下に向かって指を指す。そこには何故か小さな小さな血溜まり池が作り出されていた

「何があつたんだ！？」
「お前の鼻血だろ！？」

ああ……通りで鉄のにはいがするわけだ
ま、この程度の鼻血上を向いてれば……いや、鼻血が出たときは上を向いたらダメなんだ。つまんでいれば良いんだ
そう考えた俺は早速実行し、鼻血をせき止め

「真箒、お前の身に何が起こつたんだ？」
「ほんなほほへひひふなほ……」

せき止められない。まさか若干生まれた隙間、いや、もう押さえ
ても無駄なほど出血量が半端ないらしい。本当に俺の身体はどうな
っているんだ？

「しゃーねー……保健室行ってくるわ」

「あ、ああ……いつてら」

健太に見送られて保健室へと向かう。あーなんかこの状態で歩い
てると恥ずかしいわ……だってこの状態で女子のいる場所を通らな
きゃいけないんだぞ？

そんな事を思いながらもバレーボールをする女子を左手に見なが
ら体育館を出ようとす。その際エルフィがレシーブミスして転ん
でいる姿が見え、こちらに気がついたのか、顔を真っ赤にして慌て
ふためいていた

その時他の女子からは変な目で見られたけど

それで今度は琉華がサーブして見事に決めていた姿が見えた。そ
れでチームメイトとハイタッチをしていた。琉華はこちらには気付
かなかつたみたいだ

ジロジロ見ていたせいか、女子からは変な目で見られてしまった。
そろそろ視線を戻すとしますか

体育館出口まで後数メートルまで来た。そして左を見ると見知っ
た顔の女子がちょこんと座っているのが目に映った

近藤さんだ。体操着に着替えもせずに、制服のまま体操座りを
して他の女子がバレーボールしているのを見ているようだ。そして
こちらに気がついたのか、こちらを向いてくる。その際に目と目が
あった

まあいい。可哀想な気もしなくはないが、保健室に向かうと

「……神崎」

「え？」

近藤さんに呼び止められて再びそちらに目を移す。すると近藤さんは小さく手招きをしている姿が見えた

なので近くへ行くことに

「何、近藤さん？」

「……さつきエルと琉華を見てたけど……何？」

「What？」

「……言語がおかしい。……もしかして卑猥な事でも考えてた？」

「どーしたらそういう思考へと繋がるんだ？」

どうも最近 wars 部の女子が考えることがよくわからない。特にあの3人だが……まあ近藤さんはまだマシな方だ

だからといってその思考をどうにかしてほしい

「あのさ近藤さん。どうしたら俺がそんな事をすると思えるのだね？」

「……まず今朝。神崎はプールの女子更衣室に入って行って、出てくる際4人で出てきた。……更には毎朝のようにあの3人と登校して、その更にはこの前明日香に琉華とあんな事やそんな事をしようとしてたと聞いている。……だから神崎がそのような事を考えても不思議では無いということ」

「……あれは嵌められたんだ」

「……琉華との件は？」

「あいつが無理矢理……」

うん間違っではないない。というか近藤さんがここまで喋るとは…

…夢？ それとも世界滅亡へのカウントダウン？

「……失礼な事考えてる」

「滅相もない」

もう読心術とか読心術とか読心術とかの事を考えるのは止しておこう。まあ確かに世界滅亡へのカウントダウンは酷かったかもしれないが

「……とにかく神崎は自重すべき」

「それはあの3人に言ってくれ」

何で俺がそんな事を言われなくてはいけないのだ。そういうのはあの3人に言うべきだぞ！

「……神崎、聞かせて貰うけど……あの3人の事はどう思ってるの？」

「待つんだ近藤さん。急に話を変えないでくれ。そしてあの3人と同じような質問をしないでくれ」

まさか近藤さんまでそんな言動や行為をしてしまうようになってしまうのか？ いや、考えすぎだろう

「……で？ ……場合によっては神崎に《鈍感王》の二つ名を授ける」

「貰っても嬉しくないわ！ で、だな……あの3人は普通の友達だと思ってる！ それだけだ！」

「……わかった鈍感王」

「何を言うんだ！」

なんで俺が鈍感王にならなきゃいけないんだ！ まあ、こんな事を言う近藤さんには罰でも与えておこう

「……近藤さん、ちょっと目を閉じるんだ」

「……やだ。危険な匂いしかない」

「む……じゃあこのままでいい」

「……え、やめてほしい」

俺はデコピンをする手の形を作り、近藤さんのデコまで運んでく。髪の毛がちよつと邪魔だったので、開いている方の手で前髪をどけるが、何故か近藤さんは嫌がる様子もなかった

ま、これで俺の勝ち

「食らえ！ メテオサーブツッ！！」

「え？」

俺がその声が出た方を見してみる。

体育用の靴と体育館の床が擦れ合う嫌な音、女子たちによる元気な掛け声、外が雨により体育館に閉じこめられる湿気、バスケットボールの弾む音とバレーボールをサーブする音、俺の顔面に向かってくるバレーボール……

「じぶあつー！」

「……助かった」

「大丈夫望？」

「……うん。ありがとう琉華」

まさか琉華に攻撃されるとは

「何をするんだ琉華！」

「それはこっちの台詞だよ！ ボクにはそんな事してくれないのに
なんで望にしようとしてるのさ！」

「お前はMかつ！？」

「いろいろ間違ってる！」

まさか琉華がM体質だったとは……ずっとSな人だと思ってたけど……人は見た目で判断してはいけないんだな

「まあとにかく……保健室連れて行ってあげるからさ、ほら立つ」
「あ、ああ……忘れてた」

琉華に手を差し伸べられて、それを掴んで立ち上がる

「よし、じゃあ行こうか。誰もいないといいね」

「なんでだ？ 先生いないとダメだろ」

「……そ、そうだよ。ま、行こうか」

「？ あ、ああ……」

そんなこんなで俺と琉華で保健室へ行く事になった

それで保健室に到着したら……先生は今日出張だとかでいなく、それで琉華に手当をして貰い何故かベッドに横にさせられた
で

琉華に乗つかられるわ、手を捕まれて自由を奪われるわ、その自由を無くした手を琉華の胸まで運ばされるわ、顔が近づいてくるわ
で……

更にエルフィが入ってくるわ、お説教されるわ……

なんで朝からこんな事になったんだコンチクショー……

本日の授業も全て終わり放課後。俺、エルフィ、健太のいつものメンバー3人でいつものように……ではなく、極力雨に濡れないように全力で走って部室へと向かっていた。昇降口から何気遠いんだよあの部室は……

何度か転びかけたが、転ぶ事はなく部室近くの屋根まで来た。一旦そこで雨宿りしてから再びダッシュで部室へと向かう

そして

ガチャ

「おう、来たか若いの」

「……なんでそんな悠々としてるんですか？ 以前に何故濡れてないんですか？」

「傘と言う名の便利アイテムがだな」

ここから部長の傘についての説明が始まった。相変わらずの性格だ

「それにしても……3人だけか？」

「え？」

「そういえばそうですね、皆さんどうしたんでしょうか？」

「まだ校舎にいるんじゃないか？」

部長にそう言われて部室を見渡すと、確かに俺たちしかいない。他のみんなは何処で何をしているのだろうか。ま、心配する必要はないだろうが……

「ま、座れ。今度の県大会のトーナメント表が届いた。目でも通しておけ」

「……はい」

部長からトーナメント表を手渡され3人で覗き込む。今回の出場校は全部で20校。つまり東西南北、中央の5地区から4校ずつ上がってきたという事になる

それでシード校が4校。もし俺たちが勝ち上がったとしたら、シード校との戦闘になる……

で、初戦の相手は……かみきた上北高校、都央地区の高校だ。もちろん実力の程はまだわからない。が

「そんなお前らの為に今日はプレゼントを用意してやったんだ。ありがたく思え」

まだ3人しかいないのだが、部長はプレゼントと称する何かをテーブルの上に置く。データスティックだ。おそらくこの中には

「この中には……」

「エルフィ、耳を塞ぐんだ」

「え？ ハイ……」

急いでエルフィに耳を塞がせる。だつて……なあ……

「エロDVDをダビングした物が入っている」

「そんな物を俺たちに渡してどうするんですか!？」

「もち僕は貰うけどな!」

この部長の考えてることが全くもって理解できない。この前のユニフォームといい……

「ま、冗談だ。全員が揃ったら話すとしよう」

「全く……エルフィ、もういいぞ」

「あ、は、ハイ」

「それにしてもまだか？ 遅いぞ他の連中」

ガチャ

「お、噂をすれば来やがったか」

「黙れアホ」

早速反抗的な態度で入ってくる明日香。どうやら制服は完全に乾いたらしく、体操服じゃなくなっていた

「ちょ、ちよつと明日香！ そこで立ち止まってないで入ってよ！

ボクたちが濡れる！」

「あ、ああ………濟まない琉華」

明日香がドアの正面から離れると、頭が濡れている琉華が入ってきた。なんとというか………少しだけ朝の光景を思い出す

「………酷い雨」

今度は近藤さんが入ってきて

「雨は天の恵みだ。それに悪気があるわけではなからう」

最後に光久。武士口調で隻眼、ポニーテールが特徴の男子だ
今日はその髪の毛もびしょ濡れだ

「よし、全員揃ったな。お前ら席に座れ。渡したい物……というか、まあ……今から行ってこい」

再びデータスティックをテーブルに置く部長。『行ってこい』って事は、おそらくVWに行ってこいと言う意味だろう。つまりそのデータスティックの中身は……

「このデータスティックにはだな、今年の県央大会のデータが入っている。今回の初戦に当たる上北高校のデータも入ってるからな、今からVWに飛ばすから今の内に確認しておけ。以上、準備開始」

そう行つた部長はすぐにソファに横になり、どうしてもよさそうにこちらを見ている。だが、あんな顔をしていながらも色々と考えているのだろう

「ふむ……とりあえず今まで通りの作戦で行くぞ」

「だな」

「ですね」

「りょーかい」

「承知」

「上北かあ……」

「……琉華？」

なんだか琉華だけが嫌そうな顔をしたような……気のせいかな？

Wars program setting start .
field coating
enemy program


```
final battle data install...co  
mplate  
are you ready... Wars battle  
start!」
```

ビーーーーッ!!

……延長戦の開始を告げる合図がVW内に響き渡る

何故延長戦かって？ とりあえず2回戦までの結果報告。1回戦
目はこちらの勝ち、2回戦目は相手の勝ち

2回戦目はちょっと油断してしまい、遠くから2人とも狙撃され
てやられてしまい、それでエルフィがやられて負けた、と。エルフ
イも俺と明日香が狙われている場所を見逃していたらしい

ま、今回勝てば良いんだ！

「真筆、今回はさっきのようにはいかないぞ」

「わかってる……まさかあんな遠くから狙撃されるとは思わなかつ
たからな。ま、2度同じ手は通用しねえよ」

「そうか……まあ、目指すは大將だ。敵を見つけ次第戦闘に入る」
「了解」

明日香と横に並んで走りながらそう答える。すると、明日香のそ
の先に人影が俺の視界に入る

するとエルフィからPLが入り

「神崎さん！ 20m右方です！」

「わかってる！ 今俺にも見えた！ 行くぞ明日香！」

「えっ……あ、ああ！」

一瞬なんなのかわからなかったのか、明日香はちょっとだけ驚いていた。そして俺と明日香で敵がいる方向へと向かい、武器を取り出す。敵もこちらに気付いたのか、武器……（俺は初めて見るが）双剣を取り出していた

「真箏！ お前は左からだ！」

「言われなくとも！」

敵の少し手前で明日香と2手に別れる。だが敵も弱くはない。巧みに回避しながらこちらへと接近してくる。が、甘い！

「敵は真箏だけではない！」

もう後数mで俺の所へ辿り着こうとしていた敵の背中が切り裂かれる。後ろから明日香が奇襲したのだ。全く……甘い

『神崎さん後ろです！』

「何っ!？」

後ろを振り向くと、そこには遠くで狙撃銃を構えている敵の姿があった。なんつーかこのパターン最近多くねえか!？

そんな事を考えている内に敵が引き金を引いたのか、こちらへ弾が飛んでくる……って、マズい！ 反応するのが遅すぎて回避できねえ！ しかも相手の腕は良く、俺の心臓目掛けて銃弾が飛んできた。これはやられる……！

「くっ！」

「なっ……大丈夫か真箏!？」

「大丈夫だ！ それよりあの敵を……！」

今の銃弾は何とか心臓を逸れて俺の右腕に命中する。別に大したダメージは無いが、やっぱりいてええ……

ま、そんな事を考えている場合ではない。俺もアイツを何とかしに行かなければ……！

俺は明日香に続き、先程俺の右腕に銃弾を命中させた敵へと接近する。その間に何度か弾を発砲されたが、もう見切った。殆どの弾を回避して接近する

が、甘かった

『明日香さん！ 右です！ 真琴さんは左からです！』

「何！？」

それぞれがそれぞれの方向を見ると、敵の武器はマシンガンなのか、多くの銃弾がこちらへと飛んでくる。回避しないとこれはやられる……！

そう思った俺は目の前の敵を放置し回避に専念する。でもこのままじゃあの敵に……！

「くっ……明日香！ 俺がコイツらを惹きつける！ その内にあるスナイパーをやれ！」

「なっ……！ 無茶だ！ その前にコイツらの狙いは私たち2人だ！ ターゲットを変更するとは思えん！」

「それもそうか……！」

それじゃあどうしろと！？

と、思った瞬間に助けが入った

「大丈夫か真箏！ 鶴！」

「助太刀いたす！」

その声がして数秒後、俺と明日香に向かって放たれていた銃弾はピタリと止まった

「健太！ 光久！ 助かった！」

「何、礼には及ばぬ」

「左様。光久の言うとおりだ。鶴！ 残りを倒せ！」

「私に命令するな！」

とか言いながらも残ったスナイパーを刀で斬りつけて倒す明日香。これで何とかなったか……？

敵の残り人数3人

「悪かったな健太、光久。助けて貰って……」

「何を言うか真箒。丁度お前たちがやられかけてたのが目に映ったから助けに来ただけだったの」

「本当はたまたま敵が目に映っただけだったのだが……」

「まあいい。お前たちは陣旗を指せ。私と真箒は引き続き大将を搜索する。では行け」

「了解（承知）」

明日香がそう言って2人が了解すると、その場から段々と離れていった

よし、俺たちも対象の搜索を再開

『大変です皆さん！ 藤堂さんと近藤さんがやられました！』

「何っ！？」

『近藤さんは大将に！ 藤堂さんは残りの2人です！ 大至急戻ってきて きゃあっ！』

ビーーーーーッ！！

「あ……」

「エル……」

エルフィの悲鳴を最後に聞いて試合終了の合図がVW内に響き渡った。つまりエルフィ……大将撃破により俺たちの敗北だ

「お疲れだったな若者たちよ」

戻ってきて早々部長にそう言われる

「ええ……大変ですから俺の代わりに部長が参加してください」

「断る。俺はWarsをやらん」

「だったら何故ここにいるんですか？ 強いとかそういう話を聞きましたけど？」

「ここにいる理由はなんとなく。強いとかそういう噂はデマだ」

本当にそうなのだろうか。ここにいる理由はともかく

「とにかくくだ神崎。このままで勝てない。だからあと2日練習期間がある。その間に1勝だけでもしておけば大丈夫だ」

「はい……」

「それでは……解散」

その合図で今日の部活は終わりとなった

この調子では初戦で敗退になってしまっただろう。だからデータに1勝くらいはしておこう。そうすればなんか安心できそうだ

来週の月曜から始まる都大会に向けて俺たちは本日2度目のVW
に自主連と言う名目で行くことになった

#20 wars都大会1日目(前書き)

遅れて申し訳ございませんでした……

#20 Wars都大会1日目

6月11日。Wars都大会1日目の朝

前回と違って何事もなく起床することができ、現在自分の部屋でくつろいでいる。理由は時間が余りすぎてしまっているから

要するに早く目が覚めてしまったというわけだ。今日は5時半に起きるように目覚ましをセットしておいたのだ。で、その目覚ましが鳴る1時間前に目が覚めてしまった。人には絶対にある経験だろう。更にその後寝付けずにずっと起きていてしまうという

それで現在時刻5時。本来の起床時刻の30分前の時間

起きてからの30分何もせず……というわけではないのだが、ベッドの上に座って机の上に置いてある今日の荷物を眺めていた武器、ユニフォーム、トーナメント表、その他の道具

昨日のうちに武器の手入れはした。ちゃんと銃弾の装填もしてあるし、銃弾の予備だって用意した

ユニフォームだって先月に着て、洗って……言っちゃ悪いがそのままだ

トーナメント表も昨日穴が開くほど眺めていた。知っている学校名はないかと

一応知っている高校はあるにはある。だが友達がWarsをやっているとは限らないわけだが。もし当たったら当たったで、その時だ

それで6日から気になっている事が無くもない

“上北高校”

この学校名に琉華が反応した理由。俺たちにとってはどうでも良

いことのような気がする。でも何故か気になって仕方がない……いや、気にしたら負けだろうか？

まあとにかく気にするのはやめよう。今は今日の対戦相手の事を考えることに集中しよう……って、相手「上北高校」気にしてる所

……ダメじゃないか

とにかくだ。その事を気にするのはやめて、相手の出方とかを考えておこう

……6日に戦ったデータ、都央大会での上北高校の戦闘データ。結局あの日は勝利することが出来ずに終え、7日、8日、そして土曜の最後の演習でも勝利することは出来なかった

良いところまではいっていた。が、最後にどうしても油断してしまつのか、それとも本当に実力不足なのか、最終的には負けてしまう。つまりこのままの状態で行くと今日は負けてしまつかもしれない。11回戦敗退。それだけはどうしても避けたい

だから今日は勝つ

「さて」

その決意を心に決めた俺はベッドから立ち上がり、机に向けて一歩歩き出す。歩き出す……歩きだそうとした

「……何故だ」

今俺の姿勢は左足を挙げた状態でストップしている。言うておくが結構辛い。今にもバランスを崩して足をついてしまいそうだからだ理由は足下にある何かを踏みつけそうで、足を下ろせば踏みつけ

てしまいそうだから

何故俺はこんな近くにある物に気がつかなかったのだろうか。俺の視線の先には机があった。そして俺が踏みつけようとしている物はその中間地点に存在しているのだ
それに気がつかなかった

理由はとつても簡単な事だろう

……机だけを眺めていたから。つまりそれ以外の物は視界に入らなかったということ

自分で言うのもアレだが、流石に気付けよ俺

ま、そんな事はさておき、今俺の足下にある何か。その説明をさせていただきたい

俺の目に映っている物は、まず自分の左足だ。その足は空中ですトップしている

その左足の先に移る物。それは見覚えの無いタオルケット。結構可愛い柄で、女子物といったところだろうか

そしてそのタオルケットの中にある物。とりあえず“人”というのは間違いはない。人の形が浮かび上がっており、呼吸をしているからかたまに膨らんだり沈んだりする

目線をすこし左に動かす

そこには2本のほっそりとした足。結構白く、たまに指先が動いている

目線を戻し、そのまま右へと動かす

……見覚えのある顔、見覚えのある長さや色の髪の毛

普段からこんな顔してくれていたらしいのにか思ってしまう

「まことお〜……わたしはここにいるぞお〜……」

その寝顔を眺めていると寝言が聞こえてきた。何が「真箏」、私はここにいるぞ〜」だ。見てればわかるわボケ

「よおしそつだなあ……今日も……」

……何を見ているんだこの娘は

「ふふ……ふふふ……あつ」

そろそろ叩き起こした方がいいかもしれない。なんだかそろそろお茶の間にお届けできない声が寝言として発せられそうだし……しかも夢で見ているのは考える限りで俺辺りだろう

ま、普段と違って可愛らしい寝顔をしている明日香さんを起こす
としよう

「おい明日香、起き」

「あつ、そこはまだ」

ブウンッ……ゴスッ！

あれ？ 世界が横に動いているような

……無理もない。理由は知らんが、開脚された明日香の左足が俺の頭（左脳辺り）にクリーンヒットしたのだ
多分とんでもない夢を見ているに違いない

「ん……んう……あれえ？ もうあさか？」

「~~~~」

「どうしたまこと？ あたまがいたいのか？ わたしがなでなでしていたみをとばしてやるっ……」

頭を抱えている俺に明日香が近づいてきた

「どれどれえ？ みせてごらん……はっ」

「え？」

「まっ、ままま真箒！？ どうしたその顔！？ それに私はなんでこんな所に！？」

ちゃんと覚醒したのか、明日香の口調がいつも通りに戻った気がする。目もパツチリしている

「というか何が「なんでこんな所に！？」だよ

「なんでって自分で来たんだろ？ というか勝手に人の家へ上がって勝手に人の部屋に入るな」

「うむそれはちゃんと覚えている。昨日の……いや、今日の1時にお義母さんが家へ上げて貰って、それで真箒の部屋に来て自分で持ってきた就寝道具を広げ……それで寝て」

「色々聞きたい事がありだが、本題を解決させるとしよう」

「何故私は今真箒の目の前にいるんだ？」

「……お前寝ぼけてただろ？」

「……おそろく」

明日香の問題無事解決(?)

この後少し(5分弱)だけ何故俺の部屋に来たのか理由を聞いた
り、目的を聞いたりして部屋を出る準備を開始し始めた

「真筆、RF-Xp05型の銃弾はこれで足りるのか？」
「ん、そうだな……まあ足りなくなったらその時だな」
「そうか……」

明日香が机の上に置いてある武器を見ている間にユニフォーム……ワイシャツに腕を通す。まあ銃弾はなんとか持つだろう。土曜日までの演習で弾の消費が激しかったからな。そろそろ買に行かないといけないかかもしれない。試しに寄ってみるとするか？ 開いてないだろうけど

「仕方ない。コンビニで買っぞ真筆」
「コンビニで売ってるのか!？」
「知らなかったのか!？」

まさか銃弾がコンビニで売ってるとは思わなかった。世の中物騒になったのだろうか

「プリンくらいコンビニで売っているだろ!？」
「あ……そっちね」
「……お前は何と間違えたんだ」

言えない

この後warsの店は開いているのか聞いたところ、開いていると答えてくれた

理由は大会の最中だからだとか。まあ会場でも売ってるらしいけど

「よし行くか」

「あ、ああ……真筆」

「ん？ どうした？」

「……勝とうな」

「何言ってるんだ今更。まあ最初あんなだった俺が言う事でもないけどな」

「ふっ……そうだな。行くか」

……この後朝食を取るためにリビングへ向かうと、何故かwar部の全員（部長除く）がテーブルを囲んでいた

「よし、全員いるな」

「何を今更確認してるんですか」

「済まないな神崎。さっきまで俺にはお前の姿が見えなかったものでな」

「俺には貴方の後ろにいる人が気になるんですけどね」

「なんだ神崎？ お前悪い物でも食べたのか？ 幻覚見るだなんて相当ヤバイぞ？」

「そうですね。そろそろ俺危ないかもしれませんね」

「よし、今すぐ病院に行つてくるんだ」

「いえお気になさらず。これくらいどうってことないです。それに俺がいなくなったら部長が出場することになるじゃないですか」

「そうだな。それじゃあ頼むぞ神崎」

「はい」

「そろそろ僕のことを幻覚か気のせい扱いするのはやめてくれないかい！？」

「あれ？ 吉は クズいたんですか？」

「全く気がつかなかったな神崎」

「ですね。あれ？ なんだかさっきの幻覚に似ているんですが」

「相当ヤバイな神崎」

「ええい！ いつまでこの僕を侮辱するつもりだ！ なんの為にここにいると思っっているんだ！」

「え？ いたの？」

「……………」

さて、そろそろ可哀想になってきたなこの人

「で、吉原。なんでこんな所にいるんだ？ 哉町は2回戦敗退して
都大会には進出してないだろ」

「ふっ、よく聞いてくれたね。応援するために来てあげたのさ！」

「よし神崎、お前は準備してろ。俺も直に行く」

「え、あ、はい」

俺は先に行っているみんなの後を追いかけた

「それで拓人、本題は何だ」

「流石は西宮君だ。すぐにわかるなんてね」

「何年の付き合いだ？ それと美里、隠れてないで出てこい」

「バレてら……………」

「拓人が話しあるってんだ。お前がいるくらいわかるっつか、お前も都大会には進出している訳だからな」

「流石だよ。それで本題だけ……………」

「……………永久迷走についてか？」

「……………」

「流石だな雄太は……………まだ何も言っていないのに」

「西宮君、まだ気にしているのかい？」

「……………1年前の話だ」

『あのね、俺たちも雄太と来斗のことは……』

『その名前を出すな。それで本題に移せ』

『雄太……』

『わかったよ。それじゃあ本題に移ろう。これが僕が調べた資料だよ。とりあえず前例はまだ少ないらしい。その事含めまだ過去に6回しか起こっていないらしい』

部長と別れ、みんなと合流し、現在最終チェック中
その最中

「げ」

「……琉華？」

琉華が何か声をあげ、全員が目が目した

何があったかというと、銃弾が残り少ないらしい。つまり俺と似たような状態になっているわけだ

俺は結局銃弾を買わずに会場に来た。だからなあ……

「はは……ちょっと弾買ってくるね」

「そうか」

「すぐ戻ってくるから」

「あ、だったら俺も」

「真筆くんの分も買ってくるから大丈夫　あっ」

ドンッ

琉華がベンチを立ち上がり会場臨時売店へと向かおうとした瞬間、琉華が目の前にいた男性とぶつかってしまった。その人は琉華の事

を見下ろしているが……なんだ？

「おい、気をつける」

「あ、すいま……せ………」

琉華がぶつかつた相手を見上げると、段々と顔が強張つていったのだが？ もしかして知ってるヤンキーだとか？ それはマズいな

「ほれ、お探しの物はこれか？」

「う………」

「え？」

琉華とぶつかつた男性は紙袋を琉華に差し出す。別に何も捜し物はしていなかつたはずだ。あつたとしたら銃弾だろう。この人は何がしたいのだろうか？

「いいよ。別に今から自分で行こうとした所だし。それに敵同士なんだからそれで手加減するとかあり得ないからね」

「え、ちよ、琉華」

なんだなんだ？ すごい琉華がタメ口なんだが？
マジで知ってる人か？ つか敵って言う……？

「あん？ テメエ誰に向かって『琉華』って呼び捨てにしてるんだ？」

「へ？」

「うつさい。早く戻ってよ」

「だけどな琉華………」

理解

「お兄ちゃん……お願いだから自陣に戻ってよ……何かと恥ずかしいから……」

「……………ぶっ!!」「……………」

予想してたとはいえ、全員で吹き出してしまった

「だけどな俺は琉華が心配でな」

「さっきも言ったでしょ？ 敵同士だからって……そう思っのなら棄権でもしてくれない？」

「う………わかったよ」

琉華が冷たくそう言い放つと、琉華のお兄ちゃんという人はこの場から去っていった。なんていうか……外見と中身の違いが激しい人だ

一言で言うならヤンキーのシスコンだろう

「はあ………ごめん真箏くん。気悪くした？」

「いや………」

「凄い感じのお兄さんでしたね………」

「私も驚いたな………」

「……………うん」

「あれがしすこんというものなのか？」

「そうだな光久。それがしっくりくるな」

思い思いの反応を示すみんな。そりゃアレみたらそう思うわな

「ま、それは置いて、準備しよう。すぐ始まるよ」

琉華がそう言うと、全員が最終準備を始めた

そしてその10分後

```
Wars program setting start .  
field coating . . . compile .  
enemy program . . . compile .  
final battle data install . . . co  
mpilate  
are you ready . . . . Wars battle  
start! !」
```

の30分後

正直よく粘った方だと思っわ。だって土曜まで一回も勝てずに…
…なあ？

1回戦目は負け、2回戦目は粘って勝利。それで現在延長戦が始
まるって いや、もう始まったんだ。俺と明日香はもう動き出し
ている

今回の対戦高、上北高校。つい先程まで話していた人、琉華のお
兄さん。名前はまだ無い……のではなく、聞いていない。というか
琉華が言おうとしない。それに部長のことが少し気になっていたの
か、選手名点呼の時間きそびれてしまった

ま、そこら辺は問題ないか。問題があるとしたら部長。さっきク
ズと話していたところまでは見ていたが……その後試合が始まるま
で戻ってこなかった。何か話していたのか。それとも用でも足して
いたのか

まあ部長だし大丈夫か

とりあえず今は試合に集中つと

俺と明日香は試合開始直後からずっと直進していて、3分経とうとしているが敵の姿が全く見あたらない。エルフィからも連絡が入らないということは敵は近くにいないのだろうか
出てくるなら出てきてくれ

一応確認しておこう。敵の戦闘スタイルは今と全く似た状態のもの、つまり敵（俺たち）に見つからないように行動しているらしい。それで陣旗とサポートルームに近づき、それで倒す
データではそのような戦闘方法を用いられなかったもので、はっきり言って厄介だ。もしもそのまま気付かれずに陣旗、大将の撃破なんてされたら……なあ

まずは敵を見つけないとどうにもならないのだ

「真筆」

「ん？」

明日香は急に立ち止まり俺を呼び止める。見ている方向は俺から見て左の方向、そちらには一直線上に道（道路だけど）が続いている。何か見えたのだろうか

「どうした明日香？」

「……いる」

「え？」

『敵を捕捉しました！ 明日香さんの右方30m地点です！』

明日香の言うとおりその方向に敵がいたようだ

それがわかったところで早速向かうとしよう

「行くぞ明日香」

「いや、ここは私だけで十分だ」

お、珍しい発言が。いつもなら2人で攻め込むというのに……なんだろうか

「なんでだ？」

「さっきまでの戦闘を思い出せ」

「……あ」

そうだ思い出した。俺と明日香が2人で行動しているのがわかってるのは、1人を囷にしてその間に集団でがら空きになった場所を通過する。説明が難しいだろうが、とにかくこの道を空けるわけにはいかないということだ
そうなら

「いや、実力はお前の方が上だ。お前がここで待機してくれ」

「そうか？ だったら……」

『そんな事言ってる場合ですか！ 周囲7名に囷まれています！』

「何！？」「」

冗談じゃない。ここで全員で俺たちをやるか……？ というか囷まれたら逃げ場が無いじゃないか
どうしたものか

「どうする明日香？」

「どうしたもこうしたも……せめて2人は倒しておかないとな。もしくは佐々木か明智に任せるかだ」

「やっぱそつなるか……」

流石に2人だけで7人を相手すると保つわけがない。だから戦えるところまで戦うとするか

「来るぞ……」

「ああ……そつちは任せたぞ明日香」

「ふっ、言われるまでもないな」

その言葉を最後に4方向から銃弾が撃ち込まれてくる。全部マシンガンだろう、銃弾が止みそうにない。更に上空2方向からの狙撃、そして俺の正面から槍を持って走って向かってくる敵の姿。その銃弾に当たってやられればいいのに……

とか悠長な事を考えている場合ではない。現に結構な銃弾を浴びてしまった

突っ込んで来ていた敵はもう沈んでいた

銃弾を回避……それでも食らってしまうが敵に向かって銃の引き金を引く。引いたのは良いがやっぱり届かない

「くっ！」

「明日香！」

あちらもあちらで相当なダメージを受けている。これではすぐにやられてしまう……

健太と光久が急いでくれれば……！

というか今ここでふと思った

敵……バカだろ

ビーーーーーッ!!

やっぱりな

正直に言おう

データの方が強かったよコンチクショー

#20 wars都大会1日目(後書き)

すいません

久々に書いたもので……

途中〜最後が適当になってしまいましたorz

#21 1回戦目後

都大会の一回戦目を勝利で終え、その約30分後。現在俺たち（と言っても俺、明日香、エルフィの3人だが）は適当に会場内をぶらつき、他の学校の試合観戦をしたり、銃弾の補充をしたり……とにかく会場内をぶらついている

で、現在見ているのは本条高校ほんじょうこうと西蓮寺高校さいれんじこうの試合。見ている理由は簡単。もしかしたら次に当たる可能性があるからだ

可能性があると言ったのには理由がある。今上げた高校は次にシード校……箕輪高校みのわと当たることになっている。つまりこの試合に勝ったとしても次に負ければそれで当たらなくなる。仮に上がってきたとしたら……ま、そういうわけで敵の動き方とかを学習しているわけだ

とりあえずこの試合を見ていて思うことがある。どちらも凄いうちの学校とは比べものにならないんじゃないかー、ってくらい凄

……よく勝てた俺たち

まああの試合は中々酷かったもので……（前話参照）。データの
方が強かったよ……正直

それはさておき今見ている試合の様子は……ダメだ。見てもなんだか……俺、俺たちが格下に見えて仕方ないじゃないか
学校戻ったら即行演習だなこれは

そんな事を思っていると

「神崎さん、神崎さん」

「ん？」

「あの人……」

エルフィに話しかけられ、それに反応する。するとエルフィは俺の背中の方を指さす

何かあるのだろうか、と思いその指を指した方へ振り向いてみる。そこには怖い男性……シスコン（俺が決めた）こと琉華のお兄さんがこちらを睨み付けていた。すげえ目が怖いです

まー無視

なんか言われてもアレだし

つーわけで再び試合を観戦

「あいこらテメエ」

「ハイ……」

……無視出来なかった

「ちよつといいか？」

「へ？」

「いいからちよつと来い」

怖い顔のまま小さく手招きをされる。金でも巻き上げられるのかなあ……それともボコボコにされるのかなあ……とか思いながらも

「どつした真筆？」

「わり、ちよつとトイレ」

「早く戻ってきてくださいね」

「ああ」

2人にはそう言ってその場から離れる。そして琉華のお兄さんの前へ。ちなみにさつき琉華に名前を聞いたところ、藤堂架琉かけると言っらしい。「琉」だけが共通点だな、うん

そんなこんなで近くの自販機前

「それでなんですか？」

「……お前琉華とどういう関係だ？」

「へ？」

何を言い出すんだこの人は。どう考えたって友達、同じ部活の仲間、とかいう答えしか無いじゃないか。それ以外に何があると言っんだ！

「ただの友達ですけど……」

「……それだけか？」

「あとは同じ部員ですが……」

「本当にそれだけか？」

「え、ええ……」

やべ、すげえ怖い

というかこの人は何を聞きたい

「……わかった。それならいい。が」

「が？」

「それ以上の関係になったらブチ殺す」

うわーこえーまじかー

凄い殺気に満ちた目で俺の事を睨まないでくれ！ どうも死にたくなってきた！ いや死んだらアカンか……とにかくやべえ！

とりあえず『それ以上の関係』とはなんだ！

ま、聞いたら聞いたで殺されそうだからやめておこう

「わ、わかりました」

「以上だ」

話が終わったらしいのでその場をすぐに立ち去った。もちろんダツシユで

その際、「あんなのに琉華を渡すか」とか聞こえたのだが……改めてあの人が琉華にベタベタ(?)なのかがわかった気がした

琉華のお兄さんに開放され、現在エルフィと明日香がいる場所へと向かう途中。今になって思い出したことがある

部長はどうした？

さつき試合が始まる前にクズと話をしているのは見えたが、その後。試合が終わってから50分が経過しようとしているが、その間ずっと姿を見せていないのだ

なんだか嫌な予感がしなくもないが、部長の事だ。大丈夫に違いない

でも万が一……ないよな。部長に限って、うん

……思えば何の話をしていたんだろうか。それにクズ……吉原先輩と部長の関係は一体何なのだろうか。初めて会った時はあんな態度だったからアレだけど……(#10参照)。今となっては結構仲

が良く見えて仕方がない（もちろん虐め虐められるの意味で）
探してみるとするかなあ……いや、いいか？ いや探すべきか？
でも面倒だしな。探して何になる？ 誰得だよ
よし探そう

エルフィと明日香には悪いが戻らずに探すことにする。なんだか
気になるし

でもでも神様はそこまで優しくないのです

「どこ行くんですか神崎さん」

「遅いから私たちも探したじゃないか」

「そうだよ真箏くん。一人でどこ行こうとしてるのさ」

……神様は優しくないのです
なんでこの3人なのだろうか

「いや、ちょっとトイレに……」

「トイレなら目の前じゃないですか」

トイレは後方、俺が向いてるのはトイレの反対方向。どこからど
う見てもトイレから離れようとしている風にしか見えないうら
さーてよく考える。ここでいける嘘は……

「ジュースを買いに」

「自販機ならトイレの目の前だろ」

〓 後方

「……銃弾を買いに」

「トイレの裏だよ？」

……どうすればいいのだろうか
というか何故トイレに集中しているんだ

とにかくだ。なんとか嘘をついてこの3人から逃げ出

『琉華あああ！』

せないかもしれない。遠くから琉華のお兄さんの声が聞こえてきたからだ。もしここで絡まれば面倒かもしれない
いや、ここはむしろ逃げないといけないな、うん

「ふむ……よし」

「？ 神崎さん？」

「どうかしたか？」

さて……どうやって逃げて、どうやって部長たちを探すとするか

……これしかない、か

「」「」「」

その場に流れる沈黙。普段の俺なら耐えることができないかもしれない。が、今日の今だけは違う。敢えてこの空間を作り出しているのだ

まあ俺らを除けば周りは試合とか試合とか琉華のお兄さんとかの
声でやかましいけど

とにかく、この俺たちのいる空間（俺を中心に10m）に沈黙が
流れている……

さて、この作戦……上手くいくか……

無言で3人を見つめる俺。無言で俺を見つめる3人。……今だ！

「あーっ！！」

「……」

今俺がしたことは非常に簡単だ。3人の後ろに向かって指を指し、それに気を取られている内に逃げ出すという作戦に出た……のだが、それまではいい

……3人とも、気にした様子もなくこちらを見ているじゃないか

だが、失敗がなんだ！ このまま逃げてしまえばいいんだ！

「さらばだっ！」

「……あっ」

身を翻し3人から離れようとする。そして1歩駆け出す。するとある人物が目映る。が、こちらには気がついていない。というか気がつかないでくれるとありがたい人物だった

と、いうわけで

更に身を翻し（つまり360度回転した）、エルフィたちがいる方向へと駆け出す。そして3人の陰に隠れこんで……

「ちょ、ちょっと真箏くん？」

「あのその……こういふ場所でこういふ事はちょっと……」

「ま、まあ真箏が望むなら……」

「頼む。そのままできてくれ。動かないでくれ。俺が死ぬ」

「「「へ？」「」」

この3人は知らなくても良いような人物なのだ。とにかく気がつかないでくれれば……

とりあえず今日、この日はずっとこの体勢で過ごし、wars都大会1日目（1回戦目）は幕を下ろした

warsの都大会、1回戦目が終わった4日後。つまり週末
来週の月曜に2回戦目があるので、今日は最終練習の為に部室へ
全員集合………するために部室へ向かっている

ちなみにメンバーは俺、健太、光久の男子3人。いやあ………あの
問題児（女子3名）がいないと楽でいいですなあ………

これを聞かれたら俺は確実に殺されているだろう

で、現在職員室前にいるの………だが

理由はとつても簡単。健太が授業中に呼んでいたエロ本（健太曰く聖典）を没収されたので、健太はそれを取り返す為にここへ来ている。それで俺と光久はただの付き添い

………女子がいない理由の一つでもあるのかもしれない

とにかく職員室前。健太は意を決したのか、職員室のドアをノックし、そのまま入っていった

『失礼しまーす』

これで廊下にいるのは俺と光久の2人だけ。思えばこの組み合わせは結構珍しいんじゃないかと自分でも思ってしまうくらいに珍しい。今までで1、2回くらいしか無かったような気がする。もう学校始まってから2ヶ月ちよつと経ってるのにな

「真筆殿」

「ん？ どした光久？」

どうでもいいような事を考えていると、光久に話しかけられた。なんだろう、どうしたのだろうか

「質問なのだが……健太殿が授業中に没収された“えろほん”というのとは一体どのような物なのだろうか。拙者にはよくわからぬ」

「まさか男子高校生でエロ本を知らない人間がいるとは……」

正直ビツクリだ。でも光久ならあり得なくもないかと、というわけで丁寧に教えてやるとしよう

「光久、エロ本と言うのはだな
「ふむ」

正直な話、そういう物を読み出したのは高校生になってからで、入学してちよつとしてだったな、健太に勧められて読んだところ……と、いうわけだ

それで今から光久に説明するのは健太に教えられたことでもある。なんか教えるのは嫌な感じもするのだが、光久が聞いてきたんだ。聞いてきたのが悪いんだ……とか考えたらいけないよな

そんな訳で光久に説明中

「ほう……では拙者たちの代の女子おなこや、大人の女の……そのような写真が貼ってあるというのだな」

「ま、そんなところだな」

「……………」

何故だろうか。光久の顔がすげえ赤い
無理もないのかね

「……拙者も健太殿に申し込んで借りるとしてみよう」

「え」

……まさかここまで話が発展してしまうとは。まあ現代を生きる
高校生男子だから仕方ないよな
俺も巻き込まれた人間だけどさ

そんなこんなで説明を終えた頃、健太の姿らしきものが職員室入り口のすりガラスに映る。そして職員室のドアが開くと、そこには健太のようで健太ではない男子生徒が突っ立っていた

……つまり健太ではないな

その目の前にいる人物の姿がどのような物が説明するでしょう
この学校指定の男子制服ブレザー、健太が普段使っているようなスクール
バッグ、健太ぐらいの髪の長さで凄いボサボサ、膨れあがった顔、
血まみれの顔、健太の面影

つまり健太だ

「で、どうだった？」

「……………だ、ダメ……………ぐむっ」

ドサッ

「健太!？」

「しつかりするのだ健太殿！」

「済まない……てっさんが……っええ……（ガクッ）」

「健太……！！！」

今ここに死亡者（佐々木健太、15歳男子）が出た

「ふっ……死ぬかと思っただぜ」

「いや、死んだんじゃないのか」

「拙者はもう駄目なのかとばかり……」

「い、一体何があったんですか……」

「どうせいつものバカだろう？」

「懲りないよね、佐々木くんも……」

「……バカは死んでも直らない」

部室に到着し、健太を長いすに横にさせたところ、急に開眼して起き上がって……この状況へと至る。近藤さんの言葉が酷いような気がしたのは気のせいだ

で、まあ……部室に来たのは良いのだが、今現在7人しかいない。つまり部長だけが来ていない。さて、何があったのだろうか？ といっても仕方ないので、VWに入る準備でもしておこう

ちなみに次の対戦校は、シード校の箕輪高校だ
部長ならデータを持ってきてくれるはずだ

そんな事を思っていると、いきなり部室のドアがゆっくりと開く。今更だが、錆びているんだろう。ギギギ、という音を立てながら開かれていく

ドアが開ききるとそこには部長が立っていた。……何故か勉強道具を持って

「部長……どうしたんですかその……」

「ああこれか？ まー座れ。これから話すぞ」

そう言って部長はいつものソファへと座る。珍しい。横にならない

「ほれ、これが先日の箕輪高校と西蓮寺高校の戦闘データ、こっちが箕輪高校の戦闘データだ」

そう言って部長はテーブルに2つのデータスティックを放り投げる。カランカランと音を立ててそれはテーブルの上で跳ね、やがて収まりパターンと横になる

「ありがとうございます部長。相変わらずお仕事が早いですね」

「言つな神崎。照れるじゃないか」

「その言葉が結構気持ち悪いですけどね（チュインツ）何がしたんですか？ 俺を殺す気ですか？」

「一言余計だお前は」

という相変わらずの会話

「ま、それはいい。早速VWに行ってい」

「命令するな」

という明日香の言葉

「と、言いたいところだが……」

という部長の言葉

「お前ら試験勉強はいいのか？」

という部長の言葉。その言葉によって部室内が一気に静まりかえる

試験？ examination？ 勉強？ study？

何ソレ？ 美味しいの？ Is this a dericio

us？

「神崎、“美味しい”は“delicious”だぞ」

どうでもいい

「……試験勉強って……いつですか？」

「近藤なら知ってると思ったのだが……もしかして全員知らないんじゃないか？」

その部長の言葉に全員が頷く。すると部長は頭を押さえ

「全部活で同じ質問したらこの部活だけが知らないなんて状況だな
これは……まあいい。試験は月末と7月はじめを挟んで行われるか
らまだ時間はある。だがな。一応言っておくが……今日から試験勉
強期間、つまり部活動禁止期間だ」

もちろん全員が「は？」と返す

「俺たちは現在都大会があると言つことで見逃して貰っているが…
…仮にだ。もし関東大会に進出してだな、それで誰か1人でも赤点
を取った場合…：関東大会への出場は不可となる」

もちろん全員が「え？」と返す

「そういう事だ。というわけで勉強と部活の両立を図ってくれ。俺
は勉強するからな。必要な時だけ呼んでくれ」

そう言つて部長は持つてきた参考書を読み出した。へっ、どうせ
出来もしないのにそんなの読んだって仕方ないじゃないか！

「神崎ー今失礼なこと考えただろうがなー…：まあいい。好きなだ
け言つてろ」

心を読まれました

で…：勉強ですか？

部室内に貼つてあるカレンダーを見てみる。するとそこには

『6月29日、7月2日、期末試験』とデカデカと書いてあつた

「どうする？」

「どうするもなにも…：」

「行くしかなからう」

「でも皆さん…：勉強は…：？」

「…：私なら大丈夫」

「私も大丈夫だな」

「それじゃあ決定か？」

……俺たちwars部メンバーは勉強より部活を優先することに
した

この後待ち受けている運命など知らずに……

#21 1回戦目後（後書き）

よし、健太は赤点にしよう！

もちろん冗談です

いや、冗談じゃないかもしれません

進んでからのお楽しみと言っことで

#22 Wars都大会2日目

2096年6月18日月曜日、午前4時23分。……何故だろう。
最近起床時間がどうも早い

ちなみに普段なら6時起きで、こういう日（特別だと言っておこ
う）に限っては……本来の起床時間の1時間〜2時間ほど早く起き
てしまう

とりあえず本来の起床時間まで約1時間。つまり5時半まで

先程話した『こういう日』というのは、もちろんWarsの大会
ということ……都北大会の時は……アレだ。明日香がいるわ、琉
華がいるわ……悪夢見るわで。で、先週はただ起きちゃっただけだ
けど

そんでまあ、アレだ。一度起きたら寝付けないって状況なのだよ
今は。人なら人生の中で1度は絶対に経験するであろうアレだ

で、ベッドの上で寝っ転がってるだけだと時間ギリギリになって
から睡魔が襲ってきてそうなので、とりあえず起きておこっと思
い、ベッドから起き上がり、そして座る。そして机の上に置いてあ
る道具一式……を見る前に足下確認。今日は何も無いぞ、うん
足下確認終了後、再び机へと目線を戻す。俺のその目に映る物、
それは

『少年サタデー』

と言う名の少年雑誌

の表紙をした物

つまり聖典（健太風に）

とりあえずソレはどうでもいい。その横に置いてある物に視線を移す。それは

『New English World（英語の教科書）』

「はあ……」

思わずため息をつく。無理もない。本来なら今はテスト勉強期間ということ、部活動は禁止となっている。だが、俺たちwars部は現在都大会に進出しているということ、部活動の許可を得ているのだ。それでまあアレだ。仮に関東大会に進出したとして、wars部の誰か一人でも赤点を取ったら関東大会への出場を取り消しにされてしまう、と言うわけです……

赤点を取るわけにはいかないので勉強も頑張っているというわけだ

ちなみに 英語>数学>理科>社会〃国語 の順に出来ない
更に捕捉。 俺の中学の時の英語の最低点数は6点だ

…… 入部前の俺だったら赤点とっても構わないとか言いそうだな

そう思った所で更に思ったことがある

例えば俺ってなんでwarsやってるんだ？（強制）入部させられる前まではあれほど嫌だったのに……正直自分でもビックリだよでもなんとなくだけでもこんな答えが頭の中で思い浮かばれる

『あのみんなが楽しいから』

正直困る点もあるけど

ま、そんな事はどうでもいい。一旦勉強の方に話を戻そう

とにかく赤点を取らないように勉強とwarsを両立させようと俺も努力というものをしていてだな、一番不安なのは健太だが、人の心配より自分の心配を……自分最低ですね

……昨日は勉強しなかったけどな

まあこんな事を考えていてもあれだからな

再び俺は視線を逸らし、次はwarsの道具一式を見る。もちろん手入れは昨日のうちにしてある。だから試合中に駄目になるとかそういうのはないだろうが……

今日の対戦校、箕輪みのわ高校。今大会のシード校の1つである……

……が……勝てるのか？

とかいう不安が……

先週の金曜日、あ後に試合のデータを見てからVWで実践してみたのが……全く歯が立たなかった。そのうちの1人の人物、芥川あくたがわ聡蓮そうれんという人物。とんでもない《強さだった。とりあえず大将ではないのだが……強い

そうなる と大将はもっと強いのだろうか？ すると俺たちに勝ち目はあるのか？

……正直な話勝てないような気がする

だが、『諦めたらそこで試合終了ですよ』とか爺ちゃんが持ってた漫画の台詞にあった気がする

だから出来る限りやってみるとしますか

そう思い、机から視線を外して時計を見る。4時52分。結構時間が過ぎるのが早く感じた一瞬である

「さて」

このままベッドの上で考え事を続けるのもあれだからな。そろそろ行動するのでしょうか

と、いつわけで立ち上がって机に座って英語の教科書を開く。朝勉強の方が頭に入るとかよく言ってたし、それに時間があるなら好都合だ

そしてこのまま5時半（本来の起床時間）になるまで英語の勉強を続けた

トントン

俺の部屋をノックする音が部屋に響き渡る。ちなみに現在時刻は5時半。本来の起床時間ってワケでして……多分母さんが親父、もしくはあの3人の誰かだと思う

最後に出た予想は俺もどうかと思うけどな

「どうぞー」

「し、失礼します」

ガチャ

まあ予想通りと言っておこう。ドアの向こうから出てきたのは、同じwars部で、クラスメイトの女子である、エルフィだった。……なんでこんな時間に来ているかは正直なところ不明。とりあえずわかっているのはアレだ、朝食を取りにだとか

……飯くらい自分の家で食べ

「つて、神崎さん……勉強してたんですか？」

「あ、ああ……英語は駄目駄目だからなあ……」

「そうなんですか？」

「最低点数6点だよ」

ぶっちゃけてみた。どういつ反応をするだろうか

「わたしは5点ですが……」

1点負けた

「いやいやいや、そこ教える場所じゃないだろ!？」

「え？ 流石に冗談ですけど……実際の点数は40点台ですかね」

普通なのか？ それとも出来ていない方なのか？

というよりなんだ。本当に今更だが、エルフィってどこの国の人だよ。名前がアレな訳だし、英語圏の国の出身ならそれくらい出来るはずだろ？ 本当に今更そんな事を思う
思っただので

「なあエルフィ。今更だけどさ、どこの国の人よ？」

「え？ わたしは日本生まれの日本育ちですが……」

衝撃の事実発覚

まさかそんな名前で日本出身で日本育ちだったとは……まあ通りで日本語ペラペラな訳だ

とりあえず名前の理由も聞いてみるとするか

「じゃあエルフィ、ご両親は？」

「お母様とお父様ですか？ お母様が日本生まれで、お父様がイギリスの出身で……そのハーフですね」

なるほど……って、様？

どこのお嬢様だよ

ま、これ以上聞くのはアレだと思うので質問は止しておこう……
待てよ。イギリス＝英語圏 英語できるんじゃない？

「エルフィ、何故お前のお父さんがイギリス出身なのに英語ができないんだ？」

「え！？ ええつと……それは……」

急に焦りを見せ始めた。これは絶対に何かあるのだろう
聞き出すしかないな

「それは？」

「えつと……出来ないんです」

「へ？」

「えつ、英語が出来ないんですっ……！」

……ま、いいか

「よしわかった。なんとなくだけどその気持ちはよくわかっておこ
う」

「まあお父様には結構怒られたりしましたけど……英語で」

辛かったろうに

「とりあえず神崎さん、下でお義母さん……が呼んでますよ。朝食出てるから早く降りて来てください、と。それに他の皆さんも待ってますよ」

「……色々聞きたいことがあるのだが、『他の皆さん』ってなんだ？」

「え？ 言葉の通りですが……」

そう、言葉の通りだった

俺がエルフィを先に行かせて着替えた後、トイレ、洗面所、台所、リビングの順に道を辿っていくと、最終地点のリビングには見慣れた顔が揃っていた。言うまでもない。6人+母さん+親父だ

母さんと親父は『賑やかでいいじゃないか』と言っていたが、俺にとってはちよつと……な？

…… 光久と健太辺りならいいんだけどな

会場へ到着した弦巻高等学校 Wars 部のメンバーたち。今現在会場の外……正門の目の前で円を作って立っている

何をしているのかと言うと勿論最後の作戦会議。8人揃っているわけなのだが、部長は『面倒だからお前たちだけでやってくれよ』と言ってたが、やっぱり最後にはこうしてくれるのでありがたい

さっきも言ったとおりだが、金曜の最後の練習では勝っていない。というか圧倒的

この調子だと勝てないと部長は述べているが、そんなの最後までやらないとわからない。だったら自分も参加しろってんだ、と言ったら殺されそうなので言わないことにしよう。……読心術を使われているかもしれないが

「とにかくだ。別に今回は負けても問題はない。5位決定戦で勝てばいいだけの話だからな。それに負けたとして勉強時間が増えるんだ。それでいいんじゃないか？」

クツクツクと笑いながらそう言う部長。いやまあ確かにその通りっちゃあその通りなんだけど……

「ですがね部長、あくまで目標は優勝ですよ？ 最初から諦めてなんになるんですか？」

「……でもあの力は凄い」
「おお、近藤はものわかりがいいじゃないか。神崎と違って」

……近藤さんに裏切られた気がした

そして今の近藤さんの発言により他5名（俺も含め）が沈み込む。嗚呼、この調子で大丈夫なのだろうか……

そして

試合が始まる直前、部長は何も言わずに俺たちの前から姿を消していた

f i e l d c o a t i n g . . . c o m p l a t e .
e n e m y p r o g l a m . . . c o m p l a t e .
s e c o n d b a t t l e d a t a i n s t a l l . . . c
o m p l a t e
a r e y o u r e a d y w a r s b a t t l e
s t a r t ! ! 』

2 回戦目開始の合図がVW内に響き渡る

1 回戦目は勿論敗北した。陣旗の撃破による敗北だ。琉華の狙撃も全く通じなかつたらしい。それと一つ、敵側の大将は芥川先輩より上の実力を持っていているっぽい。俺、明日香、健太、光久の4人が1人の手によつて倒されたほどだ

もしかしたら……な

そんな最悪の結果が脳裏をよぎる

「真筈？」

「あ、ああ……どうした明日香？」

そんな事を考えていると明日香に話しかけられた

「その、だな。顔色が優れないようだが……何かあったか？」

「いや別にそついうのはないけど……ただこの試合負けるんじゃないかってな」

「ああ……確かにな。あの芥川と新橋にいしつていうのはどうも強すぎる。あれは化け物だ。いや、もっと上がいるんだらうな。だからこんなところでひるんではいられないだらう？」

「……そつだな。その通りだな」

明日香に元気づけられた気がした

ま、そんな事はどうでもよく

『神崎さん、明日香さん！ 右方から敵が接近してます！ 注意してください！』

「了解」

右を見ると、確かに遠くから敵が接近してきているのがわかる（ちなみにフィールドは荒野）。おそらくあれは芥川先輩は敵大将ではない。あれくらいなら俺たち2人でどうにかできるだろう

「準備は出来たか明日香？」

「それはこっちの台詞だ」

俺は両手に銃を、明日香は刀を。明日香が接近している間に俺が援護射撃といった形だ

敵はまだ近づいてくる。ということは遠距離攻撃型ではないのだろう。多分刀とか鎌とか槍とかそういうた形の武器でくるに違いない
そして

「行くぞ真箏！」

「わかってる！」

明日香は掛け声と同時に飛び出していく、明日香と敵の直線上から少し外れて両手の銃の引き金を引く。そしてその攻撃に反応したのか、敵は武器を取り出し（盾つきの剣か？）、俺が放った銃弾をその盾で受け止める

それだけに気を取られているのか、明日香が接近しているのにそちらを見ようとはしない。もしかして

『神崎さん後ろです！』

「そんなところだろうとは思ってたけどさあ！」

左手に持っていた銃を後方の敵に……回……し……
……遅かった。というか、勝てない敵が目の前にいた

引き金を引いたのはいいが、その攻撃を軽々回避され、更には武器で受け止められて……

俺は戦闘不能となった

「さて、お疲れだったな若人たちよ」

RWに戻ってきたの部長の言葉。思えば毎回こんな言葉を言うてくるな

とりあえず今日は前回と違ってこの場にいた

まあさっきの試合の結果なのだが……勿論負け。つまり……5位決定戦に参加することになる訳だ。|| 勝てば関東大会に進出、と

「どうだ？ 自分たちの弱さがよくわかっただろ？」

「その通り。拙者……拙者たちはまだまだ未熟ということだな」

「あー……なんか悔しいな……」

1年男子による声。いやまあ確かに悔しいけどさ。それは仕方ないんだよ

「とりあえずだ。今日はもう帰れ。明後日に5位決定戦があるわけだ。今日はもう帰ってゆっくり休め。以上解散」

そう言い残して部長は去っていった

ちなみに次の対戦校は白扇はくせん高校というところだ。一応実力は未知
数つつーことで

……勝って関東大会に進出しないとな

#22 wars都大会2日目(後書き)

最近文章が悪いですたい
スランプ的なアレでしょうか？

#23 反省と提案と事件と始まり

Wars 都大会2回戦目が終了し、その大体3時間後にあたる時間。現在部長を除いたWars部のメンバーで学校　の近くのラーメン屋に来ている。ちなみにここには何回か来ているが……とりあえず全員で現在ラーメン待ち。俺の注文は味噌ラーメンだ

で、まあ今は今日の試合の反省会を開こうということ……

「絶対無理だろ」

早速俺の弱音がそのテーブルの上で響き渡る

「誰だ、最初から諦めるなとか言ってたヤツは」

「ハイ、俺ですゴメンナサイ」

……健太に突っ込まれてしまった。まあそりゃそうだろうな、うん

「でも確かにわたしたちの実力不足というのがありますが、まずあちらの学校のレベルが高いんですよ多分。だからわたしたちはもっと強くないと駄目かもしれませんよ？」

「エルの言うとおりだ。このままだと私たちは明後日の試合も勝てないかもしれないぞ。仮に勝ったとしても関東大会は1回戦敗退は目に見える」

「そうかぁ……。でも試合は明後日じゃん？　だからもし明後日の試合に勝てるように特訓するってなると相当厳しい……。っていうか無理な話じゃない？」

「……私が抜けて部長を入れる」

「無理であろう。雄太殿には任せることはできません。それにあちらが拒否するのは確実だ」

「というか部長の実力ってどんなもんよ？」

「さあ？ 俺だって知らねえよ。灌先輩とか吉原先輩は『強いのに』とか言ってたけどさ」

一応言っておくが、話が結構ずれてきている。あえて口にはしないが

「まあ部長の話は置いておきましょう。まずは明後日の試合の事です。どうやったらわたしたちは勝てるのか、そこが重要ですよ」

と、エルファイが脱線した話を元に戻す

「そうだな……とりあえず今まで通りにやってなんとかするしかないんじゃないか？ それに敵の力はまだ未知数だ。おそらくぶっつけ本番。もしくは明日アホがデータを持ってくるかだ」

「……部長の事だし「勉強しとけ」とか言いそう」

近藤さんの言葉に頷くwars部一同。そういえば期末テストが近いというのも事実だ。だからそちらの方もなんとかしないといけない

まあそんなこんなで話し合う中、全員分のラーメンがテーブルに置かれる。7人ということもあってかなり狭いので、男女で別々のテーブルに移動することに

よくわからんが2つのテーブルを挟む形に

要するに 明日香たち、空席、空席、俺たち といった感じに

ま、いいか　　と思つたところで

「なあ真箏」

「ん？　どうした健太？」

健太に話しかけられる

「お前さ、どうやったら次の試合に勝てると思う？」

「え？　さっきまで話してたじゃないか。いつも通りにやって、駄目だったら作戦を変えればいいんじゃないか、って」

「いやまあそうなんだけどな？」

「結構厳しいかもしれぬ」

「いやわかってるって」

なんだろう。さっきまで話していたことを執拗に聞いてくる2人。何があつたのだろうか

と、ここで女子側です

男子の皆さんと席を離れて早2分。わたしたち女子一同はラーメンを食べ始め、現在会話無し……お願いですから誰か喋ってください、と言いたいところですが、皆さんラーメンを食べるのに夢中で……

ちなみにわたしは……というか近藤さん以外は神崎さんと同じ味噌ラーメンです

べ、別に他意はありません！

と、まあそんなこんなでお食事中。男子の皆さんが何を話しているのかも気になります。……まあ、誰かが話し始めるのを待ちますか……それとも自分から行くべきなのか……

……

ちなみに隣は明日香さんです

ちなみに正面は藤堂さんです

ちなみに右斜め前は近藤さんです

……誰一人として何も喋りません

と、ここで明日香さんが完食したらしく（食べ始めて7分後）、席に深く座って水を飲み、そして口を開きました

「さて……ここから先の話は女子の領域だ。エル、琉華、望……は大丈夫か。とにかくだ。これからについて話すぞ」

まだ食べ終わってないですからね!?

って、藤堂さんはその言葉と同時に食べ終わってますし!!
というか食べ終わってないのわたしだけですか!?

まあ食べながらも大丈夫ですよ……多分

「で、何なの明日香? 女子の領域って?」

「決まっているだろう。真筈についてだ」

「ああ……」

その言葉に納得するわたしと藤堂さん。こういつ話をするなら今が丁度いいって話ですね。……普通に家出すればいいだけの話だけだと思えますが

「一応聞いておく。真筆の唇を奪った者はいるか？」

いきなりとんでもない質問を繰り出す明日香さん。いや、流石にそれはないですよ。ほら、手を挙げる人とかいませんし……

「ふむ。次だ。真筆の部屋に上がったことがある者」

もちろんこれは全員挙手（近藤さん除く）

「……真筆と一緒に寝ようとした者」

……近藤さん以外全員挙手

言うておきますがわたしたちはまだ校1です。健全な女子高校生です

……正直な話やりすぎな気もしなくはないですが……これは私たちの戦いなわけですから……これくらいしないと勝てないわけです

……違う気がしてなりません

「わかった……次だ」

「……明日香」

「む、どうした望？」

と、ここで初めて近藤さんが会話に混ざりました。もしかして近藤さんも……

「……とりあえずこの話は保留にして欲しい。私だけ入れない。と
いうか入りたくない」

「む、望。それは真筆の事はどうでもいいということか？」
「……………そうなる」

まあ確かにそうなりますよね。近藤さんは神崎さんのことを好きとかそういう感情を抱いているとか聞いていないわけですから……………混ざれなくても無理はないですけど、どうでもいいってというのはわたしたちにとってはちょっとアレな言葉なわけですね……………

「……………望が言うのなら仕方がない。が、『どうでもいい』はないだろ。私たちにとってはどうでもよくないことなのだ」

「そうだねえ……………ま、それはそれで仕方ないよ」

「……………私に神崎の良さはわからない」

「……………近藤さんまで敵に回らないことを祈りたいです」

「ん？ エルなんか言った？」

「い、いいえなんでもありません」

……………口に出してしまったみたいです

ですが……………これ以上敵が増えない事を本当に祈ります

『毎度ありー！』

鈴木さん（忘れたかもしれないが大将の名前）に見送られ……………と
いとか店を出て、10m地点。現在時刻はまだ2時頃ということだ
『これからどうするか』的な感じで全員で輪になり、会議が執り行
われようとしていた

ちなみに司会進行役は我がクラス委員長である佐々木健太でございます。
ちなみに投票の結果こうなりました。ちなみに6票入りま

した

「まったく……じゃあこれからどうするか話し合いたいと思いまーす。はい、意見のある方は拳手をお願いします」

正直なことを言おう。店で話し合えば良かったじゃないか

「……明後日のために特訓」

「それだと今からまた学校に行くって事ですか？」

「……うん」

「それは無理であろう。何せ今は授業時間。それに雄太殿に今日はゆっくり休めと言われたであろう」

「……それじゃあどうする？」

「今からゲーセン行こう」

「ふざけた意見をだすな佐々木」

「いや、でもボクは同意見だけだなー」

「お、藤堂気が合うじゃないの。鶴と違ってさ」

「……佐々木くと気が合うのは嬉しくないけどね」

「今サラッと酷いこと言った！」

「気のせいだろ」

「気のせいだね」

「健太……ドマイ」

「慰めなんていらねえよコンチクショー！」

「……で」

「どうするのだ？」

「そうですね」

最終的にどうなるのだろうか

「あ

と、ここである発想が……だがなあ………反対意見が出るであ
ろう。健太がその8割を占めて

「「「「「あ」「」「」」」」」

と、ここで健太以外の5人も何か閃いたようだ。もしかしたらも
しかしてもしかするとだが……同じ意見を持てたのかもしれない
一応健太はわかったような顔をしているが、敢えて口に出さない
ようにしているのだろう。それなら俺たち6人で合わせて言うしか
ないじゃないか

「よし、全員で言おう」

「ですね」

「だな」

「……いつでも」

「準備は出来た」

「ボクもおっけーだよ」

「待て、それを言っな。ここにいらなくなる」

健太だけ言う気はないつもりだ

それなら言わないでやろう

目だけで全員にそう伝えようと、本当にわかってしまったのか、全
員が頷いて返してきた

正直に言おう。なんだこれ

「それじゃあ場所はどつするの?」

「……一旦家に帰って道具を持ってくる?」

「それだと時間が掛かるではないか?」

「でもそうしないと自分のやりたいようにやれないじゃないですか」
「だったら」

ポツ

俺の鼻の上に何か冷たい者が当たる。そこを人差し指で触ってみると濡れたみたい……って言うか雨がこれは

ポツポツ

それは段々と強くなってくるのだろうか、雨水が身体にあたるスピードが速くなってくる。いやぁ……これは決定だな

ポツポツポツ……ザ……ザザー……

「全員走れえ！」

「え！？ どこに行くの真箏くん!?!」

「とりあえず真箏に続け！ 多分ここからだとあそこしかないだろう！」

「あ、あそこですか！」

「わかった！ あそこだな！」

「……あそこか……」

「ふむ……あそこか」

何故だろう。“あそこ”で通じ合えているというのが非常に悲しくなってきた

「あらお帰り真筆！。早かったわねー……ってどつしたの皆さんお揃いで　そんなびしょ濡れで」

我が家に帰ってきました。wars部一同（部長を除いた7名）で。かなりびしょ濡れな状態で……

簡単に説明しよう。あのあと土砂降りになってですね、それで現在のびしょ濡れな状態に至っていると、そんな感じ

ちなみに今も外は雨……土砂降り、それを人はゲリラ豪雨と言う

でまあ全員今玄関先で濡れた身体の状態で母さんと話している訳なんですわ

「とりあえずさ……風呂お願い」

「あらまあそんな事言われなくても準備してあるわよ！　それじゃあどうぞごゆっくり」

「待つんだ母さん。今の言い方だとこの7人が全員で入るみたいな感じだったぞ？」

「あら違うの？　てつきりみんなで仲良く入るものかと……母さん勘違いしちゃった！」

とんだ勘違いだ

だが一応捕捉しておこう。うちの風呂は広い。つまりこの7人で入ることは可能ということだ

……さすがにしないが

「それじゃあ……先に女子から、ってそんな悲しそうな顔をするな女子共」

後ろを振り向くと何故かしょんぼり顔の女子たちがいた。近藤さんを除くメンバーだ

「それじゃあお邪魔します」

「済まないな真箏」

「……礼を言う」

「それじゃあお先にね」

そういつて女子たち一同は濡れた服のまま風呂場へと向かっていった

「服とタオルは母さんに任せるとして……俺たちは身体拭いてリビングで待つか」

「だな」

「それではお邪魔しよう」

俺たち男子一同は身体を拭き、リビングへと向かった

向かったのだが

「真箏」

「断る」

「まだ何も言っていないだろー？」

いかん。健太から犯罪臭がするぞ

「拙者からも願おう」

「光久までもか！？」

「どうせ今真箏のお母さんいないじゃないか」

駄目だ。今のこいつらに何を言っても説得できる自信がねえ。と
いうか光久。お前までそんな事を言う人間になったのか

で、ちなみに今何を話していたのかというところ

「覗きくらいいいじゃないか！」

男なら一度はしてみたい事である

無論俺もそうなのだが……さすがに俺の家だ。そんなこと出来る
わけがなかるう

つかバレたら確実に殺されるだろ俺たち。女子のメンツがメンツ
だし

だが俺も正直なところを言つとだな。そついつのに興味があるわ
けでして……

「真筆。お前の顔に『覗きたい』って書いてあるぞ」

顔に出てしまっていたようだ

「くっ……でも俺は知らないぞ。俺は行かないからな。絶対に行か
ないからな……行くなら2人で行つてくふっ」

「これでいいのか健太殿？」

「おう光久ナイスだ。これで全員共犯だ。それじゃあその亡骸は非
常事態の時だけに使う。それじゃあ行くぞ光久」

「承知」

俺は意識を失った。が、なんとなく引きずられていく感じだけは
した

「光……さ……え……か……？」
「も……し……か……う……見え……」
「しか……え……これで……だ……」
「ふむ……これ……な……か……だな……」

意識の遠く。遙か彼方からとある男子の声が聞こえる。それは2人いるらしく、ちゃんと聞き分けることが出来る。というかなんか聞き覚えのある声だなあ……はて、これは一体誰だっけか？

しかしまあ……さつきからやけに蒸気とかそんな感じのものが当たるんだよ。すげえ温いつていうかさ？　なんか居づらい

それでまあ……男子以外に時々女子の声が聞こえるんだあ。はて……これも聞き覚えのある声

……

ああ、そうか。俺、健太と光久に気絶させられたんだ
それで……それで……

見覚えのある風景。間違いない。ここは我が家の脱衣所、の横のよくわからないスペース（捕捉：収納スペース）

……そこには本当に僅かだが、穴が開いているのだ。それはつまりだな

「健太、光久。お前らよくここがわかったな」

「おう真箏。起きたなあ……よしこれでお前も共犯だ」

「会話が合っていない気がしなくもないが……それができるのはこしかなからう」

もちろん目の前にいる2人は例の穴の所にいますがね

ちなみにこの穴の事は俺と親父だけの秘密になっている。が、実際来たのは初めてである。というか母さんもそろそろ気づき始めるんじゃないかなあとか思ったりもする

……親父は姉貴の事を覗くことがあったらしい
その時は俺が生死の境界を彷徨わせてやったが

で、まあ

「なあ真箏、この穴もう少し広げらんね？」

「無理を言うな健太。というか俺を本当に巻き込むな」

「そうも言いながらチラチラ穴に視線を向けるな」

突っ込まれてしまった

いや仕方ないだろ。これが男の性だ

「大体な。これは立派な犯罪行為だぞ？ そんな事したら駄目に決まってるだろ？」

「いや、目線をチラチラ穴に向けながら僅かに鼻血を出した状態でそんなことを言われてもなんの説得力がないぞ？ それに光久は思ったよりガン見だし……」

左を見ると今にも目が飛び出るんじゃないかというくらいに光久が穴に顔を突きつけている

まさかここまでだったとは、と思った

「とにかくだ。今すぐここを出て行こう。そうしないとっ本当に危なくなるかわからないぞ？」

『くっ……エルも琉華も……私よりも良い感じに……』

『やっ、ちよつ望！ やめてよそこは！ そんな事しても何も得とか無いよ！？』

『……私の胸が大きくなりますように』

『ちよつと明日香さんまで！ きゃあっ！ や、やめてくださいよっ！』

……穴の向こうから聞こえてくるその言葉で再び穴の向こうを見る男子一同。周りから見たらどういいう目で見られるのだろうか

少なくとも男子からは同じような意見がでるに違いない
それが女子なら俺たちは死亡だ

「なあ真箏……家交換しね？」

「断る……というかお前親を覗く気か？」

「お主ら……というか真箏殿はとうとう全てを捨てたのだな」

ちなみに現在全員で鼻血がダバダバいつております。まるで雄大に流れ落ちるあのナイアガラフォールズのように。もちろん赤いが

『ちよ明日香さん！ いい加減にしてくださいよ！ いくら自分の胸が無いからってそれは駄目だと思います！ というか大きくても肩を凝るだけなんですから損しかありませんよ！？』

『黙れエル！ お前にはこのような武器があるから駄目なんだ！』

それを私に寄越せ！ というかエル！ お前さつき私に胸がないと言っただろ！？ 悪かったな！ Aで悪かったな！ だが寄せてあげればBくらいはある！』

『ちよつと望……？ そろそろやめてくれないとボク……その……アレだ。変になるから止めてほしいかなあ』と』

『……わかった。……それじゃあエルフィの所に行く』

『いやそういうわけじゃないんだけどさ』

『……琉華はC』

『短時間でそれを計測してたの!? とういか凄いな!』

『ちなみに私はAよりAA寄り』

『言わなくて良いからね!?!』

『エルフィはDに少し足りない。明日香はA』

『ちよつと止めよ!?!』

……俺たち男子の目の前ではもの凄い光景が繰り広げられていた。
湯気が多くなつてきてよくは見えないが

とういかなんだ。そろそろ貧血なのだろうか？ だんだん頭がクラクラしてきたぞ？

「なあそろそろ戻らないか？」

「あ、ああ……そうだな。戻るか」

「おーいえす」

光久の言語がとうとうおかしくなった

と、いうわけでこの蒸し暑い部屋から出る事になり、そして

「お風呂上がりましたー……っつて、どうしたんですか3人とも……?」

「どうせバカでもやってたんだろ?」

「……にしては無駄に赤い」

「どうしたんだろっね?」

……この後男子3人で風呂に入った訳なのだが……2分足らずで

上がってきた

理由は簡単。1分でのぼせたからだ

で、あの後（のぼせてでてきて10分後）、とりあえず、とりあえずだが、一旦ランプをすることになり、何故か俺が配ることになり、ババ抜きをやることに

ちなみにJOKERという忌々しきものは俺の手札に存在しない

で、全員が知らないカードを捨て終わり、全員がテーブルの中央を何故か見る。そして健太が口を開く。

どうせ『やつぱこういう時には何かを賭けるべきだろう』的な何かを言い出すのではないかと、そんなベタな発想をしてしまうが、健太に限ってそう言う事はあり得ない。くはないが、何か別のことを言い出すのを願おうとしようじゃないか

「これ負けた人明日アイスを奢ると言うことで」

……ベツタベタなアイデアに俺は何も言うことが出来なかった。しかも全員了承してるし

つか本来ここに何しに来たんだ。少なくとも遊ぶためではないだろうが 健太。こうやって時間を引き延ばすのはいいんだが、後悔するのはとりあえずお前だ

そんな事は置いておいて、とりあえずゲームスタート

まずカードを引いたのは光久で、引かれたのは健太。重なった物があったのか、カードをペアにしてテーブル中央へと捨てる

その次は健太。俺の手札から引く訳なのだが……俺の手札は3枚と、結構良い感じなのだ。そして健太がカードを引いて手札と見比べると、揃わなかったのか元の向きに戻る

次は俺。引かれるのは（いろいろ事情があり）近藤さん。一応無表情且つ結構無口なので何を考えているのか読めない人物だ。俺がカードに触れてもなんの顔の変化もなく、ただただ手札を見つめている。まあ長引かせたらみんなに悪いのでカードを引く　スペードの8。ペアは無し

まあ今更なのだが周り方がおかしい気がしなくてならない

それを気にしたら負けだと思つので、そのままゲーム続行。

・
・
・

さて6分ぐらいの時間が流れ、現在残ったメンバーは4名。俺、健太、エルフィ、明日香というメンバーだ

手札は、俺が2枚（ハートの2と5）、健太が2枚（おそらくJ OKER）、明日香が3枚、エルフィが2枚つて感じ。このままながれてくれればいいのだが……

健太のターン。健太が俺の手札からカードを引いていく。そのカードはハートの5

「ちっ……」

揃わなかったのか、悔しそうな声を上げて手札をシャッフルする健太。さて、次は俺の番だ

俺は横にいるエルフィからカードを引こうとする　が、直前エルフィの顔を見て最後の判断をする。左のカード、無表情。右のカード、無表情。おそらくどちらを引いても問題は無い気がする、ので俺はそこから迷わず左のカードを引く。それはクラブの5。……このタイミングでか。ちょっとバッドタイミングだったなで、次はエルフィの番。エルフィは迷わず明日香の手札からカードを引いていく。そして

「あがりです」

エルフィはカードを確認すると同時にテーブル中央へとカードを置く。それはハートとスペードのKだった

まあまだ2人残ってるんだ。これなら勝機はある

明日香の番。明日香は健太の手札からカードを引こうとするが、そのカードの予想を俺はする。まずは俺がさつき持って行かれたハートの5、JOKER、後は何か
さて……明日香は何を引いたのだろうか

「ふっ、これで残り1枚だな」

そうやって明日香はテーブル中央へカードを置く。8同士のペア。これだと明日香が自動的にあがりだな

……健太の番。さて、俺のカードは2と5……一応言おう
これ勝てるんでね？

……上手いこと健太は5を引っ張っていつてくれた

要するに、だ

このゲーム……健太の負けと言うことだ

この後健太がもう一戦やろうとかほざきだしたが、全員に冷たく却下され、本題へと移ることに

というわけで俺の部屋。正直言わせて貰おう。7人でこの部屋は狭いだろ

まあそんな事を言っていられないので（俺の部屋だし）、隣の部屋（姉貴の）からテーブルを持ってきて、それを部屋の真ん中に置く。こういうことならリビングでやっても問題はないのだが、みんなが俺の部屋でいいと言うのでこうなってしまった。まあいいのだが

そして先程と同じように円形に座り……

「さて、真筆。例の物を出してくれ」

「言われなくても持ってくるっつ」

明日香に言われて自分のテーブルへと向かい、置いてある本……教科書、参考書等を手に持ってテーブルに置き、それをもう1回繰り返す。そして

「さて、勉強会を始めよう」

と、いう案だ。もちろん健太以外の全員の意見ということ、健太は逆らえずに……的なの？

ま、そんな事を言っても仕方がないので俺は英語のお勉強をしようじゃないか

人それぞれ好きな教科書とか参考書とか持ってるが

でまあ……勉強開始、と

・

・

・

「ん？」

「どつした真筆？」

勉強に集中して早くも1時間が経過しようとしたその頃。ある問題で突っかかってしまった。こういうことはよくある事だ

「いやまあ……ちょっと突っかかって」

「それじゃあボクが見てあげ」

「いえ、わたしが見ます」

「ここは私だろう」

始まったよ……

……最近。本当に最近になってなのだが、この3人が何をしたいのかわかってきた気がしなくもない

まあこれだとなんだか教えて貰うのに時間が掛かりそうだし、光久……はやめておいて近藤さんあたりに聞くのが一番無難だろう……

…が

「……私は英語出来ない」

との事だ。なんだ？ 俺の身の回りには英語出来ないヤツが多いのか？（ちなみに俺、健太、エルフィ、光久、近藤さん）
……なのだが、やけに近藤さんのやつてる勉強の進行速度が速い気がするの俺だけなのだろうか。ちなみに英語である

ま、仕方ないしパソコンか辞書で調べるとするか

「さて、じゃんけんでボクが勝ったことだし……真琴くん、どれがわからないって？」

まず一番近い辞書に手を伸ばしたところで、琉華が話しかけてきた。それなら助かる……が、その後ろでどんよりオーラを出している2人をどうにかしてくれ

まあ、助けて貰うとしますか

「……まあ、これなんだけどさ」

「ああこれね……その前に真箏くんたち、ちよつといいかな？」

「「「え？」「」」

男子一同喉が渴きました。なので目の前にある冷たい冷たい麦茶に手を伸ばして口に含みました

……ま、お約束がこの後あるっつーことで、この選択は間違いでした、と

男子一同が口にお茶を含んだところで琉華が口を開いた

「……さつき風呂覗いた？」
「」「ぶふうー……っツ!!」「」

はいお約束。男子3人でお茶を一気に吹き出しました
てかちよつと待て。なんで急にそんなことを聞き出す!? まさ
かバレてたか!?

「え、ちよつと待ってよその反応。本当に覗いてたワケ？」

……あれ何? もしかしてカマかけ?

「いいえ、そんな事しておりません」

「Yes! Yes!! Yes!!! Yes!!!!!!」

……駄目だこの2人。明らかに嘘が下手じゃないか。光久なんて
英語になつてゐるわけだし

「真箏くんは？」

「何を言う。そんな事をするわけないだろ。この俺が? H A H A
H A H A H A」

今になつて思う。俺も嘘が下手だな

「神崎さん……」

「真箏。どうせ覗くなら堂々と覗け。わ、私は……べ、べ別に大丈夫だからな」

「待て明日香。お前の思考はどうなっているんだ」

「わっ、わたしも平気です!」

「エルフィまで!?!」

「ボクも大丈夫……」

「琉華も!？」

駄目だこの3人

……ちなみに残りの男子2名はいつの間にか昇天していました
やべ、俺も死ぬな

「……神崎」

そしてとうとう最後の女子が口を開く

「……死んで詫びて」

この後俺は近藤さんに凄い一撃を食らわされました。それもまあ意識が一瞬で飛ぶような一撃で……
今になって思う。本当に酷いことをした後で真剣に謝ろう

『……あまり調子に乗らないで』

……薄れゆく意識の中、近藤さんの怒りの声が聞こえた気がした

#23 反省と提案と事件と始まり(後書き)

ん……微妙だな

#24 5位決定戦

5月19日。簡単に言うとwarsの都大会2回戦目の翌日。もつと簡単に言うと、5位決定戦の前日。本日は通常……つまり授業があるという訳でして、学校にいます

で、現在2時間目の授業を受けている最中。ちなみに授業は我がクラス担任兼wars部顧問である梅花哲也先生の授業 数学である

……wars部顧問と言っても一度も部室に顔を出したりはしていないが

とにかく授業中。今の俺は前までの俺と比べて至って真面目な生徒である。ほら、この前みたいにノートに作戦とか作戦とか作戦とか書いたりせずにちゃんと板書してるんだぞ！ 偉いだろ！ 見直しただろ！

……自分でも思う。今のはかなりイタイ

さて……まあ授業中な訳だが……この際だから言わせて貰おう。

関数って何だ

そして英語とは何だ。

そもそもこんな応用的な物を習って将来一般的に使うのかコノヤロ。絶対使わないだろ。……そういう職に就く以外では

『さて、このグラフを……よし、杉山』
『げっ、マジか』

杉山君が先生に指名され、黒板へと向かいそこで悩み始めた。あ
あ……確かに俺でもわからないわ
テスト大丈夫だろうか……？

少しだけ腰を浮かせて前の席のノートを覗いてみる。うん、何気
に綺麗にまとめてあるな。後で教えていただきたい　が、一応言
っておこう。目の前の席はエルフィだ。コイツが数学出来るのか出
来ないのかは俺でも知らん
前にパソコンを使った卑怯な手を……な？

俺はもちろんそんな事はしないぞ

『よし、戻れ』

『はい……』

『この問題の答えはこれで、これがこうなるからで

』

先生が杉山君を席に戻し、説明を開始し始める。正直に言おう。
聞く気になれない

……いやまあ、昨日あんな事があったわけだしな？　そっちに思
考が行ってもおかしくはないわけだこれが

あれ？　さっき言ったこととかなり矛盾してる……？

正直に言わせて貰おう。板書してただけであり、授業は真面目
に聞いていない

つまりは、外見は授業に集中しているように見えても、中身では
違うことを考えているという、そういう感じの状態になっている。
この方法はたまに使っている。……授業が早く終わって欲しいが為に

昨日の事件　我が家で発生した高校生男子3名による、女子風
呂覗き事件。犯人は高校生男子グループの3名で、神崎真筈、佐々

木健太、明智光久の3人が逮捕……ではなく気絶させられ……

ここで時は昨日にさかのぼる

「……死んで詫びて」

近藤さんが放った冷たい言葉。普段なら聞かない言葉だ

そしてその言葉を言い終えるなり、近藤さんはもの凄い動きで俺に近づいてきて1発の拳を鳩尾に決めてきた。それはもう女子とは思えない力にして……自分、情けなく気絶してしまいました

『……あまり調子に乗らないで』

そして鳩尾を決められ、薄れゆく意識の中で、近藤さんの怒り……まあそんな感情がこもっていた言葉を耳にした

『……いくら3人がいいからって……これ以上調子に乗るなら私は貴方を殺す』

……言いたいことはよくわかっていた

だから今日は謝ることから始めたい

……この状態のまま明日を迎えるなんて俺にはできないから

で、時間はあっという間に過ぎ4時間目が終了。さあお弁当の時間だ

いつもなら wars 部のみんなで学校の屋上で食べている訳なのだが……

「望なら他の女子と行ったよ？ あ、そうそう琉華も一緒だったかな」

5組に着くなりそのクラスの女子にそう言われる。ちなみに現在いるのは俺たち4組メンバーと明日香と光久の2組メンバー。さて、これは困ったぞ

「どうするのだ？」

「それじゃあ携帯に繋いでみますか？」

「いや無理だな。多分昨日の感じだと下手したら部活にも来ないかもしれないな……」

「じゃあどうする」

とりあえず5組をちょっと離れて廊下の端。そこで5人で話し合う

「まあ確かにあの事件は許せませんけどね」

「それは私も同感だが……このままだと明日に影響するかもしれないからな。早めにこの事件の事は解決するぞ。というかしろ」

「……はい……」

……どうすればいいのだろうか

結局昼休みはこの5人で弁当を食べることになり、近藤さんと琉華の顔を見ないまま放課後を迎えることとなった

部室。現在来ているメンバーは、先程の5人と部長のみ。そして時刻は帰りのHRが終わってから20分が経過した時間……4時20分。いつもなら10分には全員が集合しているのだが……近藤さんと琉華の2人だけがこの部室に姿を現さない。つまり昼休みと同じような状況である

ただただ沈んだ空気が部室内を漂う。誰一人として口を開かないからだ。……こんな時に余裕で勉強をしてられる部長が凄い。というかどうせ出来ないんだから無駄だろ

と、思った瞬間にコンパスが俺の頬を掠っていった。大丈夫。一応傷は浅い、が

「もし目に当たってたらどうするつもりだったんですか」

「黙れ。そして失礼な事を考えるなバ神崎」

「“バカ”と“神崎”をつなぎ合わせないでください」

とうとう俺が口を開いてしまった。その瞬間に全員で安堵の息を漏らすな

「さて、一応聞かせて貰うが……何故藤堂と近藤が来ない？ 何か理由とかは聞いていないのか？」

部長が触れてはいけないようで触れないといけない質問をしてきた。それは部長も分かり切っていた事なのだろうが、埒が明かないと思ったのかとうとう聞いてきた

「いやあ……」

「……………」

「その……ですね」

「説明に困るなこれは……」

「男子一同で女子風呂を覗きました」

……こんな時にサラツと言える健太がすげえ。さっきまで黙り込んでたのに

「……バカかお前は」

その健太の言葉を聞いた部長は頭を抱えてそう言った。……その後一瞬だけ、誰にも聞こえないような蚊の泣くような声で『俺も混ぜろよ』とか言ったのは気のせいだろう。絶対に

ま、部長だからな

と思った瞬間銃弾が髪の毛を掠っていきました

これ以上何も考えない方が俺の身のためかもしれない

「はあ……それじゃあ誰か連絡してくれ。そうしないと明日が困る」「いや、さっきメールは送ってみたんですけど……返信がまだこなくて」

エルフィがそう答える。返信すらしないとはいちよつとマズイんじゃないか？

「……これだと演習もできないな……白扇ならまだいけるかもだが……ちっ」

部長がボソボソと何かを呟きながら爪を噛む

「仕方ない。今日はもう解散に」
「お、遅れましたかあ？」

部長が何かを言いかけたところで部室のドアが開き、見知った顔が姿を現す。我らがwars部のスナイパーこと、藤堂琉華。昨日の被害者の1人である

近藤さんの姿が見えないが……多分1人で来たのだろう

「遅かったな琉華。何をしていた？」

「え、ちよつと……明日香、耳貸して」

「ん？ あ、ああ……」

琉華が入ってくるなり明日香がそう尋ね、聞かれたくないことなのか明日香に耳打ちをする。そして明日香の反応はというと

「なつ、何いつ!!!!??」

「え？ え？ どうしたんですか明日香さん、藤堂さん」

「実は……ゴニョゴニョゴニョ」

「えっ!?!? そ、それは本気の話ですか!?!」

2人ともそんなリアクションを取るほどビックリしたらしい。ちなみにかなりのオーバーリアクションで……もう喻える事が出来ない

もし本当に喻えるとしたら、昔(100年くらい前)に流行った芸人のオーバーリアクションとかそんな感じだ

まあ遅れてきた理由は後で聞くとしても……近藤さんはどうしたんだろうか

「遅れてすいませんでした。ちよつと事情があって話せないんです

が……とりあえず今日は望は休むそうです。なんだか熱出たみたいで5時間目に早退して……」

「それで今まで近藤の所に行ってたとな」

「はい、そうなんで　　ってちよつと何を言い出すんです!?!?」

「あ、当たってるのか」

……とりあえず謎解決

「はあ……で、まあそんな感じなんですけど……明日」

「その点は多分問題ないだろう。仮に出られなかったら勉学に励めるだけだからな」

部長は琉華の言葉を遮ってそう悪い方向の思考する。やめてくれよそついうの

「ま、今日は6人でいても仕方ないからな。今日は解散だな。明日は5位決定戦だからな。さ、頑張れ若人たちよ」

そう言っただけ部長は部室から出て行った。何が若人たちだ。自分だって十分若いだろ　　っつーか、6人じゃなくて7人だろ

いい加減に部長の実力が見たくなってきた時だった

さて、そんなこんなで翌日　　の前に、昨日の解散後の事について振り返ってみよう

昨日、部長の解散の合図がかかってそれぞれが帰宅しようとして荷物

をまとめている中、エルファイが口を開き、こんな案を出した

「お見舞い……行きませんか？」

と。もちろんそれは熱を出した近藤さんに対するもので、確かにこのままだと俺もアレなのでそれくらいはしておきたい
で、他のメンバーの返答は

『よし、行くっ』

との事で……近藤さんの家の前まで来て

ピンポーン

玄関の前にあるインターホンを琉華が押す。そしてその約10秒後くらいだろうか、インターホンからノイズが聞こえ始め、そして知っている声が入ターホンから聞こえ始めた

『……はい』

「あ、ボクだよ。琉華。また来た訳なんだけど……大丈夫？」

『……うん。……さっきよりはちょっと楽になってる』

聞こえてくるのは近藤さんの風邪声で、確かに体調が悪そうだ

「それでさ、中にあがっていい？」

『……いいけど……もしかしてみんないるの？』

「うん。お見舞いに行こうってエルが案を出してね。それでみんな
で来たってワケ」

『……男子の皆さんはお帰りください。……以上』

といった感じに。まあ言い返す言葉もなく俺たち男子3名はそれぞれの家路について……

そこは省略

で、現在朝の6時。そろそろ出る時間なのだが、今日は誰もいない。すげえ。こんな穏やかな朝があったか？ ……少なくとも最近では1回もない

まあそれはともかく、食事を終えて現在玄関へ向かう途中。……この家も古いのだろうか、廊下を歩くたびにギシギシ言っている……すげえ人が出した声ってわかるんだけどな。犯人は母さんしかいないだろうが

そしてギシギシ言っていた廊下を歩き終え、玄関に辿り着く。靴を履き、立ち上がった後ろを振り向いて『行ってきます』と言う。そして玄関のドアに手を掛け、それを外側へと押す。するとそこには

「やつ、真箒くん」

琉華が1人で立っていた。多分30分くらい待っていたのだろうか、若干寒そうに震えているように見えて仕方がない

明け方は寒いしな

「ちよ、どうしたんだよこんな早く……寒くなかった？」

「ううん。別にボクがこうしていたかっただけだしね。それに上がるのは迷惑だと思って」

「いや迷惑って事は……あるけど、さすがに入ってもよかったぞ

「？」

「一瞬サラッと酷い事言っただけだか……とにかく、ボクが外にいたかっただけだから……うん」

酷いことを言ったことに対して後で後悔した

それはともかく、琉華はどうして1人でいたのだろうか。それが気になる

「それで琉華」

「よし、それじゃあ行くか。もうみんなも行ったらしいし」

「あ、ああ……」

良い感じに遮られた。まあ歩いてる途中でも聞けるから大丈夫か

そして2人で歩き出す。これを周りから見たらどう見られてしまうのだろうか

と、そんないらん事を考えてしまう。が、今重要なのはそれではない

「琉華」

「何？」

歩き出して5分。ここで俺は先程尋ねようとしたことを口にしようとする。そして

「何で家の前にいたんだ？」

「ん？ それは別に大した意味はないんだけど……とりあえず……驚く顔が見たかったからかなあ……」

……そんな理由なのか。いやまあ確かに少しは驚いたけどさ。顔

には出さなかったけど

「まあ、本当の目的は……」
「ん？」

琉華がふと足を止めて足下に視線を落としている。何だろう。靴紐が解けたとかそう言う訳ではない。だとしたら何だろう。そう思っていると琉華が口を開いた

「一昨日のことだけども、ちょっとアレは許せないかなーと。正直な話」

「え」

「まあこれは昨日話せばよかったのかなーって思ったりするけどさ、確かにね、望の言ってる事は正しいよ。でも確かにボクも、明日香も、エルも調子に乗ってあんな発言したり行動したりしてたね。でも真箏くん、望もいるのにアレは駄目だよ」

「いや待て、あれは」

「だからボクからも一発」

俺が言う前に琉華がこちらにずいっと近づいてきて頬にビンタを食らわせてくる。パチインツと綺麗な音が響き渡り、それに驚いた鳥たちも飛び去っていった

2秒、いや3秒。その間その場に沈黙が流れる

「これはね、ボクと明日香とエルの分。昨日女子たちで決めたことだよ？ というわけでこの事件は無事解決……と言いたいところだけど」

俺が何も言えないでいると、琉華がしゃべり出す

「後で望に謝っておくこと。あと、望からの話も聞いてあげて」
「え……」
「返事は？」

琉華が腰に手を当てて俺にそう言ってくる。その間2秒の沈黙。情報整理を終わらせてやっと返事をする事ができた

「わかってるよ」
「ならよろしい」

そう俺が返すと琉華は微笑み、そのまま歩き出し俺の横を過ぎ去っていく。その際、『また敵が増えるのかあ』と呟いていたが、そこはあまり気にしなかった

何故なら、さっきの琉華の微笑みが可愛かったからだ

学校に到着……してから30分経過し、現在都大会の試合会場。今日は全員揃ったので試合に全く影響は無い……とは言えないだろう。なにせ近藤さんは病み上がりだ。1日で熱を直す元気があってもさすがに昨日の今日だ。下手したら倒れるなんて事態もあり得なくはない

それで現在待機中な訳でして……

「さて、準備は出来たか？」
「わたしの方は大丈夫です」
「拙者も問題はない。いや、あとは刀の手入れを……」
「ボクも大丈夫かな」
「俺も大丈夫だ」

「僕も問題はないな」

「……………（コクリ）」

全員どうやら準備が整ったようです。いや、光久がちょっとまだか

「よし、問題ない」

と、ここで光久が刀の手入れを終え、TEMMを使って武器を移送する。随分早いな。というか、光久って機械音痴なのにTEMMだけは使えるんだよな

……………お陰でどれだけの自動販売機を壊したことが

……………お陰でどれだけゲームのコントローラーを壊したことが

……………お陰でどれだけ携帯電話を壊されかけたことが

「真筆殿、少しばかり酷い事を考えてはいまいな？」

「滅相もない」

……………あえて突っ込まない方針で

「さて、全員準備も整ったことだし、行くぞ」

明日香がそう言って椅子から立ち上がる。それに続くようにして俺たちも立ち上がる。そしてその場を後にし、試合が行われるVWの設置所へと向かった

……………部長はどこに行ったのだろうか

f i e l d c o a t i n g . . . c o m p l a t e .
e n e m y p r o g l a m . . . c o m p l a t e .
s e c o n d b a t t l e d a t a i n s t a l l . . . c
o m p l a t e
a r e y o u r e a d y W a r s b a t t l e
s t a r t ! ! ! 』

2回戦目の開始を告げる音がVW内に響き渡る。とりあえず1回戦目は負けた。つまりこの試合で負ければ敗退。勝てば延長戦といった感じだ

まあ、負けるわけにはいかないということだ

「そつだ真筆」

「ん？ どうした明日香」

試合の事を考えていると、明日香に話しかけられた。一応言っておくが、俺たちは敵を探すために走りながら喋っている。これが結構辛いんですわ

「朝……どうだった？」

「え……ああ、あれか。なかなか効いたな」

「そつか……それ以外には何もしていないだろうな？」

「あ、ああ」

なんだ？ 顔がやけに怖い

……でもまあ

琉華の微笑んだ顔が可愛かったなんて女子の前では言えない。しかも同じwars部員に

「……………」

そして明日香は黙り込んだ。そして沈黙が流れる。聞こえるのは俺と明日香の走る音。そしてどこからか聞こえてきた銃声

『明日香！ 真箏くん！ 敵が来てる！』

『神崎さん！ 明日香さん！ 前方に敵です！』

「え、うぐっ！」

「真箏！」

その言葉に反応したときにはもう遅く、俺の左肩を一発の銃弾が貫通する。うーん……やっぱりいつ受けてもかなり痛い。ってそんな悠長なことを言っている場合ではない。すでに攻撃を受けているんだから

「くっ……………行くぞ真箏！ 問題ないな！」

「あ、ああ！ この程度問題はない！」

ここで改めてフィールドを確認しておきたいと思う。一回戦目は俺たち側のフィールド、つまり荒野だった。そして今は二回戦目で相手側のフィールドだ

……………とんでもねえよ。まさか都市だとは思わなかったわけだし。だって延長戦と同じ場所だぞ？ さすがになにかしら着くっておけよとか言いたくなって仕方がない

ということ、慣れたフィールドっーことでやりやすいのかもしれない

で、いつも通りに攻め始める俺と明日香。だが敵もそう単純ではない。片方に盾の着いた武器（おそらく片手剣の類）を片方に持ち、

もう片方で銃を使っている。これじゃあ何か厳しいぞ……

まあ敵が一人だけいいか

しばらくそこの攻防戦が続く。というかこれだと俺たちが不利かもしれない。俺たちは2人で銃で攻めているわけだし、それに明日香の方に銃が向いている。明日香が刀で攻められない。これは困った状況だ。って、あれ？

これってさ、かなり単純に解決する問題じゃないか？ と、今更ながら思う

とりあえずその作戦の結果をまず報告させて貰おう。10秒で沈んでいったよ

したことは非常に簡単。俺が近づいて明日香に気を取られている内にバン。それだけ。本当に単純すぎることだった

まあ敵も沈んだわけで、搜索再開。と言いたるところだが、今の戦闘で2人してかなり消耗した。しばらく動けそうにないほどだ。俺はともかく明日香が無理そうだ。何せさっきまでの戦いでどれだけ銃弾を浴びたことか。見ただけで凄い傷を負っているのがよくわかる。それに歩いたら歩いたでかなりふらついている。これだと駄目だな……

「明日香、とりあえず休むか？」

「し、心配するな……この程度、どうってことはない……」

「いや強がらなくて良いから。あまり無理するとRWに残るぞ？」

「……悪い。少しだけで良いから休ませてくれ」

「謝るなよ。というか俺が進めたわけだし」

なんとか説得することに成功した

フラフラになった明日香は近くにあったビルの壁に寄りかかり、そのまま力なくズルズルと座り込む。相当響いていたに違いないと、とりあえずこの状態だと移動することが出来ないの、俺は周りを警戒することに

「くっ……こうしている間に負けなければいいが……」

「まあ大丈夫だろ。なんとかなるさ」

「……もう、大丈夫だ」

「おいおい……もう少し休めよ。身体持たないぞ？」

「この程度……」

「落ち着け。ちょっと待ってる」

立ち上がろうとした明日香の肩を掴んでもう一度座らせる。そしてPLを開いて健太に接続する

電話で良く聞くあの無機質な音が聞こえてくる。そして

『おう、どうした真箏』

「ああ悪い。今どんな感じだ？」

『そうだな……光久と今行動中だな。順調に敵陣旗に向かっている。その間に敵は2体倒してある』

「そうか。なら安心だ……健太。できるだけ早く決めてくれ」

『言われなくとも。それじゃ』

「ああ」

健太との接続を解いて、次は琉華に接続する

『どしたの真箏くん？』

「いや、ちょっとな。そっちはどうだ？」

『そうだね……とりあえず異常は無し。さっき敵は1人倒したから……うん。そっちは？』

「こっちはさつき1人倒したところだ。明日香が凄い負傷を負って今動けない状態だな……」

『そっか……まあ、陣旗には敵を近づけさせないからね。泥船に乗ったつもりでいればいいよ』

「それ沈むから」

『ははっ、冗談。それじゃあまた後でね』

「ああ」

接続を解く。そして……

「出るかな……」

最後に近藤さんだ。出てくれるかどうかもわからない。とりあえず出てくれることを祈ろう

ちなみにまだ謝っていない。というか今日はまだ話してすらいないだから出来れば今謝ってしまおうかなーなんて……タイミングがおかしすぎるか

しばらく無機質な音が響く。そして

ビーーーーーッ!!

「え」

試合終了を告げる音が響き渡った。結果はどうなった!? 勝ちか!? それとも負けか!?

明日香と2人で空中に投影された文字を見る

『B team lose』

reason : flag broked

Bチームは白扇高校。つまり

「ふう……健太が光久がやったみたいだな」

「あ、ああ……ぐっ」

試合が終了したということで、明日香の身体から傷が消えていく。一応言っておこう。このときの痛みも結構キツイ……大した損傷が無くて良かったと思ってしまう。目の前でこんな事が起きているのに

そして全員が集合する形になった

「大丈夫明日香？」

「ああ……まあなんとかな」

「神崎さん。わたしを忘れませんでした？」

「何のことだ？」

「……拙者が盾にさせられた気がしたのだが」

「気のせいだ光久！」

「……………」

なんていう会話だろうか。誰一人として次の試合の話をしない。

いや、明日香と琉華はそれらしい話をしているわけだが……

しかしまあ……健太はまたか

そしてエルフィはなんだ。忘れてただけだよゴメンナサイ

で、近藤さんは……一言も喋らない

話しかけようとは思った。だが、そうする間もなく延長戦が開始された

```
Wars program setting start .
field coating . . . . .complate .
enemy program . . . . .complate .
final battle data install . . . . .co
mplate
are you ready . . . . .Wars battle
start!!
```

延長戦の開始を告げる音が響き渡った
これに勝てば関東大会に進出できる

さて、俺と明日香の傷も無くなったわけだし、攻めるとしますか
一応再確認しよう。フィールドはさっきの試合と同じで都市。理
由も再確認しよう。白扇高校がただただフィールドを改修しなかつ
ただけ

……慣れてるから困る

だからと言って白扇高校も慣れてるわけだ。それも俺たち以上
に、だ

もしかして白扇高校がフィールドを都市にした理由は……駄目だ。
バカな俺ではわからないぞ

ま、攻めよう

傷もなくなったので普通に走れるようになった明日香。とりあえ
ず敵がいるとかそーいう感じの反応はしていないのでまだ大丈夫だ

ろつ。それに勝利を確信したような顔をしている。どこからこんな自信が湧いてくるのだろうか

あくまで俺の勝手な想像である

「真筆」

「ん？」

「……望には謝ったか？」

「いや……というかなんだ。空気を読むだる普通。今試合中だぞ？」
「む……それもそうだな」

バカかコイツは

「……………」

再び流れる沈黙。なんとも居づらい

とりあえず早く敵さんが出てくることを祈りたい、が

「……………どういう事だ？」

「敵が見あたらないってどうして……………？」

『わたしに聞かないでくださいよ。レーダーの故障とかはまず無いですし、それにみなさんの周囲300mまで展開しているわけですからそろそろ反応してもいいと思うんですよ』

「でも敵を見かけなかったが？」

『だからわたしに言われてもお』

敵が見つからないという事態が発生した。ここまできてこんな事態か……これは相当マズイ気がする

「とにかくエル。早く敵を捕捉しないと事は始まらないだろう。見つけたらW1で全員に伝えてくれ」

『了解です』

「それじゃあ」

『弦巻の皆さん元気です？』

「『え？』」

俺と明日香がPLを切ろうとしたその瞬間、聞いた事のない声が聞こえ始めた。誰だ？

『いやあ〜……ふふ。レーダーの故障かあ〜……ちよつと違つと思
うよ？ “ハッキング” が正解だね』

『えー！』

「『どういうことだ！？』」

『ん〜？ 簡単簡単。この僕がそっちのサポートルームのPCにアクセスしてレーダー機能の妨害をしてるだけ。簡単でしょ？ ほら早くしないとますます不利になつちゃうよ？』

まさかそんな事まで出来るとは思ってもいなかった。ここにきてまさかのレーダーへのハッキング。それはサポートルームに人がいればの話だが、そんな事態になると状況は一転すると言つても過言ではない

レーダーが使えない＝敵の発見が無理 陣旗もしくは大将への接近に気づけない 敗北の可能性大

まさに最悪の事態だ

『ほらほらエストラントさん頑張つてよ。たまにはこうやってPC遊びをするのも楽しいんじゃない？ あ、そうそう申し遅れたね。』

早乙女夕（おとめゆづる）。それじゃあ……PC遊びを楽しもうか』

『……あまりわたしを舐めないでください』

初めて聞くようなエルフィのマジ声。結構威圧感的な何かがある……ので、俺と明日香はその会話を聞いているだけだ
やがてPLが切られる

「明日香……」

「ああ……あんなエルの声は初めて聞いた」

「……………」

再び沈黙。これからどうするか……

「なあ明日香」

「どうした真筆？」

「これってさ、俺ら戻った方がいいんじゃないか？」

「どうしてそうなる？」

「いやほら……さっきリーダーの事件があつたわけだろ？ つまり敵が陣旗とエルフィに近づいていたとしたら？ しかも敵全員……3人ずつだな」

「……………琉華と望に勝ち目はない……な」

そこまで言った明日香がハッと何かに気付いたようだ。多分俺の言いたいことを理解したのだろう

「戻るぞ真筆！ お前は望のいる方へ向かえ！ 私は琉華の方へ行く！」

「えー？ ちょっと何ソレ！？ すっげえ気まずい空気が流れる気がするんだけどー！」

……その言葉を聞かれる訳もなく明日香は琉華のいる方向へと走っていった。そして

『レーダー直りました！ 大変です！ 大至急近藤さんの所と藤堂さんの所に向かってください！』

「言われなくてもその最中だ！」

『まさか……僕が負けるなんて……』

……とりあえず俺は2人の戦いの事が気になってしまった

まあそんな事を考えながらも近藤さんがいるであろう、サポートルームから51m地点の場所へと向かう。その途中でPLが繋がれる

『……神崎！』

「え！？ 近藤さん！？」

『……もう保たない……！』

「急展開すぎてビックリだよコンチクショー！」

そんな連絡が入ってきたので俺は足のスピードを速める。間に合うか……！？

段々と武器と武器のぶつかる音が大きくなってくる。つまりもう近い。まだ保っているみたいだ

『……ぐっつ！』

近づいていくと今度は近藤さんの声が聞こえた。多分今の声は結構マズイ感じかもしれない。急がないと……

そして

「大丈夫か近藤さん！」

『……神崎……』

「ちっ、早くトドメを刺せ！」

「わっ、わかってますよっ！ ごっ、ゴメンナサイ！」
「謝る必要性ってある？」

目の前にいる敵は3人。どうやら読みは当たったみたいだ。その内の2人が俺の方を向き、その内の1名が近藤さんにトドメを刺そうとしている。そしてその近藤さんは力尽きたように武器を動かすこともない。これだと……

もう間に合わないかもしれないと思った俺は咄嗟に銃の引き金をトドメを刺そうとしている人に向けて引いた。頼むから当たってくれ……！

だがその期待空しく、その目の前にいる2人に攻撃を阻まれた。だが、今の銃声で怯んだのか、トドメを空ぶってしまった。まだチャンスはある

今度は敵に目がけて走り出す。多分反撃されるだろうが、そんなのどうだっていい
そして

ドスドスッ！！

「コイツ……バカか何かか……？」

「とんでもないね……」

「ひああっ！！」

「……神崎？」

目の前にいた2人に両サイドから槍で貫かれた。はっきり言おう。とんでもない痛さだ

……トドメを刺そうとしていた人なんてビビって動けてないし

だが……これが狙いだ

「……バカにはバカなりの考えがあるんですよ」

俺は最後の力でT E M Mを起動し、両手に銃を持つ。正直その手に握力は無い。いつ落とすかもわからない
そしてその銃を両側にいた敵に向けて

「しまっ
」!

「やられたねこれは……」

俺を倒したことで満足していたのか、動けなかった両サイドの敵
に向かって引き金を引き、その銃弾が脳天を貫通する
それと同時に俺も力尽きてその場に倒れ、意識を失った

『……本当にバカじゃないの?』

『え……?』

『……ごめん。勝たせて貰うから』

「む……」

目が覚める。そこは……救護室のようだ。どうやらまた気絶して
いたらしい

……何回目だよ

右を見るとそこには誰もいなく、幾つかのベッドが置いてあった。おそらく気絶していたのは俺だけのようだ。そりゃまああんな激痛だった訳だしな

右から上に視線を戻し……ってあれ？ なんだろう。今気付く俺もあれなんだが、腹部当たりになんか少しだけ重みを感じる。俺太ったっけ？

少し身体を起こし、違和感のある自分の腹部を確認してみる。するとそこには

「へ？ 近藤さん？」

近藤さんが俺の腹の上に頭と腕を置いて寝ていた。なにがあつたらこうなる？

……しかしまあ……明日香と同じように普段の態度と顔からは想像も出来ない寝顔である

これを言うのはかなり失礼だ

「すーすー……」

小さな寝息を立てながら眠る近藤さん。まるで小さい子供が寝ているようで……

俺はロリコンではないぞ？

とりあえずこの状態だと起きられないので、再び横になる。近藤さんが起きるまでこの状態っていうのも辛い。それにもし他の誰かに見られたらどう見られるのだろうか

ここである事を思い出す。試合の結果だ。それが今気になって仕

方がないところなのだが……誰かに聞こうにも聞きに行けないし、それに近藤さんを起こすわけにもいかないし……

「ん……」

と、ここで近藤さんが目を覚ましたようだ。腹部から重みが消え、とりあえず起きてたなんてバレたらヤバイ気がするので寝たふりを……やべ、再び睡魔が。いや、寝るわけにはいかないか

「……………」

……なんだろう。ジッと見られている気が

「…………別に起きてるなら起きてればいい」

「ぶふっ」

バレてた

その言葉を聞いて安心してしまったのか、俺は起き上がる

「…………おはよう神崎。…………ごめん、いろいろと」

「いや謝らなくて良いから。というか謝るのは寧ろ俺の方だから」

そつだ。今ここで謝れば良いんだ

「近藤さん」

「…………うん」

「一昨日は本当に申し訳ございませんでした……………」

「…………うん」

「だからどんな罰でも受けます。というか受けさせてください。そつしないとアレだ。俺の気が済まないというかなんというか……………」

自覚：M体質 な俺

「……その前に」

「え？」

俺が覚悟を決めたというのに、何か近藤さんも言いたいことがあるのだろうか。まあいい。急いても仕方がない

「……私からもゴメン」

「なんと」

いや、そりゃ驚くだろ。俺が謝ったのに近藤さんも謝り出すとは……何もしていないのに？

「いやいや。まず近藤さんは何かした？ 少なくとも俺が謝られるような事は何もしていないはずだけど……？」

「……一昨日気絶させた」

「……それだけ？」

「……あとさっきの試合で助けて貰った」

「……だけ？」

「……あと昨日は電話に無視した」

「……」

謝られる要素が1つもない

「……だからゴメン」

「……うん謝らなくてよるしい」

「……え？」

「だから謝らなくていい。だから俺にする罰でも考えてくれや」

「……………」

完全に自覚：M体質

「……………」わかった。とりあえずもう一つ

「うん」

「……………」好きです

……

……………

……………

……………え？

一度情報を全て整理してから近藤さんの顔を見してみる。もの凄い真っ赤だ。まるでチェリーのようだ

「さて、これはからかっているに違いないな。おそらくこれも罰の一環だ。うん

「うん……………」

「……………」それだけ

「うん」

短っ

「……………」それじゃあまずは試合の結果を教える

「うん」

罰はどこかへ飛んでいったのかもしれない

「……私たちの勝ち」

「……へ？」

「……だから私たちの勝ち。……私が陣旗の撃破をして勝ったの」

「……よくやったな近藤さん」

「……とりあえず“望”って呼んで欲しい……」

「へ？」

「……“望”って呼んで欲しい」

……急に何を言い出すんだこの娘は

ま、まあ罰の一環……

「でまあ……なんで望が？」

「……黙秘権を施行する」

ずるい

でもまあ聞かないでおこう

そして沈黙が流れ出す

で、その10秒後

「……行こう。……みんなが外で待ってる」

「あ、そうなの？ んじゃ、行くとしますか」

俺と近藤さんはベッドから立ち上がり、入り口へと向かおうとする。が、近藤さんは立ち止まったままだ

「……どうしたの近藤さん？」

「……だから……」

「あ、ゴメン」

「……罰がまだだった」

「う」

ここに来てそうくるか……

「……目を閉じて欲しい」

「……はい」

なんだろう。目を閉じるのに抵抗がかなりある。だってほら、明日香とか琉華とかエルフィとか……あれには恐怖すら覚えなくてもない。そして俺は抵抗を感じながらも目を閉じる

「……もう一回言わせて貰うけど、私は真筆が好き」

「え」

その言葉を聞き終えた直後、頬に何かを押しつけられた。そしてそれは段々と離れていき

「……終わり。……行こう真筆」

「え……ちょ、ま！」

「……やだ。……待たない」

「今！ 今何した！」

俺は望を起きかけるようにして救護室を出る。するとそこには見慣れたみんなの姿があった

みんなが心配していたのかはわからない。だが、とりあえず事実としては……このみんなで関東大会に進出した

さっき気になることもあったが……気にしても仕方ないのかもしれない

れないが……

とりあえず

全員揃ったということで、帰宅準備を終え……

Wars 都大会は5位という成績を残し、幕を下ろした

#24 5位決定戦(後書き)

……はい

とりあえずChapter3 が終了いたしました

なんだかスゲー適当だった気がしてならない

……はあ

んでもって次回からChapter4 突入です
関東大会編ですね、ハイ

……光久の眼帯の理由と部長の過去を……

あれ？ なんだかおかしい気も？

まあいいです

とにかくお疲れ様でした

#25 7月4日(前書き)

さーて前回話したとおり新章突入だー

今回は前後編無しですb b

7月。梅雨の季節が去って何日経ったことであろうか。そして期末テストと言う忌々しき何かが終わって何日経ったことであろうか。ちなみに2日である。梅雨は知らんが
そしてwarsの都大会が終わって何日経ったことであろうか。とりあえず今日でちょうど2週間だろう

時が流れるのが早く感じて仕方がない。そう、7月。つまりはもう少して夏休みというパラダイスが控えているこの時期。まだ計画とかは立てていないが、とりあえず遊ぶことは確定事項だ

時が流れるのは早い。だが、それは自分が楽しんでいるときだけに限るようなもので

「さて、この問題を解いてみる」

……授業中はどうしても長く感じてしまう。誰でもこういった経験があるに違いない。「早く終われ、早く終われ」と考えているとどうしても長く感じてしまうものだ。それに時間になってしま
い、何度も何度も時計を見てしまうという現象

ちなみに7月4日午前9時。1時間目が始まってからまだ15分くらいだろう。この15分の間にどれだけ時計を見たことか。……数えても仕方ないのだが15回、つまり1分に1回ペースだと言っておこう

「それじゃあ佐々木」

しかも困ったことに教科は我がクラス担任である梅花哲也先生による数学。何が困ったかつて？ とりあえずこれは仕方のないことだが、俺の席は窓からかなり離れている。もっとわかりやすく言うと、廊下の真横。風通し最悪のポジションと言っておこう。……真後ろの扉が開いているのに全く風が通らないというのが何とも腹立たしい

言っておくがまだ席替えはしていない

話が逸れたがメインの理由を述べさせて貰おう。まず1つ目。この学校には何故かクーラーが取り付けられていない。「今は節約……ecoの時代なのだよ諸君！ by校長」というわけでして……クーラーがついているのはPC教室と職員室だけである

格差社会を感じてしまう

とりあえず2つ目。今日は風がない。先程述べたように真後ろの扉は開いている。それにベランダに出るための窓（ちなみに2階）は全開になっているのだが……本当に風がない。これはこれで本当に困る。何せ夏だから

そして最後に3つめの理由を。今は7月、季節は夏だ。6月の真ん中辺りで衣替えが施行され、生徒のみんなは夏服に変わっている。もちろんその制服は風通しが良く結構薄い素材で出来ている。だから女子の下着がよく見るとかそういうこともある

下心丸出しの自分が恥ずかしい

……話が逸れた。とりあえず制服の素材が薄くてたまに涼しい時がある。だがこの時間。我がクラス担任であり、今この場で授業をしている梅花哲也氏は夏とは思えないとんでもない格好をしている

のだ。どんな格好かって？

……まさかのスーツ

いや、ワイシャツだけなら理解はしよう。だってな？ スーツだぞスーツ。しかも黒。黒は熱を吸収するんだぞ？ 知ってる？ ……

…ごめんなさい

とにかくだ。あの格好を見ているとこちらまで暑くなってくる。だから現在ボタンキユーしている人の数が半端無い。特に男子だが運動部の人間は生き残っているようだが、文化部、もしくは帰宅部の連中は机に突っ伏している。それだけ凄い

ちなみに先生の額に汗はない

あれは化け物か

……そんな事考えてたらチョークが横切りました

「よしダウンしている人間が多くなってきたみたいだが、このままだと夏休みを過ぎせないんじゃないのか？ まあいい。そんな俺からみんなにプレゼントだ」

『ブーッ!!』

……先生からのプレゼントと言ったらアレしかあるまい。それを察したのか、生きていたクラスメイトは皆親指を下に向けてブーイングを始めた

「そうか……いらないのか。折角俺がアイスを全員分買ってきたくいうのに。これは職員スタッフの皆さんで美味しくいただくとするか」

『ごめんなさい梅花先生』

……『アイス』という言葉に反応したのか、死んでいたクラスメイトはガバツと起き上がり、死んでいた顔を生きている顔に戻っていた。若干辛い物もあるが

「いやしかしだな……さつきブーイングをされてしまった訳だしな……よし、この問題を出来た物から順に渡していこう。では……」

先生は黒板に文字と数字を書き連ねていく。そしてこの教室の生徒に出された問題は

『このクラスの委員長である佐々木健太の悪い点を3つ答えなさい』
「これは生徒に対するイジメですか!!」
「何を言ってるんだ佐々木。もうこの教室のクラスメイトからは非難の声が上がってるのに気付いてないのか？」

……当然俺もその1人である。しかもその問題に全員が賛成したのか、ペンでノートに何かを書く音しか聞こえなくなった

健太が泣いてるように見えたが

「とりあえずこれは冗談だ。教科書68pの問9番だ。それでは開始」

その言葉に『なんだよー』『もう10個も書いたよ』『俺は20個書いたぞ』という声が上がっていた

結局、先生は色々と罪悪感を感じたのか、自分の分を削って健太に2つ贈呈していた。……その1つは誰かに奪われたらしいが

やっとの事で昼休みになる。体感経過時間はすでに8時間……通常の倍だと言っておこう

そして現在昼食を摂るためにwars部の全員を呼びに行くため廊下を移動中。現在のメンバーは俺、エルフィ、健太といういつものメンバー。この3人で2組と6組に行くと確実に残りのメンバーが呼び出される

で、現在5組教室前

「あ、ちょっと待ってね。琉華と望呼んでくるから」

といった感じになる

というか俺たちの姿見ただけでそれはないだろ。もし他の生徒に用があるって時だったらどうなるんだ

まあそれは置いておこう

「ゴメンゴメン。ちょっとノートまとめるのに時間掛かって」

「……寝てたのが悪い」

そしてさつきから30秒後。教室の奥（と言っても真ん中の列の一番前だが）から、琉華と望がやってきた。琉華でも授業中に寝ることがあるんだなとか思ってしまう一瞬だった

「それじゃあ光久と明日香を呼びに行こうか」

「だな」

「……お腹空いた」

「それじゃあ僕は開いてるスペースを取りに行ってるわ」

そう言って健太は1人で屋上へと続く軽暖の方向へと駆けていった。珍しく気が利くじゃないか

一応学校の屋上は昼休みになると生徒の数が増える。その理由は弁当を食べる生徒が多いからだ。毎日そこで食べている訳なのだが、たまに出遅れたりすると座れる場所が無かったりする。だからこうやって先に取りに行った方がいいのだが、全員で迎えに行くのが何故か習慣になってしまい、埋まっていることが多々ある。要は自業自得とかそんな感じだ

「ホント気が利くよね……」

「ええ、わたしもそう思います……」

「……いつもこうだと嬉しい」

「だよな……」

全員共感しているようだ

まあとりあえず早く2組に向かおう。残りの2人を連れて来なくてはいけません

「へ？ 2人とも職員室？」

「うん。なんだか宿題忘れてきたらしいよ？ 他にも何人か行つて

……多分あと5分くらい戻ってこないんじゃないかな？」

2組の教室に着くなり、さっきの5組で起こったような事がこの場でも起こる。が、どうやら明日香と光久は今この教室内にいないらしく、言つちや悪いが無駄足だったのだ

まさか2人揃って宿題忘れとは

「どじするっ」

「そうですね……」

「……お腹空いた」

「それじゃあ私から明日香と明智くんに伝えておくよ。屋上でしょ？」

どうするか考えていると俺たちに明日香と光久の状況を教えてくれた女子がそう言うってくれる。それなら助かる

「うん。それじゃあよろしく」

「はいはい。……なるほど。明日香も惚れるわけだ」

「へ？」

「」「」「」

「後ろの3人目が怖いよ？ それじゃあね」

俺が理解できない事を言うと、その女子は身を翻し教室の奥へと戻っていった

「それじゃあ行くか」

「ですね」

「……お腹空いて歩けない。……真箒、おんぶ」

「いや無理」

「望はよくそんな事言えるよね……ここ学校なのに」

で、結局本当に望をおんぶして屋上へと向かう事になってしまった。何故なら望がそこでボタンキューしたからだ

……屋上へと向かう間、他の生徒からの視線が凄かった

「おつかれ真箒……」

「はあ……おんぶした状態であの階段はキツイな……」
「……おかげで助かった」

そんなこんなで現在屋上。ついてから3分が経過しようとしているが、明日香と光久はまだ来ない。そんなに時間が掛かる事なのだろうか

まあそんな事を考えていても仕方ないので俺も弁当を食べるとしよう

弁当の蓋を開く……そこには全面焼きそばという大惨事が

「真筆くん……なかなかやるね」

「いや俺に言うな。母さんに言え。それに俺は塩派ではなくソース派だ」

「細かいですね……」

何かと突っ込まれたが事実は事実だ。仕方ない食べるとしますか
箸がない。弁当箱の中身以上に大惨事だ

あの人は何がしたいんだ。帰ったら真っ先に言おう

とりあえずこの状態だと俺が昼食を食べることが出来ず5時間目が始まり、そのまま力尽きてしまうか、手づかみという大層お行儀が悪い食べ方をするかという考えが脳裏をよぎる。が、もっと良い方法があるじゃないか

「なあ、誰かあまりの箸保ってない？」

「ん？ 無いな」

「わたしも無いです」

「ボクも……さすがにね」

「……無いの？」

最後の望は儚く散っていきました

仕方ない。ここはお行儀が悪くても手づかみで

「~~~~」

「琉華、一体俺の焼きそばという生命線をどうするつもりだね。まさか俺が食えないからって自分が生きる糧にでもするつもりかね？」

「まっさか〜。ボクもそんな鬼じゃないってばあ〜。はい、あーん」
「……！！」

琉華が俺の弁当がこの中の焼きそばを自分の箸で掴むや否や、そのまま自分の口に運ぶという動作は見せずに俺の口元まで運んできた。むう、前にもこのようなことがあった気がするが、あれは殺人平気だったので今回は安心できる。が、しかし。ここは屋上ですよ？ 人が多い訳ですよ？ 羞恥心を知れ とは今回ばかりは言っ
ていられないのだろう。琉華の発言にエルフィと望が反応したっばい、とりあえず置いておかなくては

「ほらほら遠慮せずに。箸無いんでしょ？ だったら手づかみで食べるよりはかなりマシだよね〜？」

笑顔でこちらを見ている琉華。何というか笑顔がこえーです

「食べないんだったらボクが全部いただきますでもいいけどなあ〜」

「是非いただきますと思います」

「~~~~っ！！」

もう俺も諦めた。全部食われるのは御免だ。だからこれくらい受け入れる！ そうしないと俺の生きる道が見あたらぬ！

「あ、あーん」
「ほい」

そして俺が口を開き、段々と琉華の箸が近づいてくる。そして

「んむっ」

「ほら次行くよ」

食べてしまった。ああ、周りからの視線が痛々しいよ……

妬み、恨み、嫉妬とかそんなマイナスイメージの視線しか飛んでこない。主に男子。主にクラスメイト

「はい、あーん」

「あっ、手が滑りました」

パシッ

「あっ、ちよつとエル！？ なにしてくれてるのさ！」

「あ、すいません藤堂さん。どうやら手が滑ってしまっただけです。早く箸洗ってきた方が良くないですか？」

エルファイが俺の口元まで運ばれてきた琉華の箸を手ではたき落としました。手が滑ってああいう動きをする物なのだろうか。そもそも手が滑るってどういうことなのだろうか

「……エル、後で覚えておいてよ？」

「ええ、覚えておきますが……負けるわけにもいきませんので」

そして琉華は箸を洗うため、ダッシュで校舎へと戻っていった。さて、これからどうやって食べるとするか。琉華が戻ってきたら

来たでまたああなりそうだし……それまでは待つか？ でもなあ……これ以上やっていると琉華にも悪いしな。お行儀が悪くても手で

「はい神崎さん。あーんしてください」

「……………」

今度は手を滑らせて琉華の箸を落としたエルフィがフォークで俺の口元へと焼きそばを運んでくる。それと同時に周りから先程と同じような視線が飛ばされてくる

……今気付いたが健太は俺の近くにいない

「ほら、あーんしてください」

尚エルフィの動きは止まらない。止まらないというか俺の口元でストップしている

望が苦虫を噛んだような顔でこちらを見ている。顎に手を当てながら、何かを考えるかのように……

「早くしないとわたしが全部いただきますよ？」

「うっ……あ、あーん」

「……おっと手が滑った」

今度はその場にいた望が上から手を振り下ろしてくる。その目標はエルフィが掴んでいるフォーク。多分また

「安心してください。落とさないようにガッチリ掴んでありますから」

バシッ

「……か、堅い……」

望の振り下ろした手はフォークを落とすことなく下へと振り下ろされた。なんていう握力だエルフィ。男子の俺でもビックリしたよビックリして目線が下に行きつつ口がポカーンだよ……

「はい、あーん」

そして再びエルフィの腕が動き出し

「……あ、足が滑った」

ドガツ、ヒューン……カランカラン

「痛あつ！ なっ、何するんですか近藤さん！」

「……ごめんエルフィ。……ちよつとバナナの皮を踏んづけちゃつて足が滑った。……早くフォークを洗ってくることを推奨する」

……俺にはそう見えなかった。今バナナの皮を持っている望みだが、その直前に起こった事を俺支店から教えよう

先程のフォークはたき落として俺が下を見ていたのは良いだろう。そこからだ。ポカーンと開いた口に再びフォークが近づいてくると、望が後ろに手をつき始めてそして足を振り上げてきたのだ。だからこそ起きた事故。ライトグリーンの何かがスカートの中に見えた

「む……後で覚えて置いてくださいよ近藤さん」

「……私も負けたくないから」

この女子たちがすげーおそろしーです

「でまあ、エルフィもフォークを拾って洗いに行くために校舎へダッシュして戻っていった」

「……さて、ここから先の流れは読めなく無いぞ」

「……あーん」

「予想通り過ぎて困るのだ」

「望は都大会が終わってから急に壊れだした。何が理由だとか原因だとかは知らん。とにかく明日香たちと同じように壊れたのは事実だ」

「まあこれは抵抗しても無駄だとは思うので受け入れるしかない」

「あーん……」

「……随分と受け入れが早い。……これは勝ち」

「そして焼きそばを掴んだ箸が俺の口元へと運ばれてくる。そして」

『あつ、銃が滑った!』

「ドンッ、バキッ！」

「危ねえええええつ!!！」

「……明日香!? ……今のは普通の人間がやる事じゃない!」

「黙れ望! そもそもお前たちがいけないんだ! 私がない間にそんな事をしておつて……誰が許すか! その箸を壊せばこちらのものだ! さあ真箒! 私の箸で食べるといい!」

「光久ー、割り箸持ってないかー?」

「割り箸か? ふむ、それならちようど3つ持っておる。使つと良」

「い
…………無視するな真箏」

とりあえず光久から割り箸を貰ってやっと落ち着いて食事が出てくることに。ああ…………いろいろ大変だったな…………
で、全員が集合し

「しかし暑いな…………」

「仕方ないだろ。いつもここなのだから。それに中だと更に暑いぞ？」

「それもそうなんです…………やっぱり夏ですね」

全員が弱音を吐き出した。そりゃまあこんな暑けりゃ誰だってこ
う言っわ

ちなみに本日の最高気温は34度だそうです

「…………試合中はもっと暑くなるはず」

「だよねえ…………もつと忍耐力つけようよ」

「その通りだ。これだと夏の間を過ごせぬぞ」

「光久の言う通りだなあ」

そうか…………思えば今月は関東大会があるじゃないか。だからこの
程度で弱音を吐いてたら試合中とんでもないことになる。試合中は
動くわけだし…………

なんだろう。今更運動部に入ったことを後悔　しちや駄目か

「そついえば初戦の相手つてどこだっけ？」

「まだトーナメント表が渡されてないからわからん。ただゆだんは
禁物だな」

「…………どっかの誰かさんがまだ自己犠牲になる」

「え？ それって俺のこと？」

多分違うない

「とにかく頑張るしかないんじゃない？」

「健太殿の言うとおりで。そうするしかあるまい」

「単純だね……真箏くんと違って」

「真箏と比べるな藤堂。勝ち目がまるでないじゃないか」

「あ、ゴメンね。じゃあ吉原先輩にしておく？」

「比較対象が嫌だ」

どういふ比較基準だろうか

まあとにかく最初話していたこととはずれてきたので……

食事に集中しよう。我ながら最悪だ

と思つたら全員が再び箸を動かし始め、その15分後予鈴が鳴り、それぞれの教室へと戻っていった

やけに長く感じた午後の授業も無事(?)終わり、現在放課後。掃除当番だったこともあって少し遅くなってから部室へと向かう。エルフィと同じ掃除当番なので一緒に部室へと向かう

「夕方暑いですね……」

「そりゃまあ夏だしなあ……」

……人が会話に困ったときは天気の話をするとか言い出すけど、それって本当なのかもしれない。だってさっきまで無言でここまで来たわけだし。ちなみに部室の30m手前の場所だ

よくここまで来られたと思ったりもする

で、そんなこんなで部室へ到着

「おう遅かったな神崎、エストラント」

「掃除当番だったもので」

「待ちましたか？」

部室に入ってくるなり部長からのお言葉。貰っても嬉しくは無いが一応受け取っておくとしよう

……お約束、俺の頬を銃弾が掠りました

「いや、さっき俺も来たところだしな。……ま、全員揃ったわけだし渡す物を渡す。ほらボサツとしてないで席に着け」

「あ、はい」

部長にそう言われてテーブルの周りにある椅子に座る。なんていうか……もうそれぞれ椅子が決まっているみたいで、毎日同じ椅子を座っている

説明が下手でわかりにくかったかもしれないが、とにかく椅子が私物化し始めている感じだ

「さて……まず1点目。これが来週の月曜から始まる関東大会のトーナメント表だ。よく目を通しておけ。ちなみに最初の対戦校は聖アマリア女子高等学校だ。女子だからって気を抜くなよ」

「……なんで僕を見るのだね？」

「そりゃ過去にあんな事があつた訳だからな」

「あの時はさすがに相手に同情しましたよ……」

「私ですらそうだったな」

「……最低」

「ま、まあ落ち着いて。でも今回は仕方ないよ。女子校つてなつたら……ねえ？」

「そもそも言いながら僕を見るな」

……さて、大変な事になつたと言っても過言ではないだろう。対戦校がまさかの女子校と来たか。男子とあつてはかなりやりづらいが、今回は仕方ない、か……

「で、2点目だ。これが群馬県の大会のデータだ。もちろん聖アマリアのデータも入れておいた。その他のデータが欲しければ後で来い」

……部長の目が俺たち男子の方だけを見ていた。つまりはそういう意味であろう

「とりあえず今日は好きにしてくれ。俺はまだこの前の期末の自己採点が終わってない。って、お前らどうした？ 一気にテーブルに突っ伏して」

『思い出させないください』

「え、あ、ああ……済まなかった」

テストという名詞を聞いただけでウンザリしてしまう。まだ結果がわからないとはいえ……もしそうなつたら……なあ？

まあとりあえず今日は演習を行うことになり（結果はなんとか勝

利)、そして下校時刻になって全員が帰宅する

来週の月曜。つまりは5日後だ。その日から関東大会が始まる。今まで以上の強敵がいることには間違いはない。だから負けても仕方のない話だ　　が、できるところまではやろう

……関東大会の結果があんなことになるなんて、この時のwar
s部メンバーは思ってもいなかった

#26 Wars 関東大会前日

7月の第1週が終わり2週目に突入。つまり日曜、7月8日。更に詳細を言うならば、Wars 関東大会の前日とでも言うっておこう。現在時刻は8時。こういった休みの日でも割と早く起きるのが俺だ。別に見たいテレビがあるとかそういう訳ではなくだな……休みの日の朝は一応ランニングしてるんだよ

……見栄を張りました。本当は今日からです

Wars部という運動部に所属してはいるものの、中学校の時に入っていたサッカー部と比べると断然運動量が少ない。というか少なすぎる。だから最近運動能力が落ちてきてしまったのか、走っていると息切れしやすくなる。前と比べての話だが

というわけで、俺は今日から運動不足を解消するためにランニングを始めることにした。何？ もっと早く起きろって？ ……休みの日に早起きするのは嫌いなんだ

ベッドから降りて服がしまつてある収納の元へと歩き出す。そしてその収納のドア(?)を引き、動きやすい服装を取り出す……むう。やっぱり早めに出しておくべきだっただろうか。去年まで着ていた服が見あたらな……あ、あつたあつた

それを取り出し、広げて自分の前に持つてくる。が、やっぱり駄目だ。若干穴が開いてるし、それに少し小さくなったかもしれない。これじゃあ着られないな

……まず去年の服を着るところでどうかしてると思うが

仕方ないので他の服を取り出す。これもまた動きやすい服で……
一応念のためを思っただけ昨日辺りに買ってきた

そしてその服に腕を通し、部屋から出る。まずは顔を洗いに行く。
その後はリビングに向かい

「……まさか日曜まで来るとはな」

「何言ってるんですか神崎さん？ もう1ヶ月半くらい前からそう
じゃないですか」

「そうだぞ真箏。折角お義母さんたちがご飯を作ってくれているの
だ。お言葉に甘えているだけだ」

……日曜の朝だというのにも関わらずエルフィと明日香が椅子に
座って朝食が来るのを待っていた。というか、俺が来るの見計ら
っていたのだと思う。理由はともかく

母さんの顔を見ると笑顔。親父の顔を見ても笑顔。なんなんだろ
うこの夫婦。この両親

「それはともかく……どこかに出かけるんですか？」

「そうだな。何処へ行くんだ？」

「……お前たち女子には教えられん！」

「「え。まさか」」

どうやら誤解を与えてしまったみたいだが、とりあえず嘘も方便
だ。適当な事を言っておいてついでにこれがないようにするのが一番
手っ取り早い。が、この女子たちにはそんな事は通じないらしく

「それなら私も行くぞ」

「わたしも行かせてください。神崎さんが他の女性と不純異性交遊

をするのは許しません」

……通じないらしいです

嘘という作戦が潰れた以上、俺に安全にランニングに出かける為の
良い作戦は無いのか……？

まー、人はすぐに思いつかないのが欠点です（個人差有）

「で、本当は何処に行くんだ真箒？ まさかこんな可愛い女の子たちを置いて1人で遊びに行くつもりか？」

「可愛いってそんな……」

「そんな言葉言ってくれるのはお義父さんだけだな……」

とうとう親父にまで突っ込まれた。というかエルフィと明日香。その『可愛い』というワードに反応して顔を赤らめるんじゃない。この男はそう油断させておいて襲いかかるといふ作戦を考えていてだな……

「あらやだ真箒。そこがいいんじゃないの」

……母さんに心を読まれた

いつそこは遅い反抗期に突入するべきか？

「で、真箒。一体どこへ行く気だったんだ？」

「そうです。早く教えてください」

「む……仕方ない。今からちょっと走りに行つてこようとした所だよ。ただそれだけだ！ そんじゃ飯は帰ってきたら食べるから、行つてきますっ！」

「あ、ちょ神崎さん!？」

「まっ、待て真箒!」

後ろから2人で呼び止める声が聞こえたが、それを無視して俺は玄関へ向かい、そして外へと出る。よし、後悔した。なんだこの気温は。軽く30度いつてるんじゃないのか？

もちろん体感温度だから実際の気温は知らないがとにかく暑い

でもまあ走りに行くって言ってしまったんだ！　ここで戻ったら男じゃない！

そして俺はクソ暑い真夏の太陽が照らす道を1人で走り出した

『ありがとうございましたー』
「…………マジ死ぬ」

言葉の通りでございます。この猛暑の中走ろうなんて誰が考えたことか。…………少なくともここに1人いるわけなのだが

あれから30分くらいが経過しただろうか、現在家から約5km地点のコンビニ。買った物はスポーツドリンクとドリンクゼリーの2品。さすがに何も飲まず食わずだと死ぬ。まあ飯を食って走ったら走ったでまた保ちそうにないんだが…………

とりあえず今買ってきたドリンクゼリーを一気に飲み干す。まったく満腹感とかそんなのは感じないが、走るのであればそれで十分

だ。そしてスポーツドリンクも少し口に含み、1歩歩き出す。さて、ランニング再開だ

とりあえず飯を食べる時間が遅くなっていく

そんな事はどうでもいい。この運動不足をどうにかしなくてはいけない……でも始める時期を大分……いや、かなり……超大幅に間違えた気がする

後悔先に立たずだ

もう1度スポドリを口に含んで徐々にスピードを上げていき、走り始める。なんていうかまあ……完全に体力が回復したわけではないのでつらいところもある。が、この程度でへばってたらダメだなあの頃を思い出せ俺。中学生のあの頃を……真夏の校庭で走り回って汗を流したことを……

……吐いたが

いや、そんな悪い思い出を引つ張り出してどうするんだ……一応これでも運動神経はよかったもので……

まあその時はその時と言っわけです

しばらく走る。そして家から約7.5km地点の公園につく。案外日陰もあり、楽そうな場所だ

この公園は結構訪れる人が多く、夏でも冬でも……季節に関わらず人が来る。だが、時間が時間なのであまり人はいない。いても2、3人程度だ。俺と同じようにランニングをしている人だっている

……見た感じだと50代のおっさん

まあさつきはそこまで休憩を取れなかったので、ここで改めて休憩するでしょう。日陰のベンチは……あったあった。そこに駆け寄り、腰を下ろす。鉄製のベンチで陰にあったということもあり、ヒンヤリして気持ちいい。それに静かに流れてゆく風が汗に当たり、それが更に涼しさを感じさせる。なんだか段々と眠くなってきてしまった。自分でもウトウトしているのには気付いている。だが、どうも止められそうにない……

だがそんなことを思っていると

「うおっ」

視界が急に真っ暗になり、先程まで見えていた光景が見えなくなる

まあ、わかつていることはある。これは誰かの手で目を塞がれたのだ。だからお約束のアレで、『だーれだ』とかそういうパターンだろう。実際声を聞くまではわからないが、おそらくこれは女子の手かもしれない。結構柔らかいし、それに何よりも背中になんか当たっているのだ。しかも前に事故とはいえ手で触ったことがあるような気がしてならない

とりあえず明日香とエルフィは除外しても良いかもしれない。何処を走るとかそういうのは伝えていないからここに来ることは無いだろう。つまり予想できる相手。それは2人くらいに絞れた。が、どうやらそのもう1人の人物は外れていて欲しい。だから俺はこちらの方を選ぶでしょう。というか声を聞けばわかる

「……………」

「……………」

え？ 何？ お約束の『だーれだ』は無し？ ノーヒント？ ちよっと待て。もしこれで外れてたら相当やばくねーか？ まあ知ら

ない人だつたら無事かも知れないが……もし知ってる人間で間違つてたら？ 間違えられないよなあ……
だから俺は

「る、琉華……？」

「おお流石は真箏くん。よくわかったね」

聞き慣れた声を聞くと同時に視界に光が戻ってくる。その急な変化により目を細めてしまう

そして後ろを見ると我がwars部のスナイパーこと、藤堂琉華が立っていた。一体何をしていたんだろう

「こんな所で会うなんて奇遇だね。何してるの？ そんなに汗掻いて」

「あー……ちよつと運動不足解消の為にランニングを……な？」

「へえ〜……そっか。大丈夫だった？ こんな猛暑の中……」

「あ、ああ……ところで琉華は？ これからどこかに出かけるつもり？」

「ん？ ボクはただの散歩だよ。暑いから嫌だけどさ、これだけは止められなくてね。ティナ」

「へ？」

琉華が誰かの名前だろうか、『ティナ』と言い出した。すると、どこからか鳥の羽ばたきの音が聞こえてくる。そして1羽の鳥が琉華の周りを飛びだし、やがて琉華が差し出した左手の人差し指に止まる

「へえ……琉華、鳥飼ってたんだ」

「うん。インコのティナ。こうやって土日は毎日1人と1羽で散歩してるんだよ。家族の中ではボクが1番懐かれてるかなあ……」

「ふーん……」

「……意外って顔してるね」

「あ、悪い」

「いいよ別に謝らなくたって。さて、そろそろ行くこうかな。そうだな、真箏くん、午後は暇？」

「ん？ そうだな……多分大丈夫だな」

「おっけー。それじゃあ関東大会前日って訳だしなんか策とか練っておこうよ。場所は……真箏くんの家で大丈夫かな？」

「大丈夫。まあ……また後でな」

「うん。それじゃ」

琉華と別れ、琉華とは逆の方向へと走り出す。走り出したのだが、1歩足を進めたとき

「あ、あれ……」

急に目眩がして

ドサッ

「え？ まっ、真箏くん!？」

その場に倒れ込んでしまった

一方その頃神崎宅

「神崎さん……遅いですね……」

「だな……どこをほつつき歩いているんだ……」

「まあまあ落ち着いてよ明日香ちゃん。真箏ならもうすぐ帰ってくるって」

「お義父さん……でもなんだか真箏の家にいるのに真箏がいないのはどうも……」

「やっぱりそうよねえ……こんなお嫁さん候補が2人もいるのに帰ってこないなんてちょっとアレよねえ……もう1時間半も経ってるわね」

「わたし……探してきましたよか?」

「いややめておきなよエルフィちゃん。暑さで倒れちゃうよ?」

「ですがお義父さん……」

「大丈夫。真箏ならすぐ戻ってくるから」

「そうよ。それまで私たちと一緒に色々話しましょう。将来のこととか色々。もういつそのこと琉華ちゃんも望ちゃんも一緒に結婚しちゃいなさいよ!」

「いやお義母さん……さすがに日本は一夫多妻制ではないですから……これは私たちが解決するのでご安心を」

「まあ……私の中では明日香ちゃんに1票かしら……」

「俺はエルフィちゃんに1票だな……」

「「ありがとうございます」」

「ああ……あなた、真箏はいいわねえ……」

「そうだな……もう本当に4人を神崎家に受け入れてもいい気がするよ……」

「……明日香さん、負けません」

「それはお互い様だ」

……真箏の知らないところでとんでもない会話が繰り広げられていた

そして話は元に戻り

「ん……」

「あ、気がついた？」

目を開く。するとそこには見たことのない景色が広がっていた。とりあえず三途の川とかいう場所ではない……というか1度行ったことがある

それはそれで大問題だが

その見たことのない景色の中に知っている人物の顔……琉華の顔が視界に映る。さて、ここはどこだろう……とりあえず何処かの部屋の中であるに違いない。天井があり、今俺は……座布団の上で寝ていて、更には膝枕というものの上で寝ているからだ。勿論この場にいる琉華のものであるが

さて……ここは本当に何処だ

とりあえず情報を整理しよう

朝家を出て走り始めて、コンビニ寄って、公園で休憩して、琉華に会って、走り始めたなら目眩がして倒れて……なるほど。大体わかってきたかもしれない

琉華の顔を見る

「え？ 何？ ボクの顔に何かついてる？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……ありがとう。助かった」

「いやいや礼なんて言わなくても。とりあえずここはボクの部屋だよ。来るのは初めてだよね？」

「あ、ああ……とりあえず俺からも質問させてくれ。なんでこの部

屋にいるんだ？」

気になっていた事を聞いてみる

「え？ そりやまあ真箏くんが倒れたわけだし、それに人通りが少なかったから助けを呼ぼうにも呼べなかったからさ。だからあの公園から近いって事でボクの家」

「……電話すれば早かったんじゃないか？」

「……空気呼んでよバカ」

琉華が小さな声で何かを呟く

「え？ なんか言った？」

「ううんなんでもない」

ならいいか

とりあえずもう一つ気になっていることがあるので聞いてみよう

「もう一つ聞かせてくれ。なんで俺は膝枕をされているんだろうか」

「ん……？ ダメだった？」

「いや、ダメって訳じゃないんだけど……」

改めてその状況を確認してみる。なんていうか柔らかい。それにさっきまで外にいて汗を掻いただろうに、全然汗の臭いがしないというか……むしろいい臭いだ

……改めて確認したことにより、改めて自分がやらしいことに気付く

「ところで……今何時？」

「え？ え〜っと……11時ちょっと過ぎかな。あれから40分く

らい寝てたからね。水持ってこようか？」

「あ、悪い。頼むわ」

「うんわかった。それじゃあちょっと身体起こしてくれる？」

「お、おう」

琉華にそう促され上半身を起こす。その後ろから『あゝ……もうちょっとこのままで良かったかな……』とか聞こえたがそこまで気にしなかった。なんとなく

まあそれは置いておいて。琉華は立ち上がり部屋を出て行った。そしてその30秒後くらい。氷を入れたコップを2つ持ってきた琉華が戻ってくる。中身は水だ

「お待たせ。はい真箏くん」

「ありがとう。とりあえずこれ飲んだら行くわ。そろそろ帰らないと色々心配されそうだからな」

「そう……あ、そうそう。携帯結構鳴ってたかも」

「え、マジか」

水を飲みながらポケットの中の携帯を取り出し画面を確認してみる。不在着信が3件、メールが5通来ていた。さて確認していくとしよう

まずは不在着信。1つ目は健太、2つ目は明日香、3つめはまた健太だ。なんだろう。明日香はともかく健太は何か用事があったのだろうか

とりあえず次にメールを確認。1つ目は望、2つ目はエルフィ、3つ目はどこぞのお店、4つ目は健太、最後にまたエルフィだ。とりあえずまだ家にいるのかもしれない

と思ったところでまた携帯が鳴り出す。画面を確認すると、“健太”と表記されている

「……………」
「どござ」
「悪い」

琉華に許可を取ってから電話に出る。すると聞き慣れた声が

『やあやあ真箏。調子はどうだい？』

「調子ねえ……………別にどうってことはないけど……………で、何の用事だよ」

『ああそつだな。さつきから無視するから嫌になってたけど……………まあいい。午後暇？ 暇だったら光久も連れてお前の家に行きたいな』
「と」

「え？ 別に大丈夫だけど……………というか来い。大歓迎だ」

『あ、何？ もしかして真箏も考えてた？』

「とうるか琉華に言われてな。それで全員で、と」

『……………藤堂も中々凄い事を考えるんだな……………そんなもの女子に見せられる訳ないだろ……………』

「は？」

『だから僕は3人でDVDを見ようと……………』

「うん俺が間違ってたんだな。それは今日はなし。明日のことについて話し合うから来い」

『わかってるよ。それじゃあまた後で電話かメールすっから。んじや』

そして電話が切られる

「……………そっか。佐々木くんはそう考えてたのか……………」

どうやら琉華にはバレたらしい。これはこれで最悪な状況だ

「すまん……………」

「いいよ謝らなくて。でもそれが男の性なんですよ？ だったら……」
「え？」

その言葉とどろじに琉華が身をずいっと乗り出して来る。そして琉華の視線は俺の方を向いている。真っ直ぐに
なんだ？ 何が言いたい？ そしてどうしたいんだ……？

「……真箏くんはそういうのに興味あるんだったら、ボクたちには興味ないの……？」

「へ？」
「ねえ真箏くん。答えてよ」

依然として琉華の目はこちらを見たままだ

「いや……まあ、あることには変わりはないけど……とりあえず……ハイ」
「ふう……じゃあ」
「え？ ちょ琉 ！」

言うこと既に遅し。気付けばいつだかの状況のように琉華に馬乗りにされる。そして琉華が俺の上に乗ったまま、俺の顔に顔を近づけてくる。その距離僅か15cm程だ

「ねえ。真箏くんは……さ。この状況下で嬉しいとか思える？」
「う……コメントは控えさせて貰う」
「そうかあ……それじゃあ明日香とかエルとか望とかには悪いけど……あ、真箏くんもかな？ 真箏くんの初めて……奪っちゃおうかな？」
「へ……？」

悪戯な笑みを浮かべて琉華はそう言う。初めて？ それってどう
いう事だ……？

そんな事を考えていると琉華の顔が俺の顔に向かって動き出す。
止めようと腕を動かす。が、腕が琉華の足でガツシリと固定されて
いて動きそうにない。つまり回避のしようがない……
……もしかして……初めてってキスの事だろうか

距離は更に縮み、7cmの所である救世主が

p l l l l l l l l l ! !

「え？」

「よしっ」

「あ」

俺の電話が鳴りだし、琉華の動きが止まる。その隙に俺は腕を抜
き出すことに成功し、琉華の肩を掴んだ。これでなんとか……

「あーあ……冗談通じないなあ。寸止めするつもりだったのに」

その割には目がマジですが

「ほら、早く電話でないと切られちゃうよ？」

「あ、悪い。……とりあえず降りてくれないか？」

「あ、ああ……ゴメンね」

そして琉華が俺の上から降りる。そして俺は携帯電話を手に取っ
て画面を確認する。するとそこには“明日香”と表記されていた
仕方ないので通話ボタンを押す

「……もしもし」

『真箏！ お前今一体何処にいる！』

「何処つて……まあ」

『誤魔化さないでください！』

「誤魔化すつて……」

『……早く答えた方が身のため』

「待て。何でそこに望っぽい人物がいるんだ？」

『……『っぽい』つて何！？ ……正真正銘、近藤望！』

「……」

『とりあえず今すぐ帰ってこい！ 私たちが暇で仕方ない！』

「自業自得たるバカヤロー」

『黙れ！ とにかくだ。早く戻ってこい。そうしないと』

ピッ

やかましいので通話を切った。だが案の定また電話が鳴り出す
もちろん切つてやったが

これ以上来ると面倒なので電源を切る

「……なかなかやるね、真箏くんも」

「まあいい……そろそろ家に戻るわ。これ以上遅くなつて色々言われるのは御免だ」

「そう……あ、それじゃボクも一緒に行くよ。もうどうせ午後になつちゃうし」

琉華にそう言われて時計を確認してみる。すると11時36分と表記されていた。随分と長居したのかもしれない

「わかった。それじゃ行くか」

「うん。あ、ちよつと待つて。準備するから」

「うい」

そう言つて琉華は準備を開始する。そして俺は改めて琉華の部屋の中を確認してみた。いや、女子の部屋だから少しは抵抗あつたけどさ。なんていうか……結構女子の部屋つて感じがする

そして俺は机の上に置いてある写真立てを発見する。それは倒れていて見えないようになっていたが

好奇心

人なら誰でもこういつた物が沸いてくるに違いない。幸い琉華はあちらを向いている

なんだか見ちゃいけない気がしてならない

が、好奇心に負けた。その机の上に置いてある写真立てに恐る恐る手を伸ばしていく。そして

「ちよ、ちよつと真箏くん!? 何して……る……つて!」

「へ?」

写真立てに触れる直前に琉華がこちらを見たらしい。俺が写真立ての中を見ようとしているのを見てダッシュでこちらに駆け寄ってくる。そしてその写真立てを奪つてあちらを向く
やっぱり見ちゃいけない物だったか

「駄目だよ真箏くん……いくらなんでもそれは駄目だよ。ボクにはボクの秘密があるんだから」

「あ……悪い」

「うん。でもそうやって置いておいたボクも悪いかな。だからいつて見せる気は無いけど」

「いやそんな物だったら見せないで大丈夫だから」

「ありがとう……まあもし見たら見たで記憶が消えるまでボコボコにするだけだからいいんだけどさ」

「そう簡単に物騒なことを言うな」

「冗談だよ。それじゃあ準備も出来たし行こうか」

「あ、ああ。そうだな」

すると琉華はさっきの写真立てを机の上に戻す。その際一瞬だけチラッと見えてしまったが、小さい子供が2人写った写真が見える。多分琉華と誰か友達なんだろう

だが、それを隠す理由が俺にはわからなかった

そして俺と琉華は、俺の家に向けて出発した

「随分と遅かったな真筈……」

「……生かしておくべからず」

「へえ……随分遅かったと思えば藤堂さんもご一緒でしたか。つまりはアレですね。ランニングしに行くと言っておきながら藤堂さんに会ってあんな事やそんな事をしていたとかそういう訳ですね。わかりました。よくわかりました。近藤さんの言うとおり生かしてはおきません。明日香さん、近藤さん、戦闘準備をお願いします」

「了解」

「待て3人とも。落ち着くんだ。俺を殺してもなんの解決にもならない。とりあえず俺の話聞いて」

……聞いてくれませんでした

家につくなりこんな状態にあり、しかも家に着いたのは12時半頃だ。いやぁ……そりゃまあ怒るか。つーか待て。なんで俺が怒られなくてはアカンのだ。完璧朝からいたのが悪いんだろ

まあそんなこんなでいつもの俺の顔が3、4倍に膨れあがったところで女子4人を引き連れて自分の部屋へと向かう。なんだろう、いつもここで話し合う訳なのだが……どうも男子がいないとアレだ。悲しくなる

別に俺はホモではない

「で、なんで琉華がいるんだ？」

「ん？ ほら、明日から関東大会でしょ？ その話し合いをしようと思つてさ。後で男子2人も来るらしいし」

「そうですか……」

「露骨にガツカリした顔をするなエルフィ」

理由がどうも理解できん

「とりあえず、明日からの事を話し合うという訳だな」

「そゆこと。いやぁ、まさか3人とも真箏くんの家に来てるとは……

……侮れないね」

「……真箏は琉華の家にいたらしいけど……なんかした？」

「別に何もしてないよ？」

「……ならいい」

嘘をつくな琉華。十分やらかしてくれただろ

とりあえずここから健太と光久が来るまで色々と話していた。来たのは1時間後の1時半。それまでの会話等は割愛

「いやあ……クソ暑かった」

「夏は嫌いかもしれぬ」

「どうせ冬になったら冬が嫌いって言い出すんだろ？」

残りの男子2名が到着。なんていつか結構汗を掻いている

「さて、全員揃ったことだし、会議を開始する」

「だねえ。まずは対戦相手の確認でもしておく？」

「……聖アマリア女子高等学校」

「群馬県の学校らしいですね。えーと群馬の県大会で5位。わたしたちとほぼ同じ実力らしいですね。それに水曜と金曜の演習ではなんとか勝てましたし」

「でもそのように上手くいくとは限らんな」

「その通りだなあ。あっちもあっちで結構準備はすると思うよ？」

「だから僕たちも……今日は無理だけど、こっやって作戦を立てればな」

「ん〜……でも頑張ればいけるだろ」

我ながら単純な思考をする

「ふむ……まあ確かに何とか勝てなくもないが……まあそうなったらその時だ。各自気を抜かなければ大丈夫だろう」

「そだね」

「だが油断出来ない相手もいるのではないか？」

「……………吉原朱美^{あけみ}」

「クズの妹だったとは……………」

「やっぱり妹なだけあって強いぜ？ 結構油断できないよなあ……………」

「でも所詮吉原先輩の妹ですし……………」

エルフィが今サラッと酷いことを言った

「へくしっ」

「どうした拓人？」

「いや、どうも悪寒がするんだ……………ふっ、何処かの僕のファンが噂しているに違いな」

「黙れ変態」

「酷い言い様だね！？」

「事実を述べただけだ」

「くっ……………覚えてもいい西宮君！ いつか追い越してみせるよ！」

「何を言うか。俺はもう」

時間が流れるのは非常に早い。あれから3時間、4時半頃。

もう関東大会の話はどうでもよくなってしまったのか、全員でゲームをやりだした

ちなみにWarsのゲームである。健太が面白そうだからと言って買ってきたつばい

その買ってきた本人が一番弱いわけだが（注・光久を除く6名で）

そして光久は取扱説明書を真剣に読んでいるという悲しい状況に

「ふっ琉華め。まだまだのようだな」

「仕方ないじゃん！ だってボクはスナイパーだから近接攻撃は慣れてないの！」

「それは言い訳だな。私はスナイパーではないのに何故こんなに移動しているのかわからんなあ」

「むっ。エル、順番だから交代」

「は、はい」

現在明日香がぶつちぎりのトップ。続くは望、俺、琉華、エルフイ、そして健太

2人プレイしかできないので、負けたら交代と言うことになっている

今更だが、ゲーム機はプレイヤーミナル6だ

そしてこのまま時間は過ぎていき

「それじゃあまた明日だな」

現在時刻は6時半。エルフイが帰ると言って、他の皆も帰ると言い出した

「それじゃあまた明日な真箏」

「明日は頑張ろうぞ」

「夜更かしして死ぬな真箏」

「それじゃあね真箏くん」

「……また明日」

「それではお邪魔しました」

全員を玄関で見送って、しばらくしてからドアを閉める。なんていうか……騒がしかったとでも言っておこうか。この疲れが明日に残らなければいいが

玄関のドアを閉めてから少しして部屋へ戻り、そしてベッドへダイブする。予想通り睡魔が襲ってきた。でも飯も食ってないし風呂も入っていない。だから負けたら駄目だな
だが

「ふう……」

結局睡魔に負けて寝てしまった

そして起きたのは翌日になっていた

#26 wars 関東大会前日（後書き）

……あれ？ かなり適當？

まあ次回から関東大会開始です
ではではさざばっ！

#27 事件と再会と戦いと

「あのまま寝過ごしたか……」

目覚ましをしっかりセットしてあったので大丈夫だったものの、やっぱり早起きしてしまった。ちなみに目覚ましは鳴る1時間前である

結局昨日はあのまま起きられずに寝てしまい、現在に至るといわけだ

つまりは夕飯を食べていなければ風呂にも入っていない。若干臭っているのがわかる

さて、今から特にすることも無いような気がする……いや、武器の手入れとかがまだだったな。いや、それよりも先に優先すべき事があるような気がする。まずは昨日のままであるこの身体をどうにかしなくては

つまり最初にやることは決定した

ベッドから降りてタオルと服を取って部屋を出る。そして風呂へと向かう

脱衣所につくと持ってきた服とタオルを置いて洗面台に向かい、顔を洗う。そして服を脱ぎ風呂へと入る

湯船には入らない。というか今は入れない。そりゃまあ冷たいわけですし

だからお湯を加えながらボイラーの電源を入れる。これで身体を洗い終わる頃には暖まっているだろう。そして石鹸に手を伸ばし

割愛

湯船へと浸かる。丁度良い湯加減になっていた

……再び睡魔が襲ってきた。どれだけ眠いんだ俺……

いや、ここで寝たら負けだ。というか風呂で寝たらいけないって爺ちゃんが言ってた気がするぞ。なんか溺れるだかなんだか今の『溺れる』という単語を思い出した瞬間眠気が吹っ飛んだ

・
・
・

後ろを振り向いてみる。目線の先に見える物（本当は見えないが）、それはこの前男子一同が大事件を起こした穴である。まさか誰かいるとは思わないが……念のため確認を

その穴の死角へと移動して近づく。そしてその穴をこちら側から覗く。だが誰もいない。まあいたらいたでかなーり困るんだが

まあ、確認も済んだところで再び湯船へ

さて……やることがないぞ。いやだって風呂だし。そろそろ上がるか……？

時計（防水）を確認すると、目覚ましがなる30分前。つまり起きてから30分経っている。そろそろ十分だな。というか長すぎた

湯船から上がり風呂場を出る。そして脱衣所へ

ガラッ

「……………」

目があった

誰と？

俺と

違う

俺と誰が？

女子

誰？

エルフィ

……………非常にマズイ状況である

いやまあエルフィは服着てるからいいとしてよ、俺はどうよ？
身には何も身につけず……………つまりは真っ裸……………生まれたままの状態

……………何故ここにいる……………！

「えっと……………入ってたんです……………か？」

「ま、まあな……………ところでなんでこんなところに……………？」

「ええっと……………手を洗いに来てそれで……………あの……………えっと……………」

エルフィの視線が段々と下へと動いていく。あれ？ ちょっと待
って

……………あまりにも突然なことだったので隠すのを忘れた

「……………ごめんなさいっつ！……………」

「おっ、俺も済まんっ！……………」

慌てて俺はその部分を隠し、エルフィは反対を向く。さて……………こ

ねはどうしたことが

「は、早く服を着てくださいよ……わたしが動けません……」
「と言つてもな……服がエルフィの近くにあるんだ……俺だって動けないんだよ……」

ピーンチ

「う……じゃあ神崎さんは一旦風呂場に戻ってください。その間にわたしはここを出て行きますから」

「あ、ああ」

エルフィに言われて風呂場へと。そして扉を閉じるとエルフィが出ていく足音が聞こえる

はあ……

そして俺は服を着てリビングへと向かうことに

「あらおはよう真筆。早いよね。っていうか風呂入ってたのね」
「あ、ああ……」

視線を椅子に座って真つ赤な顔で下を向いているエルフィに移す。
いやそりゃあんな事があればなあ……俺だって恥ずかしいよ
恥ずかしいで済む問題ではない気がするが

「それじゃあちよつと待っててね。すぐご飯出すから」
「あ、うん。よろしく……」

母さんはキッチンへと戻り、朝食を作る準備をする。そして俺はエルフィが座っている反対側の椅子へと向かう

「あ、あの……おはようございます」

「ああ……おはよう」

改めてここで挨拶を交わす。お互い気まずい空気が流れている。そして挨拶の後、何も会話がない。本当に気まずい空気が流れる

ここは何か言わなくては

「えっとさエルフィ……見た？」

「！？」

「……ゴメン」

……なんて事を聞いているんだ俺は
そして再び沈黙

「その……神崎さん」

「ん？」

沈黙が続いて30秒後、エルフィがとうとう口を開く。なんだろうか

「えっと……大丈夫です。湯気で見えませんでした」

「そ、そう……ならよかった」

とりあえず助かったのかもしれない
そしてまた沈黙

「ご飯できたわよー……って、どうしたの2人とも黙り込んで」

「いろいろあったんだよ……」

「そう?」

『お邪魔します』

『お邪魔します』

ここで朝食が4人分出てくる。そしてそのタイミングを見計らったのか玄関から聞き慣れた声が2つ聞こえてくる。琉華と明日香に間違いはない

「おはよう真箏くん」

「おはよう真箏……ってどうした2人で黙り込んで。まさかとは思うがやらかした訳ではあるまいな?」

「んな訳ねーだろ。色々あったんだよ。って、望は?」

「……お前は望がいいのか」

「何を言ってるのかわからんが、とりあえずどうした?」

「えーと、なんだか先に会場に行くって言ってたけど……色々見ておきたいんじゃない?」

「そうか」

何のためだろうか。まあ問題はないか

「まあそれよりも2人とも。早く席に座って頂戴。冷めないうちに食べてね」

「あ、ハイ。ありがとうございますお義母さん」

「ご馳走になります」

……やっぱりこいつら、何かがおかしい

そしてこの4人で朝食を食べることに。エルフィもやっと戻ってきたのか、朝食の時から会話に参加していた

そしてその後朝食を取り終え時間になると、4人で家を出て学校へ向かい、そして会場へと向かうことになった。関東大会の始まりである

「ん、全員いるよな？」

「まだ望が来てないです」

「マジか……どこほっつき歩いてんだ……」

現在関東大会会場。望以外の全員が集合してから2分後の事、部長が全員揃っているかを確認する。が、望が来ていない。何かあったのだろうか

「琉華、メールはした？」

「うん。もうちょっと着くって あ」

「ん？」

琉華が何かに気付いたのか指を指す。それに釣られて全員が指の方向を見る。するとそこにはこちらに向かって走ってくる望の姿があった

「……ごめん。……ちょっと人が多くて」

「まあ仕方ないだろ。関東大会だからな。さて全員が揃ったわけだが……問題とかはないのか？」

「大丈夫です。水曜と金曜は問題ありませんでしたから」

「拙者も特には問題ない」
「そうか……ならいいが」

そして全員が集合する。そして

「あれ？ 雄太？」

「ん？ あ」

部長が知らない人物に話しかけられる。誰だろう。って知り合
いしかいないか。多分瀧先輩と同じような関係の人だと思う

「久しぶりだな咲也さくや。なんでこんな所にいるんだ？」

「なんでって……関東大会に出場したからに決まってるじゃん。で

……そちらが後輩っていうか、出場選手かな？」

「ああそうだ。さて……お前らのメンツは誰だ。って、今聞いて
も無駄か。どうせコイツらは初戦敗退だから当たるわけないんだよ
な」

「酷いこと言わないでください部長」

「ん？ 事実じゃないのか？ まあいい。新町高校2年の雅咲也みやびだ。
俺の友人だからな。ま、さっきも言ったとおり当たるのはまずない
な。トーナメント表を見ればわかる」

そう言われてトーナメント表を見してみる。……第一シード？

どれだけ強いんだ

ちなみに弦巻高校は本当に反対側に存在している。というか県
大会でも第一シードだった気がする

って今更だが新町高校？ 凄い嫌な予感がする。かなり。本当に。
マジで

『まーーーーー』

俺たちの後方……それかなり遠くから叫ぶ声が聞こえてきた。声からして女子。それも聞き覚えがある。脈が加速する。そして俺は尋ねる

「あの雅先輩……もしかして
「ん？ ああ……うん」

予想は的中した。というかしてしまった

『こーーーーー』

「どうした真筈？ どうしてそんな顔して
「いやなんでもない」

「本当に？ もう試合始まるのにそれだと困るよ？」

「いや、本当に大丈夫だ」

「本当ですか？ 今からでも少し休憩した方が」

「大丈夫。マジで」

「……いや駄目そうだけど」

「至って健全だ。うん」

「本当に大丈夫か？」

「ダイジョブだよー。ウン。アリガトー」

「もう言動すらおかしくなっている気がするのだが……」

「光久まで心配するな。大丈夫。本当に……」

もうみんなが心配してくれるくらい俺の顔はヤバイものになっているのだろう。いや、だってなあ……？

そしてその時が来た

段々とこちらに足音が近づいてくる。それに反応したのかみんなが後ろを振り向く。それに釣られて俺も後ろを振り向く。するとそこには

「とーーーーーっ！っ！」

「うばあーっ！」

いきなり飛びつかれた。その勢いで後ろに倒れ込む。他のみんなは何が起こったのかわからない感じの顔でこちらを見ている

「お、来たな星乃^{ほしの}。っていうか……知り合い？」

雅先輩が俺の上に乗っかっている女子にそう尋ねる。その通り、この女子とは知り合いだ。幼稚園頃からの。ようするに幼なじみというところだ

その人物は

「やーやー真箏ー！ 元気にしてたかなー！？ もちろん元気だったよねー？ そうかー元気だったかー！ 元気があるってのはいいことだー！」

「そ……穹^{そら}……降りてくれ……」

「何を言うんだね真箏ー。劇的再会を果たしてそれはないだろー！ というか県大会の時に姿を見なかった気がするのだがー……もしや逃げていたわけではあるまいなー？」

凶星をつかれた。それに反応してしまった俺は目を逸らしてしまう

依然として他のみんなは口も開かずこちらを驚いたような顔で見据えている

「むー……よし真箏。小2の時の約束今ここで果たそうぞ。ささー
いってみよー!」
「ま、待て……約束ってなんだ!? なんかそんな物したか!?」
「何を言ってるのだねー真箏ー。わたしが16歳になったら結こ…
…キスしてくれると言ったじゃないかー!」
「なっ……ちよつと待て! そんなものはしていない! お前の捏
造だ! そう俺の人生を狂わせるな!」

今の穹の発言でみんなが「え……」と呟きだした。だがそれでも
身体は動かさずこちらを見ているだけ

「ほらほらーよく思い出すんだー……まさかわたしとの約束を忘
れたとは言わせぬぞよー」
「だからそんな約束してな」

……小学校2年生の時の記憶が今ここで蘇る。というか蘇ってし
まった

『ねえねえ真箏』
『どうした穹?』
『わたし……大きくなったら真箏のお嫁さんにして』
『ん〜……いいよ。だけど16歳になったらな。法律でそうなっ
てるらしいし』
『うん! でも……まずはキスがいいかな』
『おう! それまで約束な!』
『うん!』

……我ながら子供っぽい約束だよ

「あ」

「お、思い出したのかな？」

「……覚えてない」

それでもなお嘘をつく俺が痛々しく思えてくる

「そうかあ……じゃあー、えいつ」

「なっ！」

いきなり腕が伸びてきて俺の顔を掴み、そして動けないように固定される。それでもなお皆は動かない。というか動けないのだろう。お願い！ 助けて！

「……罰。忘れた罰」

「え……ちよ、ま」

「えいつ」

「んっっ！？」

「……………あ……………」

唇を塞がれた。もちろん手ではない。穹の唇で、だ。いわゆるこれは……キス、接吻、口づけ……

念のため確認しておこう。ファーストキスだ

唇と唇が触れあうこと3秒。穹の顔が離れていく

「ふう……さて、これまでにしておかないと試合に間に合わなくなっちゃうかな？ ……あれ？ もしかしたらもしかして……わたしやらかしちゃった？」

「な、な、な……なんなんですかあなたはあああああ……！」

「へ？」

「ちょっと神崎さんから降りてください！　すいませんがこちらに来てください！　色々と話したいことがあります！」

そしてとうとうエルフィが口を開く。その言葉は怒りと何かに満ちていた魂の叫びであろう。俺から穹を引きはがしてその手を掴みどこかへと連れて行く

で、ここに残ったのはエルフィを覗いた弦巻メンバーと雅先輩だけだ

「えーと……神崎。お前……」

「その……星乃と知り合いだったんだね」

「ハイ……一応幼なじみです。まさかあれまでエスカレートしていろいろとは思っていませんでしたよ……」

「なあ真箏。穹……ちゃんだっけ？　なかなか強引だったな」

「真箏殿……とりあえず覚悟はしたほうがいいかもしれぬ」

「ああ……もうその覚悟はとっくに出来てるよ……」

「真箏。さて私たちと話し合おうじゃないか」

「そうだね真箏くん。ちょっと事情聴取イイデスカ？」

「……事によつては覚悟していただきたい」

……この後俺とエルフィを覗いた女子で緊急会議的な何かが執り行われ　かけた。何故ならもう試合の開始時間になり、そのまま試合が開始される事となった

Wars program setting start .
field coating . . . compliance .

e n e m y p r o g r a m . . . c o m p l a t e .
s e c o n d b a t t l e d a t a i n s t a l l . . . c
o m p l a t e
a r e y o u r e a d y W a r s b a t t l e
s t a r t ! ! 『

Wars 関東大会一回戦目の2戦目の開始を告げる音が響き渡る。先程行われた1戦目は無事勝利を取り、現在に至る

だが相手が相手なだけにこちらとしてはやりづらい。いや、女子にとつては問題は全くないだろう。だが俺ら男子にとつて……相手は女子だ。やりづらくて仕方がない。が、試合が始まる直前に

『別に手加減をしなくてもよろしくてよ』

とクズの妹（吉原朱美。ちなみに同学年）に言われている。いやだからね？ そう言われてわかつてはいても本能的に……
凄いやりにくくて仕方がない

ちなみに俺はそれを乗り越えて1人を撃破している。……横にいる明日香は3人くらい撃破してるけど

さて……それはさておき攻めるとしよう。したいのだが

「真筆？ さっきの話はまだ終わっていないからな？」

「あ、ああ……どうぞご質問を……」

1戦目の開始直後からずっとこれ。たまにPLで琉華や望やエルフィや健太……とりあえず光久を除いた全員から質問攻めにされている。もちろん内容はさっきの件。穹との関係のこと等

「マジかつ……!!」
「失せる……」

ドンッ

『きゃああああっ!!』
『……』

いや、まあな？　いつものように敵が来た瞬間に倒してくれるのはいいんだ。今の明日香のテンションは低いのか、いつもの『失せる!』が『失せる……』になっていた。これはこれで怖い。それで俺とエルフィは何も言葉を発することが出来なかった

『神崎さん。明日香さん、何かあったんですか?』

「さあ……さっきの俺のが初めてって言った瞬間にああなった」

『はっ、初めて!?!　じゃっ、じゃじゃじゃあ!』
「……………」

エルフィまで壊れてしまったのだろうか

『

!?!』

「頼むエルフィ。戻ってきてくれ。そうしないと敵がどこにいるのかわからん」

『えっ!?!　あっ、はいっ!?!　あっ、す、すすすいません!!』
あ!　前方に敵を確認しました!』
「失せる……」

ドンッ

『きゃああああっ!!……』

明日香の気力（と覇気）のない攻撃が前方にいた敵に命中する。なんだろっ。怖すぎて見ていられない。いやまあ、普段からそうなのだが

「その……明日香。大丈夫か？」

「うっん……私……もう駄目かもしれないだ……!!」

「わ、ちょ！ 明日香!？」

「なんですか!？ 何が起こってるん って、明日香さん!？ 本当に何やってるんですか!?!？」

明日香が変な声を出したかと思えば、こちらを振り向き俺に抱きついてきた。ちょ、ちょっと待て！ 今は試合中だぞ!？ 早く引きはがさないと……！

だが力を入れて離そうとするも中々離れてくれない。更には

「真筆おおおお……一体お前はどうしたいんだああああ……? そして私もどうしたらいいのかわからなくなったああああ……!」

今度は涙声になってそう言い始める。いや俺だっでどうしたいかわからないから! というか早く離れろ……! !

『てっ、敵が来てます!』

「うっ……まってるまこと……いますぐおわらせるからなああああ……! !」

エルフィの言葉を聞いた明日香が俺の身体から離れていく。そして敵の方向を言われていないのにどこかへ走っていく。そして銃声が聞こえて断末魔が聞こえる。あいつ……やるな

そして

なんだか納得のいかない感じでこの試合は勝利した

とりあえず……1回戦目が勝利。2回戦目は今週の木曜日に行われる

さて……俺らは勝てるのだろうか？

試合が始まる少し前。わたしは神崎さんの幼なじみだという星乃穹さんを連れて皆さんいるの場所から離れていき、そして人の通りが少ない場所へ来る。理由は

「さて……星乃さんでしたね……いきなりのもので申し訳ありませんが、神崎さんとはどういう関係ですか？ 答えてください」

さっき聞いたばかりだというのにその質問を出してしまう。でもここからいかなないと始まらない気がしたから……

「えっと……わたしは真筆の幼なじみで星乃穹。よろしく……って言いたいところだけど立腹層だから……って、わたしもアレか。やりすぎちゃったか……？」

「やりすぎって……いやまあそういう言いつもりはないんですが、あれは無理矢理すぎですよ！」

「うーん……そうだねえ。以後は気をつけないと駄目だなあ……ちゃんと許可を取ってからキスしないと駄目かあ……」

「結局キスするんですか!？」

「うん」

この人の発言にビックリさせられた。まさかそこまで神崎さんと仲が良いなんて思わなかった
同時に敗北感が襲ってくる

「……………えっと。失礼だけど名前をそろそろ……………」

「え、あ……………失礼しました。わたしはエルフィ・N・エストラントです。改めてよろしくです星乃さん」

「いや穹でいいよ？ で……………何？ もしかしてエルフィさんも真筆の事が……………好きだったりする？」

「ほえっ！？ きゅ、急にな、ななな何を言い出すんですか!?!」

「あ、凶星だ。ふふふ……………わかった。さっきの話はナシ！ うん！ 多分残りの3人もそう仮定して……………よし、正々堂々と戦う！」

「ふえ……………?」

急な話しすぎてついていけない

「うん……………ねえエルフィさん」

「呼び捨てで良いです穹さん」

「そう？ じゃあエルフィ。あの……………さ。もう1度聞かせて貰うけど、真筆は好き？」

「……………はい」

今初めて誰かにそう答えた気がする。「好き」という気持ちを今までではあーゆう反応をしていたからバシてはいたものの、この感情を口に出したことは無かった。つまり穹さんが初めて私の本心を知った人だ。初対面なのに……………

「そっか……………言っておくけどわたしも真筆が好きだからね。中学、

小学、幼稚園。その頃から」

「……そんな古くからの友達だったんですね」

「うん。まあとにかく時間がなさそうだから短く言うけどさ。あのさ。真筆を……正々堂々と奪い合おう？ 誰が真筆を振り向かせられるか。ね？」

「穹さん……」

「ま、最終的に勝つのはわたしだけだね。幼なじみであるこのわたしがつ！」

「む……言いましたね穹さん。いいでしょう。そちらがその気ならわたしだつて負けません。ですが穹さん相手を間違えているんじゃないですか？ 大体あなたは学校が違うわけですし、わたしは同じ学校、つまりわたしは会おうと思えば毎日会えるんですよ」

「ふむ……そうか。つて！ こんな話してる場合じゃないでしょ！ 早く行かないと試合始まつちゃうんじゃない！？」

「え？ つて、ああっ！ じゃ、じゃあわたし急ぎますんで！ 変な話をして申し訳ございませんでした！……正々堂々ですからね！」

「うん！ それじゃ！」

わたしは穹さんと別れ皆さんのいる場所へと戻っていった

……これで恋敵がまた1人増えてしまった。これでわたしに勝ち目はあるのだろうか

いや、勝つてみせる。同じクラスなんだし、それに学校で1番会う頻度が高いのはわたしだ！ だから勝機はいくらだってある！

わたしは皆さんに勝とうという意志を胸に刻み込んだ

#27 事件と再会と戦いと (後書き)

相変わらず適当な描写ですな

やべ……自分の駄目さに笑えてくる……

とまあ本当に適当でした

お疲れ様でしたb

Wars 関東大会第1回戦目が終了したその翌日　の朝7時。
いつもと変わらないような日常が始まるうとしている。が、胸騒ぎ
がする。なんだろう

ま、考えていても仕方がない

現在7時（2回目）で、自宅にいる。もちろん神崎家の皆さんだ
けではない。エストラント家の方や、鶴家の方や、藤堂家の方や、
近藤家の方や、佐々木家の方や、明智家の方までいる。つまりwa
rs部の部長を除いた全員が我が家に集結している。しつこいよう
だがもう一度確認しよう今は朝の7時だ。そして家。これがいつも
と変わらない日常とはどういうことだ。かなり困る

しかも

「よし、私が本気を出して作った卵焼きだ。心して食べるといい」

明日香が殺人兵器と言う名の卵焼きを作り出した。密かに聞いて
いた内容だと、前と同じように歯磨き粉と栄養剤、その他の薬品が
含まれているらしい。どうやら皆に元気と活力を与えたいみたいだ
が、全く逆の効果が得られてしまうことだろう

「……よし、それじゃあ食べるとするか」

「ですね」

「すいません毎日毎日……」

「いいのよ琉華ちゃん！ おばさ お義母さん、毎日いらっしやい！ ごちそうしてあげるから！」

今母さんが『おばさん』と言おうとして『お母さん（お義母さん）』に訂正しているのが、この俺でもよくわかった。どうやら自分がおばさんであることを認めたくないらしい。どうせあと2年で50歳なんだから無駄

……包丁が横切りました

「アンタは息子を殺す気か！？」

「どうしたの真箏？ そんな急に大声だして。もっと欲しい？」

「いえ、本当にごめんなさい。心の底からごめんなさい」

いや別に泣いてないよ？ 昨日の夜飲んだスポーツドリンクがね？

「とにかく……早く食べないと遅刻するわよ。早く食べなさい！」

その母さんの一言でみんなが急いで食べ始める。もちろんある場所（テーブルの中央）に置かれている黄色い何かは誰も手を出さないが

そして

『ごちそうさまでした』

「待てみんな。何故私がついた卵焼きが1つも減っていない。これは虐めか何かか？」

「そう思うなら自分で食べてみたら？」

「琉華……私はみんなに食べて欲しいから作っただけで、私は食べる気はない。ほら琉華。1つで良いから食べるんだ」

「ゴメン……後で本当に自分で食べることを推奨するよ……」

琉華が逃げ切った

そしてこの後他の全員が同じような会話をし、最終的にその卵焼きは母さんが親父の弁当箱に詰め、残りは母さんが食べるということになった

……その後の話。親父は病院に搬送されたらしい

朝食を食べ終えたということで、現在玄関。いや、7人でこの玄関は狭い。だからたまに何か柔らかい何かが俺に当たっているのだが……まあそれはどうでもいい。全員で玄関を出る

「忘れ物は無いですよね？」

「なんでエルフィに心配されなきゃアカンのだ」

「だって……」

「まあ大丈夫だ。それに無かったら無かったで誰かから借りれば良いだけだし」

そういう卑怯(?)な手を思い浮かべてしまう俺であった

で、現在家から100m地点とでも言っておこう。誰もが想像しなかった出来事が発生した

「……そういえば今日、テスト返される」

「あ……」

「そうだったな……まさかとは思うが、赤点の自信のあるヤツはいるか？」

明日香がそう尋ねる　　が、拳手する者は無し

「……健太。お前はどうかんだ？」

「何を言うか真筈。この僕が赤点なんて取るわけないじゃないか」

「……拓人殿と同じような話し方故、切りたくなってきた……」

「恐ろしいことを言うなっ！」

正直に言おう。俺も銃で脳天を貫通したい

「まあとにかくこれなら大丈夫かもしれないですね」

「だね。まあ……不安分子は無くはないんだけど……」

「……どうしたの？」

「ちよつとね……国語が危ないかもしれない」

「ああ……確かにあれはちよつと難しかったな。私も自信は」

と、ここで今になってテストの話をしている女子たち。話しながらも学校へと向かっている。その進行速度はいつもと全然変わらな
い。平和でいいなあ……

なんとなく現在時刻を確認してみる。7時40分。普通に間に合
うかもしれない

……そして

「まことおおおおおおおつ！！」

後ろから大きな足音がすると同時に、この町全体に響いてしま
う……大袈裟か。でもかなり大きな声がこちらに聞こえてくる。それ

も聞き覚えのある声。昨日聞いた声に間違いない。そしてその声の主は昨日俺の唇を奪っていった人物で

「だああっ!!！」

「捕まえたあああ!!！」

振り向いた瞬間に昨日と同じような状況になってしまった。それを見た6人がこちらを見据えている

「おはよう皆の衆！ 元気かねー!? 元気だよねー!? そうか、元気かー！ 元気があるのは良いことだー！」

「ちょ、穹……降りろ……」

「ん？ あ、ゴメンゴメン。やっぱりこれが無いと真筆との会話が始まらなくてね……」

そして穹は俺から降りて立ち上がる。その姿は制服姿ではなく、なんか見慣れた私服だった。……無理もない。何故ならその服は俺が去年あげた物だったから

理由は黙秘権を施行させていただこう

まあその話は置いておいて……何故この場に穹がいる。そして何故私服なんだ。それを1つ1つ聞いていこう

「おい穹……なんでここにいる？」

「なんでって……今日は学校の創立記念日と言うヤツでなー。それで真筆の家に行ったらもう出たってお義母さんが言うじゃないか。それで急いで追いかけて来たよ」と

「穹さん……さすがにそれは……」

「お、エルフィ！ 昨日ぶりだねー？ どうだい？ 元気かねー？」

どうやらエルフィと仲が良くなったのか、普通に会話をしている。

いつの間に……と言いたいところだが、あの後色々あったのだろう。うん、間違いない。……と思う
ちなみに依然として他5名は黙ったままだ

「でなー真箏。わたしには最近悩み事があるのだよ……」
「悩み事？」

エルフィに向けていた顔がこちらに向いたかと思うと、そのまま穹は何かを言い出す。悩み事？ 一体どうしたんだろう

「あのかな……」
「うん」
「……胸が大きくなるんだ」
『じぶあつー！』

その場にいる7人全員が吹き出した。なんだよ！ 悩み事ってそれか！？ いや確かに小さいけどな！？ 今！ この場で！ このタイミングで！ そんな事を言い出すのかコイツは！ なんか昔と変わらないと言うのかなんというか……！

「で、真箏。力を貸して欲しいんだ。手を貸してくれい」
「断る」
「まーまーそうお堅いことを言わずに……ね？ 幼なじみでしょ？」
「断る」
「……真箏は小2までおねしょをしていました」
「じぶあつー！？」

思わず吹き出した。無理もない。自分の恥ずかしい黒歴史をここで言い出すとは……というかこの事は俺と母さんしか知らないハズだ。なんでこのことを穹が知っている！？

「そうか……真箏は小2まで……」

「……嬉しいようで嬉しくない情報……」

「あは……あはは……」

「やるな……穹殿」

「ああ。僕もビックリだ……」

ようやくさつきまで黙っていた5人が口を開いた。いや待て。急に俺の恥ずかしい歴史を聞いた瞬間に口を開くな。そして穹。いつの間に俺の手を奪うな。しかも両手

「さて……真箏。前提として、女性の胸は揉むと大きくなるとかそういう噂がありますが、ご存じですか？」

「ちよつと待つてくください穹さん。まさかとは思いますがそれを神崎さんにさせるとかそういう訳ではございませんよね？」

「……色々省いて、真箏。任せた」

「ちよ、まっ!!」

『なっ!』

抵抗しようとしたその本当に直前。穹に両手を引つ張られてそのまま穹の胸へと運ばれる。なんていうか……明日香より無いんじゃないか？

……こんな時にこんな事を考えてしまう自分がどうかしていると思っただけの一瞬であった

ちなみに全員が動けないでいる。俺もその1人

「さあ真箏。揉んでくれい」

「……断る」

「……真箏は幼稚園生の頃わたしの胸をよく触っていました」

「だからそんな話をすな——!!」
「……食らえ！」

ガッ！

「うあああつ！ 腕が！ 俺の腕があつ!!」
「おおぅ……見事な回転蹴りで……見事なスカイブルーで……」

望の回転蹴りが俺の腕にクリーンヒットする。その直前に穹は離れたので全く怪我はない。俺の腕が凄い致命傷になっているが
ちなみに今の回転蹴りというのは横には横にはない。縦にだ。要するにバク宙したのだ

……望の運動神経はどこまでいいのだろうか。体育はサボってたが

「……全く。……星乃、さすがに今のはダメかと」
「むう……そっか。失礼だけど名前は？」
「……近藤望」

「そっか。ま、胸が無いもの同士仲良くしよう。もしくは望もわたしと同じような事をするか」

「……その手があった……！」
「穹！ 変なことを吹き込むな！」

とんでもないことになっていく現状況

そして健太。誰にも聞こえないような声で『小さいのにも魅力がたくさん……』とか言うな。そして何事も無かったかのように光久とこの場を立ち去るな。俺を助けてからそうして……

「おい、今何時だ？」

「え……あ」

俺の声を聞いて戻ってきたであろう琉華が時計を確認する

「……7時50分。急がないとマズイかも」

「よし……全員走れえ！」

明日香の掛け声で全員が走り出した。俺は1歩遅れて走り出す。もちろん穹は置いてこれなかったようだ。何故か俺たちについてきている

「……穹。なんでお前まで走ってくる」

「なんでって……暇だから？」

「穹さん……本当の目的をどうぞ」

「あちゃ〜……エルフィには気付かれてたかな？ 今日ちょっと弦巻高校に用事が、と」

「へ？」

「ま、そういうわけでヨロシク真筆。家にいても暇だし用事が終わったら一緒に授業、受けさせて貰うからね」

……

「はあっ!?!」

そして俺たちは時間ギリギリで学校へと辿り着いた

学校

「と、いうわけで今日1日だけ入学的な何かをさせていただいた星乃穹でございますーす！　どうかどうか皆様ヨロシクお願いします！」
『うおおおおっ！！』

男子が沸き上がっていた。無理もない。一応俺も認めるくらい可愛い。一応だ。他意はない

まあ穹が来た理由はまだわかっていないわけでした……

「さて、今聞いたとおり1日限定入学という感じで、都央の新町高校から来た星乃穹だ。1日だけが仲良くしてやってくれ。以上、授業の準備につけ」

そう言い残して梅花先生は教室から出て行き、黒板前にいた穹の周りにはすでに人が集っていた（主に男子が）。そんな状況に俺は近づけるわけがなく

「ねえ、星乃さんって神崎さんの幼なじみなんですよ？」

俺の周りにも人が集っていた（主に女子が）

「いやまあ、そうだけど……」

「ねえねえ！　神崎くんと星乃さんって付き合ってるの！？」

「んな訳ないだろ！」

「いやあ……エルフィも大変だねえ。また強敵増えちゃったねえ」

「そこでわたしに目標変更ですか！？」

「そう照れないのエルフィ。ほら、ズバツといけばいいだけだから！」

「待ってください！　そもそもわたしが」

どうやら俺は解放され、俺の周りにいた女子はエルフィの所に行くなり穹の所に行くなりしていた。そして俺も授業が始まるギリギリまで健太の所に行こうと思った時

「真箏！」「神崎！」「真箏くん！」「まっこん！」

今度は穹の周りに集っていた男子共が俺の周りを囲んでいた。…
…どうやら俺に逃げ場と言う物は存在しないらしい

「なあ！ 真箏！ なんだ！？ お前にはあんな天使がいるのか！？」

「いや、天使ってなんだよ……」

「惚けるな神崎！ どうせお前、表に出していないだけで星乃さんと付き合ってるんだろ！？ くそっ！ 恨み殺してくれるわ！」

「だから付き合ってたねえ！」

「……その割には顔が赤くなってるよね」

「何を言ってるんだ滋賀崎ししかたけ！？」

「Makkon! Please give me Soracc
han!」

「英語で俺に話しかけるなあ!!」

……助けて。いや、マジで

男子に囲まれながらも我がクラス委員長佐々木健太の方をみただけで見てみる。(健太だから期待はしないが)委員長ならこのガヤガヤを止めるはずだ！ さあ健太！ この状況をなんとかし

……机に突っ伏して寝たふりをするな

「どうなんだ真箏！」

「だーかーらー！」

『授業始めるぞー……つて、なんだこの騒ぎは……』

「あ！ 新治先生！ 助けてください！ この状況を止められるのは先生しかいません！」

俺が本当に困って、ガチで助けを求めているところへ理科の新治にいほり先生が教室へ入ってくる。助け船と言う物は本当に存在するものなのだ……神様に感謝

「さて席に着け……授業はじめるぞー」

誰も聞く様子はなかった

つまりまだ俺の周りは囲まれているわけでした……

「まつこん！」「神崎！」

「だからお前ら席戻れ！ もう先生来てるぞ！」

「……え……」

「お前ら硫酸の刑がいいか？」

「……結構ですっ！」「……」

先生の危険な一言により、周りを囲んでいた男子がそれぞれの席へ（俺を睨みながら）戻っていく。いや、本当に助かった

そしてガヤガヤが収まると穹はまだ黒板の前に立っていた

「ん……あれ？ ああ、梅花先生が言ってた子か……席ね。どこが
いい？」

「……………」

穹が珍しく質問に答えなかった。それはまるで何かを考えているような感じの目をしていて

「……君？」

「え？ あ、はいっ!？」

「ああよかった。聞こえてないのかと思った。さて……君の席だけで、好きな場所を指定してどうぞ」

「あゝ……じゃあ、窓側の一番後ろで」

「え」

「……神崎さん？」

穹の発言にかなり驚かされた。いつもの……というか穹なら確実に『真筆の隣ー!』とか言う人間だ。それなのにわざわざ俺のいる反対側の席を選んだ。つまり

「……俺、とうとう嫌われたか」

「あのゝ……神崎さん？ 嫌われたって？ それに穹さん、さっき『学校では自重するよ』って言ってましたけど……?」

「え……? あ、そうなの?」

自分としたことが……随分早とちりな考えをしていたみたいだ。いやぁお恥ずかしい

「それで神崎さん？ 嫌われたってどういう意味です？」

「……あゝ……まあ、友達として嫌われたかね、って感じの意味で捉えてくれ。というかそのままだ」

「……わかりました。一応そついう事で納得しておきます」

自分の席に振り返っていくエルフィの顔がかなり怖かった

そして時間が経つのは早いらしく、4時間目が終了して昼休み。いつもなら7人で食べる訳なのだが、今日は8人

『ゴメン。ちょっとわたし、あの4人と食べるね』

穹はWars部の女子4名を連れてどこかへ去っていった

そして、6時間目。穹の事もそうだが、それ以上の事件が発生した

「さて……日直、号令」
「これから6時間目の授業を始めます。礼、着席」

本日の日直の号令が掛かり、全員が礼、着席を行う。座る際に窓際最後尾の人物 穹の席を試みる。どうやら今はいないみたいで、その事を知ったときの男子がかなり落ち込んでいた

ちなみに何故今いないのかは俺でも知らない。もちろん先程昼食と一緒に食べていた女子でさえ。嘘をついているわけではないと思う。なんとなくそう思える

……本当にどうしたのだろうか

まあそれはさておき授業……と言ってもLHRなのだが……黒板の前には今日もスーツ姿の梅花先生が立っている。暑苦しいったら

ありゃしない

暑苦しい上に

「今日はこの前の期末テストを返す」

暑苦しい上にテスト返してきたもんだ。もしかして穹がないのはそういう理由で　そんな訳がない

しかしまあ……テストか。自分で言うのもアレだがかなり良い点数を取れたのではないかと思う。……英語を除いて

とりあえずこのテスト返して色々決まることがある。1学期時の成績もそうだが、今の俺たちにとってはもっと重要なものがある。Warsの関東大会だ。もしこの期末テストで誰か1人でも赤点を取れば関東大会の参加を取り消す……なんていう話だ

そして色々不安分子がある状態でテストと成績表が返し始まる。

段々とクラスメイトが呼ばれていき、エルフィ、そして俺が呼ばれてそれらを取りに行く

そして席に戻ってきてきて中身を確認すると

「あ、危ねえ……」

英語、自分の点数：30

この学校では30点未満が赤点というシステムだ。つまり俺は赤点の一点上。ギリギリ回避したことになる

「わたしももうちょっとでアウトでした……」

「どれどれ？」

エルフィが英語の答案用紙を見せてくる。そこには37点と赤で書かれた数字が

「……よかったな。マジで」

「はい……あ、ちなみに最高点は87点の世界史です」

「……俺の最高は75点の国語だ」

エルフィの意外な得意教科が判明した。そして俺の至らなさ

ちなみに俺の世界史の点数は54点である

『佐々木』

そして我がwars部の1番の不安分子こと、佐々木健太の名前が呼ばれて先生の元へと歩いていく。その態度はもう自信アリアリといった感じで、「本当に赤点を取っていないぞ！」的なオーラを出している。まあそれなら嬉しいのだが……

そして健太はそれらを受け取って席へと戻っていく。俺はその点数を聞きに行くため健太の席へと向かう

……そしてその時が来る

俺と健太の距離が机6個分の地点。そこで健太は成績表を確認し始める。色々な顔を浮かべていて、なんだか面白かった

俺と健太の距離が机3個分の地点。健太は驚愕を隠せないような顔で成績表を見ている。その成績表を掴む手は微かに震えているように見えた

そして健太の正面

「よう健太。どうだった？」

「あ、ああ真筭。ど、どうした？」

「いや……点数どうだったかな、と」

「お、おう大丈夫だ。全然赤点なんか無いぞ。だから心配しないでもいい」

「そうか……それなら良かった。後は他のクラスの連中だな」

「そうだな……」

俺はその言葉を聞いて安心して、自分の席へと戻っていく。その後方で健太がため息を漏らしているような感じがした

その5分後。テストが全部返されて

「さて……佐々木。それじゃあ今日の議題を言うから司会進行任せたぞ」

「はい……」

なんだかよくわからないが何かを話し合つらしい。その為に我がクラス委員長である健太が黒板の前へと移動し、色々書き連ねていく

忘れていたかもしれないが、俺はクラス副委員長だ。仕事が面倒だから席に座っているわけだが

そして話し合いが始まり　その5分くらい経つた頃だろう。先生が後ろからやって来た

「神崎、エストラント。ちょっとだけでいいから廊下に来い」

「へ？」

「いいから来い。話しておきたいことがある」

「は、はい……」

先生にそう言われるがまま、俺とエルフィは廊下に出る。出て行く際に他の生徒からの視線が結構あったが、大して気にはしなかった。そして廊下。ここにいるのは俺とエルフィと先生だけ。

「で、話しておきたいことってなんですか？」

「まあ落ち着け神崎。慌てなくても俺は逃げていかんからな」
「そうですよ神崎さん」

2人に言われて俺は静かにする。そして先生の表情が変わり

「用件は3つだ。まずは星乃の事だ」

「へ？ 穹？」

「そうだ。……今回のことだが西宮には黙ってる」

「穹さんと部長に何かあったんですか？」

「まー……今言える事は無いが……とにかく黙ってる。言ったら俺から制裁を下すからな。もちろんこれは後で他の連中に伝えておくように」

「は、はあ……」

何かあったとしか考えられない

「2つ目。お前たち関東に出場したらしいな」

「まあ……頑張りましたからね」

「昨日の試合は行けなくて済まなかった。ちょっと俺にも色々あったな」

「気にしないでください先生。別に今までこれでやってきた訳ですから」

「顧問も一緒に行くのが普通なんだけどな。まあいい。お前たち、

「エルフィの言うとおりです！ 理由を説明してください！」
「まったく……少し声のボリュームを下げる。そうしないと話せん」

先生に言われて黙り込む俺とエルフィ

「とりあえずだな……佐々木がやらかしてくれた」

「……騙したなアイツ」

「落ち着け。まあそういう理由なんだが……あともう一つは明智の
両親にそう言われたんだ」

「へ？ 光久の両親……？」

そこで全く予想していなかった人物の名前が拳がる。なんでそう
なるのかまったく理由がわからない

「理由は言えないが……とりあえず事情があるらしい。だから……
済まない。納得してくれないか？」

「そんな……勝手に……」

「くっ……ちよつと光久の所に行ってくる」

「落ち着け神崎。今は授業中だ。それに俺だって本当はこうしたく
ない。だが今回は事情が事情だ。頼むから納得してくれ……」

「……」

「神崎さん……」

「……頼む」

後ろを振り返ると生徒に対して頭を下げている先生の姿があった

「ちよつと先生……頭を上げてください」

「……本当に済まない」

「先生……」

待て。これが人間の出来る事か？　そして総合成績学年1位だと？
バカな……まさかこんな人間が勉強できるハズが……

「これでも俺は成績が優秀なんだ。言っておくが英検準1級も持つてるぞ」

「そんなバカな！」

……改めて部長の凄さを知った気がする。今までの俺がどれだけ失礼だったことが

「さてと……それはさておき、関東の話だ。それはマジ話か？」

部長がここで逸れた話を修正する

「マジもマジ。大マジです」

「そうか……ちっ、何考えてるんだ梅花のヤツ……」

部長は1人で何かを呟くと苦虫を噛みつぶしたような顔をしながら爪を噛む。そして部長がマジ顔になって色々呟き始める。頭がおかしくなったわけではない。多分色々と考えているのだろう
そして

ガタッ

「よし、今日の所はもう帰れ。とりあえず関東の話は無くなったわけだ。ここにいっても何も無いわけだ。以上解散」

「ちよつと部長」

部長は席を立ったかと思うと、そのままドアへと歩いていき、そ

う言い始める。そして俺はその部長を止めようと声を掛ける

「……このことは高くつくからな。それと……12日は現地集合だ。
以上」

「へ……？」

そして部長は部室から出て行った。意味のわからない言葉を残して

「母上……父上……まさか……」

そして、光久が何かを呟いているのを俺は見逃さなかった

#28 事態（後書き）

……相変わらず変な終わり方をする作品ですね、うは
というかこれフラグがピンピンしていますね

……うはw

#29 想いと力と暴走と

7月11日。本来なら明日warsの関東大会があったという前日。現在5時間目の授業の最中でなんとなく黒板を眺めている。板書すらしていない。それだけポーツとしている

無理もない。warsの関東大会を棄権することが決まったのだから。気になる事がたくさんあつて仕方ないのだが

まず1点目。昨日の穹の事。学校に来たのはいいのだが、授業を受けるというわけではなく他の用事があつたとしか思えない。それに話してくれないし、いつの間にか帰っていたという事実。その理由すら聞き出せていない。女子でさえも

次に2点目。光久の両親の事について

とりあえず昨日のあの後部室で起こったことを確認しよう

「母上……父上……まさか……」

「……明智？」

望も光久の様子に気がついたのか、声を掛ける

「……な、なんでもない。ただの1人ごと故、心配はない」

「そうか？ その割には深刻な顔をしてたけど」

「問題なかるう。だが……棄権とは……」

「ああ……とりあえず、なんで光久の両親の名前が出てきたのかわからないんだ」

思い切って気になっていたことを口に出す

「……拙者にもわからぬ。帰宅したらあの2人に問い詰める……そして棄権を止めさせよう。任せてくれ」

「あ、ああ……」

その時、光久は左目の眼帯を押さえていた

と、こんな事があった。大した会話ではなかったがとりあえず光久は帰って両親に問い詰めたらしく、理由は教えてくれなかったがそれだけ重大な理由らしい。そこが気になって仕方ないところだ

そして最後に3点目。部長が言い残していった言葉

『それと……12日は現地集合だ。以上』

つまり明日。wars 関東大会2回戦目のある日になる。現地集合って言ったら会場しか思い浮かばない。それ以外の場所で思いつくとしたらこの学校……って、学校へ来るのに現地集合も何も無いだろう。ということとは、俺に想像出来ること本当に1つしかない

明日は会場に集合するのだろう

そして時間が過ぎて放課後になる

ガチャ

「おう、来たな若人たちよ」

放課後の部室。相変わらずソファに横になりながら雑誌を読み、
その声を掛けてくる部長が1人である。とりあえず今入ってきたの
は俺と健太の2人だけ。他の5名は掃除当番やら日直やら係の仕事
やら委員会の仕事やらで遅くなるらしい。……俺たちはクラス役員
なのだが

「さて……他の連中はどうした？」

「掃除当番やら日直やら係の仕事やら委員会の仕事やらで遅くなる
そうです」

「上の文をそのままコピーするな神崎」

「何を言ってるんですか部長……？」

何を言っているのが全くもって理解できなかった

「まったく……大事な話があるってのにな。まあいい。お前らだけ
でも先に席に着け。佐々木には渡したい物がある」

「へ？ 渡したい物っすか？」

そう言われて俺と健太は席に着く。そして部長は足下に置いてい
た鞆を漁って1枚の紙を取り出す。それはどこかで見ることがある
ような というか昨日見た

それはテストの成績表と言う物でして

「ほれ佐々木。受け取れ」

「え？ 昨日貰ったハズなんですけど……というかなんで部長が持
ってるんすか」

「何を言っ佐々木。これがお前の成績表だ」

「は？ はあ……」

健太は理解できない様子ながらもその紙を受け取る。まあ勿論俺もわかっていないのだが

そしてその成績表を開くと昨日の物とは思えない成績が記されていた。赤点だった数学（27点）が黒点になっていた（32点）。

「えつと……これはどういう……」

「感謝しろよ佐々木。俺があの後決死の覚悟で職員室に潜り込み、梅花の机の引き出しの中からそれを引っ張ってきたんだ。それがお前の本当の点数だ」

「あ……」

「部長。それじゃああの健太の成績は一体……」

「安心しろ。それは後で全員が揃ったら話す。まあそれまで暇になつてしまつからな。……このことは誰にも言わなければお前たちを楽園へ招待するが……どうだ」

「ええ、僕は参加させていただきます」

「……お好きにどうぞ」

で、結局俺を除いた2人はみんなが来るまで部室の角でDVDを見ていた。もちろん普通のデーブイデーではない。エロデーブイデーだ

……まあ誰かが入ってくるのに気がつかずに見ていたのはアレであつたが……。ちなみに最初に入ってきたのは琉華で、健太と部長のしている物を見て顔が凄い真っ赤になつていたのを俺は忘れなかつた

「ご、ゴホン。さて、全員揃つたことだし、話すべき事を話すとしようじゃないか」

「部長。明らかに動揺しているのがバレバレです」

「黙れ神崎。そもそも何故藤堂が入ってきたときに教えない」

「音に気付かずに見ているのが悪いんじゃないですか」
「くっ、正論……」

初めて部長を負かした気がした

「……見てたつて？」

「ええっ!? の、望!? そ、それは聞いちゃダメだよ! 流石のボクでも目を逸らした物だよ!? 言える訳ないじゃないか!」

「……そうか……琉華は見たのだな」

「……そうですか」

「なんでそんな目で見るの3人とも!? 事故だよ! ボクは悪くない! あの2人が悪い!」

女子の方では色々と話していた

「はあ……これじゃあ話せないな」

「いや自分が悪いんじゃないですか」

「黙れ神崎。とりあえず女子を止める。そうしないと話せん」

そう言われて（更には銃を突きつけられて）俺は女子を止めるために間に割り込む。2秒で玉砕されたがどうやら戻ってきてくれたらしい

そして全員がテーブルを向く

「さて……話すことは全部でつある。まず1つ目。神崎と佐々木には先程話したわけだが、昨日の佐々木のテスト、赤点は1つもない」

その発言によりざわつき出す5名。無理もない。健太に赤点がないなど誰が考えたことが

「待て真筆。その考えはどこからどう見てもおかしいぞ。僕が赤点取ることは必須なのか。そして今経たされている状況をわかった上で考えているのか」

「どうやら心を読まれたようだ」

「まあ静まれ若人たちよ。次に2つ目。何故昨日の佐々木の成績表に赤点がある理由がわかった」

「今度は全員で固まった。理由？ そんなものまであったのか」

「実はだな……昨日俺は学校のデータベースにハッキングして色々調べてみた。そしたらその情報があつてな、佐々木が赤点にされていた理由はどうやら明智が関係してくるらしい」

「は？」

「光久が？」

「ですか……？」

上から順に健太、俺、エルフィ

「ま、待て雄太殿！ 拙者は何もしてない故」

「落ち着け明智。それは誰もがわかっていていることだ。……どうやらこれは明智の両親に依頼されていたことらしくてな」

『Wars部の誰かの点数を赤点にすることで関東大会への参加を消そつとした訳だ』

『え……』

全員で部室の扉の方をしてみる。するとそこには我がクラスの担任兼、Wars部顧問の梅花哲也が腕組みをしながら立っていた

「まず色々言いたいことはあるが……確かに学校側が仕組んだことには変わりはない。許せ佐々木」

先生が健太に向かって頭を下げてくる。これは昨日も見ただような光景だ

そして頭を上げ

「まあ西宮の言ったことは全てが正しい。だが……棄権することに変わりはない」

「と言うと思っただけ梅花」

「お前は先生に向かってその呼び方を……まあいい。なんだ？　まるで俺が言うことをわかっていたみたいない言い方をして」

俺たち1年生を挟んで部長と先生が話している

「ふう……言っておくが、俺たちwars部は棄権しない」

「は？　何を言っているんだ西宮。もう昨日のうちに棄権するとう旨は伝えておいたんだ。おかしな事を言っな」

「はっ、まだ気付かぬえか。言わせて貰うが、warsの大会の主催者は誰だ？　というか会社は何処だ？」

「何を今更……西宮企ぎよ……なっ!？」

「ま、そついうことだ」

「お前……ふう。そつだったか……俺もまだだつて事か……」

「それに付け加えさせて貰うが……梅花、コイツらの努力を無駄にする気か？」

その言葉に1年生全員と先生がハツとする。そして先生は顔を伏せ

「クク……ハハハ……アハハハハハ!!」

「ったく……ここまで言っただけ気付きやがるか……」

「へ？」

「そうだな西宮！ お前の言うとおりだな！ ははは……俺が間違ってたのかもな……」

「とんだ大間違いだバカヤロー」

「先生に向かつて……まあいい」

そして先生はこちらに向かつて歩き出し、余っている椅子を手繰り寄せてそれに座る。まるで先生が生徒になったかのように感じてしまう

「さて……今になってだが、改めて挨拶しよう。弦巻高校 wars 部顧問、梅花哲也だ。……お前らに相談せずに勝手に決めたことを謝らせてくれ」

「いえ、頭を上げてください先生……」

「謝るんだつたら何か出せ梅花」

部長のこの態度

「まったく……まあいい。とりあえず今の西宮の話だと明日は2回戦目に出るそうだが……大丈夫か？」

「何言ってるんだ梅花。俺だってここまで勝ち上がるとは思っていないかったわけだ。下手したら全国進出しちまうよ」

「まあ……初心者の集まりだというのに確かによく残ったものだ。

俺でもビックリしたよ……」

「そういう連中だ。ま、今まで来なかった分明日は来るんだな」

「むう……まあ仕方ないな。お前たちの実力、改めて拝めさせていただけこうじゃないか」

そして今日は話し合いだけで解散ということになり、翌日、関東大会2回戦目が行われようとしていた

「全員揃ってるな」

部長が昨日現地集合なんて言うから現在出欠確認中。大丈夫。顧問を忘れてるが大丈夫

「全く……梅花のヤツ遅いな……どこで道草食ってやがる」

「多分忘れてるんじゃないですか？」

「どーだか」

「いや、忘れるわけがないだろ」

『あ』

そして後ろから声を掛けられる。そこには夏だというのに暑苦しいスーツ姿の顧問の姿と、言っちゃ悪いが頭が太陽の光で反射してもの凄い眩しいオッサンが立っていた

「失礼だな神崎くん。私は弦巻高校の教頭ですよ？」

教頭だと名乗る人にも心を読まれたらしい。……教頭？

「いやいや……しかし若いっていいですなあ梅花先生。私にもこんな時がありましたよ」

「ここで語り出さないください教頭。あー……とりあえず教頭の白鳥学先生だ。今日連れてきた理由は色々あってだな」

「梅花先生。その『とりあえず』というのはなんでしょうか。そして『連れてきた』じゃなくて『来ていただいた』が正しいかと……」

「……まあ色々」と
「ちよ、梅宮先生!？」

どうやら教頭はいじられキャラ的な立ち場らしい

「さてさてWars部の皆さん。頑張ってくださいね。教頭は一生懸命応援させていただきますからね」

「あ、お願いします」

そして教頭と先生は応援席へと歩き出していた

「さてと……俺も行くが、大丈夫だな？」

「問題ないです」

「わたしも大丈夫です」

「いちいち心配するなアホ」

「まあ落ち着きなつて明日香」

「拙者も問題はない」

「……良好」

「僕も問題なし」

「そうか……それじゃ、頑張ってください」

そう言葉を残して部長も去っていく。残されたのは7人のみ

ちなみに今日当たる高校は“大俵高校”^{おおたわら}という所だ。ここにも部長の知り合いがいるとかいないとか

そして俺たちは選手控え室へと向かいだした

Wars program setting start.

f i e l d c o a t i n g . . . c o m p l a t e .
e n e m y p r o g r a m . . . c o m p l a t e .
f i r s t b a t t l e d a t a i n s t a l l . . . c o
m p l a t e
a r e y o u r e a d y w a r s b a t t l e
s t a r t ! ! ! 『

1 回戦目開始の合図がVW内に響き渡る。それと同時に俺と明日香は動き出す

どうやら本当に部長の知り合いがいたらしく、開始直前部長に実力を聞いたところ、瀧先輩と互角レベルだとか。それじゃあ勝つことは難しいだろう

だからここは光久と健太に任せるしかない

走り出すこと早20秒。明日香が口を開く

「真筈。今回の相手だが、勝機はあるだろうか……」

「さあなあ……まだ俺にもわからねえよ。でも大将が瀧先輩と互角レベルつちゃあ……な？」

「そうか……まあ気合いで乗り切るしかないか」

そして沈黙が流れ出す。聞こえるのはただ俺と明日香の走る足音だけ。依然として敵とは遭遇しない。これはこれで暇だと言っておこう

そしてこの静寂を破るようにしてどこからともなく銃声が聞こえてきた

『神崎さん！ 明日香さん！ そこから左の80m先の地点に敵を捕捉しました！』

「わかった！　すぐ行く！」

明日香がそう返事をしてそちらの方へと駆け出す。それに続いて俺も走り出す。誰かが戦闘を開始したのだろうか……

そして目標地点まで20m手前の場所でまたも銃声が響く

『大変です！　佐々木さんがやられそうです！』

「ちっ……健太か……！」

「急ぐぞ真箏！」

「言われなくとも！」

俺と明日香は走る。そして健太がいるであろう場所へとたどり着くと、そこには今にもやられそうな感じの健太と、倒れた状態でいる光久が、そして健太にトドメを刺そうとしている部長の友人……
新垣竜一あらがきりゅういちが立っていた

間に合うか……！

「食らえ！」

そちらへ向かっている途中で明日香が銃弾を放つ。その銃弾に氣付いたのか、敵は持っていた武器ではじき飛ばす。どうやらこちらへ注意を惹けたみたいだ

「むう……ま、いいか。雄太には手加減しないでいって言われてるし……」

「元より手加減される筋合いなど無い！」

その言葉と同時に明日香が刀を取り出して敵に突っ込む。片手に刀、片手に銃といった感じで、発砲しながら接近する。そして敵との間合いが狭まっていき

「私の勝ちだ！」

「……甘いつて」

「なっ……！」

明日香が刀を振りつけると、敵は横に流れるように回避する。そして敵は武器を槍から小刀へと変更し　明日香の腹部目がけて斬りつけた

「くっ……うっっ！」

「いやぁ……ゴメン。女子でも手加減はいらないと言われてるモノで」

明日香を斬りつけ、そして流れるように武器を変更……再び槍を取り出して

「悪いねえ……」

その槍の先が明日香の腹部目がけて突かれる。そして

「ぐっ……うあっ……」

「はぁ……雄太も中々酷いこと言うなあ……」

その辺りに血が飛び散った

そして敵の武器に腹を貫通されたまま明日香の身体が消えていく

「……さて、次は　」

敵はこちらを振り向いたかと思うと、健太に向かって明日香を刺した槍を投げつける。それは健太の頭を貫通して再び血が飛び散る

「残りは2人……手加減はしないでいいんだよね……？」

……言葉を発せない。身体も動かない。銃を敵に向けたいの腕が動かない

「……先に君か」

「……っ！」

そして敵はこちらに向かつて少しずつ近づいてくる。ダメだ。身体が動かない。光久も全く動かないでいる

「さて……ゴメン」

「くっ……」

何故か謝られた。いやさっきからそうなのだが……とりあえず試合なのだから　ってそういう場合ではない。回避しないとやられる

「伏せる真箏殿！」

「え？」

「何っ!？」

光久の声が聞こえてくる。その言葉を聞くと同時に身体が動けるようになり、言われたとおりに伏せる。すると光久の武器だけが敵の槍にぶつかっていた。どうやら投げ飛ばしたらしい

そして光久が起き上がってこちらへ近づいてくる。その間に武器が落ち、音を立てながら1バウンドする。1バウンドしたところで光久が刀を回収し

「はっ！」
「むっ……！」

回収した刀で横に振るう。攻撃は当たらなかった いや、少し掠めたらしい。敵の左腕から若干ながらも血が流れる

「……先に君からやっておくべきだったか」
「どちらからでも結果は同じだ！」

光久はもう1本の刀を取り出し二刀流で攻め始める。敵は防ぐので精一杯らしく、攻撃できていない

「すげえ……」

俺は思ったことを口にしてしまうタイプなのかもしれない

「……さて、そろそろ本気で行きますか」
「なっ!？」

「……TEMM起動」

敵は光久の攻撃を受けている最中だというのに武器をしまつ。そしてお馴染み(?)のワードを口にした。すると敵の正面を細長い光が多い、武器が現れる。それは一見普通の鎌だ

だが、どうやらそれは普通の物ではないみたいだった

『え……これ、レイズリテ・リーチエ!? マジですか!?!』
『嘘!? なんでそんなの持つてる人がいるの!?!』
『……信じられない!?!』

その武器が顕現すると同時にWLが開いたらしい。エルフィと琉

華と望がそう言う。そんなに凄い武器なのだろうか

「……本当は使いたくなかったんだけどね。こうなるから」

「は、はぁ……」

だったら使わなければ良かったじゃないか

「と、とりあえず光久！ 俺も戦うぞ！」

「かたじけない！」

「はぁ……まあいいや。かかってきな」

そして俺と光久は武器を持って接近する。一応俺は銃なのである程度の距離を保って発砲する。一方光久は刀なので近接攻撃だ。光久に当てないようにしなければ

その場に鉄と鉄がぶつかり合うような音が響く。そしてそれは起こる

「……とりあえずさ、君たちこの武器知らないみたいだから教えてあげよう」

光久の攻撃を受け流しながら敵は言い始める。しかも随分と余裕な表情で。さつきから攻撃を1度も出来ていないのに

「えつとだね……この武器はさつきWLで言ってくれたとおりの名前なんだけどさ、EXシリーズ……まあそういう武器なんだけどね、結構特殊なんだよね……だからこの武器はこんな事だってできる」
「え……」

敵は光久の武器をはじき飛ばし、1歩大きく後退して俺に鎌の先

端を向けてくる。その相手はかなり隙だらけで

『神崎さん！ 左に飛んでください！ 早く！』

「え……？」

「遅い」

ドンッ！

「……え？」

気付いたときには腹部を銃弾が貫通していた。何故？ とりあえず正面から飛んできたことには間違いない。だが敵は鎌しか持っていないはず。それなのに何故……

鎌をよく見てみると先端から煙が立ち上っていた

「正式名称：レイズリテ・リーチエクス・3 本来なら0が欲しいところだけどワガママ言ってもらえないか。とりあえずこの武器は鎌兼、銃つてところかなあ……とりあえず終わりにしますか」
「ぐっっ……」

そして光久を切りとばし、再び俺に近づいてきた

「……雄太には悪いけど勝たせて貰うわ」

「っっ……」

鎌が振り上げられる

「……マジで済まん」

「何、謝る必要はないですよ」

「……済まん」

「待たれよ」
「え？」

敵は鎌を振り上げた状態で硬直し、後ろを振り返る。すると武器を持たずに立っている光久の姿があった

「……まだやる気なん？」
「……悪いが……こちらにも負けるわけにはいかぬ故、本気を出させて貰う」
「光久……？」

あれでまだ本気で無かったと言っのか……光久恐るべし

「済まぬ真筆殿……拙者はいなくなるが……全国に出よう」
「え……」
「……父上、母上。拙者は約束を守れん男だ……」

光久が左目の眼帯に手を掛ける。そして

「……」
「光久……？」
「……気配が変わった？」
「え？」
「マズい……相当ヤバイ気がする……君走れる？」
「え、それってどういう……」

ドゴオッ！

「なっ！？」

光久が近くにあった何かを破壊する。そして左目を見ると……

「碧……目……?」

光久の左目には右目の黒と違って、碧の目があった。一体これは
どういうことだ……?

「……いや、……全員進撃やめ、今すぐこちらに向かってくるよ
うに」

「え?」

『良い判断だ竜一』

「え……?」

『ちよ、ちよつと君! 早くこの部屋から出て行きたまえ! 試合
妨害だぞ!』

『うつせえ。こちらにも色々事情があんだよ。それとも主催者の甥
にそんなこと言っているのかコノヤロウ』

『え……』

『まあとにかくマイクを借りるぞ。さて神崎、そこにいるな。あ、
そつだ。一旦この試合中止してくれ。ゴホン。で、神崎。今すぐ明
智をやれ。以上だ』

「はあっ!?!」

『竜一。お前も任せた』

「待て雄太。それだけ言われてもかなーり、いや、すげえ困る」
『じゃあな』

ブツッ

「……なんだっただ」

「……さあ」

「……」

さて、現状の整理をしよう。光久が眼帯を外したかと思うと近くにあった何かを破壊して、それで部長からよくわからん連絡が入って……光久をやれ、と
そんなこと出来るか

「先輩！ どうかしたんですか!？」

「お、来たな……よし、あの少年を倒すのが今回の目的になった。それじゃあ頼む」

「へ？」

「……まあ頑張って」

……部長並に適當かもしれない発言だ

「頑張ってたって……まあいいですけど」

そして今駆けつけてきた敵選手（女子）が刀を持って光久に向かう。ちよつと待て。マジでやるつもりかコラ
だが

「……………」

「え？ きゃあっ!」

「……マジか」

今突っ込んでいった女子が軽々とやられた。いや、軽々と言ってもそんな簡単な物ではなかった。色々と省略してしまったが、光久とは30秒近くやり合っていた。光久は防いでいるだけだったが、最後には光久の刀が首を切り落とした

そして光久は俺たちの方へと走って向かってくる

「くっ……君は戦える!？」

「わかりませんが……というか俺までやらなくちゃいけないんですか!？」

「……仕方ないけど、悪い」

そして光久は俺に向かって刀を振り下ろしてくる。次にもう片方の刀で横に薙ぐ。その攻撃は俺の腹部を掠る。そのまま光久は新垣先輩を斬りつける。こちらに攻撃のチャンスはない

「む……さっきまでとは全然違うな……でも敵わないか」

光久の攻撃はとうとう新垣先輩だけに集中し始める。それを軽々と回避していく新垣先輩。そして先程の鎌で横に薙ぐ。すると

「……マジで?」

「新垣先輩!」

今の鎌を、光久はしゃがんで回避し、いつの間にか武器が変更されていた銃で

ドンッ

新垣先輩の心臓を撃ち抜いた

そして倒れていく先輩

言ったら悪いが呆気ないやられ方だったような……

そして光久は俺の方を振り向く。本当に身体が動かない

「光久……」

……一応覚悟は出来た。出来てしまった

目をつぶる。光久の刀が空中を薙ぐ音が聞こえる。そして

ガキインツ！

見えない視界の向こうで鉄と鉄がぶつかりあうような音が聞こえてきた

#29 想いと力と暴走と (後書き)

……相変わらずヒゲエ……

マジで申し訳ございませんでしたorzorzorz

#30 躓いと理由(前書き)

今回みじけーです

#30 躊躇いと理由

ガキインツ！

見せない視界の向こうで鉄と鉄がぶつかり合うような音が聞こえてくる。何が起こったのかはわからない。とりあえず俺は戦闘不能になっていないことだけはわかる。つまりこの音は武器と武器がぶつかったときの音。誰の物かはまだわからない

目を開いてみる。するとそこには誰だか知らない　まあ対戦相手の人だが、2人がかりで光久の攻撃を受け止めていた

「大丈夫ですか！？」

「あ、ああ……ありがとう」

そのうちの1人がそう確認してくる。正直なことを言うと全然大丈夫じゃなかったりする。そりゃまあ光久がこんな状態になってしまったわけで……原因はまだわかっていない。だが、部長は何か知っているはずだろう

「なんつー力だよ……2人がかりで押さえるのがやっとな……！」

「とりあえず……君は逃げるかどうにかして！　ここは俺たちで押さえるから！」

「いえ……とりあえず光久には俺がトドメを刺します。今の状態なら撃てる」

そして俺は銃を取り出す。銃弾の補充を忘れていたので弾はほとんど残っていない。だが今の状態……光久が動けない内なら1発で当てられる

そう思っていた

「頼む……早く！」

「もう保たねえ……！」

「は、はい……！」

躊躇った。理由はとっても簡単な物だ

仲間だから。友達だから

今の光久の状況を考えると確かに俺がトドメを刺さないといけない。だけど相手が相手だ。やらないといけないことは十分に理解している。でも何故か指が動かない。動かせない。動かしたくない。わかっていてもそれが出来ない

そしてこの戸惑いが目の前にいる2人を傷つける

「もう……ダメだ……っ！」

「うあっ！」

「……………」

光久が刀で2人の武器をはね除ける。そして無防備になった2人に向かつて2本の刀を突き入れる。その突きは心臓を貫き、やがて引き抜かれ、血が流れるように溢れ出す。その時の光久の目を俺は見た。他の感情も持たず、ただ敵を倒す。いや、殺すことをただ楽しむような目。いや違う。そんなだったら怖すぎる。だとしたら？

復讐？

嗚呼……ピッタリだ。そうだよ。光久の先祖って言ったら明智光秀じゃないか。織田信長を倒して天下統一出来ると思ったらすぐに殺されて……そしてその復讐って言うか何て言うか………そんなイメージしか湧いてこない

そして光久の目がこちらを向く

「……光久……」

「……………」

いつも見ていた黒い瞳と、眼帯の下に隠されていた碧い瞳。その両目が俺の目に入る。怖かった。俺が知っている光久の目じゃなかった

1本の刀が天に向かい始める

俺はそれを見据える。途中でVW内の太陽に照らされ眩しく光るその刀は、やがて天に向かってまっすぐに伸びる。まっすぐに伸びたかと思えばこちらに向かって落ちてくる

はは……俺が真剣白刃取りなんて言うくだらない事を出来たらいいなあ　なんて要らない事をその瞬間に妄想してしまう。その妄想と同時に腕が勝手に動いていた。どうせ出来るはずも無いのに目を閉じる。そんな事が出来るはず無いから

そして

「……くだらない事を考えるな神崎」

「……へ？」

ガンッ……カランカラン

聞き覚えのある声が俺の耳に入ってくる。とりあえず言えることは、心を読まれたらしい

そんな事はどうでもいい。恐る恐る目を開いてみる。するとそこには我が弦巻高校Wars部部长、西宮雄太がいた。武器も持たずに。そして光久は片方の武器を手から落としていた

「つたく……お前が要らない事を考えるからさっきの2人がやられるんだ。その戸惑いが間違いないんだ。だからお前も消えておけ」
「ひっ！」

部長がTEMMを起動して見慣れた銃をこちらに向けてくる。何
度あれで殺されかけたことか。でもここはRWじゃなくてVW。つ
まりは殺される

……覚悟した

ドンッ！

本当に部長はなんの躊躇いも無く銃の引き金を引いた。その銃か
ら放たれた銃弾は俺の 顔の横をすり抜ける

「へ？」

「なんて思ったが……今回だけは見逃してやる。さて……お前はそ
こで動くな。明智は俺が殺る」

そう言っただけで部長は、落とした武器を拾ってきた光久に向き直る。

武器も持たずにか？ あるいはあの銃だけでか？ 無理だ。今の光
久に勝てるわけがない

だが

「神崎。言っておくが、俺があの状態の明智に負けるんじゃないか
なんて余計なことは考えるなよ。余裕だから言ってるだけだ。それ
と……今回VWに来たのは特別だ」

その言葉を言い終わると同時に光久が部長に向かって走り出して
くる。すると部長は避ける事をしようとせず、その場に立っている。

どうする気だ？ まさか攻撃しないつもりじゃあ……！

「……直線的な攻撃だなあ……これじゃあこの試合、勝てるわけが無いか」

ガンッ！

何が起こったのかわからなかった。ただ言える事は光久の両手から武器が無くなっていること、部長が右腕を上上げていることだけ。それ以外は何もわからない

そして両手から刀を失った光久は銃を取り出し部長に向ける。かなりの近距離からの射撃だ。これだと部長も回避が無理だが

「はあ……まあいい。後で梅花のヤツに頼むか」

ドンッ！ ガッ！

またしても何が起こったのかわからなかった。さっきと同じような状況だ。部長は右腕を下ろし、光久の銃からは煙が出た状態で約5m先に吹き飛ばされている

……これで光久が持つ武器が無くなった。慌てて武器を取りに行こうとする

「……いいか神崎。躊躇ったら負けだ。だから俺は」

ドンッ！

「……スマン。許せ」

部長の持っている銃から放たれた銃弾が光久の心臓を貫き、光久はその場に倒れ込んだ

RWに戻ってきてから大体30分が経過した頃だろうか、現在救護室の端で全員がある人物を囲んで椅子に座っている。その人物は光久。なんだか亡くなってしまったかのようにだ

ゴメンナサイ。マジでゴメンナサイ

「光久……」

ぼそりと健太が呟く。とりあえず戦闘中にやられたNo.2だ。No.1の明日香は光久を挟んだ反対側に座っている。戦闘不能になっていたので当時の状況を知らなかった2人だ

とりあえず戻ってきた時の話、つまり30分前の話をしよう

RWに戻ってくる。とりあえず今回は気絶している人物が

「……明智？」

「へ？」

「……気絶してる」

望が光久の顔を覗き込んでいる。俺も見てみると、そこには眼帯

をした状態の光久が眠っていた。どうやら本当に気絶しているらしい……あれ？

「さてと、お前ら無事か？」

俺たちの後ろから聞き覚えのある声　　というか先程まで聞いていた声が聞こえてくる。6人で後ろを振り向くと、そこには部長が歩いてこちらに向かってきていた

「……………とりあえず、神崎、佐々木。明智を救護室に運んでいけ。話はそこでするから……………それじゃあ任せた」

そして俺たちは救護室へと向かい

「さて……………明智のことだが……………言うておく。長くて1週間は目が覚めない」

その言葉にここにいる全員が言葉を失った

「それってどういう」

「簡単な話だ。明智の両親に関東を棄権してくれと言われた理由がこれだ」

「先生……………」

エルフィが部長に尋ねようとすると、タイミングが良いのかどうだかは知らんが、顧問の梅花先生が入ってくる。とりあえず教頭はいない

後で聞いてみると、熱中症で倒れて病院に運ばれたとか

「もうこうなつた以上話すしかない……………とりあえず、明智のその左

目。明智光秀の物だ」

『……は？』

部長を除いた全員で目を丸くした

「明智が明智光秀の子孫だというのは全員が嫌でも知っているだろう。だがその左目、明智家代々受け継がれてきた物で、本当に詳細は知らないが、とりあえず受け継がれているそうさ。だがその目は」

「その目を持つ者の力が解放される。が、不完全な者が解放してしまつと力を押さえきることが出来ずに暴走してしまう。そういう事です」

先生の説明の途中で知らない男性の声が聞こえてくる。入り口を見てみるとそこにはガタイのいい男性が立っていた

「明智さん……」

『へ？』

「こんにちは梅花先生。1週間ぶりですか？ 弦巻高校 Wars 部の皆さん初めまして。私、明智光久の父、明智繁しげみつさう三郎です。いつも息子がお世話になってます。梅花先生とは」

「明智さん」

「失礼。本当はこのことは明智家以外の人間に教えてはならないルールなのですが、皆様なら……いいでしょう。だが他言無用のことに願いますよ」

この場にいる全員が頷く

「さて……梅花先生、何故あれほど棄権させるように言ったのに……こうなるわけですか？」

「申し訳ございません。この生徒たちの成長を見たいという自分勝手な意志によりこのような事態を招いてしまいました。どうかここは」

「いえ頭を下げられる必要はありませんよ。正直な話こちらも助かりました。光久が本当に完全な人間になったかを確かめるには丁度良い機会でしたから。それに……今からでも遅くない。目を楓に移植する事も可能ですから」

「は、はあ……」

言ってることが全く理解出来なくなってきた

「おっと失礼。とりあえずここはお互い様という訳で……それではまた」

そして光久のお父さんは去っていった。その場に沈黙が走る

「さて……とりあえず今日の試合の事について話すぞ。今日の試合は明日に延長になった」

「明日ですか……」

『あ、そうそう！つ言い忘れてましたけど、光久が目を覚ますのはおそらく4日後ですー』

入り口からそんな事が聞こえてきた……って4日後！？ それじゃあメンバーが足りない

「というこらしいが……残念ながらメンバーが足りない。そこでだな」

「梅花。そこで俺を見るな」

……先生が部長に対して期待と希望を交えた視線を送っていた。

あ、なるほど。最後の希望がそこにいたか。その場にいた6人がそれに気付いたのと同じような視線を送り出す

「ったく……言っておくが俺は試合には出ないぞ。だから……これはもうマジで棄権するしかないな」

『は？』

「待て梅花。お前までこいつらと同じような反応するな」

「教師に向かってお前とはなんだ」

なんだろう。この2人の会話に上下関係と言う物が全くもって見られない。まるで随分昔からの知り合いが如く

「と、とにかくだな。俺は試合に出ない！ 棄権だ、棄権！」

「……………」

「そこで全員黙り込むな！」

どうやら部長はいじられキャラに降格したらしい（現在ののみ）。

「ふう……さて俺は帰るからな。棄権の報告をするのは明日でいいな。明日も現地集合だからな！」

部長はそう言い残して救護室から立ち去り、帰っていった。それを見送ると先生が立ち上がり、『俺は教頭を迎えに行く』と言って出て行った

そして現在に繋がり

「本当に……棄権するのかな……………」

「……部長の事だしマジだと思っ」

「だよなあ……」

「ま、所詮アレが入ったところで勝ち目は無いだろう」

「……明日香は知らないからそんな事が言えるんだな」

「なっ、何!? 私は何を知らないと言っのだ!」

とりあえず俺は見た。部長の力を。この目で

だが言っのは止めておこっ

「むっ……まあいい。とりあえず明日だ。私はもう帰る」

「あ、それじゃあボクも帰るよ。じゃあね」

そして明日香と琉華が立ち上がり、その場を去っていく。それを見送ると、今度は俺以外の3人が立ち上がり

「すみません神崎さん。わたしも帰ります」

「……また明日」

「じゃあ……あた明日な真箏」

「あ、ああ……」

3人が去っていく。この場に残ったのは俺と気絶した光久だけになっってしまった

……俺も帰るか

そして俺も椅子を立ち、光久から離れ救護室から出る。すると

「真箏……」

「へ……? そ、穹?」

救護室を出て右の方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。そち

らを見ると穹が立っていた。そして段々と近づいてくる

「あのさ……一昨日はゴメン。ちょっとわたしも用事があったね？」

「いやいいけど……っていうか何でここにいる」

「何を言うのです。わたしたちは今日試合でした」

「ほう……結果は？」

「もちろん勝利しましたっ！」

Vサインをしながら笑顔で答える穹。この部分は昔から変わらない

「それですな……西宮先輩の事だけど……」

「へ？」

何故ここで部長の名前が出てきたかわからない

「……わたしから頼もつか？」

もう意味がわからない

「えっと……つまり？」

「わたしが頼んで明日の試合に出て貰うようにする。いやあ……さつきエルファイたちに聞いたのだよ。部長が出ないと明日棄権することになるってさあ。だからわたしから頼んじやってやるうかなあ。なんつって？」

「……とりあえず無駄かもしれんがヨロシク頼む」

「おうおう任せておきんしゃい。絶対に成功させてみせるからんじやまたぬ」

「お、おう。またぬ」

そして穹はこの場を去っていった。その際『……成功しない方が不思議だけどさ』と聞こえてきた

…… Wars 関東大会2回戦目は、“延長”ということでも幕を下ろした

そして時は流れて翌日の朝になる

#30 躊躇いと理由（後書き）

……なんだろこの終わり方
俺でも納得いかないんですが

はい、黙ります

#31 過去と現在（いま）（前書き）

……まだまだ続くというのに次回作の企画進行中という……

はい意味不明ですね

とりあえず企画が進行しているだけです

内容なんてまだ決まってるから

忘れて本編へGO

3 1 過去と現在（いま）

「……………」

Wars 関東大会 2 回戦目が延長ということになって、その翌日。つまり今日が試合の日。現在目を覚ましてベッドの上で転がっている。ちなみに目覚ましが鳴る 5 分前だ。そして起きてから 10 分経っている。とりあえず何もすることがないから転がっている。いや、何もすることが無いというのは間違いかもしれない。いろいろと考えていた。今日の試合の事がメイン………というかそれしか考えてなかった気がする

“棄権”

ただこの単語だけが頭の中で何度も何度も復唱される。そろそろ頭が痛くなってきたところだ

光久が倒れて いや、気絶って言った方が良いのだろうか、目覚めるのは 4 日後、いや、昨日そう言われたから 3 日後か。だから今日の試合で出るメンバーがいなくなってしまったということだ

いやまあ、特別ルールというものもあるっちゃあるのだが、流石に公式大会だ。特別ルールに変更するのは不可だろう

……………」

時間が過ぎていくのがやけに遅く感じて仕方がない。その間にどれだけ“棄権”という単語が復唱されたことが

少なくとも 300 越えはしたはずだ。どうでもいい

と、ここでもう一つ思い出す。穹の発言

『それですな……西宮先輩の事だけど……』

『わたしが頼んで明日の試合に出て貰うようにする。いやあ……さつきエルファイたちに聞いたのだよ。部長が出ないと明日棄権することになるってさあ。だからわたしから頼んじやってやるうかなあ。なんつって？』

『おうおう任せておきんしゃい。絶対に成功させてみせるからんじやまたぬ』

『……成功しない方が不思議だけどさ』

あそこで部長の名前が出てきた理由といい、俺たちの現在の状況
といい

どこから出ているかもわからない自信といい

穹がどういう事を考えているのかなんて俺にだってわからない。
ただわかることは、穹が部長を説得すること。それと部長と穹に何
らかの関わりがあるということ。あくまで推測だ。当たっているか
どうかなんてわかるはずもない

もし当たっていたら？

説得には成功したのか？ それとも失敗したのか？

そして部長と穹にどういふ関わりがある？ 恋人？ それはあり
えん。それじゃあ何？ わからない

もしはずれていたら？

特に何も……いや、今日の試合が出られない

というか部長のことだ。穹が説得に上手くいったとしても、あの

人の性格を考えるとかなり

いや、確実にありえない

「はあ……………」

思わずため息をつく。それと同時に部屋の扉が開き、見慣れた顔が姿を現す。女子ではない。男子。健太である

「健太……………」

「おはよ……………って、どうしたよ。ため息なんかついて」

「いや……………ちよつと色々と考えてて……………」

「ほう……………ま、いい。とりあえず今日は現地集合して棄権するとい旨を伝えて終わりだよ。学校も行かなくてよし！……………なんだか嫌だけどな」

「ああ……………」

そして訪れる沈黙。正直な話、沈黙状態に慣れてしまった。良いことなのか悪いことなのか……………

少なくとも良いことであろう

……………ゴメンナサイ。わからないです

「ま、まあ……………また後でな」

「おっ」

そう言っつて健太は部屋から出て行く。扉が閉まると同時に目覚まし音が部屋中に鳴り響き、扉の向こうから『うおっ！なんだ!?!』

とかいう声が聞こえてきた。教えてやるう。目覚ましのアラーム音だ……………自分でも思う。かなりイタかった

さっきからやかましい音を鳴らしている目覚ましに手を伸ばし、アラームを止める。そしてその5秒後にベッドから立ち上がり、服

を着替える。全ての準備を終えたところで部屋を出、洗面所に向かい、リビングへと向かう。そこにはいつものメンバー……いや、光久を除いた7名が揃っていた（Wars部メンバー+両親）

「おはようございます神崎さん……」

「お、おはよう……どうしたエルフィ、元気無いんじゃないか？」

いつもより元気の無い声で挨拶されたので、そう聞いてみる
すると琉華が口を開き

「仕方ないよ真箏くん。だって今日は棄権するために会場に行くだけなんだよ？ そりゃ元気がなくなるのも当然だよ……」

「……すまん」

「……謝らなくていい。……現に真箏も元気が無いように見える」

「ああ」

「まあこんなことを話していても仕方がない。早く朝食を食べて行く」

こんな話をしているのに耐えられなくなったのか、明日香が言い出す。多分本当は違うことを思っているに違いない。早く朝食を食べて向かいたいんじゃない。向かいたくないんだろ。それは俺だって同じ事を考えている

でも仕方がないことだ。それが神様が決めたであろう定めだから

……

そして全員が朝食を取り終わり、その20分後に家を出て、会場へ向かうことになった

「さて、全員揃ってるな」

会場についてから20分くらいたった頃であろう、俺たち6人は先生と合流（教頭も）してから部長と合流した。現在地は、本部からかなりの場所だ。今からこのメンバーで本部へ向かい、棄権の旨を伝える。そして今日 俺たち弦巻高校の関東大会はここで終わる
まあ来年もあるわけなのだが

……随分納得のいかない終わり方だよなあ

「……それじゃあ行くぞ」

そして部長が先陣を切って歩き出す。あることを思った俺は、部長の横へ並んで歩こうとする。だが

「寄るな変態」

「誰が変態ですか」

「お前しかいないだろバ神崎」

「だから“バカ”と“神崎”を繋がないてください」

横に並ぶや否や、部長にそう言われてスピードを速められる。だがそれに負けじと俺もスピードを合わせる

「なんだ神崎。お前はそういう趣味か？」

「そんな訳ないじゃないですか。というか聞きたいことがあるんです。よろしいですか？」

「断る」

「断らないでください」

再びスピードを上げられるが、俺も合わせてスピードを上げる。随分くだらないようなことに見えるが、俺にとっては重要なことだ。負けてたまるか

「いい加減にしろ神崎。後ろの連中が追いつけなくなる」

「いい加減にするのは部長の方です。スピード落として聞くこと聞かせてください」

「だから断ると言ってるだろ」

「だから断らないでください」

更にスピードが上がる。もはやこれは歩いていていのではない。走っている。もう後ろに他の皆の姿はない。あるとしたら他の高校の選手たちと言ったところだろうか。とりあえず俺と部長で置いてきてしまったみたいだ

「そろそろ諦める神崎。後ろのの連中がいなくなったじゃないか」

「何を言うんです部長。それはあなたが悪いんでしょう？ 俺の話をお聞かずにただスピード上げてるからこうなるんです。早く諦めて俺の話をお聞きやがれ」

「神崎。今誰に向かって『聞きやがれ』なんて言ったんだ？」

「部長しかいないじゃないですか。とりあえず話を聞いてください」

よりスピードが上がる。いや、もう走っている。軽いジョギング程度ならまだしも、走っている。どれくらいのスピードかと言うと、50mを8秒で走れるペース。そろそろ周りからの視線が痛々しくなってきたところだ

「い、いい加減にしろ神崎……お前に……話すことは1つも……ない……！」

「何を言うんですか部長。知ってますよ。昨日穹から何か言われま

したよね？」

「何を馬鹿な……というか神崎……お前以外に体力あるんだな……」
「これでもサッカー部に入っていたもので、とりあえず早く話してください」

これ以上はスピードが上がらないらしく、それに部長の息が上がってきている。ちなみに俺はまだまだいける。ふっ、年貢の納め時DA！

ちなみに本部テントはとくに過ぎた。現在はテントから100mくらい離れてしまっただろう
そして

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「つと、大丈夫ですか部長？」

「くそ……運動不足かこりゃ……」

部長が体力の限界になったのか、急に立ち止まって膝に手をついて息を荒げている。いやぁ……こんな部長見たこと無いからラッキ―だ

言ったら言っただで殺されそうだが。とりあえず心を読まれなくて良かったと思う

「つたく……本部テントから離れちゃったじゃねえか……戻ろぞ神崎」

「え、ああ……で、話なんですけど」

「後で聞くから……行くぞ」

「あ、はい」

部長はそう言って早歩きで歩き出す。俺はそれについていく
後で話を聞くと言っていたが、本当に聞いてくれるのだろうか。

とりあえずこの人の性格だから若干信用できな

「黙れ。そして沈め」

どうやら読心術を使われたらしい。そして部長が持つ銃の銃口がこちらを向く。別にここは会場なワケで、VWじゃないから撃たないハズだ。うん

ドンッ！

「部長。今俺の顔の脇を何かが飛んでいったんですが」

「気のせいだ。それより急ぐぞ。走れ」

……さつき走ったばかりだというのに。でも部長は走り出す。まるで急ぐかのように。俺もそれにつられて一緒に走っていった

「……やっと戻ってきたか」

「うつせえぞ梅花……神崎が……悪いんだ……」

「人聞きの悪いことを言わないでください。それに息が上がってるんですから喋らない方がいいんじゃないですか？」

全員の注目を浴びる中、本部テントに辿り着く。どうやらまだ棄権することを伝えていなかったらしく、その場で立って待っていた

「さて……弦巻高校の皆さんは何の用事ですか？」

全員が揃い、部長の呼吸が整ったところで、実行委員の人であるう人が尋ねてくる。その質問に答えるため、先生が口を開く

「ええ……我々弦巻高校は」

「梅花、俺が言う。黙ってる」

「だから教師に向かつて……まあいい。好きにしる」

……いいのか

とりあえず先生から部長へとバトンタッチした

「……弦巻高校 Wars 部は……」

全員がその言葉を聞くことを覚悟し目を閉じる。俺だけは部長の後ろ姿を見据えていた。その可能性にかけて

「弦巻高校は棄権」

……

「……え」

「よつやく決めたか西宮……」

その言葉に部員一同が驚愕した。そりゃあ無理も無いだろう。あの部長から『棄権しない』という単語が出てきたからだ。そして次に発せられた言葉は

「明智光久の代わりに私、西宮雄太が出場します」

弦巻高校 Wars 部は、関東大会を棄権しないことが決定した

「ぶ、ぶぶぶぶ部長！ 一体どういう風の吹き回しですか！」

「そ、そうだぞアホ！ 今までのお前なら絶対に参加しないと思っ
ていたが今日はどうした！ もしかして人が変わったのか！？ そ
れとも地球が減ぶのか！？」

「言い過ぎだよ明日香…… 実際ボクだって理解できてない状況なん
だから……」

「……落ち着かない方が不思議な状況」
「ま、そうなるわな」

俺以外の5人はこんな状況になっていた。どうやら最初からわか
っていたのは俺と先生だけらしい。いや、俺は知っていた訳ではな
く信じていたって言った方がいいのだろうか

……正直な話、こんな人を信じても何の解くも無い気がするが

そう思った途端に銃弾が俺の頬を掠りました

「さて…… 事情説明は試合後にするとして…… 鶴、今回は俺とポジ
ションチェンジしろ」

銃弾の事はどうでもいいらしく、軽く話を逸らされた

で、その話に対する明日香の反応は

「黙れ。私に命令するな。そして断る」

俺としては嬉しいようで嬉しくない案だ

「そうか…… それじゃあ仕方がない。棄権しよう」

「待て待て待て！ 何故その程度でそうなるんだ！ もしかしてお
前…… そういう趣味なのか！？」

「おう。悪いか？」

……俺ですら引いた

「まあ冗談はさておき……エストラントはいつも通りサポート、鶴はサポートルーム51m地点で待機、藤堂は陣旗51m地点、佐々木と近藤で敵陣旗を目指せ。それで俺と神崎で大将撃破を目指す。この暗に文句を言った瞬間に棄権する。以上だ。準備につけ」

もちろん誰も反論やら文句を言えないわけでした

「……部長、何があつたんですかね？」

「さあ……気持ち悪すぎて吐きそうだ」

「だから落ち着きなよ明日香。今吐いたらアレだからさ……」

「……でも明日香が正しいかもしれない……」

「僕もう意味ワカンネ」

5人とも頭を抱えながらそう話していた

俺はそれを見て苦笑いをする。すると先生がこちらにやってきた

「神崎。お前……西宮になんか言つたか……？」

「いいえ何も」

「……俺も怖くなってきたぞ。明日雪でも降るんじゃないか？」

どうやら先生を不足の事態だったらしい。さっきまであんな冷静だったのに

「むう……まあいい。理由はともあれ試合に出る気になつたんだ。

……言つておくが、西宮1人でも十分だぞ」

「……は？」

「おつと何でもない。それじゃあ健闘を祈る」

そう言っつて先生は観客席へ向かつていった。すると入れ替わりで部長がやってくる

「さて……お前ら出陣だ。敵は昨日と同じだが気は抜くな。そして今回はルール変更があつてだな。1回戦2回戦は抜いてそのまま延長戦だからな。つまり1回だけの戦闘だ。負けたら負けたで終わりだから本気でいけよ」

その言葉に誰も返事はせず（出来なかつたが正しい）、部長が試合会場の方へと向かい出すと俺たちもそれにつられて歩き出す

そして、関東大会第2回戦の延長戦が始まつた

```
Wars program setting start .
field coating . . . complete .
enemy program . . . complete .
final battle data install . . .
complete
are you ready . . . . Wars battle
start! ! !
```

……正直なところ聞き飽きてきたサウンドがVW内に響き渡る。
とりあえず試合開始

今回隣にいるのは明日香ではなく部長。何故こんなポジションに

したのは俺でもまだわかっていない。多分何かあるに違いない

2人で走り出す。敵はまだ見つからないから大丈夫だろう。まあ油断大敵なのだが

「そうだぞ神崎。油断大敵だぞ」

……心を読まれた

「……つたく……なんで俺が星乃なんかの説得されなきゃいけないんだよコノヤロー……」

「あ、やっぱり穹だったんですね……」

なんとなく予想できていた結果だった。とりあえずこれは後で聞こうとしていたことだが手間が省けた

「そうだ。昨日家に着いた途端に電話が来たー、ってお袋に電話を渡されれば星乃妹じゃねえの。そしたら明日の試合に出てくれなんて頼まれて……断ったけど脅されてだな……仕方なく出たって訳だ。言っておくが、俺が参加するのは明智が目を覚ますまでだ。それ以降はお前たちだけで頑張れよ」

よくもまあこんな長い台詞を一文字も噛まずに言えますこと

「ははは……まあそれはいいんですが……脅されたってなんですか？」

「……断る」

「断らないでください」

そこまで言っておいて断るのかコノヤロウ

「……まあ、正直なところ……いずれはバレるか話すかするだろうとは思ってはいたがな……」

「え」

「1つ聞いておくが、神崎。お前に俺の心の傷の原因を聞く勇氣はあるのか？」

「そ、それは……」

「それを聞く勇氣が無いなら話す事はない。試合に集中してこの話は忘れる」

そう言っつて部長は真っ直ぐに走り出す。当然俺も走っていることには変わりはない、が。今の言葉で俺はスピードを遅めてしまい、部長の少し後ろを走っている

部長の心の傷。部長にそんな物があつたのか。もしかしてそれが部長がwarsをやらない理由なのだろうか。それはわからないけど……

聞こう

あれ？ でも聞いてもいいものなのか？

それは却つて更に部長を傷つけるだけなのでは？

聞いてはいけない

でもそうすれば部長は1人で抱えたままになるのか？

駄目だ。それじゃ駄目だ

1人だけで苦しむ誰かを見てられるか

聞こう

俺は決心し、走りながら口を開き、部長に尋ねる

「……教えてください。部長の心の傷を……」

「……もう1回聞かせて貰う。お前に俺の心の傷の原因を聞く勇氣はあるか？」

「……はい。決心しました。お願いします。聞かせてください」
「……わかった。いいだろう」

部長は口を固く閉じた後、ゆっくりと口を開いていった

2095年、5月10日。wars都北大会を翌日に控えた日。東京都立弦巻高等学校の放課後、俺たちwars部のメンバー……と言つてもここにいるのは4人な訳だが、部室へと足を運んでいた。ちなみに他の3人は掃除やらなんやらで忙しいらしく、少し遅れていくらしい

俺たちwars部のメンバーは今年、公式試合に出られるギリギリの人数の7人しかいない。理由はとても簡単なもので、昨年までいた部員が卒業だとか引退だとかでいなくなつてしまつたらしい。それに加えて俺たち7人以外に入部したいという人間がいなかつたというものだ

「いやあ……明日から都北大会かあ……なあ雄太、目指すはモチ全国だよな？」

「当たり前だろ美里。つか、全国優勝しかありえないだろ馬鹿」

「まあそう言わずに西宮君。君だつて緊張はしているんだろっ？」

「黙れ。脳天貫くぞ」

「落ち着こうよ3人と。誰だつて緊張はするんだよ」

「……命拾ひしたな」

「な、本当に殺す気だつたのかい!？」

その場にいる4人で笑う。そして部室へと向かつていく

正直な話、都北大会、都大会、関東大会に出るのも面倒くさい。

そのまま全国大会に出てしまつてもいいんじゃないかってくらい面

倒くさい。とにかく面倒くさい。別に本気を出さなくたって勝てる相手を倒しても何の得も無い。ただそう思っていた俺。でもそれは違うだろと言うみんな

こうかみ合わないながらも楽しい日々を過ごしていた。中学、小学、幼稚園の頃から

どうこうしている内に部室へと着く。部室はグラウンドの端の影という、全校生徒が羨ましがる絶対ポジションにあったりする。今までの部員が獲得してきた場所らしい

夏場は涼しく、冬場は若干寒いのが、暖房がついていてまるで天国の様な場所だ

とりあえず4人で腰を下ろす

「さて……いつ頃来るかね」

「さあ。まあ西宮君みたいに面倒だからとか言って休む人たちじゃないからね」

「黙れ。本当に脳天貫くぞコラ」

「だから落ち着こうよ雄太」

左にいる男子生徒にそう押さえられ、TEMMを起動して取り出しておいた銃をしまう。コイツの言葉がなかったら今にも目の前にいるヤツの脳天を撃ち抜いていたところだ

「あ、そうそう。さっき先生にトーナメント表渡されてさ、全員に配っておけだつて。特に雄太、受け取るように」

「貰っても変わりないだろ……」

「ダメだつて。ほら受け取る」

「ったく……しゃあねえ」

そう渋りながらも、俺はトーナメント表を受け取る。目を通してみると、初戦の相手は哉町高校という所らしい。まあ所詮俺たちの相手ではないが

そして暇になる。会話すらない。俺以外の全員はトーナメント表を見ているわけで……

「なあ、そんなの見て面白いか？」

「とりあえず拓人の顔よりは面白い」

「瀧君！？ 今サラッと酷いことを言っただね！？」

「だからそういうのはやめようって」

……俺はどうみても目の前にいるヤツの顔の方が面白いと思うのだが

「哉町高校だったか？ レベルはどんなもんよ」

「さてね。まあ雄太の言うとおり余裕かもしれないけど……油断大敵だからな」

「そうだよ西宮君。いくら君が全国4位の实力を持つからって言うても油断だけは駄目さ」

「そうだねえ……確かに油断はダメだね。もしやられたらどうするのさ」

「……俺はどうにも自分のやられる姿が想像出来ん」

一応言っておくがそれだけ自信がある

まあ、どうこう話している内に時間が流れてゆき

「いやー悪いー。遅れたー」

「……日直面倒だわ……マジで」

「学業は大切だじょー！」

部室のドアが開き、残りの wars 部員が入ってくる。それぞれ違うことを言っている

とりあえずこれでメンバーは揃った。後は顧問を待つだけだ

「あ、あつくんたち、これ明日からの大会のトーナメント表。ちやんと渡したからね」

「お、サンキュー」

「哉町ねえ……」

「あ……あそこ何気にやるって言ってたなあ……」

トーナメント表を受け取るなりそう言い始める3人。……とりあえず思うのだが、この部活、華がない

「それはともかく……今日は」

全員が席に座り、左斜め前に座っている男子が説明等をはじめた。正直どーでもいい事のようにだから適当に聞き流しておく

「ま、こんな感じ。それじゃあ梅花しゃん来るまで準備でもしますか」

その発言と共に、全員がVWへ行く準備をする。それぞれが武器の手入れを始めている

例えば、今や後輩にすらいじられているヤツだったり

例えば、全国5位の實力を持っているヤツだったり

例えば、今現在戦っている相手であったり

例えば、都北大会で後輩を負かせたヤツだったり

例えば、関東大会で第1シードに入っている学校の部長であったり

……例えば、この事件で永久迷走したヤツであったり

ロスト・ラン

そして全員が準備を終えると同時に、部室の扉が開く。現れたのは Wars 顧問の梅花哲也だ

「さてと……準備は出来てるな。お前ら送ったら職員室もどっからんじゃ、データを回収〜」

「はい。これが今日の相手のデータです」

「お、流星星乃。仕事が早いな。んじゃ……もっかい言つが、職員室に戻るからな。じゃあ行つてこい」

そして俺たちは、この後あんな事件が起こるとも知らずに VW に突入する

ドンッ！

「……甘い。甘すぎる」

『まあまあそんなこと言わないでよ雄太。多分明日はもうちょっと手応えあるはずだからさ』

「つたく……そうだと嬉しいんだけどな」

『いやあ〜……やっぱり雄太は来斗らいとの言葉には負けるんだな』

「うっさいぞ美里。シバくぞコラ」

『おう怖い怖い』

美里との回線が切られる。目の前では俺の銃弾で沈んでいった敵がいる。弱すぎて話にならない。これじゃあ明日は期待できないな

「おい聡蓮。まだ終わらないのか」

『まー待つんだ。直に終わるからちよい待ちを　あ、いたいた』

「頼むから早くキメてくれよ……」

ドンッ！

回線の向こう側で発砲の音が聞こえた。多分これで

ビーーーーッ！！

多分じゃないか。ちょうど飽き飽きしていた1回戦目が終了する。これから2回戦目があると思うとうんざりする

そして全員が集合するという形になり

「……やべえ。飽きる」

「だから落ち着こうか雄太」

「そだよー。咲也の言うとおりさー。それにそんな面倒くさがってたら……順位抜かすぜー」

「やれるもんならやってみろ」

こう適当な会話を5分続け、2回戦目が始まるうとする。全員がポジションに配置され、次のフィールド……荒野が現れる

そのはずだった

ブッッ

「……は？」

急に辺りが暗くなった。何も見えない。ただただ暗い空間だ。上

も下も右も左もわからない、ただ暗闇に包まれた空間だ。回線を繋いでも誰も反応してくれない

「なんだってんだ……」

依然として暗くなったまま。こんな事は初めてなので、とりあえずそのまま動かないでいる。まあ、その内フィールド構成されるだろう。そんな単純な考えだった

この後、あんな事件が起こるとも知らずに

パッ

「うつ……」

急に空間が元に戻った。いきなりのことだったので目を細めてしまふ。視力が戻ってから目を開いてみると、そこには混沌とした空間が広がっていた。状況が理解できない。それに誰とも回線が繋がらない。どうなっているのだろうか

よくわからないまま歩き出してみる。ただ真っ直ぐに。警戒をせずに。ただ、真っ直ぐと

「……なんなんだ……」

思わず独り言を呟いてしまふ。無理もないかもしれない。そりゃあこんな状況になっているのだから

しばらく武器を出さずに歩く。すると急に後ろで気配を感じた。そして後ろを見してみる。するとそこには“影”が立っていた。ただ真っ直ぐと。こちらを向いて

「……………」

しばし見つめ合う。目があるのかどうかは知らないが。すると、急に影の腕らしき物がこちらに向き、手に持った何かから

「……………」

咄嗟に右へと回避した。その直後、1発の銃弾がさつきまで立っていたところをすり抜ける。危ないところだった

とりあえずこれは敵だと言うことが判明したので、俺もTEMMを起動して銃を取り出す。そして

ドンツ！

「……………なんだよ。大したことないじゃねえか……………」

今放たれた銃弾は見事に影の胸の辺りを貫き、影は消えていった。まったく大した敵ではなかった

そして再び歩き出す。ここがどこなのかも知らないまま

「しかしまあ……………広すぎる」

大体1kmくらい歩いたんじゃねえの？ それだけ歩いても誰も見あたらないし、回線が繋がれないし、繋ぐことも出来ない。一体どうなっているんだ

さつきから影を2体ほど 合計3体倒しているんだが

まあ……………なんらかのアトラクションとかそんな風に思えばいいだろうか？ いや、ダメか？

とにかく歩き続けてみる。何もないこの空間の中を。すると、遠くに何か人影らしき何かが見える。もしかしたら誰かかもしれない。そう思っただけは走り出す

そして

「お、來斗か」

遠くに見えたのは來斗だった。どうやらこちらにはまだ気がついていないらしく、俺とは別の方向へと向かおうとしていた。ここで悪知恵が働くというのか、驚かせようという案が浮かんでしまう。そう思った俺は気づかれぬように來斗へ近づいていく。まだ気がついてない
すると

ドンッ！

「……え」

後ろから大きな落下音が聞こえた。なんだろうか。とてつもなく大きい何か落ちてきたに違い無い。その音に気がついたのか、來斗はこちらを見る。それにつられて俺も後ろを見してみる。そこには今までの数倍はあるだろう、影が立っていた

でも大きさがどう変わろうと俺には及ばないはずだ。武器を取り出し、そして構える

一向に敵は攻撃する動作がない。これはチャンス以外の何者でもない。沈め

『やめるんだ雄太！』

「……」

ドンッ！

後ろから來斗の叫ぶ声が聞こえてきて、それに驚いて照準が狂い、敵の腕（？）を貫く。そして來斗がこちらに辿り着く

「なんで止める來斗！」

「説明は後！ 早く逃げよう！ こいつに手を出したらダメだ！」

「何言ってるんだ！ こいつを倒せば戻れるんだろ！？」

「君は何を言ってる……とにかく逃げるよ！」

「離せ來斗……！」

その場で手の引つ張り合いが始まる。早くこいつを倒さないといけないのに……！

「雄太！」

「離せ！」

「離すものか……！ なっ！」

「え……？」

ガスッ！

「ぐほっ……」

急に左脇腹に痛みが走る。一瞬何が起こったのかわからなかった。だがその後の一瞬で理解できた。目の前にいるヤツに攻撃されたのだと…… 上等だ。來斗から手を解放されたことだし、すぐにこいつを片付けて……！

銃を構える。そして銃口を敵に向けて引き金を引く。すると

ガキインツ！

鉄と鉄がぶつかり合うような音が聞こえた。その銃弾は敵に当たることは無かったようだ。当たり前だ。来斗に防がれたのだから

「邪魔するな来斗！」

「だったらやめるんだ雄太！早く逃げないと手遅れになる！」

「それならお前も排除するだけだ！」

「くっ……無理に決まってるだろ！？この武器と君の武器じゃ差があるのは知ってるだろ！？」

「それを乗り越えればいいだけの話だ……！」

「……いいよ。それじゃあ僕は全力で君を止めるだけだ」

そして俺はもう1本の銃を取り出し、片方を来斗に、片方を影に撃ち込む。だが、その全ての弾を来斗に防がれる。すると、今度は鳩尾に殴られたような感覚が走り、そのまま奥へと吹き飛ばされる

「雄太！」

「くっ……そうか……俺は来斗と影を敵に回してるのか……面白え

……」

「やめる雄太！これ以上やると戻れなくなる！」

「うっせえ！その影倒して戻るんだよ！」

「間違いに気づけよ……！」

俺は再び銃を撃ち始める。もちろん結果は全て防がれる。そして影の攻撃が飛んでくる。今度は見切れたので回避する。が、ただ回避するだけではダメだったらしい。背中から痛みを感じた

その攻撃で吹き飛ばされ、俺は来斗の近くへと吹き飛ばされてきた

「くっ……」

「雄太……もうやめてよ……」

「誰が……ふっ、この至近距離なら止められないだろ……？」

「……無駄だよ」

ガキインツ！

彼我の差が数メートルだというのに、銃弾を防がれる。こいつが
持つてる武器は桁外れだ

「……だったらお前がその影をやるんだな……？」

「雄太……これはVWの中枢だよ……これを破壊したらRWに戻れ
なくなるよ……？」

「……は？」

「だから……あつ！ 雄太！」

ドスッ！

「……………え」

「だから……ははは。破壊しちゃダメだ。えっとさ……うん」

目の前で来斗が心臓を貫かれていた。もちろんその攻撃は影から
によるもので……どうやら俺を庇ったらしい。なんでそんなことを

……

「その……とりあえずさ。これ、預かって欲しいんだ。その……
もしかしたらの話だけど……」

その言葉を聞き取れなかった

そして俺の手には来斗の持っていた武器が渡される

「えっと……とりあえず……またRWで会えるといいね」

「おい來斗。何言ってるんだ……？ 会えるに決まってるだろ？
バカなこと言うな……」

「その……それじゃあ、また後で」

來斗の身体が消えていった

「來斗？」

思わずそう尋ねてしまう。目の前にいる訳じゃないのに尋ねてみる。あるのはただの影だけ

「おい……來斗」

再び尋ねてしまう

「……馬鹿言ってるんじゃないよ……また会えるに……会っしかに決まって……」

影の腕が伸びてきた。そして

「はっ!？」

「ふう……とりあえず成功したか……？」

目を覚ます。するとそこは見慣れた景色である、RW 部室が広がっていた。そこには職員室に戻ったはずの梅花もいる。その額には汗が光っていた

「せ、先生……これは一体……」

「おっと大丈夫か吉原。ただ強制終了をかけたただけ。若干気持ち

悪いとかあるかもしれないが、了承してくれ。これしか手が無かったんだ……」

「それはいいんですが……さっきまで俺たちがいた空間はなんですか？」

「おそらく暴走によって生まれた空間だろう。まあ……良かったよ、全員無事」

「來斗？ おい來斗！」

「え？」

竜一の言葉で全員がそちらを見る。するとそこには唯一寝た状態から気絶したのかもしれない

「ただ寝てるだけだろ？ 直に起きるさ」

俺はそう答える。すると梅花が口を開き

「おい西宮。もしかして……星乃は戦闘不能になったか？」

「は？ あ、ああ……」

「……吉原。あつたらでいい。ペンライトかそんな感じの物はあるか？」

「え？ ええ……どうぞ」

梅花は拓人からペンライトを借りて、來斗に近づいていく。何をしたいのかサツパリわからない

そして梅花は來斗の瞼を開かせると、ペンライトを目の上に持ってきて、明かりをつけた。その結果に全員が言葉を失った

反応無し

「……………永久迷走だ……………」

梅花は立ち上がり、俯いた状態でそう言う。誰もが言葉を発せずに立っていた

「おい……………嘘だろ梅花……………冗談よせよ……………」

「西宮……………TEMM起動してみろ」

「え？」

言われたとおりにTEMMを起動してみた。すると、そこには俺の持っていない、そして来斗だけが持っているはずの武器が入っているのに気がついた。これはどういう……………

「……………来斗……………」

武器をしまつて誰も動けずにいる状態の中、俺はそう呟きながら来斗の元へと歩み寄る

「おい冗談よせよ……………そんな演技はいいんだよ……………」

俺の足は止まらない

「何が……………『会えるといいね』だよ……………何で会えねえんだよ……………」

来斗の元に座り込む

「目を覚ませよ！ 来斗おおおおおおつ！…！」

全員が沈み込む中、俺は全力で叫んだ

そして、星乃来斗15歳は、永久迷走という植物状態のようなも

のになってしまった

「どうだ？　これが過去だ」

「……………」

言葉を返せなかった

「くだらないだろ？　笑いたければ笑えよ神崎」

「……………」

「笑えねえよなあ…………そりゃあ…………來斗は俺が殺したも同然なんだからな…………まあ實際生きているが、死んだも同然さ…………」

「……………」

「なあ神崎。お前はこれ聞いてどうしようとした？　あるいはどうしたい？　何も出来ないだろ？　こんな話を聞いて…………お前がどうこう出来る問題じゃ…………ないだろ…………」

「…………はい」

「…………とりあえず話は以上にする…………これだと俺が集中できん…………」

俺は何も言わずに頷く。忘れていたかもしれないが、俺たちは現在走っている。よくもまあ息切れをせずに長い話を　って、そんな事を考えている場合か

2人の間に沈黙が走る。が、それを破る声が聞こえてくる

『神崎さん！　部長！　右方左方から敵が来てます！　戦闘態勢に入ってください！』

「そうか…………それじゃあ神崎。お前はここから離れてる。巻き込むぞ」

「へ？」

「な……なんだあれ……」
『わかりません……あんな武器があるんでしょうか……』

エルフィと回線が繋がっていたようだ。そう答えられる。1年の中で唯一の Wars 経験者のエルフィですら知らないとは……一体何なのだろうか

『ただ心当たりはあるんですけど……』
「心当たり？」

『は、はい……多分ですよ？ 多分部長が使ってるのは あ、て、敵が2名接近してきました！ 注意してください！』

……聞けなかった

でもまあ、これで敵が4人になってしまったわけだ。これ以上はいくら部長でも防ぎようがないだろう

そして部長の目の前に友人である新垣竜一先輩が立っていた。もちろん武器はこの前の鎌で。おそらく持っている中で一番強いに違いない。現れると同時に銃声が止む

「……竜一か」

「ああ……まさか雄太が参加するとは思わなかったよ……」

「まあ色々あってだな……それよりも……かかってこないのか？」

Wars 全国ランク第9位、新垣竜一さんよ。今の俺はもはやランクには載っていないただのクズだ。今ならやれるぜえ」

「……雄太でも手加減しねえからなっ！」

そして新垣先輩が部長に向かって突っ込み出す。それでも部長は微動だにせず、ただただ近づいてくるのを待っていた。その距離は残り15m

『……全国ランク9位って……まさかそんな相手と戦ってるとは全く思いませんでした……』

「やっぱりすごいのか？」

『だって全国ランク9位ですよ！？ たった10名だけが載ることが出来るランクに入ってるんですよ！？ 凄いに決まってるんじゃないですか！』

怒られた

とりあえず部長の方をしてみる。すると、もうわずか5mの所まで接近されていて、それでも部長の動きは止まらなかった。諦めたのか！？

「竜一。言っておくが、俺はお前に負けるつもりなんて無いからな」「だったら雄太。今のお前が俺に勝てることを今ここで証明して見せる」

新垣先輩の武器である鎌が、部長の首目がけて空中を薙ぐ。その時やっと部長に動きがあった。さっきまでと同じように右腕を動かす。そして

ガキインツ！

その攻撃をはじき飛ばした。やっぱり武器は持っておらず、どうしてこうなったのかわからない

「……なんでそれを出さない」

「決まってるだろ？ これを出したら出したで大問題だからな。こっちは一瞬だけじゃないとダメな訳よ」

「だったら表に出すだけだ」

そして再び新垣先輩の鎌が空中を薙ぐ。それを部長ははじき返す。再び鎌が遅う。それをはじき返す。その繰り返しが始まった。見ている俺たち（俺と敵方）は攻撃もせず、近づきもせず、ただその光景を見ているだけだった

鉄と鉄がぶつかる音だけがここに響く。それが何分も続く。今で大体2分ぐらいだろうか、それだけ繰り返していた

「どうした竜一。全国9位の实力はそんなものか？」

「……言っておくけど、これでまだ6割だ！」

「……俺は5割も出してないけどな」

「……これで終わりだ！」

シュツ、ガキインツ！

今までで一番大きな鉄の音が響く。そしてかなりの風圧がこちらに飛んでくる。思わず目を閉じてしまい、どうなったのか解らない状況だ。やられたのか？ それともやったのか？ 相撃ち？

目を開く。するとそこには、新垣先輩の鎌を受け止める金色の武器を持った部長の姿がいた。もちろん今まで見たことのない武器だ

「やっと出したか……」

「ちっ……まあお疲れとでも言っておこうか」

その武器が現れたと思うと、急にRWからの歓声が聞こえてきた。あまりのうるささに耳を塞いでしまう

「……こうなるから嫌だったんだよ……」

「いいじゃんか……これで本気で戦えるだろ？」

「……本気で行ってもいいのか？」

「かかってこい」

未だに歓声は止まらない。すると、エルフィから回線が入る

「エクスカリバーEX・0保持者、Wars全国ランク第4位西宮雄太。ここからが本番だ」

#31 過去と現在（いま）（後書き）

はいお疲れ様です

前書きのことはわすれておいてくらはいorz

とりあえず#32（次話）でChapter4は終了予定です
おいコラ

その後は……とりあえず言いません

それではまた次回

期待している人が0割だと思いたすかね

#32 悲しみの果てに(前書き)

サブタイトル……

マシなものが思い浮かびませぬですたorz

#32 悲しみの果てに

「エクスカリバーEx・0保持者、Wars全国ランク第4位西宮雄太。ここからが本番だ」

「言うておくが、それは中3までの時の話だ」

ガンッ！

先程のぶつかり合う音を遙かに上回る音がこの辺一帯に響く。すると、目の前にいる2人は目視できないほどのスピードで戦い始めた。もはや武器すら見ることが出来ない。部長は先程までと同じように攻撃するときだけ武器を出すのではなく、出した状態で戦っている。そこはどうでもいいのだが、とにかく凄い戦いが目の前で繰り広げられている

『……………ありえません』

……………エルフィと回線が繋いであるのを忘れていた。何がありえないのだろうか

「どしたエルフィ？」

『……………ありえないです。いや、ありえなくはないのかもしれないですけど……………まさか部長がエクスカリバー……………それもEx・0の保持者……………実物見るの初めてです……………』

「えーと……………それって凄いいん？」

これを聞いたことに後々後悔した

『当たり前じゃないですか！ だってあのエクスカリバーですよ！
？ レイズ・テ「リーチエ以上の攻撃力を持ちながら、wars武器で現在最高傑作と言われている五大武器の1つですよ！？ それもEX・0！ 同じシリーズが6つ存在する中で特に高い能力を持つ武器ですよ！？ それを持っていてるって相当凄いことですよ！？』

後悔した理由「鼓膜が破れかけるほどの声の大きさで怒られた

とりあえずエルフィが言うには、部長が持つ武器はwars武器の中で最高傑作、いわゆる五大武器の1つらしく、その内の1つである“エクスカリバー”を部長が持っていると言うことだ。新垣先輩が使っている鎌（レイズ・テ「リーチエ」も五大武器の1つらしく、入手がほぼ不可とされていると言っても過言ではないらしい更にその五大武器を細かく分類すると、1武器につきEX・0～EX・5までであるらしい。つまりは1つの武器が世界に6つあるらしい。それで部長が持っている武器はEX・0と言う特別製で、五大武器のEX・0はEX・1～EX・5と比べるとかなり性能が高いらしく、とんでもない能力を秘めているとか。それであるエクスカリバーだが、剣と銃が合わさっているらしい。能力はわからないみたいだが

ちなみにEX・1～EX・5に特殊能力はなく、新垣先輩が使っているのはEX・3 特殊能力がない物だ

「はあ〜……まさか部長がそんな武器を持っていようとは……」
『正直わたしでもビックリですよ……あの武器は全国ランク4位でも手に出せないような代物ですからね……それに、多分それは2079年出生の人のデータで4位なんじゃないかと思えます。そもそもエクスカリバーEX・0は世界ランク1位でも持てないような物ですからね……』

そこまで凄い武器のようだ。それを何故部長が持っているのかわからない。まさかとは思うが、どこかから盗んで

チユインツ！

まさか戦闘中の部長が俺に向かって弾を撃ってくるとは思わなかった。あの戦いの中でよく読心術を使って、よく俺に攻撃できるな……もうただ者ではない。これからは敬うようにしよう
やっぱやめた

「ほう……粘るな竜一。やっぱり9位の実力は伊達じゃないな」

「そっちこそ……4位のくせして結構押されてんじゃないか？」

「……一応言わせて貰うが、まだ6割だ」

あの戦いの中で部長はまだ6割しか出していないらしい。それじゃあフルパワーになるとどれだけ凄いことになるんだ。想像してみるも、それが出来ない。多分想像したところでそれを超越しそうだからだ

目の前で鉄と鉄が激しくぶつかり合う音が響き、目で追えないような戦いをしている2人。本当たまに風圧がとんできたりする。その光景を見て、俺と先程まで攻撃していた敵は一步も動けず、更には攻撃もしようとしない。そりゃあ目の前でこんな戦いが繰り広げられていれば試合に集中できるはずがない。その内試合放棄して全員が集まってしまいそうだ

そんな事を思っていると、健太から回線が入る

『なあ真筈。かなり凄い音が響いてるんだが……何かあるのか？』

「ああ……人の人知を超えた戦いが繰り広げられてる」

『は？』

「部長が凄いことになってる」

説明が下手になったかもしれない。理由は目の前の戦いを見ていて頭がおかしくなったから

理由にならないか

『……とりあえず私たちは陣旗を目指してる』

「ああ……早めに頼む」

そうだ。今回は健太と一緒に望も行動しているんだった。望の声が聞こえてきてもおかしくない。早く陣旗を破壊され、この戦いが見られなくなると思うと、少しだけ悲しく思えたりもする

回線が切れる。依然として目の前では戦いが繰り広げられている。最初と比べると、スピードが上がってきているように見える。いや、確実に上がっている

「どうした竜一？ そろそろ限界か？」

「なあに。これでもまだ全開じゃないからまだいけるさ」

「そうか……それじゃあ俺が全開になったらお前はどうなる？」

「……勝つしかないだろ？」

ドッ！

「うっ………！」

今までで一番強い風圧がこの辺一帯を襲う。あまりの強さに足を持って行かれそうになり、目を閉じてしまう。転びはせずに踏みとどまった。まだ目を開けていないので現状はわからない。ただわかることが一つある。ぶつかりあうスピードが更に上昇した。それは

もう1秒間に10回はぶつかってもいいような感じでして……

目を開く。すると、そこには戦っている2人がいた。戦っているまでにはいい。ただ腕が見えない。見えないのではない。見ることが出来ない程のスピードで動いているらしい（つまり攻撃している）

再びRWから歓声が響いた。もしかしたら一番盛り上がっているのかもしれない

武器がぶつかり合う度に少しながらも風圧が飛んでくる。少しと言っても4mくらいはあるだろう。それが毎秒10回飛んでくるとして……うは

理科は出来ないんだ

そんなくだらしない事を考えていると、2人から回線が繋がれる。誰かと思うと、それは琉華と明日香だった

『ちょ、ちょっと何！ さっきの強い風は！』

回線が繋がれるなり、いきなり琉華の声。あまりの大きさにビククリしてしまった。というか、琉華のところまで風圧届いてたのか

……
多分明日香もそう言った事を言うに違いない

『真筆！ さっきの風はなんだ！？』

「あ……部長と新垣先輩が引き起こした現象とでも言うっておきます」

『は？』

「つまり……五大武器と五大武器の戦いって意味だな」

これを言ったことに後悔することになった

『はああああああああああああっ!?!』』

再び鼓膜が破けそうになる。エルフィといい、明日香と琉華とい……あまり大きな声を出さないでくれ。鼓膜が保たない……
まあ自業自得な訳だが

『え、ちょ、そ、それじゃあ……え!?! レイズ・テリリーチエと何!?! 何が戦ってるの!?! まさか“サウザント・クラウン”!?! それとも“サンクチュアリ”!?! “フォーマルハウト”!?!』

今日1日で五大武器の全ての名称がわかった。とりあえずこの中に部長の武器が存在していないことが気になる。というかエクスカリバー思いつかないんかい

「えーっと……エクスカリバー」

『……真筭。1つ聞かせて貰おう。EX……』
「Oらしい」

再び大絶叫。うるさすぎるので省略

『え、ちょ、ま、そ、え、うあ……ええっ!?!』

琉華が壊れてしまった

『まさか……まさかあのアホが……? 信じられん……そんな実力の持ち主だったとは……』

「正直俺でもビックリだよ……」

『しょ、しょの真筭くん……え、その、えっと、あ、あああ……』
「琉華。無理して喋ろうとするな。聞いている俺が耐えられない」

とりあえず琉華は落ち着かせた方が良くもしれない。というかこの話だけでここまで壊れてしまうとは思わなかった。これ以上喋らせる可哀想なので回線を切る

『……………見たい』

「は？」

『私もその戦いを見たいのだが……………持ち場を離れたらダメだろうか』『ダメに決まってるだろ。というか後でデータになるだろ。だからそれで我慢しろ』

『……………この目で、その瞬間を見たかったが……………試合中だから仕方ないか……………済まん。切る』

そして明日香との回線が切れた。そりゃこんな話を聞けば見たくはなるか。俺が明日香の立場だったら、間違いなく同じ事を言っていることだろう

そんな事はどうでもいいのだ。再び目を戻してみる。そこには……………なんだかまたスピードが上がったんじゃないかなあ、って感じで戦っている2人がいる

「くっ……………」

「どうした竜一？ 限界か？ 勝つんだろ？ だったら俺を倒して見せる」

「はははっ……………そうだな。お前を倒さないと始まらないか……………だったらこういう手もあり、だろ？」

「何？ ふっ……………そう来るか……………卑怯なヤツだ」

「何とでも言えよ……………お前を倒して次の戦いに進ませて貰う。だからこのくらいしないとお前は倒せないのかもな……………」

「……………たく、」

ガッ！

大きな音が響いて部長の言葉を聞き取れなかった。とりあえず最初の方に話していた言葉……それはもしかしてそういう意味なのだろうか……

その予想は正しかった

俺もそうだが、今まで動かずにただただその戦いを見ていた残りの敵が動き出した。総数2名。1人消えたのだろうか……？ いや、どうでもいい。新垣先輩を含めると総数3名。3対1。これだと勝ち目はないんじゃないか？ 現に部長は新垣先輩とぶつかりあっている。つまりは残り2人からの攻撃を防ぐことが出来ない
それじゃあ部長はやられるのか？ いや、部長に限ってそんなことは……

でも仮にやられてしまったら？ もう俺たちに勝ち目はない……
よな

それじゃあどうする？ 俺も戦う？ でも動くなつて言われたしな……

でもそれだと部長がやられるじゃないか。最後の希望……言い方が悪いが

だったら俺はどうする？ 戦う……しかないじゃないか
あの2人以外の2人を俺が片付けるしかないじゃないか

そう思った俺は足を前に出し、部長と新垣先輩の所から離れていく。敵に走っていく。誰もまだ気がついていないのか、順調に近づいている。そして

ドンッ！

「え？ うあつ！」

「何！？ だあつ！」

「神崎！？ 馬鹿かお前は！」

「すいません部長！ 多分こうするしかないんじゃないかと……」

部長にそう言われたが、あまり起こった様子ではなかった。どうやらあの状態だと結構厳しい感じだったのかもしれない。いやあ、良いことした

部長の顔を見る。するとそこには赤いレーザーポインタが額に向けられていた……つまり

部長が今狙われている。遠くから

「馬鹿！ 神崎！ 来るな！」

「よそ見厳禁だ！」

「くっ！」

それを見た俺は部長の下へと走り出していた。もうここからだと敵を倒すのに間に合うわけがない。だから俺がとった行動。それは

ピシユウンッ！

遠くから銃弾が発射される音が聞こえてきた。大丈夫。まだ間に合う

……倒すには遠すぎる。だから守るしかない

ドンッ！

部長から5mくらい離れたところでそんな音が聞こえた感じがしなくもない。何が起こった？ それはとっても簡単なものでして……自分の心臓を、一発の銃弾が貫いていた。ようは部長を守っていた情けないが倒れていく。その時に一瞬だけ2人の顔が映った。攻撃が止まっている2人。その時の表情を

「……神……崎……？」

「あ」

新垣先輩は何かを思い出すかのように。部長は何かを恐れるような顔でこちらを見ていた
その場に倒れ込んだ。そして部長の武器が落ちる音が聞こえてくる。ダメだろ……やられるぞ……

「神崎……？ 神崎……？ おい、おい……」

その場で部長が俺を呼ぶ。俺はもう体力がないみたいだ。返事を返すことが出来ない
……… 凄い情けない

「あ、ああ……あ、ああ、あ、ああああ、あ、あ、ああ、ああ
あ、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、あ、あ、あ、あ、あ
………うああああああああああああああああああああああ
あああああああつ……！！！！」
「まっ、マズいっ……！！」

部長が急に叫び出すと共に、新垣先輩も武器を落とす音が聞こえてきた。あれ？ 試合放棄？

この時の思考は後で殴られてもいいものだろう

「あああああああつ！！ うあ、ああつ！！ うああ……あああああああああつ！！」

「落ちて着け雄太！ くそつ……ここでフラッシュバックか……！」

フラッシュバック？ ああ……え？

そこで自分の意識が途絶えた

「あああああああああああああああああああああああつ！！……あ……！！？」

あの時の光景を思い出し発狂した雄太は足下にあるエクスカリバーを目にする。すると、彼はそれを拾う

それを見た竜一は

「くつ……主催者！ 主催者！ 早くこの試合を止めてくれ！」

RWにいる主催者たちにそう訴え始める。理由は雄太が暴走し、いつ精神が崩壊するかわからないからだ。早くしないと手遅れになる可能性がある

RWからの回線が繋がると同時に、雄太は拾い上げたエクスカリバーで竜一に襲いかかり始めた。竜一も落とした武器を拾い上げ、その攻撃を防ぐ

「早くこの試合を止める！ そうしないと雄太が……！」

『残念ながらそれは不可だ。両校の同意がないとそれは出来ない。つまり、試合は続行とする』

実行委員長からの冷酷な一言が竜一の耳に入る。それと同時にRWとの回線は途絶えてしまった

それが実行委員のすることなのか？

「あああああああああつ！　アアアアアアアアアつ！　あああああつ！」

「くっ……落ち着け雄太！……やるしかないのか……！」

「あああつ！　来斗！　来斗っ！　死ぬな！　戻ってこい！　あああああああつ！　戻るんだ！　あいつも一緒に戻るんだ！　だから！　だからああああつ！」

「もうダメか……！　くそっ！」

「死ねえ！　壊れる！　お前が……お前があああつ！　消えろ！　消えろ！！　消えろおおお！！　返せ！　来斗を返せ！　消えて来斗を返せよおっ！！」

「　許せ雄太……！」

ズサツ！

竜一の武器が雄太の胸を貫いた

「……………」

目を開く。……なんだろう。最近こんな事が多い感じがしてならない。最近は試合が終わる度に救護室のベッドの上にいることが多い　　というかそれしかないんじゃないだろうか

前回は除かれるが

もしこれからもそうなっていくのだとしたらかなり嫌になってく

る。……あれ？

そういえば試合の結果はどうなったのだろうか。あの後すぐに気絶してしまったからよく解らない状況で　あれ？　右に部長が寝てる……あ

そうだ、思い出した。俺が倒れた後に部長がおかしくなって……新垣先輩はフラッシュバックって言ってたな。もしかして俺が倒れるのを見て？　その理由は？　思い当たることはあるのだが……それが当てはまるのかどうかよくわからない
そんな事を思っていると救護室の扉が開かれる。そこにいたのは部長の友人たち　吉原先輩、瀧先輩、芥川先輩、新垣先輩、雅先輩たちだった。あれ？　これってどういう……

「やあ神崎君。県大会の時以来かな？」

「吉は　クズ、お久しぶりです」

「君は……ちょっとは年上を敬うべきだと思うのだけど……まあいい。雄太の事で話があつて来たんだ」

「へ？」

クズからそんな言葉が出てきた。部長の事で話？　それじゃあその話しかないんじゃないか？

そう思っていると、次に瀧先輩の口が開いた

「えつとな……まず聞かせて欲しい。雄太にどこまで聞いた？」

「ええ〜っと……穹のお兄さんが永久迷走したというところまでですが……その、先輩たちは元々弦巻高校の生徒だったんですよね？　それでどうして全員がバラバラの学校へ？」

「それは……その、アレだ。あの事件がきっかけで……ね？」

雅先輩が言う

「まあそれはどうでもいいんだけど……神崎君、さつき試合中」
「あ……」

新垣先輩が気まずそうに言う

「あれの事だけ……雄太はさつき神崎君が庇った所を見て、あの時の光景　来斗がやられたときの光景を思い出してしまったんだと思う。それで狂い始めて……最終的には落とした武器でメチャクチャに攻撃するだけで……その……ゴメン。試合は弦巻高校の負けだよ」

「あ……」

「それでなー、今後は雄太の目の前でそういう事を起こさないで欲しいんだよ。もしあんな状態になったら　」

「誰も止められるヤツがない。そう言いたいんだろ聡蓮？」

全員がその声を聞き、声のした方向を見してみる。するとそこにはベッドを起き上がって座っている部長の姿があった。結構目覚めるのが早かったかもしれない

「雄太……」

「ったく……こうなった以上全員にぶっちゃけるしかなくなっちゃまったじゃねえか……」

「へ？」

部長が小さく指を指す。その方向は俺たちの後ろ　つまり入り口。俺と戦敗たちで振り返ってみると、そこには弦巻高校のメンバ― + 梅花先生が立っていた。何故かそこには光久もいるわけでした

……

「光久！ 目覚めたのか！」

「……左様。父上には無理を言っ出てきたのだ……残念であったな……」

「ちょ、無理するな光久。とりあえず横になれ。健太、手を貸すぞ」
「あ、悪い」

健太と2人で光久をベッドに倒す。一応目が覚める2日前だ。結構早かったな。それはそれで嬉しい

「その、部長……」

「えっと……今まで悪かった。アホなどと呼んだりして……」

「まさかそんな過去があっただんですね」

「……申し訳ない」

女子一同が部長に対して謝り始める。だが部長は『もう別にいい』と言いながら首を横に振る。先生はただ静かにその光景を見ていた

「さて……先程も言ったとおり、俺には全てを話す義務が出来たらしい。神崎には少し話したが、全部を話す」

部長は口を開く。先程聞いた内容と同じ物だったが、その後の話も全てが語られた。その日の出来事、部長が負った心の傷、フラッシュバックの原因、戦敗たちが別の高校へ行くようになった理由、そして部長がエクスカリバーを持っている理由

エクスカリバーを持っている理由についてはこうだ。VW内で穹のお兄さんが渡した武器。それがエクスカリバーで、ようは形見のな物らしい。それを見せないように戦っていたのは周囲の反応が嫌だからという理由ではなく、それを見ながら戦っていると、段々と穹のお兄さんを思い出してしまっからだとか。よくさっきあ

んな戦い出来てたな……

更に凄い話を聞いた。部長たちは元々全国出場経験者、それも優勝をしたことがあるらしい。だからwarsの全国ランクに載れるというわけだ。ちなみに一番強いのは穹のお兄さんで、2位らしい。その次に部長が4位、芥川先輩の5位、瀧先輩の8位、新垣先輩の9位ということだ

ちなみにクズは10圏外　19位だとか。本当にそうなのかと思えるほどに弱いのだが……

それと、雅先輩は17位らしい

「はあ……なんでこんな事になっちまったんだろうな……本当はこんな事……お前らに話すつもりじゃなかったのによ……なんでだろうな……」

『部長……』

『雄太……』

部長は全てを語り終わると、目元を左手で押さえて俯いた

「お前らが知っても……どうせ何も出来るはずないのによ……そりゃ俺たちもだけだよ……」

部長がその状態のまましゃべり出す。その声は少しだけ震えていた

「あのな雄太。俺たちだってお前と同じ気持ちでいるんだよ。何も出来ないのは悔しいけど」

「だったらその分生きればいいじゃないですか」

『へ？』

「いや、確かに俺たちにどうこうできる問題じゃないことはわかっています。でも、仮に部長が出来る事と言ったら……穹のお兄さんの為に生きるしかないんじゃないですか？　なんか言い方が亡くな

つたみたいで嫌ですけど……部長は前を見ながら歩いて行けば……
それでいいじゃないですか」

……俺何言ってるんだろ。こんな事を言っただって無駄に決まってるんじゃないか？ でもよくわからないけど、気付いたらこんな言葉の口にしてた。本当に何故だろう。これは俺が部長に望んでいる事なのだろうか？

「クク……」

「雄太？」

「ククク……ハハ……」

「部長？」

気付けば部長はその状態のまま震え、微かに笑い出していた。そして笑いが収まると、部長は手を下に戻して顔を上げる。すると俺を睨み付けてきた

「ククク……神崎、年下のクセしてすげえ事言うじゃねえか。そんな言葉こいつらからは聞いた事無かつたんでビックリしちゃったよ。だがな、俺はもう取り返しのつかない事をしてんだよ。梅花から『永久迷走だ』なんて聞いた後には俺だつて泣いちゃったさ。部室で帰り道で、公園で、家で、來斗の家族の前で。涙が涸れるんじゃないかってくらい泣いたさ。そして何度も何度も、泣きながら、來斗に、來斗の両親に謝ったさ。声が涸れるんじゃないかってくらいに誤ったさ。『來斗を殺してしまつてすいませんでした』ってよ……まあ生きてるけどな。それで神崎。來斗のために生きる？ 俺が？ どうやって？ 俺が來斗を殺した罪を償えつてか？ あ？ あまり巫山戯た事を抜かすなよ？」

「……………」

「ちよつと西宮君」

「黙ってる拓人。おい神崎。次にそんな事を言えば俺はお前を確実にブチ殺すぞ？　そう簡単にそんな発言するんじゃないわねえ。わかつたら今すぐ」

『何をさせようってんですか？』

『え……？』

再び入り口の方から声が聞こえる。それは聞き覚えのある　穹の声だ。全員が振り返ってみると、先生の後ろに穹が立っていた。そして穹は救護室へと入ってきて、俺の横へと並ぶ

「おお星乃妹か。なんの用事だ？　それで『何をさせよう』ってか？　決まってるだろ？　來斗に謝れ」

部長は俺と穹を睨み付けたままそう言う

「……………」

「真箏。謝らないでいいから。ちょっとわたしが先に話しつけるから」

「え？」「ほう」

「……………西宮先輩。真箏の言うとおり、今を、お兄ちゃんの為に生きてください。それが今貴方に出来る事です。もう一度言います。お兄ちゃんの為に、ただ、平凡に　生きてください」

「……………は？　さっきも言ったハズだが……………まあいい。なんだ？　お前ら2人揃って死にたいか？　ご希望とあらば容赦なく殺すぞ？」

「雄太！」

部長はこちらに銃を向ける。この状況を見て止めない顧問がいるなんて初めて見たぞ……………ってどうでもいい。もしかしたら先生は確信しているのかもしれない。穹が部長を説得出来る事を。まあ今日の事だっけ穹がやってくれた事だし……………

「もう一度尋ねるが……俺はどうすればいいんだ？ 星乃妹」

「……お兄ちゃん……星乃來斗の為に、ただ今を生きてください」

ドンッ！

その発言と共に1発の銃弾が発砲される。その弾は穹の顔の真横を通り抜け、救護室の壁元にあつた花瓶を割る

「雄太！」

「黙ってる美里！ 俺はこいつら……このクソ生意気な後輩を殺さないと駄目みたいだ。大人しくそこで見てろ！」

「部長……」

「おい神崎。今こんな状況になつてまで意見を変えないって訳じゃないだろうな？ 変わっただろ？ だから今すぐ來斗に」

「いい加減にしてください！」

「……エルフィ？」

後ろからエルフィの声が聞こえたと思うと、こちらへ歩み寄ってきて穹と同じく俺の横へと並び立つ

「さつきから巫山戯るなだ、殺すだ……物騒な事を言わないでください！」

「エストラントか……なんだ？ お前まで神崎たちと同じ事を言うのか？」

部長はそう言うと、エルフィに銃を向ける

「はい。部長、わたしからも言います。星乃先輩の為に生きてください。あなたにはそれしか出来ません」

ドンッ！

「……っ！」

「エルファイ！」

今度は銃弾が完全に外れる。外した訳ではなく、その銃弾はエルファイの頬を掠った。そしてその部分から血が流れ出し、エルファイはその部分を押さえながら再び部長を向く。

「……次は目を撃ち抜くからな」

「やれるものならどうぞ。その前に説得しきります……部長。あなたはこれからどうしたいんですか？」

「……」

「もしかして見つけていない状態なんじゃないですか？ 少なくともわたしはそう思います。星乃先輩を動けなくしたその罪をどう償うか解らない状況なんですよ。それで神崎さんと穹さんが言った事が理解できないから八つ当たりしているだけですよ。」

「はっ。そんなハズあるわけねえじゃねえか。理解できないってどこのガキだ？ あまり舐めた口聞くと目じゃなくて心臓を撃つぞ？」

そう脅されても尚エルファイは口を続ける

「だったら部長。あなたはどうしようとしていたんですか？」

「……っ」

そこで部長が言葉に詰まった

「やっぱり……そうなんです」

「けっ……ああそうさ。俺にはまだ來斗の為にどうすればいいのか

わかっていないさ。そうだよ八つ当たりなんだよ。こうやって俺がすぐに答えを導けないだけなのに、こうやってすぐに答えを出す事が出来る神崎と星乃妹に当たってるだけだよ。だがその答えは確実に間違いだ。多分お前らも間違いだって事は気付いてるんだろ？俺がただただ生きるだけで来斗が満足なハズ無いつて事くらいわかってるんだろ？」

「……まだ気付いてないんですね」

「あ？」

「……神崎さんと穹さんは……星乃先輩の為に生きると言いました。多分その意味を本当にわかってないみたいですね」

「ほう？」

「……部長は罪を償って許しを得ようとしています。ですが、星野先輩はそれを望んでいないという事です。そうですね穹さん？」

「その通りです」

「抜かせ。来斗はもう動けないんだ。そんな事をどうやって知ってたんだ。嘘は良くないぞ」

「……西宮。お前はどれだけ馬鹿な人間なんだ？」

「何？」

今度は今まで何も喋らず、動かずにいた先生が動く。それを見た先輩たちも動き始めた

「西宮。一つ聞かせて貰うが……今の星乃はお前に何を望んでいると思う？」

先生が尋ねる

「決まってるじゃねえか。俺が来斗を動けなくした罪を償って欲しい。違うか？」

「大いに間違ってるな雄太」

「なんだと？」

今度は瀧先輩が口を開き、次に吉原先輩が口を開く

「西宮君は忘れたのかい？ 星乃君がどんな性格の持ち主だったかを」

「なっ……！」

その発言で部長がハツとなる

「やっと思い出したみたいだな……今ならわかるんじゃないか？ 来斗がお前にそんな事を望んでいないって。そしてどうやっていて欲しいかを」

「……そんな……そんなハズないさ……来斗はアレでも裏では……」
「雄太。来斗と一番付き合いの長いお前が全部を知らなくてどうするんだ？」

「……嘘だ。来斗が俺にそんな軽い事を望むはずが無い……絶対にあいつは俺に罪を償えと……」

「そろそろいい加減にしてくださいよ部長」

「……あとは任せたよ神崎君」

「はい、任せてください。部長。言わせていただきますが……その性格、どうにかした方がいいですよ？」

「……え」

あたりにいた先輩と穹とエルフィと先生が頷く

「話を聞いていてわかりました。部長。部長は何も考えずに突っ走り過ぎです。だからあんな事故を招いたんだ。それくらい気付いてくださいよ……」

「あ……」

「それに光久の時だつてそうだ。俺は躊躇いがあつて攻撃が出来なかつた。それは俺が光久を仲間だと認識しているから。ですが部長、あなたは違つた。光久の時は、もう何も考えずに光久を撃つ事だけを考へていた。そして事故の時、中枢を倒す事以外何も考へていませんでしたよね？ というか、そもそも敵と認識した者は倒すまで気が済まない性格……そんな感じの性格だから招いた事だ。だから今だつてこんな話に……部長、性格悪すぎです」

「……」
「穹、パス」

「ほい、受け取つた。……もう一度言わせていただきます。わたしの兄、星乃來斗はあなたに罪を償つて欲しい望んでおりません。なので……西宮雄太、あなたは今を生きていてください。それ以外の事は考へなくていい。わたしも、両親も、あなたを許しています」
「……あ……ああ……」

部長は持つていた銃を床に落とし、震えている両手を顔の前へと運んでくる

「俺は……気付いてなかつたのか……？ 來斗の気持ちに……そんな事を望んでいないと……？」

「ええ、そうです」

「クク……ハハ……傑作だなあ……駄目だ。笑いが止まらん……」

部長はまた先程と同じように左手だけで目元を隠す。そして

「……なんて最低な人間だよ……俺つてヤツあ……」

左手で目を隠した状態で部長は上を向く。今発せられた声は微妙に震えていた。そして、部長の左手の中から一筋の水滴がこぼれ落ち、そのまま床へと落下していった

5分後

「落ち着いたか雄太？」

「ああ……」

「それじゃあ俺たちは帰るけど……」

「ああ、帰れ帰れ」

「全く……折角心配して来てあげたというのにその態度かい？ ま、それも西宮君らしひっ！」

「黙って出て行け」

「ハイハイ」

「んじゃ」

部長が泣きやむと（本人は泣いてないと主張していたが）、先輩たちは救護室から出て行き、帰っていった。残ったのは弦巻高校のメンバーと穹だけ

「まったく……まさかお前らにあんな事を言われるとは思わなかったな」

「はは……正直俺でも何であんな事を言っただのかわかりませんけどね」

「え？ 真箒はただただ喋ってた的なヤツ？」

「あ、ああ……そんなところか？」

「……まあ、よく神崎さんも言いましたよね」

「正直言われすぎた気がするな……さて、これからは神崎とエストラントには要注意しないと駄目かもな」

「……どういう意味です？」

「冗談だ。さてと……俺たちもそろそろ帰るわけだが　って星乃

妹。お前は帰れ」

「わかつてますよー。っていうかその『星乃妹』ってやめてください。そのまま星乃でもいいですよ」

「あーはいはい。じゃ、帰れ星乃妹」

「む……わかりましたよ。それじゃあ……また」

「あ、ああ……」

「穹さん、今度買い物とか行きませんか？」

「ん？ そだね。見当しておくよ。それじゃ」

「はい」

そして穹も救護室を出て行き、残ったのは弦巻メンバーだけだ

「ふう……アレがいるとどうも居づらい……まあいいか。……若人

たちよ、関東大会お疲れだったな。もうこれで試合が終わり、全国大会への夢も消えたわけだが……来年頑張れ」

「部長が出ればいいだけの話ですけどね」

「黙れ神崎。さて帰るぞ　の前にだが、明智だ。まずは謝らせてくれ。済まなかったな」

『なんと』

「何故謝るのだ雄太殿。拙者には状況が理解できぬ故……」

「ま、色々あつてな。よし、帰るぞ」

全員で救護室を出る

「それじゃあ……ここに来るのはおそらく来年になる。それまでに……全国に出られる力をつけておけよ？ それじゃあ行くぞ」

全員で歩き出し、関東大会の会場を後にする。俺は会場の出口で1人立ち止まり、後ろを振り返る

なんだかねで4ヶ月になり、ここまで熱中するようになってし

まった。それはそれで良かった気もするのだが……。都北大会と県大会を勝ち上がり、関東大会へ。だが、それが今日終わった。つまりは全国大会出場の夢はここで終わった

いや、ここから始まったのかもしれない。さっき部長が言っていたとおり、来年にもこのチャンスはあるんだ。だから今、この場で始まったんだ

前を見る。そこに映ったのは、1足先に行くwars部のメンバーたち。この7人で来年の全国を目指せばいいんだ。だから終わったんじゃない。むしろ始まった。俺たちの戦いが。warsが

もう1度後ろを振り返り、会場入り口を見る

「来年こそ……」

1拍おいてから次の言葉を繰り返した。独り言みたいでちょっと嫌だったが

「全国に出場する」

1人でそう会場に向けて呟いた。前を見る

そして俺は皆のいる元へ決意を胸にし、1歩、足を前に、前に出
していった

#32 悲しみの果てに（後書き）

予告通りChapter 4終了です
相変わらずひでー作品だよ

さてさて来週のサ エさん……違いますね。次回ですね
もちろんChapter 5に突入……と言いたいところですがね

もしかしたら。本当にもしかしたらですよ？

Ex・Chapter突入かもしれません

それはこの作者の気分次第で…… ちよ

まあ……その内わかりますね

では、また次回会いましょう！

期待していない人が多いと思いますが！

EX1-1 とある噂(前書き)

……予告通りEx・Chapter突入しました

全3話で予定しております。ちなみに章タイトル通り、文化祭です
ちなみにエルフィ視点メインですね

では、相変わらず酷い文ですが、よろしく願いますorz

EX1-1 とある噂

2096年5月16日。wars都北大大会を4位入賞という成績を残して終了した2日後の朝、HRが始まる20分くらい前の事

「文化祭……ですか？」

わたしはクラスメイトの皆さんと話をしていた。会話の内容は最初から段々ずれてきて、今に至る。ちなみに最初に話していた内容は昨日のテレビの話。そこから段々とずれてきて、今の話。つまり今の発言の文化祭の話に繋がる

「そそ。もうあと1週間と少しで始まるじゃない？ でさあ……我が1年4組は何を出店すべきかなーってアンケート取ってるんだけど、なんかいい案無い？」

「そうですねえ……って、それこの前から結構聞いてますよね？ なんでこの時期になって決まってないんですか？」

そうわたしが聞き返すと、今話していた女子（笹原さん）が親指を立ててある方向へクイクイと動かす。その先には机の上で突っ伏している、クラスメイト兼部活仲間兼クラス委員長である佐々木さんがいた。それを見てわたしは一瞬で理解した

「ああ……なるほど。決まらないわけですね。というか聞かないわけですね……」

「そゆこと。だから1年4組のもう1人の副委員長であるこのアタ

シが聞き回ってる訳よ……聞いてよエルフィ、昨日は放課後15人に聞き回って収穫ナシよ？ 嫌になるわよねえ……」

「あはは……」

その言葉に苦笑いしてしまった

「でまあ……エルフィ、1年4組は何をすべきだと思ってる？」

笹原さんがわたしの机にだらんとする。その姿を見ながらわたしは考えてみた。文化祭で何を出すべきなのか。そしてある答えが導き出される

「やっぱり……無難に喫茶店がいいんじゃないですか？」

「だよねえ……答えてくれる人はみんな喫茶店って言うし……それでもいいのかなあ……」

「でもそうになると……」

「どうい品を出すかなのよあ……」

多分こうやって飲食店を出すクラスは何かと悩むに違いない。いや、もしかしたらこのクラスだけ？ っていう可能性もあり得る。でも喫茶店って言ったら基本はお茶だろう。でもなんのお茶にするか あ

自分が何かに気がついた顔をしているのに気がついたのか、笹原さんがこちらに目を向ける

「笹原さん……よかったらお茶は全部提供しましょうか？」

「ほえ？ それってどういう意味？」

その言葉を発したことに自分でも後悔した。でも後には退けないだろう。だから

「その……笹原さん。このことは他言無用に願いたいんですが……
そうすればお茶だけは提供します」

「……よし、聞こつ」

机の上につ伏した体勢でいる笹原さんに耳打ちをする。その言葉
を聞いた笹原さんは驚きを隠せない表情でこちらを見た

「え、マジで？」

「はい……だから本当に言わないでくださいよ？ 多分この学校で
知ってるのは教師の皆さんだけでしようから……」

「……わかった。約束する。よし、まあこれで決まったわけだ、
あとはLHR中に伝えて残りの事を決めて、と」

笹原さんはポケットからメモノートを取り出し、文字を書き連ね
ていった。おそらく今日の予定に違いない。使っているのが電子メ
モなので裏からでも大分透けて見えるのだが、こちらから見える1
面にはビッシリと文字が書かれていた。結構使っているに違いない、
と考えてしまう

そしてメモを閉じてしまい、こちらを向く

「んじゃありがとエルフィ。え〜と神崎は……まだいないな」

「？ 神崎さんがどうかしたんですか？」

「……その様子だと知らぬみたいだねえ……いいだろう、秘密を教
えて貰ったんだあ、こちらも教えちやる」

すると笹原さんはわたしの耳に口を近づけてきて

「エルフィさ、神崎の事好きでしょ？」

「うえっ!?! き、きゅきゅきゅ急に何を言い出すんですか!」

教室全体に響く大声で叫んでしまい、クラス全体の視線がわたしに注がれる。それに気がついたわたしは1つ咳払いをしてから笹原さんに向き直る。耳を閉じないでください。自業自得です

「で、なんでそんな話になるんですか？　というか何を根拠に言ってるんですか？」

「何をつて……この1ヶ月見てれば誰だって気がつくって……言っておくけど1年4組の女子は全員知ってるわよ？」

「だからなんですかあつ！！」

今度は机に手を突いて席を立ち上がってそう叫んでしまった。再びクラス全体の視線が集まり、自分でも顔が赤くなっていくのがわかる。そして何事も無かったかのように席に座る

「こ、コホン。それで……まあいいです。もうバレてるんだったら仕方ないです。その代わりに男子の皆さんには」

「男子も3割方が気付いてるけどね」

「わたしはどうすればいいんですかっ!？」

ガンッ!

思いつきり机に頭を打ち付けてしまった。あまりのオーバリアクションだったので、クラスどころか廊下にいた人たちまでこちらを見ている。もうこの顔を上げたく無いとすら思ってしまう　が、そうしては駄目だと思つので顔を上げる

「大丈夫エルフィ？」

「……大丈夫です。続けてください」

「え？　あ、ああうん。ま、それでさ」

再び耳打ちされる

「文化祭終了後の後夜祭で一緒にいた男女は結ばれるらしいよ？」
「……え」

一瞬だけ頭が回らなくなった。が、その後一瞬で全てを理解した
「そ、そそそれはマジ話ですかっ!？」

再び (以下略)

「そろそろ落ち着いて……いやしっかし……いつもパソコン開いて
るエルフィなら知ってると思っただけだな……ま、これは嘘なの
か真なのかは解明されてないけどね。とりあえず噂だよ噂。ま、そ
れだけね。んじゃ」

そして笹原さんが席に戻っていく。すると入れ替わりで神崎さん
がやってきて真後ろの席に座る

「おっすエルフィ……ってどうした。随分と顔赤いんだが……熱で
もある？」

「……」
「おい」
「……」

頭の中が文化祭の事で一杯だった。もし。もし仮に後夜祭で神崎
さんと一緒に過ごして、その噂が本当だとしたら……結ばれたら？
そのままめでたくゴールイン？ それで30までに子供を3人……
いやいやいや、まだここまで想像は飛躍しないでいい。後夜祭だ後

夜祭。噂が本当だとしてそれで……き、キヌまで行っちゃったり……

「はうあ」

「ちょ、エルファイ!? おい保健委員誰だ! エルファイが! エルファイが倒れたっつ!」

その時保険委員はいなかったらしく、最終的に神崎さんの肩を借りて保健室へと連れて行かれることとなり、1時間目の授業だけは受けなかった

「エル、朝倒れたというのは本当か?」

「はい……とりあえず今はもう大丈夫です」

「明日香……知ってるかはわからないけどさ。エル、真箏くん保健室まで運んでいって貰ったらしいよ。それもお姫様抱っこだとか」「ちよつと何を言い出すんですか藤堂さん!」

「ほう……その辺の話をもっと詳しく聞かせてくれエル」

「違います! その話はかなり間違ってます! お姫様抱っこなんてして貰ってません! というか誰ですかそんな変な噂を流したのは!」

最終的にその犯人は見つかることは無かったが、2人の誤解を解くことが出来た。……他のみんなの誤解を解くのが大変だったけど

そんなこんなで昼休み。今日は神崎さんたち男子グループは他の男子と弁当を食べるということになったので、わたしたちwars部女子メンバーは人数を増やさずに4人で昼食を摂っていた。ちな

みに場所は5組教室　藤堂さんと近藤さんの教室だ
ついこの前から藤堂さんまでもが敵に回ってしまい、現在の敵は
明日香さんと藤堂さんの2人だ。結構な強敵だ。負けるわけにはい
かないけど……

「……わたしにはどうしても神崎の良さがわからない」

それとは一転、近藤さんは神崎さんの事はどうでもいいみたいで、
一応敵ではない。敵に回ったら回ったで強敵になる可能性が大だが

全員で食を進める。すると藤堂さんが口を開き

「そっぴや文化祭まであと少しだよねー」

「ぐぶっ！？」

「ちよっ、エル！？　だ、大丈夫！？」

思わず口に含んでいた食べ物を吹き出してしまった。量が少なかつたので助かった。それを見た近藤さんがコップにお茶を注いで渡してくれる

「あ、ありがとうございます　ゲホゲホ」

「大丈夫かエル？　なんで“文化祭”という単語に過剰反応」

「プーッ！」

「……エルフィの反応が異常……！」

今度は口に含みかけたお茶を吹き出してしまう。どうやら今のわたしは“文化祭”という単語に敏感になっているらしい。原因はおそらく……というか確定。アレだ。あの“噂”

「……しばらくエルの目の前では発言禁止だな」

「うん……」

「……了解」

「すみません……なんだか自分でも知らないうちに反応するようになってしまったらしいです……」

少しだけ頭を傾けて謝る

「いやいいんだけど……ところで、エルはなんでその単語に反応するようになったわけ？」

「いえ……特に大した理由は……」

「ほう。隠し事か。まあ確かに知られてはいけない秘密を誰かしら持っている訳だが……気になって仕方がない。言っただエル」

「お断りします。特に明日香さんには」

「私限定なのか!？」

1番の強敵に塩を送ることは無い。というか送ってたまるか

「それじゃあボクには教えてくれるの?」

「いえ、お断りさせていただきます」

「ふ〜ん……そっか……それじゃあボクも文化祭について色々調べてみるとうしようかなあ」

それなら……いや、問題アリアリかもしれない。でもその情報……という噂に気がつかなければいいんだ。まだわたしに勝機はある

というか、この2人はあの“噂”について知らなかったのか……

「……………」

近藤さんは何かを知っているって感じでしたしを見ていたが

「まあいい。とりあえず私もこれから調べるとしよう。それじゃあどうする？ 授業まで時間がある訳なのだが」

「それじゃあトランプしようよ。結構暇つぶせるよ？」

「……賛成」

「それじゃあやりましょうか」

「おっけー。んじゃエルが負けたら文化祭についての情報を教えて貰うからね？」

「ぶふっ！ それじゃあ私が不利じゃないですか！」

「冗談だよ冗談。それじゃあやろうか」

「……その割には目が本気でしたけど……」

この後5時間目の始まる5分前のチャイムが鳴るまでトランプと言つ名の戦いは続いた。最終的に負けることが無く、それを思えば賭けてもよかつたのかもしれないと思つてしまった

そして時は流れ、放課後に なる直前。最後のLHRの時間で

「1年4組は喫茶店をやりたいと思います」

普通なら佐々木さんが出るであろう場所（黒板前）に笹原さんが立ち、今日の朝の事をクラスの全員に伝える。もう1人の副委員長である神崎さんは後ろでただただその様子を見ているようだった

『何？ 最終的に喫茶店になつたん？』

『うげ、面倒くせ……』

『ハイ！ この俺が男子の声を代弁して、メイド喫茶にすべきだと言います！』

『『『黙れこの変態がっ！！！！』』』

……教室内ではこんな話になっていた。が

「ほら静まれ静まれ。あのアテにならない委員長、佐々木の代わりに笹原が案を出したんだ。それにお前らだってマトモな案を出していなかったんだろ？ だったら文句を言うなアホ共が」

「先生！ アテにならないとはなんですか、アテにならないとは！ これでも僕は人には見えないところで地道に努力を積み重ねてですすね……」

「それじゃあ佐々木。お前は文化祭の議題の時に何して過ごしてた？」

「もちろん文化祭の事をですすね……」

「それじゃあ言ってみろ」

「それは……喫茶て（ガスッ）」

佐々木さんの額にチョークが当たり、佐々木さんはそのまま机の上に倒れていった。ちなみに当たったチョークは粉々に粉碎されていた

とりあえず先生がその場を沈めたことにより、クラス全体が静かになる。そして笹原さんが口を開く

「まあ喫茶店にしたのはいいんですが……何を出すかを今から決めたいと思います」

『なんだよー』

『そこまで決まってるなら考えておけよー』

『そーだそーだ』

至る所から批判の声（10割が男子）。すると、笹原さんが作つたような笑顔を浮かべ

「あ、今文句言ったヤツ、先生に頼んでこの前の佐々木と同じ事させるわよ？」

「おい笹原。何故俺に　まあいいだろう」

『『』申し訳ございませんでした』』

この前の佐々木さんと言えば、あれだ。梅花先生に教室からグラウンドに投げ飛ばされたというあの事件（？）だ。確かにあれは…怖い。見ているこつちも

「で。お茶はあるルートから入手できるからいいんだけど、その他をどうするかなのよ。で、何かいい案ある？　ほら男子。てか佐々木。委員長なんだからアンタが答える！」

「……………」

「……先生」

「え？　早速か？」

その質問にコクリと頷く笹原さん。それを見た先生が佐々木さんの元へと歩み寄っていき、つかみ上げたところで笹原さんが指示を出した。ちなみに佐々木さんはまだ寝て（気絶して）いる

「お前ら、机を少し離してくれ。巻き込むぞ」

その指示で先生の周辺の机が離れていく。そして

「起きろ佐々木いいいいっ！！」

「じぶるあっ！！」

見事なシャーマンスーププレックス。初めてリアルで見た気がする。というか初めてだ

なんとなく思う。逆効果なのでは……？

「おお起きたか佐々木。ほれ、笹原が呼んでるぞ」

「いつつ……今何が起こったんですか先生？ 一瞬だけ世界が反転して見えたんですが？」

「夢でも見てたんだらう？」

あれを『痛い』で済ませる佐々木さんの身体の構造が気になる。

それと、あの攻撃を受けて気絶するのではなく、本当に目覚めるとはどういうことなのだろうか……

そして目覚めた佐々木さんが笹原さんの元へと近づいていく

「で？ 僕にどーしろと？」

「簡単よ。出品するもの考えなさい。アンタ委員長でしょ？」

「急にそう言われても思い浮かぶわけ」

「もっかい頼むわよ」

「一生懸命考えさせていただきます」

なんとなく思う。笹原さんは佐々木さんの扱い方が上手い気がする

「そだなあ……この際ラーム」

「殺すわよ？」

「……普通にお菓子等を出せばよろしいのでは……」

「誰が作るのよ」

「もちろん市は」

「墮とすわよ？」

「……料理が出来る人が作るべきかと」

笹原さんの笑顔が非常に怖い

「さてまあ、この腐って使い物にならないクズ委員長が明日雪でも降るんじゃないかってくらいに非常に珍しくマトモなようでマトモでない駄意見を出してくれたので、この案を受け入れてくれる方は？」

「笹原。僕泣きたいんだが？」

男子は全員が挙手。多分逆らえないとかそんな感じの所だろう。

一方女子は手を挙げているのが5人くらいしかいない。多分料理に自信がある人たちなのかもしれない

……というか佐々木さんの発言をスルーしてる……

「ふむ……それじゃあ手を挙げた女子6人はお菓子作りを任せるけど……その他男子は力仕事、ウェイター、客引き等々してもらおうから。もし逆らうようなことがあったら……屋上から突き落とすわよ？」

笹原さんのトドメの一言により頷く男子一同。確かにこれは逆らえない

「さて、やっとこ決定したことだし……あ、そうそう、もう1つあったわ。クラスでのステージ発表どうする？　まずはこのどうしようもないクズ委員長に意見を聞いてみましょう。では、クズ委員長こと佐々木健太、ヨロシク」

「……ロミオとジュリエット」

「はい他の者」

「なんだよ！　聞いておいてスルーかよ！　なんの為に聞いたんだよ！　何？　これイジメ！？　って、笹原無視するな……！」

「というわけでこの意見に賛同する者は？」

最終的に

「1年4組のステージ発表は“ロミオとジュリエット”に決まりました。じゃ、役作りね。ロミオは佐々木がやりなさい」

「何故そうなる」

「言い出しつぺよ」

「是非ここは真箏を推薦する」

「何故そうなる」

「副委員長だから」

「理由になつてな」

「ああ、それもアリね……でも……はい、やりたい人挙手」

「結局そうなるのか!？」

そして……

「なんでアタシがジュリエットでロミオが佐々木なのよ……」

こんな感じになつてしまった。最終的に委員長だという理由で佐々木さんがロミオ役、女子でのじゃんけんて負けたという理由で笹原さんがジュリエットということになった

その笹原さんは……

「……マジ最悪だわ」

「まあまあ。仕方ないじゃないか」

「黙りなさい。ベランダから蹴落とすわよ? ……はあ、こうなつた以上やるしかないわ。それじゃあ野郎共! 明日から練習開始するぞお!」

『お、おのおお?』

「佐々木。こいつらに喝を入れて頂戴。失敗したらタダじゃおかな

いわよ」

「……野郎共！ 行くぞー！」

『……………』

「うおおい！？」

「はあ……まあいいわ。それじゃあ今日のLHRは終わり。それじやあ後は先生、お願いします」

そしてLHRは終わり、先生の話が始まる。それが終わると放課後になり、部室へと向かう。のだが、みんなクラスの準備が始まったらしく部室には4組のメンバー以外誰も来なかったので、今日は帰ることになった

その帰り道。わたしは決めた

後夜祭で頑張ってみようかな？ なんて……

EX1-1 とある噂（後書き）

……やっぱり最後には適当になってしまおうという……
申し訳ございませんでしたorz

EX1-2 草碧祭1日目(前書き)

文化祭のネーミングセンスねええええ
WWW

EX1-2 草碧祭1日目

文化祭で1年4組が何をするのが決まり、練習に励む放課後。

ちなみに今日は5月24日の木曜日。つまり明日からの2日間が文化祭。草碧祭くさひくさいということだ。一応確認しておこう。1年4組は喫茶店をやることになり、ステージ発表は健太が主役という大惨事の“ロミオとジュリエット”略して“ロミジュリ”。健太がロミオ役なので本当に何が起るのかわからない。まあ笹原さんがジュリエット役だし何とか健太をリードしてくれればいいのだが……そう上手くいくわけではないか

ちなみに俺の役は“農民C”だ。2回くらいしか出番がない。が、台詞が長かったりする。今それを覚えるのに一生懸命になっているところだ

そしてエルフィの役は“農民D”。俺と同じで出番が少ない。俺と違うと言えば台詞が殆ど無いし、長くない。俺がそっちにすればよかったかなーなんて思ったりもするが、農民D役は女子がやるということになっていたのでそれはそれで仕方がない

一方他のクラス

1年2組 つまり明日香と光久のクラスも喫茶店をやるとか言っていた。なんでもクラスの副委員長同士が対立してどちらが多く稼げるかとか張り合ってしまったらしい。笹原さんにそんな一面があったのかと思う。そしてステージ発表は踊りをするとか。内容はまだ聞かされていない。つまり当日のお楽しみなのだろう

1年5組 つまり琉華と近藤さんのクラスはお化け屋敷をやるらしい。もちろん昨日から5組への進入は不可になっており、それ

に加え昨日から5組の人たちを1人も見かけていないのだ。多分中では凄いことになっていくんだろーなんても思ったりする。ちなみに電話も繋がらない。そしてステージ発表は、4組と同じく劇をするらしい。……練習できているのかが心配だ。ちなみに“シンデレラ”だそうだ

『ちょっと佐々木！ 今の台詞違うわよ！』

『うっさいな！ アドリブは重要だろ！？ それくらいわかれよ！』

『黙りなさい！ その感覚はあなただけよ！ とにかく台本通りやりなさい！ 突き落とすわよ！』

『言っただな！？ それじゃあこの台本通りやつてもらっぞ！？』

『上等よ……ってあー！ 今のナシ！ 撤回！ 忘れなさいこの変態！』

『その攻撃、見切った！』

喧嘩をするほどなんとやら。周りから見たらそんな風にしか見えない

とりあえず台本に目を通してみる。もちろん原作を多少アレンジしてあるので（原作を知らんが）、動きが加えられたり少なくされたりしているわけだ。そして台本を見ている内にある場面が目に入る。ああ、そういうことか

笹原さんがさっきの台詞を撤回した理由がよくわかった。台本に目を通していくと、脚本のイタズラか何かは知らないが、『ロミオとジュリエットがキスをする』という場面があった。でもここは角度調整で誤魔化す場所だが、『本気になったらマジでどーぞ』と書かれていた。健太はマジで言ったに違いない。あの変態め

そんなこんなで練習を再開する

『だから佐々木！ アドリブ入れないでよ！ こっちが狂うじゃないの！』

『さつきも言っただろ、アドリブは重要だって！ しかも取り消したんだろ！？ だったらいいじゃないか！』

『うっさいわね！ シバくわよ！？』

『見切った！』

『くっ……とにかく台本通りやりなさい！』

『はいはい……』

さつきからあの2人の声はかなり大きい。というかあの2人の声しか聞こえない気がする。まあ気にせず自分の役割を

「なあ神崎ー。ちょっとこっち手伝ってくれねえか？ 人手が少し足りなくなってるさー」

「あ。あ、おっけー。で？ 俺にどーしろと？」

「じゃあ社会科室にあるテーブルを取りに行くぞ」

「了解」

そして俺は台本をその場に置き、社会科室へ向かうため教室を出て行った

『さーさーきー…… ちょっといい加減にしてくれる！？ もうアンタこれで16回目よ！？ 何度言ったらわかるのよ！』

『僕が物覚え悪いのは知ってるだろ！？ それを知っててなお言うか！』

『黙りなさい！ アンタがバカだから駄目なのよ！ 少しは勉強しなさいよこのバカあ！』

『バカバカ言うな！ だったら勉強教えてくれよ！ お前優秀だろ！』

『か、勘違いしないですよ？ これは佐々木に制裁を下すために買ったんだから。他意は別にないからね』

まさか笹原さんもT E M M……しかもw a r s用武器を持っているとは思わなかった。ちなみに今の攻撃は佐々木さんの鳩尾にクリンヒットし、佐々木さんは腹を押さえながら沈んでいった

ちなみにw a r s用武器で攻撃しても、死に至らなければ犯罪ではない

視線を台本へ戻し、台詞の練習をする。3回しか出ないし台詞も2回で短めなのでそこまで苦は無い。佐々木さんが心配になったりもするが

ところで“他意”とはなんの事だったのだろうか。聞いたら怒られそうな気がしたので聞かないことにした

『さて……やっとこの使えない委員長も台詞を覚えてきたみたいなので、一旦ここで通してみるわ。今の内にトイレ行ってきたい人は行ってきて。5分後に開始するわよ』

そして笹原さんがそう言うと、クラス全体の動きが一旦止まり、ところどころから『あー疲れた』『通しかよー面倒くせー』『トイレにでも籠もってようかな……』等々。ちなみに全部男子からの声

『そんな事を言うならアレみたいになるけどいいかしら？』

『『申し訳ございませんでした』』

笹原さん恐るべし

そして時間が経過し……

「はい、それじゃあ通し始めるけど……あれ？ 神崎と滋賀崎と杉山は？」

「ん？ あーそういや社会科室にテーブル取りに行っただっさり戻ってこないな。見てくるか？」

「あ……じゃあお願いするわ」

そして教室から竹内さんが出て行った。その3分後

「遅い……社会科室って2分で行って戻れるペースよね？ 手伝っているならともかくこれは遅いわね……」

「それじゃあ俺が行ってくるか？」

「……2分で戻ってきて」

そして教室から宮本さんが出て行った。その3分後

「……1分過ぎたわね」

「それじゃあ俺が」

「佐々木。携帯貸しなさい。それと橋川、あなた今サボろうとしてた？」

「滅相もない」

「なんだ？ 浮気チエツクか？」

「なっつー！！ そ、そんな訳ないでしょ！ バツカじゃないの！？ 死んだら！？ 早く貸しなさい！ それか神崎に連絡入れなさい！」

「……エルぽんに任せるよ。生憎今日は携帯を忘れてしまい……」
「ちよっ、さつき昼休みいじって あ、うん。エルフィに任せるわ」

「え、わ、私ですか！？」

急に振られたのでビックリした。なんでわたしになるのか……

「え、えっと……電話すればいいんですか？」

「こそ。神崎に」

今神崎さんの名前の部分がやけに強調された気がする

「え、えっと……それじゃあ掛けます」

p l l l l l p l l l l l t - t -

「……出ませんね」

すると、笹原さんがわたしに近づいてきて、わたしだけに聞こえる声で話しかけてきた

「……わかった。エルフィ、社会科室へ行って。一応だけど予想できたわ……」

「へ……ええっ！？ わたしが行くんですか！？ 説得力のないこのわたしがですか！？」

「大丈夫大丈夫。これが作戦メモね。完璧に遂行すること。OK？」

「OKもなにも………わかりました。行けばいいんですよ」

「よし、それじゃあ佐々木。ちょっと行ってきて」

「はいはい……」

そして佐々木さんが教室を出る。その後3分後にわたしが教室を出て行った

社会科室は本館の1階に存在していて、階段を下りた目の前にある。さつき笹原さんが言ったとおり、往復には2分かからない場所だ。それなのに遅い理由、何かあったのかもしれない

というか笹原さんはわかっててわたしに行かせたんだと思う

そして階段の踊り場、目の前には社会科室の扉がある。その扉は閉じていて、中が確認できない状態になっていた。そこでさつき渡されたメモに目を通す

『社会科室の目の前の踊り場に着いたら社会科室の様子を窺うこと』と書かれていた

その指示通り、階段の踊り場から社会科室の様子を窺う。ドアは開く様子もなく、誰も出てくる気配すらない。いるのかいないのか解らない状況だ

とりあえず順調なので、次の指示を読んでみる。『誰も出てこないことを確認したら気付かれないよう音を立てずに社会科室の後ろ扉から中を確認。その後この地図通りに進むこと』と書かれて
つて地図？

メモの下には校内であろう地図が綺麗に書かれていた。それはもう天井裏の地図みたいで……

「まさか……」

とりあえず指示通りに気付かれないように後ろの扉に近づいていく。なんとか気付かれないように到着すると、扉の窓から中を覗いてみる。が、何故だか知らないが暗幕が張られていて中が確認できない状況になっていた。とりあえず次の指示通り、地図の始まりの場所へと向かう。そこは隣の隣の部屋、第2会議室だった。恐る恐る扉を開けてみると、誰もいない空間があった

もう1度地図を確認する。情報によると……

「えっと……」ロッカーの上、扉から6枚目のパネルを押すと人が

2人ほど入れるスペースがある。そこを社会科室方面に向かうと、白でマークがしてある。そこを思いつきり叩くこと。by笹原』で
すか……やるしかないですね……」

ロッカーの上に乗る。そして今来た扉から6枚目のパネルを押し
てみる。すると、本当に人が入れるスペースが存在していた。ジャ
ンプしてなんとか入れたので良かった

中に入ったところでパネルを閉じる。真っ暗なので何も見えない。
携帯電話のライトをつけてその方向へと向かっていく。ここは掃除
されているのか、蜘蛛の巣とかが1つも無い。順調に進んでいき、
指示にあった白いマークが……

『ゴメン。許して』

「何を伝えたいんですか……」

おそらくそのマークは教室でTEMMを使って作った物だろう。

とりあえずこの言葉の意味を今は理解できなかった

とりあえずもう1度指示を確認する。確認し終わると、深呼吸、
そして意を決した

思い切りそのマークを叩く

バコッ！

「ほえっ!?!」

「……………え……………?」「……………」

マークを思い切り叩くと急に床(天井)が消え去って、そのまま
下へと落下し始める。ここは社会科室、さつき教室を出て行った男
子は全員この場にいた。そして

「ひゃあっ！」
「……………」

地面へと落下する。その場には丁度クッションが敷かれていて、大した痛みなどは無かった。そして立ち上がる

「いてて…………も、もう…………皆さん何やってたんで…………すか…………？」

今自分の目に映っているもの。それは、神崎さん、佐々木さん、杉山さん、滋賀崎さん、竹内さん、宮本さんの6人。そして1台のテレビとDVDレコーダー

そのテレビに映っていた映像。それは

「えっと…………その…………」

「…………あ、ヤバッ！ とっ、止める！」

「え、えっとエルフィ！ こ、これはだな！」

大人の男女があんなことやこんなことをしている映像、俗に言うAVだった

「あ、あ、あ…………」

「頼むエルフィ！ ここで見たことは誰にも」

「きゃああああああああああああっ！！」

…………いくら自分が同じような事をしようとしたとはいえ、あーやって見るのは非常に恥ずかしかった。よくそんな勇気が出たな、って思う

一、学校でAVを見てはいけません

……なんだかんだで翌日。つまり草碧祭1日目。その後エルフィに思いつきり叫ばれたお陰であの場にいた男子が全員先生に連行され、8時まで反省文を書かされていた

自業自得である

そしてその後、俺たち抜きで通し練習が行われたらしい。思えば昨日全く練習しなかったような気がする。というか元はと言えば杉山君が悪いんだよ。社会科学室に着いてテーブルを運ぶのかと思いきや、その場にいた滋賀崎がDVD取り出して見始めて……俺も見ちゃったじゃないか

その後の事は自業自得である

というわけで文化祭1日目、現在地は校門の外。ちなみに校門はまだ開いていない

昨日の事件に関わった男子6名は朝一番に登校し、最終準備を行うことになってしまったのだ。自業自得なワケだが。ちなみに今来ているのは俺だけだったりする

ちなみに6時。ちなみにそろそろ開く時間。ちなみに文化祭のスタートは9時

……なんだろう。俺以外の男子が来ない気がしてならない

とりあえず時間が5分過ぎ、校門が1人の教師の手によって開かれた。多分ここまで言っておいたら誰かを説明する必要はないだろう。梅（略）先生だ

「神崎。教師に対して（略）はないだろ（略）は」

「どうやら開校一番（当て字）心を読まれたらしい」

「まったく……ってまさかお前1人しかいないってパターンじゃないだろうな？」

「全くもってその通りです。非常に困った状況ですねこれは」

言葉の通り、わたくし非常に困っておりますよ。まさか男子1人で準備を進めるとかそういうのはないだろうな？

あの駄目委員長が今何をしているのか気になるところだ

「それを言うならお前は駄目副委員長だろ」

「心を読まないでください。それと駄目ってなんですか駄目って。とりあえずあいつよりはずっと役に立ってますよ。ほら現時点で」

「まあそれもそうだな。というか入れ。俺は今から待つべき物を待たないといけないからな」

「え、あ、ああ、ハイ」

適当に会話が終わり、校門の中へ。そして先生の横を通り過ぎ、1人校舎へと向かう。靴を履き替え我が教室へ

「しかしまあ……昨日のあの状態でよくここまで出来たよな」

教室にはいると、いつもの学校じゃ想像も出来ないくらい綺麗な光景が広がっていた。見るからに高そうなテーブルクロスが敷かれたテーブル。見るからに高そうなお盆。見るからに高そうなティーセット等々。こんなものどこから調達したんだ……

ちなみに昨日の教室の状態はと言うと、劇で使う為の素材の破片等々が散らばっていた。それを1時間程度でここまでにするとは…

…俺は何を準備すればいいんだよ

すると教室中央に置いてあった何か光り出す。それは投影機だった。映された人物は、もう1人の副委員長である笹原綾香だった

『あれ？ ちゃんと繋がってるわよね？ 聞こえる神崎？』

「あ、ああ。そっちは？」

『良かった。ちゃんと繋がってるみたいね。ってあれ？ もしかして来てるのって神崎だけ？』

「ご覧の通りです」

『そっか……それじゃあ後でヤツらには制裁を下すとして、仕事の内容はまだ伝えてなかったわよね。今からそれを説明するわ』

「スマン。頼む」

『えっと……多分そろそろ梅花先生から教室の隅にダンボールが転送されてくるはずよ。それを開いたら一旦お湯を沸かして欲しいの。それで沸騰したらダンボールの中の物を1つずつ入れてって。簡単でしょ？』

「ああ。多分アリでも出来るくらいに簡単な仕事だ」

『まあキツイ仕事は残りの男子に任せるとして……』

『何？ 僕にキツイ仕事を回すと言っのかね？』

『そうそう。特に佐々木に回すとしてね』

「……………」

『そうか、それは大変だよな』

『そうよ大変よ。今の内に覚悟して貰わないとね』

「……………」

『まったく……まだ他の連中来てないのか…………』

『そうね……ま、そろそろ切るわよ？ また後で』

「……………」

『あらどうしたの？』

『だって後ろにいる佐々木健太に気付かないんだもん』

『きゃああああああああっ！ ちよっ、健 佐々木！ なん

「……………」

……そして男子5人で準備に取りかかった

で、その30分後くらいであろう。急に教室の扉が開き、その場にいた男子5人で扉を見ると、この高校の制服を着た誰か（注・顔の幅が広い）が入ってきた。まさかこの高校に通っていて迷ったとかそういうわけではないだろう。というかまだ登校時間ではない。俺たちは特別なので話は別だが

「えっと……………」

「悪い。遅れた」

「……………は？」「……………」

「……………どうも、佐々木です」

……ガチで誰だかわからなかった。というかわかる方が不思議だ。というか今でもわからない

とりあえず事情を聞いてみると、さつき笹原さんの家にいたのはたまたまらしい。それ以外は何も話してくれなかった。多分口止めか何かされたのだろう

とりあえずいつもの健太の顔は5倍はある

そして準備を再開した

「あら、結構綺麗ね。よく頑張ったんじゃない？」

「まあ……最後は健太に全部やらせたけどな」

「……………」

健太は教室の隅で燃え尽きていた。もちろん最後と言うのは嘘で、あの後すぐ健太に全部やらせたのだ。さすがに可哀想かなーなんて思ってしまったが、健太のことだから大丈夫だろう

そう思っていると、笹原さんが1つのティーカップに手を伸ばす。なんだかよく知らないが、とりあえず美味しいお茶だった。一体誰が持ってきたのだろうか

「……………美味しい。これイケるんじゃないの？」

「確かにこれ美味いわ。誰が持ってきたんだよ」

「ちよつと裏ルートからね……………ま、神崎もお疲れ様。しばらく休んでていいわよ。というか午後まで仕事無いから好きにしてく」

そう言った笹原さんはクルリと身を翻し、カウンター席の方へと歩いていった。ということでは1人になったわけなのだが……………午後まで仕事がないとなるとどうするか。適当に校舎を回ったりしてみるか？ それともこの場で出来そうな手伝いを……………でも折角休みを貰ったわけだし適当に歩いてみるとするか？ よし、それじゃあいろいろ回ってみるとしよう

ちなみに現在時刻は8時半。文化祭開始まであと15分。そうすると一般客が入ってくる。まあ今日は平日なので少ないが

そしてもう1つ。穹には連絡を入れなかった。わざと。来たら来たで面倒な事になりそうだから　なんて言ったら怒られそうだが

……………まあこの後（Chapter 4 #27 参照）のWars
関東大会の初日に何かを奪われていったわけだが

その場につつ立つて時間が過ぎていく。そして気付けば9時になつていたつていう大惨事

さて、何をしよう

とりあえずまずは2組、明日香と光久のいるクラスへと足を伸ばしていた

「い、いらつしやいませご主人様ー」

「ごぶうつ！！ お、おおおまおま……何がご主人様だよ！
ビックリしたよ！ ていうかメイド喫茶だったのかよー！」

「な、何を言うんだ真箏！ わ、わわ私は仕事上こうするしか

いや間違えた。事実を述べただけだ！ たまにはチェンジもいいた
ろうチェンジも！」

「何のチェンジだ！」

「ご主人様と犬の立場の交換だ！ ……さて、きよ、今日は私を好
きにしてください。」

「とりあえず俺を席に通してくれ。後ろが若干突っかかり気味なん
だが」

「か、かかかしこまりました……旦那様」

とりあえず現在の状況を確認しておこう。2組に着くや否やメイド服を来た明日香からのお迎えというものが有り、入り口の前でこんな会話をしてしまった。何がご主人様だよ。まあ確かにメイド喫茶だから仕方ないのだろうけど……俺にはそうやって呼んで貰う趣味が……100%つてわけではないが、無い。とりあえずおかし
いと思ったのは、最後に明日香が『ご主人様』ではなく『旦那様』
と呼んでいたことだ

とりあえず明日香に店を通され、1つの席に着く。なんつーか1
人で来なければ良かった気がする

「それではメニューです」

「ああありがとう。ところで明日香。光久はどうしてるんだ？」

「明智か？ 明智なら……ああ、あそこだ」

明日香がある方向を指さす。　「ごばあっ！！　な、なななんじゃあそれは！！」

思わず上の文をそのまま動きに出してしまった。どんな動きをしたかというと、口に含んでいた水を一気に吹き出し、そのまま椅子ごと後ろに倒れていった。おかげで後頭部がかなり痛い

立ち上がり、椅子を立てて席に座る。そして明日香の方を向く

「……お前たち2組は何を考えているんだ」

「いや、仕方なかったんだ。思ったより人数が少なくて髪の毛長い明智なら誤魔化せるんじゃないかなーって委員長が言い出して……それで……」

「あーなったと？」

「……そういうことだ」

再びその方向をしてみる。そこには客に注文を聞いている光久の姿が。だがそれはとんでもない格好でして……

想像はつくだろう。何故かメイド服だった。しかも似合いすぎてる

「……あんまりだ。あれはあんまりだ。あんなことさせられたら男子は生きていけなくなるというのに……」

「明智ならすんなり受け入れてくれたんだが」

「……説明しなかっただろ」

「あ、ああ」

「……」

2組の連中が最低なことがわかった。現代人だというのに現代の事をよく理解できていない光久にあんな事をさせるだなんて……最低だ

「ま、まあ……注文はいいのか？ そろそろ頼みたいんだが」

「あ、悪い。それじゃあ 明日香。なんだこのメニューは」

「神崎真箏専用メニューでございます」

「急に店員らしい態度を取るな。というかなんだこの『鶴明日香』とか『鶴明日香』とか（略）とか。食せる物はないのかこの店は」

「す、すす全て食べ物でございます」

「……すいませーん。今すぐこの店員代えてくれませんか？」

「わ、わかつたわかつた！ ……こっちがメニューだ」

「ガツカリした顔をしながら渡すな」

やっとのことでマトモなメニューを受け取った。なんていうか……結構マシな物が期待でき ん？ 卵焼きですか……これって確実にアレだよな。しかも『鶴明日香オススメ！』なんて書いてあるし。というか今明日香が持っているペンが気になって仕方がない。まあこの商品はスルーして、コーヒーでも飲んでいこうかね

「じゃあコーヒー一つ」

「かしこまりました。卵焼きが1つですな？」

「おいコラ明日香。俺は今コーヒー一つって言ったんだぞ？ どうやったら卵焼きって聞こえるんだ」

「……かしこまりました」

「ガツカリした顔をしながらメニューを戻すな」

そして明日香はメニューを引き取ると、厨房らしき方向へと戻っていった。その1分後商品が明日香の手によって運ばれてくる

「コーヒーでございます。さて、真筆。これからの予定はなんだ？」
「ちよつと店員。何を勝手に向かいに座ってるんだ。仕事なんだから戻れ。というか知ってどうする」
「場合によつて判断する」
「……5組行つてくる」
「五十嵐ー。しばらく休憩するー」
「りよーかーい。明智く……明智さーん。仕事増やすねー」
『しよ、承知したっ！』

光久が可哀想過ぎるんだが

「つてちよつと待て。なんで休憩入れるんだ？」
「決まつてるだろう。私も連れて行け」

「ヤダ」と言つても無理に着いてくることが予想できる。だからここは諦めておこう

「はいはい……その代わり一旦4組に戻るからな。それからだ」
「わかつた。それじゃあちよつと着替えてくるから早めに飲んでおけ」
「わかつてるつの。あ、スマン。砂糖とミルク TEMMで転送ですか……」

そう言うや否や砂糖とミルクが手元に送られてきた。誰だこんな即座に反応できたヤツ

まあ知らない人だろうが

明日香は一旦教室から離れ、その間にコーヒーを飲む。なんていうか……光久が非常に頑張りすぎている。というか客は光久が男だ

というのに気がついていないらしい。俺から見たら一目瞭然だとい
うのに……

まあ毎日見てるんだからな

……というか光久があんなに女装が似合うなんて思わなかったわ。
元から髪が長いせいですか。ビックリだよ

光久の動きを眺めながらコーヒを飲んでみると、正面に誰かが
座る音がした。誰だろうと思って見てみると、そこには若干息を切
らしながらこちらを見ているエルフィの姿があつた

「おうエルフィ。どうした？」

「どうしたも何も……捜しましたよ。教室にいないんですから」

「いやあ、笹原さんに休憩いただいてなー。それで他のクラスの様
子を見ていこうかなと」

「なるほど……」

そういやエルフィはなんでここまで来たのだろうか

「なあエルフィ。仕事は？」

「あ、昼まで休みですね。それで……あ、わたしも一緒にいい
ですか？」

「ん？ 明日香もいるけど構わないかーって、エルフィと健太を誘
う気でしたんだけどな」

「お呼びかい？」

「……いたのか」

後ろから声があったと思うと、そこには健太が立っていた。多分コ
イツも仕事がないからウロチョロしていたのだろう。まあ、これで
4組に戻る手間が省けた

「だなあ……後で恨まれても知らないけどそれでいいか」
「どういう意味だ健太。まあいいか、んじゃちよつと即席くじ作るから待ってな」

というわけで

「か、かかか神崎さん。よろしくおねがいましたしゅ……」
「……待ってた方がいいんじゃないか？」
「なんで私が佐々木なんかと……」
「まあまあ」

俺&エルフィペア、健太&明日香ペアが完成し、先に俺とエルフィが行くことになった。なんか入る前からエルフィが震えていた。こんな調子で大丈夫だろうか

と、いうわけで突入

「か、神崎さん……大丈夫ですよね？ 何もいませんよね？」
「ああ……ところでエルフィ、本当に大丈夫か？ 駄目なら参加しなくてよかつたんだぞ？」
「な、ななな何を言ってるんですか……わ、わたしがお化けが怖いだなんてあるわけないじゃないですか……そんな子供じゃ 見えない見えない見えない見えない見えない見えない見えない見えない見えない見えない……」
「おーい」

エルフィが向けていた視線の方をしてみる ああ……確かにこれはリアルだわ。つかよくこんな作れたなオイ

エルフィがその場に立ち止まってしまったので、動けない。さて……これはどうしたものか

「エルフィ？」

「見えない聞こえない見えない聞こえない聞こえない聞こえない……」
「駄目だなこれは……」

もう仕方ないのでエルフィの腕を掴む。するとエルフィは驚いたように顔を見上げた

「か、かか神崎さん！？」

「あゝ……ごめん。歩けるか？」

「べ、別に大丈夫です……」

「なら離すけど……」

「え、あ……」

手を離す。するとエルフィは黙り込んでしまい、再び動かなくなつた

「えーと……そろそろ行かないと追いつかれるけど……」

「……手」

「へ？」

「……あの、手、繋いでいいですか？ 駄目なら駄目でいいんですけど……」

「……ま、まあ……問題は無いが……んー。まあいいか。ほい」

「あ……し、失礼します」

そしてエルフィの手が握られる。なんていうか……思ったより小さい手だ。身長に比例したのだろうか。しかし……問題が無いとはいえ、かなり恥ずかしかったりする。でもここで立ち止まっているわけにも行かないので、エルフィの手を引っ張り歩き出す

そのまま黙つたまま進む。というか黙っているしかなかった。エ

ルフィがさつきから『見えない聞こえない見えない聞こえない』と繰り返しているからだ

そして出口が近づいてきて

「エルフィ、もう少しで出口だぞ」

「あ、や、やつとですか……ほう……」

「さて、何も出なければいいんだけどな」

「へ、変な事を言わないで　あ。あは、あはは……はっあ」

「うおっ!?!」

急にエルフィがこちらに倒れてきて、そのまま抱きかかえるという形になってしまった。この状態が恥ずかしいというのもあるのだが、エルフィが気絶した原因を説明

「……神崎? ……エルフィ?」

「……近藤さん?」

俺の視線の先にはとんでもない格好と化粧をしている近藤さんの姿があった。というか見切れた俺が凄惨と思う。それくらいとんでもない格好をしている

「……とりあえず出て行った方がいいと思う。……後の人に追いつかれる」

「あ、ああ……さて、どうしたものか」

仕方ないのでエルフィをおんぶする。背中に柔らかい何かに乗っかっている気がするのだが、まあそんなことを考えている場合ではない。早く脱出しよう

……まさかエルフィがここまで怖い物が苦手だとは思わなかった

「……あの程度で気絶した自分が情けないです」

「まあそう言うなって。人には誰でも苦手な物はある」

現在保健室。今この場にいるのはさつきまでいた4人だけで、つ
いさつきエルフィが目覚めたところだ。ちなみにここに来てから1
時間が経とうとしている

とりあえず付け加えておこう。健太と明日香のペアもほとんど似
たような状況だったらしく、明日香はエルフィみたいにはならな
かったものの、教室から少し離れた場所でも明日香の叫び声が聞こえ
た。それで2人は10秒で出てきたらしいが

……とりあえず2人の弱点が判明した

「ま、まったく情けないなエルは……あ、あああの程度で怖がつ
ていてはこの先やっていけないぞ……」

「明日香、足をガクガクさせた状態で言っても説得力がまるで無い
んだが」

「だつ、黙れ！ ひ、人には苦手な物があるのだろう！？ そ、そ
れなら私だってそうなんだ！ 仕方のないことなんだ！」

「保健室で大声を出すな」

とりあえず黙らせておく。そして左に目をやってみた。……健太
が保健関連の本を読んでいた。女子がいるというのにやるなアイツは

「……で、この後どうしますか？」

ベッドの上に座っているエルフィがそう尋ねてくる。ちなみに明日香の震えは止まっていた。しかしこの後どうするか……1年の教室は回ったわけだし適当に回ってみるか

「適当に回ろうかなと」

「適当ですか……」

「しかし……それだけで時間を潰すのは厳しいんじゃないか？」

「そうだったら部室行って暇潰せばいいだろ？」

「ああ〜」

なんか2人とも納得したようだ。左では保健関連の本を読みながら、健太が頷いていた。本の内容に頷いているのか俺の言葉に頷いているのかわからないところだ

……俺の言葉に頷いていることを願いたい

「そ、それじゃあそろそろ行きませんか？ わたしはもう大丈夫です」

「そうだな。明日香は大丈夫か？」

「だ、大丈夫に決まっているだろう。なあに……大丈夫だ……大丈夫……」

「……保健室出たら真つ先にトイレに駆け込んでこい」

「……済まん」

そしてこの後すぐに保健室を後にし、まずは明日香をトイレに向かわせ、戻ってきた後行動を開始した。とりあえず12時まで暇を潰せて良かったと思う

で、その後俺たち4組メンバーは全員仕事があると言うことで、明日香と3組まで別れてそれぞれの教室へと戻って仕事を開始し、最後まで働いていた

そして草碧祭1日目は幕を下ろした

EX1-2 草碧祭1日目(後書き)

はいどうもお疲れ様です

とりあえず適当な形で1日目が終わりましたね。自分の学校も今日が1日目でしたw

とりあえず次回予告

次でEx・Chapter終了予定ですな

正直な話何をするかは決まっています

劇は出来たらやろうと思っています。というか次回は今回より短くなりますね、確実にww

で、その後からは……新章に突入するかエピソード集を入れるか迷っています

多分新章に突入すると思いますが……

ちなみにエピソード集は、各キャラのサイドストーリー的なアレです

さて……

最後はその時の気分ですな

ではまた次回b

EX1-3 草碧祭2日目

弦巻高校文化祭 草碧祭の1日目が終了して翌日の朝。つまりは草碧祭の2日目。現在時刻は6時半くらい。いつもと同じ時間より少しだけ早めに起きたわたしは少しだけ早めの朝食を取る。そして学校へと向かう準備をする

今日で草碧祭が終わる。つまりは今夜、勝負の日が来たと言つことだ。笹原さんから聞いた噂が本当だと仮定して、後夜祭で神崎さんと一緒にいれば……

でも正直なところまだ意は決めていない。もし変に妨害が入ったら失敗に終わってしまう。特に明日香さんと藤堂さん。あの2人のどちらかがいた場合はその時点で終わってしまう。まあ来年もあるわけですが

でも……

「頑張らなくちゃ……駄目ですよね」

わたしは玄関を出て学校へと向かう。今日という日をより良く過ごせるように祈りながら

「やべえ、眠い……」

「お疲れ真箏……僕だって疲れが抜けてないんだ……そもそも昨日

の朝から疲れが凄いんだ……」

その言葉に少しだけ胸が痛んでしまった。別に同情したとかそう言うわけではない。若干罪悪感を抱いてしまったわけです。そりゃ全部健太に仕事を押しつけたわけですし……

まあ健太の自業自得だとも言っておこうか

そんなこんなでいつもと変わらぬ登校風景　　と思いきや、現在いるのは俺と健太の2人だけ。嗚呼、あの女子共がいないとどれだけ平和なことか……言ったら殺されそうなので考えるのをやめておく。でもまあ、それはそれで暇なわけですし……会話がほとんど無い状態だ。無理もない。2人とも疲れているのだから。理由にならないと思うが

「……そういや今日ってさ、アレじゃん。演劇」

「ああ……そうだったな。頑張れよ主人公」

「……帰っていいっすか？」

「笹原さんにブチ殺されるぞ」

正直な話、笹原さんの健太に対する態度は結構怖い気がする。周りは『ツンデレツンデレ!』とか言っているが、もはや健太は死亡寸前のラインに立たされていたりする。本当にいつ死ぬのか期待……心配になってくるところだ

「……お前は僕に消えてくれた方が嬉しいのか」

心を読まれた

とりあえずふと思ったことがあったので健太に聞いてみる

「なあ健太。お前と笹原さんってどういう関係よ」

「ん？ ただの近所さんだけど？」

「……………それだけ？」

「それだけ」

普通に怪しすぎるのだが。そりやまあ周りが『ツンデレツンデレ！』言ってる笹原さんの健太に対する態度と言ったら……………ああ、まあ確かにそう思えるわな。ん？ それじゃあ仮に笹原さんが健太のことを好きだとして、健太がその気持ちに気がついていないだけ？ どれだけ鈍感なんだコイツは……………

「……………それをお前が言っな」

「どっという意味だコラ」

まったくもって理解不能だ。というか俺の心を読むな。つか読心術を俺にも教えてくれ

……………別にやましい事に使おうとかそういう事ではない

「だとしたら僕が随分なことになってるんだけど？」

「そっだよなあ」

確かにその通りだ。もし読心術をやましい事に使ったとしたら随分なことになってしまふ。だから使えない方が って、なんかもう『読心術をやましい事に使う』というのが前提になってた気がするんだが？ 気のせいだと嬉しい。というかまた心を読まれたんだが、もはや読心術を使えないこと俺自体人間では無いんじゃないか、ってすら思えてきたりもする

「大丈夫。そんなこと出来る方が不思議なんだ」

「……………」

要するに俺の周りには不思議人間しかいないということになるんだが？ いや、それはそれで当たってるか。例えばwars部員とか（主に健太。特に佐々木）

「他にもいるだろ」

「そうだな。忘れてたよ」

主にwars部員。特に健太

「どつちみち変わらないんだな」

「気のせいだろ」

……ここまで会話してきて（？）と思う。全部心の中読まれたんじゃないか？ それで会話が成り立ってたんじゃないか？

もはや地球上に存在している俺以外の人間が全て宇宙人が何かに見えてきたりする

「それはあんまりだ」

「だったら何故俺に読心術が使えない」

「……さあ」

……目だけが左に向いていて、説得力の無い「さあ」なんだが。まあそんな大きいようで小さいことは置いておくとしよう。気付けばもう学校の近くだしな

「ところで真筈。なんとなく聞きたいんだが、昨日2組にいた女子って何？ もしかしてタイプの子だった？」

「は？ 何を言ってる」

そこまで言っただけで気付く。あれは光久だ。そんな事を言ったら光久

が可哀想だ。ここは適当に嘘をついて　　って、あつ！
驚いたような顔で俺を見るな！

「…………え、マジか…………」

「くっ…………許せ、光ひ　　」

『健太ああああああああああ！　これはどういう事よおおおお
おおおおおおおっ！』

「え」

聞き覚えのある怒鳴り声が聞こえてきたので、驚いてそちらの方
を見てみる。すると、何かを手にしている笹原さんがもの凄いスピ
ードでこちらに走ってきていた。目を凝らして手に持っている何か
を見てみると、それは1枚の紙切れに見えた

健太の方を振り向いてみる。するともの凄い勢いで逃げていく健
太の姿が遠くに見えた。いつの間にあそこまで逃げたのだろうか

やがて笹原さんが俺との距離数メートルまで近づいてきて、やっ
とその紙切れの正体を知った

…………1枚の写真。それも笹原さんの寝顔＋パジャマ姿（若干はだ
け気味）＋クマのぬいぐるみだっこといった感じの写真だった。そ
れが指す意味がよくわからない

1つ予想がつくとすれば、健太が笹原さんの寝ている内に写真を
撮ったが、その写真を笹原さん宅に忘れてしまいそれを見られたと
言うことだろうか。あくまで予想、当たっているかはわからない

そして笹原さんが俺の横を過ぎ去っていく。俺には目もくれずに
過ぎ去っていったが、その際に手元から何か1枚の紙切れ　1枚
の写真が俺の足下へと落ちてきた。それを拾ってみる

…………想像を絶する破壊力だった

「いやあ……健太。流石にこの写真は駄目だと思っただが……」

一、女子の着替え中を盗撮してはいけません

そして1人空しく学校へと歩き出した

「ふっ、酷い目に遭ったぜ……」

「外傷から見てわかるわボケ」

学校に到着して早10分。教室に着いても健太と笹原さんがいなかったのが驚いたが、今になって健太が1人で教室へと入ってきた。それはもう顔がいつもの1.5倍近くはあるものでして……痛々しい。そして至る所が赤く染まっていたりもする

『あああああああああもっ！ もう1枚は何処に行ったのよ！ なんて見つからないの！』

健太の痛々しい姿を見ていると、教室の外からそんな聞き覚えのある声が聞こえてくる。声の人物は言うまでもなく笹原さんなのだ。言っている内容からすると俺が持っていた写真を探しているらしい。いや、そりゃあの写真が無くなればそう慌てるよな

とりあえず『持っていた』という過去形になっている理由を説明しよう。流石にあの写真をこの世に存在させておくのは可哀想なので、道中燃やして処分しておいた。だが、これをどうやって笹原さんに説明すればいいのかわからない。言ったら言ったでアレだ、

写真を見たということになり俺も健太と同じようになりかねない。でも言わなかったら言わなかったで笹原さんがずっとあの状態のままになってしまう。本当に悩みどころだ

すると健太が突然椅子を立ち上がり、教室から出て行った。なんだか嫌な予感しかしないんですが

不安になったので少し遅れて健太の後をつけてみる。まあそれが良かったのか悪かったのかは俺にはよくわからない

……健太と笹原さんが何かを話していた。多分写真騒動のことに間違いない。このタイミングで読心術を使いやがったなアイツ……俺が死ぬ！

慌ててクルリと身を翻す。が、その行動は遅かったらしく

「神崎、そこにいるんでしょう？ 今すぐにここに姿を現しなさい」
「……ハイ」

笹原さんの悪魔のような表情を見た途端に逃げられなくなってしまった

「えっと……とりえあずお礼を言わせて貰うわ。あ、ありがとう……」

「へ？」
「……あの写真を見られたのは最悪だったけど、この世から消してくれて助かったわ。でも流石に写真を見たことを許すわけにはいかないわ。だから」

『ありがとう』言っておいて何かやらせるんかい。どーなってんだよこの世の中は

席を立つ。そしてボロボロになった健太も立たせると、開店前最後の準備をする。ほとんどすることは無かったが、なんとか始められるだろう

時間が来る

「さてと、今日は2日目よ。昨日以上に大変になるから覚悟しておきなさい！」

『おおー！』

さつきまで机の上で突っ伏していた笹原さんが号令を掛けると、クラス全体の掛け声が教室内に響く。そして最初の時間帯のクラスメイトたちが準備に掛かり、笹原さんは教室を出て行った。ちなみに1年4組Wars部メンバーはここにいたりする

「で、今日はどうするんだ真筆？」

「だなあ……昨日ほとんど見て回ったしな……」

「ステージ発表でも見に行きますか？」

「ああ。その手があつたか」

俺と健太でポンと手を叩く。そうだよ、今日は昨日と違ってステージ発表があるわけだからそれで暇が潰せるじゃないか

さつきまで自分のクラスの事だけ考えていたのでそこに思考が結びつかなかった自分が恥ずかしい

「それじゃあ行きましょうか。良い席が取られない内に」

「だな。行くぞ健太」

「待ってくれ。なんだか顔が重いんだ」

「……自業自得だアホ」

……健太の顔は登校時より膨れあがっていた

「……開始5分で満席ってどういうことですか……」

「世界の心理が気になるよな」

「まあ立ち見でいいんじゃないの?」

体育館に到着……したのだが。2日目開始5分後には席が全て埋まってしまったらしい。それはそれで凄いのだが……

それで今現在体育館入り口付近。3人でどうするかを話し合っていて、立ち見にするか諦めるかの二択が出ているところだ。ちなみに俺は諦める派

「でも立ち見だと疲れますよ? 神崎さんの言うとおり諦めた方がいいんじゃないでしょうか?」

「んー……でも僕はこの場で見たいんだが……あ」

「ん?」

「思いついたわ」

どうやら健太は何かを思いついたらしく、顔をハッと上げる。するとTEMMを起動して何かを取り出した。それはどうやらビデオカメラらしい。一体それをどうするというのだろうか

「どうするかな……それじゃあ部室で会おうじゃないか。終わったらすぐに行くから」

「は? どうすんだよ」

「まあまあそれはお楽しみって事で。ほら先に行ってな」

「えっと……じゃあ行きますか神崎さん?」

「……絶対来いよ」

「わかってるって」

そして健太と離れて2人になり、言われたとおり部室へと向かってみる。まあもちろん鍵は開いて……あれ？　なんで開いてるんだよ。閉めるのが普通だよ

「……なんで開いてるんですか」

「俺に聞くな」

「ま、まままままさか……いや、そんなハズは無いですよ。あり得ませんよね。そんなの存在するのがおかしいんですよ」

「何を言ってるんだ」

とりあえず部室の扉を開いてみる。もちろんそこには誰もいないわけで……何故か奥にある機械がついていたのだが

先に俺が入って本当に誰もいないのかを確認してみる。すると、死角になっていて見えなかった機械の手前にある椅子に誰かが座っているのが確認できた。恐る恐る近づいてみる。すると見慣れた人物がその場にいた

「ん？　ああ神崎か。どうしたこんな所で。まさかとは思うが迷子にでもなったとかそういう訳じゃないだろうな」

「部長？　なんでこんな所にいるんですか。というか今2年3組がステージ発表しているところですよ。なんでいるんですか」

「いちゃ悪いのか。面倒くさいにからに決まってるだろ」

なんとという発言を

とりあえずエルフィをこちらへと呼ぶ。そして2人で部長が見ている物を見してみる。それは体育館内の映像だった

「えっと……これは？」

「いい質問だなエストラント。今現在体育館内で行われているステ

「ジ発表の映像だ。発表に参加しない代わりに録画を頼まれてな…
…それでここで作業中って訳だ。ほら、全席埋まつてるだろ？」

なんとなく理解できた

「で、お前らはなんでここに来たんだ？もしかして文化祭の最中
だというのに演習でもするつもりだったのか？言っておくが今は
出来ないからな」

「そんな訳ないじゃないですか。健太に部室に言われるように言わ
れたんですよ。理由は知りませんが」

「なんだそれ。まあいい、お前らはお前からで好きにしてろ。映像を
見ても良いし寝ても良いし。以上だ」

「じゃあ健太を待たせて貰いますよ」

そう言っただけで俺とエルフィは部室中央に置いてある椅子に腰掛ける。
なんだか何もしていないと時間が経つのが長く感じてしまう

そして待つこと5分。体育館で別れた健太が部室へと入ってきた

「お、遅かったな健太」

「いやまだ10分ぐらいしか経ってないから。よしそれじゃあ…

…部長？なんでいるんすか」

「……まさか佐々木も同じ事を考えるとはな。まあいい。お前の使
ってるカメラの接続は切らせて貰ったからな」

「勝手に切るんすか!？」

「そうしないとこちらの画質が悪くなるからな。と、いうわけで見
るんだったらこれを見てくれ」

部長が健太に何かを投げ渡す。それを見た健太はすぐに部長へと
投げ返す。一体何を渡されたのだろうか

「結構つすよ。さて、することなくなつたしどうするよ真箏、エルぼん」

「そうですねえ……もうこの際ここで見ればいいんじゃないでしょうか？」

「俺もエルフィの意見に賛成だな」

「じゃ、部長。横で見させて貰いますよ」

「好きにしる」

そして部長の横へと3人で座り、体育館内で行われているステージ発表を見続けた。そして時間が来て一旦教室へと戻り、必要な物を持って再び体育館へと向かった。さて、劇は成功するのか失敗するのか

1年4組のステージ発表が始まるうとしていた

「さてと……全員準備は出来てるわよね？」

笹原さんがその場（体育館のステージ端）にいる全員にそう尋ねる。もちろんここにいる理由は今からステージ発表が始まるからで……全員顔が緊張しているのが普通にわかる。俺だって緊張している。出番は少ないわけだが

今回の主役である健太の顔を見してみる。なんだかいつもと違って真面目な表情をして座っている。多分緊張しているのだろう。言ったら悪いがらしくない。一声掛けようと健太に近づいてみると、僅かに震えているのがわかった

「おう真箏……お前は大丈夫か　って、お前は出番少ないから余

裕か。僕はほとんど出ないといけないから……あーやべ」

「健太……ま、まあ平常心だ平常心！いつものお前ならこれくらい乗り切れるだろ！」

「だよな……おう！こんなん気合いで乗り切ってやらあ！」

「その意気だ！」

なんだか一声掛けただけでいつもの調子の健太に戻った。でもそれは無理に作っているのかもしれない。まだ若干震えている

今度はエルフィを見してみる。エルフィも健太と同様で、同じような体勢になっている。近づいてみると、震えはしていないが緊張している顔をしていた

「大丈夫かエルフィ？」

「あ、神崎さん……ええ、大丈夫です。ちょ、ちよつと緊張気味ですけど……頑張ります！」

「そうだ頑張れ。俺より出番は少ない訳なんだから余裕だろ？」

「はい……でもお芝居するのは初めてなので……失敗したらどうしようかな、って……」

不安そうな表情を見せるエルフィ。確かに『失敗したらどうしよう』っていうのは誰もが抱く不安だ。正直なところ俺にだってある。でもそんなの気にしていたら何も出来ないんだ。それをエルフィに言ってみる

「神崎さんもですか……そうですか……多分皆さんも同じ気持ちなんです」

「ああ。だから失敗なんて考えないでいい。平常心でいけば失敗は無い」

「……わかりました。頑張りますね。神崎さんも頑張ってください

よ

「わかってるって」

そしてエルフィとの会話を終える。するとすぐ後笹原さんが集合の号令を掛けたので、そちらへと向かう

「さて、さっきも聞いたけど全員準備はOKね？ 今から始まるわけだけど……ふう。この劇を成功させて終わらせましょう。では使えないクズ委員長から一言どうぞ」

「クズ言うなクズ。……えっと、まあクズ言われても仕方ない委員長、佐々木健太です。今から我が1年4組のステージ発表『ロミオとジュリエット（アレンジver.）』をやりますね。多分緊張している人しかいないと思います。僕だってそうです。失敗しても構いません。ですが、失敗してもいいですからこの劇は成功させましょう。では皆さん、頑張ってくださいましょう」

健太らしくない発言がこの場に放たれる。それを聞いたクラスメイトたちは驚きを隠せないような表情をしながらざわつき始めた。無理もない、健太があんな真面目発言したら誰だってそうなる

明日雪でも降るんじゃないか？

「酷いな真筆」。僕はいつだって真面目さんじゃないかあ。ま、さつきのは冗談だよ冗談」

心を読まれた　　と言うのは今はどうでもいいかもしれない。『冗談』という健太の発言を聞いたクラスメイトたちが再び健太の方を向く

「今僕から言えることはただ1つしかねえよ……この劇成功させるぞ野郎共おおおっ！ー！」

狭い室内（ステージ脇だが）に大きく響くほどの大きい声で健太がそう叫ぶ。その言葉に全員が固まったが、一拍置いて全員の心が一つになった

『おおおおおおおおおっ！！』

今までにない集結っぷり。正直なところ感動すら覚えた。先生なんて若干涙目だし……

健太の横にいた笹原さんは若干赤面していた

そして発表が始まった

・
・
・

「ふい〜……とりあえずこれで俺の役は終わりかあ」

「おっつかれ〜神崎〜。中々良かったぜえ」

「うっせえ。そもそも俺に良いシーンなんて1つもねえだろ」

「まあそう言わずに。ほれ、滋賀崎の番だぞ。行ってこい！」

「おしー！」

「いやあ……今のところ失敗は無いから大丈夫そうだな」

「そうだなあ……ところで宮本、例のシーンまであとどれくらいだ？」

「もーちよいだな。この後笹原と亘のシーン、工藤と新島、佐々木のシーンの後だな」

「そうか……さて、どうなることやら……」

「男性陣には期待の1シーンだよな」
「まあ……お楽しみってことだな」
「ああ」

「次か？」

「そうだな。とりあえず神崎、次のシーンに入るとき背景の切り替え手伝ってくれ」

「あ、ああ」

「……あと20秒」

「……」

「10秒」

「よっと」

「3 / 2 / 1……よし、行くぞ神崎」

「おっけー」

「やっぱり1人だと辛いわこの荷物は……」

「なるほどなあ……というかTEAM使えば一発だろ」

「使っちゃ駄目なんだとよ。ま、とりあえずその辺に うおっ！」

「なっ！」

バキッ！

「ちょ、ちよつと神崎！？ 宮本！？」

「わ、悪い！ 大丈夫か宮本？」

「ああ……セットは……げっ！」

「どうしたの？」

「……割れた」

「ちよつと嘘でしょ！？　なんでこんな時にミスするのよ！」

「済まん笹原……さて、これはどうやって乗り切ったものか……」

「……俺がなんとかするわ」

「神崎？」

「まーちよつとな。それじゃあ配置についてくれ」

「え、ええ」「あ、ああ」

照明がつく。幸いこのセットが壊れたことに観客は気がついていないらしく、劇は進行していく。まあ目の前で見ているとちよつと得した気分になれたりする

ちなみに俺が今どこにいるかというのと、さっき壊れたセットの裏。そこで頑張つて壊れた部分を接合している。いつ崩壊するかわからないが、なんとか乗り切れるかもしれない

『ロミオ！　なんで行ってしまわれるのですか！？』

『ジュリエット……仕方が無いんだ、元々私たちは敵国同士。これが父上たちに知られてしまえば私も君も無事じゃ済まない。だからこれが一番良い方法なんだ……』

目の前で見られることがどれだけ得なことか。2人の演技が上手すぎて何も言えねえ……

『ジュリエット……わかってくれ、本当は私も君とは離れたくない』

『それなら……』

劇は進んでいく。そして待ち望んだシーンがやってくる

『ロミオ……』

『ジュリエット……』

なんでこうなったかは割愛させていただくが、そのシーンがやってくる観客から盛大な拍手が送られてきた。もちろんそれはステージ横からであり……俺はしたくても手が離せない状況だ。だがその代わりに間近で見られるっていうのが本当に素晴らしい

少しだけ割れたセットの間からそのシーンを覗いてみる。それはそれはお顔同士が急接近しているシーンでございまして、観客席側からはそう見えるが、実際は角度の調整によってそう見せているだけのシーン。いわゆるキスシーンだ。ふーむ、なんだ。触れていない

なんでこんな事に期待しているのかが不思議な自分である

そしてやっとそのシーンが終わり、証明が落とされてセットを片付ける。お陰で今は若干腕が痛かったりする

「お疲れ神崎。なかなか良かったぜ」

「……お前が転ばなければ良かったんだけどな」

「まあまあそう言わずに。おかげで今まで成功で進んでるんだからよ。まあ話はずれるが、どうだった？」

「んー……触れてなかったな」

『はあ……』

「男子共、何ため息ついているのかしら？」

「……あれ？プリンセス？」

「全く、何に期待してたのよ。アタシがそんなことするはずないじゃない。って、何よその目は」

『いえ、なんでもありません』

「そう？ まああと少しで終わるから、頑張るわよ」

『了解』

『……アタシだってその気になってればやってたわよ』

「しかしまあ、あとは何事も無く終わりそうだな」

「ああ……しかしさっきのは本当に悪かった」

「もう過ぎたことだし気にするなって。とりあえずあと1シーンだし余裕だろ」

「だといいんだけどな……」

『ジュリエット！ ジュリエット！ どうして……どうして私を置いて逝ってしまったんだ！？』

「……何事も無く終われるなこれは」

「ああ。何かが起こることに期待していた俺がバカだったのかもしれない」

「神崎。それ笹原に聞かれたら佐々木みたいになるぞ」

「悪い……」

『ロミオ！ なんで私の分の薬を残しておいてくれなかったの！？』

「しっかし……あの2人あれだけダメダメだったのに、今日凄くないか？」

「ああ。俺もそう思うわ。特に佐々木なんて全部台本通りにやったぞ」

「家で練習してたのかね……」

「……なんだか見直したかもしれねえ……あ」

『これにて、1年4組による『ロミオとジュリエット』を終わりにします』

「終わったな」

「ああ。お疲れ」

『お疲れ様ーーーーー!!』

ステージ発表が終わって10分後。劇で使った道具を全て片付け終わり、そして教室で全員で乾杯をした。もちろんまだ店は閉まっている状態なので今だけは自由だ。そして飲んでいるものは紅茶的な何かという……

まあそれはさておき……

「よし！ まずはここで主役の佐々木から一言どうぞ！」

「いきなり振るなって……えっと、お疲れえええ!!」

いかにも健太らしい適当な一言。もっとマシな言葉は思い浮かばなかったのかアイツは

「それじゃあ次に笹原いつてみよー!!」

「え、アタシに振るの……。う、お、お疲れ」

……笹原さんもか

いや、多分2人は疲れているんだ。だから思考回路が上手く回っていないからあんな適当な発言になってしまったんだ。うん、多分そうだ

……こつこつと自分で納得しているのがもの凄く恥ずかしかったりする

「ま、とりあえず後で盛り上がりましょ。えっと、この後10分後に店を再開するわ。それまで各自で休憩を入れて頂戴。それじゃあ……残り頑張っていくわよー!」

そして笹原さんがそう叫ぶと、クラスの全員で『おー!』と返す。その後各々好きな時間を過ごし、10分後、店が再開……そして店番残りの時間は全部店番で過ごし、高校生活初めての文化祭は幕を下ろす

732

パチパチパチ……

グラウンドの中央で焚かれている炎がそんな音を立てる。上に広がる夜空と炎の色が綺麗でそれに1人で見とれていた

現在6時10分前。草碧祭が終わってから1時間くらいが経つただろうか、20分前にグラウンド中央で炎が点され、それ以降ずっと1人でその炎を眺めていた。何もせず、ただただその灯火を

「……………後夜祭……………ですか」

“後夜祭”

考えてみれば今がその時間と言うわけだ。要するにあの噂が正しければ、神崎さんと一緒にいれば結ばれる……………でも……………

「どこに行つたんですか……………」

……………恥ずかしいことに現在1人でいたため、どこに誰がいるのかわからない状況だ。もちろん1年4組のみんながどこにいるのかすらわからない。それまで何があつたかつて話すと少し長くなるかもしれない

何があつたかというと、草碧祭終了直後に迷子になつてここにいる高校生にもなつて迷子は非常に恥ずかしかったりする。昨日はお化け屋敷で気絶してしまつ……………

なんだか神崎さんに嫌われてしまつんじゃないかつて思えてきた。そんな事を考えたせいか、少しだけ涙が零れてくる。慌ててそれを拭つて再び前を見る。が、再び零れてくる

随分くだらないことで泣いてるな、なんて思つてしまつ。でも重要なことだ。でもくだらない

矛盾？

世の中矛盾だらけだ
馬鹿な事を考えてしまつた

「……………」

グラウンド中央の炎を見つめる。なんだか幻想的だ。見てると吸い込まれそうだ、なんてことはない
すると遠くから声が聞こえてくる

『エルフィー。エルフィー。あれ、こつちじゃないのか……』

毎日聞いているような声。間違いない、神崎さんの声だ。多分左の方から聞こえた。わたしも動いて探した方が良いのだろうか。でも正直なところ、『会いたくない』なんて感情も混じっていたりする。嫌われることを恐れているから？ 違う。まだ涙が出てくるからだ

『エルフィー？ ん……しつかしまあ、なんで笹原さんは俺に行かせたかねえ。まいいか。エルフィー。どこだー？』

段々と声が近づいてくる。そして神崎さんの姿が一瞬だけ視界に映った

それを見たわたしは、無意識に反応して頭を伏せてしまう。こつすれば気付かれないと思ったから？ 違う。涙を見せたくないから理由を答えたくないから

『こつちじゃないのか……しゃあない、戻るか……って』
「……っ」

足音が自分のすぐ左で止まる。それに驚いて少しだけ身体をビクつかせた

「やっと見つけたよ……どうしたエルフィー？ 具合でも悪いのか？」
「いえ、大丈夫です。何も問題ありません」

とりあえず適当に何か言っておく

「そっか？ それじゃあみんなの所に行くぞ。みんな心配してるからな」

「はい……えっと、神崎さん。先に行つてくれませんか？ 後で必ず追いつきますから」

「……無理。笹原さんエルフィを連れてこいって言われたからさ……連れて行かないと何て言われることか」

「お願いです。先に行つててください」

ちよつとだけ怒った感情を混ぜた声で言ってしまった。それを聞いたであろう神崎さんは少しばかり言葉を発せないでいた。そして神崎さんの口が開く

「嫌だ。まだ死にたくないし……って言ったら酷いか。まあ……とにかく一緒に行こう。みんな心配してるって」

「お願い……ですから」

「え？」

「お願いですから……先に、先に行つててくださいよ……わたし、わたし、このままじゃ戻れません……」

「……どうしたエルフィ？ 何かあったのか？」

なんだか神崎さんの優しさに耐えきれず、とうとう涙声になってしまった。これを神崎さんはどう捉えてくれたのだろうか……嫌われてしまうのだろうか

「いえ……なんでもない……です。そ、それより行きましょうよ、皆さん待ってるんですよね？」

「ちよつと待った。今なんで泣いてたか理由を聞きたい」

「……なんで……そうなるんですか……」
「え？」

「それを聞いてどうにかできる問題じゃないです。それにこれは自分で勝手に……」

「……それじゃあ1つ言わせて貰う。この文化祭が笑顔で終われん」
「……え？」

思わず聞き返してしまった

「なんでこういう日に1人だけ泣いてるヤツがいるんだよ。なんで泣いてるんだよ。なんで1人で泣いて1人で終わらせようとしてるんだよ。1人だけで抱え込んで無理するな。協力できることだったら協力させて欲しい」

「……本当に、本当に」

バカですね

「え？」

「いえ、なんでもありません。えっと神崎さん、ありがとうございませう。おかげでなんか元通りです」

「……無理してないよな？」

「え、ええ……なんていうか……その……」

思い切って聞くことにしてみた

「……わたしの事、嫌いですか？」

「……へ？」

その質問に神崎さんは目を丸くしていた。無理もない。こんな質問をしてしまったのだから

……どう、答えてくれるだろうか

「……何故に？」

「ほら……わたしって、お化け屋敷で気絶したり、今迷子になって迷惑掛けてたり……勝手に1人で泣いてたりして……わたしってこっつ面倒ない人じゃないですか。だから……神崎さんはわたしの事、嫌いですか？」

「……バカな事聞くなよ」

「え？」

「嫌いな訳ないだろ？ とうかさ、それくらいで迷惑ってどういふことだよ。迷惑って言うのは健太の事じゃないか。それと比べたらマシだって」

ちよつと比較対象が嫌だったり……なんて冗談

「まあ……俺がエルフィを嫌いになるのはあり得ないな」

「え……それってもしかして……」

「もちろん他のみんなもだけどな」

「……やっぱりそうですか」

「え？ なんか言ったか？」

「なんでもないです」

ちよつとガツカリしたり

でも、神崎さんがわたしの事を嫌いじゃなくて良かった

「ふう、なんだかスッキリしました。えっと……それじゃあ、行き
ますか？」

「あ、ああ……って、本当に大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。むしろ神崎さんが大丈夫ですか？」

「酷い言い様だな」

「ふふつ、冗談です。それじゃあ行きましょっか」
「あ、ちよつと待て！ 教室だからな！」

神崎さんを置いて1人で走り出す。明るく輝く炎を右手に、炎で照らされる夜空を見上げながら

多分神崎さんを振り向かせる………といつか一緒になる、といふのはまだまだ無理なのかもしれない。なんて思ったりもする
後ろから神崎さんが追いかけてくる

追いつかれないけど追いつかれないよう、わたしは1年4組へと向かう

いつか必ず振り向かせる、という意志を胸に抱きながら

EX1-3 草碧祭2日目(後書き)

相変わらず酷い作品すなあ……

とりあえずこれでEx・Chapter終了ですね。いかがでしたでしょうか

5月の終わりにはこんなことがあったわけですよ

……大分変になったと思いますが

さてさてそれはさておき……

今回はどうしようか未だに迷っています

多分更新は来週になるかなーなんて思ったりしていますが、その間には決まります

というか決まらなかったら更新出来ないわけですが(笑)
はい

ではまた次回、お会いしましょうb

#333 一学期終業式（前書き）

さて……悩んだ末、新章突入です！

#33 一学期終業式

Warsの関東大会が終わってから大体1週間くらい経っただろうか。とりあえず7月19日の木曜日。現在5時間目の授業中。なんかやつと一昨日あたりに席替えをして、今は窓側最後列の場所の席だったりする。風が時折入って涼しいポジションだ。ちなみに健太は教卓の目の前で、エルフィは右の席にいたりする。なんだかエルフィとのポジションがまったく変わらない気がする

チラッとエルフィの机の上を見してみる。そこには真面目にノートをとるエルフィの姿があり、ノートには綺麗な文字と数列が並べられていた。ここまで言うておいて言うのもアレだが、数学の授業だったりする

思えばこのクラスって数学多くないか？とかどうでもいいことを考えてみたりする

なんとなくエルフィの書いているノートに視線が行ってしまふ。それを見ている間の効果音と言ったら、ペンの音とチョークが黒板に当たる音、そして暑苦しい先生の声

もちろんスーツ姿での。窓側で風があつて涼しいとはいえ、あの姿を見るとウンザリする。あの人には季節感という物が無いのか季節感が。冬どうしてんだよ。まさか半袖……いや、タンクトップだったり？なんて妄想が膨らんだり

エルフィのノートから視線を外して自分のノートを見てみる。それはもうエルフィのノートとは大違い……540度近く違うだろう。今日の日付を書いてそこで終わっているノートだ。それ以外は真っ白。ページが変わったからという理由込みだ

これだからテストの成績が駄目なのか。でもそんなこと言ったら

健太辺りはどうなるのかが気になったりする

なんとなくペンを手にとってペン回しを開始する。1世紀くらい前にはペン回し用のペンの販売されてたとか爺ちゃんが言ってた気がする。というか実物を見せてやってくれた

かなりの達人だった

それには及ばない技術のペン回しをして、やがて机の上へと落ちる。大きな音は出なかったので注目は受けなかった。……エルフィだけがこちらを見たが

「神崎さん、全然ノート纏めて無いじゃないですか」

こちらを見たときにノートも一緒に見たのか、エルフィがそう言うってくる。仕方ないだろ。あんな姿の先生を見たらやる気を削がれるわけだし、それに加えやる気が全くないんだ。だから

今考えていたことを全部エルフィに言ってみた。もちろん誰にも聞き取られないような声で

「それで次回のテスト大丈夫なんですか？」

「痛いところを突いてくるな」

ちなみに次回のテストは夏休み明け直後だったりする。期末テストなどとは違って5教科なので楽……とは言えないか。明けて即行は厳しい物があるかもしれない

とりあえずもう1つ捕捉しておこう。10月の終わりに中間テスト、11月の終わりに期末テストがあったりする

……まだまだ先のことを考えていても仕方がない気がするのだが

「まったく……後で泣いても知りませんよ？」

「大丈夫大丈夫。健太じゃあるまいし、それに後でノートを見せて

くれば……」

甘えてみた

「わ、わたしのでいいんですか？ 字へタだし、それにわかりづら
いかと……」

「いや、大丈夫だ。多分テスト前にお世話になるさ」

……こうやって自分の力で解決しようとしないうち自分の駄目な心が
赤点を招く糧になるのかもしれない。かなり嫌だが とうかが自
分が駄目なことがまず駄目なんだ

夏休み中は自分を変える旅にでも出てみるか？

……予算が無いから無理に決まってるだろこのバカめ

それじゃあ山にでも籠もって精神修行でもしてみるか？

……どこの僧侶だアホ

じゃあどうしろと？

……今まで通りの夏休みを送るしかないんだろうか（夏休み終了
1週間前になってから宿題を始めるという昔ながらのアレが俺）
なんだか健太と被りそうで嫌だ

黒板の方をしてみる。もちろん黒板前では先生が授業をしている
わけです……目が焼けるほど痛い服装だ

ちなみに前を見る度に健太を見なくちゃいけなかったりする

……吉原先輩を見る方がよっぽど嫌だが

再びペンを手に持ってみるが、そのまま何もせずに机の上に置く。
一体自分が何をしたいのかわからなくなってきた

もうこの際寝てしまおうか？ ……指名されたとき致命傷になり
かねないので却下

致命傷とは頭にチョークが炸裂して気絶してしまうことである)
by 健太)

他にもシャーマンスープレックスやら、スクリユードライバーやら、バツクドロップやら、そんな攻撃を受ける方が致命傷な気がするの俺だけだろうか？　そしてそれらを受けて今もなお元気に過ごせている健太は一体何者なのだろうか

……怪物なんじゃないかななんて思えてきたりもする

黒板から目を逸らして再びエルフィの机の上へ。さっきから授業は進んでいるので、もちろんエルフィのノートに書かれている文字の数も増えていつている。まあさっきと比べて僅かな変化なのだが、なんだかこうして見ていると、エルフィの手が本当に小さく見えなくなる。パーの状態だとリングと良い勝負なんじゃないか、ってくらいに小さい手だ

……俺はどこを見ているんだ

エルフィの手元から視線を逸らして今度は窓の方を向いてみる。すると同時に風が教室内を過ぎ去っていき、その風と差し込む太陽光に目を細めてしまう。今日は良い天気だ。昨日も良い天気だった。明日も良い天気なのだろうか。天気予報では明日も晴れだ

2羽のツバメが青い空を飛び去っていく。それに続くようにスズメが飛んでいく。そしてゆっくり雲が流れてゆく。こうしてみると平和な光景だ。18年前に戦争があったなんて思えないほど平和な光景だ。要するに姉は戦争の経験者である。まあどうでもいいが

1羽のハトが空を飛んでいく。それを見えなくなるまで眺める。見えなくなると教室に風が流れ込む。その風に目を細める。正面を向く

思えば明日は終業式だ。つまり明後日からは夏休みだ。そう思っ

た瞬間に何故か憂鬱さが吹き飛んだ気がした
再び爽やかな風が流れ込む。そして

「この問題を……それじゃあ神崎、解いてみる」

……夏休み前、最後の試練が襲いかかってきた

「……地獄の数学の後に大掃除するのはキツすぎだろ……」

5時間目の授業だった数学も無事（最後に指名されたわけだが）に終わり、現在6時間目の……LHRであったであろうこの時間。まだ授業が始まって5分も経っていない時間なのだが、全クラスメイトは揃っていない状況である。自分のさっきの発言を聞いたのはエルフィと健太の2人だ

……まあ大掃除中なのだ。明日は終業式とLHRをするだけで帰りという、まるでヘヴンの（なんとなく英語で言ってみた）ような1日だ。つまり、明日は掃除がない。今日中にやっておこう

いつその事掃除をしてくれる人を雇ってくれ。ほら、どこかの国ではそうじゃなかったか？

……自分のだらしなさがいかにもわかる思考だった

「まあ……1ヶ月はこの学校に来なくなって誰も掃除しない訳なんだから、しょうがないんじゃないかね」

左隣で箒をブンブン回しながら、我が友兼クラス委員長兼War s部の仲間である佐々木健太というバカが話しかけてくる。危ないからその箒を下ろせ

「誰がバカだよ」

……最近インターネットとか本とかで超能力について調べ始めた
「佐々木さんの言う通りですよ。1ヶ月誰も掃除しないわけなんですから今の内に綺麗にしておかないと……」

右隣で箒を両手で持ちながらゴミをかき集めている小柄な女子、エルフィ・N・エストラントが話しかけてくる。最近ずっと名前と呼んでいたから名字とか名字とか名字とか忘れていた気がする
もう4ヶ月になっていてアレなのだが、エルフィの特徴ってなんなのだろうか

「小柄で巨乳」

「ああ」

「そこで納得しないでください！」

何を納得しているんだ俺は。というか健太に（以下略）

……まあエルフィも泣き目で胸を両手で押さえながら言わないでくれ。まるで俺と健太が何かをやらかしちゃった的な空気が流れてしまったじゃないか。教室にいる女子の目線がすげー痛いんだぞ

そんな事を考えてしまった俺が悪い訳なのだが

「あれ？ 言い方悪かったかね……ロリ巨」

「食らええっ！！」

「ふべらっ!？」

すると突然健太が勢いよく教室の床へと倒れ込む。丁度そこにはエルフィがかき集めたゴミが溜まっていたので、起き上がったときには制服にゴミが沢山ついていて

それを払って健太は後ろを振り返り、俺とエルフィもその方向を見てみた

「ちよつと佐々木。校内で卑猥な発言は止めておきなさい。風紀委員に差し出すわよ」

そこには我がクラスの俺と同じ役職を持つ人物、笹原綾香が立っていた。というか風紀委員ってアンタの事だろーが口にしたら怒られそうなのでやめておいた

「で、大丈夫エルフィ? さっ、ここから離れましょ」

「えっ、で、でも……」

「あゝ……ゴメン。まあ……っ、いいわ。その代わり何かあったらすぐに叫びなさい」

「あ、はい……」

何があつてどうしてこうなるのか説明いただきたい所だ。理解出来た最後の部分だけだぞ

まあ人間知らない方が良く事は沢山あるらしい

「……綾香」

と、ここで先程起き上がって制服についていた埃をはたき終わった健太が笹原さんに話しかける。なんだか最近健太が「綾香」と呼

ぶごとに聞き慣れてきてしまった気がする。本当はこの2人付き合
っていたりしないのだろうか

「学校で名前で呼ばないで頂戴。で、何？」
「……………」

急にその場が静まりかえる。教室内では多少ざわつき始めた
なんだこのシリアスなシーンは

窓から、穏やかな風が流れ込み、やがてその風は教室の廊下へと
吹き抜けていく

「……………」

依然として2人は固まった状態だ。クラスの皆はそれをただただ
見つめている

2人の額から汗が流れ始めた
ただただ沈黙の状態が続く

「……………」
「……………綾香」

再び健太がその口を開いた。そして

「…………エルぼんより無いからって嫉妬するな」

ガスッ！！

「な・ぐ・る・わ・よ・？」

「殴ってから言ったーっ！！」

いや、そりゃそうなるわ

ってなんだよ！ さっきまで嫌な空気だったのに言うことこれかよ！ ガツカリだよ！

……俺は何に期待していたのだろうか

ちなみに笹原さんは Wars で使うような武器、健太と同じような手甲を右腕に装備している。どうしてそんな物を持っているのかは誰も真相を知らない

「それより早く掃除の続きしなさい！ ここが終わらないと帰れないのよ！？ みんなが困るじゃない！ それとみんなも見てないで早く続きしなさい！」

笹原さんの一言で、教室の外から見ていたクラスメイトたちが戻っていき、教室内にいたクラスメイトたちも掃除を再開する

「綾香……」

「……なによ」

正直な話俺も「いい加減にしてくれ」と言いたいところだが、もしかしたらもしかする場合もあるので、ここは見届けることにしてみた

再び教室を静寂が包む

2人は見つめ合ったまま動かない

2人の額から汗が流れ出す

そして

「……ちなみにスリーサイズはいくつだ」

「79・63・8 　って何言わせるのよこのアホおおおおおっ

「!!」

『うおおおおおおおっ!!』

……教室外で男子が沸き上がっていた

まあ、健太がこの後どうなった、と言うまでもあるまい。一応言うが、笹原さんの右ストレートが健太の脇腹に直撃し、そのまま教室の窓側の壁へと激突して崩れていった
もちろん気絶した

そして恥ずかしい事を口走ってしまった笹原さんは、真っ赤な顔をした状態で教室から出て行き、クラスメイトの女子がそれを追いかけてこっそり観察したところ、女子トイレの個室へと入り込んで1人で泣いていたらしい

その時に言っていた言葉は、『アタシ……これでお嫁にいけるのかしら……』らしい

更に更に捕捉。『そんなの後で聞けばいいじゃない。健太のバカア……』なんて事も言っていたそうだ。もうこれは笹原さんは健太の事が好きと見て問題ないだろう

……これを笹原さんの前で言ったら怒られる　いや、殺されてしまつに違いない

教室の端で気絶している健太を見つつ掃除を再開する。教室内にいる生徒からは残念そうな視線や、蔑むような目をしている女子、敬礼をしている男子等がいた

「あ、あの神崎さん……」

「ん？」

憐れな健太を見ていると、エルフィに話しかけられた。振り返ってエルフィを見てみると、赤い顔をしながらモジモジしているエル

フィの姿が。一体どうしたのだろうか

……普通こういう状態の人を見ると、トイレに行きたくなった小さい子供、告白をしようなんて思っている女子、なんて物が想像されるに違いない

結論から言うとエルフィは俺に告白してきたのだ

勿論俺はその言葉に驚愕した

まさかエルフィがそんな事を言い出すなんて誰が想像したことがなんで？　なんでこのタイミングで？

ここは教室だ。しかも他の生徒（主にクラスメイト）が見ていると言つのに告白するのか

エルフィは、エルフィは……

「……わたしは92・63・88です……」

……驚愕した。掃除中に、教室で、俺に、エルフィのスリーサイズを、エルフィの口から、何故か。俺に告げてきた。もちろん教室内のみんなに聞こえるような声で

教室内にいるクラスメイト全員（俺含め）が、目をパチクリさせる。エルフィは顔を赤くして目を固く閉じたまま下を向いている。いやいやいや何ぶっちゃけてんだよ！　恥ずかしいなら最初から言つなよ！　嬉しいけどその情報は今いらねえよ！　ほれ見ろ！　クラスの女子がジト目で俺の事を見始めたじゃないか！（男子は軽蔑の目）

「……エルフィ」

「ひゃ、ひゃいつつ！！」

エルフィは下を向いたまま返事をする

俺はため息をつきながらこう言った

「……バカか」

その後大掃除は順調に進んでいき、教室は見違えるほど綺麗になった。その後帰りのHRがあつて1日が終了し、それぞれが家路についたり部活へ向かつていたりした。今日は俺たちwars部はいろいろあつて休みとなり、全員が家路についていた

エルフィはHRの間、真っ赤に染まった顔を両手で覆っていた

突然だがなんとということだ。今日は終業式だというのに。早く帰れる日だというのに

結論から言うと身体が動かない

このような話をすると、まず皆が思い浮かべる物と言ったら金縛りであろう。身体が動かなくなるとかいう現象だ。爺ちゃんの経験談を聞くと、呼吸すら難しくなったらしい

どうやら俺は呼吸は安定しているようで、別に気持ち悪いとか体調の変化はまるでない。至って健全体だ

金縛りに遭っていて健全と言つのはちょっと駄目だと思つが、とうかここまで言つたらわかるだろうが、一応金縛りなんかではない。既視感を感じて仕方がない

多分このような現象は2ヶ月くらい前にもあつた気がする。とうかあつた。なんか2日か3日連続でこのような事が起こっていた気がしてならない

まあ最後は悪夢で済んでくれたのだが

とりあえず今俺は動けずにベッドの上で仰向けになっている。――

応言っておくが、発言はできるらしい。……出来ない方が困るのだが

さて、自分の現状についての説明は終わったので、そろそろこの現象の原因を取り除かないと行けないらしい。起きてから20分間この状態でいたので、さすがにそろそろ身体の半分から下が痛くなってきた

なんとか動く右腕を自分の腹の方へと運んでいく。そして俺の腹の上に乗っかっている物を軽く叩きながらこう言った

「……おい明日香。起きろ、朝だ」

「ふえ……?」

……上に乗っかって寝ていたのは明日香だったのだ。デジャヴ

というか前々から思っていたのだが、何故こいつの寝顔はこう可愛らしいのか。いつもはあんな怖い顔(?)をしているのに、寝顔と寝起きは何処をどう見ても可愛いとしか言い様がない。こう発言しているとなんか誤解されそうなのでやめておく

寝起きの明日香が半眼でこちらを見る

「まこと……? そうかぁ……あさかぁ……おはよう」

「ああ、おはよう」

とりあえず挨拶されたので返事をする。寝起きで呂律が回っていない

「ところで……なんでおまえがここにいるんだ? もしかしてじい
か?」

「何を言ってるんだお前は。何が事後だ。お前が勝手にそこで寝てただけだろ。というか何故ここにいる。というかどうやって入って

きた」

寝起きで頭がちゃんと回転していないだろう明日香に質問攻めをしてみる。もちろん寝起きの明日香には全部答えられるはずもなく、俺の上で再びウトウトし始めた

左にある時計を見てみる。とりあえずまだ時間は少しある。早く起こして準備しますか

「って、おい明日香。再び寝るな」

「ふにゆう……」

なんつー寝顔だよ

試しに人差し指で明日香の頬を突いてみた。すると明日香は、痛かったのか小さく唸りを上げる。そして再び目を開く。もちろん半眼

「まことお……いたい」

「だったら起きろ。学校だぞ」

「……わかった」

やっと了解してくれたのか、明日香は俺の上から降りてベッド横へと立つ。纏めていない長い髪が、重力に従ってスラリと下に落ちていく。太陽に照らされた赤い髪が、今明日香が来ている白いワンピースと綺麗なコントラストを描く

……というかちょっと待て

「おい明日香！ なんでお前ワンピースしか着てないんだよ！ というか短すぎね!？」

「……え？ だってあついし……」

いや暑いことは俺もわかってる

「だからと言ってワンピース1枚と……う……ぱっ、パンツ1枚だけはないだろ！」

これを言うのに相当恥ずかしかったりする

そう。今の明日香の格好は、ミニスカくらいの長さまでしかない白いワンピースと、（白の）パンツが1枚だけ。しかも着ているワンピースがボタン式で、上3つまでが開いている。というわけで中の肌が見え見えな訳でして……

「まあまあおちつけまこと……ちょっときがえるからまっててくれ

……」

「や、やめるバカ！」

慌てて明日香に手を伸ばす。その判断が遅れたので少し間に合わなかった。自分が明日香の腕を掴んだときには明日香のワンピースが床へと落ちていた

「まこと……？ ちょっと、これははずかしい……」

その一瞬だけをモロに見てしまった

明日香の髪の色とは対照的な、普段なら外側に晒されることのない白い肌

普段なら下着と服で隠れているであろう、小さい胸

……俺は何を見ていたんだ

「ぱっ、馬鹿！ 早く服を着ろ！」

「でも……まことがうでをつかんでるから……」

ガチャ

「「「……………」」」

俺の部屋の扉が突然開いた。もちろんその音を聞いた瞬間に俺たち2人は固まる訳でして……

2人で扉の方を見てみる

「……………神崎さん？ 明日香さん？」

この場での約束である人物、エルファイが入ってきた

エルファイは固まった表情のまま扉を閉める。そして大きな深呼吸が聞こえたかと思うと、再びゆっくりと扉が開かれた

そして俺たちの現在の姿を見て顔を真っ赤にし始めた

……………言い忘れたが、俺もトランクス1丁とタンクトップだけだったりする

「あ、朝っぱらから何やってんですかああああああああっ！

！」

「落ちて着けエルファイ！ これは誤解だ！」

エルファイが珍しくTEMMを起動して銃を取り出す。でも銃弾が入っていなかったのか、乾いた音しか聞こえてこない

それを仕舞ったエルファイはこちらへと歩み寄ってくる。それはもう暗黒のオーラに包まれていて、ふらりふらりと……………まるで悪霊とかそんな感じのイメージを与えてくる

「誤解だエルファイ！」

「え……………さっきじい」

「事後……ですか。……あはは」

俺は事後だと言った覚えがまるつきし無いのだが
エルフィは暗黒オーラを纏った状態でとびっきりの笑顔を作っ
てくれる。俺もその笑顔に作り笑顔で返してみた
というか明日香はいつまで寝ぼけているんだ

「なんで……」

「え？」

笑顔の状態のエルフィが何かを呟き始めた

「なんで……なんで事後って認めないんですか！ もうやっちゃっ
たんですよ！？ そうなんですよね！？ 答えてください神崎さ
ん！ もう……もう明日香さんとは……身体の関係になっちゃっ
たんですよ！？」

笑顔を解いたと思えば、今度は泣き顔になって訴えてくる。だか
らそれは誤解だ！

「どうせ……どうせわたしはそれまで女だったんですー！！！」

「ちょ、ちよつと待てエルフィ！！！」

エルフィは泣いたまま俺の部屋を出ていった

明日香はその10秒後にお目覚めし、ちゃんと着替えさせてから
（勿論俺は後ろを向いたが）リビングへと向かった。そこには笑顔
の状態の両親と、泣き目をしながらこちらを見るエルフィ、苦笑い
しているwars部1年が集結していた

……説得するのに朝食を抜いた

朝食を取り終わり（俺は食ってない）、良い時間になったので全員で家を出る

「すみませんでした神崎さん……」

「いや、こっちが誤解するようなことを　　というか明日香。お前が謝れ」

「何故私なのだ」

「お前が俺の部屋で寝てたのが悪いんだろ」

家を出て即こんな話に繋がってしまう。さっき事情説明はちゃんとしたので、もう変に繋がる心配はないはずだ

……それでも両親は結構壁が高かったが

「う……す、すまんエル、真筆」

「……頼むからもうあんな事はやめてくれよ？　特に女子4人」

俺がそう言うと明日香以外の3人の身体がビクツと反応していた。そして琉華と望の2人は笑顔で振り向き『そ、そんな事するわけないじゃないかあ』……明日香じゃあるまいし』と言っていた。一方エルフィは『だ、大丈夫ですよ』と言っていた。どうも信用できない反応だ

それはさておき健太と光久。俺たちを置いて先へ行くな

「いやしかし……明日から夏休みかあ」

「そういえば課外ってあったっけ？」

健太の発言に琉華がそう返事をしてしまう。その言葉に健太がビ

クツと反応した。まさかとは思うがコイツは課外対象者か？

「い、いや……まだ知らされてないし大丈夫……なハズ」

「……大丈夫も何も昨日には知らされる形になってる。……だから佐々木は課外対象者じゃない」

「うおっしっ！」

望の言葉にガツポーズを取る健太。その顔はとても嬉しそうだった

夏真つ盛りの都道を7人で歩いてゆく

「なあみんな。夏休みって家族で出かけたりする？」

しばらく沈黙の状態だったのを破ったのは健太だった。その質問には答えられない人物もいる訳でして

「拙者は……京都へ行く予定があったはずだ。確か8月の終わりだっただろう」

「へえ京都かあ……いいなあ……あ、ボクは今のところ予定は無いかな」

どうやら光久は京都へ行くらしい。そういえば俺は京都に行ったことが無いような気がする。中3の修学旅行は北海道へ行ったから……他の中学では京都が多かったらしいが
まあそれはそれだ

「……私はちよつと外国」

「うおっ！ マジか！」

「……明智と同じで8月の終盤になると思っ」

「多分わたしもその頃にイギリスに戻 行ってくるかと」

望とエルフィは外国か……羨ましいの一言である
……姉貴もなのだが（アメリカ）

「で、真箏は？」

「あゝ……俺はまだ予定は入ってないな」

健太に聞かれたのでそう答えておく

そして一瞬の隙に明日香の表情を確認してみる。少し暗めの表情をしていたが、俺が見ているのに気がいたらしく、すぐにいつもと同じ表情に戻っていた

「鶴は？」

「わ、私も特に予定は入ってないな」

「ふむ……」

健太は明日香の返事を聞くと同時に顎に手を当てて悩み出した。
一体なんだと言うのだ
とりあえず聞いてみた

「いやなあ……実は8月の終盤にちょっとした計画を立ててな。
だから」

「行きます」「……行く」「相伴に預かるう」

「なんだよ！」

なんていう反応だコイツら

まあ気持ちはわからなくもない。最後に思い出でも作っておきた
いのだろう。俺でもそうしているハズだ

「でもそれだと家族の人に悪いんじゃないか？」

俺がそう言ってみる。だがこの3人、考えが普通じゃなかった気がする

「それがどうしたんですか？ 予定をずらせばいいだけの話ですよ」

「……時間を調整すればいい。……仮に重なったとしても説得する」

「元より行かなければ良いだけの話故、是非とも行かせていただく」

……この3人は……いや、このwars部ってヤツは……

若干感動を覚えた

「そっか……じゃあ……ま、色々決まり次第全員に連絡回すわ」

健太がそう言っつて話を打ち切る

それを言ったのはもう学校周辺だったので、同じ制服を着た学生が多くなってくる。そしてその5分後、俺たち7人は学校へと入っていった

「な・が・か・つ・た・」……」

「そ・う・だ・な」

「キモイぞお前ら……」

現在放課後の部室。なんだか色々割愛した気がするが、割愛という事にしていただきたい

とりあえずなんでこんな所にいるかというのは……嫌でも予想がつくであろうが、一学期終業式とLHRが終了したからここにいる

本日学校内（部室を除く）にいた時間は、多分3時間も無いはずだ。終業式は暑いからという理由でかなり早く終わったのだ。そしてLHRは通知票の伝達と夏休みに関する注意事項を聞いて終わり……それで長く感じたというのはどういうことなのだろうか

「まあいい。これでは1年5組の2人か？」

奥のソファに座っているwars部部长こと、西宮雄太が言う。部長の言うとおり集まっているのは1年2、4組メンバーと部長の6名。要するに来ていないのは琉華と望だ

部長はあの関東大会の後どうなったかというと、やっぱり今までと同じようにwarsには参加していない。だが先生から話を聞く限り、少しずつ努力は始めたみたいで、俺たちが帰った後1人で模擬戦をしているらしい。真か偽かはちょっと不明なところ

「つつたく……たださえ風通しが悪い部室なんだから早くしてくれ……早く用件済ませて帰りたいんだよ俺は……」

とうとう部長がソファに横になる。その額にはプツプツと汗が光って見える

ちなみにこの部室の風通しが悪い理由はただ1つ。そういう場所に立っているからだ

1年前まではクーラー設置がされていたが、去年の都北大会前の事件が原因（ちょっと違うが）でクーラーを外され、日当たり風通し最悪のポジションへと移動させられたのだ

wars部のあった場所は、現在野球部の部室が立っていたりする

しかし……用件とはなんだろうか

「お、いい質問だな神崎。それは全員揃ってからの楽しみだ」

……心を読まれた

と、その次の瞬間、部室の扉が鈍い音を立てながら開き出す。そこには我がwars部顧問兼1年4組担任の梅花哲也が立っていた。基本ここには来ない顧問なので、結構珍しい

「おせえぞ梅花」

「教師を呼び捨てにするな西宮」

……この2人、本当にどういう仲なのだろうか

「って、梅花先生、本当にどうしたんですか？ 珍しいですね」

先生の前だと態度が変わる明日香がそう尋ねる。俺もそのことを尋ねようと思ったが、急に銃弾が頬を掠ったのでやめておいた

「あ……まあ西宮に呼び出されたと言うのもあるんだが……残り
の2人が来たら話す」
「呼びました〜？」

と丁度いいタイミングで琉華と望が入ってきた。正確に入ってきていないが（扉の前にいる先生の後ろに立っているらしい）

「おっとスマンスマン」

「……早く先生も席に着いた方がいいと思う」

先生が扉の前から少し離れると、琉華と望がいつも座っている椅子へと腰掛ける。一方先生は胸ポケットから小型のカプセルを取り出して展開させた。どうやら展開型デスクチェアらしい

「ソファだと場所を取るからな」

……ソファも持ち合わせているらしい

「そんなことはどうでもいいぞ梅花。まあ、今日集まって貰ったのは他でもない」

「いつも集まっていますけどね」

銃弾が横切った

「お前は一言余計だ神崎。……で、まずはエストラント。お前に1つ聞きたいことがあるんだが……」

そう言った部長はエルフィの顔を見る。それと一緒に先生もエルフィの顔を見る。当のエルフィは状況がわかっていないのか、あたふたしていた

「別荘つてあるか？」

なんていう質問だ。エルフィがそんな物を持っているわけ

「ありますけど……」

『あるんかい!!』

「え、ええっ!? って、ああっ!!」

その場にいた全員でエルフィにつっこんだ。何故かその中には質問を出した部長と先生までもが含まれていた

そして質問に答えたエルフィは更にあたふたしていた

「い、いえ今のは冗談なんです！ ちょっとした出来心だったんで

す！ 別荘があるっていうのは実は嘘で、ただの出来心で冗談が言ってみたかっただけなんです！！」

動揺しすぎていて、嘘だというのがバレバレだったりする
とりあえず気になったのが、何故嘘をつく必要があるのか、だ。
でも聞いても答えてくれそうにないのでやめておいた

「さて……エストラント、済まないがその別荘、借りられないか？」
「だ、だから嘘……」

その『嘘』という言葉に反応した部長は、ポケットから小型の機械を取り出した。その機械にはゲージがあって、そのゲージはレッドラインを振り切って壊れてしまっていた

「う、嘘発見器……」

「……見ての通り、この機械が壊れるほどわかりやすい嘘だったと言うことだ……済まん。マジで許してくれ」

「……はうあ」

「エルフィー……」

エルフィーがその場で倒れてしまった

エルフィーが倒れてから5分後

「うう……バレたなら仕方ないです。でっ、でも部長、それを何に使う気なんですか？」

「ああ。えくとだな……」

部長がポリポリと後頭部を掻きながらこう言った

「……我々弦巻高校 Wars 部は8月1日〜4日の間の4日間、強化合宿へと向かう！」

『おお』

「って、反応それだけか!？」

珍しく部長が大声を出していた(さっきのつつこみ除いて)

その部長の案を聞いて、手を挙げた人間がいた

「なんだ佐々木」

「え〜と……海ですか？ 山ですか？」

「だ、そうだエストラント」

なんでエルフィに振った ってああ。そういうことだったのか。さっきの部長がエルフィに対してした質問の意味がやっとわかった

「え、な、なんでわたしに あ、あ、ああ……えっと、山です」

「……近くに水辺は？」

「確か湖と小川があったかと……」

「……なるほど」

その答えを聞いた健太は、朝と同じように顎に手を当てて考え出した
しばらく沈黙状態が続き、最初に口を開いたのは琉華だった

「しばらく沈黙状態が続き、最初に口を開いたのは琉華だった

「えっと……合宿ってやっぱり……」

「さっきも言ったとおりだ。強化合宿でお前らを鍛え直してやる」

「本音は？」

「……運動部って言ったら合宿だろコノヤロー……」

部長の本音を聞くことが出来た

というかそんな理由で合宿を野郎なんて言い出すとは……

「ま、まあ俺の本音は置いておくとしてだな、お前らを強くするために開くって言うのは事実だ」

そう言った部長は一枚の紙をテーブルへと置く。そこにはスケジュールみたいな事が書かれていて、「何時から何時」「といった感じに書き込まれていた。多分若干の修正が加えられたりしていくのだろう」

「で、30日にここの機械を目的地にTEMMで転送しておきたいんだが……全員その日に集合できるように。それと各自で準備は進めておけよ。後の細かいことは決まり次第俺から全員に連絡する」

部長は立ち上がって部室の入り口へと向かう

「さてと、この俺からこんなチャンスを頂けたんだ。ありがたく思えよ？……覚悟しておきな若人たちよ」

そして部長は部室の扉を開いて出て行った。その際『今日は解散な』と言っていた

取り残された部員と先生が顔を合わせる

「さて……それじゃあ俺もそろそろ職員室に戻ることにする。お前たちも西宮の言っていた通り、今日は帰ってゆっくりしておけ。……あとエストラント、お前は後で1人で職員室に来てくれ」
「あ、はい」

そして先生も立ち上がって部室を出て行った

再び全員で顔を合わせる

確かに部長の言っていた通り、これは自分たちが強くなる良い機会だ。「覚悟しておけ」と言う台詞が気になったりもするが……でも覚悟は全員出来ている目だ。多分大丈夫だろう

俺たちも席を立ち上がって部室を後にする

そして、まだまだ予定の決まっていない夏休み、“Summer Vacation”が始まった

#33 一学期終業式（後書き）

最後の“Summer Vacation”は言ってみただけです

ごめんなさいorz

さて、話は変わりますが、現在自分の活動報告ページにて、作品の裏話などを掲載中です（と言ってはまだ1つしかありませんが）

本編や前書き後書きでは載せられなかった、あるいは載せなかった物も掲載するかもしれません

気が向いたらそちらのほうも読んでみてください
ではまた次回w

#34 夏休みと言う名のWonderland?

7月21日

「いやあ……学校が休みつていいことですねあ……」

「ああ……今回はかりは同意見だな……」

俺と健太は冷房がガンガン効いている市立の図書館にいたりする。ちなみに何故ここにいるかという……一言で言つと色々あつた。現在ここにいるのはwars部の男子3名のみ。要するに俺、健太、光久の3人になる

女子4人+1人は隣町のショッピングモールに行つたらしく、昨日あの後誘つてみたがすんなり断られた

言つたら悪いが、女子がいないとかなり静かだ

「なあ真筈……そついや光久つてどこ行つた？」

「ん？ あ……ん？ あ、いた」

健太にそう聞かれたので、つい5分前にこの場から立ち去つた光久を捜してみる。すると歴史関連の本が置いてある棚の前に立つていた。こんな日にお勉強なんて死んでも嫌だ

ちなみに宿題の量が半端ねーです。夏休み用ワークが3冊（1冊当たり80ページ）、表裏印刷されたプリントが3枚（B5サイズくらい）、理科の自由研究（小学校か）、読書感想文（これも小学校か？）、その他諸々。どうにも夏休み中に終わる気がしない

こつやつて図書館に涼みに来てるんだつたら勉強しるとでも言い
たくなる（主に健太）

「そう思っただったらお前も勉強しろよ」

……どこかに超能力関連の図書はないだろうか

「しっかし……もう夏休み入ってるんだよなあ……思えば一学期終わるの早くなかった？」

「それもそうだよなあ……入学して、強制入部させられ、危機にさらされ、練習試合を……」

4月の話だ

「……強制入部させられた真筆は、今現在Wars部に自ら留まっているわけですが」

「ほっとけ」

「で、その後か。都北大会あったな」

「ああ……なんだかエルフィと琉華がちょっとヤバくなったけど」

「あれって結局なんだったんだよ」

「聞かないでくれ……」

5月の話だ。あの月は色々大変なことがあった気がする
それも今となってはいい思い出だが

「まあ……4位で終わったんだっけか？」

「そうそう。で、その後文化祭で」

「……最高だったぜロミオ」

「うっせえ農民」

あの時の笹原さんと健太の仲が良い感じだった
ちなみに笹原さんはまだデレない

「……お前はアレにデレて欲しいのか」

「なんとというか……見てみたい」

「はぁ……言っとくけどさ、僕は綾香の事はどうも思っていないからね？」

「嘘こけ」

なんだか否定するところが怪しく思えて仕方がない

視線を健太から外して光久のいる場所をしてみる。さっきから変わらず本を探していて読み始めない。一体何の本を探しているのだろうか

後で手伝おう

「その後に県大会だったな」

「琉華のお兄さん……アレ怖かったわ」

「お前結構絡まれてたな」

「……………」

あの人は一体何を伝えたかったのだろうか。そしてなんだっただろうか

ま、気にしてもしょうがない

「……なんか嫌な事思い出したわ」

「黙れ。そもそもお前が発案したんだろが」

「最終的にはお前もガン見してた訳だけどな」

「……………」

正論過ぎたので言い返せなかった。自宅で起こった覗き事件である
そう言えば望のあの言葉は……

気にしていても仕方のない……事ではないな、うん。今度返事するか？ でもなあ……

ま、いいか

「……それってどうでも良くない気がするのは僕だけだろうか」
「どつという事だ」

本当に超能力に関しての本を読もう

「その後は関東大会で……」

「第一回戦の日に真箏は唇を」

「うっ……」

「おっと顔が赤くなりましたな」

無理もない。初めてを奪われた訳なのだから……意識しないはずがない

かと言って穹の事が『好き』と言うわけではない。普通に友達であり幼なじみの関係だ。穹と俺は不釣り合いなわけです……

「だったらそんな事しないだろーが」

「ん？ 何か言ったか？」

「……なんでも」

健太が小さく何かを呟いていたのがかなり気になってしまった

「しかし……光久にあんな力があつたなんてな」

「……リアルタイムで見ていた者にしかあの迫力はわからねえよ」

「いや、逆にいなくて良かったと思ってる」

サラッと酷いことを言っていた気がするのだが

「その後か……」

「部長……」

2人で黙り込んでしまう。まさか部長にあんな過去があつたなんて誰も知るわけがない。それを……俺たちは聞いたわけだから

でも部長は変わり始めた気がする。話してスッキリしたのだろうか……まあ人の心はわからない

「ま、まあ……今は夏休みを満喫だな」

俺が気まづくなっていた空気を元に戻そうと発言する。すると健太は怯えた表情をし始めた。全く、人の顔を見て怯え出すとはコイツはどんな神経をしているんだ

なんて事を思っていたら、こめかみにヒンヤリとした何か突きつけられた。うーん、この感覚何処かを感じたことがあるぞ。まるで部長が持っている銃のような……

左を見たら本当に銃口が突きつけられてました

「ひいっ！」

それを見た瞬間に慌てて距離を取る。そして銃の持ち主を見ると、見知った顔がそこに立っていた

「全く。本人がいないときにその人物の悪口を言つとは……中々やるじゃないか神崎、佐々木」

「ぶ、部長……いたんですか」

我らが弦巻高校 Wars 部部長の西宮雄太が立っていた。が、しかし。その後ろ（と言ってもしかかなり後ろ）にも見知った顔が2人。こちらへと向かってきていた

「はぁ……図書館だから発砲できないって言うのが辛いな……」

「要するにその銃で俺の脳天を貫通させるつもりであったと？」

「そうなるな」

「涼しげな顔をしてそんなことを言わないでください」

物騒な御方だ

「それはそうと……なんでいるんすか」

「何を言うんだ佐々木。お前たちアホの集団と違って俺はお勉強をしに来たんだ。どうだ？ 偉いだろ？」

「わーすごい。えらいですねー、よくできましたー」

「……お前ら合宿の時どうなるか覚えておけよ」

どうやら怒らせてしまったらしい。しかも棒読みだったのがマズかったかもしれない

さあ合宿の時が楽しみだ

……多分殺されるのだろうか

なんて事を考えている内に遠くの方から向かってきていた2名が部長の後ろに立つ。もちろん見慣れた顔である

するとその内の2人が口を開いた

「酷いじゃないか西宮君。急に早歩きになったかと思えば」

……あれなんだろう。どこかで見覚えのある人……

「おお丁度良いときに来たな。神崎、佐々木、紹介しよう。俺の奴隷の中の奴隷を極めた奴隷、《ザ・奴隷の極み》の称号を持つ人物、どれいかわ奴隷川クズだ」

「その紹介はあんまりじゃないかい!？」

「……図書館ではお静かに」

「……………」

俺の中で可哀想な人物No.1にランク付けされている人物、奴隷川クズだ（本名：吉原拓人）。もうそろそろリストカットとか始めそうな感じがしてならない

「まあ冗談だ。俺の友人をそんな酷い名前で呼ぶわけがないじゃないか。……クズ」

「クズって普通に言ってますけどね」

「まあな」

その後2人で大笑い

……図書館で働いている人に怒られました

先輩たちが加わって5名になったので、2回にある多目的ホールで一服する。ここでは下の図書館と違って大きな声で会話が出るので、何気に人が多かったです

ちなみに光久はまだ下で本を探している

「で、部長たちは勉強しに来たんですっけ？」

「ああそうだ。このクズが勉強教えてくれと泣きついてきたものでな」

「あれ？ それって雄太じゃなかったか」

「黙れ美里」

「どうやら泣きついたのは部長の方なのかもしれない。ということ
は吉は　クズは部長より成績がいいという考えが出来る

「まあ確かに俺たちに負けるようなレベルじゃアレすぎる。せめて
Warsは出来なくとも勉強くらい出来るようにしておこうという
考えなんだな

「……なあ神崎。一応言っておくがな、コイツの実力はお前の想像
しているものより凄いで」

「確かに……拓人が本気出したら神崎君は瞬殺かもしれないな」

「どうやら心を読まれたらしい……が、なんだか2人がありえない
ことを言っている。だったらなんで俺たちに負けたんだ。どうして
そんなことが言えるのか事情説明していただきたい

「ふっ、よく聞いて　いや、考えてくれたね神崎君！　そうさ、

「僕は実力の半分以下しか出してないのさっ！　その理由は　」

「華麗に決めるため実力を押さえててな。本気でやると華麗じゃな
いとかがほざいてるから19位になってるんだよって話だ」

「西宮君！？　ちよっと人の言おうとしていた事を言わないでくれ
るかいい！？」

「……いや、長いから駄目なんでしょ」「」「」

「その場にいた先輩以外の4人がそう言うと、左手で目を擦り始め
た。多分涙が零れ始めたに違いない

「そんな憐れなクズを見ている途中、部長は顎に手を当てながら何
かを考えていた。そして閃いたような顔を見ると同時に顎から手を
離し、俺と健太を見て喋り始めた

それはもうとんでもない提案で

「お前ら、今から哉町高校行くぞ。拓人と美里の本当の実力を
見せてやるよ」

「へ？」

「は？」

いきなりの話すぎてついていけない俺たちと、いきなりの話すぎ
てとまどう先輩たち。でもその5秒後、先輩2人は『ニヤリ』と言
った感じに唇を上げてこちらを見る。多分本気で来るのかもしれない

「会場は今言ったとおり哉町だ。今からすぐ行くぞ。ちゃんと明智
も連れて来いよ」

そして部長たち3人はこの多目的ホールから出て行く。それに続
いて俺と健太も出て行き、下の図書館へと戻る

光久を捜し始めるが中々見つからず(5分)、最終的に外で待た
せていた部長たちにも捜索を手伝って貰った

……光久はどうやらトイレにいたらしかった

ところ変わって

「いやあ……いつ来ても広いよね、ここ」

「……すぐに迷子になれる」

「近藤さんは迷子になりたいんですか？」

「絶対違うと思うぞエル」

「まあまあ。それにしても……なんかありがと。わたしの買い物に付き合ってもらってさ」

ここは隣町のショッピングモール。その名も《ファンタジア》。ネーミングセンスがどうも沸かない隣町のショッピングモール。わたしは学校帰りに友達とよることが多いからここは慣れていても弦巻高校女子4名はどうだろうか？ 通学路とかそういう訳ではないし、来たことが少ないかもしれない。だからここはわたしがしつかり道案内を

「それはさておき……一体何をかうんですか？」

「え？ いやあ何言ってるのエルフィ。昨日も言っただじゃん季節物をかうたってさあ！」

「え、ええ。でも具体的に何をかうのかなあ、って」

「エル……夏の季節物って言ったら水着しかないでしょ！ 夏だよ！？ もしかしたら海に行くかもしれないんだよ！？ 勝負時だよ！？ ってボクも負けるわけにはいかないんだけど！」

ボウッ

なんだか琉華の発言と共に周囲3名の目に火が灯った気がした。そんな感じの効果音と共に……もちろんわたしもその1人だったりする

確かにここに来た理由は水着をかうっていう理由もある。でも季節物だけと言うのは嘘だ。ただただ本当に自分が欲しい物を見に来ただけであって、買い物はついで。No.2だ！

……真筆は覚えているだろうか

「らさん！ 穹さん！」

「えっ、な、何エルフィ？」

「皆さんが藤堂さんの発言で先に行っちゃいましたよ！早くわたしたちも行かないと手遅れになっちゃいますよ！」

エルファイが慌てたような声で入り口の方を指さす。するとそこにはダツシユで入っていく3人の姿があった

人は熱中すると周りが見えなくなるとか言うけど……あ、明日香が転んだ

わたしとエルファイも一緒に走り出す。あの3人には負けられないような物を買って……それで……

あれ？　なんだか自分も水着を買う気になってる？

あ、エルファイが転んだ

「あ………やっぱり中は涼しいなあ………」

「………琉華、はしたない」

現在ショッピングモール入り口付近。走っていった3人もここで待っていて（明日香が足をやったため）、無事に合流する。その場所は電気屋に近かったため、扇風機やらクーラーやらが何台も置いてあって、琉華がその風に当たっていた。『あ』とかやったりもしていた

その様子を温かい目で見守った

……その2分後

「お待たせお待たせ。いやあ夏っていいねえ。こごやって薄着で涼しいしさあ〜」

琉華が上に着ているＴシャツをパタパタと仰ぐ。確かに涼しいけど、ここは人の目があるので止めていただきたい
そう思ったのか、望が止める

「で、まずはどこに行くのかな？」

「水着でいいんじゃないか？」

「……できれば後にしていただきたい」

「なんでですか？」

「……まだ食後。……一点が目立つ」

「」「」「」「」

望の発言に全員が言葉を失う。確かに食後な訳だし、気になるっ
ちや気になる

結局洋服店を回ることになり

「こ、これはどうだ」

明日香が試着室から出てくる。今明日香が着ているのは純白のワンピース。結構……いや、かなり似合ってる

そこに若干の敗北感を感じてしまった

とりあえずこのショッピングモール内で、安くて良い品が売っているファッションセンターにいる一同。軽くファッションショーみたいな感じになっているが、店員の人もノリノリなのかどんと服を持ってきてくれるので、わたしたちもノリノリになってきている

ちなみに現在トップは琉華とエルフィの2人。審査員は店員の皆さんとお客様の一部。言っておくが男子禁制になりかけている

明日香の服を見て審査員が判断を始める。もはやこれはなんだとしか言い様がなくなってきた気がする

ちなみに1人3点までで、30点満点だ。その合計のトップがさつき言つた2人。合計87点だ

『23点!』

「むう……」

これで明日香の合計は78点。3回戦目の結果だったりする

次は望の3本目。ちなみにわたしの3本目は22点で、合計が74点と……ビリだったりする

で

「いやあ……ボクが優勝か」

「うう……僅か1点の差で……」

最終的に5回戦まで行い、優勝は僅か1点差で琉華が1位に輝いた。しかも優勝賞品だとか言つて激安の夏物を2、3枚いただいていた。142点である

……そういうわたしは124点の第5位だった

「ん〜、僅かだけとお金が浮いたなあ〜」

「琉華め……1位になったからって浮かれて……」

ファッションショーを終えたので、店から出てその3分くらい後結構時間も経っていたので水着を見に行こうと言つことになり、現在移動中。明日香は店から出るとすぐに琉華をジト目で見ていた

3位になつただけいいじゃないか……

「……琉華、重かったら私が貰う」

「いやいやいや。これくらい余裕だからね!？」

「藤堂さん、それサイズが小さいんじゃないですか？ わたしなら着られると思うんで譲って」

「ちゃんと160だから！ エルと望には少し大きいから！」

「大きくても大丈夫！」

エルフィの身長はわたしより2cm大きいらしい。そして望はわたしより1cm小さいらしい

なんてどうても良いことを考えながら道を歩く。そして一件の店の前を通り過ぎる

「あ……」

思わず立ち止まってしまった。ショーケースの中に入っている品物に目を奪われてしまったからだ

みんながわたしに気がつかず離れていく。でもわたしはその品を見つめ続ける

頬を緩める

そして頬を緩めながらみんなの元へと走っていく

欲しい物……見つけた！

「こ、これはちょっと恥ずかしいんですが……」

……あれ？ 既視感？

水着を売っている店に着くなりファッションショーの再来。なんだかさっきの店の店員さんがこちらに向かったという情報を回していたらしく、店に着くなり店員さんに拉致されて更衣室前に連れてこられて……現在に至る
もちろん男子禁制になりかけている

「ちょ、ちょっと写真まで撮るんですか！？ さすがに無理って物が……」

「とか言いながら何気ピーズ決めてるよね」

琉華の冷静なツツコミが入った

『写真は後でお届けするんでご住所後で伺いますね』

この店員、ノリノリである

しかしまあ……こうやって見るとき、エルフィと琉華がかなり胸があるように見えてしまう。嫉妬とかなんやらが出てきそうなんだけど出てこない

明日香からは真っ黒なオーラが出てたりしたけど
自分の壁を見てみた

「はあ……」

思わずため息をついた。真筆は大きい方と小さい方、どちらが好きなのだろうか。また揉んで貰おうかな……

この前は望に止められて失敗したけど

すると望がこちらを見てきた

「……仕方ない。……多分遺伝なんだと思う」

「そっか……でもさ望、うちのお母さん、Eなんだよ……」

「………気の毒としか言い様がない」

遺伝って一体何なんだろうか。そんな疑問が生まれた日だった

そして優勝は明日香が納め、この日はあっという間に過ぎていった

「おい健太。哉町の生徒は化け物か？」

「僕に聞くな。なあ光久、どう思うよあの2人」

「………Oh my god」

光久の言語が崩壊した

現在哉町高校の部室内。クーラーも整備されているのでやたら涼しい。いや、涼しいを通り越して寒いかもしれない

部長が16度設定してるんだもん

「どうだったよ神崎。いい負けっぷりだったな」

「そりゃあ今までの戦闘結果を考えたらあななりますよ………というか隠さないで欲しかったですかね」

「仕方ないだろ。変態なんだし」

「そりゃそうですよね」

その後2人で大笑い

図書館の人より迫力のない人が怒っていた

「はあ……ところで西宮君たちは合宿をするらしいね。つまりは相
当本気なんだね西宮君」

「ああ……ふっふっふ……こいつらには日頃のストレスをブチまけ
ると同時にいい演習にしてやろうってな……」

「顔が邪悪だぞ雄太。3人怯えてるぞ」

3人で部屋の隅で震えていたりした

「まあ……言うまでもないだろうが、俺はこの2人より実力は上だ。
要するに今の感じ以上になるから相当覚悟が必要だぞ？ さ、どう
する？」

部長がそんな変なことを尋ねてくる。どうする？ 決まってる、
行くに決まってるじゃないか……

「何を今更……」

「拙者たちは強くなりたからここにいたのであるっ」

「こつちが気合いいれりゃあいだけの話ですよ？ 頑張るっす
よ」

3人でそんな返事をする

それを見た部長は唇を上を持ち上げ、後、1人で大笑いし始めた

「ククク……いいだろう。それじゃあもう一度相手してやれ拓人。
コイツらが気が済むまで本気でやってやりな」

そして3人对1人での戦いが始まった

が、しかし。その日、一度も勝てることは無かった

時は流れる

#35 いざ合宿へ

8月31日、wars部強化合宿を前日に控えた真夏の日。なんだか久しぶりに全員が家に集合していた

久しぶりっていうのはアレだ。最近は男子と女子が別々に遊んでいたのも、全員が集合するのが久々ということだ

ちなみに健太と光久とは毎日遊んでいた。そして3人で特訓したりしていた。そりゃアレに負けたわけですから……悔しさとか色々込み上げてきたので

全員で冷たい麦茶を飲む

「いやぁ……やっぱり全員が集まるっていいよねえ……」

麦茶を一気に飲み干した琉華がそう言う。その言葉に全員が頷く

「……1週間近く顔を合わせなかっただけで随分久しぶりに感じる」
「だなあ……」

望の言葉に全員が頷く

なんだか頷いてばかりだ

「それはいいんだが……明日から合宿だ。用意は大丈夫なのか？」
「……」

「まさか……」

「明日香、それを聞いたらアカンと思うぞ。もちろん全員準備できてるに決まって」

『……………』

していないって感じの顔をしている5名。俺は今日全員が集合する前に持っていく物の準備は出来ている。明日香もどうやら準備が終わっているらしい

……俺は昨日のうちに準備しておけと健太と光久に言ったはずだ

「まあ大丈夫だって。どうせ帰ってすぐに準備できるわけだし」

「そ、そうですね。それに出発は明日の早朝ですから、まだまだ時間がありますって」

「なあ。時間を忘れているかもしれない5人に嬉しいようで嬉しくない情報を教えてやるう。もう5時近いんだが」

なんだかんだでもう5時になってるっていう始末。確かに準備は間に合うかもしれないが、その疲れで明日動けないなんてことのないようにしていただきたいところだ

なんてことを考えていると、全員の携帯電話が鳴り出した。全員メールがこのタイミングで届いたらしい。なんだかすげえ怖いんだが全員で携帯のメール受信箱を確認してみた

『お前ら何やってんだ。一昨日のうちに今日4時に学校集合の令をかけておいたハズなんだが？』

b y部長

パタン

いち早く携帯を見終わった俺が、携帯を折りたたむ。すると他のみんなも読み終わったのか、ポケットにしまい始めていた

さて……これは怒られるパターンだ

全員で顔を合わせる

「……行くか」

「ですね」

全員で椅子を立ち上がる。そして玄関へと向かい、全員が靴を履き替えて外へ

もう夕方だつて言うのに外はクソ暑い。部屋の中がクーラー効き過ぎていたのか、外に出た瞬間に一気に汗が噴き出してきた

「真筆、リビングに用があるんだけどさ、行ってきていい？」

「健太、そうやって学校に行かないなんて事を考えているんじゃないぞ」

どうもコイツの考えていることはわかりやすいというかなんというか……

まあ俺でもそうしたいって言うのは秘密だ

……とりあえず読心術の前には無力同然でした

「そう言えばさ、部長はなんで今日呼んだんだろうね」

琉華が皆がそう疑問に思っていた質問を、答えることの出来ない6名に投げかける。答えが返ってくるわけがないのにそんな事を聞くでない

「明日の打ち合わせか何かじゃないか？」

「とりあえず鶴の案に一票」

「右に同じく」

「……それ以外あり得ないと思う」

「ですね」

とりあえず全員が同意見のようだ。明日の今日で打ち合わせというのはどういうことだ。もっと事前にしておけば良いもの

「まあ着いてからだな」

なんて言っただけその話題を締める。が、それと同時にあることを尋ねたくなってしまう

「なあエルフィ。本当にアレで良かったのか？」

「へ？ アレですか？」

「ああアレね」

「アレ……」

「……アレ」

「荒れ？」

「アレ」

なんだ？ アレアレうるさいぞ？ というか光久、『荒れ』ってなんだ『荒れ』って。『アレ』違いだぞ

発生元は俺です

「確かにそれはボクも思ったよ。どうしてそうなるのかなあ、ってすぐに思ったもん」

「えっと……何度か説明したはずですけど……」

「だからといって本当にソレとは限らないだろ？」

「……左に同じく」

「うっ……でも神崎さんはこれくらいわかりますよね！？ ね！？」

「あのお……読心術を使うことの出来ない俺がそんな超能力的な何かを使ってそんな事がわかる訳ないだろ。そもそもお前ら金出す必要無かったんじゃないか？」

『……………』

「黙り込むな。まるで俺が全て間違っているみたいじゃないか」

『大いに間違ってる』

べ、別に泣いてないよ？ 朝飲んだストレートティーがね？

「まあいい。とりあえず当日に渡せないってのがアレだよ……」

「神崎さんは当日に渡す派なんですね」

「そりゃあ……………」

むしろ当日以外にいつがあるっていうんだ

「とりあえず帰ってきたらすぐ渡せばいいだろう？」

「だな。それで行くか」

話が終わる頃には学校へと着いていた

「さて、まずは理由を聞かせて貰おうか」

そろそろ5時30分だったというこの時間、弦巻高校 Wars 部は全員で部室に集合していた。その理由はまだ聞かされておらず、逆

に部長から遅れてきた理由を聞かれていた
まずは先にそちらの事情を説明求めたいところだ

「聞いたら教えてやる。から答える」

合宿中に超能力についてたくさん調べないとな

「神崎さんの家で遊んでました」

エルフィが正直なことを誰よりも早く口にする。部長は『本当か？』と聞き直してきたが、事実なので全員が首を縦に振ると部長は納得した顔になった

部長は続ける

「じゃあ今日集まることを忘れていたヤツは拳手しろ」

……誰一人拳手する者はいなかった。嘘はよくないぞ！

俺はどうなるんだろうか

「よし、今の質問の回答は全員が嘘だということがわかったので明日からの合宿では俺は容赦なくビシバシ行きたいと思う。と、いうわけで明日からは全員1日3回ずつ戦闘不能になるから注意しろよ。俺を倒せればそれだけ回数が減るからな」

よくまあ嘸まずに言えること

しかし……1日3回ずつ戦闘不能になったら身体が保たないだろう。なんとか凌がなくてはいけないなこれは

「特に神崎と佐々木を重点的に殺るとして」

1日5回を覚悟しておこう

「それはさておき、今日全員に集まって貰ったのは他でもない。エストラント、例のブツを　と言われても出てくるわけがないので用意しておいた。これが明日行く合宿の会場の地図だ。確かここでいいんだっただよな？」

「はい。長野県の山の山頂ですからね。そこで間違いないです」

長野まで行くのか。その時点で初耳だ

「で、だな。もちろん別荘だということまでVWの装置が無い。まずそこはバカな佐々木でも理解できるはずだな」

「待つてください先輩。バカなら僕だけじゃないっすよ」

「そうだな。健太もいたな」

健太が涙を堪えていた

「まあここまで来たら予想は出来ると思う。VW本体をこちらへ転送する」

「部長。俺たちを呼んでおいてそんな無謀な作業を……どうやって転送するっていうんですか。というかあの質量の物をどうやってTEMで転送しろと？　どう考えても質量オーバーですよ」

「何言ってるんだ神崎。その質量を簡単に運ぶことのできるTEMがあるから言ってるんだ」

言い切ると同時に部長はソファを立ち上がる。するとVW本体の所へと歩み寄り、手招きをしていた。それは俺と健太と光久　男子に向けられていた

3人で部長の下へと歩み寄る

「さて、運ぶぞ」
「よし帰るぞみんな」

1発の銃弾が頬を掠り健太の額でバウンドする。どうやらゴム弾だったらしい

でも銃弾は銃弾。額に大きな一撃を受けた健太が床の上で悶えていた。見ているこちらも痛い

「神崎はそこを、明智はそこ、佐々木は……俺と代われ」

「部長、そうやって1人サボろうなんて事はないですよね？」

「何言ってるんだ神崎？サボるとは心外だな。後輩に期待していると云って欲しいところだ」

言い方1つで印象がガラリと変わる物だが、遠回しにサボると言っていると同じような発言にしか聞こえない。というかサボりそのものだ

どこまでダメな部長なんだ

「お前にダメと言われたら俺も相当ヤバイな。じゃあ手伝ってやるでしょう」

……なんて野郎だ

男子4人でVW本体を持ち上げる。見た目通りかなりの重さで、正直4人でも若干辛い物がある

「そっいえば部長。女子は何のために……」

「おっと説明がまだだったな。お前ら女子はTEAMまでの道を確認しておいてくれ。置いてある場所は第3会議室だ。道の確保頼んだぞ」

部長がそう言うと女子は部室から出て行き、瞬間静かになる。その2秒後部長から合図があり、本体を持って部室の入り口へと向かう。だがここでとんでもない問題が発生した。それは部長でも予想していなかった不足の事態とでも言っておこう

ゴスッ

……入り口を通らなかった

「……部長」

3人で部長の顔を見してみる。すると顔から汗がダラダラ出ていた。本当に不足の事態だ
もう一度通してみる

ゴスッ

「おかしいな……寸法は合ってたはずだが……」

ゴスッ

「なんだ？ 入り口が小さくなったのか？」

ゴスッ

「もしかしてこっちが大きくなったか？」

ゴスッ

「計測ミスか？」

ゴスッ

「……………」

ゴスッ

ドスン

『うあああああああ！！ 手が！ 手があああああああああ！！』

「あ、スマンな3人とも」

急に部長が手を離したので、部長が加えていた力が一気に消え去ってその分の重さが機械に帰ってくる。お陰で3人だと力が足りなかったのか、そのまま手を挟んでしまった

ちなみに部長はその様子を見ても平然とした顔をしていた。まだ手は挟まっている

部長は携帯電話を取り出した

「ちょ部長！ 俺らの手を放置して携帯いじるんですか！」

「部長！ マジヘルプ！」

「雄太殿！ 手が！ 手が！」

無視して誰かに電話を掛けている部長

『ぎゃああああああああああああああ！！』

「あ、俺だ。悪いが女子をこっちに戻してTEAMを運んできてく

ね。それと『ぎゃあああああああ』ぎゃあぎゃあうっせえよ!!
あーとにかくだな。頼んだぞ」

『ぎゃあああああああああああ!!』

「……………」

手が！ そろそろ指先に力と言う物を感じないレベルに到達した
んですけど!?!?

「……………」

「部長！ そつやつて見捨ててソファで寝ないでくだあああああ
ああああああ!!」

結局先生がTEMMを持ってくるまで俺らの手は挟まったままだ
った

「健太……光久……なんだか俺の指が赤黒く見えるのは気のせいか
?」

「おお真箏、奇遇だな。実は僕もどうやらそんな色をしているんだ
よ。なんでだろうね光久？」

「I'm sorry. I don't know...」

光久の言語が崩壊した

先生がTEMMを持ってきて約10分が経過しようとしている今
でも指の痛みは消えることなく、それに加え、指の変色が起こって
いた。更には指が自由に動かせないという大惨事になっていた

正直な話先程の説明は間違えたと思う。指の痛みは消えている。
痛点を超えたらしい

もう3人の指先がお茶の間にお届け出来ないような形に変形、色に染まっていた。モザイクを掛けても多分効果がないだろうくらいに

2人の指を見てから部室の奥を見してみる。そこにはVWの機械を一回り小さくした感じのTEMMが置かれていた。アレで中型と言う事実には男子3名は驚きを隠せなかったが

そしてその周りでは女子がなにやら回線やらケーブルやらなんやらをあちこちに接続していて、機械にはシールやらゴム状の何かがつけられていた。破損防止の為の処置らしい

一方部長と先生は何かを話していた。俺たちの事ではなく、明日からの事とからしい

先生なんだから俺たちの事を心配してくれよ

「エル、そっちはどう？」

「もう少しですね。近藤さんは……終わってますね」

「……一番楽な仕事だったし」

「私ももう少しで完了だ」

女子も頑張っていますな

それを眺めていると、部長と先生がこちらへと来ていた

「さてダメ男子共。そろそろ指の状態が危ついと梅花が言っているので、早急に保健室に行つてこい」

「……それ言うの遅すぎませんか？」

「気のせいだ。じゃあ行つてこい。こっちは終わらせておくから、そっちも終わり次第部室へと戻つてくるように」

その言葉を聞き終わると同時に3人で席を立ち上がる。そして動かない手でドアを押し開けて保健室へと向かった

『ひぎゃあああああああ！』

……直すだけなのにとつもない痛さを経験した

そして部室へ帰ってくる

驚いたことに、高内先生（保健担当）は医師としての資格も持っているらしく、保健室に入った途端に処置をしてくれた

処置した数秒後には全治していたが、その後の痛みが激しすぎる。保健室から5分経った今でもかなり痛い

まあさつきよりはマシなんだが

「やっと全員揃ったな。それじゃあ席に座れ」

部長にそう促され、3人が席に座る。右には持参の椅子に座っている先生がいる

部長が口を開く

「さて、明日から合宿な訳なんだが……とりあえず質問があるヤツはいるか？」

「それじゃあボクから。こちらからあちらまで行くための手段を」

「それか。それは梅宮から話して貰うとしよう。それじゃあ頼んだ」

部長から先生へとバトンタッチする。すると先生は文句を言いながら口を開いた

「俺が10人は乗れるであろう車を友人から借りておいた。それで目的地へと向かう」

なんとなく先生の運転が楽しみだ

「コイツの運転はジェットコースターだぞ」

「変なことを言うな西宮」

……楽しみ……だ

「それはさておき、集合場所と時間を説明するぞ」

こうして部長と先生から明日からの説明がされる。そしていかにも手作りって感じのしおりまで渡され、なんだか遠足気分になってきてしまった

説明が終わったのは結局7時30分頃になり、解散の後、すぐに眠りへと落ちた

#36 顧問の実力

8月1日、早朝

「いや、早朝って言うてもこれは早すぎだろう」

思わず自分で考えていることにツツコミを入れてしまった
そのツツコミたくなる原因はこれだ。現在時刻が朝 とういか
夜中の3時30分近く。当初の起床時刻より1時間半程早い
なんだか大会中にもこんな事があつた気がする。とういかこんな
事しか無かつた気がするんだが

とりあえず幸いなことに隣や下には誰もいない

その事は一旦置いておこう。今から1時間半後に起床するはずだ
つたんだが、今からまた寝ようにもどうも寝付けない。人は一度起
きると中々寝付けないものだ

まあ個人差があるが

とりあえず1度起きてしまい睡魔が飛び去ってしまった。なので
寝付けない。だから今から1時間半どうするかを考えてみる。でも
『寝る』と言う選択肢が8割を占めていて、他の選択肢が中々出て
こない。なんて困つた頭だろう

机の横に置いてある荷物を見てみる。そういえば昨日帰ってきた
後すぐに寝たから最終的に準備がちゃんと終わっていないかつたんだ
ベッドから立ち上がって荷物の元へと歩み寄る。そして荷物の前
で腰を下ろし、鞆に入っている物を取り出していく

「これで全部か……あと必要な物は……あ、肝心の武器を」

昨日持ちっぱなしだったので、机の上に置いてあるTEMMと武器を鞆に詰め込む。これで第1の問題は消え失せた
次

「とりあえず……ゲームでも持ってこ」

……合宿に行くのにこれでいいのだろうか

「後は……あ、念のため勉強道具を」

……言うことは何もありません

「我ながら……カオスな荷物だ」

……合宿に行くというのにゲームとか勉強道具とかは確実に必要ない気がするんだが

まあ健太は8割方AVを持ってくるに違いない

一度取り出した荷物を全て鞆の中へと戻す。そして全て戻し終わった後あることに気がつく

「風呂入ってなかったな……」

・以下、割愛・

風呂から出て2分後、一旦キッチンへと向かって冷蔵庫。その中から1本の牛乳瓶を取りだしてすぐに開栓する。そして腰に手をあて　　なんて事はしない

開栓した牛乳瓶を持ってリビングのソファへと向かう。もちろんまだこんな時間なので誰も起きていないハズがなく、いつも朝起きてくると騒がしいリビングはかなり静かだ。聞こえるのは自分の足音のみ。そして外は真っ暗で、東の空が若干薄くなり始めていた

ソファに腰掛け　　ようとした

「はぁ……」

困ったお人だ

頭にネクタイを巻いて、スーツ姿。手にはお土産、もう片方の手には空のビール瓶。まったくいびきをかかないでその場に変な寝方をしているウチの親父がいた

典型的な酔っぱらいの姿だ。これで千鳥足で夜道を歩いてきたいたいところだ

なんて事を心に思ってもそんな光景は一生掛かっても見られそうにないので、心の中からそんな考えを一瞬にして消す

親父が寝ているのを見ながら反対側のソファへと腰掛ける。そして先程開栓した牛乳を4分の1ほど口に含み、すぐに飲み込む。少し時間が経ってしまったので、若干温くなっていた。瓶からは水滴が浮き始めている

でも、風呂上がりの一杯は良い物だ　　なんて爺ちゃんがよく言っていた。確かに良い

神崎真筆、生まれて15年と数ヶ月、初めての風呂上がりの牛乳である

「も、もう飲めないですよ部長」

……多分夢の中でも酒を飲んでいるのだろう

というか親父って酒に弱かったような……？ まあいいか

多分夢の中で飲まされているに違いない

残っていた牛乳を一気に飲み干し、ソファを立ち上がる。そしてキッチンのゴミ箱（瓶専用）へと牛乳瓶をポイする。ビニール袋しか入っていないかったのか、『ガサッ』って音と、『ゴンッ』って音が混ざった音がゴミ箱から聞こえてきた

キッチンを離れて洗面所へと顔を洗いにいく。夜中と言っても夏は夏、暑いので若干汗が噴き出していた。ので顔を洗う

……完全に目が覚めた

なんだかもうここまで来ると何もすることが無くなってしまった。現在時刻は4時を少し過ぎたばかりなので、まだ1時間はある

……

部屋に戻ろう

「……………」

部屋に戻ってきた。戻ってきたのはいい。そう、戻ってきたのはあきらかにおかしい事がある。物の配置が色々と変わっている。例えばさっきまで机の元に置いてあった鞆はベッドの横へ、ベッドの横にあった携帯電話が床へ……そんな感じに

そしてベッドの上には見覚えの無いようで、ほぼ毎日見ているよ
うな気がする物体が転がっていた。正確には『寝ていた』が正しい
かもしれない

金髪、長髪、小柄、そして巨にゆ　　ゲフンゲフン

我が弦巻高校 Wars 部サポートメンバー、エルフィ・N・エス
トランドさんが寝ているではありませんか。大丈夫、ちゃんと服は
着ている

……なんだか明日香がデフォルトになり始めてきた気がする

そんなことはどうでもいい。どうでもよすぎる。むしろそれがな
んだ

コイツは……コイツはどうやって俺の部屋に　　いや、どうやっ
てこの家に入り込んだ！！

エルフィが『うゝん』と言いながら寝返りをうつ。そして俺の目
にエルフィの寝顔が映る

ああ、なんだか明日香と似てるな……寝顔が　　ってイカンイカン

コイツがどうやって入ってきたのかを突き止めなくては！！

ベッドを挟んだ反対側、ベランダに出ることの出来る窓へと向か
う。そして閉まっていたカーテンを開くと、昨日から開けっ放しに
なっていた窓はそのままの状態で固定されていた。ここは除外
というか、ベランダから入ってくるんじゃないか？　って予想を
立てている俺って一体どんな思考回路をしているのかが気になる
ところだ

机の側の窓を確認。大丈夫、昨日と同じだ

……玄関か？

玄関に向かってみたが、ちゃんと鍵は掛かっていた

じゃあ裏口？ 鍵が掛かっている

我が家の人間のみぞ知る地下通路？ 全くの異常はない

……選択肢が全て消え失せた

「やべえ……これはこれで大事件だな……」

今この家で大犯罪が起きるかもしれぬ。早急にトリックを見破らなければ！！

とは言え、もうこれ以上我が家への進入経路はどこを見ても見あたるわけがない。ここはエルフィが起きてから確認するしかないの
だろうか……

ちなみに現在時刻は4時30分。本来の起床時刻まで後約30分
なんだかそれまでに謎を解き明かしたくなってきた

なーんて事を考えるだけ無駄なわけで

「ん……んんっ」

俺のベッドの上で寝ていたエルフィが起き上がり、寝ぼけ眼でこ
ちらを見た

「ふあれ？ かんざきさん……おふあようふおはいまふ……」

「あ、ああおはよう」

なんだか似た光景を前にも見た気が いや、見た

まだ眠気が飛んでいないのか、ベッドの上で座ったままうつらうつらと船を漕いでいる。いつまた寝出すかわからない状態だ

再度寝られると面倒なことになりそうなので、喝を入れるためにエルフィの元へと歩み寄る。が、突然エルフィも立ち上がり、頭を

「クンクン言わせながらこちらへ近づいてきた
そして俺の目の前で立ち止まる

「？」

「……………あ、こっちじゃない」

「なんだよ」

そしてベッドを通り過ぎ、俺とベッドを挟んだ反対側へと立つ。
そして俺がいることに気がついていないが如く上着を脱ぎだした
そうか、着替えるのか。だったら問題は　問題大アリだよバカ
野郎！

「エルフィ！　ストップストップストップ！！」

慌ててベッドの反対側にいるエルフィの腕を掴み、現在の行動を
ストップさせる。ギリギリ間に合い胸が見えるか見えないかの所で
制止した

すると寝ぼけた目でこちらを見て

「なにするんですかあ……………きがえられないじゃないですかあ……………」

「落ち着こうなエルフィ。わざわざ俺の目の前で着替えなくても良
いじゃないか」

「ああそつですな……………」

わかってくれたと思うので手を離す

その判断が甘すぎた

……………行動再開

「待て待て待て！」

再び腕を掴んで行動を止めようとするが、その良いのか悪いのかのタイミングでエルフィが後ろによるけ、俺の手を回避された。勢いが良すぎてそのまま前方へと倒れ込んでしまう

「あだっ！」

「ん〜……」

「ふごっ！」

そのまま前方によるけたエルフィが俺の上へと倒れ込む。現在腰の上に柔らかい何かが乗っかっている　って何を考えているんだ俺は

早くエルフィを起こさなくては！

「よしエルフィ、一旦降りよう。このままだと俺が圧死する」

「ふえ？　あ、まっってください。さきに……きがえます……」

「……灰？」

本当に一旦　　というか僅かな一瞬、その俺が起き上がるまでに要する時間内でエルフィは立ち上がり、そのまま俺の腰の上へと馬乗りになる。なるほど。コイツが何をしたいのかわかってきた気がしなくもない気がする

……コイツ、起きてるんじゃないか？

と言つてもまだ船を漕いでいる。そして上半身が裸で　　ってオイ！

一瞬、本当に一瞬。……見てしまった　　イカンイカン。大丈夫、俺は今何も見なかった

まあこの状態だから自然と下を見ることになる。それに体勢がア

しだから後ろ（上）を見るのはかなり辛いから問題は無いだろう。
さあ、早く着替えて降りてくれ

でも、神様は本当に残酷でした

エルファイが上半身裸になってから3分が経過した。カップラーメ
ンが1つ出来る時間だ

でもエルファイは一向に上から降りようとしなない。3分あれば着替
えなんて余裕なはずだ。それでも降りないなんて何かがおかしい気
がする

さて、なんだか嫌な予感がするまま後ろを

「……よし、異常アリ」

見た瞬間に顔を元に戻した

まさか上半身に何も纏わない状態で寝ていようとは……これはこ
れである意味凄いのかもしれない

いや凄いとかが凄くないとかそんなの今はどうでもいい。どうでも
良すぎる

……早くこの異常な光景をどうにかしなくては……！

自分の目先にある時計を確認してみる。現在時刻は4時50分。

下手したら誰かが入って来るであろう時間帯にまでなっていた

もし、もしもこの光景を見られたとしよう。確実に終わる

まあ何度もこんな光景を見られているわけですが、何度も何度も
あれば大事になりかねない

さあ、脱出大作戦の開始と行こうじゃないか！！

まずは、何故か理由はわからないが中学校の時の体育で習った匍

匍前進で抜け出そうと試みる。だが結果は予想できていた。自分の身体と共にエルフィの身体がついてくる

失敗

次に あれ？ なんだか作戦が他にない気がするんだけど？
というかこれしかないんじゃないか？

……さて、どうしよう

「んう……」

「へぷっ」

どうこう考えていると、背中の上に乗っかっていたエルフィが倒れ込んできた。もはや行動できない状態になってしまった

ピンチ、襲来

いやいや落ち着け 落ち着いたらアカンけど。冷静に考えるんだ。今どうやってエルフィを上から下ろすかを考えるんだ あ

「……よく考えたら結構簡単だったんじゃないか？」

正直失敗したら大変どころじゃない考えな気がする。というかそうだ。でも……俺はその小さな確立に全てを賭ける！！

両腕を俺の上で寝込んでいるエルフィの腰辺りに回す。一瞬だけ布生地を触った気がするが気にしな 気にするところだ

そしてエルフィを落とさないように段々と立ち上がっていく。それまでに約1分くらい掛かってしまった。が、もはやこれで成功は確定したぞ

エルフィをおんぶした状態のまま後ろへとゆっくりバックする。そして足下にベッドであるう硬い感触を感じたので、一旦そこで腰を下ろす。その後エルフィを潰さないようにゆっくりと後ろに身体を傾けていく。その背中背中に柔らかい何か当たりまくりだったが、もうこれで終わりだ

エルフィをそのままベッドへと倒し、自分は起き上がり、立ち上がる

そしてベッドの方を見ないまま力二歩きで自分の入り口の方へと向かう。後は女子の誰かに任せればオツケー……

ガチャ

「……………」

なんて事を考えていたら、急に部屋の扉が開く。そして入り口から現れた人物と目が合ってしまった

しばしの沈黙。そして俺の目の前にいる人物が俺の後方を確認する。と、顔を段々と赤くしていき、そして俺の目を見て睨み付けた

「……………真筆、一体これはどういう事だ？」

「……………スマン、明日香」

「す、すまっ……………！？ ま、ままましゃかお前っ！！」

「……………後はお前に任せるっ」

「ちよ、まっ」

扉の前に突っ立っていた明日香の肩を掴んで横に除ける。そしてその時に出来た隙間を通って一気に洗面所へと向かう

……………その後リビングにて朝食を抜いた事情説明会がありましたとさ

「なあ琉華、どうも顔が重いんだ」
「そう？ 疲れてるんじゃない？」
「なあ望、どうも体中が痛いんだ」
「……疲れているだけだと思っ」

本当にそうなのだろうか

確か俺はあの事情説明が終わった直後に何故だか知らないけど気絶して……そして現在、高校の入り口である集合場所にいるんだが……何があってここまで来ているのか全く記憶がないし、どうして休んだはずの身体が疲れているのかわからない

ああ……そうだ。エルフィが進入した経路を探すのに疲れたのか
「真筆はポジティブシンキングだなあ」
「何言ってるんだ健太。ポジティブシンキングはお前の方が上だろ？」

多分……いや絶対俺の考えはおかしくない……はずだ

「早朝、真筆殿の身に何が起こったのかを知りたいのは拙者だけか？」

光久という人間は……俺の空しい努力を知らないで……
結局進入経路は見つかりませんでした。答えてくれませんでした。
……聞いてませんでした

まず答えてくれなかった、っていう以前の問題だった

自転車に乗ってきた部長がやってきた。自転車を俺たちの目の前でストップさせて降り立つ

「おつと遅れて済まないな。後は梅花だけ　つて、神崎……お前……なんだか……ああ、蚊に食われまくったのか」

「一体俺の身体はどうなってるんですかね？　どうも痒くないんですよ」

「……そういうことな」

なんだか俺だけが理解できないっていうのが何とも腹立たしいまあそんな事を考えるだけ無駄かもしれないので、心を無にして来たるべき人、梅花哲也顧問を待つことにしようじゃないか

2分後。もの凄い勢いで校内に入ってきた一台の車が、何度も何度もスピしながら俺たち8名の前でストップした。そして中から1人の男性が降り立った

なんとというか……ハワイにでも行くんだか行ってきたんだか……そんな格好で。しかもウクレレ背負ってるし

「部長、これは110番に連絡した方が　」

「おう梅花。遅かったじゃねえか」

『……………』

なんだろう。部長が不審者と思しき人と普通に話している。『梅花』って言う単語がどうも気になるんだが……

「やっぱり110番　」

「相変わらず酷い私服だな……もっとマシな私服は無いのかよ」

『……………』

私服がハワイアンとは……………完全な不審者だ。そんな不審者に普通に話しかけている部長って一体　あ、そうか。部長も不審者
銃弾が耳たぶを掠る

「さて、と……………紹介しよう、プライベートモードスイッチがオンになっちゃった弦巻高校 Wars 部顧問の梅宮哲也先生だ。1年に200回くらいは警察に通報されているらしいが、安心しろ。顧問だからな！」

『顧問だから』という理由で済ませないで欲しいというのが本心だ
というか先生がさっきから一言も喋っていないのは気のせいだろうか

「ま、無駄話はそれまでにしておき……………覚悟が出来た人間から、助手席から順に乗っていくこと。俺から言える事は……………異常だ」

……………文字が違くなかったか？

「そんじゃ僕がお先」

「それじゃあ次は俺で」

「じゃあ次は私」「わたしが」「ボクが乗るよ」「……………私が乗る」

……………光久

「御意」

「じゃあ俺が乗ろう」

「……………」

運転席：先生　助手席：健太　中：俺、光久、部長　後：女子4名

全員が車へと乗り込む。結構大きさがあるからゆっくり出来そうだが部長が大急ぎでシートベルトをつけていた

「部長？」

「早くしろ。死ぬぞ」

「へ？」

「……さあ、エンターテイメントの開幕だぜ野郎共」

ギヤリリリリリリ！！

車のタイヤがもの凄い音を立てて急発進した

学校を出てから約1時間後、弦巻高校 wars 部は目的地である長野県のどこかの山奥、ストラント家の別荘へとたどり着いた。学校を出て高速に乗り、そして長野に入ってからすぐに降りる。その5分後の場所という結構な近場だった

まあ、車で1時間で目的地に着けるっていうことに驚きを隠せない
隠せない、隠せない

先生の運転に、驚きを隠せない

「いやあ……ジェットコースターの比じゃねえよアレ」

サヤ人になったのかもしれない健太がそう言う。いやいやそれは後ろに乗ってた俺にだってわかる。確か最大瞬間時速が350k

m 超えしているのを、俺は見た

ちなみに女子4名はなんだかピンピンしております。一方光久はげっそりしています。一方部長と先生は何事も無かったかのように話し合っています

じゃあ俺と健太は？ サ ヤ人になりました

別荘の前にいた部長が集合を掛ける

「さて、1名グッタリしているヤツもいるわけだが、無事に目的地に到着した。と、言うわけでまずは別荘の清掃を」

「それならもう一昨日の内に済んでますよ」

「あ、ああそうか。それじゃあ各自部屋に荷物を置いて、5分後にここへ戻ってくるように」

5分後

「広いわ」

「ああ」

「だね」

「うむ」

「……凄い」

「……」

「ちょ、ちょっと皆さん？」

「いや気持ちはわかるんだけど……早く行動しろお前ら」

入った瞬間の広さに全員が呆気にとられていたのは無理もあるまい

なんだかんだでその10分後

「さて、なんだかんだで準備も整ったことだし、早速演習入れるぞ」
再び全員が外に集合した瞬間、部長の提案がブーイングを巻き起こす。でもまあ逆らえない訳でして

「そつだな……梅花、早速アレでいいか？」
「ん？ ああ……そつだな。それで行くか」

いつの間にか着替えたのであろう先生と部長が何かを話している。
『アレ』とはなんだろうか
話し終わったのか2人がこちらを見る

「今回の演習は特別ルールで行くぞ」
『特別……』
『ルール？』

男子と女子が分かれて言う

「ああ。2対7の変則戦だ。もちろん2は、俺と」
「俺だ。そして7はお前たち、生徒諸君だ」

部長、先生の順にそう言う

「そして更にルール。どちらか1人を倒せたらお前らの勝利、こちらが7名殲滅したらこちらの勝利、というルールだ。かなり変則的だろ？」

「なるほど……」
「はいはい質問がありません」

琉華が手を真つ直ぐ伸ばして尋ねる

「それって大将、陣旗は関係無いって事ですよね」

「まあそうなるな」

「わたしからも質問です。今回はわたしはサポートに着く必要が無く、そのまま戦闘に参加しろという事になるんですか？」

「それは自由だが……はつきり言って意味無いからな。何せタイムンだからな」

要するに、そのまま直接2人を7人で相手すればいいという話か。ならちよろいちよろい

全員で目を合わせる

「おい梅花、こいつら覚悟できたみたいだぞ」

「まったく……まあいい。久々に遊びますか」

VWにやってくる。横には俺以外の6人が、目の前には部長と先生の2人が立ちつくしている

こちらは武器もセット済みだ。だがそれに対して敵側2人は武器を持つとせせず、ただただこちらを見ているだけだ。相当の余裕があると見た

でもこっちは7人。この人数で1人を集中的に狙えるかはまだ疑問だが、上手くいけば余裕で勝てるだろう

それに部長の実力はわかってるから、どうせ部長以下であるだろうな先生を狙えば良いだけの話だ

「なあ梅花。俺は見学してていいか？」

なんだあの部長の余裕は……まるで俺の心を読んだが如く

「ああ構わないが……」

……なんだ先生のあの余裕の表情は……1対7だ。無理がありませんか？

部長は欠伸びながら後ろへ下がっていく。元から来なければ良かったのではないだろうか？

先生が武器を取り出す

「さてと……武器を持つのは1年ぶりだが、そこまで衰えてはいないな」

「嘘……」

「琉華？」

「さ、サウザントクラウン……？」

「ええっ！？ ごっ、五大武器の1つじゃないですか！！」

「安心しろ。西宮のE×0と違ってE×3だ」

「……あの武器、尋常じゃなく強い気を放ってる」

望が半歩下がった

そして

「……かかってこい」

先生が真剣なまなざしになって武器を構え、そう言った

「だったら先に行かせて貰いますよ！！」

「御意！！」

その言葉の後、健太と光久が同時に飛び出す。2人は左右に分かれて武器を構える

だが先生は武器を構えたまま動こうとはしない

「その余裕、一気に消し飛ばします！」

琉華がその場で銃を構え、スコープを覗きながら3発の銃弾を放つ。2発目の銃弾が放たれると共に望が鎌を持ってその場を飛び出していた

「……余裕でいられるのは今の内！！」

「わたしだって戦えます！」

望に続いてエルフィが飛び出て、少し進んだところで銃を構える

「私たちも行くぞ！」

「ああ！」

明日香に続いて俺たちも飛び出る。いつもと同じよう、健太たちと同じように両サイドから攻撃をしようとする

琉華が放った銃弾の1発目が回避される。2発目も回避、3発目は打ち落とされる

打ち落とすと同時に光久の刀が先生を両断しようとする。反対側からは健太からの拳が飛んできている。回避のしようがない！

「……………」

先生は槍の先端で光久の斬撃を横に流す。そしてそのまま下にしゃがんで健太の攻撃を回避し、槍を下で回転させて2人の足を引っ

かけて転ばせ、数歩後ろへと下がった

「……攻撃は終わってない！」

続いて望の攻撃。鎌が横に薙がれ、それを槍の取っ手で受け止める。が、望の攻撃はまだ終わっておらず、受け止められた状態のまま反対側の手に槍を持ち、それで先生の腹部目がけて突きを放つ。それと同時にエルフィが放った銃弾2発、琉華が放った銃弾2発が飛んでくる。さあどうやってやり過ごす？

「……………」

先生は手から武器を離して次の武器を手にしようとする。が、横からは受け止める力がなくなった鎌が、正面からは槍が、斜めからは銃弾が飛んできています

「さて、こちらにも攻撃するか」

「……………!？」

一瞬、先生の姿が見えなくなった気がした。気付けば左手を望の腹部にめり込ませていた

望からは武器が離され、そのまま俺たちの後ろへと飛んでいく。そして攻撃の途中で動き続けていた武器をしゃがんで回避、銃弾までも回避される

望、戦闘不能

落ちた槍を持ってエルフィへと構えた。かなりの距離があるので攻撃範囲外なのは確かだ

その構える瞬間に光久が下から攻撃を仕掛ける。だが先生の防御

は間に合わないレベルまで来ていて、このまま行けば勝利だ
でもそう簡単にはいかなかった

「またもその行動が見えなかった。気付けば光久の胸を槍が貫いて
いた

それを抜くと同時に琉華の銃弾が先生を襲う。が、防御まではか
なり余裕があったので前端打ち落とされる

光久、戦闘不能

明日香が先生の元へと辿り着く。その反対側からは健太が接近し
ている。俺は十分に距離をとったところで銃を構え、エルフィ、琉
華と一緒に援護射撃を開始する

「……甘い」

明日香が刀で両断しようとする。その反対側で健太が銃を構えな
がら突っ込む

先生は槍の尻の部分で刀をはじき飛ばし、明日香を無力化する。
そしてそのまま刀を弾いた部分で明日香の腹部を思い切り突き、そ
のまま吹き飛ばす。が

「さて、これで終わりですね」

健太が先生の頭に銃口を突きつけていた

「はあ……仲間を1人アレしてコレか……最低な奴だ」
「何言ってるんですか。ま、これで勝ちっすね」

健太の人差し指がトリガーを引こうとする

「……撃つんだったらもつと早く撃つようにな」

「へ？」

健太がトリガーを引く寸前、先生は身体を下に傾け、銃弾を回避する。そしてその状態のまま健太を槍で貫く

明日香、健太、戦闘不能

「残りは……3人な」

健太から槍を抜くと、先生はこちらを向き直る。何故か俺たちは攻撃が出来なくなっていた

だが、それを見た先生はそこから動こうとはしない。まるでその場で俺たちを倒すみたいなの

先生は武器を閉まって、琉華が持っている武器に似ている銃を取り出した

「……フォーマルハウト……そんなものまで持ってるんですか先生は……」

「琉華。それってやっぱり五大武器ってヤツか」

「あれ？ フォーマルハウト？ ……ちょっと厄介ですね」

先生はその銃ともう一つ、リモコンサイズの何かを取り出し、それを銃口の少し手前の下に取り付けた。一体……

「さて……終わりか」

その行動を見た部長は先程いた場所を立ち上がって大きく欠伸を

掻いた

「マズイ……隠られる場所に隠れて!!」

「「え……?」」

「……遅い」

ドンッ!

一発の銃弾が放たれたはずだったが

残っていた3人の身体を何発もの銃弾が撃ち抜いた。そして周り
にあった壁や建物などにも何発もの銃弾が当たった

フォーマルハウトの専用銃弾、1発で1万発の銃弾を放つ物だった

#37 とんだ来客

8月2日、現在午前9時23分16秒。つまり弦巻高校wars部強化合宿2日目の午前9時23分18秒、エストラント家別荘の外。まずは基礎体力作りと言う事で全員が走りやすい服装になつて外に出ている。目の前に広がる湖を通つてくる風が涼しくて気持ちいい。まるで夏じゃないどこかにいるみたいだ

8月2日、現在午前9時23分48秒。つまり弦巻高校wars部強化合宿2日目の午前9時23分18秒、エストラント家別荘の外。ここにいるのは先生が1人、生徒が9名

この『9』という数字に注目していただきたい。弦巻高校wars部のメンバーと言つたら8名、俺、健太、光久、エルフィ、明日香、琉華、望の1年生で構成されたメンバーと部長の8名、加えて先生。この時点で『9』になる

だが、先程は先生と生徒を別々にしたので、合計が『10』になる
つまり？

今この場にいるメンバーが増えていると言つことだ
俺を除いた8人がその人物を見据えている。俺が見ていないという理由はただ1つ、何故だか知らんが背中に乗つかられている。でも結構軽かつたりする

湖から流れってくる風が涼しくて気持ちいい

「え？ 乗つかられると気持ちいい？」

ブチ壊すな

俺の背中に乗っかっていた人物が背中から降り、俺も立ち上がって服についた砂を手で払ってその人物を見る。今日見るのはこれで2回目だろう

昔から何度も見てきた顔、昔から変わらないツインテール、昔から変わらない可愛らしい笑顔。そして昔からの友人であり幼なじみである

「さて、わたしも今日からお世話になるからね」

星乃穹が両手を腰に当てて発言した

時は約3時間前、8月2日午前5時57分31秒頃に遡る

「……………」

俺の部屋に置いてあるベッドとは比べものにならないくらい寝心地の良いベッドの上で目覚め、その眠い目を左手で擦る。左のベッドには光久、右のベッドには健太が寝ている。要するに俺が1番最初に目覚めたらしい

『ぐがー』

……足の先にあるソファの上で部長が大いびきを掻いて寝ている

のを忘れていた。ちなみに先生は個人部屋である

部長のいびきの五月蠅さで目が覚めてしまった。どうしてくれる、全員が集合するまで後1時間近くあるぞ

再びベッドに横になってみる。だが、寝心地は良くても再度睡魔は襲っては来ない。こういうときは非常に困った身体だ

ベッドに横になったまま昨日の出来事を思い返してみる

朝起きて、風呂入って、牛乳飲んで、部屋戻ったらエルフィが何故か寝てて、進入経路を探したけど見つからなくて、エルフィが起きて……色々あって何故かは知らないけど気絶して……学校にいて気付いたら身体のおちこちが痛かった、と

それで先生の格好に驚愕して……ジェットコースターに乗って、到着

別荘の大きさに驚いて

変則戦をして、綺麗に負けて

その後2回同じ事をしたけど惨敗して、後は普通に寝たんだっけ

先生の実力が圧倒的すぎた。あの時あの距離で銃弾を止められたという時点で気付くべきだったかもしれない

そういや3回目は光久もとうとうキレて眼帯を外そうとしてたな……その前に健太が吹き飛ばして戦闘不能にさせてたけど

とにかくだ。あの2人は多分怪物だ。もしかしたら今日もあんな感じの戦いになるかもしれないから覚悟しておかなければいけないだろう

強くならなければ、どちらにも勝てない

なんだかぼんやりしていたら、いつの間にか3人が起きていて、朝食を取るために大広間へと足を向かわせていた

「さて、一旦食べる手を止めて注目をしていたきたい」

8月2日午前7時28分03秒。大広間にて全員が朝食を食べている最中、部長は席を立ち上がって手をパンパン叩いて注目を煽っていた。が

「……お前ら、流石にメシが美味いからって無視をするな」

美味いんだから仕方がないことだ

ちなみに朝食のメニューは、普段家で食べるような物と大して変わらないように見えるが、質が違う。というか違すぎる。比較にもならないくらい美味い

「西宮の言うとおりだ。早く話を聞いておけ」

「とか言いながらメシを食い続けるな」

「美味いんだから仕方がないことだ。というか顧問も聞くのかこれは」

この人が顧問でいいのだろうか。あまりにも適當すぎる発言だ
一応部の人なんだから聞いて当然だろう

「神崎、それはお前にも当てはまる事だからな」

部長の仰るとおりです

全員が手を止めて部長の方を見る。それを確認した部長は開口一番、とんでもない事を言い出した

「お前ら、流石に昨日のアレは酷すぎるだろ」

全員で首を頂垂れる

それは仕方ないことだ。何せ先生が強すぎて俺らが相手にならないだけだろう

そもそも俺たちに勝機ってあったのか？

「気合いと根性があれば勝てる物を……」

何を根拠に発言しているんだこの顧問は

「と、いうわけで。昨日の結果があまりにも酷すぎたため、今日は演習を入れたと思う。なんて思ったが、それは後回し。先に基礎体力向上演習を行う」

「と、言いますと？」

琉華が手を伸ばして部長に尋ねた

「言葉のままの意味だ。まずは基礎体力をどうにかしない限り、試合ではどうにもならないだろう。だから体力を向上させて持久戦でも保つようにするって訳だ」

「本音は？」

「俺の体力が落ち始めたから少しでも回復させよう……って神崎、何を言わせる」

その後2発

部長は煙を立ち上らせた銃をこちらに向けながら続ける

「今のは八工を撃ち落とすだけだ。……まあ、9時15分に外に集合。もちろん動きやすい服装で来るように。では食事再開」

部長が言うことを全て言い終わると、全員が食事を再開させた。食事を取りながらなんとなく銃弾が飛んでいった方向を見てみた。すると、奥の壁と銃弾に挟まれて息を絶やしていた八工がいた

そして現在に至る約10分前、9時15分頃に時は進む

「よし、全員いるな」

全員が動きやすい服装になって別荘の前に集合する。前には鬼教官が2人、後ろには綺麗な湖。湖から流れてくる風が気持ちいい

なんだか魚釣りをしたくってイカンイカン

俺がどうでもいいような事を考えている間にも部長は話を進めていく。どうやらこの山の中にはキングコースが整備されているらしく、走れるらしいのでそこを走ることになった

「コースはこの別荘の裏から続く1本コース。この湖を挟んだ反対側に続いているらしいが、そこまでの距離は約3km、往復で約6km。で、今から女子3往復、男子5往復。異論のある者は撃ち殺す」

もう少しで健太が手を挙げるところだった

3km×2×5＝30kmか……なんだか久々にこれだけの距離を走る気がする

「ああ……あ、最後まで走って貰うのは確定事項だが、体調に変化が出たらすぐにその場で休憩しろ。それで直ったら再開、最後まで諦めるな」

……リタイアという選択肢は与えてくれないみたいだ

部長が反対を向き、全員が走ろうと準備に入る。準備運動は必須だ俺は湖を見ながら準備運動をすることにした
すると

『まーーーーー』

「ん？」

「どした健太」

「誰か今何か言わなかったか？」

健太が何かに反応したらしい。でも俺は何も聞こえなかったので、『空耳だろ』と言って健太を納得させた
だが

『じーーーーー』

『……………』

全員聞き取れたらしく、それぞれがしていた行動で固まったまま耳を澄ませる。どうも聞き覚えのある声だ。何度も何度も聞いたことがある

やがて木の上を走るような音が別荘の屋根から聞こえてきて、段々とこちらに近づいてくる。まさかとは思つが

『とっつー!!』

別荘の屋根の上で何かが飛翔した。『それ』は綺麗に腕を横に広げ、太陽と重なって神々しさを描き出す。だが、『それ』は鳥ではない何かなので羽ばたくことは敵わず、地球の重力に従って地面に落下を始める

知っているだろうか。人はそれを身体で受け止めたとき、骨が粉碎するほどの威力を持つことを
(佐々木健太・談)

ドスウンツ!!

「ぐがあっ!!」

「ひよっ!!」

……嬉しいのか嬉しくないのか、骨が粉碎されることは無かった
8月2日、現在午前9時23分16秒。つまり弦巻高校wars部強化合宿2日目の午前9時23分18秒、エストラント家別荘の外。まずは基礎体力作りと言う事で全員が走りやすい服装になつて外に出ている。目の前に広がる湖を通つてくる風が涼しくて気持ちいい。まるで夏じゃないどこかにいるみたいだ

8月2日、現在午前9時23分48秒。つまり弦巻高校wars部強化合宿2日目の午前9時23分18秒、エストラント家別荘の外。ここにいるのは先生が1人、生徒が9名

この『9』という数字に注目していただきたい。弦巻高校wars部のメンバーと言ったら8名、俺、健太、光久、エルフィ、明日香、琉華、望の1年生で構成されたメンバーと部長の8名、加えて先生。この時点で『9』になる

だが、先程は先生と生徒を別々にしたので、合計が『10』になる

つまり？

今この場にいるメンバーが増えていると言うことだ
俺を除いた8人がその人物を見据えている。俺が見ていないとい
う理由はただ1つ、何故だか知らんが背中に乗っかられている。で
も結構軽かったりする

湖から流れってくる風が涼しくて気持ちいい

「え？ 乗っかられてると気持ちいい？」

ブチ壊すな

俺の背中に乗っかっていた人物が背中から降り、俺も立ち上がっ
て服についた砂を手で払ってその人物を見る。今日見るのはこれで
2回目だろう

昔から何度も見てきた顔、昔から変わらないツインテール、昔か
ら変わらない可愛らしい笑顔。そして昔からの友人であり幼なじみ
である

「さて、わたしも今日からお世話になるからね」

星乃穹が両手を腰に当てて発言した

「全く……おい穹、なんでこんなところにいる。というか何で『わ
たしも今日からお世話になるからね』だよ。どういう考えに至っ
たらそういうことが言えるようになる」

いきなり聞きすぎたことに関して謝ることはない

……ごめんなさい。謝ります

穹が口を開く

「ん？ だって朝真箒の家言ったらお母さんが『合宿に行った』って言うんだもん。だから来た」

「ちよつと待つてください穹さん。その『合宿に行った』だけで何でここがわかるんですか。ここは地図とかを見ない限り着くことが出来ない場所のハズです。それを」

「え？ あー……“星乃穹専用乙女サーチレーダーVer. 神崎真箒”を使用したからかな？」

この幼なじみはとんでもない持っているのか、はたまた作り出してしまったのか

その名前を聞く限り、用途としては俺を捜し出すための物だと思う。何の為なんだか

「そんな話はどうでもいい。星乃、どうしてここに来た」

とうとう部長の口が開かれることとなった。確かにそれは全員が気になっている質問だ

穹は表情を変えずにこう言った

「だって真箒いるし」

なんだかコイツは俺さえいればなんでもありなんだと思う

正直なところ迷惑だけど……なんて言ったら怒られそうだし泣き出しそうだし言うのはやめておこう。確実に死ぬる

「あと自分自身の特訓になるかなー、と」

「却下だ却下」

「ケチ」

なんとという会話だ。先輩後輩が関係ないような感じの会話になりかけているように見えて仕方がないんだが？

でもまあ、却下をする人間はこの場に1人しかいないわけでした

……

「おいお前ら、なんで俺をそんな目で見る？」

「西宮……流石にこれはお前でもわかってる事だろ……？」

「くっ……」

どうやらわかっていたみたいだ

しばらく沈黙が流れ、この場を吹き流れる風が辺りの木々をざわめかす

「……まあいいだろう。特別だ特別」

「というわけで今日含めた残りの3日間ヨロシクねっ」

そんなこんなで、弦巻高校 Wars 部 + 星乃穹による合宿がスタート。そして第一にマラソン大会が始まった

「な……何故だ。何故この男子である俺が女子である星乃に体力劣ってるんだよ……」

現在時刻12時を少し過ぎたくらい。マラソン、筋トレと続いた特訓メニューが一段落し、全員で昼食を作ると部長が発言した直後。

部長は両手と両膝を地面につけて頂垂れていた。俺には縦線が入っているようにも見える

そう、部長は（というか全員は）穹より体力が劣っていたのだ。マラソンでは男子より多い7周を走ってそれを男子より速いペースで走るわ、筋トレは男子より（腕立て、腹筋、背筋、その他100回ずつ）多い150回を余裕でこなすわ……全てにおいて弦巻高校のメンバーは穹に劣っていた。まだ全員が若干息が上がっていると言うのに、穹は何事も無かったかのように昼食を作り始めている

ああ、穹の手料理とか久しぶりだなあ　　ってイカンイカン。体力の話だ

とにかく、俺らは体力では穹に劣っているというのが今日、さっきの時点でハッキリされた。これは気合いを入れていくしかないのだろうか……

ちなみに穹の体力はわかったが、warsでの実力はまだわかっていない。手合わせ願いたいところだ

「くっ……これだと2年としての顔があ……」

部長は本当に悔しそうな声を上げてさっきの体勢でいたすると、健太と光久がやってきた

「ほれ真箒。お前も突っ立ってないで手伝え手伝え。早く準備してメシ食おうぜ」

「あ、ああ……」

「午後も頑張ろうぞ」

俺と健太と光久も昼食を作る手伝いをすることに。どうやらカレーらしい

「よし、私は卵焼きでも」

危険人物には食器の準備をさせておいた

「にーしーみーやーせーんーぱーいー……」
「断る」

「まだ何も言っていないですよー」

昼食という名のカレーライス……逆だ。カレーライスと言う名の
昼食が出来上がり、食事中。こういう綺麗な場所で食うとかなり美
味く感じられる

しかし……テーブル中央の黄色い塊は一体何なのだろうか
まあ、放っておくのが安全だな

「にーしー」
「断る」

しかし……本当にこうやって湖を見ながらカレーを食べるのも良
い物だなあ……本当に美味しい
この湖、魚でもいるのかな……釣れたら今日の夕食にでもしよう。
釣れたらの話だが

「に」
「断る」

……水深はどれくらいだろうか。もしかしたら泳げるかもしれない

「

断る

「……………」

断る

……………さつきから穹は部長に何を言おうとしているのだろうか。何も言っていないのに断る部長って一体……………ああ、体力で負けたから悔しいのか

3 発

「おい神崎、こいつを引き取ってくれ」

「いやいやいや。まずは部長が穹の話を聞くべき何だと思えますが」

俺の発言に全員が頷く。何故か穹も頷いていた

部長が嫌な顔をして舌打ちをし、とうとう穹に用件を聞き出していた

「お手合わせ願います」

「……………ほほう」

その穹の発言に、部長は目の色を変えた。まるで闘争心を燃やしているような目だ

多分体力で負けたのが相当来ているのかもしれない

5 発

「まさかお前が喧嘩を売ってくるとは……………面白いじゃねえか。受けてやるよ」

「じゃ、今から1時間後でいいですか？」

「喧嘩を売ったことを後悔させてやるよ」

なんだか……面白い物が見られそうな気がしてきた

『おい星乃、最後の忠告だ。撤回するなら今の内だぞ』
『何度も言わせないでくださいよ。わたしは本気でいきます』

現在時刻、2時。部長と穹はVWに送られて今から2人による一騎打ちが始まるうとしている。が、部長は穹に最後の確認をしていた。でも穹はそれに降りることはなく、随分と余裕な体勢でその時を待っていた

ちなみに俺たち弦巻高校1年全7名、加え先生はRWにあるVW監視画面を見ている。場所は《都市》だ

『本当に最後だ。いいんだな？』
『はい』

「よし、両者とも準備は出来たみたいだな。それじゃあカウントの後、試合開始だ」

RWにいる先生がVWにいる2人そう告げる。そして先生は機械の右端にある青色のボタンに手を伸ばす。試合開始のコールを鳴らすためのスイッチだ

スイッチを押す。すると、10秒のカウントが始まった

10,9,8……

「どちらが……勝つんでしょうね」

「拙者の予想だと……雄太殿かもしれぬ」

7 / 6 / 5 ……

「いや、もしかしたら穹ちゃんかもしれないぞ？」

「佐々木の言うとおりだな。穹が勝つ可能性もあるだろう？」

4 / 3 ……

「……最後までわからない」

「そうだね」

2 / 1 ……

「穹……」

ビーーーーッ！！

戦闘開始の合図がVWに響き、RWでもその音が響く

だが、2人は動こうとはせずに、互いに見つめ合っている

『どうした星乃。来ないのか？』

『そちらこそ。先手を賭けた方が有利ですよ？』

『ケッ。それはお前にも言えることだろ？ まあいい。そっちが譲ってくれるんだったら容赦はしねえっ！！』

とうとう部長がその場から穹へ向かって一直線に走り出す。部長はエクスカリバーではなく、明日香や光久が使っているような刀を取り出し、武器を構えて穹へと突っ込んでいく。だが、穹はそれに

も関わらず武器を取り出さずに部長の姿を見続けていた
段々と距離が縮まっっていく

『……俺も舐められたモンだな』

『最初から勝つ気でいますからね。そりゃあ舐めてますよ』

穹と部長の距離がとうとう零距离になるうとしていている。そして刀の先が穹の心臓を貫こうとする

『これで終わりは無いだろ？』

『ええ勿論です』

穹の心臓を刀が貫こうとしたその瞬間、穹は身体を左へと流して攻撃を回避する。こちらからは掠ったようにも見えたが、穹には傷一つついておらず、穹は口端を持ち上げて余裕な表情を浮かべていた回避した穹の腕に武器が装着される。健太と同じで、手甲系の武器だ

そのまま穹の顔が真剣になり、後ろに下がっていた右腕を部長の腹部目がけて突き出す。が、その攻撃は軽々と回避されてしまう

2人は距離を取った

『“AGブレイカー”か……中々手に入らないぞソレ』

『ちよつと諸事情あって入手できたんですよねえ……攻撃力はちよつと低めでもスピードはわたしが上ですね』

今度は穹から部長に向かって走り出す。最中、穹は腕を構えて攻撃態勢に入る。一方部長は武器を仕舞い、腕をクロスして防御態勢を作り出した。流石に無理だ!!

2人の距離は零距离となり、穹は部長のクロスした腕に突きを入れる。その攻撃の勢いで部長は少し後ろへと下がってしまうが、移

動距離は約50cmくらいだった。どうしたらこうなる!?

『……………!』

『だから甘いんだ!』

よく見ると部長の右手が穹の右手を掴んでいた。もちろん部長は武器を装着している。同じように手甲だ

手を掴んだ部長は、その状態のまま回転を始める。遠心力によって穹の身体が浮き、段々と勢いがついてくる。穹は抵抗できていない!

部長の手から穹の手が離され、とんでもないスピードでビルの壁へと飛んでいく。勝負ありか!?

ドゴオツ!!

穹がビルの壁に激突し、周囲に煙が舞う。もちろん穹の姿を確認することは出来ず、煙が晴れたときにどうなっているのかを確認するのを待つだけだ

『……………ま、この程度で終わったら來斗の妹失格だよな』

『ですよねえ』

あれ?

『なっ!』

『……………遅い』

いつの間にか部長の後ろに穹が回り込んでいて、部長の背中目がけて左腕を突き出していた。それをまともに食らった部長は吹き飛ばされていく

『ぐ、うっ……!!』

『流石にこの程度で終わるわけ無いですね?』

穹の腕から部長の身体が離れ、そのまま約200mくらい吹き飛ばされて部長は体勢を立て直す。口からは血が流れ出していた。それを拭き取って部長は答える

『当たり前だ。俺は後武器が3つある』

『こっちは4つです』

部長が駆け出す。そして手に持った武器は 銃? 無茶だ。零距离で当てれば確実に仕留められるだろうが、今までの行動パターンから考えると確実に返り討ちに遭う

だが、穹も武器を換え 部長と同じく銃。それも両手だ。1丁と2丁だとかなり差が出てくる

これは部長の負けだ!

段々と距離が縮まっていき、2人が武器を構えてトリガーに指を掛ける

そして

ドンッ!

部長が先に銃弾を放つ。だがそれは穹の頭上数mの方向へと放ち、全く当たることは無い

カッ!

『づづづっ!』

画面が真っ白に輝く。輝きすぎて画面越しだった俺たちも目を閉じてしまった。どうやら閃光弾だったらしく

『……………』

画面に2人の姿が映った時、2人は互いの心臓に向けて銃を構えていた。どちらも動こうとはしない

『……………このまま仕切り直しだ』

『ま、そりゃそうなりますよね』

『10秒後開始だ』

『了解です』

2人が距離を取り始める。差は段々と広がっていき、やがて50mくらいの距離が保たれる

そして10秒後、2人が動き出した

『さて、そろそろ終いにさせてもらうか』

『それはこっちの台詞ですよッ!!』

部長はとうとう最強の武器、エクスカリバーを取り出して穹へと走っていく。一方穹は1本の小刀と1本の長刀を取り出して部長へと向かっていく。これで穹の武器は全部出揃った

やがて鉄と鉄のぶつかり合う音が聞こえてくる

刀と刀をぶつけたまま2人は競り合いになる。時折火花が飛んでいる感じにも見えた

『やっぱり……………その武器か』

『え？　なんか言いました?』

『いや……なんでも』

ガンッ！

2人は同時に武器を払いのけて距離を取る。そして向き合う

『おい星乃。そろそろ全開で行かせて貰うが……お前、今何割だ』

『そんな事普通聞きますかねえ……とりあえず6割です』

『そうか……それじゃあここからは互いに全力で行くぞ』

『……はい』

穹が目を閉じ、部長は武器を構える

沈黙がその場を包み込む

RWにいる先生を除いた7人が息を呑む。あまりにも静かすぎて唾を飲む音が聞こえてきた

そして先生が静寂を破る

「この勝負だが、勝敗が決まったな」

『え？』

そして続くように部長が口を開く

『……エクスカリバー形状変化、セカンドフォルム第2形状』

その言葉と共にエクスカリバーの形状が変化する。その形は機械的に変化していき、やがて銃の形になる

その銃となったエクスカリバーを空に向け、2発銃弾を放つ。が、それは意図的に外しているらしく、穹の横を流れていく

『……行きます』

穹の姿が一瞬だけ消えた気がした。駆け出すと共に一気に加速していたらしく、殆ど一瞬で部長の懐に入り込んでいるように見えた。部長はエクスカリバーを穹へと向け、3発放つ。が、素早い動きで回避される。

でもその場に穹の髪の毛が舞っているのを見逃さなかった。

穹は反対側に回り込み、後ろから心臓を貫こうとする。が、部長は素早く身を回転させ、再び剣へと形状変化させたエクスカリバーで受け止め、再び距離を取る。

『厄介だなあ……瞬間反射能力。どうにか攻略できないものか』

『無理だな。もし攻略できる人間がいたら見てみたいぞ』

『じゃあ見せますよ』

また穹から接近。そして一瞬のうちに部長の目の前へと姿を現す。そして穹は長刀を大きく振りかぶり、勢いよく振り下ろす。

だが部長のエクスカリバーに阻まれ、更に手から離れてしまったのかその場で回転を始める。

『……………!』

部長の武器を持つ腕は上にある。ここで一気に振り下ろせば部長の勝ちだ。

『いやあ……見事に』

一方穹は危険な状況だということにも関わらず余裕そうな表情を浮かべていた。

そうか！ 部長は今攻撃したばかりで小回りが効かない。だから

もう片方の手に武器を持っている穹が攻撃すれば……
穹の勝ちか!?

一瞬穹がバックステップし、2 mくらいだが距離を取った。そして右手に持っていた小刀を構える。離れてどうするんだ! その距離でそのリーチだと届くわけがない!

『この武器は2つで1つ……これで終わりです!』
『やっぱりその手が……っ!』

穹が小刀を回転していた長刀へと向かって投げつける。すると、小刀の剣先が綺麗に長刀の柄に入り込み、1本の刀となって部長の心臓目がけて飛び出す

『ちいつ……!』

部長は咄嗟に左腕を前に出し、その攻撃を受け止めた。が、受け止めたというのも素手でだ。勢いよく突き刺さり、血が溢れ出したその刹那、穹が1本の刀を構えて部長の懐へと入り込んでいた
勝負……あつた!

が、自分が危険な状況だと言うのに、部長は楽しそうに笑い

ドスッ!!

『……っっ』
『勝負、アリだな』

部長の頭上まで来ていて戻しようの無かったエクスカリバーが穹の背中を貫き、腹から反対側へと貫通していた

『 エクスカリバー第二形状 Ver. サウザントクラウン 』。ま、これを知らないのも無理ないか』
『 うう……お兄ちゃんはそのような物……使って無かった……な』

穹が倒れた

部長が手にしていたエクスカリバーの剣身が伸縮していく

勝者、西宮雄太

「まさかそう来るとは……」
「だから甘いんだお前は」
「ううっ……これじゃあお兄ちゃんを抜くのもまだまだ先かあ……」
「どうせお前には来斗を超せねえよ」
「どうぞ言つてください。絶対に抜きますから」
「ハイハイ。ところで星乃、烏丸と雀星ってどこで手に入れた？」
「げっ、知ってたんですか……」
「知ってたもなにも……あれ元々来斗が使ってたからな」
「ああ……だから防がれたのか」
「……あの時は一応ピンチだったけどな」
「家に置いてあったのを貰ったんですよ」
「なるほどな。それでか」
「まあわたしが強く慣れたのもアレのお陰でして」
「……」
「なんで黙るんですか」
「いや……まだ甘いな」と

「……………」

「まあいい。とりあえず休めるときに休んでおけ。俺は夕食の準備を手伝うかどうにかしてくるからな」

「……………」

「意外そうな顔で見るな」

「まあまあ。ま、今日はありがとうございました」

「はあ……………まあいいか」

ボタン

「……………さてと、明日はどつしどつかなあ……………」

#37 とんだ来客（後書き）

お疲れ様でした

最後は適当になっちゃいましたがご容赦を

#38 Free time (前書き)

ふりーたいむ？

2096年8月3日、午前7時04分

ガチャ

「ん、おはよう真筆」

「おはよう……」

穹が加わって2日目、そして今日で3日目となった合宿。少しみんなより遅く起きてしまい、寝たときの服のまま朝食のある大広間へと来てしまった

それにしても気のせいだろうか。朝食がなければ誰1人として……いや、俺の目の前に挨拶をしてくれた明日香がいる。つまり今いるのは2人だけ。みんなはどこへ？ そして朝食は？

そう疑問に思っていると、明日香が窓の方を指さした。釣られて指の先にある物を見してみる

なるほど。俺以外の男子（先生は除く）はトレーニング中か。そりゃあ昨日あんな事があったらああなるな

男子の行方はわかった。女子は？

言葉に出して明日香に尋ねてみる

「ああ……ちょっと買い出しに」

「つまり？」

「……朝食がまだなんだ」

その言葉の意味を理解するまでにおよそ3秒。要するにみんなまだ朝食を取っていないという訳か

多分外の3人はトレーニングをして空腹の気分を紛らわせているに違いない

そして女子は引率的な何かで先生の車に乗っていったのだろうで、明日香はお家でおとなしくお留守番、と

ふむ、これは腹が減るな

「まあ真箏、立っていないで座ったらどうだ？」

「だな。あ、悪い、水持ってきてくれないか？」

冷蔵庫の近くにいた明日香にそう注文する。しばし掛かってガラスのコップに注がれた水と、それを冷やす氷が出てきた

一口飲み、明日香の方を向く

「明日香。みんなが買い出しに行つてどれくらい経つた？」

「ん……そうだな、大体40分くらいか？ 多分そろそろ戻ってくるハズだな」

どうやらもう少して朝食を食べることが出来るらしい

でも待てよ。昨日の夜の時点で食料が無いことに気がつかないってどういふ事だ？ なんで今日の朝になって気がついたんだろう

「それもそうだな……」

頼む。これ以上高校生男子のハートを読まないでくれ。もしもの時があつたらどうするんだ

というか明日香とそれ以外のメンバーよ。何故そこにすぐ気がつかないんだ。そして明日香、真剣に考え出すな

「ま、考えていても仕方ないか」

ダメだコイツ。5秒もしないうちに諦めやがった

「そ、それにしても……」

「ん？」

明日香が席を立ち上がる。顔は伏せられていたので表情を見ることは出来ない

「トイレか？」

「馬鹿。そんな恥ずかしいことをサラツと言いな」

明日香がテーブルに手を突き、こちらに向かって前傾姿勢になる。これは怒られるか？

それにしても視線を下に下げるとかなりマズイ。着ているTシャツの下に見えるピンクの何かはなんだ。早く元に戻りなさい
戻る気配が少しもないので、視線を左に外す

「真筆、その……なんだ。今この状況をお前はどっ思ってる？」

「この状況？」

「えっと、アレだ。い、今2人きりだろ？」

「うぶっ……！」

思わず口に含んでいた水を吹きだしてしまう。それは霧状になっていたので、窓から差し込む太陽光によって小さな虹のアーチが一瞬だけ見えた

口元を拭って明日香に向き直る。距離が近い

「お、おま、急に何言いだしてんの！？ ビックリしたよ！」
「わ、私も驚いたぞ。まさか吹くとは……………」

驚いたんだから仕方がない

「全く…………… どう思ってるね…………… ま、いつもみたいじゃなくて助かってるか」

「…………… それは私や他の連中が横で寝てるという状況か？」

「そうだよ」

「……………」

明日香が顔を俯せ、そのまま黙りこくる。それによって大広間が急に静まりかえり、窓の外から暑苦しい男子の声と、穏やかな水音や小鳥の鳴き声が良く聞こえる

「…………… なら」

「ん？」

明日香が何かを小さく呟く。聞き取ることが出来なかったので聞き直してみた

すると明日香はゆっくりと顔を上げていき 立ち上がってテーブルを回り込んで俺に体当たりしてきた

よって俺は後ろに倒れ、後ろにあった椅子の上に倒れ込む。途中途中段差になってかなり痛い。頭も打ってしまった

「す、すまん…………… 大丈夫か真筆？」

「まあなんとか…………… って、近っ！」

痛みを堪えて目を開けてみると、明日香の顔が目の前に。そして明日香の身体は俺の身体の上にある。意外と軽い じゃないじゃ

ない。一体どうしてこうなった

「そのだな真筈。さっきお前は言っただろ？ いつもみたいじゃなくって助かってるって」

「ま、まあ……言ったな」

「それじゃあ……それに比べたらこれはマシと言うことだろ？」

「そう考えるとそうなるな」

そこまで言っただけで自分が気がつく。これはかなりヤバイ。ここから発展するんだ！？ どういう事件に発展するんだ！？

「そのだな真筈……えっとだな……その……あ……」

明日香が他所を身ながら顔を赤らめて何かを言おうとする。その間俺は抵抗することすら出来ず、その様子を見ていた

「……………」

……明日香は目を閉じて顔を近づけてきた

「……そのまま無言で顔を近づけてくるな」

明日香の動きがストップする。とりあえず緊急回避
目を開いた明日香の顔が離れていく。が、未だに近い

「そ、それじゃあ何かを言えればいいということだな？」

「いや、そういう問題じゃない。何かを言えれば何かをしていいという訳じゃない。とりあえず降りて だからやめなさい」

再停止、再バツク

「むむ……じゃあ言えばいいんだろ言えば！」
「だからですね。そういう問題じゃ」

明日香がそのまま上半身を起こして顔を真っ赤にし、大声で叫びだした

「きっ、ききっ、きききききき　　！」
「きっ、きっ」

ダメだ。もはや日本語ではないどこかの言葉になってしまったようだ。これでは俺が理解できる訳がない
あ、もしかしたら猿かも

「き……き……」
「木？」

『通路、オールグリーン。いつでも行けます！』

『おっけ……！』

「きい……」

「気？」

『照準よし、それじゃあ……』

ピシユウンツ　　ガシヤアンツ！！

明日香が何かを頑張っって言おうとしていると、急にテーブルの上に置いてあった水の入っているコップが粉々に割れた。銃弾の音も聞こえたということは

2人で玄関へと続く廊下の入り口を見てみる。そこには買っ物から帰宅した女性陣がマジ顔になってそこに立っていた

「だ、だから言ったじゃないですか藤堂さん……明日香さん1人で残すのは危険だって……」

「ごめんエル……ボクも完璧に油断してたよ……」

「……事情説明よろしく」

「さて、真筆にはわたしから罰を」

「」「却下」「」

なんだろう。この4人の息はあっていると云うのだろうか

これで何回目だろうか。朝食中に事情説明会が執り行われ、朝食後は女子が女子部屋で緊急会議を行っていた

「よし、今から午後の3時まで好きに過ごすがいい」
『は?』

朝食を取り終わり、食休みしてから30分後の8時34分。全員が外に集合して昨日一昨日と同じように特訓の内容を告げられると思いきや、まさかの自由行動許可宣言。一体何があって何をどうしたらこんな話になるのだろうか

誰一人としてその状況を理解できないまま部長は続ける

「えつとだな。昨日一昨日と続いて今日も特訓だけだと流石に疲れてくるだろ? だから俺と梅花で話し合った結果休憩時間的な感じで自由時間を設けたいと思う。寝ててもよし、遊んでもよし。とにかく目の届く範囲内なら好きなことをしていい」

「それじゃあDVDを見ているっていうのはアリなんすか?」

「言っただろ。自由時間だから好きなことをしてよし」

質問をした健太が小さく小さくガッツポーズをした。もうこれだと何をするのかバレバレな質問じゃないか

部長は続ける

「先程も述べたとおり自由時間は3時までだ。3時になったら再びここへ集合するように。それから昨日までと同じように特訓だ！以上、解散！」

全てを伝え終わった部長は、1人足早に別荘の中へと戻っていった。ここに残ったのは1年生8名と先生の合計9名だけとなる

1羽の鳥が鳴いているのが聞こえる

先生がこちらへ近づいてきた

「と、言うわけだ。それじゃあ好きに過ごしていきな。俺はちょっと不足物の買い出しに行ってくるからくれぐれも問題を起こさないように」

全員が返事をする、先生は『よろしい』と言って別荘の横に止めてある車へと乗り込み、そのまま山を下っていった。当然残ったのは1年生8名である

全員で顔を合わせる

「えっと……どうしよっか」

まず口を開いたのは琉華だった。もちろん誰もがこうなると思えていなかったので、これからどうするのかが決まらない

緊急会議の始まりだ

「どうするも何も……何もやることが無い以上……」
「……エル、ちょっと聞きたいんだけど……あの湖って泳げそう？」
「へ？ ああ……中央の方は水深が深くて近づけないですけど、そうですね……泳げますよ？」

ダッ！

エルフィがそう言うや否や、望と琉華が別荘の方へと猛ダッシュしていった。一体なんだったのだろうか

まあ望が聞いていた事で大体は予想できる。泳ぐんだな……あの2人

残ったのが6人になる

「で、どーすんの？」

今度は健太が全員に尋ねる。もちろん全員が悩んだ顔をしながら考える

明日香が口を開く

「もうこれは私たちも泳ぐしかないんじゃないか？」

「そうですね……」

「まあわたしも賛成だけど……生憎水着が……」

ポスッ

上から何かが落ちてきた。まるでそれは女性が身につけるような水着でして

あまりにも偶然すぎる。そして不自然すぎる

別荘の3階から水着姿の琉華と望が手を振っている。そして何でそんなことが出来るんだろっかって感じで3階から飛び降り、無事着地する

2人が駆け寄ってくる

「いやあ、よかったよ念のため2つ用意しておいて」

「……でもサイズ……」

なんだろう。この2人は気が早いのか？ それとも勝手に話を進めているだけなのか？

再確認。琉華と望の2人は水着姿で、望は普段見ることがないだろう、後ろで髪を束ねていた。そして琉華が黄緑、望が水色と白のストライプ

……アレ？ なんだか自分の見ているところがおかしい気がしてきたよ？

「ん……」

しゃがんで落ちてきた水着を見つめる穹。いつになく真剣な表情だっったりする

「そ、穹？ 別に着られなかったらごめんなさいだけど……もしかして泳げ」

「よ、よーしエルフィ！ 明日香！ 泳ごうか！ ね？ 泳ぐよね！ そ、それじゃあ着替えよっか！ そうしよっか……！」

ああ……そういえば……

うん

とりあえずここで着替えようとしなくて欲しい

「はい穹ストップ。着替えるんだったら別荘戻れ別荘に」

「え！？ あ、うんそうだね！！ そ、それじゃあ行くよエルフィ

！ 明日香！」

「ちょっ、引っ張らないでください！」

「お、落ち着け穹！」

エルフィと明日香の2人は穹に手を引かれて別荘へと戻っていった。その光景を苦笑いしながら見つめる一同

だが、足下にはまだ水着が落ちてている。アイツ、わざと拾わなかったな

「……………真箏」

足下に落ちている水着を見ると、望に話しかけられる。視線を望の顔に向けると、ジト目でこちらを見ていた

「……………真箏、そうやって女性用水着を見つめるのは良くない」

「申し訳ございません……………」

「……………その代わり私を見ること」

随分大胆な発言だ

少し意識してしまい、望から視線を外してみる。気付けば男子2人がこの場から足音もなく消え去っていた

「ちょ、望。それは流石に不意打ち過ぎるな……………でもボクだったらこうするかな」

ガシッ

琉華に両手で頭を捕まれる。そして顔を無理矢理琉華の方へと向

けられる。そこには満面の笑顔で迎えてくれる琉華の顔が

「琉華。一体どうしようというのだね」

「ん？ どうするもこうするも……真箏くんはこうというのが嬉しいんだよねえ？」

「ふにゅっ!？」

「……あっ!！」

急に頭を引つ張られてそのまま琉華の胸の中へ抱きしめられる。

ああ……柔らかくていい臭い　じゃなくて！　なんでこんな状況になってるんだ！　困るよ！　柔らかいよ！　優しいよ！　何考えてるんだよ！

そのまま呼吸が苦しくなってきた、解放されている腕をバタバタさせながら唸る

「……ちょ、ちよつと琉華！……そ、それは卑怯！」

「ほほう……卑怯とな？　人には人の戦術って物があるんだよ望い」
「？　例えば　」

琉華の左手が頭から離れるが、右腕が後頭部に回り込んできて、更に締め付けが強くなる

更に暴れることに

「んーんーんー!！」

「例えば……望になくてボクにある物で戦ったりとか？」

「……そ、そうやって勝ち誇った顔をしながら胸を触らないで欲しい!！」

俺の視界外では百合世界に近い光景が広がっているに違いない
なんだか意識が遠くなってきた気がする

「……………っ！！」

「へっへっ……………さて、いつまでこの状況でいようかなあ〜？ ほら

ほら、望もやってみたらあ〜？」

「……………っ！！」

「ひぬ！ まじで！ ちょ、るは！ きぶきぶきぶ！！」

ああ……………意識がもつろつと

「岐阜？ ここからは遠いよっ。」

なんだか遠くから『チーン』って感じの音が聞こえてきた気がした

「あ」

「……………っ！！」

琉華の胸から解放される。もう真筆の意識は吹き飛んでいて、顔は真っ赤に血で染まっていた。そして琉華の胸も血に赤く染まっている

「ちょっとやりすぎたかも……………」

「……………ずるい……………」

「ああ、ああは……………どうしよっか、真筆くん」

「……………寝かせるのがいいと思う。……………男子に回収してもらおう」

顔が血まみれになった真筆を琉華が横にする。望は携帯を開いて健太に電話し、真筆の回収を求める

真筆を横にした琉華が真筆の顔を見つめる

(……………望は遠い。他のみんなは誰もいない。これは……………チャンスだ

ね)

琉華は真箏の顔に自分の顔を近づけていく

(ごめんねみんな……)

『琉華ー！ 穹の水着を持ってきてくれないかー？ っておま！

何してるんだ琉華ー！』

「げっ」

真箏との顔の距離があと10cmくらいのところで3階から明日香に呼ばれる。なんだかこのまま行くととんでもない事件に発展すると考えた琉華は急いでその場から離れて落ちていた水着を回収し、明日香へと引き渡す

「なんだか……妨害受けてばっかりだなあ……」

戻ってきたときには真箏の身体はそこには置いていなかった

『全く……一体何をどうしたらこんな血まみれになるんだか』

『拙者にはとてもじゃないが想像出来ん』

意識の遠くから2人の声が聞こえてくる。どうやら意識が戻ってきたらしい

しばらく動けそうにないのでそのまま寝る

『でよ光久。僕たちはこれからどうしようか。水着があるとはいえ、

女子と一緒にになって遊ぶのはマズイ気がするんだ。だからどうするか』

健太はこれからどうするかまだ決まっていなかったらしい。健太のことだから部屋に引きこもってAVを見る物だと思っていたが光久の声が聞こえてくる

『生憎でーぶいでーは哲也殿に没収されてしまったしな……』

いつの間に没収されたんだ。まあ無理もないか

2人の悩む声が聞こえてくる。さて、そろそろ起きるとするか

重い身体を起き上がらせる。すると健太と光久はこちらを見た

「おっ、起きたな」

「大丈夫か真箒殿」

「ああ……なんとかな」

身体が正常に動くかどうかを確認してみる。多少動きにくい感じもするが、結構問題は無さそうだ

ここは……大広間のソファらしい。クーラーの風が涼しくて気持ちいい

「それはそうと真箒。一旦顔洗ってくることを推奨する。真っ赤に染まっただけで怖い」

「ん？ そうなのか？ わかった」

1人洗面所へと向かい顔を洗ってくる。確かに顔が血で真っ赤に染まっただけでかなり怖かった。何があっただけでこうなったのだろうか

2人のいる大広間へと戻ってきて、三角形を作るようにテーブルに座る

「さて、これからどうするよ」

正面に座っている健太が尋ねてくる

DVDを没収されている以上、そういう事は出来ない。残る選択肢はゲーム、もしくはただの暇つぶし

「やはりここは拙者たちも泳ぎに行くしかないのでは……」

「そうなる色々厄介な事になりそうだからやめておかないか……？」

俺の発言によって全員が黙り込む。本当にいい案が見あたらぬ

「それじゃあ……一旦部屋戻って何か無いか探してこよう」

「そうだなあ……うん。そうするか」

「承知」

結局健太の案、一旦部屋に戻って何か暇を潰せそうな何かを探すが採用されることとなった

で、男子部屋の扉まで辿り着き、扉を押し開けた

「……」

ボタン

「……」

全員で顔を合わせてもう一度扉を開いてみる

「「「「」」」」」」

その場にいる男子4名で黙り込む。男子4名というのは俺、健太、光久、部長の4人

部長は入り口の前（と言っても少し奥）でパソコンをいじっていたそう、パソコンをいじっていたのだ。なんだか動画を見ていたらしく……

「えっと……」

気まずい空気の中健太が口を開く。すると部長に心が戻ってきたのか、顔を真っ赤にしてパソコンを閉じ、こちらを見た

「お前ら……もしかなくても見たか？」

部長の質問に全員が小さく縦に首を振る。すると部長は顔を真っ青にしてそのまま固まってしまった

部長が見ていた動画。それはアニメだったらしく、俺はその名前を知らない

でも健太は知っていたらしく

「部長、いいんじゃないでしょうか……それくらいどつってことありませんよ……」

「い、いや……その……だな。ひ、人には言いたくない事だってあるんだ。ほらアレだ。1年前に起こった出来事とか……」

「部長がアニメを愛していると言ったこともですね」

「うおおおおおおおおおっ……！」

俺が冷静にツッコんでみると、部長は頭を抱えてその場で発狂し始めた。横では健太が『お前、何てことを言うんだ!』と言ってきた。アレ? 言葉を間違えたか!?

発覚、部長はアニメ好きだ

発狂していた部長は落ち着きを取り戻したのか、その場に膝を突きながら立ち上がり、俺を見た

「ち、違っんだ神崎。これはだな……その、アレだ。これは……その……」

珍しい。部長がここまで取り乱すなんて今までであっただろうか。現在部長の頭は混乱しているに違いない

「えつとだな……」

「趣味、と」

「じぶっつ……!」

そのまま部長は頭を床に強く打ち付けた。ヤバイ。今までの部長の形が崩れ始めてしまった

若干額から血を流し出した部長がこちらを見る

「その……だな……スマン。これは他言無用に願いたい……」
『……………』

ついには土下座をさせていただきました。なんだろう。今日の前にいる男性は本当に西宮雄太本人なんだろうか。絶対偽物のハズだ

でもなんとなくだけどこで納得がいく答えが出た。5月の初め、都北大会の前日だったか当日だったか、部長が出てきたユニフォームのアレ、おそらく部長の趣味だ。まさかこんな一面があっただ

なんて意外だ

健太が部長の頭を上げるように促し、部長は頭を上げる

「部長……いいんすよ。人には人それぞれの趣味があるんすから…

…」

「佐々木……」

なんだろう。爽やかそうで爽やかではないスポコン漫画的な光景。それを俺と光久はただただ温かい目で見守っているだけだ

2人が立ち上がる

「で、お前ら何の用だ。まさか俺の趣味を見るために来たとかそういう訳じゃあるまいな」

あ、いつも通りの部長に戻った

その質問に健太が答える

「なんだ。だったらお前たちも泳いでくれば良いだけだろ？」

光久が捕捉する

「ああ……なるほどな。気持ちはわからなくもないが……そうだな。それじゃあ……佐々木、これをやるうじやないか」

部長が二枚のデータステックを健太に渡す。受け取った健太は疑問符を浮かべていた。もちろん俺と光久もそうである

健太がこれは何かを尋ねる

「ま、やってからののお楽しみだ。使うかどうかは好きにしる。……それじゃあ出て行け」

よく説明されないまま部屋を追い出される。直後、部屋の中から再生されているであろう音が漏れていた。部長ってあーゆーのが趣味なのか……

追い出された3人で顔を合わせる

「どうする？」

「どうするって……そうだな。やるしかないんじゃないか？」

「真筆殿の言うとおりだ。拙者たちは……この時間を使って……」

「「「特訓するか！」「」」

3人でVWの機械が置いてある部屋へと走って向かっていった

「ふう……」

足下に冷たい水がある。その少し手前にわたしは1人、座っている。目の前では4人が泳いだり水を掛け合って遊んだりしている。わたしはそれをただただ見つめていた

着替えて湖に来てから大体10分くらいが経過しただろう。わざと水着を置いてきたけど……失敗したな。まさか無理矢理着替えさせられるとは

でもまあ、このくらいの浅瀬だったら自分も大丈夫なワケで……

ゆっくりと立ち上がる。気付けばエルフィが目の前に立っていて、気付けば左腕を捕まれて走り出していた

段々と水位が深くなっていく。深く、深く

なんだろう。この前水着を買ったのはいい。でもなんの為に？
どうせ着ることはないだろうと思っていたのに？
多分確信してたのかもしれない

自分は再び泳げるようになるんじゃないかな、って

水位が深くなる。気付けば太股の所まで水が来ている。駄目だ。
これ以上は

言えない。言葉が出ない。言う勇気が無い
何故？ 別に自分は臆病な訳ではない
ただただ……言葉が出なかった

水位は深くなり、気付けば腰まで来ている
不意にバランスを崩した。大丈夫、エルフィの腕は捕まっただまだ
アレ？ 左手に力を感じなくなった？ エルフィが離れていく。
わたしは沈んでいく

暗い。冷たい
ん？ 違う？ 暖かい いや、通り越して暑い？

「ん……」
「あ……大丈夫ですか穹さん……」

目を開く。するとそこにはエルフィがわたしの顔を覗き込んでい
た。今のは……夢？
身体を起こす

「ん……何があったの？」
「何があったも何も……穹さん、溺れたんですよ」

段々とさっきまでの記憶が戻ってくる。そうだ。なんだかヤケに

なっちゃってそのまま深いところまで行ったら自爆して溺れたんだ
った

夢との共通点が溺れたと言ったところしかない
実際わたしは泳げない いや、泳げなくなった

「あの時はどうなるかと思いましたよ。急に走り出して湖に入って
いったかと思えば沈みだして浮き上がってこなくて……泳げないん
だったら先に言ってくださいよ」

「あはは……うん。なんだかわたしもヤケになっちゃってたんだね。
気付いたら今、みたいなの？」

2人で笑ってしまう。笑い事ではないのに
他の3人は泳いだり水を掛け合ったりして遊んでいた

「穹さん、浅いところで良いから遊びませんか？」
「ん……うん。そうだね。行こうか」

エルフィに左腕を引っ張られて、わたしも湖の浅瀬で遊ぶことと
なった

「うはあ〜……駄目だ。強い」
「ま、まるで勝ち目がない……」
「んな事言つな光久……僕たちだってやれば頑張れるんだよ……」

大広間のだ真ん中で3人、転がって息を上げている。3人とも汗
だくで、身体が凄く熱くなっている

今まで何をしていたかというと、部長から貰ったデータステイクの中に入っていたデータ、先生のデータと戦闘していたのだ。30分の間に2回戦い両方惨敗。3人がかりで倒せないっていうのはどういうことだ

健太が身体を起こす

「気合いだ気合い！ 気合いで勝てば良いんだ！」

なんでもかんでも気合いで済まさないで欲しい といつもなら言っているところだが、今回はかりは賛成するのも良いだろう
続いて俺が身体を起こす

「そうだな……気合いで勝つ！ 明日までに絶対勝つぞ！」

最後に光久が身体を起こす

「左様……勝てずして雄太殿に勝てるわけがない。必ず壁を乗り越えようぞ！」

3人が身体を内側に向ける。そして全員が拳を出して

「「「勝つ！！」「」「」

思い切り拳をぶつけ合った

#39 Boys talk , Girls talk (前書)

今回答

「さ、最終的に一度も勝てずじまいか……」

「駄目だ。アレ絶対チートだろ……」

「け、健太殿……『ちーと』とは……?」

まだまだ明るい夏の夜(?)、午後6時半。3時になって特訓が再開されて今回も7人で先生に挑むことになったのだが、結果は惨敗。3時〜6時の間に5回戦って全て敗北という結果を残した

俺らが5回中5回敗北した少し後穹も1人で先生に挑んでいたが、昨日の部長と戦っていたときみたくかなり惜しい結果を残していた。もう少しで倒せると言うところでフォーマルハウトの登場により、負けてしまった

で、現在今日の特訓が終わってから15分が経過しようとしている頃、1年男子一同は15分経ったのにも関わらず息を上げて床に転がっていた。女子は風呂に向かったそーな

風呂は大浴場が1つしかないので男女交代制である

「光久、『チート』ってのはだな……」

なんか横で光久に『チート』の意味を教えている健太の姿が。疲れている顔をしながら頑張って教授してるよ……

話をする健太と話を聞く健太の顔には大粒の汗がいくつもついていた。勿論俺もその1人だったりする

「しかし健太、光久。今日何度戦って全敗した?」

「そうだな……5回+3人で行ったのが8回、全部で13回負けるな……」

「これでは目標の達成は出来ぬぞ……」

光久の言葉によって落ち込む一同。なんだかさつきまでの威勢は何処へ行ったんだと尋ねたくなってしまふ

ふとここでもう一枚のデータスティックがあったことを思い出す。ポケットから取り出して2人に見せる

「ああ……そういやそれ、なんたるな」

「まさかとは思うが、雄太殿の……」

3人で息を呑む。そして目を合わせて全員が頷き、再びVWの機械へと向かう

データスティックを挿入してVWへと突入した

「いやぁ……なんだか広い風呂に入ると無性に泳ぎたくなるのは何故だろう？」

「……琉華、はしたない」

「ん……エルー、シャンプーって換えあるかー？」

「え、あ、はい。ちょっと待ってくださいね」

「ふう……」

前方では琉華が平泳ぎ中、後方では明日香とエルフィがシャンプ

「中。そしてわたしはまつたりとお湯に浸かって 熱い

現在時刻6時30分。今日の特訓が終わってから15分が経つ今、女子の一同はご覧の通り大浴場へと来ている。男女交代制なので勿論男子はいない

真筆だけは許可するけど。小5まで一緒に入ってたし

「クロールツ！」

「……だから琉華、はしたない！」

「エル、相談があるんだが……私に譲ってくれないか」

「何言ってるんですか明日香さん！ 無理に決まってるじゃないですか！」

後でわたしにも譲って貰うとしようかな。まあエルフィが駄目なら琉華でも問題はないんだけど……

そつえば真筆は大きいのと小さいのどちらが好みだろうか。なんて事を考えてしまう

そもそも遺伝って何なのだろうか。この前望と話してたけど、お母さんの遺伝子はわたしに遺伝されるだろうか。よくお母さん似っでは言われてたのに、その部分だけが妙に発達してくれない。本当に遺伝ってなんだろう……

どうでもよさそうでもよくない事を考えていると、隣に明日香とエルフィがやってきた。やってきたというかわたしを間に入れて距離を保ってる的な

「……休戦だなエル」

「休戦も何も戦ってませんし……」

というかわたしの両側で戦いを引き起こさないで欲しい なんて思いながらもエルフィの胸を見してみる。うん、負けてる

「ちょっと穹さん？ まさかとは思いますが、明日香さんと同じような事をしたりはしませんよね？」

「え？ あ、大丈夫大丈夫。明日香と違ってエルフィを襲うわけないじゃないかー！」

そう言いながらエルフィの背中をバシバシ叩く。我ながらオヤジっぽい。叩かれている本人は『痛い痛い！』と連呼していた

「なあ穹。今更なんだが、なんで私たちに泳げないことを言わなかったんだ？」

その言葉にピクツとなつて明日香の方を振り向く。なんだか聞いちゃいけなかったかなー的な顔をしていた
でも

「うん……なんか言えなかった、つてのが理由かな。まあ、小学3、4年くらいまでは泳げたんだけど……ちょっと色々あってね」
「そうだったんですか……」

「バタフライ！」
「……だから琉華、はしたないってー！」

元気があつていいなあ……
再びエルフィに向き直る

「まあまあわたしの泳げない話はどうでもいいとして……今日こそは聞かせて貰うとしようじゃないかえ、エルフィさん……」

「え……な、なんの事ですか？ 別に話すことなんて何も無いんですけど……」

「待てエル。昨日私と望が恥ずかしい話をしておいてエルは逃げる気か？ 今日話すまで寝かせはしないぞ？」

「え、えつとですね……」

その反応を見たわたしと明日香は目を合わせる。どうやら同じような事を考えていたらしく、すぐに行動へと走った

「え、ちょ、2人とも……きゃああああああっ!!」

その後、エルフィ&琉華VSわたし&明日香&望 による死闘が30分に渡って繰り広げられ、のぼせたわたしたちは浴場を後にする

チーン

どこからともなくそんな音が聞こえてきた。とりあえず勝手に殺さないでくれ。ただただ真っ白になっているだけなだ、死んでなどいない

部長に渡されたもう1枚のデータステイクを開いたところ、アレは穹の戦闘データだったらしく……言わせて貰おう。勝てない！別に女子だからって躊躇う事は無かったんだよ、データだし、幼なじみだし

だから男子3人は本気で穹データに戦闘を挑んだのだが……あっさりと負けた

昨日の戦闘を見ていたとはいえ、実際に戦ってみるとかなり強い。というか強すぎる。部長や先生をあそこまで追い詰めるというのに

納得できる強さだ

3対1で女子に挑んだというのに情けない

「……関東で第1シードに入ってるっていうのに納得が出来ますね
アレは」

健太が小さく呟く。もちろん真っ白になっている。そして健太の
口から魂が抜けかけているようにも見える。光久も同様、俺もそうだ
俺たちは大分危ない状況になっているのだろう

「拙者もまだまだ実力不足、この目を扱えぬ以上どうもできん……」
「逆にそれ使えない方がいいんじゃないか……？」

逆に使われたら止めるのにこっちが大変になると付け加える。で
ももし光久がその目の力を使って暴走することが無ければこちらと
してはかなり助かる気がする

「今からでも遅くはない、明智家の奥義を修得せねば……」

習得していなかったのか。今まではなんだったんだ
健太が起き上がる

「ま、とりあえず合宿も明日までだ。合宿が終わるまでに誰かを倒
すのを目標にするって言うことで」

俺が起き上がる

「じゃあ仮に倒せなかったらどうする？」

光久が起き上がる

「そこは男らしく切腹を……」

「いや、死ぬから」

もう死んでしまったら何も残らない。というか光久、物騒なことを言うでない

「やっぱり特訓……必要だよな」

「ああ……」

「うむ……」

「あー……青春を満喫しているだろうに申し訳ないが……ちょっとお前ら転がってないで晩メシ作るの手伝え」

チーン

なんだか再びそんな音が聞こえた気がした

「え？ 今日に戻ってこない？」

「ああ。なんでも一旦東京まで戻るハメになったらしい。足りてなかった不要品が品切れだったらしくてな、それで取りに戻ってあっちで一泊してから戻ってくるってさっき連絡が入った」

食事を取り終えて風呂から上がり、現在男子部屋。もちろんここにいるのは俺、健太、光久、部長の4名。ソファの上でパソコンを弄くっている部長にそう言われる

先生が買いに行った足りない物ってなんなんだろう。そこまで品切れしやすい物なのだろうか

「まあ……品切れしやすいかどうかは場所にもよるな」

「どうやら部長は先生が買いに行った物を知っているらしい。そういうものなのか……」

いざそれは何かを尋ねてみると、部長は『知らん』と言ってパソコンに没頭していた。さっきのアレ言いふらすぞコラ

3発の銃弾が掠る

「あ。それはそうと、どうだ調子は？ さっき渡したデータステイツクはありがたいだろ？」

「ええ。もう大感謝。部長に惚れるくらい感動したつすよ」

「やめる佐々木。その言い方はかなり気持ち悪い。お前が俺に惚れても俺がお前に惚れん。そもそも俺にそんな趣味はない」

言われるだけ言われた健太が目頭を押さえていた

部長がパソコンを閉じ、マジ顔になってこちらを見る

「まあ……これでお前たちの実力はわかっただろ？ 俺を倒すことは疎か、梅花や星乃、更には美里や拓人を倒す事なんて無理だ、今のお前たちの実力じゃあな。7人でかかったとしても完全に勝利はありえない。それに今回関東大会まで進出できたのもマグレとか言い様がない。仮に今の実力のまま来年の大会を迎えてみる？ そして拓人や美里に本気でかかられたらどうする？ しよっぱな敗退だぞ？ それに運良く県に出場しても星乃がいる、聡蓮がいる……全国大会なんて夢のまた夢だな。それでも目指すってんだったら俺は何も言わない。ただ目標達成できるように特訓しやがれ。俺がわざわざデータにした理由は何だと思う？ 何度も戦って気付くこ

とは無かったのか？」

部長に言われるだけ言われ、全員で黙り込む。データにした理由……何度も戦って気付くこと……駄目だ。わからない

3人が何も言えないまましていると、部長は苦笑してこう言った

「まったく……これじゃあいつまで経ってもアイツらに勝つのは無理だな。100% いや、300%ありえねえ」

部長は再びパソコンを開いて、今度はゲームを始めたらしい

依然として3人は動けず、何も言えないままだった

時計の短針が9と10の真ん中を指す

なんでだろう。こんな時に喉が渴いてしまった

ベッドから立ち上がる

「ん？ どこ行くんだった真筆」

「ちよつと水飲んでくる」

そして部屋を後にしようとしてドアノブに手を掛けた

『……強敵を倒すにはまず弱点を調べるのが大切なんだよな。さて、こいつの弱点は』

攻略本見ながらそれはないだろう……

「え、ちょ、ま……3人とも顔が怖いよ？　ねえ、よそつよ、手つきがやらしいよ？　ねえ聞いてる」

ガッ！

「えつと……穹？」

ガシッ！

「望……明日香……ちょっとやめ」

「が、頑張ってくださいね藤堂さん！」

「あはははははは！　くすぐったいくすぐつたい！　ちょっと本当によ、やめっ！　あはははははは！！！」

これぞ星乃家に代々伝わってきた処刑秘技、『くすぐり地獄』なり。なんでも100年くらい前からこの秘技は星乃家にあるらしい。それを今琉華が受けている

ちなみに明日香は脇担当、望は足の裏担当、わたしは押さえつけ担当、何もしていないと思われるであろうエルフィはカメラ担当。なんだか危ないビデオを撮っている感じがして嫌だけどこれも良い思い出になること間違いナシだ！

「ちょギブギブギブギブギブギブ！！　しっ死ぬううううう！！

！　あはははははは！！！」

なんでこんな事になっているのかは色々理由がある。実際この数分前にエルフィも同じ物を受けているのだ。それで標的がエルフィから琉華に移されたというわけだ

もちろん攻撃中の皆さんに共通するお話だ

「え、エル！ 撮影してないで助けてよ！！ ぼつ、ボクは助けようとしたはずだよね！？ みつ見捨てないでええええええええ！！」
「すいません藤堂さん……これも自分の身のため……」
「エルの裏切り者おおおおお！！！」

依然としてくすぐり攻撃は止まらない。むしろスピードが上昇している感じがする

……わたし、明日香、望に関係するそれ 言いたいけど言えない。悲しくなるから

「ちよつ穹どさくさに紛れてどこ触って……あははははははは！！！」

御利益ありますように

「はあ……はあ……しっ、死ぬかと思った……」

3分後、琉華を解放する。くすぐりの刑から解放された琉華は呼吸を乱しながら乱れた服を元に戻していた。お陰で全員が汗だくな感じがする

自業自得だが

「全く……自分のこの成長はなんなんだ……背だけが伸びて肝心な部分が……」

「……大丈夫明日香、私も同じ」

「……わたしは遺伝というのに問題が……」

無いもの同士3人で肩を組んで悲しみを分かち合う。勝ち組2人はわたしたちを見ながら

「お、大きくても方が凝るだけ」
「望、穹、エルを押さえて実刑開始だ」
「了解」

割愛

「はぁ……に、2度目は死ねます……」

自業自得ということに気がついて欲しい
とりあえず全員で休戦に入り、それぞれのベッドの上で黙り込む

「そついえば明日で合宿も終わりかぁ……」

「……短いようで長かった」

「結構楽しかったですね」

「だが、これで私たちは強く 穹？ どこに行くんだ？」

「え？ あ、ちよつと喉乾いたから水飲んでくる」

1人で部屋を出て冷蔵庫のあるキッチンへと降りていった

「水……水は……あつた」

冷蔵庫の奥の方で横に置かれていた水の入ったペットボトルを取り出し、大広間の椅子に座る。さっきまでここでワイワイやってたのか……

ペットボトルの蓋を開けて水を口へと流し込む。満タンだったの

に3分の1くらい減っているのが目に見えてわかる。空気中の熱が入らないように急いでペットボトルの蓋を閉じ、それをテーブルの上に置いて椅子にもたれかかる。なんだかこのままここで寝てしまいたいそうだな

なんとなく目を閉じる。聞こえてくるのは虫の鳴き声が8割、それ以外には静かに流れてゆく風に吹かれた木々の音、そして誰かが近づいてくる足音

その足音は自分の後ろで止まったかと思うと、目を塞いできた。目は閉じていたので誰だかはわからないでも……この感覚は何度も

「……穹か」

「お、正解」

どうやら当たったらしく、聞き覚えのある声と同時に手が顔から離れていく。目を開けてみると、そこには顔を覗き込んでいる幼なじみの姿があった。はて、なんで逆なんだろう……

「真筆が見上げてるからでしょ？」

全くもってその通りです

身体を起こして穹に向き直る

「で、なんでここにいるんだ？俺がいるからとかはナシだからな」「流石にそんな訳ないでしょ……喉が渴いて水を飲みに来ただけってそこに水あるし。いただきまーす」

「おい穹」

止めようとしたが間に合わず、穹はテーブルの上に置いてあった水の入ったペットボトルの蓋を開栓してそのまま水を飲む。そして

残りの半分くらいを飲んで再びテーブルに置く

「ふう……生き返ったなあ……」

「……それ、俺が飲んだヤツだぞ」

「へ？」

俺が止めようとした理由を聞いた穹がキョトンとする。そしていつものように笑顔を作ったかと思うと、急に照れたような顔をした。そしていつもの顔に戻る

「べ、別に問題ないっしょ。昔からこうやって同じペットボトルで飲んでる訳だし」

「ん……それもそうか」

なんで俺は止めたんだろうか。別に幼なじみだから問題は無いというのに……

そんな事を考えながら穹の顔を見ると、暗くてあまりよくわからないが普段なら見せないような表情で顔を真っ赤にしているようだった

穹の名前を呼ぶ

「え……あ、ううんなんでもないなんでもない。……ねえ真箏、ちよつと外で風に当たらない？」

「いいけど……まあ、行くか」

2人で外、別荘のバルコニーへと出てくる。風は穏やかで昼とは違って夜は涼しい

俺が穹の後ろについて出てきたので、風で靡く穹の長い髪の毛に身体をくすぐられる。いつもと違って下ろしているから結構当たる
2人で手すりに肘をつけて景色を眺める

東京とは大違いで星がよく見える。その星がおおきな湖の水面に映し出されてまるで宇宙にいるみたいだ。周りには森林がある
穏やかな風が吹く

「ねえ真箏」

「ん？」

湖を眺めている穹が話しかけてくる。俺も湖を見ながら穹の言葉に返事をする

「あのさ、わたしが溺れた話聞いた？」

「いや、初耳だな。何？ さっき溺れた？」

「うん……ちよつとわたしが暴走して突っ込んでただただ溺れた。エルフィたちに助けて貰ったから大丈夫だったけど いたっ」

「何が大丈夫だよ馬鹿。心配掛けるな」

「ゴメンゴメン……」

穹にデコピンをする。多分これであの日から38回目くらいだろう
なんでこんな余計なことを覚えているのだろうか。自分でもよくわからないけど、不思議と数えてしまつて7年経つた今でも覚えている

額を抑えながら穹は話してくる

「それじゃあさ、わたしが泳げなくなった日のこと覚えてる？」

「……ああ」

その日からこのデコピンのカウントは始まっている

「小3の夏休み……丁度今日かな。わたしたちと真箏の家族でキャンプに行つたんだよね。確かこの近くのハズだなあ……」

「え、ここから近いの？」
「今更……泣きたいぜよ」

その日の出来事は覚えていようと場所なんて覚えていない
穹は1人で話を続けていく

「わたしたちが4人でさ、近くの川に遊びに行ったんだよね。ちょっと川の流れが速いところ」

「ああ……」

「3人は止めたけど、その頃のわたしはちょっとだけキカンボーで1人でずんずん行っちゃってさ、気付けば腰まで浸かってて流れが強いところにいたんだよね」

思い出を語る穹。勿論俺も知っている話だが、それを聞き続ける。
なんだか懐かしい

「それで流れに足取られてそのまま流されて……」

「その先はちよつとした滝になって……落差3mだったっけか」

「そうそう。それで」

穹は流されてそのまま滝から落ちた。滝壺の水深が深かったのか、穹に怪我はなくて済んだ。そして滝の先は川の流れも落ち着いていたので俺、姉貴、來斗兄の3人で穹の救助をした

そしてその時に3人で穹にデコピンをした

でもそれ以来、穹は泳げない

確かその日から3日くらい水を見るのを怖がっていた気がする

「……怖かった」

「え？」

「本当は怖かったんだよね。今日エルファイたちが手を引っ張って行

ったときは結構怖かった。ああまた溺れるのかな、今回は死ぬのかなって。でも助けてくれた。嬉し……かったかな」

「穹……」

穹の目に僅かに涙が浮かんでくる。それを穹は左手で拭う

「ま、まあ昔話は終わりにして」

穹の顔がこちらを真っ直ぐと見る。星空に照らされた穹の髪のと顔が綺麗に見える

なんだか普段より可愛らしく見えた

穹が口を開く

「真筆……今日って何の日か覚えてる？」

「え、今日？ ……なんかあった？」

なんだろう。思い出せそうで思い出せない……

「……まあいいや」

少し頬を膨らませて拗ねたように見せた穹は、顔だけを湖に向ける。俺もつられて湖を見る

「綺麗……だよ。湖と言ひ、星空と言ひ……」

「ああ」

トンッ……

穹の身体が自分にもたれかかってきた。その軽い体重をほぼ全て受け止め、なんとか倒れないようにバランスを保つ

穹の顔はまだ湖を向いたままだ

「真箏……」

「ん？」

「……綺麗だよね」

「さっき聞いたぞ」

「てへ」

穹の視線が、湖から俺の目へと移る。が、何故か俺は目を合わせられなくて、また湖を見る

「こっち見て」

「う……」

穹の顔へと視線を戻す

なんだか今はほぼ零距离だからわかることだが、穹の脈が速い気がする、勿論俺もそうだ

「あのさ、真箏……」

「……」

「……キス、して」

「……はい？」

一瞬穹の言葉を疑ってしまった。何を言い出すんだ……
頑張つて返す言葉を探し出す

でも俺が見つけて言い出すより早く、穹が先に言葉を発していた

「だってこの前はわたしが一人で無理矢理しちゃった訳だし、つまりは真箏の同意がなかった訳じゃん？ だから今回は真箏から……ダメ？」

星空に照らされている穹の顔は赤かった
でも

「ダメに決まってるだろ」

「へへ、そうだよね」

穹が自分の身体から離れてゆく。その時の穹の顔は伏せられていて読み取れることは出来なかった

穹が反対を向く

「真筆はさ……好きな人っているの？」

再び言葉を疑った。が、その質問の答えはすんなりと出てきた

「『いない』が答えだ」

「そう……じゃあ真筆は言ったからわたしも言う」

穹はこちらを見て笑顔を作り

「わたしは」

その時強い風が吹いて、その言葉を聞き取れることは出来なかった

「……………」

「あはは……言っちゃった……」

「……………」

『聞こえなかった』なんて言いたくても言えなかった。なんだか穹を傷つけてしまいそうで

穹は別荘へと向かって歩き出した

「さて、夜更かしもほどほどにして寝ようじゃないか。明日、起きられなくなるぞー！」

「あ、ああ………」

「おやすみ、真箏」

「おやすみ」

そして穹は一人で戻っていった。それに続くようにして俺も入っていく

「あ………」

ふとここで思い出す。今日が何の日であったかを携帯電話を取り出して自宅へと電話を掛ける。母さんが親父は起きているだろうか……

10秒後、電話が繋がる

『あら真箏、どうしたのこんな時間に。もしかして家が恋しくなっちゃった？』

「んな訳ねーだろ。ちょっと頼みたいことがあって………」

『そんなの言われなくても転送準備は整ってるわよ。真箏部屋の机の上の水色の箱を転送すればいいのよね？』

「ま、まあそうだけど………」

『んじゃ今から転送するわね。それじゃあおやすみ』

「ああ、おやすみ」

30秒後、必要な物が自分の手元へと転送されてくる。それを落とさないように左手で持ち、さっきから放置されていたペットボトルを回収しに机へと向かう

「……………」

冷蔵庫に戻す前に一口飲む
……かなり温くなっていた

#39 Boys talk , Girls talk (後書き)

ggdgdでしたね……随分と

次回でChapter5終了です

その後は……どうしよう

またEX入れるか……？

まあ置いておきましょう

ではまた

#40 合宿最終日(前書き)

なんか凄い長くなっちゃいました

そして最後はgoodgoodです

Chapter 5 最終話、とじろぞ……

#40 合宿最終日

「……なんだろう。俺って目覚ましなる前に起きる人だったっけ……」

思わず独り言を呟いてしまう

現在時刻5時55分。ソロ目だラッキーとでも言いたいところだが言いたくない。本来の起床時刻の約1時間前に起きてしまい、いつもと同じようにすることがない状況になっている

まあ横に誰もいないだけまだマシ……いや、普通にありがたい

ということまでベッドの上にいる。何をするにもわからないまま15分が経過しようとしている。隣には健太と光久の寝顔が。そして足の先には部長の醜い寝顔が

何故だか知らないが銃弾が掠る

とりあえず暇だ。何もすることがない。ゲームはクリアしてるヤツ持って来ちゃったからやってもすぐに飽きてしまうだろう

さて……どうしたものか

なんとなく健太の顔を見してみる。うん、暑苦しい

続いて光久の顔を見してみる。あれ？一瞬だけ女子に見えたよう
な……気のせいかな

最後に再び部長。いびきがうるせーです

ベッドの下に置いてあった荷物の中に入った鞆を漁る。が、この暇という状況を切り抜けられそうなアイテムは存在しない。ちなみに見つけた物は着替えとゲームと昨日の夜母さんに転送して貰った水色

の箱。さてと、昨日を過ぎてしまった以上渡すタイミングがわからない

とりあえず鞆に戻してベッドに倒れ込む。綺麗な天井だ。おそらくこの真上の部屋で女子たちが寝ているに違いない

ベッドを起き上がって座り込み、何をするかを考える

よし、女子の顔にイタズラ書きを……いや、まず入り口に何かしらのトラップが仕掛けられているはずだ。確か先生が1日目に女子たちが問題ないかを確認しに行ったときに、1階にいた男子の耳に悲鳴が聞こえてきたんだ。それで戻ってきた先生の顔が凄かった

1つ目の選択肢が消える。というか俺はどういう悪趣味を持っていったんだ

2つ目。この部屋の男子全員で落書き

……確実に殺される。多分部長はRWで容赦なく殺しにかかってくるはずだ

2つ目の選択肢が消える

さて……どうしよう。今この場で出来ること……別荘、湖、合宿……

ああ、そういえば俺たち合宿に来てたんだよなあ……よし！

小型テーブルの上に置いてあったデータスティックを手に取り部屋を出、VWの機械が置いてある部屋へと1人向かう。今から7時まで1人で特訓だ！

……なんだか結構簡単に答えが見つかった気がした

「……おはよう、真箏。……どうしたの？ ……凄い汗だけど……」
「お、おはよう望……ちょっと1人で身体を動かしててな……」

7時になったので特訓を切り上げ、顔を洗うために洗面所へとやって来た。そこでまだパジャマ姿の望と出くわし会話をする。どうやら結構な汗を掻いているらしい

ちなみに1時間の間に先生のデータと2回戦い、両方とも敗戦した。今回の結果から俺は銃だけではやっていけない気がしてきた。そんな感じがする

仮に近接戦へ運んだとしても、俺には銃が3丁しかない。要するに敵の斬撃や拳を受け止める術がない。さっきの戦闘中に銃で槍を受け止めてみたが、どうやら格闘攻撃を防御できるほどの耐久力はないらしく、そのまま貫通されてやられてしまった

ちなみにその銃はRWに戻ってくるとあら不思議。元通りです！

「……何やってるの、銃なんか取り出して」

「ん……あ、ちょっとな」

どうやら取り出してしまったみたいだった。外傷なんてない！

銃をしまって望に向き直る

「で、望はどうしてここに？ 洗面台使うんだったら先にいいけど？」

「……あ、うん。……使おうとしたら真箏が来たからつい」

なるほど。俺が来たから妨害してしまっただか。なんだか悪いことをしたのか？

でも望は洗面台へと向かずに俺の顔を見ている。目が一瞬だけ合ってしまったので視線を逸らす

望が口を開く

「……真箏、昨日の夜穹に何かした？」
「へ？」

思わず聞き返してしまった。が、すぐに言葉の意味を理解して『何もしていない』と返答する

答えを聞いた望は『……そう』と言って視線を斜め下へと落とす。昨日の夜は……あ、そうだ。昨日は何の日だったのかを忘れてしまっていたんだ

「……なるほど……そんなようじゃ幼なじみ失格」
「う……」

望にキツイ一言を入れられた洗面台へと向かう望。その時に長い髪の毛が身体にぶつかる

「……真箏、最終日、頑張ろう」
「……ああ」

顔を洗い、2人で洗面所を後にした

「む。真箏殿、起きていたのか」
「心配させるなよー真箏ー。朝起きたらベッドにいないし……どこ行ってたんだよ」
「あー……ちよつとな」

望と一緒に大広間へと到着。テーブルを囲う椅子の内、2つに1年男子が2人座っている。健太の隣の椅子に腰を下ろし、その隣に望が腰掛けた。準備はいいのだろうか

「……問題ない。……今日はエルと明日香が当番」

「望、早急に明日香を止めてくるんだ」

「……了解」

危険人物の明日香を止めるべく望をキッチンへと向かわせた

椅子に座っているのが男子が3人だけになる。部長はどうしたのだろうか

「部長はトイレだよ」

心を読まれたのか、健太がそう答えてくれる。たまにこうやって会話を省略できるところがいいかもしれない

まあ読まれてはいけないことを読まれるとかなーり厄介だが

次は光久が疑問詞を浮かべながら尋ねてくる

「真筆殿、本当に何処へ行っていたのだ。まさか1人で特訓など…

…」

「……まあ、そうだな。早く起きすぎて暇だったから1人で特訓しようかと……結果は惨敗だったけどな」

「おいコラ真筆、1人で勝手にやってるんじゃないやねえよ。なんで僕たちを起こしてくれないのだね」

なんだか健太がキレた

「いや……起こしたら悪いかなと」

「……なるほど　って違う。んゝまあいいや。やっぱりなんでもない」

なんだったのだろうか

『さて……朝食が出来たぞー』

キッチンから明日香がやってくる。両手で支えられているお盆の上には黄色い塊が乗っかっていた

……望、間に合わなかったんだな……

「さて。今日で最終日な訳だが……まあ全員問題ないだろう」

そうやって勝手に決めるでない

現在朝食中。食事が揃うと共にトイレから帰還した部長が話し出す。もちろん他の皆さんは危機ながらお食事中。それにも関わらず部長は話を進めていく

「で、今日は3時に全ての演習を終わりにし、4時半までには全ての片付けをして学校へと帰る。以上、これが今日の予定だ」

話し終わった部長は再び朝食を取り始める。3時までがタイムリミットか……それまで先生を倒せるだろうか　って肝心の先生がまだいない。これじゃあ目標の達成なんて確実に不可

全員が大広間に揃っているのに、玄関へと続く扉が開かれる。そこには合宿に行く前に見た不審者が立っていた。早く110番通報しないと！

「おう梅花。予定より少し遅かったんじゃないか？」

部長がこの前と同じように普通に話しかけている。だからどうしてそう不審者と仲良さそうに話せるんだあの人は！！

そして朝食の時間は過ぎて特訓開始時刻になり、全員が外へと集合する

「　　と言っわけで西宮。よろしく頼む」

「だからなんで俺がやらなくちゃいけないんだよ……」

基礎体力作りを終えてから15分くらい。これからVWに突入して戦闘開始だと言っのに部長と先生は何かを話していた。どうやら今日は部長が戦っらしく、先生は色々と準備があつて忙しいようだしなみにこの会話は10分くらい続いている

「だからさっきから言つてるだろ。俺は色々と準備で忙しいと」

「いやだからつて俺が戦闘に参加するなんて面倒くさい。一昨日と同じようにお前がやれ」

「教師に向かつてお前言うな。……仕方ない。だつたらお前がこつちで準備しろ。そうしたら俺が戦闘に参加する」

「よし乗つた」

どうやら方針は決まつたらしい。部長が何かの準備をして、先生が戦闘に参加するらしい。もちろん形式は初日、2日目と同じように1対7の変則戦。穹は見学という形になるが、1人でトレーニングをするらしい

8人でVWに向かう

「さて、お前らも少しは強くなつたんだろうな？」

「まあ男子は少しは変わつんじゃないっすかね？」

VWに来てすぐに先生がそう尋ねてくる。俺と光久もそれを言おうとしたが健太が早く答えてしまい、俺たちが喉元まで来ていた言葉飲み込むだけだった

健太の言葉に疑問詞を浮かべる女子4名。無理もない。昨日女子が遊んでいる間に隠れて演習をしていたわけだから

だからと言って本当に強くなったかどうかはまだわからない。もし強くなっていたとして、それ先生に勝てるのか？ それとも一昨日や昨日の個人演習のようにあっさり負けてしまうのか？ 今からその演習の成果がハッキリと出る

光久が『集中せよ』と言い、疑問詞を浮かべていた女子たち含め全員が先生に向き直る。全員の準備が整った

「さてと、今回はかりはすぐに決めさせて貰うとする。何せ西宮に仕事を押しつけた訳だしな」

先生はTEMMを起動して武器を取り出す。それは一昨日、データとの戦闘の時とは違ったパターン。一番最初にフォーマルハウトを取り出してきた。一撃で決める気か！？

専用弾を取り付けこちらに向ける。このままだと瞬殺だ！ 瞬殺じゃない。瞬殺より酷い！

「全員左右に散って！」

『了解！』

琉華が大声で叫ぶ。すると全員で左右に分かれ、ビルという障害物に隠れて移動する

ビルの陰に入ると同時に1万発の銃弾がそこを通り過ぎてゆく。どうやら間一髪のタイミングだったらしい

さて、こちら側に来た戦力を確認しよう。俺、光久、明日香、望

の4人。すると残りの3人は反対側に隠れたと言つことになる
さて、ここからどうするか……

『まったく……隠れても無駄だ。早く出て来い、すぐ終わらせるぞ』

お願いだから早く終わらせようとししないで欲しい

「さて、どうする？」

「どうするも何も……やっぱり一昨日のように全員で攻めるしか……」

「……でもそれと同じ結果になりそう」

「ふむ……では誰かが押さえつけている内に攻撃を決めるといふのは……」

「でも一昨日の結果だと押さえつける前に無力化されてダメだったからな……」

その場にいる4人で悩み始める。早くしないと先生から襲撃してきそうなので早く案を出さないといけないだろう。でも思うように良い案が出てこない。どうにか先生を倒す方法は……

しゃがんでいた明日香が立ち上がる

「考えてても仕方ない。とりあえず様子を見ながら攻撃を仕掛けていこう」

結局その案が採用されることとなった

先生の立つ場所の横に立つビルの角へとやってくる。先生の意識はどうやらここには来ていないようで、依然としてさっき俺たちがいた場所へと視線は向いている。そしてその右手にはサウザントクラウンが握られている

「えっと……さっきの順に行けば良いんだな？」

「ああ。別に確実に成功するというわけじゃないが、様子を見るならそうするしかないだろう」

「拙者の準備は出来ておる」

「……私も大丈夫」

3人とも武器は準備してある。俺も2丁銃を取り出して向かう準備をする

「それじゃあ先に私が行く。その次に望、明智、それで真箏、いいな？」

明日香の言葉に全員が頷き、そして

明日香がその場を駆け出し先生へと向かう。その2秒後に望が出て行く。その反対側からは健太が飛び出してきていた

「では拙者も行くでしょう」

続いて光久が飛び出していった

とりあえず一旦俺は様子を確認することに。先生の動きを観察するためだ

明日香の刀が先生の身体を両断しようとする。が、その斬撃は槍の取っ手によって阻まれてそのまま押し返される

続いて望の鎌による斬撃が足下に入る。このまま行けば立ち上がりが必要な状態に持って行ける！でもそんな簡単にはいかず、ジャンプして回避、槍の尻で望の顔が殴られて望は半歩下がることに最後に光久が攻撃。そのタイミングで健太も攻撃を仕掛けようとする。すると先生は武器を変更、以前職員室で見た手甲を装備する。

というか一昨日も見た

「それでも　　！！！」

「　　食らええっ！！！」

光久、健太の順にそう言い、2人で斬撃と殴りを入れる。が、先生はその攻撃を両方とも腕で受け止めて2人の攻撃を停止させる。2人は全く動かなくなった

「さて、これで終いか？」

「僕たち2人を止めてもこっちはまだ5人いるんすよ？　終いな訳ないじゃないっすか」

健太の言葉が終わるとほぼ同時にエルファイからの銃弾が襲いかかる。が、先生は武器を受け止めるといふ状態のままその銃弾を回避する

続いて明日香が刀で襲いかかる。その攻撃に対して先生は

「「なっ！！！」」

「すまんな佐々木。ちょっと利用させて貰う、ぞっ！！！」

右手で掴んでいた健太の身体を右腕一本で大振りする。それと同時に光久の身体も大きく動いて反対側へと振り回される

先生を軸に振り回された健太の身体は投げ飛ばされて明日香の方へと飛び始める。それに対し、明日香は武器を引っ込めてそのまま健太との衝突を待つだけだった。一応まだ戦闘不能ではないがそのまま動けなくなってしまうた

一方刀を捕まれたままの光久はまだ動けない

すると先生は右手を大きく後ろに引き、そのまま光久の顔面へ目

かけて突きを入れる

「くっ……!!」

光久は握っていた武器を手から離し、今の攻撃をしゃがんで回避する。それと同時にもう1本の刀を取り出して先生の腹部目がけて横薙ぎを入れる

その斬撃は先生の持っていた光久のもう1本の刀によって阻まれ、先生の足に何か武器が付いたかと思うとそのまま光久の腹部に蹴りを入れる。そのまま光久は50mくらい吹き飛ばされてしまい、動けなくなってしまった。健太、明日香と同様戦闘不能では無いみただ

「ぐっっ……」

望がさつき殴られたときの状態でその場に座り込んでいた。どうやら目にかかりの負傷を負ったらしくその場で座り込んでいたらしい無情にも先生はそのまま望を気絶させる

さて、動けるメンバーがこれで全滅したのか？ いや、まだ俺とエルフィと……そういえば琉華はどうした？ 俺もそうだがまだ攻撃していない

……仕方ない。みんなが動けなくなった以上俺が動くしかないか……
2丁の銃を持って走って先生に接近。それと同時に再度隠れていたエルフィも出てくる。さて、銃での近接戦、どこまで通用するか……

「銃しかないお前らには余裕か……」

「いや、舐めて貰っちゃ困りますからね？」

エルフィは遠方から射撃を開始するが、俺はまだ先生との距離を縮め続ける。その間に先生は銃弾をはたき落としてエルフィへと向かっていく。つまり俺から遠ざかっていく

「ちよ、来ないでください」

エルフィの想い、届かず気絶

だがその間に距離を詰めることが出来た！ 銃は弾を発射するだけじゃない！ 殴ればそれなりの攻撃力は期待できる物だ！

先生との距離がほとんど詰まり、そのまま銃を前へと突き出す。そう、銃は弾を発射してそれを当てるだけが全てじゃない。こうやって手の延長として捉えれば若干リーチが伸びるし、何よりこれは拳より硬い素材で出来ている。だから攻撃力の上昇、加えて零距离での射撃が可能になる

だが相手は先生、そう簡単にいくはずがない

「銃で殴るか……考えたようだがそれだと俺には勝てん」
「くっ……」

横に流れるように回避されて腕を捕まれる。もう片方の腕を動かして攻撃しようと試みたがもう片方の手で動きを封じられてしまった
先生の足に装備が取り付けられる

「終わりだな」

「……………」

先生の足が少し後ろに下がる。ダメだ。やっぱり俺たちの力だと先生には遠く及ばない

ピシユウンッ！

「……………」

頭上から銃弾が発射される音が聞こえてくる。それと同時に先生の腕から解放されて2人で距離を取る。が、先生の頬を銃弾が掠つてそのまま肩を銃弾が貫き、その部分から細く血が流れ出す

「藤堂か……………」

先生はそのまま武器を変更、フォーマルハウトへと切り替えて俺の方へと向ける。ってちよっと待て。この距離だと

「ぐあああああああつ！！」

そのまま発砲されて全発命中。1万発の銃弾が身体を貫き、お茶の間にはお届けできない姿に九返信してしまった

そしてこの戦闘結果、最後の希望であった琉華もフォーマルハウトの餌食に。気絶した5人はそのまま戦闘不能扱いにされて敗北。結局勝つこと叶わなかった

「おー、終わりやがったか。結果は……………その様子だと聞くまでもないな」

「うっわぁ……………なんだかみんなゲッソリしすぎだよ……………」

RWに戻ってきて5分と少し。流した汗を洗面所で流し、そして

外。先生に外で集合の令を掛けられたので7人が外へとやってくる。そこには部長と穹の姿しかない。先に行った先生はどうしたのだろうか

とりあえずこちらに煙がかなり飛んでくる

「ゴホゴホ……な、なんですかこの煙は……」

エルフィが煙を思いっきり吸い込んでしまったのか、その場で咳き込んでいる。確かに凄い煙の量だ。これは火事が起こっているのか狼煙をあげているのか……わからないところだ

続いて琉華が咳き込んでいた

男子3名は穹と部長のいる場所へと向かっていく。するとそこには煙でよく見えなかったのだが、バーベキューセット、略称BBQ Sがセットされていた

「あんな神崎、そんなどーでもいいこと略称しないで良いんだからな」

この別荘には確か数冊本が置いてあったはずだ。帰る前に超能力関連の本があるかどうかを探しておかないといけないみたいだ

部長が意図的にかどうかは知らないがこちらに向けてうちわをパタパタ仰いでいる。そのお陰で結構な量の煙が飛んできて男子3名がその場で咳き込んでしまう

それにしてもいつこんなバーベキューセットを用意したのだろうか　と想っている間に望が質問していた

「ああ、これはだな」

「今日で合宿も終わりなんだ。最後くらいパーツと占めようじゃないかーという先生の心易しい案がこのような事態を招いている」

「……梅花。なんだか国語力が無くなってる気がするぞ」
「俺は数学教師だからな」

だからと言って国語の能力くらいは持っていて欲しい
先程戦闘を終えた7人が後ろを振り返り先生の姿を確認する。その手にはダンボール、肉やら野菜やら焼きそばの麺やら何やらがギッシリと詰まっていた。そのダンボールには学校の近くにあるスーパーの名前が書かれている。どうやら買いに行った物はこのことだったらしい……。のか？
敢えて質問はしない

先生はバーベキューセットの前にダンボールを下ろして別荘の前へと集合を掛ける。だが部長は与えられた仕事なのかどうかはわからないが、集合せずにうちわを仰いでいる

「さて、見ての通りバーベキューをするんだが……今の内に言っておく。油断はするな。ほんの一瞬、コンマ数ミリの時間油断するだけでお前らは飢え死にすることになる」
『いきなり何物騒なこと言い出すんですか』

1年生総勢8名で先生にツッコむ。すると先生は「説明が足りなかったな」と言って続きの説明を開始した

「さて、さっきも言ったがバーベキューをする。で、油断は一瞬でもするなと言ったな。その理由は大体見当の付く者もいると想うんだが、西宮の右腕は尋常じゃない。一度俺も経験したからわかっているんだが、俺が一瞬だけ西宮を視線から外して後ろを見たんだ。本当に一瞬。それで自分の持っていた器を確認してみると肉が無くたってな、その代わりに焦げた肉やら野菜が入っていたんだ。確信した。あいつは……鬼だ」

簡単にまとめると、部長の動きに要注意しろということだろうか
全員が先生の説明に頷き、セツトの方へと戻っていく。そこには
全員の器と箸が用意されていて、部長は未だにうちわを仰いでいる
なんとなく思った。多分先生は部長だけ呼ばなかった、のだと

「お、説明会とやらは終わったみたいだな。女子には手を出さない
が、男どもは覚悟しておけよ」

……なんだろう。バーベキューセツトに仕切りが……

全員が器と箸を持ち

「 戦闘開始だ」

部長の一言によって、『バーベキュー肉争奪戦・男ども、本気の
戦い』の火蓋が切って落とされた

……なんとなくだけど、結果は目に見えていた

「さてと……お前らこのままで終わらせるつもりか？」

「」「」「」

『バーベキュー肉争だ（略）』が終了して約30分後。すぐに出
来る片付けをパパッと終わらせて全員が休憩中、男子3人が湖を見
て黄昏れている中、不意に後ろから部長に声を掛けられる。どうや
らこの合宿中に先生に勝てないままでいいのかということらしい

「それは……」

健太が俯きながら答え始め、最後には部長の顔を見てハッキリと告げていた

「……このまま終われる訳ないっすよ……」

でもその健太の言葉は消沈していた。目だけは本気で何か矛盾しているように見えるが、俺にはぼんやりとわかる。負けたままじや嫌だけど、どうせ戦ってもすぐ負けてしまっただろうから挑戦する為の勇気が湧いてこない。多分そういう感情が混じってしまった顔と言葉で違いが出てきてしまったのだろう

やがて健太は再び俯いてしまう

「……終われないけど……」

「はぁ……ダメだなこれは」

健太が顔を上げる。それと同時に俺と光久も部長の顔を見る
部長の口がゆっくりと開かれる

「とりあえず俺が言いたいのはただ1つ。最初から諦めるな、本当に無理だと感じたときにだけ諦める。まあ祖父が死ぬときに残した言葉だったけど……とりあえずこれをお前らに伝えておく」

3人で部長の顔を見続ける

「まあ……俺が思うには、お前らはこれくらいじゃ諦めないだろ？
色々な意味でのバカが3人揃ってるわけだから」

部長は照れたような顔をして頬をポリポリと掻く。そしてそのまま別荘の方へと歩いていった

『最初から諦めるな、本当に無理だと感じたときにだけ諦める』

……か。部長のお爺さんも良いこと言うじゃないか……

健太と光久がビシツと立ち上がる。それに釣られて俺も立ち上がる
そして

ありがとうございます。

言葉にはせず、向こうへ歩いていく部長へ頭を下げた

「……今度は3人で戦闘を挑みたい？」

更に30分後。全ての片付けを終えて別荘の中、の1つの部屋。

先生が寝泊まりしていた部屋

帰るための荷造りをしている先生の元へと男子3人で押しかけ、
先生に再戦の申し込み中。だが今度は7人で挑むのではなく、男子
3人で挑むという条件でだ

それだけ俺らの意志は本気だ
だが

「却下だ却下。7人がかりで倒せなかったお前らに3人で俺に挑む
？ 結果が見えている状態で挑むのは流石に俺も許可は……」

「……それでもお願いします!!」「」

先生に3人で頭を下げる。先生は「む……」と言いながら頭を
掻いているらしい

しばらくその場に沈黙（と言っても先生の頭を掻く音が聞こえる）

がその部屋を包む。そして沈黙が破れるように、ガタツと椅子の音がする。3人で頭を上げてみると、先生が立ってこちらを見ていた。そして先生の口が開かれる

「そこまで言うのだったらしようがない。けどな、もしこの戦いでお前たちが負けたらもう諦める。流石に俺もクタクタだ……」

その言葉に健太が身体を起こして言う

「元より次負けたら諦めるつもりだったっすよ」

次に光久

「だが拙者たちは負けはしない。今回ばかりは勝たせていただく」

そして俺が

「せんしえい。勝負です」

……噛んだ

『ほ、本当にやるのか真筆』

『……無茶にも程がある』

『なんでボクたちを誘わなかったの……』

『今からでも良いです！ わたしたちも戦闘に　！』

『……………』

RWの回線から女子5名の声が（穹は無言だが）聞こえてくる。

どうやら全員が3人で戦いを挑むことに心配しているらしく、自分も戦わせて欲しいとかいう感じの声が多く聞こえる

でも今回は男子3人で勝手に決めたことだ。女子も一緒に戦わせるわけにはいかない

それにこれは俺たち自身の問題だ。俺たちの問題は俺たち自身で片付けたい

武器を手に持ち先生に向き直る。今までの結果から考えると勝率は限りなく低い。もしかしたら1%も存在していないんじゃないか。つてくらいの勝率だ

でも1%の勝率を満たしていなくても、完全に0じゃなければその数字に賭けてみたい。それが男って物だ

「「「最初から諦めるな、本当に無理だと感じたときにだけ諦める」

」

その言葉に先生が反応する。そして鼻で笑いながら目を閉じる

その際、『雄治さんの言葉か……』と呟いていた

「さてお前ら、時間がないんだからそろそろ始めるとするぞ」

先生が武器を取り出し、構えながらこちらに向かう。その武器はやはりサウザントクラウン

こちらにも武器を構えて先生の方を向く

VWを静寂が包む。それと同時にRWの方からも会話などが聞こえなくなる。ただ聞こえるとするならばRWで吹く穏やかな風の音だけだ

RWと連動しているのか、普段風の吹くことのないVWにも優しい風が吹く

何故だか知らないが鳥の鳴き声まで聞こえた気がした

「……………来い」

ダッ！

先生の挑発的な言葉と同時に光久が2本の刀を持って飛び出す。だが戦力差は1人と1人でも、簡単に比にしてみると軽く15:1になってしまいかもしれない。1人で7人に突っ込んでいると同じような物だ

それに続いて健太が飛び出していく。特に作戦を考えることはなかったのでとりあえず攻撃を仕掛けて勝利を取るだけだ

……………こんな戦い方で勝てるかどうかの問題だが 勝つしかない

「……………その戦闘方法も飽き飽きしてきたぞ……………」

「だったら多少変えるまで！」

光久の左手に持った刀が先生を襲う。それは右から左に薙かれ、それを先生は槍の取っ手で、いつもと同じように受け止める。だが光久の攻撃はまだ終わっておらず、今度はもう片方の手 右手に持たれた刀で先生を縦に両断しようとする

「全然変わってないぞ……………！！！」

先生は槍を（先生から見ても）時計回しに回す。よって光久の左手に持たれた刀は上に上がっていき、そのままもう片方の刀も槍の取っ手で押さえられる。このままだと光久の身体が無防備だ！

俺は少し前進して銃を構え、2発先生に向けて弾を発射する

2発目が放たれるタイミングで健太が先生の身体を捉えようと、光久と先生の間の一発の拳を入れていく

だが再度槍を回転させられ、健太の右腕が弾かれ、光久の刀は健太のいる方向へと流れていく
そして

「これだから甘いんだっ！！」

ドストスツ！

一瞬の間に武器を変更したのか、先生は2人の腹部に手をめり込ませていた。その衝撃で2人ともこちらへと飛ばされ俺の横に並ぶ2人がこちらに戻ってくると同時に2発の銃弾が先生の元へと到達するが、呆気なく2発ともはじき返されてしまう

2人が口からにじみ出た血を拭き取りながら立ち上がる。今の攻撃だけで結構ボロボロになっている

「くっそ……どうにか勝てねえのか……」

「どこかに攻撃できる部分、もしくは瞬間があれば……」

2人がそう言う。だがそんなチャンスはほとんど無いに等しいだろう

そんな事を言ったら敗北しか無いんじゃないか？ 勝利なんて夢のまた夢、0%より上の勝率なんてあり得ないんじゃないか？
とりあえず攻撃を与えられるチャンスを探さないと……

先生がこちらへ歩み寄ってくる

「チツ……もっかい行くぞ光久！」

「承知！」

2人が武器を拾って再び先生の元へ。だがさっきのダメージ蓄積が大きかったのか、数秒もしないうちにこちらへと返されてしまう。2人が立ち上がるまでの間、俺は2丁の銃で何発も弾を撃つていく。でも全てはじき返される、回避されるの行動で一発も命中はない。その状態のままでもこちらへと歩み寄ってきている。ダメだ……チャンスなんてどこにも見あたらない

気付けば2人が再び飛び出している。こちらへと戻ってくる。飛び出す。戻ってくる

それが全部で6回続き、2人は立ち上がるのがやっとになってきていた。俺が使っている銃の内2丁も弾切れが近づいてきている。2人は膝を突きながら立ち上がる。が、フラフラして再び座り込んでしまう

その間にも俺は銃弾を撃ち続ける

「どうせもう終わりだ。諦めて降参するかどうにかしておけ」

先生は尚歩み寄ってくる

そして片方の銃が弾切れになり、パンツ、パンツと乾いた銃声を響かせる

その銃を後ろに放り投げてもう1丁の銃を取り出して攻撃を再開する

2人は膝を突いた状態で動かない

やっぱり俺たちの力だと先生には勝てないのだろうか

ピチャッ

「……………」

その光景を見て思わず攻撃を止めてしまった。先生も歩くのを止めて自分の肩へと視線を向けている

ここがVWで良かっただろう。本当にそんな事が思えて仕方がない

……先生の左肩に鳥の糞が落ちてきた

というかVWにも鳥って存在してるのか……？　そもそもVWに人間以外　ああそうか。データだから作るうと思えば作れるのか

……

4人、静止状態

しかし攻撃を普通に流したり回避したりする先生がアレを回避しないとは……いや、武器じゃなかったから避けなかっただけか？

でも鳥の糞なら流石に避けるはず。武器じゃなかったらという理由では無いはずだ。そうなると多分気がつかなかったのだろう

気がつかなかった？

そこで俺は今までの考察と言葉を思い出す

『……強敵を倒すにはまず弱点を調べるのが大切なんだよな。さて、こいつの弱点は　』

さっきの戦い、琉華がビルの屋上から仕掛けた攻撃……音に反応して回避していたがギリギリだった……

もしこれが予想通りなら勝機がある

「健太、光久。その状態のまま悪いけど、一瞬だけ走れるか？」

「え……」

「……走れる？　そうか、走れるんだな。それじゃあ行くぞ」

……なんだかこの辺、幼なじみに妙に似た言葉のような気がして
ならない

急いで銃弾を装填して先生の頭目がけて発射する。その直前にサ
イレンサーを外しておいたので大きな音がこの場に響く

その音に反応したのか、先生は武器でその銃弾を落とそうとする
だが

カッ！

「ぐっ！！」

これは戦闘が始まる直前、念のためと思って部長から貰っておい
た閃光弾だ

先生の前方3m手前でそれは爆発し、一瞬何も見えなくなるほど
の閃光がこの一帯を包む。その間に3人で近くのビルへと隠れ込む

「はあ……はあ……」

「悪いな無理させて……」

念のため謝る。が、2人は気にした様子もなく首を横に振るが、
大きく呼吸を乱している

気付かれるとマズイので、2人には極力大きく呼吸をしないよう
に説得する。そして2人は呼吸を小さくする。本当に申し訳ない

「で、真箏。何か思いついたのか？」

「ああ……そうなんだけど……2人とも、先生をどれだけ押さえつ
けられる？」

気付いた頃には1本のビルの屋上に立っている。光久から借りた刀を持って……

下では先生が俺たちが出てくるのを待っているのか、さっきの場で立ちつくしている。勿論汚れた上着は脱いでタンクトップになっている

ある意味これからすることは賭けだ。予想がはずれれば俺たちは確実に敗北。予想が当たれば勝率は8割を超えるかもしれない
というかこの作戦を思いつかせてくれた鳥さん、ありがとう……

先生に気付かれないように下を覗き込む。未だに先生はその場で動こうとはしないが、ちゃんと武器は手にしている。油断はしていないようだ

さて……作戦開始まであと数秒。健太と光久がどれだけ先生を押しさえつけられるか

ギインツッ!

「始まったか……!」

下から大きな鉄音が響いてくる。下を気付かれないように除いてみると、光久が1本の刀で先生を両断するが如く縦に刀を握っている。その斬撃は槍の取っ手、毎回そうだがその部分で押さえつけられている

でも光久と健太は体力の限界だ。いつ戦闘不能になってもおかしくはない

ドスッ!

『ぐぐっつっ!』

下から鈍い音が聞こえてくる。どうやら光久の腹部に槍の尻の部分が突き刺さったのか、光久は腹を押さえて数歩後退していた。その瞬間健太がビルの間から躍り出る。そして光久を横切つて先生の顔に右手を入れようとしますが、先生は武器を変更、手甲で健太の左手を受け止める。

そして光久がその瞬間を待っていたかのように攻撃を仕掛ける。

勿論先生はそれに反応して刀を右手で受け止める。今がチャンスか……？

『ふう……さて、そろそろ終わりにするか……？』

『しませんよ……もうちよつと戦いましょうよ先生……』

『拙者たちはまだまだ負ける気ではないからな……』

『……そうか。それならこうだな』

先生は一瞬だけ手を開いて2人の武器を離す。だがその刹那、2人の右手を掴んで力を入れ始めた。

『ぐああああつ!!』

なんだかここからでも2人の右腕の骨の軋む音が聞こえてくるんじゃないかってくらい力なんだろう。2人の悲鳴がかなり大きい。早めに勝負を！

2人は左手で右手を解放させようと先生の右手を掴む。だがそれは全く離れようとはせず、2人の腕をさらに圧迫させて更なる悲鳴を上げさせる。

でも、悲鳴を上げながら2人は

『ははっ……』

『?』

地味に笑っているように見えた

その顔を見た瞬間に俺はビルの屋上から飛び出していた
重力によって地面へと吸い込まれていく。段々と3人との距離が
縮まっていく

光久から借りた武器を大きく後ろへと引く
より近くに来てわかった。2人は笑っている

『で、真箒。何か思いついたのか？』

『ああ……そうなんだけど……2人とも、先生をどれだけ押さえつ
けられる？』

『へ？』

『だから……む……スタボ口の2人に申し訳ないんだけど、先生
をどれだけ押さえつけることが出来る？』

『押さえつける……ねえ』

『良くて2、30秒ではないだろうか……』

『その間に戦闘不能になる確証は？』

『……』

『……すまん』

『何言ってるんだ真箒』

『へ？』

『戦闘不能になる確証は……皆無だ』

『光久……』

『その通り。真箒は先生を倒すことが出来る作戦を思いついたんだ
る？ だったら僕たちはその作戦に乗る。だから絶対に成功させる。
だから』

『戦闘不能になる確証は無い』

『2人とも……』

「で、先生を押さえつける理由は？」
「ああ……多分こういう事なんだと思う」

「なるほど」

「と言うわけで……」

「そうと決まれば決行だな」

「うむ。拙者たちは真箏殿に全てを任せる。その代わり失敗したら

……」

「アイスでも奢って貰おうぜ光久」

「御意」

「……」

「さてと……僕たちもそう長く保ちそうにはないけど……行くか光久」

「うむ。真箏殿、これを」

「……ありがとう光久。ありがとう健太……」

「なあに」

「では……任せたぞ真箏殿」

「ああ。今から5分後に決行だ」

自分の影が先生に重なる

「……なっ!？」

どうやらその影で俺が上から攻撃を仕掛けようとしていたのに気がついたのか、即座に上を見た。なんて時に影が重なるんだ！

でも先生は咄嗟のことだったのか2人の手を離さずにこちらを見る
そして

「これで……」「終わりだああああああっ!」「」「」

ズシャアッ！！ ドスッ！

「ぐぶっ」

先生の右肩を切り落とし、そのまま勢いよく地面へと落下する。思い切り頭を打ち付けたのか、頭から暖かい液体が出てくるのかわかる

「いつっ……」

2人の手が解放されたのか、2人は右手首を左手で押さえて蹲っている。どうやら長時間握られていたせいか、若干身体を震わせながら呻いていた

一方右腕を切り落とされた先生は、まだ戦闘不能になっていないのかその場に倒れ込んでいる。でもこれなら動くことは無いはずだつまり

「勝った……って事が……？」

健太が呟く

「はは……ははは……」

光久が呆然とした顔で笑い出す

「くっ……あはは……」

光久に釣られて俺と健太も吹きだしてしまっ
そして3人は笑いを喉の奥へと戻し込み

「だから何のことだ？」
「しかし……頭上が弱点か……」

3人で大きな湖を見つめる。その先には大小様々な山が連なっていて、その景色が湖によって綺麗に引き立てられる。時折吹く風が涼しくて気持ちいい

そのお陰ですぐに汗は引いていった

無言で向こうを見続ける。特に何も無いのだが……

健太が不意に立ち上がる。俺と光久は無言で健太を見つめる
すると健太は靴を脱いで湖の浅瀬へと足を進めていき

バシヤッ

あまりにも不意打ち過ぎる不意打ちを決められる。体操座りだった俺たちは抵抗できないままそれを全て受ける形に……お陰で一発でビショビショになる

が、涼しくて気持ちいい

光久が立ち上がる。健太と同じように靴を脱いで浅瀬へと足を進め

バシヤッ

再び被害を被った。勿論誰も一言も発しない

バシヤッ、バシヤッ、バシヤッ……

それから何発も水を掛けられる

そして我慢の限界になり

俺も立ち上がって水の掛け合いに参加した

帰る時刻になる頃には3人とみずぶ濡れになっていた

そしてとうとう東京にある学校へと帰ってくる

この『とうとう』にはいろいろな意味が込められている
例えば合宿であったり……いや、8割方合宿だなこれは

残りは帰りの車である

行きと同じように光久はグツタリ、俺と健太はサヤ人に。女子
一同はピンピンしている

穹だけが大はしゃぎ。そういえば昔から絶叫マシーンが大好きだ
った気がする

全員を下ろして先生を乗せた車は、とんでもないスピードで学校
の敷地を出て行った。残ったのが生徒9名だけになる

部長は駐輪場へと身体を向けて一言、『それじゃあ解散。次集合
する日は決まってるから連絡する』と

そのまま駐輪場の方向へと歩いていき、姿が見えなくなった数十
秒後に校門を出ていた。これで残ったのが8人になる

「さて、僕たちも帰るとしようか」

「そうだね。もうクタクタだよ……」

「ラーメン食べて帰りたいです……」

「私はエルの意見に賛成なんだが……」

「……私も同意見」

「それでは行くとするか」

俺と穹を除いた6人が校門へと向けて歩き出し、俺たちもそれに続くように歩き出す

「真筆」

「ん？」

横にいる穹に話しかけられる

「えつとさ……昨日が何の日だったか思い出した？」

穹のその言葉に前にいた全員が立ち止まり、こちらへと戻ってくる。ああそつだ。結局今日も忘れてしまふところだった

「あれ？ あれ？」

7人が横に並ぶと、穹は「え、何？ 今から何が始まるの？」と
言いながらキョドキョドする

無理もないだろう。7人に急に横に並べられたらそんな反応をする。
俺もそうするに違いない

「ほら、神崎さん」

「え？ 俺？」

確かにそれを持っているのが俺だからって……ここは選り出した
エルフィが渡すべき 手を後ろで隠すな。仕方ない……

「えーつとだな穹……」

自分の鞆を漁って例のブツを取り出そうとする。だがごちゃごち

やしてしまったのか美味く取り出せない

苦戦すること約10秒、例のブツ 昨日の夜母さんに転送して貰った水色の小さい箱を取り出す

それを穹に差し出すと、穹はゆっくりと手を伸ばしてきてそれを両手で受け取る

開けても良いか？ と言った感じの目でこちらの7人を見たので全員で頷く

綺麗に包み紙が開封されていく

「これ……」

包み紙が剥がされ赤色の箱が出てくる。そしてその箱を開けた穹は驚いたような顔をして

「……なんで……わかったの？」

そう呟いた

箱の中から出てきた物、それは5cmくらいのペンダント。真ん中には翠の石がはめ込まれている

そして7人全員で息を吸い

『誕生日おめでとう！』

「……」

その言葉に驚くようにして顔を上げた

そして疑問詞を浮かべながら質問をしてくる

なんでみんなが穹の誕生日を知っているか。なんで穹の好きな色がわかったのか

なんで穹の欲しい物がわかったのか

エルフィはこの前女子のみんなで買い物に行ったときに穹が何かを見つめているのを見ていたそうだ。そしてそれを確認するために単独行動をして穹が見ていた物を確認、俺に報告、そして穹が8月3日に誕生日だと言うことを告げる。それで全ての話が繋がったのか、エルフィは『みんなでプレゼントしましょう』と言い、wars部全員で金を出し合ってそれを買った

最初は疑っていたが、穹の事を考えると確かにそうなるだろう。そう思った

本来なら合宿が終わってから渡す予定だったが、一昨日穹が来たから急遽……というか昨日の穹の発言で……

穹は視線を落としてそのペンダントを見つめる

とりあえず今ここで思った最低なこと。エルフィがアレに気がつかなかつたら俺の財布がとんでもないことになっていただろう
要するに全額出費だった

「……………」

穹は黙ったままだ

『……………』

こちらも黙ったままだ

しばらく沈黙が続いた後、穹は顔を上げる。そして頬に涙を伝わせ、とびきりの笑顔を作って

「……………」
「ありがとう、みんなっ！」

弦巻高校 Wars 部 + 星乃穹による強化合宿は、ラーメン屋での
打ち上げによつて幕を下ろした

さて、夏休みもこれからが本番だ!!

40 合宿最終日(後書き)

・おまけ・

「よし、それじゃあ海に行こう」

「は？」

「ちょ、みんな惚けるなって。海だよ海。ほら、この前話したじゃん？ 夏休み後半に出かけようって。だからそれで海行こうよっ・み！」

「ああ………」

「ちょ、何その反応！」

「賛成！」

「反応急変！？」

「で、いつ？」

「詳しいことが決まったら連絡するよ。メンツは多い方が楽しい、ってね」

40.5 ラーメン屋でのちょっとした会話 Chapter

5 本当に終わり

はいどうもあんだーすたんどです

応援も何も無い状態でChapter5が終了いたしました！

なんだかすっげーgdgdです！ 最近危ないかもしれません！

この先の展開を細かく決めてないです！

やっべー………！！

はい

こう叫んでも仕方がないので……

ではここで次回からの予定

えっとですね……

Chapter 6に入るかEXに入るか迷ってます！

Chapter 6 本編が進行（9月突入） EX 夏休みの後半

はい

流石に1章挟んでまたEXは無いと思うんですね、僕的に

だからと言って……

Chapter 6の話がEXの話に関係してくる予定なんだよ！

（あ

……ゲフンゲフン。忘れてください

ま、まあ……

次の話の投稿結果って事で！

ほんではまた……さいなら

EX2-1 in Ocean!! (前書き)

悩んだ末そのままEX突入です

どうせ夏休みの話なので章分岐はしません。めんどいし

とりあえず海でのお話になります

ではまた後書きで

「で、千葉の方まで行くんだっけか？」

「そぞ。駅に5時集合でそこから2時間くらい掛けて電車、乗り換えは無かった気がするな。それで到着は8時ぐらいで……4時くらいまであっちで遊ぶ。からの1時間半でちよつと寄り道して隣町の隣の祭に行つて帰ってくる。そんな感じになるだろうね」

「……祭にも行くとなるとお金がかなり必要になる」

「ぼ、ボクそこまでお金無いんだけど……」

「わたしが少し出しましょうか？」

「だったらエル、私にも出してくれると助かる」

「あ、わたしも」

「拙者も」

……

お金の貸し借り……いや、もう貸し借りではない気がするんだが……とにかくお金の貸し借りはやめておいた方がいいんじゃないだろうか。でもそんな事を言えそうにない空気なので発言しないようにしておく

とりあえず今日は8月21日。弦巻高校wars部強化合宿を終えて約2週間が経った日の3時頃。我が家は冷房が壊れてしまったので別の場所。最近によく利用する図書館、の2階。多目的ホールへと来ている。少し大きい声で話すことが出来るし、なにより我が家より涼しいのでここに来ている

今日の最高気温は38度近いらしい。12時頃のニュースでは今日の東京だけで200人近くが熱中症や日射病などで倒れてしまっているらしい。母さんも暑さでダウンしてしまった。幸いなどころまだ死者は出ていないらしい

こうやって冷房をガンガン使うから地球の温暖化は進んでいくの
だろう。まあこうやって言いながらも涼しみに来ている自分が恥ず
かしい。少しはエコ人間になれってモンだ

それはさておき、今日は何故ここで話すことになっているのかと
いうと　の前に今いるメンバーを確認しておきたい

まずは弦巻以外のメンバーとして挙げられるのが、我が幼なじみ
であり、最近高校間の交流を多くしてきている星乃穹。もしかした
らこのまま転校してくるんじゃないかってくらいのレベルに達して
きている気もするが、流石に転校するというのは考えていないらし
い。そもそもコイツの学力は少し足りていない

次に弦巻メンバー、1年5組の近藤望。初めて会ったときはあんなに
暗いイメージを与えてきたのに最近では普通に明るいような気が
する。というか普通に明るい。どうやら人を第一印象で決めては
いけないというのは本当なのかもしれない

まあ限度を過ぎれば……

同じく1年5組の藤堂琉華。ショートカットが良く似合う女子N
O・1に認定しても良いかもしれない。どうやら人を変えてきたかもし
れない。一人称が『ボク』と言う、少し変わった女子である

今更だけど……どうやら6月が誕生日で16歳になっていたらしい

続いて3組を挟んだお隣クラス、1年2組。の、偉大なる子孫、
明智光久。名字からもわかるように明智光秀の子孫であり、武士道
を行く男(?)。なんだか最近は健太によってエロの道を行かされ
つつもあるけど、家ではちゃんと修行に励んでいるらしい。とりあ
えずあの左目の力を押さえられるようになってくれれば……

なんだか知らんが横で俺の腕を拉致る1年2組の女子、鶴明日香。
サイドテールが特徴的な女子で、数ヶ月間に『犬』呼ばわりされて
いた覚えがあるが、最近はそうでもなく普通に名前が多くなってき

ているような気がする。というかそつだ。何かとベッドに入っているから大変な人物だよコンチクショー

続いて我がクラスのメンバー。何故かwars部じゃない人間も混じっているんだが……

杉山、滋賀崎、宮本

なんでこのエロ要素のタツプリ詰まった3人集がいるのだろうか。まだ文化祭のことは根に持っていたりするんだぞ……

おそらく穹に猛烈アタックすること間違いナシの3人、なんだか知らんが穹の後ろでワイワイやっている。一応仲は良いらしい

とりあえず俺から言えること、穹に変なことで手を出したら確実にブチ殺すだろう。幼なじみとして

……エロ3人集はさておき、イギリス人と日本人のハーフ女子、エルファイ・N・エストラント。外国の名前であり、名前で呼ぶことが多いからか、もはや名字なんて覚えていなかったりする。出てくるとしたら本当に……たまたまと言うしかないだろう。明日香と同じでベッドに入っていたりするから大変だ

続いて我がクラスの委員長……間違えた。『腐って使い物にならないクス委員長（by笹原さん）』の佐々木健太。エロ3人集の上に行く人物であり、その名をエロ・ザ・キングオブ・大魔神の称号を授けてもいいくらいの……エロだ。それくらいエロだ。家にはエロ要素の詰まった物が100を超えているくらい……エロだ

「おいコラ真筈。僕にあるのはエロだけなのか。というかエロしか無いのか」

「すまん……ずっとそう思っていたんだ　って、心を読むなエロ魔神」

「待て待て。エロ魔神とはなんだエロ魔神って。以前に“エロ・ザ・キングオブ・大魔神”ってなんだよ。まずネーミングセンスが存在

しねえよ。せめて“ゴッド・オブ・紳士”にしてくれよ”
『いや、ないな』

その場にいる全員から総ツツコミが入る。健太は顔を上に上げて左手で目頭を押さえていた

その様子を健太の横で呆れた顔で見ている人物がいる

笹原綾香。我が1年4組の『腐って使い物にならないクス委員長』の数百……いや、数億倍って言うて良いほど頼りになる俺と同じ役職の副委員長だ。勿論俺より頼りになる。というか頼りになりすぎている

我がクラスの副委員長であると同時に健太の幼なじみでもある。だが健太に対してだけは素直になれないらしく、周りでは『ツンデレ』とか言われている人物だ。俺でもその様子はすーっごいわかる何かを感じたのか笹原さんが俺の方を見る。今日はコンタクトなのかいつもしている眼鏡が無い。笹原さんって眼鏡を外すと綺麗なんだなあ……

「お世辞はいいわよ神崎。それより何よこの紹介的な文。誰がツンデレよツ・ン・デ・レ。誰が……全く……何よこのwikipediaみたいな感じ……嫌よ。するならもっとマシな紹介して」

心を読まれたのか、はたまた独り言なのか。笹原さんはそう言うて反対側を向く。周りは騒がしくてその言葉に気がつかなかったのかガヤガヤしている

いや、思い切りツンデレじゃないか？

そんな事を考えた瞬間、再びこちらを向いて睨まれた

よし、とりあえずここで再確認を試みたい

ここにいるのは俺、エルフィ、健太、明日香、光久、琉華、望、穹、笹原さん、滋賀崎、杉山、宮本の12人。男子6名女子6名だ

そして

「それじゃあ……明日の話し合いは以上にして解散にする？ それともどっか遊びに行く？」

「いや、明日早いんだしやめておいた方が……」

『よし、行くっ』

「……行くのか」

明日は海へ遊びに行つてきます！

結局、今日はこの後近くのゲーセンに行き、8時近くになって解散となった

そして夜が明け、8月22日。海へ行く日がやってくる

早朝5時

「……眠いです」

「……大丈夫だエルフィ……俺もだ」

「……奇遇だな2人とも……私も凄い眠いんだ……」

「……眠いのはみんな同じ」

「……なんていうか……寝ないって辛いね……」

「……何があつたのだ」

「……光久……聞くだけ野暮だ……」

「……実際なんだつたのよ……」

「「「……さあ……」」」

「……あれ？ わたしだけかな……真筆の家になかったの……」

「「「ちよつと神崎、話がある」「」
「……あれ？ 3人とも一体何処に……もうちよつとで電車来るはず」

……

「お目目パツチリだじえ！」

「真箏……まだ5時なんだしちよつと静かにしようね」

「大丈夫だ穹。なんだかオラ、テンション高くて……でも身体が痛いんだが」

…… 8月22日、早朝5時

集合時間に全員が駅に集合して5分くらいが経ったであろうこの時間。何故だか知らないが俺の顔はいつもの数倍に膨れあがっている気がする。でも眠気が一気に吹き飛んだので良しとしておこつとりあえず今日の朝……と言つても夜中。ガチ夜中。その時間帯に何があつたのか説明しておこつ

8月21日、午後11時頃 要するに約6時間前の出来事だった
インターホンと『おじゃましまーす』の声によってそれは始まった
もうこの時間帯でのインターホンと『おじゃましまーす』はパターンが予想できる。しかも大勢。聞いた限りだと4人。確実にwars部女子4名だ。だから俺は敢えて寝たふりをしてそれをやり過ごそうと決めた

でも我が家には母親という悪魔、要するにバカがいる。勿論それに反応した母さんは誰かも確認せずに玄関のドアを開けたらしい。以前に誰かを確認する前に人の名前を言っていた

つまりドアを開けて人を確認する前から来ることがわかっていた
みたいなの……

そして4人は入ってくる。リビングへと向かう。その時間にお茶

をしたらしい。なんだか世間話の様な物が聞こえる。うるさくて眠れない

うるさいからか親父が起きたらしく、リビングへと向かう足音が聞こえてくる。その様子を音だけで感じ取る。親父がリビングへと入っていく音が聞こえる。なんだか知らんが親父まで世間話らしき物に参加し始める。うるさくて眠れない

世間話が聞こえてくる

世間話が聞こえてくる

世間話が聞こえてくる

せけ（略）

会話が聞こえてこなくなる。やっと静かになったと思って目を閉じる。実際その時刻は今日の1時。もうこれは仮眠になってしまふなど覚悟する

覚悟したとき

…… 4人が入ってくる

寝たふりをする。誰だかは知らんが俺が寝ているのを確認してくる。すっげー吐息が当たる。なんだか後ろでガヤガヤし始める。じやんけんの掛け声が聞こえてくる。落ち込む声と喜ぶ声が聞こえてくる。うるさくて眠れない

うるさくて眠れないからベッドを起き上がる。4人が驚いたような顔でこちらを見る。その場に4人を正座させる。とりあえず黙らせておく

何故だか知らんがトランプ開始……ゆえに4時まで遊んでいた

そして今へと時は繋がる

これが5人の眠い理由だ。とりあえずこの4人には謝って欲しいところだ

とは口には出せなかった

健太が時計を確認している。それに釣られたのか、全員が時計を確認し始める。5時7分。どうやらそろそろ電車の来る時間帯らしい。ちなみに始発である

「さて、そろそろホームに向かうとしますか」

そして全員が電車へと乗り込んだ

そして電車内

どうやらこの電車は4人席が向き合っているらしく、全3グループになって席に座ることになった

説明が難しかったかもしれないが……家族席と考えて貰おう

「真筭……それ余計にややこしくなってる気がするぞ」

自分だつてそう思っている

とりあえず全員の座席を確認しておこう

エルフィ、明日香、琉華、望の女子4名で1グループに纏まることに。もちろん全員眠さでダウンしてしまったので普通に寝ている。俺の席からだと思の寝顔がよく見える

続いて穹、笹原さん、杉山、宮本の4人グループ。本当は笹原さんじゃなくて滋賀崎が座るってなっていたのだが、笹原さんが「獣共の中に女子1人は危ないわよ」と言つて滋賀崎をどけることになった。一応言っておこう。穹は笹原さん並に強いと思う

でも……俺としても笹原さんがあちらについてくれたのはありがたいと思う。あのエロ3人集の中に穹1人でいさせるのは不安すぎる。幼なじみとして

そして最後に残った4人で席に座っている。目の前に座っている

滋賀崎が悔しそうな顔をしているのが傑作だ

ちなみにその左では光久がグツタリしている。この前の合宿の時も思ったが、光久は乗り物に弱いのではないだろうか。後で聞いてみよう

そして俺の横、光久の目の前では健太が携帯で何かを確認していた。こつそり覗いてみると、どうやら今日の天気らしい。全部晴れマークが付いている

「なあ神崎……どうしても穹ちゃん譲ってくれないのかあ……？」
「あんな滋賀崎……それはどういう意味だ。俺に穹をどうこうする権利も義務もないから何も言えないぞ……？」

滋賀崎がよくわからない質問をしてきた。すると光久の後ろに座っていたのか、穹がこちらに頭を向けてきた

「何言ってるの滋賀ちゃん（どうやら滋賀崎の事らしい）。わたしは真筍の物です。なのでわたしを滋賀ちゃんにあげるのは無理なことでしょう」

「滋賀崎、そうやって睨み付けないでくれ」

『ちよつとアンタら、今星乃さんみたらブチ殺すわよ』

『大丈夫でございます……』

とりあえず滋賀崎の恨みと妬みとマイナスイメージか何かの沢山詰まったであろう視線がかなり痛い。俺は一体何かしたのであるうか

……

その視線を無視して笹原さんの言葉が気になって奥の席に座っている杉山と宮本の姿を確認してみる。どうやら両手で顔を覆っているらしい。その指と指の間には隙間がないように見える

そして穹の顔を見してみる。その瞬間に不思議そうな顔をしてこちらを見た

滋賀崎の視線が (略)

しばらく見つめて視線を外す。うーん……ああ、そういうことか。そういえば今日は穹がスカート……それもかなり短い物を履いてきていた気がするな。それで今の穹の体勢……ふむ、あちら側からだとスカートの中身が丸見え、そう言いたいのだな笹原さん。その判断、間違っていない！

少し時間が経ち、穹が光久の上で携帯をいじり始めた。どうやらメールを打ち込んでいるらしく、文字を打ち慣れた指先はとんでもないスピードで文字を打ち込んでいる。もちろんこちら側から内容を確認することが出来ない

その間滋賀崎の (略)

穹がメールを打ち終わったのか、携帯をパタンと閉じてあちら側へと戻っていった。そして置くの2人を確認してみると、どうやら解放されたらしい。両手を脱力させている

不意にメールの着信音が響く。携帯を開いて確認してみると。そこには“From 星乃穹”のメッセージが

その間 (略)

メールを開いてみる

『あのさ真筆、さっきなんでわたしのこと見てたの？ もしかしてわたしと一緒に座りたかった？』

ふむ……早速返信をしよう

こんなに近いのにメールをするというのはどうかと思うが内容が内容だ。メールで回答するでしょう

『いや、そっちの男子2人が疚しい事を考えているのではないかな』
『く』
『悪い。ほら、今日スカートで来てたからそっちの男子2人が……』

返信
受信

『あ、そういうことね……えっとね……』

なんだか空白が多いので、下キーを連打する。長い、長すぎるぞこれ……

連打開始から約10秒、やっと文字が出てくる

『今日は白だよ』

「穹あぁっ!?!」

思わず席を立ち上がってしまった。多分俺の顔は今真っ赤になっているに違いない

滋賀さ(略)

今この状態で思えることはただ1つ。他の乗客が誰もいなくて良かった……

落ち着きを取り戻して席にゆっくりと座っていく。そしてメールの返信を打ち始める

『あんな、そういうのは報告するな! こっちが気が狂っ!』

返信
受信

『ねえねえ聞いてよ真筆! 昨日さぁ……少しだけ胸がおっきくなつてた!』

「穹—————っ!?!」

滋（略）

さっきと同じ行動を繰り返して返信を打つ

『誰も聞いてないから！ 俺にとっては無用な知識だよ！ いいか！？ そういうのは軽々と……いや、とにかく報告するな！ 以上！』

返信

またもや受信

ため息を吐きながらも確認してみる

『それでもわたしはまだAAカップです。真筆はおつきい方が好きだよねえ？ エルフィか琉華みたい。わたしだって負けないよお？』

「いい加減にしなさいああいつ！！」

『あはははははははは！！』

からかわれてる！ 絶対からかわれてる！ なんでこんな時に胸の話してくるんだよ！ その後俺はどう反応すれば良いんだよ！ とりあえず光久の後ろから穹の笑い声が聞こえてくる。あちら側の3人と健太が『何、何？』と言った感じつぶやき始めた

なお滋賀崎は（略）

穹の姿が見えないまま、あちらがわから穹の声が聞こえてきた

『ふう……ふう……ま、真筆……も、もうちょっと下にスクロールしてみてください……』

「……事によっちゃ後で罰だからな」

『『罰！？』『』』

『ちよつと神崎!? 幼なじみにそれは破廉恥よ!!』

どうやら今の発言に誤解を与えてしまったらしい。そこで穹も『え、ま、真筆、本当なの……?』って聞き返すな。俺はそんな事をするわけないだろう。エロ4人集と違つて

「あ、格下げ?」

……エロ3人集とエロ大魔神と違つて

「……戻すな」

とりあえず横のエロ大魔神を無視してさっきのメールを確認。本当だ、どうやらまだ続きがあるらしい。下にスクロールしていくと添付ファイルが添えられていた。その下には『見てみて!』の文字が

怪しみながらもその添付ファイルを開いてみる

『そういえばまだ送ってなかったよね?』

「だからと言つてこのタイミングで送るかフツー」

穹の制服姿の写真。何故だかは知らないが、こうやって互いの制服姿を交換している

言い出しは両家の母親。『思い出に』とかいう理由で中学から始めている。最初は乗り気じゃなかったけど何故か割と続いているのだ……しかし……相変わらずだらしのない制服の着方だ。俺の知らない所でどう先生に注意されているんだか……まあ穹は穹だ

「……つたく……こうやって近いのにも関わらずイチャイチャしゃがって……リア充野郎め……」

「あいな……」

『そ、その……星乃さん？　もしかして神崎とキ、キスしちゃったり……したの？』

笹原さん。それはなんでも直球過ぎる質問じゃないか？　思わず心臓が飛び出そうになったぞ

とりあえず穹、嘘を言え。というか俺は不本意だったんだ。これなら言い訳が出来

『うん。もう両家公認だから』

『『『『殺せええっ！！』『』『』』』』

「穹あああああああああっ！！！」

1時間半後、目的地に到着する

その1時間半の間、俺はいつの間にか眠りについていたらしい

ザザーン、ザザーン

弦巻高校 Wars 部 + 1年4組1部メンバー + 星乃穹 in o
clean……

波の音が良く聞こえてくる。というか波の音しか聞こえないような気がする。他の客も沢山来ているのだが……あ、カモメの鳴き声カモメが沢山飛んでいく。それを12人で見つめている

「よし」

「それじゃあ」

『あ、明日香さあん!?!』

『……琉華、覚悟』

『のーぞーみー? まさかとは思いつけどボクを襲撃するつもりかなあ……?』

『……そのまさか。……ていつ』

『ふふーん、甘いね望。その攻撃パターンは既に読んであ ひゃうんっ!』

『ご、ごめんね藤堂さん……アタシも一応女だから……』

『……琉華、覚悟』

『え、ちよ、ま……おたすけええええええええっ!』

……駄目だ。いくらこの壁が厚いとは言え女子更衣室からの声が丸聞こえだ……何故こんなことになっているんだ……くそおっ……俺も水着履いてくれば良かった……!!

水着を着替えて戻る頃には、風呂に入ったが如くのぼせきっていた

『あれ? 笹原さん、その包帯って……』

『え、ああこれ? ちよっ……ね。海にはいるわけだからちゃんと外すわよ』

『……なんかあったの? ……骨折?』

『近藤さん……もし骨折したらこの場にいないわよ……』

『とりあえず私たちは気にしないでもいいのか?』

『ええ。そうしてくれるとありがたいわ』

『え……嘘』

『な、何その傷……』

『……気にしないでくれるとありがたいんだけど……』

『で、でも……!』

いるとかなり暑苦しい。太陽が良い感じに照りつけているので余計に熱い。しかもさっきの会話を聞いたことよって余計な熱が生まれている。だから本気を出せずに踏ん張っている

……光久もその格好で明後日の方向を見ていないで欲しい

「……………ふむ」

すると光久が声を発する。その声に反応したエロ3人集が俺の腕を解放して光久の横へと並び立ち、同じ方向を見つめ始める。どうやらその方向は更衣室のある方向らしい

なんとなく予想は出来る。女子一同が向かってきたに違いない
ちなみに魔神の健太はパラソルを立て終わった後、その下のシートで転がっていた。寝ているのかよくわからない状態だ

「なあ杉山、俺は今日誘われて良かったと思ってる」

「同感だ宮本、今日という日を俺は絶対に忘れたりはいしない」

「Ah…天使が舞い降りたみたいだな……………」

横に並んでいた光久がこちらへと戻ってくる

「真筆殿、拙者は荷物番をしていた方がいいだろうか？」

「ん……………任せても良いのか？」

「男子で交代制にすれば問題なかるう。では拙者は」

そして光久もパラソルの下に座り込んだ。何故だか知らんがTEMMを起動して刀を脇に抱えている

まああの様子だと荷物は大丈夫かもしれない

再び3人集の方へと目を向けてみる。そこには何故か撃沈した3人の姿しかない。この一瞬の間に声1つ無く何が起こったんだ!?

なんだか知らないけど足下が赤いんだけど!?

少しだけ視線を左に動かしてみる。そこには健太が使っているような武器を手にしている笹原さんの姿が。笑顔がとてもしゃないが恐ろしい

なんだか睨まれた。でも攻撃はされなかった

とりあえず笹原さんの姿を確認することは終了した。だが他の5人は何処へ行ったのだろうか……辺りを見回してみると 何をしているのだろうか。5人揃って両手で顔を隠して……光久から視線を逸らして……

そのままパラソルの下にいる光久に視線を向けてみる。うん、女子があんな状態になるのも頷ける理由だ。とりあえずその下に覆っている物をどうにかして貰おうか。というか何でさつき誰もつこまなかったのだろうか、ふんどしに一丁になったことに……珍しかったからだろうか

ちなみに生で見るのは初めてだ

仕方ないので光久の元へと歩み寄る。その隣では健太が倒れながら女子5人を苦笑しながら見つめていた

「む、どうなされた真筆殿。交代はまだ早い故……」

「あ、あのな光久。とりあえず、とりあえずなんだが……そのふんどしはどうにかならないか?」

「……なるほど。しかし、これ以外の水着が無い故どうすることも……」

待て、ふんどしって水着の一種なのか?

すると健太が鞆を漁りだし、一枚の海パンを引き出す。それを光久に手渡しして

「よし、着替えてくるんだ光久」

「承知」

……なんでこいつは2枚も海パンを持ってきていたのだろうか
試しに聞いたところ、予備で持ってきていたらしい
砂浜では赤く染まった砂が男子3人を包み込んでいた。砂風呂的
な感じらしい（赤色）

光久が戻ってきて全員が集合する。光久はちゃんと海パンに着替えてあり、その手には先程まで身につけていたふんどしがある。それに対して女子が全員目を逸らしていた

全員で（埋まっていた3人も）パラソルの下に敷いてあるシートの上へと座り込む。うん、みんな水着な訳だし目のやり場に困りますねこの状況

……なんだか知らんが3人集は目を押さえて血の涙を流していた
「さて、今から3時半くらいまで海にいます。自由時間です。各自好きなように遊んでみてください。荷物番は男子の方でやっておくので女子の方は気にしないでください。で、昼食はみんなで食べようと思うので12時になったら一旦ここへ戻ってきてください。では以上、行ってきてください！」

その健太の言葉に静まりかえる一同。この光景を何処かで見たことがあるような気がするが敢えて触れないで起きたいと思う

全員が黙り込むこと数十秒、3人集に動きがあった。もちろんと言えることなのか、穹の側へと3人が立ち

「穹ちゃん、俺と遊ばない?」「」

……駄目だコイツら。早く何とかしないと……

とりあえず穹のことだ。相手が誰であろうと受け入れる性格の持ち主だからその辺は問題ないだろうな。多分

……その3人集を笹原さんがもの凄い蔑んだ目で見ているのが怖いと思つた一瞬である

「ん〜……いいんだけどね、いいんだけど……わたしは泳げないのです」

「「「ほう」「」」

「と、言うわけで3人で好きに遊んでいて欲しいなと」

穹の発言に思わずオーバーリアクションをかましかけた。大丈夫、反応なんて一切してない。平常心のままだ

3人集がキョトンとしたかと思うと、歯を見せとびっきりの笑顔で

「「「じゃあ、俺が泳ぎを教えてあげるよ。手取り足取り」「」

「死になさい変態共」

「と、言うわけでわたしは真箏に泳ぎを教わりたいと思います」

「あ、私も教えてくれ真箏」

「ボクもいいかな?」

「……私も」

「わたしもよろしくお願いします」

「ちょ、4人とも。そうやって怖い目で俺を睨まないでくれ。というか健太、何処へ行く。って以前の問題だ。穹以外の4人は泳げるだろ普通に」

「「「「チツ」「」」」

「……舌打ちすな」

3人集と笹原さんに睨まれながらシートを立ち上がる。すると同時に穹が腕にまとわりついてきた。他の言い方をするならば腕が拉致された。更に反対、右腕には……Wars部女子4名が腕を拉致し　　つて重い！　つか痛い！　死ぬ！　なんか穹は海行こうとするし、4人は反対に引つ張るし！

「痛い痛い痛い！！！」

「……ははっ、ざまあねえな神崎い！！！！」

「テメエら黙つてろやあ！！　痛い痛い痛いいいいいい！！！！」

なお引つ張られる。とりあえずより力の加えられている右腕が胴体から切り離されそうなくらいに引つ張られる。そしてその反対側の穹はだんだんとパラソル側へと戻ってきている

ふむ、この際俺はどうしたらいいのだろうか

「わたしが真箏と泳ぐんだああああ……！！！！」

「そ、それはこっちの台詞だよ穹ああああ……」

なんだか知らんが穹と琉華がそう会話をする。てか何で俺！？穹はともかく他の連中は好きに泳げばいいじゃないか！！

「真箏、それお前本気で考えてるか？」

「な、なんの事だ健太あああああああああああああああ
あっ！！！！」

もう駄目だ。だんだんと右腕に血が流れなくなってきた感じがする。というか今にも骨が真っ二つになりそうな勢いだ

今この状態で考えるのもあれだが、こういう時に心を読まないで
いただきたい

それに……心を読む暇があるのなら、今、この状態の俺を助けて
いただきたい。特に動きのない男子一同

ちなみに3人集はジト目（負のオーラ付）でこちらを見ている。
お願い、マジで助けて

「……わかりました。わたしはとりあえず今回は降りておき
ましょう。今回だけは穹さんに譲ります」

右腕から1つの手が離され、少しだけ右腕が楽になる。どうやら
エルフィが手を離れたらしい

何を諦めたかは疑問だが
続いてもう1つの手が離される感じがする。どうやら望が離れた
みたいだ

「……今回だけ。……でも、次は私が取らせて貰う」

何をだ

続いて明日香が離れていく

「くっ……いいか穹。今回だけ今回だけ。それと……いくらそう
いう場面だからと言って……ああいうのはナシだからな」

何がだ

「さ、3人とも……うう……わかったよ。それじゃあ……祭の
時はボクが右腕を貰うから」

「……あ、ずるい……」

「早いモン勝ちだもんねだ」

琉華が離れてゆく。そして機嫌を損ねたかのように肩を上げながら1人、海へと向かっていった

「まず拙者が荷物番をする。だから皆は好きに遊んでくると良い」

「そっか。んじゃ……光久、任せたかな。綾香、ちよつと」

「……名前で呼ばないで」

「……………」

琉華を覗いた9名が、健太が笹原さんをどこかへと連れて行くのを見ていた。とりあえず健太と笹原さんの事だ。色々な意味で問題はないはずだ

左腕を引つ張られる

左腕の先にある物を見ると、そこには穹の笑顔があった

ちなみに後ろからは負のオーラが飛んできている

「よし、行こう」

「ちょ、引つ張るな!!」

そして穹と海へとintoすることに

その後ろからは光久、健太、笹原さんを除いた全員が走って付いてきていた

ゴボボボボボボ……

目の前で気泡がいくつも浮かんでくる。というか泡立っているっていうのが表現的に一番近いかもしれない

現在穹との泳ぎの特訓中。小1くらいの時の立場が逆転している感じがする。あの頃は穹も泳げていたのに……あの事故で、な

ゴボボボボボボ……

なお泡が出続ける。そういえば穹が海水に顔をつけてからそろそろ30秒が経つ気がするのだが、一向に穹は顔を挙げてこない。そして泡が出るのに目立ち始めてのがつい15秒くらい前。……なんだろう、すつげー嫌な予感がするぞ

とりあえずそのままで見ている

ゴボボボボボボ……グツ、グツ、グツ……

……なんだろう、泡が止まったかと思えば穹の喉当たりからそんな音が聞こえ初め

「穹？」

「しよっぱあああああああああああつー！」

もちろん海水だからである

ここがちよつとした浅瀬で良かったなと思う。穹が足を着けて急に立ち上がった。前髪から海水がポタポタ零れてゆく

そして何故だか知らんが顔と顔がかなり近い。いや、近すぎる

「ふおつ！？」

その出来事に驚いて思わず手を離してしまった。するとバランスを崩した穹がその場で尻餅をついてしまう

スラリと細い足がこちらを向いたので、思わず視線を逸らしてしまふ。その先では女子4名が男子3名に水を掛けて虐めていた。なんだか琉華と目が合った

「ちよ、ちよつと真筈……急に手離さないでよお……」

「ああ悪い悪い。立てるか？」
「うん。ありがと……」

穹に手を伸ばしてそれに掴ませ、一気に引き上げて穹をその場に立たせる。しばらく呼吸をしていなかったため、若干呼吸が荒い。小さくもとい控えめな胸が上下している

「どう？ 7年前のCANは取り戻せた？」

「ん……ポチポチって所かなあ……ちょっと一人で泳いでみるね」
「あ、ちよ」

俺が止めること遅く、穹は一人で泳ぎだした。穹はだんだんと沖の方へと受かっついていき、それをゆっくりと少しずつ追いかけていく。それと同時に足場が深くなっていき、ついには足場が不意に無くなって、もうその場に浮いた状態になる

一方穹はまだ止まらず いや、今止まってその場で体勢を立て直そうと

「げっ、あ、足場 ゴボオツ!!」
「そ、穹!!」

目を閉じていて下に足場が無かったのに気がつかなかったのか、その場で穹が溺れだした。なんだよ！さっきまで普通に泳げてたのに!!

慌てて穹の元へと泳いでいく。結構な距離を開かされていたのに加え、波の力によって中々進んでいる感じがしない。早くしないと穹が！

「ゴボアツ！ ま、ま」

そして穹が沈み始めた。ヤバイ！ 本格的にヤバイ！
俺の身体が出せる全ての力を出して穹の沈んだ場所へと泳ぐ。そ
してその場で潜って手を伸ばし

(穹……！)

ギリギリ、穹の手を掴んで救出することに成功した

チーン

誰だ。そんな不吉な効果音を鳴らしたバカ野郎め。今は幼なじみ
が大ピンチなんだ。それに勝手に穹を殺すでない
とりあえず穹を引き上げてパラソルの下へと運んでくる。心配し
てくれた全員がそこへ集合し、穹の様子を見守る

「え、えっと……確かこういう時って……だあああつ！！ どうす
ればいいんだよ！！」

「か、神崎さん、落ち着いてください！ 焦ってても解決策は出て
きません！」

どうやら取り乱していたらしい。でも大変な事態になっているん
だ、早く穹を助けなくては！

でも人が溺れたら一体どうすればいいんだ……えっと、えっと……
…あ、そうだ。こうすればいいんだ！

「おい神崎！ 何穹ちゃんの胸に手当ててるんだよ！」

「こんな人前でそんな事をするのか teme は！」

「コイツもはや人じゃねえよ！」

「黙れよ！ 緊急事態だよ！ これ以外方法ねえよ！ っていうか

俺も正直なところ躊躇ったよ！」

「……じゃあ女子にやらせるよ！」

エロ3人集がガヤガヤやっている中俺は穹の……う……小さもとい控えめな胸に両手を当てている。女子が『し、仕方ない……』と言った感じに呟く声が聞こえたが、とりあえず今はこうするしかない！ 学校で習ったことが役立つときが来た！

穹の心臓の上辺りであろう場所を強く押す。一定のリズムでそれを繰り返す、奥へと入ってしまったであろう水を吐き出させる。口の中からは少しずつだが水が出始めてきている

『……………』

一同はそれを見守っている

そして俺は穹に呼吸を吹き込もうと顔を近づけ あれ？

ここで恐るべき大問題が発生した

「……………」

『……………！！』

思わず後ろを振り向いて全員表情を確認してみる。負のオーラしか飛んできていない

一応確認しておこう。まだ触れ合っていない

「え、えっと……ここから先はどうすればいいのでしょうか……………」

『……………』

いや黙り込まないでくれよ！ 確かにここまでやったから俺に責はあるとは思うんだよ！ でも……俺は……俺は穹に呼吸を吹き込

めと言うのか!? いや、前に不本意ながらも穹に唇……もといフ
アーティストを奪われたよ! でも……えっと……とにかく! 俺
にはそんな真似できない! だ、誰か……!!

「じゃ、じゃあ……俺がやるよ」

「おいコラ滋賀崎、俺は男子に助けを求めてなんかいないぞ。女子
に助けを求めているんだ」

「流石にそこは自重しような滋賀崎」「
「お前らなんて大嫌いだー!!」

おお……杉山と宮本はちゃんとわかってるじゃないか。どっかの
変態とは大違いだよ

「それは真箏にも適用されるけどなー」

……真箏に面目ない

しかし困った……本当にどうすればいいのだろうか

「仕方ないわね……アタシがやるわよ」

「へ? 笹原さん?」

声のした方を振り向くと、そこには小さくてを挙げた笹原さんの
姿が。笹原さんが穹にマウストウーマウスするというのか! 助か
る!

「ちょっと何よその表現方法……流石にアタシにそんな趣味は無い
わよ?」

……確かに表現が悪かったかもしれない

笹原さんが穹に近づいてきたので、俺は反対側へと移動して心臓

マツサージを続ける

穹の前に笹原さんが座り込むと、どこからか一枚のハンカチを取り出して穹の口へと掛け、そして

「ああ……そうすれば良かったのか」

「いや、良くないから……」

笹原さんがハンカチ越しに穹に呼吸を吹き込み始めた

呼吸の吹き込みを繰り返すこと合計2回、穹は目を覚ました。無事でよかったと心からそう思う

「と、言うわけでスイカ割り大会を行いたいと思います」

『はい？』

なんだかんだで結構な時間が流れてゆき、昼食を取り終わって40分が経過した頃。そろそろ1時近いだろうか、健太が海の家の方からスイカを抱えてやって来た。そのスイカはつい先程までいい感じに冷やされていたらしく、健太がスイカを下ろすと『冷たい冷たい』と呟いていた

……健太が砂の上に置いてしまったので皮に砂が付く。急いで杉山がそれを持ち上げ、見事な連携技で宮本が水を掛ける。どうやらそれは本人が持ってきた水筒の中の水らしい

砂の上にちよつとしたシートを置いて、その上に冷たいスイカを乗せる

「で、健太。このスイカを割るための道具はどうするのだね」

俺が健太に尋ねてみる。すると健太は光久にアイコンタクトをする
それだけで何をすればいいのかわかったであろう光久は、TEM
Mを起動して銃を取り出ししていた。そうだね、やっぱり銃で木っ端
微塵にするのが手っ取り早いよね

「いやいやいや、流石に木っ端微塵じゃ食えんだろう」

そこで健太の冷静なツツコミが入る。そうだ、木っ端微塵じゃ駄
目だな。食えなくなるな

光久は「違うのか……」と呟きながら銃を戻し、続いて刀を取り
出す。そうだね、やっぱり刀で綺麗にスパッっていくのが気持ちい
いよね。何せ平等に分けられるしね

「いや、だから……刀でも別に問題は無いけど、それじゃあつま
ないでしょ。それに刃物だから危ないし」

再び健太の冷静なツツコミが入る。そうだ、確かにそこまで問題
はないけど刀は刃物だし危ないな。目隠しするわけだし……

とりあえず、望には鎌やら槍やら用意しないでいただきたいとこ
ろだ。何気に構えてるし

光久が刀を仕舞う

「それじゃあこれでいいのかしら」

「……それ使えるのお前だから……」

「あらそう?」

……笹原さんは笹原さんで例の武器を装着していた

とりあえず琉華、そのスイカとの至近距離で銃を構えないでいた
だきたい。銃弾が中心でストップする。種と間違える可能性がある

このままでは埒が明かれないと思ったであろう健太は、自分のTE MMを起動して一本の木刀を取り出して、それが俺の方に向かってきているのは気のせいだと願いたい

「まあね、今から力チ割るのは真箏の頭だからね」

「……やっちまえ佐々木！」

「死ぬから！」

……コイツ、本当に俺目がけて振り下ろしてきやがった。砂に木刀が突き刺さり、俺はその間に健太を蹴り倒して木刀を没収する

「さてと……一番最初に割りたいのは誰だ！。やらないなら俺やっちやうけどー？」

俺が木刀を右肩に抱えて周囲に確認を取ってみる。すると、女子の中から1本の腕が真っ直ぐに伸ばされた。どうやらエルフィらしい若干興奮気味なのが気になるのだが

「わ、わたしが最初にやらせていただきたいと思います！」

かなり意気込んでいた

エルフィに近づいて木刀を手渡す。そしてその後ろから琉華が目隠しをし、明日香と穹の2人でエルフィの身体を回し始めた

「わ、ちょ、何するんですか！」

……スイカ割りのルールを知らないのだろうか

「……た、立つのがやっとなん……ですがあ……っ」

回され終わったエルフィがその場でヨロヨロし始める。何とかその場に足を踏み留め、少し前へと足を出す

そのタイミングでヒントの教え合いが始まった

前と言う者、右という者、左という者、後ろという者。やっぱりスイカ割りはこうじゃないと駄目だな。ちなみに俺はスイカから離れる左を指示している。正しいヒントを教えているのは望だけらしい
さあエルフィ、誰のヒントを頼りにスイカの元へと辿り着く……？

「え、ちょ……どっちにあるんですか！ ちゃんと教えてくださいよ！」

「これがスイカ割りだぞエルぼん。それえええええっ！！」

「ちょっと佐々木さん……きゃああああああっ！！」

健太がエルフィの肩を掴んでそのまま左に一回転させる。回り終わったエルフィを笹原さんが立て直し、そのまま健太に一発拳を入れていた。もちろん健太は沈黙

再度ヨロヨロし始めたエルフィは、そのままスイカから遠ざかり、力尽きたのかその場に木刀を振り下ろした。砂に木刀が刺さる音が響く。目隠しを外したエルフィが悔しがっていた

そのまま次のメンバー 望へと木刀が手渡される

が、回された後、地面に踏みとどまることが出来ずにそのまま前方に倒れてしまったりタイヤという残念な結果に終了してしまった
続いて運動部に所属してもいないのに結構筋肉がある宮本に木刀が手渡される

結果は勿論言うまでもない気がする。コイツは所詮見た目だけだ。望と同じようにバランスが取れずに後ろに尻餅をついてりタイヤ。打ち所が悪かったのか立ち上がれずにいた

「さつてと……次はボクの番じゃないかなあ？」

琉華が袖まくりをする。いや、水着な訳だから袖は無いが……座り込んでいる宮本から木刀を取り上げてブンブンと回転させる。その行為は非常に危ないので絶対に真似しないでください

「誰に伝えてるんだ真摯？」

「明日香、これは非常に大切なことだぞ。もしかしたら怪我人が出るかも（ガスッ）」

『あ、ゴメン！ 大丈夫杉山くん！！』

「……な？ 危ないだろ？ だから真似するなって事だ」

「わ、わかった……でも私はそんな事はしない」

と言うわけで、木刀は人前では絶対に振り回さないように。してもスイカ割りの時だけに

杉山の頭を力チ割ったと言うことで琉華はレッドカード退場。パラソルの下に戻ってちょこんと体操座りをする。その横には残念な結果を出した4人が座ってこちらを眺めている。全員が失敗したら2週目の開始だ

ちなみに怪我人2人はもう1つのパラソルの下に運ばれている

続いて笹原さんの手に木刀が握られ、穹と明日香の2人で回転させる

「む……これは……わ、わからないわね……」

フラフラになった笹原さんが独り言を呟く。そして一步一步ゆっくりとだが前へと進んでいく。ヒントも無しに、まるでその方向にスイカがあるかの如く

まあだからといって真実を伝えるまでもない

ドスッ

「……………なんでスイカが後ろ……………それもなんであんな遠くにあるのかしら……………」

……………スイカから遠く離れた方向、しかも海の方で木刀を振り下ろしていた。その場に人がいなくて良かったと思う。というか皆さんどいてくれました

木刀を引きずりながら笹原さんが戻ってくる。顔を赤くしながら不機嫌そうな顔をしていた

そのまま滋賀先へと木刀を手渡し、残念賞のパラソルの下へと足を向かわせて座っていた

木刀を手渡された滋賀崎が琉華と同じように、袖がないのに袖まくりをする。よほど気合いが入っているらしい

「ここで穹ちゃんに良いところを見せて神崎と言う魔の手から俺へとターゲット変更……………うむ、良い感じのシチュエーションじゃないか」

それを人は妄想と呼ぶらしい（明日香・談）。若干違う気もしなくはない

目隠しをした滋賀崎が俺と光久の手によって回転させられる。そしてフラフラになった滋賀崎が少しずつ動き出す

パラソルの下にいる全員と、まだ生き残っているメンバーで声を掛け出す。もちろん俺は正解の方向なんて教えたりはしない。正解を教えているのは、今回は光久だ。誰の言葉を信じるのだろうか

まあ、そんなのは考える必要も無く

「俺は穹ちゃんの言葉だけを信じるぜ！」

まあ実際聴いているヒントは琉華の物だったりする。だが、そのヒントはとんでもなく危険な方向でして……

「おおう滋賀ちゃん。良いところ狙おうとしてるんじゃない？」

「こ、この声は穹ちゃん！？ よし、外れてても許す！ ここだあつ！！」

『穹！！』

滋賀崎と穹を除いた全員がそう叫ぶ

滋賀崎の振り下ろした木刀は穹の頭目がけて振り下ろされる。駄目だ！ バカだアイツ！ 目の前から穹の声が聞こえたことに何の違和感も持ってねえ！！

「まあ大丈夫だつて。このくらいで死ぬほど簡単に出来てないし」

パシッ

まあ……ですよねー

穹が木刀から視線を外した状態で木刀を白刃取りしていた。やべえ……アイツ超人だ！

部長と先生をあそこまで追い詰めたと言うのも納得がいく。いきすぎる

木刀を止められたことに違和感を持ったであろう滋賀崎が目隠しを外して木刀を砂浜へと落とす。そしてその場に膝を突いて穹に土下座を始めていた

そこに女子が全員集まってくるが、穹は5人を止めて滋賀崎へと向く

「うん、大丈夫だよ。別に怪我がないわけだしさ」

「え、そ、それじゃあ穹ちゃんは俺の事を許して」

「だーかーらー……少し痛いかもしれないけど沈んでてねー」

ドゴオツ！！

正直に言わせていただこう。あまりにも一瞬過ぎたので何が起ったのかわかりませんでした

気付けば滋賀崎の身体が海まで吹っ飛んでいた。そのまま海へと沈み出す滋賀崎、誰も助けに行こうとはしない

穹へと視線を戻してみると、手をパンパン叩いて一言

「全く……穹ちゃん穹ちゃんうるさいなあ……わたしがどう想ってるかわかってるクセにさっ」

……何故だろう。この言葉はどうも滋賀崎に聴かせられる勇氣は無かった

砂浜へと落とされていた木刀が明日香の手に握られる

そして目隠しをされて穹と笹原さんの手によって回転させられる。フラフラになった明日香は何故だか知らんがこちらへと向かってきていた

「おおっ……」

「ん……これは真箒か？」

そのまま身体と身体が接触してしまう。もちろん水着と言うことで肌と肌が触れ合ってしまった。なんていうか……細いし白いし何より柔らかい。女子の身体ってこんな　ってイカンイカン！！俺は何変なことを考えているんだ！　これだとエロの称号を授けられてしまう……！！

2秒後、明日香が離れてゆき、フラフラの状態のままヒントを頼

りにスイカを目指し出す

正しいヒントを言っているのはエルフィの1人だけ。明日香はエルフィの声を頼りにスイカへと向かって行っていた

『おおっ！！』

思わず全員で声を出してしまった

その声に反応したのか、明日香はピタリと立ち止まった。どうやらここだと確信したらしい

「……………ここか」

木刀を思いつきり上へと振り上げ、そのままスイカへと向かって振り下ろす。が

ドスッ

「……………むう」

『ああ……………』

今の明日香の斬撃は、スイカを少しだけ掠って地面へと叩き付けられてしまった。その惜しい結果に全員が残念そうにため息を吐く。明日香は悔しげな顔で穹に木刀を手渡した

だが穹は木刀を光久に手渡した。どうやら完全に体力が回復していないとの事らしい。そのまま明日香と一緒にパラソル下へと戻っていく。体力が完全に回復していないのなら最初からあそこにいれば良かった物を……………

多分遊びたかったんだな

光久が木刀握り、目隠しをする。そして俺と宮本の2人で光久を

思い切り回す

光久は若干フラつきながらもなんとか踏みとどまり、ヒントもない状態で歩き出した。まるでそちらにスイカがあるかの如く　笹原さんの時みたい

「……………」

一度立ち止まってそこで木刀を振り下ろすと思いきや、反対を向いて再び歩き出す。その方向はスイカのある方向で……再び立ち止まる。それがスイカの目の前だったりする　一応言わせていただこう。結果は言うまでもない

光久がその場で木刀を振り下ろす

バコッ

その振り下ろされた木刀は、綺麗にスイカを叩き割った

……俺、まだやってないのに……

とりあえず考察。光久は気でスイカを感知したに違いない

光久の攻撃によって割られたスイカを全員に配り、パラソルの下で食べ出す（気絶した3人も）。自分が出来なかったのが残念だが長い時間が掛かってしまったからか、スイカは温くなっていた

EX2-1 in Ocean!! (後書き)

結局長くてgdgdになってしまいました

もしかしたらこの話だけで2話分の量があるかもしれませんが

19534字이었습니다

はい

長くて飽きましたね。そうですね

とりあえず次回に少し引っ張ってそのまま祭です

ではまた次回

もしかしたら若干遅れるかもです

EX2-2 in Festival!!

「さて、もうそろそろ時間だし着替えてこようか」

「もうこんな時間なのか」

「早いですねえ……」

「……楽しい時間は早く過ぎるように感じる物」

「ちよっと寂しいよね」

全員が遊び疲れて集合している中、健太が立ち上がった全員に向かってそう発言した。改めて時計を確認してみると、携帯の時計は3時半を示している。エルフィと望の言うとおり早く感じる。同時に琉華の言うとおり寂しくも感じられる

健太が女子全員を立たせ、先に更衣室へと向かわせる。残った男子は荷物番兼パラソル等の片付け担当だ。一番はしゃいでいた滋賀崎をなんとか立たせる

「ほら滋賀崎、片付けするぞ」

「……何？ 覗きに行くって？ 神崎……お前トコトン人じゃないな……」

「……お前の思考が人間じゃねえよ」「」

滋賀崎の変態発言に光久を除いた3人でツッコミを入れる。どうやら疲れすぎていて聴覚がおかしくなってしまったみたいだ。早く元の世界に引っ張り戻してこないと

俺と杉山の2人で滋賀崎の身体を持ち、安定させる。そしてその正面には軽くシャドーをする宮本の姿。あの筋肉の力で殴られたら一溜まりもないだろうが、今からコイツをぶん殴って起こすつもりだ。どうせなら健太の使ってる武器を装着させてみたい。でも俺た

ちはそこまで鬼じゃない

軽くシャドーをした宮本が滋賀崎に向き直る。そして右腕を大きく引いて

「らっしやああああああいつ!!」

「わっしよおおおおおおいっ!!」

それがどうも悲鳴の声とは思えない

滋賀崎が殴られると同時に腕を放したので、勢いよく滋賀崎が吹っ飛んでいく。わかっているとは思うが、穹より威力はなく、数メートル飛んでそのまま砂地へと落下する
背中に少しだけ砂をつけた滋賀崎が立ち上がる

「いつつ……今のは大分効いたわ……で、どうするんだか。覗きに行くんだっけ？」

「宮本。今度は健太から武器を借りてきてくれ。そうしないと本当に目覚めないらしい」

「了解」

「いや神崎、わかってるから。わかってるから頼む、殺さないでくれ」

わかつてるならボケないでほしいと言いたいところだ

右頬を押さえている滋賀崎を立ち上がらせる。本当に効いたのか、若干ふらついている

ちなみに滋賀崎はあの後穹に3回吹っ飛ばされている。結構タフなヤツだ。死んでも尚生き返るといふのは……多分ゴキブリ並の生命力があると言っても過言ではないだろう

「神崎、それは佐々木だろ」

「あ……そうだな」

先生にあれだけの格闘技を食らわせられても尚生き返る健太の方が凄いな、確かに。ゴキブリ以上の生命力を持っていると言っても過言ではないだろう

「真筆、滋賀崎……それ結構傷つくんだけど……」

正直諭えが悪かったとは思っています

その場にいる男子全員でパラソルとシートを片付けだす。個人で持ってきた荷物は汚れるといけないので、片方のシートだけ残しておき、そちらに置いておく。空になったシートは綺麗に畳んで別の袋の中へと入れて健太がTEAMで何処かへ転送する。多分家だろっ
続いてパラソルも転送し、やる事が無くなったので着替えに行つた女子を待つ。荷物番という大切な役目もあるのでここは離れられない。が、別に6人で荷物番をしなくてもいい気がするんだが……
他の5人もそう思っていたのか、全員で話し合っ
その結果2人がここに残ることになり、他の4人は更衣室に着替えに行くことになった

俺と残つたもう1人はその場に腰を下ろし、海を見る

カモメが空を飛んでいる。空はまだまだ青いが、若干赤みがかつてきている部分がある

海はどこまでも水平線が続いていく。途中で島など無く、どこまでもこんな直線で続いているんじゃないか、って思わされたりするのが不思議なところだ

周りで遊ぶ声や叫ぶ声が聞こえてくる。同時に波の打つ音が聞こえてくる

横に座っている健太の声が聞こえてくる

「なあ真箏」

「ん？」

2人で海を見つめながら返事をする。太陽に照らされた水面が眩しい

健太は次の言葉を紡ぎ出す

「……綾香の腹部、見たか？」

「……………ああ」

敢えてそこに触れることは無かったが、女子が全員こちらへ戻ってきたときに真つ先に目に映った

笹原さんの腹部には大きな傷があった。傷と言っても結構昔の物に見えるし、何より傷は塞がっていた。別に大した問題ではないのだろう

ちなみに男子全員はそのことに関して一切触れていない。笹原さんがどう反応するのかわからな いや、聞いたら怒られそういや、殺されそうだったからだ

「流石に綾香も殺しはしないからな」

「心を読むなっつーに」

近くに図書館はあっただろうか

健太の方をしてみる。海を眩しそうに見ている

「なあ健太。なんで急にそんな話を？」

「ん。いや、真箏はアレをどう思ったかなんてね。正直僕でもビツクリしてね」

「俺もアレ見たときはびっくりしたよ……まさか笹原さんにあんなのがあるなんてな……っていつか健太、お前は笹原さんの……アレ、知らなかったのか？」

「ん……ただの近所馴染みな訳だしそこまで知るわけ無いでしょ。要するに僕も見るのは初めて、と言っわけですな」

そうか……多分アレを見たのは全員が初めてだったと言うことなのだろうか

その割には健太の顔は至って普通に見える。まるで前にも見たことがあるような感じで……

視線を海の方へと戻し、顔をしかめる。視界に直で太陽が入ってきてしまった。目がチカチカして太陽の残像が時折映る。結構痛いその場を沈黙が包み込む

「……………」

何も話すことがない。その状態のまま15秒が経過しようとしたとき、遠方から6つの足音が聞こえてきた

2人でその方向を見てみると、着替え終わってこちらに向かってくる女子6人の姿が見えた。それを視界に映した俺と健太は立ち上がり、服の入った袋を持ち上げて更衣室のある方向へと歩き出す
そして女子6人とすれ違い

「じゃ、荷物番をしばらく任せた」

健太が誰に対していったのかわからないが、そう女子に告げていた

更衣室手前で4人とすれ違い、そのまま2人は更衣室の中へ

着替え終わって全員と集合し、最後に荷物を纏めた後、電車を待

つために駅へと向かうことになった

電車を待った（過去形）こと15分くらい。全員が電車に乗り込み、行きの時とは違った座席に座り、寝ている人もいれば外を眺める人、会話をする人がいる

ちなみに帰りの座席はこうだ

俺、琉華、穹、滋賀崎の4人。光久、明日香、望、宮本の4人。健太、エルフィ、笹原さん、杉山の4人という感じになっている。もちろん光久はグツタリしている。本当に乗り物が苦手なんだなと思う

まあ俺の隣に座っている滋賀崎は若干興奮気味なんだが。滋賀崎の目の前には穹、その横に琉華、俺の目の前に当たる。が、

「ん……んんっ……んあ……」

コクリコクリと船を漕いでいる。その目は閉じればすぐにも寝てしまいそうなほど閉じている。半開き……いや、4分の3以上は閉まっているな

ちなみに穹は窓の外を眺めて夕陽を眩しそうに眺めている

ちなみに滋賀崎は穹を眺めている。今にも俺がブン殴りそうだ

そして横に隣の座席に座っている4人グループ（光久グループ）は、全員で寝てしまっている。光久は酔って寝、女子2人は互いに肩を枕にして眠りについている。宮本は暇だから寝たのだろう

しかし……女子がああやって寝ている光景は絵になる。写真を一

枚撮っておきたいところだが、今やったら笹原さんに殺されると思うので止めるしかない

というかこの前からつくづく思う。俺はどういう悪趣味を持っているんだろうか

俺と滋賀崎の反対側に座るグループ（健太グループ）。本当によく耳を澄ませないとわからないが、健太と杉山の会話をする声が聞こえてくる。まあ内容は……アレだ。……言えない

ちなみにそちら側の女子も寝てしまっているのか、耳を澄ませば僅かながら小さな寝息が聞こえてくる。穹以外の女子は全員疲れてしまったんだな

「ん……んあ……はう……」

「琉華、眠かったら無理しないで寝て良いんだからな。着いたらちやんと起こすから」

「はえ……？ ん、んん……いあ、だいじょうぶ……」

うん、早く寝かせてあげたくなってきた

今の会話を聞いた穹が俺と琉華の顔を見て苦笑している。滋賀崎はその苦笑を見て綻んでいる。今にもコイツに銃弾を撃ち込みたいところだが、車内だから止めておこう

「真筆、流石にそれは物騒だつて」

「じゃあ穹、穏やかに殺する方法を教えてください」

ちなみに海の近くに図書館は存在しなかった。祭の会場の近くに図書館はあるだろうか

滋賀崎が何故だか知らないが睨み付けてくる

「ん……それじゃ、これを使おう」

「「……………5円玉？」」

思わず滋賀崎と台詞が重なってしまった

穹が鞆から何かを漁り出すと、取り出したのは財布、の中から5円玉を1枚。そして再度鞆を漁ること、数秒。取り出されたのは1本の若干長い糸

穹は器用に5円玉の穴に糸を通し、そのまま輪を作って5円と糸を結びつける。それは催眠術を使うための道具によく似ていて……古すぎるような

まあ予想通り

「はい滋賀ちゃん、この5円玉をじつと見つめていてください」

「…………穹、それ古すぎる」

…………それを本当に見つめる滋賀崎が本当にどうかと思う。地味に血走ってるし。今にも目が飛び出そうだし

何故だかはわからないが俺もその5円玉を見つめるようになってしまった。とりあえず見ていること自体怠くなってきたりもする

「あつれ…………おかしいな」

穹が独り言を呟く。そりゃあそんな事で人をどうにか出来るわけ無かるう。よほどの超能力者で無い限り

「…………ぐう」

…………うわ、滋賀崎寝よつた

ちなみに5円玉の振り子運動は5分ばかり続いていた。その結果、滋賀崎は寝ることに

まあ、多分冗談で寝ているふりをしているに決まっている。少し肩を揺すって滋賀崎の名前を呼ぶ。が、まるで返事がない。ただのしかば 違う、本気で寝ているようだ

顔に落書き（水性ペンで）したところ、全くの反応無し。これは完全に寝ている

「……まあ、いいか」

滋賀崎が完全に寝たことを確認して疲れてしまったので、そのまま座席へともたれかかる。当然視界には2人の姿が入ってくるわけだが

「ま、無理ないよな」

琉華はとうとう眠りについていて。さっきの5円玉の振り子運動が原因なのかどうかはわからないが、完全に睡眠モードだ。静かな寝息が聞こえてくる

そして視線を少し左に逸らすと

「……本人が辛そうなんだな」

「そ……そおんなことはないよお……」

依然として5円玉の振り子運動を続けている穹が、その状態のまま船をこぎ出した。右手で5円を動かしながら頭は前後に揺れている。目も半開きになってかなり眠そうだ

というか滋賀崎寝たんだからその5円を止めなさい

「だ、だめだ……まこと……ちょっとねるからついたらおこして」「はいはい」

そして穹は糸を手から離し、そのまま眠りへとついた。その間3秒である

自分の周りからは寝息と電車の進む音しか聞こえなくなってきた。いつの間にか後ろで繰り広げられていた小さい声での卑猥な会話も止まっている

後ろを覗いてみると、そこには4人の寝る姿が。要するに今起きているのは俺だけだ、うん

大きく座席にもたれかかる。するとアナウンスが流れ、やがて電車は停車する

慣性の法則によって若干頭が持つて行かれる

「俺も寝るかなあ……でもなあ……」

もしここで俺が寝てしまい、駅を寝過ごしてしまったらどうなるだろうか。この後予定している祭に行くのは完全に無理になってしまう

……というか、なにより眠くない。本当に困り果てた身体だ

「ふべらっしょーい……!!」

「なんつー大きな寝言だ」

琉華が寝ぼけたのか、急に座席を立ち上がる。両手は上に掲げられ、目は閉じた状態にある

……一体琉華はどんな夢を見ているのだろうか。他のみんなも何か夢はみているのだろうか

ふと思った。俺って将来何したいか決めてたっけ？ ……早めに決めておくのが得策だな。姉貴もそう言っていた気がする

ちなみに姉貴は今、アメリカで何をしているのかわからない。最

後に会ったのは今年の正月の1回のみだ。1月6日にアメリカへと旅立った

姉貴は今頃何をしているだろうか。彼氏の1人や2人は作っただろうか。……まああの人の性格的に微妙に厳しい点もあるわけだが……今度連絡して聞いてみよう

それにしても……琉華、早く席に座るんだ。いつまで寝ぼけて突っ立っている

なんて事を考えていると、電車が動き出す

「ふぬ……」

「げっ」

慣性の法則によって琉華の身体が傾く

それは琉華の座席の方ではなく、こちらへと　つまりは俺に向かって

「むっ」

ゆっくりと琉華の身体を押さえていく。思わず力負けしてしまい、押さえられずにそのままこちらへと倒れ込んでくる。完璧に抱き込む形になってしまった

「……………」

なんだろう、琉華の顔がすぐ真横にあるんだが……自分の髪の毛に琉華の寝息が当たり、そのせいで首筋がくすぐりたい。同時に脈が加速する

何て言うか……いい臭いだ。さっきまで海で遊んでいたから普通

は潮の匂いがしてもおかしくないような……なんて破廉恥なことを考えているんだ俺は。早く戻さないと

でも何故だろう。もう少しこのままでもいいような気がする……

辛うじて動く首を頑張つて琉華の方へと向け、その寝顔を見てみる
何て言うか、可愛らしかった。どっかの誰かさんと同じような寝顔だったりする

その顔を見てみると、急に瞼が動いた。大きく瞑つた後、ゆつくりと目が開かれていく

あれ？ これって結構マズイんじゃない……

「……まこと、くん？」

「やあおはよう琉華。随分と早いお目覚めだね」

とりあえず冷静に行ってみる。大丈夫、琉華はまだ寝ぼけているはずだ。上手くいけばやり過ごせる

「うん、おはよう……」

琉華は左手で瞼をゴシゴシ始める。小さく欠伸を掻いてしばし動かなくなる。まさかこのまま寝てしまうのか？

再び電車が停車する

「それにしても……なんでぼく、こんなところに……あ」

「げっ」

「……………ぐう」

最終的にそのまま眠りについてしまった。再度寝息が髪の毛に当たってくる

さて、急いで琉華を戻すとしますか

琉華が俺にもたれかかっているので、そのまま腰に手を回す。そしてゆっくりと立ち上がって少し前へと歩み寄る

だが、ここで神様がイタズラをしてくる

「げっ……」

電車が再度動き出した。なんとかの法則によって身体が後ろへと傾く

流石の俺でも支えきれることが出来ずに自分の席へと還ってゆっくりとして勢いよく座席に座り

「いたっ」

勢いよく座席に座ると共に琉華が背もたれに顔を打ち付けたりしく、そんな声が聞こえてくる。依然として俺の手は琉華の腰へと回っている

さて、これで最悪な状況は完成してしまったぞ

「あ、あれ……真箏くん？　なんでこんな近くに……あ」

「えっとだな琉華、これには色々事情があるんだ」

とりあえず冷静に行ってみよう。もしかしたらまだ琉華は寝ぼけているかもしれない

琉華の腰に手を回した状態のまま、説得力が無くなってしまっが言葉を考えてゆく

「なるほど、真箏くんはとうとう本能に耐えることが出来ずにボクを襲ってしまった訳ですね」

「冷静にそんな事を言うな。以前に俺は何も言っていないしそんな事はしていない」

とりあえず琉華の頭の中ではどんな思考が繰り広げられているかが気になって仕方がない

「それじゃあ……なんでボクの後ろに手が回ってるのかなあ？ どう考えても抱きかかえてたよね？」

「うぐっ……」

「それと……な、なんでこんなに密着してるの？ それに、なんでこんなに顔が至近距離にあるのさ」

「それは琉華が寝ぼけていたからで……」

慌てて琉華の腰から手を離す

そして琉華の肩へと手を置き、力を加えて離してゆく

琉華の顔は朱に染まっていた

「寝ぼけてたからねえ……まあボクも変な夢を見ていたのにはかわりは無いけど……」

「じゃあそう言うことで」

琉華を立ち上げらせようと自分が立ち上がるうとする。だが膝が真っ直ぐに戻らない……琉華が全体重を加えているらしい

琉華が顔を赤く染めてこちらを見てくる。じっと俺の目を見つめてきたので、思わず視線を逸らしてしまう

「そつだよ、思い出した。さっき見てた夢……」

「へ、へえ……どんな変な夢見たんだ？」

自分で思う。人の見ていた夢を聞こうとするとは……
なんだか琉華の吐息が頬に当たっている気がする。そして耳元で
何かを囁かれている気がする

「えつとねえ……ボクがある人にい」
「……うん」

それでも答えてくれる琉華が優しいな、なんて思ってしまった
次の琉華の言葉に脈が更に増す

「キスしてる夢を見たんだよね」
「そ、そう……良かったな」
「だよねえ」
「わ、わかったから降りてくれ……そろそろ辛い……」
「ボクが重いとでも？」
「……すみませんでした」

女子に対する言葉は気をつけないといけないうら
琉華の顔が次第に離れてゆく。その一瞬落ち着いた。本当に一瞬
だけ

琉華の両手が俺の顔を捉え、琉華の方を向かせられる。自分
の瞳に琉華の目が映り込み、思わず目だけを横に逸らしてしまう

「さて真箏くん、この世界には『夢』という言葉が存在しています。
その言葉の意味はご存じですか？」

琉華が常識的な質問を仕掛けてくる。が、今の状況が作り出した
焦りにより、簡単に答えが出てこなくなってしまう

電車の音しか聞こえなくなること約10秒、答えを自分の口から紡ぎ出す

「え、えっと……生き物が寝ている間に見る物。人が将来考える物……」

「はい、正解としておきましょう」

「よ、よし。そ、それじゃあ降りて」

「第2問です」

マズイ。この状態は非常にマズイ

でも琉華は口を開く

「この世界には『正夢』という言葉が存在しています。その言葉の意味はご存じですか？」

「み、見た夢が現実に起こること……」

結構すんなりと出てきてくれた物だ

なお琉華の口は止まらない

「正解です。……あーあ、さっきの夢が正夢になったら嬉しいんだけどね」

「そ、そうだなあ。自分にとって嬉しい夢だったら正夢になって欲しいよね……」

「ねえ〜」

それつきり会話がストップする。しかし琉華はまだ降りようとはせずに俺の膝の上で俯き出す

とりあえずお願いだ。早く降りてくれ……。首すら動かない……

「正夢になったら……嬉しいよね」

「あ、ああ……」

琉華が呟く

俺が返事する

琉華が顔を上げ、こちらを見る

そして

「正夢……ならね……」

「え、ちょ、琉華……」

琉華の顔が近づいてきた

「なあ真箏、なんでそんな疲れた顔してるんだよ」

「ああ……お前らが寝ている間にお説教を受けていたんだ」

もう正直なんでこうなったのかわからない

目的地に一番近い駅で電車から降り、本日の最終目的地である祭の会場へと向かっている。何故だか知らないが、降りた瞬間に女子全員が別行動をすと言つて男子たちとは反対の方向へと向かっていった。一応後で待ち合わせはしてある

とりあえず俺はもう疲れ切っているらしい。どうも足が重い

あの時電車の中で何があったのかを思い返してみる

「正夢……ならね……」
「え、ちょ、琉華……」

琉華の顔が近づいてくる。首は両手でガッチリ固定されているので横にも縦にも動かすことが出来ない。というかなんつー力だ……段々と琉華の顔が近づいてくる
自分の脈が加速する
身動きが出来ない

「ボクは」

琉華が小さく小さく何かを呟く。だがそれを聞き取ることは出来なかった。こんな至近距離で喋っているというのに
琉華の顔が近づいてくる

「琉……華……」

最後まで首を動かそうと努力してみる
動かない

顔の距離がもう僅かだ

「……………」

その時を覚悟して目を閉じる。もう……避けるのは諦めた
俺と琉華の唇が重なるうとする

その瞬間

キイイイイイ

「えっ……」
「琉華っ」

電車が駅にはいるのか段々とスピードが落ちていき、なんやらの法則で琉華の頭が後ろへと下がる。バランスを取ることが出来なかったのかそのまま地面へと頭が向かっていく

俺はなんとか左手を動かし、琉華の腕を掴んで落ちないようにする。その掴んだときの反動で琉華の手頬から離れてゆく

琉華の手を引いてほぼさっきと同じような体勢に戻る。そのまま席に戻せば良かった

目が合ってしまった、慌てて目を逸らす。それは琉華も同様だった

しばらく会話が出ない状況が続く。俺の視界の先には明日香たちの寝顔が見える

「ご、ごめんね真筆くん。ちょっとボク、変になってた……」

「いや……何事も無かったんだ、謝らなくていい……」

互いに会話がぎこちない

依然として目は逸らしたままだ

自分の視界に明日香の寝顔が映る

明日香の目が段々と開かれている感じがするのは俺だけであって欲しい

いや、そうであって欲しくない

目を開いた明日香がこちらを見ながら目を擦る。そして目をパツチリと開き

「真筆？ 琉華？ い、一体何を……」

……こんな状況を前にも見た覚えがあるような……

明日香の声に反応した琉華も俺と同じ方向を見る

とりあえず今の状況を確認してみよう。琉華は自分の座席にはおらず、自分の膝の上にいる。そして明日香喋って琉華がそちらを見るまで互いに気まずい空気を出していた

つまり

「じ、事後なのか……」

「だからどうしたらそんな思考に至るんだ」

「あ、明日香……流石に車内ではそんな事しないよ……」

「琉華、その発言にはどうもおかしい部分があるんだが」

車内でしないということは、別の所ではするということなのだろうか。いや、そもそも何をするというのだ

「くつ、まあいい。2人とも席に座れ。今から駅に着くまで色々話を聞かせ貰うとする」

と、いった感じな話があの後繰り広げられていた

それにしても……いや、忘れよう

「神崎、暗いからよく見えないけど顔赤いぞ？」

「気のせいだろ。杉山は少し疲れてるんだよ」

「ならいいけど」

6人で（光久は滋賀崎と宮本に肩を借りながら）目的地の祭の会場……ちよつとした神社へと向かう。結構近いからか人通りが多く

なってきている気がする。同時に屋台からだろうが、少しずついい臭いがするようになってきた。その臭いで空腹感が出てくる

「よし、これが夏休み最高の思い出になるはずだからな。最後まで楽しむとしようじゃないですかあ」

少し先を歩いていた健太が後ろを振り向いてそう言う

その言葉に光久を除いた全員が「おー！」と返事をする

……光久にはたこ焼きを奢ってあげるとしよう

屋台で少し並んでたこ焼きを購入し、グツタリしている光久に手渡して全員で地べたに座り込む。この辺は人の通りが少し少ないから問題はないだろう

そこらのヤンキー共に絡まなければ嬉しいが

たこ焼きを食べた光久が元に戻る。熱さによるものらしい

とりあえずここは神社の入り口の少し手前のちよつとした広場。

先程健太が女子の誰かにメールをし、ここで待ち合わせをするということに。そろそろ10分くらい経つだろうか

「しかし……なんで急に別行動なんてするんだろうかね」

とりあえずその理由がわからなかったので、他の男子はその理由を知っているかを尋ねてみる

すると滋賀崎が口を開く

「全く……何言ってるんだ神崎。今俺たちが向かおうとしている場

所は何処だよ」

「ん、そんなの聞かなくてもわかるだろ。祭りだろ祭り」

なんだか滋賀崎の口調にイラツと来た一瞬である

何故だか知らないが続いて杉山が口を開く

「神崎い……祭って言ったらなんだよ」

「祭ねえ……それとか？」

光久がたこ焼きの最後の1つを口に運んでいるのを指さす。一瞬気になったのか光久が手を止めるが、「何でもない」と言っただけのまま食べさせる。冷めていたらしく、そのままもぐもぐとたこ焼きを食べる

で、一方のエロ3人集はやれやれといった感じで両手を挙げながら首を振り出した。一体なんなんだコイツらは

3人が人差し指を立てながら空へと向ける。そしてそのままビシツと左の方向を指さした

何かあるのかと思っただけでそちらをしてみる。そこにいたのは数人の女性たちだった。コイツらは本当に変態趣味なんだな

「いやだからな……あの人たちが来ている物と言ったら？」

「ああ……そういうことな。最初からそう言えよ、わかりにくい」

どうやら浴衣のことを指しているらしかった

とりあえずその場が静まりかえり、誰も喋らなくなる

「暇だなあ」

「ああ」

「佐々木、連絡は？」

「ないな」

「真筆殿、たこ焼きが」
「我慢しような」

光久は俺の財布を破綻させるつもりなのだろうか
とりあえず健太の元に連絡は入っていないらしい。これで18分
くらいは経つだろうか……

全員で頂垂れてみる。なんていうか……何もしていないと結構暇だ

そしてその5分後

『真筆おおおおおおおおおおおおおおおっ!!』

「穹、何度もその手に食うと思うな」

「痛い痛い痛い!! 頭蓋が! 頭蓋が陥没しそうだよおおおお
おおおおっ!!」

「俺は本当に今日いて良かったと思う」

「俺もだ」

「ああ」

「真筆ー、女子にアイアンクローは駄目だろアイアンクローは」

「あのお……やっぱりこれ……スースーするんですけど……」

「……慣れれば問題ない」

「エルは浴衣初めてなんだからさ、それは仕方ないんだよ」

「でも琉華……下に何も身につけないっていうのは……」

「だって涼しいんだもん」

「いや、そのだな……」

EX2-2 in Festival!! (後書き)

んー……

サブタイトルが「in festival」なのに祭部分に入って
いないっていう……

まあ次回頑張ります

さて、何を入れるか……

琉華、残念でした!! 黙

EX2・3 夏の思ひ出(前書き)

勿論aaaaa回です

EX2-3 夏の思ひ出

「……………」

凄い集中力ですね……

現在祭の会場内、入ってから数十メートル地点

早速だが目の前にいる2名が右手を高く上げながら下の水面を凝視している。もの凄い集中力だ。そのせいで水中にいる金魚たちが怯えているようにも見えてくる

そう、現在金魚すくいの屋台の前。ここにいるメンバーは俺、明日香、エルフィの3人。明日香はもう6匹すくい上げ、まだポイは破れそうにない

一方のエルフィは、金魚すくいを初めて経験するのか、これで4回目だ。勿論1匹もすくえていない。一回200円と結構安い

「ほっ」

明日香がタイミングを見極め一匹の金魚をすくい上げる。暴れる尾びれが上手くポイの外に出るようすくい上げられていて、和紙は少し濡れた程度でまだ破れようとはしない

すくい上げられた金魚が左手のカップに入る。これで7匹目だ

「あ、明日香さん上手なんですね……」

エルフィの方をしてみる。いつの間に水の中にポイを入れていたのか、真ん中に大きな穴が開いている。金魚に突き破られてしまったのだらう

「そ、そりゃあな……昔から鍛えているんだ」

「わたしに教えてください！」

「いいだろう。まずポイを持つ手の力を」

明日香による金魚すくい講演会が始まった。いつの間にかエルフイは新しいポイを手にしている

あ、また明日香が……おおっ、2匹同時だ

しかし……後ろ姿を見ている訳なのだが、この2人、非常に浴衣が似合っている

エルフイは浴衣を着るのが初めてらしく、最初は結構ぎこちない動きをしていたが、ちよつとずつ慣れてきているようだ。金髪と紺の浴衣の色が良い感じだ。髪も1つに纏められている

一方明日香。髪型はいつもと変わりはないが、水色の浴衣の色で赤い髪が目立って見える

ただ、明日香にあさがおの柄はちよつと似合わないなと思って思ったりもするが、何気に似合っている。外見のことではない。印象での話だ

あ、今度は3匹同時!!

また真ん中に大きな穴が……

少し長く掛かりそうなので、後ろを振り返ってみる。時間が時間なのか、結構な人が集まっている。下手したらすぐにも迷子になれそうだ

金魚すくいの隣の屋台をしてみる。焼きそば、りんご飴。そうだな……この頑張っている2人に少し差し入れでもするとしよう。ちよつと誰も並んでいないわけだし

と、言うわけでもりんご飴を2つ購入。400円の出費である
買ったのはいいのだが、まだ終わりそうにない。明日香のポイは
若干亀裂が入り始めているがまだまだ余裕な表情を見せている。一
方のエルフィ、足下には数十枚のポイの残骸が……一体どれだけ金
魚すくいが出費しているのだろうか
……俺もやるのかな

エルフィの横に座り込む

「か、神崎さん？」

「すまんエルフィ。ちょっとこれ持っててくれないか。2人を見て
たら俺もやりたくなってきた」

「は、はい……」

手の空いているエルフィに2つのりんご飴を持たせる。そして俺
は200円支払い、1枚のポイを屋台のおっちゃんから受け取る

「あ、エルフィ。1つ食べててもいいぞ」

「あ、ありがとうございます……美味しい」

「真筆、私の分は？」

「心配するな。ちゃんとエルフィに持たせてある」

そう言って水面に集中する。なんだか金魚に怯えられているよう
で悲しくなってきたりもする
全神経をポイに集中させる

「真筆、右腕に力が入りすぎてる」

「あ、ああ……サンキュ」

どれをすくうかを決め始める。角には結構な量の金魚がいるから

な……敢えてそこを狙ってみるか？

「ほっ」

明日香め……5匹同時すくいとは……俺にプレッシャーを与えるつもりか……！！

仕方ない。ここは角を狙って6匹同時を狙うとしよう

静かに入水していき、ポイを水面に向かってほぼ垂直にする。そして水圧で破れないようにゆっくりと水面へとあげていく

パリッ

「……………」

水面から上げたのは良いが、暴れる尾びれによって和紙が破られてしまった。しかも6匹ではなく1匹である

「あ……………」

それと同時に明日香の方も破られてしまったようだ。20匹以上すくい上げてるんだから問題はないだろう

2人で立ち上がり、エルフィの方を振り返る。そこには一本の棒を持ちながらも片方のりんご飴を食べ始めようとしているエルフィの姿が

慌てて食べるのを止め、それを明日香へと渡す。左手には金魚が沢山詰まったビニール袋が。なんだかかなり狭そうで可哀想だ

『いっやー……祭ってやっぱ楽しいよねえー』

「ねえ真箒くん？」

「「「おおっ」「」」

左の方から聞き慣れた2人の声が聞こえてくる。そこには穹、琉華、望の3人と、3人集と光久の7人が立っていた。琉華と穹はお祭りフルセットで登場している

2人の手に持っているのはほとんど同じで、お面、りんご飴、わたあめ、ヨーヨー、etc. . . 持ちきれない荷物は後ろの男子が持っている。望は焼きいかをおとなしく食べている。光久は飽きていないのか、たこ焼きを食べている

3人集は両手一杯に荷物である。決して華ではない。そして8割が穹の荷物だろう

「琉華……凄い荷物の量だな……」

りんご飴をかじりながら明日香がそう言う。わたあめを食べながら琉華が口を開く

「そりゃあね。折角祭に来てるんだから楽しまなきゃ損損！！ ねえ真箒くん？」

「だよなー」

琉華が食べていたわたあめを差し出してくる。丁度甘い物が食べたくなっていた俺はそのまま琉華の差し出してきたわたあめを口に含んで引きちぎる。失敗した、口がベトベトだ。でも甘い

しかし……何故この場にいる連中は驚いたような顔で俺を見る。光久はたこ焼きに集中しているが

「あれ？ もう要らないの？」

「おお、いいのか？」

「そりゃあね。はい」

琉華が一口食べ、棒ごと俺にわたあめを手渡してくる。それをベ
タつかせないように食べていく

結構早い時間で食べ終わってしまった。のだが、周りの視線が
妙に厳しい

「いやあ……神崎。お前には失望したよ」

「そっちな滋賀崎……俺だってそう思ってるよ。お前は男じゃない
ね神崎」

「だからいつまで経ってもバ神崎なんだ!」

はて、杉山は部長と繋がりがあろうか

とりあえず女子の視線がわたあめの棒へと向かっているので、そ
れに釣られて俺も棒を試してみる。何の変哲もないただの棒だ。何か
あったとすればさっきまでわたあめがついていた程度だ。はて……
ん?

「ああ……ああああああああ!」

「どうしたのかな真筆くん?」

その事実到现在気づき、思わず大声を上げてしまった。周囲にいた
他の客がこちらを見ていたが、何事もなかったかのように過ぎ去っ
ていく

この場にいるみんなは「今頃気付いたのか」と言った感じの表情
をしている。そして女子一同は笑顔になる。いや、琉華以外は完全
に作り笑いだ! 怖い! 顔が笑ってない!!

「あはは……ボクもビックリしたよ……何事も無かったかのように
全部食べちゃうんだもん……」

「い、いや……俺はただ甘い物が食べたかっただけで……それで琉

『……………』

赤く染まった手の上に、白い小さな小さな塊があった
ああ……………葉が1本欠けた

「なあ綾香」

「なに？」

「なんかさ、久しぶりじゃない？ 2人でこう歩くのって」

「そ、そうね……………」

「最後に歩いたのって……………いつだっけ？」

「中2の終わり。あ、あの時は3人ね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………け、健太っ」

「ほいほい」

「や、焼きそば……………食べない？」

「別にいいけど……………何を緊張してるかね」

「べ、別に緊張なんてしてないわよおっ！…！」

「はいはい……………もう長い付き合いなんだからテンパらなくていいんだからね」

「べ、別にテンパってなんか……………」

「わかりましたよ……………じゃあ買ってくる」

「え、ちょ……………あ、アタシも並ぶっ」

「別に待ってればいいのに」

「いいじゃない別に……………」

「そして手を繋ごうとすな」

「は、はぐれたら大変でしょ」

「……まあいいか」

「……うん」

「……」

「……」

「……」

「……健太」

「今度はなんですか？」

「……もう、気にしないで良いんだからね」

「何を」

「……言わなくてもわかってるクセに」

「……」

「全部、アタシが自爆しただけのことなんだから……」

「……でも」

「……いいの。だから……」

「……」

「……その……ね」

「……ちょっと前までの健太に、戻ってよ」

歯が抜けたという事件があり、射的で盛り上がる事があり、かき氷でみんなが頭が痛いのを堪える事があり……なんだかんだあって全員が集合している

しかし……集合している場所がどうかとは思っ

「何故こんな山奥に……」

いや、山と言ってもそこまで大した山ではない。標高がかなり低く、言ってみれば丘みたいな物だ。その山頂には俺たち以外誰もおらず、小さな川が流れている。きっと地図にも載っていない小さな小川なのだろうな

近くの岩に全員が腰を下ろす

とりあえず何故ここにいるのかというと……実はまだ聞かされていない。健太が「移動するぞー」と言っていてここまで引き連れてきたのだ。まあ見当は付くのだが

……蚊が耳元で鬱陶しい。しかも結構腕やら足やらが痒い

「さてと……そろそろ時間か」

健太が時計を確認してそう呟き、空を見上げる。そこには星が広がっている。この前行った別荘ほどではないが、家の近くよりは断然見える。下が明るいからか……

その夜空に1発の花火が上がって

ドオオオオオオン！！

夜空に大きな1輪の花を咲かす。やがてその数は多くなっていき、夜空の花畑と化す

1発咲けばまた次の花火。それが何発も続き、今度は星とかハートとか、何かのキャラクターとかの花火が上がってくる
全員がその花火を見続ける

やがて花火は上がらなくなる

「はいお疲れ様でした」

健太がこちらを見てそう言う。となると、今日はこれで解散なのだろうか……そう思うと寂しく思えてくる。全員がそんな感じなのか、頂垂れているのがほとんどだ

「さて……長いようで短かった今日も終わってしまっわけですが……これで終わるのはまずあり得ないだろうと思うので……はい」

健太がTEMMを操作し、なにかを取り出す。それは花火がギツシリ詰まったセットで

「と、いうわけで。今から花火大会をして本日を締めたいと思います」

本日最後のイベントが開かれる

「いえっふー……！！！」

「おい穹！ 危ないからこっち向けんなー！！」

「小さくても結構綺麗なんですネ……」

「だなあ……花火なんていつぶりだろうか……」

「……私も結構久しぶりな感じがする」

「ボクもだなあ……」

「なあ、俺たちってばぶられてる？」

「いや、それは無いと思う」

「うん、俺もそう思う。そうであってほしい」

「拙者もこの線香花火と同じように散っていくのだろうか……」

「光久ー。不吉な事を言うのはよそうなー」

「そ、そうよ……そう思うと怖くて線香花火に手を出せなくなるじやない……」

盛り上がる一同

「か、神崎さん！ こっ、この花火ってなんですかっ！！」

「エルファイ！ 危ないからネズミ花火に火をつけたまま持ってくるな！」

「え、ええっ！？ きゃああああああっ！！」

「真箒ー、これって何の花火だっただろうか」

「ロケット花火をこっちに向けるな！！」

「……すまん。発射するらしい」

「うおおおおおおおおおっ！！？」

「真箒くーん。これって打ち上げだっけ？ 噴射だっけ？」

「打ち上げをこっちに向けるなバカーーっ！！」

「……真箒、あげる」

「これ爆竹！ わ、ちょ……」

「やっぱり……はぶられてない？」

「き、気のせいだ宮本……そんなことはない」

「滋賀崎！ パス！」

「おっけー っておい神崎！ これ火の付いた爆竹」

「「「ぎゃあああああああああす！！」「」

「む、もう落ちたのか」

「さっきと同じような事は言わないようにな」
「……アタシも神崎を虐めてこようかしら」

盛り上がりすぎる一同

「おいコラ神崎いいいいいつ!! テメエも爆竹食らえやコラア
アアアアアアッ!!」

「遠慮するー!!」

「真箏ー。ロケットいくぞー」

「止める明日香!! 俺を殺す気か!!」

「穹ちゃん、俺と線香花火やらなーい?」

「ふっふっふ。わざわざ負けに来るたあ良い度胸だ……滋賀ちゃん
と宮もっちゃん……まとめて掛かってきなあ……」

「線香花火って勝ち負けあるんですか?」

「まあ……そうかもね」

「……私たちは何かを賭けて勝負しよう」

「じゃあ真箏くんを賭けようか」

「負けられませんね」「……負けられない」「私も負けるわけには
いかないな」「そりゃあね」

「結局全員なんだ……」

「あれ、穹ちゃん結局そっち?」「」

「アタシたちもあっちに混じらない?」

「何? 綾香も真箏を賭けるの?」

「惨たらしく死になさい」

「それでは拙者はあっちに」

「光久も真箏を賭けるんだな」

「崖から突き落とすわ」

「……ごめんなさい」

そして全員が輪になり

「……あ、落ちた」

「望はやっ！」

「そういう真箏も落ちてるけどなー」

「健太くんも落ちてるけどね」

「穹殿もそうなのだが……」

「そういう明智もそうじゃないか」

「そういう滋賀崎もな」

「その杉山もな」

「だったら宮本、アンタも落ちてるわよ」

「……だったら綾香も落ちてる」

……

この時点で残ったのはエルフィ、明日香、琉華の3人である。線香花火もそうなのだが、この3人の中心に火花が飛んでいるようにも見える

「……凄い集中力」

「だね……」

望と穹がそう呟く

その呟きと同時に

「ひゃあっ！……お、落ちました……」

エルフィの線香花火が地面へと落ちる。それに続くように誰かの線香花火が落ちた

「わ、私もか……」

「じゃ、ボクが1位って事かな？ それじゃあ商品の真筆くんは」

「待つんだ琉華。俺のいない間に何故俺が商品になっている」

冗談と言われた

その後全ての花火を使い切る

「いやあ……今日は楽しかったね」

「だなあ……」

帰り道。全員　と言うわけではないが、ほぼ全員と駅で別れて帰宅中。ここにいるのは俺と穹の2人だけだ。割と家は近い。というか近所そのものだ

「やっぱりこの辺だと星は見えないんだね」

「そりゃあ……この辺は結構明るいしな。街灯が眩しすぎるんだよ」
「ねえ」

穹の言うとおりこの辺は全くと言っていいほど星が見えない。街灯が明るすぎて空を見てもかなり明るく見える。むしろ眩しいくらいだと言っておこう

夜道を歩く

「ねえねえ真筆。合宿中にも聞いたけどさ、好きな人いる？」
「だから……いないって。いや……いるにはいるかもな」
「ほほう……誰々？」
「……みんな？」
「……何ソレ……」

ソレとはなんだソレとは
穹に詳しく説明していく

「ああ……なるほど」
「納得した？」
「うん、した。その内にわたしも入ってるんだよね？」
「もちろん」

街灯にさしかかる。穹の顔は若干赤く見えた
この光景に何かしら既視感を感じる

そして無言のまま歩くこと15分、穹の家の前へと到着する

「じゃあね真筆」
「ああ」
「あ、それとも今日は止まっていくかい？」
「いや、遠慮しとくよ。おばさんに悪いし」
『真筆ー！ 誰がおばさんだってー！？』
「やばっ……ゴメン！ 口が滑ったー！！ じゃ、じゃあな穹ー！！」
「ほいほーい……むう、やっぱり前みたいに簡単には止まってくれ
そうにもない、か」
『はあ……はあ……全く。真筆にはお義母さんって呼ばせるように
してるのに……で、穹。キスの1つや2つはしてきた？』
『いやあ……やっぱり出来なかったよ……』

『ふう……そう。それにしても……』

『ん？ どうしたのお母さん』

『いや、何でもない。ほら、今日は早く寝て明日の朝から襲ってきな』

『はい』

『……。なんだか真筆は穹じゃない子を好きになりそうな気がするなあ……気のせいかな』

「はあ……」

穹と別れて2分、家の前へと辿り着く。そして玄関のドアノブに手を掛ける

「ただいまあ〜」

『あら真筆、おかえり〜。随分遅かったわね』

「まあ……楽しすぎてな』

「そう……あ、久々に雫から連絡来たわよ。真筆宛に荷物もあるから部屋の前に置いておいたから』

「ああ、ありがと』

部屋へと向かってみる。ドアの前には小さなダンボールが置いてあった

部屋に入ってダンボールを開けてみる。そこには投影機と何かしらの荷物が入っていた

投影機を部屋の真ん中において起動する

とりあえず光は出てきたが、誰も写りはしない

「……まさかとは思うが、不良品なんてことは……」

『な訳ないでしょ』

『おお、久しぶりだな姉貴』

『やあやあ久しぶりだねー、我が愚弟よ。今更ながらご入学おめでとうございます』

『愚弟ってなんだ愚弟って。ま、まあありがと』

『うわ……愚弟って言われたことに感謝してら……』

『誰もそつちに喜んじやいねーよ』

『冷静なツツコミありあとーござーます。それにしても……焼けた？』

『まあな。今日はちよつと遊びに行つててな』

『なるほどねえ……ねえ真箏。Wars部入ったんだって？』

『ん、まあな』

『ふーん……ねえ真箏。今日お祭り行つてた？』

『急に話を逸らすんじやねーよ……まあ』

『……穹に暴力振るつたー？』

『ごぶつ!! な、何故にそれを!？』

『歯、抜けた？』

『おい待て姉貴……随分怖い話になってきたぞ……』

『金魚すくい、1発で終わった？ 女の子に囲まれてた？ 射的で見事に失敗してた？ かき氷食べて頭押さえてた？ レモン味食べた？』

『ま、待て姉貴！ なんでそこまで』

『あ、それと……今日本にいるから』

『はあっ!!!？』

『まあ何処にいるかはまだ明かさないと……その内行くから随分急な話だなオイ!!』

『そして感動の再会ではお姉様から直々のちゅーをプレゼントしたと思います』

『待て、アンタは姉弟で何をしようとしてるんだ!』

『そのままお姉様が先導してあんなことやこんなことをしましょう』

「おかしい！ 前々から思ってたけどやっぱりおかしいよ！！」
『おかしいとはなんだね。ちゅーとかキスとか接吻くらいしかないから。あ、あとキスとか』
「2回言ってるから！ その時点でアウトだよ！ というか何姉弟でやるうとしてるの！？」
『あ、もしかして初めてを奪われた……？ そんな……真筆の初めでは私が奪う予定だったのに……』
「……じゃあ切るなー」
『ちょ、まつ、待って真こ』

ブツッ

「駄目だあの姉……」

そう思うと急に疲れが押し寄せてきた。今日はもう寝よう……

ダンボールを机の側に寄せる。中には特に何も入ってはいなかった。武器を送ってきてくれればよかったのに……
机に寄った際、ある物が視界に入ってきた

「……明日で良いか」

宿題、もうそろそろ終わらせないとヤバイかもしれない……
結局そのまま寝てしまった

……やっぱり、楽しかったな

「ふう……」

携帯を机の上に乗せ、しばらくポーツとする。もちろん連絡なんて一通もない

思えば今日、アイツと久々に手を繋いだんだ
そう思うと身体が熱くなってくる。風呂から上がったばかりなのに

「……好きの一言も言えないなんてね……」

思わず独り言を呟いてしまう。小学校の高学年の時に意識してからずっとアイツが好きだった。今でもそうだ

でも、最近になってアイツからメールが来た。久々に

そしてアイツの事も好きだ。小学校の頃から

要するにアタシは2人のことが好きなのだ

でも……どっちかっていうとアイツの方が好きなのかもしれない
だって同じ高校なんだし

p l l l l l l l l l

携帯の着信音が響いたので、急いで確認する
そのメッセージに一瞬呼吸が出来なくなった

『なあ綾香。夜遅くにスマンな
ちよいと聞きたい事があるねん

今更言えば今更やけど……

オレと健太、どっちの方が好きや？』

返信せずに携帯を閉じる

迷いが……生まれた

EX2-3 夏の思ひ出(後書き)

はいども understand です

今日は英語表記にしてみました

はいどうでもいいですね

とりあえず Chapter 5 から続く Ex もこれで終わりです
相変わらずの gdgd 感。最近の終わりが gdgd で安定してますね

それはともかく、次回から新章、Chapter 6 突入です

9月、入ります

そしてこの話の最後の続きを…… ん？ メールを送り主は誰かっ
て？

この先を楽しみに待っていてください。あ、楽しみにしなくても
いいですからね。勝手に書きますから

そして悪い感想バンバン書いてください

まあ楽しみにする人はいるのかいないのかわかりませんが……と
りあえず、はい

では……

次章、#41 でお会いしましょう

#41 8月31日(前書き)

6章開始です!

4 1 8月31日

……早起きは三文の得と唱えたのは何処の誰なのだろうか。とりあえずそんな事を考えてしまおう

「さて、6時22分。どうするか……」

本日8月31日、8月が最終日という今日。相も変わらず目覚ましよりも早く起きてしまふ俺。今年の5月に入ってから一体どうしたのだろうか

……とりあえず悪夢の連続である

もう8月も終わりだからなのか、若干明け方が涼しくなってきた。たまに寒いかな、って思う日も少しばかり増えてきた気がする。とりあえず横に誰もいないことが嬉しく感じられる

いたらいたで大問題である

とりあえず……8月31日、6時23分……いや、24分。セツトした目覚ましの1時間半前に起きてしまったというわけだ。というか8時に起きようとしている俺は一体……もう学校も始まるんだ、遅く起きるのはいけないだろう

早起きしている訳なのだが

多分リビングに行けば母さんと親父はいるだろう。早めに朝食を摂って今日は遊びまわるとしようか……でももしかしたらもう奴らが来ている可能性もあるな。来てたら来てたで問題はほとんど無いのだが……まあいい

とりあえず着替えて下に降りるとしよう

ベッドから立ち上がり衣装ケースの元へ。そして開いて1着の服を取り出す

んうゝ、何処かで見覚えのある服だなあ

「……結局三日坊主？ いや、1週間は保ったか」

取り出したのは7月の初めあたりに買った気がする衣装だ。白で無地のTシャツだ。走る用に買ってきたのだが、結局着ていたのはその1週間くらいと合宿中のみ。その他はたまたま普段着になったりしている

とりあえずその服に腕を通してみる。すると消えかけていた闘志が込み上げて……はこない

嗚呼……そういえばもう学校が始まるじゃないか……

窓の外をしてみる。そこから見えるすぐ近くの電線には雀とか鳩とかツバメとか……色々な種類の鳥が留まっている

大丈夫、宿題は全て終わっている

大丈夫、もう学校へ行く準備は昨日のうちに済ませておいた

大丈夫、武器の手入れもちゃんとしてある

大丈夫、部活の準備はバッチリだ

大丈夫……今日はたっぷり遊ぶぞ……

……なんだか現実逃避している自分が悲しく思えてくる。この年代の学生はどうしても学校へ行きたくない。親父も爺ちゃんも同じ経験をしたようだ

とりあえずズボンも書き替える……と言っても穿くだけ。要するにトランクス1丁で寝ていたというわけだ。女子にはお見せできない

とはいえ俺も男子にはお見せできないであろう女子の姿を何度か……イカンイカン

ああ……濃い夏休みだったなあ……時が戻って夏休みの初日に戻らないかなあ……

そろそろ現実を見るとしよう

机の上に置いてあった携帯と財布をポケットに入れて部屋を出、洗面所で顔を洗って玄関へと向かう

夏休みもどうせ終わるんだ。現実逃避していたって何も始まらないだから……だから……

「最後まで真面目にやっておきますか」

……ランニングという現実逃避の仕方を……

いやいやいや、現実逃避じゃない！ 特訓だと思え神崎真箏！

家を飛び出し、前と同じランニングコースを走ることに決定した

『ありがとうございます！』

「……運動不足っておそろしーわー……」

ここはいつだかも寄ったコンビニエンスストア。その名もFriend Mart。いつだかと同じようにスポーツドリンクとドリンクゼリーを購入し、一気にドリンクゼリーを飲み干す。満腹感な

んで少しもあるわけ無い。あるのは空腹感と喉が渴いた感だ
そのままドリンクも少し飲む。口の中が甘かったのでドリンクが
苦く感じられた

しかし…… 8月の終わりで少しは涼しくなってきたかなー、とは思っていたが、やっぱりまだ8月という訳なのか、走るとクソ暑い。お陰で今は汗ダクダクだ。誰だ、こんな暑い日の中走ろうなんて考えたのは……!

とりあえず自問自答は目に見えている

コンビニの駐車場のブロックに腰を下ろす。そろそろ混み出す時間だからやめておいた方が良いかなどは思ったが、疲れていたので座ってしまっ た事に後悔した

「あつつつつつっ!!」

そこまで頭が回らなかった自分のバカさに後悔する。ああ……だから部長とか杉山にバ神崎って呼ばれたりするのかなあ……

健太以下そうで嫌だ

p l l l l l l

まるでタイミングを計ったかのようにメールの着信音が響く。マナーモードにするのを忘れてしまっていたようだ
なになに、『From 佐々木健太』とな?
メールを開いてみる

『僕以下は嫌なのか!? それって結構酷い発 』

パタッ

このまま図書館で本を探した方がいいのだろうか。まさか遠距離でも心を読まれるとは思ってもいなかった

とりあえず今は読心術の事は忘れて走るとしよう。再開だ再開！

何とか我慢して座っていたブロックから立ち上がって走り出す。やっぱりクソ暑い訳なので

「……結局またここで休憩するのな」

またもやいつだかここで休憩したような気がするベンチ。正面にあるベンチはペンキ塗り立てのようだ。ここは張り紙をしていないから大丈夫だ

鉄のベンチがヒンヤリしていて気持ちいい。同時に穏やかな風が吹き、一気に汗が乾いていくような気がした

周囲を見渡してみる。やっぱり走っている人は他にもいるらしく、いい年のおじさんたちが多めに見える。この公園はランニングコースとして最適のようだ。日陰も多いわけだし、自然も多いわけだし、ここ最近東京の自然が少なくなってきたらしい。どうでもいい話をした

ベンチにもたれかかって上を見上げる。風が吹いているからか、木が揺れている。たまに木漏れ日から太陽が覗いてきて目を細めてしまう

公園の木々がざわめく。このざわめきが子守歌のように聞こえてきて、段々と眠気が襲ってきてしまった。瞼が落ちていくのが自分でもわかる

すると、かなりの近距離を1羽の鳥が通過していくのが見えた。

よく見えなかったが、結構珍しい色をしていたような……飼われている鳥かな？

「ん……」

駄目だ。もうこのままここで寝てしまいそうな勢いだ……
……少し、休んでいこう

一方その頃の神崎宅

「おはようございます……って、あれ？ 神崎さ……んは？」

「おはようエル。どうも真箒は早くに出かけたらしいぞ」

「おはようエルフィちゃん。真箒ったらおはようも言わずに家を出て行っちゃったのよ。まあその内お腹空かせて帰ってくると思うから……ささ、椅子に座って。ご飯出すから」

「あ、お構いなく」

「お義母さん、後で肉じゃがの作り方を教わりたいのですが……」

「あら、明日香ちゃんは花嫁修業かしら？ いいわよ、お義母さんがおいしい肉じゃがの作り方を教えてあげる！」

「あの、明日香さん……」

「なんだエル？ そんな怯えを隠せない顔をして」

「い、いえ……その……ですね。……すみません、やっぱりなんでもないです」

「？」

「……すみません、皆さん……」

真箒の知らないところで新たな兵器が完成しようとしていた

「……はっ」

どうやら気付かぬうちに本気で寝てしまっていたようだ。とりあえず体勢が体勢だったので首が少し痛い

ポケットから携帯を取り出して時間を確認してみる。7時14分、あれから20分ほど寝てしまっていたようだ。少し気温が暑くなってきた。スポドリボトルにも水滴がたくさん着いている。一口飲むと、予想通り温くなっていた

携帯電話をポケットにしまう
すると

「おふっ」

1羽の鳥が顔の上に止まった。鼻の先である。足が若干食い込んできて少しばかり痛い

慌ててポケットから手を引っこ抜いて鳥をどかさうとする。が、いつだか何処かで見たことがあるような鳥だし、何より引っこ抜いた手に何かが触れている

「いたたたた」

その鳥に額を突かれる。これはこれで結構痛い

もう手でどかすのは無理だと思ったので頭を起こす。案の定鳥は飛び去り、自分の周囲を軽く3周した後、自分の頭の上へと再着陸した。なんと図々しい鳥だろうか。焼いて食ったるかなんて思ったが流石に自分はそこまで残酷ではない

とりあえず手に触れている何かを確認　あれ、見覚えのある人物の顔が

可愛らしい寝顔、穏やかで首にかかる寝息、海へ行ったのか若干

黒くなっている肌、首くらいまであるショートカットの髪の毛、黄緑のTシャツ、膝くらいまであるズボン、何故だか知らないが繋がれている俺の左手と誰かの右手

弦巻高校 Wars 部、スナイパー担当藤堂琉華である。要するに今頭の上に止まっている鳥は藤堂家で飼われているインコの……忘れてしまった。本当に申し訳ない

視線を下から上へと戻していく。若干強調されている胸が左腕に少し　ゲフンゲフン

そして琉華の顔を見してみる。家とか電車の中で何度か見た覚えはあるが、今回は結構至近距離だ。かなり危ない気もするのだが、何故だか見とれてしまった

小さな寝息が首にかかる

動く右手を頭の上へと運んでいき、藤堂インコ（仮）の元へと持つてくる。そして人差し指を突き出してそこに掴ませて自分と琉華の間へと持つてくる。何故だか知らないが手の甲がやけに突かれる。結構痛い。しかし……地味に懐かれたものだ

「はう……」

「えっ」

急に琉華の右手が動く。それと同時に繋がれていた左手も動いてしまい、琉華の右手に引っ付いていつてしまう。そして琉華の右手が辿り着いた先は

「まずい……これは非常にまずい事になったぞ……」

これは周囲で走っている方たちにどう思われてしまうのだろうか。とりあえず俺の左手全体が柔らかい何かに包まれている気がする

何処へ運ばれていったのかは言うまでもなく、胸だ

いやいやいや、そんな事を悠長に考えてる場合じゃないから！
早く離させないと！

ちよつとだけ自分の左手に力を加えて右手と胸からの解放を試みる。しかし、ガツチリと掴まれているのか離れる気配はない。琉華には申し訳ないが思い切り力を加えてみる。だが予想に反して離れようとはしない。むしろ握る力が強くなり始めた気がしなくもない

「ん……う……」

何かに反応してしまつたのか、琉華が色つばい声を出してしまう。周囲で走っていた男性の1人が驚いたような顔でこちらを見、状況を理解したかのように携帯電話を取り出していた。多分110番に連絡するに違いないな、うん

「ってタンマタンマタンマ！」

なんとも説得力のない

琉華に左手をガツチリと掴まれたままベンチを立ち上がり、今にも電話を掛けそうなその男性に向かってストップコールを送る。気付いてくれたのか男性はこちらへと近づいてきた。ので、説得力のない形で説得してみる

そしてわかつてくれたかのように頷くと、再び携帯電話を取り出していた。多分110番通報だろう

以上、2回ほど繰り返し
それでやっと理解してくれたのか、携帯電話をしまつて走り出していた

琉華へと向き直る。そろそろこの手をどうにかしないといけないなこれは。客観的にも主観的にも色々と危なくなってきた

再び左手に力を加える。しかし、琉華はまた色っぽい声を出してしまう。何故だ！？ 何故なのだ！？ 何故俺が力を加えるとそっちも力を加えるのだ！？

しばらくそんな攻防戦が続いてしまう。そして

「ん、んう〜……」

琉華の閉じられた瞼が僅かに動く。そして起きてくれたのか、段々と目が開いてゆく

「あれ……まことくん……？」

「ああそうだ。おはよう琉華」

「お、おはよあ〜……ふわあ〜……」

琉華がなんとも可愛らしい欠伸を上げる。何故か右手は離れないが欠伸が理由で涙を浮かべる琉華がこちらを見る。まるで長時間寝ていたかのようだ

「でえ〜……ううどう？」

「いや、自分で思い出そうな」

そんな事は俺が訪ねたいところだ

「えつと……ん〜つと……あ、緑咲公園か」

「はいご名答」

どつやらちゃんと覚醒したのか、目をパツチリしてそう答えた。藤堂インコくんと……いや、インコちゃんと朝のお散歩に来たのだろ

しかしインコちゃんよ。何か気に触ったのなら謝るが、そう突か

ないでくれ。そろそろ出血しそうですぞ

こんなとき動物と会話できたらなと思ったりする

「真箏くん……インコちゃんじゃなくてティナねティナ」

「あ、そうだ。ティナだ」

あ、突くの止めてくれた

どうやら名前の事に怒っていたらしい

ティナが羽ばたき、2人の周囲を飛び回る

「でさ、真箏くん。1つ聞きたい事があるんだけどさ」

「ん、なんだ？」

「うん……なんで真箏くんはボクの胸を揉んでるのかな？」

「ああ……話すと長くはならないが、色々とおっいたらしい」

こんな非常事態なのに冷静な対応をしている俺がどうかと思ったりする。というか揉んでない。琉華が勝手に運んでいただけだし。しかし……その事について琉華が話してくれたというのに、何故左手を解放しようとしてくれない

「そっか……真箏くんはとうとう性欲に負けてボクを襲っちゃったんだね……」

「待つんだ琉華。俺をあの人集+と同じような事にしないで欲しいんだが」

「いいの、真箏くんならボクは文句を言わないよ……自分の目でその光景を見られなかったのは残念だけど、真箏くんとひと」

「はいストップストップ。そこから先の話をする俺が警察に通報される。というか俺はそんな事しないから！」

「……なんだ、ガツカリ」

「ガツカリするような出来事なのか……!?!?」

最近女子の考えが読めなくなってきた気がする

やっとの事で左手が解放され、自由になる。なんだかまだあの柔らかなさの感触が左手に残って 落ち着こうな俺の本能

改めてベンチに座っている琉華に向き直る

「で、今日はランニング中で寝てしまった、とな？」

「ご名答です……これから帰りますんで、では」

「いやいやいやちょっと待とうよ」

あまりにも短い会話を終わらせようとして琉華に止められる。琉華は立ち上がってこちらを見ていた

「えつとさあ……これから遊びに行ってもいいかなあ……なんて」

「まあ別に構わないんだけど……宿題終わってるのか？」

「あ、あはは、大丈夫大丈夫、終わってるって。そ、それじゃあさ、今から荷物持ってくるからここで待っててよ。すぐに戻ってくるからねえ。ティナっ」

そして飛んでいるティナと並んで琉華は自宅の方へと戻っていった。公園内に完全に俺一人になってしまったらしく、誰も走っていない姿がない

再びベンチに座る。立ったばかりだからか、若干暖かった。琉華の温もりであるう

およそ5分後、琉華が戻ってきたので自分の家へと向かう

その間、琉華の持ってきた大きな荷物がどうしても気になってしまった

「おっすー真箏ー」

「お邪魔しておるぞ真箏殿」

「健太？ 光久？ 連絡も無しに来てたのか」

「だったらわたしたちはどうなるんですか」

「そつだぞ真箏。私たちを置いて何処に出かけていた」

「……琉華が一緒……怪しい」

「大丈夫だよ望……残念な結果だったから……」

何が残念だったんだ琉華よ

現在自宅の俺の部屋の中。そこには部長を除いたwars部メンバーが全員（と言っても琉華を除く）が揃っていて、5人でテーブルを囲んで座っていた

だが……そのテーブルの上に何も置いていないことがかなり気になる。凄い気になる。気になって仕方がない

とりあえず琉華を座らせて自分は椅子に座る。そして健太の方へと椅子を向ける

「で、何故朝早くからここにいるのだね」

と質問してみた

正直なところ大体の予想は出来ている。だがここにいる全員がそつだったらかなり厄介だ

そつならないことを心の底から祈っておこう

「真箏、予想できてるなら質問しなくても問題はないんじゃないか？」

「ま、まあ……外れてる場合もあるじゃないか！」

外れていてほしい所だ

「残念……実は僕、夏休みの宿題が終わっていません」

ほら来た

健太が自分の後ろに置いてあつた荷物を漁りだし、1冊のノートと2枚のプリントを取り出す。もちろん夏休みの宿題と言う物である

「見て見て！ 読書感想文書いたんだぜ！」

「はいはい偉いですねー。他の宿題も頑張ってくださいネー」

そんなもの見せびらかすな。どうせ去年とか一昨年のを丸写ししただけだろ

どうやら当たっていたらしく、健太の顔が笑顔のまま固まっていた

「まあ、宿題の終わっていない健太は置いておくとして……残りの方々は何用だね」

「宿題です」

「……宿題」

「えっと……宿題」

「宿題だ」

「……明日香は？」

「心配しなくてもいい。ちゃんと終わってる」

明日香の偉さに感動しかけた一瞬だった

それにしても……琉華は宿題終わったんじゃないのか！？

それ以外の方々は何故終わっていない！？ もう夏休みも終わりなんだぞ！？

と、カレンダーを見ている。うん、あと少しで終わる

テーブルを囲う全員に向き直る

「で、お前らは宿題をやりに来たと？」

「……その通りです」「……」

「……明日香、今日は2人でどこかに遊びに行かないか？」

とりあえずここから逃げ出したい気持ちでMAXだった。なのでこのメンバーで唯一宿題を終えている明日香と何処かに逃げようと思った

それだけである

「え、ええ……ええええええっ！！？ ま、まま真箒！ そつ、それは本気で言ってるのか！？」

この反応に驚いてしまった

更にこの後の女子3人の行動に驚いてしまった

とりあえず割愛。何故だか知らんが手錠が付けられてしまった。そして椅子の上で固定されている

しかし誰だ、手錠なんて持っていたヤツ。俺はMじゃないぞ

「さて、真箒は固定されたことだし、僕たちは宿題を始めるとしようか」

「……お……」

「……明日香、なんとかこの手錠は外せないだろうか」

「……すまん真箒。どうも私は教師をやらなといけなみたいだ」

……こうなったら寝るしかないのだろう

そんな訳で俺は眠りについてしまった

時が流れるのは早いのか、起きたときにはもう短針が7を指していた。なお5人は宿題に集中している。健太もあれだけ集中すれば赤点ギリギリなんて事がなくなると言うのに……

敢えて発言はせず、その光景をただただ見守ることにした。すると突然部屋の扉がノックされ、ゆっくりと開かれていく。そこには料理を持ってきている母さんの姿があった。料理名は肉じゃがである

全員の視線が母さんに集中する

「ほらほらみんな、そう頑張ってたら保たないわよ！ だからこれ食べて少しは休憩しなさい！」

そして母さんは肉じゃがをテーブルの上へと（教科書類は退けられていた）置き、『頑張つて』と一言残して部屋を出ていった

母さんが出て行ってから数秒後、健太が食べ始めると他のみんなも食べ始める。俺は手錠をされているので食べるのは疎か、動くことすら出来ない状態である

……誰も、食べさせてなぐれなかった

「……あ、もうこんな時間なんだな」

「そんな中俺はずっと動けないままだったんだが」

更に時間は流れて9時30分頃。健太の発言によって全員の手がストップし、時間が時間なのか帰る準備を始めていた

俺は未だに繋がれたままである

帰り支度を整えた6人が玄関へと向かう。俺は椅子に繋がれたまま頑張つて……いけなかつたので、やっとのことで手錠を外して貰い、7人で玄関へと向かった。外は真つ暗である

「そんじゃまた明日な真筈」

健太がそう言うと、他のみんなも釣られて同じような言葉を送ってくる。まさかとは思うが明日も来るつもりなのだろうか。終わっていないのだろうか

「何考えてるんだ真筈？ 明日から学校だろ？」

「……………」

その健太の発言に俺と明日香が固まってしまった。まさかとは思うがコイツら、気がついてはいなかったのだろうか

明日香と顔を見合わせ、健太の方を向く

「なあ健太、今日って何月何日だ？」

ごく当たり前の質問を健太に繰り返してみる。だが帰ってきたのは正解、『8月31日』である
よし、確信したぞ

「なあ健太、今日って何曜日だ？」

「え？ えーっと」

その質問には健太が携帯を取り出し、日にちを確認している。そしてゆっくりと携帯を閉まっていき、重々しく口を開いた

「……金曜日……か」

「ここで5人に朗報です。夏休みは9月2日、日曜日までです」

夏休み最後の日だと思われていた8月31日は、この言葉をもつて終了する

#41 8月31日(後書き)

いきなりですが申し訳ございませんでした

投稿までに一週間かかってしまいました。連休中は宿題やらバイトやらで忙しくて書く暇がありませんでした

大至急書いたので文がめちゃくちゃですがご容赦を

もしかしたらしばらく投稿が遅くなるかもしれません

そうなってしまった場合は……本当にすみませんorz

4 2 二学期始業式

時間が流れるのは早い。ゆえに夏休みは長いようで短く感じられてしまうものだ

時間が流れるのは早い。ゆえに2日、要するに48時間が経過するのはかなり早く感じられてしまう物だ

時間が流れるのは早い。時間が流れるのは早い

時間が流れるのは

……約1ヶ月前に時は戻ってくれないのだろうか。いつそのこと誰かタイムマシーンを開発していただきたいタイムマシーンを……『マシーン』である

「おい真箒、現実から目を背けてないで戻ってきたらどうだー？

この僕でさえ現実見てるんだぞー」

「いいんだ健太。明日から俺は『タイムマシーン』の開発に取りかかるんだ。だから問題ない」

「要するに神崎さんは光の速さを超える物を作り出すんですね」

「無理だな、やめておこう」

「諦めが早いのだな……」

そう突っ込まないでくれ光久よ。人類が光の速さを超えるだなんてどう考えても無理なことなんだよ

最初から諦めるから駄目なのかもしれない

「いやいやいや、無理な物は無理だから……」

健太、少しは夢を見させてくれてもいいだろう

とりあえず短いようで長かった　なんて感じることはない、長いようで短かった夏休みも終焉の日を迎え、その翌日である9月3日の朝。夏休みが始まる前と同じように我が家に（俺を含めた）Wars部7人が集結している。朝食時である

ちなみに今日の朝食メニューはベーコンエッグだ。明日香が台所に立つ前に完成したので助かった。ちなみに琉華お手製である。結構美味しい。どこかのサイドテール娘とは大違いだ

「真筆、私の料理の何処がいけないというのだ」

「全部だ全部。お前は基礎から母さんに叩き込んで貰え」

我ながら厳しいことを言った気がする

だが明日香は

「そ、そうか……要するにお前は私に嫁に来て欲しいというのだな

……」

とか言っていた。面倒なのでスルーする

母さんにちよつと怒られた

まあ……とりあえず何故基礎を叩き込んで貰うことが『嫁に来て欲しい』に繋がるのかがわからない。ご説明願いたいところだ

だが……明日香は本当に基礎から必要だ。卵焼きの中に栄養剤を入れるバカがどこにいる。少なくともここに1人いるのだが、世界中……いや、この宇宙の中の何処を探しても明日香以外そんな生命体は存在しないだろう。してたまるか

「あら真筆、うちで作る料理には全部栄養剤入ってるわよ」

「ブーーーーッ!!!」

15年と数ヶ月生きてきて明らかに変わった新事実。俺は何故生きているのだろう。いや、俺だけじゃない。親父や姉貴は俺より長く生きている……何故だ、何故死んでいないんだ神崎家の皆さんよ……とりあえず吹きだしてしまった牛乳を布巾で拭き取っていると、母さんが続きを話してきた。明日香を除いた5名は驚愕を隠せない顔をしながら母さんを見据えている

「真箏……貴方、知らなかったのね……全ての料理には『愛』という栄養剤……いや、活力剤が入っているのよ！」

「ああ……そういうことな。驚いて損した」

「ちよつと何よその反応。そもそも驚く事じゃないでしょう？」

紛らわしい発言をしないで欲しいものだ

それはともかく明日香よ、何かに納得したかのように『愛』が足りなかったのか……』と顎に手を当てながら頷かないでくれ。足りないんじゃない、栄養剤そのものが間違っているんだ

ここでふと思ったことがある。何故こういうときに心を読んでいただけないのだろうか、と

「……真箏、それ、変態発言」

「じゃあ望、食べかけだけどこれいるか？」

「……是非」「……えっ!？」」「」

「望、それも変態発言だ」

「」「」「」

殺されかけた

本当にどうにかしていました、心から謝罪させてください

……左腕が使い物にならなくなったところで朝食再開

「で、お前ら宿題終わったのか？」

なんて質問をしてみた。8月31日になんとか終わっていたらしいが、万が一のこともあるかもしれないので聞いてみた。とりあえず問題は無く、持ってきていないというのも無いようだ

次の言葉が舞う

「真箏。実は私肉じゃがを作れるようになったんだが」

「なあ明日香。お前が肉じゃがを作れるようになったのは俺たちにとってはとっても喜ばしいことだ。だがな、今までに関してもそうなんだが、明日香。味見はちゃんとしような。以上」

……コイツが料理を作る際一番危険なポイントである。今まで味見をせずに料理をしてきたくらいだ、コイツが普段家で食べている物が気になってしまう。ただでさえ一人暮らしだというのに……

まあ最近はずちでよく食べているが

すると琉華が俺だけに聞こえるように耳打ちをしてきた

(……真箏くん、明日香は一人暮らしじゃなくて二人暮らしなんだよ?)

(へ? そうなのか?)

ここで新たな事実が発覚した。あのボロいアパートに明日香と誰だか知らないが、二人で生活しているというのか。とりあえずその同居している人、ドンマイ……

(いや、勝手に殺しちゃ駄目だった)

(ああスマン……)

(まあ真箏くんもわかってるだろうけど、これは誰にも言っちゃダメ)

メだからね？)

(あ、ああ……………?)

……………ここまで琉華に話されて気付く。何故琉華は明日香の事情を知っているんだ？ しかもかなり詳しく。つて、ああ、そうか。多分琉華は明日香の家に一回上がったことがあるのかもしれない。それならそれで話は付く

それにしても、親に見捨てられて二人暮らしか……………そうだった場合誰と生活しているのだろうか。琉華って事はありえないので省く、それ以外なんて全く見当が付かない

とりあえずこの話題はもうやめておこう。心を読まれると厄介だ。テーブルの方を見ると、琉華を除いた女子4名がジト目でこちらを見据えていた。琉華もその被害者である。ちなみに健太と光久はトイレに行ったらしい

逃げたなアイツら

「神崎さん、一体藤堂さんと何を話してたんですか？」

「……………話した方が身のため」

「琉華、言っておくが変なことは言っんじゃないぞ？」

「いや流石にボクも心得てるって……………大丈夫だよ明日香」

「そうか……………じゃあ真筈、何を話してたんだ？」

「待て琉華、何お前1人で逃げ出してるんだ。頼む、何か良い言い訳をしてくれ」

言っが遅く、殺されかけた

今回は俺は決して悪くないぞ！ かといって琉華も悪くないけど誤解しすぎだろ！

……………でも一応ゴメンナサイと心の底から謝っておきます

首がよく動かなくなっただとこで家を出る準備をする。気付けば

誘わなかったのだらうと思っってしまった。人数は多ければ多いほど楽しくなるはずなのに……今更ながら本当にどうしてだらう

健太が喋る

「……聞いて怒らない？」

「……怒らない」

嘘だ。竹内のあの目はすでに怒ってる。健太が何を言おうと俺たちを確実に殺してくる目だ。もし嘘で竹内の怒らないような事を言っただとしても確実に殺し来る。間違いない。多分、絶対……多分？

「えっと……」

健太が気まずそうに口を開いていった

そして

「人数調整の為に省かせていただきますたい」

ドゴオッ！！

その言葉と共に健太が横から消え失せた。本当に一瞬過ぎて何が起こったのかわからない。ただわかるとするならば、竹内が身を乗り出して健太のいた場所に右手のストレートを入れている。その右手の拳からは微量だが煙が立ち上っていて、消え失せた健太はと言
うと……

カラッ……

教室の壁にめり込んでいた。相当な破壊力だったらしく、健太型にめり込み、煙が立ち上っている。更には気絶をするという破壊力

そして最後にわかったこと

健太が発言した際、アイツの顔が凄い真顔だったこと……

その後、俺に竹内の怒りの矛先が向くことが無く、先生が教室に入ってきてHRが始まった

「いやあ……ただただ座って先生の話を聞くだけってのも退屈だったなあ……」

「とりあえず健太、1つ聞きたいことがあるんだ。いつ復活した」

聞くだけ野暮である

2学期始業式も無事に終わり、現在健太と2人で部室へ向かう途中。いつも一緒にいくエルフィは先生に呼び出されてここにはいない。1人減るだけで結構静かだ

上履きから靴に履き替えて昇降口を出る。ほぼ午前中で終わったも同然なので日が照りつけてきてかなり暑い。教室内と比べてまだ風があるから良いが、それでも暑い。9月だというのに

2人で部室までの道のりを歩く

「なあ真箏、変なこと聞くぞ」

「ん？」

空を見上げながら健太がそう呟く。その時の健太の表情は少し真面目。いつもより真剣に見えたりする。一体なんだと言うのだから。健太が変なことと言ったら卑猥な言葉が出てくるに違いない

「真筆はそれだけ僕のことを変態だと思っておるのかね……？」
「おう。でも……今回は真面目です、ってか？」
「ま、まあな。……………」

こう変に会話が入ってしまったが、健太は再び前を向いて歩き、表情が元に戻る

そして口を開いた

いつもの健太なら出ることのない言葉、質問

その質問に対して俺は一瞬頭が回らなくなってしまった

「僕と綾香ってさ、どういう関係に見える？」

その一瞬の後、すぐに答えが見つかる。『どう』って言われた『
こう』って言うしかないだろう

俺は口を開く

「恋人じゃね？」

いつもと同じで冗談交じりで言ってみた。そして健太はいつものように笑みを浮かべて言う

「……………そっか」

「うん。それにしても……………」

「ん？」

「何故急にそんな質問を？」

ついつい気になってしまったので思い切って質問してみた。もちろん冗談半分である

でも健太はいつもと同じような表情で、態度で

「まあ……なんとなく？」

「……そう済ませるな」

そうは言ってもこれ以上は敢えて追求はせず、そのまま部室へと辿り着く

そこには部長と光久の2人だけが椅子に座っていた。ドアが開いた音に気がついてこちらを見ていたが

2人以外誰もいないのだろうか

「おう、見ての通りだ」

相変わらず心を読まれる

心を読んで発言したのは我らがwars部部长である西宮雄太。あの海に行った日のことなのだが、部長たち3人（吉原先輩と瀧先輩を加えた3名）で祭の会場にいたらしい。そっちは気がついたが敢えて声は掛けずに楽しんでいたそうだ

多分……楽しかったのだろう。部長は。吉原先輩を弄り倒して

「何を考える神崎、俺はそこまで酷い人間じゃないぞ？」

「その割には結構弄りますけどね」

その後談笑。タイミングが良いことに吉原先輩から電話が掛かってきて、色々と言われてしまった。テレパシーでも使えるのだろうかと言いか最近思った。『クズ』から『吉原先輩』って言う事が多くなった気がする。正直な話本当にどうでも良い、と部長なら言うだろう。年上は敬わないとな！！

「それはそうと2人とも、早く席に着いてくれ。お前たちだけに話

しておきたいことがあるんだ」
「へ？」

しばしの笑いの後、部長が急に真剣な表情に戻って俺と健太にそう言ってきた

その部長の指示に従って2人でいつもの席へと着く。すると部長が一枚のデータスティックを取り出しテーブルの上へと置いた

「これがなんだかわかるか？」

「……いいえ全然」

というかわかるかフツ

部長は『フッフッフ』といかにも悪者っぽい笑みを浮かべた後、こう続けた

「いや実はだな、これはこの前の合宿の最終日の……アレだ、お前たちと梅花が戦った試合あるだろ？ その映像を入れたデータスティックだ。欲しいか？ 記念に」

「……」

……正直な話、期待して損した気がする

いや、だが、しかし。適当な接続語がわからんが、ここで部長のありがたき好意を断るわけにはいかない！ だからここは貰っておくべきだろう！ うん！

「と、言うわけで俺がいただきます」

……何故、この2人は手を挙げないのだろうか。本当に、いや、マジで

結局このデータスティックは俺がいただくことになる

そして、それから約10分後のこと。女子4人がやってきて全員が集合する

部長が口を開く

「さてお前ら、早速なんだがな……しばらくお前らには1日3戦していただきたい」

いきなりのご注文に俺だけがビクリしていた。らしい。今までだと1日に1戦するだけで部活が終わっていたが、一体どういう事だろうか

部長は続ける

「すまん、さっきのは訂正する」

なんなんだ

「しばらくじゃねえ。これから先だ」

『へ?』

「とりあえずこの前の合宿あったろ? それから後の演習も見てて思ったんだ、お前らにはどうも演習量が足らずに成長が遅い気がする。これは言った気がするがこの前関東に出たのだってあれは只のマグレに過ぎない。だからこれから先、1年後、もし全国をガチで目指すんだったら今までの演習量じゃ全然足りないんだ。だから……これから毎日3回は戦闘をすることする」

相変わらずどうでも良いんだが、よくこれだけ長い文を噛まずに言えると思う

しかし……いや、確かにこの前の関東大会については運が良かったと言うのもある。しかし……いや、部長が言ってることは正しい

のか

俺たちが目指すは今や全国だ。要するに俺たちの力じゃ及ばない学校が幾つもあると言つことになり、その間には部長とほぼ互角レベルの穹、全国19位ながらも力の差がありすぎる吉原先輩、部長と互角の芥川先輩、それ以下だが8位の瀧先輩、それ以外にもたくさんいる。それを超えない限り全国への出場は不可だと言つことだ
部長の言葉に全員が黙り込んだ

「まあ本来なら練習試合等でやった方がいいのだろうが、生憎俺の友人たちも時期が直で結構忙しいらしい。だからしばらくはデータで、余裕があつたら俺から練習試合の方は考えておく。お前らはお前らなりのやり方で強くなれ と言つても演習しかないんだけどな」

部長のその言葉に明日香が立ち上がる

「ふう……確かにお前の言つとおりだ。このままだと私たちは全国に行くことは出来ない……それに男子3人は3人だけで先生を倒しているのだから私たち女子も強くないといけない。……やろう、みんな」

どうでも良いことなのだが、明日香は相変わらず部長の呼び方が『お前』やら『アホ』やらだ。この前の関東大会終わりの時の申し訳なさそうな顔は何処へ消えたのだろうか
怒られそうだから考えるのを止めた

明日香の言葉に女子が全員立ち上がる

「そうですね……明日香さんの言つとおりです。わたしたちはもっと強くないとですね。と言つてもわたしはサポートの人間なん

ですけど……全力でサポート出来るように頑張ります！」

エルフィは途中苦笑しながらそう言った
それに望が続く

「……私たちはまだまだ未熟、だから……私も強くなる。……全力でサポート護衛を出来るように！」

今のままでも十分強く見えるのだが、それはあくまで俺の見方。実際の所望は先輩たちにはまったく言ってもいい程力が及んでいない。良い心意気だ、望

琉華が続く

「まあボクもエルと同じでほとんど動く訳じゃないんだけど……だよね、スナイパーだからと言って遠距離射撃専門じゃダメか……あはは……」

確かに琉華の銃弾の命中率は7割と結構高めだ。でもそれはあくまで遠距離での話。どうも琉華は近距離に敵がいると動揺してしまうのか銃弾が良く乱れている。それをどうにかしいのだろう
それを見た部長が男子3人に向かって口を開いた

「おい男子共、女子たちに呆気取られてるんじゃないやねえよ。お前らも梅花を倒したからと言ってまだまだ未熟だ。未熟すぎる。あれは3人だから倒せた話、1対1じゃ勝てないだろ？ それをどうにかしやがれ」

「へっ……上等っすよ」

「拙者も一応修行の身、まだまだ上は目指しておる」

2人が立ち上がる

それに続くようにして俺も立ち上がる

「じゃ、第一目標は本気モードの哉町を倒すことから始めるか？」

……なんだか俺だけ発言がおかしいような気がしたが、あまり気にはしない。その言葉に部長が苦笑しながら言う

「ククツ……まあいいんじゃない？　これが拓人が本気を出したときのデータだ。思う存分頑張ってこい」

『はい！』

そして9月3日、2学期初日の部活動が始まった

#42 二学期始業式（後書き）

なんだかChapter最終話みたいな話になってしまいました
Chapter始まったばかりですからね？

とりあえずおつかれさまでした

#43 秋期……(前書き)

多分今回短めです

4 3 秋期……

本当に最近になって思うことがある。とうかこれしかない

……時間は流れるのが早い。いや、早すぎるんじゃないか？ だ

つてもう学校と言う物の2学期が始まってから4日目だぞ……9月

6日だぞ……

早い！ 早すぎる！

そしてなんか暑すぎる！

いや、残暑という理由で暑いつてなら俺にでもよくわかる。多分健太でもわかることだ。バカでもわかることだ。実際の所残暑が理由でかなり暑い。窓を開けてても今日はまったく風がないからバカみたいに暑い。本当に残暑なのか？ って思えるくらいに暑い。それだけ暑い

暑いと思うから暑いのもかもしれないと思いたいところだが、実際問題暑いんだから仕方がない

さつきから暑い暑いってさと思うが本当に暑い

忘れていた、今は3時間目である。横ではエルフィが綺麗な文字でノートに数式を書いていっている。後で写させて貰おうしよう

健太の方を見してみる。教卓前の席なので寝ているわけが無く、真面目に授業を受けているのはわからないがノートに何かを書いている。まあどうせ落書きであることには間違いないだろうが

……健太を見たことにより先生の暑苦しい姿を見てしまった

梅花哲也。我がwars部顧問にして我が1年4組担任兼数学教師。あんなヒョロい身体の何処にあんなスタミナがあるんだって疑問に思えて仕方がない人だ。しかも細いのに何処に筋肉が隠れてい

る。昨日男子5名を同時に持ち上げるといふ事件があつたのだが、あの身体を見るにそれほどの筋肉が何処にあるのかがわからない。本当にわからない人物だ。部長に並んで

さて、ここまで来たならわかるだろう。現在9月3日の3時間目、数学の授業中である

まあ言うまでもないだろうが……とりあえず付け加えるとしよう。この数学の授業が普通の授業だったならまだ良しとしておこう。もうこんな事を言っている時点で普通じゃないことに気がついていただきたい

そう、あの梅花教師は普通じゃないのだ。いや、尋常じゃない。もう何度か見ているから見慣れたかなー、とは思っていたが……やっぱりこうやって久々に見たから厳しいものがある。現にクラスメイトの約3分の1が天に召されている状態になっていると言っても過言ではない。それだけヤバイ

……相変わらず、スーツ姿なのだ（しかも真っ黒）

更にはもつと最悪なことがある。その黒スーツ姿に加えて日に焼けた姿なのだ。多分……いや、絶対この夏休みの間に日に焼けたであろうその姿は、黒いスーツに加えてその黒い肌と重なって最悪のコントラストを描いているのだ。要するに、その姿を見るだけでクソ暑い

でもわかることがある。夏休み前よりは大分マシだ

『じゃあこの問題を……和見^{わみ}』

すまない先生……和見さんなら俺の2つ前の席でダウンしているんだ……！！

ちなみに和見さんはバレー部に所属している長身の女子である。見かけによらず体力が少ないのがアレ

和見さんを指名して倒れていることに気がついたのか、先生は別の誰かを指名しようとして教室を見渡す。なんだかこっちの方を見ているのがやたら気になる

そして俺の目の前に座っている八幡やわたが今にも倒れそうで怖い。帰宅部だからそうなるんだ!!

『じゃあ……八幡』

バタツ

……凄いタイミングが良すぎると思う。ここでマジで倒れるかつツ

それを見た先生が頭をポリポリと掻いている。そして何事も無かったかのように俺の方を見てくる。おい教師、まず授業を進める前に倒れている生徒たちをどうにかするべきなんじゃないか？ それが教育者ってやつなんじゃないか？

それでもなお、先生は俺の方を見てきます。ここで指されたら最悪だ、上手く倒れて誤魔化さなければ!!

……逃げようとしている自分に空しさを覚える

『じゃあ神崎』

バタツ

「……………」

もうだめだ。逃げるしかない。逃げるしかないんだ！ 俺には……俺には……その問題が全然わからないんだ!!

ツカツカツカ、と先生がこちらへ歩いてきているのだろうか、そんな音が聞こえ始めて段々と近づいてくる。そして俺の横でその音は止まった

後頭部に尖った何か突きつけられた。冷たくて気持ちいい……じゃねえ！ 尖ってるって危ない！！

慌てて身体を起こそうとする。が、やめた。何故なら今それがあるのは後頭部、起き上がれば一瞬にして昇天してしまう。ので、そのまま固まる

「……起きろ神崎」

どうやら先生は俺を殺したいみたいだ。起きたら確実に死ぬからとりあえずその状態のまま口を開く

「いえ先生、今の状態だと起き上がるのが辛いんですよ。だから後頭部にある何かをどかしてくれませんか？」
「断る」

俺には天国か地獄に行けと言うことらしい
尖った何かで後頭部を突かれる。地味に痛い

「はあ……簡単な話だ、頭を横にずらせばいいだけだろ」
「ああ、そっか」

先生に言われたとおり頭だけを左にスライドし、それから解放される。身体を起こして見てみると、それは合宿で何度もお世話になった Wars 武器、『サウザントクラウン』だった。要するに先生はそれで俺の頭を貫通したかったらしい

「それじゃあ神崎、あの問題解いてみる」

梅花先生はこの上なく鬼畜な教師だ

「……なんで数学の授業が2連続して入ってくるんだよ」

「いや、両方とも授業変更で入ってきたんだから仕方ないだろ」

健太の言うとおりでございます

地獄のような数学2連続授業を耐え抜き、お昼休み。多分そろそろ『笑ってよいとも』で一番好きなコーナーが始まる時間だ。12時41分である

ちなみに今いる場所は1年4組教室内の俺の席。健太が目の前の空いている席に座って俺の机に突っ伏している。あまりにも邪魔で弁当を広げることが出来ない。何故俺たち2人だけでここにいるかというのには色々と理由がある

まず1点目のエルフィ。4時間目の授業終了直後に先生に呼び出され、一緒に職員室へと向かっていきまだ帰ってこない。そろそろ5分くらい経つ頃だ

続いて1年2組メンバーの明日香と光久。先程教室に確認しに行ったところ、2人して授業中に寝ていたらしくノートを纏めておらず、頑張つてノートを纏めていた。もうそろそろ来るんじゃないかと思う

最後に1年5組メンバーの琉華と望。体育の授業でまだ着替えているらしい

そして何故ここにいるのか説明しよう。あまりにも簡単すぎる」とだ

出遅れて屋上を占拠できなかっただけである

「まあ遅れたのは僕たちが色々歩き回ったからね」

「心を読んで会話をすな」

学校の図書室には超能力関連の本はあっただろうか。初めてだが後で寄ってみるとしようかな

健太が身体を起こし、机の上に弁当箱を乗せる。それに釣られて俺も同じ動作を行う

「さて、待っててもアレだし……みんなには悪いけど先に食べてるか」

「だなあ」

健太と一緒に弁当箱を開く。どうやら今日の中身はしょうが焼き弁当らしい。結構ボリュームたっぷりだ

一方健太の弁当はチャーハンだったりする

2人で箸を取って弁当の中身に手を付け、一口食べる

それを繰り返す

ただただ無言で

……無言っていうのはなんだか嫌だ。といっても会話のネタが思い浮かばないのが残念である

「だったら僕がとっておきの話をしてやろう」

「どうせエロネタだろ？ 遠慮しとくわ」

「……そうやって聞く前からエロネタだと思いきむな」

「健太が話すのはそれくらいしかないだろ」

数ヶ月の付き合いでもわかることだこの変態め

「……………変態に変態言われたかねえよ……………」
「俺だつてそうだつっの」

というか思つたことがある。このクラスの男子全員変態なんじゃないか？ ほら、健太を筆頭にエロ大魔神だろ？ エロ3人集、その下にエローズ、3人集の上に四天王……………あ、でもそうなつた場合俺はエローズに入るのか。嫌だなそれは

「真筭。知らないみたいだから教えてやる。お前はエローズのメンバーに入っていない……………お前は四天王の1人、《強欲》の神崎真筭だっ！！」

「なっ、なんだつてー！！？」

このクラスのメンバーなのに知らなかった事実が判明した。あまり……………いや、かなり嬉しくない情報だつたが

つてかちよつと待て。何故俺が四天王に入っている？ エローズならまだしも何故四天王なんだ！ その辺に關してのご説明を求めたい！！

「いいだろう。お前は　ぎゃふん！！」

説明を始めようとしたところで健太の頭がチャーハン弁当の中に陥没し、中身が周囲に飛び散つた。ギリギリ俺の弁当は回避させておいた。その健太の後ろにはイライラを隠せないような表情をして拳を振り下ろした後の笹原さんが立っていた。今日も眼鏡をしていないらしく……………あれ、なんだろう、美人さん……………とりあえずやめておこう。もし心を読まれていたら何を言われるかわからない

健太が顔を上げる。その状態に思わず顔を逸らしてしまったが

「何をするのだね綾香!!」

「その顔でこつち見ないで!!」

「ぎゃふん!!」

再び健太の顔が弁当箱に陥没した。なんつーか……結構耐久力あるんだなああの弁当箱……

変なところで感心してしまった

健太が顔を上げ、顔を拭いてから笹原さんの方を向く。それと同じ時に俺も笹原さんを見た

「全く……今は周りで昼食中の人が多いんだからそんな卑猥な発言はよしなさいよ……」

「いやぁ……真箒がなんかいい話が無いかって聞くもので」

「聞いてないし」

「そうなの神崎？」

「いや、だから聞いていないし」

なんだか俺にも被害が及びそうな感じに一瞬だったぞ……

というかそんな事俺は一言も言っただけだ。考えただけだ。そもそもエロネタに走ったのは健太だ

「とにかく……食事中なんだか言動は控えなさい」

「そだなぁ……なあ綾香、お前も一緒に弁当食わないか？」

「遠慮しておくわ。アンタがすぐエロトークしそうだし……」

流石笹原さん。健太のことをよくわかっている

笹原さんが身を翻す。すると何かに気がついたのか、再びこちら

を見た

「ちよつと、まだ米付いてるわよ」

「え？」

笹原さんが健太の頬に向かって手を伸ばしてそこに付いた米粒をすくい取る

そして

「んっ」

「「あ」「

その動作に俺と健太が固まった。いや、俺だけならまだしも健太まで固まってしまった

笹原さんは健太の頬からすくった米粒をそのまま自分の口へと運び、それを食べた

「おい綾香……お前」

「ん？ どうかした？」

「……いや、なんでもない」

「そう？」

そしてまたあちらを向く

何故だ？ 今までの笹原さんなら、『……早く捨てて手を洗ってくるべきね』と言いつつだった。だが今日はそんな仕草を見せようとはせず、そのまま食べた。何事もなかったかのように

……なるほど、とうとうデレたか。と、勝手に考察する俺である

「あ、そうそう」

少し歩いていた笹原さんがこちらを向く

「ちゃんとその辺掃除しておきなさいよ 健太」

「……………」

健太の事を……………下の名前で呼んだ？ 今までなら『佐々木』と呼んでいたはずなのに……………
そうか、やっとデレたのか……………

「……………綾……………香？」

健太は不思議そうな表情で、ここから離れてゆく笹原さんの姿を見ていた

この時点での俺は いや、俺たち。この1年4組クラスメイト全員が思っていた。考えていた

笹原さんが健太にとうとうデレたと

だが

この時の俺、いや、俺たち1年4組。笹原さんを除いたクラスメイトが

まさか、あんな事になるなんて誰もが想像しなかった

残りの2時間、国語と理科の授業を耐え抜いてHRがあり、そして放課後。今日は掃除当番ではないので部室へと向かって　いや、もう着く

今この場に居るのは俺とエルフィの2人だけで、健太は掃除当番があるので少し遅れてくるらしい。3日の人は少し違った状況になっている。そして部室まで50mの場所にいたりする

そこから部室への出来事については割愛。ただただ世間話を繰り広げただけである

部室へと辿り着き俺が扉を開ける。そこには俺たち1年4組のメンバーを除いた1年全員が集合していた。部長はまだ来ていないらしい

2人で席に着く

「む。真箏殿、健太殿は如何されたのだ？」

「あー、掃除当番だよ。あと10分ぐらいで来ると思っ」

珍しい。光久が髪を下ろしてる

眼帯については相変わらずなのだが……

「……何もしてないと暇」

「だよねえ……先に演習でも始めてる？」

「琉華、流石にそれはダメだと思っんだが……」

確かに望の言うとおりこうやって何もしていないと暇である。かといって琉華の言うように先に演習を初めているだなんて真似は出来ない。何故なら7人揃っての演習な訳で、メンバーが賭けている

状態での演習は好ましくない

まあ、誰かが休んだ場合はそれで仕方がないんだが

この場にいる全員が机に突っ伏す。目の前には明日香の顔があった。かなり近い

少し慌てて頭を引っ込める。明日香の顔が少し不機嫌になっていた

この状態のまま3分が経過する

「あ、そういえば」

何かを思い出したかのようにエルフィが声を発して身体を起こす。それを5人全員が目で追っていた

エルフィの目が俺の方を向く

「神崎さん。さっき友達に聞いたんですけど……笹原さんが……」

「ああ……うん。うん……」

「『うん』だとわからないぞ真箏」

黙っていて欲しい。4組には4組なりの大事件があるんだ
なお机に突っ伏しながらもエルフィの言葉を聞く

「笹原さんが佐々木さんにデレたのは……本当なんですか？」

ガンツ!!

「どしたみんな？」

「頭痛くないですか……？」

「……大丈夫」

あれだけ思い切り机に頭を打ち付けたというのに本当に大丈夫なのだろうか……光久が一番強かったのか、額がかなり赤くなっている。というかなんだそのオーバーアクションは

俺を除いた全員が身体を起こし、俺とエルフィの方を見る

「エル、真箏くん……笹原さんがデレたって……本当？」

『本当』と書いて『マジ』と読む

琉華がそう尋ねてきたので俺が答え　　る前にエルフィが口を開いていた

「はい……そうらしいですよ。実際わたしはその場にいなかったからわからないんですけど……笹原さんが佐々木さんにき、き、き……キスをしたとか……」
『しゅぽっ……』

思わず俺までリアクションしてしまったではないか！！　誰だそんなデマを流したヤツは！！

とりあえずさつき4人がしたようなリアクションを俺もしてしまい、頭が結構痛い。思い切り机に打ち付けてしまったみたいだ
身体を起こす

「……真箏、血っ、血が出てる……！」

「望……そんな嘘はつかないでいいんだぞ？」

「ちよつと本当だって！　ほら鏡！」

琉華に鏡を手渡されたのでそれで自分の額をしてみる。ああ、なんだ。今朝飲んできたトマトジュースじゃないか

「いや真箏殿！　それは』とまとじゅーす』などではない！　正真

正銘の血だ!!」

「光久まで……とりあえず拭き取ればわかるか」

ハンカチを取り出してトマトジュースを拭き取る。んー……確か
にトマトジュースにしては赤色が濃い気がするなあ……まあこの程
度なら問題ないか

「問題大アリですよ!!」

エルフィもこの程度で慌てるな。以前に心を読むな
トマトジュース(?)を拭き取りながら会話再開。だがみんな集
中できないらしい

「え、えつと……とにかく! 笹原さんが佐々木さんに……キスし
ちゃったみたいなんです!!」

あ、そういえばそれをデマって言うの忘れてた
これ以上のデマを広げたくないのでエルフィの口を塞ぐ。そして
代わりに俺が口を開いた

今のエルフィの話がデマだということ。俺がその場に居合わせて
いたこと。実際に起こった出来事を全て話してみた。どうやらみん
なはこつちの話に納得したらしく、少しだけ安堵の息を漏らしてい
たが、その後すぐに大きなリアクションをしていた。まあ無理もない

しかし……いつまで出るんだトマトジュース

「……綾香が佐々木に……デレた」

「な、なんていうか結構リアルな話だよね……」

リアルなんだから仕方がないだろう。実際目の前でそんな事が起こっていたんだから一番驚いたのは俺だから、多分

「しかし真筆、それは今日からだったのか？ 2学期初日からとかそういう訳じゃないのか？」

明日香にそんな質問をされる。だが実際その光景を見たのは今日からで、3日から昨日にかけてはそのような仕草・言動などは一回も無かった。要するに今日からだろう

それを明日香に伝えて思う。何故急にあんな感じになったのだろうか……疑問だ

「ま、それは考えてても仕方ねえな。とりあえず今後の事について考えるでしょう」

なんだか無理矢理すぎる気もしたが、全員納得したらしく頷いてくれた

そして俺がそう言うと同時に部室の扉がゆっくりと音を立てて開かれた。そこには部長と健太の珍しい組み合わせの2人が立っていた。多分何処かで会ったのだろう

「ま、そういうことだ」

学校の図書室にはマシな図書が無かった

2人が部室に入ってきていつもの椅子に腰を下ろす。部長はソファだが

「さてと……早速だがこれを見てくれ」

『……ん？』

部長が1枚の紙切れを取り出して机の上へと置く。それを7人が見つめ、書かれている内容をじっくりと見ていく

1番最初に読み終わったのか、琉華が部長に対して質問していた

「えっと……要するにこれで参加すると？」

「おう。その通りだ藤堂」

書かれている内容、それは

「『東京都 wars 一般大会』……ですか？」

「まあ相変わらず勝手に参加応募をしたと？」

「その通りだ神崎。相変わらず読みがいいじゃないか」

読みも何も部長の性格上すぐにわかることだ。わからないほうが不思議だったりする

部長が口を開く

「この大会は来週から開催される。期間は1週間、優勝賞品はなんと」

「『AT社新商品 エメラルド・シユーター』か……強そ」

ドンッ

「おいコラ神崎。人が言おうとしていた言葉を取るな」

……誠に面目ない

部長が続ける

「と、言うわけで参加申し込みはしておいたからな。明日には俺たちの初戦の相手が決まるはずだ。だから優勝できるように今の内に

特訓でもしておけ野郎共
「

部長の言葉によって7人が立ち上がり、VWへと転送される
そして

来週から始まるWars一般大会へ向けての演習が始まった。勿
論目指すは優勝だ!!

#43 秋期……（後書き）

次回から戦闘開始予定ですが、
さ、上手く入れるだろうか……

#44 一般大会1日目(前書き)

ああ……試合形式を書くのは久々だ……
見づらいかもしれませんがご容赦を……

#44 一般大会1日目

2096年9月10日、東京都によるwars一般大会の初日。
なんていうか……もう当たり前すぎて慣れてきてしまった

今日も早起きである

現在時刻は5時近く。本来起きる時間より1時間くらい早いのだが……5月辺りから大会つてなると、いや、最近たまにだな。大会の時は確実だが、セットした目覚ましより1時間以上早く起きてしまうようになってしまった。本当に困り果てた身体である

ベッドの上で何もすることが無くただただ上を見つめている。言わせて貰おう、何も無い。横には扉と窓しかない。俺以外の人間なんて誰もいない

いたらいたで大問題なんだが。というか本当に困るからあの4人にはそういうことはやめていただきたいと言いたいところだが、言ったところで無駄な気もするので言っていない。言わなければ始まらない気もするのだが……

何事も挑戦である

上半身を起こしてベッドに座り込み、自分の机に置かれている物を見してみる。こんな事をして暇を潰せるわけでもないのに見てしまう。置かれているのは今日持っていく荷物と少しの勉強道具だけだ。それ以外なんて何も無い

最近健太から聖典を借りる事が少なくなってきた気がするな。今度また借り いや、そんな事したら四天王から格上げされてしまうな。自重しよう

ちなみに何故だか知らないが、光久がエローズの中に入っているのだ。別クラスなのに……後で健太に聞いてみるともしよう

鳥が鳴く声が聞こえてくる

風が吹く音が聞こえてくる

今日は多分暑くなるかもしれない。今はまだ明け方だから涼しいかもしれないが、まだ9月。夏も過ぎたばかりなのだ。残暑は厳しいぞ

とりあえず先生のスーツ姿を夏に見るよりはまだ……いや、結構違う、か・な・り、マシだ。強調するのは大切だ

「よっ」

ベッドから立ち上がって机の元へと歩み寄る。そして1丁の銃を右手にとって銃弾の残量を確認してみる。とりあえずこれは問題ないので、端へと寄せておく

そして2丁目。これも問題ないから端へ。3丁目

「はあ……良かった確認しといて」

確認してみると、残りの銃弾が僅か6発しか入っていないかった。

道理で持ち上げたときに少しだけ軽いと感じたのか……

机の引き出しから弾の入った袋（新品）を取り出し、開封して3分の1を装填する。そして残った弾をTEMMの方に移動させておき、これは戦闘中の予備にしておく。備えあれば憂い無しだ

端に寄せておいた銃と、今装填したばかりの銃をTEMMにしまっておく。これで武器に関して問題は無くなったな、多分。接近戦でどうなるかが問題だが

続いて銃の横に置いてあった1枚の紙切れ　今日から始まる一般大会のトーナメント表を確認してみる。最初の相手は、以前都北大会でもお世話になりました西堂高校。あの時明日香にメチャメチャにされた大将……飯島先輩は元気になっているのだろうか

多分、今日、あの日の、トラウマが、蘇って、来るに、違い、ない……なんだか明日香と顔を合わせるのが怖くなってきた。その人が壊れそうで

今回の大会は参加フリーだそうで、吉原先輩のいる哉町高校や、瀧先輩のいる高坂高校。他にも部長の知り合いがいる高校や、各自中学校の時の友達がいる高校も参加しているらしい

でも穹のいる新町高校は参加をしないらしい。どうやら色々と学校行事が重なってしまったらしい。それくらいだったら弦巻だって色々あるんだ。それなのに部長が……まあ、参加申し込みをしてみたらいいのか。やるしかない

出場チームは32、5回勝てば優勝、か……

表を机の上に置き、窓から外の景色をしてみる。太陽の光が差し込んできていて、その眩しさに目を細めてしまう

再び机へと視線を戻す。するとこの前姉貴が送ってきたダンボールが視界の端に入る。当然投影機も視界へと入ってきた。なんだろう、この好奇心は……

ダンボールの中から投影機を取りだし、それを足下へと置く。なんとなく起動してベッドの上へと座り込んだ。当然光だけが映し出され、人の姿なんて誰一人として映らない

「ま、無理ないよな……姉貴だし」

そう呟きながら投影機の電源スイッチをOFFにしようとベッド

から立ち上がる。すると

『あれ……？』

「……………ほ？」

突然投影機のスピーカーから声が聞こえてきた。勿論誰も映っているわけではない。ただただ声が聞こえてきた。しかもその声の主は姉貴ではなく、俺の知らない人物の声だった。誰だ！？ 声からして女の人だけ……誰だ！？

「………どうか何処にいるんだ！ 多分映らないところだろうけど！」

『From神崎……ああ、雫の弟くんかあ………やつほー真箏くん』
「へ？」

………姉貴の名前が出てきたのは納得しよう。だのに何故俺の名前を知って

『いや、私が雫の友人だからね』

まさかの読心術。しかも遠距離。さらに正体不明

とりあえず落ち着くために深呼吸をし、ベッドに座って投影機へと向き直る。依然として誰も映らない。映ってるのはただただ見えづらい景色

頭の中で浮かんだ質問を口にする

「えーっと……貴方は姉貴の友人って言いましたけど………どちら様でしょうか？」

『あ………自己紹介を求めらんだね真箏くん。でもそれはちよーっとまだ出来ないかな』

どういう意味だ

『ま、こっちの事情ってコトで』

「……まあ今回はそれで納得しておきます」

『しかしまあ……ん、流石に6年前じゃ覚えてないのか』

「ちよつと待つてください。その言い方だと前に会った事がある見たいな感じなんですけど……」

『一応あるよ？』

ここで驚きの事実が発覚した。確かに6年前の事なんてそう覚えている訳じゃない……何せ小学生の時だ。と、なると姉貴が高校生頃か……Wars関係者だな

しかし……確かにそう言われるとこの声を何処かで聞いたことがあるようなないような……そんな気がしてきた

推理を止めて投影機を見る

「えつと……話は変わりますが、姉貴は？」

『ん？ 雫ならまだ寝てるけど……起こす？』

相変わらずダメな姉だ、と心の中でそう思った一瞬である
とりあえず起こさないで良いと伝える

『ん……雫に用があつて連絡したんじゃないんだ？』

「はい。ちよつと悪戯してみようかと」

『なるほどねえ……あ、そういうえば今日って東京で一般大会なんですよ？』

「え？ あ、ああ、はい。それがどうかしました？」

『ん、いや何でもないよ？……じゃあ私も用があるからそろそろ切るね』

「え、あ」

『じゃあ頑張つてね真箏くーん』

ブツッ

投影機の光が消えると共に声が聞こえてこなくなる。聞こえてくるのは鳥の鳴き声だけだ

少しその場で呼吸をしてから投影機をダンボールの中へと戻す。そして椅子へともたれかかって今の会話を思い返してみる

……しかし、6年前の記憶なんてそう簡単に思い出すことは無かった。誰だか思い出すことも

やがて望が部屋へと入ってきてリビングへと向かい、全員で朝食を食べた後、先生の車で会場へと向かうため、学校へと向かうことになった

視界の隅で光久が吐いているように見えるのは気のせいだろうか、もう試合前だと言うのに……

それだけ光久が乗り物に弱いと言うことだ。それに加えて先生の運転もあるな、多分。俺と健太は前と同じでサ ヤ人になってるし
そういえば……

「いやはや、相変わらず凄いですね梅花先生の運転は」

……そういえば今日は教頭も来ているらしい。名字と名前を忘れてしまったが、とりあえず教頭だ。弦巻高校の教頭が見に来ている

「神崎君。学校の教頭の名と名前を忘れるなんて……せめて名字だけでも覚えて欲しかったところですね、教頭として……」

「だ、そうだ神崎」

「梅花先生も『だ、そうだ』で済まさないでください」

なんだかこの2人、地味に息が合ってるんじゃないかって思ったりもする。というか相変わらずのいじられキャラだなあ……教頭
ちなみに白鳥学教頭である

「『ちなみに』ってなんですか神崎君」

「いえ、お気になさらずに」

……なんだかこの教頭、相手にしているとかなり疲れてくる。そんな気がしてきた

「そんな事はどうでもいい。『ちよつと西宮君、どうでもいいって

』とりあえずお前らは先に移動してる。『無視しな』『黙れ。』

「……」とにかくだな……明智をどうにかして……まあいい。

初戦の相手は過去に一度勝っているから余裕なハズだ。気合い入れてやってこい」

学校の教頭に向かって『黙れ』なんて言えるなんて……流石は部長だ　って何処に感心しているんだ俺は。そんなところに関心しちゃいけないだろう

とりあえず俺と健太の肩を光久に貸して立ち上がらせる。もう光久の顔が凄い真っ青だ

「あの、明智さん……大丈夫ですか？」

エルファイが小走りで駆け寄ってきて、俺と健太の間にいる今にもダウンしそうな光久にそう尋ねてきた。どうやら答える気力すら残っていない感じだ。それだけグツタリしている

「……念のため持ってきておいて正解だったかもしれないね」
「「え？」」

するとエルファイが腰に付けているバッグから小さな袋を取り出し、その中から1錠の薬を取り出した。それを健太に手渡し、気が利くのか琉華が水を買ってきていた。要するにこれを光久に飲ませると言うわけだな

健太が薬を飲ませ、俺が水を流し込んでやる。その数秒後

「ふむ……酔いが一瞬にして引いたな」

「だ、大丈夫なのか明智？」

「案ずるな明日香殿。エルファイ殿のくれた薬のお陰で」

喋っている途中で一瞬光久の顔が凍り付いていた。どうやらみんながそれに気がついたらしく、その方向を見てみた。特に何も無い。あってもただの壁だ

全員で光久に向き直る。非常に健康的な顔をしていた。本当に大丈夫らしい

すると部長がこちらに歩み寄ってきた。少し苛ついているような表情だった

「おいお前ら……早く行ってこい。棄権になっちまうぞ」
「……申し訳ない」

望だけが謝っていた。それを聞いた部長は「まあいい」と言いながら頭を掻いていた

俺たち7人が会場の方へと身体を向ける。が、

「ああそういえば……」

後ろにいる部長に話しかけられる。何かと思って全員が振り返ると、部長はこちらに歩み寄ってきて口を開いた

「お前ら、“武器共有”^{シエア}って使ったことは　あるわけ無いよな
『……“武器共有”？』

初めて聞いた単語だ。英語だし

「そうか……そうだな、試しに神崎と近藤、出てこい。あまり時間を掛けられないからすぐにやるぞ」

「あ、はい」

そう言われたので部長の元へと小走りで向かう。そしてTEMMを出すように指示されたので、指示通りTEMMを部長へと出す。互いに左手についている

すると部長が俺のTEMMから細いケーブルを取り出して望のTEMMに繋げた。あんなケーブルがあるなんて初めて知ったぞ……そのまま部長が色々と操作し、俺の目の前にモニターを出してきてた。どうやら望も同じ状態らしい。そのモニターには自分が持っている武器が表示されている

「さて、もうわかると思うが“武器共有”ってのは互いに設定した武器を共有できるシステムだ。例えば……神崎がAと言う武器を、近藤がBと言う武器を設定したとする。するとそのAとBはこの二人の中で自由に使うことが出来るというわけだ。ただし使われていた場合は使用できないけどな」

部長が長々と説明をしてくれる。今の説明を纏めてみると、俺の武器を望も使えて、望の武器を俺が使えると言うことだ。まさかそんな機能があるなんて知らなかったぞ

その説明を聞いた望がモニター内に映っている武器を選択した。するとこちらにデータが送られてきたのか、モニターの一番下に刀（伊右衛門と表記）がされている。俺も1丁銃を選択する。あちらにも同じようにデータが送られてらしい
部長がケーブルを切断する

「さて、今ここで実践していると時間が無くなつから……本番で試してみる。以上だ、行ってこい」

その言葉を聞いて7人が再度会場の方へと向かう
そして、東京都 Wars 一般大会が始まった

「しかし……歩きづらいなこのフィールド……」
「同感だ明日香……2度目とはいえ……」

Wars 一般大会初戦、vs 西堂高校1戦目。先攻をあちら側に取られたのでフィールドが西堂高校で作られたフィールドで戦っている。そのフィールドは前回かなーりお世話になった《海岸》だ。
そう、前回の事件と言えば……

「貴様！ 私のスカートの中身を見たというのだな！？ そうなんだろ！？ 屈辱だ！ 貴様みたいな人間に見せるなど最悪の羞恥だ！ 今ここで死んで詫びろ！ もしくは私の夫である真箏に謝れえっ！」

「ちよっ！（ガスッ）待てっ！（ドスッ）俺は！（ガンッ）ただ！（バシッ）見たくて！（グシャッ）」
「見たくて」だと！？ 貴様……！ ええい、謝っても許さん！ 今すぐこの場で死ねえっ！」
「と、とりあえっ！（ゴスッ）ごめんなさいっ！（ドガアッ）」

……飯島先輩（敵大将）、明日香のスカートの中身を見た事件である。あの時は本当に……可哀想だったと思う。いや、自業自得な訳なのだが……可哀想だったと思う
さっき改めて挨拶したところ、明日香の挨拶に身体を一瞬ビクつかせていた。多分トラウマになってるんだろうなあ……

歩きづらい砂の上を走る。敵の姿はまだ見えない。何故なら目の前に砂で作られた大きな壁があるからだ
とりあえずVWの住人よ、ここまで大きな壁を作るのご苦労であった

右の方にある海の家ではかき氷を買っているCPUがいる。良く出来てるなあ……

「なあ真箏、さっきの武器共有だが……上手くできたのか？」
「ん……ああ、そういえばまだ確認してなかったな。試してみるか」

左手に付いているTEMMを起動しようと前へと出す。すると

『神崎さん、明日香さん！ 敵が前方より接近中、その数1！ 注意してください！』

「……………だよ」

「なら話は早い……………真箏、さっそく実践だな」

「言われなくてもわかってるっつーの」

敵が来るのに備えて2丁、銃を取り出す。どうやらさっき設定した銃は望が使用しているらしく、使おうとしても取り出せなかった俺が持っている武器を見て明日香が呆れた顔でこちらを見ていた。どうやら成功したのかどうかを確認したかったらしい。いや、刀なんだからそれは接近戦でのお楽しみってコトで

……………心を読まれたのか、納得したような表情をして刀を前へ構えていた

『……………そろそろ視界に映るはずですよ……………来ました！』

「行くぞ真箏！」

「ああ！」

相変わらずの戦闘スタイル。明日香が刀で敵に接近し、俺が銃で遠距離攻撃を加える。明日香は接近中、銃を撃ちながら攻め込んでいる

今回目の前に現れた敵は大将ではないらしく、双剣でなんとか2人の攻撃を凌いでいる。これなら余裕で潰せる！

『神崎さんの後方30mに敵！ 気をつけてください！』

「了解！ 明日香！ 悪いけどそっち1人でいけるか！？」

「ああ！ 問題ない！」

最後に1発撃ち込んで後ろを向く。それと同時に後ろでは鉄と鉄がぶつかるような音がし、俺の真横を1発の銃弾が飛んでいった。

どうやら先制を取られたようだ

2丁の銃を30m先の敵へと構え、数発撃ち込む。だが相手はこの地形に慣れているのか、軽々と回避されてしまい、1発も当たろうとはしない。銃弾の無駄だ

なお敵からの攻撃は止もつとしない。それをギリギリで回避する

『くっっ！』

『遅いっ！…！』

後ろでは明日香が優勢なようだ。あちらに関しては問題はないだろう

さて、問題はこっちだ。足場が不安定な上、相手はこの地形に慣れて俺たちとは違って自由に動き回れる……ここは接近戦を持ちかけるしかないか？

銃弾が飛んできたのでしゃがんで回避する

「やるしかないか……！」

そう思った俺はその場を駆け出していた。相手との距離が縮まっているのがよくわかる。弾が良く掠るようになってきた。掠ったところから細く血が流れてくる。砂に血の色が付く

敵との距離が縮んでいき、残り10mの場所へとたどり着いた。

が、相手はこちらに銃を向けながら段々と遠ざかり始めた。これだと刀での攻撃は無理か……？

「ぐっ！」

1発の弾が左肩を貫いた。同時に血が流れ出し、服を赤で染めていく。だがここで止まるわけにも行かないので走り続ける。相手も攻撃を止めようとはしない

血を流しながらも攻撃を加えていく。しかし当たろうとはしない

『うあつ！』

『終わりだ！』

明日香は大丈夫か……

よし、自分はこちらに集中しよう。腕が痛いけど

敵に向かって走り続ける。何発の銃弾が横を流れてゆき、数発は自分の身体を掠ってゆく。結構体力を取られてしまったな……保つか？

『神崎さん！ 右から敵が来てます！』

「マジか……！！」

なんて最悪なパターンだろう……このままだと戦闘不能は確実にやないか

とりあえず健太と光久が陣旗撃破をしてくれることを願おう。そして誰かが大将撃破をしてくれることを祈ろう

1発の銃弾が砂浜に当たり、そこから砂が拡散する。結構痛い。どうやらその銃弾は右方から飛んできたらしく、そろそろ俺もマズくなってきたところだ。これだと確実に殺られる

『真箏！ お前はさっきの敵に集中しろ！ 私が右側はどうにかする！』

「明日香！ ……ああ、頼む！！」

明日香からPLが入り、その数秒後こちらに右から銃弾が飛んでくることはなくなった。そして前方にいる敵も弾切れなのか、弾が飛んでこなくなった。さて、こちらの手番だ！！

とりあえず……さっきの砂の拡散を応用させていただくでしょう。正直俺って頭いいんじゃないかなーなんて思えるぞこの案は……フフ。この前の先生戦の時だって

『真筆ー、自分で頭良いつて言うなんてどうかしてると思うぞー』

……健太は自分のことに集中して欲しいと思う

とりあえず2丁、敵の足下少し手前に向ける。そして同時に引き金を引く。当然その銃弾が行き着く先は砂、ゆえに

『うわっ！』

「いただきー！」

銃弾が行き着く先は砂、ゆえに銃弾の勢いによって砂が舞い上がり、上手くいけば敵の目に入って目つぶしになる。それを利用して

1発の銃弾が再び左腕を貫通した。が、もう俺の勝ちだ

ドンッ！

今放った銃弾は、目を潰されて動けなくなった敵の胸を貫き、戦闘不能にさせる。それと同時に明日香の方もケリがついたらしく、敵の叫び声が聞こえてきた。どうやら大将ではないらしい
そして

ビーーーーーッ！！

どうやら光久が陣旗の撃破をしたらしい。1戦目に勝利した！
全員が集合する形になる

「ナイス光久ーっ！」

「うむ、だが健太殿が犠牲に……」

「光久……どうも僕は光久に盾にされた気がするんだが……」

「気のせいだ健太殿」

「どうやらいつもと立場が逆転したようだ。まあ、健太にはちょうどいいだろう」

「一方視界の左の方で銃を弄くっている望が凄い気になる。別に今は戦闘中でも無い訳なので武器を持つ必要はない。って、よくよく考えたらその銃って俺のじゃないか。望は近接武器しか持っていないわけだし、買ったわけでもない。さっき武器共有した俺の武器、銃ではないか」

「……何故だか知らないが全員望の状態に気がついていない」

「とりあえず放置しておこう」

「で、次は？」

健太がそう尋ねてくる。その質問に琉華が口を開いた

「別にボクと望は護衛で大丈夫だし、さっきと同じで大丈夫だよ。」

「ねー……のぞ……み？」

「……うん、大丈夫。……問題ない」

「近藤さん……近藤さんに問題がなくてもわたしたちに凄い問題があるんですが……」

「……気付くの遅すぎだろ」

銃をしまった望がこちらに戻ってくる

「望、以後ああいう事が無いように」

「……大丈夫、見てただけだから。……別にやましいことに使った訳じゃない、試合中だし」

明日香の質問に答える望。いや、試合中とか関係ないから、俺のだし

とりあえず健太、「やましい事ってどういう事？」って聞きそうな感じの体勢を作るんじゃない

「とつ、とりあえず2戦目が始まりますよ。頑張らしましょう」

『了解』

エルファイがそう言うと、次のフィールドが構成され始めた。今回は後攻の俺たち、弦巻フィールドの《荒野》だ。もう変えないで大丈夫だな、これは

しかし……相変わらず殺風景なフィールドだよ。地面と草しかねえし。まあ、哉町の《モノクローム》と比べたらまだマシか

```
Wars program setting start .  
field coating . . . complete .  
enemy program . . . complete .  
second battle data install . . .  
complete  
are you ready . . . . Wars battle  
start! ! !
```

「行くぞ明日香」

「ああ」

2人で地面を蹴り、フィールドを走り出す。やっぱり慣れた自校

のフィールドは良い。さっきの《海岸》と比べて数倍走りやすい。何せ地面が固まっているわけだし。まあたまたま地形が凸凹しているって理由で転びやすいけど

とりあえず走り出してから30秒、2回躓いた。明日香は3回躓いた

「真箏」

「ん？」

少しだけスピードが落ちた頃、明日香が前を見て走りながら話しかけてきた

「……いや、なんでもない」

「??？」

なんだったのだろうか

明日香のスピードが遅くなってきたのでそれに合わせて走る。明日香の額には汗がにじみ出ているのがよくわかる

正面に少し高めの段差があったのでそれをジャンプして上に乗る。明日香も同じようにする。そして再び走り出す。スピードがさっきよりも落ちた

『神崎さん、明日香さん！ 左から敵が接近中！ 数は2！ 警戒してください！』

「了解。……明日香、大丈夫か？」

「大丈夫……問題は無い……それより、集中しろ真箏……」

「はいよ」

銃を取り出して明日香の前へと立つ。体力の消耗が激しい明日香に攻撃を当てないようにするためだ。だが、後ろにいる明日香は前

にいる俺が要らないかのように前へと歩き出してた

「まあまあ、少し休んでな。その状態だとすぐに殺られるぞ？」

「む……わ、わかった。それなら少し………すぐに私も加勢する」
「おう」

敵の姿が段々と見えてきた。どうやら両方とも銃を持ってきているようだ。そしてその内の片方が

「………大将か」

「何？」

その言葉に反応した明日香が俺の背中から顔を出して敵の方を確認する。確かにあれは敵大将だろう。ここからでもよくわかる気がする

とりあえず大将はまた別格だ。1対2で戦ったところで勝ち目はない

明日香を立たせて今さつき上ってきた段差を下る。そして少し右の方にあつた入れるスペースに明日香を入れ、俺は再び上へ。明日香には凄い反対されたけど

銃を構える

『神崎さん、気をつけてください………かなり遠いですが、右からも敵が接近してきてます。なるべく早めにしたほうがいいと思います』

「そうか………ありがとうエルフィ。出来るだけ頑張ってみる」

『はい………が、頑張ってください！』

「ああ」

さてと………どうしたものか

今こちらに接近している勢力は、大将ともう1人。ここから見る

限りだとさつき明日香が2番目に対応していた人物だろう。さつきの状況とは違って挟まれているわけではないからすぐにやられることは無いはずだ。だが2人で片方は大将。それなりの実力があるのは前回戦ったときにわかっている。だから俺1人である2人に勝てるという確証は無い。しかも後方からは遠いらしいが1人接近中。明日香が加わって2人になったとしても、敵の数を減らせていなければ2対3。厳しい戦いだ

……覚悟を決める、神崎真箏

ドンッ！

正面にいた2人の内1人が銃弾を放ってきた。結構遠かったのだからそれを余裕を持って回避する。しかし残りの1人が続けて撃つてくる。当然回避仕切れるわけが無く、右腕を小さく掠った。そして連続して銃弾が飛んでくる。ダメだ！ 全部回避できるわけがない！ そう思った俺は明日香のいる反対側へと降り、そこで戦法を考える。今のだけで結構負傷している。1つ1つの損傷は少ないが、換算すると結構大きい

頭を出して敵との距離を確認してみる。と、耳たぶを銃弾が掠った。慌てて頭を引っ込める

とりあえず今ので確認は出来た。2人の意識は完全にこちらへと向いている。しかもこちらへと向かってきているようだ。この状態だと俺は危ないが明日香は安全だ
さて、これからどうしたものか

「……明日香に協力して貰うか」

PLを開いて明日香に連絡を入れる。すぐに気がついたのか、1秒もしないうちに出てくれた

『だ、大丈夫か真箒……』

「ああ、この程度問題ない。でだ明日香。そこから頭を出してくれないか」

『あ、ああ…… 2人敵が見えるが……』

「それでいい。とりあえずどちらかでもいい、そこから狙ってみてくれないか？」

『わ、わかった！ 待ってる！』

その言葉を最後にPLが切れる

……敵の足音が近づいてきた。このままだと俺は確実に殺られる。そうなったら明日香もだな……頼む、成功してくれ

ドンッ！

『ぐっつ！』

『衣鶴！』

明日香の板砲から銃声が聞こえ、1人に命中する音が聞こえた。今だ！

「今だ！」

「なっ！？」

ドンッ！

大将ではない方に弾が命中したのか、『衣鶴』と呼ばれていた方は腰の辺りから血を流していた。一方俺が放った銃弾は気を取られていた大将の左の太股に命中し、その場に膝を付かせた。あまりに突然すぎたのか、2人とも武器を落としている

掠り傷と血で一杯になった腕を『衣鶴』の方に向ける。そして1
発、胸を貫く

「くっ……」

「……すいません、俺たちの勝ちです」

そして大将の方へと銃を向ける

しかし、大将の顔は一瞬微笑んだ

ドンッ！

「なっ!?!」

「甘い!」

「くっ!」

今俺が放った銃弾は大将の元へと確かに飛んでいった。飛んでいったのだが防がれてしまった。放つと同時に取り出された盾によってそして瞬時に武器変更、銃で同じく左太股を撃ち抜かれて武器を落としてしまう。形勢逆転されてしまった……！

「……甘かったなあ……満点まではもう少しって所だな……」

大将が俺の頭に銃を向ける。だが、この勝負は俺たちの勝ちだ
口元を緩める。その行動に疑問詞を浮かべていた
そして

「満点までもう少しですか……それはそっちじゃないですか？」
「何？」

チャッ

「……あ」

大将の後頭部に銃を突きつけた
勿論俺ではない

「こっちの勝ちですね、飯島先輩」
「く……うっ……!!」

大将の後頭部に銃を突きつけた明日香が引き金を引き、大将撃破
によりこちらが勝利した
優勝までの一齣を、1つ進めた

#44 一般大会1日目（後書き）

……その時の飯島先輩の身体は、凄い震えていた

ってのを入れたかったんですけど、止めておきました

次回、もう1回戦闘入れるかもしれません。あくまで予定
では

#45 今更気付くそんな事(前書き)

違う作品書いたらこっちが余計にggggdになりましたw

4 5 今更気付くそんな事

東京都による wars 一般大会の 1 日目が終了した翌日、9 月 1 日の昼。いつものように 7 人が集まって弁当を食べようとしている。ちなみに場所は屋上、今日は早めに獲得することが出来たのだ。そして弁当箱の中身は普通の弁当だ。色々入っている

先に食べていた健太が口に食べ物を含めながら話してきた

「まあ 1 日目ご苦労。明日は哉町と試合だった」

「食べながら喋るなっつーの」

正直自分でもよく聞き取れたな、なんて思ってしまう

口に含んでいた食べ物を飲み込んだ健太が再度口を開く。その内容としては、明日最初に当たる相手が哉町高校（吉原先輩がいる所）らしい。そして昨日の解散後に健太と部長が少し話し合ったらしく、その結果、多分本気でかかってくるに違いない、と。本気での実力を知っているのは男子 3 人と部長の刑 4 人だけ、女子はまだ見たことがない。下手したら明日の一発目で敗退の可能性があるので今日の演習では部長が吉原先輩の弱点を教えながらやってくれるらしい。大助かりだ

この場にいる健太を除いた 6 人が弁当を食べながらその話を聞く

「と、まあこんな感じかな」

「それはいいんだけどさ、佐々木くん。吉原先輩の本気を見たことあるの？」

「そりゃもっ」

琉華の質問に健太がため息を吐きながら話す

「えつとな……開始1分も経たずに3人が全滅したよ」

「ん？ 健太、3分じゃなかったか？」

「あ、そうかも」

「どっち……？」

「3分」

カップラーメン1つが出来る時間だ。とりあえずあの時の記憶が健太は曖昧になっているらしい。衝撃が強すぎて忘れてしまったのだろうか

明日香が驚いたような表情をしている。望がビクリしたような表情をしている。エルフィが驚愕したような表情をしている

「ま、あの人の実力はこんな感じなんだよ……」

「……勝てるの？ ボクたち……」

それは俺だつてそう思っていることだぞ琉華。あの人に本気を出されたらマジで瞬殺されてしまう。今まで本気を出さなかったことに疑問を抱くかもしれない、女子は。男子は理由を知ってるからいいんだけどさ……

とりあえず……いや、なんでもない

全員が昼食を再開する

残暑が厳しいなあ……

ここで昨日の1回戦目の後の出来事について振り返ってみる

「おうお疲れ若人たちよ」

試合が終わってRWに戻ってきてから2分くらいが経過し、部長が確保しておいた観客席につく。冷房が効いているらしく、汗を掻いた身体には結構悪く感じる……けど涼しいからいい。部長の横には先生と教頭が座っている。2人も「お疲れ」と言って迎えてくれた。7人で部長の前に座る。するとポケットから1枚の紙（トーナメント表）を取り出してきた。赤いラインが目立つ。当然弦巻の所からもラインが出ている。1回戦に勝利したという証だ

「さて、次の試合な訳だが……まだ勝敗が決まってないからわからん。今日の前で試合やっつてるどちらかがお前たちの次の対戦相手になる。今延長戦だからよく見ておけよ」

部長のその言葉で全員が試合の様子が映し出されていモニターに目を向ける。延長戦か……いい戦いをしているんだらうなあ……勝てるのか？

1人のおじさんと学生が競り合っている。おお、おじさん凄いな……あれ？ おじさん？

ここに来て違和感を感じる。何故おじさんが出場しているんだ？ よく見たらおばさんも参加してるじゃないか！ 何故だ！ 何故なんだ！

「……おい、神崎」

「はい？」

突然後ろから部長に声を掛けられたので、後ろを振り向く。部長は左手を頭に当ててやれやれ、と言った感じの表情をしていた。なんかあったのだろうか

「いや、なんかも何も……あのなあ神崎、お前たちが参加している大会ってなんだよ」

当たり前前の事を聞かないで欲しい。東京都の Wars 一般大会だ

「……わかってるんだったらわかるだろ。その「おじさん」が参加している理由がよ」

「……ああ、そういう事だったのか」

そういえば。そういえば……トーナメント表にも商店街の名前が入っていたような気がするなあ……今更ながら気がついた

気がついたところで観戦を再開する。今のところおじさんたちのチームが押しているらしい。学生さんたちのチームは……危ないな。2人も戦闘不能者が出てる

「部長、あのチームの詳細は？」

「ん？ 東通り商店街。あのチームで4位をの成績を2回収めているチームだ。確か……大将の今野こんのってヤツが相当な実力者だったなあ、そろそろだぞ」

「え？」

ビーーーーーッ！！

どうやら今見ていた試合が終了したらしく、試合終了のブザーが聞こえてきた。勝ったのは……東通り商店街、今部長から話を聞いていたチームだ。大将同士の戦いで今野さんという方が勝ったらしい。武器は……棒か……初めて見るな。さっきチラッとだけ見た感じだとかかなり扱いが上手いと思う

後ろに座っていた部長が手を叩いて席を立ち、口を開く

「さて、今の結果の通り、次の対戦相手は東通り商店街だ。今神崎には少し話しておいたがかなり強いチームだ。油断したらすぐに敗北は確定する……」ので、気合いを入れて挑むように。ほれ、梅花もなんか言ってやれ。顧問として」

部長が横に座っていた先生にアイコンタクトを送りながらそう言う

「だから呼び捨てにするなど……まあいい。勝てるようにベストを尽くせ、以上」

「頑張ってくださいね皆さん。校長の代わりに私が見届」

「というわけで行ってこい」

……部長って教頭になにかしらの恨みでも持っているのだろうか？

結局教頭の言葉を全て聞くことなく、2回戦が行われるVWのある場所へと向かった。その場には相手はすでに来ていた。2回戦の始まりだ

```
Wars program setting start .
field coating . . . . .complate .
enemy program . . . . .complate .
final battle data install . . . . .co
mplate
are you ready . . . . .Wars battle
start! !」
```

なんだかんだで延長戦の始まりだ。1戦目は健太が陣旗撃破によつて勝利、2戦目は大将撃破で敗北という結果だった。2戦目の時に俺と明日香が大将と戦ったが、正面から挑むとまるで勝ち目がな

い。それくらいの実力を持っている人物だった。俺は戦闘不能になつてしまつたが

後方から仕掛けた方がいいだろうか？ 仮にそれが成功したとすれば勝てるだろう。失敗したらすぐに2人ともやられるかもしれない。大将撃破をするために作戦を考えながらフィールドを走る。敵の姿は一向に見えない

「真筈、いい案は思いついたか？」

「いいや全く。後ろから不意打ちを仕掛ける以外何も思い浮かばん」
「そうか……」

チツ、と舌打ちをしながら明日香は呟いた。多分この様子だと明日香も作戦は思い浮かばないのだろうな。俺が考えた後方からの不意打ちも100%成功するという確証はないわけだ、実行するならよく考えなければ

次の十字路を左に曲がる

『神崎さん、明日香さん！ 前方200mに敵がいます！ 気をつけてください！』

「了解」

まだ曲がったばかりだったので、少しバックして角に隠れる。そこから見てみると、小さく人がいるのが確認できた。どうやら陣旗の方向へと向かつてるらしい

「どうする真筈？」

「……倒す」

「わかつた」

明日香を先に敵へと向かわせる。武器は左手に刀のみ、接近戦で

の勝負だ

一方の俺は来た道を一旦戻り、一番手前の角を右（敵のいる方向）に曲がる。敵が行こうとしていた角で曲がって明日香と挟み撃ちをするためだ。でも敵の移動が早すぎたら意味がないが

道を走る途中、鉄と鉄がぶつかり合う音が聞こえてきた。どうやら足止めに成功したらしく、さっき敵が入っていった場所の当たりから聞こえた。これなら挟み撃ちが成功する！

走るスピードを上げて目的地の角へと辿り着く。そこから敵の様子を確認する。ちよつとした小競り合いになっているらしく、2人とも刀と槍をぶつけ合っている状態だ。大将ではないから明日香1人でも勝てるかもしれない。と思ったが何気に押されている。早く助けないと

銃を取り出して相手へ接近する。が、敢えて弾は撃たない。もし相手が音に気がついて回避された場合明日香にダメージが行ってしまう。だから近距離で当てる方が確実だ。明日香は気がついたようだが相手はまだ気がついていない。距離が縮まる

『神崎さん！ 上です！』

「えっ!?!」

その連絡の内容に思わず声を上げてしまい、明日香と競り合っていた敵に気付かれました。そして連絡にあったように上を確認

「ぐ……っ……っ!」

「悪い……ねっ!」

「があっ!」

「真筆!」

「余所見は駄目だよ！」
「うあつ！」

上から降りてきた大将に左腕を切り込まれ、武器変更された棒武器によつて腹を突かれて思い切り吹き飛ばされ、ビルの壁へと激突する。左肩からは血が流れ出し、胃の辺りから熱い物が込み上げてきそうになった

一方の明日香は俺が攻撃されたことで余所見をしてしまい、武器を弾かれて槍の尻で腹を突かれ、脇腹に薙ぎが入って同じく吹き飛ばされたようだ。更に打ち所が悪かったのか気を失ってしまった

大将が目の前に立ちはだかる

「悪いねえ……こつちも商店街の事情つてモンがあるんだ」
「事情……ですか」

聞かないでおこう。つて、そうじゃない

早く逃げるかどうにかしないと……明日香もやられそうだ

武器変更、相手の手にはエクスカリバーに似ているようで違う武器が手に持たれている。それが後ろへと引かれていく。成る程、突きか。つてそうじゃない

「それじゃあ……」
「ちつ……ここまで」
『諦めるのはまだ早いんじゃないかなあ？』
「え……？」

チュインツ！ バババババ！

琉華の声が聞こえたかと思うと、地面に銃弾が当たって大きな音が響く。その攻撃に反応した敵の行動は既に遅く、数発の銃弾が足

に命中、そして1発は武器を持つ手に当たっていた

銃弾が飛んできた方向を見てみる。真横には誰もいなかったが、ビルの屋上が鏡で光を反射したかのように光った。目を凝らして見ると、そこには武器を構えている琉華の姿が。あ、手は振らないでいいから

「今野！」

明日香にトドメを刺そうとしていたおばさんがこちらに駆け寄ってくる。だがその判断、間違ってるぞ

「うあっ！」

「ため多米さん！」

「余所見は厳禁ですよ、今野さん」

ピシユウンッ！

琉華が放った銃弾が余所見をしていた大将の胸を貫通した。その直後、試合終了を告げるブザーが鳴り響く

こうして2回戦目は勝利という結果を残し、3回戦目へと駒を進めた

もう、自分がどうしたいのかわからなくなってきた

「健太！ お前、本当は綾香の事好きなんやろ！？ なあ、そんなんやろ！？」

『何度も言わせんな。オレは別にどうも思っていない。友達だ友達』
『テメエ……どうも思っていないってどういう意味や！ 答えてみい
！』

『はあ……だからどうも思っていないのは好きとかそういう事に
関してだ。OK？』

『……』
『だったらよ、お前も綾香の事好きなんだろう？』

『……それは……』
『……オレの事なんて気にしなけりゃいいじゃねえか。お前がした
いようにすれば』

『健太、気付いてないかもしれんけどな、綾香はお前が好きなんや』
『……は？』

『今言った通りや。この前本人の口からそう聞いたわ。ちゃんとな』
『そんな訳ないだろ？ オレはこの前綾香本人にお前が好きだって
聞いたんだからよ』

『な』
『まあ綾香がどう思おうとオレはオレだ。じゃあ帰るな』

『……なあ健太』
『ん？』

『……もしもの話や。アイツがお前に告白したら……どうするっ？』
『別にどうもしないさ』

『……は？』
『だから、別にどうも』

『黙れこのアホがあああっ！！』

あ……

『……何すんだ』

『はあ……はあ……撤回せえ』

『はあ！？』

『今言った言葉を撤回しろ言うとするんやこのアホがあっ!!』

『……あ?』

『撤回しろ言うとするんや! 何が『どうもしない』や! お前は人か!? そんなん人じゃないわ!!』

『くっ……言わせておけば……くたばりやがれこのカス野郎!!』

……

『チツ……こうなったらやるしかあらへんか……』

『ああそつだな……久々にやるうじゃねえかよ……今回は血、見せるぞ』

『言ってる……』

『ぐっ……』

『うあっ……』

自分は……自分はその頃からおかしかったんだ
こうやって

こうやって、2人を好きになつたからいけなかつたんだ

2人に相談したのがいけなかつたんだ

だから……2人を傷つけた

健太を変えてしまった

関係を、崩してしまった。今まで何ともなかった関係を。アタシが、この手で。自分自身の手で

崩してしまつたんだ

「もうやめてよ2人共おおっ!!」

「綾香っ!?!」

だから

だから……

だから、アタシは

終わらせようと思った。そう思った

この関係を、本当に。完全に。崩してやる

周りがどうなるうとアタシには関係ない。アイツが昔よく言っていた

崩して終わらせる。亀裂を完全に崩す

アタシは……

そう、アタシは

#45 今更気付くそんな事(後書き)

おひさしおひさしおひさし

#46 一般大会2日目(前書き)

……頑張ったつもりです

#46 一般大会2日目

一般大会の1日目が終了して翌日、2日目との間にある休憩期間的な時間　も、終わって一般大会2日目の朝。今日はなんとか目覚ましのなる時間に起きることに成功し、6時頃。いつものように7人がリビングに集まっており、朝食を摂っている

今日の初戦、3回戦の相手は吉原先輩のいる哉町高校。昨日の間に作戦の会議はしていたが、とりあえずこちら側の予想としては

- ・ 吉原先輩は確実に本気で来る
- ・ 残りの6人は陣旗を集中攻撃するはず（逆の場合もあり）

と、いった感じだ。そして考えた作戦として

- ・ 吉原先輩が来たら逃げることに
- ・ 残りの6人は1対1で倒せるだろうレベルなので、現れた場合は応戦
- ・ 相手の数が3人まで減らせた場合、3人（誰でも可）で吉原先輩を徹底的に潰す

そんな感じの作戦があがっている。成功する確率は半々、いざ本番にならないとわからない

全員でカップに注がれていた牛乳を飲む。落ち着いてるなあ、この光景

牛乳を半分ほど飲み、テーブルにカップを置く。光久には牛乳で白ひげが出来ていた

「で、結局他の作戦は思い浮かばないのか？」

パンの端をかじっている明日香が健太にそう尋ねる。今回の作戦は全て健太が提案した物なので、全員がそれに頼り切っている。質問を受けた健太は顎に手を当てながらパンを食べていた。なんだか忙しい人みたいだ。「サクツ」といい音があがる

「んー……ダメだな。成功の可能性を上げられそうにもないし、他の作戦も思い浮かばん」
「そう、ですか……」

健太の回答に唸る一同。これでもみんなが勝てるだろう良い作戦を考えている、けど俺も、他のみんなも思い浮かぶ様子はない

最後の一口を口に放り投げた健太が、口内の物を噛みながら喋る

「ま、後は運任せでしょ」

「行儀悪いから飲み込んでから言え、飲み込んでから」

牛乳で中身を流し込む。ゴクン、と健太の喉から聞こえてきた

「ま、後は運任せでしょ」

「……2回目」

望の冷静なつつこみが　って、望も口に入れたまま喋ってるししかし運任せか……確かに成功確立が50%となるとそうなるってしまうのかもしれない。しかもこの50%というのはあくまで俺たちの勝手な予想。本当なら0%かもしれないし100%かもしれない。大袈裟すぎたけど、実際の確立なんてわからない。本当に運任せだ

最近ではパンも食べるようになった光久が、最後の一口を飲み込む

「運任せか……ならば拙者が」
「却下だ却下」

光久が左目の眼帯に手をかけたので、俺と健太で言い切る前に即答する。続いて琉華が口を開く

「明智くん、確かにそれを使えば確立は一気にあがるけどさ……止めるこつちの身にもなってるね？」

「も、申し訳ない……」

言い終えた琉華が再びカップを持って牛乳を飲む。どうやら中身が無くなったらしく、テーブルのほぼ中央に置いてある牛乳パックに手を伸ばしていた

エルフィがコトン、と小さな音を立てながらカップをテーブルの上に置く。琉華と同様、中身を全部飲んだようだ

「と、とにかくやるしかないんじゃないでしょうか？」
「……それしかないか」

エルフィがそう言うと、明日香がそれに答えて牛乳を一口飲む。カップをテーブルの上に戻してため息をつく。「なんで良い作戦が思い浮かばないんだ……」と、小さな声で呟いていた

健太が席を立つ

「ま、これ以上考えても仕方ない！ 後は神様に頼んで勝たせて貰うしかない！」

「健太、まだ出発する時間じゃないだろ？」

「ああ、悪い。ちよっとトイレ借りるな」

そう短い会話をした後、健太はリビングから出て行った。ここにいるのが6人になる

「はあ〜……勝てるのかなあ、ボクたち」

琉華が思い切り椅子にもたれかかって自信のない言葉を言う。もたれかかった椅子は今にも倒れそうだ。その言葉に望が続く

「……最初から諦めるのは駄目」

「そつだぞ琉華。最初から諦めたらダメだ、本当に無理だと思ったときだけ諦めるんだぞ」

部長から教えて貰った言葉だ。その直後、琉華は体勢をキープしながらうなり声を上げていた。琉華を挟んだ反対側には皿を洗いなから笑顔でこちらを見ている母さんがいる。他人から見たら面白い光景だろうけど、こちらは思い切り真面目なので止めていただきたい。琉華が椅子と一緒に元の体勢に戻る。その際思い切り戻ってしまったのか、床からゴン、と言う音が聞こえてきた

「まあ、諦めなければなんとか策は見つかるさ」

「その言葉は信じてもいいのか？」

「……多分。というか明日香もそんな細かいことにつっこまないでくれ」

「わ、悪い……」

謝った直後、今度は明日香が先程の琉華と同じような体勢になる。だが勢いが強すぎたのか、バランスを崩してそのまま後ろへと傾いてしまった。当然音を立てて倒れる

「いったあ〜……」

当然頭を打ち付けたからである

後頭部をさすりながら涙目で明日香が立ち上がる。その後椅子を元に戻してすぐに座り、何故だか知らないが牛乳を注いで飲んでいった。骨でも丈夫にしておくのだろうか

「とっ、とりあえず後は佐々木さんが言ったように神様に頼るしかないんじゃないでしょうか……？」

「……そうするしかないと思う」

「だねえ……」

最終的に神頼みが採用されるのか……まあ、そうするしかないか
6人で祈っている最中、リビングの扉が開いて健太がトイレから帰ってきた。俺たちのこの様子に驚いたのか、初見「え、なににな？ 何が起こったの？」と言っていた。けど

ドアが閉まる音で良く聞こえなかったが、小さく小さく舌打ちをする音が聞こえた気がした

その後全員で神頼みをし、20分後に家を出て学校へ。そして試合の会場へと向かった

会場へと向かう車の中で、部長がある提案を持ちかけてきた。確実に勝利する方法を

俺たちはその提案を受け入れることにした

会場に着いてからどれくらいの時間が流れただろうか……少なくとも

とも1時間は経過した頃かもしれない。俺たち弦巻のメンバーは、次の対戦相手が決まるまで待機をしなくてはならない。なので今はその相手になるかもしれないチームの試合を観戦中。いや、両者とも凄いい試合を送っている。両方とも一般チームなんだけど、一戦目が始まってから……15分は経つただろうか、まだ1人も戦闘不能者が出ていない。戦闘は3カ所で行われてるといふのに、しかし……今観戦をしているのはいいのだけれど、何かを忘れているような気がする。てか忘れてるな、確実に

ふと横の方を確認してみる。そこには観戦ベンチに突っ伏している吉原先輩の姿がある。その周囲ではチームメイトが慰めているのか、虐めているのかわからないけど、周りで何かを話しているのはわかる

再度観戦、両チーム一步も……あ、ここで初めての戦闘不能者が
出た

ふと気になったことが出来たので、部長に尋ねることにした

「部長、この試合での最強選手は？」

部長が身体を前に倒して膝に肘を当てる。そして右手と左手の指を交互に重ねて眉間にしわを寄せる。さて、部長はどう見極めるのだろうか……

「……そうだなあ……アイツだな、あの双剣を使ってるヤツ。反射神経が非常に良すぎて回避と防御への移行が早い。加えて攻撃速度が速い。武器が軽いのか本人の筋肉が凄いのかはわからないが、あのスピードだとこちら側の防御スピードが間に合わないな。2対1じゃ勝てないだろう」

双剣双剣……あ、あの選手か。確か“大俵Warsクラブ”の優

秀選手だっただろうか。20代前半で、その腕はクラブのコーチを上回る実力を持っているとか（琉華・談）。確かに見ているだけでも凄い

「仮に1対1で勝つには？」

俺は今、無茶な質問をしているに違いない。でも部長は答えてくれた

「何とかして相手の隙を突くしかない。例えばの話だ。相手の武器を無力化した瞬間に銃弾を撃ち込むとか、弱点を見つけ出すとか、不意を突くとか。まあ確実なのは無力化だな。もしくは2人がかりで、1人が押さえつけ、もう1人が攻撃、と」
「なるほど……」

とりあえず2人で行動するから問題は無いとして……いや、あるかもしれない。もし2人同時にやられた場合どうするんだ。かなり難しいところだ

「まあ大将やってる訳だから、討ち取るにはそれなりの力が必要だな」

「……ですよねー」

苦笑しながらそう答える。さて、まだどちらと当たるか決まっていない訳だが、今の流れだと確実に上がってくるはずだ。今の内に観察しないと、って、やっと一戦目が終わった

……しかし、本当に何かを忘れていたような気がする

「神崎君！ 君が忘れてるのはさっきの試合の結果だろうー！」

左から聞き覚えのある声が聞こえてきた。部長と共にそちらを向くと、吉原先輩、通称クズが来ていた。最近クズ呼びしてないが

「おお奴隷川、来てたのか」

ああそうだった、奴隷川クズだったな

「神崎君！ さっきまで『吉原先輩』だったのに急に『奴隷川クズ』にしないでくれるかい！？」

「だったら何と呼べば」

「吉原先ば 「クズだな」西宮君！？」

「わかりましたクズ」

「だから僕は 「クズ」だ って西宮君！？」

ああ、もうこの人ダメだ、自分で自分のことを「クズ」呼ばわりしてるよ……相当のマゾっぶりだ

クズが上を向いていた。それはまるで涙を堪えているかの様だった

「で、拓人。何用だ？」

「……あ、ああ、そうだったね。神崎君、君が忘れてるのは3回戦の結果だろう？」

3回戦……3回戦……あ、そうだ。哉町高校との試合の結果がどうなったのを忘れていたんだ！ あまりにもその試合が凄すぎてとりあえず結論として、勝利はした。だから次の試合相手になるであろうチームの戦いを観戦しているんだったな

会場へ向かう車内にて

「一昨日も先生の運転で会場に向かったわけだが、少しだけ違う点がある。なんと光久が車酔いしていない！……まあエルフィがくれた薬のお陰なワケですが

「とりあえず今日も来た教頭は死にかけている。どうでもいいいや、どうしてもよくないか

「そんな中部長が今日の試合に関して話すことがある、と言うので聞くことにした

「えつとだな、誰でも良い。次の試合は俺と代われ」

「……瞬間に全員挙手。なんて野郎共だ！ サボりたいのか！？」

「その様子を見て部長がため息をつき、運転している先生は苦笑していた。まあ無理もない

全員で手を下ろす

「すまん、言い方が間違ったらしい。……じゃあエストラント、俺と代われ」

「えっ！？ わ、わたしですか！？」

「おう。今回はサポート抜きの俺が大将で行く。わかったな？」

「なるほど……じゃあ今回の試合は余裕で勝てるだろうな

「ふと気になったことがあるので部長に聞いてみるとしよう

「部長、交代して欲しい理由はなんですか？」

「決まってるじゃないか神崎。腕が鈍らないようにするためだ」

「ふむふむ

「健太が口を開く

「本音は？」

「拓人を徹底的に潰したいに決まってるからだろう？」

その後部長から悪魔のような笑い声が。ヤバい、完全にこの人悪魔だよ！ 顔は笑ってるけどその笑顔がとてもじゃないけど怖いよ！

「まあ、とりあえず、今回近藤は藤堂と一緒に陣旗護衛に当たれ。佐々木と明智はいつも通り、神崎と鶴の2人は俺と行動。拓人と一騎打ちにするつもりだから周りからの妨害が入らないようにサポ―トを頼む」

『了解』

「エストラントは……」

「はっ、はい！」

「お茶でも飲みながら観戦してくれ」

「は、はい……」

実力は部長の方が上だ。それは先生を含めた8人がそう思っていたでも

まさか、あんな戦いになるとは……

「えっ！？ に、西宮君が試合に出るのかい！？」

「ああそうだ。文句あるか？」

「……いいだろう！ 西宮君が来るというのなら僕も本気で行くしかないみたいだね！！」

ああ、吉原先輩に死亡フラグが。勝てるわけ無いのにそんな事言っちゃアカンだろう、と口に出してつつこみたくなってしまうが、

もしかしたら心を読まれている可能性もあるのでこの辺でやめておく
会場についてから約20分。もうちょっとで試合が始まるので、
VWの装置のある場所へと向かってきた一同。もう哉町のメンバー
は来ていたらしく、付いた頃には武器のセッティングが全部終了し
ていたらしい。ああ、吉原先輩の本気か……多分あの6人は初めて
見るのかもしれない。今までの本気だと思っていたら俺たち同様
驚くかもしれない

「ほう、楽しみだな」

「僕だつて日々君を倒すために努力をしているんだ。その成果を今
日、見せてあげようじゃないか！」

「ま、お前じゃ何年かかっても俺にゃ勝てねえよ」

そしてVWへ移動、2戦目が開始する。1戦目はまさかの遭遇す
ることが無く、健太と光久が陣旗撃破にて勝利した。今回は相手側
のフィールドなので、とりあえず中央で戦おうと言うことになつた
で

「おいおいおい、わざわざ7人で来ることは無いだろ……こっちが
陣旗撃破しちまうじゃねえかよ」

「何を言ってるんだい西宮君？ この6人には僕の実力を見せつけ
ておかないとねー！ そうしないといつまで経っても僕はクズ呼ば
わりされてしまう……」

「ああ、なるほど。じゃあこの試合負けても問題ないか？」

「まさか。僕が君に勝って終わるに決まってるじゃないか！」

「要するに俺とお前が戦っている間に陣旗撃破されて負けても問題
ないか？」

「3人陣旗へ向かうように」

「どっちだ」

戦闘フィールドのほぼ中央で部長とクズがそんなやりとりをしている。ここにいるのは俺、明日香、戦う部長の3人。加えて哉町のメンバー、クズ、2年生2人と1年生1人。クズの言葉で相手のメンバー3人が陣旗の方へと戻っていった

まあ実際の話

「……………」

左にある黒い立方体の上に健太と光久の2人がいる。どうやら頑張つてよじ登つたらしく、そこから2人の戦いを観戦するらしい。というか試合、これでいいのか!?

右にある直方体を見してみる。ああ、やっぱり今戻つてつた3人も2人に気がついてたんだな。あの上から下を見下ろしてる。本当にこれでいいのか!?

「……………」

後ろを見してみる。ああ、やっぱり

「……………もう隠れないで良いんじゃないか……………?」

「……………バレてた」

「さ、さすが真箏くん……………よく気がついたね」

……………ぶつちやけ部長も気付いてた気がする

琉華と望が出てきた後、上にいた計5名が下に降りてくる。その様子に、部長は溜め息をつき、クズは心底驚いていたような顔をしていた

「まあいい。そろそろ始めるからお前らその辺隠れてろ」

部長の言葉に全員が動き、全員が同じ所で観戦することになった。ということは相手も一緒である。うん、今がチャンスだ。やってしま

「ちなみにそこに隠れてる中のメンバーで戦闘不能者が出た場合は、戦闘不能になったメンバーのいるチームの勝利とする」

うん、駄目だ

全員が頷く

「ねえねえ神崎くん」

「へ、あ、はい。なんででしょうか」

前傾姿勢になって観戦していると、上から重みがかかってきた。首だけ動かして見てみると、そこには哉町高校のメンバー、2年生の椎名先輩らしい。とりあえずそののしかかり攻撃をやめていただきたい。背中になんか当たってるのですが
とりあえずその状態で話を聞く

「あのさあ、拓人って、本当に強いワケ？ 私たち見たこと無いからわっかんなくてさあ」

「ああ……同じ学年なのに見たこと無いんですか？」

「そうなんだよ……てつきり今までのが実力だと勘違いしてたみたい。実際の所どうなの？」

夏休み初日の悪夢を思い出す。なんだろう、急に身震いが……

「……なるほど。神崎くんが身震いするほどの実力、と」

「……今までのが全力だと思ってたら、本気で挑まれたときに腰が2秒で抜けますよ……」

「そ、そんな凄かったの……？ でも全国19位……ん。あ、それでも西宮君には敵わないか」

「……だといいんですけどね」

「へ？」

少し気になったことがあった

先程までの会話からして、調子とかはいつもの吉原先輩だ。いつものように相手にされて、いつものように言葉を返し……とにかくいつもの感じだ

ただ

ただ、勝ち気でいたのもいつもと同じ様子。その中に違和感を感じた。毎度ながら自信のあるような口調だけど、今回は目もマジだった。勝利を確信している、そんな感じ。これは俺の気のせいかもしれないけど……多分、本当に力がついている。夏休みの初日以上だ、多分……

仮にあの時のが100%じゃなくて、80%くらいだったとしたら？

……200%、それでも部長には敵わない。けど

「……もしかしたら負けるかもしれない」

「……それはなんで？」

「部長と吉原先輩の力を比べてもその差は圧倒的です。でも、頭の良さでは吉原先輩の方が上、仮に頭脳戦で行くとしたら？」

「それなら拓人が有利……」

「もしかしたら。もしかしたらの話ですよ？」

この予想は当たっているかどうかはわからない。ただ、俺が今思えること、それは

「エクスカリバーの“瞬間反射能力”、これを攻略するかもしれません」

ガキインツ！！

「始まった!？」

「さて部長……仮に攻略されてたらどうしますか……?」

部長は最初から本気で行くのか、エクスカリバーで攻め込んでいた。一方の吉原先輩は2本の小刀。現段階ではまだ互角程度の力しか出していないかもしれない。両者共に攻防を繰り返している。とりあえずスピードでは吉原先輩の方が上だ。武器の軽量からして

「拓人つてあんな武器も持ってたんだ……」

「え、知らなかったんですか?」

上にいる椎名先輩が呟く。周囲にいる哉町メンバー5人もそうなのか、呆然としている。ああ、あの小刀2本にはかなりお世話になった覚えがある。弦巻の女子も啞然としている

「いや、私たちはさ、銃を使ってるどころしか見たことないの。だから近接武器を使ってるのは初めて見るな、って」

「なるほど……とりあえずですね、あの程度じゃないですね」

ガガガガガ！！

吉原先輩による小刀での乱れ付きが入る。もちろんその攻撃はエクスカリバーの能力によって全部が受け止められてしまう。両方も笑顔だ

刀で突くスピードが少し上昇する

「……速い」

「あと少し上がるはずです。……あと、そろそろ2人が距離を取る頃かと」

更にスピードが上昇する。現在出ているのは最高速度、あの速度男子3人がお世話になった。あの速度でも部長は余裕な表情でいる。まあ、武器が武器だからか

吉原先輩が左手を思い切り振り上げる。その攻撃は見事に受け止められ、そのまま小競り合いとなるが、まだ右手の武器が残っている。右手を大きく引いて部長の心臓目がけて突きを入れる。それを左に回避して競り合っていた武器を弾き、2人は距離を取る

「おお、少しはやるようになったじゃないか拓人。とはいえまだまだただけだな」

「ふっ、舐めて貰っちゃ困るね西宮君。僕はまだまだ余裕……さっ！！」

吉原先輩が部長目がけて走り出す。同時に武器変更をして、前にもお世話になったトンファーを取り出す。しかしあのトンファーは特殊性。部長は知っているだろうが、攻撃力、防御力共にかかりのレベルだ

トンファーの形状が変化し、鋭利になる。形状の違う双剣と、トンファーが混ざった武器だ

部長が振り下ろした武器を左の剣で受け止める

「……その武器か」

「そういえば西宮君はこの武器が苦手だったね？」

『そうだったか？ 苦手は克服する物だぞ？』

余っていた右を、腹を目掛けて殴るように動かす。その攻撃を左に流れるように避け、後ろへと回り込んだ。でもあの程度で終わるわけ無い

部長が横に薙ぐ。それを左手の方で受け止められ、2人が動かないくなる

『拓人、今何割だ？』

『それならまずは君が言わないかい？』

『……4割だ』

『なら僕は2割だ』

『……は？』

『一気に8割まで出させて貰うよ』

吉原先輩が取っ手に付いているスイッチを押す。すると正面から収納されていた刃が出てくる。あれがあの武器の最終形……でも、あの程度の武器なら軽く受け流すはず……

その状態のまま右腕を後ろに下げる。部長は右に回避、エクスカリバーを離す。すると反時計回りに回転した吉原先輩が右手の武器で腹部を薙ぐ。それは受け止める。までならいい

更に回転

『なっ！』

急いでバックして回避したが間に合わず、腹部を軽く切られてしまった。服が裂け、そこが赤く血で染まり始める

2人の間に距離が保たれる

『クッククク……いいじゃねえか拓人……この程度で8割じゃ』

『4割』

『はあ!?!』

『……これが僕の』

吉原先輩が武器をその場に投げ捨てる。そして左手に付いているTEMを起動、俺たち3人も、部長も見たことがない武器が左手に顕現される。弓、白く眩しく光る弓。エクスカリバーに劣らない神々しさだった

武器が現れると同時にエルフィが絶叫する

「さっ、サンクチュアリ!?!」

『ええっ!?!?!』

……ああ、鼓膜が痛い

『これが僕の、本気だ』

『な、な、な……』

部長も驚きを隠せない表情をしている

今吉原先輩が手にしている武器、サンクチュアリと呼ばれる弓の武器で、五大武器の1つらしい。どれだけの物かは知らないが、フォーマルハウト同様凄まじい物らしい

弓を構える

『……なっ、なんでお前がそんなモン持ってんだ!! 今までそんな物は持ってなかつ』

『 中学生の時、僕たち7人はどういう存在だった?』

『何を今更……言つまでもないが、お前は持つほどの実力者じゃなかつたはず。何故……』

『まあ知らなくて当然だね。今まで知ってたのは僕1人だけだから』

『……………まさか』

『そう。非公式に、ね。ルートもちゃんと通っている。WW社から直接、余っていた物をくれたのさ』

『……………と言うことは!!』

『“サンクチュアリEX・1”』

『くっ……………』

『それなりに破壊力だつてある。それに今の僕なら君を確実に超えることが出来る。この武器さえあれば、ね……………?』

『お前……………瞬間反射能力の攻略をしたつてのか!?』

『勿論。0コンマ1秒のインターバルの間に攻撃すれば僕の勝ちさ』

『……………ちっ』

弓の弦を引く。その手には1本の大きな矢が握られている

部長が苦虫を噛みつぶしたような表情をする。瞬間反射能力を攻略されたんだ、そりゃああんな反応をする。ヤバい、ピンチだ

『さて、322戦322敗の記録、ここで撃ち抜かせて貰うよ』

『……………』

弓の弦から手が離される。離された矢は部長に向かって飛んでいき

「拡散した!?!」

「無理だ! あの数は避けきれぬ!?!」

「部長!?!」

フォーマルハウトと同様、専用の矢なのかどうかは知らないが、かなりの量の矢に拡散する。ざっとその数は10000発以上、もうこの時点で避けきれない!?! やり過ぎすには全部はじき返すしかないぞ!?!

『ちいつ!!』

部長が武器を横に大きく薙ぐ。同時にその矢、全てが風圧によって吹き飛ばされ、散り散りとなる
なるほど、それが狙いだったのか

『しまっ』

『これで僕の勝ちさあっ!!』

散り散りになった矢の中、吉原先輩が小刀を構えて部長へと詰め寄っていた。0コンマ1秒……その時間を作るための攻撃だったのか
!!

部長の心臓目がけて刀が突かれる

『だが、甘い』

『えっ……?』

ドンッ!!

『がっ!!』

『えっ!?!』

いきなり銃声が聞こえたかと思いきや、吉原先輩の武器を持つ手からは血が流れ出していた。エクスカリバーの形状変化? 違う。
もう片方の手に銃を持っていたのか!!

武器を地面に落として手を押さえている吉原先輩に部長が歩み寄り、銃口を頭に向ける

『く、くそっ……何故だ!!』

#46 一般大会2日目（後書き）

…… 本当に頑張ったつもりです

次回適当に4回戦目入れて、後は学校です

あと2話でChapter6終了予定です

新しい作品の方も是非よろしくお願いします。まだまだ少ないですが
どちらかがgdgdになりながらも頑張って書きます

ではまた次回orz

4 7 再戦へ向けて

Warsの一般大会2日目が終了して次の日。9月13日、弦巻高校内1年4組窓側最後尾席。天気、晴天、無風、湿度高し。気温も高し

そして暑苦しい。理由は語るまでもない

改めて9月13日の2時間目である数学という忌々しき時間。黒板の前では黒スーツ姿で授業をしている我が1年4組担任兼数学教師の梅花哲也氏が……あ、黒板正面の健太が今にも倒れそうな感じに首が振れている。いや、あれ確実に死ぬな。黒板の目の前だし真横でノートを纏めているエルフィは……うん、死にそうでも何でもないな。普通に授業を聞いてて普通にノート纏めてるな

一方俺の机の上に置いてある開かれたノートは、ページが変わってからまだ1文字も書いていない。本当に真っ白、あるとしたら線だけ。落書きはしない方だ。汚いし

「ちよつと神崎さん、ノート纏めないんですか？」

「あゝ……後で写させて貰う」

こんなクソ暑い中ノートを纏める気にはどうしてもならない。だから後で涼しい場所で写させて貰う。これが俺のやり方……結局伸びない。1学期に習った範囲なんてほとんど覚えていない

授業中だというのに大きく欠伸をする。幸い先生はこちらを見ていなかったらしく、黒板に文字を書き連ねていた。うわ、なんだあの数式は……わからんぞ

なんとなくペンを持つが、ノートを纏めるのも面倒なのですぐに机の上に戻してしまう。ペン回しをしたらしたですぐに落としそうだ。それで音を立てて指名されるのも嫌だし。そもそも授業を受けたくない、という愚考をする

誰にも聞き取られないように小さく溜め息をつき、そしてすぐ真横にある窓……の外を見つめる。まだツバメがいるらしく、一番手前に見える家に3羽くらい止まっていた。親子かもしれない

雲一つ無い快晴の空、雲が流れてこないほどの無風状態、体育の授業で野球をやっているのか、グラウンドから聞こえてくる掛け声、本当に僅かながらも色づき始めている校門の外の木、大空を飛んでいく鳥たち……なんて穏やかな光景だろうか

……なんだろう、穏やかすぎて怖い

別に台風が来るとかそういう予報は全く出ていない。そろそろ3つくらい同時に接近してくるかもしれないが、まだ警報とか予報とか……出ていない。いや、違う

嵐の前の静けさとか誰かが言ったりするが、別にそういう自然で言う嵐って訳ではない。かといって宇宙人が侵略してくるとか、そういう地球レベル、もしくは国家レベル、地方レベルの大規模な災害でもない。というかそれは大袈裟すぎか

実際問題、起きた時点でおかしいな、とは思っていたのかもしれない

朝、誰も来ない

登校時、誰もいない

教室到着時、誰もいない

HR直前、誰も一言も発しない

授業中、指名される以外黒板とチョークの音しか聞こえてこない
(さっきのは除く)

穏やかだ……実に穏やかすぎる……。こういうのを期待していた

なんていうのは本心の何処かにはあったのかもしれない。けどこれは静かすぎる。静かすぎて怖い
これから何か起こるのだろうか？ 起こったとしてどのようなことが、誰に、どうして？
わからない
けど

多分、今日の内に何かが起こる。このクラスが……震撼するような
そんな……気がする

気付かれないように教室を見渡す。みんなが授業に集中しているのか、ペンの音と黒板の音しか聞こえない。しかもダウンしているのが誰もいない（健太除く）

…… 1年4組って、こんなに静かなクラスだったっけ？

「 どうだい？ 思い出したかな神崎君？」
「 ああ……相当惨い殺られ方してましたね」

現在3回戦を終え、次の相手が決まる試合を観戦中の一同。3回戦、哉町高校との試合の結果を思い出し、目の前にいる相当惨い殺られ方をした人に声を掛けられる。横にいる部長は声を殺して笑っていた。そうとう楽しかったみたいだ

ちなみに部長はあの後、相当惨い殺られ方をした人に100発くらい銃弾を撃ち込んでいた気がする。しかも悪魔のような表情で、笑いながら

んでもって周囲には血が飛び散り、穴だらけになり、観戦者数名

が吐き気を催す等の事故が起こったらしい。ちなみに琉華と望、哉町メンバー3名が吐きかけていた

Warsのルールとしては、戦闘不能の判断がされるまで相手の攻撃は可と言うことで、戦闘不能の判定が出るまで部長は攻撃を加えていた。それを過ぎると反則負けになってしまふからだ。とはいえ……あれは流石にやりすぎだ、と本部から言われたけど、特に罰は無いらしい。不安があるとしたらダメージを受けた本人へのトラウマ、精神状態等々、色々ある

まあそれを何年も受け続けてきた相当惨い殺られ方をした人なら問題はないだろう

「待つんだ神崎君。なんだか僕の名前が“相当惨い殺られ方をした人”になっているのは気のせいかな？」

「あ、クズ。いたんですか？」

……今の言葉に相当応えたらしく、上を向いて涙を流していた

とりあえず相当惨い殺られ方をした人は放置しておいて、試合の観戦を 終わりがあ……思い出している間に結構進んでたんだなあ……。結果がディスプレイに投影される。どうやらと俺が考えた通り、大儀Warsクラブが勝利していた。要するに今回の試合の最強選手のいるチームだ

とりあえず考察。あれは1対1では確実に勝てない。2対1でも微妙

それだけの實力があると見ても良いだろう

「さてと、結果もわかったことだし……気合い入れてやってこいお前ら」

部長が席を立ち上がって7人に向かって言い放つ。部長の横に座

つっていた先生は笑みを浮かべ、教頭は……寝るなコノヤロー

「そうだな……よし。神崎、相談があるんだが」

「へ？」

部長がこちらに歩み寄ってくる。なんだか今までに見たことのないような……いや、あるかもしれないけどないような笑顔で（表現崩壊）。部長が俺の右肩にポン、と左手を乗せる。そしてポケットの中を漁りだして何かを取り出し、俺の目の前で何かを掴んだ右手を開いてきた。もちろんみんながその手に乗っている物を凝視している

「おい西宮……それ……」

先生は何かを知っているようで、怯えている。そんな感じで部長の名前を呼んでいた

その声に部長が笑顔で先生を見る

「まあまあ落ち着け梅花……次の試合、面白い事になるぜ……ククク……」

ヤバい。非常にヤバい。今俺は目の前にいる悪魔に右肩を掴まれている……そして悪魔の道具を差し出されているみたいだ……ヤバい。俺、死ぬのか……っ!?

「大将と遭遇した場合はこれを装填して発射するように」

「……はい」

手の平に置かれていた物を受け取る。今の言葉を聞く限りこれは銃弾の様だ。しかし……

面白くなるとはどういう事だろうか？

4 試合目が始まる

その結果　　の前に、現在どのような状況下にあるかを確認しておきたい

1 戦目、弦巻フィールド。（何故か）望の陣旗撃破によって弦巻 Win

2 戦目、相手フィールド。大将撃破によって相手の Win
そして延長戦、（何故か）俺と明日香は敵将と対峙している。威圧感ばねーです

とりあえず2対1。こちらが有利に見えるが、相手の戦闘力は俺と明日香を足しても足りないくらいだろう。この試合でも部長が出ていれば……

武器共有で望が貸してくれた刀を取り出す。ちなみに銃は使われているらしい。銃弾足りるのか？

「行くぞ真筆！」

「ああ！」

「2対1か……厳しいか……？」

明日香と同時に敵へと向かって駆けだし、一緒のスピードで接近する。その間に相手は何かを呟いていたが、聞き取れることは出来ず、先程の試合でも使っていた双剣を取り出す。スピード、力、テクニクは負けるかもしれないが、数押しで行くしかない！

ほんの僅かに明日香の方が早かったのか、下から刀を振り上げ、敵を切り上げようとする。勿論相手もそんな簡単な攻撃で倒せるわ

け無いので左手の剣で受け止められる。でも今は2対1、そつちだけに気を取られているわけでもない

明日香と競っている間に反対側から縦に刀を切り込む。しかし簡単に残りの剣で止められてしまい、2人で動きを止める状態になる。動かない、動けない

「この程度で倒せる……とか思った訳じゃないよな？」

「当然だっ！！」

競り合っていた明日香が刀を持ったままその場で1回転する。咄嗟に刀が消えてバランスを崩したのか、明日香のいる方向へと身体が傾き、俺が持っている刀の刃から剣が離れてゆく。そして

「喰らえっ！！」

回転した明日香が1周したらしく、刀が敵へと向かっていく。相手のバランスは崩れているし、このままいけば首を切断できる！

刃が相手へと接近していく

「甘い」

そう呟いた相手は、俺と競り合っていた剣を持ち直してそれで刀を受け止めた。しかし正直な話こうなることは俺も明日香も予測は出来ていた。この状態なら相手の背中に隙が生じるため、今背中側にいる俺が攻撃すれば勝てる！しかしこの先、まだ相手は仕掛けてくるはずだ

相手の背中目がけて刀を振り下ろす。勿論こんな程度で終わる相手ではないことくらいわかる

「せいっ！！」

相手は地面に付いていた左足を強く蹴ってその場で回転する。回転というのは空中でだ

背中目がけて斬りつけた刀が受け止められる。しかしこれで相手は完全に無防備。地面に身体の何処も接触していなければ、両手は武器で封じ込まれている。これを待っていた！

2人で攻撃を中断して大きく刀を振りかぶる。2人分の威力ならいくら双剣でも受けきれぬわけがない！

「これで終わりだっ！！」

2人で同時に刀を振り下ろす。勝った

「相手の行動パターンは裏の裏を読むべし」

「！！！！？」

ガンッ！！

切り下ろしている最中に相手が軽く微笑んだかと思うと、2人の攻撃を受け止められた。先程まで使っていた双剣ではない

「た、盾……」

「しかもAT社の新型モデル……“ダイヤモンド”！？」

うむ、AT社は中々いいネーミングセンスを……って違う！いくら地球上に存在する鉱石で一番硬いからってそれはないだろ！ってそれも違う！！

早くこの下にいる敵にトドメを

「真筆！ 急いでこの場から離れろ！！」

「え　？」

ズシャアッ！！

明日香が大声で叫んだその直後、足に大きな痛みが走った。斬りつけられた……？　斬りつけられている！？　どうして！？　敵は防御態勢に入っているハズじゃ！？

左足の脛から下を完全に両断されて立つことが出来なくなったので、その場に膝をつく。明日香は距離を取って回避したらしいが、僅かに掠ったらしく同じく脛から血が流れていた

盾の中にいた相手が姿を現す。手には双剣が握られていて、こちらへ向かって歩いてきた。目の前で見下ろすように立つ

「さて、終わりだな」

「ちっ……」

慌てて銃を取り出し、相手に向ける。明日香は動けないらしくその場に座り込んでいた

「悪あがきか……まあいい」

ドンッ！

1発銃弾を放つ。しかし先程の盾で防御され、弾かれた銃弾が俺の肩でバウンドし、血が溜まった場所へと落下する。どうにかできれば出血多量で戦闘不能になる前にケリをつけられるが……

『大将と遭遇した場合はこれを装填して発射するように』
「……そういえば」

相手に銃弾を連発しながら部長の言葉を思い出す。左ポケットにはさつき部長から貰った銃弾らしきものが入っていた。それを取り出す

改めてみるとこれは確かに銃弾だ。ただこの弾は何かが不思議だ。なんていうか……まず見た目が違う。普通の銃弾なら銅の色とかだけど、これは真っ白だ。何か特殊な銃弾なのだろうか？

攻撃をなお防いでいる敵を見る。駄目だ。傷一つつかない銃弾を見る。……賭けてみよう、無駄だとは思っけど賭けてみよう！ すぐ使わなかった俺が悪いんだけど！

攻撃中の僅かなタイミングで装填をする。ちゃんと装填できるらしく、いつでも発射できるようになった

その弾が発射されるまであと20発。それまで相手が攻撃をしなければ……

「そろそろ諦める！ 無駄なことくらいわかってるだろ!？」

「……後ろを忘れてるとかそう言うのは無いですよね？」

「当然だ」

残り、4発

「もしかしたらそろそろ後ろから攻撃来るかもしれないよ？」

3発

「別にそれが問題になる訳じゃないからな。それはともかく諦めるって」

2発

「いやいや。これが時間稼ぎだ、って言ったらどうします？」

1発

「ハツタリか？ それは無駄だと」

発射！！

ドンツ、ガスツ、ドサツ

「……………はい？」

発射、貫通、転倒

別に説明を効果音の説明を求めたとかそういう訳じゃない。今どうしてこうなったのかの説明を求めたいところだ

とりあえず相手の頭を今の銃弾が貫通したらしい。そして盾の上方には銃弾サイズの小さな穴が開いている。要するにこれを貫通したらしい。さっきの銃弾が

……………何故？ これが特殊な銃弾だったのはわかったけど、何故？もしかしたら知っているであろう明日香も知らなかった。そして部長も人差し指で口を塞いで答えてはくれなかった

4回戦目、よくわからないまま突破だ！

「決勝の相手が高阪高校？」

「はい……………さっき職員室に授業の用意を取りに行ったとき部長とす

れ違ったんですけど、その時に全員に伝えておくように言われて……」

「4時間目始まる直前だったから言えなかった、とな」
「そういう事ですね」

地獄のような午前の授業を耐え抜き昼休み。今頃になって風が吹き始め、クラスのみんなも離すようになってきた。本当にさっきまでの静けさはなんだったんだろうな、って思えて仕方がない。と
「うか思い出すと笑えてくる」

ちなみに今何処にいるかというところ、1年4組教室内。窓側最後尾（要するに俺の席）。もちろん横には4時間目の授業の道具を片付けているエルフィが。ちなみに国語、古文の分野をやっている。とりあえずアレだ、助動詞がわからない。あと動詞の活用形とか机を横に向けてエルフィの机にくつつける。そして前方にある八幡の席を引っ張ってきてさらにジョイント。これで3つ繋がった。ちなみに八幡は1組で食べている

俺とエルフィが自分の席へと座り、それぞれ弁当箱を取り出す。本来ならあと1人待つわけだが、アレを待っていると時間がかかりそうな気もするので悪いけど先にいただくでしょう

「アレとは誰だアレとは」

と、ここで待っていたメンバーが俺の後ろに立っていたらしく、声を掛けられる。いつの間にか後ろに回り込んだんだコイツは

「健太、結構早かったんじゃないか？」

「……何先生に呼び出されてたんですか？」

「ん？ あ……ただの短いお説教だった」

……コイツの事だ。多分寝ていたに違いない

健太の顔を見てみると、凶星の様な表情をしていた。授業中に寝るな授業中に。だからテストで赤点ギリギリになるんだよ

健太が弁当を片手に八幡の席へと座る。今日はこの3人で弁当を食べることになってしまった。理由はかくかくしかじか(2組、授業延長。5組、体育)。3人でそれぞれの弁当箱を開く。俺は全面焼きそばの大惨事(塩味)。健太はまたもチャーハン弁当。エルフイは普通に色々が入った弁当。こう見るとエルフイの弁当が見た目的に一番綺麗だ。多分味も良いんだろう

3人で箸を掴む

「じゃあ食べますか」

健太の号令で食べ始める

あれ？ いや、ちょっと待てよ？

……何か、大切なことを忘れてないか？

とりあえずその大切な事を思い出しながら黙々と弁当を食べる。というか何故だ？ 何故教室内がここまで静かなんだ……っ！！もしかしてまだ隣は授業中だからなのか！？ 違う！ これは前触れか！？ そんな事が起こるのか！？

「おい、大丈夫か真箏」

「なんだか頭の中がぐちゃぐちゃになつてるとるみたいですけど……」

……脳内がグチャグチャになつてのことすらわかるのかコイツらとりあえず「問題ない」と伝えて食事を再開する。あれ！……なんだっけ！……本当に大切なことだったような……

1口焼きそばを食べる。良く噛んで呑み込む。ソース味派の俺と

しては、この塩味はしょっぱすぎる。後で母さんに塩を少なめにするよう頼まないとな

しかし……誰も、一言も、何も、発しない。静かすぎる

1人の女子がこちらに向かって歩いてきた。どうやら俺とエルフイが気はついたらしく、健太はまだ気付いていない様子。何故なら健太の真後ろから歩いてきているからだ。はて……どうしたのだからか

「ん？ 2人ともどうかした？」

俺とエルフイが健太の後方を見ていることに気がついたのか、そんな風に尋ねてきた。まだ気がついていないらしく、完全に疑問系だ
健太の後ろを歩いてきた女子 1年4組委員長、笹原さんが健太の真後ろで立ち止まる

「いや、なんでもないですけど……どうしたんですか笹
「けーんーたあー」

その光景にクラス全員の呼吸が止まった

「……笹……原さん……？」

「……健太？」

「おい……綾香？」

1年4組委員長、笹原綾香が

1年4組副委員長兼友人兼部活仲間、佐々木健太に

後ろから抱きついた

クラス全員がこちらに注目し、言葉を発さずに驚いたような顔で見ている。そして目の前にいる俺とエルフィの2人も同じような状況に。そして健太も驚いたような顔をしている

……デレ……たのか？

「いや……真筈、これは……」

「へ？」

「おい綾香」

健太が席を立ち上がり、笹原さんを引きはがすように腕を掴んで

放　え？

ヤンデレ？

「あのな……呆けてる場合じゃないっつーに」

初めて健太につっこまれた気がする

「なあにー健太ー？　一緒にお弁当食べよ？」

「あ、ああ……」

健太はその異常(?)な状態になった笹原さんを一旦離し、先程まで座っていた椅子に座る。そして隣から椅子を引っ張ってきて座らせようとする。しかし

「アタシこころ」

「はいストープ」

いや、ストップするべきなのはお前だ健太！ 何笹原さんの……えっと、あれだ……何笹原さんの尻を触っておるのだね！？ いや、もはや驚づかみにしてねーかオイ！？ 学校内で痴漢が出たよ！ 堂々と目の前でやってるよ！ こんな完全におかしいよ！！ 意味がわからないよ！！

「いや、あのな真筆。状況が状況なのでお許しただきたい」
「……まあ仕方ないのか。後で男子全員に殺されるがよい」

……状況を整理しよう。とりあえず1つに纏めると、笹原さんが健太の上に座ろうとした。ただそれだけの話。そして健太がそれを止めようと笹原さんの尻を揉んだと

「健太はお尻が好きなの……？」
「待つんだ綾香。もはや質問が学校内で聞いてはいけないレベルに到達してる。というより僕は胸の方が」
「いや待て健太。お前もその学校内で聞いてはいけないレベルに到達した質問に答えるなボケ」

……コイツの脳内の9割はエロで出来ている。間違いない

「でもアタシ……胸小さい」
「ストップストップ！！ そうするのは今はナシ！ 弁当食うんだろ弁当を！！」

「だからアタシはここに」
「こっちに座ろうか？」
「……ケチ」

いや、もうこれはデレたレベルだろ。絶対そうだろ

というか教室内でそうやってイチャイチャするなって。さっきまで驚いてた表情のクラスメイトが今や嫉妬と軽蔑の眼差しでこっちを見てるから。というかいつから付き合ってるのだね

笹原さんを椅子に座らせる。しかしその人は健太の腕に巻き付いて頭をスリスリしていた。……どこまで行っただんだこの2人

「さてと……真筆、エルぼん。今からやることは出来れば見なかったことにしていただきたい」

「へ？」

ちよつと待て。いきなり犯罪臭がするんだが

「綾香、僕の目を見て」

「え……駄目だよ……見つめられない……」

もはややることがおかしい気がする。そんな事をしてどうするといふのだ

健太が無理矢理笹原さんの顔を自分の方へと向け、目をジッと見つめる

「……なるほど」

「え？」

健太が笹原さんの顔を解放する。ヤバい、笹原さんの顔が凄い真っ赤だ。熱でもあるんじゃないかーってくらいに真っ赤だ。パプリカ並に真っ赤だ

「真筆、とりあえず今はそういう表現をやめて欲しい」

……ごめんなさい

「はあ……こりゃ自己暗示だな」

「自己……」

「暗示ですか？」

「え？　なんでアタシがそんな　」

笹原さんは何かを言い終わる直前に机に倒れ込んだ。え、気絶？

一体何が……

「悪いな綾香。ちょっと寝てて欲しい」

「健太……一体何が？」

どうやら気絶させたのは健太らしく、笹原さんの左手首を掴んでいた。よくわからないが、気絶をさせたようだ。ところで自己暗示ってのは……

「……綾香にも何かあったみたいだな」

「え？」

健太がいつになく真面目な顔になり、語り出した

「多分誰かが綾香に何かを言ったんだと思う。それで色々あって……」

「佐々木さんをずっと好きだった、付き合っている、と思いこんで暗示を、ですか？」

「うん。それで今の状況が出来る訳なんだけど……」

顎に手を当てて何かを考え始める健太。ヤバい、今までこんな表情の健太って見たことがあったか？　ありえないくらいに真面目に見えるぞ……ん？

いや、違う……え？

「ま、何かを吹き込んだ人物の見当は大方付いてる」

「あ、ああ……そうか」

「……後はソイツをマジで殺すだけか」

「……！！？」

健太つて……あんな顔をする人間だったか？ 今、完全に本気の日だったぞ……？ 要するに本気で殺すつて……

気付けばいつもの表情に戻っていた。俺とエルフィの顔を見て疑問詞を浮かべている

……横で食べていたクラスメイトも驚いた顔をしている。一部の女子は涙を浮かべていた

「……ど、どうかした2人とも……？」

「いや、なんでも……」

とりあえず誤魔化しておく。健太は余計に疑問詞を浮かべていた。自分で気付いていなかったのだろうか？

「それにしてもさ真筈。さっき忘れた大切な事つて？」

……大切なこと？

……

……

……

「ああ……エルフィから聞いてくれ。決勝の相手が決まったらしい」

「へえ……。で、何処？」

「え、えつと……『高阪高校』、瀧先輩がいる学校ですね」

なんでこんな事になったんだろう

なんで綾香があんなになったんだろう

なんで僕がこうなっているんだろう

……なんで決勝の相手が高阪高校なんだろう

綾香が壊れたのはアイツが原因だとは思う

だったら何故？ アイツは綾香に何を吹き込んだ？ 綾香は何を

吹き込まれた？

なんで？ どうして？

なんで壊れるような事を吹き込む必要があった？

壊したかったのか？ 奪いたかったのか？

もはや過ぎたことなのに？ 終わったことなのに？

まだ根に持つてるのか？

というか

誰だ『周りがどうなろうとオレには関係ない』って言った凡骨は

僕だ。オレだ

今じゃすっごい関係あることだよ

周囲は大切だよ。なんせ副委員長やってるくらいだし

いや、そこはどつでもいいよ

……

アイツには一発死んで貰うしか無いか。試合で
あの日の決着、つけてやるとするか

……

傷つけたのは僕か、ハハ……

……今回の決勝、絶対に負けられるか
都北大会では負けたけどよ。ここまで来たらみんな優勝だな
……今関係ないけど

個人的な戦いにはなるとは思うけど

勝つ

優勝もする

そして

アイツをぶつ殺す

西堂中学、笹原健太

あの日の決着を、付けてやるよ

なあ、お前もそんな風に思ってるだろ？ 刹那

#47 再戦へ向けて（後書き）

あれ……どこかで聞き覚えのある台詞（？）が……

はい

gdgdgdですね

やっと出ましたね、名前

1度出てます、その子

はい

次話、Chapter6 最終話（予定）です

すいーゆるねくすとペーずい

#48 絆と言葉(前書き)

……大変遅くなりました。理由は後書きで

48 絆と言葉

「よし、全員揃ってるな」

9月14日金曜日午前10時頃。大会にしては始まるのが遅いんじゃないかなーって時間に大会の会場へ集合したwars部一同。いや、全員あの地獄のような車でこっちに来たんだから揃ってるだろ。光久はエルフィから貰った薬でなんとか生きている

今日が最終日であり決勝戦という理由だからなのか、少しばかり観客が多く見える気がする。大半は仕事をこっそり抜け出してきた大人か近所の人たちだろう。遠くからだけど数名知り合いがいる感じがする。下手したら日本に帰ってきている姉貴もいるかもしれないぞこれは……そうでないことを祈るしかない

色々な理由込みで溜め息をつき、腕組みをしながら会場を見つめる部長に話しかける

「……部長、今回の試合代わってくださいよ」

「何故だ神崎。何故俺がそんなことしなくちゃならない」

まあ普通の返事だ。とりあえず理由を伝えないと駄目だな

「今回の試合は決勝ですよ？」

「ああそうだな。要するにお前は俺に出場させて優勝をしたいと？」

……確かにそういう理由もあるんだが……一番の理由はそんなことではない

「……相手が瀧先輩じゃないですか」

一昨日の試合から得られた考察としては、部長は吉原先輩と望んで戦った。つまり今日の試合、瀧先輩と戦いたがるハズ。って考えたけど、まあ部長もそこまで残酷な人じゃないか。……吐き気してきた

「ああ……神崎、本来なら俺が出てアイツをメッタメタにしてやりたいところだ」

だったら何故だろう。というかメッタメタって……瀧先輩ですら吉原先輩と同じような目に遭わせようと考えていたのかこの人は……鬼だ、凶鬼だ、鬼畜がいる……

溜め息混じりに明後日の方向を見つめる部長。上っている太陽が眩しく見える

「実は4回戦の後、2ヶ月の出場停止令を発せられたんだ……」
「……」

俺たちの知らない裏側でそんな事が起こっていたとは……いや、確かに運営のやったことは正しいよ。あんな放送出来ないような姿にまでメッタメタにしたわけだから……

どれくらい凄かったかというと、放送にモザイクがかかるレベルではない。音声等々含めたら放送禁止になるレベルのグロさだ。とにかくグロい。周囲が赤しかなかった

「ま、それはいいんだが」

明後日の方向を見ていた部長がこちらを振り向き、俺の奥へと視線を向ける。その視線はほぼジト目同然、呆れているような表情だ。

一応当の本人以外は先に控え室へと向かっている。俺も恐る恐る後ろを振り向いてみる。そこには困っているような表情をしている男子が1人、その男子の腕を掴んで肩の辺りで頬をスリスリしている女子が1人、計二人、同クラスメンバー、1人、学校にいるはずの人物

「……あれはなんだ」

「……説明すると非常に長くなる気がするんで試合終わってからにしてくださいませんか」

困ったような表情をしている健太、スリスリしている笹原さん。笹原さんがおかしくなったのは昨日か……本当に一体何が？

いや、そこを考えるのはまだ早いのか？ というかそこは今どうでもいい。まず尋ねることを尋ねないといけない気がするが、もう尋ねてある。何故登校日だということにここにいるんだ優等生……俺たちは部活だからというものの、これはサボリそのものではないか。ちなみにここに到着したのは10分くらい前。笹原さんが登場したのは8分前くらいだ。多分先に来ていたのだろう。学校をサボって

「健太あゝ」

「とりあえず離れような綾香？」

……なんだろう、このモヤモヤ感は

部長が俺の1歩先に立った

「とりあえずそのバカップル」

「誰がバカップルっすか誰が」

「アタシたちじゃないの？」

……なんだろう、この敗北感

「……間違えた。佐々木、早く離れて控え室に向かえ」

「了解つす。……綾香？」

「やだ」

「……」

……なんだろう、この殺意

部長が額に手を当てて首を横に振り、健太の事を睨み付けた。その表情に全員で固まる

「おい佐々木、彼女が出来たからってあまり調子に乗るなよ？」

「あのですね……」

話が少々長くなってもいいから事情説明しておくべきだったかもしれない。変に誤解されたなこれは

健太が小さく溜め息をつき、笹原さんの首に右手を回す。……今日もやるわけですか佐々木さん

「はにゆう……」

一瞬だけ健太の顔がマジになったかと思うと、手に力を加えたのかどうかは知らないが笹原さんがその場で倒れ込んだ。もちろん健太が支えているので地面には足しか付いていない

健太が笹原さんのことをおんぶする

「それじゃ部長、行ってきます。ほら真箏、行くぞ」

「あ、ああ……行ってきます」

「おう、ここで負けたら死刑決定だからな」

……負けられない戦いがすぐ目の前にあるらしい

笹原さんを背負った健太の横に並んで控え室に　いや少し違う。
こっちは救護室のある方向だ。なるほど、健太はそこで

「なにを考えてるんだね真箏。僕はそこまで変態じゃないぞ？」
「悪い悪い」

救護室までの道のりを割愛、笹原さんをベッドに寝かせた後俺と健太の2人で控え室へと向かう。多分みんなと高阪のみんなが待っているだろう。早く行かないといけないけど……

「健太、原因ってわかった？」
「……………」

無言で首を縦に傾ける。なんだかその原因の詳細を聞く勇氣は俺には無くなっていった
健太がこちらを振り向く

「……………後で、話すよ」
「……………ああ」

2人で遅れて選手控え室の扉を開いた

「……………佐々木、お前今なんて言った？」

「言葉のままだ。頼む鶴、マジで」

「あんな……………もしかしてお前、そういう趣味でもあるのか？」

「えっと……………」

「まあお前の性格からしてそれはあり得んだろうが……………理由はあるんだな」

「……はい、その通りです」

「……」

「……鶴？」

「……お前にも色々理由があるのはわかった。だからといって私はそれを聞いたりはしない。だから」

「鶴……」

「断る」

「なんでやねん!!」

なんつー会話をしてるんだこの2人は

選手控え室に入ってから大体2分が経った頃かもしれない。健太と明日香の2人が今回の試合のポジションについて話し合っている。明日香が会話に混ざってくる時点で大体予想は付いていたが、まさか試合中に？ ちよつとやめていただきたい

この2人はどのような事を話し合っているかというところ

「頼む鶴!! 今回の試合は僕とポジションチェンジをしてください!!」

おおつ、深々と土下座を……健太も男よのう

……ま、ざつとそんな所らしい。とりあえず俺には男子同士のそういう趣味なんてあるわけがない。深々と土下座までしてどうするっていうんだコイツは……

「佐々木……」

ここまでさせて断るのだろうか、明日香は。なんだかこの光景を見ているとちよつとだけ悲しくなってくるんだが

「……あの、神崎さん……もしかして佐々木さんってそういう趣味

をお持ちなんでしょっか……」

「また1人増えるってことかぁ……」

「……油断ならない」

「何言ってるんだお前ら」

pill

まるでタイミングを計ったかのようにポケットの中の携帯が鳴る（マナーモードなので振動）。どうやらメール……穹か。確認してみる

『健太くんも真』

パタン

……どうやってこの場の状況を知ったんだアイツは……なんで俺の周りにはこいつも超能力者が多いんだ………そういえば9月に入ってから穹と1度も会っていないような……

どうでもよさそうな事を思いながら2人のやり取りに目を向ける

「……どうしても交代したいのか？」

明日香の言葉に健太が無言で頷いた。その反応に明日香が小さく溜め息をついて他所を見た

「わかった。どうしてもと言うなら今回だけだ。その代わり後で色々とお願いが」

「……健太？」

明日香が言葉を言い切る寸前、この空間をもの凄い殺気が支配し

た。正直苦しい。発信源は健太からだ。マジ切れの表情をしながら明日香の奥を見ている

『……………』

そこでは高阪高校の哀川君が健太の事を見ていた。そして何事も無かったかのように反対を向き、元の場所へと戻っていった。明日香の足は若干震えているような……………

健太から殺気が消え去り、元の表情に戻る

「……………ゴメン。ちょっとビビらせちゃったかな……………それじゃあ鶴。光久とよろしく」
「あ、ああ……………」

笑顔でそう言ったかと思うと、今度は俺の方へと歩いてきた。そして肩に手を乗せて「じゃ、よろしく頼むぜ相棒」と言ってきた。明日香はその場にへばり込んでしまった。相当効いたのかもしれない……………ひよつとしなくても、原因はあの哀川君にあるのかもしれない。知り合いだったのか……………

「ああ。頼むぜ相棒」

Wars 一般大会、決勝戦の始まりだ

今日の決勝戦は大会側の趣向によって大きな変則戦で行われる
それはいつだかもあったような気がするが いや、あった。本

来なら2戦行つて両方取つた方が勝利（もしくは延長を取つた方）する。それが今回は前みたいに1戦だけでやることになってしまった。何を考えているんだ大会運営よ。かなり不利になるじゃないか頭の中で愚痴を考えながら健太とその場で立つ。そろそろ試合開始の合図があるはずだ

「……真箏」

「……ん？」

フィールド、ビルに囲まれた十字路の中心で健太が喋る。愛を叫んでなどいない

「……僕はさ」

これも趣向なのか、風が吹く。健太がゆっくりと口を開く

「僕はさ、僕がさ、今回の元凶なのかもしれない」

「……は？」

ビーーーーッ！！

試合開始の合図がVWに響き渡つた。でもその言葉に動けない俺と、動かない健太がいる

再び小さな風が吹く。まだ戦闘の音は聞こえてこないなので戦いは何処でも始まっていないだろう

健太がゆっくりとこちらを見る。その目はさっき見せた表情とはまるで逆、暖かな視線を向けてきた

「……僕がやつたんだ」

「え……？」

「海行つたときに見たる、綾香の傷。あれ、僕がつけた物なんだよ」

健太が言っている言葉の意味が全くわからない。健太が笹原さんに傷をつけた？ あり得ない。そんな話があるわけ

「不良やってたんだよ」

「は？」

いきなり話が変わって頭がついていかない

健太が空を見上げる。別に何も無い、ただただVW内の作られた青空が広がっている。鳥が飛んでいるわけでも……あれ、なんで飛んでないんだ？

「……………僕も部長みたいに嫌な過去がある。それを……………真箏」

空を見上げていた健太がゆっくりとこちらを見る

「まずはお前に聞いて貰いたい」

「……………」

正直、あの時と同じように躊躇った。部長の話聞いたときと同様に。でもその時と違うことは少しだけある。健太の目が真剣だ。部長の用に俺に覚悟があるのかどうかを尋ねているわけでもなく、健太はただただ聞いて貰いたい。言い方が悪いが、とにかくそんな感じの顔をしている。でも試合中の今聞くわけには

「……………哀川刹那は僕の幼馴染みだ」

「……………」

「綾香も幼馴染み」

返事を返す前に言葉が返ってきた

「……1年くらい前、2月頃だったかもしれないな」

2月14日。世間ではバレンタインデーとかそんな感じのイベントが行われている中だった。いつも通り適当に授業サボって、いつも通りに屋上いて、いつも通り帰る。そのつもりでいた

その日だけは……その日からはいつも通りにならなかった

その日はいつもより寒くて、早く帰ろうと考えていた。早く帰って暖まるうと

『健太!!』

なんて考えながら昇降口出たら刹那がいた。刹那は小さい頃からの幼馴染みでさ、今までずっと同じように歩んできて、不良になっても友達やつてくれていた。もちろん僕も

その時の刹那の表情がいつになく殺気立ってて僕は何だろうと思ってた。どうせ負ける喧嘩をするのか、とそういう風に考えていたけど、いつも穏やかな刹那が自分から売るわけがない。疑問に思っながらいつの間にか手を引かれていつの間にか体育館の裏にいた

『なんだよ刹那』

『用が無いなら帰るぞ』

その時の刹那は怒ったような表情でこっちを見ていたけど、別に

どうとも思わなかったからそう返事をしておいた

『……………帰るぞ』

『……………健太あ……………』

『あ？』

『お前……………綾香の事好きやろ？』

『……………は？』

正直意味がわからなかった。当時は

『なんでそうなるんだよ』

『なんでもなにも……………幼馴染みとしてそう思っただけや……………』

『あのな……………綾香は友人だ。幼馴染みっつー友人だ。それ以上でもそれ以下でもない』

『……………』

『帰るぞ？』

『嘘こけ』

『本当だ』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………じゃ、帰るぞ刹那』

『待て！！』

『……………あ？』

『健太！ お前、本当は綾香の事好きなんやろ！？ なあ、そんなんやろ！？』

『何度も言わせんな。オレは別にどうも思っていない。友達だ友達』

『テメエ……………どうも思っていないってどういう意味や！ 答えてみい

！』

『はあ……………だからどうも思っていないのは好きとかそういう事に

「聞いてだ。OK?」

「……」
「だったらよ、お前も綾香の事好きなんだろう?」

「……それは……」
「……オレの事なんて気にしなけりゃいいじゃねえか。お前がしたいようにすれば」

「健太、気付いてないかもしれんけどな、綾香はお前が好きなんや」
「……は?」

「今言った通りや。この前本人の口からそう聞いたわ。ちゃんとな」
「そんな訳ないだろ? オレはこの前綾香本人にお前が好きだって聞いたんだからよ」

「な」
「まあ綾香がどう思おうとオレはオレだ。じゃあ帰るな」

「……なあ健太」
「ん?」

「……もしもの話や。アイツがお前に告白したら……どうする?」
「別にどうもしないさ」

「……は?」
「だから、別にどうも」
「黙れこのアホがああああっ!!」

その瞬間、刹那の右の拳が頬に入った。僕は別にそこから動くこともなく、手の動きに合わせて首が動くだけだった

「……何すんだ」

「はあ……はあ……撤回せえ」
「はあ!?!」

「今言った言葉を撤回しろ言うてるんやこのアホがあっ!!」
「……あ?」

「撤回しろ言うてるんや! 何が『どうもしない』や! お前は人

か！？ そんな人じゃないわ！！』

『くっ……言わせておけば……くたばりやがれこのカス野郎！！』

『チツ……こうなったらやるしかあらへんか……』

『ああそつだな……久々にやるうじゃねえかよ……今回は血、見せるぞ』

『言ってる……』

その後僕と刹那で殴り合いが始まった。久々の喧嘩だったけど別に衰えてなどいなかった

『ぐっ……』

でも少し変わっていたことがあった。刹那の喧嘩が上手くなっている気がした

『うあっ……』

しばらく殴り合いが続いた。本気で殴り合ってたからどれくらいやっていたかなんて覚えていない。周りにも気が行っていなかっただからこそ

『もうやめてよ2人共おおっ！！』

……体育館の影から綾香が飛び出してきた。僕と刹那の間に入り込むように、手を広げて

『『綾香っ！？』』

刹那はギリギリの所で拳を地面に叩き付けてそれを回避していた。けど

僕の方は思い切り綾香の腹を、本気で、殴りつけた

「きゃああっ!!」

殴られた衝撃で綾香の身体は大きく吹き飛んで近くにあった木に激突した。その時に当たったところが悪かったのか、綾香の左の腹部が大きく裂けて制服を血の赤で染め上げていった

「あ、綾香っ!!」

「だ、大丈夫か!？」

僕と刹那は慌てて綾香に駆け寄り、刹那が上半身を抱えて座り込んだ。綾香は気絶してしまっただけで、目を閉じて首を下に項垂れていた。刹那の制服にも血が少し付く

「えの……いや……」

「……え？」

「お前のせいや健太!! お前が……お前があんなこと言うからこんな事になったんや!!」

「……」

「……」

「……周りがどうなろうとオレには関係ない」

「……はあ!?! この期に及んでそんなこと言うんかお前は!!」

「……刹那、後のことはお前に全部任せた」

「おい健太!!」

「……その日から僕たち3人の関係は壊れた」

「……」

返す言葉が見つからない……

「3月に入ってから僕はこんな感じの人間になった。もう誰とも喧嘩はしない、誰も傷つけない、そう思ってたけど Wars はどうしてもやりたかったんだろうね。……矛盾してるよね」

「……」
「高校が上がってからは刹那とも離れて、誰とも関わらずに過ごせるのかな、と思ってた。けど綾香は前と同じように接してきた。学校ではあんな感じだったけど、学校以外では普通に、ね……」

健太は今も尚遠くを見ながら喋り続ける。駄目だ、敵が来たらそっちにしゅうちゅうできないかもしれない

「なんだかんだで今までやって来たけど……この試合終わったら、しばらく学校休もうと思ってる」

「……は？」

一瞬呼吸が詰まった。健太は言葉を続ける

「場合によっちゃ……たいが」

健太に最悪の言葉を言わせる前に頬を思い切り殴りつけた。本気で、吹き飛ばすほどの

頬を押さえながら驚いたような表情でこちらを見る

「おい健太……いくらなんでもそれはないだろこの野郎……」

「……ゴメン」

頬を押さえたまま健太がゆっくりと立ち上がり、こちらへと向か

ってきた

「もしそんなことになったら……寂しいじゃないか」

「……ゴメン真箏。でも」

「あのな、確かにお前は笹原さんのことを傷つけたよ。だからといって笹原さんが壊れた原因は一体なんだ？ 多分それは違う。とは言え俺も全くわかんねえ。けど……けどな！！ そんな理由で退学なんつー言葉出すな健太！！ 次言いかけたら……言いかけたら……また思い切りブン殴ってやる！！」

「真箏……」

やっべ、なんか恥ずかしい台詞言ってるよ俺……顔から火が出そうな台詞だコレ。しかも相手は男子だぞコレ。こんな恥ずかしい台詞言ったの明日香の時以来……いや、部長の時以来か？

健太が目を閉じて鼻で笑う。そして

「あはははははー！！」

「……わ、笑うな……無意識に言ってた俺が恥ずかしい……」

大きな声を出して笑い出した。それもVW全体に響いてもいいんじゃないかってくらいの

「いつやー……確かに真箏の言うとおりだわ。これじゃあ変わった意味ねーな……。……スマン真箏、僕どうかしてたよ」

「わ、わかればいい、わかれば……」

わかってくれたようで何よりだ。安堵の息を漏らしてしまう。試合中なのに

試合中だからこそ

『あ、あのおく……神崎さん、佐々木さん……お話は終わりました……か?』

通信が入ってきた。しかも気まずそうに

「え、ちよ、ま……え、エルファイ!?!」

『あ、す、すすすいません!! 敵が近づいてきていることを連絡しようかなーと回線繋いでみたらお取り込み中だったみたいで……べ、べべ別に神崎さんがクサイ台詞を言っていた所なんて見たり聞いたりなんてしてませんよ!? わわ、わたしは……えっと……その……え〜っと……なんだか神崎さんがちよっと格好いい台詞言ってるなーって関心しちゃっただけなんですーっ!!』

「要するに見てたし聞いていたとな!?!」

『すいませんでした!!!』

ヤバい!! 今の会話をエルファイに聞かれていたのか!! ヤバい!! 本当に恥ずかしさで死にそうだ!! 誰かこの恥ずかしさから解放して!! 本当に死ぬるコレは!!

「いや、それはいいんだけどさ……エルぼん、敵の情報くれるかな……」

『えっ!? ああつ、すいませんでした!! えっと……60メートル先に1人、こちらに……』

ピシユウンッ!!

エルファイが全てを言い切る前に、俺と健太の間を銃弾が通り過ぎた。音的に琉華と同じような武器かもしれない……確か高阪高校でスナイパーって言ったら……

「…………刹那か」

健太が銃弾の飛んできた方向をゆっくりと見る。そこには地上でライフルを構えた哀川刹那君の姿がある。なるほど…………琉華と違って行動派って感じが…………

2人で武器を構える。が

「……………」

「…………健太？」

首を横に振りながら手を俺の前に運んでくる。まるで戦わなくていいと言っているかのように、若干微笑みながら

「…………ここは…………僕1人にやらせてほしいんだ真箒」

その微笑んでいる間の瞳は、何故か本気になっている感じの目だった。なるほど…………それなら仕方がないかもしれない

武器を閉まって半歩下がる

「任せたぜ健太」

「任された」

…………これは任せるとかそういうのじゃないかもしれないな。これは…………なんていうんだ？ 決めてこいとかなそんな感じか？ とりあえず…………決めてこい健太！！

武器を構えながら健太が哀川君に近づいていく。どうやら哀川君は攻撃してこない…………いや、武器が変わった？ 健太と同じような…………

…………手甲系の武器か

「あ、そうだ真箒」

「ん？」

数メートル先で健太が振り返る

「お前さ、やっぱりオトすの上手いわ」

「……はい？」

言っている意味がサツパリわからない。何をオトすって言うんだ。鳥か？ 球か？ 目薬か？

駄目だ、疑問詞だらけだコンチクショー

さて……健太が戦いに行ってしまった。俺は一体どうしようと……援護は却下、かといって何処かに行くのもあれだし……敵が来るのを見ながら待つか？ いや、時間がかかるな。ん……

『神崎さん！ もう1人そちらに接近してきました！！』

「なるほど……じゃあ俺はそっちを相手しますか！！」

「よう刹那。都北大会の時以来か？」

「せやな。久しぶりやな健太」

「少し痩せたか？」

「そういってお前こそ」

……試合中になんて会話してるんだろう僕たち……多分武器を持つてる時点で穏やかではない。状況を知らない人たちから見たら僕はあちらから接近してきている刹那に接近している。歩いて、ゆっくりと

「なんつーか……こんな状況が久しぶりだな」

「せやな……おい健太」

「ん？」

「……あん時の言葉は……撤回せえへんのか？」

「そうだなあ……あの時の言葉よりはまだマシな返事が出来るかもね」

「……………」

「……それはどうでもいいんだよ……おい刹那。お前、綾香に何か変な事吹き込んだりしてねえだろうな？」

「は？ オレが綾香に何を吹き込め言っんや。そんなことするはず無いやろ？」

「……なるほど」

「なんでそんなこと聞くんや？」

「ああ……綾香がブチ壊れちまってなあ……お前が何か吹き込んだからこんなことになったんじゃねえのかーって思ってたんだよ」

「はあ？」

「……身に覚えが無いか……それともシラを切るつもりか……どっちでもいい。とりあえずだ。あの時の続き……終わらせるぞ」

(なるほど……あのメールの事が……?)

「……刹那？」

「……なんでもあらへんわ。あん時の続きかあ……ええやろ。やったるわ」

「……そうこなくっちゃな……」

「いつでもOKやで……」

「行くぞ刹那あー!!」

「やるでえ健太あー!!」

「……………まさか瀧先輩だったとは……夏休みの初日以来ですか？」

今日の前には槍を構えた敵大将こと、瀧先輩が立っている。これ

はチャンスなのか、最悪なのか、よくわからなくなってきた。とりあえず勝ち目はほとんど……確実に言っているほどないかもしれない。そんな状況だ

「そうだね神崎君。てっきり雄太を投入するかと思ったけど……」

「……出場停止令出されたんですよ……」

「あぁ……」

どうやら理由は思いつくらしい

とりあえず両手に武器を構え、いつでも戦闘に入れるように体勢を作る。同時に先輩の警戒が強まった気がした。先輩はこちらにゆつくりだけど近づいてきている

「じゃあさ、あれは？」

「男には色々あるんですよ。先輩にだってそれくらいわかるでしょ」

「……なんとなく」

「一応お願いしておきますが、あちらには絶対手を出さないでくださいよ？」

「状況からして手を出せない」

それはそれでありがたい。あちらはもう戦闘が始まったみたいで、2人が本気の殴り合い……喧嘩を試合中に行っている

さて……こっちはどうしたものか……

「とりあえず……こっちは本気で行くけど……覚悟は出来てるよな神崎君？」

「ええ大丈夫ですとも……あれから少しはレベルアップしてるんですから……」

先輩は槍を上で数回転させてからこちらへと構える。こちらも銃

の準備は出来ている

「……行くぞ神崎君。その上達した力、味合わせて貰うとする」
「望むところですよ!!」

ダッ!!

俺が言い切ると同時に先輩が槍を手にこちらへと駆けだしてきた。スピードは普通、穹のスピードほどではない。実力は……確か8位だったか？ 部長以下としても吉原先輩以上だ。それに都北大会では手を抜いて貰ったし、実力を見たのは夏休みの初日か……さて、どうしたものか

こちらへ向かってくる先輩に銃を構えて数発撃つが、予想通り撃ち落とされる。距離はまだある。多分銃での戦闘は分がかなり悪いだろうな……かといってまだ刀に慣れた訳でもないし……とりあえず様子見で……!!

ドンッ！ ドンッ！

距離を取るために離れながら両手の銃を撃つ。撃っては撃ち落とされるの繰り返しが続くが、やはり隙など生じないか……どうやって攻めるとするか

「同じような攻撃ばかりじゃつまらないよ!!」
「とは言え俺の武器は銃しか無いんですよ!!」

軽く嘘をついておいた。多分先輩は俺が望と武器共有をして刀を持っていてなんて知らないはずだろう。部長が言わない限り、見えない限り

「……マジか」

あ、信じたみたい。でも接近止まらねー……!

くっそ……隙が生まれればいいんだけど……そう簡単には見せてくれないよなあ……せめてこの場に明日香でも誰でもいいからいてくれれば……

「逃げてるだけじゃ終わらないよー!!」

「重々承知ですよー!!」

……こっちはこっちで不利すぎる……健太は大丈夫か……?

「……やるようになったじゃねえか刹那……」

「そっちは相変わらずやな……まるで衰えてへんわ……」

「ま、warsで鍛えてたからな」

「なるほどな……こっちも基本スナイパーやってるけど、地味にトレーニング積んどるんや。こういう時の為にな」

「……藤堂より働くねえ」

「藤堂……弦巻のスナイパーやったか。ま、お前らには負けてられへんからなあ。こっちも優勝かかってるんや」

「それはこっちもだよー!!」

「そっやってなあー!!」

……あっちはあっちで元気そうじゃないか

「危なっ!?!」

「余所見は駄目でしょ神崎君……?」

「ちっ……!!」

健太たちの方を見ていると顔に向かって槍の突きが入り、それをギリギリで回避。少し掠れたのか髪の毛がはらりと落ち、頬からは血が細く流れ始めた

慌てずに急いで距離を取る。どうやら攻撃をしないでくれているみたいだ

「さてと……どこまで保つのかな神崎君？」

「どこまで、ですか……俺が勝つまでですか？」

「おうおう言ってくれるねえ……あまり舐めた口聞くなよ後輩」

「正直口が滑りました先輩」

再び猛スピードで再接近。さっきと変わらないスピードだが、これくらいなら俺の足で余裕で逃げられるはずだ。でも逃げたら逃げたで格好悪いだろ……応戦しようじゃないか！！

けど……

「だが、逃げるー！！」

「ちよ、まつ……！！ さっきと変わらんー！！」

「……ま、こっちもこっちなりに考えが」

あるわけ無いじゃないですか。あつたとしてもほぼ無意味だよ
さっきと同じように離れながら銃弾を撃ち込んでみるもやはり全
て撃ち落とされる。駄目だ！！ まるで勝ち目がない！！ 諦め……
ない！！ なんとしても隙を生ませてやる！！

「同じ攻撃ばかりじゃつまないぞ神崎君！！」

「銃しかないのにどうしろと！？」

「……根性？」

「根性じゃ人は倒せないですよ！！」

とりあえず銃しかないというのは嘘だ。さて……銃だけでどうやって倒せと言うんだ……

「……………」

「……はあ……はあ……」

「どうした刹那。息が上がってるぞ?」

「そっちこそ……その傷でよう戦えるわ……」

「ま、これくらいどうってことね。……………」

「……健太?」

「いや、なんでもない」

「?」

「……………なんやねん」

「……………」

「……行くで」

「待った」

「……………なんや?」

「……本当に……何も知らないのか…………?」

「……………」

「……知ってるんだな」

「……ああ。もし本当に綾香が壊れた言うなら原因はオレやる。多分な」

「……………」

「……どんな風に……壊れたんや」

「……それは後で教えてやる。何を吹き込んだんだ?」

「吹き込んでなんかおらへん。ただ……アイツが誰の事が好きなのか聞いただけや」

「それだけ…………?」

「ああ。それ以外はなんも言っておらへん。……………そうか」

「……よし、これでやっと迷いが消えた」
「は？」

「……今からお前を全力でブン殴る」

「……………」

「行くぞ」

「来いや」

「ほっ、ほっ、ほっ！！」

「せいっ、はっ、たっ！！」

なんだこの光景は……正直ギリギリすぎる

最悪な事に離れている最中転んでしまい、何とか立て直したものの追いつかれてしまつて槍で突かれる始末。しかも更に最悪なことに銃を足下に落としてしまった。回収できなければ反撃も出来ない。今が絶好のチャンスじゃないのかこれは！？

「ほらほらどうした！！ まさか武器がそれしかないって訳じゃないよな！？」

「いや、その……武器共有してるから今使われてて無いんですよ！！」

「……俺を恨むな、神を恨め」

「格好いい台詞だけどちょっと酷いかも！！」

そこは「神を恨むな、俺を恨め」の方が格好 危ないっつ！！

これだとあと数分も保たないぞ！！

先輩が槍を持ち替えて足下をなぎ払う。それを見切つてジャンプして回避するが、今ので足下にあつた銃が吹き飛ばされてしまった。ヤバい！！ 非常にヤバい！！ そついえばここまでよく保ってるな俺！！

再び突ぎが始まる。どうやって抜け出せばいいんだ……！！

「真箏殿！！ 下がられよ！！」

「えっ、光久！？」

「上か！！」

ドドドドド！！

光久の声がしたかと思うと上から銃弾が降り注いだ。さっきまで自分の場所に（なんとか回避できた）。その数秒後、目の前にポーンと一ターゲル長髪男子が

「むじっ！！」

不時着した。この光景をどこかで……俺が体験したに違いない。不時着しちゃった光久がゆっくりと立ち上がる。頭から血が流れ出ていた。無理するな、光久

「無事か真箏殿！！」

「……俺はお前の頭が大丈夫かどうか知りたい」

「この程度の傷」

「いや、外傷じゃなくてな……」

「????」

……まあいいか。応援が来てくれた訳だし 応援？

「おい光久、明日香はどうした？」

「明日香殿なら『私は一人で問題ない。真箏が心配だから明智が行ってきてくれ』と言って陣旗撃破に向かわれた」

……アホだ

心の中に留めておくべき言葉だこれは。1人でどうにかなるかつの

「さてと……急いで明日香の所に戻れと言いたいところだが……状況が状況だ」

「承知。拙者は問題ない」

「2対1か……それでも」

先輩が武器を仕舞う。そして左手のTEMPMが光ったかと思うと、右手に長い武器を持っていた。刃が2枚、反対側にある両鎌だ。……1度見たことがあるような無いような……（#17参照）。無いな

「俺には及ばない」

「そんなの……」

「やってみなければわからぬ」

「じゃあ……証明して貰おうか後輩たち!!」

ダツ!!

言い切ると同時に光久と先輩が走り出す。あちらの武器は両鎌、こちらの武器は2本の刀と2丁の銃。武器の数と人数ならこちらが上だがテクニクは合計でもあちらが上。どう頑張っても厳しい相手だが、俺たちはそれ以上の実力を持つであろう先生を倒している!!（とはいえ3人で）ここは気合いと根性でなんとかするしかない!!

武器と武器がぶつかるあう音がこちらに響いてくる。どうやらあの鎌の攻撃を受け止めるには片方の腕だけじゃ足りないらしく、両方の刀で武器を止めている。しかしそれでも足りないみたいで徐々に迫られているのがここからでもわかる気がする

「援護するぞ光久!!」
「も、申し訳ない!!」

少し前に出て片方の銃を先輩に構える。そして光久に当たらないように引き金を

ドンツ!! カチツ、カチツ……

1発の銃弾が先輩の頬を掠ったかと思うと、その後銃口から乾いた音が聞こえてきた。不発!? このタイミングでか……違う!! 弾切れか!! 妙に軽い!!

「畜生!!」

慌ててもう片方の銃を向ける。しかし

カチツ!!

先程の銃と同じく弾が出ない。こっちも弾切れか……!! もう1つは……駄目だ!! 望が使ってるのか出てこない!! どうすれば!!

「ぐっ!!」

「光久!!」

どうこうしている内に光久がこちらに向かって思い切り吹き飛ばされ、俺の横を通過して道路の真ん中へと倒れ込んだ。そうかさっきの不時着で地味にダメージ受けてら。なんて無理をする……!!

「余所見してる暇は無いだろ!!」
「しまっ」

反応すること既に遅し。もの凄いスピードで接近されていたのか、左腕を大きく切られてしまった。完全に切断された訳ではないのでそこから血が流れ出し、服を赤く染め上げていく。それ以上の切り返しが無かったので急いで距離を取る。腕を伝ってきた血が地面に落下して血痕を作った

「さっきまでの威勢は何処に行った後輩たちよ!! 俺を倒せるならやってみるがいい!!」

……瀧先輩ってあんな台詞言う人だったっけ……って違うだろ!!
赤い刃の部分に付いた血で更に赤くなった鎌。その長い取っ手の部分を自分の肩に乗せる先輩。描写を見れば悪魔に見える。部長ほどではないが。刃の先端から血の雫が落ちる

「ま、真箏殿……」
「光久……?」

フラフラになった光久が両手に刀を持って横に並ぶ。並んだかと思つと武器を閉まつてその場に片膝を付き、息を荒げ始めた

「ん、大丈夫か?」

……試合中だというのに心配してくれるだなんて……優しい先輩だよ本当に

とりあえず光久の様子からしてこれを作戦だとは思えない。ほら、今油断している先輩を攻撃するなんて絶対考えるわけがない。呼吸

が本当に苦しそうだ

「……すまぬ真箏殿。やはりこの試合に勝つにはあれを使うか……」

「左手ストープ。止めるの大変だから使おうとしない!!」

「え、何。その眼帯の下に何かあんの!？」

お願いだから目を輝かせないでください先輩!! 使ったら使つたで止めるの大変なんですからね!？ ほぼ同じ実力者の新垣先輩ですら止められなかつたんですからね!？

そして光久も懇願するようにこっちを見つめない!!

「まあ冗談だ」

「……頼むから試合中に冗談はよしてくれ」

「……期待して損した」

お願いですから期待はしないでいて欲しかったです

「だが少し休めた!!」

瞬間、光久が再度武器を両手に先輩目がけて走り出した。なるほど、今の変な会話を使って休んだとな？ 相手が悪かったら意味が無かつたろうに……鉄音が響く

しかし……こちらの戦局は変わらない。むしろどうやって変えろと言っただ……

……健太も早く決めてこいよ

「やて……」

光久だけに戦わせるのもあれだ。望に連絡入れて銃を貰って援護

に入らないと……

「……くっ」

「……なかなかしぶといじゃないの刹那……」

「それはお互い様や……」

距離を取り合って互いに息を乱す僕たち。なんだか長い時間が経った気がするけど本当は短い時間なのかもしれない。もう2人揃って損傷が大きくなり始めている。僕なんて血がダラダラだ。刹那もだけど

拳を強く握る。握力が落ちてきたかもしれない

さっきまでの会話から考えた結果、綾香がおかしくなった原因は刹那が作ったとみておかしくない。さっき真箏に言ったことと矛盾してるなーって考えたけどその考えは先程捨てた。刹那の言葉を聞いて

……

「なあ刹那」

「なんや」

「今更だけどさ……」

なんとなくあの日の出来事が脳裏に浮かんだ。綾香を殴ってから僕は逃げるようにその場を去った。それからなんだか3人気まずくなって……関係を壊した。今も亀裂は入っている。こう仲良さそうに話しているけれど
なんていうか……

「あの日の事、謝る」

なんていうか……謝りたくなつた

「……は？」

ま、そう返事するのも無理ないよな
頭を下げた再び上げる

「お前がさ、綾香のことをどう思ってるか聞いてきて僕はどうも思
つてないって答えたる？ その事について謝りたい。それで……」

新たな答えを、僕は導き出した
いや、新しくなんか無い

ずっと、ずっとずっと前から。本当はその時も思ってた。思つて
たよ

でも不良やつてるのにそんな事言うのは恥ずかしかった。だから
心に留めておいた

こう考えると最初からそう言えば早かったんじゃないか、つて思
つたけど……なんか言えなかつた
けど

今なら僕は言う。このタイミングで
今更の謝罪だけ……

刹那は許してくれるかね？

「僕は……2人の事が大好きだ」

「……はい？」

言っちゃったよ……言葉にすると恥ずかしー……
今僕の顔はどんなんだろう

「おま、ちよ……どういう意味や」

「言葉のまんま、そのままの意味。僕は綾香も刹那も大好きだ」

「……………」

「刹那？」

なんだか肩が震えている様に見える。そう見えたかと思うとすぐに顔を上げ

「ざけんなこの野郎っ！！」

こちらに向かって走ってきて、右ストレートを放ってきた。それをなんとか腕で防御する。勢いが良かったのか、そのまま後ろに数メートル飛ばされてしまった。確かに痛い

「何……今更言うてるんや……冗談も大概にせえ！！ お前はどうも思ってたへのやる！？ ただ機嫌取りたくてそう嘘ついてるだけなんやる！？ なぁ健太！！ お前の本音を、今ここで……言うてみいこのバカ野郎があ！！」

……なんだか最後の言葉に脳内のスイッチがオンになる音が聞こえた気がした。そうか……バカ野郎か。確かに僕は言いたいことを言えなかったただのバカ野郎だ。でもなあ……どうも刹那にだけは言われたくないね、その言葉

「バカはお前だコンチクショー！！」

「ああん！？」

思い切り、拳を固めた。それを見ていたのか、刹那も拳を固めていた

「いいか刹那！！ 今から俺は本気でお前の事をブン殴る！！ だ
から刹那！！ お前も…… 100%…… いや、300%の力でかか
つてこい！！」

「……ええやる！！ そつちがそう言うんならお前の気持ちを拳で
聞いたるわ！！ 行くで健太！！ お前のその気持ち、教えてみい
！！」

「行くぞ！！」

2人で駆けだした

「くっそ……保つか光久！？」

「む……そろそろ……厳しいかもしれぬ！！」

なーんだろこの小競り合い…… 1歩も動かねー

多分これで5分ぐらいは経過しているはずだ。競り合ってるのは
もちろん光久と先輩。俺は何をしているかと言うと、光久に休んで
言われたのでお言葉に…… 今更だけど駄目だろ俺！！ 少しは手
伝えよ！！と、言いたいところですが…… まさかの弾切れ。望は何
に使ったんですか？

だったら武器共有の刀があるだろう？ いいや、最悪なことに長
時間持つことができねーです。損傷が大きすぎて

「そろそろ諦めたらどうですかぁ…… 光久くん」

…… 灌先輩ってあんな挑発的な表情を作る人だったっけ？ 部長
並みにウザい。けど音はいい人だ。部長以上に

(……しかし、これからどうしようと…… 打つ手はないし……)

そう思いながらポケットに手を　ん？　なんだこれ……レシート？　ああ、朝買ったプリンのおれか。財布にしまうの忘れたのか……やけにゴツゴツする。開いてみるとそこには2発の銃弾が

「……………なんで？」

どうも銃弾をくるめた覚えはない。あつてたまるか。でも……これはチャンス……でもない。あの小競り合いの状態でも銃弾は軽々と回避されてしまう。攻撃できても隙をつけないと……

念のため装填

「ぐっ！！」

とうとう光久も力尽きたらしく、俺の元まで吹き飛ばされてきて一緒になってその場に倒れ込む。しまった！　今の衝撃で腕をかなり痛めた！！　それはどうでもいい！！　先輩が迫ってきてる！！

「さてと……そろそろ終わりにしよう」

「大丈夫か光久！？」

「も、問題はない……が、動けぬ……」

やばいなこの状況……どう回避しろってんだ……

「　　終わりだ！！」

先輩の武器が振り下ろされる。思わず目を閉じてしまったが、目の前で鉄の音が響き、耳が痛くなってしまふ。恐る恐る目を開いてみると、そこには必死な表情で武器を受け止める光久の姿が。圧力が下にかかって俺が凄い痛い

「くくく……いつまで持つかな……?」

……この距離で銃を撃つても回避されるのか……?

ドンッ!!

「無駄な悪あがきを……諦めろ!!」

「ぐつ……!!」

顔に向けて撃つた銃弾は呆気なく回避され、それが引き金となつたのかより圧力をかけられた。やばい……これ以上は俺も光久も保たない……!!

ここで……終わるか……っ!!

段々と僕たちの距離は狭まっていく

互いに走っているからそれは早く感じられる

右手に拳を作りながら、力を加えながら

「行くで健太!!」

「行くぞ刹那!!」

互いに声を掛け合う

よし

覚悟は出来た

あの時に言えなかった言葉を、今、伝える

「もっかい……言ってみい!!」

今、伝えるんだ!!

「僕は……!!」

刹那の拳が顔面目がけて飛んでくる。それを顔を左に避けて回避、そして懐へと潜り込む

「オレは……!!」

驚いたような表情で下を目だけで見る刹那。僕は固めた拳を刹那の腹部目がけて繰り出す

「オレは……2人の事が好きだあああああつ!!!!!!」

「……」

ドゴッ……!

放った右手が刹那の腹にクリーンヒットし、身体がくの字に折れ曲がった。そして勢いが止まらない攻撃はそのまま身体を遠くへ吹き飛ばす。そして

ドガアンッ!!

「刹那!？」

一瞬先輩の武器の圧力が弱まった。先輩が見た方向には砂煙が上がついて、そこには……健太に吹き飛ばされたのか知らないが、哀川君がビルにめり込んでいた

……ナイスだ、健太

「あ……」

最後の銃弾が入った銃口を、先輩の額に突きつけた

「余所見は厳禁ですよ、先輩？」

「……一本取られたなこれは」

俺がそう言うのと先輩は呆れたように笑顔を作った。そして

ドンッ！！

放った銃弾が額を貫通した

つまりますところ……弦巻高校 wars 部は、大会初めての優勝を記録した！！

「いやあ……いい戦いするじゃねえか男子ども！！ 思わず目が飛び出そうになったぞ！！」

RWに戻って来るなり俺と光久は部長に肩をバンバン叩かれている。いや待て。男子って言っても1人足りない状態で言うな

健太は諸事情で今この場にはいない。表彰式が始まるまでに戻ってこいとは言っているから問題はない。とりあえず部長、肩が痛いんですが

「あのな瀧……銃口を突きつけられても諦めるなどれだけ言えば……」

……何故か瀧先輩は弦巻の顧問に色々と言われていた。妙に首が
項垂れている

「優勝……したんだな」

「……まだ目が覚めてないらしい」

「いや望……一応現実だからね？」

「いえ、でもビックリですよ……」

女子4人は固まって信じられないという感じの顔を浮かべていた。
いや、実際に優勝したんだよ俺たちはさ。現実見ようぜ現実を

「しっかし……お前も中々クサイ台詞言ってくれるじゃねえの神崎

！！」

「え！？ 聞いてたんですか!？」

ちょっと待て!! 何故部長がその事を知っている!？ 部長は
あの場所にはいなかったはず……ていうかいること自体があり得ん
!! 何故だ!! 何故その事を……まさか健太か!？

「いや、観客席で見てたんだからわかるっつーの」

「そっぴや試合中だったー!!」

そっぴだよ……試合中なんだから見られてるわけだよ……やっべ、
逃げ出したいわ

「後でちゃんとデータ化してやるから安心しておけ!!」

「嬉しくないですから!!」

別に見たくも聞きたくもない!! あんなの忘れない気分だよ

ンチクショー！！

とりあえず溜め息をつく。優勝したのになんだこの気持ちは……嬉しいはずなのに悲しいぞ？

「ま、それはどうでもいいんだが……」

どうでもよくない。おれにとってはどうでもよくない。ひじょうによくない。せかいがほうかいしてもどうでもよくないことだ。たのむ、おれをころしてくれ

「……佐々木はどうしたんだ　？」

華麗にスルーされた！！　読心術使われると思ったけどスルーされた！！　それはそれで悲しい！！

……まあいい。健太か……　試合の様子を見てたならどうしてるくらいはわかるはずだけど……　まさか見てなかったとか？　あり得ないよな。もしかして行方を知りたいだけだろうか？

健太は今、救護室にいる。幼馴染み、2人と一緒に

「ん……」

「あ」

「起きたか……」

救護室のベッドの横にある椅子に僕と刹那は座っていた。なんだか綾香の寝顔をずっと見ていた気がする。けど、その本人もやつとの事でお目覚め。まあ僕が気絶させたただけだけど。上半身を起こすと、左手で目を擦っていた。そしてその寝ぼけ眼で僕の事を見る。刹那は反対側だ

「あれ……おはよおけんたあ……」
「……………」

挨拶されたけど敢えて返事はしなかった。もちろん理由はある。
色々と

「けんたあ……おはよお〜」

多分この声のトーンの時点で刹那も感じているだろう。綾香のその異変に。驚いたのか、すこしビクリした表情に変わっていた
それでも一応返事はしない

「……………けんた？」

「……………綾香、後ろを見て欲しい」

「え？ 後ろ」

後ろを見た瞬間に綾香の表情が固まった。刹那の姿を見たからである。誰も言葉を発しない、気まずい空気が数秒流れる。沈黙を破ったのは綾香だった

「なんで……………刹那がいるのよ……………」

あ、いつもの綾香に戻った

「なんで、か……………今日が対戦日だったからさ」

「久しぶりやな綾香……………」

「う、うん……………久しぶり……………」

なんだかその挨拶はぎこちなく、まるで2人は初対面の様な感じ

の空気を発していた

僕は刹那の横に移動して本題に入ろうとした

「さてと……綾香。お前、何があった？」

「へ？」

「なんで僕にあんなデレデレするようになったのかを聞いてる。さ、話してみ？」

「……………」

その場に沈黙が走る。どうやら綾香は刹那の姿を見た瞬間に元に戻ったらしく、いつものような口調に戻った。なるほど……自己暗示は完全じゃなかったんだな

「ただ……刹那にどっちが好きかを聞かれて……それで收拾つかなくなって……………」

「はいオツケー」

その質問に混乱して暗示をかけたのか……全く。なんだろう。前から思ってたけどこの2人、どこかが駄目なのかもしれない

「ご、ゴメン健太……アタシが悪かったんだよね。アタシが迷惑かけたから2人の仲が……………」

言い切らせる前に綾香の頬を平手で叩いた。パチンツ、と綺麗な音が救護室内に響き、刹那は驚いたような表情を、綾香も叩かれた場所を押さえながらこちらを見た。泣き目で

「……………健太？」

「ああ……………謝るのは僕だ。言いたいことを素直に言えなかった……………僕が悪かったんだ……………」

「ちょ、何を急に笑って……」

「いや、悪いわ健太……まさかお前がそんなアホな考え……ぶふっ
!」

「刹那!!」

「やっぱり健太……バカだわ……」

「綾香も……」

なんだろう……慣れてるけど、慣れてるんだけど……今回のバカは非常に重いぞ……?

しばらく2人は笑い続け、数分後、空間に落ち着きが戻ってくる

「まあそれはいいんだけどさ」

「へ?」

「結局のところ……綾香はどうしたい?」

「あ……」

正直今の綾香にこの質問は重すぎると思う。精神状態等々から答えるのは至難だろう。でも僕は今それを尋ねている。何処かに本音を聞きたいのかな、ってき気持ちがあるのかもしれない。今の自分の顔はどうなっているのだろう

綾香は無言のままだ

「えっと……無理には」

「アタシは……」

「……」

「アタシは……このままがいい」

その綾香の返答に刹那と一緒に目を閉じた。これで……OKだなでも……僕には僕なりの考えがある。関係? 別に崩れる訳もないだろうけど……なんだか試してみたくなった。この関係はどう続

くのかを。個人的に

綾香を立ち上がらせて僕たち2人も立ち上がる

「でもさ」

「え？」

僕と刹那の間にいる綾香の肩を軽く押す。それは力に従い、身体が刹那の方向へと向かっていき、やがてはくっつき合う

「僕はお前たちが付き合ってもいいんじゃないかなー、って気がするんだよ」

「……はい？」

さてと……逃げる準備は整ったぞ

「実は僕さ……この関係より大切な物が出来たんだよ」

「な……!!」

「な、何よそれ!？」

「ん、聞きたい？ それはさ」

Wars部、かな

「……」

おおう、いい表情だぞ2人とも。思わず写真に納めたいじゃないかでもその表情は段々と怒りの表情に変わっていき

「ふざけんな健太!!」

「そつよ!!…ふざけないで!!」

「おっと僕は真面目だぞ」

少しずつ2人から距離を取っていく。これでいつでも逃げられる
!!!
これから面白くなること祈りながら笑みを浮かべる。2人は怒った
感じだけだ

「健太!!!」

「ちよつと!!!」

「悔しかったらお前らでどうにかしてみろ。ま、僕は難攻不落だ
がな!!!」

「待て健太!!!」

「待ちなさい!!!」

「表彰式もあるし断る!!!」

そのまま救護室から脱出、2人も追いかけてきた。なんだろう…
…追いかけてこでもしてるみたいだ

ちなみにあの言葉は本気も本気、大本気だ。全く…真箏の野郎
は男さえオトせる能力をお持ちで？ この代金は高くつくぞ？

2人に追いかけられながらみんなのいる場所へと向かう

……さてと、学校戻ったらラーメン屋で打ち上げだな!!!

48 絆と言葉（後書き）

どうも あんだーすたんどus です。面倒なのでこれから us と表記します
え？ なんで us かって？ u があんだー、s がすたんどです。その略です

……ごめんなさい

さてと、話を前書きに戻します。岩手に行っていました。更新できませんでした

そして相変わらずの g d g d です w w w
うは

遅くなったことを謝らせてください or z
え？ 期待なんて全くしてなかった？ まあ……ですよねー

……本編に戻します

これで Chapter 6 が終了いたしました！！ 次回から Chapter 7 です！！

ああ……物語ももう 10 月かあ……9 月の残り、どうしよう……
ちなみにやっとこれで全体の 3 分の 1 だと思ってください。まだまだ長いですが、温かい目で見守ってくれば幸いです。冥府の様に冷たくても構いません え

それはさておき軽い予告（？）的な物を

次章、ほとんど戦闘ないと思います

そして勉強回です。全体的に見て

だってこいつら勉強しなさすぎなんだもん！！ 特に健太！！
だから赤点とるんだよ！！ あれ？

……
と、とにかくですね

次回から（多分）次章です！！ 9 月の残りには体育祭がありました

たとき!!

で、もし次章入らなかったらおふざけ回入れます!! 全く本編に
関係ないwars部によるwars部の為の雑談回です!! そう
とづくだらなくする予定です!!

どっちになるかはまだ未定、次回もよろしくね!! 期待は0か
もだけど!!

ではではさようなら!!

ps 中途半端に終わったなあ……

#49 涼しくなり始めて（前書き）

Chapter7に突入b 予告通り勉強回です（章自体が）

試合とかはほとんど無いです。もしかしたら無いです

とりあえず……はい、久々に書いたのだからgdgdです。そし

て今Chapterは普段より短くなるかもです。もしかしたらです

ではではwars新章、開戦です

49 涼しくなり始めて

「おお〜……やっぱり朝は冷えるなあ……」

「まあ、もう10月だしな〜」

健太と2人で外に出ると、この前まで夏だったとは思えないくらい涼しさがお出迎えをしてくれた。今日の最低気温は15度らしい。携帯を見ると17度と表記されている

昨日から10月に入った。昨日は体育祭の振り替え休日と言うことで学校は休みだったので、今日が10月の初登校になる。加えて今月からは後期が始まると言う理由で冬服へと衣替え。5月の終わりで一旦バイバイしたブレザーと先程感動の再会を果たしていたところだ。この温もり、なんとも言えず

「しっかし……まだ脹ら脛が痛い……」

「情けないな真筆〜。普段運動してないからだろ〜？」

「ちゃんと部活で動いとるわ」

健太の言うとおり確かに情けない。普段部活で走ったり撃ったり切ったりしてるのに、なんでこういうときにだけ筋肉痛になるんだろ。悲しさが湧いてくる。でも楽しかったからいいか。今日からまた地獄のように勉強だけどさ

思わず溜め息をついてしまう。まだ早いからか白い息は出ない

「ま、落ち込むな少年よ。喻え勉強が苦しかろうが、努力すれば道は開ける」

「健太が言う台詞じゃないと思うぞ俺は……」

バカの健太にそんな格好いい名言的な何かを言われると無性に腹が立つ。というかコイツにそんな台詞を言われるとは思ってもいなかった。結局その後2人で笑うことになったけど

2人で涼しくなった通学路を歩く。ところどころ見える木々が少しずつ色づいているのがわかる。完璧に色づいている木も少なくはない。ああ、銀杏って踏むと厄介なんだよな……そんな事を考えると実際に踏みかねないのでやめておこう。空を鳥が飛んでいった

そういえばさつきから疑問に思ってたことがある。いつもなら来る他の5人が今日は来なかった。いや、来る方がおかしいんだけど、来なかった。というか逆にそっちの方が怖く思える。なんでだろうと思いつつさつき健太に質問したところ、理由はわからないらしい……もしかして筋肉痛で動けないとかそういう感じ……か？ いや、運動しない人間じゃあるまいしそれはないか。と言っても動かないエルファイだけなら少しあり得そうだけど……まあ、ないか
冷たい秋風が頬を通り過ぎていく。おお、涼しい涼しい、寒い寒い

「まあ学校行けばわかるんじゃない？」

「そうだよなあ……」

今軽く心を読まれたと思うのは気のせいだろうか？

「それにしても健太。笹原さんの事はもう大丈夫なのか？」

一体俺は何を聞いているんだ。凄い唐突すぎるぞこの質問

でもあの大会後から笹原さんの健太に対する態度が元に戻ったので何かあったのかーとか思っていたけど今の今まで聞いていなかった。正確には忘れていた。そして体育祭の時は笹原さんと哀川君と一緒にいたのを目撃した。全てはコイツが知っている……！！

と、言うことで質問したことに対する悔いはない。あつてどうする

「ん？ ああ大丈夫大丈夫。だって」

「うん」

「僕があのだ二人を付き合い合わせたから」

よし、よく意味がわからない。いや、わかるんだけどわからない
とりあえず質問する前に考えてみる。要するに健太があのだ二人を
付き合い合わせたって事は、健太は笹原さんを振った（？）と言うこと
になる。となると健太には好きな人がいる？ もしくは鈍感すぎる
？ なるほど……そういう事か

「なるほど……そういう事か」

大事ではない気がするけど2回言いました

健太に向き直る

「お前はそれでいいのか？」

「……まあね。寂しくならないなんて言ったら嘘になるけどさ」

横にいる健太が歩きながら遠くの空を見上げる。釣られて見上げると、雲の少ない青空が広がっていた。おまけに吹き飛ばされた紅葉の葉が飛んでいる

「ぶっちゃけWars部の方が大事だったり？」

「……ははっ」

「……どうしてもお前だけには笑われたくない。似たような理由で退部止めやがって」

「悪い悪い。ちよっとな」

右肩をばんぽんと叩いて再び前を見る。もうそろそろ学校が見える頃かもしれない

「全く……こうさせたのは誰のせいだか」

「ん？ 何か言った？」

「別に」

やけに気になる言葉を言っていたのはただの空耳だったのだろうか。やけーに重要な事を言ってた……気がしなくもない

しかしまあ…… Wars部が大事か……それはみんな同じ気持ちなんじゃないかな

「とりあえず真箒。僕の肩から離れてはくれないだろうか。重い」

「失敬な。それでも俺の方がお前より体重は少ないハズだ」

「お前の言葉の方が失礼だよ。というか根拠も無いことを言うな」

「はいはい」

健太の肩から離れる。自分でも気がつかない内に肩を組んでいたみたいだ。しかも全体重の内約3分の1を加えていたらしい。周りから見たら俺はどういう風に見られていたんだろう。怪我をして歩けなくなった状態か？ いや、歩いてたか。どうでもいい

「まあとにかくさ」

健太が口を開く

「僕も真箒も、同じように思ってるって事だよ」

「……だな」

その後2人で笑みを浮かべる。周りから見たらどう思われるのやら

「これからも頼むぞ相棒」

「それはこっちの台詞さ親友」

2人で右手に拳を作り、互いにぶつけ合おうとする。すると

『朝から青春ごっこはいいんだが、そろそろ気付くなり助けしてくれるなりしていただきたいんだがお2人』

「うひゃあっ!!」

後ろから聞き覚えのある声がしてきて、ぶつけ合う前に驚いて距離を取った。そして一緒に後ろを見ると、そこには他クラスのwars部メンバー、鶴明日香が立ってるのがやっとなって感じて立っていた。見た感じだとコイツも筋肉痛みたいだ。若干膝が曲がっていて、両手を膝に突いている

「おはよう明日香。……お前も筋肉痛か」「おはよう鶴」

「ああおはよう……まさかここまで酷くなるとは思ってなかった……」

「……」
「どれだけ張り切ってたんだよ……」

確かに明日香は張り切ってたと思う。張り切りすぎてたと思う。wars部の中で一番張り切ってたと思う。違うクラスだったから勿論応援はそこまで出来なかったけど、結構目だったとは思う。その状況はまた後ほど伝えようと思う

フラフラゆっくりと歩いてきた明日香が俺の肩に両手を突いて頭を頂垂れる。どうやら足下がガクガクいつているみたいだ。……本当にどれだけ酷いんだ!! よくここまで歩いて来られたな!!

「真筆……助けて……」

「情けないやつちゃ……運動部のくせに」

「それは同じく筋肉痛の真筆が言う台詞じゃないと思うのは僕だけなのだろうか」

「健太うつさい」「佐々木うつさい」

「……ごめんちゃい」

溜め息を吐きながら明日香を自分の背中に回す。そして背負って学校へと　いつもなら余裕なハズが筋肉痛という状態異常で辛く感じる……！！　学校まであとどれくらいだよ……！！

「このペースだとあと7分くらいだなー」

「……健太、途中で変わってくれ」

「断る」「断る」

なんでだろう。明日香にまで断られた

「とりあえず真筆。……アレも回収して向かおうな」

「へ……？」

健太の指さす方向をしてみる。学校に向かう通学路の途中で女子生徒が……倒れてる！？　道ばたで倒れてる！？　そして何あの看板……！！

『Please give me……』

あ、すみません。英語読めないんです自分

2人（と背負った1人）で倒れている生徒に歩み寄る。近づいていくとそれは段々と知り合いに　ってあれ？　よく見ると男子制服を来ている。加えてポニーテール……って事は……

「おい光久ー。起きろー。朝だぞー」

健太がしゃがみ込んで光久の肩を揺する。俺は明日香を背負っているので上手くしゃがむことが出来ないのもそのまま待機。それにしても光久……これ、生きてるのか？

肩を揺すること約10秒、光久の口元が少し動いた気がした

「け、健太殿……せ、拙者は……もう……」

「み、光久……？ おい光久！ しっかりしろ！ 何があった!？」

……なんだろう、この三文芝居。急に健太も力入れよった

「もう……駄目だ……（ガクッ）」

「光久ああああっ!!」

「……何やってんだお前ら」

耐えきれなくなってしまったのでとうとうっこんでしまった。すると光久は何事も無かったかのように いや、身体を震わせながらゆっくりと立ち上がる。その様子に健太は膝を突いた状態で見つめていた。……なんだか読めてきた。完全に立ち上がると先の明日香のように足がガクガクしていた

「改めておはよう光久」「おはよう明智」

「う、うむ……今日もいい朝だ」

とりあえずその足のガクガクやめい。なんだか見てるのが辛い

「で、明智。何道ばたで倒れ込んでたんだ？」

今俺が背負って真後ろにいる明日香が質問をかける。耳元で言わ

れたので少し耳が痛くなってしまった

「じ、実は筋肉痛で……って、どうしたのだ？」

「……ああ……なんでもない」「」

筋肉痛者、現時点で3名。残3名、不明

光久の言葉に全員が溜め息をついて額に手を当てた。その時明日香の身体が落ちそうになってしまったのですぐに体勢を直した。そろそろ身体が限界に近いんですけど

なんて思いながらも健太が光久の身体を支えて再出発。さっきまでより若干スピードは下がってしまったが、その10分後、誰とも会うことなく学校に到着した。右隣の机ではエルフィが突っ伏しているのを見逃しはしなかった

「……あー……うー……」「」

「……ちょ、お前ら……本当に大丈夫か？」

「……大丈夫です」「な、なんとか……」「……問題ない」

「大丈夫とは言えないよな……」

「ああ……私もそう思う」「右に同じく」

「……いや、登校中に情けないことを言っただお前らが言っつな」「」

「……うっつ……」「」

長いようで短かった午前中の授業も終わって昼休み。秋休みではない、昼休み。いつものように……いや、集まってるメンバーはいつもと同じだけどロケーションが違う。外が涼しいからとかそういう理由ではなく、単に目の前にいる女子3名が動けないという理由

で現在1年5組、琉華と望がいるクラスにいる。時間は昼休み、目的は勿論昼食

それはいい

それはいいんだけど

「……そろそろ頭を上げてはいただけないだろうか。弁当が食えん」

筋肉痛（笑）の3人が机に突っ伏しているせいで弁当を広げることが出来ない状態になっている。もしかして上半身を起こすことから出来ないんじゃないだろうかこの3人。いや、身体を起こす以前の問題に、よく学校まで来られたな

ふと横を見ると明日香が琉華の頬を人差し指で突いていた。うなり声は聞こえるけど起きる気配はない。どれだけ頑張ってたんだ女子たちは……いや確かに……でもなあ

報告はまたの機会に

「と、というか明日香さん……なんで明日香さんはそんなに動けるんですか」

俺の正面で突っ伏していたエルフィが顔だけを起こして明日香の方に視線を向けながらそう尋ねていた。確かに朝まであんな感じだったのによくここまで動けるようになったなコイツ

琉華の頬を突きながら口を開く

「まあ……色々あってな」

何があっただ

「色々ですか……後で詳細聞かせてくださいね？」

「……あ、ああ」

怖いです。筋肉痛（笑）なのに、エルフィの笑顔がマジ怖いです。なんだか知らないけど俺まで見られたし

「ちよ、ちよっと明日香……そろそろ指を止めてくれるかな……痛い」

「あ、ああスマン……」

しつこく頬を突いていた明日香が慌てて手を引っ込めていた。おかげで琉華の頬にちよっとした後が付いていた

それはいいんだけど……早く昼食にしませんか？

「まあまあ真筈。急いでは事をし損じるぞ？」

「何を損じると言うのだね健太よ」

「いや、言ってみただけ」

……とりあえずそこにつっこむのは止めておいて……うん。心を読まれた。もう驚かなくなってきたな、これ

光久の方を見てみると、本人は眠たそうな顔をして欠伸を掻いていた。手元には開けられていない弁当箱がある

「……そろそろ起きませんか3人とも？」

「……起き上がれないです」「……」

筋肉痛（笑）、恐るべし。まさかここまでの破壊力があるとは……ってかちよっと待て。エルフィは……とは言え隣だけど、4組からここ（5組）まで歩いてきたよな？フラフラになりながらも頑張っ
て歩いてきたよな？ 身体くらい起こせるはずだよな？

……心を読まれたのかエルフィの身体がピクリと反応していた
横では明日香が再び琉華の頬（さっきとは反対）を突いていた。

拒否反応はない。代わりにうなり声が聞こえてくる。そして望も頬を突かれていた

「……ってあれ？」

望をつついているのはこの中の6人ではなく、自分の知らない女子生徒だった。見たことがあるような無いような感じの……あるかもしれないけど記憶にない。自分が見ていることに気付いていないのか、望の横顔を見ながら頬を突いていた。もちろんこちら側の他3人も気がついていない

「お……相変わらず柔らかいほっぺだなあ……」

1人感慨にふけているその女子生徒。望の頬を堪能するかのようになり人差し指で突きまくっていた。望から聞こえてくるうなり声が徐々に大きくなり始めてきた

「えっと」

「この16年間で常にプニプニを保ち続けた望の柔らかいモチモチほっぺ。この感触はいつ何処で楽しんでも飽きないなあ……やつぱり琉華のおっぱい並に柔らかいねっ」

ガタツ!!

「そいつあ誠か　　「ぶーっ!!」」

「変態落ち着け健太」

健太が勢いよく立ち上がったので勢いよく裏拳を決めてやる。綺麗に鳩尾にクリーンヒットしたのかそのまま腹を押さえてうずくまっていた。さすがに勢いよすぎたか……? いや、こうでもしてお

かないと止まらないか。というか何に反応しているんだコイツは。つか「そいつぁ」ってなんだよ「そいつぁ」って

今の椅子の音にやっと反応してくれたのか、その女子生徒はこちらを見ていた。依然として明日香は琉華の頬を突いている

と、思っている、とうとう琉華の右腕が女子生徒の襟首を掴んだ。ゆっくりと痛みを堪えるように上半身を起こしていく。どれだけ辛かったんだ

「あう」

「ちよつと紗凧……？ 前からその比喻表現は止めてって言うてるのがわからないかなあ……？ そっちは恥ずかしくないだろうけどこっちが恥ずかしいの……例えるんだったそこにいるエルにした方がいいんじゃないかなあ……？」

おうおう、琉華の笑顔が超怖いです。紗凧と呼ばれてた女子は肩をすくめていた。すると突然何かに反応したかのようにエルフィの方を見た

「える……？」

「さな……？」

そしてエルフィも何かに反応したかのように（痛みを堪えるように）上半身をゆっくりと起こし、琉華の掴んでいる女子を見る。視線と視線があつてその場の会話が完全にストップしていた

ちなみに望も段々と身体が起き始めている。2人と比べると2分の1くらいのスピードだ

2人の視線が合ってから約5秒。望は半分ぐらいまで身体を起こしていた。そして琉華の掴んでいる女子は顎に手を当ててニヤリと微笑んだ

「……なるほど。確かにいいおっぱいだ」
「ええっ!? いきなり爆弾発言ですか!？」

……なんだこの会話

「くっ……確かにロリ貧乳よりロリ巨乳の方が需要は」 「沈んで
ろ」 「ふっ!」

健太が危つく変な発言と共に再復活を遂げそうだったので、後頭部を殴って気絶させておいた。後頭部を殴ったらそのまま机の角に額をぶつけて沈んでいった。そして光久はさり気なく弁当を広げて1人で弁当を食べていた

「……確かにエルと琉華は……くそっ」

「お前もお前で変に反応するな明日香」

「黙れ真箏。お前に私たち女子の苦しみを理解できるか」

……なんかごめんなさい

琉華の手から解放された女子は嫌らしい手つきを作りながらエルフィに歩み寄っていた。それに泣き目で怯えるエルフィ。さっきまでの筋肉痛はどこへやら

「ちよっ、まっ、さっ……待ってください!! というか明日香さんも見てないで助けてくださいよ!!」

「黙れ……お前と琉華は私たちの敵だ!!」

「何処見て言ってるんですか!!」

「ふっふっふー……覚悟!!」

そして女子が空高く(と言っても教室内なので実際は1m程度)飛び上がり、エルフィに襲いかかる!! やばい!! これは男子と

して見ててはいけない気がする！！

「……ストップ紗凧」

「あう」

「はあ……はあ……はあ……た、助かりました近藤さん……」

間一髪だったのか、望がさっきまでの琉華と同じように紗凧と呼ばれていた女子の襟首を掴む。すると猫の様におとなしくなり、その場に正座をさせられていた

「……全く……その痴漢行為、少しは自重するべき。」

「はあーい……」

……さっきまでの動きはなんだっただろうか、と思えるほどになった紗凧さん。この状況を見る限り、望と琉華の友達……クラスメイトと言ったところだろうか。加えてさっきの発言からすると、この2人は幼馴染みなのかもしれない

説教している側と説教されている側の女子2人組が立ちがあり、とうとう全員が起きている状態で（健太はまだ床）席に着いた

「……紗凧、自己紹介」

椅子を半分に分けて座り合っているのか、望と紗凧さんの距離が異様に近い。望に促されて口を開いた

「……朝比奈紗凧。……望と琉華のクラスメイトで、望とは幼馴染み。

……趣味は望のほっぺ弄り」

「……私の喋り方を真似しないで」

「あ、バレましたー？」

表情まで似せていたのだろうけど、そこに関しては……つつこむ
勇氣はない

朝比奈さんは再び望の頬を突こうとしてたけど、予想通り手前で
ガツチリとホールドされて動けなくなっていた。更にはアイアンク
ローに模した行為まで受ける始末。でもあまり痛そうではない

「いやー改めまして……初めましてWars部の皆さん。望と琉華
と……以外は今日が初めてですよね。あんまり気にしないでくださ
いね？ あれが私流のスキンスリップの方法ですから。あ、男子の皆
さんにはやらないですからね　キヤー痛い痛い」

見事な棒読み……まるで望のアイアンクローが痛くないかのようなだ

「というか望ー、そろそろ離してくれますかー？　頭蓋が陥没しそ
うですー」

「……はい」

棒読みだというのにアイアンクローから解放する望。そして解放
された朝比奈さんは頭を少しさすってから席を立ち上がり、エルフ
イの元に歩み寄った

「先程はご無礼を働きました。どうぞここはお許しを」

「え、あ、ああ……はい。別に気にしてないですから……」

なんとというか……綺麗な謝り方だった。健太にアレを見習って貰
いたい

「僕に出来るわけ無いでしょ」

「おお、復活したのか」

「うむ。でも記憶が曖昧なんだよね」

それはそれでいいことだ。むしろ思い出すな健太よ
謝り終わった朝比奈さんが教室を出て行こうと扉の方へと向かっていった。そろそろ予鈴が始まるのに……トイレかな？

「真筆……少しは発言を控えろ」

……ごめんなさい明日香さん

「あ、そうだ神崎くん」

「はい？」

教室の扉の前で立ち止まった朝比奈さんに声を掛けられた。こちらを振り返ると、自分をジッと見つめてきた。一体……なんなんでしょう？

すると何かを判断するかのように見ていた彼女は、笑顔を作って「なんでもないです」の一言を残して教室を出て行った。何だったのだろうか

「……………」

「エルフィ殿？」

「あ、なんですか明智さん？」

「いや……何でもない」

「さてと……全員起きたことだしそろそろ昼食を」

キーンコーンカーンコーン……

『……………』

結局この日の昼食は朝比奈さんが起こした出来事によって食べ損

ねることになってしまった。実際、本日の弁当を食べたのは放課後
部長に見られながらの部室になっていた。

#49 涼しくなり始めて(後書き)

久々に書くとやっぱりgoodgoodですね

さてと……朝比奈紗凧ですか……ただの変態でしたね
とりあえず今Chapterではもう少し登場して貰います
ふう……

ではまた次話でb

#50 On school days 1 (前書き)

タイトル名の理由

思いつかなかったからです。同じタイトルが番号違いでいくつか存在します
では、

10月が始まってから早くも1週間が経過し、10月の9日、火曜日。健太を除いた全員が筋肉痛という名のアレから回復し、今まで通り朝、我が家の食卓に集合している。ただ1つ違う点があるとすれば、幼馴染みの穹がいるということだ

「まったく……君たちは毎日真筆の家に朝ご飯を食べに来てると、ええ?」

……真横に座っている穹の喋り方が凄い怖いです。感じ的に凄い怒ってる。俺に対してじゃなく、ここに毎朝来ているメンバーにだ。だったら穹も来ればいいじゃないかー、と言いたるところだけど、学校が違うという理由でそれは不可。なんでも登校時間が多少異なるために、俺たちより早めに登校しないといけないらしい。大変だなあ……

そんな事を考えながら手元の牛乳に口をつける。カルシウムは大切だ

「それはそうなんだけど……なんで穹がここにいるのかなあ?」

ちなみに穹が来たのはほんの少し前。よって理由を知っているのは俺、健太、エルフィ、明日香、望の5人だけだ

琉華が挑発的な態度を取りながらそう尋ねる。そして食べかけのパンを1口かじった穹が、口をモゴモゴと動かしながら質問に答える

「あれー、言っただけじゃなかったっけ? 実は土曜日が体育祭だったもの

で。今日はその振り替え休日って訳。3連休は最高ですなーはっはっは」

「……初耳なんだけどそれ」

ボソリと呟く琉華。そして何かを訴えたいのか、俺の方に視線だけを向けてくる。ついでに光久もこちらを見て「それは誠か？」と尋ねてきた。その他の5人は各々宙に視線を彷徨わせている。仕方ない、溜め息混じりに説明するとうとう

「あー琉華。とりあえずな、俺は電話して誘ったんだ」

「うん」

「そしたら誰も出なかった」

「うん。その日は出かけてたから……あ」

「……携帯にかけたら出なかったぞ？」

「……そういえば家に忘れてったんだった……」

琉華が来られなかった理由が無事(?)に解決した。残る光久も同じような理由。こっちも出かけてたらしく、加えて携帯を持っていないので連絡のしようが無かったという事で、と伝える

ちなみに会場に来たのは望を除いた3人。健太は暇人だったから誘うことに成功、明日香も同様に暇人、エルフィは外出中だったけどたまたま近くにいたということで現場に直行。弦巻高校と比べて若干生徒数が多い学校なので、少しばかり弦巻より白熱していた。特に最後のリレーとか

溜め息を吐いている琉華に穹が歩み寄り、優しく肩を叩きながら「まあ来年があるじゃないか」と言っていた

「まあ……穹は筋肉痛とは無縁なんだな」

「ああ。コイツは筋肉痛と言っ言葉が辞書に載っていないらしい」

明日香が穹の様子を見てそんな事を呟いていたので、幼少時代からお世話になつていてる俺がそう呟いておく。今明日香に言われたから気がついたけど、確かに今まで筋肉痛になつていてる姿を見たことがない気がする。まあ運動神経が高い証拠だな

コップの中に牛乳が無くなったので半分ほど注ぐ。すると望が空になつたコップを差し出してきたので、同じように注いでやる。そして健太。お前も注いで貰おうとして急いで牛乳を飲み干すな

「あ、トイレ借りますね神崎さん」

「ほいほい」

「お前が返事すな穹」

ここはお前の家ではない。いや、昔から何度も来てるからって勘違いをするな。お前の家はもう少し奥に行つた場所だろ

席を立ち上がったエルフィが廊下に出るドアへと歩いていった。ドアの開く音と同時に俺、健太、光久の男子3人組が朝食を完食する。そして牛乳を飲み干す。今度は注がない

「……………それにしても今日も平和」

「だよねえ……………何か面白い事でも起こらないかなあ」

「11月に新町高校で文化祭あるけど？」

望の言うとおり平和だ。今月はwarsの大会が1つも無いらしく、部長も暇そうにソファの上で欠伸を掻いていた。部長曰く「今月は好きに生きる」だそうだ。つまり、大会が無いと見られる。と何か好きに生きるとはどういう事だ。その内に練習をしないでどうする

エルフィがトイレから戻ってきたのか、部屋のドアが開い……………違う。エルフィではない。今日は珍しく寝坊した親父だ。おいおい少しは慌てるくらいしようぜ。なんでそんなゆっくりしてるんだよ

「おお、みんなおはよう」

『おはようございます』

「今日は珍しく遅いな」

「ああ……ちょっと雫と連絡取ってたら、いつの間にか午前4時になってて……」

一体どれだけの時間連絡を取っていたのだろう。というかその時間になってたからもう起きてればいいんじゃないだろうか

……にしても、親父と母さんは姉貴が日本にいることを知っているのだろうか。とりあえず後で聞いてみよう

「……あ、忘れ物した」

部屋の真ん中辺りで思い出したのか、ドアの方へと急ぎ足で戻っていく親父。ああ、そういうえば鞆を持っていないな

「……暇」

「ゲームでもする？」

「穹……もう少しで登校する時間だからそれはちょっと……」

「エルが来たなら出るとしよ」

『きゃああああああああああああああああああっ！！』

『ぎゃああああああああああああああああっ！！』

『……………』

廊下から聞き覚えのある叫び声が聞こえてきた。何事　いや、大体予想は出来てきた

男子は行つてはならぬと思い、この場にいる女子に行かせてみた。4人が戻ってくると、そこには顔を真っ赤にして号泣しているエルファイが顔を両手で覆って地面にへばり付きながら、「もう……お

嫁に行けないです……」と呟いていた。その後時間になって玄関に向かう際、親父が人間の形をせずにそこに置いてあるのを忘れはしなかった

「……なあ我がクラスの使えない委員長よ。今の状況を君はどう思うかね」

横にいる健太にそう尋ねる

「使えないと言っな使えないと。とりあえず黙らせない限りは何も始まらないね。綾香は？」

更にその横にいる笹原さんに尋ねる

「珍しく気が合うわね。とりあえずやかましい男子だけでも先に黙らせておきましょうか。エルフィはどう？」

更に更にその横にいるエルフィに尋ねる

「え、えつとその……最終的に暴力になっちゃうんですか？ 神崎さん？」

俺に順番が返ってくる

「とりあえず滋賀崎あたりは問題ないと思う。健太は？」

2週目、健太にそう尋ねる

「だなあ……まずは平和的交渉はどうだるか綾香」

本当に2週目が開始。笹原さんのターン

「そうね……それで駄目だったら暴力しかないわね。それじゃあエルフィが行く？」

再びエルフィへ

「わ、わたしですか！？無理ですよ。あんな人数わたしの発言力じゃ……神崎さんがなんとかしてくださいよ」

あ、また回ってきた

「あのな……俺もそこまで責任取らないっつの。委員長、君に決めた」

3週目、1st turn 佐々木健太

「あ、やっぱり僕なのな。ここは副委員長の綾香が行ったらどうかな」

3週目、2nd turn 笹原綾香

「何言ってるの……ここは委員長のアンタでしょうが」

3週目、3rd turn 佐々木健太

「え、僕？ エルぽんはどう思うっ？」

3週目、4th turn エルフィ・N・エストラント

「笹原さんの言うとおり、ここは委員長の佐々木さんが行くべきかと……」

「はいはいわかりましたよ。行ってくればいいんでしょ言ってくれば……!」

「……頑張れ」

健太が1人、この1年4組クラスメイトほぼ全員を説得するために教卓前へと移動する。教室の中央ではクラスメイトほぼ全員がある人物1人を取り囲んで騒ぎを立てていて、それを沈めるための作戦会議をしていたところだ。ちなみにこれはイジメではない

俺、エルフィ、笹原さんの正常メンバーは教室の入り口（後ろ）からその様子を見守る。どうやら騒ぎが他のクラスにも聞こえてしまったのか、少し野次馬が出来ていた。あ……中々面倒な事になってきたぞこれは……

「ん、真箏殿。そんな場所で何をしておるのだ？」

後ろから聞き覚えのありすぎる声が聞こえてきた。3人で振り向くと、そこには現在1年2組の教室で授業の用意をしているであろう光久が立っていた。何をしているのだろうか

「明智さん、どうして4組へ？」

俺が質問しようとしていると、先にエルフィが質問していた

「うむ……しばし用を足しに行ってたのだが……しかし、これは一体……」

「あー……光久、朝の出来事思い出してみろ」

教室中央に目を向けた光久にそう言ってみる。朝の間ずっと一緒だったから理由は少なからずわかるだろう。別に喧嘩というわけではない

「ああ……なるほど」

「わかってくれたようで何よりよ。さ、健太の演説会が始まるわよ」

笹原さんはずっと教室内を見ていたのか、この場にいる3人にそう伝える。もう教室の反対側のドアは野次馬で一杯になっていた。恐るべし1年4組

「で、光久は戻らなくていいのか？ そろそろSHR始まるぞ？」

「いや、もう状況を見た以上見るしか無いと思い……」

「……遅れても知らないからな」

俺たち4人は健太を温かい目で見守ることにした

『諸君！ いつまでガヤガヤやってるのだね！！ 席に着き給え席に！！』

わいわいがやがや

『そのままだと授業に差し支えが出てしまうぞ！！ それに可哀想じゃないか！！ 早く解放してあげなさい！！』

わいわいがやがや

『ちよ、聞いてください！！ 早く席に戻って！！』

わいわいがやがや

『おいコラ早く席に戻れよ!!　そろそろSHRの時間だぞ!?!
つか話聞けよ!?!』

わいわいがやがや

『……………』

あ、諦めたなアイツ。もう完全に下向いてるわ。泣いてそうだが仕方ない…………俺と笹原さんも出撃をしますか

「待ちなさい神崎。アイツ…………まだ何か言つつもりよ」
「へ?」

先に移動しようとする笹原さんに右肘で進行を止められてしまう。その言葉を聞いて健太の口元を見ると、どうやら落ち着きを取り戻したいのか呼吸を繰り返していた。確かに…………まだ何かあるのか。というか駄目委員長、この暴走した教室を止めるほどの台詞をお前は言うことが

『…………真筆は穹ちゃんと毎晩遊んでいるらしいです』
「健太あつ!?!」

あら不思議。今まで反応を1つも見せることの無かったクラスメイトたちが一瞬にして俺に向かって視線を向けてきました。更には入り口にいる野次馬たちも、この場にいる3人も
うん、そういう嘘って本当に怖い

「おい神崎それは一体どういう事だ!! 毎晩だと!? それはつまり……あのような事をしているというのか!?!」

真つ先に穹ちゃんLOVEを語る滋賀崎がこちらにもの凄い勢いで詰め寄ってくる。あ、やばい。こいつ相当マジ切れしてら。今一瞬首締められかけたもん

続いてその集団の約半分がこちらに押しかけてきた。もう半分は顔面蒼白でこちらを見ている。やばい、もうこれ弁解のしようがないぞオイ。健太! この状況どうしてくれるんだ!!

『あ、そうそう。更には穹ちゃんと遊んだ後、エルぽん家に遊びに行ってるらしい』

「ええええっ!?!?!」

エルフィをと一緒にビククリしてしまった。俺も知らない衝撃の事実。ゆえにこれは嘘と呼ばれる物だ。嘘って怖い。ギリギリ回避に成功したけど、笹原さんの腕が壁に埋まり込んでるもん。加えて相当な威力だったのか抜けそうにないもん。更には残り半分、野次馬の皆さんまでもが押しかける始末。エルフィはわなわなと震えている

よし……もう逃げられないな。八方塞がり、四面楚歌、超えられない壁。俺の周囲はそんな状態になっている

『ぎゃああああああああああっ!?!』

なんて危機感を危機感と思えないままどう脱出するかを考えていると、健太の叫び声が聞こえてきた。何事!? と思つてそちらを見ると……

『ちよっとその嘘は嬉し恥ずかしいからやめてもらえるかなあ……』

？ とりあえずわたしと真箏はキスまでの関け 』
『 神崎真箏を1年4組、加えて野次馬の皆さんで血祭りにあげよ！
』

やばい！！ 男子が完全に狂戦士と化した！！ 女子まで戦乙女
（狂ver）になつてる！！ なんとかあの言葉が嘘だつて嘘を言
わないと……！！

「落ち着け1年4組男子！！ 穹の言葉は多少違う！！ 無理矢理
だつたんだ！！」

『 むっ、無理矢理！？ おのれ神崎！ まさか女子にそのような事
をするとは……！』
「なんでそうなる！？」

しまった！！ 今自分でも気がついたけど言い方を間違えた！！
今のコイツらには『神崎真箏が星乃穹に無理矢理キスをした』と
聞こえてしまう！ やばい……やばいぞ！！ 早く新しい言い訳か
何かを……

『 言い訳無用！！ ここで死せ神崎真箏！！』
「へぶるっ！！」

いきなり顔を思い切り殴られたかと思うと、連続して鳩尾に膝
蹴りが入った。その勢いで吹き飛ばされて廊下の壁に後頭部から激
突した。しかも意識が飛んできた

よくわからないけど女子が目の前に立った。服装でわかる。足ま
で裾が無いという事は、おそらくスカート。女子だ。誰だかはわか
らない。でも何故かさっきの声は聞き覚えがある。どこかで……

「まったく……危険人物ですね。後で上官に報告しておかないと……

…」

その声の主を誰だか思い出せぬまま、意識を失った

「まったく……穹のせいで散々な目に遭ったな……」

「散々とはなんだね散々とは。生きているだけありがたいと思いなさい」

「うっせえ。つか他校の生徒が他校に来るな」

「いいではないかいいいではないか」

「お2人とも静かにしてください。先生に聞かれますよ？」

「……はい」

正直今の状況がよく掴めていない。いや、掴めないのも無理がない。朝から状況を掴めていない。むしろ掴んで溜まるか

現在同日5時間目、LHRの時間。今日は先生が何かを語りまくっていて、全然クラス内の事をやるうとはしていない。校外学習の事とかはまだ決めないでいいのか？ なんて事を考えながらも、普段はあることの無い席（真後ろ）に視線を向ける。そこには幼馴染みのツインテールが座っていた

「紹介文間違っただけ？ “ツインテール”じゃなくて、“星乃穹”だよ？」

「知つとるわ」

「だからお静かに……」

そう、普段あることのない真後ろの席には穹が座っている。しか

も今日の1時間目からずっと。前回の様に途中でいなくなることは無く、ずっとここに居る。何故と思ったが、やっぱり振り替え休日だという理由。朝家に来たときから少しおかしいなとは思っていたが、まさかそのまま学校まで足を運んでくるとは……というかこの学校、何処まで緩いんだ……他校生を普通に授業に受けさせるて……もしかしたら校長間に何かあるのか？ それとも先生の個人的許可？ 絶対権限的な何か？

くだらないと思いつながら前へ戻る。まだ先生が1人で話していた。するとエルフィが机と椅子と一緒にバツクさせていた。……こやつ、さつき言ったこととやろうとしていることが全く違うんじゃないか？ 案の定小さな声で会話していた

『それじゃあ話題を変えよう。来週から校外学習についての』

お、とうとう校外学習の事を決め出すのか。えつと……1年は何処行くんだったかな……後で確認するでしょう。時期は確か1月の終わり……だった気がする。それで2泊3日……だよな？

……後で確認しよう

それからしばし先生の話をして右の穴から左の穴に貫通させる。本来なら聞いておくべき事なんだろうけど、ところどころ先生のプライベートが混ざっているのもどうでもいい。興味が多い人は多いだろうが聞かないことにする。なんとなく

それにしても、それにしてもなんだが

……滋賀崎の視線がもの凄く痛い……なんだか頭に穴が開くんじゃないかってくらい痛い。とにかく痛い、激しく痛い。ついでにさつき打った後頭部も、腹も痛い。一体誰だったんだらうか

なんて過ぎた事を考えながら後ろを見ている。2人とも瞬時に気がついたのか、一緒に顔を真っ赤にして「あっち向け」と言わんばかりの視線を向け、手で払うかのような仕草を見せ、更には千切っ

たであろうノートの端を丸めて投げつけてきた。広げると「こつち見ない！」の文字が書かれていた。何を話していたんだか。まあ男子の俺が関わる話では無いだろうけど

よし、滋賀崎の視線が更に痛くなった。更には宮本、杉山、竹内からも視線を送られるようになった。ちなみに健太は教卓目の前だというのに絶賛爆睡中。笹原さんは真面目に話を聞いている。その他のクラスメイトは聞く者5割、寝る者3割、視線を送る者2割に分類された。逃げ出していいですか、先生？

窓の外を見る。そこには何も無い、ただ青く広がる大空があるだけだ

溜め息混じりに頬に手を当て前を向く。まだ先生が1人、クラスメイト全員＋他校生徒に向けて話をしている。ああ、なんだか先生と部長の繋がりを調べたくなってきた。聞いたら聞いたで、部長と顧問の関係とか言われて終わりそうだ
どうでもいい

さて、横にはエルフィもないし、後ろの穹とエルフィは何か話してるけど俺には混ざれそうにもないし……どうしたものか

『それと月末……と言っても22日からだが……中間テストがあるからな。ちゃんと勉強を』

……先生、冗談は大概にしてくださいよ。まだ10月、テストの実施だなんて……

『ちなみに赤点を取った者は、学年主任から宿題を出されるらしい』

そんなリアルな話が！？ おい健太、爆睡してる場合じゃねえ

起きてた！！ いつの間にか起きてた！！すげえ、テストの話題

！！ しかもこつちに視線向けてた連中全員先生に向き直った！！
ちなみに後ろはお構いなく雑談を繰り広げているらしいです。ま
あまあ机と机をくつつけ合って……

ああ、テストか……夏休みの宿題、一般大会、体育祭と続けて今
度は期末テストか……今回も頑張つて赤点を乗り切るしかないのか
あ……ああ、健太が激しく不安だ

『全く……ウチのクラスは揃いも揃ってバカばかりだからな。少し
他のクラスにお前らの実力見せつけてやれよ』

先生、そんな無茶な……俺たちにそんなの出来るわけ無いじゃな
いですか……特に健太

『とにかくだ。各々ちゃんと勉強はしておくようにな』

その言葉と同時にクラスの全員から溜め息が零れる。後ろの2人
は未だに会話を繰り広げているらしい。少しは先生の話聞きなさ
い、話を

さっきの溜め息より大きい溜め息をついて机に突つ伏す。なんだ
か身体全体の力が全て抜けたみたいだ。起き上がれそうにない。し
かも首の辺りが痛くなってきた。膝から下も。まだ筋肉痛か？ あ
あ、なんで筋肉痛なんて物があるんだらうか
目を閉じる。なんだかすぐに眠れそうなくらいに眠い。これから
まだ6時間目があるけど寝ようかな。疲れたし

『ああ、そつだ。もう1つ』

先生が話し出す頃にはもう意識を

「おい真箒、大丈夫かー？」

取り戻していた

目を擦りながら身体を起こす。なんだか首と脹ら脛の辺りがもの凄く痛い。えーっと……ああ、筋肉痛か。どうりで。それにしてもここは何処だ？ 授業中なのに何故目の前に健太と明日香がいる？

「何考えてるんだ真箒？ 今は部活の最中だぞ？」
「へ？」

明日香にそう言われたので頭の中にある情報を全て整理してみる。確か、5時間目の終わりに目が覚めて……って、あれ？ 今受けているのは5時間目のLHR、俺は少しも参加していないと言っことは……

「夢か……」

「何見てたんだ真箒？ 途中難しそうな顔してたけど」

「いや……なんでもない。それにしても……」

辺りを見回してみる。そこはもう見慣れた風景の部室……の隅、もう1つのソファだったりする。中央を見ると、そこには誰もいなかった。下校時間を過ぎたのか？

「いや、全員トイレなりジュース買いに行ったりしてるだけだよ。直に戻ってくる」

「なるほどねえ……で、なんで俺寝てたんだ？」

なんだか自分でもその辺の記憶が曖昧になっているらしい。誰かに攻撃されて気絶したとか、何処かの誰かさんが作った殺人兵器を食べたとかそういう理由では無かった気がする。部室だから……やっぱり演習中だったのか？

「えーっと……私を庇って脹ら脛を切断されて、片足だけで頑張ってたらそのまま首を撃ち抜かれて、と……そのまま気絶した」

「なるほど……結局結果は？」

「駄目駄目。今の僕たちには先輩の本気には勝てないよ。この前はただのマグレ。ああ……頑張らないとなあ……」

健太の言葉に3人で溜め息をつく。なんだか実力の差と言う物を見せつけられた気がしてならない。特に吉原先輩に負けるのはどうも悔しい。でも武器が武器だ。どう頑張っても勝てない、五大武器には

そんな事を考えていると、部室のドアが大きく音を立てて開いてゆく。そこには外出していたメンバーが全員（穹含む）が立っていた。先生もいる時点で珍しい

「あ、神崎さん。目覚めたんですか？」

「まあな」

「……はい、真箏。……差し入れ」

「ああ、望。サンキュ」

望に缶のスポーツドリンクを手渡される。そして横にいる2人もジュースが手渡された

「まあとりあえず飲みながらでいいから全員席に着け。会議やるぞ」

部長にそう促されて全員が指定席に座る。ゲストの穹は奥から引っ張ってきたパイプ椅子に座らせる。場所はエルフィの隣だ。そして先生はいつだかの展開型の椅子を使っていた。って、部長の真横？もしかして先生が何かを話すのだろうか

「じゃ、梅花。コイツらに驚くニュースを伝えてやれ」
「だから名前で呼ぶなど……まあいい。それじゃあ言っぞ」

……本当にこの2人の関係性が気になるところだ

今月末、中間テストが実施される……

中間テストが実施される……

テストが実施される……

が実施される……

実施される……

される……

れる……

る……

その言葉がエコーするかのように脳内で再生された。ふむ、中間テストか。先生、冗談も

「やだなー先生ー。冗談は止してくださいよー。テストなんて時期が」

俺が言おうとした台詞を代わりに健太が伝える。そうだ、テストにはまだ早い。というかテスト？ 何それ？ 美味しいんですか？ 健太の言葉に先生は少し笑みを浮かべ

「今月末、中間テストが実施される」

「そんなバカな!!!」

悪魔のような笑顔で言われた健太は、その場で頭を押さえて苦しみだした。ちなみに女子たちは平然としている。加えて光久も。穹は「大変だネー」と他人事の様子に呟いていた

思った。これってロケーションが違うだけの正夢なんじゃ……ないでしょうか？

「なあ、お前ら……反応しなかったけど、知ってたのか？」

『いや、初耳』

どれだけ物怖じしないんだコイツら……！！ 神様もビックリだよ……！！

「いや、驚いたけどさ……これしきの事で反応するのもどうかと……」

「……もう慣れた。驚いたけど」

「確かに……驚きはしたが、大して……」

「佐々木さんが異常すぎるだけじゃ……」

「すまぬ真筆殿、健太殿……さほど驚けぬ」

……軽く裏切られた気分だ。驚いたなら驚いたで反応くらい示して欲しい

溜め息を吐きながら健太と肩を組む。よし、テストに対するボイコットグループの完成だ！！ ふははははは！！ ……悲しくなってきた

「現実を見るお前ら……その前に少し面白い事があるから……」

『面白いこと？』

それに関しては誰も知らないのか、全員が先生の方に注目する。あれ、部長は……ああ、知ってるのか。だから冷静でいられるのか。よし、その面白いことは何か聞こうじゃないか
先生がゆっくりと口を開いていく

「今週末の土曜、授業参観だ」
「……………え？」

その久々に聞いた単語から色々なパターンの検出を開始した。
…駄目だ… 特定できない… いや、これは先生の冗談か！！ 高
校生になってまでそんな授業参観だなんて…

「今週末の土曜、授業参観だ」
「なんでですかー！！」

「エルフィ!?」「エルぽん!?」「エルフィ殿!?」「
「
!?!?!」
「……………」

エルフィの反応に全員が啞然とする。テーブルの上を両手をバシ
ンと思い切り叩き、先生に対して抗議するかのような目で訴えてい
る。その先生は口をぽっかり開けてエルフィの顔を見続けている。
何があつたのかわかっていない様子だ

「だつ、大体高校生にもなつて授業参観つて…ただ恥ずかしいだ
けです!! 親に恥を見せつけるんですか!? 止めてください!
! 今すぐに!! そつ、その参観デーは中止です!! お願いし
ますから止めてください!!」

机をバシバシ叩きながら涙目で訴えるエルフィ。その様子を訳わ
からない様子で見つめる部員一同+ゲストメンバー。先生が目線を
逸らしながら後頭部を左手で掻いて口を開く

「……………すまんエストラント…実は、今日の内にクラスの親御さん
全員に連絡を……………」

「……………へ？」

「多分他のクラスも同様だ。……………、と、とにかく……………もう連絡は……………」

「はうあ」

「エルファイ!？」

「またもエルファイが気絶してしまった。ああ、どれだけショックを受けたんだろうか……………」

「それにしても……………やっぱり先生は明日香の事情を知っているのか。一瞬だけ明日香の顔を見ていた気がする。明日香も気がついたのか、しかめっ面で地面を見ていた」

「……………にしても、授業参観……………? 高校でもやるのかあ……………穹、笑ってるんじゃない。もしかしたらお前の学校だってあるはずだぞ? と尋ねたら、もう1学期にやっていたらしい」

明日香、エルファイを除いた5人で溜め息を吐く

「なんだか、その参観日が少し荒れるんじゃないだろうか。そんな不安を抱きながら本日の部活は解散となった」

……………それにしても

「エルファイのあの異常な反応は一体何事だったのだろうか?」

5 0 O n s c h o o l d a y s 1 (後書き)

ちなみに自分の通う高校には授業参観が存在します。実際に今年、母親が来てました。皆さんの高校はどうですか？

さてさて、エルフィ。どうしてこうなった？

次回、多分明らかにします。ではではorz

5 1 O n s c h o o l d a y s 2 (前書き)

もう綾香もメインヒロインでいいんじゃないかな……

「……もう、死にたいです」

「いや落ち着け……」

朝食中に何を口走っているのだねこの娘は。少しは時と場合を考えなされ

10月13日土曜日、晴れ。普段の土曜日ならこんな時間に起きているわけもなく、メンバーが全員揃っていつものように朝食を食べている。今日はパン切れなのか、珍しくご飯が出てきた。ちなみにおかずは母親製目玉焼き。明日香製卵焼きではない。決して明日香製卵焼き（を装った殺人兵器）ではない

人それぞれ目玉焼きに掛ける調味料は異なると誰かが言っていたけど、それは本当らしい。醤油、ソース、塩、ケチャップ、人それぞれだ。我が家では醤油派しかないが、このメンバーになるとやっぱり変わる。目玉焼き恐るべし

「……何でそんなになるの？」

「いいんです近藤さん……わからないかもしれませんが、家庭には家庭の事情があるんですよ……そうです。わからないでください。理解しようとしなくてください……本当に、頼って置いてください……本当に……」

机に突っ伏して僅かな鳴き声で喋り続けるエルフィ。どうやら今日の授業参観をどうしても嫌っているらしく、あの日以来先生にずっと講義を続けていた。でも今日ここにいるということは結局頼み通せなかったんだらう。何が嫌なんだらうか

……まあ、確かに俺も親（母さん）が来るのは非常に嫌だ（以下、想像）

「真箏ー頑張つてー!!」

「違うわよ真箏!! それはずバリ4よ!!」

「はい!! 息子に代わって私が回答します」

周囲からは笑いの声が。自分でも顔が赤くなっているのがわかる

「……………」

「大丈夫か真箏…………… なんだかお前もエルみたいなんだが……………」

どうやら顔に出てしまっていたらしい。想像でもこんな事をしてはいけないというのがよくわかった。わかりすぎた。辛い。絶対にあなりそうだ……………」

というか、母さんの顔ってみんなに知られてるんじゃないか……………
? (#5 参照)

そんな事が起こること無いように祈りながらお茶を飲む。うっーん、温い!! 氷が欲しいです!!

「……………もう、駄目です。アレが来たら……………わたしは生きてけないです」

「そんなレベルなんだ……………」

琉華がエルフィの肩をポンポンと叩きながら慰める。女子全員が琉華と同じような行動をしていたが、全くもって無意味。効果が得られなければ逆に悪化しているようにも見えなくはない。本当に親を嫌ってる? もしくは他の理由があるのだろうか

その光景を見ながらコップにお茶を注ぐ。しかしまあ、エルフィに関しての問題は少しわかったとはいえ、もう一つの問題として明

日香だ。今の今まで忘れていたが、明日香は現在1人暮らし(？)な為、両親がいない。仮に明日香の親は誰だ、と聞かれた際にどう答えるのだろうか。誤魔化すのか？ ……非常に心配だなどと思いつつ荒ぶるエルフィを見つつかお茶を飲む。温いからやっぱり氷を入れるべきか？

すると、廊下が続くドアがガチャリと開いた

『真筆ー、今日の服これでいいかしらー？』

「ブツー！！」

「汚っ！！」

母さんの格好を見た瞬間に飲んだお茶を健太の顔面目がけて全て吹きだした。被害は健太だけ、問題は全くない。いや、母さんの服装に問題がある

「アンタはこれから一体何処に行くつもりだね！？」

「決まってるじゃない。高校よ、こ・う・こ・う」

うん、それは知ってる

「普通アロハシャツ着て学校に行く親がいるか……？」

目頭を押さえて溜め息を吐きながら発言する。そう、今母さんが着ているのはいつか何処かで見ただことがあるような気がするアロハシャツ。今の季節が夏だったらまだ少しは……少しだけは理解してもいいものの、今の季節は生憎ながら秋。の真ん中。涼しいのにアロハシャツを学校に着ていく親がこの世の何処に存在する………確実にウチの親だけだ。毎回思うが、この人の脳内はどういう感じに出来ているのだろうか

ああ、思い出した。アロハシャツって言ったら先生か

「あのな母さん……別にハワイに行く訳じゃないんだからその服装はやめてくれ……息子の俺が恥ずかしい……」

「あらそう？　じゃあ　」

どうやらわかってくれたらしく、そのままさつきまでいたであろう部屋に早歩きで戻っていく我が母親。全く……つつこんでもつつこみ切れない……親父、どうしてあんな面倒くさい母親と一緒になつたんだ……いや、そうしないとここに俺がいないか

そんな失礼すぎる事を思いながら席へと戻る。横では健太が手ふきで顔を一生懸命拭いていた。後でお詫びにアイスでも奢ってやろう

「……で、そつちはまだ駄目か……」

「さつきからこの状態のままだ」

エルフィを慰めている女子たちに代わって健太の横に座る光久が答えてくれる。かれこれももう15分以上……いや、そろそろ17分くらいか。それくらいの時間こんな感じである。これ、学校に行けるのか？　というか行けても遅刻するんじゃないだろうか……

「なあエルぼん……」

顔を吹いている健太が目だけを手ふきから出してエルフィの名前を呼ぶ。口元にタオルがあるから若干言葉が聞きづらいが、何を言っているのかは普通にわかる

「そんなに嫌なら休めば良かったんじゃないか？」

おお、健太にしては珍しくマトモな案を出すじゃないか。いや、マトモと言ってもサボリと言う反則行為に等しいけど、今日の授業

参観を回避するなら一番やりやすい。今からでも遅くない。今すぐエルフィを家に

「佐々木さん……その意見はわたしも考えました……ですが、なんていうか……学校は1日も休みたくない人間なんで……ちよっとそれは出来ないです……」

「真面目だねえ……僕だったらサボるね!!」

「よし黙ろっ」

少しイラツと来たので頭の頂点にチョップを入れてやった。さっき吹きだしたお茶が少し残ってるのか、若干髪の毛が濡れていた

「……なんでこんな事に……」

「まあエルフィ、ここは仕方がない。頑張って乗り切るしかないだろ。俺も手伝えることは手伝うからさ」

「うう……神崎さん……それじゃあよろしくお願いしますうう……」

……

……隣の席だし、やれる事はやるうじやないか。なんだかもう見てられないし

「」「じとー」「」「」

……残りの女子3名の目が少し怖いんですけどね？

「さて、エルぽんの問題も大方片付いたみたいだし、そろそろ学校行きますか!!」

健太がテーブルをバンツ、と叩きながら席を立ち上がりつつそう言う。それにつられて他のメンバーも準備を始め、玄関へ移動しよ

うとする

「忘れ物無いかー？」

「……うむ、問題ない」

光久が最後に部屋の様子を確認してみてくれたみたいだ。さて、準備はOKだし、行きますかあ……気が進まないけど

授業参観かあ……なんだか気が重い、と思いつつ玄関の扉を開く。さて、今日も新しい一日が

『待つて真筆！　これは!?!』

扉を半分ほど開くと後ろから母さんの声が聞こえてきた。ああ、やっと着替え終わったのか、と思いつつ全員で後ろを振り向く

「アンタはその服をどこから取り出したというのだねえ!?!」

『おお……』

「どっつ?　似合っつ?」

いや、なんつーか……似合ってるけど……似合ってるけど、年齢的に少し厳しい!　その衣装は!!

「いや……高校生時代に還れるわあ」

正直な話もうつつこむのに疲れてきた

何故なら母さんが着ていた服が、姉貴の着ていた弦巻高校の制服だったからだ。にしても流石親子、似合っている……

「……やっぱりもう死にたいです」

「だから落ち着こうな？」

通路路と昇降口まで正常だったのに席に座った瞬間にこれか……
本当にどれだけ嫌なんだろうか

あれから特に何も問題もなく登校し、それぞれがそれぞれの教室に到着し、更にそのそれぞれがそれぞれの席に……着くわけもなく、エルフィと俺は自分の席へ、健太は席に座らずエルフィの机の上に顎と肘を乗せていた。当然笹原さんもそこにいる

「ねえちよつと神崎、エルフィこれで大丈夫なの……？　というか
アンタ達理由知らない訳？」

「仰るとおりでございます」「」

その返事の直後、「使えないわね」と小さく呟かれた気がした

とりあえず登校中にも聞き出そうとはしたものの、結局理由は教えてくれなかった。さっきからの発言から予想して親関連だとは思
うが、その詳細がわからない。家庭には家庭の事情とも言っていた
ので詮索するのもいけないかな、と思いつつどうしても聞いてしま
う。普段あれほど大人しいエルフィがここまで取り乱すような事件
見逃せるか。見逃して溜まるか

4人でそれぞれの思いを込めた溜め息を吐く。健太と俺は似たよ
うな理由かもしれない

「何、真箏も今日の深夜番組見逃したの？」

「んな訳あるかアホ」

……大分違っていたらしい。察するにコイツはウチでは写らない

やましい映像の流れる深夜番組を見逃したことに對する溜め息を吐いたみたいだ。紛らわしい真似をすな健太

まあ健太の溜め息の内容は違えど、笹原さんの溜め息の理由はわかる。ちゃんとエルフィの事を

「え、神崎……アンタ、なんでアタシが料理を上手く作れなかった事を理解できるのよ……」

「もう嫌だよお前ら」

まさか1年4組最終防衛ラインの笹原さんまでどうでもいいことを考えておるとは。凄いよ、誰もエルフィの事心配してねえよ

さっきより大きい溜め息を吐いてしまった

「真筆ー、溜め息ばかり吐いてるとすぐに歳取るぞー」

「誰のせいだ誰の」

少なくともこの大きな溜め息の理由は目の前にいる2人にありそうな気がする。俺の若さを返せコノヤロー、と言ったら笹原さんに確実に殺されそうなので心の中に秘めておく

しかしまあ、さっきからずっと机に突っ伏した状態だ。この精神状態だといつ自殺するかもわからない……いや、この精神状態とはいえ、エルフィならそんなことはしないか

「とにかく、まずはエルぽんをどうにかしないと」

「そうね。もう少しでHRも始まるし……それまでになんとか」

ガタッ

目の前で会議している最中、急にエルフィが立ち上がる。何かと思つて3人でその様子を見てみると、1人ベランダへと向かつてい

った。もしかして空気でも入れ換える……もしくは吸いに行くのか？ ベランダへと続く窓を開いて柵に手を掛ける。……これって非常にマズい状況になったのではないのでしょうか？
……悪い予想の中、その場でジャンプしよった

「「「ちよ、まああああああああつっ！！！！！！」」」

慌てて3人でベランダに出てエルフィの腕を掴んで教室へ引き戻そうとする。くっそ、なんて力だ……3人がかりでこんな苦戦をさせられるとは……何処に隠してたんだこんなパワー！！

「お、落ち着けエルフィ……！！！！」

「放してください神崎さん！！わたしはもう駄目です！！アレが来たら死にます！！肉体的にとか精神的にとかじゃなくて社会的に死にます！！嫌なんですもう！！」

「おーちーっーきーなーさーれー……！！！！」

なおエルフィは抵抗する。まるで本当に今ここから飛び降りるんじゃないかとばかりに。いや、よく保ってるなこの柵。4人分の力が……そうじゃない。早く教室に引き入れないと……！！

すると、神様がこちらに見方をしてくれたのか

バキッ！！

「えっ……きゃああ！！？」

鉄製で壊れないだろうと思っていた柵の一部が外れてこちらに全ての力が戻ってきた。つまり、4人全員が教室に……

ドスンッ！！

……思い切り不時着した。しかも何故だか俺が一番下に……

「いつつ……」「どうなったんだ……?」

「とりあえずセーフか……って、重い……っ!!」

気付いてくれたのか、全員が早急に降りてくれた

抵抗すると思っていたエルフィも大人しく席に座り、事情聴取を3人で執り行う。エストラント氏は「気付いたら身体が勝手に動いていた。理由はよくわからない」と語る。なお今後の分析が解り次第、報告をします。以上、弦巻スタジオからお送りしました

x

「さて、1時間目と同時に参観が開始だが」

エルフィをなんとか落ち着かせることに成功して先生が直後にやってきてから大体4分くらいが経過してであるうHRの最中。今日の参観に関する注意事項やら、その他色々について話している。今日は全部で2時間授業、それで月曜が丸々休み。なんだか学校の用事もあるから今日こうなったとか

とりあえず2時間だけ授業を受けて丸1日が休みになるなんて夢の様だ。それを思うと全く苦しく思えない……はず

目だけで右にいるエルフィを見てみる。先生が来てからも変わらずに机の上に突っ伏している。もう諦めて見られたらどうだ……?

と言いたくなってしまいが、それを言うと本当に自殺しかねないので止めておく。さっきはさっきで大変だった。壊れた柵の処理とか……ちなみにその壊れた柵は、見えないように掃除用具入れの底、

モップで隠れた部分に隠しておいた。今後見つかると危ない気もするので、後で持って帰るしかない。とは言えベランダを見れば一瞬でわかるような物だ。実際に少し足りない

「今日は1時間目に」

数学とLHR。ぶつちやけ2時間目にHRをやる必要は無いと思ったりもするが、なんだか決めごとをするらしい。そんな光景を親御さんたちは見て面白いのか……？

などと思いつつ窓の外に広がる校庭を見てみる。もう来ている人も多いのか、見慣れた校庭には多くの車が止まっていた。文化祭と体育祭の時とは違って、テントではなく車。機械の塊だ。えーと……あ、もう母さん来てるな。あの時に壊れたバイクが止まって……普通授業参観にバイクで来る親はいるのだろうか？ とうかまさか本当に制服で来ないだろうな……？

「……ん？」

母さんの来てくる服装の事を心配しながら校庭を見ると、一台の黒塗り高級車が学校に入ってきた。世間で言うリムジンとかそんな感じの車が。来客か？ それともこの学校にお坊ちゃまとかお嬢様とかが登校してて、その参観か？ どんな人が降りてくるのだろうと思いつつその車の行方を見ていたが、結局その車は見えない場所に移動してしまつて誰が降りたのかは見えなかった。まあ、何処かのお屋敷の人に……お屋敷？

そういえば今の今まで忘れてたけど、確かエルフィの家の近くに豪邸があつたな。行く時間帯はいつも暗くてよく見えないけど、確かあの辺にはあつたはず……もしかしてその人か？ それともやつぱり来客？

……ま、どうせその人と直接会う訳でもないし、それ以上の事は

考えていても無駄って物か。でも本物のセレブを見てみたいと言う気持ちも無いわけではない。無理そうだけど。1人で苦笑しながら前を見る。まさかの青チヨークが飛んできた。頬を掠って後ろの壁で粉碎する。先生、知ってました？ チヨークって肌に付くと、中々落ちないんですよ？

水なら一発だけど

あまり目立たないようにするために、念のためと思って入れているハンカチをポケットから取り出して拭いておく。実際の理由は念のためではない。母さんが持って行けとうるさいからだ

「さて、今日は変則授業で9時開始の40分授業。少し職員室に戻るから大人しく教室で待機をしているように」

先生は授業の用意を取りに行くのか、教室を出て行った。それと同時にクラス全体にみんなの喋り越えが戻ってくる。「うわ、母さん来てるし」「安心しろ……俺は父さんが来ている……」「え、あれ滋賀崎のお母さん!? 若!」とかそんな感じの声が聞こえてくる。というかこんな感じの声しか聞こえてこない。どれどれ、滋賀崎の母親は……おお、確かに若い。見た感じだと20代真ん中って感じに……

「真筆は大人の女性がタイプなのか」

「ぶっ!! な、何を根拠に言ってるんだ健太!？」

「いや、だって今……滋賀崎の母さん見てたし」

だからと言ってそう変な推理をするではない。この前みたく……いや、もっと最悪な場面が完成してしまうじゃないか!!

「それじゃあどういいう人が好みなんだよ」

「……それとこれとは話が違うんじゃないか？」

とは聞かれたものの、正直自分でもサッパリだ。とりあえず……

「……そうだな……料理が上手い人？」
「なるほど」

今パツと思いついたので本当でも嘘でもないただの言葉。とりあえずこの言葉が真となるなら、身近にいる人物で考えると明日香はかなーり遠くに分類される。少しは人を殺める料理じゃなくて、人を癒す料理を作れと怒鳴ってみたいものだ。しかも徐々にレパートリーが増えつつある。この前なんてカレーまで習得したくらいだ。そろそろ本当の料理を教えないと危ないかもしれない

『なるほど……真筆は料理の出来る人が好みなんだね？』
「まあそうだな。どつかの誰かさんとは違って人を殺めるのではなく、人の心を癒すような……ん？」

何か違和感を持ったので一旦そこで会話をストップする。よし、とりあえず落ち着いて大きく深呼吸をしよう。そうすれば何かが必ず見えてくるはず……ふう

「そうそう。そうだなあ……例えば毎日俺の好きな物の入った弁当を作ってくれたりとか……」

「うんうん」

……

「あと、周1でいいから夜に料理を作りに来てくれたりとか……」
「うんうん」

「………とりあえず家庭的って感じの人がいいかな」

「よし、ご協力ありがとう真筆」

「おい穹、なんでここにいる」

何度も何度も聞いたことのある声を聞いてちゃんと確信に至り、理由を尋ねながら後ろを振り返る。そこには母さんと一緒にその場にいる幼馴染みの姿が

「ちよ、おま………!!」

「あ、どう？ 似合うー？」

いやいやいや、似合うとか似合わないとかそういう問題じゃないんだその格好は!! その格好はこの学校内ではアウトだと思う!! とうか待て、なんで母さんまで同じ服をチョイスしているんだ!?

「なんで高校の制服なんだよ!!」

『なんだって!!?』

ああ………バカ男子共が反応しよった

今目の前にいる2人の着ている服が朝と変わらないこの学校の制服についてまず驚いた。要するに母さんはあの後着替えてない。そして穹が着ているのは姉貴の着ていた制服の余り………なんでだろう、この2人がこの服着ても全く違和感が無いような………

いや、今はそこ関係ない

なんだかもう俺の席周辺男子で取り囲まれちゃってますからね!?

「はあ………」

溜め息を吐きつつその場からなんとか脱出する。もう授業が始まるといふのになんだこれは……なんだか子の俺が恥ずかしくなってきたよ……親御さんたちもガヤガヤしてるし……
それにしても……

「おいエルフィ、そろそろ授業始まるぞ？ いい加減諦めたらどうだよ？」

「……………大丈夫です。ご心配なく……………」

エルフィの席は奇跡的に囲まれていなかったもので、会話に成功する。ちなみに健太もすでに避難していたらしく、話しかけたときにはエルフィの反対側に肘を乗せていた。その横にはもちろん笹原さんも腕を組んで健太を見ている。そういう意味じゃない。何かやらかさないかを見張っている目だ

「ま、本人も心配なくって言うてるし、大丈夫なんじゃない？」

「そうねえ……………とりあえず後の事は神崎に任せるわ。どうせ席隣だし」

「そうやって俺にお守りをしろとな？」

「Oh, Yes!」

親指を立てながらこちらに向けてくる2人。おい健太、喧嘩売ってるのかその手の向きは。……………まあ確かに席が隣の俺ならなんとか

……………

「……………5……………4」

「……………へ？……………」

どこかで5秒カウントが始まったらしい。機械音ではなく声で聞

こえて……近い、エルフィか!? 突っ伏してるから余計に小さく聞こえる!!

それにしてもなんのカウントダウンだろうか……? もしかしてまたベランダに特攻……そういう訳じゃないか。一体……

「……3……2」

考えている間にもカウントダウンは減っていく。駄目だ、わからない

すると、やっとエルフィが身体を起こす。何かが始まるうとして

「……1」

エルフィが席を立ち上がった。そして

「……!!」

「「「なっ ……!?!」」」

「0」のカウントをすと思いきや、席を立ち上がったエルフィは勢いよく教室の外……と言ってもベランダではなく、後方ドアから教室を出て行った。今までに見たことのないスピード、クラスの後方では男子にとっての神風と言わんばかりに風が巻き起こっていた。ちなみに被害者は0

「おい真箒、追うぞ!!」

「あ、ああ!!」

健太の言葉でハッと我に返る。あのスピードに驚いたのかポーツとしていたらしい。笹原さんは念のため教室待機と言うことで俺と

健太でエルフィの後を追う。そして、教室出口に差し掛かったとき、男性の悲鳴が廊下から聞こえてきた。一体何が！？

急いで2人で廊下に出る。そこにはエルフィが通ったと思われる道が生まれていて、その直線上には身体が宙に浮いているスーツ姿の男性と、首に綺麗にラリアットを決めている弦巻高校の女子生徒の姿があった。間違いない、教室を飛び出した本人だ……って、

「「何やらかしてんのー！？」」

首に腕を決めたまま廊下の奥へと走っていくエルフィ（と思われる金髪女子生徒）と、首に腕を決められたまま宙を浮くスーツ姿の金髪の男性。突き当たりの角で左に曲がったので、生まれている道を急いで走って急いで曲がる。だがすでに2人の姿はなく、完全に見失ってしまった

「やべえなオイ……」

「くっそ……すみません！ どなたか金髪の女子生徒が走っていったのを見かけてませんか！？」

周囲にいる親御さん達に尋ねてみる。2人は1階に向かったらしく、男性はかおが真つ青になっていたと言う。どれだけ危険な状況に……

目撃証言を頼りに2人で走る。そして辿り着いた先は

「部室……か」

気付いたときには部室の目の前に立っていた。もう授業開始のチャイムは鳴ってしまったので、早めに連れ戻さないとならない。とは言え開いていない部室に何の用が……？

「おい真箏、鍵が開いてる」
「へ？」

いつの間にか扉の前に移動していた健太がドアノブを捻っていた。音を立てないように少し開けたらしい。中にいるであろうエルフィに気付かれないようドアに接近し、その僅かな隙間から中を覗いてみた。そこには

『……なんで来るんですか』

『なんでも何も無いだろう。お前の授業参観じゃないか』

誘拐犯（？）のエルフィと、被害者（？）の男性が何かを話しているみたいだった。立っているのではなく、ちゃんと椅子に座って

『それくらい知ってます。だからこそ来ないでください』

『エルフィ……いいじゃないか。家族間のスキンシップくらい』

『そうですね。あのラリアットで今後のスキンシップは永久に訪れないですね』

『酷いっ！！』

……家……族？

「おい健太、あれがエルフィの親って知ってたか？」

「いや始めて見たな……」

そう言われると確かに何か微妙に似ていなくもない。顔はやっぱり違うけど、金髪に関しては何となく同じだ。なるほど……確かに父親がイギリス人って言うってたな

気付かれないようもう少しだけドアを開ける。一瞬だけ男性と目があつたような気がしたのは気のせいか……？

『話はこれ以上ありません。わたしはこれから授業を受けに行くので早く帰ってください。でないともママに殺させます』

『もっと酷い事になってるよ!?!』

「ク……クク……」

「ま、ま……ママ……」

最低だ俺ら

本当に気付かれないように2人で息を殺して笑う。まさかあのエルフィが母親の事を……ママ呼び……新しい事実が発覚した。してしまった

『……エルフィ』

『話しかけないください。わたしはもう行きますので』

『いや……入り口にいる彼らも入れてあげたらどうかなー、と』

『へっ!?!』

マズい……やっぱりさつき目が合ったような気がしたのは気のせいじゃなかったのか……!! 早くここから撤退を……

「ま、ま……ククッ……」

駄目だコイツ!! 失礼すぎる!! ツボに嵌りすぎだよ!!

健太をなんとか立て直そうと身体を起こす。しかし

「神崎さん? 佐々木さん?」

ああ、駄目だ。完全に捕まったよ

「初めまして。私はラーサー・N・エストラント、エルフィの父親です。いつも娘がお世話になってるね」

「は、初めまして……」

今は授業中だということになんてこんなまったり会話してるんだろ
う男性陣……なんだかよくわからんが、テーブルの上にはお茶が置
いてある。ちなみにエルフィはラーサーさんの隣に不機嫌そうに顔
を赤くしながら座っている。「ママ」と聞かれたのが相当恥ずかし
かったらしい

「と、挨拶をしたものの今は話題が無いらしい。そして今は君たち
は授業中の身だ。早くエルフィを連れて教室に戻りなさい」

「は、はい……」

「戻りますから来ないでください」

「ね、酷いでしょ？」

「は、はあ……」

エルフィの父親を拒否する能力は、姉貴が親父の拒絶する能力に
若干似ているような気がする。見ていて少しも違和感を覚えないの
は何故なのだろうか……

「まあとにかく、今は教室に戻るのが先だろう。エルフィがそこま
で言うのなら仕方がないが、私はここで帰らせて貰うとするよ」

そしてこの場にいる4人で席を立ち上がる。どうやら本当に帰っ
てしまうらしく、凄く寂しげな表情をしていた

……しかし、エルフィのここまで授業参観を嫌がる理由がやっと

わかった気がした

「……エルフィ？」

「いいんです。いいんですよ、これで……」

ラーサーさんと別れて昇降口から教室へと3人で向かう。なんだかさっきまでの表情とは違って少しは明るい表情をしていた。とりあえず完全ではないけど元に戻ってくれたようで何よりだ

「とりあえず早く行こうぜ。先生に怒られるぞ？」

健太に急かされたので少し歩くスピードを速める。到着と同時に少しだけ説教を受けたが、授業はすぐに再開された。穹は俺の席の周りでビデオカメラを回して近距離撮影を楽しんでいた。誰かが問題を間違えるとクラスの全体が沸く
しかし

「なんで……今更……」

席が隣だからすぐに気付くことが出来た
穹は気がつかなかつたみたいだけど……

さっきの元に戻った明るい表情とは逆に、悲しそうな表情をしているのを見逃すはずは無かった

5 1 O n s c h o o l d a y s 2 (後書き)

最後はやっぱりgoodです
ではまた次回orz

#52 テストに向けての(前書き)

今回短いですw

そしてついったーはじめましたw

6r0kunderstand

ですw

気が向いたらフォロー

とかお願いしますorz

52 テストに向けての

「ふう……」

色々あって中々凄い状況になっていた授業参観も無事(?)に終了してからもう3日が経過した10月16日の火曜日、我が神崎家の食卓にはいつも通りのメンバーが集合していた。今日は穹も学校があるということでの場にはいない。なんだ1人減っただけでかなり静かになるのだと実感する

「どした？ 溜め息なんか吐いてよ」

溜め息ではないような溜め息を聞かれてしまったのか、健太が口の中にパン(だった物)を含みながら話しかけてきた。毎回言ってる様な気がするけど、ちゃんと口の中の物を飲み込んでから話さない

いつもの如く心を読まれたのか、口の中身を飲み込むと再度同じ質問をしてきた。今月末の行事的な何かに対しての溜め息だ。中間テストと言う名の学生が聞くと鬱になる学校行事の数ある内の1つ。それが今月末……と言ってももう来週まで迫ってきていた。期間は来週の月曜日から水曜日の3日間にかけて行われるらしい。期末テストでもそうだったけど、早めにテストを切って帰ってからの時間を勉強に充てるために1日3教科で終わる。そのため3日間で行われる。期末テストは教科数が少なかったので2日かけて行われていた

質問に対してテストの事で鬱になりかけてた、と伝えると、その場にいる全員が「思い出させるな」と言った感じの表情をしながら下を向いていた。なんだかごめんなさい。そして母さん、その光景を見てニヤニヤしないでくれ

「……今回は誰も赤点を取らないといいんだが……」
「ちよつと待つんだ鶴。」「は」「じゃない。」「も」「だ」「も」。前回は誰も赤点取ってねえよ」
「あ、ああ……そうだったな。悪い」

前回の赤点と言えば健太が取っていたハズだ。と言ってもそれは学校側が wars 部の関東大会を取り消そうとして作っただけの事実であつて、実際は誰も取っていない。そういえばそんな話もあつたなあ

しかし今回は、別に近日に大会が近づいているとかそういう話も部長から聞かされていないので、ぶつちやけ赤点を取っても成績以外にはほとんど問題は無いと思う。問題があるとすれば、補習だの課題だの……それくらいだろう。あとは部活にしばらく行けなくなるるか

それそれで楽だと言つのは自分だけの秘密だ。心を読まれないことを祈りたい

「……今回は全体的に範囲が広い」
「確か1学期の範囲も含まれるんだよね……」

左の方にいる5組の2人は今回のテスト範囲についての会話をしていた。そういえばテスト1週間前になったとは言えまだ勉強してないし範囲の確認をしていないような……そろそろ焦った方がいいな……まあ横に冷静なバカが1人いる訳ですが

「やはり英語はよく解らぬ」
「お前は本当希に英語を喋るんだけどな……?」

光久の脳を徹底的に解剖してみたいところだ。今までの結果と考

察からして、光久はテンパった時とか焦った時（？）に英語で喋る事があるらしい。今の状況からすると焦ってはいない……と思う。本当は英語出来るだろ

ちなみにこの7人で英語を出来ないのは俺、健太、光久、エルフイの4人。俺と健太は元々出来ず、光久は出来るように出来ない。エルフイはイギリス人と日本人のハーフだと言うのに残念な始末。そっぴえばあの男性は……

「真筆、今回も世界史を頼む」

「あんな明日香……俺は全教科非対応だ」

得意教科など一つもない。あるのは苦手教科と好きな教科。得意と好きは別次元だ

そして苦手と嫌いは同等の意味を持つ by 神崎真筆

日本全国に同じような意見を持つ男子高校生はどれくらいいるんだろう。少なくとも真横にいる男子生徒は間違いなくそうだ

「だったら明日香。逆に国語を教えてくれよ」

そっぴえば明日香は国語が得意だったような気がしなくもない。

だから逆に俺が教わるのはどうだろう。教えられないのが残念だけど

「あ、ああ……あ……すまない真筆」

「へ？」

「今回の国語の範囲は私も理解できていない……」

「「なんだって!!?」」

何故か横にいる健太までもが反応していた。ああ、そっぴえば前回は皆さん明日香によくお世話になったなあ……国語だけ。その

他の教科は……力を合わせて乗り越えることが出来た

しかし……これだと確実に赤点を（主に健太）取ることになりそうだ……下手して多く赤点が出たら（特に健太）しばらく部活動の停止なんて事もあり得るだろうか……その辺は後で先生に

「ちょ、ま、真箏。何で僕限て」

先生に聞くとしよう

「ま、今回もなんとか乗り切るしか方法は無いよね？」

「……琉華の言つとおり。……佐々木は特に頑張つて」

「みんな僕を虐めてるよね!？」

なんだか健太が可哀想なポジになつてきた気がするの俺だけで
しょうか？

その様子を見て可哀想だと思つたのか憐れだと思つたのか、光久
が健太の肩に手を乗せて慰めていた

……いや

「健太殿……頑張るしかあるまい」

「お前もか!！」

……光久までもが敵に回っていた

「はあ……みんな僕の事をそう虐めやがって!! こうなつたら絶
対真箏より良い点数取つてやる!！」

「お、言つたな健太？ じゃあ今回は勝負しようじゃねえか」

なんだかとんでもないことが始まつた気がしなくもないが、健太

にそう言われると少し腹が立つのでその勝負に受けて挑もうじゃないか！！ 絶対に今の言葉を言ったことを後悔させてやる

「ただの勝負じゃつまらないし、罰ゲーム有りだな」

「いいぜ……それは後で決めるか？」

「そうだね。その時に決めようじゃないか真箏くん？」

「そうだな。その時に決めような健太くん？」

2人でガツチリと手を握り合う。互いに思い切り力を入れているのか、少しミシリと言ったような気がする。いや、それは危ないな

……

とりあえず今この2人の中には黒いオーラが漂っているに違いない

「はいはい終わりにして2人とも。そんなバカやってないで早く学校行こうよ」

「バカとは何だバカとは！！」

琉華にそう言われたので2人一緒にそうつつこんでしまった。言っておくがこれはバカではない。負けられない戦いだ。漢の戦いだ

「それがバカだって言ってるんだ」

明日香にまで言われた

「はいはいどうせ俺たちはバカですよー」

「納得出来ない真箏。「たち」とは何だ「たち」とは。バカはお前だけだろ」

「お前だけには言われたかない」

「……2人ともバカ」

「……」

もうこれ抱き合つて慰めあつてもいいんじゃないかな？ 今の俺なら出来ますよ、望さん？

涙を流さないように堪えながら席を立つ。テーブルの上には朝食が載っていた皿が置いてある。そして中央には黄色い塊、又の名を殺人兵器と呼ばれる物が鎮座していた。これは母さんが平らげることか、親父を病院送りにするのかその行方は母さんのみぞ知る

「ほら、エルファイ行くぞ」

「……………」

6人が立ち上がったとしてもその1人は何かを考えるような……いや、少し機嫌が悪いような表情をしてまだ椅子に座っていた。授業参観が終わった翌日からだろうが、日曜、月曜と続いてこんな感じだ。理由は誰も知らないし、言ってくれようとはしない

「エルファイ」

「あ……はい、すみません」

2度目。今度は気がついたのか、謝りながら席を立つ。表情は変わらずに

「それじゃあ行きましようか」

廊下のへの出口の所にいるみんなの所に来るといつもの表情に戻つて笑顔になる。学校ではどういう風に過ごすのだろう。昨日は振り替え休日だったから家にずっといたので話すときだけ笑顔、特に何もしていない時はあの表情

「はあ……………」

本日2度目の溜め息を吐いた。理由は色々込み、で

「くっそー……2次不等式とか全然わからねえ……」

「安心しろ健太……俺もわからん……」

「少しは真面目に授業受けなさいよアンタ達……」

「そうですよ……だからあれほどノート取った方がいいって言ったじゃないですか」

「仰るとおりでございます……」

本日2回目の授業（つまり2時間目）が終了して、学生達が一番楽しみにしているであろう休み時間という名の休憩時間。今日は数学が2時間（？とA）があつて、その2時間目が？の授業だった。2次不等式とは一体何だ？ そもそもグラフって何だ？ 以前に数学って何だ？ どうせ大人になって使いもしない物を習って何の意味が……

「習っておいた方が将来に役立つわよ」

だったら習った方がいいな。全然わからないけどさ

Aの授業は……確か午後にあつたハズだ。それまでの空きは助かるものの、昼休み後と言う昼食後のけだるさによって集中は出来なくなるかもしれない。いや、確実になる。なんで数学なんて物があるんだろ。誰だ数学を作ったヤツ。死んでて良いから出てこい

「死んでたらず出てきませんよ……」

確かに俺はゾンビとかとは対峙したくない。自分までゾンビになりそうだし

というか2回くらい軽く心を読まれた？

勉強が出来ない2人で更に机に突っ伏す。ちなみに健太の机、黒板前の素晴らしいポジションだ。辺りの男子はほとんどが同じような状況になってたりする。テストに絶望してるに違いない

「綾香、良い勉強方法を教えていただきたい」

「まずアンタは集中力を付けることから始めなさい」

健太は勉強をしない以前の問題があるみたいだった。俺に関してはどうだろうか

「アンタは基礎を徹底的に叩き込みなさい」

つまりは基礎がちゃんと固まれば問題ないということか？

「後は気合いよ気合い」

気合いでどうこう出来るような教科じゃない気がするのは俺だけでしょうか？ 数式覚えても問題はいくらでも変えられるんですよ？

「だからこそ基礎を叩き込めばいいだけの話じゃない」

なるほど……つまり基礎の数式を徹底的に叩き込んで、その数式に問題の数字を当てはめて解けばいいという話ですね笹原さん？

「まあそう言う事ね」

数学のどの難しい問題よりも、心と言葉で会話できる事の方が大問題……今世紀末最大級の世界も驚くビックリ大問題だと思うのは自分だけでしょうか？

読心術の存在についての証明が一番難しい数学問題だと思う

「全ての証明が数学問題だとは限らないわよ」

だったら読心術の存在についての証明をしていただきたいと無茶なお願いをしてみたい

でも実際に心を読まれているのは俺だけなので、証明しろと言われても証明は確実に不可だということは言うまでもない

……テスト鬱だ

「次の授業ってなんだっけー？」

「ええと……国語ですね」

国語かあ……明日香が今回のテストの範囲をよく理解できていない今、ここは本気でかからないと古典問題で終わる。確実に終わる。ありおりはべりいまそかり……よし、ラ行変格活用は完璧だ……！

「今回はそこ出ないわよ」

「そんなバカな……！」

そこが出なかったら何処で点を稼げと言っただ笹原さん……文章問題は無理だ……かといって古典問題はもっと無理だ……！

「アンタも少しは勉強しなさいよ……勉強会でも開いたらどうよ」

「綾香。刹那も呼んで勉強しよう」

「アタシは今週都合悪いのよ。他を当たりなさい他を」

勉強会か……そういえば前回の期末テストでも軽くそんな感じのことはやったなあ。それじゃあ今回も開いてみると

「はっ」

勉強会を開こうと思ったままでは良かった。問題は会場、それは俺の家でやればいいとすぐに結論はついたが……が!!

色々と記憶を戻してみる。そういえば今週の土日は親戚が泊まりに来るだのとかそんな予定が入っていた気がする。ヤバい。うちでは勉強会は開けないな

とりあえずその話は保留にしよう

「それじゃあ真筆の家でまたやるかあ」

保留にした瞬間なんて事を言い出すんだこの男子高校生は

「いや、その……すまん」

「はい？」

「……今週は無理だ。土日にうちに来るのは不可だ」

「何だと!!!!?」

とりあえず勉強会の会場としての選択肢その1、神崎家が消去された。聞くまでもないかもしれないが、鶴家も消去しておこう。念のため

「仕方ない……昼休みで皆に聞こう。これはかなりマズい状況になつてきたぞ……」

「アンタが普段勉強しないのが悪いんでしょうが……褒めてないわよ、照れないで」

悪口的な何かを言われているというのに照れる必要があるだろうか

「ふう……それじゃあそろそろ時間ですし……席に戻りましょうか」
「だな」

「そんじゃまた後でな」

「真面目にやりなさいよ？」

「肝に銘じておきます」

それぞれがそれぞれの席に戻ると同時に3時間目が始まるチャイムが校内に響き渡った。それと同時に国語担当の先生が教室に入ってきた

……に、しても勉強会か……誰の家は大丈夫だろう

時間は進む

x

「勉強会の会場は何処がいいかって？ 真筆の家に決まっているだろう？」

「即答ですな鶴さん。怖いですよ？」

鬱だつた午前中の授業も全部終わって昼休み。場所はしばらくぶりに来た屋上。やっぱり季節的に考えると少し肌寒いが、やっぱり人気スポットと言うことで人は多い。その一角にwars部7名が集合して弁当を広げている

で、早速他のクラスのメンバーに確認したところ、明日香が即答で返事をくれた。即答はいいんですが、もうちょっと考えるという

ことをしましうね？

「だったらそれ以外に何処があるんだ真箏」

「佐々木家」

「あー悪い。今週の土日は親が誰も連れてくるなって言ってるさ」

第2の選択肢は即行で消去されてしまった。残るは4つ、問題が無い家庭は何処の家だろうか

「ねえ真箏くん。聞くの忘れたけど、真箏くん家は駄目なの？」

「そういえば言ってたな。なんだか親戚が泊まりに来るらしくてな？ それで駄目、と」

「なるほどねえ……ボクの家も今週はそんな感じだなあ」

第3の選択肢もここで消去されてしまった。なんてタイミングが悪いんだろう。我が家もそうだけど、他の家庭も良い感じに予定が入っているんだ。これは試練か何か！ 個人で頑張れっつー神様からの余計なプレゼントか！？

「真箏……流石にそれは失礼だろ」

「……申し訳ないです」

確かに神様を疑うのは良くない。それはそれで仕方ないことなんだ。ありがとう明日香、それに気付かせてくれて

「光久の家はどうなんだよ」

1人で先に食べ始まっていた健太が更に先に食べ始まっていたのかもしれない光久にそう尋ねる。早いな食べ始めるの……

光久はちゃんと行儀を弁えているのか、ちゃんと口の中身を飲み

込んでから喋り始めた

「確か母上も父上も家を空けると言っていたな……ゆえに今週は無理かもしれぬ」

「光久の家もかあ………どんどん選択肢が消去………そういえば光久の家って行ったこと無いな」

「ああ」

言われてみればそうかもしれない。会ってから7ヶ月目だけど、1度も明智家にお邪魔したことが無いような気がする。佐々木家なら何度かお邪魔しているけど、やっぱりメインは我が家らしい。なんでそう我が家に集まりたがるんだこの連中は。わざわざ遠回りまでして来る必要は……

なんでだか知らないけど、女子一同にチョップを入れられた

「いつつ………じゃあ望の家はどうだ？」

チョップされた頭のとっぺんを押さえながら望に尋ねてみる。計4発+おまけの1発を受けたのでかなり痛い

「………多分無理。………なんか改修工事をするとか言ってた」

「そっつえば言ってたね………」

琉華もその事を聞いていたのか、すぐに選択肢は消去される。回収工事………俺たちの事情よりまたえらいこっちゃ

使い方を間違ってる気がするのには気のせいだと思いたい

「………明日香の家は駄目なの？」

「………えっ」

少しばかり恐れていた質問が望の口から解き放たれた。なるほど…… Wars部のメンバーとて全員が全員知ってる訳じゃ……あれ？ 知ってるのは俺だけ……じゃないのか？ 今琉華も反応したよ。うな……？ 気のせいか？

「あ、ああ……確か土日は無理だ。少し都合が悪いな、うん」

……コイツ、嘘付くのエルフィ並みに下手だろ。あからさまに嘘
つて言つて

「……わかった」

るんですよ？

ここまでで6つの選択肢が消去され、残った選択肢は最後の1つ
となつてしまった。もしこれが駄目なら各自家で勉強をすることに
なつてしまう。頼むからOK出してくれ……

6人で最後の人物であるエルフィに顔を向ける。予想は出来てい
たのか、苦笑いをしながら6人の顔を見ていた

「やっぱり最後はわたしですか……？」

「まあ、そうなるな」

「あはは……はあ」

そういえば今までエルフィの家に行った事が無かつたような……
あれ？ 無いよな？ 前までしか行ったこと……いや、暗いからよ
くわからない

「……正直な話、誰も家には来させたくないとは前々から思つてた
んですけどね……もう神崎さんと佐々木さんにはバレたので大丈夫
ですよね……」

「へ？」

エルフィが今何を言ったのかよくわからない。言いたいことはわかったけど意味はわからない。俺と健太に何がバレたと言っただろうか？

「はあ……」

エルフィが大きく溜め息を吐いた。どうやら今言った言葉は本当だったのか、来させるつもりは無かったらしい、のか？

「金曜日、学校終わったら直接家に向かいます。泊まりでも問題は無いですよね？」

『とっ、泊まりっ!!?!?』

「え、違うんですか？」

「泊まり」という言葉に6人全員で驚く。いや確かに泊まりがけで勉強はしておきたいけど、流石にそれだと迷惑を掛けるんじゃないか、と思っっているに違いない。というかエルフィも元からそう考えていたのか……

「わ、私は問題無いが……」

「ボクも……」

「……私も」

待つんだ女子一同。何故我々男子の方を見るのだね

「気にしないでください。その点に関しては大丈夫ですから」

「あ、うん……」

「大丈夫ですか？」

「「「あ、はい……」」」

男子も問題ないことが判明。もしかして女子達はそういうことが無いかどうか心配になったんですね、わかります

エルファイがまた溜め息を吐く

「それじゃあ……金曜日の放課後から開始ですね」

今月末のテストに向けた勉強会が、エストラント家で行われることが決定された

それにしても……俺と健太にバレた事って一体なんだっただらう……

5 2 テストに向けての (後書き)

やっぱりaaaaですb

それと少しばかり遅れてスイマセンでしたorz

#53 On school days 3 (前書き)

サブタイトル? 気にしない

皆さんがこれを見る頃には……自分はしばらく執筆活動を停止しているハズですw

碧の軌跡を頑張りますw 書いたのは9月15日の夜です

……はい

では皆さん

いつ会えるかどうかわかりませんが、しばらくおよろしく……

時間が経つのは早すぎるのか、なんだかんだでもう10月も残り後半戦の3分の1、もしくは下旬に入ろうとしている10月の19日金曜日。本当に早い。テスト前による部活動停止期間というアレがあるからそう感じられるのかもしれないけど、授業を受けている間は凄いい長と思う。ゆえに終わったたら短かったと感じられる

中間テストまであと3日となった。今日の放課後から始まる勉強会を終えればその翌日はとうとう悪魔の週、中間テストが始まる。現在の調子でいくと少しばかり危ない気がする。英語が余計にわからなくなってきたぞ……なんだ仮定形って

いつもの様に数学の授業。季節が季節なのでもうあの暑苦しかった姿を見ても何も問題は無い。ほんの少し暑いかなって思うか丁度良いのどつちかしか最近は思えない。もし11月に入ってあの服装がタンクトップとかになったらなつたでそれは泣く。寒くて泣く

先生が黒板に書いた内容をノートに書き写す。2次不等式か……Dやらくやら やら……わからない記号ばかりが出てきて頭が混乱する。一番数学が出来ない健太は生き残ってるか……？ 黒板前にある健太の姿を見てみると、テスト前でヤバいと感じたのか、それともとうとう健太の本気が現れたのか、真面目にノートを取っている姿が見える。昨日になってからあんな感じだな……

「それじゃあこの問題を佐々木」

おっと、健太が指名されたらしい。なにになに？ 「次の2次不等式の解が、すべての実数となるとき、定数mの値の範囲を求めよ。」

$x^2 + 4x + m = 0$ ？ 駄目だ、全然わからない。なんだ2次不等式って、なんだ全ての実数となるときの定数mの値って……そもそもなんだ数学って……

考えるだけ頭が痛くなってきた……

「だ、大丈夫ですか神崎さん……」

「だ、大丈夫だ、問題ない……ただ問題がわからないだけだ……」

横の積で綺麗にノートを纏めているエルフィに心配を掛けてしまったらしい。まさか問題がわからない理由の頭痛で心配を掛けさせてしまうとは……俺も最低だな

頭痛もなんとか治まったので、エルフィに問題のないことを伝えて再び前を見る。黒板前では健太がさっきの問題の答えを……途中式もちゃんと書いて答えを書いていた。よし、アイツがあの問題を解けるなんて夢だ。俺がアイツに劣るわけが……

「おお佐々木、珍しいな。正解だ」

（なんだと！？）

先生のその「正解」という言葉に心の中で驚いてしまった。それと同時にクラスからざわめきの声が聞こえ始める。もちろん健太が問題に正解したという事についてのざわめき。一部からは「あの佐々木が！？」というSの声が聞こえてきた。あとMとTともう1人のSの声が聞こえてきた。いや、男子全員が同じような事を言っていた

そのざわめく教室の中1人の女子、俺ともう1人のクラス副委員長の笹原さんが席を立ち上がった

「申し訳ないんですけど先生。その答え間違ってます。」「じゃなくて」「ですよ」

「なんだと綾香!? 今先生はちゃんと正解って」
「おつとすまん。笹原の言うとおり俺が気付かなかつたみたいだ。惜しかったな佐々木。 - の符号が消えるときはちゃんと不等式の向きも変えるようになる」
「……………はい」

その指摘を聞いた先生は近くにあった黒板消しで健太の書いた答えを……………消す必要は無いと思うけど消し、その上から本当の正解を赤で書く。笹原さんの言うとおり「 から」「 に訂正された答えが書かれる

自信満々に書いた答えが間違っていたのが相当ショックだったのか、元気が無いようにトボトボと目の前にある自分の席に戻っていく健太。なんだかもうすぐにでも自殺するんじゃないかなと言った感じに元気が無いように見える。席に座ると両肘を机に立て、両手で顔面全体を覆っていた。多分泣いている……………と思う

「というか問題一問程度の事であれだけ落ち込むような物か? 普通無いだろ。たかが問題、されど問題と言ったところか

……………しかし、その落ち込む健太を嘲笑うかの様にクラスの男子が全員「あれでこそ佐々木だな」と言っていた。横にいるエルフィは苦笑い、間違いを指摘した笹原さんは全く、と言った感じで健太の事を見ていた

まあ健太の事を気に掛けていても仕方がない。そろそろ板書を始めるとしてしよう

「さて、次でテスト範囲も終わりだが……………大丈夫だよな、お前ら」

そんなに心配しないで欲しい

机の上に置いてあるペンを右手に取り、左手で風で捲れてしまったのかもしれないノートのページを進めて今日のページを開く。途中まで書いてあるけどついさっきからポーツとしてて書くのを忘れ

ていた。時間はそれほど経っていないからすぐに纏められるだろう

「ん？」

今日のページを開くと、そこには風で飛ばされてきたのかかもしれない紅葉が2枚挟まっていた。これだけ赤いつて事はもう秋も本番なんだということを実感する。捨てるのも勿体ないし、家で栞にでもしておこうか？ それとも天ぶら……いや、量が少ないか。それに都会のだから不味いかもしれない、ということ帰ったら決めよう。折り曲げないようにポケットにしまう。さて、始めますか

「ふふ、頑張ってくださいね神崎さん」

黒板に書かれた内容をノートに纏めていると、横にいるエルファイが話しかけてくる。一瞬目だけで横をチラッと見ると、右手で頬杖を突いてこつちを微笑むように見ていた。一瞬だったから本当にそうだったのかはわからないけど、俺にはそう見えた
ペンを動かしながら口を開く

「お前もな。でも気ばっか遣ってないで自分の心配もしろよ？」

「じゃあ気を遣わせてるのは何処の誰ですか？」

紛れもなく自分でございます

「さあ、誰だろうな？」

敢えて自分とは言わずに適当に答えてみる。するとまた横から苦笑する声が聞こえてきた

「そうですね。それじゃあ神崎さんには授業のノートを見せない事

にします」

「申し訳ございませんでした」

「……素直ですね」

もしもの時のライフラインが潰れるのはどれだけ苦しい事か。というかエルフィの纏めたノートが見られなくなるとはどういう事だ。あれだけ綺麗に纏まったノートは買っても貰っておきたい、それだけの価値があるような気もする。先生が言った内容まで隅に纏めているから本当に助けられている

「じよ、「冗談ですよ……」

「その冗談は心臓に悪いわ」

ちよつと大袈裟すぎたかもしれない。黒板に書かれている内容の色が変わったので、筆箱からボールペンを取り出して緑を出す。黒板は黄色だけど、生憎黄色を持っていないので緑で代用している。姉貴がそうだったから今の俺もそうしているのかもしれない。受験対策用ノートがそうだったからか？

先生が黒板消しを持って一部を消していく。そこはさつき纏めた……ってギリギリセーフだ。丁度2分前くらいに書いたばかりの場所だ。そしてそこには新しい内容と言う名の数式が書かれていく。早く書かないと消されるかもしれないから早く写さないか……

「さて、この問題でラストだな。……佐々木、リベンジするか？」

「よしきたあ……」

先生の質問に即座に反応して勢いよく席を立ち上がる健太。勢いが増したのか、椅子が思い切り後ろに倒れて後ろの机にぶつかる。ちなみに滋賀崎。仕返しなのか、健太の腰を思い切り押ししていた

黒板前に移動した健太はチョークを1本手に取り途中式から書き

始める。少し止まりながらも段々と数列を増やしていつている。健太が答えを書ききる前に全部写しておくか……説明も聞いておきたいし。文字を書くペーを速める

「んん？ ああ」

「……ふう」

それほど残っている量も少なかったのですぐに書き終えることが出来た。同時に健太も問題を……もう少しで解き終える所だ。凄い。今までの健太からしてあんな数式を出すなんて……俺も本気でやらないと危ないのかもしれない……あ、書き終わった。間違いが無い。かチエツクまで……

「よし」

何も間違いは無いと信じた健太が席へと戻っていく。それと同時に先生が問題のチエツクを始め、クラス全体の空気が止まった。無理もないのか……？ あの健太がここまでの問題を解くというのは今までに無かった事だからみんな驚きを隠せていないんだろう。先生は上から下までミスが無いかを見る。エルフィは緊迫した様子で先生の姿を見る。笹原さんは納得したかのような顔で前を見る。健太は祈るように手を絡ませている

そして先生の口が開き、クラスの空気が元に戻った

「……正解だ」

「っしやあー！！」

先生の「正解」と言う言葉に歓喜の声と悲観の声が教室に響き渡る。ちなみに悲観の声は主に男子、特に男子で、7割の男子が「ああ……」とか残念そうな声を上げている。そして歓喜の声を上げ

る者は盛大な拍手まで送っている。この音だけを聞く他のクラスはどう思っているのやら

正解を告げた先生が教卓の両手をついて話し始める。気がつけばもう授業も終わりの時間になっていた

「それじゃあこれでテスト範囲は終了した。月曜からのテストは各々気合いを入れて挑むように。あと佐々木を見習え男子一同」

『どついう事っすか!!』

1年4組男子一同、心からの叫び。わたくし神崎真箏も参加しております

「要するにお前らも勉強しろという意味だ。以上、号令」

男子が納得いかない状態で健太から「起立、礼」の号令がかかって数学の授業が終了した。それと同時にクラスみんながバラバラになりだす。男子は4割くらい納得がいていないのか、その場で固まったりしていた

「それじゃあ神崎さん、行きましようか」

「ん、そうだな」

エルフィに声を掛けられて元に戻る。さて、4時間目も終わったことだし弁当を食べますか

そして午後の授業が全部終われば勉強会の始まりだ!!

x

「なあなあ聞いてくれよ！！ 問題に正解したんだぜ！！」
「はいはい。良かったね佐々木くん」

琉華、その反応はいくらなんでも冷たすぎるとちやいますか？
とは言え勝手に一人で喜んでる高校生男子が真横にいるんだけどさ
さっきの数学の授業が終わって学生が待ち望んでいる時間N.O.
2(であろう)の昼休み。今日は出遅れてしまったのか、屋上はほ
ぼ満員になっていて座ることが出来なかった。季節も季節なので問
題がないと言えば問題はない

ということ屋内、明日香と光久のクラスの1年2組で弁当を広
げている

「たかが問題、されど問題、か……」

「おお光久奇遇だな。俺もさっきまでそんな風に思ってたんだ」

周りから見たらあの程度、って感じの問題なのかもしれないけれ
ど、自分から見たら解ければ十分って問題だったのかもしれない。
そうだとしたら共感できる……かもしれない。ちなみに答えだけ見
ても自分にはサッパリわかりませんでした

いつものよう(?)に大惨事な焼きそばを一口食べる。最近ソー
スの味が良くなってきたのか、少し濃い感じがする。でも1週間連
続で焼きそばはやめて欲しいところだ。昨日の時点で危ない気はし
てたけど、まさか本当にこうなるとは……正直母さんの考えに驚いた

そしてまだ一人で喜んでいる健太に驚いた。驚いたから水筒のお
茶を飲んだ。寒い季節でも冷たい飲み物を飲みたくなってしまふの
は何故だろう。どうしても氷とかを入れておかないと落ち着かない

「……そういえばエル、本当に今日から泊まりで大丈夫なの？」
「んぶっ！」

急に質問されて驚いたのか、エルフィが口に含んでいた物を喉に支えたらしく、胸の少し上を手でトントン叩いていた

「ほらエルフィ、飲め」

「ん、んんんんんんんんん」

水筒の蓋を開けて渡すと、勢いよく中身を飲んでいった。おお、これだと俺が飲む分が無くなりそうだ………というかさっきなんて言っただ？ 喋れてなかったからわからなかったけど、「ありがとうございます」って言ったのかもしれない

お茶を飲んで落ち着いたエルフィが息を上げながら水筒を返却してきた。中身は………ほとんど無くなってたけど昼食分は保つだろう。それを床に戻す

「す、すみません近藤さん………もう一度お願いします………」

「………うん、今の水筒は誰の？」

あれ？ なんだか質問内容が違うんじゃないですか近藤さん？
場の空気が凍りついちゃいましたよ？ 健太はまだ一人でガッツポーズしてるけど

「………誰の？」

望が何故かエルフィじゃなくて俺に対して目線を向けて質問してきた。仕方ない、正直に答えて怒らせないようにしよう

「俺の」

「はあ………え、ええっ!？」

「真筈、目と鼻好きな方を選べ」

「待て明日香。なんだその選た」

うああああああああっ!!

「目が！！ 目の光があああっ！！」

明日香に質問するが遅く、気付けば両目に鈍痛が響き、目の光を全て奪われていた。間違いない、今の動きは絶対に琉華だ。何故だ…… 何故こんな状況に！！？

視界を奪われた目を押さえながらさつきまで前だった方を見る。なんだろう、涙と血が混じっている様な液体が手にかかる……

「なんで……なんでこんなめに……？」

「心の中でよく考えるんだ真箏」

「けんたあ……それぜんぜんわからないです……」

何を良く考えればいいのかサツパリわからない。というかコイツが最近言うことがよくわからなくなってきた気がする

「くっそー……全然思い当たら ぐおおおおおおおっ！！

鼻が！！ 鼻の穴が広が 痛 だだだだだだ！！！！」

見えない景色の向こうで誰かが鼻フックを仕掛けたいらしい。それも相当な力の量で軽く身体が浮いてるんじゃないですかーって感じになっている。ヤバイ！！ この状態だと確実に鼻の穴が伸びる！！ 急いで解放を求めなければ……！！

「ごめんなさい！！ なんだかよくわからんけどごめんなさい！！

だからこの鼻フックをどうにか

「……真箏、鼻を取られて死ぬか、頭を貫かれて死ぬか」

「何そのおぞましい質問！！ 怖いよ望！！」

……そんな質問が数回続き、鼻フックを仕掛けられてから約2分後、悪魔の人差し指と中指から鼻が解放された。ちなみに犯人はわ

かっついていない。とりあえず鼻から温かい液体が出てきているのが感覚と匂ひでわかるので、左ポケットに詰めてあるティッシュで応急処置はしておいた。周りから見たらどんなだろう

「……何も見えん」

「自業自得だ」

「自業自得だね」

「……自業自得」

エルフィを除いた女子3名が非常に冷たいです

「健太あ……頼む。俺に弁当を食わせてくれえ……」

前が見えず何が何処にあるのかわからない状態で、弁当を食べられない状況にあるので健太に助けを求めてみる。こうは言うも心の中ではかなり必死だ。これを食べられないと確実に午後死ぬ
だが健太から帰ってきた答えは

「断る!!!」

すぐに断られた。その間1秒もない

「何故だっ!?!」

「僕にそんな趣味はない!!!」

一蹴された!!! 俺にとって今最も重要な事が健太によって一蹴された!!! いやまあ、気持ちはわからなくもないけど流石に酷い! ええい、こうなったら光久、光久だ!!!

「光ひ」

「光久ならトイレ行ったぞ？」
「そんなバカな!!」

タイミングが良いのやら悪いのやら。どつっつこめばいいのかよ
くわからなくなってきた

しかし……つっこみすぎて余計に腹が減ってきた。このままだと
誰も食べさせてくれそうにない気がしてきた……もうこうなったら
女子に頼むしかない、か……

「だ
」

「「断る」「」

「早いつ!! まだ何も言っていない!!」

エルフィを除いた3人に、「誰か食べさせてください」と言おう
とした瞬間に断られた! もうイジメどころの問題じゃないんじゃない
でしょうか? そう思うのは僕だけでしょうか? もう目から
流れてるのは涙か血かわからないんですが?

「エルフィいゝ……」

「すいません……断らないといけない雰囲気みたいなんで……」

その言葉を聞いた瞬間に席を思い切り立ち上がった

「もう嫌だこんな部活っ!!」

何も見えない空間を何処かに向かって独りで走り出す。何も見え
ないから気が楽で良い。このまま何処へ向かえるんだろう……楽し
みだな。……もう嫌だ、こんな部活の人たち……

「ちよつと真筈! ストップストップ!!」

「……にしても楽しみ」
「だよねえ。エルの家ってどんな感じに広いんだろうねー」
「もしかしたらエルの部屋だけで10畳はあるんじゃないか？」
「あ、あるかもねそれ」
「皆さん……」

男子達より先に歩く女子5名がエルフィ宅についての話題で盛り上がった。いや、流石に10畳は無いでしょう明日香さん。それ我が家のリビングに匹敵するレベルですよ……いや、待てよ？ そしたら俺の部屋も8畳だから……なんだ、対して変わらないな

女子達の会話を聞きながら前へと進んでいく。男子一同は女子の家に泊まりがけで勉強会と言うことで軽く行動を制限されている。無駄な発言は控えた方が良くとエルフィからの指示。学校を出てから男子は一言も発さず、目だけで会話をしていた。とは言え内容がわからない。物事の真似はするものじゃない

「あのさ、流石に今は喋ってもいいんじゃないかな真箒……」
（いや穹……無駄な発言は止めた方が良くと）
「いや、まだ到着してないから大丈夫でしょ……というかそれって家での話じゃない？」
「それもそうか」

さっきから全く違和感が無かった穹にそう言われてお口のチャックを解放する。この2人は息まで止めていたのか、急にゼーハーし始めた。アホだ

「そういえば真箒くん、真箒くんはエルの家の近くまでは行ったことがあるらしいけど……どうなの！？ 広いの！？」

左右でゼーハーという効果音を聞いていると、ほぼ正面にいた琉華が振り向きざまにそんな質問をしてきた。色々と思いついて回答する

「すまん。行くのは暗い時間帯だからよくわからないんだ」

「ちえー」

その回答にふてくされるように戻っていく琉華。そこまで残念がられても……わからないものはわからないんだから仕方がない。女子達の会話を聞きながら家へと向かって歩く

「ま、まあそれなりに広いとは思いますが心配は必要ないですよ

……」

「楽しみだねえ」

どれだけ楽しみにしているんだろう女子一同は。まあ確かに楽しみなのは間違いではないけど……そういえばあの男性……エルフィのお父さんもいるんだろうか。なかなか話しやすそうな人ではあったけど……えらい嫌われようだった。我が家の親父と姉貴の関係が浮かんできて仕方がない

1人で苦笑したら健太に後頭部を叩かれた

「そういえばさ、光久の家ってどの辺なんだよ」

しばしの会話が途切れた後、健太が光久にそんな質問をしていた。今更ながら今更過ぎる質問だ。2人共行ったことが無いからわからない。前にいた女子達も気になったのか、こちらを振り向いていた

「む、拙者の家か？ ……あっちだな」

……指を指すだけじゃわからないので、今度実際に遊びに行くとしよう

そしてそれから約15分後、目的地であるエルフィの家へと辿り着いた。普通の家で2階あり、もうそのまま普通に家だ。周りの家と比べても全く比較する必要のない普通の家。比較するならここから奥に見える高級住宅……いや、豪邸だ。周囲から浮いてるだろあの家

『がっかりだ!!』

女子一同は本当に何を期待していたんだろう……揃いも揃って同じ言葉を発すな。失礼だろ

「あ、あはは……まあ上がってください。すぐに鍵を閉めますんでメンバーを脅すかのように言うエルフィ。女子は渋々、男子はドキドキで玄関にあがる。8人でこの玄関はきついので、先に女子から入ることになった。そういえばインターホンと表札が無かったよ。うな気がするの、は気のせいか……？ 男子が入ると本当にすぐに鍵を閉めた。神速と言っても過言ではない気がする

「あれ？ エルフィ、全然家具がない気がするんだけどー？」

「……水も出ないし電気も付かない……怪しい!!」

「というかほんの少しだけ埃っぽくないか？」

「隊長ー、2階にも何もありません」

……女子一同はそれぞれ好きなように移動と発言を繰り返していた

しかし……確かに女子達の言うとおり、家具がなければ少し埃っぽい。玄関の電気で試したけど確かに電気は付かない。水はやめておこう。本当にこの家で生活しているのだろうか？

「……すみません皆さん……こっちへ」
『へ？』

それぞれがそれぞれの発言やら行動をしていると、1つの扉の前で止まっているエルフィに招集をかけられた。何の変哲もないただの扉。この先に何かあるのだろうか？

「えっと……他の皆さんには黙っててくださいよ？」

言い切ると同時に目の前の扉がゆっくりと開かれていく。そこには地下（？）へと続く階段が伸びていた。暗くて何も……あ、電気が付きよった

「じゃあ行きますか」

エルフィを先頭に階段を下り始める一同。地上（家内）より綺麗になっていて、毎日掃除してるんじゃないかなーってくらい綺麗さだ。まさかエルフィの家の地下にこんな地下通路があるとは……でもこれは一体何処に繋がっているんだろう

狭い通路にコツンコツンと8人分の足音が反響する。反響するから誰も声を発しようとはしない。ただただ歩くだけだ

やがて階段も下りることなく真っ直ぐな道となり、今度は登って真っ直ぐ行ってまた登りになる。軽く登山をしている気分になってくる

「もっ少しです」

エルフィの小さな声が大きく通路に響き渡る。それと同時に何処かに繋がっているのか、扉が見えてきた。鉄製の丈夫そうな扉だ。しばらく歩くと到着、そこには大型セキュリティ的な感じの……目と指で本人確認するアレが備わっていた。凄い……何故ここまで……

もちろん本人なのでロックは解除された。重そうな鉄製の扉がゆつくりと開かれていく。太陽の眩しさに思わず目を細めながら扉が出る。そして目の前に広がる景色は

『……え？』

「よ、ようこそ、エストラント家へ……」

さっきの家から見えていた豪邸が左手に広がっていた

5 4 英語と英国と英人と（前書き）

一斉更新2話目ですb なお前回の続きで同日のお話
やっぱり最後はgood goodですね

5 4 英語と英国と英人と

「ぼーん、とそんな擬音がどこからともなく聞こえてきた気がしなくもない。エルフィを除く7人は左手に広がる光景を見て大口を開け、絶句していた。と思う。数名は目の前にいるから後頭部しか見えないので表情は見えない。でもそんな後頭部よりその先にある豪邸の方に目が行ってしまふ。大きい、大きすぎる。そして庭は広すぎる。とりあえず言葉なんて物は出てこない。誰もが無言のまま豪邸の正面を見ていた

「え、えつと……」

誰も反応しないことに疑問を抱いたのかは知らないが、エルフィが表情を引きつらせながら話しかけてくる。いや、誰も反応できないのは無理もない。あの普通の家からこんな豪邸に繋がっているなんて誰が想像しただろう。誰も想像しない

とりあえず今言えることは

「なんじゃこりゃ……」

それくらいしか言えなかった。本当なら腰を抜かしても良いような状況だったけど、それ以上の破壊力で抜かすことすら出来なかった。なんだそれ

全員に正気という物が戻ったのか、深呼吸をしてから全員でエルフィの顔を見る。その時の表情はやっぱり引きつったまま。それほど通したくなかったのか？

……あーなんだろ。これが夢オチってのは無いんだろうか？ そ

れとただの張りぼてでした」とかそんなオチも……それはないか。普通に立体的だし。まだ夢……いや、今一瞬何かが掠った気がしたけど気のせい？ 地味に痛いんですが

「えつと……ここがエルの家なんだよ……ね？」

「は、はい……黙っててなんかすいませんでした」

横では琉華とエルフィがなんだかこう、ぎこちないやり取りをしている。まあ無理もないだろう。俺だってそうなるかもしれないてか待て。エルフィがこの豪邸に住んでいるとして、そうなった場合のエルフィの立場ってどうなるんだ？ 豪邸に住んでいるって言うことは確実にお金持ち。ゆえにお坊ちゃまとかお嬢様が……お嬢様かあ……まさかこんな身近に……

「お嬢様っ！！？」

思わずその場で叫んでしまった。なんだか頭の中で整理したらしたで……おかしくなっちゃったよ！！

あまりに大きな声だったのか周囲の7人が耳を塞いでいた。そして今の声を聞きつけたのか、豪邸の入り口が開いて数名のメイドさんらしき人が出てきた

「いや真箏……まずここに来た時点で気付くべきだよな？ まあそ

れ以前の話だけだよ……」

「へ？」

耳を塞ぎながら穹が声を掛けてくる。なんだかこう、ごめんなさいそれはともかく、確かに来た時点で気付くべきだったと思う。

でもそれ以前の話とは一体どういう事なのだろう。まさかそれ以外に伏線的な何かがあったとしても言うのだろうか

「……長野県の別荘」

「ほう……」「なぬっ!?!?」「」

健太と一緒に同じような反応をしてしまった。うん、確かにそこで気付くべきだったね。別荘を持つてるなんて普通の人じゃ考えられないよね、はい

今の望と穹の言葉を聞く限り、2人はエルフィがこんな感じの人物だったって言うのは気付いていたのかもしれない。だったらもうちょっと早く言ってくれても良かったのではないでしょううか？

「いや、確信がなかったからな……」

「というか自分で気付いておこつよ……」

「明日香と琉華もか」

光久もなんだかんだで感付いてはいたらしく、同じ理由で確信には至らずに今までいたらしい。となると気付いていなかったのは同じクラスの俺と健太の2人だけ……駄目なクラスメイトだなオイ。友人の事はもう少し知っておくべきなのではないでしょうか？

そしてもう1つ。文化祭で出されていた品物（1年4組）は全てエストラント家から提供していただいた物らしい。まあ確かにあんな美味しい紅茶ならいくらあってもおかしくないよな……

ちなみにさつき外に出てきたメイドさん達は玄関で状況を確認した後、遠くからだだったのでよくは見えなかったが、笑顔、警戒、不安と色々混じった表情で中に戻っていった

「ま、まあ立ち話もあれなんで……とりあえず中に入りましょう。その為の勉強会ですから」

『りよ、了解です』

なんだかみんな敬語になつていた

エルフィを先頭に建物へと向かい、玄関の扉の前まで来る。間近で見るとかなり大きい。我が家の玄関の大きさが2mくらいだとすると、この扉は4mくらいあるんじゃないかなーってくらい大きい。こんな扉が開くというのか……！！

……自動ドアでした

玄関と言う名の自動ドアを怖ず怖ずとぐり抜ける。やっぱり外から見る大きさからわかるように、中も非常に広い。玄関だけでどれくらいの広さがあるんだろう。見た感じだと我が家のリビングが2つくらい……そんな感じかもしれな　殺気！？

その強い邪気を感じた瞬間、男子3人は咄嗟に左に避けていた。避けたと同時に足下を見ると、そこには3本のナイフが大理石に突き刺さっていた。何故！？

「おや、お嬢様。お帰りなさいませ」

「あ、ただいま帰りました」

男子一同はナイフに目が行っていたが、玄関の奥から男性の声が聞こえてきたのでそちらを見る。そこにはタキシード姿の年配男性……いわゆる執事さんと言う人が立っていた。マンガで良く見そうな感じの人だ

しかしまあ……初めて見たよ、こんなやり取り。生で

「……ふむ、そちらの方々は……」

「あ、学校の友人です。この前も話したとおり今日は家で勉強会をすることになりました……」

お嬢様と執事さんのやり取りだというのに、何故か互いに丁寧語を使っているシュールな光景。なんだか見ていると不思議な気分

なってくる

「ええ心得ておりますとも。して、そちらの不浄な輩は？」

エルファイが俺たちの事を紹介してくれると、執事さんの鋭い眼差しが男子に向かってくる。はつきり言わせて貰うと、今すぐに殺されそうな目だ。というか「不浄な輩」言うたし

執事さんが詰め寄ってくる。目の前にいた女子達は道を造るように彼を避けていた。oh...死の予感。執事さんの顔に怒りのマークが浮かんでいるような気がするのは気のせいか

「この中に神崎真筆という人物はいるのですかな？」

「コイツです」「彼だ」

「お前らの友を思う気持ちに感動したよ」

Yes! shibo-flag! 死亡フラグがピンピンしてら。理由はわからんけどな。とりあえず執事さんが片手に持っている4本のナイフが凄い怖いです

「左様でございますか。では神崎様はこのエストラント家執事代表朝比奈時雨しぐれが特別待遇を

「へ？」

「ちよつとお爺ちゃん。エルをあまり虐め あい？」

聞き覚えのある名字と聞き覚えのある声を同時に聞き、穹、エルファイ以外の6人は玄関のほぼ中央を見ている。そこにはこの前話したばかりの朝比奈紗凧さんがいらっしやった

「……紗凧？」

「望……？ それに他の皆さんまで……」

メイド服を着てその場に立っていた

x

「紅茶でございます」

大きな円形テーブルを9人で囲っているとお菓子と呼ばれるケーキと紅茶と呼ばれるお茶が執事さん（時雨さん）の手によって運ばれてきて目の前に置かれる。文化祭の時も見ることがあるので美味し王だし匂いが良い。良いんだが

「あのすいません。俺のだけ妙に毒々しい色をしてるんですが」
「大丈夫です、毒なんて入っていませんよ？ 入っているのは青酸カリですから」

（絶対に殺す気だ……！！）

実際に青酸カリを紅茶に入れた場合、毒々しい色なんてしないはずです。今のは真筍が見た幻覚かオーラの的な何かなので気にしないでください。以前に飲み物、食べ物には絶対に毒素を入れるのだけはおやめください。・佐々木健太からの忠告

時雨さんの顔を見ながら紅茶の毒々しい色を見る。うん、悪気は無いんだよ。多分砂糖か何かと間違って青酸カリを入れたんだね。わかる、わかるよ、醤油とウスターソースを間違えるノリだね、多分。それにしてもこの執事、良い笑顔である

「……まさか紗凧がこんな豪邸に住んでるなんて」

「いやいや、ただ居候つてなだけ。その代わり学校から帰ってきたらバイト的なノリでメイドしてるってね。だからエ　お嬢様とは一応面識が」

「あの紗凧さん……今は別に皆さんでお茶してるわけですからお嬢様呼びは……というかその呼び方やめてくださいって……何回目ですか」

「693回目でございます」

ここからはよく見えないけど、一部の女子では話が盛り上がっているらしい。その他の女子は妙に落ち着かない感じで辺りをキョロキョロしていた。ちなみにこの部屋は接待室だそうで、軽く40畳ぐらいあるんじゃないでしょうか

そして男子は妙に落ち着いてお茶とケーキを食していた。光久にケーキとか紅茶とかがって合うんだろうか

それにしても時雨さんにいつ殺されるかわからないです。なんとかエルフィに止めて貰っている感じだけど、朝比奈さんもなかなかの手練れだ。半端なく力が強い（この前殴られた（らしい））

「とりあえず……お茶を飲むだけだとアレですし、そろそろ始めますか？」

「お嬢様の部屋でしたら、不浄な輩共は私目が相手になりますか」

不浄な輩共と言うのは男子3名の事らしい

「いえ、ここでやるので」

「琉華！　エルフィの部屋に行くぞ！　そして卒アルとかを御拝見になるんだ！！」

「おっけー穹！！　時雨さん！　エルの部屋ってどこですか！？」

「ちよつと藤堂さん！？　穹さん！？」

「かしこまりました。即座にご案内いたします」

「ちょっと時雨さん!？」

もの凄い勢いで穹、琉華、時雨さんの3名はこの接待室から出て行ってしまった。おお、はいはい。速すぎてもう広い廊下には誰の姿も見えない

にしてもエルフィの卒アルか……確かに興味は無いと言えば嘘になる。見てみたいけど、流石に女子のだしなあ……やめておくしよう

「ちょっと皆さんはここで待っていてください！」

エルフィまでもがこの部屋から出て行ってしまった。まあ無理もない。その後が続くようにたくさんメイドさん達があらゆる場所から出現していた。多分この家はメイドさんが多いに違いない。そして執事さんは時雨さんしかいないと思う

「さてと、わたしも仕事に戻ります。……神崎さん？　あまりハメを外すことのないように」

「……はい」

思い切り睨まれたので素直に返事しておくことにした。そして朝比奈さんは軽くお辞儀をした後、エルフィを追うかのように部屋を出ていった。それと同時に一気に身体の力が抜けていくような気がした

「大変だな真筈？」

一気に脱力した瞬間に健太に話しかけられた。なんだか俺と違う立場だからだろうか、もの凄い笑顔でこちらを見ていた

「他人事だと思いやがって……」

「まあ、しょうがないんじゃないか？ なんせ真箏な訳だからな」

「明日香まで……」

ちなみに光久からも同じような返事が返ってきました

更に力が抜けて溜め息までもが出てしまう。なんだかもう紅茶の毒々しい色が抜けてきたような気がした。それでも毒は入っている

「くっそー……なあ、俺ってエルフィに何かしたか？」

「……真箏、それ時雨さんの目の前で言うとか確実に殺されるぞ？」

「……なんとなく了解しておく」

健太の目がなんとなくマジッぽかった。とりあえず返事をしながら首を縦に振っておく。なんだか時雨さんは俺をどうしても殺したらしい

光久の紅茶がかなり残っていたのでそれを手にとって勝手に飲む。うん、美味しい。目の前にある紅茶を飲むと確実に昇天するから……仕方ない。光久は明るく許可してくれた

「しかし……広いな」

「ああ……流石はお嬢様と言ったところか」

「絶対に迷うよコレ。実際問題誰か迷ってるんじゃない？」

「……琉華と穹はそうなってそう」

「というか勉強会ってどうなった？」

残ったメンバーで思い思いの感想、意見等を口にする。誰もが広いと思ひ、誰もが迷ひ、誰もが勉強会についての事を口ずさんでいた。理由はわからないけどそれぞれがそれぞれの溜め息を吐いていた

「我輩じゃー！ 帰還に成功したぞい！！」

「ちょ、穹……死ぬ……」

溜め息を吐いたところでさっき走っていった女子2名が帰ってきた。その手にはさっきまで持っていなかった箱状……と言ってもまるで卒アルみたいな形をしている。もしかして持ってきたのだろうか。そして息を上げてこちらに戻ってくる2人の後ろに時雨さんや他のメイドさんの姿は見あたらぬ。何があつたのだろうか

「いや……ボクたちが卒アル持つてることに気がつかなかつたらしくて、それで時雨さん1人がエルフィとメイドさん達に捕まってお説教を……それでこれが戦利品の中学の卒アル。ちなみにまだ中身は拝見しておりません……」

琉華がゼエゼエ言いながら左手に持つ卒アルを明日香に手渡す。それと同時に力尽きたのか、卒業アルバム入手特別部隊の2人は床に膝を突いてそのままゆっくりと倒れていった。ご苦労であった、藤堂大佐と星乃中佐……2人の勇士は忘れない……

思わず敬礼をしてしまった。それを見た4人からは冷たい視線を送られてきた

「さて、と。それじゃあ見てみるとするか」

琉華から手渡された卒アルを明日香がゆっくりと開いていく。現れるエルフィの中学時代の思い出、果たしてどのような軌跡を辿ってきたのだろうか。色々と期待を込めたままゆっくりとアルバムが開かれる

そして1ページ目にある1枚の写真。その写真を見た瞬間に全員
の顔が凍り付いた

『……………』

次々とページを確認していく。段々とページを進めるスピードが速くなる。そして全員が言葉を失う。胸が締め付けられるような痛い現実

エルフィが写っている写真その全て、楽しくもないような表情で写るエルフィの姿が写されていた

「皆様、夕食のご用意が出来ました。大広間へのご移動をお願い戴けるでしょうか」

なんだかんだで勉強を始めてから約2時間くらいが経過していたらしく、時間を見ればもう7時を少し過ぎていた。時雨さんが部屋に入ってきて時間と用事を伝えてくれる。さつき最後に見たときと比べて大きな変化が 頬に大きな絆創膏を付けている。敢えて何があつたかは聞かないでおくとする

その言葉を聞いて全員がペンを置いて脱力をする。2時間ぶつ続けで勉強をしていたため疲労感MAXな状態。なんだか動けない感じの…… 光久がいる。みんなで駄目駄目な英語をやるうと言う話になっててそれで光久はこの有様。ちなみにこの中で一番英語が出来るのが穹。2番目に俺、そしてその次に光久という順番になっている。イギリス人のハーフだというエルフィはその次に出来ないらしい。というか健太に負けているというのが腹立たしい

大きく伸びをしながら席を立つ男子2名と机の上にぐんにやりとなっている男子1名。そして机に手を突きながらゆっくり立ち上がる女子一同。光久を2人がかりで起こして時雨さんの後に続く。辿

り着いたドアの先には大きな部屋と大きなテーブルが置いてあった。流石はお嬢様の家と言ったところだろうか。なんていうか、マンガとかで見たことがある光景だ

「ただいま運びますのでお席についてお待ちください」

時雨さんに促されてそれぞれが席に着く。実際に座ってみると、個人個人の感覚が結構広いような気がしなくもない。そしてテーブルの周囲には数名のメイドさん。監視なのかなんなのかはわからないけど殺気を感じられる人もいる。その全てがこの一点に集中しているような気がするのはいのせいだと思いたい。願いたい

「ねえねえエル。もしかして夕食も豪華だったり……？」

視界左の方では、琉華がエルフィに対してそんな質問をしていた。ちよつとやめい

「ど、どうなんでしょう……流石に今日ぐらいは普通なんじゃないでしょうか……？」

「……『ぐらい』……普段は普通じゃないんだ」

「え、あ、そつ、その……」

望も望でそんな事を言っている。いつもなら騒がしい穹ぐらいに落ち着けないのかね

なんて言おうとしたけど怒られそうな気がしたので、静かに目を閉じて待つことにした。だが目を閉じるとさっきの卒アルの写真が頭の中に思い浮かんできた

最初に出てきたクラス内で撮影されたであろう写真。そのほぼ中央って言うていくくらいの場所にエルフィが机に座っていた。エルフィがメインで撮られた写真では無かったのだからけど、その写真

の中での姿は孤独、孤立、そんな言葉が似合っていた。無表情のまま読書をする女子生徒。そんな感じに見えて一瞬本当にエルフィンのかを疑った。しかし事実。何度瞬きしても頬を掴つても結果は変わらない、孤独な女子だった。何故そうだったのかは誰にもわからない

もし知っているのだとしたらこの家の人　ラーサーさん、時雨さん、メイドさん達、朝比奈さん。かといって答えてくれそうにならない人物が勢揃いだ（ラーサーさん除く。なお仕事のため非在宅）
誰にも悟られないようにその事を考えている内に、メイドさんの手によって料理が運ばれてきた。メニューはビーフシチューらしい。大丈夫、毒々しい色なんてしていない普通のビーフシチュー。全員の場合に料理が置かれると、この家庭はキリスト教なのか、お祈りっぽいアレをしていた

「そ、それじゃあいただきますでしょうか」

エルフィンが若干笑いながら言う。すると全員行儀良く手を合わせて「いただきます」という挨拶をする。もちろん俺も忘れない

挨拶と動作から食べるといふ動作に移行するのが一番速かった健太が、スプーンを加えながら硬直していた。それを脇目に見つつ自分も一口食べる

「……………美味しい」

食べるのと同時に望が小さな声で感想を上げていた。確かに美味しい。今まで食べたことのない様な味。以前に肉自体が高級なのでは……………？

「……………これ、多分紗凧が作った」

『くっっ』

「あ、やっぱりバレましたー？ 流石は望ですねー」

すると、厨房の方（だと思つ）から見覚えのある……いや、今はエプロンを着ているが、朝比奈さんが頭を掻いて照れるようにしながらこつちに向かつて歩いてきた。そして望の横の開いている椅子に座る

「……紗凧の得意料理。……それに何度か食べてる」

「さ、流石は幼馴染みですね……一応幼馴染みのわたしでもわかりませんでした……」

「いえ、自宅ではあまり作らないですから……」

そういえば望と朝比奈さんは幼馴染みだ。小学校からずっと一緒だったって言うてた訳だし。……でも待てよ？ そうなつた場合、エルフィはどうなる？ 仮にも朝比奈さんがずっとここに住んでいたとして、エルフィとは同じ学区になる。すると当然エルフィは望と同じ学校に通っていたと言つことになるけどこの2人は全く面識がない。つまり……駄目だ、頭がこんがらがってきた

とりあえずこの整理から考え出される答えは、望とエルフィは同じ幼馴染みを持つものにも関わらず面識が無い。それしかわからない
余り考えすぎると身体に良くないと思うので、一瞬思考を停止させてビーフシチューを一口食べる

「……幼馴染みの差」

「そんな……勝ち誇つたような顔で言わなくても……」

「でもわたしとお嬢様はまだ喋れなかつた時からの友人ですからねえ」

「……負けた。……時間では負けた」

「『では』ってやめてくださいよ……」

視界の隅の方ではそんなやり取りをやっていた
更にもう片方の隅では

「じー……」

幼馴染みがこっちを見ていた。何を伝えたいのかはわからないけど、多分「あれ、わたしはなんですか？ 幼馴染みですよ？ だからわたしの料理もすぐにわかるはずですよ？」とかそんな事を伝えたいんじゃないかなーと思う。そんな気がする

あまり見続けて怒られるのも嫌なのでビーフシチューに視線を戻す。健太はすでに食べ終わったらしく、先に出てきていたデザート（チョコレートケーキ）を食べていた。一方の光久はゆっくりと味わうように食べていた。そして残る女子2名は誰にも聞かれないような声で何かを話しているように見えた。とりあえず穹さんの視線が突き刺さるようで痛いです

「ふう……」

何故かは知らないけど溜め息が出た。今日はここに来てから疲れたのか？ それとも勉強のしすぎで疲れてるのか？ それともエルフイの写真の事？ 駄目だ、本当に頭がこんがらがってくる。という意識が朦朧としてきた。なんだか眠い……

「……はあ」

更にもう一度溜め息。それと同時に頭の中の電源が切れたように意識を失いテーブルの上へと頭が引き寄せられていった。その際みんなが立ち上がる音を聞くまでは覚えている

5 4 英語と英国と英人と（後書き）

日付は明日に続く b

5 5 隠した事実と本当の気持ち (前書き)

一斉更新3話目b

#55 隠した事実と本当の気持ち

目を閉じているからなのか視界が暗い。でも日か光が差し込んでいるのか若干明るくも感じられる現在の状況。そしてかなり寝心地のいいベッドに寝ているようなそんな感覚と、近くから聞こえる聞き覚えのある男子2人の声。なんとなく理解は出来た。多分朝だ

「ん……」

ふかふかに感じるベッドとは逆に、かなり重く感じる自分の身体。昨日は全然疲れたわけでも無いのに……何故？

なんとか身体を起こす事に成功すると、左手にある小さい円形テーブルの上にwars部男子生徒2名が勉強道具を広げてこちらを向いているのに気がついた。軽く挨拶をしてからベッドを立つ。予想通りベッドだ。大きい。テーブルの上には数学の教科書や問題集が置かれていた

1つ椅子が余っていたのでそれにそれに座る。すると左に座っている健太が笑いを浮かべて話し出す

「いやあ……お前もよく生きてたこと」

いきなり物騒な話だ

「ちよつと待て健太。何故いきなり俺が生きてる生きてないの話になるんだ？」

「まあ落ち着こうな真筈。1つ1つ順を追って説明しようじゃないか。な、光久」

「左様。情報は整理しながら纏めるのが一番いい」
「む、むう」

2人に説得させられた気がしたので、とりあえず乗り出していた身体を落ち着かせて深く椅子に座る。そして大きく深呼吸をした後、健太と光久の顔を見た

「さてと……真箏。昨日の夜の出来事は覚えてるかね？」

そのくらい普通に覚えている。確か勉強を7時くらいまでやって、時雨さんが夕食が出来たと伝えに来て移動。ビーフシチューが出てきて、作ったのが朝比奈さんで……あれ、そこまでしか……
その事を健太に伝えると、再び2人で笑い出した

「実はお前、食事中にいきなりぶっ倒れたんだよ」

「……はい？」

「それで皆慌てて真箏殿に……なんだったか……え、えーいーでー
？ を使って蘇生を」

「………はい？」

正直に言わせて貰うと全く情報の整理が出来ない。いきなりぶっ倒れてAEDを使って心肺蘇生作業を行われたのはわかる。でも何故倒れたとかそういう理由はないのな？ たただだ倒れただけなのな？ 気絶的な何かな？

「その後医者に聞いてみたらさ、あと量が多いか運が悪かったら見事に昇天してたらしいぜ？」

「なんだその話は！！ 明らかに作り話だろ！？ 何で俺がそんな生死の境界彷徨ってたんだよ！！」

大袈裟すぎる話に思わず立ち上がった。大声を出してしまった。そういえば……多分、ここはエルフィの家だ。あまり大声を出すのはよろしくないと思い、慌てて席に着く。なんだか廊下で走る音が聞こえてきたな

咳払いをして健太に向き直る

「俺が死にかけたと言つのはよくわかった。ちなみに俺が生死の境界を彷徨つた理由は？」

「ああ。実はお前の食べたビーフシチューだけに毒物が入ってたらしい」

「ぶふっ!!」

飲み物が口に入っていたら確実にアウトだっただろう反応をする。その健太の言葉を聞いて確信に至った。至ってしまった

再度健太の方を見る

「それで医者呼んでよく確認したらお前の体内で青酸カリが検出されてな？　んで、エルぽんが時雨さんに詰め寄ったところ、『はい。あの腐れ切ったゴミを処分するために使用いたしました。これもお嬢様の身のため、これで安し』って途切れて、今日はまだ時雨さんの姿を見ていない、と」

何やってんだ時雨さん。何があつたんだ時雨さん。俺はもう少しであの世に行つてるところだったぞ？　そもそも何で殺したがるのですか。男子ならここに他に2人もいるじゃないですか、ねえ。……でもなんだろう。時雨さんの安否が非常に心配になってきた。殺されかけたというのに

大きく溜め息を吐いてテーブルで肘を置いて頬杖を突く。そういえば忘れてたけど、結構明るいな。今何時だろうか。周囲を見渡して時計の場所を確認する

「時間か？ 今もう3時だぞ？」
「もうそんな時間だったか……」

毒物恐るべし。まさかそこまで俺を寝坊させるとは……（本日も
曜日）

椅子から立ち上がって荷物を……：そういえばここは何処だろう。
あの後気絶したわけだから荷物は接待室に置きっぱなしだろうか。
見あたらない

「お前の荷物ならそのベッドの裏な。そして良いことを教えてやる
う。そのベッドで俺たち3人が一緒に寝たんだ」

「全く嬉しくない情報だよ」

「健太殿の寝相が酷くて全く眠れなかったが……」
「ドンマイ光久……」

ずいぶん重く感じる身体をゆっくり動かしてベッドの裏へと移動
する。そこには昨日持ってきた荷物（TEMM含む）が置いてあっ
た。重要だったり大きかったりする物はTEMMに閉まってあるか
ら、基本そこにあるのは勉強道具がほとんどだ。中から筆記用具と
勉強道具を取り出す。2人に合わせて数学だ

「そういえば健太。女子達はどうかしたのか？ というか何で男子
だけこの部屋なんだ？」

「ああ……：なんか買い物行くーだとかで今家に居ないんだよ。そ
れで今いるのがこの家の人と男子だけだから、真筆が気絶してるし
他の部屋で勉強するのもアレだなーと思って。そろそろ帰ってくる
と思うよ？」

「説明ありがとうございます」

再び椅子に座って勉強道具を広げる。2人で同じページを勉強しているのか、同じ問題を解いていた。確かに大人数でやればわかりやすくはなるな。三人寄れば文殊の知恵と言うしな。実際3人目だし2人が開いている同じページを開いてペンを取る。ここは自分でも結構出来る内容だった

部屋にペンが走る音と、ヒントを教え合う声が響く

そして気がつけば女子も帰ってきていて、時間は5時半を回っていた。起きてから2時間半だ

「……時雨さん」

「はい。どうかありませんか神崎さん」

「……今日は毒物が入ってるなんて事はないですよね？」

「はい。大丈夫でございます。入っているのは愛という名の劇薬です」

「……要するに今日は劇薬が入ってるんですね……」

最後に食事を摂って(？)から約24時間経った今、昨日と同じ大広間では夕食がそれぞれの目の前に置かれていて、他のみんなは食べ始めているのにも関わらず、俺は時雨さんに事を問うていた。今日も食べたら死ぬメニユーらしい

今の話を聞いていたのか、近くにいたメイドさんが時雨さんの首根っこを掴んで部屋から立ち去り、別のメイドさんが新しい料理を持ってきて一生懸命謝ってくれた。なんていい人達だろう……

そのメイドさんの中にももの凄い視線(死線)を送ってくるメイドさんも少なくは無いわけですが。ちなみに今運ばれてきた料理には何も盛っていないらしいので、やっとのことで食事を開始する

しかし、今日に関しては違う事がある。事って言うか……風景が違つと言つのだらう。テールルの奥でエルフィの父親であるラーサーさんに、その横にいる母親らしき人物が

「……………」

「さ、早苗さん……目が怖いですよ……？」

「また帰ってきてすぐにエルフィに抱きついた？ どういう風に反応されるかはもう分かり切ってるんだから諦めたらどうかしらラーサー？」

「いや、親子間のスキンシップはいつまで経つても大切かと」

「次極度なスキンシップをしたらエストラント家所属メイド大隊内エルフィ親衛隊を起動するわ。覚悟しておきなさい」

お説教的な何かをしていた。ラーサーさんは正座で、この家の主であることを忘れさせるような光景を、今、この場で、身内ではない方々にお見せつけになられております。なんだこの家庭。どれだけ女性の立場が強いんだ。しかも普通ならラーサーさんに仕えるメイドさんの方が立場上なのかよ。というかエルフィ親衛隊つて……………」

なんでこんな状況になっているかというのと、時は30分くらい前に遡る事になる

勉強も一段落して息抜きにトランプをしていた一同の所に1つの足音が聞こえてきて、ドアが開かれると見覚えのある男性ラーサーさんが入ってきた。もちろんエルフィも反撃体勢を取ったけど間に合わず、抱きつかれて頬ずりをされる始末。もの凄い拒否反応と鳴き声を上げながらもラーサーさんはその身を離さずにキスまでせがむ。しかしそれを聞きつけたメイドさんが見事に飛び膝蹴りを腰に決め、動けなくなつたラーサーさんをメイドの部隊が包囲、捕縛。そこへ入ってきた母親らしき人にエルフィは泣きついて抱きついて『ママ、怖か

った』を連呼（というか母親だね）。慰めるお母様、謝罪するメイドさん

俺は思った。この家、絶対に普通じゃない

「なんていうか……駄目だわ。僕まだエルぽんのママ呼びが……ツボだわ」

「い、いい加減にしてくださいよ佐々木さん……」

横ではクラスメイトのお2人がそんな会話をしていた。その奥ではお説教が続いて　あ、終わったみたいだ。グンニヤリしたラーサーさんと笑みを浮かべながらこちらを見るお母さんの姿が。早苗さんと呼んでたけど、本当に日本人だ

「わざわざお見苦しい姿を見せて申し訳ございませんでした。私はエルフィの母の近町早苗ちかまちと申します。いつも娘がお世話になってるよう……後で娘の秘蔵写真コレクションの全貌を初公開」

「ちょっとママ　じゃなくてお母様……佐々木さん、笑わないでください！！　その秘蔵写真コレクションって何ですか！！　そんな物見せようとしなくてください　って、いつの間にもどこから出したんですか！！　というか何穹さんに見せてるんですか！！」

「ほら見て！。これエルフィが3歳の頃でね！。ベッドに世界地図作っ「きゃああああああああああああああああああ！！」

早苗さんが言い切る前に写真がたくさん詰まったであろうアルバムを没収するその娘さん。その顔はいつも見るときよりも赤く、まるでそれは熟しすぎたトマトの様だった。あれ、でも熟し過ぎると色変わるよう……あれ、どっちだ？　世界の作られ方はよくわからない

写真を没収したエルフィが目をぐるぐるやりながらアルバム内の写真を確認していく。その最中の表情はとても面白く、赤くなっ

り青くなったり……様々な表情を見せ、後ろから明日香と穹が確認しているのに気がついていなかった。あの2人、かなり笑いを堪えてるな……少し刺激を与えたらすぐにも吹き出しそうだ

「あら残念。お友達に少しでもいいから見て貰えばいいのにー」

口に指をくわえながら子供のようにつまみ食い。いや、まるで子供だ。子供そのものじゃないか？ 身長なんてエルフィより少し小さいくらいで体型もほぼ小学生並み。あれ……危ないんじゃない。むしろエルフィが親に見えるなんて事もあるんじゃない……

そんな事を考えながらポーツと見ていると、早苗さんがこちらを見て微笑んだ様な気がした。いや、気がしたんじゃない。微笑んだんだ。その表情のままこちらへと歩み寄ってきて、俺の目の前で立ち止まった。座っていても視線はほとんど変わらない

「失礼な事考えてない？」

「滅相もございません」

初対面なのに心を読まれるとはどういう事だ

「貴方が神崎真箏くんね？ 改めて……初めまして」

「そうも言いながら何事もなく膝の上に乗らないでください」

「あら失礼ね。わたしが重いとても？」

「いえ、そんな……」

なんだこれ。まだみんなはあつちのゴタゴタ騒ぎでこっちの不思議な状況に気がついていないけど……本当になんだこれ。マジで小学生じゃないか？

早苗さんを膝の上に乗せていると、ポケットから一枚の写真を取り出し、こちらに向ける。そこにはエルフィと思われる小さな子供

が積み木で遊んでいる光景だ

「これはエルフィが4歳の時の写真よ。ね、可愛いでしょ？」

「そうですね……」

その写真を見て思わず笑みをこぼしてしまった。昨日見た写真と比べたからなのかもしれない。昨日見た無表情で写るエルフィと、それと対照的な笑顔で写るエルフィ。違いは一目瞭然、なんで笑ったんだろう。俺はロリコンだから？ いや、違うし。安心したのか？ そうなのか？ わからない

真相はそう簡単に掴めるほど安易じゃない。それくらい知っている。試合に勝つと同じくらいだ。でもまあ、自分の事くらいすぐにわかってモンだ

早苗さんは写真をポケットにしまって膝をブラブラと動かす。たまに脛に当たって痛い

「ねえ神崎くんはさ、エルフィの事、どこまで知ってるのかな？」

「え……？」

足の動きが止まり、首がこちらを向いて真剣な眼差しが飛んでくる

「私の娘……エルフィの事を、どこまで知ってる？」

「え、えつと……」

「あ、無理に言わなくていいからね。ちょっと聞いてみたかっただけだし、それに」

早苗さんは首を元に戻してエルフィ達が騒ぐ方を向く。それに釣られてそちらを見ると、アルバム争奪戦をしていたメンバー全員がこっちを見て呆然としていた。それを見た瞬間に今の自分の状況を意識したのか、顔が赤くなっていくのがわかる。とりあえず、エル

フィの顔が特に真っ青になっていた

「ま……ママ………ちょっ、まっ、何やってるの!!!」

あ、アルバム投げてこっち走ってきよった。普通に拾われとるし

「んじゃ、後は頑張つてねえ」

「え、あ………ちょまつ!!!」

「逃がしません!!!」

突進してきたエルフィを見た早苗さんは即座に膝を降りてドアの方へと走り出す。そして走ってきてここに突っ込もうとしていたエルフィは止まらず、俺も逃げようとしたら間に合わずに突っ込まれた。少し先で早苗さんが笑う声が聞こえてきた。後ろからも笑いの声

「……娘をよろしくね、神崎くん」

何故だろう、また意識が遠のいた

「……くそ、また気絶してたのか……」

思わず独り言を漏らしてしまう悲しい人間まで育ったのかもしれないと思いつつながら身体を起こしてみる。何故だか頭が痛い。もしかしたら頭を強打して気絶したのかもしれないな

とりあえずまたベッドの上にいるようで、隣には……うわ、マジ

で健太がいるよ。凄い、健太の足が光久の顔にクリーンヒットして
るよ。本当に寝相悪いんだなコイツ

この状態のまま健太の攻撃を受けると危険なのでベッドから降り
る。そういえば今思う。まだ夜なんだな、と。窓から差し込む月の
光が眩しく見えて仕方がない。今日は満月かな、と思いながら窓の
外を見てみる。夜空にはもうちよつとで満月になるっていう感じの
月が浮かんでいた。ウサギはちゃんと見える。確かあれは他の国か
ら見ると違う動物に見えるんだよな。なんだか面白い

「さて、これからどうするかね……」

月見も終えたところでやる事が無くなった。寝るという選択肢
が8割思いつくが、健太の寝ている場所で寝る気になれない。そう
なると寝る場所が無くなる。まあ床で寝れば問題は無いかもしれな
いが、何より1度目が覚めてしまったので眠くない。しかも月を見
たことで余計に目が覚めてしまった。ゆえに寝ることが不可になった
こうなったら勉強でもするかー、と思ったけど、正直やる気には
なれない。元々勉強会という形で来ているというのに気絶ばかり
でまともに勉強出来ていない気がする。それなのにやる気にはなれ
ない。多分心の何処かで面倒だという気持ちか……駄目な心だ。や
るときはやれよ

溜め息を吐きながらさつき座って勉強していた椅子に座る。よし、
今日はここで寝るとしよう。意外と寝心地が良いかもしれぬ。と
思ったのもほんの一瞬。いざ突っ伏してみると、学校机より寝にく
い。というか硬い。そして起き上がる

そういえば今は何時だろう、と時計を確認……そうだ、この部屋
時計無いんだよ。だから携帯で確認を……む、入ってない。手持ち
が1つも無いだと？ 面倒だと思いつながら荷物の場所へと移動する
ために椅子を立ち上がる。立ち上がったと同時に身体が震えた

「……トイレって何処だったかな」

加えて寒いっていう理由もある

頭の中にトイレまでの道のりを作りながら部屋を後にする。この時間帯に誰かに見つかる危険な気がするので出来るだけ誰にも会いたくない。そう思いながらトイレの方向へと向かっていく。途中で女子が寝ている部屋の前を通らないと行けないので静かに行かなければ

ただただ長い廊下を1人歩く。月光が差し込む窓からは夜の景色が見える。そういえば姉貴は何処にいるんだろう……そろそろあっちから会いに来る頃じゃないか？

そう考えながら歩いていく。すると1つの窓から1つの人影が見えた気がした。その窓に戻ってそちらを確認すると、ベランダの柵に肘を突きながら景色を眺める女性 いや、エルフィの姿があった。どうしよう、行くべきか……？

……いや、身体が勝手に動いていた。気付けばエルフィのいるベランダに出るドアの所で
ドアを押し開けていた

「……神崎さん？」

「よっ。何してるんだ？」

そう尋ねてみると、月に照らされた顔が笑顔を浮かべ、そしてあちらを向く

「ただ……風に当たってた いや、なんとなく……ですかね」
「なんとなく……ね」

頭を掻きながらエルフィの横まで歩き、同じように肘を突いてそこから見える景色を一望する。ここは東京の中でも結構田舎な方な

のか、見える光は少なめだ。それでも遠くにはレーザー光線の様に光が伸びているし、見える星の量だつてこの前の別荘と比べたら断然少ない。それだけ都会なんだろう、この町は

「さつきお母様から聞きました。わたしの昔の写真を見て可愛いと言ったそうですね」

一緒に景色を見ていると、左にいるエルフィが声を出す。流石はエルフィ、行動が速い。そして早苗さんも捕まるのが速い。変に言うのもアレなので、ここは素直に言っておくでしょう

「ま、まあな……可愛かつたよ」

「あはは……神崎さんつてもしかしてロリコンですか？」

「バカ言え」

「すみません……」

やっぱり俺はロリコンなんだろうか

いや、認めるのも嫌なので、ここはロリコンではない宣言をして
おごう

「ふう……神崎さん」

「ん？」

「変なこと聞きますが……わたしの事、どこまで知ってますか？」

なんだろう、この既視感。この質問はさつき気絶する馬絵にも聞いたような覚えがある。いや、確実に聞かれてた。質問する内容は同じでもしている人物は違う。これはつまり、答えても良いのだろうか

「すみません……これだけは真面目に、本当に答えてくれませんか

「？」
「……………」

この機会だ。逆にこちらが知りたかった事実も知ってしまったおう。なんだか人の嫌な思い出を漁るようで嫌だけど、あの写真の事が頭に張り付いて離れない。これをどうにかするためにも

「悪いエルフィ、逆に聞かせて貰う。あの中学校のアルバムに写ってたお前はなんだ？」

その質問をすると、エルフィは「やつぱりですか……………」と言いなから肩を降ろした。そして真剣な表情になってこちらを見たので、俺もその覚悟をした

「……………この話は、昨日ここに来た時点でいつかは話さないといけなだろうと思ってました。でも先にアルバムを見られたんじゃないでしょうか」

「知ってたのか……………」

時雨さんの説教が終わった後に部屋を確認した際、アルバムが無いことに気がついたらしい。ちなみにそのアルバムは気付かれないように穹が元に戻してくれた。もうバレてたから意味無いけど

笑みを浮かべながらエルフィはまた夜景の方を見る。俺は肘を突いたままエルフィの顔を見る

「……………わたしは高校にあがるまで、紗凧さん以外の友人はいませんでした」

「……………え」

「わたしは両親が無茶言って都立の小中学校に通ってました。本来なら私立高校に通うべきだったんですけど、わたしは普通の学校に

行きたいって言って止まなかったんです。紗凧さんは元々お爺さんの時雨さんしか家族がいなくて、大体の事は時雨さんの言うことに逆らえなかったんで、市立の小中学校に通ってました。それまではいいんです」

何も反応できないままエルフィは話を進める

「やっぱりわたしはお嬢様ということなのか、周囲からは浮いてました。周りからは『相手はお金持ちだから友達にはなってくれない』と言われて、避けられてました。それが9年間続いて、今のわたしがいるんです」

「……………」
「入学当初にわたしの趣味はPCだって言いましたよね？ 友達がいなかったわたしにはそれくらいしかすることが無くて、メイドとして働いてた紗凧さんも仕事で遊べず、両親も仕事で遊べない。だからわたしに用意されたただ1つの友人みたいな物です。あのノートパソコンはその時からずっと使ってる物です。それだけ大切だったんでしょね」

「……………」
「中学校までの経験で、わたしは高校で身分を隠しました。まあ名前で気付かれるとは思ってたんですけど、案外上手くいったもんですね。あの時初めて神崎さんに声を掛けたときもかなり心臓がバクバク言っていました。その後ラーメン屋に行かないかってなったときも、緊張して行けませんでした。嬉しかったです。そうやって友達に誘われることが」

「……………」
「でも昨日わたしが皆さんをここに連れてきた時点で『ああ、高校の生活もこれで楽しめなくなるのかな』、と思ってました。敬語を使われる度……いえ、昨日の玄関で皆さんに敬語を使われたときには泣きたくなりました。堪えました。また友達がいなくなるのかな、

と」

エルフィの声が段々と涙ぐんでくる。横から見た表情だとよくわからないけど、月の光で反射したのか、目元から一筋の涙が零れていた

「嫌……ですよね。こうやって周りの人に自分の本当の姿を隠しながら生きている人なんて……神崎さんは嫌ですよ？ こんな本当の事を言えないわたしの事なんて……嫌い……ですよね？」

こちらを振り向いたエルフィが一生懸命涙を拭きながらそう言う

「……神崎さんが……わたしの……初めての友達で……嬉しかったです」

そして、笑顔でこう言った。駄目だ、もう我慢ならん思い切り溜め息を吐いてエルフィの頭にデコピンした

「な、何するんで」

そしてエルフィの小さなその身体を思い切り抱きしめた

「か、かかか神崎さん!？」

「あんなエルフィ。あんまり巫山戯た事言っなよ？ 何が俺が初めての友達で良かったって？ まるで今日限りで絶交するような台詞を言うなバカ」

エルフィの心拍数が自分に伝わってくる。多分今の自分の心拍数はエルフィとほぼ一緒だと思う

「それに俺がお前のことが嫌い？ そんなのあり得ないな。どつちかっていうと俺はお前が好きだ。最高の友達だ。健太以上に最高の友達だ」

「え、え……？」

「……健太と比較しない方が良かったか？ まあでも、とにかくお前はそのままがいい。お嬢様だからってなんだよ。今はもう身分がバレたけど、別に大した変化なんて無いだろ？ 俺はここにいるだろ？ みんなもここにいるだろ？ 仮にお前の周りの友達全てが絶交したとしても、俺はずっと……永遠に、永久に友達でいてやる。だから、そうやって変な事言っつなよ……」

「……………」

「ありのままの自分でいれば、それでいいんだよ……」

「……………う、ああ……………」

「泣きたければ思い切り泣けばいい。こうやって友達がいるんだからな」

「あ……………う、あああああああああああああああああああああ
あああつー！！」

泣きじゃくるエルフィの肩を更に強く抱き寄せる。なんだか今言った台詞を意識し出すとかなり恥ずかしいなこれ……もし仮に誰かに聞かれ得たら死ぬぞ、社会的に、精神的に、肉体的に。つまり死ぬな。俺は天国と地獄、どちらに行けるんだらう。天国であつてほしい

小さく穏やかな風が吹き、エルフィの髪がたなびく。何だらう、思い切りくすぐったい。くすぐったいけど、なんだか視界に映る景色がさつきより綺麗に感じるのは気のせいかな？ 気のせいだ。隣では大きな鳴き声が聞こえるし、景色が変わることは無い。変わったから変わったで凄い怖い

そして

このエルフィやみんなとの関係が、変わるのものはもの凄い怖い。そ

れだけは、誰にも変えさせたくはない。どんな事が起ころうとも

「……すみません神崎さん。ありがとうございます」
「なに、気にするなよ」

やっとの事で泣きやんだエルフィを未だに抱きながらそう会話を
する。なんだか今の季節を忘れさせるほどの暖かさだ

「あの、神崎さん……そろそろ放して貰って良いですか？」
「あ、悪い悪い」

そう言われたのですぐに放す。そういえば今まで抱いていたんだ、
という意識をしてしまったせいも、急に顔が熱くなってきた。暗い
から問題は無いかもしれないけど、慌ててエルフィと反対の方向を
見た。同時にそっちも反対側を向いたらしく、互いに逆の方向を見
る形になった

「そ、その……」
「な、なんだ……？」
「わたしはずっと友達で……いいんですよ……？」
「あ、ああ……」
「それ以上の……親友、はあるんですか……？」
「ど、どうだろうな……正直わからん」
「そうですか……そっ、そそそれ以上なんてのは……」
「いや、親友以上は無いだろ。どう考えても」

我ながら鋭いツッコミだとは思う。というか親友以上ってなんだ
？ 真・親友か？ 「しん」が2つ続いて面倒だなこれ

「神崎さん……それ本気で言ってますか？」

「当たり前だろ。親友以上なんてどう考えてもないだろ。親友以上なんて何が　いだだだだ!!」

なんて言っていると首根っこを思い切り抓られた

「もう……なんだか神崎さんに直接毒物を注入したくなってききました」

「恐ろしいことを言うな!!」

この子、時雨さん以上に怖い!!

「ふふっ、冗談ですよ」

「ぐほっ!!」

やっと解放されたと思いきや、今度は脇腹にチョップを入れられた。かなり痛いこの仕打ち。俺ってなんかした？

「なんだか泣いたらスッキリしました。本当に、ありがとうございます」

「全く……今度何か奢って貰うからな？」

「了解です。それじゃあ……そろそろ戻りますね」

「ああ、おやすみ」

「おやすみなさい、神崎さん」

一足先にベランダ入り口に戻るエルフィ。それを見届けていると、急に立ち止まって再びこちらを向いた。そして今度は

「すみません神崎さん。1つだけ、お願い事をしてもらいたいのでし

ようか……?」

そう、尋ねてきた

あの後エルフィと2分くらいの会話を済ませて部屋へと戻るために廊下を歩く。エルフィから頼まれたお願いは正直驚くような内容だった。今日まで見た感じだとただただ1つの考えしか浮かんでいなかったけど、初めてその話を聞いて理解した。ああ、ちゃんと原因はあるんだな、と。もちろん断る訳にもいかないので引き受けることにした。今日は遅いし、明日も無理なそうなので、テストの最終日の放課後にまたこの家に来ることになった。それもエルフィと2人で

月の光が差し込む廊下を1人寂しく歩く。やっぱり時間が時間なのでかなり静かだ。どの部屋にも明かりなど付いていない。さつきエルフィに時間を聞いたところ、11時を回っていたらしい。多分今は15分くらいだと思う

ふとさつきまで自分が何をしようとしていたのかを思い出す。そういうばトイレに行く途中でエルフィを見かけてそのまま話し続けてたんだ。また引き返すことになるけど急いで行ってこよう。と、思った矢先、1つの明かりの付いた部屋のドアの隙間から手が伸びているのを遠くから確認できた。よくわからないけど手招きをしている。あの部屋の説明は受けてないし、誰の手かもわからない。とりあえず行くだけ行ってみるとしよう。まだ保つし

あまり足音を立てないようにその部屋に近づく。近づいているのに気がついているのか、もう少しで到着する所で手が引っ込んだ。ドアの前に立ち、ノックして名前を言ってからドアを開く

「やあ神崎くん。さつきぶりだね」

「……ラーサーさん？」

エルフィの父親が部屋の中央で、笑顔で立っていた

「夜遅くにどうしたんだい？ トイレにでも行ってたのかな？」

「あ、これから行くところでした所です。それで振り返るときに手招きしてるのが見えて……」

「なるほど……邪魔をしたかな」

「いえ、そんな……」

どこかぎこちない会話をする。1度会ったことはあるのに何故だか緊張して仕方がない。多分エルフィの言葉を聞いたからかもしれない

「でもその割には娘を抱いていたらしいじゃないか」

「ぐほおっ！！」

その発言に思わずとんでもないリアクションをしてしまった。言われた！ 言われたよ！！ いや、言われるまでなら大丈夫だ。見られてたよ！！ あんな恥ずかしいシーンを誰かに見られてたよ！！ やばい、今死ぬほど恥ずかしい。身体全体がかなり熱くなってるのがわかる

今の俺の反応を見たラーサーさんが笑顔で笑う。超笑顔だ

「なに、私もトイレに行く途中に君たちを見かけてね。思わず聞き入ってしまったよ。まさかエルフィが自分から本当の事を話すなんてね。私の口から言う手間が省けたよ」

「……あの、ラーサーさん。これは誰にも言わないと言うことで

「つて『私の口から』？」

「ああ。本当は君が寝ている間に誘拐して話そうと思っただ。でもエルフィが言ってくれたからそんな事をしないで済んだよ」

「かなり物騒なんで止めていただけでしょうが……？」

「なんだろう、この家庭にはホントに物騒な人しかいない気がする。例えば朝比奈さんとか、その祖父の時雨さんとか」

「とりあえず立ち話も疲れるだろう。そこの椅子に座ってはくれないか？　すぐにお茶を用意しよう」

「え、いや……」

「君と、少し話がしたいんだ」

「……はい」

促されるままレーザーさんが用意した椅子に座らせて貰う。するとレーザーさんは部屋の隅の方にあるポットとティーカップを持ってきて、俺の前に2つ並べ、反対側に腰掛けた。2つのカップに紅茶が注がれる。文化祭の時にも嗅いだような匂いだ

「それで……話ってなんですか？」

「我ながら気が早いとは思う。そう思いながらも用件を尋ねていた

「ふふ……まず1点目だ。私と娘の関係についてだよ」

「……え」

『あの……わたしとお父様の関係についてお話があるんです』

その言葉を聞いてエルフィの言葉がパツと脳裏に浮かんた。エルフィに頼まれたのはその事に関わる話。まさかここまで聞いていて、

更に何かを言おうというのかこの人は……

「もしエルフィから話を聞いていけば早い。私がエルフィに避けられるようになったのは」

『わたしがお父様を避けるのは理由があります。溺愛しすぎと言うのもそうですが』

「中学校の終わりまで授業参観に行つてやれなかったんだ」

『中学校の終わりまで授業参観に来なかったんです』

娘と父、2人のその言葉が重なるように脳内で再生された。同じようでは何処か違うような理由。『言つてやれなかった』と『来なかった』。一見同じような感じもするが、全く別の意味を持っている。なんだ？ エルフィが言った言葉とラーサーさんが言った言葉が全く違う。理解が出来ない。もしかしてエルフィがしているのは勘違い……なんじゃないだろうか？

「えっと……」

「授業参観に行けなかったと言うことは勿論運動会、体育祭にも行ってやれなかった。毎年あの子の悲しむ顔を見るのが辛かった。しかし今年に入つてからは完全に拒否されるようになって、この前の授業参観ではあの態度。もう、手遅れだったのかもしれないな」

「……………」

「先月の体育祭に限つても同じさ。毎年悪いタイミングで仕事が入つてしまつてね。しかも全て外せないような感じの。でも今回の授業参観に限つては違かった。仕事が入つてこなかったのさ。だから私は学校に行くことが出来たが……駄目だったよ。普通に接するつもりが先制攻撃を決められてしまつた」

レーザーさんの言葉で全ての言葉の意味が1つに纏まってきた。なるほど……これは全てエルフィがしていた勘違いだったんだ

「私は、最低な父親さ。娘……家族の事より仕事を優先してしまう、ただの大馬鹿者さ」

「それは違うと思いますよ」

「……ん？」

「あ、いえ……何でもないです。忘れてください」

思わずさつきエルフィと相談したことを言いかけてしまうところだった。今言ったらテスト明けの時に変になってしまう。だから誤魔化しておかないと……

「……？ それならいいんだが………2つ目の話をしてもいいかな？」

「あ、はい……」

レーザーさんの顔から笑顔が消え、真面目な表情になった

「君たちにとっては変な事を言うことになるかもしれないが、君たちがやっているスポーツ。Warsについて君はどう思っている？」

「……え」

「Warsをどのように思っているのか。率直な意見を聞きたい」

その言葉によって数秒の沈黙が生まれた

「えっと……ただのスポーツ……ですか？」

「やっぱり……そう答えるんだな」

「へっ？」

ラーサーさんが立ち上がり、自分とは反対の方向へと歩いていく

「君たちの年齢だと戦争の経験はしていないと思う。戦争、すなわち wars はただの殺し合い。そのようなスポーツをただのスポーツと言うのかい？」

「えっと……」

「この wars が始まった頃からずっと思っていた。このような不健全極まりないスポーツがこの世に存在しているのか、と。君は経験者だからまだわかると思うが、このスポーツでどれだけの血を見た？ 血を流すのがスポーツで良いと思うかい？ 人を殺すのは犯罪だ。しかしその犯罪を V W とはいえ、ましてはスポーツ、更には部活動まで組み込まれている」

「……………」

「そんなスポーツを、君はおかしいと思わないか？」

……………言葉を、失った。確かに今まで wars はただのスポーツとして認識していた。姉貴がやっていたから、今俺がやっているから、俺たちが出会った部活だから。 wars をしていて得をしたこともあれば存したこともたくさんある。それを……………おかしい？ 言われればおかしい。でも、

今こうやってみんなが楽しく過ごしている部活をおかしい？ 巫山戯るな。不健全だろうとなんだろうと場所は場所。今まで築いてきた関係を壊させるような発言をするな

「確かに……………言われてみればおかしいです。でも、 wars のおかげでみんなに出会えた。その事実だけはどう足掻いても変えることは出来ません」

「……………」

なんだろう……自分で言ってる言葉とラーサーさんが言った言葉がかみ合っていない気がする。でも、伝えたいことを伝えることは出来た

「それならそれでいい。だが神崎くん、私は思うんだ。このスポーツには何か仕組まれているんじゃないかと」

「……え」

「このスポーツを作り出した人物を私は知らない。そこまではいい。もし仮にその人物が第五次世界大戦を起こそうとしている人物だとしたら、warsというスポーツはどのような目的で始められたと思う?」

「……戦争の兵の調達」

「その通り。まあこればかりは私でもどういう事も出来ないが、そのような連中がいてもおかしくはないと思う。あくまで可能性、ただの予想さ」

「……」

そういう視点も、あつたのか……

「神崎くん、これはとりあえず他言無用のことに願いたい。もし仮にそのような連中がいるとして、もし周囲にバレてwarsが無くなるなんて事になったらそいつらは確実に君を殺しにかかる。だから心に留めておく程度でいい。別に忘れてくれても構わない。ただ私が言えることは、君たちの部長が持っているエクスカリバーを守り抜いて欲しい。それだけさ」

「え?」

「……あくまで可能性にかけただけさ。私の話は以上。君は何か話したいことはあるかい?」

「いえ、特には……」

「そうか……ふふ。よかったよ、君と2人きりで話すことが出来て」

「…………え？」

ラーサーさんとの話を終え、トイレに行ってから部屋へと戻り、さつきまで座っていた椅子に座る。かなり時間が経ったのか、携帯で時間を確認すると12時を回っていた。ベッドの上の2人の様子は凄いもので、健太なんか下に落ちてている。光久はその下敷きになっていた

「……………」

Warra、か…………考えれば考えるほど確かに危ないスポーツだ。今まで俺はそれを…………でもやめるわけにはいかないのか。そんな出来事を起こさないためにも

いや、そこは今はどうでもいい

娘のことを、よろしく頼んだよ

「ふう……………」

呆れてしまったのか溜め息を吐いた

そんなの、言われなくてもわかってる。すぐに泣くような女子なんだ、自分が守らないでどうする

そんな事を思いながらテーブルの上につっ伏して目を閉じると、すぐに眠気が襲ってきた

窓から差し込む月の光が、反対側の椅子を照らしていた

#55 隠した事実と本当の気持ち（後書き）

お疲れ様でした。本当は戦闘入れる予定だったんですけど、やめました。なんとなく
なんていうか……変にフラグが立ちましたね。回収はかなり遅れる
と思いますが

さて、次回でChapter7最終話です

#56 伝えられた想い(前書き)

はあ……なんとか間に合ったw(9月26日)
ではWars第7章最終話、どうぞ

56 伝えられた想い

「……もう無理だ」

「安心しろ真筈。僕もだ」

「ちよつと2人共……そろそろHR始まるんだから起きなさいよ」

「そうですよ。もう今日はこれで帰りなんですから」

ああ、何故学校という場所にはテストという悪魔が潜んでいるんだろう。それは我々に対する試練か何かなのか？ でもまあそれを乗り越えたということで、健太と一緒に机に身体の全体重を預けている。ちなみに1つの机に2人分。こう見ると机って結構頑丈なんだなと思ったりもする

念のためもう1度確認しよう。今日はテスト期間最終日で、丁度最後の教科が終わってHR直前の時間。最後の最後に数学？が来たので今の疲れは尋常じゃないほど溜まっている。しかも昨日の夜は12時まで勉強をしていたわけなので眠い眠い。おかげでテスト中に寝たくらいだ。今回の結果はどうなるんだろうと、期待と不安がすでに高まっているのは何故？

いつもの女子2名が起きると言うので身体を起こす。健太は俺以上に燃え尽きていたのか、微動だにしようともせず、そのまま倒れている。もしかやコイツ、寝ているのでは……

「……………」

寝てました。もしかしたら健太も同じように遅くまで勉強をしていたのかもしれない。うん、それなら同情できるな

「ほら起きなさいバカ」

「じぶうつ!!」

笹原さんの拳が健太の脇腹にクリーンヒット、例の武器も装備していたのか威力が倍増されていたことにより、健太の身体が良い感じに吹き飛んでベランダの柵に激突。窓は開いていたので割れることは無かったが、吐血したのか窓に赤い液体が張り付いた。咳をしながら健太が苦しそうに立ち上がり、フラフラになつて教室内に戻ってくる。というか柵頑丈だな

「ちょ、ちょっと綾香……今は酷いんじゃないのかな……」

「本気で寝るアンタが悪いのよ。ほら、早く席に戻りな　そこで近くの神崎の席に座らない」

自分の席に戻ると思いきや、目の前にある俺の席に座つてまた寝よつた。本当どれだけ疲れているんだろうコイツは

このままだと戻る席が無いので健太を起こそうと後ろに回る。そして脇に腕をくぐらせてカー杯持ち上げる。うん、男子だ。重い

「悪いわね神崎」

「なに。このままベランダから突き落とすだけだよ」

「恐ろしいことを考え　ベランダに向かおうとすな!!」

おお、起きるのがお早くて。こんな早く起きなければすぐベランダから突き落とせたものの。そうすれば今健太の求めている睡眠が永遠にだな

「いや、まだ永遠に寝とうないわ」

そりゃそうだ。こんなまだ若くして永遠に寝たくは無い。まあそれを今、俺が、この手で、やろうとしていたところでしたが。健太

も無事起きたので、脇に通っていた腕を放してベランダから離れる。話した瞬間の健太の身体がフラついていたので倒れないように両手で支える

そして放す

「じぶうつー!!」

「ああ悪い。つい手が」

「絶対にわざとだろ!!」

「これで目が覚めたんじゃないかしら？」

ちなみに放せという指示は笹原さんがジェスチャーで与えてくれたものだった。確かに今くらいの衝撃を（笹原さんの殴りで十分だとは思うが）与えておけば目は覚めるだろう。流石は1年4組で1番の成績保持者と言ったところか？ 健太が制服に付いた埃をはたき落としながら立ち上がる。強すぎる衝撃が2度連続で与えられたせいかかなりフラフラしている。別に眠そうとかそういう訳じゃない、普通に痛そうだ。奇跡的なのか出血（外傷的な）はしていない

「くっそ〜……真筆、綾香、後で覚えておけよ……」

「多分アタシは忘れるわ」

「右に同じく俺もだ」

「お前らなんて大嫌いだ!!」

そう言っただけ泣きをしながら自分の席へと駆けていく健太。いや、嘘じゃない。本当に何か目元から零していったぞ……

申し訳ないなと思いつながら席に着く。それを見て落ち着くことが出来たのか、笹原さんが溜め息と礼を言いながら席に戻っていく。さっきまで横にいたエルフィはいつの間にか先に戻っていたみたいだ。すぐ隣なのに気がつかなかった

「……あ、血どうするか……」

窓に張り付いた健太の吐血を見る。もう固まってしまったらしく簡単に落ちそうにはない感じになっていた。後で頑張るか

何もすることが無くなったので前を見る。どうやらこつちでゴタゴタやっている間に先生が来ていたらしく、まだ落ち着かない教室を見ながらクラスメイトが静まるのを腕を組んで待っているようだ。なんだかまだ落ち着く気配がない教室。テスト明けだからしょうがないのかもしれない

不意に窓の外を見てみる。雲はゆっくり流れていつて鳥たちも飛んでいく。もう秋も後半なんだと思ったりする

そういえばこの後エルフィの家にもまた行くんだよな……2人だけで。色々な用件で……なんだか不安とかがごちゃ混ぜになって緊張が生まれ始めているのか？俺はどう立っていればいいんだろう

そう考えていると教室が静かになっている。そして先生の合図と共にHRが始まった

x

「すみません神崎さん。1つだけ、お願い事してもよろしいでしょうか……?」

振り向いたエルフィが不安げな表情をしたままそう尋ねてくる。断るわけもいかないので、再度エルフィを横に立たせて話を聞くことにした

「で、お願いって?」

「はい……実はわたしとお父様の事についてなんですけど……」

エルフィの口からその事についての頼み事? もしかしてとうとう愛想がとうとう尽きて家出……それとも嫌気がさして殺害……まさか、そんな事をお願いするつもりなのか? いや、それと逆で凄じい穏やかな頼み事か……? とりあえずエルフィがラーサーさんに関する事を言ってきたことにまずは疑問を覚えてしまった。心の中で謝罪をしながら

「は、はい……その、えーと……」

頬を掻きながら照れたような仕草をする目の前の小さい女子。なんだかそういう仕草をされるとさっきまで自分がしていた事を思い浮かべてしまうので若干恥ずかしくなってくる

エルフィは意を決したのか、真剣な表情をまた向けてきた

「わたしがお父様を避けるようになった理由、まずはそっちを聞いて欲しいです」

「……ほ?」

こつちが何も言うことが出来ないままエルフィは口を動かす

「わたしがお父様を避けるのは理由があります。溺愛しすぎというものもありますが、中学校の終わりまで授業参観に来なかつたんです」

「……え」
「わたしが義務教育で通ってきた9年間、毎年授業参観がありました。神崎さんも経験あると思いますけどね……」

「あ、ああ」

エルファイが言った言葉を頭の中で整理しつつ話を聞き続ける

「普通学校で孤独な自分を見せたくないという気持ちは高いと思うんですが、わたしはちよつと違かったんでしょうね。何故だか授業参観の日はもの凄く楽しみに待っていました。毎年毎年、お父様が見に来てくれるのを、ずっと」

「でも毎年毎年お父様は来ませんでした。どうしても仕事を優先したいらしく、わたしの事なんて仕事より後順位。仕方ないことなかもかもしれませんが、毎年悲しい思いをしました。でも待ちましたけど全然来てくれませんでした。運動会、体育祭も」

「でも授業参観とかは後回しのくせ、休日はわたしをペットとつか、なんとつか……アレです、動物愛好家の方みたいな感じでスキンシップを取ってきたので、去年の末にとうとうわたしも本気で怒って避けるように……」

「エルファイ……」

「すみません……そこで神崎さんをお願いしたいのは、わたしがお父様にこの前の授業参観の話で怒るので、それに加勢していただきたいな、と。今まで放置のくせになんで今更！ 見たいな感じに……」

今までそんな話を聞いてきたのにオチとしてはそれか……まあ、確かに聞く限りだとラーサーさんがやってきたことは少し酷いといつかなんといつか……エルファイを傷つけた。傷つけすぎた。心の何処かで怒りの感情が芽生えたのか、エルファイに思い切り加勢してやりたくなった

「おう。俺も加勢して言うこと言ってやるよ」

「ありがとうございます神崎さん……それじゃあテストの最終日の

放課後は……どうですかね？」

「……まあ、大丈夫だな」

「それじゃあその日にお願ひしますね」

「ああ」

エルフィは笑顔でベランダを出て行く。さて、どう言つてやるか俺も考えておかないとな

でも、この後気持ちガラリと変わるなんて、この時の俺は全く想像していなかった

「日曜日までここにいたのになんだか久々に来た気分だよ」

「そ、そんな物ですかね……？」

いつ見ても見慣れぬこの辺の景色に不釣り合いに見えるエストラント家の豪邸の目の前に立っている。目的は例のエルフィのお願いと個人的な用。その為だけに今ここに立っている。ちなみにここにいるのは俺とエルフィの2人だけで、今日はあの家からじゃなくて正門から。こつちから入るのはアレだ、余計に緊張する。普通に入り口まで遠く見える敷地が目の前にあって、その庭つばい敷地の各地にはメイドさんが様々な仕事をしていた

ちなみに他のメンバーが来なかったのは、個人的な用があったり、気付けばいなくなつてたり、このことを伝えてなかったりと、様々な理由がある。まず3つ目の理由が10割。その他の理由は5割ずつ当てはまる。要するに今日の事は誰にも伝えてなく、俺だけが頼まれた用事だ。それはそれで嫌だけど

「それにしても、なんで今日のこの時間なんだ？」

開かれた門をくぐりつつ、すぐ左を歩くエルフィに尋ねてみる。すると、少し間が開いてから理由が語られた

「今日しかお父様がいないですよ！！」

「明らかに前がテスト勉強したかっただけな」

「あつ……」

多分毎晩過激なスキンシップを受けかけたに違いない。そしてラーサーさんも毎晩お説教等されたに違いない。失礼ながらもそんな想像で笑いが込み上げてしまったが、あまり大きな笑いにならないように音量を抑えて笑う。何事が尋ねられたけど、思い出し笑いだと伝えておく。エストラント家で思い出し笑いをする人は変態だと言われるらしい。つまり俺は変態か

約200mはあるんじゃないかなあ、って感じの道を歩き、やっとの事で入り口に辿り着く。手動式のドアだと思われていた自動ドアが開き、その豪華な内部へと入っていく。駄目だ、ついこの前来たとは言えやっぱり慣れない。トイレの場所を忘れたくらいだ

「……それじゃあ神崎さん、お願いしますね。幸いお父様も今日はいらっしやいますし、早めに用件を済ませてお茶でも飲みましょう」
「そうだな」

俺はエルフィに伝えるべき事実を伝えなくちゃならない

エルフィとラーサーさんが違った気持ち。間違えた事実

それを今日1つにするために俺は今日来たのかもしれない。いや、1つにするのは親子の仕事だ

俺は、ただの手伝いだ。この親子には、仲良くして貰いたい

気がつけばこの前の土曜日に入った部屋の入り口の前に立っていた。何故だかここだけは覚えていたらしい。そして何故だか緊張してきた

「……………行きましょう、神崎さん」

「……………ああ」

エルファイによってレーザーさんの部屋の入り口が2回ノックされる。俺の部屋の扉と比べて跳ね返ってくる音が良質だ。扉の材質も違うんだろう

『……………どうぞ』

「失礼します」「お、お邪魔します……………」

ガタツ!!

「チエストオオオオオオオツ!!」

「カウンターツ!!」

ドスツ!! ザツ、ザザザザ……………

簡単に説明しよう。扉を開くと同時にレーザーさんがスタンドアツプ&エルファイ襲撃。それに素早く対応したのか、エルファイが右手に持っていた鞆を上大きく振り上げて、迫り来るレーザーさんの顎にクリーンヒット。カウンター成功によってレーザーさんの身体が3m程吹き飛んだ

そして何事も無かったかのように立ち上がる彼。傷が1つも無いように見えるのは気のせいだろうか

「やあ神崎くん、土曜日ぶりだね。それとお帰りエルフィ」

「ただいま帰りましたお父様」

「お、お邪魔してます……」

やっぱり慣れないのか、恐縮した挨拶になつてしまった。ちなみに時雨さんの姿は何処にも見あたらなかつたと言うことは、何処かに出かけたのだろうか。それと早苗さんもいないらしい。好機（？）が到来しているのかもしれない

「エルフィがこの部屋に自分から入ってくるなんて珍しいじゃないか。何かあつたのかい？」

「ええ。実はお父様に伝えたいことがあつて参りました」

さて、ここからは俺とエルフィとラーサーさんの戦いだ。いや俺と、エルフィだけだ

「今までの授業参観に来なかつたクセに何を今更になつて来てるんですか！！　そもそもなんでこの前の体育祭も来てくれなかつたんですか！！」

「なっ……」

「本来なら直後に言うべきだったとは思つたんですけど……今改めて言います。わたしが悲しんだ9年間分の想いを、誠意を持って謝つてください！！　今すぐに！！」

今まで聞いたことのない様な声量で怒鳴りつけたエルフィ。その声はこの屋敷の全体に響いたのか、あちこちでメイドさん達が走る音が聞こえるような気がする。メイドさんが駆けつける前に勝負を付けることは出来るだろうか

謝罪を求められたラーサーさんは言葉を返せないような表情でその場に立って固まっていた。駄目だ、これだと言い方が悪いけど使

い物にならない。やっぱりここは俺とエルフィだけの勝負らしい。さて、ここは勝たせて貰うからなエルフィ……！！

「どうしたんですか！！ 早く……早く謝ってくださいよ！！」

目に涙を浮かべながら大声を出すエルフィ。今までに見たことのない物を見たような感じで固まるラーサーさん。その2人の様子を見た直後、俺はエルフィの真正面に立っていた

「か、神崎さん……？」

「さてエルフィ、お前が言う言葉はそこまでだ。後は……俺が言う」「あ……お願いします……」

やっとの事で落ち着きを取り戻すエルフィ。さてと……どうしたものかな

頭の中でなんとか構成された言葉を口元に持ってくる。2人はどういう反応をしてくれるかな……

「ふう……」

覚悟は、出来た

「あのなエルフィ。お前が悲しんだ9年間、あれは仕方がなかったんだ」

「……え？」「か、神崎くん……？」

「お前が楽しみで楽しみで待っていた授業参観、運動会、体育祭。ラーサーさんも行くこうと決めてたんだよ」

「なっ、ちよっ、神崎さん！？ 何を言ってるんですか！？ わたしたちが言うべき相手はお父様の方」

「いいから聞け。ラーサーさんは毎年お前の授業参観を楽しみに待

っていた。待っていたんだけど仕事がない」
「そうです！ 仕事です！！ 仕事があつて来なかったんです！！
だから！！」

その言葉を聞いた瞬間、俺の今まで抑えていられたスイッチがプツンしたような気がした。ONの方にレバーが傾いた幻聴も聞こえた

「ラーサーさんは来なかったんじゃない！！ 来られなかったんだよ！！」

「えっ……！！？」

一瞬怯んだエルフィの肩を掴む。後ろではラーサーさんが近づいてくるような気配を感じた

「さっきも言ったとおりラーサーさんはお前の活躍を楽しみにしてた！！ ちゃんと前日まではお前に秘密で行く準備だつてしていたんだ！！ でも当日になつて外せない仕事 타이ミング悪く重なつて行つてやれなかったんだよ！！」

「そんな……うっ、嘘です！！ それは神崎さんがお父様の味方に付くように言つた嘘です！！ 来られなかったなんて……ありえませんが…… わたしは……わたしは仕事よりも後順位なんですよ！！？ そんなのありません！！」

「全部本当の事だ！！ ちゃんと俺はこの耳で確かな事実を聞いた！！ その言葉が嘘だなんて……あるわけがない！！」

「嘘です！！ 騙されてるんですよ！！」

「全部本当だ！！」

「お父様！？」「ラーサーさん……？」

いつの間にか真後ろに立っていたラーサーさんがいきなり大声を

上げた。エルフィの説得に集中していたのか全く気がつくことが出来なかった

息を荒げるラーサーさんが言葉を続ける

「神崎くんの言うことは全て本当だ……私は毎年お前の驚く姿が見たくて行くことは伏せていた。しかし、毎年のように重要度の高い仕事が入って行けなくなってしまったんだ……」

「そ、そんな……い、いや騙されません!! わたしが悲しむ姿を見てそれでもなお」

『あらあら落ち着きなさいよエルフィ』

「「「え?」「」」

どこからともなく聞き覚えのある声が聞こえたので、3人で辺りを探してみる。しかし、その声の主は何処を探しても いや、上か……

ちょうど死角になって見えないような影にエルフィの母である早苗さんが立っていた。その手には見覚えのある例のアルバムが

「あんまり大声出すとこの写真を屋敷全体に貼り付けるわよ?」

「ママ じゃなくってお母様!? いくらなんでもそれって鬼畜過ぎです!」

「それじゃあ静かになさい。あまりの清涼すぎて親衛隊が起動するところだったわよ? それと男性陣も静かにね? いくら神崎くんと言えど、親衛隊にかかっちゃ容赦ないわよ?」

「「「す、すいません……」」」

今の言葉とかをもつて確信に至った。この家庭内で一番強いのがて早苗さんだ。本当の主であるラーサーさんですら逆らえない絶対領域。もしかしたら……

「エルフィ、レーザーが言ってることは全部事実の事よ？」
「え……」

身軽そうな身体を華麗に動かし、結構高い場所から軽々と飛び降りて着地する早苗さん。何か新体操とかそんな感じの何かをしていたのだろうか

「今までそれを伝えられなかった私も悪いんだけどさ、毎年狙ったようなタイミングで仕事入れる会社なのよ？　だ・か・ら・ね」

早苗さんがレーザーさんの顔を見る

「レーザーも知らない1つの事実。体育祭ではちよつと間に合わなかったんだけど、この前の授業参観の時の仕事は『今年は完全完璧に家族優先なんで丁重にお断りさせて貰います。はあと』で電話切ってたのよ？　それなのにエルフィったらすぐに追い返して……私の努力とレーザーの愛が無駄になっちゃったじゃないの？」

「ちよつと早苗……？」

「貴方も何か言ってるやいなさい」

「……あ」

やべえ、そろそろ俺邪魔になつてきたかも

「エルフィ……今まで、悪かった!!」

「お、お父様……」

エルフィの左に移動して肩をポンと叩く

「か、神崎さん……？」

「さっきも言つたとおりアレは事実だ。だから……許してあげなよ。」

な？」

「あ……………」

そしてエルフィの背中を軽く押してレーザーさんにくつつける

「お前はちゃんと家族に愛されてるんだよ、エルフィ」

「……………」

「エルフィ……………」

「ふふふ……………」

さてと、これ以上長居すると完全に邪魔になりそうなので、早急に立ち去るとしよう。今にも家族の愛が始まりそうだし

「エルフィ、愛してるよ……………」

「う……………う……………うわああああああああああああああん！！」

「ああああ、レーザーの胸で泣くなんてエルフィもまだまだ子供ねえ」

「ごっつ、ごめんなさいパパああああああああっ！！」

駄目だ、今笑ったら確実に殺される

「あら、神崎くん？ どこ行くの？」

「これ以上の長居は俺にとっては無駄ですよ。それに俺はただの手伝いで来ただけですから……………」

後ろにいる3人の顔を見ないで部屋を後にし、そのまま屋敷を立ち去る。まさか外に出て30mくらいの場所まで鳴き声が聞こえるとは思わなかったけど……………まあ、なんとかハッピーエンドになって良かったよ。愛されてるって、いいよな……………家族っていいよな……………

屋敷の外まで来て後ろを振り返る。やっぱり見慣れない
1つ溜め息を吐いて再び前を見る。秋を告げるような涼しい風が
この場に吹いた

「うっ、うっ……」

「落ち着いたか？」

「はい……本当にごめんなさいパパ……」

「あらあら。まだ『パパ』って……エルフィも子供なのねえ」

「か、からかわないでください！！ わたしももう少しで大人です
！！」

「その割には今まで泣いてたくせにい」

「そ、それは……」

「ああ……パパって呼ばれるの何年ぶりだろ……」

「……調子に乗らせると危ないからその呼び方は止めておきなさい
エルフィ」

「……なんとなく想像は出来ました」

「ちよつと2人とモ!？」

「ふふつ……でも、今日はなんだか久々に甘えたい気分です……」

「それじゃあ私も甘えようかなあ……神崎くんに」

「え」

「冗談よ それはそうと……」

「そついえば神崎さんはどうしたんですか？」

「今言おうとしたのに言わないでよ……まあ神崎くんなら気まずくて帰ったわよ？」

「えっ!？」

「ふふふ……」

「行っておいでエルフィ」

「ぱ、パパ……?」

「お礼がしたいんだろう? それくらいお前の父親なんだからわかるさ」

「あ……」

「それにもう少しで大人って言ったわよねえ……ふふふ……エルフィはどうするのかしら?」

「ま、ママ!？」

「大人になりたいんだつたら……大人のキス、とか?」

「あ、あわわ……」

「ちよつと早苗?」

「冗談よ。まあ追いかけるなら早くなさい。まだ間に合つわよ」

「は、はい!! 行ってきます!!」

「あの子ももう15歳なんだな」

「そつね……歳を取るのって嫌よねえ……」

「まっただよ」

「ふふっ」

「どうしたんだい？」

「なんだかね、昔の私たちを思い出しちゃった」

「ああ……懐かしいね」

「ええ……」

「神崎くんか……あの子はしっかりしているようで何処かが抜けてうっかりするときがある。神崎くんならそれを埋めてくれるんじゃないかな」

「奇遇ね。私も丁度思ってたわ。今度私だけで挨拶に行ってくるわ」

「そうだね。よろしく頼んだよ」

「ええ」

「……………」

「青春……………」

エルフィの家を出てからどれくらいが経っただろう。ここから家まで遠いから時間の感覚がよくわからない。加えてさっきより風が冷たくなった気がするので、手が凄く冷たい。もう少しで冬何だ酔なあ……秋の思い出に焼き芋パーティーとかどうだろう。wars部のみんなと穹、笹原さん、その他変態男子とか含めて。その頃姉貴もいたら誘うとするか

1 人道を寂しく歩く。ポケットの中は温かいかなあ……冷たいなあ……吐息が白いなあ……早く暖かくなりたいかなあ……

夏だと「早く冬にならないかなあ」、冬だと「早く夏にならないかなあ」とか言う人間が多いのは自分でもよくわかっている。どっちかっていうと冬の方が好きだ。暑いのはどうしても嫌だ。かといつて寒すぎるのも嫌いだ

「ははっ」

自分の脳内はどうなっているんだ。呆れながら一人で笑ってしまった。コンビニでも寄っていいころ

「か、神崎さんっ!!」

「……え?」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえたので振り返ってみる。そこには家から走ってきたのか、エルフィが息を荒げて膝に両手を突きながら立っていた。何しに来たんだろう

「どうしたんだ?」

「え、えっと……か、神崎さんに……今日のこと……おっ、お礼がしたくて……」

「いや気にするなつて。俺も大した事したわけじゃないし、例言われるような事じゃないつて」

「それでもです!!」

困った。非常に困った。なんとなく予想は出来る。この絶対にお礼をするつて言い出した人は気が済むまでこの言葉を繰り返し続ける。本当なら受け取る程の事もしていないので貰う必要はないが、このモードに入ったなら仕方がない。遠慮せずに貰うとするか

「……悪いな。それじゃあ」

「……」

「え………ちょ、エルフィ……?」

小走りで駆け寄ってきたエルフィが自分の身体にピタリとくっつ

いて顔を伏せる。表情は見えない

「お、おい……」

「本当にありがとうございました……神崎さんのおかげでお父様とも仲直りできました……」

「あ、ああ……それなら良かったな」

「はい……だから……いくらお礼を言っても足りないのです、わたしなりのお礼の仕方……満足していただけますか……？」

エルファイがゆっくりと顔を上げる。そこには顔を真っ赤にしてこちらを見る姿が。何故だか見た瞬間に鼓動が早まった気がする。いや、加速し続けている。エルファイの心拍数が自分の胸に直接伝わる。自分の心拍数がエルファイに直接伝わる

そして、エルファイの考えている事が自分に伝わってきたような気がした

「これがわたしからのお礼です……」

エルファイが目を閉じて顔を近寄せてくる。駄目だ、未だに心拍数が加速してる。止まりそうにないこの鼓動、絶対に伝わってる。は、死ぬのかな俺

無意識の内に自分の手が女の子の肩を掴んで目を閉じていた。無意識に、身体が勝手に動く。そして自分の顔も近寄せ始めていた

「神崎さん……」

「エルファイ……」

ああなるほど、理解できた。エルファイが今どんな気持ちでいるのかを。多分、もしかしたら、そういう気持ちなのかもしれない

無意識って、なんだろうね。意識が無いって書くんだよね

「し、時雨さん！？ どうしてここに!？」

遠くにいるエルフィが我に返ったのか、顔を赤くしたままそう尋ねている

「いえいえ。買い物帰りでしたまたま通つたら、たまたまそちらの虫ケラがお嬢様に破廉恥行為をしようとなさっているのをたまたま目撃して、たまたま渾身の一撃が命中してたまたまあれだけ吹き飛んだだけですよ？」

「マズい……あの人の顔笑ってるけど、バツクの阿修羅と文字が怒りを露わにしてる……うん、わかった。確実に殺される。今回ばかりは理由がわかるぞ……!!」

「ふふふ……お嬢様を汚そうとした罪……それは万死！ いえ！ 億死に値する!! 我が朝比奈家に伝わる執事殺人武術、とくと味わうがよいわ神崎真箏!!」

「ちょ、まつ、待つてください時雨さん！ これは誤解」

「言い訳無用！ 沈めえつ!!」

「危なあつ!？」

時雨さんの放った右の渾身の一撃が地面に命中。相当の破壊力だったのか、アスファルトの地面が大きくひび割れ、その場の地形変化を成し遂げた。……本当に死ぬ

めり込んだ腕を抜こうとしている間に立ち上がってエルフィと反対の方向へ駆け出す。それと同時にエルフィも走ってきた。腕が抜けて走ってきた

「逃がすかああああああつ!!」

「ちよつと待つてくださいよ!!」

「待ったら殺されるから!!」

物騒な執事さんと、何処か問題のあるお嬢様と一緒に1本の道を走り抜ける。自分でも思うが、よくこんな傷ついた身体で逃げられること。火事場の馬鹿力と言うアレか？ わからないけど

命の危機が訪れているというのになんとなく空を見上げてみる。穏やかに流れる雲と、楽しげに飛んでいく鳥たちがそこにはいた。何故だか笑みを零してしまう。死にそうなのに

再び前を見て走る。誰もいない、ただ真っ直ぐに伸びるこの町の
道路

走っているのにも関わらず大きく呼吸をする

秋も後半を告げるような涼しい風が、この道を通り抜けた

#56 伝えられた想い(後書き)

#56・5 テストの結果はどうだった？

「なあ真筆、赤点あったか？」

「……ま、まあ……ノーコメントだ」

「じゃあ僕は教えるから、ちゃんと教えてな？」

「ちょ、ずるいぞそれ」

「僕の赤点の個数は1だ」

「おお」

「んじゃ教えろ」

「だが断る!!」

「ちよつと待て真筆!!」

(言えない……まさか健太より1つ多かったなんて……!!)

#56・5 終

はいどうもusです。多分これを読み終える頃には自分はゲームに没頭しているでしょうw

ゆえに10月は執筆活動が停止しちゃいますwww え

書けよって話ですが、これも4月から待っていたゲームのためw

今回ばかりはそちらを優先させてくださいww

さてさてwarsも7章が完結しましたw 最後のオチは一体ww

テンションで書いた物ですw そう簡単には真筆の口は奪わせません 穹は？

それはさておき、いつになるかもわからない次回の予告を

今回は再びExかもです。体育祭の話を入れたいな、とw 明日香の張り切りがわかりそうなお話ですw そして何かの伏線的な何か

も出るかもです

正直まだ中身は未定ですw 大まかなストーリーは出来てますがw
そっちに入らず8章に入ったら……とうとうあの人を出します

あの人ですw 西宮部長です!! え この章で登場したの1場面
じゃね? と思いつつも書き上げましたww すいませんw

冗談はさておき、あの人を出しますw あの人ですw あの人です
w 誰ですか

読み直してください

では、いつになるかはわかりませんが、また次話でw

あまり期待とかないでくださいよ? 間違えましたw 期待しな
いでくださいw 目が腐るのでww え

さあ、この作品を読んだら他の作品(人気作)で目を潤してくださ
いね

あんだーすたんどからのお願い

あんだーすたんどからのお知らせ

<http://twitter.com/#!/6rokundehstand>

ついったー始めましたw

気が向きすぎたらふおろーとかおねがいしま s 前にも書いた?
気にしないw

EX3-1 体育祭準備の部（前書き）

『弦巻高校・男性発情大事件』

：概要

2096年9月20日、とある女子生徒2名による胸のサイズによる口論により、男子生徒167名が暴走した事件である。なおこの事件は実際に誰も発情した人物はおらず、事件に関わった男子全員が不可思議なコールをしただけである。なおこの事件は、発端である女子2名によって解決された。

ちなみに記録者（作者）は おや、誰か来たみたいだ。

EX3-1 体育祭準備の部

2096年9月18日火曜日、午後4時30分。東京都立弦巻高等学校校舎裏Wars部部室

「ぶ、部長……今、何て言いました……？」

部長のある一言によって部室内は静まりかえり、健太が部長にそれについて聞き返している。今日は珍しく先生も顔を出していて、その先生の表情は呆れたような……そんな感じの表情をしながら健太と部長の間を見つめている

「なんだ佐々木、ちゃんと聞いてなかったのか？」

「……………」

絶対に聞いてたな

「だったらもう一度だけ口にしてやる。来週の土曜日に」

そして、本日2度目の言葉を、本日2回目の部長から口にされる

「 体育祭が開かれる」

「そうかあ……もうそんな季節なのかあ……………」

その言葉と同時に静まりかえった部室内は元に戻り、健太が明日の方向を見ながら小さく呟いた。その方向には沈みかけの夕陽が窓から見えている。空気も戻ったところで先生が大きく溜め息を吐

いた

「全く……何でお前らはこう……人の話を聞かないんだ。確か2学期始まってからすぐに伝えたハズだぞ……？」

先生のその苦労、わかります

「さて、とにかく今月末には体育祭が開催される。お前らは初めてだから……って神崎は知ってるか。チーム分けがそろそろあるはずだ。とはいえ俺には全く関係ない話だけだな」

「先生、チーム分けって……？」

部長が口にした「チーム分け」と言う言葉に疑問を抱いたのか、琉華が手を挙げて質問をしていた。そういえば姉貴の時の体育祭に来たときもそんな感じの事があったとか言ってたな……

先生が席を立ち、部長の奥にあるプロジェクターを操作しながら話し始める

「そういえばこれはクラスでも説明がまだだったかもな。チーム分けってのは言葉の意味のまま、1学年全6クラスをくじ引きで3チーム（紅、白、青）に分ける事だ」

「なるほど……」

つまりは俺たち4組は他5組いずれかと同じチームになって他のチームと戦う事になる。このwars部には俺たち4組を含めて3つのクラスに在籍がある。明日香、光久の所属する2組と、琉華、望の所属する5組、俺、健太、エルフィの所属する4組。全ては運任せだが5分の1の確立でこの2クラスのどちらかと同じチームになる可能性があるわけだ。同じになったら残りのクラスと戦うのは悲しいけど、バラバラだったらそれはそれで面白くなりそうだ

色々と考えている内に先生がプロジェクターの用意を終了させていたみたいで、電源がONにされていた。画面はまだ青い

「西宮が言った「関係ない」ってのは、学年内対抗だから別学年に点数が鑑賞することが無いって意味だな。だけどまあ……」
「どうかしたのか梅花」

先生が難しい顔をしながらプロジェクターに画面を映す

「俺も詳しい話は知らないんだけど……今年も学年の壁を越えた競技があるとかないとかだ」

『はっ』

「いや、だから俺も詳しい話は知らなくてな？ 見た限りだと」

画面に1つのファイルが開かれ、地図らしき物が映される。どうやら校内全体を表した地図らしい。細部までちゃんを書き込まれている

「どうやら学校全体を使った競技を学校側で提案しているそうだ」

「そ、それってわたしたちに喋っちゃっても問題ないんでしょうか

……」

「まあいいんじゃないか？ どうせ後で生徒全体に知らされるだろうしな」

いいのか教師

「まあとにかくだ。お前らは聞いてなかったらしいが、明日から本格的に体育祭に向けた練習などが開始される。明後日の集会でチーム分け、その他の説明があるはずだ」

先生がPCとプロジェクターの電源を切り、セツトを順に仕舞っていく。隣にいる健太はまだ明後日の方向を見ていた

「明日からは全員が部室に集まることも少なくなるだろう。と言うわけで体育祭が終わるまではしばらく部活動停止とする。ただまあ……鈍らせたくないヤツは自主練は認めてやる。それじゃあ俺は職員室に戻るからな。後は任せたぞ西宮」

「ああ」

言うことを全て言った先生が部室を後にする。それだけで一気に静かになったような気がした

部長が大きく息を吐いて頬杖を突く

「全く……なんだ学校全体を使った競技って……そこまで調べておけてんだ」

「あ、あはは……」

「まあいい。俺も今日は面倒だから帰る。そんじゃーな」

うわ、無責任。この後の指示も出さずに部室を出て行きよった
1年生だけが部室に残り、再び静かな空気に包まれてしまった。
ただし健太がまだ戻ってこない

「で、結局どうするのだ？」

「どうするも何も……どうするんだ？」

「……そこで私に振らないで欲しい」

「そうは言いつつ僕を見ないでくれ」

「わ、わたしですか？ え、えーと……」

「ボクに助けを求めないでよ。ねえ真箏くん？」

「……………」

いつの間にか戻っていた健太も加えて12の目がこちらに集中した。四面楚歌……いや、十二面楚歌と言ったところか。上手くない

「どうするってなあ……じゃあ1戦だけやっておくか？」

結局この日は1戦だけやることになった。なんだかんだで体育祭に向けてそれぞれのクラスが動き出した

「……………」

『はいもしもし？』

「あ、もしもし。明日香です」

『おお明日香ちゃんか。電話掛けてくるなんて珍しいねえ』

「い、いや……ちょっと事情があって……」

『事情かい？』

「あ、うん……実は聞きたいことがあるんだけど」

『それでは各クラス代表1名ずつ前に来てくださーい』

先生から忘れていた存在である体育祭の話が聞かされてから2日後の3時間目。なんと中途半端な時間に全校生徒が体育館に集められていて、放送委員か何かは知らないが、そのようなアナウンスが館内に響き渡った。もちろん代表は健太だ

ちなみに今現在何故集まっているかというのも

『それではじゃんけんで勝った順にくじを引いて行ってください』

体育祭のチーム分けが行われている。正直全校生徒集めずとも学年ごとにやればいいのでは、と思ったが、どうやら先生が一昨日言っていた種目について説明があるとか無いとか。とりあえず目前で行われているのは各学年がじゃんけんをしているところだ。健太は3番目に引くことになったらしい

「どのクラスとチームになるんですかね？」

「さあな。ま、健太と運に任せるだけだろ」

「そうですね……（2、5以外でお願いします……）」

「ん、何か言ったか？」

「い、いや何でもないですよ？ あはは……」

エルフィは目の前に座っているのでこうやってすぐに会話が出る。ただいちいち後ろを振り返ってくれるのも大変だろうな……つてそうじゃない。まずは健太の引いた結果を知らないと

ちなみに引く順番は、6組 3組 4組 2組 5組 1組の順。

他の2学年の順番は知らない。そして順番に引き始める1学年。6組代表は神経を手に集中させるような感じで神を1枚引き抜いた。

中身は全クラス同時に発表するらしい

3組、適当にくじを引く

健太、素早くくじを引く

2組、悩んでからくじを引く

5組、手をつっ込んでる時間が長い

1組、強制終了

全クラスくじを引き終わり、他の学年が終わるまで待機をする。

それから30秒後には全て完了したらしく、中身を見る準備が開始

されていた

するとエルフィが再びこちらを見る

「神崎さん」

「ん？」

「神崎さんはどのクラスとチームになりたいですか？」

「いや、別にどこでも大丈夫だけどな……まあ欲を言えば運動神経の高い3組辺りと……」
「なるほど……」

何か考えるようにしながら前に向き直るエルフィ。その後ずつと体勢をキープした状態で座っていた。声を掛けないであげよう

『さあ、全クラス中身を確認してください　！』

ステージ前に立つクラス代表全員が一斉にくじを開く。その中にはその色一色で染まっているらしく、すぎにどのチームになったかわかるらしい。閉じてる状態だとただの白い紙なのに赤、青に関しては透けないというのが素晴らしい。日本の技術、恐るべし

そして全員が紙を上に掲げる。健太は　白か。他のクラスは何だろう

1 学年

1 組・赤

2 組・白

3 組・青

4 組・白

5 組・赤

6 組・青

2 学年

1 組：青

2 組：赤

3 組：青

4 組：赤

5 組：白

6 組：白

3 学年

1 組：白

2 組：白

3 組：赤

4 組：青

5 組：青

6 組：赤

教師 A：白

教師 B：青

教師 C：赤

……教師？ 担任を持たない先生は3グループに分かれて参加を
するらしい。姉貴の代にこのシステムが無かったという事は……俺
たちが入学する前から今年から導入されたシステムだろう。これは
燃えるかもしれない

しかし……まさか3組と6組がチームになるとは……3組は運動
部のメンバーが多いせいかな全体的に体育の成績が高い。加えて6組
も3組に次ぐ為あそこは驚異だ

1組と5組に関しては……1組はそこまで問題無いかもしれない
が……5組には割と運動部が多い。更にはwars部、琉華と望ま
でいる。ある意味強いチームだ

そして4組と2組

「まさか明日香達のクラスとチームになるとは……」

「正直残念です……」

「だな」

「えっ？」

4組も6、7割の人間が部活動に所属してるからいいだろう。ただ2組。運動部に入っているのが3割くらいしかない。要するに勉強できる集団の集まった真面目(?)さんクラス。これはマズイ。非常にマズイぞ……優勝は厳しいかもしれない戦いだ

「え、えつと……まさか神崎さん……」

「ああ。これは4組が多めに頑張るしかないな……」

「あ……はい、そうですね……」

そう言うと、エルフィは溜め息混じりに前に向き直った。それほど2組と組むのが嫌だったのか？ それだけ優勝したいのか？ さすがに2組が可哀想だ

組み合わせ発表も終了したので各クラスの代表が列に戻ってくる。その時健太は微妙な顔をしていた

「それでは続いて校長　は休みだそうなので、更に風邪でない
教頭の代わりに教務主任の畑山先生から体育祭に関する連絡事項を

」

校長の休みの理由は、まだ夏休みボケが抜けてないとか

校長、教頭の代わりに出てきた主任が体育祭に関する話を話し出した。殆どが注意事項、先生の言っていた例の種目については話が
なく終了した

『それではこれにて全校集会を終わりにします。この後は各チーム作戦会議、練習を自由に行ってください。集合場所はクラス代表に渡したメモに』

「ああ……終わつたな、今年も」

「こ、今年もつて……まるで去年まで何かあつたような言い方ですね？」

「……聞くか？」

生まれてこの方15年、一度も運動会、体育祭で勝利を納めたこと無い可哀想な人物であることは一つの自慢だ。どれだけ運の悪い人間に育つたんだろう

悪夢を思い出している内にクラスの全体が円になり、その中心にいる健太から今後の活動予定を聞かされる。今までの健太が出す案と比較できないほどマトモな案を出してきたので、学園祭以来久々のざわめきが発生する。後で話を聞いたところ、体育祭には気合いを入れているとか

「……まあなんだ、体育祭まであと1週間と1日な訳だし……なんとか2組と連携を取って優勝をもぎ取りに行くぞ!!」

『おおーっ!!』

そして久々の一致団結

そうやっている内にチームクラスの2組が後ろにやって来ていたらしく、先頭には申し訳なさそうな顔をしながら立つ、2組委員長すずはしの鈴橋さんが立っていた。笹原さんとはどうも仲の悪いのやら良いのやらわからない人物だ。なんせ学園祭では売り上げだかなんだかで競つてたわけだし

「とりあえず全員で話し合おう。それぞれの種目をどう切り抜ける

かを、ね
」

そして4組、2組による作戦会議が始まる

x

弦巻高校体育祭 プログラム

開会式 8：30～

開会宣言

学校長挨拶

選手宣誓

諸注意

準備運動

午前の部 9：00～

1 3 学年徒競走

2 1 学年男子団体競技：騎馬戦

3 2 学年女子障害走

4 2 学年男子障害走

5 3 学年女子団体競技：大縄跳び3種目

6 1 学年女子団体競技：タイフーンリレー

7 1 学年女子障害走

8 3 学年男子障害走

9 2 学年徒競走

10 1 学年徒競走

11 教師対抗3番勝負：綱引き・玉入れ・大縄跳び

12：30～13：20 昼休み

午後の部 13:25)

- #12 全チーム対抗点数争奪大戦争
- #13 2学年女子団体競技：ムカデ競争リレー
- #14 3学年男女混合競技：背中渡り
- #15 1学年男女混合競技：二人三脚リレー
- #16 3学年女子障害走
- #17 2学年男子団体競技：綱引き
- #18 1学年男子障害走
- #19 2学年男女混合競技：大玉転がしリレー
- #20 3学年男子団体競技：棒倒し
- #21 学年別チーム対抗リレー

閉会式 16:30)

整理運動

学校長挨拶

結果発表

賞状授与

閉会宣言

x

「……と言うことだが……正直な話決めることは山ほどある。ただ……1つだけでも重要なことが存在する。2組委員長鈴橋さん、何だと思う?」

「え、えーつと……2組の力不足?」

その答えに首を横に振る健太。多分間違いではないと伝えたいの

だろうけど伝えられないのか？ まあ確かにそれを伝えるとなるとかなりの勇気が

「男女混合競技の二人三脚のペア決めが問題なのだよ明智くん！！」

「む、呼んだか健太殿？」

「……悪い、お前じゃない」

「そ、そうなのか？」

健太の呼ぶその明智くんとは光久以外に誰が居るんだろう。もしかして光久のお父さん辺りだろうか

今の発言が大問題だったのか、笹原さんが健太に近づき1発殴りを入れた。もちろん身体は吹き飛んで3m飛ばされる

「アンタ……疚しい事でも考えてるんじゃないでしょうね……？」

「誤解だ綾香！ これ見るこれを！！」

口から出た血を拭いながら先程のメモを笹原さんに突き出す健太。ここからじゃ文字はよく見えないが、笹原さんが口を塞ぎながら驚いたような表情をしていると言うことは、何かとんでもないことが記されているに違いない。その反応が気になったのか、2組委員長もメモを見る

「な……なによこれ……」

「『 なお男女混合競技に関しては、絶対に男女ペアが成立するようにすること』……嘘でしょこれ……」

「まあ競技上3年生は省かれるらしいけど……1、2年に関しては絶対命令らしい。そこが大問題なんだよ……」

その絶対命令の内容にざわめき出すチームメイトたち。まだ体育館の中に他のチームも居たのか、同じようなタイミングでざわめき

始めるのが聞こえた

1年生の混合競技は二人三脚……マズイ、色々マズイ。これだったらあまり盛り上がりがなくても2年生の大玉転がしの方がマシかもしれないぞ……

「くっ……仕方ないわね。ここからは出来ない健太に代わってアタシが指示を出すわ！！ 全員色々不満、羞恥があると思うけど…… 覚悟してかかりなさい！！ そして優勝をこの手でもぎ取るわよ！！！」

『おおーっ！！』

「僕以上の団結力だー（棒読み）」

……今回ばかりは健太が可哀想だと思える

「まあ今のは冗談としても……まずは二人三脚のペアとリレーのメンバーを決めないと駄目ね。健太、リレーに関する情報は？」

「あ、うん。リレーは各クラス男女2名を選択、順番は自由。走る距離は全員同じの200mで、アンカーだけは倍の400mらしい」

なるほど。それなら足の速いやつを選び出さないといけないな。そうなると部活に入っていないのに何気に足が速い宮本が適任だな。全員で宮本の顔を見る。が、

「それじゃあ……4組からは神崎と佐々木、エルフィと柚葉ゆはで出るわ」

「ちょっと待とうか笹原さん。何で俺（僕）たちが出ることになるのだね」

笹原さんの思考に驚いた。流石のエルフィと高梨たかなしさんも驚きを隠せていないようだ

「何でも何も……アンタたち足速いじゃない？ だからよ。それに何気に足速いエルフィと、陸上部エースの柚葉が出ればこっちは確実でしょ」

「絶対に俺（僕）より宮本を出した方が良いような気がする」

2人で同時にそう言った瞬間、笹原さんの表情が笑っていない笑顔に豹変する。殺気と言う物を感じ、瞬間的に後ろに飛んでいた。健太も同様、ギリギリ右フックを回避したらしい。直後、笑顔が消えて笑顔に変わる

「これは命令よ。黙って出なさいバカ共」

「……すいませんでした」

「その……わたしたちはどうなるんでしょうか……」

「そうだよ綾香。なんでウチらも出ないといけないのさ」

「だって2人とも女子で足一番速いわよ？」

「いつ記録してたんですか！」「……手抜いとけばよかった……」

決まった女子2人も、流石に笹原さんの言葉からは逃げられない様子だ。これで4組からのリレーのメンバーは決まってしまった。こっちがそうしている間にも2組では話し合いが行われている様子だ

「さて、と……これが決まったら二人三脚の事も決めないとねえ……そしたら男女別に徒競走と障害走の走順、団体競技での組み合わせを決められるんだけど……」

「流石は学年首位の笹原綾香……でも最近は鈴橋かおりに追いつかれつつある、と……中学から変わらないねえ2人は」

「黙りなさい。というかアンタでもこのくらいの考えは出せるでしょ」

「とっくに考えてはいたさ。ただまあ全権限を綾香に持ってかれた

ら……僕の発言権は全部無くなったよ」

「そうね。アンタには生きている権利……いや、義務すら無いわ」

「……泣いて良いですか？」

「むしろ死になさい、惨めに。自分で死ぬのが怖いならアタシが殺してあげるわ。というかあの言葉は絶対に許さないから」

「へーへー」

この2人は一体何があったんだろう。大会が終わったら終わった元には戻ってくれたし……「あの言葉」って何だろう。俺が関与できる事では無いだろうけど、また関係が壊れるような物だったりしたらどうしよう。……にしても鈴橋さんとも馴染みがあったのか。さっきは鈴橋さんって言うてたのに

なんて考えている内に2組の話し合いが終わったらしく、鈴橋さんが笹原さんの前に立っていた

「さて、足の速いメンバーは選出出来たのかしら？」

「とりあえず2組からは東城、石田、藍、皐月を出す事にした。補欠とかは選べるわけ？」

「そういえば決めてなかったわね……それじゃあ補欠は宮本と鴻巣「」のウツを出すわ」

「それならこっちは……榎本えのもとと明日香を。これで決まりね」

「はあ……正直な話無性に心配ね」

「それならこっちだってそうよ……」

「はあ……」

仲が良いのは良いことです

それにしても明日香が補欠入りか……まあ確かにそこそこ足は速いような気もするけどエルフィには及ばなかった気がする。それでも地道に体力はつき始めたから……と言っても補欠だ。余程の事が無いと出ることはない

この後走順を決める話し合いが始まり、その結果がすぐに出るとになる

我が白チームの作戦は最初から最後までバランスを取って走ることにする。最初に足の速い人を入れて順位を繰り上げておき、最後に余裕を持てるようにする、あるいはその逆なんという作戦もあつたりするが、ここは敢えてこの作戦で行くことになった。その順番が

? 高梨柚葉

かすなり

? 石田一成

? 佐々木健太

かじまつ

? 唐松皐月

? エルフィ・N・エストラント

? 東城悠

はるか

? 新島藍

? 神崎真箏

こうなった。まあそこそこ行けるとは……思う

「さて、と……残るは二人三脚ね……」

「男女合計80名、男子40、女子40の、計40のジャストな組み合わせ……本番では2組に分かれて6レーンで勝負、か……ここはくじ引きか?」

「そうね……組みたい物同士で組んだら確実に余りが出るからそれが適当ね……」

で、結果

「いやあ……健太か……久々ね」

「だなあ……気付けばかおりも小学生と見間違えなく　痛い痛い

!」

「失礼ね……何処見て言ってるのかしら？ 少なくとも綾香よりは
あるわよー!!」

「ごめんなさいでした……」

「アンタこそ失礼でしょかおり!! 背は小さくて小学生並なのに
何でそう胸が発達するのよ!! この6ヶ月で何が起こったって言
うのよー!!」

「小がつ……これでも156あるわ!! ……まあ？ 今私の胸は
高度経済成長を迎えているのかしら？ バブルよバブル!! あな
たの胸は今大恐慌よ!!」

「何が大恐慌よ!! あーもう別に発展途上でも大恐慌でも何でも
良いわ!! アンタはその内たゆんたゆんになって動けなくなるの
よ!!! ざまあ見なさい!!!」

「何だつてこの水平線？」

「何よこのキリマンジャロ？」

いけない!! それ以上その会話はいけない!! 周囲にいる男
性陣が出血多量で全滅してしまう!! これじゃあ体育祭どころか
血祭りが……ああ、滋賀崎が沈んだ!!

……にしても高度経済成長か。うむ、穹もいつかは……いや、や
めておこう

姉貴はどうしているだろうか

「ま、落ち着け2人とも。何も胸だけが女じゃ」

「アンタは黙ってなさい!!」

「………はい」

幼馴染み、最弱なり

「お、落ち着くのだ2人とも……争っているは何も始まらぬ……」

「……そうね。あなたのペアがお呼びよ」

「くっ……今回は一時休戦にしましょうか……」「めんなさいね明智くん……」

「何、気にすることはない。が……」

「……あ」「」

「滋賀崎！ おい滋賀崎しつかりしろ！」

「駄目だ神崎！ こっちは呼吸してないぞ！」「くそっ、こっちは心臓が止まってる！」「医者を！ 誰か早く医者を呼んでくれ！」

「落ち着け！ 駄目だ、もうこっちでは「おっぱいコール」が始まつてる……！」「おっぱい、おっぱい！」「う、うわぁ誰か助けくれ！ 俺もあちら側に巻き込ま……うわぁああー！」

『宮本おおおおー！』『おっぱい！ おっぱい！』

「大分取り返しがつかないのだが……」

「……」

被害総数、168名（全員男子。1年全120名、2年23名、3年24名、教師1名）。この事件の原因となった2名の女子によって無事（？）解決された

なお、この事件は後に『弦巻高校・男性発情大事件』として語り継がれることになった

事件が解決してから約15分後

「……神崎さんまでもが巻き込まれたときはどうなることかと……」

「悪いなエルフィ……まさか宮本が落ちたとは……」

「まさか真筆まで……その、なんだ……コールし始めるとは」

「……悪い。男はああいう生き物らしいんだ」

「そうですね……」「そうか……」

「ところでエルフィはペアの所に行かなくて大丈夫なのか？」

「そ、そうですね……それじゃあ頑張りましょうね」

「ああ」「……行つたか」

「ん、何か言つたか明日香？」

「いや、何でもないぞ？」

とりあえずくじ引きの結果、俺は明日香と組むことになったらしい。おそらくくじには「相手クラスの異性」と組み合わせになるように作られていたらしい。つまりはエルフィは2組の男子と組む事になっている。その結果は他のメンバーにも現れている

「しつ、しまさか私とお前がペアになるとはな！ 偶然だな真筆！？」

「ああそうだな。やるからには」

「さて頑張るぞー！」

「あ、ああ……」

なんだか明日香のテンションがいつもよりおかしいような気がするのは気のせいだろうか。いや、気のせいじゃないぞこれは……何かがおかしい

「頑張るしか、ないだろう……」

「え……？」

「な、何でもないつ。それではまた後でな」

「あ、ああ……」

一瞬明日香の表情が曇つたように見えた気がした

ペア合わせもなんとか終了して全員が再び集合する。どうもこれからの予定を立てていたらしく、代表格3名が話し合っていた、がそれも丁度終わった様子。男女別れて集合する形となる。男子の先頭は健太、女子の先頭は仲の良さそうな2人。男子はこのまま体育館で決め事を、女子はとりあえず多目的教室に移動することになっ

た。これから決めるのは徒競走、障害走の走順、団体競技の組み合わせだ

「それじゃあ騎馬戦の事から考えよう。40人だから作れる騎馬は10で」

体育祭は準備から勝負 by 佐々木健太

1週間後に控えた体育祭に向けた準備が、今始動した。負けられない戦いがそこにある。狙うは優勝、ただ1つだけだ

「……なあ藍、少し頼み事があるんだが……」

「言われなくてもわかってるよ。これと交換して欲しいんでしょ？」

「あ、ああ……悪いな」

「良いつて良いつて。まあ神崎くんも悪くは無いんだけどねえ……」

私とは不釣り合いつていうか」

「……それは真筈が藍に務まらないって事か？」

「逆だよ逆。そういうのはねえ……同じ部活である誰かに任せるよ」

「藍……済まないな」

「私は明日香の味方だよ。勿論みんなも。……琉華には及ばないだろうけどね」

「はは……琉華はまた特別だからな……」

「私と明日香がこうしてるのも琉華のお陰だね。それじゃあ……はい」

「ああ。ありがとう藍」

「どういたしまして」

EX3-1 体育祭準備の部（後書き）

久々に書いたから異常な具合です。凄いggdgdでえすww

え、何？ 前書きのあれは何かって？ 気にしないw 最後に言いかけたのは何かって？ 自分は おや、誰か来t(ry)

改めましてusです。久々の投稿（登校）で疲れました。以上にくだくだしてます。毎回の事ですが、今回のggdgd具合は最高です。調子を取り戻しつつやりたいですが、ゲームの方にも手を出さないといけないため、ちょっと辛い感じですよ 調子を取り戻してもggdに変わりはありませんがw
それはさておき次回予告

今回は体育祭、午前の部をお送りしますw プログラム組むの大変だったんだよ？ ありとあらゆる所から情報を引き出してきてだな……（全て経験、乙）

ぶっちゃけ午後の#12は危ないです。死者出ます え そんな予定です え、え？

……まあ、次回会えたら会いましょう。では

E X 3 - 2 体育祭の午前の部（前書き）

なんだか長くなりました

入りたい要素がもう少しあったのに尺の具合でカットになりました

本当は面倒だった（蹴

はい

すいませんでした

EX3-2 体育祭の午前の部

「くっそ……やっぱり眠いな本番は……」

「仕方ないだろ。最終準備と微調整、その他色々あるんだから」

「微調整はともかく最終準備は昨日のうちに終わらせるべきだ、つての」

前から走ってきた男女のペアから1本の紐を受け取り、それを俺の右足と明日香の左足に縛り付ける。あまりきつすぎると到着時に解けなくなる。かといって弱くすると走ってる途中に解けてしまうという事件が練習中しばしばあったので、きつすぎず弱すぎずの強さで足を縛る。現在時刻は朝の6時頃。時間が時間なので結構寒い。なのに半袖だったりする。そして学校のグラウンド

ととう待ちに待ったという感じの体育祭。本番が始まったら練習するなんて事はまずありえないのでこの時間帯に練習すると言っことになった。とはいえまだ集まっているのは7割程度。理由は登校距離とか様々な理由もあるせいだろう。一番遅い人であと20分くらいはかかるらしい。しかもそれはリレーメンバーなので、バトン回しの練習が自然に最後になるのは明らかだ

ちなみに練習をしていられるのは7時まで。それから1時間半かけて最終準備、出欠確認などをし、最後の30分は自由時間が設けられると言う感じだ。んでもって開会式、と

「大丈夫か？ きつくないよな？」

「ああ大丈夫だ。行くぞ」

紐を縛り終わったので立ち上がる。それと同時に2人の外側の足

を前に出し、そこからリズム良く足を交互に出していく。wars
で一緒に行動することも理由になるのかどうかはわからないけど、
結構速いほうだとは思う。150mがあっという間だ。そのあつと
いう間の距離で明日香の顔が真っ赤だというのは俺しか気がついて
いない。前からもそうだったけど熱でもあるんだろうか。所々不安
がある

不安と言えば2点。まずエルフィについて

あの波乱の集会の後、エルフィがまともにも口を聞いてくれなくな
ってしまった。5組の2人とは体育祭が終わるまで集まるのは止め
ようと言うことになって最近話していないが、同じチームで同じク
ラスのエルフィがよく話を無視する。何か原因があるのか、と質問
したところ「何でもありません」と言っただけ顔をふいっと向けてしま
う。絶対に何かあるだろうと思いつつ健太に思い当たるフシは無いが
尋ねてみると、「ああ……しょうがない。そしてお前もわかってや
れ」と言ってくる。駄目だ、わからない。更に明日香は「……すま
ない」と謝ってきた。本当にわからない。おかげで今日は眠れな
かった(という大袈裟な表現)

リズム良く足を前に出す。スピードが落ちる気配は殆ど無い。も
う少しスピードを上げることが可能か？

「明日香、もう少しスピードあげられるか？」

「うにゃっ!？」

いざ尋ねてみると言葉にならない声で大袈裟な反応をする明日香。
突然すぎたからか身体が大きくビクツとなった。それが原因でバラ
ンスが崩れて少しスピードが落ちる

「悪い。大丈夫か？」

「あ、ああああ……だ、だいじょうぶだ。すこしナらいける」
「お前本当に熱あるんじゃないか……？」

でも正直今の反応が可愛いと思ったのは心の奥に仕舞っておく

不安要素2点目。午後の部一発目の種目、全チーム対抗点数競争大戦争。まず名前から物騒すぎるのは全校生徒の約7割が思っている状況。「戦争」という単語でビクついているのは4組にも数名いるらしく、その内の笹原さんが不安げに思っている状況だ。加えて2組の鈴橋さん。喧嘩しているけど中身はよく似てるのかもしれない2人だ

そしてその種目に関してもう1つ。未だに競技の詳細が明かされていない。中学までのように予行練習は無いから他のクラスと手合わせする機会は少ない物の、その物騒な競技の詳細が昨日まで明かされなかったと言うことは……未完成競技？それは非常に困る
というか今日説明されたら收拾つくのだろうか

なんて思いながら反対側のペアの元へと走り着く。ここの場面も結構重要になるので慌てず丁寧に縄を解いて次ペアに渡す。これで任務は終了、後ろに並んでアンカーがゴールするのを待つだけの簡単な競技。とりあえずすでに走り終わっていたエルフィに睨まれたのは気のせいだと思いたい

「本当に何かしたかなあ……」
「……………」

隣で顔を真っ赤にしている明日香は何も答えてくれなかった。駄目だ、何も心当たりがない

5分後

「それじゃあしばらく男女別に団体競技の練習でもしようか。綾香とかおりは少し遅れるらしいから僕が指揮を取るから……お願いですから文句を言わないでください」

情けない委員長だ

二人三脚の練習も一段落したところで5分の休憩を挟んで練習を再開させるという健太の案。この時間で大体揃ってきただろうか……60人くらいはいるかもしれない。他のクラスも加えると結構な人数だ。グラウンドが狭く見えてきた。ちなみにチームメイトで個人的に練習を再開している人が数名いたりする。滋賀崎とかがそのメンバーだ

「さてと……真箏、全体的に見てどう思うよ」

周囲を見渡していると、さっきまで少しだけ離れた場所にいた健太がそう尋ねてくる。その近くには知り合いが居たりしない

その質問に一息挟みながら全体的な考察を立てる

「そうだな……まあ悪くは無んじゃないか？ 竹内情報によると運動部の揃った青チームは二人三脚で大分グダグダしてるとかだな。赤は見た感じだと同じレベルだし……そこは問題ないと思う。他の種目はまだわからないけど……個人種目と学年全体競技の成績にもよるだろうな」

「やっぱりな……ただ一つだけ……不安があるんだ」

その言葉と同時に表情が曇る。なんだか珍しいと思いつながらその不安要素を尋ねてみる

「実は僕、昨日から胃の調子が」

「大丈夫だ健太。それは緊張による腹痛だ」

……冗談だとは思っていた

「冗談はさておき……そろそろ始めるとするか」

「ああ」

2人でその場を立ち上がる。周囲のみんなが練習再開を待ちわびていたのか、一斉にこちらを向き、集まってきた。その遠方には息を切らしながら走ってくる2人の代表の姿も見えたりする。健太は気がついていない模様

「そんじや練習再開します。男子はあつちで、女子はここを使って団体競技の練習を。具合が悪くなったりしたらすぐに休憩、報告、保健室への搬送を」

健太が次々と的確すぎる指示を周囲のみんなに出す。2組の一部は黙って聞いていたが、その残りの一部と4組のメンバーは「信じられない」と言った感じに健太の顔を見ている。もちろん俺もその1人、代表格2名もそんな感じになっている

「というわけで解散！ 女子は2人の指示に従ってな。んじや後はヨロシク」

「え、ええ……」「うん……」

後ろから来ているのに気がついていたのか、後ろにいる2人に対してそう言いながらその場を去り男子の練習場所へと移動する健太。気配でも感じたのか？ あいつもかなり強くなったんじゃないだろうか。そう思いながら後をついていく

「ま、なんとかなるぞ」

何故だろう。いつもなら真面目に受け取れない言葉が、妙に自信を沸かせてくる感じがした

そして時間が経過するのは早く、気がつけば全体集合の時間になっていた。弦巻高校体育祭の始まりだ！

×

8 時頃、神崎家

「おばさーん、準備出来たー？」

「待って穹ちゃん。もう少して完成するから……出来上がり！」

「弁当ならわたしも持ってきたのに……そんなに食べられないよ？」

「まあまあ。余ったら真筆に食べて貰えば良いだけだし、それにその穹ちゃんの手作りの弁当を真筆にあげれば良いだけでしょ？」

「まさかわたしのお手製だと言うことに気がつくとは……相変わらずだね……」

「16年の付き合いじゃないの！ それくらい真筆と同じくらい知ってるわよもぉ〜」

「あはは……そうだね。そうすればいいよね。って話してる場合じゃないって！ 早く行こうよ！」

「そうね。それじゃあ弁当包んでるからお父さん呼んできてくれる？ そろそろ行くよって」

「りょーかい」

「……16年、か……時間が経つのも早いわね……ね、雲？」

『そうだね……私ももう22だけどそんな時間なんてあっという間だよ。2人も直に大人だよ?』

「あら寂しいわねえ……あなたの時もそうだったけど?」

『おおおお嬉しいねえ。……とりあえず來斗の事はこっちでも聞いている。残念な話だったけど……前を向いていけないとね』

「そうね……もう年半近く……」

『でもそれならあの子がなんとか出来るかもしれないね。それじゃあ……後で落ち合えたら』

「はいはい。早く真箏にも顔出してあげなさいよ?」

『まあそれは11月のお楽しみで?』

「11月……あ、そうね。それがいいかもしれないわね。きっと驚くわよ」

『はは……それじゃあねお母さん』

「じゃあね霽」

『選手の皆さんは朝礼台正面に2列で並んでください』

司会だと思われる女性教師(?)の声がマイクで拡声され、学校のグラウンド全体に響く。その言葉を聞き漏らす生徒など1人もおらず、指示通り朝礼台の前に全校生徒が集合、開会式が始まる直前になっていた。目の前に広がる景色は朝礼台、テントの数々、競技に使う道具の数々、それぞれのチームの色をした鉢巻きを額ではなく腕に巻く教師一同、色々な方向に伸びる万国旗、そして不機嫌な態度を示し続けるエルフィの姿が。結局この日はまだ1度も口を聞くことなく練習していた。リレーの時なんかどうなることかと

思い当たる事例が全く見あたらないと言うことで、開会宣言を右

の耳から左の耳に通過させながら理由を考える。ついでにそのまま
学校長挨拶もスルーする。シャレではない

選手宣誓：3学年代表生徒。諸注意：教務主任畑山先生

準備運動：2学年の誰だかわからないけど基準、体操の隊形に開
け。リードは体育委員会

『それでは皆さん、気合いを入れて勝負に取り組んでください！』

最後に校長からの言葉を聞き、第一種目の為に3学年がスタート
位置に移動し始めた。その他の学年はここに居ると邪魔になるので
応援席に戻ったり本部席の方に戻ったりした。本部席側では放送や
敬老の方々にお茶出しをしたりするとか。俺もその1人になってい
るが、なんでもチームの主要メンバーだということと同じクラスの
女子が代わりに多くやってくれることに。それでもあまり負担を掛
けたくないので手伝いには行こう

1人本部席の方へと向かう。そこには想像以上に年配の方々が
いた。まだ5人くらいかと思っていたら15人くらいはざっといるだ
ろう。お茶出しも始まっている

「あれ、神崎くん？ 休んでていいって言ったじゃん」

すると噂の人物である中里さんに気付かれた。急にストップした
のでお盆の上に乗っている湯飲みのお茶が零れそうになっていた

「まあ同じチームな訳だし1人に多くの負担を掛けるのもあれだと
思い……手伝いにな」

「なるほど。それじゃあ……少しだけ手伝って貰おうかな」

「了解。それじゃあお茶出せばいいのか？」

「うん。半分はウチがやるからもう半分はお願い。次男子団体種目
だし時間が危ないと思ったらすぐ行っていいからね？」

「悪い」

次の種目は騎馬戦か、と思いながらポットに入った冷たいお茶を出してお盆に乗せる。そして指示通り右半分の席に座っている人たち前にお茶を置いていく。気付けば中里さんのスピードが圧倒的に速く、こちらの領域に少しずつ浸食してきていた

「ほら、早くしないとあの子にみんな置かれちゃうよ?」

「あ、そうですね。お茶です」

「ありがとね真箏。うん、冷たくて美味しいお茶ですなあ」

「なんだか何処かの天然水で沸かした麦茶らしいですよ? それはともかく何でここにいるんだ穹」

まさかの敬老席に幼馴染みがいるとは

「何でって……真箏の体育祭じゃないですか!」

「いやそれは事前に教えたからわかってる。俺が言ったのは何で敬老席にいるか、だ」

「ん〜……なんとなく?」

駄目だ……会話が成り立たない……

こうやっていているうちに全ての席にお茶が置かれたらしく、結果俺は2席にしかお茶を置いていない。穹と話してしまったのが原因だろ

「ごめん中里さん……全部やらせて……」

「いやだから気にしないで良いからね? それはそうと……」

「どうもー、星乃穹です。真箏の幼馴染みやってる新町高校の生徒。よろしく中里さん」

「こちらこそよろしく。ああ……エルが可哀想だ……」

「え?」「ああ……」

とりあえず気になる事は置いておこう。さっきから話が進んでいない気がする

「とにかくだ。早くこの敬老席から立ち去れ。お前は母さん達と応援席で応援してなさい」

「ほらほらそんな事言わないの」「えっ?」

いざそう言つと、お隣に座っているおばあさんにそう言われてしまった。かなり優しそうだ。って違う。そう言う問題じゃないんですよおばあさん?

「いや、敬老席に16の女子高生がいるのはどうかと……」

「いいじゃないの。何も絶対に禁止されてるわけじゃないでしょ?」

「それもそうですけど……」「ほら真箏」「……………」

奥の方では中里さんが苦笑いをしながらこつちを見ていた。駄目だ、穹が老人達に加勢された今勝ち目があるとは到底思えない。ここは負けを認めるとしよう。そしてもう少しで終わりそうだしそろそろ集合場所に移動しよう

「……………それじゃあ中里さん、後はお願いする」

「はいはい。それじゃあ頑張つてね男子諸君」

「ああ」

そして第二種目、騎馬戦白組集合場所へと向かっていった

「……さて、わたしも出るとしよう」

「え？」

「いやあ……ちょっとしたサプライズをね……きっと驚くだろうね？」

#2 1学年男子団体競技：騎馬戦

今まさにお約束のアレが始まるうとしている。円の中央には健太が。他のチームでもそんな状況になっているらしい
お約束のアレ、勿論円陣というアレだ

「さて、とうとうこの本番の刻を迎えた……諸君、戦闘の準備は出来たか？」

その言葉に頷くチームメイト一同

「羞恥と臆病という心は家に置いてきたか？」

全員が頷く

「覚悟と勇気は持ってきたか？」

全員が頷く

「それじゃあ今一度問おう。今僕たちに必要な物は何だ!？」

『覚悟と勇気!!』

「今僕たちに求められている物は何だ!？」

『勝利と友情!!』

「僕たちが成すべき事とは!？」

『優勝、すなわちビクトリー!!』

「紅組男子!？」

『ファイアー!!』

綺麗に纏まった掛け声がグラウンド全体に響く(多分)。それを聞いていた他のチームは若干圧倒されたのか、ヒソヒソ話すような感じの行動が見られ始めた。他学年からも同じような行動を取られるちなみにこれは全てアドリブ。誰もがこんな事をするわけ無いだろうと思っていたが、ぶつつけ本番で成功させるとは……ある意味このチーム凄いいんじゃないだろうか。健太のまとめ上げる能力もまた凄いなと思う

「各自騎馬を作れ! 作戦は会議したとおり! 何があっても決して諦めるな、最後まで戦い抜け!!」

『おおーっ!!』

全員が配置について騎馬を作り、その上に1人乗る。全チーム騎馬は計10頭。制限時間内で頭に括り付けられたフラッグを取り、それが多いチームが勝利となる。全部で2回行いその合計点数が多いチームが1位、100点。2位、60点。3位が20点だ。主戦力の健太、俺、宮本は上に乗っている

「いいか!? やるぞ野郎共!!」

ちなみにフラッグを取られたら騎馬は解体。それまで取った点数

を手に陣地へ戻ることになっている

『おおっ！！』

全員が配置についた。戦場を風速1mの風が吹き抜ける。軽く砂埃が舞った

スターターの人がピストルを上に掲げる

『それでは位置について』

パンツ！！

「かかれえええっ！！」

『うおおおおおおおおおっ！！』

聞き慣れたあの音が鳴ると同時に全チームの騎馬がほぼ中央に向かって動き出す！そして作戦の通り2騎馬1組となって相手の騎馬を攻める作戦に出始める白組一同。だが他のチームも練習を積み重ねてきているのでそう簡単には取らせてくれるわけがない

「福原！ 行けるか！？」

「大丈夫！ いつでも行ける！」

ペアの福原に合図を送り、その意味を理解している俺を騎馬作っている3人は迅速且つ丁寧に青組の騎馬の後ろに回り込む。俺たちの後ろに回っていた福原と相手を挟み込み、防御しかさせないようにする。4本と2本の腕じゃかなり相手が悪いだろう。それが狙いだ！！

頭に付けられたフラッグを奪おうとこちらは攻撃に出、相手は防御に徹する。周囲でも様々な戦いが繰り広げていて、援軍が駆けつ

けてくることはないだろう。それは相手もこちらと同じだ

「ぐぬぬ……」

一歩も引かない戦いがその場で繰り広げられる。大体15秒程度が経過したはずだ。未だに周りでは激闘が繰り広げられていて、落ちた騎馬は一チーム1、2程度しかないが、白組は未だに0だ。これなら勝てるか？

すると丁度今紅組から1つのフラッグを奪った宮本が相手の正面からこちらへ向かってくる。その手には2本のフラッグが握られている。援軍が来た！

「大丈夫か神崎！ 福原！」

「ああ大丈夫だ！」

「後方から頼む！」

「3対1か……！！ 誰か援軍を……！！」

しかし、その叫びはすでに遅い……！！

「なっ！？」

もの凄いスピードで後ろに回り込んだ宮本が中央で防御をしていた青組の騎馬のフラッグを奪い取る。これで宮本のフラッグは通算3本目、良い記録だ

「おし！ 次行くぞ！」

「おお！」 「了解！」

そして1試合目は無事に終了し、白組では戦死者が1人も出ることなく宮本の3本、健太の2本、俺の2本という記録を叩きだ

して通算1位に躍り出る。2位は青組で4本だ。3本差はかなり大きいはずだ！

2戦目に向けた作戦会議を立てるために白組の男子が円形になる。時間は30秒、余裕はある

「多分次は両チームで白組を徹底的に潰してくるはずだ。だからここは5組1チームの防御型、1、2、2、で守り抜く。余裕があれば攻撃態勢に。特に後方の2人が重要になるから気をつけてかかるように。それじゃあ後半戦も勝つぞ！」

『おおっ！！』

作戦会議の30秒の時間が終了し、再び全チームが騎馬を作った隊形を作る。さつき健太に言われたとおりの陣形を作ったその場に並ぶ。その隊形に他のチームは驚いたらしく、先程と同じようにヒソヒソ話しているように見えた

会場が静まりかえる

『さて騎馬戦も後半戦……勝利は一体どのチームが取るんでしょうか！？』

聞き慣れた声のアナウンスが聞こえてくる。聞き慣れた声だとは言え何かが違うような気がする。というかさつきまでアナウンス……っていつか実況はあったらどうか。不安を抱きながら放送席を見ている。他の人たちも気になったのかそちらを見る。そこには予想通りで当たって欲しくなかった光景が広がっていた

穹の放送席占領

「おいこら穹あ！！ お前そこで何やってんだよ！！」

『はいはいどもども！ これから体育祭を盛り上げようと実況係に抜擢されちゃった新町高校1年3組の星乃穹です！ さつきの3

年の種目で実況できなかったことはすいませんって事で……これから
ら体育祭盛り上げていくぞっ！ イェーイツ！！」

「人の話を聞けええええっ！！！」

おそろく無理を言っであそこを占領したに違いない

それはいいが……この会場の盛り上がりよう。過去にもこんな事
があつたらビックリだ

』と言うわけで1年団体競技、騎馬戦の手に汗握る後半戦！ 行っ
てみよう！！』

ここからだとよく見えないけど穹が立ち上がったような気がする。
そしてこちらを見ているような……いや、こっち見てる

『真筆ー！ 頑張れー！！』

うん、手を振ってくれてるね。嬉しいね、幼馴染みの応援って
嬉しい反面悲しいかな。周りの視線が冷たいんだ

『いいか皆の者！ 神崎の騎馬を真っ先に潰せ！ いいな！？ 勝
負はそれからだ！！』

『うおーーっ！！！！』

『神崎殺す神崎殺す神崎殺す神崎殺す神崎殺す神崎殺す神崎殺す神
崎殺す神崎殺す神崎殺す………』

『うおーーっ！！！！』

死ぬかもなんだ

『 な？ …… ったら……ぐに相……るに………』

『了………』

そして青組は動きが怖い！！まるでゾンビの様にゆっくりと向かってくる……！！

『プランD発動！！行くぞー！！』
『了解！！』

更に白組の7組が裏切りよった！？ 1対27だと……逃げ切るわけがない……！！

「おい神崎！！俺たちまで巻き込むなよ！！」

「嫌だあ！！まだ死にたくない！死にたくないよお！！」

「助けてくれえ！！どうか殺すのは神崎だけに絞ってくれえ！！」

「俺だつて死にたくねえよ！！ここは逃げ切れ！逃げ切れば嫌でも俺たちの勝ちだ！！」

「……おお、そうだな！！」

『逃げられる前に形を付けるおおおお！！』

『青組出陣、ターゲット八神崎殺す。カカレ』

『裏切り？いいえ、裏切ったのは彼奴です』

こちらの騎馬が動き出すと同時にもの凄い勢いでこちらへ向かってくる27の騎馬、54の腕、108の男子生徒。これ以上に恐ろしい物なんて無いんじゃないでしょうか！邪念の集合体はこちらへ向かってくる。後ろにも敵はいるので油断は出来ない……！！

「角を取れ！そうすればなんと逃げられる！！」

「駄目だ！相手の行動の方が早くて移動が出来ねえ！！」

「万事休すか……っ！！」

角を全て取られて行動できる範囲がもう中央にしかなくなる。そして気付けば八方塞がり、四面楚歌。何処にも抜け出せる穴が無く

なっていた。完全包囲網だ

「畜生……!!」

「駄目だ！ もう神崎のせいで死ぬしか……!!」

「せめて……せめて孫の顔を見るまでは……」

「……いや、なんとかなるかもしれない」

「「「え?」」」

左後ろで騎馬を組んでいる吉野が呟き、左の方を見つめている。

何があるのかと思いきや、相手がジリジリと迫っているのしかわからない

「……なるほど、確かにこれなら可能性はあるな」

続いて右後ろの田中が逆方向を見ながら呟く。駄目だ、何も見えやしない

「……いいか？ すぐに合図がある。その瞬間に俺たちの戦いがスタートだ」

「あ、ああ?」

『さあ、かかれ野郎共おおお!!』

『Yeah! Let's killing parrrrrrr
tyyyyyyyyy!!』

『裏切り者には死の鉄槌を下せええ!!』

周囲を囲っていた相手全員がこちらに向かって動き出す。駄目だ

……合図も何もないし間に合はずがない……!!

『だが間に合う!!』

『行くぞ宮本!!』
「おう!!」

すると何処からか聞き覚えのある2つの声が聞こえてくる。それは自分を中心に取り巻く円の外側から聞こえたらしく、その直後段々と外側からの敵が消え始めた。何事だ!?

「ま、窮地に立たされるのも悪かねえよなあ!! 動け白組!!」
『よっしゃあ!!』
『しまっ ！？』
『畏か……っ!!』

そして白組神崎襲撃組の筆頭が何かを叫んだかと思うと、瞬時に紅、青の騎馬の後ろに回り込んで次々とフラッグを回収していく。今起こっていることが全く理解できない

「行くぞ神崎!!」
「え、あつ……?」

正面で組んでいる横川が叫ぶ。その直後自分が乗っている騎馬が相手チームに向かつて動き出す。なるほど……大体の事情は理解した。ここからが戦いか……!!

俺を狩ることに集中していたのか、白組の急襲を受けてバランスや陣形を乱し始める紅と青。みるみる内に騎馬を減らしていき、そして

「取ったどー!!」

宮本が最後の一本を奪い取った

騎馬戦：1位 白 2位 青 3位 紅

After the game

「……どうなるかと思ったぞ……」
「いや、正直あんなになるとは僕だって思わなかったさ……穹ちゃん様々だな」
「まあな。もう少し遅れてたら俺が死んでた」
「ははは……まあ結果良ければ全てよし、だろ？」
「まあなあ……にしても……」
「……放送席がとんでもないことになってるな」
「ああ……穹のヤツ大丈夫かあ……？」
「心配なら見に行ってやれと言いたいけど……冷めるまで止めた方が良いな。それに実況もちゃんと聞こえてくるし」
「だな……さて、次の準備でもすっか」
「OK。次は確か……徒競走だけど、その前に女子を2種目連続で応援だな」
「よし。応援も頑張るか！」
「おうよ……！」

Middle of game

「……」
「ん、エル？ どうしたんだ？」
「あ……明日香さん……いえ、ちょっと……神崎さんについてちょっと考え事を」
「……」

「あつ、いえ、明日香さんが悪いとかそう言うんじゃないです！
かといって神崎さんも悪くはないんですけど……勝手に怒ってる」
とについてなんて謝ろうかな、って……」

「ああ……私も手伝うか？」

「いや大丈夫です。これはわたし自身の問題ですから……というか
明日香さん？ なんだか嬉しそうですね？」

「ん、そうか？ 気のせいじゃ」

「……混合競技で神崎さんとペアだからって浮かれないください
いや、そうじゃなくてな……多分気のせいだろう」

「そうですかねえ……まあいいです。応援に専念しましょうか」
「そうだな」

「白頑張れーっ！」「」

Middle of game , another place

1441

「紅弱っ！！」

「……感情に流されるなんて駄目すぎる」

「ですねえ……」

「感情どころの問題じゃないよ！ 根本的に弱いつて……」

「……それより紗凧、そろそろほっぺいじるのやめて欲しい」

「だってこの感触が何とも……」

「……怒る」

「勘弁勘弁。それじゃあ琉華の胸で我慢を……」

「このオヤジ。少しは応援にも徹してよ」

「揉ませてくれたら考えよう」

「……ちよつと望も説得してよ」

「……揉ませてくれたら……いや、くれるんだったら考える」

「無理だからね！？」

「……」

「残念そうな顔をしないでよ!！」

「……紅頑張れ!！」

「やる気なさ過ぎだよ!！」

6 1学年女子団体競技：タイフーンリレー

タイフーンリレーについて

その名の通り typhoon!! (?) 1チーム4人1組になり、全部で10組の組を作る。そして組ごと並び、縦10、横4の列を作る。そして先頭は4人で持てるような棒を持ち、スタート同時に走り出す。途中置いてあるマーカーを回りながら奥まで行き、行きと同じように戻ってきたら待機中の9組の足下に棒を潜らせ、一番後ろまで行ったらそのまま前へ。待機組はしゃがむ。そして交代。以下これの繰り返し。一番早いチームの勝利。なお1回戦のみとする

「……はあ。なんでわたしたちがアンカーになってるんですかね」

「知らん。元はと言えば綾香が負けたのが悪いんだろう」

「ごめんなさいね……とはいえなんだかノリノリじゃないの」

「気のせいだ」

「明日香は嘘を吐いている！ なんだかアンカーと言うことに喜びを……」

「藍、黙れ」

「ごめんちゃい」

騎馬戦の後も他学年の暑い競技が繰り広げられて、午前の部も折

り返し地点のタイフーンリレー。白組の女子の中では中々良い結果が残せると言われている競技の1つで、竹内さん情報だと白が一番早いとかなんとか。佐々木さんから聞いた

それはともかく、順番をじゃんけんで決めようなんて事になって、笹原さんが負けてしまつて結果はアンカーに。かなり責任が重大な場面。緊張はかなりする

「とにかくこうなつた以上プレッシャーにやられてばかりじゃ駄目だろう。勝つぞ」

「明日香の言つとおりだね。勝つぞ」

「そうね。もうアンカーだのなんだの関係ないわ。勝つぞ」

「え、ええっ……か、勝つぞ?」

『さーて午前の部も中間地点! 1学年女子の団体競技の始まりだあ!! なお女子はこの後も連続で競技らしいです! 早くゴールして早く休んだ方がいいのかな、ニヤニヤ。それじゃあ真剣勝負、行つてみようかあ!!』

『うおおおおおおおっ!!』

……放送席の後ろにいる男子生徒の声がうるさいです。拡声されて余計うるさいです。時折『穹ちゃん、俺だ! 結婚してくれ!』なんて聞こえてきたりもしなくもない。神崎さんはどう思うんだろう。スターターの人が準備をする。それに合わせて先頭が棒を持ち、待機側も準備を始める

『位置について……』

パンッ!!

お馴染みのあの音が空高く響く。電線に止まっていた鳥たちが一

斉に逃げ出した

『おっと白組速い！ いいスタートダッシュを決めて2位との差が……いや、青組と紅組も追い上げが凄い！ 流石は運動部の集まっているだけある！ 3チーム同時に1本目のマーカーを回る！ ここでのスピードは重要だ！ そして青組はスムーズに回る！ 1位に躍り出た！！ 残りの1チームも頑張れ！ まだ1レース目だ！ 諦めんな！ そして青も逃げ切れ！』

穹さんの熱い実況がグラウンドに響く。それを聞いていると段々とこちらも熱くなってきた

そして早くも1レース目が終わろうとし、今まさに足下を棒が潜ろうとしていた

「みんなタイミングを合わせなさい！ 行くわよ！」

ここは白組の一番出来る場面と言ってもいいだろう。外側には基本足の速い人たちを置いて、最後のこの時スピードを上げられるようにしている。そして今までの練習だと1度も失敗したことが無いからすぐに交代できるはず……！！

『白組速い！ でも青組はそれ以上に速い！ 紅組も速い！ 青と赤は同時に2レース目がスタートしたぞ！！ 白は……少し遅れてのスタートだつ！ どうなる！？ まだ始まったばかりだぞ！！』

「ううむ……かなり危ないわね……この競技じゃどうも作戦は立てられないし変えられないし……微妙ね、本当」
「運に任せるしか無いですよね……」

そして早くも第6レースの開始。現在順位は赤が青と微妙な差で

トップ。白はその後方をマーカー1つ分の差を付けられている。これ以上の追い上げは難しく思える。チーム内でも不安が募り始めたのか!? 白頑張り! まだ行ける! 諦めたらそこで試合終了だぞ!」

「そんな事はとづくにわかってるわよ!!」

「あ、綾香……穹に当たらなくても」

「そうですね。藍さんがなんとかしてくれませよ!!」

「えっ……? 何それ! 初耳なだけど!」

こちらはこちらでこんな会話をしている。しかし追い上げられる気配はまるでない。これは負けてしまっただろうか……

6レース、紅と青の走行者が戻ってくる。その到着より少し遅れて白も戻ってくる。だがその時

『おつと青組がつかえたああ!? 3、4、5と転び始めたぞ
おおおお!?!』

その言葉にはつと横を見る。するとそこには棒を足に引っかけて転んでいる青組の生徒達が。その際に紅組が1歩リードをする

「ほらあなたたちも早く戻ってきなさい! 今の内に逆転するわよ!」

笹原さんが大声で走者に叫ぶ。こちらは転ばないように慎重且つスピーディーに走者が切り替わる。切り替わったその少し遅れたタイミングで青組も再出発を遂げた。気付けば紅組はすでに戻り始めている。これは紅組を抜かすのは辛いかもしれない……

「諦めないで！ まだ3レースある！ その中で差を縮めなさい！
そうすれば藍とエルフィがなんとかするわ！！」
「なんでそうなるんですか！？」「いくら外側だからって無理があるからね！？」

中々強引だ

第9レースがスタートする

「とうとうここまで来たのね……差は結局縮まらず、青とは僅差に……2位も危ないわね」

「……………」

「……明日香？ どうしたの？」

「えっ…………いや、…………なんでもない。大丈夫だ」

『さあ紅組はアンカーがスタートしたぞ！！ これは紅が勝つのか！？ それともまだ諦めないか！？』

「諦めてたまるかっ！！」

前を走る走者が折り返してから半分の地点に到達する。青組との差は開かず縮まらず、ずっと同じ距離と保ったままそこにいる。1位は難しそうだけど2位もなかなか難しそうだ。2位と3位での40点差は結構大きい

紅組はとうとう折り返し、白と青は9走者目が辿り着く。そしてバトンパスへ

「行くわよー！！」

「了解です！」

「ああ！」

「一気に行くよ！」

『白と青が同時にバトンパスだあ！！ どうなる、差は殆ど変わらない！ 1つ目のマーカーを両チーム1周した！ 速い！ 速いぞ 2チーム！ おっとここで紅組がかなりの差を付けてゴール！ 残るは2チーム、今2つ目のマーカーを回ったぞ！ それでも差は変わらない！ どうなる、どうなるんだ！！』

折り返しの3つ目のマーカー目がけて全力疾走をするわたしたち。青組も引くことなく同じようなところを一緒に走っている。差を付けてゴールしないと……！！

『最後のマーカーに差し掛かったぞー！！』

「……………」

「いつけええええっ！！！」

「そ、外側辛いで……………す……………っ！！！」

「耐えてエルファイ……………！！！」

「……………あっ」

「えっ！？」「なっ！？」「明日香！？」

急に棒を支えるバランスが崩れた。そして3人では支えきることが出来ないのか、棒が地面に落ちて4人で一斉に転ぶ。砂埃が軽く舞った

『おっと白組がバランスを崩して転倒してしまったぞ！？ 一体何が……………と、その隙を利用して青組が一気にリード……………ゴールっ！！ 青組が2位だ！ っ、白……………エルファイ、明日香！！ 綾香達も

「！！」

「てて……まさかね……まさかあそこで転ぶとは……」
「驚きました……一体……」

「……すまない……私が一瞬気を抜いてしまったから……」
「そう言うのは今は無し。とりあえずゴールしてからにしよう。みんなが心配してる」

「あ、ああ……」「はい……」「そうね。まずはそうしましょう」

そして、白組女子は3位でゴールした

タイフーンリレー	1位	紅	2位	青	3位	白
点数総計	紅	120	青	120	白	120

After the game

「大丈夫！？ 明日香！ エルファイ！」

「あ、ああ……穹か……大丈夫だ」

「こちらは問題ないですけど……って、いいんですか？ 実況なのにこっちに来て」

「まあそっちは問題無いとしても……一体何が？」

「えっと……」

「いや、ただ私が余所見したただけだ。それでバランスを崩して……」
「なるほど……とりあえず大きな怪我が無くて良かったよ。……ゴメン、戻るね」

「ああ」「はい」

「……」

「明日香さん……」

「本当に……すまない」

「ひ、1人のせいだと思わないでください！ 支えきれなかったわ
たしたちも悪いんですから！」
「それは……」
「……それはともかく、あと2分したら次の競技が始まっちゃいま
すよ。行きましょう？」
「……ああ、そうだな」

Middle of game

「なっ!?!」
「綾香！ エルぼん！ 鶴！ 新島！」
「だ、大丈夫かあれ……」
「まさかあそこで転ぶとは……」
「神崎、それがチームメイトに言う言葉か」
「悪い。……にしても宮本、なんでこっちにいるんだ？ てっきり
滋賀崎たちについて穹の方にいるかと」
「あのな……俺も真面目なんよ？ チームの応援くらいするさ。て
かあいつらと一緒にするな」
「おお、宮本がいつになく真面目だ。怖い怖い」
「うるせえな」
「いや2人ともうるさいから。問題は……」
「……」
「……残りの競技が鍵になるか……？」
「……」
「……にしても鶴のヤツ、さっきからボーツとしてなかったか？」
「ん、そうなのか宮本？」
「ああ。何か探すようにキョロキョロと……悪い、気のせいかもしれ
ない」
「……明日香……」

「男子が暗くなっても仕方がない。残りの競技で巻き返すように頑張ろう」

「ああ」「了解」

#7 1学年女子障害走

「……正直2連続は辛いですね」

「ああ。だがここで点数を稼がないと……本当に悪い」

「いや気にしないでくださいよ……」

つい3分前に先の競技、タイフーンリレーをが終わり、次の競技である女子障害走が始まろうとしているこの時。ほんの少しだけ時間に余裕があるということでもまだ列には並ばず明日香さんの所で会話をしていた。明日香さんは藤堂さんと同時に走るらしい。それでもチームは別なので話してることが無いのが同じ部員として寂しく感じられる

さつきはあんなハプニングで点数を落としてしまったのでこれからの戦いが厳しくなるのは白組全員がそう予想している。特に笹原さん、鈴橋さん、佐々木さんの代表格3人はこれからの作戦を徹底的に考え始めているらしい。今の少しの時間でも会議している……今戻ってくるのが確認できた。後で聞くとして今はこの競技に集中するとしよう

「……エル、そろそろ自分の場所に戻れ。そろそろ始まるらしい」

「あ、はい、そうですね。……お互い1位を取れるように頑張ります」

しょうか」
「そうだな」

そして1年女子としては2競技目、障害走が始まった

障害走概要

走行距離：600m 1000mおきに難関が仕掛けられている。
以下難関についての内容

第一難関（100m地点）：平均台 長さは5m。急いで渡ると途中で落ちるので注意が必要。なお落ちたら最初から渡る

第二難関（200m地点）：網くぐり 面積は5×5の大きさ。
速く抜けるテクニクとスピードが鍵となる

第三難関（300m地点）：縄跳び50回連続跳び 持久力が必
要になる難関。あまりに突破が難しいと判 断された場合は10回
ずつ減少

第四難関（400m地点）：パン食い 高さは1m70cm程度。
ジャンプ力とキャッチ力が必要。ちなみに あんぱん、クリームパ
ンの2つが用意されている。中身は取ってからの楽しみ

最終難関（500m地点）：借り物（者） ワンダーボックス（
校長命名）から1枚くじを引き、書かれ た内容の物を借りに行く。
誰からでも可。なおゴール手前3m地点でお題の確認あり。認証失
敗の場合 は100m戻ってそこからゴールまで直通

「……もう私の番ですか」

「頑張りなさいよエルファイ？」

「どうせ次は笹原さんです。同じ事を言わないでください」

「言わないわよ。それより早く準備しなさい。んじゃ2人共ワンツ
ーフィニッシュで決めるのよ？」

「いや、難しいですから……」「無茶言わないでな？」

スタートラインにつく。今横にいるのはクラスメイトの香坂さん。つまり一緒に走るペアみたいな感じ。1レース6人走って、その内2人ずつメンバーを選出することになる。1位6点、以降1点ずつ下がっていく。笹原さんの言うとおり11点取るのが好ましいけど流石に難しいかもしれない

……何故なら青組の2人が陸上部だから

とはいえ最後の借り物は殆ど運に任せるようなものなので、運が良ければ……

『この競技、早くも6レース目！果たしてどんなドラマが見られるのか！！それでは位置について』

パンツ！

ピストルの合図と共に走り出す走者6人。序盤と言うことでまだ加速していないのか、6人が横に並んだような状況になる。目の前に見える平均台は2本しかない

「ここは一気に渡ります！！」

『おっとここで白組の女子が加速し始めた！そしてそのまま独走で平均台……バランスを崩しながらも落下することなく通過あ！！』

早いぞエル……白組！！その後他の人も平均台を渡るが……おつとここで急ぎすぎたのか青組が落ちた！！それにつられて後ろに支えていた2人も落ちる！渡りきったのは各チーム1人ずつだ！！』

若干の余裕があるので後ろをちらつと振り返ってみる。そこには流石に危ないと思ったのか、青組の誰かが凄いスピードで追い上げてくる。流石にあのスピードから逃げ切るのは難しいだろう。でもなんとか難関で引き離さないと……

『白組が網に入った！しかしどうも上手く行かない様子、思うように前に進めない！！』

(髪の毛が……引つかかつ　！！)

『おつとここで青組進入！速いスピードで抜け出していく！もしかしてプロ？そんな訳ないだろうけど速い！白組と差を付ける！そして紅組、追い上げてきた青組も入ったぞ！！』

(このままじゃ……！！)

このままじゃ段々と抜かれてしまう……！！なんとか抜け出す方法は……あ、相手の潜った後ろを通ればなんとか……？賭けだ！！

『お、白組青組の進行を利用、そのまま抜けだし3位に！だが次々と追い上げが来ます！1位はすでに縄跳びを始めている……つて2重飛び！？審判　アリです！2重飛びは25回でクリアだそうです！』

青組の後ろをなんとか引き離されないように走る。やっぱり陸上

部なだけあつてかなり速い。スタミナを軽く奪われる。しかし後ろとは結構引き離れたらしく、大差が生まれていた

『1位が抜けたところで2位と3位も到着！ 縄跳びを開始した！
青組は二重飛び！ 白組は 』

「本気でいきます!!」

『 えっ!? まさかのハヤブサ飛び!? 余計だよ! それは余計な体力使うよ!! 審判 10回!? 2重飛びと同じ回数だけど10回!? これは耳寄り情報だ!! そして青もこの情報を元に え!? 交差二十!? 無理でしょ! 陸上部だからわかるけど、あれは無理でしょ! 超人じゃないのキミたち!! 審判 10回! 同じく10回らしいが先に始めていた白組が抜け出した! 残りが到着と同時に青組も抜け出した って、この学校ハヤブサ飛び出来る人多いんだね!? 』

そして第四難関へ。1位はまだ捉えることが出来ないらしく、その場で跳び続けていた

「こんなのすぐに捉えます!」

『 追いついた白組、なんと走った状態でそのままジャンプ! 上手いキャッチだ! そのまま再び1位に躍り出て独走を始めた!! ……にしてもバーの高さがちょっとずつだけど上がり始めてない? 』

袋にくるまれたパンを加えながら最終難関に向かって全力疾走。そろそろ辛くなってきた。でももうすぐでゴール、ここで油断するわけにはいかない。他の走者もパン食いで手間取っているらしく、完全に独走状態だ。余程の油断が無い限り大丈夫だ

『ここで1位の白がワンダーボックスに到着！ 手を入れて……引いた！ 見た！ お題はなんだ！？ おっと、パン食いの方ではバの位置が下げられたぞ！』

(え)

ボックスから引いた紙に書かれていた内容に絶句する。その間頭の中ではぐるぐると思考が回転、もはや收拾がつかない状態に

「お題：愛する人」

(えっ、えっ！？ これ何をどうやって借りればいいんですか！！)

『おや、白組の様子がおかしいぞ？ お題を見た状態で固まって……顔が赤くなったり青くなったりと……一体何が書かれていたんだ？ 攻略不可なお題でも引いたのか？ 審判 もしくリアできない場合はゴール前で報告、戻って再び走るそうです！』

(あ、愛する人って……まだわたしもそんな歳じゃないしそれに好きな人は居るけど愛するまでは)

もはや諦めるしかないお題のような……

「大丈夫かエルファイ！？」

「っ！……！！！」

もう泣きそうです。涙が手前までやってきました
神崎さんが本部テント前で大きな声を上げて名前を呼んでくれた。

呼んでくれてしまった。まさかその本人が来てしまうとは……

『おつと青組が追い上げてきたぞ！ どうなる白！？』

穹さんの言葉に後ろを見た。そこにはもの凄い勢いでボックスに向かってくる青組の2人。危ない、これ以上迫られると本当に申し訳ない

「エルファイ！！ お題は何だ！」

「う〜〜っ！！」

『おつと青組の1人が逆走！ お題はあちらにあるのか！？ 一方もう1人は観客席方面へ！！ ここで他のみんなも追いついたぞ！』

「エルファイ！！」

「あ〜〜っ！！」

『おつと青組速い！ もうお題を借りてきた！！ その手には……眼鏡！ 眼鏡があります！』

「そんなに借りにくいんだったら俺がいくらでも貸してやる！ エルファイ！！」

「〜〜っ！！」

『更に紅組が学年主任を連れてゴールへ！ 青と並んだ！』

「エルファイ！！」

「……っ、かつ、神崎さん！ お願いしますっ！！」

「えっ、あっ、わかった！！」

神崎さんが本部テント前から出てくる。どうやらお茶出しをしていたのか、そこに居たらしい。なんてバッドタイミング……もう涙が出そうだ。というかこれ、どう説明しよう

「大丈夫かエルフィ？ 一体」

「いいから行きますよ！ 速くしないと抜かれま」おっとここで青組抜いた！』くっ……！！」

ボックスから距離を軽く距離をとってはいたものの、やっぱり30mは速い。このまま走り出しても間に合うか……

「……お前よりまだ俺の方が速いか」

「えっ？」

「しっかり掴まってる！！」

「えっ、ちよっ、神崎さん！？ 何を ……！！」

青組に抜かれて呆然としていると、神崎さんに膝の裏側と肩の辺りを持たれて宙に浮く。それと同時に会場から大きな声が聞こえ始める。要するに、要するにだ

「おっ、降ろしてください神崎さん！ わ、わわたしが走らないと意味無いじゃないですか！！」

「いいから落ち着け！ これも作戦の内だ」

「え ……？」

『おっとここで呆然としていた1位の青組を抜いた！ というか動かない、動けない！ レースはとんでもない状況になっている！そして真筆、後でそれ相応の覚悟は出来てるね！？』

「ま、こう1位に簡単にあげると」

「……………」

「……………エルファイ？」

なんだかたまに神崎さんの考えには疲れさせられるような気がする。もの凄い溜め息が出た

「……………バカ」

「……………悪い」

そしてお題の確認ポイントへ。確認と言うことでやっと降ろされる。後方はまだ啞然としていて動く気配がない

「それじゃあお題の確認を」

「……………」

「お預かりします。ええと……………」愛す 「お題です」え？「お題です」えーっと「お・題・で・す」……………お題の方、確認しました」

『ここで白組が堂々と1位でゴール！ 結局お題はわからず終いだつたが、とにかくゴールだ！ おっとここで他の人も行動再開だ！』

「エルファイ」

「はい、なんですか？」

「結局の所、お題って何だったんだ？」

「……………」

「エルファイ？」

「そうですね……………言うならば、『バカ』ですかね」

「……………なんだそれ」

「冗談です。すいません、ありがとございました……………」

「まあ良いって。それじゃあ」
「はい」

神崎さんは仕事のため去っていった。そしてわたしも1位でゴールと言っことで、1位でゴールした人の並ぶ列に入る。今までの走者全員に見られたけど気にしないことにした

「あ」

ふとここであることを思い出した

「……今、謝ればよかったですかね」

次のレースが始まるピストルの音が聞こえてきた

「……私の番か」

「ああ……そういえば明日香も一緒に走るんだっけ……負けてられないね」

「それは私の台詞だ琉華。……理由は話した……か」

「うんちゃんと昨日聞いたよ。それくらい覚えておかないと……いいところ見せてあげなね？」

「ああ」

スタートラインにつく。4クラスが相手に回るとはいえ、まさか琉華と一緒になるとは思っていなかった。とはいえ琉華は今回は敵、負けられるはずがない。……負けられるはずが

中間は殆ど問題は無いだろうが、問題があるとするならば最後の借り物。あそこは運にもよるのでなるべく簡単なお題を引くしか……

『位置について』

パンツ！

ピストルの合図と共に全員が走り出す。琉華は最初から飛ばしていくらしく、すぐに1位に躍り出た。私を含む後方5人は大体同じ場所を走っている。しかし琉華に釣られたのか徐々にスピードを上げ始める他のメンバー。負けてられない

琉華が平均台に乗る。バランスを取りながらゆっくりと歩いていく。今がチャンスか？

『お、ここで白組が加速！ 4人を追い抜きそのまま平均台へ！ バランスを崩すことなく紅組を抜いて1位に出た！！』

「悪いな琉華！」

「ちよつ、早いよ明日香！！」

琉華が上手くバランスを取れない人間だっというのはよく知っている。ただこういう事に関してだけの話だが

1人独走してそのまま第二難関の網へ。他のメンバーも危ないと思ったのか、もうすでにすぐ後ろに辿り着いていた。琉華は4位に落ちたらしい

『ここで白組早くも第二難関へ！ 早い！ 上手く網を潜って後方を引き離れた！！ 紅と青も頑張れ！！』

後方との距離を更に10mほど引き離して第三難関へ。確かエルファイがハヤブサ飛びでクリアしていたが……私にはとてもじゃないが無理なので、せめて二重跳びで挑むことに

『白組はなんと二重跳びだ！ 6レース目から二重跳びが目立つようになつたぞ！？ そして続々と第三難関へ！ なんだか青組は交差二重が多いね！？』

「くっ……！！！」

やはり回数が少ないからか、青組の2人が先に先行することに。それでもまだ立て直しは出来る距離、大体5m程度だ。その後15mほど引き離して後方集団がついてくる

『ここで青組2人がパンへ！ しかしどうも上手く行かない様子、続いて白も到着するが上手くいかない！ やっぱバー高くなつてない？』

「とっ、届かなくな……！！！」

「はっはっは！ 明日香！ 青組！ ボクが先に行かせて貰うからね……！！！」

『ここで追いついた紅組、なんと上手いキャッチ力でパンをキャッチ！ そのまま1位に浮上！ 頑張れ！まだ間に合うぞ……！！』

とはいえやっぱり高い。いや、高くはないだろうけど上手く掴めない。手を使うのがどれだけ便利なのかがこの競技でわかるような気がする

『ここで青組1人が抜け出した！ 更に追いついてきた白組も素早くキャッチで3位へ！ 残つたのは3人だ……！！ どうなるんだ……！！』

「くそっ……！！！」

思い切りジャンプしてパンを掴もうと頑張る。しかしどうも上手くいかずにビニールが頬に当たる。こうしている間に紅の片方が抜け出していた。もう1度、もう1度

『白組どうした！？　　つとここで青組がボックスへ到着！　引いた！　お題はなんだ！？　　逆走！？　　もの凄い勢いで逆走していく！』

手に膝をついた。そろそろ限界なのだろうか？　いや、諦めるわけには……

もう1度飛んでビニールを啜える。そして

『おつと白組ここでやっと抜け出した！　紅組はまだ頑張っている様子、頑張れ紅組！　そして前方では3人がくじを引いている様子！　何を引くんだ！？　　紅組が立ち止まった！　何があつたんだ！　　つと、白組は何も持たずにゴールの方へ！　一体何が！？　　青はキョロキョロとその場を見渡し……おや、もう片方の青組が何か持っている……おにぎり！　おにぎりです！　　中身はわからないけどおにぎりです！』

後方を見ると300m程度後ろに青組が走ってくるのが見える。

この距離ならまだ問題はないはず……

やっとのことでボックスへたどり着く。琉華はその場でくじを見ながら考えるように立ち止まっていた。青組は何かを見つけたらしく観客席の方へ。もう1人の白はこちらへ戻ってきていた

「……………これだ！！」

1枚の紙を引いて中身を見る

か!？」

達成可能で達成不可なお題、か。達成可能ならば実際誰を連れて行けば良かったんだ? 藍? 違う。エルフィ? 違う。真箏? 違う。その前に達成不可だったらどうだったんだ? どうでもいい。可能な場合。それは琉華しかないはずだ

『ここで紅と白が確認エリアへ! 2人がくじを えっ、2人で同じお題!? それもあり得るのか!』

「同部活の部員」…… Wars部藤堂琉華、鶴明日香、確認。「最高の「お題だ」え? 「お題だ」えっと…… 「お・題・だ」…… お題確認しました」

…… そういえばここで1つ思ったことがある。このお題ってどうやって確認するんだろう。そんなことが気になった

『お題の方は確認が済んだ様だ! 白組と青組が迫ってくる! 残りの5m、紅と白、どちらが勝負を制するんだ!』

「…… 琉華、先に行け。私はお前を無理矢理引いていったんだ。お前から入れ」

「ほほう…… 嫌だね。明日香が引いたお題の内容がわからないからね。それがわかったなら行くけど」

「お前……」
「それに…… 今日、来てるんでしょ? それだったら1位で良いところ見せないかね?」

「……」
「最高の友達」、ね。ありがとう明日香」

「なっ、おっ、お前!! 知ってたのか」

してるのが疑問だけだな」

「あれはだな神崎、女子の揺れをだな……」

「あのな……」

「いや事実だ。男子なら体育祭で一度で良いから取っつてみたいポジション。それは女子パン食い競争のバー持ちだ。あそこのポジションなら良い感じに女子の胸揺れを」

「はいはいわかったわかった。後で聞いてやるから今この場で言うのは止そうな」

「つまらぬ奴よのお。……にしてもエストラントの場合が凄そうだよな」

「だからな……」

「とは言いながらそつちを見るな。……おお、ここからでも見えるな」

「ああ　って違う。働け働け」

「はいはい。っと、来たみたいだな。何引いたんだ」

「ん？　何止まってるんだエルフィ。問題でもあったのか？」

「行ってこいよ神崎」

「いや、流石にな……」

「まあまあまさかって事もしかりだ。行って損は無いぜ？」

「そうかあ？　んじゃ行ってくるよ」

「おう行ってこい」

昼休み

教師による競技も無事………終了し、腹を空かせた選手一同が弁当を食べに行くこの時間。何故かいつものように集合するwar s部一同　ってな訳も無く、明日香、琉華、望、光久の4人は別行動という形になってしまった。要するにここに居るのは健太とエルフィを含めた3人だけ

「……お前らはいいのか？」
「別に両親が来てる訳じゃないので……」
「僕も親は来てるけど流石にね。真箒と食ってくるって言って終わり」
「……まあいいか」

そして我が家のシートが置いてある場所へとたどり着く。そこには弁当を広げたテーブルが置かれてあり、穹と親父が来ていた。親父はたまたま仕事が休みだったらしい

「……って母さんは？」
「ああ、なんかちよつと用事があるって行っちゃったよ？ わたしもついていこうとしたけど途中で見失って……でもすぐに戻るって」
「そうか」

3人で開いている場所に座る

「まあとにかく、これ食って午後の部も頑張れ若造」
「黙れ親父。そんじゃあ食うか」
「そうですね」
「それじゃあ遠慮無く」

テーブルの中央に置いてある箸に手を付けようとしたその瞬間

「いてっ」
「どつした真箒？」
「いや……なんでもない」

頭に何かがぶつかった。小さい石って言うか何て言うか……そんな

な感じの物が当たったような気がする。なんだったんだらう

気にはしながらも弁当に箸をつける

午後の部が勝負だ。そう思いながら食事を進めた

EX3-2 体育祭〜午前の部〜(後書き)

平均的に見ると2話分くらいありそうです
というか……

光久「拙者が居ない気がするのだが。解せぬ」

ごめんなさい。光久マジでごめんなさい

騎馬戦の時は健太の騎馬つていう設定で、掛け声しかありませんでした。ごめんなさい

そしてタイフーンリレーの最中はトイレに行ってる設定でした。ごめんなさい

光久、次は出られるかもしれない……わからんけど
はい

とりあえず次回更新は未定です

そして内容的には……昼休みの残りから始まると思います
では、また、次回、会えたら、会いま、しょう

E X 3 - 3 体育祭、午後の部、(前書き)

誰か才能ください。もう続けても酷くなるような気しかしません
でも続けます。本当に諦めるまでは

遅れましたが……体育祭、最終話、どうぞ

EX3-3 体育祭〜午後の部〜

「…………まさか本当に攻撃してくるとは…………」

1人昼食も食べ終わり1人食休みがてら散歩中の神崎くん。正直もの凄い寂しいなとか思いながら昼食中の出来事を思い出していた。何があつたかと言えば穹からの笑顔のようで笑顔でない表情で攻撃理由を尋ねれば「わかるよね？」と言つて教えて貰えず。その時にいつの間にか機嫌を元通りになっていたエルフィが顔を赤くして目を逸らすわ健太は笑顔で助けないわ。おかげで頭が痛い。もしかしたらさっきの借り物競走での事だろうか。まあ確かに俺の方が速いし、何よりまさかの事態を作つて1位でゴールという作戦は成功したけど…………うん、なんだか意識してないから出来ましたね。よくよく考えるとあれは恥ずかしいですね。それに関して怒つてたんですね穹さん。確かにあれはいけないよな。後で男子一同に殺されるだろうな…………あの後望とも走らされるわで

「…………手伝い行くか」

このまま始まるまで何もしていないというのもあれなので、敬老席でのお茶出しの手伝いをすることにした。もしかしたら中里さんがまだ頑張っている可能性もある。そしたら流石に休憩をしてもわからないとな

とか思っている矢先、知っている人物達の姿を目にした。w ar s部先輩の3人集だ。もちろん1人は体操服、そして2人は私服。部長に瀧先輩、吉原先輩だ

「待つんだ神崎くん。なんだか今ルビがおかしくなかつたかい？」
「気のせいじゃないでしょうか」

本当に気付くのが早い人だ。とりあえずルビとか何言ってるんだこの人は

「おお神崎か。大変そうじゃねえか」

「ええ……それは部長にも言ってるんじゃないですか？」

「ああ……なんで星乃を連れてきたんだおい。こつちまで変に攻撃されるじゃねえかよ」

「……それは俺じゃなくて穹に言ってください……」

普段余裕を持っている部長も今回ばかりは流石にお疲れの様子。理由と言えば全て穹。俺と同じように応援されて男子に攻撃されてしまう被害者の1人だ。俺と比べて被害は少ないとは思うが、それでもかなりのダメージが蓄積しているに違いない。とりあえず部長の在籍する2年3組のチームは今のところ1位らしい

「それでお前は何してるんだ？」

「あ、ちよつと今から敬老席の方に手伝いに回ろうと」

「おおおお大変だね神崎くん。何処ぞの誰かとは大違いだな」

「うるさいぞ美里、これが俺のスタイルだ。まあ長話もアレだ、とつとと行け。……どうやらお前らのチームは今のところ3位らしいが……もつと楽しませるよ？」

「何をですか……まあすいませんでした」

そして俺は3人を背に敬老席へと歩いていった

「……頑張れの一言くらい言ってやればいいのに」

「うるさい。とりあえず俺は楽しめればそれでいい。それに……次

の競技が見物だろっな」

「……ん？」

敬老席の少し手前に辿り着く。するとそこには先程と同じように見慣れた顔が何かを探すように立っているのが見える。同じwar s部員で同じチーム、そして二人三脚でペアの明日香が立っていた。その手には小さな包みが持たれている。捜し物？ いや、尋ね人？

「明日香？」

「あ……ああ、真筆か。どうしたんだ？」

「いや俺は敬老席に仕事をしに……って人居ないな」

敬老席に目をやると、そこには誰も座ってなどいなかった。もちろん中里さんも居るわけがない。いるとしたらその隣にある職員席の先生達だ

「昼食時だから家族の所に行ってるんだろっな」

「なるほどな……それはともかく、お前はここで何やってるんだ？」

いざ気になっていた質問をした途端、明日香の表情が硬くなって小さく身体がビクツとなった。そして何かを隠すように視線を横にしている

「いや、なんだ……その……琉華を探していてだな、それで歩き回っていたらここに来ていた、と」

「そうか……ああ、琉華なら確か家族の所に居たぞ？ そういえば明日香が心配だーとか呟いてたような……」

「……あ、ああ。そうか。ありがとう。じゃあ、また後でな」

「あ、うん……?」

そして明日香はこの場を立ち去っていった。俺に表情を見られな
いように顔を伏せながら、手に持っている小包を抱きかかえながら
一体何かあったのだろうか。琉華も何を心配していたんだろう
それはさておき、これからどうするか……敬老席にも誰もいない
わけだし、仕事をするともない。一旦戻るとしようか? 母さん
もまだ戻ってきてなかったし……とりあえず穹とエルフィに謝って
おくか。その場を後にしようとする

「あの……すみません」

「……え?」

すると後方から誰かに声を掛けられた。その声は女性だけど若く
ない……言ってみれば老人の声の様に聞こえた。後ろを振り向くと
予想通り、1人のおばあさんが立っていた

「えっと……どうかなさいましたか?」

「ええ……敬老席は何処かお尋ねしたくて……」

「あ……えっと、敬老席はここです。すぐにお茶を出すので……」

「わざわざすまないねえ……ありがとう」

そのおばあさんを1つの椅子に座らせて1杯のお茶を差し出す。
なんだろう……この人誰かに似ているような気がする……

「実は孫とここで待ち合わせをしていてねえ……午後からでもいい
から応援に来てくれて頼まれたんだよ」

「そうなんですか……えっと、お一人なんですか?」

「ええ、ええ。あの子はちょっとした事情があつてねえ……ウチで
預かせて貰ってるの。もう10年くらいになるかねえ……」

「……………」
「おや、ごめんねえ、なんだか暗い話をしちゃって……………」
「あ、いえ……………友人にもそんな感じのヤツがいるんでさほど驚かないというか……………まあそいつよりはまだマシなんでしょうけど……………」
「そうかいそうかい……………ほら、もうちょっとで午後の時間なんですよ？　頑張つてねえ？」
「あ、すみません。それでは失礼します」
「ええ、ええ。孫のことを、よろしく頼んだよ」

ちよつとした事情……………か。その人も色々あつたんだろうな……………まあそんな事情があつても1人で暮らしている明日香と比べたらまだ良い方なのか。……………にしてもあの何処かで……………
いや、今は競技に集中するでしょう。俺は1人、先程まで弁当を食べていた場所に帰ることにした

Middle of break time , another place

弦巻高等学校屋上

「……………お？　来たかな？」
「全く……………久々に会つたと思えば何よこの光景は……………」
「いやいや、この黒服さんたちが我が弟を狙撃しようとしてだな、それはさせぬと沈めたまでですよお母様」
「だからといって血を吐かせるまでやる必要は無いんじゃないかしら霰？」
「いやだなあ、お母さんだつて真箏がやられたら嫌でしょ？　それに血は吐いたとはいえ軽く気絶させただけだし命の別状はないよ」
「あのね……………流石にVWとRWでの区別は付けなさい」

「それはこの人達……いや、ロリコン校長に言うべきかと」

「ああ……なるほどね。って、そうじゃなくて」

「まあまあ落ち着いてよお母さん。本題本題」

「……本題も何も無いんだけどね、ただ貴方に先に会いたかっただけよ」

「感動の再会の場面でこれだけどね」

「全く……武器を持ったときの性格の変わり様は健在みたいね」

「だからだよ。それとも何？ 今一本やっつく？」

「嫌よ。それはともかく元気そうで良かったわ。顔が見たかっただけだから」

「そうかぁ……うん、それじゃあまたその内会おうか」

「そうね……」

「うん……」

「……零」

「何？」

「何をやってるのは知らないけど……あまり変なことはいらないよ
うにね？」

「……わかってるって」

「じゃあね」

「うん　って、誰だ。楓か。何ー？」

『今どこにいるの零？』

「何処って学校だけど。光久くん頑張ってるよ？」

『ああ……空回りしてなけりゃいいけど……って、そうじゃない。
今すぐこっち来られない？』

「えーっ、どうして？」

『実はさつき華と隸に会ってさ……今居るんだけど、これからお
茶行かない、って』

「おお……ん……究極の選択だな」

『都合が合えば隼人たちも来るってよ？』

「よし行くぞ。1年ぶりの悪戯が楽しみだぜっ」

『相変わらずだなあ……それじゃあ鈴木さんところで』
「ほいほい。って、それお茶じゃないよね」

午後の部も始まり、全学年を巻き込んだ壮絶な戦いも終了して次は勝負時の二人三脚がやってきた。現在休憩中の白組メンバー。その中には最終練習をしている者もいる

とりあえず前競技、全チーム対抗点数争奪大戦争の模様を少しだけ説明。もう体育祭じゃないじゃないでしょうか。うかつてくらい激しい競技でした。まさか他の学年から点数を奪えるとは……しかも先生が参加していたから点数を奪われることも無し。明日は筋肉痛確定だろう

……とりあえず俺でも説明が出来ない

それはさておき現在の点数を確認しよう

紅 298 白 301 青 344

かなり微妙な戦いになってきた。本当に残された3競技でどうにかするしかない

「次の競技は全員が全力を出し切ろう。そうすれば後は男子がなんとかするし、リレーで真筈が何とかしてくるはずだ」

「待て健太。なんだか凄いプレッシャーが掛けられた気がするぞ」

「気のせいだ」

絶対に気のせいじゃない

練習をしていない僅かなメンバーの元で健太が最後の作戦会議（では無い気がする）をしている。健太の言うとおり二人三脚で1位

を取って男子が障害走を頑張れば、リレーでなんとかいけるかどうかの範囲になる。リレーで1位……は難しいかもしれないが、2競技で点数差を広げればギリギリ追いつかれなくなる、というのが健太の説明らしい

まあそれは他の組の気合いにもよるもので

「……とにかくやるしか無いのね」

「その通りだ綾香。全てはお前が勝手に決めたりレー選手にかかっている。だからリレーで負けたらお前が全責任を」

「殺すわよ？」

「すいませんでした」

2人のその会話について笑いが沸く白組。練習組も集まったところで次の競技が始まるので移動することにした

「明日香、頑張ろうな」

「……………」

返事がない。ただの屍……ではなく、返事がない明日香。まるで魂が抜けているかのようにどこか遠くを見つめている。一応視線の先を目で追ってみると、そこには観客席が。それ以外特に何も無い。さっきの事もあるし何かあるのだろうか

「……………明日香？」

「ん……………ああ、真筆。どうした？」

いざ意識が戻ってきてかと思うと魂のこもっていないような返事が返ってくる。その様子に思わず溜め息を吐いてしまった

「いやどうしたもこうしたも……………それは俺の台詞だよ。さっきから

どうした？　なんかボーツとして」

「……大丈夫だ、問題ない……私には私の事情がある」

「事情……？　おいお前、本当に」

「すまない、心配を掛けてるみたいだな……本当に大丈夫だ。もう、わかってるから」

「……………」

そして明日香は1人先に歩き出した。その1歩もかなり重く見える。次の競技がごとくなく心配になってきた

それにしても……事情？　なんだかさっきのおばあさんの言っていた言葉が急に浮かんできた。全く関係性の無い話なのに。ただ事情という言葉が一緒だったからだろうか。いや……

「まさか……な」

1つの考えられない仮定に辿り着いた。でも何の共通点も無いただの仮定。結論も糞もないハズだ

「……………集中するか」

今考えていた事を忘れてみんなに続くように歩き出す。気付けばかなり出遅れていた。そして先にはこちらを振り向く健太とエルフイ、光久の姿が。慌てて追いかける

何事も無ければ良いと思う

でも世の中そんなに甘くない。フラグは何処にでも立つ物だ

#15 1学年男女混合競技：二人三脚リレー

改めてルールの確認をしておこう

・必ず男女1ペア

・リレー形式。1チームを半分に分け、6チームにて行う。1位は60点、以降10点ずつ引かれる

・痴漢行為をしたものは退学

・訂正。痴漢＝死刑

いや、痴漢行為のルールについては初めて知ったんですけど。そもそもする人いるんですか。というか死刑って……せめて退学……いや、自宅謹慎くらいでお願いします校長

……いや、お願いする以前の問題だ。絶対にしない。何せペアは明日香、確実に殺されかねない

「で、大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ。……そうだな……真箏、走るときに髪の毛が邪魔になつたりしてないか？」

「え？」

「ほら……私はいつも横に髪の毛を束ねているし、それに髪の毛が真箏の側にあると……邪魔になるとか……」

そう言われてみて考えてみる。明日香は人から見て右側、要するに本人から見て左側に髪の毛を纏めている。そうなると右足に紐を括り付ける俺の方に髪の毛が来る。確かに今まであまり意識はしていなかったが、確かに本番中邪魔になることがあつたら……いや、邪魔って言うのは流石に失礼か

「……悪い、じゃあ……ちょっとなんとかしてくれるか？」

邪魔とは言わずにそう頼んでみた。すると明日香は少し顔を赤くしながら髪の毛に付けているリボンを……あれ、いつもはゴムで止めているはずだけど……あれ？ リボンが解けるとその長い髪の毛が宙を舞い、するりと下に落ちる

「おお……」

「あ、あまり見るな。人前で降ろしているところをあまり見られたくないんだ」

「わ、悪い」

明日香にもこうやって恥ずかしがる一面はあるのか……しかも髪の毛を降ろした時を見られたくないって……たまに見ていたんです。その時はまだ寝ぼけていたからか

顔は適当な方向を見ながらも髪を結うその姿を見てしまう。見られていることに気がついていない明日香はリボンを口に咥えながらその長い髪の毛を後ろに束ねていく。なんだろう、女子が髪の毛を纏めてるときってなんか良いんだよね……って、いけないいけない。とりあえずあつちを見てみよう

……エルフィとか望も髪の毛を纏めてみてはどうだろうか。……いや、言ったら言ったで変に思われそうだ

「い、いいぞ……」

「……おお」

「なっ、なんだその反応は！」

「わ、悪い……ちょっとな」

出来上がったその姿を見てみると、いつもなら横に纏められている髪の毛が今は後ろに纏められている。縛り方1つでここまで変わる物だとは思っていなかった

「……正直に言ってみる……似合っていないと」

そう言いながら本気で睨まれた。いや、素直に言えるわけ無いじゃないですか明日香さん

「え、えつとだな……こういう感想はあまり本人に伝えるべきではないかと……」

「そうか、大丈夫だ。覚悟は出来ている。さあ言ってみる」
「う……」

駄目だ。完全に逃げ場を失った。辺りに誰も助けを求められるような人はいないし、それに今こうやって話し込んでいるのは俺と明日香だけだ。もうみんな並び始めていてこちらには気がついていない。早く行かないとと言うか？ それでも引き下がらない気はするが……

「あ、明日香。早くしないと競技の開始時間が」

『ちよつと神崎さん、明日香さん！ もう始まりますよ！？ 早く列に並んでください！』

すると列から出てきたエルフィがこちらに向かって大声で叫んでくれた。ナイスタイミングとはこのことか

「ほらエルフィも言ってることだし……」

「む、むむ……なら仕方ない。行くとするか」

……ぶつちやけ助かった

パンツ！

1組目のレースがスタートする。俺の入るチームは最初からスピードを飛ばしていく作戦でやっている。もう片方はバランスタイプだ。……まあ早い人がこつちに固まっただけで、ワンツーフィニッシュを狙えない形になったただだが。まあそれでもまだ紅よりは早いちなみに1組目は笹原さんと光久のペア。以上に速く、青と紅から徐々に差を付けていく。もう片方も順調なようので3位……と4位で接戦を繰り広げていた

「どうだ健太」

「そうだなあ……まあ大きなミスがなければ行ける。とりあえずアンカーとして役目を果たすだけさ」

「……不安だなあ」

「ちよつと待て。今聞き捨てならぬ言葉が」

「2組目スタートしたぞ」

「無視するな」

反対側で2組目が紐を受け取って順調なスタートを決める。まだ他クラスとの差はあり、油断は出来ないがこのままだと余裕だ。2位、3位と順々に2組目がスタートし、もう片方のチームが4位でスタートした

「60、30、90点か……ここまで稼げても青には微妙だな……」

「辛いな……」

「まあもう片方が巻き返してくれれば　　っておお!？」

「まさか2位青が転んだか……早いから」

「まあまあそう言っただけな真筈。ほら、3組目スタートだぞ」

「何事もなければいいけどな……」

こちら側から3組目がスタートした。まだまだ1位、もう片方は

4位から3位に上昇、転んだ青は5位まで落ちて再出発をする。まだ差は余裕だ

ちなみに今は宮本のターンだ

「……何事も無ければって……お前、そう言うと本当に何か起こるから止めてくれよ」

「冗談だよ冗談。なあ明日香」

「私に振るな」

「ってあれ？ 何、髪型変えたの？」

「ふん。どうせ似合っていないと言っただろ。さあ言ってみる佐々木、似合っていないと」

「じゃあ似合っていない」

「ほら見る」

いや、今確実に無理矢理言わせたよな？ 無理矢理だったよな？

健太も健太で「じゃあ」って言ったよな？ 絶対に本心でのやり

取りじゃないから今のは

……どうこうしている間に4組目があちら側からスタートする。

もう片方は順調なようで、3位をキープしながら徐々に追い上げを始めている

「どうなんだ真筈。佐々木もこう言ってるんだ。大人しく本音を言え」

「あのな……頼むから今は競技に集中してくれよ」

「そうだぞ鶴。女の子は全て髪型で決まる物じゃない。胸と言うのも大切な武器に　ぐほっ！」

「黙れ健太。どうせアンタはそこでしか判断していないでしょ。ってかいつからアンタそういうキャラになった訳？」

「……高校あがる少し前からでした」

「……佐々木い？ 今軽く私のことをバカにしなかったか？」

「いえ、誰も貧相とは仰って　　がふっ」

……口は災いの元とはこのことか。とりあえず健太、流石に女子をその部分だけで判断するのはどうかと思うんだが。酷すぎる判断材料だよ

とは思いつながら目の中にいる2人の女子を見比べてみる。うーん……鈴橋さんも結構……じゃなくて

「今失礼なこと考えただろ」

「滅相もございません」

「コイツと同じように沈む？」

「遠慮させていただきます」

……5組目がスタートした

「まあ落ち着け。世の中には貧乳萌えと言う物がだな」

「殺すぞ佐々木」

「ええ。女子の目の前でそんな話をするなんて……ただの自殺行為ね」

「ふっ、この9ヶ月で変わり果てた僕の姿を　　」

「沈め」

「ふっっ…」

なんだかこんな会話がスタートするまで続くと思うと泣けてくる。多分ここに俺の居られる場所は存在しないだろう。というか健太も健太だ。女子の目の前で堂々と……いや、女子に対して堂々と胸に關しての話をするな

6組目がスタートする。差は全く縮まることは無し。そしてもう片方は2位と未だに接戦を繰り広げている

「……どうして健太はここまで変態になったのよ」

「俺を見ないでください」

「まあその佐々木に影響されつつある真筈だがな」

「失敬な。家にはもうエロ本はない」

「つまり持っていたと？」

「ああ持っていたな。なんだったか？ 確か……じよ、女子高生秘

密の放課 「ストップストップドクターストップ！」……

悪い。流れで言いかけた」

「何故僕の首を縛るんですかかおりさん……」

「まさかあの不良がここまで落ちぶれるとは思ってもなかったわ。

抵抗すらしらないし」

健太が首を縛られながら身体を宙に浮かせられる。こちらはこちらで恥ずかしい事を言われかけた。……しかしあの本は最高だったって違う。もうあれは健太に返却して今頃光久の家にあるだろうから何の問題もない。うーん……なんだか最近になってまた読みたく……違う。競技に集中しよう

7組目がスタートした

「実は僕……隠れMだったんだ」

「元不良が良く言うわ」

「えつと鈴橋さん？ そのくらいに……」

「いえ、ちよつとこいつがMかどうかを確認するわ。踏みつけて」

「ワスレテクダサイ、ヒジヨウニモウシワケゴザイマセンデシタ」

「わかればいいのよわかれば」

鈴橋さんと笹原さんが何処からどう見てもSにしか見えなくなってきた。しかも健太は健太で踏まれそうな体勢で固まってるし

……8組目がスタート

「つていつかそろそろ競技に集中しろよ。なんだかんだでもうエルファイ達だぞ」

「ふむ。エルぽんか。ここからだとよく見えないが……あの胸揺れは」

「沈め」

「甘い！ とろけるにとろけきつたチヨコレートよりも甘い！」

3人の渾身の一撃が回避される。しかしそれは最初の一発だけで、第二波を回避するほど頭は回っていなかったらしい。俺は止めておいたが明日香と鈴橋さんの一撃が脳天にクリーンヒットした

その後すぐにエルファイが到着、9組目がスタートした

「お疲れエルファイ」

「お、お疲れ様です………なんで佐々木さんは沈んでるんですか？」

「まあ色々あつてな」

「そ、そうですか……」

「まあ気にするなエル」

「は、はあ……」

とりあえずこれ以上健太による被害者を増やすわけには……ん、健太が被害者？ いや、女子達が被害者か

なんだかんだで折り返しの手前、10組目がスタート……。順位の変動は未だ無いが、徐々に後ろが追い上げ始めてきた

「……ところで神崎さん。何さつきから目を逸らしてるんですか？」

「いや……その……なんでもないです」

「素直に言ってみる真箏。エルの方が髪型が似合っていると」

「えっと……今更なんですけど髪纏めてみたんですけど……」

「いや見れば即わかる」

「うん、エルぽんは鶴より似合ってる」

「ほら」

「ほら、じゃなくてな……」

折り返し地点で競技も後半戦に入るといつの間にこの緊張感のなさは一体なんなのだろう。どうしてこうなっているのかサツパリわかないんだが。そもそもなんでエルフィまで髪の毛を縛ったんだ。理由がわかっている明日香ならともかく………気にしても仕方ないか

折り返し地点、11組目がスタート。我が軍の諜報部員、竹内と、リレー走者の唐松さんだ。そういえばあの2人は地味に息が合ってなかったりするんだ……下手したらまさかの事があるかもしれない

「いや、流石に不幸な事故を考えるのはよせ」

「だよなあ……まあとりあえず後方の順位変動は無し、2位とは接戦、と……」

「で、どうなんだ真筈」

「しつこいですよ明日香さん……もう俺の気持ちもわかってくださいな」

「いいや納得できない」

「神崎さんは照れて本心を言えないだけ何じゃないでしょうか」

「らしいぞ明日香」

「らしいって……私はお前の口から聞きたいと」

「なあっ!?!」

「……え?」

健太と鈴橋さんの叫び声を聞いてすぐに2人の見ている方向を見ている。するとそこには選手交代の本当に僅か直前で転んでいるもう一方のペア、新島さんと滋賀崎が転んでいるのが見えた。こちらはすでに12組目がスタートしていて、あちらは段々と順位を

落としていく

そして何故か周囲の皆に半目で睨まれる

「……俺は何かしたでしょうか？」

「」「」「悪い想像をした」「」「」

「……すいませんでした」

あちらは何とか5位でリスタートをし、徐々に前者を追い上げ始める。しかし6位とほぼ同じ辺りを走っているのでこれからの挽回は辛いか……？ まああちらはあちらに任せるしかない

13組目がスタート

「さてと……そろそろ準備とかした方がいいのか……」

「……まあ色々聞きたいことはあるがそうするか。あつちが転んだからこつちが1位をキープしておかないとな」

「……頼むから競技に集中してくれよ明日香」

「……ああ、さっきも言ったようにもうなんともない。……真箏が痴漢しなければの話だけだな」

「俺をどういう目で見てるんだお前は……」

「冗談だ。ま、まあ、お前にならまだされても……」

「なんか言ったか？」

「……なんでもない」

14組目がスタートする。あと3組

「しかしさつきからまさかの連続だな。1人は保健室に運ばれて健太対は2回走ることになるわ、今さつき1組転ぶわ……正直なところ俺不安になってきたんだけど」

「だ、大丈夫だろ。僕たち男子が巻き返せば……な？」

「それが簡単に出来たら苦労はねーよ」

「期待してるわアンタら」

「だとよ健太」「だってよ真箏」

「……2人に対して言ったんだけど？」

走る直前だというのにこのペースでいて大丈夫なんだろうか俺たちは

15組目がスタート、あと2組。現在順位の変動はほとんど無し。そしてもう一方は6位と差を離して4位と接戦になっていた俺と明日香はスタートラインにつく

「さて明日香。戻ってきたら俺たちの番だぞ？」

「ああそうだな。出遅れるなんて事の無いようにな？」

「それは俺の台詞だよ。全力で行くからついてこいよ？」

「その言葉をそのままお前に返してやる。……外側からだっとな」

「ああ」

反対側、16組目がスタートした

「任せたぞ真箏」

「お願いします明日香さん」

「おう。その後のことはお前に任せたぞ」

「頼むぞ佐々木、かおり。」

「なんだか佐々木かおりって名前みたいで嫌なんだけど」

「ええい文句を言うな文句を。……ま、行ってこい」

「ああ」

あちら側からやってきた16組目に紐と言っなのバトンを渡され、それを急いで俺の右足と明日香の左足に括り付ける。練習通りきつすぎず、緩すぎず。結び終わると同時に他の様子を見てみると、もう一方のチームが4位に浮上していた

立ち上がって少し背の小さい明日香と肩を組む

「行くぞ！」

「ああ！」

俺と明日香はそれぞれの外側の足を1歩前へと突き出した

Before of game , a little time

「あれ、明日香さん？ 髪の毛縛ったんですか？」

「ああ。競技中真筆の邪魔になってると思ってるな」

「……………なんていうかいつもと違う髪型だから新鮮ですね。可愛いです」

「なっ！？ そ、そうか？ 真筆に聞いても全く答えてくれなかったんだが……………」

「あはは……………まあ神崎さんですからね」

「どうせ似合っていないか思ってた言葉に出来ないだけなんだろうがな」

「いやそれは無いと思いますけど……………わたしも纏めようかなん？」

「あ、いえ……………なんだか明日香さんの髪型見てたらわたしもそうしたくなってきた……………」

「そうか……………じゃあ私が纏めるからあつちを見ててくれ」

「あ、いいんですか？ それじゃあお願いします」

「……………エルの髪の毛って意外と癖毛っぽいんだな」

「気にしてるんですから言わないでください！」

After the game

「いつやー、見事に1位を決められたなー!」

「最後の健太がバランス崩したとき本当に心臓が止まると思ったぞ……」

「まあ1位と4位で決まったんだからいいじゃないですか」

「そうだぞ真筈。終わりよければ全て良いんだ」

「何か間違ってるから……それはともかく、次俺たちはまだあるんだから早く準備するぞ」

「おうよ」

「障害走でしたっけ？」

「ああ。女子とは違って殆ど体育系の仕掛けなんだよな……」

「あはは……が、頑張ってくださいね」

「ほいほい。それが終わったら次はリレーだし、女子は準備にかかっつててよ」

「あー……そのことなんだけど良いかしら？」

「ん、どしたの綾香？」

「なんだかかなり深刻そうな表情で……」

「何かあつたんですか？」

「あつたからこんな顔してるのよ。しかも最悪な状況が生まれたわ」

「……と言いますと？」

「実は今の二人三脚で第七走者、新島藍が左足首捻挫。とてもじゃないけど走れる状態じゃないわ」

「……」

「……えっと」

「それってヤバくね？」

「かなり深刻な大問題よ……とりあえず風向きが一気に変わったわ」

二人三脚	1位	白	2位	紅	3位	青	4位	白
5位	青	6位	紅					

点数総計 紅 358 白 391 青 404

#21 学年別チーム対抗リレー

1 学年男子障害走	紅	156	白	133	青	131
点数総計	紅	514	白	524	青	535

Before of game

「しかし……殆どの点数を紅組に持つてかれるとは予想してなかったな……」

「意地だろうな。もうこうなった以上1位を取るしか優勝は無いてこつた」

現在リレーの1つ前の競技、3学年男子による棒倒しの最中。俺と健太はその様子を眺めながら2つ前に行われていた競技の反省をしている途中だった。本来ならリレーの練習をしないと行けないところだが、一人メンバーが欠けたと言うことで会議が行われていた。過去形なのは現在休憩中だからだ。休憩している余裕なんてほとんど無いというのに、健太がリラックスも大事だと言うのでこんな形になっている。まあ補欠を出すって事になったら新島さんと同じクラスの明日香を出すしか他ないわけだが

「健太、リレーの点数配分は？」

「1位 300 2位 200 3位 100 ……何をどうしょ

うが1位が優勝ってこった。挽回も糞も無い話だよ」

「……………そうか……………」

健太は現在の競技を眺めながら唇をギュツと噛む。血が出てくるんじゃないか、ってくらい強くかんでいるようにも見え無くない。それだけ難しいのだろう

白組の代表まとめ役2名、笹原さんと鈴橋さんが戻ってきた

「どうかしら健太。行けそう？」

「さあね。ぶつちやけた話これは運にもよる。1人での転倒、集団での転倒、その他のアクシデントだって起こりうる可能性は1%も無い訳じゃない。今までの練習風景と竹内の情報から纏めると僕たち白組は他2クラスより若干劣っている。だから勝てるか負けるか微妙なラインなんだよ。後は僕たちの本気と神様をお願いするしか他ないんだよね……………」

「そう……………」

普段の健太からはとても想像つかない言葉を聞いた笹原さんは、落ち込んだような声を出す。その横にいる鈴橋さんも随分と微妙そうな顔をしている。その様子を見た俺たち2人は空気に逆らえず顔を俯せてしまう

「って、なんですかこの空気は」

「さ、流石に暗すぎるんじゃないか……………?」

そんな空気になった直後、エルフィと明日香が戻ってくる。エルフィはまださっきの競技の時の髪型のままだ。一方明日香はいつの間にか髪型を元に戻していた

「……………」

「……ど、どうした真筆。なんで私の顔を見つめてるんだ？」
「……いや」

競技終了を告げる合図と明日香の言葉によって意識が戻ってくる。どうやら気がつかない内に明日香の顔を見ていたらしい。でも無意識だったとはいえ理由が存在するような気がする

なんとなく思った。健太が言う運だけでは勝てないんじゃないかと

「さて……もう残りの競技は無くなった。後は各自頑張るしかないリレーの始まりだよ。行こうか」

健太のその言葉を合図にリレーの選手が移動を始める。当然俺たちは座っていたので立ち上がる必要性がある。のにも関わらず俺だけは1つのことだけを考えていて同時に立ち上がることは出来なかった

「……真筆？ どうしたんだよ、早く行こう」

多分、自分の意見を伝えるなら今しかないはずだ

「健太。悪いけどさ……俺と明日香の順番チェンジ」

「……は？」

正直な話俺の口は何口走ってるんだろうと思った。何の根拠も無い。なんとなくそれに賭けてみたくなった。いや、根拠というか自分の勝手な妄想というか……理由は存在するかもしれない

「ちよ、待て。なんで急にそんなことを言い出したんだ？」

健太が完全にこちらを振り返り真剣な表情になってこちらに質問してくる。その後ろにいる明日香はまだ驚いたような表情をしている。その他のみんなも驚いているようだ

「なんで……か。まあ、俺の勝手な意見だな。今こうしたからと言って勝てる確立は変わらない。けどさ、運に頼るんじゃないで実力で勝負を」

「いやそんな僕たちだって重々承知だよ。順番を変えたからと言って上がりもしない勝率なのになんで急にそんな事を言い出したのかって言ってるんだよ僕は」

まあごもつともな意見をありがとございます。いつになく真面目なキャラの健太も案外好きだ。別にホモではない

……正直この理由はどうかしてると思う。通るかもわからないし、これは予想という理由だ。ただそれだけ、みんなが納得してくれるとは到底思えない

「そうだなあ……じゃあその理由は明日香に聞いてみるか？」

「なっ!?! ま、真箏!?!」

「え、鶴? なんで鶴の名前が出るのさ」

「だから本人に聞けって」

全ての視線が明日香の方に向く

「な、何を言ってるんだ真箏! なんぞ私がそんな理由に関わって

」

「十分関わってるんじゃないか? いや、関わってるって言うのか

……? とにかく……お前さ、今日誰かに来て貰ってるんだろ?」

「……………え」

その瞬間明日香の表情が強張った。それと同時にざわめきだすチームメイト一同

「これは俺の勝手な想像であって本当に当たってるかどうかはわからない。当たっていても外れていても俺はこの意見を変えるつもりは全然無い。それにお前が正解を伝えたくないなら伝える必要はない。ただこの予想が当たってたとしたら……お前、その人に良いところを見せてやりたいんだろ？」

「……………」

「昼休みお前は誰かを捜していた。けどそれは琉華じゃなくて俺の知らない他の誰かだっと思って考えている。つまりその時間に来ていなかったって事はお前が障害走で1位を取った瞬間を見ていなかった。だから俺はお前を目立たせて」

「……………れ」

その時その場の空気が一瞬にして静まりかえった気がした

「黙れ真箏！ お前に私の何がわかるんだ！ 当てっつているかもわからない勝手な想像！？ ふざけるのも大概にしる！ 第一お前には私の事情を話しているはずだ！ それなのに……それなのに誰かが来ているだと！？ これ以上変なことを言うなら……真箏でもその脳天を撃ち抜くぞ！」

「……………」

「私は……私は……………」

今の心からの叫びで息をあげる明日香。周りでは明日香の事情についてヒソヒソ話が始まっていた。そういえば明日香の事情を知ってるのは俺と琉華だけだったっけか……これはミスをしたな。やりなおせるならやり直しておきたいなこれ……でも、ここまで言ったんだ。最後まで言ってみるしかないだろう

「私はどうせ……また1人に」

「悪かった明日香、ちょっと俺が考え無しだったな」

「いいんだ真筈……私も怒鳴りすぎたな。それとさっきのお前の想像は」

「さっきの予想は取り消して、このことは俺からの頼みって事で『は？』」

今度は俺の方に全ての視線が飛んでくる

「理由？ 理由ならあるぞ？ ただ俺がアンカーやりたくないだけ。それを明日香に任せる。それだけだ」

「お、おい……」

「納得いかない理由だなオイ……ま、僕は真筈が全責任を取ってくれるって言うなら構わないけど。それと後で鶴の事情を聞かせてくれるんだったら」

「私も佐々木さんと同じ理由でいいですかね。正直な話神崎さんにアンカーが務まるとは思っていませんでしたからね」

「それはそれで痛い言葉なだけだな……まあいい、駄目だった場合の全責任は俺が取ろう。それでだ明日香。問題ないよな？」

そして今度は全ての視線が明日香の方を向く。それと同時に呆れたように大きく溜め息を吐き、いつものような瞳でこちらを向いた

「2人の言うとおり全責任を取るならいい。それに加えて私の事情がどうかの話の話を皆から忘れさせる」

「わかったよ」

「よし、話も纏まったな！ 今回のリレーの責任は真筈が持つ！

だからと言って手は抜かず、目標は1位で優勝！ 神頼みで勝つんじゃない！ 実力で体育祭を制するんだ！」

『おおーっ！！』

そして今、白組最後の円陣をここに組んだ

「流石に明日香に400走らせるのは苦だったか……？」

「何言ってるんだ真箒？ 全責任取ってくれるんだろ？」

「う……まあそれはいいとして。任せたよ、高梨さん、健太、エル
ファイ」

「おう、任せろ」

「私も大丈夫だね」

「問題ありません」

「後はあっちの様子を確かめたいけど……無理か」

奇数走者のスタート地点、本部テントの反対側。今そこでは第一走者がそれぞれの各自最終調整をしているところで、第一走者の高梨さんが準備運動をしていた。他の2人は一旦座って待機。第三走者の健太と第五走者のエルファイ、そして順番のチェンジでここに来た第七走者の俺がいる。もうみんなは完全に準備できたらしい。後はスタートの合図を待つだけだ

「……にしても明日香さんの事情って何ですか？」

「多分真箒と鶴の恋仲の進み具合が関連」

「ええっ！？ そっ、そうなんですか神崎さん！？」

「いや、してないから」

なんて適当なことを言うんだ健太のヤツは。俺と明日香がそんな

関係に至るわけ無いだろう。普通に仲がいい友達って感じですよ？

「ってそれは今どうでもいいだろ。集中せよ集中を」

「アイ・サー」

「了解です……」

その言葉で2人が高梨さんのいるスタート地点を見る。走者は全部で3人。白組は運よく内側でのスタートを取れることになった。まあそこは良かろうと、後は実力に関わってくる

『さあーて体育祭も最終競技リレー対決だあ！』

……穹も実況に復活したみたいだ

穹による競技の説明、長つたらしい選手紹介を終えた数秒後、スターターの人がピストルを頭上に掲げる。競技開始の時間がやってきた

『それでは覚悟は出来たかな？ 位置について』

パンツ！

その大きく鳴ったピストルの合図と共に第一走者が全員同時にスタートする。外側の2名は段々と内側に入っていく、3人がほぼ同じ場所に並ぶ。が、やはり白が一番有利だったらしく、カーブの時点で1位をキープ出来た。直線で抜かれることがなければ行ける！

「次は……石田か。あいつは……そこそこ速かったかな」

「まあ任せるしかないでしょうね……」

最後の直線走り抜き、第二走者の石田くんが走り出す。それに

続くようにすぐ青、紅と順にスタートをしだす。最初の直線で段々ど追い上げられ始めてきた。カーブを終えたところでどうなるかが不安になってきた

第三走者の健太がスタートラインにつく

「……任せましたよ佐々木さん」

「一応お前にも係ってる訳だからな？」

「ま、こうなつた以上は全力で最後までやり通させてもらうさ。僕の本気、見ておுகがいい！」

石田くんがカーブを終え、最後の直線に入る。しかしその真後ろについていた青組が横に並び、そのままこちらへと向かってきた。それに続くように紅組も並び始める

「……まあ行けるか？」

「佐々木い！」

「おう！」

目の前で石田くんと健太のバトンパスが行われ、健太は勢いの良いスタートダッシュを決めて青と僅かな差を開く。あいつって意外と足速いのな。試合中は別行動だからよく見なかったし……
つと、準備をしておかないと

「お疲れ様です石田さん」

「お疲れ……いや、やっぱり辛いね、日頃の運動の少なさが……」

「それって軽い嫌みだと思っけどな」

「そこはつつこまないでくれよ」

健太がカーブを抜ける。今のカーブで更に差を開いたのが、2位の青とは2mくらいの差を開いて第四走者の唐松さんにバトンのパ

入する。若干詰まって遅れたはいいけど青とはまだ若干差がある。青と紅の差は本当に僅かだ。青に抜かれたら紅にも抜かれると覚悟した方が良くもしいれない

「さてと……次はわたしの番ですか……流石に緊張してきました」

「頑張れよエルフィ」

「任せたよエストラントさん」

「は、はい……頑張ります。目の前に神崎さんがいると思いますながら……」

「なんか言ったか？」

「い、いえ……」

「やれやれ」

カーブを抜けて差の変化がない状態で唐松さんが最後の直線を全力で走ってくる。いや、この直線に入って他2チームもスピードを上げたのか、段々と迫ってくる。その迫ってくる中目の前の2人が手を伸ばし……

「任せたよエル！」

「了解です！」

バトンを受け取ったエルフィがスタートする。それとほぼ同時のタイミングで紅と青もスタートした。順位は全然変わりそうにない。全員が全員同じようなスピードでカーブに差し掛かる

「お疲れ唐松さん」

「お疲れ臯月」

「お、おつ……いや、ごめん。全然差広げられなかった」

「まあ大丈夫だろ……エルフィがなんとか……」

エルフィの方をしてみる。そこにはカーブだというのにも関わらずエルフィの横を走る青組の姿が。カーブの状態で抜かそうっていうのか!? いや、抜けそうだ! 紅はエルフィの真後ろを走っている。これは非常に危ない状況だ。直線に入ったらかなり危ないだろう

最後の直線に入り、第六走者の東城くんが準備する。そして全員が最後にスピードを上げ、エルフィと青組は抜くか抜かないかの僅かな勝負をする。そして

『おつとここで青が白を僅かに抜いた! 僅かな差で青が速くバトンパスをしたぞ! それに続く白と紅! まだまだ諦めるな!』

穹の実況通り僅かな差で青が1位に躍り出る。その青組の真後ろ1mくらいに第六走者、東城くんが並び、その横に紅組が平行で走っている。これは危ない状況だ。でもそれをゆっくり見ている時間はない。次の走者は俺なんだから準備をしておかないと。現在の様子を見ながらスタートラインにつく

「頑張つてな神崎くん」

「責任取らなくても済むようにね」

「わかつてるよ。んじゃ、頑張るか……」

東城くんがカーブを抜けて直線に入る。なんだかわからないけど緊張してきた。いや大丈夫だ。バトンを受け取って明日香に渡すだけなんだ。その間に1位に出て……

先に青がバトンをパスする。そしてそれに続くように白と紅がやってきた

「神崎!」

「了解!」

1本のバトンを受け取って全力疾走をする。青との差は大体2mくらいになってしまっただろうか。この直線とカーブ、そしてラストパートが鍵になってくるはずだ。だから少しでも良いから差を縮めて……でも紅も結構速い。下手すると足を引っかけて転倒なんて事も……

大きなカーブに差し掛かる。身体の体重を内側に向けてスピードを上げながら走り、少しずつ青との差を狭めていく。横につく紅は転倒を避けるためか俺の真後ろに回った

『さあ全チーム譲らない戦いが繰り広げられています！ どうなるんだこの勝負！ みんな1位でいい気がしてきましたけど!?!?』

穹……それは勝負にならないから。とか思いながらカーブを抜ける。ラストパート、この道のりが長く感じられるが、その先に明日香が待っている。そうすれば後はあいつに全てを託して……
そのためにも目の前の青を抜かしておく！

「あああああああああああつっ！」

『おつと白組ここで発狂したか!? 真筈は壊れたのか!? 大きく崩壊した言葉を叫びながらスピードを上げていく！ それに負けじと青と紅も発狂した!?!?』

でも発狂し始める寸前こちらを見たのが間違いだっただな。目の前を走る青のスピードが一瞬だけ遅くなり、その内に横に並ぶ。そしてそのまま明日香の元へと走って右手に持つバトンを明日香の手元へ

「明日香っ!」

「ああ！」

言いたいこと全部は言えなかったけど、多分このバトンを通して伝わってくれたとは思う。なんせ俺と明日香はペア組んでるわけだしバトンパスと同時に白と青が同時にスタートする。それに続くように紅が1秒差でスタートした。俺は役目を終えたので健太達のいる待機場所へ。そこにつく頃には全チームがカーブに入っていた

「お疲れ真筆」

「お疲れ様です。なかなか良かったですよ」

「ああサンキュ。でもまだ油断は出来ないから……明日香に全部賭けるしかない」

全チームカーブを抜けて大きな直線に入る。アンカーは1周しなると行けないのでかなり長い道のりを走ることになる。この直線での勝負が決めてとなりかねない

『ここで3チームが1列に並んだ！ 1位と3位の差は5mも無い！ まだ抜かせるチャンスはあるんだ！ だから諦めずに頑張れ！』

その直線も終盤に入り、とうとうカーブに差し掛かる。差は穹の実況通り、そして未だ変わらず。そのままカーブに入ってしまった。これを抜けて直線に入ったらそこが最後の勝負だ

「明日香さー！ーん！！ 頑張ってくださいさー！ー！いつ！ー！」

「鶴いいいつ！ー！」

そこにいる2人が少し遠くにいる明日香を応援する。しかしそれでもスピードは変わらず、徐々に差を開かれつつある。これだと厳しいか……？

「……ん？」

すると1位の青組が一瞬だけふらついた。そしてそれは悪い方向へと派生していき、明日香と紅組の目の前で転倒してしまった。そして最悪は続いた

『うおーっ！ 青組が転んだと思ったらそれに続くように白、紅と転んでしまった！ なんだこれ！？ もの凄い危ないんだけど！ つて、大丈夫か3人も！ まだゴールは目の先にあるんだぞ！？ 立ち上がれ戦士達よ！』

転んだ3人が頑張って立ち上がり出す。だが青は最初に転んだからなのかかなりの重傷を負ったらしい。立ち上がったも走ることが出来ず、足を引きずりながら歩き出した。ここからだとはよく見えなけれど、見ると膝から血が流れ出している

それに続くように白と紅が立ち上がる。2人はまだ軽傷なようで、さっきよりスピードは落ちたが青組を抜かずスピードで走る。紅とは同じようなスピードだ

「明日香さん！」

「鶴っ！」

至る所で選手名を呼び合う戦いが始まる。もちろんその中に俺も混ざっている。その大きな声援を危機ながら徐々にスピードがあがる2人。このままだと同着、もしくはカメラ判定に……

俺は1歩前に出た

「明日香！ 走れ！ お前なら行ける！」

俺が出せる精一杯の応援。絶対に届いているとは思いが、かなりの大声を出した。他の連中には負けられないような声だと思ってる。そこを走る2人のスピードが上がる。そして後ろにいた2人も前に出てくる

「明日香さん！」

「鶴！ 全力で行け！」

「お前の今の気持ちをあのゴールテープにぶつけてみる！ 明日香あっ！」

「う……あああああああっ！」

そして明日香は発狂して最後の全力疾走を始めた。それに少し遅れた紅組も同じ様に叫びながらスピードを上げる。しかし、それはもう遅い。徐々にゴールへと近づいていき

パンツ！

『ゴオオオオオル！！ 1位は白組が制した！ ということとはつまり…… 白組！ 学年優勝を記録したあああっ！』

「……………」

「明日香！」

「明日香さん！」

「鶴！」

いつものメンバー3人が……いや、白組のメンバー全員がここに集まってきてしまった。まだ競技中だと言うのに。教師陣も動き出したので早めにしないと

「やった……のか？」

「そつだよ！ やったんだよ！」

「はは……そつか………ありがとう、真箒」

そして明日香は1粒の涙をこぼしてそう言った

俺たちの体育祭は、見事優勝を記録して幕を下ろした。ついでに言つと俺個人も初優勝だ

A f t e r t h e g a m e

『お疲れー！ー！』

白組全員の歓喜の音がグラウンドに響く。中には無く声とかも聞こえなくはない

「いつやー……まさか真箒の作戦がああ上手くいくとは……予想外だったな！」

「作戦でもなんでもないんだけど……？ ま、正直俺でも予想外だった」

「つまり私が1位でゴールするとは思っていなかったわけだな？」

「そういう訳じゃないです………」

「ま、まあ終わりよければ全て良しですよ！ とにかくこれで今晩は打ち上げですよ！」

「お、エルぼんナイスアイデア！」

「ちよつと何勝手に話進めてるのよ！ それはクラス全員の意見を聞いてから」

「そんな事もあるつかと事前調査は済んでいるのだよ笹原くん」

「アンタねえ………なんでこついう事は速いのかしらね………」

「そついう人間なんでしょ」

「そうね。なじみ深い人間だからすぐにわからなくなるわ」
「「はあ……………」」
「なんだねそのため息は」
「呆れられてんだよバカ」
「バカは余計だバカは」
「うっせえバカ」
「なんだとバカ」
「お、落ち着いてください……………」
「そつだぞ2人ともし……………私が優勝したんだからもつと静かにだな」
「お前1人の優勝じゃなくてな？」
「せめて私たちに直してよ……………」
「わ、悪い……………」
「そもそも俺が変わって」
「過ぎたことを言うなアホ」
「……………すいませんでした」
「まあおしゃべりも大概にしておけ野郎共」
「おお先生。おめでとうございます」
「おうありがとうな。まあ俺は大して何もしていないが……………これからそれぞれ後片付けに向かって貰う。割り振りは笹原に伝えてあるから……………後は任せたぞ」
「はい、わかりました」
「まさか体育祭疲れてそんな鬼の仕事が待ちかまえているのかね！？」
「当然でしょ」
「当然だろ」
「当然ですね」
「当然だな」
「お前らなんて大嫌いだ！」
「……………なんて言いながらも自分の担当場所把握してるのが悔しいわ」
「悔しいんですか……………」

「うざったいわね」
「理解できるなそれは。で、俺は何処？」
「えっと神崎はテントの片付けね。あと明日香もね。それじゃあ担当場所をそれぞれ伝えるからここに集まって」
「……わたしもテントの片付けに……」
「そうだな。健太もそっち行つたしそれがいいよな」
「……そうですね。じゃあ聞いてきます」
「……」
「……」
「……で、真箏」
「ん？」
「何故あんな予想を立てた？」
「……聞くな」
「……まあいい。その正解間違いをいうつもりはないからな……それはいいんだがな」
「今度はなんだよ……」
「まだ髪型についての話を聞いていなかったからな」
「げっ」
「何が「げっ」だ。さあ答えてみる。今なら誰もいないし答えられるだろ？」
「いや……その……」
「いいから言ってみる。私は何も言わないからな」
「だからその……本人に言うのがちよつと……」
「わかつてる。覚悟は出来ていると言つてるだろ？ ほら、恐れることはないから」
「……」
「真箏？」
「……わかつたよ。言つから。言つから何もするなよ？」
「あ、ああ……？」
「……はあ」

A f t e r t h e f e s t i v a l

「ただいまー……」

「あ、お帰り明日香ー」

「ん……ああ、琉華か。来てたのか」

「まあね。ボクにも色々あつたんだよー」

「そうか。今日はお疲れ」

「お疲れ。最後中々良かったね」

「まあ私にも色々あつたからな。そっちも2位おめでとう」

「いやいや。ボクは特に何もしてないさ……」

「……いや、私にしてくれた」

「けどあの時は……」

「……」

「……」

「す、過ぎた話をしてもし方ないか！ それより今日は3人で何処かに行こうよ！ 寿司屋さんとか」

「いや、その……実は今日打ち上げがだな」

「えー……久々に行けると思ったのに……」

「悪い……だったら明日……」

「……まあそれでいいか」

「悪い」

「いいっていいって。事情説明しないとね」

「ああ。……ところで、何処にいるんだ？」

「ん？ あ、今ちよっと休憩中。疲れて寝ちゃってるみたいだよ」

「そうか……」
「明日香の走りっぷりが格好良かったってさ」
「う……」
「まあちよつと気になることも言ってたけど」
「え？」
「なんでも真箏くんと思しき人と話したとか」
「……え？」
「まあそれは自分で聞いてみてよ。多分すぐ教えてくれるよ」
「そ、そうだな……」
「……」
「……」
「……まだ言わない方が良さそうだよね？」
「ああ。寧ろ言わない方が良さと思う」
「そっか。それならそうしよっか」
「ああ……」
「それじゃあ今日はボクが残るかなあ……」
「ん、いいの？」
「打ち上げなんですよ？ ボクは暇だし夕食くらい作れるって」
「むむ……じゃあすまない」

おばあちゃんにもよろしく伝えておいてくれ

U e E p i s o d e F e b r u a r y d a y s T o b e c o n t i n

EX3-3 体育祭〜午後の部〜（後書き）

光久「拙者の出番は何処へ消えたのだ？」

us「すまん光久。今回お前は空気だった」

光久「く、空気？ ここにいる拙者は一体……」

us「いやごめんなさいまじで。次回は出すから、ね？」

光久「拙者だけの回を用意して欲しいのだが……」

us「……ネタが思いついたら頑張ります」

光久「解せぬ」

光久本当にごめん。なんだかんだで入れなかったなw

それはさておき体育祭終わりました

そしてこれを投稿した今日、体育祭ならぬ球技祭が学校で開かれます
サッカーやって来ます 負けてきます

それはさておき今後の予定

今回はぶつちやけ未定。11月の話はある

なんだかんだでリアルタイムに追いついちゃったんだよね……やべ
えな

そこはどうでもいいです。とにかく11月の話に入ります

あの人が出てきます。いえ、出てきました

血を見せるてww 何してるんだよお姉さんw

何してるんだよ自分……

はい

……まあ

最後のこれなんだよ

2月に続けてww

……何故かその話は完成してるのよね

しかも……いえ、なんでもないです
つか完成いうても内容だけです。話は書いてませんw
先のことを何考えてるんだこいつ
どうぞ、殺してください

まあ、以上です

新作始めました

Retr^{リトライ}y よろしくです

真箏くんが一層エロくなって登場してますw

ではまた次回or活動報告or

http://ncode.syosetu.com/n8991
x/

#57 　　の秋（前書き）

どうも、usです。お久しぶりです
Warsも何とか新章に入りましたね。相変わらずssadssadしてお
りますが、

8章11月、第1話。どうぞ

更に秋も深まり11月

「うああ……寒いんだから早くしてくれよ真箏お〜」

「そう言うんだったらお前も手伝えバカ」

俺と健太は部室前で学校全体から拾い集めてきた落ち葉に火を付けようと頑張っていた。でも健太は寒がってサボっているという結果になっているわけだが。俺だって寒いんだから手伝って早く火付けて暖まりたいんだよ。とは心では思っているものの、寒いし何より集中しているので行っている暇がない。頼むから早く付いてくれ

「誰だよこんな寒い日にやろうなんて言い出したのはよお〜……」

「お前だお前！　なんで言い出さっぺのお前が何もしてないんだよ！　流石に女子を手伝うとか俺を手伝うとかそういう気は起こらないのかお前は！」

「寒くて起こらん！」

「コノヤロウ……」

震える右手に持たれたライターの火を再び左手に持つ丸めた新聞紙に付けてみる。しかし丁度良いタイミングで風に吹かれて火が消えてしまう。最悪だ、さっきからずっとこんな感じで火が付かない。早くしないと女子と光久が戻ってくる。ちなみに部長はまだ教室。なんだか長引いているらしい

秋には人それぞれの秋がある。部長のように（自分の意志ではないが）勉強の秋。（現在何処かで行われているだろうが）読書の秋。

(同じく何処かで行われているだろうが) 芸術の秋。本当に人それぞれ秋が違う
そして俺たち Wars 部にとっての秋は食欲の秋らしい。時間は少し前に遡る

「焼き芋をやるう」

健太のその言葉が発端だった。ちなみに現在11月2日、放課後の部室。焼き芋と言えばあれだ。拾い集めた落ち葉の中にアルミで包んだサツマイモを突っ込んで焼いて食べる。秋の定番のあれだ。健太はそれをやるうと提案している

「焼き芋ですか……名前は聞いたことあるんですけど……美味しいんですか？」

「えっ、エルぽん！？ ま、まさかとは思うが焼き芋を食べた事が無いのかね……」

「え、ええ……たまにテレビで見るとですけど、あの、家がアレなんで頼むのもちよっと……」

「この貴族め！」

「好き好んでやってるわけじゃないですよー！」

まあ確かにエルフィの言っていることがわからない訳ではない。お嬢様家庭だからそういう庶民の味を食べる機会が少ない……って、普通にラーメン屋とか俺の家に来て食べてるか。とはいえ流石に季節限定(?)の焼き芋まではいかないのか。今までの16年間どう過ごしてきたんだろう

「実は拙者も食べたことが無いのだが……」

「光久！？ お前が！？ ミスター 武士道光久が！？」

流石に光久の言葉には全体が驚いた模様。一瞬にして12の目が光久の方を向いた。そして驚いた様子

「う、うむ……実は父上が『お前に焼き芋は早い』などと申して……」

「お前それ絶対に騙されてる！ 焼き芋に年齢とか何もないから！」

健太の言うとおりに焼き芋を食べるのに年齢認証が必要だったら小学生とかどうなるんだ。絶対に秋がつまらない気がするんですけどすると琉華が苦笑いしながら手を挙げる

「明智くん……明智くんって火の付け方知ってる？」

「む？ それくらい……ふむ、確か火薬を蒔いて『アウトー』」

光久に焼き芋をやらせるとその地域一帯が爆発するという事ですね光久のお父さん。貴方の判断と言葉は間違っていないと思います。光久も疑問そうな顔をしないで欲しいんですけど。困るんですけど

「まあそんな事言ってるボクも食べたこと無いんだけどね」

「なんと……」

続いて琉華がさっきの苦笑い継続でそう小さく呟いた。みんなには聞かれなかったのだろうと思っていたのか、健太に反応されて身体が少しだけ反応していた

「ボクの場合はやる機会が無くてね……もしかしたら明日香辺りもそうなんじゃない？」

「む……よく知ってたな琉華……そうだな。私も食べたことがない」
「お前らよくそれで秋を過ごせたよな……」
「健太、それは流石に大袈裟だろ」

まあ確かに健太の言うことも一理あるかもしれない。けど流石に家の事情とかもある訳だししょうがないんじゃないかって思ったりもする。特に明日香、それはしょうがない。とりあえずここまで4人が焼き芋を食べたことがないとなると、後に残されている望はどうなんだろう

「……私はある」

こちらが聞く間もなく望は答えてしまう。大体質問されることが予想できていたんだろう。その回答に食べたことのない4人が小さく溜め息をついていた。理由はわからない

「近藤だけだ、今までの秋を無駄にしなかったのは」

「だから大袈裟だろ……」

「というわけで今日は焼き芋をやるう！ここに4人も食べたことのないメンバーがいるんだ！やって損はない！」

と、部長がいないのにも関わらず健太が話を勝手に進めていく。

焼き芋をやるとなるとまず火とサツマイモが必要になるわけですが……サツマイモに関しては問題ないだろう。ただ火に関しては……

「ちなみにもうやることを前提にしていたので火の使用の申請だけは済んでいるのだよ！」

相変わらずこういう事だけは準備が早い気がする。まあ、今コイツ「だけ」って言ったし他の準備は全く済んでいないに違いない。

健太が奥に置いてあるホワイトボードを引っ張り出し、その盤上に黒いペンで文字を書き出す。どうやら役割分担表みたいだ。買い物係、火付け係兼落ち葉回収係。なんだかバランスの悪い人数に見えるんですけど。5:2ってどういうことだ

「とーいうわけでー、火付け係は経験者である僕と真箏で担当しよう」

「おいコラ、勝手に話を進めるな。ホワイトボードに分担表書いた意味は何だ」

「無いけど?」

「……まあ経験者だからいいか」

「それじゃあ残りの5人はアルミホイールとサツマイモの買い出しって事で」

そしてそれから詳細が健太の口から説明されてそれぞれのメンバーが仕事を果たすためにそれぞれの役目へと付いた。俺と健太はそこから10分程度で校内から落ち葉をかき集め、今まさに火を付けようと苦戦している最中だ。もう一度ライターに火を付けるも風ですぐに消されてしまう。そろそろ怒りでライターを健太に投げ当てそうだ

「なあー、今日は止めにしようぜー」

「おい事の発端、何勝手な事言ってるんだよ……だから手伝えっの」

「寒くて動きたくない!」

「じゃあお前は食うな」

「じゃあ手伝おう」

やはり健太も食欲には勝てないのかもしれない

「応援と言う名の手伝いをな！」

「やっぱり食うな」

「なんだと!？」

大きく溜め息を吐きながらもう一度ライターと新聞紙を近づけて火を付ける。しかしどうしてもタイミングが悪く風が吹いてしまい、すぐにライターの火が消えてしまう。もうこうなったら光久のやりそうなことをやるしかないんだろうか。この落ち葉の中に少量火薬を入れて火を付けて……いや、確実だけど火を付けた直後の身の安全を考えると少し危険かもしれない。諦めて今までの通り頑張ってみよう。でも早く付けないとみんなが帰ってくるし、それまでにはどうにかしておかなければ

もう一度火を付けるがまた風が吹く。いい加減にしてください神様

「もう僕中入るわ」

「お前の分は無くなるけどな」

「くっそー……なら無理か」

もういい加減に手伝って欲しい。こちらら寒い中頑張ってるんだから暖かくなるように手伝いをして欲しいんですが。なんとなく丸めた新聞紙を健太に投げつける。そしたらナイスキャッチされてすぐに投げ返される

「全く……何でも付きづらいかね……」

「それはお前の日頃の行いが……」

「健太、それはお前だけには言われたくないんだけど？」

「失敬な」

口を動かしながらライターをカチカチ鳴らす。しかし火は付いて

もすぐに風で消えるという結果しか残らない。そろそろこのライターを分解した方が良いのかもしれない

「ん？ お前らそんなところで何やってんだ？」

すると後ろから聞き慣れた声が聞こえてくる。健太は元々そつちを向いていたからわかっただろうが、俺は聞いてから後ろを振り向く。そこには我らが Wars 部部长、西宮雄太が立っていた。やはり寒いのか、マフラーをして両手を胸の前で擦り合わせている。誰が来たのかを確認したところで再びかき集めた落ち葉へと向き直り、ライターの火を付ける。結果は変わらない

「おい無視するな」

「見てわかりませんか……火付けようと頑張ってるんですよ」

「ああ知ってる」

なら聞かないで欲しい

「俺が聞いているのは何で火を付けてるのかって事だ」

ならしょうがない

「……扉の前にいるバカの提案で焼き芋やるんですよ。そのために火を付けてるわけです」

「ああ……だから梅花にコイツを渡されたのか」

「「え？」」

事情を説明し終わると部長が肩に掛けてある鞆をいじる音が聞こえてきた。何かと思つてそちらを振り返ってみると、その鞆から一本のガスバーナーが取り出される。かなり高威力を持っているヤツ

だったような気がする。それを今部長が先生に渡されてきたと言っ
ことは……

「ああ……ありがとうございます部長」

「何。例には及ばないさ」

俺は左手を差し出すと部長はガスバーナーを発射態勢で右手で渡
そうとしてくる。そして

「灰になれ」

カチツ、ゴオオオオオオ

「危なあっ!？」

急に殺気が強くなったので即座に手を引っ込めると、まさか部長
がそのままガスバーナーを最大出力で噴射してきた。丁度その場に
落下してきた落ち葉が一瞬で灰となって風と共に消えていった。も
う少し遅ければ自分の左手も今は無くなっていたところだった
冷静に考えてる場合じゃない

「ちよつと部長! 俺を殺す気ですか!？」

「安心しろ神崎。左手を失っただけだと人は死なない」

「いやその通りですけど……危ないからやめてくださいよ!？」

「なんだ? 右が良かったか」

カチツ、ゴオオオオオオ

再び噴射。今度は左手じゃなく右手に向かった。即座に身体を
捻って回避、さっきと同じように落ち葉が消え去る

「……お願いですから止めて貰えるでしょうか……」
「仕方がない……本来なら頭を燃やしたい所だったけど今日の所は許してやろう」

今日の所というか永遠にしないでください。死んでしまいます
やっとの事で部長から安全かつ迅速にガスバーナーをぶん取り、
それを中くらいの出力に変えてからさつきまで持っていた新聞紙に
向ける。これがあれば一瞬で……思った通り一撃で新聞紙が燃え出
す。少し威力が強すぎたけど全く問題は無い。そのままかき集めた
落ち葉の中へと投入する。数秒後には落ち葉に火が回って全体的に
炎が広がっていた。後は暖まりながらサツマイモと他のメンバーを
待つだけになった

「おお……暖けーなー……」

そして何もせずに入り口の所で寒がっていた健太が図々しくもす
ぐに火の前にやってくる。若干身体を震わせながら暖を取っている。
このまま蹴り倒して火だるまにでもしてやろうかと思ったけど、そ
んな事したら部停になりかねないのでここはグツと抑えておく
流石にこのまま寒い中待つのも嫌なので、健太の横に立って暖ま
る。この辺だけかなり暖かい。気付けばいつの間にか荷物を降ろし
てきていた部長も火の前に立っていた

「それで他の連中は買い出しか？」

そして部長は当たり前前な質問を口にしてきた。その質問には健太
がいち早く答え、多分そろそろ戻ってくるとも伝えていた。部長は、
なるほどと言いながら目の前で灯る炎に視線を戻す。とりあえず今
ここに椅子が欲しくなってくる

「……おい健太、それなんだ」

「見ての通り……パイプ椅子成る物だ」

「見ればわかるから……」

丁度俺が欲しいと思っていた物に健太がいつの間にか座っている。どうやら余所見している間に先生が持つているような物を展開していたらしい。なんだか部長も同じような物使ってるし

「俺の分は無いのか」

「いや、部室内に置いてあるやつ使えよ……」

「……それもそうだな」

「頭使おうな真箏？」

「黙れ。お前だけには言われたくねえよ」

そう言いながら火から離れてそことは違って非常に寒い部室の中へ。そして俺が愛用しているパイプ椅子を持ってきてさっきと同じ場所に置き、そこに座る。こうすると非常に楽だ。ただ少し熱くなってくる。少し距離を取るか

健太が急に席を立ち上がる。すると寒そうにしながら部室の裏へと回っていった。俺と部長は何かと思いながら待っていると、片手に大きな袋を持ちながら帰ってきた。そしてその中身を椅子の横にばらまき、少しずつ火の中に加えていく。どうやらいつの間にかかき集めていた落ち葉らしい。持ってくるにしては遅かった気もするけど……寒そうだから仕方ないのか……

「しかし……あいつら遅いんじゃないか？」

「そういえばそうですね……何かあったんですかね」

「流石にそろそろ戻って……くるとは思う」

多分そろそろ30分くらいが経過したと思う。行こうと思えば10分で着けるスーパーがあるので、買い物を含めれば今の時間帯が丁度良い頃だ。それなのに姿を現さないと言うことは、少し遅れているか何かあったのか。少し心配になってくる

健太が肘で俺を突きながら、見て来いよーとか言ってくる。ここは言い出しつぺの健太が行くべきなのではと思いつながら立ち上がり、数メートル歩いてしばらく先が見える場所へと立つ。すると昇降口辺りに見慣れた女子生徒が。そしてこちらへと向かってくる。我がクラスの副委員長、笹原綾香だ。俺が見ていることにも気がついてらしく、歩くスピードを速めながらこちらへと近づいてくる。そして気付けば目の前、そして横に立っていた

「笹原さん？ どうしたんだよこんな所まで」

「どうしたって……ああ、健太が伝えなかったのね。アタシも誘われた身よ」

「誘われたって何に？」

「あのねえ……今アンタ達がやろうとしてることよ」

そう言われて後ろにいる健太の姿をしてみる。するとこちら（というか笹原さん）に向けていつもの表情で手を振っている。その様子に呆れたような表情をしながら1人健太達の方へと向かう笹原さん。とりあえず状況は理解できた。健太が笹原さんを誘った、と

もう一度笹原さんの来た方向を見てみる。すると今度は校門の方からこちらへと歩いてくる女子生徒4名と男子生徒1名。手に袋を持たされている髪の長い男子が居るということは、確実にみんなだ。光久も大変だな……荷物持ち。手伝ってやろうとは思ったけど寒さに負けて火の方へと戻る。気付けば笹原さんも部室から椅子を引張ってきてそれに座っていた。3人にみんなが戻ってきた事を報告しながら自分の席へと戻る

「さあて……やつと始められるのか」

「落ち着きなさい。アンタがやるといつも変な事になるからアタシを呼んだんでしようよ……」

「変なこと？」

「……早く取り出すか、それが遅すぎて食べられなくなるって意味よ……」

「おい経験者」

「てへ」

「……てへ」「じゃないから……」

健太の反応に2人で額を抑えながら溜め息を吐く。笹原さんが男子だったら確実に肩を組んでいたことだろう

みんなが戻ってきた。光久は両手に持った大きな荷物をドサリと地面へ落とす。相当お疲れの様子だ。すぐにその場で両膝に両手をついていた。そして女子達も部室の中から椅子を持ってきて、それぞれに座った。光久の椅子は琉華が持ってきてくれたようだ

全員がそれぞれの椅子に着席した。手元に荷物のあるエルフィが買ってきたばかりのサツマイモを袋から取り出す

「それでこれをどうすればいいんですか？ 火の中に入れておけば良いんですか？」

取り出したサツマイモをそのまま火の中に投入しようと火に芋を近づけるエルフィ。その様子を見た笹原さんが慌てて動きを止めさせ、袋に入っているアルミホイルを取り出すように指示をする

「そういえば……ボクも初心者だから気になってたけど、このアルミホイルって何に使うの？ 特に使い道無いんじゃない？」

「そうだな。別に用途がない気が……焼き上がったやつを包んで食

べるのか？」

焼き芋初心者 of 琉華と明日香までもがそのような発言を。その様子を見た健太と笹原さんが焼き芋セットを両手に説明を始める

？サツマイモをアルミホイルで包みましょう

？包んだら火の中へ。しばらく待ちます

？焼き上がったら取り出し、アルミから取り出させていただきます。
タイミングも重要

と、（主に）笹原さんが説明をして、初心者4人をそのまでの作業に移させる。経験者だったらしい部長は先に用意を済ませていたのか、アルミで包んだ芋を火の中に投入していた

ちなみにアルミで芋を包むのは、直接火に当たると焦げるからだそうです。理由は知らなかったけど、博識な笹原さんはそこまで説明してくれた。健太とは大違いだ

全員が火の中に芋を投入する。流石に数が多いので、火力を少し上げるため健太の横に積み重なっている落ち葉を追加した

「そつえば……少し芋が余っちゃいましたね」

「……少し余裕を持ちすぎた。……でも男子が食べそう」

「だね。それじゃあ今の内に入れとく？」

女子3名がそんな感じに勝手に話を進める。流石に俺はそこまで食べる気がないのでパス。光久と健太、部長も同じ意見だそうで、芋の行方をどうするか of 会議……と言つても、3分足らずで結論が出た。1つは先生行き、残りはこれから健太が誰かを呼ぶらしい。余りは全部で6個だ

健太がその人達にメールで連絡する。誰を呼んだかは教えてくれなかった

「それにしても暖かいな。春か」

「秋だからな？ 火の近くだからそう思えるだけだろ」
「うっ、うるさいぞ真箏。そう思ってもいいじゃないか」
「春……ですか……………春……はああ……………」
「どうしたのエル？ 大きな溜め息なんて吐いちゃって」
「溜め息付くと幸せ逃げるわよ」
「いいえ……………もうとつくに逃げられましたよ。うっ……………」
「……………エルのダメージが大きすぎる。……………凄い悲しいことがあったに違いない」
「ええそうですよ、近藤さんの言うとおりなんです……………過保護の執事さんなんてもう……………」

言われてますよ時雨さん。過保護ですって過保護
なんて思いながらも用意されていた鉄の棒で火の中を突く。すると燃えている落ち葉が舞ったのか、上空に火の粉が上がっていく。その時丁度風も吹いたみたいで、少し火力が上がったみたいだ

「なんだかわたしに結婚って言葉は遠すぎるのかもかもしれません……………」
「何早すぎる話をしてるのよ……………」

結婚なんて気の遠くなるくらい遠い未来の出来事に違いない。少なからず俺はそう思う

しかし……………エルフィはお嬢様なんだし、どこかの家庭とお見合いとか……………いや、平安時代とかそんなんじゃないんだし、それはないのか？ まあエルフィが言っているのは時雨さんについてのことだろう。さっきの事から考えて

「真箏殿、そろそろ取り出しても問題はないのではないか？」
「ん……………そうだな。そろそろ1つ取り出してみるか ほっ」

光久に言われて自分で入れた芋を取り出し、少し風で冷ましてか

ら手元へ。風に当てたのが短時間だったからかとても熱いので、健太がいつの間にか借りてきていた軍手を填めてアルミと皮をむく。するとそこには丁度良い感じの黄金色の芋が包まれていた。みんながその色に注目した。そして1口

「……うん、大丈夫だな。そろそろ取り出しても問題ない」

言っや否やみんながそれぞれの芋を取り出し、健太から軍手を借りてアルミと皮をむく。それでも熱かったのか、琉華が手の上で芋でお手玉をして遊んでいる

「おうおう綺麗な黄金色してるねえ」

「だろ？ 久々にやったけど上手くできてよかったよ」

「そうだね。それじゃあいただきます、っと」

「なっ!？」

そして後方から何者かに自分の手元にあつた焼き芋をかじられてしまう。一瞬何が起こったかわからなかったが、すぐに情報の整理は出来た。こんな事するのは1人くらい……いや、1人しか該当する人物が思いつかない。聞き覚えのある声だなと思いつつ後ろを振り返ると、そこには見慣れた顔、15年間と少しの期間お世話になっていた幼馴染み、星乃穹の姿が。熱かったのか涙目で口元を押さえている。自業自得だ

勝手に俺の焼き芋をかじったというのとはともかく……なんで穹がここにいるんだ

「いやあ……健太くんに美味しい物があるから来ないかーって誘われてさあ？ それで猛スピードで来たら焼き芋やつてるじゃん？ だから真箒のをいただいた、と」

「……絶対お前校門で待ってたろ」

「yes!!」

親指を立てながら元気よく返事をしてくれる穹。元気があるのはいいですが、とりあえず口元についた芋をどうにかしなさい、はしたない

「まあそれで道中同じ目的地に行くって人が居たから一緒に来たわけですよ」
「ほ？」

穹の後ろを見てみる。するとそこには、健太が誘ったのかもしれない男子4人、変態の4人集が嫉妬と殺意の黒いオーラを纏って立っていた。後ろの火の音で良く聞こえないけど、耳を澄ませると「神崎殺す神崎殺す神崎殺す」とか滋賀崎が呟いてるように聞こえる。他の3人はただただオーラを纏っているだけだ、つたがすぐに消え去って笑顔になっていた

「とにかく、わたしたちもこれから参加って事で！ エルフィの横に置いてある袋に入ってるのー？」

「あ、はい。好きなもの取って好きに焼いちゃってください」

「食べながら喋るの止そうね……？」

「お、美味しいんだからいいじゃにやいですか！」

穹に指摘されたことと、思わず噛んでしまったことに赤面するエルフィ。涙目になって溜まりながら焼き芋を食べ始めた。穹みたいに口の横に芋がついているというのは秘密にしておいてあげよう。その他初心者メンバーもそんな感じになっている（光久除く）

「じゃー俺は先に部室で準備しておいてやるからな。少し色々セッティングもしておきたいしな」

どうこうしている間にいつの間にか食べ終わっていた部長が眠そうにしながら部室へと入っていった。その空いた椅子に穹がちゃっかりと座り込み、アルミで包んだ芋を火の中へ投入。他の男子も次々と火の中に入れていった。まあ座るところがないのは我慢して貰いたい……が、滋賀崎のオーラが本当に怖いです

「ふっふっふ……この焼き芋マスターと呼ばれたこのわたしに係ればエルフィの焼いた芋なぞただの芋にしか思えないくらいの焼き加減で取り出してくれるわ……」

「なっ、何言ってるんですか穹さん！ 自分で焼いたんだから美味しいに決まってるじゃないですか！」

「悪いエルフィ……そいつの焼き芋に関する実力は折り紙付きだ。正直俺も負けた」

「だってよ」

「……べ、別に実力がどうであれ自分で焼いた物が一番なのには変わりはありません！」

それは実際に食べてみてから言っただけで欲しい台詞だった。なんだか穹の言葉を聞いて小学生の頃の記憶が……思い出すとまた厄介な事になりそうだから止めておこう

数分後、穹がタイミングを見極めて芋を火の中から取り出し、その実力が証明される

アルミと言う銀色のヴェールが剥がされ、紫色の芋が現れる。そしてそれを包む新たなカーテンを剥がすと、そこには太陽の様に輝く金色の芋が（詩的表現（？））

実際見ると何処も変わりのない焼き芋だが、それこそが相手を惑わせる色だったというのを、俺と穹以外の人間は誰も知らない

「そっかといえば先生の分どうする？」

「穹に焼いて貰えばいいんじゃないか？」

「おうおう良いこと言うねえ明日香あ。まっかせておきんしゃーい！」

というわけで、先生の分の焼き芋は穹が担当することに。穹が再び芋を入れると同時に、他の男子4人の芋が焼き上がったのか、それぞれ火の中から取りだし食べ始める。その姿を見て思い出した。そういえば俺はまだ1口しか食べていない。手で持っているからわかるけど、かなり冷めていた

「……食べるか」

手元にある（冷めた）焼き芋を1口かじると、それは手元でわかるように、かなり冷めていた

それまではいい。穹が余計な一言を追加しなければ

「あ、間接キス」

その言葉と同時にその場にいる全員が口に含んでいた焼き芋を吹きだした。汚い飛沫が日の上を舞う

「おいお前何言ってるの！？ 確かにそうなるけど言う必要とか無いよな！？ 絶対に無かったよな！？ というかなんだお前ら！ さつき一旦静まったのになんて急にオーラ纏うわけ！？ 滋賀崎お前もはや人間か！？ 悪魔だよ、悪魔だよな！？」

再び黒いオーラを纏った3人と、更にオーラが濃くなった1人が

焼き芋を片手にこちらへと近づいてくる。どうやら逃げ場がない

「まあ恥ずかしがることないじゃん？ 幼馴染みだし」

「その一言で片付けられると思うな！」

「えー……何？ 真筆はわたしのことをもつと特別な人間だと思っ
て」

「それ以上言うな！ 俺が おいお前からこっち来るな！」

俺と悪魔4人は走り出した。とはいえこの辺はほとんど逃げ道が存在しない上、相手には宮本までもがいるのでかなり厄介だ

11月2日、月初め。今日は今日で大変だったが、これから先の日がもつと大変になるとは、Wars部一同全員が思ってもいなかった

57 秋（後書き）

お疲れ様でした
相変わらずのgodgodですね。呆れていることでしょう
まあそれはどうでもいいです

図々しいと言います

……感想くだs(ry

今更ですけどね……あは
評価をして貰っているのは嬉しいです。評価、お気に入り登録して
くれている皆様には頭もあがらないです。でもですね……
不安、なんですね。この作品がどう思われてるのか、とか。こんな
作品なのに何も言わずに呼んでくださっている皆様のお声がどうし
ても聞きたいと思い、今回の後書き、本心ぶっちゃけてみました、
はい

当然ですが、神様である皆様には上記の事を強制するつもりはあり
ません。ただ、書いてもいいかなーって御方は願いますorz
…… 本当にすいません、こんな事言う人間で……
誤字脱字の指摘も気付いている方は多いと思います。というか毎
回あると思うんですが……そちらは余裕があるときに直しますので、
お気づきになられましたらバンバン書いてくださっても構いません
（悪い点の欄で）

……こんな事言っておいて違う話題です

新作 Re:try（リトライ） の方もよろしく願いますo
rz

[http://ncode.syosetu.com/n8991
x/](http://ncode.syosetu.com/n8991x/)

……続くかどうかわかりませんが

では次回、会えたら会いましょう

58 過去を振り返らず未来を見て生きよ(笑)(前書き)

タイトルなんだこれ……思い浮かばなかったからこれにしました

ggd ggd

以上！

#58 過去を振り返らず未来を見て生きよ(笑)

11月6日、朝。神崎家

いつものようにいつものメンバーが揃う……ハズだった。今日は珍しく穹がいると言うこともあるのだが……今日に限っては闖入者がやって来ている。闖入と言ってもちろんと玄関から入ってきてくれたのはいい

時間は大体30分くらい前に遡る

「一番乗りー！」

「何が一番乗りだよ……朝早くから受け入れる俺の身になれ」

事が起こるその大体10分前。玄関のインターホンがなったので渋々出てみると、そこには笑顔で制服姿で立つクラスメイト、バカ健太が立っていた。コイツの言ってることは全く間違ってる。誰も来ていないので一番乗りだ。だからどうした

「んじゃお邪魔しまーす」

そしてお構いなく上がってくる。そして何事もなかったかの様にリビングへ。そして椅子へと腰掛ける。俺にとっては受け入れるのすら大変だというのに、毎朝食事まで出しちゃってる母さんにとっては楽しくて仕方がないらしい。本日のメニューは目玉焼きとトーストになっております。トーストに目玉焼きと調味料を掛けてお召し上がりください、だそうです

が、まだ全員揃っているわけでもないのでメニューは品だしされ

ない。全員揃ってから出すのだろう。冷めるし

「いやあ……冷えるな朝はしかし」

「品詞の順番バラバラだろ……」

「ま、真箏が品詞なんて言葉を使ってる……だとッ……？」

「いや普通だから」

なんてくだらない会話をしている間にも次のインターホンがなる。座ったばかりだというのに再び立ち上がり、1人玄関へ いや、健太もついてきた。そして扉を開けると息を切らして膝に手を当てている琉華の姿が。相当な距離を走ってきたらしい。とりあえず声を掛けて中へと上がらせる

「大丈夫か本当に……ほら水」

「あ、ありがとね真箏くん……んっ……ふう。しかし佐々木くんが先に来ていたか……」

「はっはっは残念だったな藤堂よ。お主が来る前に真箏のハートは奪っておいた」

「やめろ気持ち悪い」

健太の冗談に3人で笑う。しかしその直後、琉華は顔を伏せて何か念仏を唱えるかのように何かを呟きだした。小さすぎて聞こえないが

暗くなってるなー、と思いきや再び顔を上げていつもの表情に。

何かがおかしい

「その……ね……まだ誰もいなかったら話そうと思ってたんだけど……ちよっと学校着いたらボクについてきてくれない？」

と、琉華にいきなり尋ねられる。もちろん断る理由も何も無いの

でOKとだけ返す。健太に聞かれたらいけない用事って……一体なんだろうか。とりあえずその時を待とう

「なるほど……藤堂も決心したと」

「いや、今回はまた別件。……後で佐々木くんにも話すから」

「だったら今教えてくれればいいものの」

「ちよつと特殊な用事だからね……バラバラに話したいと言っか……って」

「今度は誰だ？」

ちよつと立ち上がっていたのでそのまま玄関へと向かう。今度もまた健太もついてきて、更にはコップを持ったまま琉華もやってくる。玄関を開けるとそこには3人の生徒の姿が。と言っても1人だけは他校の生徒の幼馴染みだったりする。珍しい。残りは光久と望の2人だ。この組み合わせ自体も珍しい
3人を無言で家上げる。代わりに後ろの2人が接客をしてくれた、が穹は不服なようで、1発チヨップを決められた

「……で、なんで穹がいるんだよ」

3人を座らせるとすぐに俺からの質問

「幼馴染みのわたしが居てはいけないのか」

「違う学校なんだから先に行け……」

「ケチー」

「ケチじゃありません」

まあ確かに人数が増えると楽しいには楽しいんだが……穹は別の学校、更には別の学区になるため、登校時間の差が少しある。俺たちと一緒に時間で間に合うのかどうか本当に気になるところだ。

しかし全く問題の無い様子

穹に関してわかったところで、そこで温かいお茶を飲んでいる光久と、寝不足なのか、船を漕いでいる。望に対しては可哀想なので、光久に質問することにした

「光久と望は……珍しいな」

「む？ ああ、道中一緒になったのでな。それで一緒に来ただけだ」
「ほう」

まあ一番わかりやすい理由だった。それ以上に聞くことも何もない

(……危なかった)

「琉華？ 何か言ったか？」

「あ、ううん。別に」

一瞬琉華が何かを呟いたような気がしたのは気のせいだろうか。

とりあえず光久と共に、こちらは水を飲む。その直後、再びインターホンがなったので、立ち上がって玄関へと向かう。今度は誰も一緒に来ることなく、1人でメンバーを迎え入れる。何となく予想は出来ていたが、エルフィと明日香の2人が寒そうにしながら立っていた。このまま反応を見るのも悪くないと思っただけど流石に可哀想なので部屋に招き入れる。そしていつの間にか用意されていたココアに口を付けていた

「ああ……生き返ります」

「悪いな真摯」

「俺じゃなくて母さんに言えよ……」

その言葉で2人が母さんに礼を言う。これでいつものメンバーが全員揃ったわけだ。後は朝食を食べて学校に向かう、それだけだ

「はい朝ご飯出来たわよー」

と、キッチンにいる母さんから朝食完成の合図が係り、（穹を除いた）女子4名が同時に動く。そして4人が2人分のトーストと目玉焼きを持ってこちらへと向かってくる。とりあえず穹は女子なんだから皆のことは見習いなさい。とはいえこうやって寛ぎきってる俺たち男子も例外じゃないが……本日は眠そうにしている望から料理を渡される。何故か毎日違うメンバーが渡してくれる。理由はわからない

全員のところ朝食が並び、食事を開始する。その時だった

ピンポーン

とインターホンが鳴る。全員揃っているのに誰だとざわめき出す一同。不審に思いながら母さんが1人玄関へと向かっていった

「誰ですかね」

「さあ。ご近所さんだろ。それが穹んちか」

「ああ、可能性はあるね。別に用件ない気がするんだけどなあ……

…それにわたしに頼めば済むことだし」

「それもそうだな……まあとりあえず食事に集中するか」

その話題もひとまず置いておき、食事を再開した

その5分後

「……なんか遅くないか。5分以上話すことって……」

1人玄関に向かった母さんはまだ戻らずにいた。その間にも男子

一同は朝食を食べ終わってしまい、それぞれ飲み物を飲んだり（俺と光久）ソファに座って親父と一緒にテレビを見てたりした（健太）。流石に親父も不安になってきたそうだ。

「誘拐なんてパターン？」

「おい琉華、流石にそれは無いだろう……お義母さんが攫われたなんてなったら私は……」

「何言ってるんだお前ら。アレが誘拐されるなんてありえないだろ」

不吉な事を言わないで欲しい。一瞬想像しちゃったじゃないか

しかし流石の俺でもそんな予想は立ててみた。誰かに恨まれることなどはしているようには思えない性格だし、何より何をしているのかがわからない。家族とはいえない謎の多い人物（親父もだけど）と言えなくもない。でもバイクで事故つても死なない人間だし……その辺に関しては護身術とか身につけてそうだし大丈夫……だよな

『 ですよね！ あははは！ 』

……笑い声？

「……無事そう」

トーストと目玉焼きを同時にかじりながら望が呟く。口の中に食べ物を入れたまま喋らないと何度言ったことか……ってそうじゃない。確かに今俺の耳でも母さんの笑い声は聞こえてきた。となると今現在母さんは誰かと話しているということになる。絞られるのはご近所さんとかそんな感じだろうから問題はないはずだ

「話してるにしてはおかしくない？」

「ん、何が」

全員が納得していたところに穹が牛乳を飲みながら呟く。どういうことだ、と尋ねてみる

「だってまだこの時間だよ？　こつ交流ってこの地区だと遅くても8時半くらいからじゃん」

「言われてみれば……たまたまとか？」

「ええ〜……今まだ7時ちょっと前だよ？」

「だよなあ……」

穹に改めてそう言われて思い返してみる。穹の言うとおり、俺たちの住むこの住宅街というか、この地区。ご近所間交流はかなり良好で、毎日何時でも世間話が耐えなく続いていたりする。とはいえ時間としては8時30分くらいから遅くて6時くらいまで。大体そのくらいが世間話の続く時間と云っていい。それなのにいつもの時間をかなり上回る7時。この時間帯で話があるなんてかなり珍しい俺も今まで済んできてこの事例は初めてだ。穹も経験がないらしい。その事を全員に説明すると、驚いたような表情をしながら不安を抱いていた。驚きの半分はこの地区の交流についてらしいが

「……それじゃあちよつと俺が見てこよう」

「親父……ああ、任せる」

そして親父がリビングから出て行った。残ったのが高校生8人になる

長い沈黙状態が続く。続いたからこそ

『あはははー！』

……親父の笑い声も疑問に思えた。親父の反応にもうどうしたら

いいのかわからない高校生一同。現在時刻は7時3分
意を決心した

「……ちよい確認するか」

1人席を立ち上がりリビングの出口へ。ここから玄関が確認できるわけではないが、大声で尋ねれば聞こえて反応してくれるだろう。直接玄関に行くわけではないと説明し、大きく息を吸って発声準備につく。風邪を引いてるわけでもないし声は普通に出てくれるだろう

「おい母さん！ 何やってんの！ 誰と話してんの！？ 親父も！」

必要最低限の事だけを言葉に出してみる。するとあちらでのギャギャは一旦止まったらしく、家の中がもの凄い静かになる。そしてその数秒後、母さんが角から顔を出す

「ごめんね真筈、ちよっとお話が楽しくて……ちよっと来なさい。

エルフィンちゃんにも来るように伝えて、お客さんだつて」

「エルフィンに客？」

「わっ、わたしですか！？ なんで家じゃなくてここだつていうのが……まあいいです」

俺とエルフィンが母さんに呼ばれたことを皆に説明し、2人で玄関へと向かう。エルフィンに客なら普通は本人の自宅に向かうはずだ。それなのにこの家にいることがわかっていふことは、何かしらの事情があつてのことか、それとも悪い予想だとストーリーキングをされたか……その本人に会ってみない限りわからないが、悪くないことであることを祈ろう

玄関に出るための曲がり角を曲がる。するとそこには

「なんでここにいるんですかあつ!？」
「失敬な。ご挨拶よご・あ・い・さ・つ・」

エルフィの母親である新町早苗さんが笑顔で手を振ってくれた

そして話は今に繋がる

あの後母さんと親父が「寒いでしょうから」と言っただけでリビングに上げ、大人はテーブルで、高校生はソファで雑談をすることになった。なんでも来た理由は両親への挨拶（理由は不明）だそうで、朝家を出たエルフィの後ろ、100mくらい後ろをつけてきたらしい。エルフィ本人も何者かにつけられているのに気がついていたらしく、不安に思ったエルフィは明日香と途中で合流させて貰ったらしく、それで我が家に来たらしい。とりあえず悪い予想が的中、身内のストーキングでした。身内だからまだセーフだが

「ま お母様も今挨拶に来なくても……って何佐々木さん笑ってるんですか」

「今『ママ』って言いかけた……ぶふっ」

「ちよつとまだそれツボなんですか!？ いい加減にしないと怒りますよ!？」

「怒ってる怒ってる……ママ……くっ……駄目だ僕……」

「佐々木さんっ!！」

どうしても自分が「ママ」と呼んでいることが恥ずかしいらしく、赤面しながら泣き目で怒るエルフィ。大丈夫、癖と言う物は中々抜けない物だというのは皆が知っている。だからその程度で恥ずかしがることはない、って伝えようとしたけど、言っても怒られそうなのがしたので心の中に留めておく。まあ呼び方なんて人それぞれなんだから気にしなくてもいいと思う

テーブルの所では賑やかに大人のお話が進んでいる。どうも俺とエルフィについての話がメインらしい。さつきからその2人の名前がメインに出てくるのだが……何を話しているんだ。エルフィ以外の女子は怖いし……なんなんだ

とりあえずテーブルから移動してきたコップに注がれていた牛乳を飲む。冷たくて美味しい

『もういつそのこと5人を受け入れるのも有りかなーって我が家では思ってるんですけどね！』

『あ、それ面白いかもしれないですね！ 日本もなんで一夫多妻制にしなかったんですかねー。そうすればみんなが幸せハッピーになれるんですけどねー！』

『そこは今後の課題ですね……』

『あははははは！！』『』『』

……本当に何を話してるんだろう。日本の法律とかそっち関連の話も持ち出すのかあの人たちは……

「まさかエルがそんな強行手段に出るとは思ってたよ……」

「そつだな琉華……私ですら予想してなかった。卑怯だな」

「……抜け駆けするい」

「わたしはもう交流が濃すぎてアレだ。そんな会話になるはいいも本人がコレじゃあ……」

「……はああ……」「」「」

「人聞き悪いですね……ストーキングされたって言ったじゃないですか……」

「というかお前ら何言ってるんだ……」

「お前が言つなお前が」

「健太殿の言うとおりだ真箏殿」

「……なんかごめんなさい」

もうこの人たちの言っていることもよくわからなくなってきた
……牛乳は美味しいな

『あ、そうでしたそうでした。1つ気になることがあって……真筆
くん、ちょっと聞きたいことがあるんだけどー』

すると後ろから不意に早苗さんに声を掛けられる。牛乳を飲んで
いた途中なので、飲み込みながら後ろを振り返る。すると疑問詞を
頭の上に浮かべながらとんでもない質問をかましてくれた

「^{エルフィ}娘とキスしたって本当？」

「ごぼおっ！！」「ぶっ！！」「ごぼっ、ごぼっ！！」

回想

「お、おい……」

「本当にありがとうございました……神崎さんのおかげでお父様と
も仲直りできました……」

「あ、ああ……それなら良かったな」

「はい……だから……いくらお礼を言っても足りないのです、わたし
なりのお礼の仕方……満足していただけますか……？」

エルフィがゆっくりと顔を上げる。そこには顔を真っ赤にしてこ
ちらを見る姿が。何故だか見た瞬間に鼓動が早まった気がする。い
や、加速し続けている。エルフィの心拍数が自分の胸に直接伝わる。
自分の心拍数がエルフィに直接伝わる

そして、エルフィの考えている事が自分に伝わってきたような気
がした

「これがわたしからのお礼です……」

エルフィが目を閉じて顔を近寄せてくる。駄目だ、未だに心拍数が加速してる。止まりそうにないこの鼓動、絶対に伝わってる。は、死ぬのかな俺

無意識の内に自分の手が女の子の肩を掴んで目を閉じていた。無意識に、身体が勝手に動く。そして自分の顔も近寄せ始めていた

「神崎さん……」

「エルフィ……」

まだ飲み切れてなかった牛乳を一気に吹きだし、ソファの上を白く染めた。ああ嫌らしい色……って違う。何を言ってくれてるんだあの人は!!

エルフィもまたその言葉に驚いたようで、口の中に何も無かったは良い物の、呼吸のミスで大きな席をしていた。そして周囲の顔が驚いたような表情に代わり、一瞬して視線が俺とエルフィの2人に向く

「まっ、ままままママ!? 何言ってるの!?!」

あ、焦りのせいかママ呼びに……じゃなくて

「いきなりなんて質問かますんですか!」

「いやだって時雨にそう聞いたから」

ふむ、あの執事さんか………なんという誤情報を。なんていう誤解を与えて……

……あの出来事を思い出すと再び身体と頬が熱くなってくる。時

雨さんに目を覚まさせられてセーフだったとはいえ……

ちなみにあの後、1日だけエルフィとは気まずくなってしまう、このことは無かったことにしようという事で話がついていた。それなのに今ここでその話をされるとは思ってもいなかった

「……………そ、それってマジ？ 真箏ー」

「落ちて着け健太……………説明は後ですからまずは早苗さんの誤解を解かさせてくれ……………」

そう言いながら俺は早苗さんの方に向かう

「いやぁ……………ちゃんと話を聞けば、「少し遅かったです、妨害に成こ……………」って教えてくれてさ。つまりはそういう……………」

時雨さんの言葉が途中で途切れているのが気になるんですが

「えっと……………それは誤解で……………」

「……………真箏、ただで済むと思ってるの？」

「ひっ……………」

「……………そうだなぁ……………剣山で2階から目薬……………ここでもしてみる？」

真箏くん……………」

「……………それだと駄目だ琉華。そこは濃硫酸をかけてやらないとなぁ

……………真箏？」

「…………………………死を覚悟して欲しい……………」

「……………それは誤解です。危ないところで時雨さんに攻撃されて我に返りました。その時意識が完全に飛んでました。エルフィを汚そうとしてすいませんでした。お詫びします……………」

「んじゃ今……………」

「冗談はよしてください……………」

もう俺はいつ殺されるかわからない。硫酸を目薬に使うのかあ……さぞかし痛いんだろうなあ……失明するのかな、俺……セーフだったっていうのに何を怒ってるんだろう、女の子達……

「それじゃあ私とがいいか！」

「本当にやめてください。エルフィもお前何期待の視線送ってるんだよ……」

大人の本気の目と、泣き目で送られてくる本気の目と、殺意を感じ取れる4つの本気の目が非常に怖いです。他の男子の皆さんはテレビを見えています。助けてください。助けられません

「まあ冗談も置いておいて……いけないでいいの？ 間に合わなくなるんじゃない？」

「……そこまで言うておいて最後それですか……まあいいか。ほらみんな行くから準備……をだ……頼むから止めてくれ。怖い」

死を覚悟で視線を送ってもらうのを止めて貰う。そして各々荷物準備をしだし、玄関へと向かおうとする。俺とエルフィだけリビングに残り、とりあえず早苗さんの行動の方針について質問。しばらく話をしたら帰るらしい。それなら大丈夫だろうと遅れてみんなについていく

「……セーフだったとはいえ、エルフィには本当に悪いことしたな……後で何か奢ってやろう……」

午前の授業も無事終わって昼休み。もう屋上で食べるのは寒

いと言うことで、これからしばらくは教室で食べることになってから約2週間。今日は2組の教室で食べると言うことになり、移動する直前の事だった

「ん、メール？」

「彼女？」

「いないから……琉華か」

送信時間は20分前。どうやら授業の最中に送ってきたらしい。授業中は基本電源を切っているために気がつかなかった。気がつけるはずがなかった。内容を確認してみる

『2組に行く前に1人で昇降口来てほしいかな』
大丈夫、攻撃とかしないから』

最後の文面が非常に不安なのですが。まあ攻撃されないと言うことを信じて行くのなら……

「ふむ。そういうことか」

「この内容でわかるのかお前は」

「……なんとなく。まあ事情は説明しておくから行ってこいよ。僕とエルぽんで先に行ってるから」

「じゃあ……悪いな、行ってくる」

そして1人昇降口へと向かう。話って一体何だろう……

昇降口に着いた。何処に本人がいるかを確認していると、5組の下駄箱のあるところから1つの手がこちらに向けて招く動きをしていた。多分琉華に違いないと思いつながら近づいていくと、急に腕を掴まれてそちらに引っ張られる

そして目の前にいる琉華が下駄箱の角から顔を出して誰かが居ないかどうかを確認しているような動作をする

「……何してるんだよ」

（しっ、静かに！……誰にもつけられてないよね……？）

（あ、ああ……それにしても何故小声？）

（ま、まあそれなら今から話すけど……）

下駄箱の少し奥へと移動する。誰もいないから大丈夫だとは思うが……

琉華の口が開かれる

「いや、呼んだのは理由は他でもないんだけどさ……実は明後日望の誕生日なんだよね」

「……ほ？」

意外な話に少し驚いた。てっきり今朝の話をするものばかりかと思っていたが、誕生日という言葉に目が点になる。その反応を見た琉華が、やっぱりね、と呟く。いや、当然今初めて知ったんだからその反応されるのが当然なんです……

というより何故こんな面倒な方法で話しているんだろう。とりあえず尋ねてみる

「いや、その……望の前でこんな話するのもアレだし、メールとか出来なかったのもたまに中身見られるからそれを警戒して……まあ本題入るけどさ。誕生日プレゼントどうする？　って話なんだけど」

「プレゼント……ねえ……」

「うん。このことはもう男子以外のメンバー……エル、明日香、穹には話したんだけど、みんなアクセサリーがいいんじゃないかって

話になつてるんだよね。真筆くんはどう？」

「……そうだな」

琉華にそう尋ねられて少し考える。今年の穹はサプライズと言うことでみんなで金を出して買ったわけだが……いや、望もそうなるのか。とはいえあの時はエルファイが気付いていたからこそ買った品物だ。今回はそういう事になるわけがない。って話がずれている。アクセサリーか……まあ女子なんだしそれが一番いいんだろうか……というかそれ以外思い浮かばない

「……うん、アクセサリーがいいと思う」

「やっぱそうだよねえ……まあ望も前に「……これ欲しいな」って言ってる物があったしなあ……うん、残りの男子にも説明してそれを購入しよう。ごめんねこれだけの話のために呼び出して」

「まあいいんじゃないか？ 望も喜ぶだろう」

「あはは……ボクの場合は言いそびれたんだけどね」

「……あつたなそんな話が。来年は今年の方も含めて何か送るか、みんなだ」

「ごめん……気を遣わせた訳じゃないんだけどね……って違う。早く行かないとみんなに怪しまれるし行こうか」

「だな」

話し合いも済んだところでその場を移動しようとする。が、琉華が何かを思い出したらしく、歩き始めた足をピタッと止めてこちらを半目で振り返る。なんだか嫌な予感がする

「……今朝の話の事情説明がまだなんだけど」

嫌な予感が的中しました。弁当の時に聞かれそうだったけど、今先に説明しておいた方かもしれない……また説明するのが面倒

だけど

「いや、あれは時雨さんの見間違いというか……大丈夫だ。俺とエルフィはその……き、キスなんかしてない」

「……本当？」

「……本当です……」

その半目で睨まないでください。本当に怖いです。最近のwar s部の女子が怖い気がするのは俺だけだろうか。後で健太と光久にも聞いてみよう

「そっか。ボクたちの早とちり的な何かだったんだ……ふう」

「こつちこそ誤解させる様な真似をして悪かった……エルフィにも悪いことをしたと思ってる」

「……それってどういう意味かな？」

「え？ もちろんあんな事をしそうになっただって意味だけど……」

「……してあげないで悪かったのかと思っただよ……全く」

「え？」

「なっ、何でもない……」

何かを呟いたような気がするのには気のせいか……

琉華があちらを向き、1歩足を出す。歩き出すのかと思いきや、再びそこで止まり、こちらを振り返る。そして笑顔になって口を開いた

「真筆くん、女子に誤解させるような真似をするのは良くないぞ？」

「……すみませんでした」

謝ると琉華は「よろしい」と言って再び前を向く。そして先に行つてると言いながら2組の教室へと走っていった。俺もそれについ

ていく。腹が減ってしょうがない

しかし……明後日か。11月8日……

何か引つかかるんだよな……

神崎宅……神崎家、エストラント家による雑談（昼12時。メン
バー神崎母・エルフィ母）

「あら、それじゃあ真筆がエルフィちゃんの初めての男友達だった
んですねえ」

「そうですねえ。あの子ったら入学式当日、「初めて男の子に
話しかけられて緊張した」って泣きながら報告しに来てくれたんで
すよ。それでなんだか好きになっちゃったみたいで……青春です
よねえ！」

「本当にそうよねえ！ ああ……懐かしいわあ……あの頃の思い出
が……」

「本当ねえ……」

「……」

「……」

「第四次世界大戦、その最中でしたけど」

「ええ。あの時に今の夫と出会いました。たまたま日本に遊びに来
ていたんですよあの人ったら」

「そうですね……私の方もそんな感じでしたね。……」

「……どうかなされましたか？」

「いえ……あの頃の日々を思い出すとどうしても鳥肌が……どうし
ても血の色を思い出してしまっ……」

「え……」

「聞いたことくらいはあるんじゃないですか？ 《戦場を駆ける戦

乙女』の名前を」

「……………え、ええ……………あの、まさか」

「ふふ……………こんな事を話すつもりはありませんでしたけど……………その血は娘に引き継がれてしまったそうです。悲しいですね」

「娘……………その方には娘さんがおられるんですか……………余程凶暴に育っちゃったんですかね？」

「いえ、得物を取った時に血が騒ぐとか。おかげさまでWarsでは目立つちゃって……………」

「そうなんですか……………大変そうですね……………そのご家庭も……………」

「ですね……………最近考えたくもない想像をしているとか」

「考えたくない想像？」

「詳しいことはわからないそうですけどね」

「へえ……………その方についてお詳しいんですね」

「ただの風の噂ですが、ね……………」

「そうですか……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あ、そういえば……………」

「どうかしたんですか？」

「これをご覧になってください」

「これは……………あら可愛い！！……………これってもしかしなくてもエルフィちゃんの写真！？」

「はいそうですねですよ！……………この子がまだ両足で立つ前の写真で……………」

……………あ、こっちが初めて立ったときの写真なんですよ！」

「まあ可愛い！……………ああ、雫と真箏にもこんな時代があったのになあ……………」

「……………」

「ですよねえ……………時が流れるのは早いですよねえ……………」

「ええ本当に……………ああこうしちゃいられない！……………私も真箏のアルバムを……………」

「いえいえお構いなく。こっちは好きで見せているだけなので……」

「そんな事仰らずに！ 今すぐお見せしますから少々お待ちを！」

「ああ……」

『真筆の古き日々は何処へー！？』

「……《戦場の戦乙女》高本静葉……亡くなっただって聞いてたけどまさかこんな身近な人物だったなんて……これはこれで驚きだわ」

『真筆ー！ー！』

「それにしても……真筆くんの小さい頃の写真が楽しみねえ……！
！」

#58 過去を振り返らず未来を見て生きよ(笑)(後書き)

はい最後気にしない。別にどうでもいい設定ゆえ、ほとんど物語に繋がらない……とは思う。現段階では。こつやって自滅していくんだね

え
そしてお母様の名前、ついに発覚。神崎静葉でした。今作りまし

ついでにお父さんの名前も作りました。神崎剛つよじになりました。わー
……ごめんなさい。こんな作者です

気付いた方はいるかどうかわかりませんが
なんていうの？ ランキングタグ？ に、1つ項目追加
我がマイページの活動報告です

知っている人が多いのか少ないのかは知りません。が
……本編では書かない情報とかもあるらしい、ぜ？ 黙
内容は見たほうがいいけどね！ 黙
なんだこの宣伝。くたばれ自分ww

……感想待ってるz(殴) キャラ崩壊乙w

#59 7人の訪問客（前書き）

気付いたら10万アクセス超えていました（11月9日23時30分現在・100219アクセス、8202ユニーク）

なんだかありがとうございます……こんな作品を読んでくださっている皆様には感謝しか出来ません

とりあえず8章3話目……やっと出てきます

では……ggggですがどうぞ

59 7人の訪問客

「いやあ……久々に来たなあ……」

「お前は1ヶ月前に体育祭来てたんたる……何処が久々だよ」

「何を言っているのだい君は。1ヶ月でもかなり懐かしい物だよ？」

「はいはい……ケンジ、今何時間目？」

「6時間目……終わったら行けると思うよ？」

「あの部室にも久々に顔出すのかあ……そう思うとなんだか懐かしく思えるね。どうよ華は」

「だよねえ。隼ちゃんは？」

「部室の場所は変わってる。前と同じような感情は抱けない」

「おうおう相変わらずのクールな口調で……」

「幸司は明るいけどね」

「まあそれが俺の生き方というかなんというか。雫も相変わらずだけどな」

「いやいや。隼人いじめれば楽しい以外の何物でも……」

「頼むから俺の身になってくれ……」

「断る！」

「ケンジ。なんか新しい発明品は無いか？ 例えば人一人一撃で黙らせられるような」

「あるにはあるんじゃない？ まあオススメしないけどね？」

「ケンジさんの発明ってたまに恐ろしい物があるよね」

「……思い返すな華。泣きたくなる」

「人格交換機構だね？ まああれは廃品になったらしいけど？」

「あの発明はなかなか凄かったね……特に雫と隼人が」

「だから思い返すな楓……泣くぞ」

「おう泣け！」

「雫は黙れ」

「それはともかく、こんなところで立ち話はやめない？ 早く職員室に向かわないの？」

「ケンジの言うとおりだな隼人」

「何で俺に振るんだ幸司」

「なんとなく」

「なんとなくやめい」

「ほら行きたまへ隼人」

「黙れ雫。……じゃあ行くか」

「光久はどうしてつかねえ」

「真箏もどうなってるかなあ……」

「後輩達はどんな実力の持ち主なんだかねえ」

「くしゅん！」

「神崎さん？」

「……風邪ひいたかな……」

11月8日、6時間目。一瞬のそのくしゃみという出来事によって全ての視線がこちらに……ただのくしゃみでそういうのは止めて貰いたい。まあ風邪をひいたと言うよりは誰かに噂されたというのが合っているかもしれない。……自意識過剰か

落としてしまったペンを再び右手に持ち、黒板に書かれている内容をノートに纏めていく。なんだ、いつもと変わらないぞ。変わっている気が全然しないぞ

「じゃあこの問題を……目高」

先生が目高さんを指名する声が聞こえてきた。最近の数学が難しすぎてついに行けないとか言っている割には今の問題をスラスラ解いていくのは何故だ。俺も出来ない問題だ。健太はどうだか知らない。ちなみに健太は教卓前の席で絶賛爆睡中だったりする……何故かもう一度くしゃみが出る。更に少し寒気がした。これは風邪なのかもしれない。誰にも聞かれないような小さな溜め息をつく。ここで一昨日のことについて思い返してしまった

回想・11月6日、帰宅

「ただい」

『あははは！！』

「……………」

リビングから聞こえた笑い声を聞いて携帯電話を取り出す。そしてエルフィの番号を開いて通話ボタンを押す。呼び出し音が聞こえてから3秒、エルフィの声が聞こえてくる

『い、一体どうしたんですか神崎さん？』

「……………今から家に来てくれないか。頼みたいことがある」

『い、今からあつ！？ え、えつとその……………つまり……………』

「悪い。来てくれたら事情を説明したい」

『あ……………はっ、はいっ！！ 全力で行かせていただきます！』

そして通話が切れる。もちろん「ツーツー」と言う音しか聞こえてこない。携帯電話を閉じて再びポケットへとしまふ。……………まだ話していたのか、あの2人……………

それにしても外は寒い。でも中で待つのも嫌なので外で待つこと

にしよう

そして数分後、エルファイがやってくる。外に出ていることに驚いたのか、はたまた中にまだいることに気がついたのか、そんな表情で小走りでこつちに向かってくる。もうこの時間帯だとかなりくらののでよくわからないけど、エルファイの顔はもの凄い真っ赤になっ
ていた。本当、林檎みたいだと言っても過言ではなく……まあ走り
すぎて疲れたんだろう。息も上げてるし

寒い中にとずっと立たせていても可哀想なのでとりあえず玄関を

「えっ、も、もうですか!？　そ、その……心の準備が……」

玄関を開けるとエルファイが意味不明な言葉を口にした。そういえばまだ事情の説明がまだだった。とりあえず説明しようと思っただけ
ど、まずはエルファイが考えていることを聞き出してみたくなっ
てしまった

「……エルファイ、お前は何を考えている？」

「え……?　か、神崎さんわたしにそんな恥ずかしい言葉を言わせ
るんですか!？」

「……多分俺とお前の考えていた事は180度違うと思うんだ」

「えっと……え?　つ、つまりその……おっ、大人の階段を上ると
かそういうんじゃないんですか?」

「ああ。全くもって」

「じゃ、じゃあなんでこの時間にわたしを……!」

「まあ……入ればわかる」

エルファイの考えていたことをぼんやりと考えながら……じゃなく
て、中に入ったら温かい飲み物を飲もうと考えながら再び玄関の扉
を開ける。どうやらまだ話し込んでいるらしく、リビングの方から

は未だに話し声が聞こえてきた。それにはエルフィも気がついたらしく、大きな溜め息を吐きながらボソボソと俺には聞こえないような声で何かを呟いていた

2人で玄関に入り、ゆっくりと扉を閉める。そして何故か2人に気付かれないよう足音を立てずにリビングへと向かう。扉の前で耳を澄ましてみると、2人の楽しそうな声が聞こえてきた。どうやら俺とエルフィのことについて話しているらしい

(特攻するんですか?)

背中の上に乗っているエルフィがそう尋ねてくる

(そうだな……少し様子を窺ってからだな)

中で行われている話に耳を傾ける

『ほらこの写真！ 真筆が布団に世界地図を作ったときの』

……今もの凄く聞き捨てならない言葉を聞いた気がした

(神崎さんの子供の頃の写真……)

(お前も目を輝かせるな……)

幼い頃の写真ほど見られたくない物はない。とはいえ卒業アルバムだけは見られたが

続いて早苗さんが鞆の中から1枚の写真を取り出す

『あら！ それじゃあこっちも……エルフィが布団にせか
「ストーーーーーッブ！……！」』

布団にせか……なんだつたんだろう

エルフィが早苗さんの言おうとした言葉を遮ってリビングの扉を開け、もの凄い速さでその手に持たれていた1枚の写真を奪い取る。そして急いで2人から距離を取ってその写真を確認　耳たぶまで真っ赤にしていた。まるで林檎……いや、さくらんぼのようだ

エルフィが先につ込んでしまったので、俺もゆっくりと立ち上がってリビングの中へ。2人は何が起こったのかわからないと言ったような表情をしていた。が、すぐに理解したそうで、2人でおかえりと迎えてくれる。返事はしたが、エルフィは黙ったままだ

「何人の写真見せ合ってるんだよ……」

「あらいいじゃない。この住宅街の皆さん1人一枚零と真筆の写真を持つてるくらい」

「何配布してんの!？」

「ご近所さんなんだからいいじゃないの」

「配って良い物と悪い物があるからな!？」

15年と少し生きてきて初めて知った驚きの事実だ。まさか母親が他所様に子供の写真を配布していたとは……この地域だからまだ問題はないが、もし悪用とかされていたときはどうしたんだこの人
落ち着きを取り戻しながら2人に向き直る。エルフィも落ち着いたららしく、早苗さんの後ろに回り込んで鞆の中身を確認していた

「こ、こんなにアルバムを持ってきてたんですか……しかもDVDが20枚も……」

「今日の昼はこれ見て盛り上がったたんですよー」

「もう本当ちっちゃい頃のエルフィちゃんが可愛すぎて……その……焼き増しして貰っちゃった」

「本当ですか!？」

「何やってるんですか……貰って得するのは両親と……今はいない

けど姉貴ぐらいしか……」

「真箏くんは嬉しくないの？」

「えっと……流石に同級生の女子の写真をジロジロ見るのもどうかと……」

「なんだあ……」

「いやそんな反応しないでください！ わたしが一番の被害者ですよ！？」

「まあ交換で真箏くんの写真をたくさん貰ったから大丈夫だって」

「なんだと！？」

「ほっ、本当ですか！？ ああでもこれじゃあ神崎さんにわたしの幼き日々が……」

なんだかややこしいことになってきた。よく考えてみよう

母さんは早苗さんに俺の若かりし頃の写真を渡す

逆に母さんはエルフィの小さい頃の写真を貰う

要するにこれは交換。それなら問題はないが、品的にもの凄い問題がある……！！

「両者今すぐ返品しなさい！ 交換して良い物と悪い物がある！」

「そ、そうですね！ 神崎さんの小さい頃の写真を見られなくなるのは残念ですが、わたしの写真を神崎さんに見せるのだけは勘弁してください！」

「なんだか言うこと間違ってないか！？」

「大丈夫です！ わたしは正論を述べているだけです！」

とんだ正論だ！ それだと被害者は俺だけになってしまっただけな
いか！ というかその正論……ただエルフィの願望を述べているだけだ！
まさかここに来て的が1人追加されるとは……予想していなかったぞ……

溜め息を吐きながら冷静に戻る

「……わかった。エルフィがそう言うのなら俺は俺の写真を諦めよう」
「ふう……そ、それじゃあ」

なら俺も願望とやらを述べさせて貰おうじゃないか

「だがあくまで交換だ！ 我が家はエルフィの幼き頃の写真をいただこう！」

「なっ……！？ ひ、卑怯です！ そうやってその……とにかく！ それだけは勘弁してください！」

「ならばお前も俺の写真を諦めろ！ ならお前の写真は諦めてやるう……う」
「うっ……」

言葉に詰まるエルフィ。いや、ここは普通素直に諦めるところだよな？ 自分の写真が危機になっているのに、他の誰かの写真を優先したいって気持ちがあるっておかしいよな？ なんてこっ……俺が絡むといつもこっなるんだ？

…… 2人で溜め息を吐く

「……諦めましょう」

「……わかってくれればいいんだわかってくれれば」

なんとか交渉という物は成功した。これで俺の写真が同級生に見られるという可能性は低くなったわけだが……後は難攻不落のお母様方が残っている。この2人を攻略しない限り、2人の危機は去らないと言っても過言ではないだろう

そう思っていた

「ほらエルフィちゃん、真筆が4歳の時の写真。ヒーローごっこでやって穹ちゃんと遊んでる時のね」

「ほらほら真筆くん、エルフィが4歳の時の写真。いい笑顔だよね」

そう、思っていた

「……交換、してください………」

今ここに、健全なる高校生2名が、幼き頃の写真にて落城。まさかの写真の交換取引が成立された

……なお、この日俺はこの時だけ自分の心の何処かに潜んでいたロリコン魂に身体を乗っ取られていたらしく、気がつけば何を言っていたんだらうと反省。両家での夕食後写真の鑑賞会が行われたが、理性という物を取り戻して部屋に引きこもることに成功。エルフィも恥ずかしくて先に帰宅（という口実で1人写真の鑑賞をしていたらしい）

自分がわからなくなってきた。琉華にああ言われたばかりなのに

……

「……にしても琉華。プレゼントって用意出来たのか？」

「まあね。昨日ギリギリ買いに行けたよ。後はエルに頼んだケーキが………」

放課後の部室、現在いるメンバーは俺と琉華、そして疲れて倒れ

ている健太とお茶を飲んでいる光久の4人。これから望の誕生日パーティーをやるということでクラッカーを持って待機中。ちなみにエルフィは校門の外でこつちに来るついでにキーキを取りに行ってくれている穹を迎えに、明日香は完全に準備が出来たという報告があるまで望としばらく待機ということになっている。それも長く続きはしないだろうからこつちが合図を出したら来てくれて良いとはなっているが……まあ多分間に合ってくれるとは思う。今琉華が持っているプレゼントは最終的にブローチになったそうだ

この場にいる3人（寝ている健太除く）で大きな欠伸をする。理由はみんな授業疲れだそうだ

「……待つてる間暇だね」

「……ああ。練習しててもいいとは思うけど流石にタイミング的にはアレだよな」

「……だよな」

「……拙者もしばし寝る」

「……うん。用意できたら起こす」

「……かたじけない」

光久がテーブルに突っ伏して睡眠に入る。これで起きているのは2人になった。琉華もなんだか辛いようで、少し首をフラフラ動かしている。辛いなら寝てればいいのに……

「……ゴメン真箏くん……連絡来たら起こして……」

やっぱり無理だったご様子。そのまま勢いよくテーブルに突っ伏し、頭をぶつけて痛がっている様子ではあったがそのまますぐに睡眠モードに突入。これで起きているのがかなり眠い状態である俺だけになってしまったが、ここで寝たらみんなの連絡を聞くことも出来ないし、知らせることも出来なくなるので寝ることは出来ないだ

ろつ。起きていなければ

とは言っても眠い物はしょうがない。段々と瞼が重くなってきて視界がぼやけてくる。寝たら駄目だ寝たら駄目だ寝たら駄目だ……

「はっ！」

思いが通じたのか、タイミング良く目覚ましという名の着信が携帯電話に届く。マナーモードにしてあるから反応は少し遅れたものの、静かな場所なので響く音がいい感じに目を覚まさせる。急いでポケットから取り出して着信主を確認すると、そこには星乃穹の名前が表記されていた。着信ボタンを押す

『聞こえるかい真筆？』

「そんなの聞かなくてもわかるだろ……聞こえてるよ。着いたのか？」

『まあそんなところ。今エルフィにケーキをパスしてちょっと寄り道中。あ、もし遅くなったら先に始めててね』

「ん、いいのか？」

『うん。直接望を祝えないのは残念だけど……まあ、別件では間に合うかな。それじゃあまた後で』

「あ、ああ……？」

直後、携帯から無機質な音が聞こえてくる。会話時間は30秒程度とかなり短い。別件……ねえ。よく学校に来ているからなあ……とうとう怒られる？ いや、校長も受け入れているわけだしそれはないだろうな……まあ穹だし問題はないか

なんて事を考えていると次の着信が届く。今度は明日香からだって、望の傍で大丈夫か？ とりあえず着信ボタンを押してみる

「もしもし」

『あ、ああ。今そつちの状況はどうだ？』

「大丈夫。ケーキも学校に到着したし、そろそろ　「届きました！」　丁度来たな。細かい準備は間に合う。だから少し早めに来てくれても構わない」

『そ、そうか……わかった。それじゃあ今から望とそつちに向かう』
「ああ」

「明日香さん達も急いでくださいね！」
『了解だ』

電話が途切れてさつきと同じ音が聞こえてくる。携帯を閉じてポケットにしまい、エルフィの方を振り返ってみる。その手にはよく見るサイズの箱が持たれていた

とりあえず現在の状況を手短かに説明し、寝ている3人を協力して起こす。起きたばかりで多少呆けてはいたが、すぐに把握したみたいでクラッカーの準備をしていた。ケーキも取り出してロウソクを16本立てておく。火はまだ付けない

「いやあ……なんだか緊張してきたね」

「な、なんででしょうね……そんな緊張するほどの事でも無いんですけどね……」

「健太殿、これはどう使えばいいのだ？」

「えつとな……近藤達が入ってきたらその紐を引っ張れば良いだけだ。ちゃんと入り口に向けてな」

「承知した」

「……来るぞ」

外から小さく足音が聞こえてきた気がしたので、俺がそう呟く。その足音は段々と近づいてきて部室の入り口でストップする。明日香には到着したらノックしてから入るようにと伝えてあるので、それなら他の誰かが来たとしても間違わないような仕組みになってい

る。でも足音は2つ……いや、3つ？ それくらい聞こえてきた。もしかしたら部長も一緒？

色々と予想をしていると、入り口をノックする音が2回部室内に響く。それに反応した5人がクラツカーを構えて扉が開かれるのを待つ。そして

パンッ！

『誕生日おめでとー！！』

「……………びっくりした」

「……………正直アタシもびっくりしたわ……………」

望を先頭に3人の女子生徒が入ってくる。本日主役の望とその付き添いというかなんというかの明日香。そして明日香が引き連れてきたのか、健太が誘って明日香達と一緒に行動していたのである。笹原さんが部室内に入ってくる。今のクラツカーの音に入り口3人が驚いたような表情をしていた。まあしょうがないと思う

3人がそれぞれ席へと座る

「……………なんで私の誕生日を……………って、琉華か紗凧しかいないか」

「……………そういえば紗凧さん何も言っていなかったような……………それに今日は忙しいとかで帰りましたね……………」

そういえば望の幼馴染みであり、エストラント家のメイドをやっている朝比奈さんの存在を忘れていた。2人の言葉に男子一同が「あ……………」と言った表情になる。女子4人はわかっていたようなのでいいが

「……………まさかこんなサプライズがあるとは思ってなかった」

「まあ穹の時と同じだろ。ほら琉華」

「うんそうだね。はい望」

「……これ、欲しかったヤツ……ありがとうみんな」

いつもの口調で望が小さく言う。表情はそこまで変わらない方だから顔だけで判断すると嬉しくないように思えてしまうが、声と目に若干浮かんでいる涙で嬉しいというのはよくわかる。穹の時とい誕生日のサプライズは成功したらしい（穹は自分で知っていたみたいだが）

……って、そういえば穹はどうしたんだろう。間に合わないかもしれないとは言っていたが、本当に間に合っていない。別件なら間に合うとは言っていたな……この後まだサプライズが？ それともケーキ入刀の時に来るってパターンだろうか

考えていても仕方ないので手元にあったライターを手に取りロウソクに火を付けるという許可を取る。そして立てられている16本のロウソクに順番に火を付けていき、外は暗くなってきたはいるが、念のためカーテンを閉めて電気を消す。雰囲気が出た

「それじゃあ歌はわかってると思うけど……穹遅いなあ……何やってるんだろ」

「なんだか遅くなるって言ってたけど……別件ってなんだろうな」

その俺の言葉に望以外のメンバーがビクツと反応しているような気がした。……なんだろ、俺に伝えられていない他の出来事がある気がする

「と、とにかく……穹はしょうがないか。それじゃあ定番ソングを……」

ハッピーバースデートウユー　って感じの歌をこの場にいる全員で歌い出す。なんだろう、小さき頃が懐かしい。多分エルフィ

に渡った写真の中にはこんなシーンの写真も含まれていたに違いない
歌を歌い終わり、望がロウソクの火を吹き消す体勢に入る。16
本なので全てを同時に消すのが難しいかもしれない。ああ、なんだ
か妨害したくなってくるのは何故だろう。よく穹とそんな事をやっ
た思い出が……

「ちょっと待ったああああっ!!」

思い出されている途中で部室の扉が勢いよく開かれる。誰かと思
つて全員でそちらに視線を集中させると、そこにはさつき噂された
人物の穹が何かを片手に入ってきていた。外からの光が眩しい

「……穹遅い」

「ごめんね琉華…… ちょっとこつちも人と会っててね…… とりあえ
ずこれこれ、これに乗せないと駄目でしょ」

「私が乗せる」

「じゃあ明日香任せた」

穹の持っている小さな何かが明日香の手に渡される。そしてそれ
には向きがあるようで、それを確認してから目の前で輝いているケ
ーキのおおよそ中央に飾られる。ああ、何か物足りないと思ってい
たら名前の書かれたプレートか。「誕生日おめでとう! 近藤望 &
amp; 神崎真筆」ね。そうかあ、俺は今日誕生日……ん? 誕生
日…… 11月8日……

パンツ!

本日2度目のクラッカーが鳴り響く。俺と望はその音に驚いて腰
を低くしてしまう。その直後、暗い中みんなの表情を確認してみ
ると、ニコニコ笑顔でその場に立っていた。えーとつまり…… 脳が状

況についていかない

「やっぱり真筈は自分の誕生日を忘れていたか……この幸せ者め！」

「誕生日誕生日……ああ、そういえば今日俺誕生日だったかな。忘れてた、完璧に」

「出ました忘れてた発言！　こういうフラグ作るためにわざとやってんじゃねえの!?!」

「あのなあ……素だ素」

「それはそれで夕チが悪い気がするんですが……」

「ええ十分悪いわね」

「悪すぎるな」

「……なんかすいません」

最近謝つてばかりなのは気のせいだろうか

とりあえずみんなにそう言われて状況の整理がつく。どうやら今日は俺の誕生日と望の誕生日だったらしい。それでクラッカーを鳴らされていてこんな状況になっていると。望は未だに何があったのかわかっていないご様子だ

しかし俺と望が……

「えっ!?!　誕生日一緒だったの!?!」

「今そこにツツコミ入れるの!?!」

思わず遅れてツツコミを入れてしまい、直後穹にツツコミを入れる。いや確かに気がつくのが遅かったですが……意外な事実に驚いた。知り合いと誕生日が一緒なんて現象は初めてだ

「まあ口ウソク消した消した。2人で消せばすぐに消えるでしょ」

「ん、ああそうだな。望、消すぞ?」

望の方を向く

「……………私には知らされて……………」

すると、俯いて聞き取れないくらいの声で何かを呟いていた

「……………望？」

「……………え、何？」

言葉に気付いてくれたのか、顔を上げて驚いたような表情でこちらを見る。いや、驚いて欲しくて呼んだんじゃないんだが……………まあいいか

「ロウソク。火消すぞ」

「……………う、うん。……………わかった」

「……………せーの」

2人で勢いよく息を吹きかけてロウソクの火を消す。2人で十分な風を遅れたので全てのロウソクが消えると思っていた。が、少し足りなかつたらしく1本のロウソクに再び火が灯る。よくある現象だ。こういう場合って譲った方が良いのだろうか

とか考えている内に一瞬の間を見た穹が吹き消してしまう。小さい頃よくやられたものだ。あの頃はこの程度のことですら怒っていたけど、今はもう高校生なので怒るなんて真似はしない

火も消えたところで電気が付く。いきなり明るくなったことで目を細めてしまった

「じゃあケーキ入刀と行くかあ！」

火を消したことで満足の間が勢いよく立ち上がる。その手には

包丁が……って危ない。周りを見て振りかざしなさい。穹が人数を数え始める。この場に居るメンバーは9人。このケーキのサイズだと結構小さくなることに……って

「おい穹、何指まで使って数えてるんだ」

「いや……ちよつと……えつと……9、7、2……18等分」

「ちっさ！」

「どうしてそんな数になるんですか!？」

「どうしてもこうしても……まあそろそろいいか。西宮せんぱい？ 寒いでしょうから入っちゃっていいですよー」

その声と同時に再び扉が開かれる。そこには寒そうにしながら立っている部長と、ワイシャツ姿で平然としている先生の姿が。いや、確かにあの姿を見ていると寒いのはわかるが……まさか夏と冬で服装が逆転するなんて誰が思ったことか。非常に困るし不健全だ。2人が入ってくる。扉は開いたままだが

「ったく……頼むから早く入れさせてくれ……」

「すみません。まあサプライズは後で取っておくのが楽しみじゃないですかあ」

「くそっ……なんでこのタイミングで……まあいい。コイツらには良い薬になるだろうしな」

『へ？』

全員でその言葉に反応した直後、なんだか寒気を感じ取った。部屋の外からその感じが漂ってくる。なんとというか懐かしい……そんな感じの……というかこの感じはよく知っている人物の物だ。間違いないと思う。そして傍では光久も驚いたような表情をしている。おそらく何かを感じ取ったのかもしれない。とはいえ何故だろう……

その答えはすぐ明らかになった

「我が弟よおー！ーっ！！」

外からそんな聞き慣れた声が聞こえた気がした。今の声は間違いない……

「会いたかったぞおー！ーっ！！」

「やっぱり姉貴かあああつ！！」

その声と同時に外から1人の女性　姉である神崎雫がもの凄い勢いで入ってくる。抱きつかれかけたので急いで右手を出し、相手の頭にアイアンクローを……

……仕返された

「いやあ会いたかったぞ真筆　元気にしてた？」

「ああ元気にしてたぞ……そっちも元気だったか？」

「おかげさまでねえ。穹も元気そうで良かったよ」

「ホント久しぶりだねお姉ちゃん。あれ、何年ぶり？」

「3年ぶり」

「もうそんな時間が経ったのかあ……早いよね」

「ね」

盛り上がっているのはいいんですがそろそろお手をお離してください
お姉様。なんだか頭蓋が陥没しそうな気がします

穹がケーキを切っているのを右に、姉貴に続いてきたのか6人の人たちが部室内に入ってくる。誰も見たことが……いや、テレビや新聞などで見た気がする……いや、見た。もしかしなくてもそうだ。姉貴がいるこの7人って事は……

「姉上……」

「幸司さん!？」

「なんだお前ら、知り合いだったのか」

「どうやら光久と健太の知り合いも混ざっていたらしい。いや、そこはどうでもいいんだけど……」

「この人物達7人……」

「Wars初代全国優勝チームのメンバーだ」

#59 7人の訪問客（後書き）

お疲れ様でした

なんだかんだで1日で2話更新できたので安心しました……ふう
出てきましたね、初代全国優勝チームw 設定だともっさ強いです
次回、戦闘入ります。もちろん負けゲーみたいなものですがね
ネ
タバレ

いや、負けゲーでもしょうがないです。そういう設定ですから
それではまた次回。今度は20万アクセスを目標に頑張ります！

#60 圧倒的実力の差(前書き)

……久々の戦闘回、かなり酷いです。素晴らしいです、酷いです

戦闘回 かなり酷いです 酷いです

素晴らしいです 酷いです あんだーすたんど

……短歌のセンスはございません。すいませんでしたorz
まあ g d g d な戦闘回ですが……どうぞ

#60 圧倒的実力の差

テーブルの上に18等分されたケーキがそれぞれの目の前に並んでいる。そして18ある椅子は綺麗に9:9に分かれてテーブルを挟んでいる。高1のメンバー9名と、その年上のメンバー9人と言ったところだ。とりあえず1つ、ケーキがもの凄い薄いです

……真面目に現在の状況を説明すると、いきなり押しかけてきた全国大会優勝チームが目の前でケーキを食べていると言うことだ。その中に姉がいるというのも1つの事実。あの後数分後にアイアンクローから解放され、理由を聞いてみると「夏休み、夏祭りの日を覚えてるよね？」と言われたのでその日の出来事を思い返してみると、俺は穹にアイアンクローをしていた感じがあった。どうやらそれに関してで攻撃されたらしい。まあ幼馴染みとはいえ女子にアイアンクローはやりすぎた……ってそうではなく、まだここに来た理由が説明されていない

が

あまりにも静かすぎるので質問する勇気が湧いてこないというこの状況。なんというか……空気が淀んでいるというか何というか……上手く言い表せないがそんな感じ

それもそのはず

俺が右手から解放された直後、光久が姉上と呼んでいた人物がいきなり光久に対してクナイで斬りかかったという出来事がある。その攻撃に対して光久はギリギリ刀で防御に成功して終了、なんでも明智家姉弟では会う度にこう衝突をしているらしい。それが仲が悪いんだと解釈した俺たちがこんな空気を出しているのには間違いない。2人は説明していたがまだ慣れない様子

本当はただ会話が出てこないだけだ。いや、ここは先生とか何でかは知らないけど、7人と知り合いだった部長が何か話題を出すべきではないのだろうか？

1つの箇所でフォークが皿の上に置かれる音が聞こえてくる

「美味しい！」

姉貴です。いやケーキが美味しいことくらい誰でも知ってるから

……

とツツコミを入れそうになったが、かなり白けているので敢えて何も言わないようにする。しかし今の言葉で空気がゆるみ始めたのか、全員が一気に溜め息を吐いた。俺と穹を除いた1年側は空気に疲れた様子、その俺たちは呆れ顔。年上グループでも呆れ顔が飛んでいる

部長がテーブルに頬杖をついて姉貴を睨み付ける

「……で、まだ聞いてなかったが……大体見当は付いているが念のため聞いておく。何しに来た」

まさか姉貴とタメ口で……いや、そんな態度で話せる関係だったのか。まさかとは思うが……でもこの2人に限ってそれはないはずだな。普通そんな態度を取られて怒るべき場面だというのに、姉貴は笑顔になって口を開く

「わからないか……真箏におめでとつを伝えるためだよ」

「用件済んだな？ 本当にそれだけなら用件は済んだよな？ 今すぐ帰れ、お前だけ帰れ」

「やーねー連れないなあ西宮くーん ほらほら隼人も何か言っただけだよー」

「悪いな西宮……こんなのがお前の先輩で……」
「いえ……隼人さんの苦勞は俺でもわかってますよ……」

部長が珍しく年上の人と敬語を使って話している。珍しいなとは思いつつそれを眺めていると、部長に「俺にも常識はある」と言っただ感じの目で睨まれた。そんな事を言われた姉貴が頬を膨らませて隼人さんと呼ばれていた男性の肩をバシバシ叩く。その状況を光久のお姉さん 楓さんが止めていた

ゴタゴタも一旦終結し、この部屋が一瞬にして静まりかえる。今までの軽い冗談だったらしく、今度は先輩方全員が真剣な眼差しになって1年生全員に向けて視線を向けてきた。当然その中には先生も入っている。そして穹も一緒に見られている。その視線に背中がゾクツと震える。何故だろう、嫌な予感しかない

「とまあ神崎と近藤の誕生会の事もあったが、今回OBたちに来て貰ったのは他でもない。お前たち全員に稽古つけて貰うためだ」

部長の言葉に7人で「やっぱり」と呟きながら溜め息を吐く。最初は皆が皆誰なのかはわかっていなかったものの、全国メンバーと聞いて時点で少なからず予想をしていたらしい。穹に関しては全く予想していなかった事態だったらしく、1人でキョトンとしていた

「……まあ星乃に関しては他校だからアレなんだが……」

「私が許可するのだ！」

「……………こつうことだ」

なんとなく状況は理解できた。姉貴が許した、と胸くそ悪そうな表情をしながら部長が頭を掻く。そして次の言葉を並べる

「まあとにかくお前ら8人はこの7人相手に戦って貰う。ルールは変則1戦形式、先に全滅した方の負けというルールで戦う。……お前ら、今の内に全国優勝レベルを身に叩き込んでおけよ?」

……夏休み頃に叩き込まれたような記憶があるというのは敢えて口にはしない。言ったら言っただで殺されそうだ。……なんか考えてるんじゃないかと言われたが

部長が先に1人立ち上がり機会の前へと向かい、準備を始める。それに続くかのように姉貴が立ち上がり、6人を引き連れて部室の角へと向かった。作戦会議をしているような声が聞こえてくる

俺たちのメンバーが8人で相手が7人だったとしても勝率はまず無い。あの強さを一番よく知っている人物としてこれは断言できることだ。直接やったとかそういう訳じゃないが、見ているだけでもわかる。多分みんなもわかっていることだろう。それに……

「ほら真筆、こっちも作戦会議行くぞ」

「あ、ああ」

健太に声を掛けられて我に戻る。小走りでみんなの固まっている場所へと向かったが、姉貴のことで頭がいっぱいになって会議どころの問題ではなかった

姉、神崎雫は戦闘狂だ

結局作戦会議にまともに参加することなく全員がVWに転送されて試合が開始となる。会議で決まったことは、いつものポジションに加えて穹が俺と明日香についてくることになったらしい

……試合開始の合図が鳴り響く。データ以外の戦闘は久々だという感覚がなんとも言えないが……とりあえず鬱だ、鬱です。まさか（忘れていたが）誕生日にこんなサプライズが待っているとは思わなかったな……嫌だよ、痛い誕生日なんて

そんな事を考えながら2人の後に続くように走る。2人に指示をされたとか、これが作戦だとかそういう訳じゃない。ただ気分が落ち込んでスピードが遅くなっているだけだ。この状態を流石に不安に思ってくれたのか、2人が後ろをちよくちよく見ながら走っていく。その気持ちはありがたいが前を見ていないと危ないと伝えたい……が無理だ。言葉を発する気にもなれない

「……そういえば穹は姉貴が来てるの知ってたのか？」

という気持ちはすぐに消え去った

少し前に行く穹のそう尋ねてみると、ゆるやかに減速し始めて自分の横に並ぶ。明日香もその点に関して気になっていたのか、聞く体制に入りながらスピードをゆるめて横に並ぶ。3人が1列に並んだところで穹が口を開いた

「いや、その……実はこれとは別件で職員室行ったらたまたまその7人が居てさ……とりあえずその用件を済ませてからお姉ちゃん達と合流して誕生日パーティーの事を伝えて部屋行って……それで今に繋がるわけ。ちなみに西宮先輩もたまたま職員室に居たんだよね……」

「なるほど……」

説明を受けてこの状況に至った理由を理解する。それに関しては良いが、姉貴達はどという理由で学校を訪れたのだろうか……その

点に関して後で聞き出しておこう

「ところで別件って言うのはなんだ？」

すると明日香が口を開く。そういえば姉貴たちを迎えに行ったのだとばかり思っていたその「別件」。結局それとは違う用件だったらしいが、一体どのような用件だったんだ。聞きそびれたとはいえ確かに気になった。穹は困ったような表情をしてから一言

「それはちよつと内緒」

と、申し訳なさそうな表情をしながら言った。そう言うことならしょうがないが……と思った矢先、再び明日香が質問をする

「まさか学校に転校してくるとかそういう事じゃないだろうな？」

その発想はなかった

「いや、流石に無理があるから……仮に転校したいって願望があったとしても、わたしにはやらないといけないことがあるからね……」

しかしいつもなら冗談で返答しそうな回答がいつになく真面目に聞こえてきた。真剣な表情でまるでここになんか何かを見るかのように視線を走っている方向へと向ける。その時の穹は景色ではないものを見ているような気がした。その真面目な返答に言葉を返せなくなる俺と明日香。なんだか聞いてはいけないことを聞いてしまったのだろうかと後悔した

「まあちよつと今は言えない話。その内わかると思うからその時にね？」

「あ、ああ……悪い、なんだか変なことを聞いた」

「俺も謝る……」

「気にしないでよ。まあそれよりも……エルフィ、様子は？」

いつもの笑顔に戻って再び真剣な表情に戻ってエルフィに通信を入れる穹。そういえばまだ相手が迫ってきたという報告も無いのでそろそろ来ても良いかなとは思う。だが、いつもなら普通に繋がるエルフィも

「……あれ？」

「どうしたんだ？」

「なんだか繋がらないみたい……」

忙しいのが緊張なのか。理由はわからないが回線が繋がらない様子。不思議な現象に3人は足を止めて順番に回線を繋いでみる。が、2周しても結果は同じ、繋がらない

「ジヤミング妨害電波？」

「可能性はあるな……あのパソコンいじってた先輩もかなり腕が立つな」

「おま……それ見ただけでわかるのか」

「逆にわからないほうが不思議だろ……」

明日香にそうつつこまれて理解する。そうだ、全国レベルなら普通ですね、ははっ。いやいやいや、腕が立つとかどうこうじゃなく、この原因は一体何なんだ。もう一度繋いでみるも連絡は付かず。まさかもう戦闘不能になったとかそういうオチじゃないだろうな

「妨害の方が可能性は高そうだね」

「これだとどこから敵が来るかわからないぞ……」

「洒落にならないな…… 2人とも、警戒するぞ」
「了解」

明日香に言われて3人で周囲を見渡せるように円形を作る。この状態だと移動をすることは出来なくなつたが、護りとしては殆ど問題は無い。いつどこから攻められてきてもすぐに反応できる。ただ範囲攻撃だと危険性は高い。1人で攻めてきてくれることを祈ろう
嗚呼、先生と戦つた日々を思い出す

「……あ、あ、マイクテストマイクテスト…… 皆さん無事ですか！？」

そんな途中で聞き覚えのある声が聞こえてくる。何処からどう聞いてもエルフィの声だ。やっと回線が繋がつたらしい

「無事だつたのか？」

「え、ええ…… 連絡をつけようと思つたんですけど、相手に妨害されて連絡出来なかつたみたいです。ちなみに現状報告だと全員無事ですね。ただ……」

「ただ…… どうしたの？」

「……相手の情報が全て消えています。今全力で復旧作業中なんですけど…… 防御障壁ファイアウォールが全部突破されちゃつたんでいつまた攻撃を受けれるか……」

「それじゃ目視で敵を確認しろつて事か…… 辛いな」

「ええ…… ですからお気をつけ…… いえ、神崎さんの向いている方向に誰かいます！」

「……なっ！？」

エルフィのその言葉に全員でそちらの方向をしてみる。その方向は何もないただの地平線と言つていいほど何もない。そんな中に誰

かが立っているはずもなく……

「誰もいないぞ？」

『え、そんな……でも地図にはちゃんと相手の情報が……え……え、ちょ、ま……な、何ですかこれ……!!』
「どうしたの!？」

困惑したエルフィに穹が叫び、呼びかける

『地図上に情報が無制限に増殖……情報の数がありえない数値を……
……つて、もうこの機械使えなくなってます……反応が……』
「つ、つまり……?」
『なんていう誤情報なんだけどね?』

すると突然エルフィではない何物かの声に切り替わる。男性……さつきパソコンをいじっていた小柄な男性の声だ……もしかして今のは全て偽物の音声？

『面白い風に引つかかるよね？ 雫がおもしろがるのも納得できるんじゃない？ まあ……本当の情報を教えてあげなくもないけど?』

相手のこの挑発的な態度……なんだ？ 嫌な予感しかしない。その情報は聞きたい物だし聞きたくないという気持ちも存在する。一体……？ 明日香が我慢できなくなったのか、大声で叫ぶ。「その情報を教える!」と

『それじゃあ教えてあげようか？ 君たちのオペレーターは今全力で機械の復旧作業中だよ？ 通信はおるか相手の情報を見つけ出すことすら無理な状況らしいよ？ ボクの送り込んだ即効性のウィルスでさ？ それともう一つ良い情報を教える？ 雫と隼人が後ろに

上にいるよ?』

「「「え……?」「」」

その言葉に3人で上を確認してみる。すると1つのビルの上に2つの人影……逆光がかかってよく見えないが、その言葉の通り姉貴と隼人という人が立っている。武器も持たず、俺たちを見下ろすかのように。背筋に冷たい何かが走った。死ぬ、確実に死ぬ

『それじゃあ頑張ることを推奨する?』

回線が途切れる。それと同時に

「2人とも散れっ!」

「了解! ほら真筆! ボサツつとしない!」

「はっ!? あ、ああっ!」

明日香と穹の声で意識が戻ってくる。回線が切れたと同時に3人が別々の方向に散らばり、更に同じタイミングで上にいた2人がジャンプして降りてくる。こちらは銃を構えて空中の2人へと攻撃。だがそう上手くいくはずもなく、盾を下にしてそのまま降りてくる。しかも落下速度が速い。このままだと殺られるのは時間の問題だ。なんとか近接戦が始まる前に討ち取っておかないと、とは思うが相手が悪すぎる……!!

やがて時間切れとなり、大きな煙と共に2人が先程まで固まっていた場所へと落下してくる。これだけで戦闘不能になってくれればいいんだけどな、と楽観的な考えをしたいがその期待は絶対にならない方がいい。瞬殺される

「まあ悪くはない判断だが……いまいち攻撃力が劣るな」

「お姉様に武器を向けるとは……良い度胸じゃないか真筆、穹」

砂煙の中で2つの影がうごめく。3人の銃はそこへと向かっているのに何故が引き金を引けない。理由は……わからない。いや、恐れているのかもしれない。撃てない

やがて煙は晴れ、天が5人を照らし出す

「……隼人、面倒」

「言っと思ったよ……本来ならお前にやってもらいたい所だが……あまり血は見たくない」

「じゃあヨロシク」

中央にいる2人が余裕の表情を見せた。そうしたかと思えば姉貴は1人その場に座り込み、隼人さんは何も持たずに正面にいた明日香の方へとゆっくり歩み寄っていく。ヤバい、明日香がヤバい。助けに行かないとは思うが……無防備な姉貴もどうかと思う

ドンッ！

だが明日香は近寄る隼人さんに向けて引き金を引いた。しかしその弾はいとも簡単に回避されて2人の距離は縮まっていく。武器を出さずにそのまま、ただゆっくりと。弾の速度に反応できるなんてどういふ反射神経をしているんだ

「ボサツツとしてる暇があったら攻撃しなさい真箒！」

すると穹が1本の小刀と1本の長刀を持って無防備状態の姉貴へと走っていく。それに気がついたのであろう姉貴は、面倒くさそうな表情をしながら頭を掻き、穹の顔を見る、殺しの目で。この距離にいる俺でビビッたと言うのに穹は怖じけずに迫っていき、段々と距離が狭まる。やめろ、あぶない、しぬぞ……穹も姉貴の強さは知

っているはず……あの豹変ぶりを……

遠くから1つの音を聞き、その音のした明日香の方向を見てみる。あちらではもう本格的に近接攻撃での戦いが始まっているらしく、明日香が刀を取り出してもの凄い勢いで相手に斬りかかっていた。が、その攻撃はいつだか部長もやっていたように一瞬の武器の出現ではじき返されてしまう。使っているのはエクスカリバーじゃないだろうが、あの反応速度は以上……って、思い出した。一度だけ生で見た覚えがある気がする……あの人の武器は確か大型……それもあんな細腕じゃすぐに落とすような大型の……危ない

そう思った瞬間、明日香の刀が大きく弾かれて身体が無防備になった。そして隼人さんは武器を持たないその両腕を、大きく後ろに引いた。何かを持つような構図で、まるで遠心力をつけるが如く

「明日香あつ！ 急いでしゃがめえっ！！」

そしてその腕は明日香の方へと振り回され、ある一つの武器がその手に写り込んだ。鎌に似て鎌でない。確か……ハルバードとか言った物だったかもしれない。大きさが通常以上の人の二倍サイズ。その武器が明日香に向かって斬りかかっていた

なんとか声が間に合ったのか、その場にしゃがんで回避する明日香。武器が明日香の上を通過したと思えばすぐに手元から消え去り、次の攻撃態勢と移っていた。刀とだとかかなり分が悪い……

「行くよお姉ちゃん！！」

こちらはこちらでもう死亡フラグがビンビンした。穹はいつの間にか姉貴の元まで走り込み、左手に持つ長刀を振り上げていた

「……………」

姉貴はその場で目を閉じた。来る……悪魔が……来る

その悪魔は、その場で小さく微笑んだ。にやりと
そして一言

……後悔すんなよ？

その言葉と同時に穹のと手に握られていた長刀が折られ、柄が吹き飛び、穹ももの凄い勢いでこちらへ飛ばされてくる。その光景にハツとなり、慌てて飛んできた穹を身体全体で受け止める。しかし勢いは全く落ちていなかったのか、そのまま俺も一緒に数メートル吹き飛ばされる。やがて止まってその場に踏み留まって姉貴の様子を見てみる。もう手遅れだ。すでに得物が右手に持たれている

「始まつちったか……」

奥にいる隼人さんも苦そうな顔をしながらそう呟く。どうやら姉貴のこの豹変っぷりがどうも気に入らないらしい。明日香は明日香で必死で攻撃の回避を続けている。あちらはいつやられるかわからないし、こちらも非常に大変な状況になった

姉貴が振り上げていた武器を定位置に戻す。今の感じからだと言が見えない。それが一番怖い

「……おい穹ア……」

そして次に発せられた言葉でその場の4人が固まる。明日香も驚いた表情で姉貴を見つめ、隼人さんも呆れたような表情でこちらを見る。始まった、姉貴の戦闘モードが。正面にいる姉と言う悪魔がゆっくりと顔を上げる。いつも見せる笑顔は何処に消えたと言えるくらい笑顔。笑顔は笑顔でもまた違う種類の笑顔と言った方が良

いかもしれない。殺しの目だ

「わざわざ手エ出さないようにしてやってるのによお……そりゃねえんじゃねえのか？ それともアレか？ ドがつくほどのMだったか、あア？ ……まあくだらねえ話は置いて………」

死ね

小さく呟いたかと思うと瞬間的に加速してこちらに突っ込んでくる姉貴。そのスピードは過去に見た空のスピードを遥かに上回っていて、あっという間に懐に入り込まれる。あまりにも速すぎる動きに反応が出来ず、無防備の状態で俺の腹部目がけて姉貴の武器棒武具の突きが入ってくる

「ボサツとしないで真箏！」

「はっ!？」

「遅え!!！」

穹に言われて我に戻り、急いで武器共有による望の武器を拝借し、急いで攻撃をはじめ返そうと刀を振り上げる。しかし遅すぎた為に鳩尾へ攻撃がクリーンヒット、強すぎる衝撃に数メートル空中に浮いた状態で吹き飛ばされる。そしてそのまま棒を地面に叩き付けてそれを軸に回転攻撃を加える姉。先程の攻撃で折れてしまった武器を瞬時に手甲にチェンジしてそれを受け止める穹。ある程度のダメージは軽減出来たであろうが、やはりダメージは大きいらしく防いだ方の腕をぶら下げてしまった。まさか折れたか!？ 姉貴が一步バックステップする

「クソな真箏に比べて穹は良い反応するじゃねえかよ」

クソとは酷い言い様だ。まあ否定は出来ないが

「……ただまあ脆い防御だな……今ので左腕使い物にならねえだろ？」
「……っ」

穹が苦虫を噛みつぶしたか様な表情をして右手でぶら下がった左腕を押さえる。よく見ると打撃攻撃だというのに出血しているようで、服が朱に染まり始めていた。そして今の言動と反応からすると骨が折れたらしい（VWなので問題はないが）。どれだけの攻撃力だったんだ……

するとあちらでも戦闘をしているような鉄と鉄がぶつかり合う音が聞こえてくる。今は明日香が攻めているようだが相手は一步も……いや、攻撃をしているのは明日香に見せかけて迫っているのは隼人さんの方だ。あちらもかなり不利な状況だが……何故だろう、俺の居場所がない。というか混ざりたくない。何て情けない男だろう

「おい真箏テメエ……何処見てんだ？ 戦闘中に余所見してるとすぐに死ぬぞ？」

「あ……ああ。そうだな」

「何余裕そうな顔してんだ？ 勝算でもあんのかよ？」

「有るわけ無いだろ姉貴に対して……ただ悪あがきくらいはする。クソ呼ばわりはどうも気に障ったんでな……」

「は？ クソはクソだろ。クソはクソらしく沈んでろ」

姉貴がゆらり動き出し、徐々にこちらへと向かいだしてくる。逃げたいって気持ちもあるにはあるが、こう言ったからには逃げるなんて出来ない。相手が相手だ。負けることはわかっているが、多少の攻撃は加えておきたい。さあ何秒保つだろうか……相手の動くスピードがさっきと同等の物になり、一瞬ですぐ近くへとやってきた。

刀を構えて防御態勢に入る

「真箏！ 危ない！」

「大丈夫……1発の防御くらいならなんとかなる……」

相手が攻撃態勢に入る。負けるかもしれないが受け止める覚悟は出来た……！！

しかし

「相手の攻撃は正面から来る物だけだと考えるな。相手の2歩先を讀んで行動しろ」

「え……」

棒の先端を地面に思い切り叩き付け、棒高跳びのように空高く舞う姉貴。今言った言葉と瞬間にして起こった出来事に頭と目がついていかず、その場で硬直状態になる。やっと理解して後ろを振り向いたときにはすでに時遅かった

空中にいる姉貴は武器を棒武具から機関銃へと変更。かなり大型の物だ、火力も高いに違いない。なのにそれを片腕1つで持つなんて……なんて化け物だ。一瞬にして身体のうちここに銃弾が撃ち込まれる。まさに蜂の巣状態になっただろうな。あちらで穹が叫ぶのが聞こえてくる。その奥で武器を弾かれて大きく身体を裂かれている明日香がいる

そのまま痛みと悔しさで意識を失った

……意識が戻る頃には時計が7時を指していた

「……………」

RWに戻ってきてても痛みが残っている重い身体をなんとか起こして座り込む。どんだけの銃弾を喰らったんだろう。少なくとも200発程度は喰らったに違いない。あんな痛みを感じて死んでいないというのもまた怖い。血の色を思い出した。吐き気がするほどの、残酷な血の色を。理由なんてわからない

ふと横を確認してみる。そこには全滅しているwarsメンバーが。全員意識を失っているらしく、横たわって穏やかに呼吸をしていた。気絶した後全員やられたということが……

「目が覚めたか」

ふと声を掛けられてそちらの方をしてみる。そこには汗を掻いている部長と、息が上がっている隼さんが立っていた

「……………」

「何をしていたのか、って顔だな。ただ稽古つけて貰ってただけだ、安心しろ」

「安心するまでもないでしょう？ 一応部長もかなりの強さですから」

「確かにエクスカリバーが入ると悪魔だコイツ」

「止してください……………これは借りてる物ですから」

「そうだったな」

……………とりあえずこの2人の関係が気になった。部長がタメ口を使っていないと言うのが非常に珍しい……………って、常識はあるらしいしな。うん。しょうがない

「失礼なこと考えてるだろ神崎」
「滅相もございません」

やはりいつ心を読まれるかわからなくて怖い。その様子に隼人さんは笑顔で笑っていた。さっきの誰かさんとは大違いの笑顔だ

と、その誰かさんの事を思い出したことで他のメンバーの行方が気になった。その事について質問してみると、部長がそれぞれ帰った、と説明してくれた。まあ多分姉貴は家に向かったに違いないが……まあ気絶していたら何もすること無いわけだししょうがない。

隼人さんは部長の頼みで残っていたらしい。……この2人が戦うなんて光景が想像できない

「まあどうでもいい話は置いておいて、だ。率直に聞く。どうだった？」

「あ……」

部長のその言葉に背中が震える。同時に僅かだが吐き気がしてきた。ただ何も言わないのもダメだと思うので、吐き気を抑えながら言葉を紡ぐ

「……差を、思い知らされました。正直な話ナメてましたよ……この前関東まで進出して若干浮かれてましたけど……今回の一件で本当に理解できました。この程度の実力で勝ち上がるうだなんて……」
「ほう」

「その時に限っては部長も知り合いの方々には手を抜くよう指示をしていたというのわかりました。でも今後はそれが通用しない相手になってくる……それこそ都北の大会で全国大会への出場が決まる物になる……その実力者が2人……勝てと言われたらもう諦めます

よ……」

「……………」

「……今日のこれで全員に教えるのが目的だったんですね……それも先生の依頼で」
「その通り。99点だ」

部長が納得したような表情で頷く。それは良いんですが残りの1点は何処で落としたんでしようか。聞いたところ、顔を赤くして「聞くな」と言ってきた。多分考えていなかったか言ってみたかっただけなのかもしれない

コホンと咳払いをして真剣な表情に戻る

「とにかくこれが全国のレベルだ。今のお前たちでは出場できたとしても瞬殺されるようなレベル、そう捉えろ」
「……はい」

その言葉がやけに重たい物に感じられた。現実を知るといのはどれだけ辛いことなんだ……底に至った訳じゃないが、現実逃避をする人の気持ちが変わらんでもない。……現実は怖い

「と言うわけで、だ」

部長が続ける。そして隼人さんが口を開く

「明日からの1週間俺たちメンバーが君たち現役メンバーの特訓の講師を務めようと思う」

「え?」

思いがけないその言葉にハッと顔を上げる。特訓? 講師? こんな弱小者の俺たちの? 全国初優勝チームが? そんな事が許されるのか

「まあその為に来たって言っても過言じゃないな。とにかく、だ。明日からは地獄の特訓が待っていると思ってくれ」

「えっと」

「まあお前たちなら1日か2日でダウンするだろうな。だがこれは真面目な命令であり俺の本望だ。この特訓を耐え抜いて力を身につける。それが今の俺から言える全てだ」

「……………」

今までのwarsでの出来事を振り返ってみる

無理矢理入部させられて

入部させられたかと思えば練習試合をして、手加減していたとはいえ勝利を納めて

また急に都北大会出て

都大会出て、偶然が重なりすぎて関東大会に出て、負けて

特訓して、少しは成長したと思いつながら過ごして

一般大会出て、奇跡的に優勝して

……………そして今回、差を思い知った。壁を感じた

このままだと次回は都大会に出ることすら叶わないかもしれない。もしかしたらそれ以上の最悪な出来事が待っているかもしれない

勝てる？ いや、負ける

負けたくない……………そのためにも

俺たちは、強くなりたい

「どうだ神崎？ 後でコイツらにも聞かないといけないが……………お前だけでもやる気はあるだろ」

「……………ええ、部長の言葉で気合いが入りましたよ……………コイツらは何と言おうと、嫌でも参加させます。なので……………よろしく願います」

「よろしい」「決まりだな」

「はい！」

今ここに、1週間の猛特訓が始まることが決定した。かなり壮絶な物になることは間違いない。でもみんなも理解してくれるはずだ。何たって今まで一緒にやってきたメンバーなんだからそれくらいわかる

みんなが起きた後事情説明をすると、みんなは少し考えたが嫌な顔せずにその特訓を受けることを受け入れてくれた。やっぱり大好きだ、この部活が、メンバーが

……そしてその翌日の放課後、現役wars部7人と、優勝チーム7人、+ による1週間の特訓生活が始まった

#60 圧倒的実力の差（後書き）

次回、特訓開始です

+ は穹と部長の事です。念のため

それじゃあまた次回、お会いできたら……

追記

#60だ！ 長いね！ 長すぎるね！

……よく飽きずにここまで読んでくださりました。とりあえず学年
上がる前までに1年生編終わらせるのを目標に頑張ります。それで
はorz

6 1 それぞれの放課後（前書き）

久々の投稿です

もちろんggdggdです

健太は真箏よりオープンです
それでは後書きで

6 1 それぞれの放課後

姉貴たち 初代 wars 全国大会高校の部優勝チームが来てその翌日。その日の学校内にて

「……………」

4時間目の授業も流れるように終了して

「……………」

…………… 4時間連続でずっと机に突っ伏していた重い身体をゆっくりと、亀のようにゆっくりと、ゆーっくりと持ち上げる。非常に重く、まるでこの身体は自分の物じゃなくなっただんじやないかというくらいに重い身体を、非常にゆっくりと。その行動が遅すぎたのか健太とエルフィが驚いたような表情で見つめていた。まあ無理もない。授業中はずっと無心でこんな感じになっていたのだから。休み時間も含めてだが

…………… 今日学校休んで良かったんじゃないかか思ってる
けど

「はあ〜……………」

「ど、どうした真筈…………… いつもより重い溜め息なんて吐いて……………」
「…………… 嫌な事でもあったんですか？」

健太の指摘通りいつもより大きく重い溜め息が漏れる。その溜め息を聞いたクラスメイトはなんだなんだと呟きだしたが、笹原さんの注意のお陰でそのガヤガヤもすぐに収まる。笹原さんには感謝し

ないといけないな

とりあえずエルフィの言うとおり、朝から……いや、もう昨日からと言っても過言ではない。嫌なことが連発しているとも言っておこう。その原因はほとんど……全部だな、姉貴にあっという

机に両手を置き、重い身体を支えながら立ち上がる。なんだか両足がガクガクいつている。傍にいる2人と、今やって来た笹原さんが困った表情をしている。傑作だ、冗談だ。申し訳ない

「お、おい真箏……保健室行った方がいいんじゃないか……」

「安心しろ健太……慣れてる、慣れてるから」

「神崎、目が死んでるわよ」

「保健室どころじゃなくて病院の方がいいんじゃないでしょうか……」

大袈裟な。こんな体調不良(?)程度で病院なんて行ってたまるか。目が死んでいるというのは否定できない気もするが

机に突いていた両手を離し、すぐに健太の肩に両手を置いてバランスを保つ。やっぱり3人の言うとおり危ないのか？ 保健室行った方が良いのか？

「……………(ぶるっ)」

「……なんだか保健室には行きたくないって顔してるぞ」

朝姉貴に言われた一言を今思い出して全身に寒気が走る。思い出したくもないあの悪魔の表情と声が脳内再生される

『ああ真箏。1週間の間保健室行くような事あったらブチ殺すぞ?』

それは本気の目だった。保健室に行くなと言うのはどう考えても無理だ。というか保健室に行きたくなるのは全て姉貴と+ の原因

だというのに……

もう1人の根源の表情を思い浮かべてエルフィの顔を見してみる。一瞬間を見て怯まれたが、俺が何を考えているのかすぐにわかったのか、視線を泳がせて何処か適当な所を見ていた。いつもみたいに謝ってくれないのか。軽く裏切られた気分だ　とエルフィに言っても無理か。会った回数が少ないとはいえ、あの人が凄い自由気ままな人だというのはよく理解できた。普段何をしているんだ
健太から手を離してガクガクになりながらも自力でその場に踏みとどまる。大丈夫、大丈夫だ

「……気になるから話せ」

「そうね……アタシも一応聞いておくわ」

「……ああ。俺の苦しみを理解してくれよ」

そしてその光景を思い返しながら2人に全てを話すことにした

1609

一方的にやられた試合も終了してから俺が目覚めたその10分後、気絶していた全員も目覚めて本日は解散ということになり、やっと帰ってきた家の玄関の扉を開く。ちなみにその少し後ろには穹がついてきていたりする。なんでも夕食をご馳走になりたいとか家近いんだから帰れと言いたいが、もう暗いので後で送るしかない。さっきまで言ってたけど無理だった

先程までの出来事を思い返しながら玄関をくぐる。すると穹が何かに気がついたのか足下を指さしながら声を掛けてきた。そこを見てみると、女性物の靴が6足（3セット）置かれていた。1つは姉貴、1つは母さんの物と見て間違いない。ただ

「……真箏、隠し子？」

「んな訳ないだろ」

最後の1セットは2人の靴より若干小さい。その2人の大きさより小さい穹と比較しても更に一回り小さく、まるでそれは小さい子供が履くような靴だ(デザインは大人っぽいけど)。それを見ていると何故だか不安ばかりが募ってくる。嫌な予想が当たらなければ嬉しいが

ここで立ち止まっているのもアレなので、2人で靴を脱いでから玄関をあがる。とりあえず先に穹をリビングへと向かわせてから俺1人で自分の部屋へと向かう。そして荷物を降ろして制服姿のままリビングへと向かう

……そのリビングでは想像したくない光景が広がっていた

「あらおかえり真箒」

まずは母さんが声を掛けてくる。まあここは普通だ

「遅かったね。あの程度で気絶するなんてだらしのないなあ」

続いて今日顔を見せた姉貴が口にポツキーを啜えながら話しかけてくる。いつもみたいなら異様な光景だが、まあいいだろう

「あ、荷物降ろしてきてたのか」

更に続くように、2人から少し離れた場所にあるソファの寄りかかりながら穹が声を掛ける。一緒に来たわけだし全然不思議じゃない問題なのは姉貴の目の前に座っている人物だ

「おかえり真箒くうくん」

「……どうして早苗さんがいるんですか」

「お姉さんに挨拶しに」

まあいいだろう

姉貴と同様ポツキーを啜えながらエルフィの母親である早苗さんが話しかけてくる。さっきの正体不明の靴の持ち主はやっぱり早苗さんだったのか……嫌な予想が当たってしまった。まあ自分が嫌がるようになったのもこの前の一件が原因でして……

これ以上変なことを言われる前にご帰宅なさって欲しいところだ。とも声に出しては言えず

「いつも真筈がお世話になってます」

「いえいえこちらこそ。娘がお世話になってます」

正面に向かい合う者同士でそんな挨拶をしていた。その光景に思わずため息が出てしまう

「ちょっと真筈、何お客さんに対して溜め息ついてんの」

「ほっとけ。ほら早苗さん、送りますから」

「あ、ひつどい。折角お姉さんにも色々なお話を……」

「姉貴だけは面倒になるんで止めてください……」

更に溜め息混じりにそう答える。もしあのエルフィとの一件を姉貴が知ったとしたらどうなるんだろう。多分このネタをエサに色々と弄り回してくるかもしれない。しかも俺や家庭内に留まらずこの住宅街、更には姉貴の友人にまで話が回りかねない。なんとしてもそれだけは阻止せねば

ポケットから携帯電話を取り出し、リダイヤルの一覧に残っていたエルフィの電話番号を表記する。そして通話ボタンを

「せいっ」

「あっ」

押しかけたところで姉貴に没収された

「おい返せ」

「姉様に向かつて何だねその態度は。どれどれ真筆のメールフォルダの確認、と……」

「それはプライバシーの侵害だ」

姉貴に盗られた携帯電話を取り戻そうと右腕を動かす。しかし身軽な動きで回避されてあと少しの所で取り逃す。更には取られないように逃げ出し始めた

逃げながら携帯の操作をしてメールフォルダを開こうとする姉貴。でも念のためと言うことで掛けておいたロックが役に立った。操作している指が止まり、好機が到来する。今の内に携帯を取り返そうと腕を伸ばすが、空いている腕の方で両腕をロックされてしまった。どうやってこんな体勢にしたんだ。超人か

……まあ

「ほら、どうせわからないんだから返しなさい」

その状態のまま姉貴は固まり、考える。しかし何かを思い出したかのように顔を上げて番号を口にしながら

「……20800803」

「はあっ!?!」

「……あ、当たってた」

正解の暗証番号を押していた。番号を口に出されたことと、当たっていたという事実のせい、段々と身体が熱くなってくるのがわ

かる。そしてソファの方を見てみると、そこには口をポカンと開けながらこちらを見ている穹の姿が。椅子に座っている母さんはニヤニヤ、早苗さんはわからないといった表情をしていた

……姉貴が帰ってきたことで慌てて作った暗証番号、それは穹の誕生日だった。ちなみにそれに変わる前は俺の誕生日だったという。今までロックを掛けたことが無かったので今まで忘れていた。今日の一件が無かったらどうなっていただろう……じゃなくて

一刻も早く携帯を取り返して部屋に避難しなければ！！ 見られ
てやましい物など無い！！

が、

「あははあ……まさか本当に穹の誕生日で合っていたとは」

「黙れ！！ 今すぐにそれを俺に返却しろ！！ 別に姉貴が楽しめるような内容のメールは1通も入ってないし、その暗証番号にそれといった深い理由はない！！」

「必死になるところが余計怪しいんだよなあ……」

先程までより強い力を加えて腕を振りほどこうとする。だが姉貴の方も解かせまいと力をより強くする。女なのにこれだけの力があるなんてどういうことだ……！！

今の話の内容で一番大きく関わった穹がとうとうソファから立ち上がった。その顔は何処か赤っぽく、熱でもあるんじゃないかといった感じに……と思っていると

「真箏おおおお！！」

満面の笑顔を向けながら俺に向かってタツクルをかましてくれた。そのお陰で床に後頭部を強く強打し、更には穹の走ってきた勢いが倒れた身体の上に重くのしかかってくる。それを好機と見た姉貴がスキップしながらこの場を離れていった。とりあえず携帯のフォル

ダに関しては問題ないからあつちは放っておこう。こちらが重要だ……！！

「お、降りる穹……」

とりあえず暴走していないかその声を掛けてみる。もしそうなっていた場合は確実に俺の言葉は耳に入っていないだろう。だがその心配は不要だったらしく、顔を胸に埋めながら「ん？」と返事してくれた。なんだか胸が痛い（押しつけられて）

「なんか今失礼なこと考えなかった？」

「何が　ぐふっ！」

穹にそう言われて今自分が何を考えていたかを思い返していると、ジト目で睨まれながら体重を掛けられる。そこまで重くないので上からの衝撃は少ない。ただ下が硬い

その痛みに悶えながらツインテールの付け根を両手で押さえ、再び潜り込んでいた顔をそのまま持ち上げてこちらに向ける。不機嫌なのかそんな表情をしている。何に対して怒っているのか、とりあえずなんて謝るか考えながら次の言葉を発する

「……とりあえず降りてくれ。胸が痛い」

「失礼な事言うねえ真筆お……覚悟あ出来てるんだよね？」

「は？」

穹は眉をピクピク動かしながら笑顔じゃない笑顔を作り、そのまま俺の下半身の方を見る。まさかコイツ、変なことを考えている訳じゃあ無いだろうな……

『真筆の携帯つまんなあ〜いい』

「あだつー!!」

なんて事を考えていると姉貴が先程持つていった携帯が投げられて帰ってくる。それが見事額にクリーンヒットして、また後頭部を床に打ち付ける。そのまま携帯は床に落下してそこを滑走する。壊れたらどうしてくれるんだ……ってそれどころじゃない。それどころじゃないんだから厄介者の姉貴はこっちに近づいてくるな

「しかしまあ真筈。女の子に向かって胸がどうこう言うとはいい度胸じゃないか」

「ほ？」

姉貴に言われたその一言で一瞬思考が停止した

「城壁を押しつけられて痛いなあ？ 寧ろ男子はそこで大きな喜びを……」

額に手を当ててやれやれと言った感じで姉貴が呟く。その呟きが段々と自分の言った言葉を理解させていく

「お姉ちゃん!! それはそれで言ってることが酷い! 人のこと言えないクセにー!!」

「嫌だねえ穹あ……私はこれでもBあるのだよー!!」

「3年前まで今のわたしと変わらなかったお姉ちゃんが3年間でそんな成長を!？」

「ふっふっふ……まあ楓様を3年間弄り通したからねえ……あの子の分を頂戴出来たのか・し・ら・」

「……あの果実を毎日さわり続けていたと言うことか……っ!!」

「風呂だとまた凄いなアレが。いつもいつもおさわりすると10秒で良い声を」「ストップストップストーッップ!!」

これ以上女性の話をこんな距離でお話しされると自分はどうにかなりそうなので慌てて大声で姉貴の声を遮断する。余裕があったら聞いても良かった……じゃなくて、ただでさえ穹が上に乗っかっていると言うのに、そんな女性の身体に関する話をしないで欲しい。なんだか自分に罪悪感が芽生えてくる

とりあえず母さんは余計にニヤニヤするな。早苗さんは顔を赤くしながら何か卑猥な言葉を呟かないでください

「健全な男子の目の前でそんな話するってどんだけだよお前ら！少しは俺のこと考えるよ！」

「……それ、真筈が言える言葉じゃないと思うんだけどなあ……」「うぐっ」

穹のその言葉がグサリと胸に刺さってくる。というか、さっきの「胸が痛い」と言うのは姉貴曰く穹の城壁じゃなくて、自分の胸が穹の頭のグリグリで痛いつて言ったただだったんだが……まあここまで来たら誤解を解くのも難しそうだし謝った方が速いかもしい。その上で後で誤解を解いておこう

「……すいませんでした。お詫びします」

とりあえず申し訳なさそうに謝っておく。理解はしてくれただのか、2人は溜め息を吐きながら許すと言った感じの言葉を呟いていた。しかし、俺が「お詫びします」と言ったのは大きな間違いだったかもしれない

「……じゃあお詫びにキスして貰おう」

「……え」「」

穹のはなつた言葉に再び思考停止。周りにいた3人も同じように呆然としたような表情をしているのはわかる。思考停止しているかどうかはわからないが、静かになったのは確かだ。何て言ったよ今……穹が唇を出して迫ってくる

よし落ち着け俺

……落ち着けるわけがない

なんとかこの後どうすればいいのか状況判断をして両腕で穹の進行を阻止しようとする。が、

「くそっ……早くも両腕が固定されている……っ!!」

まさかの穹の両腕に俺の両腕が掴まれてガツチリと固定されていた。当然動かせるはずもなく、穹の進行は止まらない。もしここでキスをしたら？ 穹とするのは2回目だ。確か久々に会ったときに急に押しつけられたのは良く覚えてる。それにあの時はみんなが呆然として……今回の状況とまるつきし同じ(?)じゃないか!! 興奮してどうする、と自分で心に突っ込む。冷静になって目を閉じる

そういえば、女の子ってみんな誰とでもキスしたがるのだろうか。よくよく考えたら Wars 部女子はみんな同じようにせがんできたりするが……いや、そんな話は聞いたことがない。ただの変態だ。

俺の周りには変態しかいないのか

そんな事を考える俺が変態だろう

というか軽々しくキスなんてしていいのか普通

「むう……」

なんだかよくわからなくなってきた。じゃなくて

「もういいから止めなさ　　って!」

閉じていた目を開くと、そこには穹の顔が凄く距離にあった

「マジで止める穹!　　そういうのはちゃんとした相手を見つけてからだな　　!」

穹は止まらない

「話せばわかる!　　だから落ち着け　　!」

穹は止まらない

「フアーーーーー!」

以下略。　　というかここはゴルフ場じゃない。我が家だ

穹は聞く耳を持たないのか俺のボールが飛んでいったコールを聞かずに迫ってくる。これを聞かないでもし怪我をしたらどうするんだ。……まあボールが飛んでくるわけじゃないが。　　というか何も飛んでこないか、室内だし

もう諦めて穹を受け入れようと、覚悟を決めて思い切り目を閉じた。その瞬間

「シエアアアッ!」

姉貴という名のゴルフボールが飛んできた

俺の目の前に降り立った姉貴は、俺に迫る穹の頭を両手で掴んで思い切り持ち上げる。それに驚いたのか、穹はビクツと身体を震わせる。そして上にある2人の顔は同じ距離を保ち

「ちゅっ」

「ほえっ!?!」

……姉貴が穹の唇を奪っていった。一瞬だけ。凄い光景きましたわー。これがよく聞く百合というヤツか

姉貴と穹による一瞬のキスが終わり、その被害(?)を受けた穹は俺の上で呆然としたような表情になる。一方加害者(?)の姉貴は「ごっつあんです」と呟きながら両手を合わせて目を閉じる。なんだこの異様な光景は。きましたわーじゃない。穹が非常に可哀想になってきたように思えるのは何故?

「お、お姉ちゃん……どうして……」

「そりゃあ決まってるんだろ……おめえが好きだからさ……」

「あ……(ガクッ)」

「穹っ!?!」

あまりにもその行為が衝撃すぎたのか、穹は意識を失ったかのようになりこちらに向かって倒れてくる。同時に手に溜まっていた力も抜けていたのか、抜け出した腕で倒れてきた穹を支え、抱きながらゆっくりと立ち上がる。そしてソファまでその体勢のまま運んで横にさせる。加害者(確定)の姉貴はテーブルに置かれていたポッキーを啜ってタバコを吸うようなポーズを極めて明後日の方向を見つめていた

「……ちよつと隼、もしかしてあなたそついう趣味?」

あの行為について心配になったのか、母さんが深刻そうな表情で姉貴に尋ねる。それは母さんに同意見で、こつちから尋ねることはないが心配オーラを出しながら姉貴の回答を待つことにする

姉貴はもの凄い勢いでポツキーをかじって真顔になり、さも当たり前かのように

「いや、私はそこにいる真筆ゲスと穹の子供を作らせまいと……そして私と穹の子を作ろうと」

常識的に考えてあり得ない回答を返してくれた。その言葉に意識のある俺たち3人は驚愕を受けた表情に変わってしまった。この説明だとよくわからない気もするので、ゆっくり纏めるとしよう

姉貴の考えについて

? 俺と穹がキスをする 子供が出来る

? ?を阻止すべく、姉貴が穹とキスをする 子供が出来る

結論 ?と?より、キスをする子供が出来る

ということだ。そんな話聞いたことがない

そもそも女同士は無理だ

俺たちの表情に疑問を抱いたのか、姉貴は困ったような表情をする

「……よし姉貴、1つだけ尋ねさせてくれ……その知識、いつ、何処で、誰に教わった?」

恐る恐るその質問を口にする。母さんと早苗さんも同じような事を思っていたらしく、ナイス真筆と言ったような表情をしていた。照れるな じゃなくて

姉貴はしばらく考えた後、回答をしてくれる

「4年前……楓の家で……楓に」

「アンタは学校生活で何を教わってきた!」

まさか学校で習った知識ではなく友人から教わった知識をそのまま鵜呑みにしていたというのか……というか光久のお姉さん 楓さんは何を教えてくれていたんだ！ それは変なことにならないように教えてくれたのか！？ それとも素を教えてくれたのか！？ 今すぐにでも光久の家に電話を掛けて真相を問い詰めてやりたい……！！

俺たち3人の反応に戸惑う姉貴。まあ無理もない。今俺たちは姉貴の知らない新事実を教えようとしているのだから溜め息を吐いて俺が口を開く

「あんな姉貴……その……キスして子供が出来るわけ無いだろ」
「なぬ？」

……姉貴の反応が素だというのが非常に悲しい。22の大人がそんな反応するというのが……しかもそれが身内 姉であるという事が実に悲しい。よく22年生きてきたよこの人

「その……子供は」

ここまで言っただけでハツとなる。とりあえず俺は高校生だし男子だし、その他諸々（特に健太）な理由でその方法は知っている。しかしこれは教師とかそういう者じゃない俺が言う言葉か？ しかも俺は男で、今から教えようとしているのは女。まず身体の構造が違う。まあ身内だから問題は無いんだろうが俺の口から、しかも親の目の前でそれを言うのは抵抗がある。抵抗しかない。マズい、事実を教えたいけど教えられない……どうすればいいんだ

「子供は？」

姉貴は期待の眼差しを向けながらこちらに目を向ける。駄目だ、

そんな視線を送られると俺の逃げ場がない……これは諦めて言うしかないのか……？

「その……」

「うんうん」

……どうやら粘れるのもここまでのようだ。羞恥心を捨てて事実を姉貴に教えてやろう。そしてちゃんとした大人になって貰おう。弟に不安を掛けないでくれ

「……子供は　！！」

「キャ、キャベツ畑に神様が置いていくんだよ！！」

「「「え？」「」」

俺が本当の子供の作り方を教えようとしたその瞬間、椅子に座っていた早苗さんが大声を上げてそう言うてくれる。そう、間違った知識を教えてくれた

「え、ちよ……」

早苗さんの言葉に俺が戸惑っていると、早苗さんの横に座っていた母さんがハツとしたような表情になり

「へ、へえ！　早苗さんはキャベツ畑に置いていつてくれたんですかあ！　栗と真箏はコウノトリに運ばれてきたんですよ！！」

　　実の母親も間違った知識を提供してくれた。なんて事を教えてくれているんだ

「そ、そうなんですか！」

「そうなんですよ!」

「……………」

「え、ど、どつちなの…………?」

「に、2種類あるの!」

「そ、そうなんだ…………」

そちらでは間違った知識を教えている母親2名とそれをガチで鵜呑みにしている姉。なんだこの光景は…………

その様子を呆然と眺めていると、母さんが視線だけをこちらに向けて何かを伝えようとしている。その目は「あっちに行け」と言った感じの…………ああ、なるほど。この2人は俺が言えなくて困っているところに助け船を出してくれたのか。その知識は間違っているとはいえ、助かった。後でお礼を言わないと

姉貴に気がつかれないようにゆっくりとリビングを後にして自分の部屋へと向かう。部屋を出る際に姉貴の表情は混乱しているような感じだった。そりや違う事を2つも同時に教わればああなるわ。あの人は学校生活を送っているときに何を教わってきたんだ。姉貴がちやんと結婚できるかどうか不安になってきてしまった

自分の部屋に着き、電気を付けずにベッドへダイブする。かなり疲れてしまったらしく、眠気が襲ってきた。風呂にも入らずに寝るわけにはいかないが…………しかし

睡魔に耐えきることが出来ず、数秒後には夢の世界へと引きずり込まれていた

「…………という事があったんだ」

「まさか大人が子供の作り方を知らないとは…………」

「わ、わたしですら知ってるのに…………」

「エルフィ、それは男子の目の前で言うことじゃ無いわよ」

「はっ!?! わ、忘れてください!」

女子は女子で何か騒いでいるが、頭の中がぐちゃぐちゃなのか聞き取れることは出来なかった。健太は聞かなかったような表情をしているが……まあいい

「それで今朝早く起きて風呂入って……珍しくお前ら来ないから一人でメシ食うだろ？ それで俺の疲れてるような表情見た姉貴が……」

先程脳内再生された言葉を、今までの話を聞いていた3人に聞かせてみる。すると、健太とエルフィは大体のことは掴んでいたのか俺と同じく身震いをしていた。まだ俺が言うから平気だろうけど、目の前で言われたらエルフィは泣いてしまつかもしれない。……さすがにそれは無いだろうけど

机の脇に引つかかっていた弁当箱の入った包みを持ち上げる。足のガクガクは話している最中に収まったらしく、普通に歩けるようにはなっていた。とりあえず5組へ移動するでしょう

「じゃあ綾香、行ってくるな」

「言う必要がないでしょ。早く食べて次の授業の準備をしなさい」

「……ママをなんとか拘束しておかないと　　って佐々木さん笑わないでください!!」

「……ほら行くぞ」

そして俺たちはみんなの待っている5組へと移動して弁当を食べ始める。この辛さを共有するために俺はみんなに今の話をすることにした。なんてヤツだ、俺……

時間が流れるのは早い

イライライラ……

長いようでもかなり短く感じた本日の授業も全て終了して、放課後の部室。何処からかそのような音というか何というか……そんな物が聞こえてくる。wars部現役メンバー+穹がその発信源である場所、というか人物に視線を送る。その人からは湯気が上るように顔が赤くなっていて、苛立ちを隠せないのか、腕を組んでソファに座り、果てには貧乏揺すりまでする始末。見ているのに気付かれたのか、睨まれる。慌てて全員が視線を逸らす

イライラしているのは他でもない。(一応)現役メンバーに入る部長だ。その理由は楽しみに取っていたケーキが食べられたとか、そんな子供じみたことが原因じゃない。それは身内の人物に関わってきまして……

「アノ野郎は何処で油売ってやがるんだ……っ！！」

アノ野郎とは我が姉、神崎雫のことになります

今日から特訓が始まると言うこともあり、姉貴を除くOB一同は俺たちが授業中の間に部室内で予定や機械の調整をしていたらしく、今は最終準備と言うことで先にVWに入っている。だがそのメンバーは1人足りず(姉貴が)、何度メールや電話をしても繋がらなかったらしい。部長の言うとおり何処で油売ってるんだあの姉は。昨日あの場にいなかったとはいえ何をするかくらいはわかっているだろう

ちなみについ5分前俺から連絡を入れてみたが反応無し。無機質な音が帰ってきた

「昨日メールで連絡は行ってるはずだ……集合時間もちゃんと記入して念押しのために3回同じ内容書いて……だのにどうしてだ……！」

それを読んで来ないってどういうことだ

「あの……部長？」

「ああん!？」

何故だかわからないが俺が怒られた

「……アレは放置してとりあえず始めていただいた方が……皆さん待ってることですし……」

「チツ……確かに隼人さんたちをこれ以上待たせるのもアレだな……俺はここで待ってるから行ってこい」

表情と喋り方は変わらないが、どうやら俺の意見を聞いてくれたみたいだ。周りのみんなも同じようなことを考えていたのだろうか、安堵する声が聞こえてきた。そのまま全員が立ち上がり、転送機器の元へと向かう。その横には6人の身体(だけ)が準備をして8人でVWへと向かう

特訓内容は個人によって異なる。そう告げられていた

弦巻高校 Wars 部部室、Wars VW 展開機器内森林ファイ

ールド

僕と光久の2人は光久の姉さん……楓さんと、自分のちよつとした知り合いの幸司さんの前に立っていた。気がつけば周りにみんながいない。それに加えて知らないフィールドだったりする。こんなフィールドのデータを入力していたのか

「ようこそ、俺たちだけしかない特訓会場へ」

「ここでは私たち2人が、2人の特訓相手になるというわけ」

それはすでにわかっている

「まあわかってるとは思うけど、軽く自己紹介をしよう。楠乃幸司、くすの こうじ健太はわかってるな。光久くんは……昨日はお疲れ」

幸司さんが笑顔で光久に振り向く。昨日のあの戦闘、目の前にいる2人に為す術無く無様に散り、色々とトラウマになっていたりする。光久はいかにも作ったような笑顔でよろしく申す、と呟く。まあ僕としてはその相方、楓さんの実力も気になった物で……

「私は光久の姉の明智楓ね。光久はともかく、健太くんはお疲れ様」

そして幸司さんの横に立っている楓さんが笑顔で手を振ってくれ
る。なかなか良い笑顔。僕の趣味がお姉さん系だったら間違いない
どストライクな女性だ。特にあの胸部にある2つの脂肪が凄い。レ
ベルで言えばエルぼんや藤堂以上だ。かおりと同等……それ以上？
綾香にもあそこまで頑張ってみて貰いたい。弄れる話になりそう
だし

真箏と違つてすぐに脳の切り替えが出来る、僕は邪念を捨てて光
久と一緒に挨拶をする。全く……あんな兵器と暮らしているなんて
卑怯だな光久は。今度泊まりに行こう。真箏も連れて行こう。そろ

そろアイツの本音を聞き出さないと女子共が可哀想になってきた

なんてくだらない事を考えている内に、楓さんの口から説明がされる

「まあ2人にはこれからいつ相手の襲撃を受けても大丈夫なように反射神経の強化をしようと思う。まず手始めに……光久は幸司の所に、健太くんは私の所まで歩いてきてみて」

あり得ないくらいに簡単な要求をしてくる楓さん。だが光久が歩き出すと同時にあちらにいる2人が不適な笑顔を浮かべていたような……気のせいかな？ 罨？ 考え過ぎか。いくらなんでも悪趣味だな警戒はしながら僕も歩き出す
だが

ドンッ

「……え！？」

横の方から銃声が聞こえてきた。あまりにも急すぎることでだったので身体が反応せず、肩に一発銃弾が命中する。でもそれは演習用のゴム弾だったのか、軽い痛みだけで済む。今のは完全にハメられたのだらう。これも特訓の一部って事か

「まず不合格。こりゃ大変だな……」

「それをなんとかするのが私たちだって。もう何も仕掛けてないから心配しなくて良いよ」

その言葉を聞いて再度歩き出す。その言葉の通りこれ以上何か罨が仕掛けられているわけでもなく、何事もなく2人の元へと辿り着

いた。すると今度はポケットから何か……1本の細長い黒い布を取り出し、僕と光久に手渡す

「さてと……まずは目隠し状態になって……音に反応できるような耳を作るつか」

そして、僕と光久の1週間に渡る特訓が始まった

同時刻、同地点。工場フィールド

「……ここ何処……」

見覚えのない空間に驚いたけど、それもたったの一瞬。周りに誰もいないことにすぐ気がついて、特訓はすでに始まっているんだ、と理解した。この様子だとみんなバラバラな場所でやっているんだろうなあ。無事に会えると良いけど

なんて思いながらも工場と思しき空間を1人寂しく彷徨い始めてから2分くらいが経過した。それなのにも関わらずボクの目の前には誰も現れる気配がない。ただ自分が鈍いだけなのかな、とか思ったりもするけど、これでも結構勘が良い方だとは……自分で思っていたりする。それでも真筆くんの本心を読むのだけは苦手なモノで……

「本当に気が参るよ……」

「恋愛相談ならいくらでも乗るよお……」

「特訓に加えてわざわざすいません……」

どうやら今の独り言と言つ名のつぶやきを聞かれたのか、すぐ後ろから女性の声が聞こえてくる。あまり聞いたことのない声……多分明智くんのお姉さんじゃないみたい。それでも誰だかは予想が出来る。人物的に

後ろを振り返ると、そこにはライフルを片手でこちらに向けながら立っている女性の姿が。身長はそれなりに高い人だ

「……えっと」

撃ってくる気配は無いけど状況が状況なので今は心臓がドクドク言っている。本当はいつ撃たれるのだろうと不安が募っている

でもそれもすぐに収まった。こちらを振り向いてから2秒後に武器を仕舞って手を差し伸べてくれた。意図を理解して握手を交わす

「虹美華^{にじみはな}。よろしくね琉華ちゃん」

「こちらこそよろしくお願いします。それはそうと何たって銃を

「

気になっていたことをいざ尋ねると、虹美先輩は笑顔で答えてくれる

「今の本番だったら殺られてたよ？」

その言葉に真箏くんのお姉さんの言葉と同じくらいの精神重圧^{フレッシャー}をかけられた。いや、それはわかっているんだけど……この人たちのこの言葉は心臓に悪い。なんだか本当に……VWの中じゃなくてRWで殺されるような……そんな痛みが走る

すぐに平常心を取り戻すことに成功して、ボクも使い慣れた武器を取り出す。何故だか足がガクガクなっている

「……ポジションは陣旗護衛……なるほど。高場を制して上からの攻撃、だよな」

「はい……でも……」

昨日の試合を思い出す。昨日は変則ルールだったと言うこともあって陣旗を守る必要性が全く無かった。だから本当は動かないといけなかったんだろうけど、何処かに恐怖心でもあったのか、1歩も動けずに、そのまま……

「スナイパーだからといって、持ち場は高場だけじゃないんだよ。ちゃんと行動して相手を探し出さないとね」

いつの間にか接近してきていた虹美先輩に狙撃されて戦闘不能に……しかも上でも横でもなく、自分のいる場所の下、障害物ヒルの下からだ。今のボクには到底出来ない仕事だ

「スナイパーは何があってもテンパっちゃいけない。それが狙撃制度を狂わせ命取りとなる。目標を視界に捉えたら2秒で撃て。外せば死す。OK?」

「な、なんとなくわかりました……」

大切なことを一気に言われたけど、一言も聞き漏らすことなく全ての言葉を記憶する。でも……2秒で撃てって絶対に照準を合わせられない気がするんだけど。全国レベルだからと言ってそんな事をするのはほぼ偉業に近いような……

虹美先輩が指パツチンを鳴らす。するとフィールド（工場）の屋根が開きだし、太陽の光が差し込み出す。あまりの眩しさに目を細めてしまう

「さてと……琉華選手。特訓始めるよ!!」

差し込む光に目も慣れて少しずつ視界を広げていく。すると、虹美先輩はいつの間にか遠くに移動していて、その横にはテーブルとその上に置かれている5本の空き缶が。大体何をするのかがわかってきた気がする

「まずはね……これを7秒以内に全部倒して貰おうか！」

みんなの役に立てるようにならないと……

心の内にその目標を立てる

ボクも強くなるための1週間にわたる特訓が開始された

同時刻、同地点。RW、転送機器前

「わ、わたしたちはここで大丈夫なんですか……?」

わたしと1人の先輩が機械の前に座っている。もちろん目の前には皆さんの様子を窺えるモニターもあって、それぞれ特訓を始めている様子が映っている。そして目の前にいる先輩は聞く耳を持たないかのように持参していたパソコンを弄っている。意図がわからない

「その……」

「たまにはこうやって落ち着くことも大切だよ?」

「えっと……」

じゃあわたしは何でこんなところでこんなことをしているんだろう。これは特訓じゃなかったのか。サポートルームに居座っているわたしは何もせずにごうあって皆さんの特訓風景を眺めてるだけでも言うのだろうか。それだけは絶対に嫌だ

「わたしは　　！！」

「キミの考えている事くらい全て把握してるよ？　強くなりたい？　足手まといは嫌だ？　ましてや誰かさんを好きだと言う事まで把握しているけど？」

「ふえっ！？」

「冗談だけど？　本気にしないで欲しいかな？」

一瞬心臓が止まるかと思った。もしかしてこれはカマでもかけられていたのだろうか

……………でも

強くなりたい、足手まといは嫌だというのは事実のことだ。神崎さんの事は……………まあ事実ですけど。失礼けど今は関係ない
先輩はパソコンを閉じてこちらを見、不適な笑顔を向ける。かけているメガネが怪しく光ったような気がした

「キミにはどうも技術が足りない……………それを付けさせるのがボクの役目？　ククッ……………」

「……………」

悪寒がした。昨日もそうだったけど、あの時送られてきたウイルスはとて強力すぎるモノだった。下手をすれば本機にも影響しかねないとても強力な。それによつて皆さんの位置の把握、通信が出来なくなつて……………対処している内にやられて、敗北してしまつた。あんな物を試合が始まつた短時間で送り込むなんてどれだけの技術

力を持っているんだろう
でもその疑問はすぐ明らかとなる

「前提の話？ V Wに持って行ける物は武器だけ？」
「え？ そうなんじゃないですか？」

あまりにも当たり前前すぎる質問に難なく回答する。しかし、それを間違っているかの如く、笑い、右手を横に振って否定のサインをする

「……ふふふ……それじゃあ基本から始めていこうか？」

こうして、RWでもwarsの基本ルールから確認する特訓が開
始された

同時刻、同地点。都市フィールド

「そんな事が」

「……はい。私は何も知りませんでした」
「なるほど」

「……何故……なんででしょうか」
「それは望が鋭いから」

「……琉華ほどじゃありません」
「それは自分での考え。自分の事なんて自分で全部わかるわけじゃない」

「……違うと思います」

「……はい」
「……」
「……」
「……」
「……えつと」
「1つ言い忘れた」
「……え？」
「たまには思い切ることも大事」
「……」
「心に留めておくと良い」
「……」
「返事」
「……はいっ」
「良い返事。それじゃあ本当に始める」
「……はい！」

ガチャ

「……やっと来やがったか」
「いやあ悪いねえ雄太くん。携帯の電源切りっぱなしなの忘れててさー」
「言い訳は後で聞いてやるから今は神崎達の所に行け。そして隼人さんたちに謝れ」
「神崎……ここにいる私は何!？」
「……神崎真筈たちの所に行け……」
「はいはい」

「ちゃんと謝ってくれよ……」
「大丈夫だつてー。まあ私個人としては？ 雄太くんが早く私にデ
して欲しいな、なんて」
「誰がお前にデレるか。人の気も知らないで」
「あれ、もしかして脈有り？」
「有るわけないだろバカめ」
「先輩に向かってバカとはなんだバカとは」
「黙れ。とつとと行け」
「全く……相変わらず手厳しいねえ」
「アンタのせいだろ……」
「はて、記憶に無いのですが」
「思い出すように痛めつけてやるうか？」
「……それ本気で言ったらオレがテメエを殺すぞ」
「……」
「2度とそんな口聞くんじゃねえ」
「言ってる」
「つたく……さてと、言ってくるかなあ」
「……」
「あれ、お見送り無し？」
「……神崎隼」
「はい？」
「……」
「どしたん？」
「……いや、今は止めておく。確信が出来たら話す」
「なるほど……」
「わかったのか？」
「恋バナか！」
「んな訳ねーだろ。なんでもないから早く行け」
「連れないなあ……ま、雄太くんだけじゃなくて隼人も弄るかなあ」
「」

「……隼人さん……」

「じゃっ！」

「……ふう……。……考えすぎ、だよな……」

6 1 それぞれの放課後（後書き）

お疲れ様でした。この数日自分が何をしていたのかは、活動報告の方をご覧になってください

相変わらずの文でしたね……… すいません。最後は相変わらずですね

………これがフラグとなるだろうか………

知らん

それではまた次回、会えたら会いましょう

#62 神崎雫という人物(前書き)

……何故だろう、自分で書いたのに自分で吹いたw
死んできますorz

62 神崎雫という人物

1週間にわたる特訓が始まってから4日目の昼

『……………』

まだ3日も残っているというのに全員が燃え尽き、机の上突っ伏している異様な光景が1年5組の隅の方で繰り返られていた。メンバー全員がちゃんと呼吸できているのが不安だ。それと今の場にはいない穹の事が不安になってくる。俺たちと比べてまだ体力は多いからこんな事態になっているとは思えないけど……

今この場にはwars部の皆さんとエストラント家のメイドさん、健太の幼馴染みがある。メイドさんはいつものように望の頬を突いていた。もちろん微動だにしない

「アンタら本当に大丈夫なの……?」

「望がこんなになるって本当珍しいよな……」

この2人は俺たちが今どんな状況にあるのかを知っている。理由は知っている。ただ詳細だけは伝えていないので、どうしてここまでの被害が出ているのかはご存じではない。ちなみに各々のような特訓をしているのかもまだ確認していない。2日の間に時間はたっぷりあったものの、その2日はそれぞれの教室で食べるようになっていたので話すことも無かった。そして部屋でも到着したらすぐにVWという状況。終わる時間もバラバラ、帰る時間もバラバラ。とにかく話している時間がなかった。今日が徐々に全員集合した日だと言える

健太と俺がゆっくりと身体を起こす

「綾香に心配されるほどヤワじゃないよ僕の身体は……」
「奇遇だな健太……相手が相手だが慣れてるから問題ない……」

その様子を笹原さんは心配するように、朝比奈さんは（俺だけに）冷たい視線を送ってくる。まあ先月にあんな事があつた訳だし時雨さんに説明くらいされたんだろう。その一件を思い出しても今は何も来ない。状況が状況だからかもしれない

それに続くように光久がゆっくりと身体を起こす。健太曰く光久とペアで特訓をしているとか。それでもまだ特訓の内容は聞いておらず……というか聞いている余裕が無かったと言ってもいい

「一応光久は僕以上の事をやってるわけだしなあ……一番辛いぞ今回」

「そうなのか？」

横にいる健太が光久の代わりに辛そうな顔でそう呟く。話にあがっている本人は今でも息が上がっている……って言ったら大袈裟な気がするが、実際ここに来てからずっとそんな感じだ。悪夢でも見ていたんじゃないかって感じに汗まで掻いている。その様子から状況のほどが窺えなくもない

「……VWだからまだ被害は抑えられてるものの……」

「まさか……」

「……この3日間で計21回」

「よく耐えてられるな光久……」

どうやら予想は当たつたらしく、健太が小さく呟く。関東大会のあの時に見たアレだろう。光久の左目 眼帯を外して、あの力を

制御する特訓をしているんだろう。確か外せば力を制御できずに暴走してとんでもない強さになるはずだったが……それを2人で抑えながら？ 全国出場者なら問題は無いのだろうが、光久の身体を考えてみても欲しい

……それはともかく、今の話を聞く限りこの2人の所には楓さんがいるというのはわかった。多分それに加えて健太の知り合い（幸司さん）がいるんだろう。……間違いないと思う。楓さんなら光久の左目の事は知っているだろうし、そうでなければそんな特訓はしないだろう

「これも……拙者の強さの為だ……この程度で倒れるわけ無かるう……」

「本当なら21週間程度倒れてるはずなのにな……」

「光久……そんな無理してまで強くなれとは」

「ふふ……拙者がそう成りたいだけで、姉上には無理を承知で申したことだ……心配は無用」

……こうは言っているが表情にはかなり出ている。俺にもっと元気が残っていたら今すぐにも病院にブチ込みたいところだ。聞かないとわからないけど健太も同じようなことを考えているだろう。呆れた表情を見せている

「……明智くんがそんな辛いならボク達もこう寝てられないかなあ

……」

「藤堂……大丈夫？」

「へへ……佐々木くん心配されるほどじゃないよ。それにみんなが思ってるよりも簡単だし」

……光久同様顔に「辛いです」って書いてあるんだが

琉華が受けている特訓の内容が本人の口から明らかに。相手は虹美さん、殆ど同じポジションに当たる人物らしいが行動はアクティブ。まずは琉華もそうなるように特訓を受けているらしい。加えてライフルの扱い方の強化、反応速度、テンパらないような精神作り等々、辛く無さそうで地味に辛い特訓内容を聞かされる。その後ゲツソリして溜め息を吐いていた

続いて望が起き上がる。その様子に朝比奈さんは頬を突くのを停止し、今にも倒れそうな身体を支えていた。流星はメイド、気遣いが良い

「……ならば琉華より楽。……走って武器の扱いを学ぶだけ」

……確かに望ならその程度楽にこなしそうだ。それでも辛そうにしてるって一体……

望の相手は鈴川すずかわれいさん。話したことは無いが、かなり寡黙な人だ。もしかしたら望より静か……この2人どんな会話してるんだ。そもそも会話してるのか。不思議な組み合わせになっている

それよりも特訓内容。どうやら《都市》のフィールドを1周、その後それぞれの得物を取り出して手合わせをしながら動きの確認、それだけをしているらしい。相手が相手なだけに辛いとは思うが……まあ本気は出していないとは……思う。多分。軽く欠伸をしてから持ってきた弁当に手を掛け先に食べ始める望。やっぱり余裕そうだ。特訓後の実力に期待したいところだ

続いてペアの明日香が起き上がる。俺、穹と一緒に特訓していると言っこともあり、相手と内容はわかっているが、もちろん説明が始まる

「……辛い」

が、説明が始まる前に意識が落ちたかのように再び机へ、静かな呼吸だけが聞こえてくる

落ちた明日香の代わりに俺が説明を開始する。相手は姉貴と隼人さんの2人、そしてこちらは3人。よく考えたら最初の試合に成らなかった試合で手合わせしたメンバーだが……それは今どうでもいい。そのメンバーで望と同じ感じの特訓を受けている。更には何処から持ってきたのか隼人さんが持ってきた武器を試しに使うというそんな感じだ。今のところしっくりするものが無くて困り果てているんだが。明日香はトンファーがしっくりくるとか言い出すし……穹もハルバードが面白そうだとか言っていて……こちらの身にもなっってほしい

望に続くように俺と健太と光久も弁当を食べ始める。琉華も先に食べ始めていたが明日香が再起するにはもう少しかかりそうだ。残りのエルフィは……

「そつえばエルはどんな感じなの？」

と、気になっていたところで琉華が質問をする。だから口に物を含みながら喋るなど……

エルフィが突っ伏した状態から顔を持ち上げ、視線を琉華に向ける。そして疲れたように言葉を発する

「……わたしは……その……システムの基本学習と応用知識の勉強を……」

「はあっ!？」

ガタツ、と大きな音を立てて明日香が立ち上がる。どうやら完全に落ちてはいなかったらしいが……じゃなくて、あまりにも大きすぎる音に教室の生徒達が一斉にこちらを向いてきた。それにすぐに気がついたのか、明日香は頬を赤くし、咳払いをしてから静かに席

に着いた。かなり元気がありあまっているじゃないか。さっきのは何だったのだね明日香

キョトンとなっっているエルフィに明日香が近寄る

「……学習とはどういうことだ？」

「そ、その言葉の通りですよ……三木先輩曰く、わたしの技術力はまだまだ低いそうで……基本を学んで応用も学習しながら開発という段取りをですね……」

「聞いている限りだと楽に聞こえるんだけど……」

聞いていた琉華が半目で呟く

「ら、楽じゃないですよ！！ だって今まで使ったことのないソフトとかツールとか使ってるんですよ！？そう簡単に追いつけるわけ無いじゃないですか！！」

「ああ……だから部屋の前に見たことのないダンボールがたくさん広がっていたんですね。昨日は帰ってきてからずっと引きこもってあげくの果てには風呂に入らな」

「紗凧さんストップ！ それ以上喋らないでください！！」

今度はエルフィと朝比奈さんの間で家庭内で起こっていた話になる。ダンボールと言うことは……多分いろいろと取り寄せたんだろうな。熱心になるのはいいけど集中しすぎて倒れないようにして貰いたい。そして朝比奈さんの手つきが嫌らしくなってきたの気のせいだろうか

……危ない状況になる前に望が手錠を掛けて動けなくしていた。何処から取り出したんだあんな物

「……まあいい。今日も含めてあと4日あるんだ。これで倒れてるようじゃ身が保たない。気合いを入れてやるぞ！」

そう言いながら再びガタツ、と明日香が胸の前で拳を作りながら勢いよく立ち上がる。もちろん今の音に反応した教室の生徒達がこちらに注目しだし、さっきと同じように静かに席に座る明日香。さっきまでのお疲れモードは何処に消えたのやら。まあ確かに明日香の言うとおりいつまでもお疲れだと身体も保たない訳なので……弁当食べて午後の力を付けておかないと

「……明日香壊れた」

「うん。ボクもそう思う。疲れが溜まりすぎてるんだね」

「そ、そんな目で見るな……」

2度も同じようなことをしたのが恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして俯く明日香。それを見ながら男子達は食事を進める

特訓も4日目だ。2人と同じように新しい戦い方を見つけることは出来るんだろうか……

放課後

「遅かったな神崎。お前が一番最後だ」

部室に入るといつものポジション（ソファ）で腕組みをしながらこちらを見ている部長の姿があった。どうやら他のメンバーの特訓はすでに始まっているらしい。エルフィは話の通り機械の前で様々な本を開いて勉強……もとい特訓をしていた。これからは連絡だけじゃなく相手の妨害もしたりするのだろうか。それはそれで大変そ

うだ

いつも自分が座る椅子の前……テーブルの上に鞆を置いて椅子に腰掛ける。その行動に驚いたのか、部長はそんな表情を見せていた

「何してるんだ……早く行け」

「今国語の先生に色々と話をして疲れてるんですよ……ちょっと休ませてください」

……昨日疲れすぎて国語の宿題を忘れたから怒られていた。珍しく話が長かったから困る。何故か溜め息まで出てきた。同時に部長からも溜め息を漏らす声が聞こえてくる

「そんなんでへばってどうするんだ……もつとアクティブにだな」

「全然動かない部長に言われたくありませんよ……」

「失礼な事を言うな神崎。俺はこれでも中学の時はバリバリ動いてたんだ」

意外すぎてつい鼻で笑ってしまった

もちろん銃弾が頬を掠る。そういえば部長は全国レベルの実力を持っているんだ……それなら今の話に不思議な所なんて1つも無いことがわかってくる。ただまあ今の状態と比べたら……駄目だ、また笑いそうだ

と、思ったところで再び銃弾が掠った。さっきより地味に内側を掠った気がするのはいのせいかな

部長が銃をしまってこちらを睨み付ける

「これ以上長居したら目を撃つ」

「勘弁してくださいよ……ただでさえ相手が姉貴なんですから……」

「ああ……そういえばお前の相手は神崎寧だったな……」

苦笑しながらこちらを見ている部長。なんとというか……俺が一方的にやられている様子を見るのを楽しんでいるような……

ここで1つ前々から思っていたことを思い出す。どうせ今こんな話になっているんだ、聞いたって損はないだろう。気になったのは部長と姉貴の関係、ただそれだけだ。思い切ってその質問を口にしてみることにした

「……そういえば部長って、姉貴とどういう」

そこまで言ったところで再び銃弾が

「あぶなっ!!」

2発掠り、最後に3発目が右目の辺りを通過していった。2発目が発射されたときに危険を感じたので、ブリッジをする体勢になったらそこを通過していった、ということだ。避けていなかった確実に失明していただろう。殺す気が

いきなり曲げた身体をゆっくりと元に戻す。戻った瞬間に銃弾が掠るとかそういうのはやめてください、マジで

「……思い出しただけで腹が立つ」

どうやら姉貴とはただならぬ関係をお持ちのようです。そんな嫌そうな顔をしないでください、弟として悲しくなってくるんですが
とは言いながらも部長の口が続きを話そうとしているのは気のせいだろうか

「……何があったんですか……一体」

「……12年前……俺がまだ幼稚園に通っている頃だ。來斗の家で遊んでたらアイツ（当時10歳）が入ってきてな……何故か良いよ

うに玩具にされたんだよ……」

「ああ……」

「しかもその時に……俺はお前と星乃妹と会っている」

「ほ？」

思わず間拔けな声で返事と思われる返事をしてしまう。俺と穹が部長と12年前に会っていた……？ はて、全く記憶にない。あるとしても楽しかった思い出しか……

今にもブチ切れそうな部長の表情、それでも話が続いていく

「それで止める来斗を尻目に俺は神崎姉弟と星乃妹に玩具にされ……
…思い出すと今でも殺したくなるな」

「物騒なんでやめ……」

ここまで言ったところで何かを思い出す。なんというか……穹と久々に会ったときと同じような感じに。人生思い出したくない記憶も色々あるんですよ、神様？

12年前、いつだったかは忘れたが俺は穹と遊ぶためにそちらの家に向かった。たまたま姉貴もいたので来斗兄とも遊ぶことに。だが来斗兄の部屋に押し掛けるとそこには知らない男の子がいて……姉貴が遊ぼうと言ったけどその子は無視して、来斗兄も同じ感じに無視したら……姉貴がとうとうリミッター解除して、その子を弄くり回すように……それで姉貴に促されるまま俺と穹も混ざって……

「……あの時の男の子は部長だったのか……」

「思い出してくれたようで結構。では死ね」

「いえ、これから特訓なのでVWの方に向かわせていただきたいです
あります」

「遠慮することはない。大丈夫、2秒で済む」

「いえいえ遠慮しておきますよ。そんなお手数かけるわけには……」

「……命令だ」

「行つてきますー!!」

そして怒りのゲージがMAXを振り切ったであろう部長から逃げようにVWへと突入する。その時エルフィとその相手……三木先輩が「何事？」と言いながら転送してくれたが、それどころじゃなく説明することなくVWへ。部長が襲つてこなかったのは何故だろう、それだけが疑問に残っていた

「……弟と姉は違う……のか。不思議な姉弟だよ、アイツらは……」

VW内、都市フィール

「ぐぼおっ!!」

到着するなりすぐ姉貴による大打撃を喰らう。せめて……いや、なんでもない

いきなりの攻撃を受けて数メートル吹き飛ばされる。武器を持っている姉貴の性格を考えるとこのまま第二波が飛んできそうな気がしたが、流石に状況はわかっているのかこれ以上の攻撃を仕掛けてくることもなく、先に特訓を開始していたメンバーの元へと戻っていく。俺も立ち上がり、それに着いていくように歩き出す。3人のいるところでは隼人さんが「うえ……」と言いながら姉貴のことを半目で見つめていた。明日香と穹は必死に視線を逸らしていた

やっこのことで全員が集合する。まあ遅れた自分が悪いんですが

「遅かったね真箏。何やってたの？」

と、穹がまだ視線を逸らしながら尋ねてくる

「ああ……ちょっと国語の先生に呼び出されてな……」

「うわ、真箏もついに不良……？ お姉さん泣きたいわー」

「黙れ。不良じゃなくて宿題忘れただけだって……」

誰が不良になってたまるか。というか姉貴だけには絶対に泣かれない。常識を持たない人に泣かれたくない……です

TEMを起動して望との武器共有で借りている刀を取り出す。体力は全快していないものの、本日の特訓を乗り切るくらいの体力なら残っている。いつでも特訓は始められる。が、

「悪い……ちょっとこれから10分休憩を挟もうと思う。真箏がない間に女子2人が体力切れで……」

隼人さんが申し訳なさそうに頭を掻きながら口を開く。……今の2人の状態から体力切れにはとも思えないんだが……もしかしたら講師のお2人が疲れているだけなのでは……と思ったが口にするのはやめておこう。休憩できるならそれはそれでラッキーだ

「休憩」という単語を聞いたからなのか、明日香と穹が急に体勢を崩して地面の座り込む。……本当に疲れていたのか。普通に立っているから疲れていないのかと……無理していたのかもしれない。その様子を見て俺は武器をしまい、姉貴がペットボトルに入ったスポーツドリンクを5本取り出す。それを丁寧に配って休憩が開始される

「というか隼人お……何で休憩入れるのお？」

「あのなあ……少しは休むことも大切だろ？ ただでさえ先の3日

は休憩入れずにずっとやってたんだからこれくらい当然だろ……」
「ビシバシ当たればいいのにさあ」

姉貴、アンタは鬼か

「つままないから楓の所行ってくる」

その言葉を残して姉貴がこの空間から消える。なんでも健太達がいる場所に行くには一度RWに抜けてから行かないといけないらしい。なかなか面倒な構造になっていると思うが、普段だところやつて会場を分けることが出来ないらしいので、そこは三木先輩の技術力に感謝しないとイケないそうだ

ちなみに望も《都市》のフィールドでやっているらしいが、他のメンバーと同じようにまた別の会場になっているらしい。つまりは《都市》が2つあるということだ。こちらがAならあちらがB……
本当に面倒だ

「……ところで大丈夫かお前ら」

「私はもう無理だ……」

「こっちはちよつと微妙かなあ……お姉ちゃん容赦無いし」

俺がいない間にもこんなことになるとは。武器を持った姉貴は俺らにレベルを合わせられないのだろうか……

すると、肩に手が置かれる感覚が伝わる。後ろを振り返ってみると……この場に残っている最後の人物、隼人さんの姿が。なんとなく深刻な表情をしているような気がするのは気のせいか

「……真筈」

……声まで深刻でした

「……なんでしょうか……」
「少し……お前と話したいことがある」

隼人さんが話……全然想像がつかないが、何か深刻な話をされそうなのがするので覚悟を決めよう……聞かないわけにはいかないし、とりあえず穹と明日香の方を確認してみる。すると、表情を変えずに頷いてくれた

「はい」、と返事すると隼人さんはその場を離れ始め、1本のビルの裏へと回り込んでいく。なるほど、俺と2人だけで話したいと言うことが……行くでしょう。2人に行つてくると伝えてから後を追いかける

ビルの裏では隼人さんが座って待っていた。座るように促されたのでその隣へと座り込む

「……なんですか、話つて」

自分でもその内容が気になっていたのだろう。相手から話し始める前にこちらから切り出していた。なんでこんなことをしているんだ俺は。しかし隼人さんは気にした様子もなく、表情を変えずにこちらを向いた

隼人さんの口が動く。そこから聞かされる言葉を聞く準備は出来た。大丈夫だ、何も心配する必要は……ないはずだ

「……実は、な」

「……お前の姉………雫を俺に出来ないか？」

「……」

……はい？

あまりにも驚愕的な内容だったせいか、思考が停止してしまう。大丈夫、今の言葉に何もおかしい部分はない。冷静に、慎重になつてから情報を整理しよう

まず、俺は隼人さんに話があると言われて今この場にいる
そして俺と2人しかここにはいない、ゆえに誰にも聞かれていないはずだ

その特殊な空間の中で隼人さんはなんて言った？

「雫を俺にくれないか？」

何もおかしいところはない。ただおかしい部分があるとするなら、「姉貴」という部分だけだ

落ち着け、落ち着け俺……

落ち……

「落ち着けるかあっ！！！」

「うおっ！！！」

頭の中が混乱しすぎたのか、大声を出して立ち上がってしまった。横では突然の事に驚いたのか、数cm後ずさつている隼人さんの姿が。いや、驚いたのは俺の方だ。下手したら今の声を2人に聞かれただけ言う可能性も……いや、遠いしあの2人は動けなさそうだから大丈夫か

すぐに頭を冷やして地面に座り込む

「ど、どうしたんだ真筈……落ち着いてくれ」

「だ、大丈夫です……えっと、その……すみませんが、もう1度お願いできますか？」

「う……神崎雫を……俺にください」

「これが悪夢であることを望みたいっ！！！」

「ひ、人が真剣に言ってるのになんで悪夢であって欲しいんだ!!」
「それは出てきた名前が姉貴だからですよっ!!」
「なるほど」

「納得早いですね!？」

……確実に聞かれたかもしれない

とりあえず落ち着けと言われたので、再び頭を冷やして地面に座る。今この場に冷たい水があつたら頭から被りたいところだ。寒くて死ぬが

横にいる隼人さんが口を開く

「……それじゃあ順番に整理しておきたい……俺、立花隼人は、お前の姉、神崎雫の事が好きだ」

「……」
「その次。それは俺たちが Wars 部にいる頃からだ」

「……」
「……俺がアイツに好きだと言ってまともな返事すると思うか？」
「到底思えませんね、性格を考えて」
「だろ？」

隼人さんが相談してきた理由がなんとなくわかってきたような気がしなくもない

今の内容から察するに、隼人さんは高校時代から姉貴の事が好きで、それが今もなお継続している。告白を試みているが、姉貴の性格上まともに返事をするとは思えない、加えてそれが新たな話題のネタになりかねない。だからそうならないためにはどうしたらいいのか、などを弟の俺に尋ねてきた、と

……姉貴がそう思われているのは弟の俺からしても喜ばしいことなのだが……何故だろう、どうしても素直に喜べない。姉貴が

そう思われたからじゃない。姉貴の駄目な性格を考えたからだ
2人で溜め息を吐く

「……実際告白はしたんですか？」

なんとなくあり得なさそうな質問を試みる。性格がわかってい
るならそう無謀な事はしないと思うが……

「……高2の終わりに告白してみた」

「……とんでもないチャレンジャーがいた

「……結果は？」

「見事に玉砕。『やだなあ、また冗談言つて。次回は本気でかか
つてくるがよい！ いつでも挑戦は受けて立つぞ！』、と言われて
翌日には学年中に広まっていた……」

「……」

何故だろうか。家庭の事で苦しんでいる明日香より、恋愛関連の
話で苦しんでいる隼人の方がよっぽど苦しそうに見えてきたの
は何故だろう。その惨状はあまりにも可哀想すぎるぞ……

隼人さんの話は続く

「それ以降何事もなかったかのように生活してたわけだが……その
まま進展も何もなくこのまま来た、って訳だ」

「それで俺に相談してみた、と？」

「ああ……義弟おとこに聞けば何かしらヒントが得られるんじゃないかと
思ってた……」

「待ってください。今何かおかしくありませんでした？」「弟」じ
やなくて「義弟」って言いましたよね？」

「ん？ 俺は「おとうと」と言ったつもりだったが……」
「……すいません、何か聞き間違えたみたいです」

何故だろう。さっきまで真面目な話を聞かされていたのに一気に
変な方向に進んでないかこの相談。失礼だけどころか俺の周りに常
識人ってあまりいないんじゃないか？ ……まあ今は聞き間違い
として捉えておこう。本当に聞き間違えた感じがする

しかし……まさか本気で姉貴の事を好きになる男性がこの世に存
在するとは……誰が想像したことか。多分先日の姉貴の発言を聞いた
母さんですら今はその予想を立てることは不可だろう。1度告白
して玉砕して今もまだ好きでいられる、か……

「……真筈？」

「……あ、いえ……すいません。ボーツとしてました」

自分でもわからないがボーツとしていたみたいだ。そんな余裕は
ない。今は隼人さんの相談に集中しないと

「それで俺は何をすればいいんでしょうか」

「そうだなあ……少しずつ探りを入れていってみてくれないか？

出来れば気がつかれないように……さりげなく？」

「……極力頑張ってみます」

そして俺と隼人さんによる「神崎雫攻略作戦」が今ここに開始さ
れることが決定され、メールアドレスの交換をする。経過の報告な
どをするため。その交換条件として暇な時に特訓の相手をしてく
れるそうなので、その打ち合わせの為の交換だ。どちらにも不利益
は存在しない。こうなった以上本気で協力しなければ。母さんや穹
に手伝って貰うのもアリか？

気付けば休憩時間の10分はあっという間に経過していた。再び全員が　ではなく、姉貴を除いた4人がさっきの場所に集合する。穹と明日香はそれなりに回復したらしく、休憩時間の終わる2分くらい前から2人で手合わせをしていた

「……多分楓を弄くり回してるんだろぅな……」

隣にいる隼人さんは遠い目をしながらそう呟いていた。その呟きに反応したのか、穹と明日香は目を大きく見開いて赤面していた。どうやら変な想像をしたらしい。……理由は……考えないでおこう

姉貴が来ないのは仕方がないと言うことで本日も特訓が始まる。今日も隼人さんは様々な武器を持ってきていたらしく、それが地面に散開される。女子2名はそれなりに気に入った武器を今日も持ち、扱い方を自主演習していた。昨日触っただけなのにかなり扱い慣れているような……

「明日香ぁ……トンファアの調子は？」

「良好……だが攻撃に特化しないな。どちらかというところ防御寄り……まあ使いやすいのは確かだな」

「……穹は……ハルバードだったな　って、危なっ……」

「おおゴメンゴメン。立花先輩みたいに大型じゃないから威力は劣るけど攻撃力はあるね。リーチも長いしこの程度余裕余裕」

2人とも新たな武器の開発に勤しんでいるようだった。俺は完璧に出遅れたかもしれない。武器共有で望から刀を借りてはいるものの、やはり今まで銃に頼っていたせいだ接近戦に回るのはまだ少ない。このままだと本当にこの特訓の意味は何だったんだって思えてしまう。せめて刀だけでも上達しないと駄目だよな……

すると再び肩に手を乗せられる感覚が。もちろん隼人さんしかない。後ろを振り返ってみると、T E M Mを起動してまた別の武器を取り出す隼人さんが

「なんとなく……な、姉弟だから近い所はあるんじゃないかと思っ
てな」

「え……？」

姉貴の使っているような武器　棒武具を持ち、こちらに向けていた。要するにこれを使ってみると言うことらしい。目を見て確認してみると、隼人さんは何も言わずに目を閉じてゆっくりと頷いた

「姉弟だからと言って……そう簡単に使えるような物じゃないと思
いますけど」

その考えはその武器に触れる直前までの事だった

「……………」

隼人さんの持つ棒武具を受け取る。すると何故だかわからないが全身の毛が逆立つような感覚に襲われ、どうしたことか姉貴の笑顔が脳裏に浮かぶ。それに続くようにして母さんの悲しげな表情が通過し、最後には脳内の色が真っ赤に染まり始めた。あまりの恐怖に手を離してしまう。地面に落ちた武具がカランカランと音を立てて自分の足下へと近寄ってくる

恐怖の後は頭痛に襲われた。頭痛の後は吐き気が襲ってきた。吐き気の次は再び頭痛が襲ってきた

「真筈!？」

「ちよつと大丈夫!？」

「来るな！」

隼人さんが何かを叫んでいる。穹と明日香は心配した表情でこちらを見ている。自分の足下には落とした武具が。頭の中では赤い色が。今自分の身に何が起きているのかわからない

「……………決まりだな」

足下にあつた棒武具が隼人さんの手によつて回収され、段々と自分の目線へと上ってくる。すると何故か一瞬にして今までの吐き気と頭痛は治まり、身体が普通の状態へと戻っていた。本当に何があつたのかわからない。一瞬過ぎたからとかそういうんじゃない。自分でも何が起きたのかわからないから……………何があつたんだ？ 今だと棒武具を見ても何の感情も……………いや、安心感がある。まるで何かに守られているような……………

「真筆……………この武器はお前の物だ」

「俺の……………」

そう言われて再びそれを手に取る。だが先程と同じような現象は起きず、代わりに今感じた温かい物を感じるようになった。何処か懐かしい感覚……………今までに感じたことのない不思議な感じ……………今理解しろと言われても何もわからない

「 3人にそれぞれプレゼントだ。受け取ってくれ」

隼人さんは笑顔でそう言ってくれる。一瞬戸惑つたが穹と明日香は本当に気に入っていたのかがありがとうございますと返事してすぐにTEMMへ登録をしていた。俺もお言葉に甘えて受け取るとしよう
しかし……………

今感じた感覚は本当に一体……

「真筆」

「……はい？」

「やっぱりお前らは姉弟だよ」
かぞく

「え……？ 何を言ってる」

「……雲を、超える」

そう言ってる隼人さんは「特訓再開！」と言ってここから少し離れてしまう。そしてまるで丁度タイミングを計ったかのように姉貴も再登場する。また地獄のような特訓が始まるうとしていた

……気になることが、多すぎて集中することは出来なかったが

62 神崎雫という人物（後書き）

真箏くんの新しい装備は棒武具に決まりました。これからの成長に期待です

明日香さんの新しい装備はトンファーに決まりました。上手く扱って下さい

穹様の新しい装備はハルバードに決まりました。なんだか最強になりそうな気が

様？ 気にしない

隼人くんは雫さんの事が好きらしいです

真箏くんには結婚の許可を貰おうとしていました。親に聞いてください

多分簡単に許してくれるとは思いますが。問題は雫さん本人ですがw

次回予告

おそらくChapter 8最終話

前半：（多分）日常風景

中盤：（多分）特訓・戦闘

終盤：（多分）同上

ラスト：（確定）その確定してる部分にもう少し何かを加えるはず

それではまた次回、お会いできたら会いましょうw

63 特訓最終日(前書き)

出オチw 気にせず下へw
タイトル? 気にしない

……望の部分は難しいです。喋り方からして。すみませんでした
トンファアの部分名称ってわかりませんね。すみませんでした
この作品で始めて「gg」を使用しました。すみませんでした
でした

説明不足? すみませんでした

Wars、Chapter8最終話、行ってみましょう すいませ
んでした

6 3 特訓最終日

今何が起きているのかわからない

あまりにも突然すぎる出来事に頭がついていかないようだ

身体が熱くなる

脈が加速する

心臓も加速する

どうしてこんな状況になっているんだ？

待っていてくれたから合流して

話ながら歩いて

静まりかえって

妙に気まずくなって

それで

送っていく、と言うことになって

それで

先に動いて

それで

声を掛けられて

振り返って

それで

気付けば目の前に望の顔があった

「……長かった特訓も今日でおしまいかあ……死ぬる」

強化特訓が始まってから1週間目の今日、昼休みの1年4組の教室のある地点でだらけるにだらけきった体勢の健太が欠伸を混ぜながら呟く。今の発言を聞いていると疲れているという感じは得られない。言うならば余裕そうだ。それなりに成長したのかもしれない……一方の光久は危ない状況だが。普通VWでついた傷がRWに鑑賞するわけ無いのだが、その光久本人の腕には包帯が巻かれ、頬には何かに切られたような傷跡が存在している。どうしてこうなった俺がその傷を見ているのに気がついたのか、光久はこちらに視線を向けてくる。動きは意外と軽やかで、本当に負傷しているのかを疑わせてくる。健太同様余裕さを伺わせる。3日前まではあんな……今にも事切れそうな感じだったというのに。光久は口を開く

「何、これはRWで受けた傷。家でも特訓は欠かせぬ」

現実世界

「なるほど……つまり楓さんか」

「左様。手を抜いては貰っているものの、やはり足下にも及ばぬ」

どうやら光久は家でも部活の続きのような特訓を続けているからそんな傷がついているらしい。家に行ったことはないが、それなりに広いんだろう。そうやって特訓を出来るスペースぐらいあるんだろうな、明智家だし。……そう考えると俺も家で特訓すれば良かった、と思えるが……相手が相手なので絶対に頼みたくない。ただでさえRW、負傷は尋常じゃない物になるだろう。そう思うと身震いが

「ま、真箏くん……特訓は何も実践じゃなくてイメージトレーニングでも良いんだって。身体を動かすのも大事だけど、頭の中で動くのも大切なんだって」

考えていることを読まれたのか、琉華が苦笑いをしながら話しかけてくる。やはりこの1週間で変わったのだろう。発しているオーラが違うというか何というか。本当、3日前の状態は何処に消えたんだこの3人……いや、もしかしたら全員かもしれない。明日香なんか昼食時でさえ新武器　トンファアの練習をしていたり。エルフィも何か音楽を聴いていてこちらの話に参加してくる様子はない。……望は黙々と食を進めているが（何故か居る朝比奈さんに何故か「あーん」をしてもらっている）

でもそんなことを思っている自分本人も動きは軽快になっているもので……どうやらあの日の最後に教えて貰った休憩の仕方を実践したからだろう。隼人さん曰く、疲れたら「早く家帰って、早く風呂入って、白飯茶碗一杯だけ食べて寝る！」らしい。半信半疑で実践したところ上手くいったという結果に。おかげで早く登校して宿題をやるハメにはなったが、疲れは殆ど抜けている（ちなみにこれは正式な休憩方法ではないので実践はおやめください。成功談があるならご報告ください）。さて、午後の授業と最後の特訓の為に今の内に体力を付けておかねば

「ところで鶴は何を？」

「ああ……貰った武器の構えの練習らしい。邪魔しないでやってくれ」

「ふうん……エルぽんは？」

「……俺にもよくわからない。なんでも特訓の一環だとか」

「真面目だよねえ……2人とも」

それは心底思ったりする。でもそれがこの2人の良いところなのかもしれない。こうやって集中できるのは良いことだ。そんな事を言って勉強にすら集中しない健太に見習って貰いたいところだ

視界の端で望が朝比奈さんに卵焼きを「あーん」しているのが映る。ほほえましい光景だ。すぐに朝比奈さんに気付かれて睨まれたが

「にしても最終日の今日はどんな特訓になるのやら」

「どうせ最後に手合わせ」なんて事になるんじゃないの？」

「勘弁していただきたいな……」

健太、光久、琉華の3人が同時に溜め息を吐く。琉華も変な予想を立てるな。本当に当たったら……確実に姉貴達が襲撃してくるこ
とになりそうだ。特訓の仕上げのノリで。光久の言うとおりそれ
だけは勘弁願いたい。そう思いながら唐揚げを1口。塩味だ。どう
して母さんはこう塩味に集中するんだ

……思えば今日になって随分と凄いことに成っていたんだと思っ
たりする。いきなり初代優勝チームが現れたかと思えばこうやって
特訓の相手に貰っていて、更には自分に合った武器をただで貰えた
り……他のみんなに関してはどうなのかは知らないが。そしてみん
な成長しているんだ。そこそこの実力と運だけで戦ってきた俺たち
じゃなくなった気がする。これからは全て実力が勝負に……今まで
手を抜いて貰っていた先輩たちも容赦はしないだろう。本当の戦い
はこれからか

椅子の腰掛けに肘を置いて背後にある窓の外　遠くへ広がる青
空を見上げる。そこには雀が2羽、楽しげに飛んでいっているのが
見えた

そういえば……

……部活を辞めたいと思っていた気持ちは何処へ消えたんだ。今
になって蘇る疑問だった。楽しいからって理由はつけていたけど……
……まあいい

「……真箏？」

「ん？」

もう昼食を食べ終わったのか、朝比奈さんに後ろに回られて髪の毛で遊ばれている望に話しかけられる。おお、ポニーテールか。似合っている　じゃない

「……………どうかした？」

「いや？　ただ外を見ていただけだけど……………」

「……………そう。……………ならいい」

外を見ている事を疑問に思ったのだろうか。わからない……………いやわからなくていいのか。人の心はそう簡単に読めたモノじゃないとは言えないか

残っている弁当に手を付け始める。やっぱり食べ物はずいぶん温かい内に召し上がりたいたいものだと思ってしまふのは俺だけなのだろうか

「……………」

「望？」

「……………」
『たまには思い切ること大事』、か……………」

「……………紗風」

「は、はい……………」

「……………私、決めた」

VW内、工場フィールド

ドンッ、ドンッ、ドンッ！

天井は開いているから音は響かなくて良いものの、やっぱり差し込んでくる太陽の光が眩しくて上手く狙うことは出来ない。それでも今は特訓中、一瞬たりとも気は抜けない。今弾を当てた缶に向けて銃を動かし、再び引き金を引く。すると飛んでいった銃弾は見事に空中を彷徨う空き缶に命中し、やがて重力に従って落下を始める。さて、最後に一発撃ち込んで終了だ！

ドンッ……カアンッ！

その数秒後、缶は地面へと落下する。それと同時に後ろからパチパチ……と手を叩く音が聞こえてくる。袖で汗を拭きながら振り返ると、笑顔で拍手をしながら「お疲れ様」と言ってくれる虹美先輩が立っていた

「うんうん、最初の頃と比べて狙いも反応も良くなってる。もうちょよっと早く撃てるようになれば文句は言えないんだけど……まあ教えられるのはここまでかな」

「あはは……ボクは虹美先輩の足下にも及びませんよ……」

ボクの言った言葉に不満を覚えたのか、少し頬を膨らませて首を横に振る先輩

「いや、琉華ちゃんはこれからもっと特訓すれば簡単にわたしを超えられるよ。あの中でわたしが1番弱いし……期待してるよ」

「……………」

「あれ？もしかしてわたしなんかじゃ嫌だった？」

「……あ、いえ……はい。これからも頑張ってみます！」

軍人よろしく右手を額に掲げて敬礼をする。その行動に驚いたのが大きく目を見開いて声を出せなくする先輩。その後すぐに吹き出して声を出しながら笑い始めた。ボクも釣られて一緒に大声で笑ってみる。今までの疲れが全て吹き飛んでしまった

やがて「ふう」と一息つくような声が聞こえてきて笑いが止まる。ボクと先輩は互いに向き合い、右手と右手で握手をする。これで特訓が全部終わりだと思つと少し寂しい。それに何かと恋愛相談にも乗ってくれたわけだし、立花先輩が真箏くんのお姉さんを好きだと言つのも教えて貰つたし……メアドも交換したしこれから色々お世話になつてみようかな。w a r s 関連だけじゃなくて恋愛関係にも

「……これからも……頼っちゃつて良いですか……？」

「……わたしは琉華ちゃんの味方だよ 応援するから」

「あ、ありがとうございますっ！」

手を繋いだまま頭を下げてお礼を言う。驚いたのか握っている手からビクッ、と震える感覚が伝わってきた。また笑い出してしまひそうだ

「そーれーじゃーあー……最後の試練を与えよう」

今度はこっちが震えてしまった。下げていた頭を元に戻す

「……空き缶に向けて30発。出来るよね？」

「……………」

「返事」

「……………はいっ！……」

大きく返事をして握っていた手を離し、再度TEMを起動して使い慣れたライフルを取り出す。その行動に合わせて虹美先輩は空き缶を取り出して空高く放り投げる。目標は空き缶に30発の銃弾を撃ち込むシンプルな作業。さっきは20発成功しているんだ、これくらい大丈夫!!

藤堂琉華、1週間にわたる特訓の総仕上げはクリアできそうです!

VW内、森林フィールド

ガサツ

「……………」

右? いや、正面か? 一体どっちの方向に的がある? 良く聞いてから判断するんだ……

ガサツ

「そつちか!!」

右斜め前方に銃を向けて引き金を引く。ドンツ、と大きな音を立ててその後何かに命中するような音が聞こえてくる。更に続くように拍手をするような音が聞こえてきた。この場には僕と1人しか存在しないために該当するのはそれ以外思い浮かばない。目にしていた黒い帯を外す。戻ってきた視界の真後ろには拍手をしながらこちらへ向かってくる幸司さんが

「よくここまで聞き分けるようになったな健太。最初は左右のどちらかしか判断出来なかったお前が……1週間で……」

「泣かないでください幸司さん。親父っぽいんで」

「師は父の様な者だ。敬え」

「小学時代から十分敬ってますよ……」

なんだかんだでよく喧嘩というかじゃれ合いというか……よく遊んで貰っていたわけだから敬っていないわけがない。それに小さい僕に喧嘩を教えてくれた人だ。今となつては不必要な物になつたけど、あの頃はよく絡まれものだから大助かりしたなあ……うんうん

「兄貴と呼んでも……いいんだぜ……」

「いつの話ですかいつの……」

覚えている限りだとそれは中学1年の頃かもしれない。実際兄貴のような存在だったわけだし、普通に呼んでいたけど当時高校を卒業したばかりの幸司さんは「止めてくれ」とよく言っていたようなその事を思い出して2人で苦笑する。こうやって2人だけで居るのも随分と久しぶりだ

「まあそれはさておき……あちらも終わる頃だな。こっちはこっちで仕上げ入るぞ。構える健太」

「了解」

TEMMを起動して両手に手甲を装備する。最後の特訓、多分喧嘩に近いアレをするんだと思う。そういえば9月頃に刹那とやったなあ……まあ元々僕の戦闘スタイルだ。腕は及ばないけどそれなりに強くなったと思う今の僕ならそこそこいけるかもしれない

「本気で行くからな？」

よし、勝てないことが確定した

幸司さんが腕を構えると同時に光久と楓さんが戻ってくるのを確認する。アイツは明智家の奥義を学んだんで少し離れた場所で特訓していたところだったが……全課程が修了したんだらうな。さて、僕も仕上げに入るとしますか……

僕と幸司さんで同じ場所に向けて足を動かし始める。総仕上げは……ちよつと駄目な感じに終わりそうな気がするな、コレ……

VW内、都市Bフィールド

「……疲れた」

「特訓、仕方ない」

「……」

「仕方ない」

「……は、はい」

「最後の仕上げ、頑張る」

「……はい」

「私を倒す」

「……無理です、どう考えても」

「望なら出来る」

「……無理です」

「私は攻撃しない」

「……え」

VW内、都市Aフィールド

「うおっ!？」

俺と隼人さんで新武器（棒武具）の扱い方の確認と練習をしていると、少し離れている場所にいる明日香がいきなり奇声を上げた。同時に何かが落ちるような音が聞こえてきて、明日香の足下には3日前に貰ったトンファー……ではなく、見慣れない武器、剣だろうか？ そんな物が落ちていた。デザインは何処かで見ることがあるのだが……。横にいる隼人さんが驚いたような顔をしながらあちらへ向かっていく。どうしたのだろうと思いついていく。ちなみに穹は姉貴と戦闘中でここにはいない。少し離れたところから武器同士がぶつかり合う音がたくさん聞こえてきて集中できないが。そうとう激しい戦いが繰り広げられているんだろうな……。穹もよくやるよ

「どうしたんだ明日香？」

「ぶっ、武器が……。武器が……」

「あぁ……」

地面に落ちているその剣を明日香が指さす。デザインはどう見ても明日香が貰ったばかりのトンファーに……。左手に持たれている物と全くもって同じデザイン、違つとするなら形……。というか武器の種類そのもの。つまりこれは……

「武器の形状が変化したと？」

こういうことしか考えることが出来ない。前に部長の使っているエクスカリバーや吉原先輩の使っていたトンファーが近いような形に変化したわけだし、あり得ない話じゃない。明日香は小さくコクンと頷く。そして隼人さんはそのトンファーの原形を留めていない剣を拾い上げ、取っ手との接続部にある部分を弄くりだした

「ちょっともう片方貸してみ」

「あ、了解……です」

あれ？ 明日香敬語不得意になったのか？

明日香が左手に握っていたトンファーを隼人さんが受け取り、軽く振り回してみる。その後先程と同じように接続部を弄りだし、再び元の構えへと戻る。そして腕を軽く振ると

「おおっ！」

「なるほど……」

トンファーのメイン部分が接続部を軸に90度回転し、まるで棍棒を逆手に持ったような形へと変化する。更にはその部分が鞘の様に外れて地面へと落下する。するとそこには銀色に輝いている刃が潜んでいた。つまり持ち方を変えれば刀になるという仕組みになっていたのか

しかしまだ隼人さんの説明は終わらないらしく、持ち方を変えないまま明日香が使っていた練習道具のサンドバッグくん263号（隼人さん命名）に向ける。そのまま何が出来るのだろうか

ちなみにこのトンファーにはまた普通の物とは違った特徴があったりする。メイン部分の反対、つまり取っ手を掴んだ際に中指の第2関節が向く方向には、手を守るように作られているのかL字型の形をしている。全体的に見ればF字型をしていると行った方が速い

かもしれない。その部分をサンドバッグくん263号に向け、まるで照準を定めるかのように腕の位置が修正される。そして

ドンツ、と大きな音が響く。もちろん音を出したのは隼人さんの握っている物だ。その部分から煙が立ち上っているのを確認して目の前にあるサンドバッグを確認する。そこにはさつきまでは無かった穴が開いていて、中身の何かが見えている。砂……じゃない。綿に見える。サンドバッグじゃないぞ

「……とまあ、三位一体の武器って訳だ。自分で気付くまで黙っていたよと思ってたんだが……まさかこんな早い段階で気付くとは思わなかったな」

「明日香の武器にはこんな性能が……」
「ふっ、残念だったな真箏」

自分の貰った武器がそこまでの高性能だったことが余程嬉しかったのか、勝ち誇った顔でこちらを見てくる明日香。何故だろう、珍しく明日香を虐めたいという気持ちが湧いてくるんだが

隼人さんがトンファーを元の形に戻して現在の持ち主へと返却する。その本人の顔は何処か嬉しそうだ。おのれ、調子に乗るなよ。武器は性能じゃないんだ、あくまで所有者がどこまでその武器を上手く扱えるかが勝利の鍵へと 心の中で言っているも仕方がない。すると隼人さんがいきなりこちらを向き、手に持っていた棒武具をひったくり、明日香のトンファーと同様弄り出す

「……本当は真箏も気付いてからにしようと思ったけど止めた」
「おおっ」

すると隼人さんの弄っていた棒武具の端の方が僅かに動き、手を引くと段々と長さが延長されていく……いや、延長されながら銀色

の刀身が現れ始めている。つまりこの武器も複数の機能が搭載されているのか……気付くまで教えてくれないなんてなかなかケチなものだ

「失礼なこと考えたら」

「滅相もございません」

「……まあ、本当は星乃のも搭載されてる訳だが……あっちはお前らと違って勝手に気付くだろ」

「うぐっ」

「それはさておき、あちらはあちらで総仕上げをしている。こつちもそろそろ仕上げに入るぞ」

俺たちに武器を返却してあちらに振り返り、腕を伸ばして準備運動をしながら離れていく。そして数メートル離れたところでTEMを起動して得物のハルバードと何か小型の機械を取り出し、それを自分の胸へと装着する。一体何が始まるんだろう

念のためこちらは武器を構えて警戒態勢に入る。案の定隼人さんもハルバードを構えて笑顔を浮かべてくる

「これが最後の仕上げだ、7分間にこの的に攻撃を当てて見せる。銃でも構わない。そして俺は攻撃しない。そん代わりに防御は本気でやらせて貰う」

その言葉と同時に上空に「7:00」とタイマーが表示される

「最後まで楽しませてくれよ？」

そしてタイマーのカウントが開始され、1秒ずつ数字が減り始める。他の所でも総仕上げは始まって居るんだろうが、ここか穹のところが一番辛いかな？ それはどうであれ仕上げくらい本気で……

「行くぞ真箒！」

「了解！」

さあ、最後の特訓の始まりだ ！！

と、思っていた時期もありました

いや、予想は出来てたからそれほど驚くなんて事ではなかったが……いざそれが現実になると非常に悲しくなってくる。うん

やはり最後は成長の成果を把握するために試合形式を取ることになった（発案：部長）。さっき最後の特訓をして華麗にくたばってきたばかりなのですが。どういうことでしょうか。殺す気満々じゃないですか

ちなみに最後だけは部長も参加、全国優勝チームに混ざるといふ悪夢が事実目の前で起きようとしている。起きている。危険すぎる人物勢揃いだ。もちろん穹はこちらの味方だ

「……もう帰りたい」

「情けない事言いなさんな真箒よ。前向きに生きてけ前向きにー」
「そういえば穹はさっき義姉おねえさんと戦ってたそうだが……どうだったんだ？」

「おい明日香。今何かおかしいところg」2秒で瞬殺されたよ……」
人の話を聞k「恐ろしい……」

……本当に帰りたくなってきた

「とにかく……そろそろ来るよ」

その言葉と同時に穹の表情が険しくなり、穹にとってはお馴染みの武器である長刀と短刀を取り出して1人戦闘態勢に入る。慌てて俺と明日香も使い慣れた武器を取り出していつでも先頭には入れる体勢を作る。……にしてもよくわかるな……エルフィのサポート無しで。今回も大変な状況になっているのだろうか

そう思っただけで心配になった俺はすぐに回線を繋いでサポートルームにいるエルフィに連絡を掛ける。すると今回は前回以上に速く繋がりに、聞き慣れたエルフィの声か

『ちよつと集中してるんですから話しかけないでください！』

……とんでもない声量で怒られた。おかげで耳が痛い。キーンというあの雑音が……

そのエルフィの声は明日香と穹も聞いていたのか驚いたような表情で数歩後ずさっていた。確かにエルフィが何かに集中して怒るなんて事は滅多にないからこれはこれで珍しいんだが……とりあえずそつとしておこう。相手の位置情報を把握できないのは残念だが

「……三木とかいうヤツにやられてるのかもな……」

「おい明日香、呼び捨ては良くないだろ呼び捨ては」

「う……なんて言えばいいのかわからなくて……」

「せめて先輩くらい付け先輩くらい……」

「はいはい無駄なおしゃべりそこまでにしてよ……もう戦いは始まってるんだか、らあッ！！」

ガンッ！

穹のいる位置から聞こえてきた大きな鉄音に驚いて瞬時にそちらを見る。そこには長刀で相手の攻撃を抑える穹といつの間にか接近してきていた部長のエクスカリバーによる小競り合いが始まっていた。余所見していたからまったく気がつかなかったぞ!?

慌ててこちらにも武器を構える。しかし

「……………！ 真箏！ 上だ!!」

「なっ!?!」

上から見慣れすぎて困った人物 姉貴がすでに武器を持った状態で落下してくる。その攻撃によって俺と明日香は2つに別れてしまい、3人がバラバラの位置へ着く。その中央に立つ姉貴が攻撃の強さのあまり地面に突き刺さってしまった棒武具を引っこ抜く。ああ、なんて危険人物がこの場にいるんだ

「まさか気付かれたか……………このまま行けば一気に2人殺れたのによオ……………成長はしてるってことか」

砂が口に入ったのかわからないが、その場で唾を吐く姉貴。やはり武器を持っている姉貴の目は殺しの目だ。威圧感が尋常じゃない

「ま、1人目はここで終了か」

「……………え?」

ガシャアツ!!

いきなり明日香の真後ろにあったビルの窓が割れる。その中からは人影が見え、巨大な何かを持ってその近くにいた明日香へと迫る。あの武器……………ハルバードって事は間違いない。隼人さんしか該当する人物は居ない。あまりにも突然すぎる出来事に明日香は動けずに

硬直していた。あのままだと戦闘不能に……！！ 思ったときには全力で走り出していたが、

「……………」
「姉貴……………」

姉貴の横を通過しようとした瞬間、その棒武器が行く手を阻んで俺を明日香の元へと行かせまいとする。その持ち主と目があつてしまい、一瞬身体が震えた。その先にいる穹と部長は合宿の時に見たような戦闘を始めてしまっている。心配だった明日香も攻撃を回避して相手の様子を窺っている。俺と姉貴はそのまま微動だにしない。そのまま数十秒が経過した

「真筆」
「……………」

怒気みたいなものが混じった声が耳に入る。この声も少しは聞き慣れた気がするな

「武器を構えろ。そして今のお前の本気、オレに見せてみる」
「……………ああ」

「神崎家の血の繋がりはお前にちゃんと繋がってるかどうか……………確認の時だ」

隼人さんから貰った武器、姉貴と同じ形をしたそれを取り出して構える。姉貴と距離を取る。それぞれの方向では戦いが続いている。この中で一番鬼畜な相手と言っても過言じゃないな。全くもって勝てる気がしない

約16年家族をやってるわけだが、性格などは知っていても姉貴

の行動パターンは全て知っている訳じゃない。ただでさえこの3年間は海外に行っていて何をしていたのかわからない何処にでも居そうな普通の姉。世間と比べて違うとしたら、ただの戦闘狂。弟として把握するのは大体これくらいだろう。攻撃パターンを読めるわけがない。負けしか見えない

でも何故だろうか

今の俺ならある程度はやれそうな気がしてきた。前回の時と比べて恐ろしいという気持ちが軽くなっている。全てこの武器が与えてくれているのだろうか。だとしたら隼人さんに感謝をしないとけないな……ただで貰った訳だし

互いに武器を構える

そういえば

「血の繋がり」ってどういう意味だ？ この家系には何か特別な物でも

「ボサツとしてんな!!」

……そんな事は考えてる余裕は無さそうだ

攻撃態勢に入ってこちらに突っ込んでくる姉貴の攻撃を防ぐために防御態勢に入る。攻撃こそが最大の防御……だなんて言ったりするが、姉貴に対してそんな事したらほぼ返り討ちに遭うこと間違い無しなので、様子を見ながら隙を見て攻撃を加えよう。しかしそれが何処まで保つかはわからないが

棒の端を持って少し離れた所から振り下ろす姉貴。その攻撃はバツクステップして回避、勢いのついた武器はそのまま地面へと叩き付けられて反り始める。折れることはないが……って違う。そのまま持ち替えてこちらに向けて突きを入れてくる。身体を捻って回避し、自分の持つ武器で弾いておき、同時に下がって距離を取る。あ

のまま横に振られていたら一溜まりも無かつただろう。小さいながらも舌打ちする音が聞こえてくる

「逃げてねえでちったあ攻撃してみるやあっ!!」

「だったら攻撃をストップして欲しいなあ!!」

「そんな世の中甘くねえんだ、よっ!!」

弾かれた棒の端を再び持つて身体を捻り始める。その後すぐに回転を加えて遠距離の攻撃が横から加えられる。受けきれぬ自身が無かつたのでしゃがんで回避、勢いがつきすぎて空振り、そのまま反対側へと向いてしまう

「今か!!」

チャンスと判断した俺は急いで武器を持ち直して姉貴と同じような持ち方にする。今なら足が空き、攻撃するなら今しかない!!
持ち直した武器を姉貴の脛目がけて横から思い切り薙ぐ。長いリーチを持った棒武具が風邪を裂く音を発しながら脛へと吸い寄せられていく。が、

「てめえに攻撃させるくらい甘くねえんだよ!!」

後ろを向いていたのに俺のしていることがわかったというのか、少し早いタイミングでジャンプをして回避行動に移す姉貴。あまりにも突然すぎることであったので攻撃の軌道修正も間に合わずにさっきまで脛のあった所へ向かっていく。そしてそこを通過するところでジャンプして回避していた姉貴が落下し、武器が足によって踏まれてしまい、自分の身体が重くなったかのようにズシン、と衝撃が走る。更に攻撃は派生され、1回転してきた姉貴がこちらに向けて武器を振り降ろさんとしていた

「……こつちだつて攻撃受けたくないんだよ!!」

つい本音が

「だつたら避けてみやがれ!! そうすればお前に戦う術はなくなるんだからよおっ!!」

「言われなくてもそのつもりだっ!!」
「なっ!?!」

先程隼人さんに教わった方法で武器のロックを解除して刀の形態に変化させ、握っている部分を思い切り引っ張って銀色の刀身を引き出し右へと回避する。その直後に右上から棒武具が振り下ろされて地面に叩き付けられる。間一髪を回避した俺は回転を加えながら左手に持った刀で再び脛目がけて斬りつける。この事態までは予測できていなかったのか姉貴の回避は少し遅れて、見事右足の足首を切ることに成功した。とはいえ傷は浅い。その部分から赤い血が流れ出す

右手に掴んでいた武器の一部だった鞘を持ち、今使った刀をそこに戻して再び棒武具の形へと戻す。どちらかといえばこつちの方が使いやすいが、上手く使えばかなり上を目指せたりするんじゃないかこれ

攻撃を回避しきれなかった姉貴が少し離れた場所で斬りつけられて血を流している足首を見つめる。そして今までにない笑顔になり、こちらを見る。もしかしたら今ので完全に怒らせたかもしれない。今すぐにでもここから逃げ出したい

姉貴が口を開く

「いいねえ……最高だねえ真箒お……これだよこれ、オレはこれを待ってたんだよ……血を流す戦い、苦しみに悶える表情、そして最

後の断末魔を聞きたいんだよ……なあ真箏、お前もそうだろ？ その武器を手にしたってことはお前だつて感じてるんだろ？ 血を、表情を、断末魔を、見て、聞いて、飲んで……なあ？ そうなんだろ？」

「う……」

邪悪な笑顔で楽しそうに喋る姉貴のその言葉に、真っ赤に染まった光景を思い浮かべて吐き気を感じた。普段聞かないような言葉ばかりで珍しく想像してしまつたのだらう。その光景が脳内を駆けめぐる

「これだから面白い……戦争Warsはなああああつ！！」

「……っ」

「おいどうした真箏。血が疼かないのか？ 人を殺したい気持ちが湧かないのか？ 戦争が快樂だというのに気がつかないのか？」

狂つてる。16年間で全てを知っていたような気がしていたけど、

やはりこの姉貴は狂つてる。どうしても慣れない、この言葉

血が疼く？ いいえ全く

殺したい気持ち？ 何処にもありません

戦争が快樂？ そんな馬鹿げた話

「……え」

「あ？」

ふと忘れたいと思つていた言葉を思い出してしまふ

あの日だ。あの日ラーサーさんから聞いた言葉だ……

『そんなスポーツを、君はおかしいと思わないか？』

……今

今、自分がしていることって何だ？ 戦争？ 違う、そんな大規模な物じゃないのは知っている

Warsと言う名のスポーツだ

「……俺は……」

『そんなスポーツを、君はおかしいと思わないか？』

血が疼く？ いいえ全く

殺したい気持ち？ 何処にもありません

戦争が快樂？ そんな馬鹿げた話ある物か

だったら今自分がしているのはなんだ？ スポーツだ。Warsだ

“戦争”だ

快樂なんて全く思ったことがない。かといって人を殺す意味は知っている

全てレーザーさんの言った通りじゃないか……

「俺は……」

俺はこのスポーツで何人人を殺した？

「俺は……」

俺は戦争Warsの意味を考えたことがあったか？

「俺は……っ！」

「……消える、弱小物」

「……姉……貴……」

頭を棒で思い切り殴られた。意識が飛んでいく
記憶が飛んでいく
首が飛んでいく

ああ、血の色ってこんなに濃かったんだな

「……………」
「大丈夫か神崎？ さっきから黙ったままだが」
「いえ………… ちよつと、まだ頭が痛くて」

結果は惨敗に終了してRWに戻ってきた。らしい。なんでも今回の戦闘では俺が真つ先に戦闘不能になったらしく、その後他の全員も見事に敗北をして今の現状がある。気絶していたのはどうやら俺だけで、他のみんなは先に帰ったという事実が。そして目の前にいる部長は、部長と言う立場上仕方ないのかこうやって残って面倒を見てくれていたらしい。ちなみにもう8時を回っている。目覚めたのはつい10分前、頭が痛くて何も出来ない

でも理由はそれだけじゃない

今回の試合であったことを全て忘れてしまったみたいだ。始まる直前の事までは記憶に残っているが、VWに入ってから記憶が1つもない。何を考えて何をしていたのかも。どうしてこんな状況になっているのかも全く見当がつかないと言つことだ。はてさて困つたな。何か重要な事を考えていた気がするが…………

「頭痛か………… まあ仕方ないか。今日の所は送ってやるが………… どうす

る？」

この部長の気遣いが温かいと思えるのは初めてだ。というか気を遣ってくれること自体が初めてだな
でも

「いえ……少し気が楽になってきました。1人でも帰れますよ」

……俺の本能が危険信号を発していたので。すいません部長、俺、何か下手なことを言っただけで頭痛じゃ済まないことになりそうな気がしたんで

それを聞いた部長は呆れたように「はあ」と溜め息を吐く。怖い、なんか怖い。もしかして何かたくらんでいたのではないだろうか。明日は雪だ、やったー

銃弾が頬を掠る。これ以上俺の記憶がなくなったらどうするんだ

「別に良いだろ。俺は困らない」

「俺が困るんで止めてください」

「全く……先輩のありがたい気持ちを受け取らないとは……」

「自分で言わないでください」

自意識過剰とはこの事なのだろうか。帰ったら詳しい意味を調べてみるとうとう

部長が席を立ち上がり、横に置いてあったバッグを肩に抱えて部屋の扉の前へと向かう。どうやら帰るらしく、俺がここにいるのにも関わらず電気を消してしまう。なるほど、俺も今すぐにここから出て帰れ、と言うことか。なら仕方ない。頭痛も無くなったし大丈夫だろう

2人で部室を後にし、部長は鍵を帰して自転車で帰ると言うので

俺一人で先に校門へと向かう。時期が時期だし暗いしなにより寒い。そろそろコートを着用した方が良さだろうか。段々と人数も増えてきているみたいだし。何処に仕舞っておいたかな……。1人寂しく校門を出る

「…………真箏」

すると聞き慣れた声が横から聞こえてきて、突然すぎたことに驚いて身体が震える。ついでに言うのと寒さも影響したのかもしれない。声の聞こえた方向……校門正面から見て左側を確認してみる。するとそこには

「…………誰だ」

「…………望」

「ああ…………スマン、暗くて良く見えなかった」

「…………慣れてるから平気」

事実、背も小さいし制服も暗い色、加えて静かな性格というのが影響したのか本当に気がつかなかった。声を掛けて貰わなければ確実に置いていってしまっただろう…………って

「もしかして待っていてくれたのか？」

「…………うん。…………1人だけで気絶してたから不安になって」

「そうか…………」

なんて心優しい友達だ

「それじゃあ他のみんなは？」

「…………先に帰った」

なんて薄情な友人達だ。こう望みたいに待ってくれるという甲斐性は無いのか。特に明日香とエルフィ、一緒によく帰っていたのだから待っていてくれても……と考えていても仕方ないか。どうせ部長が気にせず帰れとでも言っておいたのかもしれない
帰ろう、ということになって2人で歩き出す。スピードが僅かに速かったので望に合わせてスピードを緩め、横に並んで歩く。もし後ろから襲われるなんて事があったら俺はどうすればいいんだ。確実に死んでも許されないよな。しかしその気持ちに反して望は更にスピードを緩めてしまおう。どういうことだ

「……望？」

「……ゴメン。……本当は戻ってきた」
「……」

いや、俺が聞きたかったのはそういうんじゃない

「なんでスピード緩めるのかなあ……と」

「……」
「……私の貞操が危なさそうだから」

「はあっ!?! 人聞きの悪いことを言うな!!」

「……冗談。……真筈はそんな事しないってわかってる。……あれは除いて」
「うぐっ」

6月頃にあったあの事件を思い出す。俺はあの時健太という変態に気絶させられて、気付けば風呂場横の穴の開いた部屋に居て……それで加害者であり被害者という立場になった一件だ。確かにあんな事があったわけだからそんな言葉を言われても仕方ないが……というか俺がそんな事をしないって言い切れるとでも言うのか。言わ

れなくても絶対にしないが

望はその場に立ち止まる。1人数メートル歩いてから気がつき、後ろを確認する。大丈夫、ちゃんとそこにいるな

「……心配した」

「え？」

望が寂しそうな口調で喋始める

「……RWに戻ってきて、真箏だけが気絶してて、みんなもちやんと心配してたけど……私はみんな以上に心配だった。……大事な人が遠くに行きそうな気がして」

「……」

「……小さい頃に妹がいた」

「え？」

始めて望の過去の話聞いた気がした

「……私が5歳の時、妹は年子で4歳だった。……ある日に2人でボールで遊んで、道路にボールが出て、慌てて出て行った妹が……ちょうど通りかかったバイクに撥ねられて、私の……目の前で」

「それは……」

「……なんでだかわからない。……妹を真箏に重ねたんだと思う。……さっきの真箏みたいに気絶してて、そのまま回復しないで亡くなった。……みんなも大事なものは変わりないけど、何故か真箏だけにそんな感情を抱いちゃう。……自分がわからなくなってきた」

「……」

『何故か真箏だけにそんな感情を抱いちゃう』その言葉のせいなのか、段々と身体が火照ってくる。もしかして意識したのだろうか

いや、ただ照れただけだろ……そんな訳あるわけ

「……だから真筈」

「……帰ろう望。これ以上お前のそんな悲しい話は聞きたくない」

「……え？」

「大丈夫、俺は傍にいる。……まあ全部お前の傍にいるって訳じゃないけど、1人で勝手に変なところに行ったりしない。行くんだつたらちゃんとみんなに伝えて許可を貰ってから行くよ。だから……安心してくれよ。な？」

「……」

我ながらクサイ台詞だとは思っている。思っているけど今の望にはこれくらいの言葉を伝えておかないと納得してくれないような気がして勝手に口が動いていた。後から意識したせいか更に段々と身体が熱くなる。ずっと傍にいる……こうは言ったが絶対に約束できるだろうか。言ったわけだし、男に一言は無いとか言っし……絶対に破らないほうがいいよな？ いいんだよな？

望が顔を俯せる

「望？」

「……うん。……そう言ってくれるなら帰る。……でも今の台詞は

クサ過ぎる」

「うっ」

「……クサ過ぎて……もっと……」

「え？」

「……な、なんでもないっ！」

小さすぎて聞こえず、聞き返してみるとそっぽを向いてそう言われてしまった。今のは聞き返したのが失敗したか？ 申し訳ない

「……か、帰ろう真筆！」
「あ、ああ……？」

そう促されて今歩いていた方を向き直し、再び望の家へと向かって歩き出す。そういえば望の家には一度だけ……外まで行ったことはあったな。熱出してみんなでお見舞いに行ったのはいいが……男子はお帰りくださいって言われて追い返されたんだ。大丈夫、ちゃんとルートは覚えている

（……もっと、真筆の事が好きになりそう……真筆っ！」
「ん？」

一人で先に歩いてしまっていたのか、少し後ろから望の声が聞こえてくる。大丈夫、誰かに誘拐されたとかそういう感じの声じゃない。というか誘拐されていたら大問題だろ……そうなんだったらもつと大きい声を出して欲しい
ゆっくりと振り返

「」
「」

振り返ると同時に7月のあの日に感じたあの感覚を唇に感じる。何が起きている？ そんなの誰にだってわかる、目前に望の顔が存在しているんだから。要するにアレだ、キス、日本風に言くと接吻とかいうヤツだ。穹の時とはまた違った感覚……望の味とでも言うのだろうか嫌らしい

……冷静に考えている場合じゃない

望の顔が段々と離れていく。この辺に街灯が存在するわけではないので、辺りは暗く表情を確認できるほど明るくはない。ただわかるとしたら顔を俯せて見えないようにしている、ということだ

「望……？」

「……たっ、大切だと思うから勝手に死なないようにおまじない……真筆が勝手に死んだら周りのみんなが不幸になる……！！！」

「お、おまじないって……」

「……そ、それ以外の深い意味はない！……これ以上意識したら怒る！」

「……すみませんでした」

そう言つて望は1人先に歩き出し、さっきまでとは段違いのスピードで俺から離れていく。おまじないとはいえ、こんな形式にしたのは絶対に間違いだったんじゃないか？ これじゃあ俺……勝手に死ねないじゃないか。それに……

「望……」

「予想が外れてればいいんだけどな？ お前今の初めてを……」

「……っ！……そういうのは思っても言わないでっ！」

「……すみませんでしたっ！！！」

予想は当たってしまったみたいだ。そして望を更に怒らせてスピードを上げさせてしまう。ああ、勝手に行かれたら俺が困る。もし事件に繋がったら……さっきからこんなことを考えすぎだ。望に話を聞いたからだろうか

置いていかれそうだと思つた俺は足を進めるスピードを速めて望に追いつこうとする。だが望は走り出してしまい、どうしても横に並ばせたくない様子。仕方ない、少し遅れて走るとしよう

「ちよつと望、待てっ！！」

「……やだ！」

結果、このランニングはいい運動になって身体を温めさせてくれた。これから冬になるのか……鬱だ

秋とは思えない冷たい風が通りすぎていった

……真箏に……2度目のキスをした。慌てておまじないって説明はしたけど……信じてくれただろうか。……いや、真箏の性格を考えてみると確実に信じてそうな気がする。なんだかんだでそっちの方向に考えるのは苦手なのか。それとも敢えて考えないようにしているのか。これから見極めないと行けないかもしれない

身体が熱い。初めて頬にしたときはあまり感じなかったけど……今回はまた違う感じがした。あのあとの1月後に穹が初めてを奪ったらしいけど……まあそれはしょうがない。いきなりすぎて止めることが出来なかったわけだし

ただ……早苗さんの聞いた話が事実だとすると、考えた限り私は3番目か？……かなり出遅れた

『たまには思い切ることも大事』

隸さんの言葉だ。多分……この言葉が無かったら行動に移す事なんて出来なかったかもしれない。他にも色々と相談には乗ってくれたけど……聞いた限りだと隸さんは恋愛経験は1度もないみたい。ぎこちない教え方だった……十分助かったけど。いつかまた会えたらお礼を言わないと。お礼だけじゃ足りない気もするんだけど

「……ふふっ」

言いそびれたけど……誕生日おめでとう真箒。これが私からの気
持ちって言う名のプレゼント
……形に残る物じゃなかったけど、真箒は……これを教えていた
ら喜んでくれただろうか

……

……無いか。真箒だし

63 特訓最終日（後書き）

どうも作者のあ（ryです。Chapter 8が完結いたしました
なんというgdgd、笑いしか出来ません、ははっ。……知ってま
す、笑えません

最終的にこんな形に終わったのはドンマイ。その内改稿する……と
思います

さて次回以降の予定

Chapter 9……なんか微妙だなあ……今回と同じような終わ
りしか見えない

しかも時間がたくさんあったものの内容が思い浮かばない

クリスマスだよねえ、そうだよねえ

そうしようかあ

ちなみにこのあと真筆たちはテスト期間という鬱期間が始まって、
その間のお話はまったくございません。前回と同じ状況です。ゆえ
に次章は12月の中頃から始まると思います

クリスマスだね（確定

サントさん来ないかなあ、とか言っている子を作ろう、そうしよう

……すいませんでした

さて、活動報告の方にもいろいろな情報が載っていたりするんで、
是非ご確認の方を

それではまた次回、自分が生きていたら会いましょうw

#64 in the winter (前書き)

a? the? 英語はわからんです

Wars、新章開幕です。12月です
寒いです

それではどうぞ

#64 in the winter

冬、12月。それは

「……寒い」

と思う人間なんてこの世界に何億人いるんだろうとかくだらないことを考えてしまう。そんな暇があるならこの前の期末テストの自己採点と間違い直しをするべきなのでは？ と、言いたいし、健太にもそう言っただけでやりたい。朝早くに押し掛けてストーブの目の前陣取りやがって

「あー？」

しかも退く気は皆無だ。というか心を読むな

1年が過ぎるのは非常に早いと、この季節、この月になってから実感する。なんだかねで2096年も始まってからも12の月、いわゆる年末を迎えるこの季節、俺や健太達……にとっては16回目の年越しだが、そう考えてみるともう16なんだよなと思ったりもする。しかももう少しで高校でも1年生の課程が修了してついに2年生が始まるうとしている。早すぎるだろ、12月。ああ、時間が過ぎるのが遅いと思っていたあの頃、小学生か幼稚園生に戻って全てをやり直したい

本気でタイムマシンを作ろうかな、とかふざけた考えが再び思い浮かんだ一瞬だった。光の速さを超えるだなんて人類永遠の夢かもしれない。……まあ、瞬間移動……TEMMを作り出せたんだし、

いずれは実現可能なのか

とりあえずそろそろストーブの前で「あー」ってやってる健太を退かしたい。それは扇風機ではない、暖房機だ。風は風でも出ている風の種類が違うから「あー」って濁るわけがないだろう。声を作るな声を

「ほら健太、俺にも当たらせろ」

「あー？」

というのが本心。我ながら独占欲が強いと思う

ちなみに今現在朝の6時30分。そろそろ全員来るんじゃないかー、って時刻だが、朝起きた瞬間にメールを確認すると（というかモーニングコールと言う名メールが来てた）、琉華と望は今日、クラスでの仕事があるらしく先に登校しなければいけないらしい。それはそれで助かるんだが……

あの一件があつてから望とは上手く会話が出来ていなかったりする。望もあの後冷静になってよく考えたらしく、顔を合わせる度に軽い返事で済ませて終了、の4週間を過ごしていた。タイミング良くテスト期間に入ったこともあり、回数は少なかったものの皆には不思議に思われているに違いない。と思いたいが、今ここに健太はその件に触れることはないし、他のみんなも気にしている様子はないし大丈夫かもしれない

……仮にもそれがバレたらどうなるんだ俺は。まず琉華と朝比奈さんに殺されることは確定するだろうな……

寒さ、想像が原因で身震いをする。しかし健太は退く気配もない、つつーかこちらに見向きもしなかった。こうなったら夏場使っていたクーラーを暖房設定にして使うか……と考えたはいいが、今年の異常な寒さにやられたのか故障するという大惨事が。頼むからしっ

かりしてくれ機械

リビングの扉がゆっくりと開いた

「……ういーっすう……あさからつるさいよ真筆お……」

「頼むから俺が学校に行くまで起きてくるな」

「だつてえ……一度起きたら中々寝付けないじゃあん？」

冬だというのに夏物の寝間着を着崩して着用している姉貴が、眠そうな臉を左手で擦り、大きな欠伸を無防備にかまし、ボサボサになった髪の毛を右手で掻きむしりながらリビングへ侵入してきて健太の居座るストーブの前へ移動を開始する。もういい大人なんだからその服装をどうにかして欲しい、それが弟から言いたい言葉だ。ただでさえ寝るときに下着付けてないんだから（姉貴談）健太に見られたらどうする

ちなみに以前健太が来る前に光久がやって来ていて、その危ない格好を見ただけで卒倒しかけていた。つまり楓さんはその辺に関して大丈夫なのだろう。出来ればの話、姉貴にそういう常識を叩き込んでおいて欲しいと思ってしまうた

「おお健太くん。オッスオッス」

「ああ雫さん。オッスオッス」

「……お前らそんな仲良かったっけ？」

「「やあ真筆。オッスオッス」」

「……さつきから居たからな？」

しかも姉貴に挨拶をしたその後は少し左にずれて横に並んでストーブを2人で独占。更には「あー」とやり出すという。いつの間にもここまで仲良く……じゃなくて、2人してストーブの前を陣取るな。ただでさえ寒い訳だが……健太もそのタイミングで横にずれるんじゃない

というか

「……今更だけどよ、なんで姉貴がここにいるんだ」

本来なら1ヶ月前にする質問を今ここでしている俺って一体

「だって我が家に居た方が面白いじゃん？」

「どういう意味だ」

「真箏を虐められるというのが」

「帰れ。頼むから今すぐにアメリカに帰ってくれ」

「ぶーぶー」

口先を尖らせながら不満を訴える姉、その横では健太が苦笑しながらこちらを見ている。これ以上いられると俺の学校生活に支障を与えかねないので早急に撤収、もしくはアパートを借りるなりしていただいて別居という案を採用していただきたい、と思っている。まあそれは俺だけが考えている案でして、母さんや親父、更には星野家の皆さんまでもがいることに賛成していて俺の案は廃止となっているが、諦めずに抗議を続けている。これが10回目くらいか

「まあいいじゃないの真箏。久々なんだし甘えたらどう？」

「ほら、お母さんもこう言ってるわけだしさあ」

「誰が姉貴に甘えるか。というか服装をなんとかしなさい服装を」

健太もいるわけだしそろそろ服装を正してストロップ前から撤収していただきたいんだが。ストロップに近いこの距離でもかなり寒い訳なんです。その距離1mも無いんですけど

…… 2つの壁は大きいのだ

「真箏に言われるのはショックだなあ……」

「俺は姉貴が心配だから言ってるだけであって……大人なんだし
っかりしてくれよ」

「だってよ健太くん。どう思う?」

「エロくていいと思います!」

「ほら」

「いや「ほら」じゃなくて……健太、お前もすぐにそんな発言をす
るな。姉になんてことを言ってくれるんだ」

というか姉貴はエロを狙って服装を乱していたのか。だとしたら
どこまで変態になったんだ。この3年間でどこまで変態になったん
だ。一時期楓さんと過ごしていたらしいが、その期間にどこまで変
態になったんだ(三回目)

……この前の子供がなんちゃらの事件が可愛く思えてくる

「とにかく服装を直しなさい」

「ええ〜……真箏も敵し (ドサツ) ……何の音?」

何か倒れるような音にいち早く気がついたのか、姉貴が俺の横
から顔を出すようにリビング入り口の方を見、それにつられて俺と
健太も確認してみると、そこには見慣れた長髪ポニーテール女子……
……じゃなくて男子が俯せになって倒れていた。顔のある辺りには刃
物で切られたかのように血が飛び散っていて、なかなかのグロさを
引き出していた。朝から血を見ることになるとは。光久もまだ耐性
は低いのもかもしれない。風呂の中をガン見しててもこれが

「おい光久ー、大丈夫かー」

声を掛けながらゆっくりと近づく。すると光久は瀕死状態が如く
血で染まった顔をゆっくり上げ、辛そうに口を開く

「I'm happy now...but would die.
Life...was good...」

しかも英語で。俺には英語を日本語に訳す程度の能力は装備されていないので、今光久が言った内容を理解することは出来ない。しかし……今「happy」やら、「die」やらそういうのが聞き取れたから、「幸せで死ぬ」とかそんな意味だな、多分。服装の乱れた女性でアウトってどういうことだ光久

一瞬笑顔を浮かべ、血の池へと頭をダイブさせた光久であった

「まったく……朝から何やってるんですか」

「その通りだ。破廉恥だぞ真箏」

すると今倒れた光久の後ろ……俺の正面（リビング入り口）から聞き慣れた女子の音が2つ聞こえてくる。誰だかはわかってはいえ、顔を確認するために顔を上げる。そこには呆れたような表情でこちらとあちらを見ているエルフィと明日香の姿があった

「2人だけにはその台詞は言われなくなかった」

「どういう意味だ」「どういう意味ですか」

「今までの行動を思い返してみる。さて、光久ー立てるなー？洗面所行くぞー」

光久の肩に手を掛けて、完全に脱力しているその身体を起こしてリビングの外、そして洗面所へと向かう

そして光久の顔を冬場の冷たい水で洗い、鼻血を流す。あまりの冷たさに手が凍りかけ、光久起床

完全回復を遂げた光久を連れて再びリビングへ。そこにはすでに椅子に座っている健太、エルフィ、明日香の姿が。姉貴は未だに服装を直さないままストーブの前で……寝そべっていた。風邪をひき

それで怖いが、姉貴ほど丈夫なら問題ないか、多分

本日の朝食であるカレーライスの乗っているテーブルの傍にある椅子へと座る。これが昨日の余りだというのは皆には内緒だ。……他の家庭でもこういう日常が当たり前だということを心から願いたい。同級生が朝から押し掛ける事じゃない。昨晚の余りのカレーが朝に出ることだ

後で健太には確認してみよう

「お母さん。まだカレー残ってるー？」

「ん〜……大丈夫、雫の分はちゃんと残るようになってるから」「じゃあ私も食べる〜」

とは言っておきながらそこから動かないつもりでいるらしい。母さんは文句も言わずにちゃんとそこまで運んでいってるが。ストーブを独占しながら姉貴もカレーを食べ始めた

「やっぱり真筍んちのカレーも少し違うな」

「ん？ 健太の家とルーでも違うのか？」

「ウチはルーから作ってるけど」

「「そうなの!？」」

16年間知らなかった衝撃の事実姉貴までもが反応して思わずオーバーリアクションをしてしまう。まさか我が家のカレーにそんな裏事情があったとは誰が思ったことか。姉貴すら知らなかった。て事は22年間もその事実を伏せられていたんだらう。光久を除いた3人も驚いたのか、食べる手を止めて母さんの方を凝視していた。いや、エルフィの家なら一から作ってもおかしくないような……

「カレーは家庭の味よ。覚えておきなさい」

「家庭ねえ……お母さん、後で教えて貰うわ」

「そうね…… 雫にはそういうのも覚えさせた方が良いわね」

…… 明日香は難しい顔をしながら「家庭の味……」なんて呟かないでくれ。光久が真つ青な顔をしながらカレーを食べ続けているじやないか。健太なんかスプーンを持つ手がプルプル震えている。エルフィは苦笑いしながら視線を逸らしていた。…… 所謂いえばエルフィと明日香のどちらが料理の腕が上なんだ。同レベル……？

「神崎さん、今失礼なこと考えました？」

「…… すみませんでした」

不用意に失礼なことを考えるのをやめると何度言い聞かせたことか。だから何度も死にかけるんだ

「んな事より早く食べないと。1時間目から鬼畜だぞ今日は」

「うげ……」「うっ……」

早く食べて多く食べないと今日は体力が持たない一日になりそうだと確信している俺たち4組メンバー。精神的に追いやられる1日になるに違いない。2組も多分同じ状況だとは思うが…… この2人は余裕なんだな。多分

1時間目…… それは、期末テストの返却

「冬休みは遊びたいよねえ……」

「だよなあ……」

課外のない楽しい冬休みを迎えるための最終試練がすぐそこまで迫ってきているのだった

冬、12月。それは

「……………つつつ!!」

教室でも声にならないくらい寒くなる季節だ。ましてやストーブなどという神様が教室に存在しないので、それはそれは非常に寒い。ここは北海道……いや、北極か。大袈裟すぎるとは思うがこれは寒い。外並に寒い

『エコの時代なのだよ!』by校長

知ってます。地球温暖化は1世紀くらい前から大問題になってるくらいだから知ってます。知ってますが最近は何んとか二酸化炭素の排出量を極力抑えた電気ストーブがあるんだからそれを使えばいいじゃないか。我が家でも取り入れてるんだし、それを全教室に設置して貰うように申請すべきか。どうせ職員室は暖房ついてるんだろうなあ

5月に次いで鬱な季節かもしれない。だったら暑い夏はどうなるんだって話だ

「……………」

前を見たら確実に死ねると思うので、さっきから視線の移動が忙しかったりする。まだ席替えはしておらず、現在窓側最後尾というポジションなので、外を見る分には全く問題がない。ただそれを続けていると先生に指名されそうだから誤魔化すために時折エルフィのノートを見たりしている。ちなみに数学の授業、中央列最前の健

太はもの凄い寒そうに肩を震わせてペンを握っているのがここからでもわかるというのはどういうことだ。窓側寒いんだぞ

……数学教師兼任兼 Wars 部顧問、梅花哲也。最近はやシャツで授業をしております。ちなみにその下にはタンクトップを着ているのか、軽く浮き出ている……じゃなくて、袖まくりまでしているから視覚的な意味寒さを与えてくる。夏と変わらないじゃないか……っ！！

「か、神崎さん……さつきから拳動不審ですよ……」

「こうしての方が身体が温まるんだ。放っておいてくれ」

「でも……」

するとエルフィは何かに気がついたかのように視線を逸らして再びノートへ向かう。そして素早く文字を書き連ねてこちらへと見せてきた

『先生がこちらを気にしています』

なんとまあ、ありがたい情報だ。アレを見ないようにしていたからそちらの方の意識が全くなかった。これで指名されて前に出てこないなんて言われたら溜まったモンじゃない。少しは我慢して黒板に向かうとしよう

机の隅に置いてあったペンを手に取り、寒さで悴んだ右手でノートに文字を書く。そして先生に気がつかれないようにエルフィの机の上へと置いた

『サンキュ、助かった』

そしてエルフィも俺のノートに何かを書いて返却してくる

『いえ……本音を言うとなたしも被害に遭いたくなかったので……』
なんか実際にそう言われると悲しくなってくるんだが……まあいいか。俺のせいでエルフィにも被害を与えたら可哀想だ。素直に聞いておくとしよう

会話を消して黒板へと向かう。教卓前の健太が死んでいるのが視界に映り、笑いかけてしまったがなんとか堪えてペンを動かさ始める。にしても……

「……寒い」

これからの2、3ヶ月、乗り切れることが出来るんだろうか

「じゃあ神崎、この問題を」

無事に帰還できることを祈りたい。ただそれだけだ

冬、12月。それは

「……ふう」

温かいお茶がやけに美味しくなると思う季節、そうだと信じたい。エルフィが持ってきていた紅茶を飲み干しておかわりを要求する。どうやら朝比奈さんも持参していたらしく、望と琉華のコップに注いでいるのが確認できる。流石はお嬢様の家庭、飲んでいるものが全然違う。ティーバッグの紅茶とは比較ならなくらいに美

美味しいと言いたいところだが、あまり紅茶を飲んだ機会がないので何とも言えない。ただ市販の紅茶に手を出しづらくなってしまいう危険性がありそうで怖い

だが飲む。健太もおかわりを貰って飲んでいた。温かいお茶は冬には美味しい物だ

ちなみに光久は持参の緑茶を飲んでる。紅茶は口に合わなかったらしく、すぐに吹きだして床をびしょ濡れにしてしまい、反省をしているのか縮こまりながら飲んでるのが妙に可愛らしい……じやなくて、コイツは男だ、そんな感情が芽生えてどうする。文化祭の時のメイド服が原因なのか？

……………

……もしかしたら女子の制服すら着こなすんじゃないか光久

「ど、どうしたのだ真筆殿……」

「はっ」

どうやら頭が変な方向に向かっていたらしく、光久の服装をジロジロ見ていたらしい。気がつけば辺りの視線がこちらへと向いていた。慌てて紅茶を口に含んで状況を誤魔化す

「まあ俺のことについてはともかく……」

そう言った瞬間に辺りの空気が重くなる。特に健太と明日香の辺りが。どれだけこの状況が訪れるのが嫌だったんだ。運命からは逃げられないというのがどうも腹立たしい

と、漫画のキャラの台詞だ。現実見る現実を

ちなみに報告は昼休みに全員でしようということで、健太とエル

フィの点数はまだ知らない。それはそれで楽しみなのだが、赤点を取ったら冬休み課外という名の地獄が待ち受けているのでそんな点数を取れるはずがない。この学校の赤点は30点未満だ

「テストなんて無くなればいいテストなんて無くなればいいテストなんて無くなればいい……」

「ちよつ、佐々木くんが急に念仏の様な物を!？」

「大丈夫、テストはちつとも怖くない。だから……赤点も怖くない……」

「明日香も魂が飛びかけてるわね……」

「テスト(笑)」

「お嬢様も良い感じに壊れてるんですが……」

「落ち着けお前ら……」

「左様。まだ1回有るゆえ大丈夫であろう?」

「……真箏の言うとおり、落ち着いた方が良い」

望が発言すると同時に笹原さんと朝比奈さんと光久を除いた全員の視線がこちらに集まってきた。あまりにも早すぎる行動だったので、驚いて身体がビクついてしまう。しかも嫌な予感というか……手に変な汗が溜まってきているのがわかる。望もそれを感じたのか、逃げる体勢の様な物を作っている

「そういえば今の今までみんなで気にしないでおこうと思ったけど……それは昨日まで。今日という今日は事実を聞かせて貰おう神崎真箏、最終日に近藤と何かあったか?」

ダッ!!

「残念だったね望? こっちもそれだけ本気なんだよお」

「……い、いつの間に後ろに!？」

やはりその話題が出てくるのか……望はすぐさま逃げようと椅子を立ち上がって教室出口へ向かおうとしたが、いつの間にか回り込んでいた琉華に羽交い締めにされて身動きを取れないようにされていた。しかもいつもなら抜け出すことが容易な望ですら抜け出せないくらいガツチリと固定されている。琉華の本気怖い……！！

ちなみに俺の後ろにも朝比奈さんが腕をパキパキ鳴らしながら立っているのが前を見ながらでもわかる。殺気しか飛んできていない。目の前にある朝比奈さんの影に纏っているオーラがそれを語っている

健太と明日香とエルフィが異端審問会よろしく手を組ながらこちらを見る。ああ、処刑か。死が近いんだな。ゴメン望、俺約束を守れそうにないです。1ヶ月で約束を破ることになりそうです、すいませんでした

健太がとうとう口を開く。ちなみに笹原さんと光久はこの空気についていけないのか、2人で弁当を食べながら世間話をしているのが横目に見えた。穏やかで羨ましい

「もう一度問うぞ真筈。最終日、近藤と何かあったのかね？」

「ならば答えて進ぜよう。一緒に帰宅したただけだ」

「ふむ……では続いて質問だ。どうしてそうなった」

「お前らが薄情だから心優しい望が寒い中わざわざ校門の外で俺のことを待ってくれてたんだよシクシク」

「薄情でスンマセンしたね」

「へえ。忘れ物を取りに行くって言って、戻ってこないから心配したんだよ望？」

「……ゴメン。……気をつける」

「望に危害は無し。目標の抹殺を中止する」

後ろから何か危ない単語がいくつか聞こえたような気がするが、今のだけで納得してくれたのか段々と空気が戻り始める。ポーズだ

け決めて何もしていなかったエルフィと明日香が大きく腕を伸ばして欠伸をしていた。退屈だったに違いない。とりあえず後ろにいる朝比奈さんの手元で何かが光った気がした

望も琉華から解放されて息を吐く。危害か……与えたのか与えられたのかよくわからないな。まあおまじないってことで済んでるから問題はない、か

「……ちなみに真箏が死んだらみんなが不幸になるから要注意」
「へ？」

ちよつと待て。なんか嫌な予感がするぞ
そんな想いとは裏腹に、望は言葉を進める

「……そういうおまじないを掛けておいた。……だから真箏を殺したりしないように」

「あ……はい」

……
まあ……危害を加えられるような心配はないし、大丈夫か。おまじないって聞いてどういいう物を思い浮かべるだろう普通。キスだなんて考えるのか？

それが（特に朝比奈さんに）知られたら俺の命は確実に尽きてみんが不幸になるな。仮に知られたとしても朝比奈さんの耳だけには入れないように注意を払わないといけないかもしれない。というか死ぬのは嫌だ

望の問題（？）発言からみんなが固まるというのも無事に収まり、とうとう弁当を食べながら本題へと移行する。本題……テスト結果の報告だ

まずは望

「……………赤点無し。……………以上」

望がその成績表をこの場で見せびらかす。もちろん赤いスペースはなく、全ての教科が70点以上という好成绩を叩きだして、2学年の生徒中25位に入るといふ成績を残していた。凄い……………こんな誰も追いつけやしない……………って、笹原さんはもうちょっと上の成績だったりするのか

「次は拙者だな」

続いて光久が成績表をポケットから取り出して、机の固まりの中央へと置く。皆がそれを凝視する

過去にとつたのか赤いスペースが存在し、それ以外の所は普通の色で染まっている。今回の成績に関しては、文系科目は平均で見ると60点くらい。理系科目は30点第という、非常にギリギリな点数を取って赤点を回避していた。全然問題ない成績だ

「……………ふっ、見て驚くな」

明日香が溜め息混じりに成績表を取り出し、光久の成績表のあった場所へと置く

『……………うわぁ』

思わずそれを見た全員でそんな声を上げてしまった。しまったと思つて全員が一瞬にして口をつぐむが、全然気にした様子もなく首を振っていた

別に赤点はない。ただ、全ての教科を平均してみると、40点台

の教科が殆どで、最高点数が国語の63点。最低が理科の38点という、なかなか微妙な成績を出していた。こんな状態になるのもおかしくはないだろう

続いて笹原さんと朝比奈さんが何も言わずに成績表を机の上に置くその結果に全員が言葉を失った

「わ、ワンツーフィニッシュ……?」

「おい綾香、後で鶴にちゃんと謝れよ?」

「はっ」

「紗凧さんってこんな成績良かったでしたっけ……?」

「あ、今回はただのマグレですから気にしないでください」

2人の成績、それは学年で1位と2位を記録している物で、笹原さんが1位、朝比奈さんが2位をとるといふそんな事件が起こっていた。しかも笹原さんは社会で100点、朝比奈さんは数学で100点をという記録を残してその他の教科も80点以上という結果が。なんだこの世界は

とりあえずこの結果を見た明日香が絶望したのか、机に突っ伏して涙を流していた。確かにあの悲惨な点数を見せた後にこれを見せられるのは精神的に辛い、辛すぎる。タイミングを計るべきだろ……と言ったら殺されかねないので、心の中だけで明日香の味方をしておくとしよう

「……なんだかもう見せる気がなくなりますよね、これ……」

などと言いながらもエルフィは自分の成績表を取り出して机の中央へ。その成績表に赤いスペースは見あたらず、全然問題のない結果だ。今回の平均も60点くらいと、なかなかの結果を残している。ただ問題があるとするなら英語の43点か。親がイギリス人なんだし教わるのはどうなんだろうか……もしかしたらラーサーさんって

英語話せなかつたりするのだろうか、なんて変な想像をしてしまう
続いて琉華が溜め息を吐きながら成績表を出す。エルフィ同様悪
くない成績だ。殆ど同じような点数で、総合的に見たら僅かにエル
フィの方が上、という事実だけは確認できた

2人が成績表をしまったので、俺も取り出す準備をする

「さて、俺か」

「いやここは僕の番じゃないか？」

しかし最後に公開するのは嫌なのか、健太が俺の右手を押さえな
がら自分のポケットをまさぐり出す。ちよつと待て、俺だって最後
に公開するのは嫌なんだ、この成績だから嫌なんだ。テストの公開
順を賭けた負けられない戦いが始まる

「アホね」

「アホだ」

「アホですね」

「アホっぽいね」

「だつと健太、アホだつて」

「何言つてるんだ真筈。アホはお前だろ？」

「黙れアホ」

「うっさいアホ」

「……………」

「…………互いに嫌なら一緒に見せればいい」

いや、泣いてないよ？ 朝飲んだホットココアがね？

『アホ』を連呼されて精神ダメージも限界を突破して健太も同じ
ような状況になったのか、望が言ったとおり2人で成績表を取り出
して机の上へ。健太の成績表は……今までに取ってきた赤がそれま

での健太を語っているが……

「健太殿に赤が無い……」

「おい光久、失礼な事言ってるぞ」

今回の健太の成績表には赤い部分が一切無く、最低点数が40点台という、なかなかの成績を残していた。健太のクセに、と言いたいが、頑張ったんだろう。ここは素直に褒めてやるしかない

……とはいえ、最高点数はそれでも48点だ。平均すると44点くらいだろう

ちなみに俺も今回は赤点が無く、健太とほぼ近い成績だ。最低点数が30点代なもの、最高点数が60を超えているから全然問題ない。平均は50くらいだろう

「……冬休み遊べるなあ」

「だなあ……」

赤点がないことに歓びを感じたのか、とうとう気分が早まって頭の中が辺り一面の銀世界となり、冬休みの気分を味わい始めた。あ、末期症状かも。なんか健太と同期してるのと同じような状況になっている。周りでは呆れたように溜め息を吐いて食事を勧めていた。明日香も泣きやんで弁当を開き始めていた。そろそろ現実に戻るとしよう

弁当箱を開いて中身を食べ始める。季節が冬だから中身も相当冷え切っている。保温が効く弁当でも作ってもらうか？

「冬休み、ねえ……」

健太がそう呟く。多分今アイツの頭の中では冬休みの計画を練り始めているのだろう。さて、今年は何処に行くとするか……

今年の冬は少しばかり忙しくなるよじな気が……しなくもない

……にじつも

来年の抱負、ぶじつじつ……

#64 in the Winter (後書き)

真箏は気が早すぎます

来年は辰年です

2097年は何年ですか？ 計算面倒です

今年も一人のクリスマスです。気が楽です

それではまた次回、生きていたらお会いしましょう

#65 緊急会議（前書き）

今回7割くらいおふざけ回です

色々とキヤラ崩壊されてます

ご注意ください

すいませんでした

65 緊急会議

ガタガタガタ……

部室内に妙に重苦しい空気と妙な熱気が混ざった空気が通り過ぎる。熱気と言っても……実際温かいか暑いかかそう言っんじやなく、なんか……こっ……変な空気と言った方が早いかもしれない。それはある箇所、部長がいつも座っているソファから発せられているわけだが……

ガタガタガタ……

しかも変な音まで聞こえてくる始末。それも空気を発している部長の足下から聞こえてくる。丁度その前にはテーブルも置いてあるので、何か 部長の膝が当たってその音が聞こえているのだろう。その部長が何をしているかと言えば……まあ貧乏揺すりだ。貧乏揺すりからの、膝がテーブルに当たってその音が部室内に響いているというわけだ

ガタガタガタ……

別に部長は怒っているわけでも……いや、詳しいことはわからないが、表情を見た限り怒っていることはまず無さそうだ。なんといつか……苦しそうと言つか、なんといつか。今までにも無いくらい酷い顔をしている。今にも死にそうだ、という言葉がピッタリと当てはまる。と言ったら怒られそうだが、似たような表情をかましている健太もいるので問題ない

ガタガタガタガタガタ……

貧乏揺すりの音が1つ増える。発信源は健太、腕を抱えてさすつて摩擦熱で体温を上げようという、この季節ならではの無駄に近い努力を始める。それに釣られたのか、普段は冷静に事に対処する部長までもがその行為を始め、もうここはいつもいる部室じゃないんじゃないかと思わされたりする

ちなみに光久は鍛錬を怠らないようにしているのか、隅で体操服姿で腕立て伏せをしているのが目に映る（本当は裸でやろうとしていたが、女子がいるためにこのような対処になった）。結構な量をやっているのか、その額には汗がにじんでいる。あの特訓以来毎日筋トレは欠かせない日課だとか

いや、それはいい

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ
タ……

……パタッ

「だああああっ！！　ちよつと部長と佐々木くんさつきからうるさいよ！？」　崩れちゃったじゃないか！！」

また別のテーブルで何かをしていた琉華が両手で頭を掻きむしりながら大声を上げて立ち上がる。それに反応した一同（健太と部長以外）はその声の主を見ている。そこには望もいるようで、溜め息を吐きながらテーブルの上に散らばっているトランプ（プラスチック製）を見てみる。あの崩れ方を考えると……トランプタワー（？）を作っていたのだろう

「……って、こっちを見て！ 気持ちはわかるけど少しは静かにしようよ！ こっちだって我慢してる訳なんだよ！？ このくらい我慢できなくてこれからどうするのさ！」

「……よく夏の間持ちこたえられた……」
「むしろ冬の方が乗り切りやすいと思うのボクだけかなあ！？」

琉華がいつになく起こり気味な口調で、トランプが崩れ去った元凶（？）の方を見て、僅かに瞳を潤ませながら抗議を重ねる。いや、トランプ如きでそこまで必死になることがあるんだろうか……と思ったが、よくトランプを見てみると、かなりの枚数だ。そうなる気持지가わからなくもない

望が溜め息を吐きながらトランプを回収し始めた

「ま、まあ落ち着いてくださいよ藤堂さん……ほら、落ち着きますよ」

丁度その間に座っていたエルフィが水筒に入った紅茶をコップに注いで、無駄に熱くなっている琉華に手渡す

「そんなので今のボクが落ち着くと思つて……ふう……」

「落ち着いたな」
「はっ」

一瞬だけが顔がかなりやわらかくなっていたような……今日の琉華の顔の変化は激しいと思うのは俺だけでしょうか？

エルフィが再びコップに紅茶を入れて、その後ろに座っていた望にも差し出す。これから何かあったときはあの紅茶に頼るのが一番……じゃなくて

「ほら明智、風邪引くぞ」

「む、すまぬ明日香殿……」

一旦休憩に入ろうとしているのか、光久が汗を浮かべながらこちらに戻ってきたので、明日香が光久の座っているパイプ椅子に掛けてあったタオルを取って手渡す。こんな珍しい構図は初めてだったりする。しかしまあ、筋トレだけでよくあんな汗をかけるな、と思ったりする

そしてその光久の背後に近寄る2つの影が存在する。それは今にも冷えるに冷え切った両手を、暖まるに暖まりきった身体に突っ込みまんとばかりに、かじかんだ両手を光久の背中に近づけていた。動きがなんだかぎこちない

「落ち着け」

「ふぐっ」「ふぐっ」

明日香と同じ事を思ったのか、呆れながらTEMMを起動して武器を取り出し、光久に近づいていた健太と部長の脳天を叩く。硬くて攻撃力が高かったのか、それとも寒さで防御録が下がっていたのか、頭を抑えながらその場にしゃがんで悶え始めた。それに気がついた光久は「何事!？」と言いながら俺と明日香の後ろに回り込んでいた

頭を抑えながら2人が立ち上がる

「……故だ」

すると、健太が何かを呟く

「なんだよ」

「何故この部室には暖房器具がないんだ……っ!」

「……まあ……予想だけだな」

今思い出した話を健太と明日香に向けて話し始める

あの一件で来斗兄が永久迷走し、人数が足りなくなったというところでwarsの都北大へへの出場はなくなり、過去全国に常連だった弦巻の恥、となって部室がグラウンドの最高の場所からこの日当たり最悪のポジションにある。そして、それまでは暖房器具が存在していたんだらう。その一件でそれすら没収されて今に至る、そんな説だらうな。2人は納得して頷いていた。よく見れば部室の隅に何かがはめ込まれていたような痕が存在するのが今になって気がつく。部長がゆつくりと（足を震わせながら）立ち上がる。いつもの威厳という物が存在しない

「……議」

「……え？」

「……緊急会議だ。これは弦巻高校wars部の存命に係っている

」

そして、弦巻高校wars部一同による、緊急会議が開催されることとなった

「……というわけで、俺らの部室に暖房器具を取り付けるか取り付けないかの会議を始めたいと思う」

ガタガタガタ……

部長が貧乏揺すりをしながらテーブルに肘を置き、両手を組んで、いかにもどこかの指令をやっているようなポーズを取りながらサングラス……まではいかないが、そんな状態に至っていた。その他のメンバーは定位置に座り、会議の進行を　　って

「ちよつと待った！　この会議の必要性ってありますか！？　絶対に無いですよね！？」

思わず立ち上がって、（いつの間にかそうなっていた）議長の西宮雄太郎に抗議をしてしまう。しかし、部長は表情を変えずに言い放つ

「言っただろう。これはWars部の存命に係っていると」

「大袈裟ですよね！？」

「静まれ神崎真箏。会議は始まったばかりだ」

「……貧乏揺すりしながら言っても説得力が無いんだが……」

真横に座っている健太が部長と同じようなポーズをしながら、表情を変えずに呟く。もうこのノリにツッコミを入れられないと思っ
ているのは俺だけだろうか。絶対に勝てる気がしない

さつきからエルフィの紅茶を飲んでようやく冷静さを取り戻し、
冷静になりすぎて、冷静を通り越した琉華が、

「それで部長。暖房でしたっけ？」

2人と同じように呟いた

「ああ」

もう俺の負けでいいんだろうか？

しかし、

「異議あり！」

と、エルファイが両手をテーブルにビターンと叩き付けながら威勢良く立ち上がる。そこまでは良かったのだが、手が冷えていたのか、今の一撃が余程のダメージになったらしく、両手を振って僅かに瞳に涙を浮かべて悶えていた。一応こちらの味方（？）なのかもしれない

手が治ったのか、今度はゆっくりとテーブルに両手を突いて、涙ぐんだ目で威勢良くさつきと同じ言葉を言う。言葉だけは良いんだが……行動がもう威勢がない。表情の変わらない3人の目だけがエルファイを向き、空間が冷たい空気に支配される。その中でもエルファイは言葉を紡ぎ出した

「部費の予算がありません！」

……これってもう、完全に会議が始まっているらしい。俺の最初に言った言葉はすでに消滅してしまったっぽい。頼むから人の話は聞いて欲しい

「……ば、バカな……もう予算が無い……だと……」

「信じられない……そんな状況にあっただなんて……っ！！」

「お前ら落ち着けー」

エルファイの言葉に余程ショックを受けたのか、健太と琉華のポーズが崩れて、絶望を味わっているが如くそんな言葉を口にする。あまりにも大袈裟すぎる反応に呆れてしまったのか、明日香がそんな事を呟いていた。ああ、そこに味方がいるみたいだ……

ちなみに光久と望は飽きてしまったのか、すでに椅子を離れて先

かつたらしいが……って違う。部費が無いって大問題だろ

ちなみにエルフィが部費の存在が無かったのを知っていたのは、いつだかに行われた生徒総会の資料に Wars 部の部費の欄が 0 円になってるのに気がついたらしい。流石エルフィ、と言いたいところが、全然資料を読んでいなかった俺たちも駄目だと思う

会議は続く

「で、でも……部費が無いんじゃ暖房を買うなんてそもそも無理なハズじゃ……」

「……あ」「」

今回の話の結論になるであろう言葉を、エルフィが戸惑いながらも話す。言われてみればそうだ。部長もこの部活に部費が回ってきいていないことを知っていたのなら、今回のこの会議を開く必要は何処にも無く、やるだけただの無駄になってしまうというのは気付いていたはずだ。それにも関わらず部長はこの会議を開き、エルフィにそこまでの推理をさせた。つまり部長は何らかの思惑があつて……

「その通りだ。部費が無ければそんなもの買える訳がない」

あつさり肯定をする

「加えてこの会議自体に意味がない」

そこも肯定をする

「最初からこちらの負けは決まっていたのさ。どつちみちこの部屋に暖房は帰ってこない。寒い3ヶ月を乗り切れ、と言う話だったのさ」

部長は最初からこのつもりでいたんだろう。その事を俺たちに気がつかせ、気合いを注入したかったのかもしれない
……って、なんだか納得いかないな

「……………部長……………」

エルフィが何かを思ったのか、未だに体勢の変わらない部長に不安げに声を掛けてみる。そういえば言葉の最後以後固まったままだ。丁度下を向いているために表情を確認することすら出来ない状況になっっている

「まあ……………」

「……………え？」「……………」

その直後、部長から声が聞こえた

「……………一番早い話、何処ぞの金持ちであるお嬢様の家が負担して暖房を買うという案が出てくることを祈っていたというのが本音だ」「最悪だ！ここに後輩をそんな風に扱おうとする外道がいる！！」「な、なんとなく予想は出来てましたけど……………そこまで至らなくてよかったです……………っていうか、その扱い止めてください。わたしだって普通に生きたいんですから」

この無駄に終わった会議もとうとう終了したのか、部長は体勢を崩してソファに深く腰掛けて息を吐いていた。あの体勢でいるのは辛かったらしく、腰を叩いて脱力しきっていた。ついでに言うところ、まだテーブルの振動が伝わってくる。健太も同じ感じだ

琉華はエルフィの持ってきた水筒を勝手に持っていき、コップに移して飲む。余程気に入っているのか何杯もおかわりして飲んでい

た。よくよく考えれば高い紅茶なんだよな……かなりタダ飲みして
るような気がするが……大丈夫なんだろうか

そして、

「……おおっ」

視界の隅でトランプタワーの建設工事をしている2人は、とうとう最後の1段を重ねるべく慎重な作業をしている途中だった。光久の両手に2枚のトランプが持たされ、望は緊迫した表情でタワーの最上階が建設される場所を見据えている。まさか短時間であそこまで作ることが可能だったとは……光久もとんでもない集中力とバランス感覚を身につけたに違いない
しかし……

「崩したい崩したい崩したい……」

貧乏揺すりをしながらテーブルに突っ伏している健太が、そのタワーを見ながらそんなことを呟いていた。確かにあんなものを見れば誰でも崩したくなったりするが……今はその気持ちを抑えて貰うべく健太の身体を押さえつける。貧乏揺すりの振動がかなり強い

「離せ……僕はあれを崩さないといけないんだ……それが僕の使命なんだ……約束したんだ……!!」

「誰とだよ……いいから完成の時を待て」

「離せ……離してくれっ……!!」

すると健太の身体が大きく動いて俺の押さえつけから逃げようとする。あまりにも強すぎるので、力が抜けてしまい、健太の身体が抜けかけてしまう。ヤバい、今ここで逃げ出されたら2人の努力が

水の泡に……ここは応援を頼むしか……!!

「明日香……手伝ってくれ……!!」

「はぁ……予想はしてたが……わかった」

呆れたような表情をしながら健太を押さえつけるのに協力してくれる明日香。2人分の押さえつけにより完全に健太の身体を固定して、貧乏揺すりを止めることまで成功する。健太は動けなくなったのが悔しいのか、男泣きと言う名の嘘泣きをしていた。一発殴ってやりたいと思うのは俺だけだろうか

光久が意を決したのか、とうとうトランプを持ち直して最後の一段に挑戦を始める。部室内に緊張が走った

エルフィはその様子を見据え、琉華も紅茶を飲みながらそちらの様子を凝視していた。部長は興味ないのか貧乏揺すりをしながら携帯電話を弄り、俺たちもこの状態のまま観覧することにした

「クリスマスパーティー？」

「はい。もうクリスマスも目の前ですし、うちで皆さんを誘って開かないかなー、と」

「それいいじゃん！ やろっよやろっよ!!」

本日の部活動も終了して帰宅 したのだが、何故か我が家に集まるなんて事態になっていて、現在エルフィがクリスマスパーティーをやらぬか、という案を出したところだった。それに琉華が凄いのりりな反応をして、健太がピクリと眉を動かしていた

ちなみに光久と望が建設していたトランプタワーは見事に最上階

まで完成し、それを全員が携帯に保存して放置……というか保管と
いうことになった。健太も崩そうとしていたので全員で抑えること
に成功した

……で

「具体的には何するんだ？」

「わかってないねえ真箏くん。クリスマスっていうのは、恋び
じゃなくて、みんなが幸せになる日だよ？ まあ……普通はプレゼ
ント交換だったりとかだよな」

「なるほど……」

「後はメシ食ったりとか……」

「……健太くんは乙女心が無いねえ」

「まあな……って、その声は穹殿ではないか」

「拙者と同じような話し方をしないでいただきたいのだが……」
「悪い悪い」

聞き覚えのある声と健太の発言で、その声の聞こえてきた方向
健太の座っているソファの後ろを見してみる。そこには健太の言う
とおり穹がやって来ていた。いつの間に入り込んでいたんだ……
全く気がつかなかった……

なんだかんだでいつもどおりのメンバーがこの場に集合してしま
う。ちなみに姉貴もそこにいたりするが、この一連の会話を聞いて
もまだ介入してくる気配はない

「だから綾香の気持ちに気づけないんだよー」

「ん、綾香？ 綾香がどうかしたの？ 幼馴染みだから全部知って
るとは思ってるんだけどなあ」

「幼馴染みってだけで全部を知れるものじゃないんだよ……ほら」
「うん知ってる」

急に穹と健太の2人がこちらを見る。穹は呆れたように半目で、健太はその言葉を理解しているが如く笑顔で。酷いことを言ってくれる、俺だって穹の事は結構知ってると思うんだが……この16年でもまだ知らないことはあるんだろうか。そうだとしたら俺は幼馴染み失格になってしまったりするのだろうか。それはそれで悲しいな

「……って、知ってる？」

「うん知ってる。僕を真摯と同じにしないで貰いたいなあ、なんつって」

「おいお前ら、なんかさつきから失礼なこと連発してないか？」

「いや、気のせいでしょ」

そうであることを祈っておきたいところだ

「それはともあれ」ということで、俺の話題からクリスマス話へと戻ってくる。発案者のエルフィはその間暇だったようで、テーブルの上に置いてあったポツキーを姉貴と同じように啜ってポーツとしていた。話しかけたらすぐに返事が返ってくる

「まあ細かい内容は後で考えるとして、日にちはどうします？ 皆さんがよければ24日にしたいんですが……」

「イヴの日か。別に問題ないんじゃないか？」

「……明日香がイヴって単語を知っていた……だと……」

「失礼だな琉華。私はこれでも……ははっ」

「……すみませんでした」

今の明日香の謎の笑いの理由を想像してしまい、なんだか複雑な気分になってしまった。毎年1人でその日を1人で乗り切るとなると精神的に辛いだろうな……今年はどうやってパーティを開けるから、これはこれで最高だろう。確かにクリスマスはみんなが幸せに

なれそうだ

エルフィの提案した24日には誰も日程は入っていないらしく、結果その日に

「……泊まり？」

「ええ……だつて遅くなりますし……」

泊まりがけでパーティを開くことになった。……確かにメンバーがメンバーだけに、その日はハチャメチャな事になることは目に見えている。特に健太がはしゃぎすぎて勝手に寝落ちるような気がしてきた。だから泊まりは必要なのかもしれない

心を読まれたのか、健太に笑顔で見つめられた。怒っている気配は無さそうだから大丈夫……だと思う。そのまま健太は携帯を取り出して何処かに連絡を入れていた

「今年のクリスマスは楽しみですねえ」

「……紗凧とクリスマスなんて久しぶり」

「そっか、紗凧は基本エルの家でメイドやってるから出られないんだよね」

「……うん。……だからまだ2回くらいしか友達とやったことない」

「その日は紗凧さんも仕事じゃなくてパーティに参加するようにわたしからお願ひしておきます」

「……ありがとうございます」

エストラント家メイドの朝比奈さんの話が終了したところで健太の電話も終了し、こちらを向いた

「なあエルぽん、綾香も誘っちゃったんだけど……大丈夫？」

「え？別に大丈夫ですよ。多い方が楽しいじゃないですか。……というか、笹原さんは皆さんより先に家庭の事情を知ってた訳です

し……」

「綾香に負けた!？」

「勝ち負けあるんですか!？」

どうやら今健太は笹原さんを誘うために連絡を入れていたらしく、それを報告してエルフィにすぐ許可を貰っていた。……笹原さん、俺たちより先にエルフィの家庭の事情の事を知っていたのか……もしかしたら文化祭の時から知っていたのかも知れない。紅茶の入ったダンボールが届くことも先に知っていたみたいだし……そう考えると色々当てはまる気がする

健太の報告が終了した直後、今まで同じポツキーを啜っていた姉貴がとうとう動きを見せる。啜っていたポツキーを口の中で折ってかみ砕いていた

「……私たちも行つていい？」

「へ？」

「いやあ……なんか迷つてたんだけどさあ、みんなの話聞いてたら私も行きたくなくなっちゃってさー？」

なんて最悪な人物が動き出すんだ……もし姉貴が来たら更にハチヤメチャな事になるのがわかるんだが……まあそういうイベント物には結構顔を出している姉貴だから……居たら居たで楽しくなるっというのも予想できる

「はい、来てください！ 人数は多い方が楽しいです！」

「そーんじゃ、私も色々連絡入れてみるかなあー」

その言葉を最後に、姉貴はリビングを後にして自分の部屋に戻ったのか、階段を上っていく音が聞こえてきた。多分連絡を入れるんだろうな。……かなり多い人数になるんだろうな

と、ここで1つ思い出したことがあったので、光久の顔を見てみる

「……そういえば、光久ってクリスマスに参加しても大丈夫なのか？」

「む？ 何故なにゆえそのような？」

「だって……お前明智家の人間だろ？ そういうキリシタンの祭と
いかなんというか……そういうの大丈夫なのかって事だよ」

なんだかんだで光久もそういう家系の人間だ、エルフィの家系とは相対的な立ち位置のような場所にいるというのは健太でもわかるだろう。そう考えた場合光久はクリスマスに参加させない方が良いのでは……と思っただけだ。周囲でもその事に気がついたのか、やっってしまった、と言った感じの表情をしながら俺と光久の顔を交互に見ているのが横目にわかる

答えが心配だったが、光久の口が開く

「別に問題ないのではないか？」

疑問系で言われても困るんだが

「いや、その答えだと……」

「別にいいじゃんかよ真箏」

「へ？」

「そうだよ真箏くん。明智くんもこう言ってるわけだし、大丈夫で
しょ」

光久の回答があやふや……というか、ハッキリ？ しないまま健太と琉華がそんな事を言う。いや、俺だってそういう来て欲しいという気持ちはあるんだが……もし本当に家庭の事情でそういうのが駄目だったりしたら、というそんな事を考えてしまう

「楽しければそれで済む話じゃなかよー」

「……………」

「言われてみれば健太の言うとおりなのか？　楽しいのは良いことだが……………」

「……………」

「……………真箏？」

「ふう……………ま、もしやっつてから駄目だった、ってときは俺たちからも事情説明しに行く、ってなら」

「よし決定！　これでメンバー確定！！」

「素晴らしい男女比率だなあ……………」

「ふっふっふ……………穹ちゃん、それは男子にとって幸せなことなのですよ」

「なるほど……………なんとなく参考にしておくよ」

出来るだけ健太の悪影響を穹に与えて欲しくないんだが……………まあいい。これで完全……………じゃなくて、姉貴が誘うメンバーが決まって、パーティの詳細が決まればそれで完全に決定だ。さっきまでの光久への不安は何処へやら、今は楽しみという気持ちで支配を始めていた。俺は子供か

「……………」

すると急にエルフィが鼻歌を歌い出す。クリスマスを大勢で過ごせるのがそれだけ嬉しいのだろうか

「……………どうしたのエル？」

予想通り琉華が先に質問をしていた。なんだかんだでクリスマスが楽しみそうな人物No.3に入るだろう。健太も質問すると思っただけで早速ストーブの前に移動して1人暖まっていた。だから暖かい空気が飛んでこないと何度言えば……

エルファイが鼻歌を止めて、楽しみの理由を語る

「だってクリスマスなんですよ？ みんなで過ごせるのもそうなんですけど……」

「なんですけど？」

「クリスマスと言えばサンタさんが来るじゃないですか！！」

……

「……えっ？」

思わず琉華と俺の2人で聞き返してしまった。その言葉に反応しなかったのは、言った本人であるエルファイ。ストーブの目の前にいて聞こえなかったのか、健太。いつの間にかテレビの方に移動して聞いて聞こえなかったのか、穹と望。そしてエルファイの横でポツキを啜えている明日香。俺たちが聞き返したことに疑問を抱いたのか、2人も俺たちの逆の意味で「えっ？」と聞き返していた

「サンタ……さん？」

「サンタさんって、あのサンタクロースだよな？」

「え、ええ……それ以外に該当する御方がいないと思うんですけど……」

「えっ、えっ？ えっと、サンタさんって実在するんだよな？一度も来てくれたことは無いが……ちゃんとしているんだよ……な？」

エルファイと明日香がサンタさん実在説を語り出す。ヤバイ……1

6年生きていてサンタさんの存在を未だに信じているヤツがいたとは……俺ですら小6でネタバラシをされたというのに……いや、明日香はしょうがないにしろ……まさかラーサーさんか時雨さん……まだエルフィに事実を伝えていないとか？ いや、それはないか……ちゃんと姿を隠して見えないところにプレゼントを置いてる……んだよな？

「え、エル……サンタさんに会ったことってある？」

すると、俺が今にも聞こうとしていた質問を横にいる琉華が繰り出していた。やはり質問の内容に疑問を抱いているのが、2人は首を傾げてから答える

「私は無い……プレゼントを貰ったことも無いな」

「わたしは毎年来てくれてます！ちゃんと手渡してプレゼントをくれます……！」

確定だ……あの2人のどちらかがサンタクロースを演じてるんだ……しかも毎年。それを知った俺と琉華は顔を合わせる。どうやら同じ事を思ったらしい

「なんで私の所には来ないんだろうか……悪い子にしてたか……？」
「でもなんででしょうか……サンタさんが来ると丁度入れ替わりでパ　お父様が居なくなるんですね。お父様にも是非会って貰いたいです」

ここでラーサーさんがサンタクロースを演じていることが判明した。とりあえずエルフィの言いかけた「パパ」と言う単語には反応したのか、健太がストープの目の前で笑いを堪えているのが何故か後ろ向きでも察知できる。これも特訓のお陰だろうか。ちなみにエ

ルフィは気付いていないらしく、明日香と一緒にサンタさんトークをしていた

それを見ながら俺と琉華は2人の反対を向き、顔を近づけて会議を始める

「……………ねえ」

「ああ……………完全だ。ちなみに聞いておくが……………琉華は？」

「小6」

「俺と同じだ。……………明日香はともかく、エルフィが……………」

「言えないね……………これ……………」

「ああ……………これは傷ついて時雨さんに殺されるENDしか見えない……………」

「うん……………黙って……………いようか」

「そうだな　　って、「あ」「あ」

会議が終了して顔を上げると、すぐそこには琉華の顔が目前に広がっていた。ついでに言うと言と髪の毛からいい臭いが飛んでくる。ふむ、これはオレンジっぽい酸味もありながら甘味もある匂い……………じやなくて、そんな至近距離で動けない状態になってしまった。まだ周囲の人たちは気がついていない

「ちょ、ちょっとそんな見つめないで欲しいかなあ……………？」

「……………」

「……………」

「はっ」

1回声を掛けられてすぐに反応できないくらいボーツとしていたみたいだ。慌てて琉華の顔から離れて反対側を向く。自分でも身体が熱くなっているのがわかる。どうせだから室温のせいにしてしまえばいいか。しかしまあ……………

「穹……そんなに見つめないでくれ。照れる」

「ほほう……冷たい視線を送られて照れるなあ……Mか？ 真筆はドがつくほどの変態だったのか!？」

「んな訳あるか!！」

さっきまでテレビの方を見てたというのにいつこちらを見ていたんだ……!! それに俺はMでも変態でもない! ……どちらかといえば……まあ 寄りなのかもしれないが……じゃなくて

「とにかく……色々決まったんだから帰れ帰れ! もう8時だぞ!？」

「あらやだ。こんな時間にみんなを追い出すっていうの真筆? 夕飯くらいご馳走する予定でいたんだからそういうのはやめなさい」

「あ、相変わらず準備早いな母さん……そう言うところがまた好きだよ……」

「あら嬉しいこと言うてくれるじゃない!！」

その数秒後、全員で夕食の準備を開始して、姉貴も呼んだところで親父を除いた10人という大所帯での夕食が始まる。……まあ、人数が少ないよりかは大勢で楽しく食べた方がまた面白いかな。そういうのを知ってるんだな、母さんは

皆が帰ってから1時間後

0111……

風呂から上がって部屋に戻ると、タイミング良く携帯電話が鳴り出す。誰かが忘れ物でもしたのかと思つて開いてみるが、そこには見覚えのない……というか、メモリに登録されていない番号が表記されていた。いたずら電話だろうか、それとも誰か友人が何処で知つて面白味で、か？

とりあえず、期待と不安を胸に着信ボタンを押してみる

『やっほー真箏くー』

ブツッ

その声を聞いた瞬間に電源ボタンを押して回線を切る。不安だけで良かったらしい。というかなんでこの電話番号を……つて、娘の携帯を確認したとしか考えられない

嫌な予感はしながらも携帯電話を机の上に置く。すると案の定、2度目の着信が。勿論番号は同じ物だ

……一応出ておいてみる

『人が挨拶してるのに切るとは何事だね!？』

「すいませんでした、つい……で、こんな時間に何用ですか早苗さん？」

電話の主は、エルフィの母親、早苗さんからによるものだった。曰く、携帯の番号はこの前テスト勉強をしに行ったときに、勝手に携帯を弄って入手していたらしい。まさか寝ている間にそんな事が起こっていたとは誰が想像したことか。というか完全にプライバシーの権利を侵しているような気がするんだが……つて早苗さんに言つても無駄か。俺に対してのことは

『うん、ちょっとお願いしたいことがあるんだよね。エルフィは…
…いない。えつとね、ラーサーがうるさくてさ、みんなが欲しい物
は何がいいか聞いて欲しいんだよね。勿論エルフィには内緒で、そ
の他のみんなに』

「へ？」

『別に好きな物で良いって。出来る範囲の物は揃えるからあ…あ、
そうそう。高校生が宝石だなんて言っちゃダメだぞ？ それじゃあ
ねー』

「あ、ちよ」

ブツッ、ツーッ

俺が何もいう間もなく回線を切られ、無機質な音だけが耳に入っ
てくる。とりあえず履歴からかけ直そうとしたが、もう寝てしまっ
たのから回かけても繋がることはなかった。いや、好きな物で良い
からって…そんな仕事を俺に頼まれても困るんだが…

……もし仮にもこの仕事を達成できなかったらどうなるんだろう

……

……

……

嫌な予感しかしない……っ！！

今の早苗さんの言葉から考えるに、俺たちが欲しい物を買ってク
リスマスプレゼントを贈ろう何てことを考えているに違いない。し
かも質問する間も無く切られたということは、俺がまだサンタさん
を信じているという設定になっているだろう。甘く見られたものだ
……これでも現実を見ている大人になりかけている子供なんだよ……

現実つて見てはいけない物も存在するというのが妙に嫌らしい。それをエルフィに味あわせるのもなんだかなあ……。悲しむ顔は見たくないな。……。健太が言わないかが不安だ

さてと

「はあ……」

思わず溜め息が出たが、この仕事はクリアするしかないだろう。

過去最高で気が向かない仕事と言っても過言ではない。なんで俺がこつ……。お金に関わる仕事をこなさなければいけないんだろうか

……

なんとなく携帯を開いてみる。そこには1通のメールが届いていた。何故かそのメールも先程と同様、登録されている物ではなく、見覚えのあるアルファベットの配列のメールアドレスが受信箱の戦鬪に来ていた

『s a n a 』

この文字だけでももう十分、これの送り主の正体が判明する。朝比奈さんしかいない。その後にも見覚えのある配列ばかりだったからすぐに理解した

とりあえず開いてみる

『T O . 神崎真箏』

まずは経歴を説明しましょう。これは望から教えて貰った物です。期待したでしょうが、こちらにその気はありませんので理解の方を。というか……。なんでもないです

あなたにメールを送ったのは他でもありません。今度クリスマスパーティをするらしいですが、丁度その日はお嬢様の誕生日です。

これは他の方々にはまだ伝えていません。なのでお嬢様から極秘裏にプレゼントの調達を依頼します。無理にとは言いませんが……ね？ 無理にとは言いませんよ？ いや、無理ならいいんですよ、無理なら。まあ、無理には……言いませんから

とにかく、その事は頭に入れておいてください。お願いします

From・朝比奈紗凧』

……無理にとは……か。そうやって何度も言われたら断るわけにはいかないじゃないか。まさかエルフィ本人が気付いていないなんていうパターンも存在……いや、俺じゃないんだしそれは無いか

……

携帯を閉じてベッドに倒れ込む。さて、一気に2つの仕事を申し込まれたわけだが……どうやって片付けるとしよう。みんなにも協力を仰がないといけない訳だしなあ……しかもエルフィに気付かないように、か。望の時もそんな感じだったけど、今回もまた大変だ。何を贈るとしよう

考えている内に睡魔が襲ってくる。気がつけば、時は既に翌日の朝になっていた。はてさて、どうしたものだろうか

#65 緊急会議（後書き）

相変わらずggdggdです

自分の部屋も寒いです

もうすぐクリスマスです

今年も1人ですw

すいませんでした

#66 Holiday's Afternoon(前書き)

真箏は実姉すら攻略する外道です
ごめんなさいでした

ちなみに健太のタイプは雫だったりしなくもない
すいませんでした そんな設定にしようかなw

12月の休日は暇だ。いや、12月だけに限るわけではないが……暇だ。特に部活がない日となるとかなり暇だ。ゆえに現在もう少しで12時を回ろうとしているというのに、ベッドの上で何もせずにごろごろと転がっている。何度落ちかけたことか

まあ何もしていなかった、という訳ではなく、ついさつき起きたというのが正論だ。多分起きてから30分ぐらいしか経っていないだろう。念のため着替えておいたが、服が冷たかったので再びベッドの中へ。そろそろ何かした方が良くと思いつつ、寒いので出られない。困った身体だよ全く。そう思いながらも12月の冷えた空気の中に、徐々に服に包まれた身体を晒す。時間が時間だったからか言うほど寒くはない。身体が暖まっていたんだろう

「やっ……」

今日は12月の16日、日曜日。部長が寒い中わざわざ休日にまで練習することはないだろうとかいう自分勝手な案の基、今月は土日の練習が一度もない。ゆえに暇な休日を送ることになっている。昨日までは宿題やゲームなどで凌いだものの、それが終わってしまうとそれ以降が暇になってしまうというのに昨日の夕方に気がつく。終わりがけのゲームをそうすぐに終わらせるのが間違っていた

というか、宿題が終わったなら自主学習をすればいいだろう。だからテストでギリギリの点数を取ったりするんだ。とか考えたはいが、身体が言うことを聞かずに「寝る」という選択肢を選んでしまった。はてさて、今日は如何しよう。そろそろ昼食だし……食べたからまた寝ることになるだろうか。それはいくらなんでも悲しす

ぎるか

とりあえずベッドから降りて携帯を手に持ち、洗面所に向かおうと部屋の扉を押す。乾燥しているからか、指先に静電気が走って顔をしかめる。痛い

洗面所に来てみると、いかにも今起きたような表情で頭を掻きむしる姉貴の姿があった。凄い眠そうな表情をしている。この顔を隼人さんが見たら悲しむことは間違いない

「おはよう真箒……」

「おはよう。眠そうだな」

「うん……昨日はちょっと撮り溜めてたドラマとか見てて……ふああああ」

大きな欠伸を無防備にしながら答える姉貴。w a r aをやっているときの表情とは180度も違う、その辺によく居そうならしい姉だ。これがあんな強いなんて誰が思ったことか。少なくともここに1人居るわけだが……そう思うと泣きたくなる

「真箒お」

「ん？」

「……………」

姉貴に呼ばれたかと思うと沈黙が走る。だらしない声で、いつものような穏やかな口調で。ただし、表情だけはさっきまで眠そうで欠伸をしていた顔とは違う、いつになく真面目そうな表情で俺の目をじっくりと見つめていた。その黒い瞳に自分が映っているのがよくわかる。実の姉とはいえ、その綺麗な顔にドキッとしてしまう

「……もしさ、目の前で家族が死んだらどうする？」

「はあ？」

「ねえ」

「何ふざけてるんだよ……冗談でそんな質問」

「答えて」

「……………」

いつもならこのタイミングで笑いながら誤魔化す姉だが、今回は何処か違うというのを言動から感じ取った。普段の言動と行動からすると嘘が苦手と思えるが、こつ見えても実は嘘と隠し事は得意だ。ポーカーフェイスも得意で、それなりにトランプが強い。でも今見せているのは嘘でも何でも無い、真剣な質問そのものだ。内容があまりにも酷すぎるため、答えるのを戸惑った。しかし、

「……真箏」

「そりゃ……悲しいに決まってるだろ」

率直に思ったことを告げてみる。何処の誰がどう聞いても当然だと思っただろう。目の前で家族が死ぬだなんて……考えたくもない。まあ寿命とかだったらしょうがないだろうけど……少なくともその瞬間は目を背けてしまいたい。もしくは目を開けられないかもしれない。そんな事を一度も考えたことがなかったので、改めて考えると人の死は嫌なものだ。ファンタジーに出てくる「永遠の命」なんて物を求める人間がいるのも頷ける

……ま、その内別れはあるものだよな

その回答に姉貴は、

「そつ……だよな」

複雑そうな表情をしながら呟いた。何か言っちゃいけない言葉を
言ってしまっただろうか。少なくとも俺は正解も不正解もない回答
をしたはずだが……気になる

でもそれ以上に、俺は姉貴の繰り出したその質問の真意が気にな
っていた。何のためにこんな質問をしたのだろう。その事で頭が7
割方占められている。どういうことだ

「ごめんね真筈、寝起きでこんな質問して」
「ちよ、おい」

曇っていた表情が切り替わって、いつものような……ではなく、
どこかぎこちない笑顔を浮かべながら頭をクシャクシャと撫でてく
る姉貴。なんだこの構図は。少なくとも俺の方が背が高いというの
に、目線の下にいる姉貴が少し背伸びをしながら腕を伸ばしている
というのはなんだ。これは関係を知らない人たちが見たらどう取ら
れるんだ

少なくとも俺が悪者扱いされるだろうな

「……よく見ると3年の間にこんなにおっきくなっただね」

「そりゃ3年だからな。男子は伸びるんだよ」

「最後に会ったときはまだ真筈の方が小さかったのに」

「いや、同じくらいだった」

「いや、私よりかなり小さかった」

「「む」」

昔の話になり、内容が内容だったので、思わず互いに睨み付けて
しまう。こういうのは写真を見るか母さんか親父に聞けば一発で済
む話だな。よし、今すぐにでも聞こう

と思っただが

「ま、今はこれだけ違うからな。満足だ」

「むっ……姉の頭を撫でるとは……良い度胸じゃないか」

「そもそも小さい姉が大きい弟を撫でるな」

「むむっ」

まだ俺の頭を撫でていた姉貴の手を振り払い、そのまま姉貴の頭に手を置いて今度はこちらから頭を撫でる。姉だから、という理由なのか、弟に頭を撫でられるのはどうも不服らしく、ムツとした表情でこちらを睨み付けてくる。それでも wars をやっている時ほど怖くない

頭を撫でていると、姉貴が顎に手を当てて何かを考え始める。そして何かを思いついたのか目を開いて頭の上に電球マークを光らせていた。隠喩だったか？ あれ？ 嫌らしい表情でこちらを見る

「なんかさー、これって周りから見たら恋人同士みたいだよねえ」

「はあっ!？」

その言葉に大きく反応してしまい、咄嗟に頭に乘せていた右手を離す。ついでに1mくらい距離を取って物理的攻撃に備えておいた

「いやぁ……まさか真箏が実姉をそんな風に扱うとは……これって貞操の危機？」

「……それ、キスで子供が出来ると思つてた人間が言う言葉じゃないと思うぞ。しかも同性間で」

「うぐっ」

まさか反論されると思つていなかったのか、半歩下がって胸を押さえる姉

「というか……そんな姉貴がよく貞操なんて言葉を知ってるな……」

驚くわ」

「うぐぐっ」

更に反論を受けて、今度は1歩後ずさる。もしかして、姉貴の反撃は最初の恋人がどうたらこうたら時の時点で終了したのだろうか。かなりのダメージを受けているように見える。しかし、ここまで来たらオーバーキルでトドメを刺してやろう。これがwarsで勝てない弟の逆襲法だ

「予想でよければいいんだけどな？ 貞操って意味、知らずに使ってるだろ」

「ぐはあっ!!」

『かんざき しずくに 999 の ダメージ!!』

まことは たたかい に しょうり した

けいけんち 0』

まさかの凶星を撃ち抜き、見事にオーバーキル判定をさせるダメージを与え、そのまま2歩下がっていく姉

「うわっ!?!」

「なっ!?!」

しかし、その先が風呂場という危険な場所に繋がっているのを忘れていた。風呂場に入ってしまった姉貴が更にもう1歩下がってしまい、その足下に何故か置いてあった石鹸を左足で踏んでしまい、バランスを崩して後ろに倒れ込んでしまう。このまま倒れたら危ない……!!

気がつけば身体が勝手に動いていて、姉貴の元へと駆け寄っていた。ただ、そこが風呂場であるというのを綺麗に忘れて

「ひっ!!」

……姉貴の踏んだ石鹸を、見事に俺の右足が踏み抜いた
だが、ここで姉貴を傷つけるわけにはいかない。そう思った俺は
左足で最後の力を入れて姉貴目がけて飛び

ドスンッ!!

「いつ!」「うがつ!」

同時に2人で倒れ込んだ。浴槽が少し遠くにあって助かった。もう少し手前にあつたら姉貴の頭が力チ割られていたことだろう。とはいえ、このまま倒れ込んで床に打ち付けていたので、頭を守るように左手を後頭部に回したから大丈夫だろう。その代わり俺の側頭部が痛い

姉貴が目を開く

「ま、真筈……」

「間に合ったか……」

「あー、うん。ありがとう……」

「ああ。でも俺も言いすぎた。悪い」

「いや、あれは勝手な自爆だから気にしない」

姉貴が作り笑いっぽい笑顔でそう答える。本当に自分の目の前にその顔があるため、その吐息が顔に掛かってくる。歯磨きを終えていたのか、苺のような匂いを鼻に感じる

……って、目の前?

そう思って自分の正面にある者を見してみる。姉だ、俺の実姉だ。その顔が目の前に存在している。こう言うのもアレだが、隼人さん

が惚れてもおかしくなくくらいに確かに綺麗だ。そんなのが今俺の目の前に存在している。あれ、おかしいな。ここにいるのって本来隼人さんのハズじゃ

しかも右手には何か柔らかい物を感じる

「……ちよつと、どこ揉んでるの」

「へ？」

思わずその柔らかい感触に手を動かしていたらしく、姉貴が顔を僅かに赤らめながらこちらを半目で見つめる。うーん、この感触は……とりあえず、俺の右腕は姉貴の後ろに回り込んで、背中の骨の完食を腕に感じて……それで右手は少し重い物に敷かれている。つまり……

「もしかして……真箒って腕フェチ？」

「聞いたことないぞそんなフェチ……」

呆れられたような目で見られ、呆れられたような声でそう言われる。自分にフェチがあるとか想像したことがないが……俺は腕フェチだったのか。……絶対にあり得ないと思う

とりあえず状況を整理しよう。今俺と姉貴は風呂場に倒れていて、俺の左手は姉貴の頭に、右手は背中を回って姉貴の腕を掴んでいる。つまり、だ。これは何処からどう見ても女を抱いている男、そうとしか見ることが出来ない。しかも困ったことにこの構図から考えてみると……どうしても当たってはいけない物が自分の胸に当たっていたりする。意識しないように敢えて想像はしない

「穹よりあるぞ私は」

「おい」

「しかも今ならノーブラだ」

「おい」

通りで確かにこれだけ柔らかいはずだ……じゃない！ 今回ばかりは非常にマズい！ 今までも何度かこんな状況に至った経験が……不本意、不可抗力の内にあつたが……いや、今回も同じなんだけど、設定が危ない！

「姉の胸で想像するとは嫌らしい弟だ」

「人の心を読まないでくれ……頼むから……」

もう嫌だ、こうすぐに心を読まれる生活だなんて……最近少ないなとは思ってたのに……

そんな事を考えている場合じゃない。確かこういう状況になったときつて、誰かしらこの場に現れるというデジャヴをなんとか経験しているような……だが今日は日曜日！ 冷静にゆっくり対処すればすうになんとかなる！

……と思っていた時期も俺にはありました

こちらに近づいてくる1つの足音。それは洗面所の目の前で止まり、そしてここからでも見える位置に足が見える。あの足は……16年生きているからわかる、ただ1人しかいない。あのすね毛の量を見れば一発だ……！！

「なんかさつき凄い音が聞こえたような……何があっ……た……の？」

開いている扉から洗面所を見る。そこには神崎家の当主（？）、親父という存在が呆然としてこちらを見つめていた。危ない。今度ばかりは完全な命の危機だ

……神崎剛は娘を溺愛しちゃっている。ゆえに覗きをして、常に母さんに現行犯逮捕されるといふ過去がある。つまり、だ。俺の命の灯火はここで消える

「あー、えつと……あれだ。これは事故であつて、不可抗力だ。気にするな」

姉貴を抱えてゆっくりと立ち上がる。親父は何も喋らない

「別に嫌らしいことをしてたんじゃない。ちよつとした事故だ。だから大丈夫」

親父は何も喋らない

「そもそも俺に姉を強姦するような気力はない……」
「じつ、強姦っ!？」

とつとつ親父が口を開いた。うん、反応する場面は正しいとは思うけど、声大きい。今のが近所に聞こえていたらどうするんだ。少なくとも俺は刑務所行きだぞ？ しかも台所の方から慌ただしい音が聞こえてくるが

「何何何!? 真箏が雫を強姦ですつて!？」

「落ちて母さん……してないから。ちよつとした事故があつただけだから」

「だつたらなんで2人して風呂に居るの!? そういふのはね……ベッドで」

「違う! ツッコミ入れる場所がすでに違う! しかも事故だし! さっきからしてないって言ってるからな!？」

「ま、真箏……いくら年頃だからって……姉を」

「……頼む。姉貴もなんとか説得してくれないか？」

「ん？ 真箒が急に抱きついてきて」

「さらばだっ！！」

姉貴の放った地雷に即座に反応して、すぐに風呂場を抜け出して部屋に戻る。その時誰にも掴まれることもなく、更には呼び止められることもなく辿り着いたのが奇跡だと思えて仕方がない。とはいえ、ちゃんとした弁解もせずに飛び出してきてしまったので、これは下に行くのが危険だな……とりあえず今は3人に近づくのを避けなければ

そう思った俺は、タンスの横に掛けてあったコートを手に取り、その他の貴重品をポケットに詰め、非常用に、と思つて数ヶ月前から置いてあるベランダの靴を履いて外に出る。ベランダの横には大きな木があるので、それを利用すればすぐに脱出可能だ。下へと降りる。その時の衝撃が脳天まで響き、少しそこで立ち止まってしまった

「ちとと……」

とりあえず今日の夕方までは外にしよう。それまでどこで暇を潰しているか……

「あ……」

真箒が1人、風呂場から脱走していく背中を見つめる。呼び止めようと思つたけど、喉に何かがつまったように声が出ず、何も出来

ないまま立っていた。お父さんとお母さんは溜め息を吐きながら視線を逸らしていた。確かに誤解を与えるような事を言ったんだ、無理もない。私もからかいすぎた。いや、逆にからかわれてたのか？真箏に抱きつかれたときの事を思い出す。なんていうか……3年って大きい事を改めて実感させられた。あんなに大きくなって、久々に会って1ヶ月経った今思い知らされた。背だけじゃない、どこもかしこも大きく。私が縮んだんじゃないかって錯覚する。でもそれはない。私だって徐々に大きくなって……ハズ。少なくとも穹よりは大きい。お母さんよりも少し大きい。でも楓や華にはどうやっても追いつけない気がする。って、そうじゃない。真箏が居なくなつた今、アイツのフォローを出来るのは今ここに居る私しか居ない。特にお父さんには何て説得しよう。何もしないまま真箏が帰ってきたら死んじゃうし……

……
死……か

VWで幾度となく人の死を見てきたから、それに関しては慣れたはずだ。別に今ある自分がいつ何処で死のうと、別に怖くはないただ

真箏やお母さん、お父さんの死

それだけではどうしても考えたくはない。家族だから、愛しているから

それはみんなだつて同じだ。大切な人を失いたくないのは知っている

でも

それでも

「……………」

逃げられない。逃^{のが}れられない。神が定めた運命からは

誰が決めた

誰がそうするんだ

私だ。みんなだ

守らないと

この手でみんなを守らないと。他の人の力じゃなく、私の手でこの手で

例え、全てを犠牲にしたとしても

世界を敵に回そうとも

私は護りきらなくちゃいけない

愛する家族を守るため

「と、いうことがあったんだ」

「けしからん！ 身体を交換してください！」

「出来ないから……」

午後も1時を回り、隣町の大型ショッピングモールのフードコート。目の前にいる健太について先程までに起こっていた事件の全貌を明かしながら、ファーストフードのポテトを2人で食していた。家を出てから色々な所に電話して回ったところ、暇人が健太と光久しかおらず、現在こんな形になっている。ちなみに光久は今トイレに行っている

そして女子。女子の皆さんは、来週に開かれるクリスマスパーティー

イの為、買い出しに行っていたりする。どうも気が早いと思うのは俺だけだろうか。とりあえず健太曰く、女子は準備が長いんだよ。化粧とかと勘違いしてないか？ まあ準備は徹底した方がいいんだろつということに納得はしておいた

「全く……彼女が出来ないからつとつと姉に手を出したか……外道め」

「だから事故だつて言ってるだろ。というか彼女出来る出来ないはどうでもいいだろ」

「……それエルぼんたち聞いたら泣くぜ？」

「なんでエルファイ達の名前が出るんだよ」

「……僕が泣きたいぜ」

どうして彼女の話からエルファイたちの名前が出るのだろうか。まさか俺にアイツらの内誰かの彼氏になれとでもいうのだろうか。確かにみんな可愛いとは思うが……絶対にやめたほうがいいと思うのは俺だけだろうか。間違いなく、死ぬ。一番マシなのは琉華……か？ ……女子をマシだとかそういう目で見える俺はなんだ。最低だ。そもそも何故死に繋がるんだろつ。我ながら謎だ

「まあ、そういうのは健太だけには言われたくない」

「ハッ、これだから乙女心のわからないアホは」

「なんだとアホ」

「やるのかアホ」

「……」

「無益な争いは控えた方がいいと思うのだが……」

「せやな。ま、確かに神崎の方はもっと女子の心を理解するべきやと思っけどな」

アホという単語の言い合いで互いに傷ついて意気消沈していた2

人の元に、聞き覚えのある2つの声が聞こえてくる。どうやら光久がトイレから戻ってきたらしいが……あれ？ さっきまで4人で居たっけか？ 聞き覚えがあるにも関わらず誰だか思い出せない。

関西弁……関西弁……

正面にいる健太とそちらを見る。そこにはハンカチで手を拭いている光久と、腰に手を当てながら半目で俺らを見る

「おう刹那」

高阪高校の哀川刹那君が立っていた。私服姿というところを見ると、どうやら外出中のような。というか外出中という単語しか当てはまらない。外出中じゃなかったら何だというのだ。外出だ

「つて、なんで刹那がいるんだよ」

「オレがここに居たらアカンのか」

「おう。お前には綾香とイチヤイチャするという大事な使命がだな……」

「健太、ツラ貸せや」

「まあまあ座れ」

健太の言葉にイライラしながらも、俺の左側で健太の右側の空いている席に腰掛ける哀川君。その正面には光久が座り、2人も目の前に置いてあるポテトを食べながら世間話がスタートする。もちろん最初に話題を繰り出したのは健太だった

「それで刹那。もうキスマではいったよな？」

コイツはいきなりなんて事を聞こうとしているんだ。普通そういうのって尋ねる部分なのか？ 聞かないよな？ そういうのは恋人同士の自由だよな？

「したで」

哀川君も律儀に答えるのな。しかも肯定までするんかい。これは俺がビツクリだよ。答えもだよ。答えることもだよ

しかし健太にはそれが予想通りだったらしく、あまり驚いているような表情は見せない。というか納得しているような表情だ。更に健太の質問は続く

「……C？」

「何を聞いてるんだお前は！？」

健太の口から放たれた言葉にとうとう我慢できなくなり、テーブルを思い切り叩き付けながら立ち上がった。テーブル上のポテトがガツと揺れ、その行動に驚いたのか光久が身体をビクつかせて少し距離を取っていた。健太と哀川君の表情は変わらない。こんな質問されて動揺しない哀川君が凄いと思う

「ちなみに親にABCの意味を聞くのは止そうな？」

「誰に言ってるんだ健太」

「光久に決まってるだろ」

それにしても違う方を見ていたような……気のせいかな

……今の健太の発言が無かったかのように、静かな空気へと戻るこのテーブルの周囲、半径2m。少し距離を取った光久も戻ってきて、再びポテトを食べ始めた。俺も落ち着きを取り戻すために1口食べる

そして、タイミングを計ったかのように哀川君が口を開いた

「せやな」

「じぶっ！」

今口に入れたポテトを盛大に吹きだした。今の俺の行動には驚いたらしく、3人とも少し遠ざかっていた。いや、そこ遠ざかるべきなのは哀川君からじゃないのか!? 今あつさり肯定したよな!? っつて肯定したよな!? どういう事だ!!

口元に付いたポテトの残骸をナプキンで拭きながら冷静になる。が、やはり冷静になりきれない。無理もない、今そんな話を聞かされたのだから

「ちょ、ちょちょ哀川君!? それはいくらなんでも早すぎだろ!?」

「ど、どうした神崎。悪いモンでも食うたか？」

「だ、だつて今っつて……!!」

今俺が大きい声で喋ってしまったからなのか、周囲にいた「C」という単語に反応した他の客達がこちらを見る。ヤバイ、これは色々と危ない。これだとなんだか俺がイケナイ人って扱いになりそうだ。咳払いをしながらゆっくりと席に座る

「落ち着け真筈」

「……といつかなんで健太がそう落ち着いてられるんだ。変態だからか、変態だからなのか？」

「酷い言い方だな真筈。僕は普通の質問をしたただぞ」

「その何処が普通なんだ!？」

もう健太の感性がわからなくなってきた。ある程度変態だというのは入学当初から知っていたわけだが……幼馴染みでさえ恋人との仲の状態を聞こうとするのか。しかも普通は介入する所じゃないところまで……駄目だ、頭が痛くなってきた

頭を掻きむしって頭の中を整理する

「……なあ健太、そろそろええんやないか？」

「だなあ。そろそろ真箏が可哀想だな」

「へ？」

「全部冗談だよ？」 「全部冗談やで？」

……

「ほ？」

「「冗談」」

2人の口から発している「冗談」という単語の意味を理解する。

確か、ふざけて言ったり、嘘の事だったり、って意味だったと思う。少なくとも俺の脳内辞書ではそんな意味だ。もしかして何処かの国の冗談だろうか？ だとしたら意味がわからない。冗談？ 地名？ 肯定の意味？ はて……

……突然、もの凄い頭痛に襲われた

「う、うあああっ！！」

「ま、真箏殿が急に悶え始めた！？」

「健太。お前がそんなからかうから神崎がこんななるんや」

「知るか。お前だってノリノリだったクセに」

「お前がそんな質問するからノッてやったんや。この変態が」

「黙れ変態。少なくともお前だって変態だろ。というかお前もA B C知ってたんだな」

「さあ？ 健太の事やから、キスの時点でエロい言葉だと感じただけや。直感や直感」

「本当かあ？ 後で綾香に真相を聞かないとなあ」

「……殺されるで」

「……せやな」

「りよ、兩人真箏殿を止めてくれぬか!? 拙者1人では間に合わぬ!」

「じゃあない。起こすぞ刹那」

「せや。これはオレらの責任やな」

直後、俺の頭に鈍痛が走り、俺は気を失った

「くしゅん!!」

「……綾香のくしゃみ可愛い」

「からかわないで望。……どうせ何処その変態2人が噂してるのよ」

「神崎と佐々木？」

「いや、多分健太と刹那ね。あの変態共ならアタシの話で盛り上がりそうね」

「刹那？」

「幼馴染みよ。ついでにアタシの彼氏だったりするわね」

「えっ!?! 綾香付き合ってるんですか!?!」

「わ、わたし……同じクラスなのに初耳なような……あれ？」

「いや多分聞いただろ。私は聞いた気がする」

「ボクもそんな気がするなあ。……完璧に置いてかれたよね」

「……謎の敗北感」

「ちよつと」

「もしかして……あんなコトやそんなコトしてるんですか!?!」

「なっ、何聞いてるのよ紗風! いくらなんでもするわけないですよー!?!」

「……なんか動揺してますね」

「動揺してるな」

「動揺してるね」

「……動揺してる」

「あまり男に興味ないとはいえ……これだけは聞いておきたい!!」

「あ、アンタらねえ……」

「で、どうなんですか!？」

「う……ま、まだ特に何もしてないわよ!! で、でも強いて言うなら……」

「うんうん!!」

「言うなら……あ……その……おお……」

「……顔が赤い」

「ほ、ほ……」

『……』

「……ほ、ほつぺにキスまで……だあああつ!! って何言わせるのよ! というか最近じゃないわ! これは10年前の話で健太と刹那の2人に」

「2人……ですか」

「2人……だと」

「2人……なんだ」

「……2人」

「なん……だと」

「はっ」

「昔とはいえいい話を聞いたなあ……ああ、最高」

「な、な、な……何言わせるのよ!! 忘れなさい! 今すぐに記憶から抹消しなさい!」

「それはいいけど……唇同士じゃないのー?」

「あのねえ……唇同士でキスしたら子供が出来るでしょ?」

『えっ?』

「えっ?」

『えっ?』

「えっ？」

『……………』

「……………」

『……………えっ？』

「も、も……………もう忘れなさいよバカぁ！！」

ぶるっ

急に感じた悪寒で目が覚める。なんとというか……………姉貴と同じような思考をしている女子高生がいるのではという危険性を感じ取ってしまったからだ。何故だろう……………それがどうも身近にいる気がしてならない。というかそんな危険性を感じ取れる俺はどういう男だ。

変態だ。いや、もう健太以上の変態だろこれ。哀川君以上でもあるな。テーブルに突っ伏されていた身体を起こす。体勢が悪かったということもあつて身体がやけに痛い。特に腰の辺りが辺に曲がったという感じがする

「おっ、起きた起きた」

目の前にいる健太がそんな事を言う。誰のせいで気絶していたと思っっているんだ

すると、手に持っていたランプを俺の目の前に置く。スピードの7だ。その下にはスピードの6が置いてある。俺が気絶している間にランプで遊んでいたみたいだ。3人とも同じくらいの手札を持っている。見たところ大富豪でもやっているらしい

光久がスピードの8を出して八切、そして光久がダイヤの9を出

して再開した。哀川君がクローバーの10を出していた

「……ところで今何時だ？」

「気絶してから10分しか経ってないよ。だから時間がありすぎて困る」

「早く目覚めて悪うござんした」

つまり俺が起きなければずっとランプをやっていたということになるんだろう。俺的にはランプをずっとやっつてることの方が退屈だと思っただが……まあいい

3人がランプを減らしていくのをジッと眺める。これはこれでもかなり退屈だ

「……そういえばさっきの冗談って？」

先程気絶する理由となったであろう単語の意味を聞いてみる。俺の脳内辞書の意味が合っているなら、さっきまでの話は嘘だって事だ。頼むからその俺が知っている意味でいて欲しい。そうじゃなければ俺はもう笹原さんと顔を合わせられる気がしない。これからどうしていけばいいんだろう。祝えば良いんだろうか

哀川君が笑いながら答えてくれる

「冗談は冗談や。ジョークやジョーク。だからさっきキスやらCやらは全部嘘や」

「真筈が暴走したときはどうなることかと……」

「悪い……俺の頭がついていかなかったみたいだ」

「拙者を置いて話を進めないで欲しいのだが」

健太が「おっと」と言いながら光久に謝罪する。まあ光久なら無理もない。アルファベットが出てきている時点でアウトな話なんだ

からしょうがない

と、ここである事を思い出す。そういえば早苗さんと朝比奈さんに依頼を申し込まれているのを今日まですっかり忘れていた。朝比奈さんの依頼は多分望の所にも回ってはいらるだろう。だから上手くあちらと連携しながらそちらは遂行できるが、まだ早苗さんの依頼に関しては遂行の予定がない。そろそろ始動しておかないと……男子陣なら今がチャンスか

「なあ健太、光久」

「ん？」「何事？」

2人がこちらを見ると、まるで俺の顔に何か恐ろしい物でも張り付いているんじゃないかって表情をする。なんだ、かなり失礼な反応を見せてくれるなこの2人は。俺が死神とでも言いたいのか。まさかの哀川君までそんな反応を見せている

「どうしたんだよ3人も。何かあったのか？」

「あつたから、だろ？」

「ま、真箏殿……」

「後ろや後ろ」

「は？」

3人にそう言われて振り返ってみる。そこには見慣れた銀色の銃口がこちらに向けられていて、今にも銃弾が飛んでくるんじゃないか、って感じのオーラを放っていた。つまりこれはどういうことだ殺されるかも知れないって事だ

「あぶなっ！！」

銃弾が撃たれることはなかったものの、そのまま銃がこちらに向

けて押され、避けていなかったら額に丸い形の痕が残る所だった。何をやる！　そう思って銃の持ち主を、確認する必要があるがとりあえず確認しておく。もちろんその人物に該当する知り合いは1人しかない

「こんにちはは部長。今日も危ないですね」

「挨拶が違うだろ挨拶が」

防寒具に身を纏った部長が、銃を向けながらこちらに立っていた

#66 Holiday's Afternoon (後書き)

自分で書いたとはいえ、綾香可愛いなオイ

その内自害しますorz

この話は次回へ続く。次回は久々に彼らが登場します

#67 成長を(前書き)

……お久しぶりです。あ(ryです。
待っていた方も、そうでなかった方も
かなり遅れました。すいませんorz
久々の投稿なので文体がメチャクチャかもしれませんが、ご容赦を

#67 成長を

「……って、どんな格好してるんですか」

「見ればわかるだろ。防寒対策だ」

「いや……もうこれ何処からどう見ても不審者にしか見えないんですけど……」

部長の服装に呆れたような表情を向けていると、また銃で頭を突かれる。ギリギリ回避したので当たりはしなかったが、2連続で来るのは予想外だった。見事に腹部へ命中してその場に崩れ落ちる

ちなみに目の前にいる不審者の服装はこうだ。黒のコートに黒のスボン。黒のニット帽に黒のネックウォーマー。更にフードを被ってサングラスまでは掛けていないが、見える肌の部分が目の部分しか存在していない。両手はポケットに入れているのでわからないが、確か黒の手袋を付けていたはずだ。よくここに居られると思う

部長が横の空いている席から椅子を運んできて光久の横へと座る。流石の光久でもその姿に驚いたのか、身体をビクつかせていた

「で、なんでここにいるんですか」

いつの間にか持ってきていたセルフサービスの水を飲みながら健太が質問する。この格好を見ればすぐにわかりそうなものだ。多分犯罪行為を犯そうと……心を読まれたのか、思い切り脳天を銃で殴られる。かなりの痛さに頭を抑えてテーブルに突っ伏す

「ただの外出だ外出」

「……寒さが理由で部活をオフにしたクセに」
「そこはつつこむな神崎。俺にも色々あったんだよ」

どのように色々あったらそんな怪しい格好が出来るんだ。というか寒さが原因で部活をオフにしているならなんで今出かけているんだ。そこまで厚く着重ねるなら一日中家に閉じこもってストーブの前に座っていれば十分温かいのに。まあそれはそれで社会的に危ない人と勘違いされそうな気もするが。部長は溜め息を吐きながら、いつの間にか持ってきていたセルフサービスの水を飲みながら

「アイツが来なければ俺は今日ずっとゲームをやっている途中だった」

不機嫌そうな顔をして言い放った。この表情はかなりキレている気がする。目しか見えないが、その目だけで全てを物語っていると言っているいい

ところでアイツとは誰だろうか。質問したら殺されるだろうか
と思つた時、部長の名前を呼ぶ声が近くから聞こえてきた。もちろん男の声だが何処がうざったい印象を与えるボイス。何処かで……いや、確実に何度も聞いたことがある。何故だか俺も腹が立つてきた

「あ、こんな所にいたのかい西宮君！」
「……来ちまったか」

部長の数メートル後ろに、身体を左に捻りながら頭だけをこちらに向けている人物の姿が目に入る。それは何処ぞのナルシストの様な喋り方をする、何気に外道な人間でありクスと呼ばれる人物の顔だった。久々に見た気がする。とりあえず挨拶はしないとな

その人がこちらへと「やれやれ……」と呟きながら歩いてくる。どうやら部長を捜していたのが行動から取って見える。そしてこちらの様子に気がついたのか、俺たち4人に目を向けて

「やあ。久しぶりだね」

と一言。挨拶されたらこちらも挨拶を返そう。それが礼儀というヤツだ

「お久しぶりです、奴隷川クス先輩」

「だっ、誰が奴隷川クスだっ!? しかも久々に聞いたよその名称は!」

「おおクス、居たのか」

「君は何でそんな不機嫌そうな目を……まあいい。僕の名前は吉原拓人だよ! 覚えておくがいい!」

「はーいはい」

「なんでそんなガツカリするんだい……!!」

俺と部長の挨拶に、健太達3人は呆れたように溜め息を吐いて水を飲んでた。まあ確かにそれが普通の反応かもしれないな。……普通に挨拶しておこう

「で、なんで吉原先輩も?」

俺が挨拶を入れる前に健太が尋ねてしまう。吉原先輩は腰に手を当てながら親切に答えてくれた

曰く、今日は暇だったらしく、部長ともう1人 瀧先輩を誘ってここまで遊びに繰り出していたらしい。そして、ゲームセンターで遊んでいる最中に部長を見失って2人で捜索中の所、今この場で発見、今から確保に向かおうとしているとか。まあそれは1人では

無理らしいので、今から瀧先輩に連絡を入れて合流を謀ろうとしている。……その本人の目の前でこれからの作戦を言ってしまうてもいいのだろうか……

ちなみに部長側の発言によると、電話が来たかと思えば玄関先に待機していて、親が勝手に入れて勝手に着替えさせられ勝手に連行されたらしい。それまではゲームをしていて、本当に閉じこもっている予定だったとか。たまに吉原先輩の行動力が凄いと思える

3分後、部長を搜索せずにスポーツショップを見ていたという瀧先輩がやって来て全員が集合し、何故かこのテーブルを囲って雑談が始まるうとしていた

「そういえばさつきから気になってただけど……刹那は何用でここに来たんだ？」

さつそく健太が質問をする。なんだかんだでさつきからずっと明らかになっていなかった質問だ。今来た瀧先輩も微妙に気になったらしく身を乗り出して聞く体制に入っていた。この様子から見ると、哀川君と笹原さんが付き合っているというのはすでに知っているようだ。小指を立てながら2人が哀川君に近寄る

「あのなあ……お袋に頼まれて買い出しに来てただけや。相変わらず人使い荒くてなあ……」

「……そういえば刹那の母さんってそんなだったな」

「あんないい人に見えるのにか」

「部長は中身を知らんからそう言えるんや……仲良くなると部長ですら使役するで、あの人は」

さつきまで気がつかなかったが、テーブルの下に置いてあった荷

物の入ったビニール袋を哀川君がテーブルの上に置き、中身を確認してみる。どうやら食材やその他の日用品が入っているらしく、曰くクリスマス用の時用だとか。ついでにクリスマスは笹原さんと過ごすつもりだったらしいが、健太が横取ったと言うことで友人と過ごすらしい。うちのクラスにいる滋賀崎辺りだったら間違いなくこう言うだろう

『リア充爆発しやがれコンチクショー！』

と。穹のメアドも聞き出せない滋賀崎がどうも可哀想になってきた。アイツがその内ちゃん和幸福になれることを心から祈っておこう……まあ穹はアイツだけには渡したくはないが

「はっはっは、悪いな刹那。綾香は僕が載っていく」

「好きにせえ。アイツも男1人と一緒に居るより女子友達と過ごした方が気が楽なんやろ。まあそこに健太とかがいるのは許せへんが……貸し1つって事で勘弁してはる」

「じゃあ今度鈴木さんとこ行くか」

「せやな。久々に顔出しせえへんとな」

やっぱり哀川君もあのラーメン屋の鈴木さんと知り合いだったか。健太と幼馴染みな訳だし、一緒に行っても全然おかしくない。ついでに俺も奢って貰うというのも有りか？

部長が退屈そうに大きな欠伸をする

「なあ帰らないか？ そろそろ寝たいんだが」

「何を言っているんだい西宮君。これからまたゲーセンに行くという大切な使命がひっ！」

「とつとと俺を解放しやがれ。消すぞ」

相変わらず物騒だ。目だけしか見えないからこそ恐怖感を出している。こういう怪しそうな人が銃を突きつけているからか、周囲ではここに危ない人がいる、等と言った感じにざわめきだした。それにすぐ気がついたのか、すぐにしまつてコホン、と咳払いをする

「そういえば……確かこの前まで神崎先輩達が来てたつて聞いたけど……マジ？」

部長の横に座っている瀧先輩が俺たち3人に向かって質問してくる。部長は「神崎先輩」というワードに反応したのか身体をプルプルと震わせ、その横に座る吉原先輩はうんうんと頷いてこちらを向いていた。世間は狭いなあ。どうしたらそこまで情報が……部長しかいないよな

詳細を答える前に、光久が姉貴達の事を知っているのかを尋ねる。その2人も面識はあるらしく、やはり来斗兄が直接のルートとなつたみたいだ。部長ほどの事はされなかつたらしい

こちらのターンが回ってきて、代表(?)の健太が説明を開始した。その横に座る哀川君はその状況説明に呆然として健太を見つめていた。無理もない、急に全国優勝チームが押し掛けてきて1週間の特訓をするなんて言われたら誰でも驚ける

「ま、そんなこんなで地獄の1週間を乗り切つたんですよしくしく」

「結局拙者もこれを使いこなす事は出来なかつたからな……」

2人がそれぞれ別の理由で目を押さえる。実際に泣いてはいないものの、確かに辛かったというのは事実だ。光久もドンヨリとしたオーラを放つて首を項垂れている

その一方で健太の反対側に座る瀧先輩と吉原先輩が顔を合わせる。

その時の表情は何かを企んでいるような顔で……何故だろう。本当に嫌な予感しかしない。哀川君もその2人の様子を見て何かを感じ取ったらしく、嫌そうな顔をしながらこの場から徐々に離れつつある2人がこちらを見る

「それなら今から哉町高校に行かないかい？ その特訓の成果を僕等が確認しよう」

「だな。前までのお前らなら3人がかりでも拓人1人で十分だった。それが今回どうなってるかを見せて貰おう。もちろん刹那も混じれよ？」

「いつ」

本当に逃げようとしていたのか、首を掴まれて行動不能になる哀川君。予想は当たっていたようだ

「確認……ねえ。止めとけ拓人。今の3人相手じゃ保たないぞ」

立ち直った部長が、いつの間にか汲み直していた水を飲みながら呟く。今の言葉に反応した先輩方2人が部長の顔を見てニヤリと微笑む。どうやら今ので完全に2人のスイッチが入ったらしい。これは俺たちも逃げられなさそうだ

「……ま、断る理由もないし。いいよな、真箏、光久？」

「俺は依存ないけど……」

「拙者も問題ない。実は少し身体を動かしたかったところだ」

「決まりか」

哀川君の首根っこを掴んでいる瀧先輩がゆっくりと立ち上がる。それに続くように吉原先輩が立ち上がり、先に歩き出す。置いていかれると道がわからなくなるので、急いでそれについていく。が、

忘れ物をした

少し歩いたところで健太と光久を呼んで座っていた席に戻り、忘れ物を持ち上げる

「おいお前ら。何をするつもり」

暴れられる前に瀧先輩の元へと連れて行った方が良いな。ああや
つて確信の無いことを言っただから最後まで責任を取って見届
けて欲しい

「お、おい降ろせ！ 俺はもう家に帰るんだよ！」

「いいじゃないですか部長。後輩達の成長を見届けてくださいよお」
「キモイぞ佐々木！ いいから降ろせ！ 降ろせえええっ！！！」

……さて、暴走して手を付けられなくなる前に瀧先輩の所に追
つかないとな

「くしゅん！」

「……綾香のくしゃみ2度目。……やっぱり可愛い」

「だからからかわないでっって言うてるでしょ。全く……アイツらは
何してるんだか」

「さつきから思ってたんだけど……綾香って自意識過剰？」

「そんな訳ないでしょ。勘よ。長年の勘よ」

「あ、ある意味羨ましいです……」

「だね」

「何言ってるのよエルフィ、琉華。いいから次行くわよ。っていう

か、いつになつたら穹来るのよ」

「メールしたのに返ってこないな」

「ですね」

「ええい、穹さんの事はいい！ それよりもさっきの話を続きを聞きたいな、あ・や・か・」

「いい加減にしないと起こるわよ紗凧」

「本望です」

「……紗凧がMだとは思わなかった……」

「じよ、冗談だからね！？ 望も本気にしないで！」

「……そう言いながらほつぺを弄らないで欲しい」

「だつてえ〜」

「全く……」

「それにしても本当に遅いよね、穹」

「だな。寝てるのか？」

「さ、流石に穹さんでもそれは無いと思つんですけど……」

「……逆に穹だからあり得る」

「……」

「……静まりかえらないで欲しい」

「と、とにかく……そろそろ移動するわよ。その内穹も来るわ」

「……」

「え、何その反応」

「これでも心配してるんだよ……」

「まあそうね。心配ね」

「それより綾香……さっきの続きを」

「しつこいわよ紗凧。忘れなさい」

「はあ……」

「だから何よ！」

「なんでも……ないです」

「もうアンタたちの考えてることがわからなくなってきたわ……」

「欲しい物？」

「ああ。実は早苗さんに頼まれて……ついでに言っと、朝比奈さんにその日はエルフィの誕生日だからプレゼントを用意しておけ、と」

目的地、哉町高校の校門前で先程聞こうとして、かなりの間忘れていた質問を今になって繰り出す。この場にいるのは俺、健太、光久の3人で、先輩達は先行して部室へと向かっている。ちなみに暴れていた部長は瀧先輩が沈黙させ、それを見ていた哀川君は静かになつて左腕に抱えられていた。ああ見えて結構力があるらしい

「……といふかなんで今その話をする」

「ごめんなさい、正直忘れてました。ごめんなさい」

健太に半眼で睨まれたので、申し訳ない感を漂わせながら謝罪する。実際本当に申し訳ないと思つている。さつき言つていればそれなりに考えることが出来ただろう。なので丁度良いタイミングで銃を構えていた部長のせいにもしておこうか

確実に殺されるから止めておこう。そもそも今日までにかなり時間があつたんだから、最終的には俺が悪いということになる。まあ学校だつたから言いづらかつたんだろうな、多分。……メールで済む話か

「やはりエルフィ殿の欲しい物が良いのでは？」

「それを聞いたら勘ぐられるだろ。だからエルフィには言つな、つて朝比奈さんは言つたんだよ」

「つまりエルぽんには聞けないつて訳だ」

「ふむ……」

光久が珍しく顎に手を当てて物を考え始める。考え事に熱中しすぎて余所見してるから転ばなければ良いんだけど……

それとは逆に何かを思いついたのか、健太がピシッと手を挙げる

「ここはもう真筈をプレゼントとして」

「冗談でもやめような？ 俺を貰って何故喜ぶ」

「……………」

「な、何だよその目は……………」

2人に冷たい視線を送られたかと思うと、「なんでもない」の一言で済まされて健太は溜め息を吐く。光久は再び考え始める。何故だろう、この中で俺だけが状況を理解できていないんじゃないだろうか。光久に理解できて俺に理解できないこと……………ふむ。俺も墜ちたか

何故か刀が頬を掠める。光久もどうやら好戦的になってきたみたいだな

「まあそっちは置いておくとして……………欲しい物が。どうしてそうなった」

「……………察しろ」

「……………大丈夫。大体予想は出来てる」

予想できているなら聞かないで欲しい

「その代わりに別の質問していいかね？」

直後、健太が笑いながらこちらを向いて話す。どうやら光久も健太と同じ事を聞きたいようで、頷きながらこちらを見る。別に拒む

理由もないので質問の内容を聞くことにする

「えつとな真筈」

「ああ」

「聞くぞ」

「ああ？」

「いいな？」

「あ、ああ」

まるでその質問を本当にして良いのかを確認するかのよう何度も聞いてくる健太。そんなに躊躇うなら最初からしないでいいんじゃないかと思うが、何故だろう。嫌な予感しかない。こんなに寒いのに手に汗が……。暑いからじゃない。嫌な予感がするからだ

健太が深呼吸をして再び口を開く

「この前はあやふやになったが、最終日に近藤と「^{何が}却下」があつ、つて早っ!!」

その質問の内容を聞ききる前に返事を返すと、予想をしていなかったのか、健太が半歩下がって叫ぶ。前方を歩く先輩達には聞こえなかったようだ。が、瀧先輩に抱えられている哀川君は聞こえていたのか、こちらを見ていた

「というか教えてだろ。望が校門の前で待っていてくれて、それで一緒に帰ったって」

実際にあつた出来事の8割くらいを確かに教えたはずだ。全部ではないとはいえ、流石にこれ以上のことがあつたなんて言わないとわからないはず……。読心術を使われなければだが。それなのにまだ聞いてくるかコイツ……。いや、コイツらは……!!

今の回答を聞いた健太が、嫌らしい顔をしながらこちらへと近づいてくる。そして右腕を抱えられ、その反対側を光久がガツチリと掴み込む。抜け出そうとしたが、完全に抜け出せない。あの特訓で力まで付けたか……！！ なんだかこの先の健太の言葉を聞きたくない……！！ 嫌な予感しかしない！！

「近藤が言つてたよな？ 『真箏が死んだら不幸になるおまじないをかけた』って」
「んなつ……！！？」

健太の言葉に思わず過剰な反応をしてしまい、慌てて抜け出そうと本気の力を腕に加える。しかし本当にガツチリと押さえられているのか、抜け出すことが出来ない。コイツらどこまで力付けたんだよ……！！

とうかあの健太が望のあの言葉を覚えているとは思わなかった。他のみんなは気にした様子もなく生活してたけど、もしかしてコイツ……この時を狙ってたんじゃない……その場合女子のみんなも気がついて……命の危機を感じる。自分でも顔が赤くなっているのがわかる。健太がニヤニヤと嫌らしい顔をしているからだ

続いてその反対側で左腕を拘束する光久が口を開いた

「それに真箏殿。お主は言おうとせず「却下」と申した。つまり、これは隠し事をしている証拠。疚しい事が無ければ答えられるはずだ」

「ぐっ……！！」

しかも光久までもがこんな推理をしてくるとは……力だけじゃなく思考能力までもが強くなったかコイツら！！ でも光久の言うとおり、隠し事をしているわけだ。自分で墓穴を掘るとは思ってもいなかったぞ今日は……

「さて真箏、聞かせて貰おう。『おまじない』ってどういう意味だ？」

「その言葉のままだ……だから離せ……っ！」

「それじゃあ何故顔が赤くなっておるのだ真箏殿？」

「寒いからに決まってるだろ……!!」

この場を凌げる嘘を必死に考えて口にする。それだけこちらも必死と言うことだ。間違っても望にキスされたなんて言えるわけ無いだろう。言ったら言ったで相手がコイツらだ、命の危険性が高まるだけだ。なんとか切り抜けないと……!!

続いて健太が半目でこちらを見、「ふうん」と咳

「ふうん」？

「近藤にキスされたのか」

「いつ!？」

しまった！一番気をつけなければいけない読心術の驚異を忘れていた！！俺の周りの人間がこの超能力を体得している時点で元々逃げ場はなかったのか！？心を読まれたことに加えて過剰な反応をしてしまったことで、健太が再びニヤリと笑う。前方にいる哀川君もこちらを向いている

しかし、直後健太はふう、と息を溢しながら腕を解放する。それと同時に光久も腕から離れていき、両腕に自由が戻る

「ま、深くは追求しないよ。ただ僕は真実を知りたかったただけだからね」

加えて意味不明な言葉まで言ってくる

「どういう意味だよ」

「少しは女子の気持ちも考えてやれ、って意味だよ。……まったく。穹ちゃん、エルぽんと続いて今度は隼さんと近藤にまで手を出すか……この性に飢えた淫獣め!!」

「はあっ!?!」

今の言葉は聞こえてしまったのか、前方にいた瀧先輩はこちらを振り返る。その顔は何処か驚いている様子で……ヤバい! このままだと変な誤解が……!! 部長はまだ気絶したままとはいえ、この変な情報が瀧先輩から漏れれば……哀川君も聞いてるし! 幸いなことに吉原先輩がいないのは助かった

「って、何が手を出すだよ! そんな覚えは一度もないからな!？」

「嘘付け! なんだかんだでもう3人とキスしてんだろ! この変態め! 身体を交換してください!」

「だから……!! エルフィとはしてないって言ってるだろ! それに望と穹は不意打ちされたんだって!!」

「……あ、本当にキスされたんだ……」

「………は?」

健太のその言葉に、思考が停止した

えっと、つまりだ

これは誘導されたという意味だろう
ゆえに

健太が先程言った言葉は嘘、心を読まれているわけではなく、こちらを動揺させて自爆させるための言葉だったという事だろう。多分。いや絶対そうだ
つまり嵌められた

「あははははっ！！」

「おい健太！」

「悪い悪い！ まさか本当に自爆するとは思ってなかったからさ！

！ あー腹痛えー！」

「あのなあ……」

笑いながら腹を押さえる健太の頭にアイアンクローを極める。その俺の後ろでは、それを止めるかのように光久が俺のことを羽交い締めに行っているが、今の俺にはそんな物効かない！！ 何故なら今俺の手は健太の額にあるからだ！！

健太がヒィヒィ言いながら両手を俺の手へと持ってくる。そして徐々に頭を上げていき、元の体勢へと戻る

「大丈夫、これは誰にも言ったりしない。僕は本当の事を知りたかったただだからさ？」

「……なんか信用出来ないんだが」

「との事だ健太殿」

「いや光久。お前にも適用されてるんだ」

「む、そうなのか」

「常識で考える常識で」

光久が素でやっているのかどうかわからない

「そうだねえ……よし、じゃあ僕も一つ、秘密を教えろと言つことぞうぞうだろっ」

すると健太が自ら死に行くような発言をする。秘密なんて普通言わないような物だが……いや、今回はかりはそんな事を言っではいられない。こちらとしては少しばかり信用できていないから、少しでも弱みというか何というか、そういうのは持っておいた方が良

いかもしれない。しかし、健太が秘密か……出来るのか

「……失礼なこと考えたろ？」

「滅相もございません」

やっぱりさつきは心を読まれたんじゃないだろうか

「まあいいや。そちらが聞こうが聞かないかは自由だけど……耳の穴かつぽじってよく聞きやがれ真筆！ 驚くなよ！」

「あ、ああ」

ちなみにこの声はあちらの方にも届いているようで、2人が興味津々な様子でこちらを見ていることに健太は気がついていなかったりする

そして、健太の口から俺も驚くような秘密が聞こえてきた

「実は僕、お前の姉さん 雫さんが好みだったりしなくもない」

そして、健太の口から俺も驚（略）

大事なことなので二回（略）

今の発言について整理をしたいと思う

「好みだったりしなくもない」 これは否定の否定、つまり肯定を表す言葉の意味となる。そして健太は何と言っただろう。俺の姉貴、「雫さんが好みだったりしなくもない」 要するに否定の否定で肯定 好みだったりする。はて、聞き間違いだったらいいんだが

「お前の姉さんが好みだ」

「んなバカなっ!？」

もう整理する必要すらなかった

「待て待て待て！　なんでそうなる！？　確かお前の好みって……」
「ん？　大きい胸を持ちながらお姉さんの様な人？　……悪いな真
箒……気付いたんだ。女性は胸で判断しちゃいけないって」

「いやそうだけどさ！　どうして姉貴なんだ！？　楓さんとか無か
つたのか！？」

「それはそれで拙者が困「楓さんも悪くないんだけど……いまいち
Sっぱさに欠ける」

「……………は？」

今聞き捨てならない言葉を聞いたような気がする

「拙者が喋っている最中に何を「待て。今なんて言った？」

「Sっぱさに欠ける」

「その……………「はあっ！？　お前Mなの！？　マゾなの！？　マゾヒ
ストなの！？　今年最後にとんでもない事聞いたよ俺！」

「まあねー。気付いたんだよねえ……………綾香によく殴られてるけどさ、
案外悪くないんだわ。まあ野郎に殴られるのは嫌なんだけど……………こ
う、女の子に攻撃されると……………なんていうか……………興奮するって言う
か……………」

「……………「変態だ！　ここに変態がいる！」」

「言つな。照れる」

「……………「そこは照れる場所じゃないからな！？」」

本当に驚きの事実を聞いた気がする。しかも1つの秘密じゃなく
て2つくらいの秘密を聞いた気がする。なんだかんだでMだったの
かコイツは！　女の子に殴られて喜んでじゃうMだったのか！　しか
も姉貴をSと見るとは……………いや実際何気にそうだけど、まさか健太
が姉貴の事を好みと言い出すとは……………本当に驚きだ。サンタクロー

スもビックリだ。キリストもビックリだ。今年一番のビックリか？
あれ？

健太曰く、姉貴は元気がよく微妙に天然、且つ寝起きの表情等々がエロくていい。そして大きくない胸が更にエロスを引き出しているとの事。結局胸を見てるんじゃないか

……とりあえずゴメン光久。今はそれどころじゃなかったんだ。ちなみにその光久は、拗ねたような表情をしながら俺たちの反対方向を向いている。なんだコイツ、可愛いぞ……って違う。コイツの心は乙女か。飼い主にシカトされているチワワか。紛らわしさの象徴であるポニーテールをズバツと切り裂いてやりたい

なんだかんだ話している内に部室へと到着する。どうやら吉原先輩は鍵を取りに行っていて、それで前にいなかったらしい。久々に来る哉町高校の部室へとお邪魔する。先に来ていた先輩が暖房を付けておいてくれたので、少しだけ温かい

ちなみに健太のMという話は哀川君と瀧先輩に聞かれていたらしく、慌てて忘れさせようとしていた。あの反応を見る限りこれは事実だろう

落ち着いたところで部長も復帰し、置いてある椅子へと全員が座る

「さて、と……」

「ふふ。早速始めるのかい西宮君？」

「帰るとしよう」

「……どうしてそうなるんだ！」「」

椅子を立ち上がった外へ向かおうとする部長を瀧先輩と吉原先輩が押さえつけ、椅子にロープで固定する。ああ、なんだかこの構図が珍しい。後で写真に納めておきたい気持ち……

何故か頬を銃弾が掠めた

「さて……さつき立てた予定の通り、今から神崎君達の特訓の成果を確認したいと思う。今回も前回と同じように僕と瀧君で相手しよう。西宮君は……多分観戦だろうけど」

「先に全滅させた方が勝利で、俺たち先輩チームと刹那達後輩チームで、《都市》のフィールドで戦うことにする。1回戦だけの真剣勝負。今日こそ1人は倒してみてくれよ？」

吉原先輩、瀧先輩の順番に説明をする。今回は哀川君もいるということで、前回の時と比べてこちらのチームに1人追加された。人数的に有利に見えても戦力の差はかなりある。あの特訓で強くなったとしても、勝てるかどうかはわからない

説明を終了した2人と、ロープで縛られていた部長が先にVWの機械へと向かう。こちらも作戦会議をする為に4人で円を作る

「と、言うわけだ。正直刹那は使い物にならん」

「おい健太、殴ってやるから顔面向けてみや。気持ちええで」

「野郎に殴られる趣味はないんだってよ哀川君……」

「せやったか。殴れへんのは残念やけど、さっきの言葉撤回せえや」

「悪い悪い。ま、特に立てる作戦もないだろうね。多分前回と同じで吉原先輩しか出てこないはずだ。あの時は3人がかりで駄目だったけど、今回は刹那もいるし、それなりに攻められるとは思う。相手の隙を突いて期を伺おう」

「……了解」「」

なんだろう。こういう時の健太って案外頼もしく見えるのは俺だけだろうか。妙にその姿が格好良く見えたりする。別にホモじゃない特に作戦を立てることもなく決まった作戦を胸に、先輩達の待つ場所へと向かう。さて、今回はどこまで通用するのだろうか……

ガンツ！！

「いきなり飛ばしすぎじゃないですか吉原先輩……！！」
「ふふ、西宮君に早く片付けるように脅されちゃったからね……悪
いけどすぐに終わらせるよ！！」

VWに到着して早々、吉原先輩がトンファーを両手に突っ込んで
きた。余りにも急すぎたので全員が反応できず、俺がその攻撃を受
け止めると同時に全員が散り散りになり、健太と光久に対して瀧先
輩が襲いかかっていた。その反対側に避けた哀川君は、健太と同じ
形の武器を装着して戦闘体勢に入っていた

もの凄い力で押されていた武器を全力で押し返し、吉原先輩から
距離を取って反撃の体勢を取る。今望はいないから武器共有は出来
ない。なので棒武器メインで攻めるしかない

「それが新しい武器かい？ やっぱり姉弟だね」

「そりゃどうも。早く終わらせるならこっちから行きますよ！！」

棒の端を持って吉原先輩へと駆け寄り、右回転を加えながら横に
薙ぐ。その攻撃は回避されて空振り、武器を持つ右手が後ろへと回
り込むが、背中の後ろで左手に持ち替えて突きを入れる。反撃の茶
素を与えないためにも攻撃はストップできない

しかし突きを左に回避され、右手に持つトンファーを上下逆に持
ち替えた吉原先輩が逆に突きを入れてくる。この距離だと回避不可
か……！！

その瞬間、右から力が掛かってその攻撃を回避。耳を軽く掠る

「油断大敵や神崎！」

力の掛かった部分を見てみると、哀川君が肘裏で俺の腰を抱えていた。そのまま左へと逃げて先輩から距離を稼ぐ。しかし、

「その程度で避け切れたと思わないことだね！」

「んなつ!?!」

その位置からバックステップしてこちらに詰め寄る先輩。両手のトンファーを上下逆にし、リーチを長くした状態で左回転を加えてくる。完全に俺のことを狙ってるな……!!

でもその程度の攻撃なら防御くらい余裕だ。武器を左手から右手に持ち替え、正面に向かって飛んできた攻撃を受け止める。しかしかなりの力が加えられていたのか、哀川君と軽く2メートルくらい吹き飛ばされる。慌てて武器を地面についてストップする。勢いが良すぎて火花が飛んでいた

次の攻撃に備えるために顔を上げる。そこにはすでにこちらへ向かってきている先輩の姿が

「哀川君腕を！ 危ないから離れてて！」

「了解や！」

まだ絡んでいた腕を放させて哀川君を遠ざける。その直後、武器を後ろに構えて右から大きく振って反撃をする。やはり防御が優秀なトンファーに受け止められ、加えて攻撃をされる

……多分、今までの俺ならここで詰んでいたはずだ。そのまま回避してやられていただろう

でも今はこの武器がある……!!

左手で棒の先端を持ち、ロックを解除。攻撃を右に流れながら回避して棒の中から刀を抜き出す

「……へえ」

「流石に事前に情報は行つてたか……っ!!」

今の吉原先輩の反応を見ると、この武器の形状についての情報は予め入手していたみたいだ。そのルートは部長しか想像できないが、今は確認している場合じゃない。どこまでの情報を知ってるかは知らないが、これから反撃するしかない!

「余裕ぶってるのもここまでですよ!!」

「それはこつちの台詞だよ神崎君!」

予想は出来ていたが、先輩の右腕がこちらへと向かって振られてくる。そう、今までならここでやられていただろうが、今はもう片腕に武器を持つてるから防御が可能だ。左手に持つ刀でそれを防ぎ、右手に持つ鞘を持ち替えて先輩の懐へと潜り込む。先輩の左の方向へと力が加えられていた武器は、それを抑える力が下に移動したことでそのまま左へと流れる。それでも驚いた様子は見せず、逆に笑顔を見せていた。ここまで予想はしていたような反応だな

「これで終わるわけ無いですよ、ねえっ!?!」

「当たり前だ!」

がら空きの身体へと右から攻撃を加える。両腕が右へと逸れている今、武器での防御は不可、更にはこの武器のリーチだとバツクして回避したとしてもかなりのダメージが通るはず。ここまで予想を立てていた吉原先輩はどう避ける。あるいはどう防ぐ?

攻撃がヒットする直前、先輩は両手に持つトンファーを仕舞って完全に攻撃を受ける体勢を作る。どうしたんだ？　これはもしかして諦め……いや、さっきは終わらないと言った。ということは

「避けられないなら防ぐまでだ！」

すでに人とは思えないほどの運動神経で、（先輩から見て）左に流れた左腕を下へと運び、再びTEMMを起動して次の武器……いや違う

「やっぱり盾か！」

「その通りだよ！」

足下に盾を展開して今の攻撃を防ぐ。盾自体に耐久力がかなりあるのか、その位置からビクともしない先輩。だがそれでも上はがら空き、チャンス以外の何物でも……

「鞘で切り上げ。僕は再びトンファーで防ぐ。続いて左手の刀で突き」

「んなっ!？」

今から自分のしようとしたことを読んだ!?　切り上げまでなら自分自身でも考えてはいたが、その次の行動まで先読み!?　もしかして姉貴達もこうやって相手の行動がどうくるかを読んで戦っていたのだろうか

今の言葉に動揺したのか、辺に手に力が入る。迷っていても仕方ない。とりあえず先輩の予言通りに行動しよう!　しかし

「その程度で焦ったら負けだよ神崎君！」

「しまっ　!」

動揺している間に武器を変えていたのか、小刀を片手にこちらへ振り下ろしていた。駄目だ！　あまりにも急すぎて腕が反応しない……！

「これで終わりっ！」

「くっ……！」

『オレの事忘れとるんやないか神崎いつ！』

「へっ？」

何処かで聞いたことのある声と同時に先輩の攻撃がピタッと停止し、直後、俺の上を何かが通過したしてそれが先輩へ命中、その身体が大きく吹き飛んだ。何事！？

その何かは俺の目の前へと降り、装備していた手甲を仕舞って琉華が使うようなスナイパーライフルへと変更。その場にしゃがみ込んで6発撃ち込む。吹き飛んでいる先輩に2発命中していた

「哀川君！」

「まったく……共闘している仲間を忘れるんやあらへんで？」

「悪い……つい」

先輩との戦闘に夢中で完全に忘れ去っていた。さっきも助けて貰ったというのに……なんだかねでこれで2回目だな

「いつ介入するかタイミングを伺ってたんやけど、お前ら隙あらへんわ……だから部長達のほう見とったわ」

「ああ……」

久々にあちらの方をしてみる。数100メートル先で行われている3人の戦闘は、互いに譲らないような戦いになっている。健太と

光久が良い連携を決めながら相手に攻撃の隙を与えず、攻防一戦の状態だ。とはいえ防御に徹する瀧先輩もなかなかの物だ。軽々と全ての攻撃を回避したりはじき返したりしている。これは持久戦になりそうだ

ちなみに部長はこの辺にいない。何処かに隠れて寝ているのかも
しれない

……さて、こちらはまだ戦闘が終わっているわけではない。哀川君の攻撃がマトモに通ったとはいえ、相手は一応全国レベルの吉原先輩だ。あの程度でやられることがないのは嫌でも知っている

60メートルくらい先で倒れていた先輩がゆっくりと立ち上がる。ここからだとよく見えないが、腕にダメージを負ったのか赤く染まっているのがここからわかる

『いい攻撃だよ哀川君！ 正直油断していたよ！』

素直に忘れていたと言えればいいものを

『だからこれで終わりにしよう！ 瀧君も含めてみんな潰そうじゃないか！』

あの人最低なことを言っているんですが

ちなみにあの大声でここまで聞こえても、あちらで真剣に戦っている彼らには聞こえていないようだ。鉄音にでも妨害されているのだろうか

『さあ武器を構えるんだ2人とも！ 僕も本気で行かせて貰うよ！』

その言葉は本気らしく、俺でもよくわからないが空気が変わる気配を感じた。別にイタイ子じゃなくて……本当にそんな気がしただ

けだ

その証拠として

「……ヤバ」

先輩の取り出した武器に、思わず呆然としてしまう。一般大会の時に見た五大武器の一つ、サンクチュアリ成る物だ。遠くから見ればただの弓同然だが、五大武器だけあって威力が尋常じゃない。以前部長が攻略した訳だが、俺たちにあれをどうにかできるハズが……あるわけない。あれが先輩の本気と言っわけだ

「……詰み、か」

駄目だ。建物の裏に隠れたとしても、連発で撃ってくることは間違いない。要するに逃げ場がない。しかもこの距離だと攻撃する術もなく、防ぐ術もない。詰みだ、完全に詰みだ。どうあがいても絶望だ

「詰み……か。なあ神崎。武器つてのは性能だけが勝負やあらへんで？」

「……へ？」

俺の正面に立っている哀川君が呟く

「性能だけで戦ったらもう、それは技術力の勝負やないか。それだともう人の戦いやあらへんやろ？ 武器を生かすのはその人の性能スキルや。その2つが掛け合わさってこそ、真の性能が生まれる。だから、戦ってるのは人の性能。武器だけで判断するのは良くないで？」

「哀川君……」

「だから神崎。ある意味賭けやけど、オレの事信じてくれへん？」

お前は上を防いでくれればいい。正面はオレが守つたる」

哀川君が後ろを向いてニヤツ、と微笑んでくる。なんていうか、その笑顔は健太に似ていて何処か信用が出来ない……訳ではない。その言葉が逆に力を与えてくれるというか何と……信じてみたくなる。賭けなら乗ろう。勝ちの確立が少しでも存在するのなら……！

「わかった……哀川君を信じて上を全力で守る！」

「その意気や。とりあえず相手の攻撃が始まったらそのまま走るでええな？」

「ああ！」

『準備は済んだかーい！？』

どうやらこちらの会話が終わるのを待ってくれていたらしく、弓と矢を両手に持ちながらそんなことを聞いてくれた。その心遣いに感謝いたします、先輩。でも早く勝負付けたいって言ったハズじゃ……

準備が出来たという合図を武器を構えて連絡する。どうやらそれは無事に伝わったらしく、とうとうその手に持つ武器をこちらへと向けてきた。俺は棒武器を使って上を防ぐ体勢を作りながら走る準備をする。一方正面に立つ哀川君も走る準備をしていた。さて、哀川君はどのように攻めるんだろうか

「……せや、神崎」

「ん？ 何か不具合あったか？」

「いやそうじゃないんやけどな？ 君付けやめてくれへん？ くすぐったくてしょうがないわ」

「……へ？」

「こっちは“神崎”って呼び捨てにしてるやろ？ それなのにそっ

ちだけ君付けはおかしいと思ってるな？　こんなタイミングで悪いけど、お願い出来へんやるか？」

「ああ。じゃあ刹那って呼ばせて貰うよ。でも……ちょっとはタイミングを計って欲しかったけどな」

「スマン……さて、オレから言っておいてアレやけど、おしゃべりはここまでや」

「了解」

最後の会話を終え、完全に相手の攻撃を迎え撃つ体勢に入る。やっぱり哀川……刹那の考えてることは未だにわからない。どう迎え撃つって言うんだ。生身で向かえば確実に終わるのはわかっているはずだろう

『行くよ2人とも！』

「行くで神崎！」

「ああっ！！」

矢を構えていた先輩がとうとうそれを放つ。そのタイミングでこちらも走り出した

これで決着を着けようじゃないか！

#67 成長を（後書き）

本当は1話でケリを付ける予定でしたが、やめました
結末は次回に続きます。年末までに今章を終わらせられる気がしま
せん。すいませんでした
それではまた次回……

#68 一学期終業式(前書き)

前話の続きです

そして4日分開きます

『これで終わりにしよう！』

遠くでこちらに弓矢を向けていた先輩が、とうとう弦を引っ張って矢を放とうとする。あのまま放たればこちらは間違いなく敗北下手したら健太達（瀧先輩含む）も巻き込まれかねない危険度のかなり高い武器だ。それを今から2人で攻略しようとしている。今は俺しか武器を構えていないが……本当に作戦なんてあるのだろうか。哀 刹那はまだ何も持たずに前を走る

……もしかして攻略法なんて無いのでは？ それを知らながら、負けることを知っていながら前へ進んでいる？ いや、それは多分あり得ないだろう。さっきの刹那の目は本気だった。やっぱり何か策があるとしたら考えられない

相手が攻撃してくる前に決着を着けようとした？ そんなの絶対に無理だ。もう武器を構えられた時点でそんなこと出来ないに決まっている

前方で弓を構える先輩が、照準を合わせているのか武器を僅かに動かしているのがここからでも見える。よく見ると、矢の先端はこちらを向いておらず、少しだけ右に傾いているのがよくわかる。多分瀧先輩達に当たらないようにわざとずらしているのだろう

念のため確認。吉原先輩が今現在手に持っている弓矢 “サンクチュアリ” は一見ただの弓矢にしか見えない（見た目が派手なんだけど）。でも五大武器の一つと言うだけあって、性能は高い。今構えている弓も普通に見えて、あれは特殊な……その武器専用の矢と言っている。まあ武器の性能、って訳じゃないんだが、その矢が

危ない。一発で万近くに分かれて飛んでくるからだ。合宿で先生が使っていた“フォーマルハウト”を彷彿させる

そこだと思う。五大武器って言うても、それはその程度なのでは？
と思っただけと違う。エルフィ曰く、基本性能は普通の武器より高い。弾速や火力、その他色々な性能がおかしいとか

……そんな話は今どうでもいい

今は目の前の事に集中しないといけない！

『これで終わりだ！』

「っ！！」

とうとう先輩の右手に掴まれていた矢が放たれ、自分たちの走っていない方向へと飛んでいく。今更ながら、よく見るとあの矢も普通の物より大きいような……そんな場合じゃない

俺と刹那の右へ飛んでいく矢が破裂した。もう少し遅ければここに飛んでこなかったのに、なんて思ってしまったが……こちらには総数の約3分の1の量の矢が飛んできている。幸いながらあちらへ飛んでいく矢は無いようだ

……さて、ここから勝負っていつか、賭けっていつか……

「刹那！」

「わかってる！ そのまま走れ！」

彼のやろうとしていることは大体だけ予想が付いた。多分盾で防ぐのだろう。もしあれをやり過ぎず、または特攻するなんて策を通すというならそれしか思い浮かばない。というよりそれが最前と言える

しかし今回はそう上手くいく相手ではない。何せ相手はあの五大武器だからだ。さっき先輩が使ったような盾でさえ……多分10発

程度が限界だろう。今までの経験と勉強から考えるとそうだがそれでも

俺は刹那を信じて走るしかない。今はそれを信じて上から流れ飛ぶ矢を防ぐしかない

『さあ、ゲームオーバーだ!』

無数の矢がこちらへ近づいてくる、近づいている。その距離、僅か10m。そしてこの間約0.1秒

刹那は

「任せたぞ神崎!」

「そっちこそ!」

俺の予想通り、少し大きめの盾を展開した
それも

「だ、“ダイヤモンド”……」

「なんや神崎。知つとつたんか」

刹那が構えた盾、それはAT社のモデル(AT社しか無いが)の盾だった。知っているも何も、一度だけよくお世話になったことがある。そう、あれは一般大会で高阪高校と戦う前……準決勝の時だった。あの堅さには骨が折れかけた、けど

……今でも思う。部長に渡されたあの銃弾は一体何だったんだろう。簡単に突き破ったし……いわゆるたった一つの真実か。攻略法……いろいろとおかしいな

五大武器の攻撃を軽々とはじき返していく盾。上からの攻撃を、棒を回転させて防ぐ。もはや横と後ろからの攻撃がない限り、ここは完全に無敵になったと言っていていいはずだ。良い感じのペースで先

輩に近づきつつある

「この盾はたった一つの弱点を除けば最強なんやけどな……ま、それも無さそうやし、大丈夫か」

「弱点？」

正面がかなりうるさいけど気にしない

「ああ。“ダイヤモンドカッター” ちゅー、銃弾があるんや。この防御を崩せるのはあの銃弾一発だけ、ってことやな」

今ひとつ、謎が解けた気がする。あの銃弾はそんな凄い物だったというのか……流石部長。新型の盾だったというのに対策が早い。

早すぎて泣ける。泣かないが

それにしてもダイヤモンドカッターか……名前、直球すぎるよう
な……

そんなことを考えている間に、先輩のほぼ真正面へと移動する。あれから何発も撃っていたようで、少々意気が上がっているようだ。危険を承知で横から見てみた結果だ

『くっ……何故君がそんな物を……っ!!』

曰く、普段はスナイパーをやっているから背中を防ぐ物が欲しかった。との事

「運が悪かったですね先輩！ 今回はこっちの勝ちですよ！」

「そうや！ 諦めて自分で落ちたらどうや！」

その言い方は無いと思うが……

今の俺と刹那の言葉に、動揺と焦りを隠せないのか、そんな表情

をしながらこちらへと弓を向けた先輩。苦虫を噛みつぶしたような顔をしながら攻撃を止める。それでも俺と刹那の突撃は止まらない

「そうだね……諦めるとしよう」

その言葉と共に武器を降ろした先輩。とうとう降参したようで、ついでに武器も消してくれた。完全に俯いて、悔しそうに声を上げていた

しかし俺たちは止まらない。さっきまで痛み付けてくれた分、しっかりと仕返しをさせて貰わなければ。部長ほどでは無いにしろ、それほどの痛みを……！！ 前回の分もしっかりと精算をしようじゃないか！！

「それでいいんやそれで！」

正面を走っていた刹那が急に立ち止まり、そのまま武器を取り出して腕へと装備。俺は急ブレーキに成功して少しバックステップして距離を取る。その判断が正解だったのか、腕が下がってきた。なるほど、そのまま盾を武器として使う、とな。それは痛いだろう、間違いなく

しかし、

「まあね」

その瞬間、俺と刹那の表情は凍り付いた

「君たちが戦っているのは、何も1人じゃ無いんだからね」
「避ける刹那ああああああああああっ！！！」

ドスッ！

瞬間、殴る体勢を作っていた刹那の身体が血しぶきを上げながら左へと吹き飛んだ。当然目の前には放置された盾が置かれて……支える物がなくなつて、ガタン！と倒れ込む。そこにはこちらを見ながら笑みを浮かべる吉原先輩の姿が

そして左の方向を見てみる。そこにはかなりボロボロになって地面に膝を突いている光久と、双剣の乱舞に耐えながらこちらを見る健太の姿が。今聞こえたのは健太の声……じゃあハツとなつて刹那の方を見た

「う……あ……」

「刹那！」

慌ててその場に倒れ込む彼の元へと駆け寄つた。腹部からは血が流れ出し、その量が多いからか地面を朱に染めている。止血しても助からないレベル、とでも言っておこう。ダメージもかなり深い。呼吸も苦しそうだ

「2人を相手にしててこつちを気にする余裕が……」

「それが瀧君の強みだよ」

「！」

その声で我に戻り、聞こえた方向を見る。そこではすでに、こちらに向けて銃を構えている吉原先輩の姿が。威圧感が……凄い

「なんだかんだでよく周りを見ているのさ。ねえ哀川君？」

「……その通り……部長はよくみんなに……気を配つて……」

喋っている最中、刹那は血を吐いた。その様子を見た俺と先輩は、喋らないでいいと言うと、すぐに意識を失ったのかこのフィールド

から消え去っていった。戦闘不能と判断されたんだろう

残ったのは俺と吉原先輩。そして向こうで戦う健太と瀧先輩だけか？　もしかして光久も戦闘不能になったのか……？

「神崎君」

「……………」

再び吉原先輩の方へ顔を戻し、そこを見ながら徐々に立ち上がる。いつでも頭を撃ち抜かれてもいい体勢が続いている

「……………確かに、強くなったね」

「なんですか？　それは嫌みですか？」

「ふふ……今の君ならそう聞こえても仕方ないか……でも、事実だよ」

「くっ……………！」

すぐさま棒武具を右手に持ち、先輩の手に持たれている銃を弾き落とす。それも予想の内にあつたのか、もう片方の腕に持たれていたトンファーで両腕を切りつけられて行動不能にされる

再び地面に崩れ落ちた。その地面は血で赤く染まっている

……………先輩の言うとおりだ。今の俺、今敗北しか目に見えていない俺には、その言葉はどうしても嫌みにしか見えない。先輩から見たら事実なのかもしれない。しれないけど……悔しさと辛さで、それが勝手に嫌みの言葉に変換されてしまう。褒めてくれているのに……何故だ

そんなの決まっている。弱い、からだ

「そう思ったのなら、これからもっと上を目指せばいいじゃないか」
「……………え？」

今は心を読まれたとかそういうのはどうでもよくなっていた

「君たちはまだ伸びるさ。それこそ僕ら……先輩達を超えられる」
「……………」

先輩達を超えられる

……今確かに俺の耳はそう聞き取った。それが幻聴なら、聞き間違いなら。それなら嬉しかった。なんでこう重い言葉なんだろう。そんなの無茶だ。たった今その手前に存在するであろう壁の前に散るうとしている。それなのにも関わらず「超えられる」と言った。今の時点ですでに無理だ。仮にこれから伸びたとしても……到底追いつけない気がする

「最初から諦めるから駄目なんじゃないかい？ 少なくとも僕の知っている神崎君はそうすぐに諦める人じゃ無かった気がするんだけど……………」

「え…………？」

「身体は強くなったけど、心は弱くなったんじゃないかい？」

「……………」

「少なくとも、僕はそう思うよ」

そう言われて、引き金を引かれた。ドンッ、という轟音がこの場に響き、銃弾が頭を撃ち抜いた。薄れゆく意識の向こう側で、健太が叫ぶ声が聞こえてきた気がした

確かに吉原先輩の言うことがわからない訳じゃない。あの特訓以来、warsの大会に関する目つきが変わったかもしれない

もちろん少し前までは全国を目標にして戦ってはいた。奇跡にもドンドン勝ち上がって、このままいけるんじゃないかと思っていたけど壁が立ちふさがった。それでも次にはまた全国を目指そう、なんて思えたよ

「おい真箏」

思っていたけど、それは夏休みで打ち崩された。もちろんその原因というか相手というか……それは吉原先輩と瀧先輩だ。あの時に更に差を見せつけられ、あのままではいけないと思っ、全国には行けないと思っ

……それでもだ。それでもまだ力を付ければ、頑張れば行けるんじゃないかと思えていた。何度倒れても何度挑戦してやるなんて意気込んだ日もあったような……まあ今になればツツコミを入れるところが多い気がしなくもないが

「まーこーとー」

結局それは先月まで。姉貴達が帰ってきてから俺の考え方は変わったかもしれない。先輩達以上の差を見せつけられた。あれが本当の全国のレベルなんだろうなと思っ。実質部長達は中学までの話、姉貴達は高校での優勝を果たしている。それがまた大きな差であることはよくわかってる。中学と高校の差、小さいようでもかなり大きいハズだ。そんなの受験でも……学業でも同じ事が言えると思っ

だからこそだ。本来目指すべきは姉貴達のレベル。決して部長達を超えるだけで済む話じゃない。仮に超えたとしても、それはあくまで中学のレベル。今は高校生だとしても、部長の今の記録はわか

らない。それに他の学校に行ってしまった先輩達の実力だって、あったとしても最終的には全国に及んでいないそうさ。その中で一番近いのが……箕輪高校（芥川先輩のいる高校）だったはず

「……なんか悲しくなってきたな」

つまり結論として、俺は姉貴に追いつく事なんて無理だ
これは誰がどう言おうと変わることはないだろう
それだけ……姉の存在は大きいんだ

「ゴッドハンドクラッシャー
神の手による崩壊ッ！！」

「ぐはあっ！！！」

なんて考えていると、いきなり右頬を思い切り殴られた。しかも武器込みで。というかなんだゴッドハンドクラッシャーって……変な読み方をするな！

幸いにも割れなかった窓ガラスを左手で押さえ、殴られた頬を右手で押さえながらゆっくりと立ち上がる。そして殴った本人を見る。もちろんそんなの健太以外該当する人物はいるはずがない

「……何するんだよ」

「それは僕の台詞だ！ さっきから呼びかけても返事無いし……お前日曜からどうしたんだよ」

「……………」

ちなみに今日は12月21日。俗に言う二学期の終業式だったりする。それも無事に終わって現在、もうクラスの大抵が帰宅したらしく、この教室には殆ど生徒が残っていない。エルフィが居ないと
言うことは……先に部室にでも行ったのだろうか

「エルぽんなら綾香と帰ったよ。……まだクリスマスの準備があるんだとさ」

「そうか……………」

何故だろうか。クリスマスという単語を聞いても楽しみという気持ち湧いてこない。もしかして聞きすぎて飽きたのか？ 自分でも原因がわからないとは……………はてさて

「……………」

「真箏……………」

正面にいる健太が少し困った表情をしながらこちらを見つめる。そりゃそうだ。今の自分の顔は何処を見ているのかもわからない。放心状態というヤツだ。別にクリスマスが楽しみな訳じゃない。吉原先輩の言葉で頭がおかしくなっているらしい。この一週間その考えすぎて、まともに授業を受けたりメシを食べたりしていない。ただでさえ昼食の時間も魂が抜けている

心が弱くなつたから安定した生活すら遅れないのか？ 心が弱いからこんな事を考えすぎるのか？

「ゴッドハンドクラッシュシャツ！」

「ぐぶっっ！」

再び健太に殴られた。今度は窓に飛ぶことなく、その場で踏みとまれたけど

頬を抑えながら（2度目）健太に詰め寄る

「何するんだ！」

「殴ったんだ！」

そんなの嫌でもわかつている！

「ほら行くぞ！ 荷物纏める！」

「はあ！？」

「ほら！」

健太に言われるまま机の横にある鞆を肩に掛け、必要な物をロッカーから取り出し、ついでに健太も必要な物を取り出すというのでそれに付き合う。そしてまだ教室に残っているクラスメイト達に「良いお年を！」と伝えてその場を後にする。この流れの8割ぐらいは健太1人だけで行い、俺はついていくことも出来ずにその後ろを立っていた

昇降口までやって来て、健太は上履きから靴へと履き替えようと、下駄箱に手を掛ける。ここまで強引に連れてこられたので、コイツの考えていることが何一つわかっていない

「おいどうした真筆？ 早く行くぞ」

「行くつて……何処に」

「そりは着いてのお楽しみで。ほら！」

俺の考えていることがわかつているのか。それとも俺が発している空気でどういう状態にあるのかを察しているのか。健太はいつもの調子で、いつもの感じに笑顔を見せる。なんとというか、コイツの顔を見ていると何故か心が落ち着く。そういう才能の持ち主なのか……？

呆れながら息を吐いて、俺も靴を履き替える。上履きを持ち帰る機会が少ないので、今日持ち帰って洗っておくでしょう

少しだけ先を歩いてきた健太に並んで学校の敷地を歩く。周囲では下校中の生徒や、部活動をやっている生徒、他には忘れ物をしたのか校舎の方へと戻っていく生徒もいた。この中にもクリスマスが

楽しみで仕方ない人はいるんだろうか。はたまたサントさん存在説を信じている人はいるんだろうか

「いやあ……とうとう冬休みだぜふ・ゆ・や・す・み！ さーて何して遊ぶっかなあ……」

ここまで冬休みを楽しみにしている健太に悪いので、宿題の存在を思い出させるような発言はしないでおこう。多分本人も忘れたい気持ちで一杯だと思う。もちろん俺だってそんな感じだ

でもやっぱりコイツの考えている事は少しだけわかる。コイツなりに元気づけようとしてくれているのかもしれない。明るい話題を出して、少しでも陰鬱な気持ちを晴らさせるよう。でも、それでも……駄目だった

数分後、目的地へと到着する

そこはw a r a 行きつけの、いつものラーメン屋だった。そういえば健太と刹那が鈴木さんがどうか言っていたけど……先に俺でいいのか？

そんな俺の疑問も心の内に、健太はガラリと店の扉を開いた。この時間帯は閉めているのか、鈴木さんの姿は見あたらぬ

それなのにも関わらず、アイツは店内を歩いていつも俺たちが座ってラーメンを食べる席へと座り込む。本当に大丈夫なのか、と思いつつついていき、その正面へと座る。別に品を注文しても来るわけではない。というかこの状態で上がっても大丈夫なのだろうか

「健」

「待ちたまへ。我は品を決めるのに忙しい」

「……………」

いつの間にかメニューを片手に真剣に悩み込む健太。いつもなら普通にラーメンを注文する健太だが、真剣な表情でメニューを除いている。これも俺を笑わせようと健太なりの工夫なのだろうか……だとしたら、相当つまらない。言ったら悪いので心の内に留めておく。数秒後、頼む品が決まったのかメニューを元あつた場所へと戻す。今は鈴木さんがいないんだから注文しても無駄な気がするんだが……というか何処に行ったんだろうか。もしかして店の奥？ それとも本当は今日は休業日？

そう思いながら健太の置いたメニューを取るが、その正面にいるソイツに止められて首を横に振る。つまりアレか？俺は食べるなということか

本当に健太の考えていることが何もわからない

「鈴木さん！ ラーメン2つねー！」

と、誰もいない店内に注文する健太。何を考えているんだ。そんな事してもラーメンは出てこない

2人しかいない店内が静まりかえる。完全に空気だけがその場を支配していた。いつもの調子を見せていた健太も何も言葉を発さず、その場でいつの間にか持つてきていたお冷やのコップを片手にそれを眺めていた。カラン、と氷がコップに当たる音が響く。響いただけだ

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

本当に会話が無い

何を話そうにも話題がない

そもそも話題を作ろうとしていない

何故？ 心が弱いから？

それとこれとは話が別だろう

ただ……

健太が何かを言うことを信じているんだろうか

そんなのただの人任せだろう

でも

ここに来させたのは健太だ

だから……全ての責任はアイツにあるだろう

コトツ、とコップがテーブルに置かれる音がする

「率直に聞こう。最終日に何があった」

その質問にはそろそろ飽き飽きしていたところだ。というかその

答えはすでに日曜に明らかになったはずだ。今その質問を出すって

……訳がわからない

敢えて何も言わずに店の外を見る。ただただ冷たい風が落ち葉を
転がしていた

「冗談言つて悪かった。だから質問を変えよう。お前日曜日に何か
あったか？」

「……っ」

やっぱり健太は日曜日だと確信していたらしい。そりゃあそうだ。

俺の様子がおかしくなったのは月曜日から。誰だっけそれくらい想
像できる

今の俺の反応を見た健太は続ける

「大方吉原先輩に何か言われたってトコロだな……どうせまだまだとか言われたんだろ？」

「……………」
「それで傷ついて自分の殻に閉じこもりますって？ お前は何処の小学生だよ……子供か」

「……………」
「……………」
「……………」
「真筈。黙ってないでそろそろ返事をしろ。そして事実を述べる。何があった？」

「……………」
「最後だ。何があった？」

健太の表情が途端に厳しくなる。一般大会の決勝前に見たようなあの表情だ。あの時は丁度笹原さんが壊れて、その原因（？）となった刹那を殺すだの言ってて……その時の目だ。俺が事実を言わなければ本当に殺しに掛かってきそうな、本気の目

別にその目に怯んだとかそういう訳じゃない。確かに黙っていても何も始まるわけがないんだ。日曜日の出来事を素直に話してみることにしよう

「……………心、ね……………」
「ああ。自覚してる」

全てを話し終え、2人でコップに入った水を飲みながら会話を続ける。季節が季節だし、暖房のついていない部屋の中で飲む氷水は冷たい。身体の隅々まで冷たくなる

その出来事を健太はどう捉えただろう。多分俺のやっている事がバカバカしいんじゃないかって思ってくれるんじゃないだろうか。

寧ろそれが本望だったりする

「しょうがないだろ。だって僕も弱いわけだし」

「……え？」

カラン、と氷の音が響く

「真箒。お前なんか勘違いしてない？ 人って誰もが弱いモンよ？

心であれ、身体であれ、少なからず弱い人間は絶対に存在する。

強い人間なんているハズがないんだよ。事実、僕だって同じ事言われて同じ事考えたもん」

「……はい？」

健太も同じ？ どういうことだろう

「いやあ……光久が動けなくなってきた、その後僕も真箒と同じ事を言われたんだ。そして同じ事思ったよ。ああ、どうせ僕は幸司さんを超える訳がない、って」

「あ、ああ……」

「でもさ、それを逆に可能に出来るって変換したらどうよ？ 超えられる、自分は絶対にあの人を超える、って。そしたらどうよ？ 僕一人で瀧先輩に血吐かせたし」

「はあっ！？」

衝撃の事実思わず手をついて立ち上がってしまう。瀧先輩に血を吐かせた！？ 健太が！？ あんな力の差があるって言うのに！？

健太に落ち着くように言われ、静かにかつ迅速にその場に座って咳払いをし、冷静さを取り戻す。いや、全然冷静さが戻ってこない

「まあ血が云々の話は置いておいて、」

寧ろそつちが気になるんだが

「お前はもつと物事をポジティブに捉えろつて。マイナスを感じたらプラスに感じればいい。重要なのは多分それだと思っただな僕は」

「……俺はお前と違ってポジティブじゃないんだよ」

「だからこそ、だよ」

「え？」

「大きい目標があるからこそ、強くなるんだよ」

「……」

何故だろう……こう健太に言い聞かせられる時が訪れようとは……
…なんか悔しい思いが……！！

でも健太の言っている事が間違っている訳じゃない。寧ろこれは正しい。人は必ず何かしらの目標があつて、それに向かつて走っているハズだ。それが大きければ大きいほど、それに掛ける思いも強くなる。だから強くなれる。多分健太はこう伝えたいんだと思う
姉を目標にして強くなればいい、と。全くもつてその通りだ

「でも……」

「ん？」

俺の考えている事は、少し違うんだ

「本当は……追い越したくないんだ」

「……」

本当の所、俺は姉貴を追い越せないんじゃない。ただ追い越したくないだけだ。吉原先輩の言っていることはありがたい言葉だ。それに健太の言うとおりポジティブになれば姉貴を目標にすることだ

つて出来る。でも俺は違う。その目標にするべき相手を、追い越したくない

別に姉貴の事を思っているわけじゃない。ただ……怖いだけだ。俺が姉貴を超した瞬間、誰かが遠くに行ってしまうんじゃないだろうか、と。それも身近な人が。それが誰なのかはわからないけど、本当に起こるかなんてわからないけど、どうしてかそれが怖い。根拠もないのに怖い

だから俺は

「俺は多分……強くなれない」

「真筭……」

『根拠の無いことを言っても何も始まらないだろうよ』

「え？」「お、来なすった」

第三者の声が厨房の方から聞こえてきた。大体見当はついているものの、そちらをつい見てしまう。もちろんそこには

「鈴木さん……」

この店の店主が立っていた。が、彼は眉間に皺を寄せて

「おい健太。人の休んでる間に勝手に入るんじゃないやねえって何度言ったらわかるんだ」

健太に向けてそう言い放った。何処か怒気があるようで迫力のない、まるで小さい子供をしっかりとつけるような父親と言った感じだ。言動はともかく、雰囲気はそんな感じだった

「仕方ないでしょ、鍵開いてたんだから」

「うぐっ……それは言い返せねえ……ラーメン2つだったよな？」

すぐ作るから待っててくれ」

「鍵のお詫びにお題をチャラにしてくれると嬉しいーな」

「んな訳ねーだろ。逆に2倍の金額払え」

「これは手厳しい」

2人で楽しそうな会話をする。今回は人数が少ないということもあるのか、いつもより楽しそうな会話をしている2人。普段みんなと来たときはもうちょっと硬い感じに話してるけど……今日は少し違う。本当はここまで仲が良かったんだなこの2人……

鈴木さんは厨房で鍋に火を掛けたらしく、ガスの匂いが鼻に届く

「で、根拠の無い事を言っても始まらないって?」

先程の言葉を健太が聞き返していた。こっちは呆然としているのが精一杯だったので、何も聞くことが出来ずにその場で座っていただけだ

「そのままの意味さ。行動に移さず結論を出す、何処の超能力者だよお前は」

「……………」

「そんなの数学の証明問題と同じじゃねえか。仮定を出して結論を導き出します、ハイおしまい。要するにそんな簡単な事をしているんだよ」

「数学……やめれ……」

「やるならもつと難易度の高い物をやるんだ。答えの見えた証明じゃなくて、答えの見えない関数を解くりしてみる。自分で答えを見つけ出すんだ」

「うあああつ……………!!」

何故か目の前に座る健太が頭を抱えて呻きだしていた。数学に関

する単語で頭が痛くなつたのかもしれない。鈴木さん……理系か……？ じゃない

答えの見えない関数を解く……つまりそれは俺が姉貴を超して、その先にある答えを掴めと言つことか。自分の立てた結論に結びつくかどうかを調べるといふ意味か。どう考えてもそれしか考えられない。これでも俺は数学……関数なんて苦手だ。でもどちらかといふと証明の方が苦手だ

……ということは、関数を解けということか？ 自分で答えを見つけてるっていうことか？

「なるほど……」

だったら……その関数、解いてみようじゃないか。姉貴を超して、その答えを導き出そうじゃないか！

「お、出たか？ 答案」

「あ……はい、そうですね。そんな事を考えてた俺がバカでした。

鈴木さん、ありがとうございます」

「いや、良いつて事よ。その代わり代金二倍な？」

「了解です」

「あ……ああ？」

料金二倍がどうした。今の俺には鈴木さんに対する感謝で一杯だ。その程度の事なら普通に恩返しが出来るといふかこれじゃまだまだ恩を返すにはまだ足りない気がするが……

(所詮は単純……やっぱり健太の友達か……)

「？ なんか言いました？」

「いや、何でもないぞ健太。そろそろ出来るから待ってるよ」

いや、今俺も何かを聞き取った気がするんだが……気のせいか、多分

2分後、2つのラーメンがテーブルへと運ばれてきた。先程の代金二倍は冗談だったらしく、笑ってそう言われた。こちらは恩返しをしたい、なんて言ったら、子供がデケエ面見せんじゃねえと言われて怒られた

俺の精神も元に戻ったところで、健太が禁断の話題を口にしてしまった

「真筆も戻ったことだし、後はクリスマスだよなあ……」
「ぐっ」

そのワードに反応して、思わずラーメンが喉に詰まりかける。痛い。そして熱い

「とりあえずなんだけどさ、エルぽんの誕生日プレゼントなら思いついたんだけどさ」

「おお」

それは意外な答えだった。それなら健太に任せるというのもアリだが……どことなく不安を感じさせる。健太だから

「……なんか信用してないって顔してるな」
「当たり前だろ」

「大丈夫！ 僕がとっておきの誕生日プレゼントを用意しておく！ だから！」

なんて笑顔を作りながら親指を立ててこちらに向けてくる。危な

いからその箸を降ろしなさい。目に刺さったらどうしてくれるんだ。というかそれについていた汁が僅かに飛んできたんですが手元にあったタオルで拭きながら健太を半目で見ると

「DAKARA!」

「……わかった。エルフィへのプレゼントは任せるよ」

「Yes!」

……英語になっている辺りがどうも怪しさを漂わせている

「で、欲しい物は?」

「真箒!」

「よし、笹原さんを大至急呼んで殴って貰おう。お前のM面が見たくなってきた」

「ごめんなさい、調子に乗りました」

実際8割本気で携帯電話を右手に持っていた。それに健太は気がついていない

しかし……欲しい物が。よくよく考えると思い浮かばない物だ。それも友人の母親に頼まれていることだ。時期が時期だし、それ以外考えられないんだが……なんというか……悪い。いくらお金持ちの家であっても……それは悪い。プレゼントを貰うなんて、悪い大切だから三回だ

すると健太はラーメンをすすりながらうなり声を上げた。猫か

「そうだねえ……うん。ああ」

思いついたのか思いついていないのかわからない反応だ

「んじゃあ……」

「うん」

「そうだねえ……」

「うん」

「真筆」

「笹原さん、っと」

「冗談ですごめんなさい」

あと2秒あれば連絡を入れられたところだった

健太は咳払いをして改まったような表情を見せてこちらを見る。

どつやら思い浮かんだらしく、ニヤリと微笑みながら

「僕さ、思ったんだけど」

俺も賛成できる案を話してくれた

まあ……残る問題は女子だけなんだが……これは黙っていても問題ないだろうか

#68 二学期終業式（後書き）

矛盾点が多すぎる気がします。気のせいですか？ 気のせいだとい
つてください。いや、ありますね、多分
なんか今回みんなイタかったな……orz
次話、クリスマス突入……え、遅い？ もう正月だもんね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0604s/>

wars! -ウォーズ-

2011年12月30日02時54分発行